

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第152集

交野市

有池遺跡Ⅰ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第1分冊

財団法人 大阪府文化財センター



1 古墳時代の遺物 2 中世の遺物

序 文

有池遺跡は大阪府の東北部、北河内に所在します。山地から交野台地に移行する扇状地の末端に位置し、西側には交野台地の広がり、東側には交野山をはじめとする生駒山系の連なりをとらえることができます。

今回の調査では、古墳時代中期から飛鳥時代、平安時代後期から室町時代の集落遺構を検出しました。特に中世の集落に関しては灌漑システムの限界から、それまで放置されがちだった丘陵地や扇状地においても集落が形成される端緒となる時期を経て、開発が軌道にのり、耕地や居住域が拡大するとともに、集住化が顕著になるまでの過程を、生産域・居住域・地割を含めた集落景観の変遷として捉えることができました。

もちろん有池遺跡とその周辺地域においては、中世より前の段階においても数々の遺跡が認められます。このあたりでは交野考古学会の調査により、旧石器時代のナイフ形石器が出土していますし、有池遺跡の東方、交野山登山道の入り口辺りに位置する神宮寺遺跡は、縄文時代早期の編年指標として知られる神宮寺式土器が発見されたことで有名です。このことから農耕社会の成立以前にも、良好な狩場に恵まれた、生活条件の整った場所であったことがうかがえます。古墳時代には、有池遺跡の南方約1.5kmのところ、大阪府でも最古級の前方後円墳である森1号墳が、また南西1km弱のところでは豊富な副葬品が出土したことで知られる交野東車塚古墳が位置します。一方、有池遺跡の北東方向の山裾には倉治古墳群、南東方向には寺古墳群などの、古墳時代後期の群集墳が点在します。古代以降は、交野郡衙が郡津地区に比定されるとともに、一級貴族である百濟王氏の直轄地として、当時の最先端技術がもちこまれたことも知られています。平安時代以降では、一帯はおおむね岩清水八幡宮領の荘園に含まれたとみられ、鎌倉時代になると、山頂の巨岩がランドマークであるとともに古来、信仰の対象とされてきた交野山に、「開元寺」が移ってきて一層発展することが知られています。

このような経過はこの一帯が磐船街道、峡崖道、山根道に接し、河内・山城・大和を結ぶルート上に位置することとも無関係ではないでしょう。したがって中世集落が開かれてからも、この界隈には人々の往来や、物の行き来が活発に行われたことが想像されます。

今回の調査は一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路の建設に伴って行われましたが、これ以降も路線内では発掘調査が行われ、新たな知見がもたらされつつあります。これらの成果に関しても順次、報告書の刊行を予定しております。

最後に、発掘調査と報告書作成にあたり、ご助力、ご支援をいただいた関係諸機関、地元関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきましてのご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

2007年2月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は大阪府交野市青山に所在する有池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路の建設に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所・西日本高速道路株式会社 関西支社（平成17年10月1日付けで日本道路公団関西支社より社名変更）から委託をうけ、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。事業名・委託者・委託期間・現地調査期間は次のとおりである。

有池遺跡（その1）〔有池遺跡02-1〕

事業名：第二京阪道路（大阪北道路）有池遺跡発掘調査

委託者：国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所

受託期間：平成14年6月1日～平成15年3月31日

現地調査期間：平成14年8月22日～平成15年2月28日

事業名：平成14年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）

委託者：西日本高速道路株式会社 関西支社（平成17年10月1日付けで日本道路公団関西支社より社名変更）

受託期間：平成14年6月1日～平成15年3月31日

現地調査期間：平成14年8月22日～平成15年2月28日

有池遺跡（その2）〔有池遺跡03-1〕

事業名：第二京阪道路（大阪北道路）有池遺跡発掘調査（その2）

委託者：国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所

受託期間：平成15年4月1日～平成16年3月31日

現地調査期間：平成15年5月26日～平成16年6月30日

有池遺跡（その3）〔有池遺跡03-2〕

事業名：第二京阪道路（一般国道1号）有池遺跡発掘調査（その3）

委託者：西日本高速道路株式会社 関西支社（平成17年10月1日付けで日本道路公団関西支社より社名変更）

受託期間：平成15年4月1日～平成16年3月31日

現地調査期間：平成15年5月26日～平成16年8月31日

調査体制は以下のとおりである。

〔調査〕平成14年度

有池遺跡（その1）〔有池遺跡02-1〕

調査部長 玉井功、調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹、技師 山元建、中部調査事務所所長 藤田憲司、調査第二係長 秋山浩三、技師 合田幸美、専門調査員 河村恵理、専門調査員 手島美香

〔調査〕平成15年度

有池遺跡（その2）〔有池遺跡03-1〕

調査部長 玉井功、調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹、主査 山上弘、技師 山元建、京阪支所長 渡邊昌宏、調査第五係長 秋山浩三、技師 木下保明、技師 若林幸子

有池遺跡（その3）〔有池遺跡03-2〕

調査部長 玉井功、調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹、主査 山上弘、技師 山元建、京阪支所長 渡邊昌宏、調査第五係長 秋山浩三、技師 合田幸美、技師 長戸満男、専門調査員 手島美香

〔調査〕平成16年度

有池遺跡（その2・3）〔有池遺跡03-1・2〕

調査部長 玉井功、調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹、主査 山上弘、技師 信田真美世、京阪調査事務所長 渡邊昌宏、調査第五係長 秋山浩三、主任技師 合田幸美、技師 木下保明、技師 長戸満男、技師 若林幸子、専門調査員 岡本智子、専門調査員 遠藤啓輔

3. 出土遺物の洗浄や台帳登録、発掘調査の過程で作成した図面類の整理は、発掘調査と併行して随時行った。出土遺物のうち、土器に関しては遺構出土遺物を優先的にピックアップし、接合・石膏復元の後、実測した。遺物の実測は備前の大型甕を除いて実寸大で行った。遺物実測と併行して遺物図版や遺構図版・原稿を順次作成した。

整理作業は日本道路公団関西支社から委託をうけ、財団法人 大阪府文化財センターが実施した。事業名・委託者・委託期間は次のとおりである。

委託事業名：平成17年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理事業（有池・上私部遺跡他）

委託者：西日本高速道路株式会社 関西支社（平成17年10月1日付けで日本道路公団関西支社より社名変更）

委託期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日

整理体制は以下の通りである。

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、調整係長 芝野圭之助、主査 山上弘、技師 信田真美世、京阪調査事務所所長 山本彰、主幹 寺川史郎、技師 若林幸子、専門調査員 遠藤啓輔、専門調査員 岡本智子、専門調査員 大竹正裕

4. 調査名の表記方法は、有池遺跡（その1）〔有池遺跡02-1〕を有池遺跡02-1、有池遺跡（その2）〔有池遺跡03-1〕を有池遺跡03-1、有池遺跡（その3）〔有池遺跡03-2〕を有池遺跡03-2とする。また各調査における調査区を表記する場合は、例えば有池遺跡03-2の8調査区であれば有池遺跡03-2-8調査区とする。
5. 報告書掲載の遺構写真については各調査担当者が撮影し、遺物写真の撮影・焼付けは京阪調査事務所主査 上野貞子が担当した。
6. 現地の発掘調査において、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、地元自治会、地元水利組合、地元園芸組合の協力を得ると共に、関係各機関の方々のご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表す。
7. 本書の作成にあたっては、各担当者がそれぞれ執筆した。執筆分担は下記に示すとおりである。
第1章（若林幸子） 第2章 第1節・第2節（岡本智子） 第3章 第1節（若林）・第2節（岡本） 第4章 第1節・第2節（手島美香）・第3節 1（合田幸美）・2（手島）・3・4

(合田)・第4節(合田) 第5章 第1節(若林)・第2節 1・2・4(若林)・3(木下保明・若林)・5(遠藤啓輔)・第3節 1(岡本・若林)・2・3・4・5(若林)・第4節(若林)
第6章 第1節(長戸満男・合田)・第2節 1(合田)・2(長戸)・3(合田)・4・5・6(長戸)・7・8(合田)・第3節 1(岡本・若林)・2・3・4・5(若林)・第4節(合田)
第7章 第1節(合田)・第2節・第5節・第6節・第7節(株式会社パレオ・ラボ)・第3節・第4節(株式会社古環境研究所)・第8節(パリオ・サーヴェイ株式会社) 第8章 第1節(若林)・第2節(岡本・若林)

8. 現地調査区の実施および整理事業にあたっては、下記の関係諸機関、地元関係各位をはじめ、多くの方々からご指導ならびにご協力を賜った。記して感謝の意を表する。(順不同・敬称略)
黒田淳(大東市立歴史民族資料館)、堀江門也(元大阪府教育委員会)、松田順一郎(元財団法人東大阪市文化財協会)、工楽善通(大阪府立狭山池博物館館長)、橋本久和(高槻市教育委員会)、尾上実(元大阪府教育委員会)、橘田正徳(豊中市教育委員会)、藤本史子(大手前大学)、山川均(大和郡山市教育委員会)、佐藤亜聖(財団法人元興寺文化財研究所)、森島康雄(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、中井淳史(大手前大学史学研究所)、大原瞳(天理大学研究生)、金斗喆(釜山大学校 人文大学考古学科)、藤原学(吹田市立博物館)、酒井清治(駒澤大学 文学部歴史学科)、河承哲(立命大学 外国人客員研究員(考古学) 慶南発展研究員 歴史文化センター)、浜中邦弘・西田倫子(宇治市歴史資料館)
9. なお有池遺跡という名称は一帶の小字名からつけられている。遺跡名は漢字の読みの通り「ありいけ」としたが、地元では「ありけ」と呼ばれている。この小字名にはもともと「有家」の字が当てられていたが、後世に有池に転化したとみられること、現在も倉治集落で見られる有家姓の読み方などから、元来は「ありけ」と読むものと思われる。
10. 本書の編集は主に若林が行った。
11. 本調査で出土した遺物、および本調査に関わる写真・実測図などの記録類は、財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構や土層断面の測量・実測における基準高は、東京湾平均海水面（T.P.）を用いている。
2. 遺構検出面の測量・実測は世界測地系（測地成果2000）に基づく平面直角座標第Ⅵ系（平成14年度国土交通省告示第9号）をもとに行っている。
3. 遺構平面図に付す方位針は、座標北を指す。
4. 現地調査や遺物整理は「遺跡調査基本マニュアル〔暫定版〕」2003.8 （財）大阪府文化財センターに準拠して行った。地区割りの第Ⅰ区画は7 J、第Ⅱ区画は11である。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』第24版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色票監修を使用した。なお、その記載順序は色名、記号、土質名とする。
6. 遺構番号は基本的に、調査時に付したものを使用している。おおむね調査区ごとに付した遺構の通し番号の後ろに遺構の種類を付している。遺構番号の順番自体には特に意味はない。ただ掘立柱建物のように複数の柱穴の複合体として遺構の性格が捉えられるものに関しては、「建物1」のように、遺構の種類のと後に番号を付している。
7. 土層断面図、遺構平・断面図は対象により適宜縮尺を変えて掲載している。各図面の縮尺はスケールを付して表示している。
8. 遺物実測図の縮尺は基本的に土器が3分の1、石器は2分の1であるが、必要に応じて異なる縮尺を用いた。各図面の縮尺はスケールを付して表示している。
9. 報告書に記載している遺物番号は、有池遺跡02-1、有池遺跡03-1、有池遺跡03-2のそれぞれにおいて、1から付している。土器・土製品・瓦は番号のみ、木器はW、石器はS、鑄造関係資料はF、鉄器はM、銭貨等を含むその他の遺物にはOを番号の前に付している。
10. 遺物図版はおおむね土器、木器、石器、鑄造関係資料、鉄器というまとまりで作成したが、石鍋（もとの形態が比較的把握できるもの）に関しては土器の図版に含めた。土器と区別するために、石鍋の断面は黒で塗りつぶしている。
11. 遺物番号は図版・写真図版・遺物観察表ともに共通している。
12. 土層断面図や遺構図には地山に達する掘削掘方の下端のラインを一点破線で表現したものがあ

目 次

巻頭カラー写真図版 上段：古墳時代の土器、下段：中世の土器

序文

例言・凡例

〈第1分冊〉

第1章 調査に至る経緯	(若林幸子)	1
第2章 位置と環境	(岡本智子)	3
第1節 地理的環境		3
第2節 歴史的環境		3
第3章 調査・整理の方法		9
第1節 調査の方法	(若林)	9
第2節 整理の方法	(岡本)	13
第4章 有池遺跡02-1の調査成果		17
第1節 基本層序	(手島美香)	17
1. 1A・1B調査区		17
2. 南端部		20
第2節 遺構	(手島)	20
1. 1A・1B調査区		20
2. 南端部		32
第3節 遺物		35
1. 土器	(合田幸美)	35
2. 石器	(手島)	47
3. 木器	(合田)	50
4. その他の遺物	(合田)	51
第4節 まとめ	(合田)	51
第5章 有池遺跡03-1の調査成果		63
第1節 基本層序	(若林)	63
第2節 遺構		93
1. 1調査区	(若林)	93
2. 2調査区	(若林)	145
3. 4調査区	(木下保明・若林)	177
4. 5調査区	(若林)	215
5. 6調査区	(遠藤啓輔)	279
第3節 遺構のまとめ	(若林)	290
第4節 遺物		301
1. 土器・土製品	(岡本・若林)	301

2. 石器・石製品	（若林）	367
3. 木器・漆器	（若林）	370
4. 金属器	（若林）	371
5. 鑄造関連遺物	（若林）	371
第6章 有池遺跡03-2の調査成果		393
第1節 基本層序	（長戸満男・合田）	393
第2節 遺構		396
1. 1調査区	（合田）	396
2. 2調査区	（長戸）	417
3. 3調査区	（合田）	423
4. 4調査区	（長戸）	449
5. 5調査区	（長戸）	455
6. 6調査区	（長戸）	456
7. 7調査区	（合田）	457
8. 8調査区	（合田）	466
第3節 遺構のまとめ		471
第4節 遺物		477
1. 土器・土製品	（岡本・若林）	477
2. 石器・石製品	（若林）	521
3. 木器・漆器	（若林）	529
4. 金属器	（若林）	545
5. 鑄造関連遺物	（若林）	547
〈第2分冊〉		
第7章 理化学的分析の成果		559
第1節 概要と結果	（合田）	559
第2節 放射性炭素年代測定	（パレオ・ラボ）	568
第3節 有池遺跡03-1における植物珪酸体、花粉、珪藻微化石分析	（古環境研究所）	570
第4節 有池遺跡03-2における植物珪酸体、花粉、珪藻微化石分析	（古環境研究所）	599
第5節 有池遺跡03-1から出土した大型植物化石	（パレオ・ラボ）	625
第6節 有池遺跡03-2から出土した大型植物化石	（パレオ・ラボ）	626
第7節 有池遺跡03-2 8調査区12大溝堆積物の粒度分析	（パレオ・ラボ）	632
第8節 有池遺跡の自然化学分析	（パリノ・サーヴェイ）	637
第8章 総括		667
第1節 有池遺跡における集落景観の変遷	（若林）	667
第2節 遺物のまとめ	（岡本・若林）	673

挿図目次

図1 大阪府文化財センター調査範囲と既往の調査位置図	1	図36 有池遺跡03—1—2 調査区 基本層序分布概念図	66
図2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7	図37 有池遺跡03—1—3 調査区 旧地形概念図	67
図3 有池遺跡周辺地形図 (1/25,000『大阪近傍図』明治20年)	8	図38 有池遺跡03—1—4 調査区 旧地形概念図	68
図4 有池遺跡周辺字切図 (『交野市全図』昭和52年)	8	図39 有池遺跡03—1—5 調査区 旧地形概念図	69
図5 有池遺跡03—2 調査区割・地区割図	9	図40 有池遺跡03—1 土層断面位置図 (1:1500)	71
図6 有池遺跡02—1 調査区割・地区割図	10	図41 有池遺跡03—1—1 調査区土層断面図 (断面①)	72
図7 有池遺跡03—1 調査区割・地区割図	11	図42 有池遺跡03—1—1 調査区 土色注記 (断面①)	73
図8 地区割りの基準・名称	12	図43 有池遺跡03—1—1 調査区 土層断面図 (断面②～⑤)	74
図9 有池遺跡02—1 地区割図新旧比較図	15	図44 有池遺跡03—1—1 調査区 土色注記 (断面②～⑤)	75
図10 現地公開資料 (部分)	16	図45 有池遺跡03—1—1 調査区 土色注記 (断面②～⑤)	76
図11 有池遺跡02—1 土層断面図	18	図46 有池遺跡03—1—2 調査区 土層断面図 (断面⑥・⑰)	77
図12 有池遺跡02—1 土層断面図	19	図47 有池遺跡03—1—2 調査区 土色注記 (断面⑥・⑰) / 土層断面図 (断面⑦)	78
図13 有池遺跡02—1 第2面 平面図	21	図48 有池遺跡03—1—3 調査区 土層断面図 (断面⑧)	79
図14 有池遺跡02—1 建物・柵 平・断面図	23	図49 有池遺跡03—1—3 調査区 土層断面図 (断面⑨)	80
図15 有池遺跡02—1 ピット 断面図	25	図50 有池遺跡03—1—3 調査区 土層断面図 (断面⑩)	81
図16 有池遺跡02—1 ピット・土坑 平・断面図	27	図51 有池遺跡03—1—3 調査区 土色注記 (断面⑩)	82
図17 有池遺跡02—1 土坑 断面図	29	図52 有池遺跡03—1—4 調査区 土層断面図 (断面⑪)	83
図18 有池遺跡02—1 土坑・溝・落込 断面図	31	図53 有池遺跡03—1—4 調査区 土層断面図 (断面⑪)	84
図19 有池遺跡02—1 南端部 第2・4面 平面図	33	図54 有池遺跡03—1—4 調査区 土色注記 (断面⑪)	85
図20 有池遺跡02—1 南端部 土坑・溝 断面図	34	図55 有池遺跡03—1—4 調査区 土層断面図 (断面⑫)	86
図21 有池遺跡02—1—1 A 調査区 包含層出土遺物	37	図56 有池遺跡03—1—4 調査区 土層断面図 (断面⑬)	87
図22 有池遺跡02—1—1 A 調査区 包含層出土遺物	38	図57 有池遺跡03—1—5 調査区 土層断面図 (断面⑭)	88
図23 有池遺跡02—1—1 A 調査区 包含層出土遺物	39	図58 有池遺跡03—1—5 調査区 土色注記 (断面⑭)	89
図24 有池遺跡02—1—1 B 調査区 包含層出土遺物	40	図59 有池遺跡03—1—5 調査区 土層断面図 (断面⑮)	90
図25 有池遺跡02—1 大溝 1 出土遺物	42	図60 有池遺跡03—1—6 調査区 土層断面図 (断面⑯)	91
図26 有池遺跡02—1 建物・ピット・土坑 出土遺物	44	図61 有池遺跡03—1—6 調査区 土色注記 (断面⑯)	92
図27 有池遺跡02—1 土坑 9 出土遺物	45	図62 有池遺跡03—1—1 調査区 景観概念図	93
図28 有池遺跡02—1 溝 出土遺物	46	図63 有池遺跡03—1—1 調査区 平面図 (全体)	94
図29 有池遺跡02—1 石器	48	図64 有池遺跡03—1—1 調査区 平面図 (部分拡大)	95
図30 有池遺跡02—1 石器	50	図65 有池遺跡03—1—1 調査区 平面図 (部分拡大)	96
図31 有池遺跡02—1 木器	52	図66 有池遺跡03—1—1 調査区 平面図 (部分拡大)	97
図32 有池遺跡02—1 その他の遺物	53	図67 有池遺跡03—1—1 調査区 平面図 (部分拡大)	98
図33 有池遺跡02—1 遺構変遷図	55		
図34 有池遺跡03—1 集落景観と微地形概念図	63		
図35 有池遺跡03—1—1 調査区 現況地形概念図	65		

図68	有池遺跡03—1—1 調査区	平面図（部分拡大）	99	105石敷土坑	平・断面図	126
図69	有池遺跡03—1—1 調査区	建物1	平・断面図	100	図92 有池遺跡03—1—1 調査区	
図70	有池遺跡03—1—1 調査区	建物2	平・断面図	101	土坑・ピット	断面図
図71	有池遺跡03—1—1 調査区	建物3・4	平・断面図	102	図93 有池遺跡03—1—1 調査区	土器3 出土状況図
図72	有池遺跡03—1—1 調査区	42ピット	平・断面図	103	図94 有池遺跡03—1—1 調査区	溝
図73	有池遺跡03—1—1 調査区	建物7	平・断面図	104	図95 有池遺跡03—1—1 調査区	溝・落込
図74	有池遺跡03—1—1 調査区	126ピット（建物7）	遺物出土状況図	105	図96 有池遺跡03—1—1 調査区	溝
図75	有池遺跡03—1—1 調査区	建物8	平・断面図	106	図97 有池遺跡03—1—1 調査区	溝・土坑
図76	有池遺跡03—1—1 調査区	建物9・10	平・断面図	107	図98 有池遺跡03—1—1 調査区	溝
図77	有池遺跡03—1—1 調査区	中心建物①	平・断面図	108	図99 有池遺跡03—1—2 調査区	景観概念図
図78	有池遺跡03—1—1 調査区	中心建物②	平・断面図	109	図100 有池遺跡03—1—2 調査区	平面図（全体）
図79	有池遺跡03—1—1 調査区	中心建物③	平・断面図	110	図101 有池遺跡03—1—2 調査区	平面図（部分拡大）
図80	有池遺跡03—1—1 調査区	118ピット	遺物出土状況図	112	図102 有池遺跡03—1—2 調査区	平面図（部分拡大）
図81	有池遺跡03—1—1 調査区	中心建物④	平・断面図	113	図103 有池遺跡03—1—2 調査区	平面図（部分拡大）
図82	有池遺跡03—1—1 調査区	中心建物	変遷概念図	115	図104 有池遺跡03—1—2 調査区	建物10
図83	有池遺跡03—1—1 調査区	土坑・井戸	平・断面図	116	図105 有池遺跡03—1—2 調査区	建物9
図84	有池遺跡03—1—1 調査区	井戸	平・断面図	117	図106 有池遺跡03—1—2 調査区	建物11
図85	有池遺跡03—1—1 調査区	198土坑	平・断面図	118	図107 有池遺跡03—1—2 調査区	建物4
図86	有池遺跡03—1—1 調査区	207井戸	平・断面図	120	図108 有池遺跡03—1—2 調査区	建物5
図87	有池遺跡03—1—1 調査区	土坑	平・断面図	121	図109 有池遺跡03—1—2 調査区	建物7・6
図88	有池遺跡03—1—1 調査区	土坑	平・断面図	122	図110 有池遺跡03—1—2 調査区	建物8
図89	有池遺跡03—1—1 調査区	10焼土集積遺構	平・断面図	124	図111 有池遺跡03—1—2 調査区	建物1・2
図90	有池遺跡03—1—1 調査区	10焼土集積遺構	完掘状況と周辺遺構	125	図112 有池遺跡03—1—2 調査区	建物3
図91	有池遺跡03—1—1 調査区				図113 有池遺跡03—1—2 調査区	柵1・2・3
					図114 有池遺跡03—1—2 調査区	土坑・井戸
					図115 有池遺跡03—1—2 調査区	土坑・井戸
					図116 有池遺跡03—1—2 調査区	土坑
					図117 有池遺跡03—1—2 調査区	土坑
					図118 有池遺跡03—1—2 調査区	土坑
					図119 有池遺跡03—1—2 調査区	溝
					図120 有池遺跡03—1—2 調査区	溝・土坑・落込

図121	有池遺跡03—1—4 調査区	景観概念図	177	建物 2・3・5 平・断面図	221
図122	有池遺跡03—1—4 調査区	平面図 (全体)	178	図151 有池遺跡03—1—5 調査区	建物 4 平・断面図 222
図123	有池遺跡03—1—4 調査区	平面図 (部分拡大)	179	図152 有池遺跡03—1—5 調査区	建物 6 平・断面図 224
図124	有池遺跡03—1—4 調査区	平面図 (部分拡大)	180	図153 有池遺跡03—1—5 調査区	
図125	有池遺跡03—1—4 調査区			建物 7・9・柵 1 平・断面図	225
	建物 1・2 平・断面図		181	図154 有池遺跡03—1—5 調査区	建物 8 平・断面図 226
図126	有池遺跡03—1—4 調査区			図155 有池遺跡03—1—5 調査区	井戸 平・断面図 228
	建物 3・4 平・断面図		183	図156 有池遺跡03—1—5 調査区	
図127	有池遺跡03—1—4 調査区			188井戸・569土坑等 平・断面図	229
	建物 5・6・8 平・断面図		184	図157 有池遺跡03—1—5 調査区	
図128	有池遺跡03—1—4 調査区	柵 平・断面図	186	642井戸 検出状況・断面図	230
図129	有池遺跡03—1—4 調査区	土坑 平・断面図	187	図158 有池遺跡03—1—5 調査区	井戸 断面図 231
図130	有池遺跡03—1—4 調査区	土坑 平・断面図	189	図159 有池遺跡03—1—5 調査区	
図131	有池遺跡03—1—4 調査区	土坑 断面図	191	69ピット 遺物検出状況・断面図	233
図132	有池遺跡03—1—4 調査区	土坑 平・断面図	193	図160 有池遺跡03—1—5 調査区	60土坑 平・断面図 233
図133	有池遺跡03—1—4 調査区			図161 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 234
	土坑・ピット 断面図		194	図162 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 断面図 235
図134	有池遺跡03—1—4 調査区			図163 有池遺跡03—1—5 調査区	
	土坑・ピット 断面図		196	460土坑 遺物出土状況図	236
図135	有池遺跡03—1—4 調査区	土坑 断面図	199	図164 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 237
図136	有池遺跡03—1—4 調査区	土坑 平・断面図	201	図165 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 239
図137	有池遺跡03—1—4 調査区	土坑 平・断面図	202	図166 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 240
図138	有池遺跡03—1—4 調査区			図167 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 242
	溝・土坑 遺物出土状況図		204	図168 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 243
図139	有池遺跡03—1—4 調査区	溝 断面図	206	図169 有池遺跡03—1—5 調査区	
図140	有池遺跡03—1—4 調査区	溝 断面図	208	土坑・ピット 平・断面図	245
図141	有池遺跡03—1—4 調査区	溝・土坑 断面図	211	図170 有池遺跡03—1—5 調査区	
図142	有池遺跡03—1—4 調査区			土坑・ピット 平・断面図	247
	セクション A・B・H 断面図		212	図171 有池遺跡03—1—5 調査区	
図143	有池遺跡03—1—4 調査区			64土坑 遺物出土状況図	248
	セクション E・D 断面図		213	図172 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 249
図144	有池遺跡03—1—5 調査区	景観概念図	215	図173 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 250
図145	有池遺跡03—1—5 調査区	平面図 (全体)	216	図174 有池遺跡03—1—5 調査区	
図146	有池遺跡03—1—5 調査区	平面図 (部分)	217	土坑・石敷 平・断面図	251
図147	有池遺跡03—1—5 調査区	平面図 (部分)	218	図175 有池遺跡03—1—5 調査区	
図148	有池遺跡03—1—5 調査区	平面図 (部分)	219	617土坑 平・断面図	253
図149	有池遺跡03—1—5 調査区	建物 1 平・断面図	220	図176 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 254
図150	有池遺跡03—1—5 調査区			図177 有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図 255

図178	有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図	257	図208	有池遺跡03—1—1 調査区		
図179	有池遺跡03—1—5 調査区	土坑 平・断面図	258		土坑・ピット出土遺物		307
図180	有池遺跡03—1—5 調査区			図209	有池遺跡03—1—1 調査区		
	653ピット 遺物出土状況図 1		260		土坑・ピット・落込出土遺物		308
図181	有池遺跡03—1—5 調査区			図210	有池遺跡03—1—1 調査区	溝出土遺物	309
	653ピット 遺物出土状況図 2		261	図211	有池遺跡03—1—1 調査区	溝出土遺物	310
図182	有池遺跡03—1—5 調査区			図212	有池遺跡03—1—1 調査区	溝出土遺物	311
	10溝 遺物出土状況図		262	図213	有池遺跡03—1—1 調査区	溝出土遺物	312
図183	有池遺跡03—1—5 調査区	溝 断面図	264	図214	有池遺跡03—1—1 調査区	溝出土遺物	313
図184	有池遺跡03—1—5 調査区	溝・落込 断面図	265	図215	有池遺跡03—1—1 調査区	溝出土遺物	314
図185	有池遺跡03—1—5 調査区	溝・土坑 断面図	269	図216	有池遺跡03—1—1 調査区	溝出土遺物	315
図186	有池遺跡03—1—5 調査区	溝 断面図	270	図217	有池遺跡03—1—1 調査区	溝出土遺物	316
図187	有池遺跡03—1—5 調査区	溝・土坑 断面図	274	図218	有池遺跡03—1—1 調査区	溝等出土遺物	317
図188	有池遺跡03—1—5 調査区			図219	有池遺跡03—1—2 調査区	包含層出土遺物	318
	溝・落込・ピット 断面図		276	図220	有池遺跡03—1—2 調査区	ピット出土遺物	319
図189	有池遺跡03—1—5 調査区	溝・落込 断面図	278	図221	有池遺跡03—1—2 調査区	土坑出土遺物	320
図190	有池遺跡03—1—6 調査区	平面図 (全体)	280	図222	有池遺跡03—1—2 調査区	井戸・土坑出土遺物	321
図191	有池遺跡03—1—6 調査区			図223	有池遺跡03—1—2 調査区		
	平面図 (部分拡大) / 遺構 断面図		281		土坑・ピット出土遺物		321
図192	有池遺跡03—1—6 調査区	土坑 平・断面図	282	図224	有池遺跡03—1—2 調査区	土坑・落込出土遺物	322
図193	有池遺跡03—1—6 調査区	平面図 (部分拡大)	283	図225	有池遺跡03—1—2 調査区		
図194	有池遺跡03—1—6 調査区	土坑・溝 断面図	284		土坑・ピット・井戸等出土遺物		323
図195	有池遺跡03—1—6 調査区			図226	有池遺跡03—1—2 調査区	土坑・溝出土遺物	324
	平面図 (部分拡大) / 土坑・溝 断面図		285	図227	有池遺跡03—1—4 調査区	包含層出土遺物	325
図196	有池遺跡03—1—6 調査区	溝 断面図	286	図228	有池遺跡03—1—4 調査区	68ピット出土遺物	325
図197	有池遺跡03—1—1 調査区	遺構変遷図	291	図229	有池遺跡03—1—4 調査区	土坑出土遺物	326
図198	有池遺跡03—1—2 調査区・5 調査区			図230	有池遺跡03—1—4 調査区		
	遺構変遷図		294		土坑・ピット出土遺物		327
図199	有池遺跡03—1—4 調査区	遺構変遷図	297	図231	有池遺跡03—1—4 調査区	溝・包含層出土遺物	328
図200	有池遺跡03—1 屋敷地区画溝配置変遷図 1		299	図232	有池遺跡03—1—4 調査区	溝・土坑出土遺物	330
図201	有池遺跡03—1 屋敷地区画溝配置変遷図 2		300	図233	有池遺跡03—1—4 調査区	溝出土遺物	331
図202	有池遺跡03—1—1 調査区	包含層出土遺物	301	図234	有池遺跡03—1—4 調査区	溝出土遺物	332
図203	有池遺跡03—1—1 調査区	ピット出土遺物	302	図235	有池遺跡03—1—5 調査区	包含層出土遺物	333
図204	有池遺跡03—1—1 調査区	井戸出土遺物	303	図236	有池遺跡03—1—5 調査区	ピット出土遺物	334
図205	有池遺跡03—1—1 調査区	井戸出土遺物	304	図237	有池遺跡03—1—5 調査区	ピット出土遺物	335
図206	有池遺跡03—1—1 調査区	井戸出土遺物	305	図238	有池遺跡03—1—5 調査区	ピット出土遺物	336
図207	有池遺跡03—1—1 調査区			図239	有池遺跡03—1—5 調査区	ピット出土遺物	338
	土坑・ピット等出土遺物		306	図240	有池遺跡03—1—5 調査区	ピット出土遺物	340

図241	有池遺跡03—1—5 調査区	ピット出土遺物	341	図276	有池遺跡03—2—1 調査区		
図242	有池遺跡03—1—5 調査区	井戸出土遺物	342		平面図 (全体・部分拡大)		397
図243	有池遺跡03—1—5 調査区	井戸出土遺物	344	図277	有池遺跡03—2—1 調査区	1大溝 平・断面図	398
図244	有池遺跡03—1—5 調査区	井戸出土遺物	345	図278	有池遺跡03—2—1 調査区	2流路 平・断面図	400
図245	有池遺跡03—1—5 調査区			図279	有池遺跡03—2—1 調査区	78竪穴 平・断面図	402
	土坑・ピット出土遺物		346	図280	有池遺跡03—2—1 調査区		
図246	有池遺跡03—1—5 調査区	土坑出土遺物	348		建物1・柱穴列1～3 平・断面図		403
図247	有池遺跡03—1—5 調査区	土坑出土遺物	349	図281	有池遺跡03—2—1 調査区		
図248	有池遺跡03—1—5 調査区	土坑等出土遺物	350		柱穴列4 平・断面図		404
図249	有池遺跡03—1—5 調査区	土坑出土遺物	351	図282	有池遺跡03—2—1 調査区	ピット 断面図	405
図250	有池遺跡03—1—5 調査区	ピット出土遺物	352	図283	有池遺跡03—2—1 調査区	ピット 断面図	408
図251	有池遺跡03—1—5 調査区	溝出土遺物	354	図284	有池遺跡03—2—1 調査区	井戸 平・断面図	410
図252	有池遺跡03—1—5 調査区	溝出土遺物	355	図285	有池遺跡03—2—1 調査区	土坑 平・断面図	412
図253	有池遺跡03—1—5 調査区	溝出土遺物	356	図286	有池遺跡03—2—1 調査区		
図254	有池遺跡03—1—5 調査区	溝・土坑出土遺物	357		遺構 平・断面図/土器群 出土状況図		413
図255	有池遺跡03—1—5 調査区	溝出土遺物	358	図287	有池遺跡03—2—1 調査区	土坑 断面図	414
図256	有池遺跡03—1—5 調査区	土器溜り出土遺物	359	図288	有池遺跡03—2—1 調査区	溝・落込 断面図	416
図257	有池遺跡03—1—5 調査区	溝出土遺物	360	図289	有池遺跡03—2—2 調査区	平面図 (全体)	418
図258	有池遺跡03—1—5 調査区			図290	有池遺跡03—2—2 調査区	中央アゼ 断面図	420
	溝・土坑・落込出土遺物		361	図291	有池遺跡03—2—2 調査区	15木組 出土状況図	421
図259	有池遺跡03—1—5 調査区	溝・落込出土遺物	363	図292	有池遺跡03—2—2 調査区	遺構 平・断面図	422
図260	有池遺跡03—1—5 調査区	溝・土坑出土遺物	364	図293	有池遺跡03—2—3 調査区		
図261	有池遺跡03—1—5 調査区	落込等出土遺物	365		平面図 (全体・部分拡大)		424
図262	有池遺跡03—1—6 調査区	溝出土遺物	366	図294	有池遺跡03—2—3 調査区		
図263	有池遺跡03—1—6 調査区				3流路 平・断面図/10土器 出土状況図		425
	遺構・包含層出土遺物		367	図295	有池遺跡03—2—3 調査区		
図264	有池遺跡03—1	縄文土器・土製品	368		1大溝 平・断面図/18石組み 平面図		426
図265	有池遺跡03—1	石器	369	図296	有池遺跡03—2—3 調査区	1大溝 土色注記	427
図266	有池遺跡03—1	石器	370	図297	有池遺跡03—2—3 調査区	2流路 断面図	430
図267	有池遺跡03—1	石器・石製品	371	図298	有池遺跡03—2—3 調査区		
図268	有池遺跡03—1	木器・漆器	372		2流路北肩部 平面図		431
図269	有池遺跡03—1	木器	373	図299	有池遺跡03—2—3 調査区		
図270	有池遺跡03—1	木器	374		2流路 遺物出土状況図		432
図271	有池遺跡03—1	金属器	375	図300	有池遺跡03—2—3 調査区		
図272	有池遺跡03—1	金属器	376		294竪穴 平・断面図		433
図273	有池遺跡03—1	銭貨	376	図301	有池遺跡03—2—3 調査区		
図274	有池遺跡03—1	鑄造関連遺物	377		建物2・柱穴列9・79土坑 平・断面図		435
図275	有池遺跡03—2	基本層序図	394				

図302	有池遺跡03—2—3 調査区 柱穴列 5～8 平・断面図	437	図330	有池遺跡03—2—3 調査区	3 流路出土遺物	484	
図303	有池遺跡03—2—3 調査区	ピット 平・断面図	438	図331	有池遺跡03—2—3 調査区	3 流路出土遺物	485
図304	有池遺跡03—2—3 調査区	ピット 断面図	440	図332	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	486
図305	有池遺跡03—2—3 調査区	井戸 平・断面図	443	図333	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	487
図306	有池遺跡03—2—3 調査区	土坑 平・断面図	444	図334	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	488
図307	有池遺跡03—2—3 調査区	土坑 平・断面図	445	図335	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	489
図308	有池遺跡03—2—3 調査区 土坑・ピット・溝 断面図	446	図336	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	489	
図309	有池遺跡03—2—3 調査区	溝 平・断面図	447	図337	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	490
図310	有池遺跡03—2—3 調査区	50落込 平・断面図	449	図338	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	491
図311	有池遺跡03—2—4 調査区 平面図（全体）／土坑・溝 平・断面図	451	図339	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	492	
図312	有池遺跡03—2—4 調査区	中央アゼ 断面図	452	図340	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	493
図313	有池遺跡03—2—4 調査区	17土坑 平・断面図	454	図341	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	494
図314	有池遺跡03—2—5 調査区 平面図（全体）／東壁断面図	455	図342	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	495	
図315	有池遺跡03—2—6 調査区 平面図（全体）／西壁断面図	457	図343	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	496	
図316	有池遺跡03—2—7 調査区	平面図（全体）	458	図344	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	497
図317	有池遺跡03—2—7 調査区	西壁断面図	459	図345	有池遺跡03—2—3 調査区	1 大溝出土遺物	498
図318	有池遺跡03—2—7 調査区 土坑・ピット・水口・溝 平・断面図	461	図346	有池遺跡03—2—3 調査区	18石組出土遺物	499	
図319	有池遺跡03—2—7 調査区	25土坑 平・断面図	463	図347	有池遺跡03—2—3 調査区	2 流路出土遺物	500
図320	有池遺跡03—2—7 調査区	溝 断面図	464	図348	有池遺跡03—2—3 調査区	2 流路出土遺物	501
図321	有池遺跡03—2—8 調査区 平面図（全体）／溝・ピット 断面図	467	図349	有池遺跡03—2—3 調査区	2 流路出土遺物	502	
図322	有池遺跡03—2—8 調査区	西壁断面図	468	図350	有池遺跡03—2—3 調査区	2 流路出土遺物	503
図323	有池遺跡03—2 流路・大溝名称概略図	470	図351	有池遺跡03—2—3 調査区	2 流路出土遺物	504	
図324	有池遺跡03—2 遺構変遷図	472	図352	有池遺跡03—2—3 調査区	294堅穴出土遺物	505	
図325	有池遺跡03—2—1 調査区	1 大溝出土遺物	478	図353	有池遺跡03—2—3 調査区	ピット出土遺物	506
図326	有池遺跡03—2—1 調査区 2 流路・31石組出土遺物	479	図354	有池遺跡03—2—3 調査区	井戸・土坑出土遺物	507	
図327	有池遺跡03—2—1 調査区 ピット・井戸・土坑出土遺物	480	図355	有池遺跡03—2—3 調査区	溝出土遺物	508	
図328	有池遺跡03—2—1 調査区 溝・落込・土器群出土遺物	482	図356	有池遺跡03—2—4 調査区	12・18大溝出土遺物	509	
図329	有池遺跡03—2—2 調査区	耕土層等出土遺物	483	図357	有池遺跡03—2—5 調査区	2 流路出土遺物	510
				図358	有池遺跡03—2—7 調査区	1 大溝出土遺物	511
				図359	有池遺跡03—2—7 調査区	1 大溝出土遺物	512
				図360	有池遺跡03—2—7 調査区	耕土層等出土遺物	513
				図361	有池遺跡03—2—7 調査区	溝・水口出土遺物	514
				図362	有池遺跡03—2—7 調査区	耕土層等出土遺物	515
				図363	有池遺跡03—2—7 調査区	1 大溝出土遺物	517
				図364	有池遺跡03—2—7 調査区	1 大溝出土遺物	518
				図365	有池遺跡03—2—7 調査区	1 大溝出土遺物	519
				図366	有池遺跡03—2—7 調査区	1 大溝出土遺物	520
				図367	有池遺跡03—2—7 調査区	土坑・溝出土遺物	521

図368	有池遺跡03—2—8 調査区 1 流路・12大溝出土遺物	521	下層確認トレンチにおける植物珪酸体分析結果	575
図369	有池遺跡03—2 土製品	522	図401 有池遺跡03—1—1 調査区 北壁における花粉ダイアグラム	584
図370	有池遺跡03—2 石器	523	図402 有池遺跡03—1—1 調査区 7 溝における花粉ダイアグラム	584
図371	有池遺跡03—2 石器・石製品	524	図403 有池遺跡03—1—1 調査区 407溝における花粉ダイアグラム	584
図372	有池遺跡03—2 石器	525	図404 有池遺跡03—1—3 調査区 中央トレンチにおける花粉ダイアグラム	585
図373	有池遺跡03—2 石器	526	図405 有池遺跡03—1—4 調査区 下層確認トレンチにおける花粉ダイアグラム	585
図374	有池遺跡03—2 石器	527	図406 有池遺跡03—1—1 調査区 北壁における主要珪藻ダイアグラム	593
図375	有池遺跡03—2 石器	528	図407 有池遺跡03—1—1 調査区 7 溝における主要珪藻ダイアグラム	594
図376	有池遺跡03—2 石器	529	図408 有池遺跡03—1—1 調査区 407溝における主要珪藻ダイアグラム	594
図377	有池遺跡03—2 木器	530	図409 有池遺跡03—1—3 調査区 中央トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム	595
図378	有池遺跡03—2 木器	531	図410 有池遺跡03—1—4 調査区 下層確認トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム	595
図379	有池遺跡03—2 木器	532	図411 有池遺跡03—2—1 調査区 2 流路における植物珪酸体分析結果	602
図380	有池遺跡03—2 木器	533	図412 有池遺跡03—2—3 調査区 1 大溝における植物珪酸体分析結果	602
図381	有池遺跡03—2 木器	534	図413 有池遺跡03—2—3 調査区 2 流路における植物珪酸体分析結果	603
図382	有池遺跡03—2 木器	535	図414 有池遺跡03—2—1 調査区 2 流路における花粉ダイアグラム	610
図383	有池遺跡03—2 木器	536	図415 有池遺跡03—2—3 調査区 1 大溝における花粉ダイアグラム	611
図384	有池遺跡03—2 木器	537	図416 有池遺跡03—2—3 調査区 2 流路における花粉ダイアグラム	612
図385	有池遺跡03—2 木器	538	図417 有池遺跡03—2—1 調査区 58土坑における主要珪藻ダイアグラム	620
図386	有池遺跡03—2 木器	539	図418 有池遺跡03—2—1 調査区 2 流路における主要珪藻ダイアグラム	620
図387	有池遺跡03—2 木器・漆器	540		
図388	有池遺跡03—2 木器	541		
図389	有池遺跡03—2 木器	542		
図390	有池遺跡03—2 木器	543		
図391	有池遺跡03—2 木器	544		
図392	有池遺跡03—2 金属器	545		
図393	有池遺跡03—2 鑄造関連遺物	546		
図394	有池遺跡03—2 銭貨	547		
図395	試料採取位置図	560		
図396	有池遺跡03—1—1 調査区 北壁における植物珪酸体分析結果	574		
図397	有池遺跡03—1—1 調査区 7 溝における植物珪酸体分析結果	574		
図398	有池遺跡03—1—1 調査区 407溝における植物珪酸体分析結果	574		
図399	有池遺跡03—1—3 調査区 中央トレンチにおける植物珪酸体分析結果	575		
図400	有池遺跡03—1—4 調査区			

図419	有池遺跡03-2-3 調査区 1 大溝における主要珪藻ダイアグラム	620	図432	火山ガラスの屈折率測定結果	647
図420	有池遺跡03-2-3 調査区 2 流路における主要珪藻ダイアグラム	621	図433	12大溝における主要珪藻化石群集の層位分布	650
図421	粒度分布のヒストグラムと積算頻度曲線	633	図434	12大溝基盤層における 主要珪藻化石群集の層位分布	650
図422	有池遺跡03-2-8 調査区 12大溝中堆積物の三角ダイアグラム (丸文字は試料番号)	634	図435	12大溝における花粉化石群集の層位分布	651
図423	有池遺跡位置図	637	図436	12大溝基盤層における花粉化石群集の層位分布	651
図424	有池遺跡周辺の地形	638	図437	12大溝における植物珪酸体含量の層位的変化	654
図425	有池遺跡周辺の等高線図	638	図438	12大溝基盤層における 植物珪酸体含量の層位的変化	654
図426	有池遺跡周辺の地質図 (宮地・田結庄・寒川2001より作成)	639	図439	有池遺跡周辺地形分類図	657
図427	有池遺跡03-2 分析試料採取位置図	640	図440	12大溝断面採取試料の粒度分析結果	658
図428	有池遺跡03-2-8 調査区 分析試料採取地点の断面図	640	図441	12大溝断面採取試料の粒度分析結果 三角ダイアグラム	659
図429	有池遺跡03-2-7 調査区 テフラ分析試料採取地点位置図	640	図442	12大溝断面採取試料の粒度分析結果CMダイアグラム (Bravard and Peiry1999、松田・別所2001を 参照して作成)	661
図430	有池遺跡分析試料採取層順柱状図	641	図443	有池遺跡集落変遷図 1	668
図431	重鉱物組成および火山ガラス比	647	図444	有池遺跡集落変遷図 2	670
			図445	底部外面に線刻のある瓦器碗	674

表目次

表 1	有池遺跡02-1 土器観察表	58	表18	有池遺跡03-1 土器観察表	387
表 2	有池遺跡02-1 土器観察表	59	表19	有池遺跡03-1 土器観察表	388
表 3	有池遺跡02-1 土器観察表	60	表20	有池遺跡03-1 土器観察表	389
表 4	有池遺跡02-1 土器観察表	61	表21	有池遺跡03-1 土器観察表	390
表 5	有池遺跡02-1 石器・石製品観察表	61	表22	有池遺跡03-1 土器観察表	391
表 6	有池遺跡02-1 木器観察表	61	表23	有池遺跡03-1 石器観察表	391
表 7	有池遺跡02-1 金属器観察表	61	表24	有池遺跡03-1 木器・漆器観察表	391
表 8	有池遺跡02-1 銭貨観察表	62	表25	有池遺跡03-1 金属器観察表	392
表 9	有池遺跡03-1 土器観察表	378	表26	有池遺跡03-1 鑄造関連遺物観察表	392
表10	有池遺跡03-1 土器観察表	379	表27	有池遺跡03-1 銭貨観察表	392
表11	有池遺跡03-1 土器観察表	380	表28	有池遺跡03-2 土器観察表	548
表12	有池遺跡03-1 土器観察表	381	表29	有池遺跡03-2 土器観察表	549
表13	有池遺跡03-1 土器観察表	382	表30	有池遺跡03-2 土器観察表	550
表14	有池遺跡03-1 土器観察表	383	表31	有池遺跡03-2 土器観察表	551
表15	有池遺跡03-1 土器観察表	384	表32	有池遺跡03-2 土器観察表	552
表16	有池遺跡03-1 土器観察表	385	表33	有池遺跡03-2 土器観察表	553
表17	有池遺跡03-1 土器観察表	386	表34	有池遺跡03-2 土器観察表	554

表35	有池遺跡03-2 石器観察表	555	表52	有池遺跡03-2 植物珪酸体分析結果 2	600
表36	有池遺跡03-2 木器・漆器観察表	556	表53	有池遺跡03-2 花粉分析結果 1	608
表37	有池遺跡03-2 木器・漆器観察表	557	表54	有池遺跡03-2 花粉分析結果 2	609
表38	有池遺跡03-2 金属器観察表	557	表55	有池遺跡03-2 珪藻分析結果 1	617
表39	有池遺跡03-2 鋳造関連遺物観察表	557	表56	有池遺跡03-2 珪藻分析結果 2	618
表40	有池遺跡03-2 銭貨観察表	557	表57	大型植物化石出土一覧表 1	627
表41	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果	568	表58	大型植物化石出土一覧表 2	627
表42	有池遺跡03-1 植物珪酸体分析結果 1	571	表59	粒度分析結果 (%)	632
表43	有池遺跡03-1 植物珪酸体分析結果 2	572	表60	粒度径区分ごとの含有率	634
表44	有池遺跡03-1 植物珪酸体分析結果 3	572	表61	粒度分析統計指標 (ϕ スケール)	634
表45	有池遺跡03-1 花粉分析結果 1	580	表62	放射性炭素年代測定および樹種同定結果	645
表46	有池遺跡03-1 花粉分析結果 2	581	表63	暦年較正結果	645
表47	有池遺跡03-1 花粉分析結果 3	582	表64	重鉍物・火山ガラス比分析結果	647
表48	有池遺跡03-1 珪藻分析結果 1	590	表65	珪藻分析結果 1	648
表49	有池遺跡03-1 珪藻分析結果 2	591	表66	珪藻分析結果 2	649
表50	有池遺跡03-1 珪藻分析結果 3	592	表67	花粉分析結果	652
表51	有池遺跡03-2 植物珪酸体分析結果 1	600	表68	植物珪酸体分析結果	655

写真目次

写真 1	有池遺跡03-1 の植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真	578	写真 6	有池遺跡03-2 の花粉・寄生虫卵	615
写真 2	有池遺跡03-1 の花粉・寄生虫卵	588	写真 7	有池遺跡03-2 の珪藻 I	623
写真 3	有池遺跡03-1 の珪藻 I	597	写真 8	有池遺跡03-2 の珪藻 II	624
写真 4	有池遺跡03-1 の珪藻 II	598	写真 9	出土した大型植物化石	625
写真 5	有池遺跡03-2 の植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真	606	写真10	出土した大型植物化石	630
			写真11	出土した大型植物化石	631

写真図版目次

写真図版 1	有池遺跡02-1-1 A 調査区・1 B 調査区 1、1 A 調査区第 2 面全景 (東から) 2、1 B 調査区第 2 面全景 (西から)
写真図版 2	有池遺跡02-1-1 A 調査区 1、第 2 面北半全景 (東から) 2、第 2 面南半全景 (東から)
写真図版 3	有池遺跡02-1-1 B 調査区 1、第 2 面北半全景 (西から) 2、第 2 面南半全景 (西から)
写真図版 4	有池遺跡02-1-1 B 調査区 1、第 2 面全景 (西から) 2、第 4 面全景 (西から)
写真図版 5	有池遺跡02-1-1 A 調査区・1 B 調査区 1、1 A 調査区 東西断面 (南から) 2、1 A 調査区西壁断面 (東から) 3、1 B 調査区下層確認トレンチ (西から) 4、1 B 調査区 南端部南壁断面 (西から)
写真図版 6	有池遺跡02-1-1 A 調査区 1、大溝 1 断面 (東から) 2、大溝 1 木製品出土状況 (北から)

写真図版7 有池遺跡02-1-1 A調査区・1 B調査区

1、1 A調査区 建物1完掘状況(南から) 2、1 B調査区 建物2完掘状況(北から)

写真図版8 有池遺跡02-1-1 A調査区 1、土坑9完掘状況(南から) 2、土坑10~14完掘状況(北から)

写真図版9 有池遺跡02-1-1 A調査区・1 B調査区

1、ピット9(建物1)断面 2、ピット9(建物1)完掘状況 3、ピット7(建物1)断面 4、ピット14(建物1)断面
5、ピット62(建物2)断面 6、ピット41(柱穴列1)断面 7、ピット40(柱穴列1)断面 8、ピット46断面
9、ピット45断面 10、ピット8断面

写真図版10 有池遺跡02-1-1 A調査区・1 B調査区

1、ピット12断面 2、ピット21断面 3、ピット4断面 4、ピット2断面 5、ピット15断面 6、ピット24断面
7、土坑9断面 8、土坑9遺物出土状況 9、土坑36断面 10、土坑12断面

写真図版11 有池遺跡02-1-1 A調査区・1 B調査区

1、土坑13断面 2、土坑24断面 3、土坑15断面 4、溝31断面 5、溝48断面 6、溝34断面 7、土坑45断面
8、溝77断面 9、溝103断面 10、溝104断面

写真図版12 有池遺跡03-1-1調査区

1、南東壁断面(北西から) 2、南東壁断面(北西から) 3、南東壁断面(北西から) 4、南東壁断面(北西から)

写真図版13 有池遺跡03-1-1調査区・2調査区

1、1調査区南東壁断面(北西から) 2、1調査区南東壁断面(北西から) 3、2調査区北西壁断面(南東から)
4、2調査区北西壁断面(南東から)

写真図版14 有池遺跡03-1-2調査区・4調査区

1、2調査区北西壁断面(南東から) 2、2調査区北壁断面(南東から) 3、4調査区北西壁断面(南東から)
4、4調査区北西壁断面(南東から)

写真図版15 有池遺跡03-1-4調査区・5調査区

1、4調査区北西壁断面(南東から) 2、4調査区北西壁断面(南東から) 3、5調査区南東壁断面(北西から)
4、5調査区南東壁断面(北西から)

写真図版16 有池遺跡03-1-5調査区

1、南東壁断面(北西から) 2、南東壁断面(北西から) 3、南壁断面(北から) 4、南壁断面(北から)

写真図版17 有池遺跡03-1-5調査区・6調査区

1、5調査区南壁断面(北から) 2、5調査区南壁断面(北から) 3、6調査区西壁断面(東から)
4、6調査区西壁断面(東から)

写真図版18 有池遺跡03-1-1調査区 1、全景(北西から) 2、全景(北西から)

写真図版19 有池遺跡03-1-1調査区 1、全景(西から) 2、全景(東から)

写真図版20 有池遺跡03-1-1調査区

1、全景(東から) 2、建物1・2・3・4完掘状況(東から) 3 建物1完掘状況 4、39ピット(建物1)断面
5、39ピット(建物1)完掘状況

写真図版21 有池遺跡03-1-1調査区

1、299ピット(建物1)断面 2、299ピット(建物1)断面 3、302ピット(建物1)断面 4、302ピット(建物1)断面
5、304ピット(建物1)断面 6、304ピット(建物1)断面 7、28ピット(建物1)断面 8、39ピット(建物1)断面
9、39ピット(建物1)断面 10、298ピット(建物1)断面

写真図版22 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、311ピット（建物1）断面
- 2、311ピット（建物1）断面
- 3、305ピット（建物1）断面
- 4、305ピット（建物1）断面
- 5、20ピット（建物1）断面
- 6、20ピット（建物1）断面
- 7、建物3・4完掘状況
- 8、建物3・4完掘状況

写真図版23 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、310ピット（建物3）断面
- 2、310ピット（建物3）断面
- 3、291ピット（建物3）断面
- 4、291ピット（建物3）断面
- 5、50ピット（建物3）断面
- 6、29ピット（建物3）断面
- 7、42ピット（建物3）断面
- 8、42ピット（建物3）断面
- 9、42ピット（建物3）完掘状況
- 10、48ピット（建物4）完掘状況

写真図版24 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、ピット48（建物10）断面
- 2、ピット51（建物4）断面
- 3、ピット269（建物4）断面
- 4、ピット281（建物4）断面
- 5、ピット281（建物4）断面
- 6、ピット309（建物4）断面
- 7、ピット309（建物4）断面
- 8、ピット126（建物7）遺物出土状況
- 9、ピット126（建物7）遺物出土状況
- 10、ピット126（建物7）遺物出土状況

写真図版25 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、建物7完掘状況
- 2、273ピット（建物7）断面
- 3、275ピット（建物7）断面
- 4、275ピット（建物7）断面
- 5、107ピット（建物8）断面
- 6、351ピット（建物8）断面
- 7、350ピット（建物8）断面
- 8、356ピット（建物8）断面
- 9、102ピット断面
- 10、102ピット断面

写真図版26 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、383ピット（中心建物③）断面
- 2、383ピット（中心建物③）断面
- 3、134ピット（中心建物③）断面
- 4、289ピット（中心建物④）断面
- 5、中心建物完掘状況
- 6、中心建物検出状況
- 7、105石敷土坑断面
- 8、105石敷土坑検出状況

写真図版27 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、105石敷土坑完掘状況
- 2、160ピット断面
- 3、59ピット遺物出土状況
- 4、284ピット（建物2）断面
- 5、11井戸断面
- 6、11井戸完掘状況
- 7、267井戸断面
- 8、267井戸完掘状況

写真図版28 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、198井戸断面
- 2、207井戸断面
- 3、207井戸断面（部分）
- 4、207井戸断面（部分）
- 5、207井戸完掘状況
- 6、6井戸断面
- 7、194井戸断面
- 8、194井戸断面

写真図版29 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、56土坑断面
- 2、56土坑断面（部分）
- 3、56土坑断面（部分）
- 4、10焼土集積遺構断面
- 5、10焼土集積遺構焼土除去段階
- 6、10焼土集積遺構焼土除去段階（中心部分）
- 7、151ピット断面
- 8、157ピット断面

写真図版30 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、152ピット断面
- 2、153・152ピット完掘状況
- 3、154ピット断面
- 4、124ピット断面
- 5、118ピット遺物出土状況
- 6、496ピット断面
- 7、土器3出土状況
- 8、111土坑完掘状況

写真図版31 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、456ピット遺物出土状況
- 2、100溝完掘状況
- 3、4溝断面
- 4、7溝O-P断面
- 5、7溝O-P断面（部分）
- 6、7溝O-P断面（部分）
- 7、7溝H-G断面（部分）
- 8、12溝断面

写真図版32 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、224・223溝断面
- 2、229溝断面
- 3、129・128溝断面（部分）
- 4、129・128溝断面（部分）
- 5、190土坑断面
- 6、132溝断面
- 7、433溝断面
- 8、451溝断面

写真図版33 有池遺跡03-1-1 調査区

- 1、7溝完掘状況
- 2、7溝・407溝結節部

写真図版34 有池遺跡03-1-2 調査区 1、東半全景（東から） 2、西半全景（東から）

写真図版35 有池遺跡03-1-2 調査区

- 1、110ピット断面
- 2、110ピット断面
- 3、110ピット完掘状況
- 4、69ピット（建物4）断面
- 5、69ピット（建物4）断面
- 6、229ピット（建物4）断面
- 7、137ピット断面
- 8、233ピット断面
- 9、63ピット・64ピット（建物4・11）断面
- 10、66ピット断面

写真図版36 有池遺跡03-1-2 調査区

- 1、建物5検出状況
- 2、222土坑断面
- 3、222土坑断面
- 4、224ピット断面
- 5、225ピット断面
- 6、162ピット断面
- 7、202ピット断面
- 8、73土坑断面

写真図版37 有池遺跡03-1-2 調査区

- 1、131ピット（建物5）断面
- 2、130ピット（建物5）断面
- 3、81ピット断面
- 4、200ピット（建物5）断面
- 5、203ピット（建物5）断面
- 6、204ピット（建物5）断面
- 7、135ピット（建物5）断面
- 8、205ピット（建物5）断面
- 9、73ピット断面
- 10、215ピット（建物1）断面

写真図版38 有池遺跡03-1-2 調査区

- 1、215ピット（建物1）断面
- 2、216ピット（建物1）断面
- 3、216ピット（建物1）断面
- 4、90ピット（建物2）断面
- 5、211ピット（建物2）断面
- 6、211ピット（建物2）断面
- 7、88ピット（建物2）断面
- 8、88ピット（建物2）断面
- 9、213ピット（建物2）断面
- 10、234ピット（建物3）断面

写真図版39 有池遺跡03-1-2 調査区

- 1、234ピット（建物3）断面
- 2、235ピット（建物3）断面
- 3、236ピット（建物3）断面
- 4、236ピット（建物3）断面
- 5、237ピット（建物3）断面
- 6、238ピット（建物3）断面
- 7、238ピット（建物3）断面
- 8、92・91ピット断面
- 9、152ピット完掘状況
- 10、250ピット完掘状況

写真図版40 有池遺跡03-1-2 調査区

- 1、208ピット断面
- 2、77ピット（建物5）断面
- 3、28井戸完掘状況
- 4、28井戸断面
- 5、58土坑断面
- 6、26井戸断面
- 7、25土坑断面
- 8、調査区南側（27土坑部分）断面

写真図版41 有池遺跡03-1-3 調査区

- 1、近世耕作面
- 2、近世耕作面
- 3、断面（ $Y=-27.862.5$ ）
- 4、断面（ $Y=-27.862.5$ ）
- 5、断面（ $Y=-27.862.5$ ）

写真図版42 有池遺跡03-1-4 調査区 1、東半全景（西から） 2、東半全景（西南から）

写真図版43 有池遺跡03-1-4 調査区

- 1、中央部全景（東から）
- 2、中央部全景（東から）
- 3、中央部全景（東から）

写真図版44 有池遺跡03-1-4 調査区 1、西半全景（南から） 2、西半全景（北から）

写真図版45 有池遺跡03-1-4 調査区 1、西半全景（北西から） 2、西半全景（北東から）

写真図版46 有池遺跡03-1-4 調査区

- 1、16ピット（建物1）断面
- 2、17ピット（建物1）断面
- 3、19ピット（建物1）断面
- 4、20ピット（建物1）断面
- 5、20ピット（建物1）断面
- 6、21ピット（建物1）断面
- 7、22ピット（建物1）断面
- 8、22ピット（建物1）断面
- 9、23ピット断面
- 10、38ピット（建物3）断面

写真図版47 有池遺跡03-1-4 調査区

- 1、38ピット（建物3）断面
- 2、39ピット（建物3）断面
- 3、40ピット（建物3）断面
- 4、41ピット（建物3）断面
- 5、42ピット（建物3）完掘状況
- 6、43ピット（建物3）断面
- 7、43ピット（建物3）断面
- 8、44ピット（建物3）断面
- 9、44ピット（建物3）断面
- 10、84土坑断面

写真図版48 有池遺跡03-1-4 調査区

- 1、82土坑断面
- 2、81土坑断面
- 3、2土坑断面
- 4、80土坑断面
- 5、404土坑断面
- 6、400土坑断面
- 7、249土坑断面
- 8、406土坑断面

写真図版49 有池遺跡03-1-4 調査区

- 1、312土坑断面
- 2、360土坑断面
- 3、316土坑断面
- 4、296土坑断面
- 5、351土坑断面
- 6、334土坑断面
- 7、354土坑断面
- 8、352ピット断面

写真図版50 有池遺跡03-1-4 調査区

- 1、326土坑断面
- 2、300土坑断面
- 3、292土坑断面
- 4、273土坑断面
- 5、269土坑断面
- 6、297土坑断面
- 7、293土坑断面
- 8、396土坑断面

写真図版51 有池遺跡03-1-4 調査区

- 1、6溝遺物出土状況
- 2、6溝遺物出土状況
- 3、526土坑遺物出土状況
- 4、250溝 a-b断面
- 5、250溝 c-d断面
- 6、248溝断面
- 7、246溝・385溝 e-f断面
- 8、322溝断面

写真図版52 有池遺跡03-1-4 調査区

- 1、267溝断面
- 2、311溝断面
- 3、313溝断面
- 4、331溝・330溝断面
- 5、254溝断面
- 6、310溝断面
- 7、317溝断面
- 8、242溝断面

写真図版53 有池遺跡03-1-5 調査区 1、全景（西から） 2、全景（西から）

写真図版54 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、建物5（部分）完掘状況
- 2、建物5（部分）完掘状況
- 3、127ピット（建物5）断面
- 4、127ピット（建物3）断面
- 5、3ピット完掘状況
- 6、466ピット（建物3）断面
- 7、126ピット（建物3）断面
- 8、126ピット（建物3）断面

写真図版55 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、467ピット断面
- 2、467ピット断面
- 3、467ピット完掘状況
- 4、建物2完掘状況
- 5、建物4（部分）完掘状況
- 6、建物4（部分）完掘状況
- 7、建物4（部分）完掘状況
- 8、建物4（部分）完掘状況

写真図版56 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、建物4（部分）完掘状況
- 2、481ピット断面
- 3、192落込完掘状況
- 4、597ピット断面
- 5、597ピット断面
- 6、598ピット断面
- 7、598ピット断面
- 8、599ピット断面

写真図版57 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、596ピット断面
- 2、596ピット断面
- 3、601ピット断面
- 4、601ピット断面
- 5、161溝南端部周辺ピット完掘状況
- 6、建物6・7・8検出状況
- 7、建物8（部分）完掘状況
- 8、建物8（部分）完掘状況

写真図版58 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、227ピット完掘状況
- 2、800ピット（建物7）断面
- 3、801ピット（建物8）完掘状況
- 4、802ピット完掘状況
- 5、62土坑断面
- 6、595井戸断面
- 7、188井戸断面
- 8、642井戸礫敷検出状況

写真図版59 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、642井戸完掘状況
- 2、1259井戸断面
- 3、1258井戸断面（部分）
- 4、314土坑断面
- 5、314土坑完掘状況
- 6、405ピット遺物出土状況
- 7、340ピット断面
- 8、60土坑断面

写真図版60 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、6土坑断面
- 2、6土坑断面
- 3、6土坑完掘状況
- 4、370土坑断面
- 5、354土坑断面
- 6、342土坑断面
- 7、372土坑完掘状況
- 8、460土坑遺物出土状況

写真図版61 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、460土坑遺物出土状況
- 2、379・378土坑断面
- 3、379土坑断面
- 4、379土坑断面
- 5、109土坑断面
- 6、109土坑完掘状況
- 7、371土坑断面
- 8、371土坑断面

写真図版62 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、396土坑断面
- 2、378土坑断面
- 3、79土坑完掘状況
- 4、94土坑断面
- 5、94土坑断面
- 6、64土坑遺物出土状況
- 7、396土坑断面
- 8、54土坑完掘状況

写真図版63 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、51土坑完掘状況
- 2、143石敷土坑検出状況
- 3、594土坑断面
- 4、594土坑断面
- 5、653ピット遺物出土状況
- 6、665・281・81ピット遺物出土状況
- 7、281ピット遺物出土状況
- 8、661ピット遺物出土状況

写真図版64 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、10溝遺物出土状況
- 2、10溝遺物出土状況
- 3、10溝完掘状況
- 4、8溝完掘状況
- 5、8溝断面
- 6、12溝完掘状況
- 7、12溝断面
- 8、11溝断面

写真図版65 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、14・13溝断面
- 2、385・11溝断面
- 3、384落込断面
- 4、446土坑断面
- 5、446土坑断面（部分）
- 6、446土坑断面（部分）
- 7、446土坑断面（部分）
- 8、446土坑断面（部分）

写真図版66 有池遺跡03-1-5 調査区

- 1、317溝断面
- 2、24溝断面
- 3、27溝断面
- 4、26溝断面
- 5、25溝断面

写真図版67 有池遺跡03-1-6 調査区

- 1、全景（南西から）
- 2、4土坑完掘状況
- 3、4土坑断面
- 4、2溝完掘状況
- 5、2溝断面

写真図版68 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、北半全景（南東から）
- 2、南半全景（北東から）

写真図版69 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、1大溝完掘状況（東から）
- 2、2流路完掘状況（東から）

写真図版70 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、深掘トレンチ④東壁断面（西から）
- 2、1大溝（下層）遺物出土状況（北西から）
- 3、2流路谷部断面（東から）
- 4、78竪穴完掘状況（東から）

写真図版71 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、69ピット（柱穴列1）断面
- 2、19ピット（柱穴列1）断面
- 3、71ピット（柱穴列2）断面
- 4、20ピット（柱穴列2）断面
- 5、55ピット（柱穴列3）断面
- 6、54ピット（柱穴列3）断面
- 7、105ピット（柱穴列4）断面
- 8、104ピット（柱穴列4）断面
- 9、133ピット（柱穴列4）断面
- 10、143ピット（柱穴列4）断面

写真図版72 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、106ピット（柱穴列8）断面
- 2、91ピット断面
- 3、90ピット断面
- 4、93ピット断面
- 5、98ピット断面
- 6、97ピット断面
- 7、96ピット断面
- 8、92ピット断面
- 9、70ピット断面
- 10、44ピット断面

写真図版73 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、150ピット断面
- 2、151ピット断面
- 3、41ピット断面
- 4、120ピット断面
- 5、119ピット断面
- 6、166ピット断面
- 7、108ピット断面
- 8、165ピット断面
- 9、26ピット断面
- 10、27ピット断面

写真図版74 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、28ピット断面
- 2、29・30ピット断面
- 3、73ピット断面
- 4、25ピット断面
- 5、173ピット断面
- 6、75ピット断面
- 7、21ピット断面
- 8、74ピット断面
- 9、113ピット断面
- 10、114ピット断面

写真図版75 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、103ピット断面
- 2、132ピット断面
- 3、115井戸全景
- 4、115井戸断面
- 5、5井戸断面
- 6、127土坑断面
- 7、22土坑断面
- 8、58土坑断面
- 9、52土坑断面
- 10、63土坑断面

写真図版76 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、162土坑断面
- 2、123土坑断面
- 3、18土坑断面
- 4、48土坑断面
- 5、101土坑断面
- 6、106土坑断面
- 7、10土坑断面
- 8、12土坑断面
- 9、11土坑断面
- 10、128落込遺物出土状況

写真図版77 有池遺跡03-2-1 調査区

- 1、129落込断面
- 2、13溝断面
- 3、16溝断面
- 4、6溝検出状況
- 5、7溝断面
- 6、23溝断面
- 7、31石組検出状況
- 8、31石組断面
- 9、4土器群出土状況
- 10、4土器群出土状況

写真図版78 有池遺跡03-2-2 調査区

- 1、全景（南から）
- 2、12大溝断面（西から）

写真図版79 有池遺跡03-2-2 調査区

- 1、11水田断面
- 2、11水田断面
- 3、15木組検出状況（北から）
- 4、15木組検出状況（東から）
- 5、17土坑全景
- 6、17土坑断面
- 7、16溝断面（接写）
- 8、16溝断面
- 9、16溝断面（接写）
- 10、22落込断面

写真図版80 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、北半全景（南西から）
- 2、南半全景（西から）

写真図版81 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、1大溝完掘状況（西から）
- 2、1大溝東壁断面（西から）

写真図版82 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、18石組検出状況（北西から）
- 2、18石組検出状況（部分）（北から）
- 3、5・7溝完掘状況（西から）
- 4、5溝石列検出状況（南から）

写真図版83 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、15土器遺物出土状況
- 2、16土器遺物出土状況
- 3、13土器遺物出土状況
- 4、13土器遺物出土状況（接写）
- 5、11土器遺物出土状況（東側）
- 6、11土器遺物出土状況（西側）
- 7、12土器遺物出土状況
- 8、14土器遺物出土状況

写真図版84 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、2流路完掘状況（北西から）
- 2、2流路断面（西から）

写真図版85 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、2流路遺物出土状況（西から）
- 2、2流路遺物出土状況（西から）

写真図版86 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、2流路（10層除去面～11層）245木器出土状況
- 2、2流路（14層～14層除去面）加工木出土状況
- 3、2流路（上層）遺物出土状況（西から）
- 4、2流路（上層）遺物出土状況（南から）
- 5、2流路（17層）遺物出土状況（南から）
- 6、2流路（17層）遺物出土状況（南から）
- 7、2流路（17層）遺物出土状況（南から）
- 8、2流路（17層）遺物出土状況（西から）
- 9、2流路（17層）遺物出土状況（南から）
- 10、2流路（17層）遺物出土状況（東から）

写真図版87 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、3流路完掘状況（西から）
- 2、3流路完掘状況（北から）
- 3、3流路10土器出土状況（北から）
- 4、3流路10土器出土状況（北から）

写真図版88 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、294堅穴検出状況
- 2、294堅穴完掘状況
- 3、294堅穴東西断面
- 4、294堅穴南北断面
- 5、294堅穴遺物出土状況（北から）
- 6、294堅穴遺物出土状況（南から）
- 7、294堅穴（上・中層）遺物出土状況
- 8、294堅穴炭化物出土状況

写真図版89 有池遺跡03-2-3 調査区

- 1、140ピット（柱穴列5）断面
- 2、412ピット（柱穴列5）断面
- 3、398ピット（柱穴列5）断面
- 4、382ピット（柱穴列7）断面
- 5、373ピット（柱穴列7）断面
- 6、333ピット（柱穴列7）断面

7、377ピット（柱穴列4）断面 8、137ピット遺物出土状況 9、446ピット断面 10、146ピット断面

写真図版90 有池遺跡03-2-3 調査区

1、152ピット断面 2、433ピット断面 3、155ピット断面 4、443ピット断面 5、154ピット断面 6、159ピット断面
7、424ピット断面 8、423ピット断面 9、157ピット断面 10、417ピット断面

写真図版91 有池遺跡03-2-3 調査区

1、418ピット断面 2、332ピット断面 3、331ピット断面 4、345ピット断面 5、292ピット断面 6、171ピット断面
7、69・68ピット断面 8、30ピット断面 9、31ピット断面 10、57ピット断面

写真図版92 有池遺跡03-2-3 調査区

1、58ピット断面 2、56ピット断面 3、112ピット断面 4、70ピット断面 5、33ピット断面 6、67ピット断面
7、34ピット断面 8、184ピット断面 9、63井戸断面 10、127井戸断面

写真図版93 有池遺跡03-2-3 調査区

1、454井戸断面 2、59井戸断面 3、54井戸断面 4、79土坑断面 5、168土坑断面 6、166土坑断面 7、388土坑断面
8、126土坑断面 9、180土坑断面 10、88土坑断面

写真図版94 有池遺跡03-2-3 調査区

1、295土坑断面 2、122土坑断面 3、122土坑遺物出土状況 4、145土坑断面 5、217土坑断面 6、20土坑断面
7、411ピット・136土坑断面 8、156土坑断面 9、84土坑断面 10、179土坑断面

写真図版95 有池遺跡03-2-3 調査区

1、293土坑断面 2、125溝南北断面 3、174溝断面 4、125溝東西断面 5、8溝完掘状況 6、8溝断面
7、8溝石列検出状況 8、50落込完掘状況 9、50落込断面 10、50落込礫集中部

写真図版96 有池遺跡03-2-4 調査区 1、全景（北から） 2、18大溝 完掘状況（西から）

写真図版97 有池遺跡03-2-4 調査区

1、12大溝 完掘状況（東から） 2、18大溝断面 3、18大溝合流点 4、12大溝断面 5、12大溝流木片検出状況

写真図版98 有池遺跡03-2-4 調査区

1、14土坑検出状況 2、14土坑完掘状況 3、38土坑検出状況 4、38・17土坑検出状況 5、17土坑検出状況
6、17土坑炭化物検出状況 7、17土坑断面 8、17土坑完掘状況

写真図版99 有池遺跡03-2-5 調査区

1、北半全景（西から） 2、南半全景（西から） 3、2流路断面（西から） 4、1流路断面（西から）

写真図版100 有池遺跡03-2-6 調査区 1、全景（東から） 2、西壁断面（東から）

写真図版101 有池遺跡03-2-7 調査区 1、北半全景（南西から） 2、南半全景（西から）

写真図版102 有池遺跡03-2-7 調査区

1、西壁断面（東から） 2、西壁断面（東から） 3、西壁断面（東から） 4、西壁断面（東から）

写真図版103 有池遺跡03-2-7 調査区

1、35土器出土状況 2、49土器出土状況 3、52土器出土状況 4、56土器出土状況 5、51土器出土状況
6、53土器出土状況 7、54土器出土状況 8、50土器出土状況 9、48土器出土状況 10、58木出土状況

写真図版104 有池遺跡03-2-7 調査区

1、25土坑検出状況 2、25土坑炭化物検出状況 3、25土坑 a 断面 4、25土坑 c 断面
5、25土坑炭化物検出状況（アゼなし） 6、25土坑炭化物 a 断面 7、25土坑炭化物 c 断面 8、25土坑完掘状況

写真図版105 有池遺跡03-2-7 調査区

1、64土坑断面 2、64土坑遺物出土状況 3、64土坑曲物内部断面 4、64土坑曲物内部完掘状況

5、64土坑断面（部分） 6、64土坑断面（部分） 7、64土坑掘り方断面 8、64土坑完掘状況

写真図版106 有池遺跡03-2-7 調査区

1、59水口断面 2、40土坑・36溝・38溝断面 3、43土坑・36溝断面 4、14溝・60溝（北側）断面

5、14溝・60溝（南側）断面 6、63溝断面 7、33溝断面 8、45溝断面 9、36・37溝断面 10、47溝断面

写真図版107 有池遺跡03-2-8 調査区 1、北半全景（西から） 2、南半全景（西から）

写真図版108 有池遺跡03-2-8 調査区

1、西壁断面（東から） 2、西壁断面（東から） 3、西壁断面（東から） 4、10溝断面

写真図版109 有池遺跡02-1 出土遺物

1 A 調査区 2 層（1～29） 1 A 調査区 2～3 層（30、31、33、34、36～39、41～43、45～49、52、53、55、57、58、60～67）

写真図版110 有池遺跡02-1 出土遺物

1 A 調査区 3 層（69～72、74～76、78～82） 1 A 調査区 4 層（83～87） 1 B 調査区 2 層（88、90～92） 1 B 調査区 2 面（93、94）

1 B 調査区 2～3 層（95、96、98～102） 1 B 調査区 3 層（103～105、107～110、112、114、115） 1 B 調査区 4 層（116）

1 B 調査区南端部 2 面（117） 1 B 調査区南端部 4 層（119、120）

写真図版111 有池遺跡02-1 出土遺物

1 A 調査区大溝 1 1 層（121～133） 1 A 調査区大溝 1 2 層（136、137） 1 A 調査区大溝 1 3 層（139、141～146）

1 A 調査区大溝 1 4 層（151） 1 A 調査区大溝 1 5 層（152） 1 A 調査区ピット 7（建物 1）（153）

1 B 調査区ピット 33（建物 2）（154） 1 B 調査区ピット 58（155） 1 B 調査区ピット 59（156） 1 B 調査区土坑 34（157）

1 A 調査区土坑 16（158） 1 B 調査区土坑 42（159） 1 B 調査区土坑 45（160～162）

写真図版112 有池遺跡02-1 出土遺物

1 A 調査区土坑 9（163、166、168、169～177、181～187） 1 A 調査区溝 6（188、190） 1 A 調査区溝 32（192～196）

1 B 調査区溝 73（198） 1 B 調査区溝 79（200） 1 B 調査区溝 80（201、202） 1 B 調査区溝 81（203、204） 1 B 調査区溝 88（205）

1 B 調査区溝 90（206） 1 B 調査区溝 94（208） 1 B 調査区溝 102（209） 1 B 調査区溝 103（210）

1 B 調査区溝 104（211、212）

写真図版113 有池遺跡02-1 出土遺物

1 A 調査区 2～3 層（32） 1 B 調査区 2～3 層（97） 1 A 調査区土坑 9（178～180） 1 A 調査区溝 6（189、191）

1 A 調査区溝 32（197） 1 A 調査区溝 74（199）

写真図版114 有池遺跡03-1 出土遺物

1 調査区 1 層（8） 1 調査区 126ピット（建物 7）（18、21、26、28） 1 調査区 411土坑（70、73）

写真図版115 有池遺跡03-1 出土遺物

1 調査区 411土坑（71、74、76、77）

写真図版116 有池遺跡03-1 出土遺物

1 調査区 111土坑（107） 1 調査区 7 溝（144、146～148、171、182）

写真図版117 有池遺跡03-1 出土遺物

1 調査区 7 溝（150、164） 1 調査区 147溝（218） 2 調査区 81ピット（229） 2 調査区 27土坑（245、250）

写真図版118 有池遺跡03-1 出土遺物

1 調査区 7 溝（158、160～163） 2 調査区 27土坑（238～240、242～244、251、253）

写真図版119 有池遺跡03-1 出土遺物

2 調査区104土坑 (268) 2 調査区20土坑 (273) 4 調査区1土坑 (322) 4 調査区6溝 (354、362)

写真図版120 有池遺跡03-1 出土遺物

4 調査区6溝 (350~353、355、357、360) 4 調査区242溝 (371~373)

写真図版121 有池遺跡03-1 出土遺物

5 調査区3層 (403、409) 5 調査区724ピット (542) 5 調査区1258・1259井戸最上層 (582)

5 調査区6土坑 (585、586、588)

写真図版122 有池遺跡03-1 出土遺物

5 調査区69ピット (595、603) 5 調査区460土坑 (641、642) 5 調査区98土坑 (687) 5 調査区10溝 (753)

5 調査区389・20溝 (768)

写真図版123 有池遺跡03-1 出土遺物

5 調査区143石敷上層 (682~685) 5 調査区20溝 (774) 5 調査区18溝 (807、808)

5 調査区土器溜り① (811)

写真図版124 有池遺跡03-1 出土遺物

5 調査区389溝・20溝 (766) 5 調査区土器溜り② (814) 5 調査区100溝 (849) 5 調査区192落込 (879)

5 調査区1溝 (892、896)

写真図版125 有池遺跡03-1 出土遺物

1 調査区5井戸 (39) 1 調査区194井戸 (54) 1 調査区7溝 (152、153、155、168) 2 調査区97土坑 (258)

2 調査区83土坑 (259) 2 調査区182ピット (293) 4 調査区攪乱 (344) 4 調査区3層 (347)

4 調査区242溝 (366) 5 調査区1258・1259井戸最上層 (582) 5 調査区460土坑 (640) 5 調査区192落込 (887)

写真図版126 有池遺跡03-2 出土遺物

1 調査区1大溝深掘トレンチ④ (12、14) 1 調査区2流路深掘トレンチ① (19) 1 調査区31石組 (31)

1 調査区69ピット (37) 2 調査区11水田上層4層 (68) 3 調査区3流路南肩部 (81)

3 調査区1大溝下段17層 (112) 3 調査区1大溝上段7層 (121)

写真図版127 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区1大溝10・11-2・16層 (114) 3 調査区1大溝上段7層 (127) 3 調査区1大溝上段8層 (135)

3 調査区1大溝下段南側27層13土器 (172) 3 調査区1大溝下段南側30-1層 (182)

3 調査区1大溝下段南側30-2層 (南肩部) (183、184、185)

写真図版128 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区1大溝下段26層16土器 (206) 3 調査区1大溝下段27層 (210、211)

3 調査区1大溝下段32層 (215、220) 3 調査区1大溝18層 (223、228)

写真図版129 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区1大溝18層 (224、225、229、230、232) 3 調査区1大溝19層 (234、236、239)

写真図版130 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区2流路6層 (244) 3 調査区2流路8層 (245) 3 調査区2流路12層 (254、255)

3 調査区2流路14層 (268)

写真図版131 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区1大溝19層 (240) 3 調査区2流路13層 (264、266) 3 調査区2流路14層 (270、273)

3 調査区 2 流路南壁側溝15層以下 (275) 3 調査区 2 流路15層 (276) 3 調査区 2 流路側溝16～17層 (279、280)

写真図版132 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区 2 流路16～17層 (281、283、285) 3 調査区 2 流路17層 (286～290、292、293)

写真図版133 有池遺跡03-2 出土遺物 3 調査区294堅穴 (303～306)

写真図版134 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区 2 流路17層 (294、295) 3 調査区 2 流路17層除去面 (298) 4 調査区12大溝10層 (339、340)

4 調査区12大溝11層 (342) 4 調査区18大溝 3 層下層～4 層上層 (352) 7 調査区23～24水田 (380)

写真図版135 有池遺跡03-2 出土遺物

7 調査区28溝下層 (392) 7 調査区31水田 1 層 (412) 7 調査区側溝 (1 大溝下層砂層) (415)

7 調査区側溝 (1 大溝下層 2 層下半) (416) 7 調査区 1 大溝下層 2 層下半 (419、421)

7 調査区 1 大溝下層 2 層上 (423) 7 調査区 1 大溝下層 3 層直上 (425)

写真図版136 有池遺跡03-2 出土遺物

7 調査区 1 大溝下層 3 層直下 (428) 7 調査区 1 大溝 2・3 層境 (429～432、434～436)

写真図版137 有池遺跡03-2 出土遺物

7 調査区 1 大溝 2・3 層境 (433、437、440、441) 7 調査区 1 大溝 3 層 (445) 8 調査区12大溝 8 層 (460)

8 調査区12大溝 7～8 層 (461)

写真図版138 有池遺跡03-2 出土遺物

1 調査区 1 大溝 2-2 層 (1) 1 調査区 1 大溝深堀トレンチ④ (上層) (11) 1 調査区31石組 (27)

3 調査区 1 大溝上段 6 層 (118) 3 調査区 2 流路 8 層 (246) 7 調査区13水田 1 層 (376)

7 調査区23～24水田 2 層南肩部砂層 (379) 7 調査区24水田 3 層南肩部砂層 (388) 7 調査区30水田 2 層 (408)

7 調査区側溝 (30水田 3 層以下) (410)

写真図版139 有池遺跡03-1・2 出土遺物

8 調査区 1 流路 (456) 1 調査区 1 大溝深堀トレンチ① (462) 3 調査区 1 大溝19層 (463) 7 調査区28溝 (464)

4 調査区 3 水田 3 層 (465) 4 調査区 1 層 (930、931) 3 調査区 3 層 (932) 5 調査区719溝 (933)

写真図版140 有池遺跡02-1 出土遺物

1 B 調査区 2 面 (S 1、S 2) 1 A 調査区 2～3 層 (S 3、S 4、S 12、S 15、S 20) 1 A 調査区 2 層 (S 5)

1 A 調査区 3 層 (S 6) 1 A 調査区 2 面 (S 7、S 8、S 17) 1 A 調査区 1-1 層 (S 9、S 11) 1 A 調査区溝 7 (S 10)

1 A 調査区 1 面 (S 13) 1 B 調査区 2 面 (S 14) 1 B 調査区 4 層 (S 16) 1 B 調査区溝 83 (S 18)

1 A 調査区河川 1 5 層 (S 19)

写真図版141 有池遺跡03-1 出土遺物

2 調査区 1 層 (S 1) 4 調査区314溝 (S 2) 4 調査区 2 層 (S 3) 4 調査区345土坑 (S 4) 4 調査区 1 層 (S 5)

4 調査区244溝 (S 6) 4 調査区側溝 (S 7) 6 調査区 2 層 (S 8)

写真図版142 有池遺跡03-1 出土遺物

2 調査区20土坑 (S 9) 2 調査区86土坑 (S 11) 1 調査区171ピット (S 13) 1 調査区 7 溝 (S 14)

1 調査区407溝 (S 15) 5 調査区314土坑 (S 17) 5 調査区108土坑 (605) 5 調査区28溝 (846)

写真図版143 有池遺跡03-2 出土遺物

1 調査区56ピット (S 1) 4 調査区16落込 (S 2) 4 調査区12大溝 4 層 (S 3) 1 調査区 2 流路 6 層 (下層) (S 4)

7 調査区 1 大溝北肩部 (16水田除去面) (S 5) 4 調査区 1 層 (S 6) 1 調査区機械掘削 (S 7)

1 調査区側溝 (10・11層) (S 8) 1 調査区2 流路14層 (S 9) 1 調査区1 大溝6層 (下層) (S10)
1 調査区1 大溝深堀トレンチ④ (16層) (S11) 3 調査区1 大溝19層 (S12) 2 調査区1層 (S13)
4 調査区8 水田2層 (S14) 7 調査区23水田3層 (S15) 8 調査区1層 (S16)

写真図版144 有池遺跡03-2 出土遺物

1 調査区1層 (下) (S19) 1 調査区2 流路谷部アゼ (西側) (S20) 3 調査区1層 (S21)
3 調査区2 流路9層 (S22) 3 調査区1 大溝下段南3層 (S23) 4 調査区1層 (S24)

写真図版145 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区2 流路12層 (S17) 3 調査区294堅穴住居上・中層 (S18) 1 調査区31土坑 (S25)
1 調査区2 流路2層 (下) (S28) 1 調査区2 流路3層 (上) (S29) 1 調査区2 流路5層 (下) (S30)
1 調査区2 流路5層 (下) (S31) 2 調査区1～2層 (S32) 1 調査区アゼ側溝3層 (下) 以下 (S33)
1 調査区1 大溝7層 (S34) 3 調査区1 大溝2層 (S64) 4 調査区12大溝5層 (S65)

写真図版146 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区2層 (S35) 3 調査区2 流路 (側溝10層以下) (S36) 3 調査区2 流路11層 (S37)
3 調査区3 流路南肩部 (西半) (S38) 3 調査区4 溝 (S39) 3 調査区5 溝 (12-1層除去後面) (S41)
3 調査区1 大溝上段6層 (S42)

写真図版147 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区1 大溝上段8層 (S43) 3 調査区1 大溝11-2層 (S45) 3 調査区1 大溝16層 (S46)
3 調査区1 大溝下段南26層 (S48、S49、S50) 3 調査区1 大溝下段南30-1層 (南肩部) (S52)
3 調査区1 大溝下段南30-2層 (南肩部) (S53) 4 調査区1 井戸 (S54、S55)
4 調査区10溝 (S56) 7 調査区13水田1層 (S58) 7 調査区23水田 (S59) 7 調査区23水田3層 (S60)

写真図版148 有池遺跡03-2 出土遺物 8 調査区64土坑 (曲物内) (S63)

写真図版149 有池遺跡02-1 出土遺物

1 A 調査区大溝1 5層 (W1～W4) 1 A 調査区大溝1 2～3層 (W5)

写真図版150 有池遺跡03-1 出土遺物

3 調査区2 溝 (W1) 2 調査区27土坑 (W4) 6 調査区北側側溝 (W5) 1 調査区7 溝 (W6)

写真図版151 有池遺跡03-2 出土遺物 3 調査区2 流路17層 (W1、W2、W3) 3 調査区2 流路16～20層 (W5)

写真図版152 有池遺跡03-2 出土遺物 3 調査区2 流路17層 (W7) 3 調査区2 流路16～20層 (W18、W20)

写真図版153 有池遺跡03-2 出土遺物 2 調査区15木組 (W21、W22) 7 調査区 (W24)

写真図版154 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区2 流路16～17層 (W6) 7 調査区30水田1層 (W27) 7 調査区側溝 (23水田以下) (W28)

1 調査区試掘トレンチ (4) (W29) 7 調査区30水田1層 (W54)

写真図版155 有池遺跡03-2 出土遺物 2 調査区15木組 (W8、W9)

写真図版156 有池遺跡03-2 出土遺物

3 調査区271井戸 (W31) 3 調査区1 大溝上段8層 (W34) 3 調査区2 流路12層 (W36)

3 調査区5 溝 (12-1層除去面) (W37) 3 調査区2 流路14～15層境 (W38) 3 調査区31水田1層 (W39)

写真図版157 有池遺跡02-1 出土遺物

1 A 調査区1層 (O1) 1 A 調査区1面 (O2～O6) 1 A 調査区1面溝6 (O7) 1 A 調査区1面溝11 (O8)

1 B 調査区2層 (O9) 1 A 調査区2面 (O10～O11) 1 A 調査区大溝1 1層 (O12) 1 A 調査区溝6 (M1)

1 A 調査区溝28 (S21) 1 A 調査区2～3層 (O15) 1 A 調査区1—1層 (O16)

写真図版158 有池遺跡03—1 出土遺物

1 調査区攪乱 (M5) 2 調査区27土坑 (M7) 5 調査区306土坑 (M15) 5 調査区1層 (M17)

5 調査区79土坑 (M18) 1 調査区194井戸 (F1) 1 調査区7溝 (F2)

写真図版159 有池遺跡03—1 出土遺物

1 調査区413土坑 (F3、F5) 1 調査区2—2層 (F4) 1 調査区118ピット (F6、F7) 5 調査区3層 (F8)

5 調査区216ピット (F9) 1 調査区1層 (M19) 2 調査区1層 (M20)

写真図版160 有池遺跡03—2 出土遺物

1 調査区2—2層 (M2) 1 調査区23溝 (M3) 1 調査区2流路3層 (M4) 1 調査区49ピット (M5)

3 調査区2流路2層 (M6、M7) 3 調査区2流路11層 (M8) 3 調査区2流路12層 (M9)

3 調査区2流路13層 (M10) 7 調査区28溝下層 (M11) 7 調査区24水田2層 (M12、M13) 3 調査区50落込 (M14)

写真図版161 有池遺跡03—2 出土遺物

3 調査区2流路12層 (F1) 7 調査区31水田1層 (F2) 7 調査区30水田1層 (F3)

7 調査区28溝下層黒色土層 (F4) 7 調査区28溝下層 (F5) 7 調査区1大溝南肩部1層 (F6)

8 調査区12大溝3層 (F7)

写真図版162 有池遺跡03—2 出土遺物

1 調査区1大溝2—2層 (F8、F9) 3 調査区1大溝上段6層 (F10、F11) 3 調査区2流路13層 (F12)

4 調査区南壁側溝 (M15) 7 調査区8溝 (M16) 7 調査区1大溝南肩部1層 (M17)

第1章 調査に至る経緯

有池遺跡は大阪府交野市青山町に所在する。人口の流入に伴い、調査地周辺にも宅地化の波がせまりつつあるが、調査地とその周辺は現在まで大規模な開発をまぬがれており、水田と畑地、果樹園からなるのどかな風景が広がっている。調査区付近ではこれまで、焼垣内遺跡や倉治遺跡に当たる部分で小規模な調査が行われた他は、面的な調査は行われなかった。

一方、調査地一帯の耕土中からしばしば土器片が出土したこと、中世の文献史料に「有家」の字が当てられる例があること、調査地の北方に位置する機物神社拜殿の南側にある鳥居が、かつて「有池集落」が存在した名残を示すものと考えられたことから、調査地周辺に中世集落が存在したことはこれまでも指摘されていた(註1)。ただ文献史料が断片的なこと、有池集落の範囲内で発掘調査が行われなかったことから、確証には結びつかなかった。

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路の建設に伴い、平成8年度より計画路線内にお

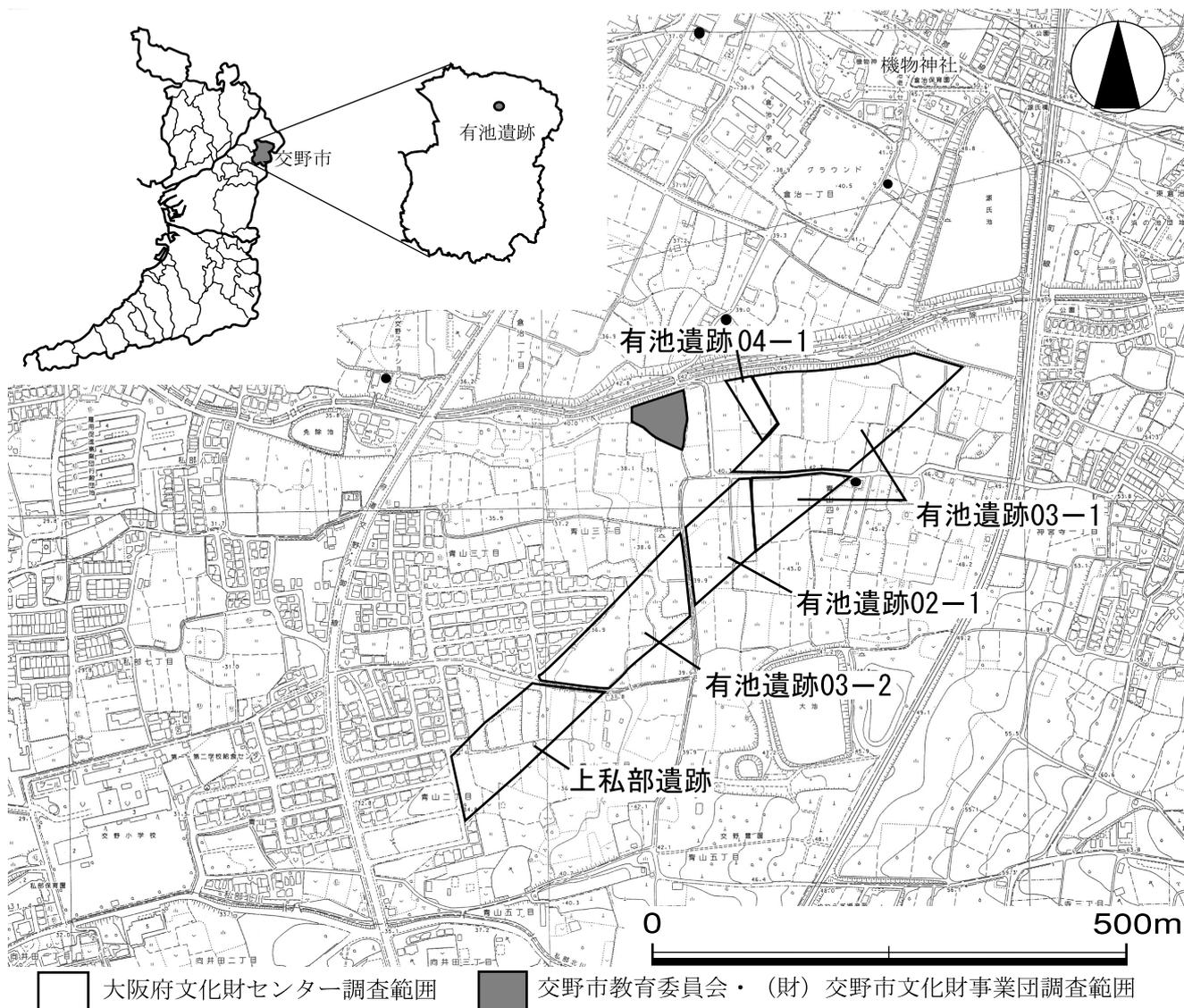


図1 大阪府文化財センター調査範囲と既往の調査位置図

いて埋蔵文化財の発掘調査が実施されるに至り、当調査地内では平成11年度に免除川から府道交野・久御山線までの道路予定地内で、遺跡の確認調査が行われた。この調査では約5m幅×20～80mのトレンチを26箇所設定し、遺構・遺物の有無を調べた。その結果、ほぼ全てのトレンチで遺構ないし遺物が検出された。

この確認調査の成果により、青山グラウンドとその北側の有池遺跡の範囲では13～14世紀を中心とする遺構のまとまりがいくつかみられること、遺構密度は免除川寄りの部分で高くなること、青山グラウンドの西南部に存在すると見られる大規模な谷地形の平坦な底部において、耕作地が存在する可能性のあること等がわかった（註2）。

これを受け、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所および西日本高速道路株式会社 関西支社（平成17年10月1日付けで日本道路公団関西支社より社名変更）の委託により、平成14年度に（財）大阪府文化財センターが大阪府教育委員会の指導のもと、埋蔵文化財の発掘調査を実施した。この調査が有池遺跡02-1である。平成15年度には有池遺跡03-1の調査と、有池遺跡03-2の調査を平行して行った。前者は有池遺跡02-1調査区の東隣で、免除川堤防までの道路予定地内に相当する。一方の有池遺跡03-2調査区は有池遺跡02-1調査区の西隣で、上私部遺跡までの範囲にあたる。今回、報告の対象となる調査は有池遺跡02-1・03-1・03-2である。（図1）

また有池遺跡02-1の調査とほぼ時を同じくする平成14年7月～8月にかけて、有池遺跡03-1に近接する箇所で、交野市教育委員会と（財）交野市文化財事業団による調査が行われた。この調査は有池03-1-6調査区からみて、府道予定地を挟んで西側の部分にあたり、建物の基礎にあたる25箇所でトレンチが設定された。調査の結果、13～14世紀を中心とする時期の遺跡が存在し、調査区の北半部は耕作域で南半部は居住域であることがわかった。耕作域で検出した溝の方向等から、鎌倉時代においては現代の耕作地の区画と異なっていたことが確認された。居住域では多数の柱穴や井戸に加え、瓦器碗の完形品を伴う土坑が確認された（註3）。

平成16年度には、有池遺跡03-1に隣接する免除川の南側の府道取り付き部分において、発掘調査が行われた。府道部分に関しては、免除川の北側部分でも今後の発掘調査が予定されている。

以上、有池遺跡の調査に至るまでの経過をまとめた。前述したように、今回の調査地を含む、小字「有池」・「焼垣内」のあたりに、中世の集落が存在したのではないかという推定はこれまでもなされてきたが、近年の調査により、その具体的な様子が明らかになりつつある。

註1 （財）交野市文化財事業団 奥野和夫氏のご教示による

註2 『長尾台地区、杉・氷室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群 一般国道一号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第61集 2001年3月 （財）大阪府文化財調査研究センター

註3 『鍋塚古墳2000-1次調査 有池遺跡2002-1次調査-大阪府交野市における慶長・伏見地震の爪痕-』交野市埋蔵文化財調査報告2002-II 2003.3 交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

有池遺跡の所在する交野市は、大阪府の北東部（北河内）に位置する。南東には生駒山が聳え、山を越えると奈良県生駒市があり、北は大阪府枚方市、南は四条畷市、西は寝屋川市・枚方市に接する。市域の3分の2は東南部の山地で占められ、北から交野山（標高344m）、旗振山（標高345.1m）、竜王山（標高330m）、普見山（標高約230m）、妙見山（標高162m）が並び、その南には磐船峡がある。山地南東の田原盆地から流れ出る天野川は、この磐船峡を経て市域を南東から北西へ流れ、淀川と合流する。

有池遺跡は、交野山の西麓から交野台地に移行する扇状地の末端、標高40m付近に位置する。交野台地は穂谷川と天野川に挟まれた標高20～50mの段丘堆積物からなる台地であり、穂谷川の北側には長尾丘陵が、天野川の西側は標高50m程度の枚方丘陵が続く。この長尾・枚方丘陵を形成する大阪層群は、急な傾斜面をもって連なるため後背堆積物は多様である。有池遺跡の北側には免除川が流れ、天野川に合流する。

主要交通路としては、枚方宿東端の岡から天野川沿いを通り、磐船峡を経て生駒市北田原で清滝街道と交差する磐船街道（国道168号線）や、京都府八幡市清水町から南下し、河内国衙跡所在の藤井寺市国府へいたる東高野街道（府道枚方―富田林―泉佐野線）などの他、寺・傍示集落を経て大和へ入る竜王山越の峡崖道（傍示越）^{かいかげみち}や、山地の村々をつないだ山根道^{やまのねみち}などもあった。東高野街道は長岡京以後の南街道であるが、四条畷から妙見山山裾を北上して交野へ入るこの道は、古墳時代以来人々の往来が盛んな古道である。

有池遺跡の所在する地は、現住所では青山3・4丁目となっているが、小字名では「有池」（有池遺跡02-1）、「宮ノ下」（有池遺跡03-1）、「焼垣内」（有池遺跡03-2）にまたがる（図4）。いずれも旧私部村に属し、現在の私部集落の東方に位置する。私部の集落は、江戸初期までは有池遺跡の南方、小字「上河原」付近に集落があったという。風化の進んだ交野山系の谷は大水が出ると土砂の流出が激しいが、「上河原」は交野山と竜王山のまさに谷筋にあたる。『交野市史』によれば、元禄4年（1691）の大水でこの「上河原」の集落が流されたのを機に、現在の地に移ったとされている。この記録の信憑性は定かではないが、有池遺跡では既往の調査により、慶長元年（1596）の伏見大地震に伴うとされる液状化現象の痕跡が検出されており（交野市教委・（財）交野市文化財事業団2003）、周辺地域に地滑りや土石流などの被害があったことも想定される。いずれにせよ、この「上河原」の地は決して安定した土地ではなく、安住を求めて低位置の私部集落へ移ったのであろう。

第2節 歴史的環境（図2）

（1）古代以前

有池遺跡の東方、交野山からのびた尾根が急斜面から緩斜面に変換する標高100m付近には、縄文時代早期の編年標式として著名な神宮寺遺跡がある。ここでは交野考古学会の調査によって旧石器時代のナイフ形石器や、山形文・楕円文・格子目文などのいわゆるネガティブ押型文の土器が出土している。穂谷川右岸に立地する穂谷遺跡も早期末の標式遺跡として知られている。傍示川水系の星田旭遺跡では縄

文時代中期の土器が出土している。

弥生時代前期の遺跡は、集落跡などは未確認であるものの有池遺跡の南西に位置する私部南遺跡で、縄文時代晩期末～弥生時代前期の流路・竪穴住居などが確認されている。ここでは、弥生時代中・後期の水田も確認されており、弥生時代を通して土地利用がなされていたことが知られる。弥生時代中期の遺跡としては上の山遺跡がある。ここでは弥生中期前半の独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物をはじめ、弥生前期～中期の竪穴住居や流路が検出されている。また、郡津渋り遺跡、私部城遺跡などでも当該期の遺物が出土している。弥生時代後期の遺跡としては、寺村遺跡や東倉治遺跡、南山遺跡などがある。寺村遺跡では交野市教育委員会によって調査がなされており、これまでに弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居や溝などが検出されている。有池遺跡の北東に位置する東倉治遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の落込や竪穴住居などが検出されている。南山遺跡は峽崖道沿いの標高210～230m付近に立地する高地性集落である。発掘調査はなされていないものの、中期後半～後期の土器が出土している。この南山遺跡を西へ下れば森遺跡があり、両者の関係が窺える。

弥生時代後期～古墳時代にかけては森集落近辺に遺構が多く認められる。森古墳群は大阪府でも最古級の前方後円墳（1号墳）を擁し、ここでは二重口縁壺が出土している。その北東には中期の車塚古墳群がある。東車塚古墳では3基の棺内から甲冑、筒形銅器、巴形銅器、鏡、刀剣、石釧、琴柱形石製品、玉類など多量の副葬品が出土している。森古墳群の丘陵下に位置する森遺跡では、古墳時代中期の鍛冶関連遺構（交野市教育委員会1989）や竪穴住居、掘立柱建物（交野市教育委員会1997）などが検出されている。妙見山の頂、標高162mに立地する妙見山古墳も前期古墳であり、副葬品として勾玉・管玉やガラス玉、鉄器などが出土している。

古墳時代後期には、有池遺跡の東方丘陵上に古墳群が築かれる。倉治古墳群では、関西電力枚方変電所建設に伴って8基の横穴式石室墳が発見されている。その北方に位置する清水谷古墳は、厚い砂層に覆われているため墳丘の形は不明であるが、無袖式の横穴式石室と墳丘をめぐる周溝などが検出され、金環などが出土している。倉治古墳群・清水谷古墳の南方1.5kmにある寺古墳群は、竜王山の山麓に群集する後期古墳群である。

一方、寺川の山裾部分には、大谷窯址と大谷北窯址が築かれる。大谷窯址では灰原部分が調査されており、6世紀末～7世紀初頭の遺物が出土している。大谷北窯址は調査の結果、焼成室と灰原、工房と考えられる2間四方の建物跡などが検出されている。灰原から出土した土器は大きく2層に分かれ、上層は8世紀初頭、下層は7世紀前半の遺物を包含していた。

有池遺跡の南西に接する上私部遺跡では、古墳時代中期から飛鳥時代初頭にかけての大規模な集落跡が検出されている。これまでの調査で竪穴住居53棟、掘立柱建物56棟が検出されており、有池遺跡とつながる当該時期の集落の中心がこの地にあったことが知られる。古墳時代の住居址は、天野川の対岸に立地する茄子作遺跡でも発見されている。

有池遺跡では03-2調査区において、中世以降の開発により削平されたとみられる古墳時代～飛鳥時代初頭の竪穴住居や溝が検出されているが、以上のように、当該期の居住域の中心は南西に位置する上私部遺跡にあったと考えられ、東方の山裾にはそれにとまなう古墳群が築かれるという景観が想定できる。

（2）古代・中世

交野市域は交野郡の一部で、郡衙は郡津地区に比定されている。推定地近隣では交野市教育委員会に

よって数次にわたって小規模な発掘調査がなされているが、顕著な遺構は発見されていない。天野川西岸の上の山遺跡では、平安時代の掘立柱建物が検出されている。有池遺跡近接地の地名は、現存する荘園関係史料上には確認できず、基本的には国衙領であったと考えられる。

交野市域における荘園としては、石清水八幡宮領の三宅山と大交野荘などがある。三宅山は交野市寺村、森、私市、星田山一帯に比定され、天曆4年(950)成立、以降中世を通して石清水八幡宮領として存続した。室町初期には八幡宮神人である火長陣衆66名のうち12名が三宅山荘の神人であった。大交野荘(星田荘)は、南北あり、南荘は交野市星田、北荘は枚方市山之上・茄子作付近に比定されている。一方で、12世紀中頃、興福寺別院円成寺領として星田南北荘(大交野荘)があった。ところが、治承3年(1179)、石清水八幡宮社宝前内殿長日御供の料所として大交野荘が宛てられ、以後、同宮領の中核的な荘園として、「交野五箇所神人」など急速な神人編成がなされていった。しかし、興福寺による交野支配も存続しており、しばしば両者の衝突も起こったようである(丹生谷1995)。なお、三宅荘に比定されている森では、発掘調査によって10～15世紀の井戸や溝、柱穴などが確認されており、三宅山荘に属する森集落が平安時代以来、存続していたことが知られる(交野市教育委員会2001)。「私部」の名は、古代に后妃のためにおかれた「私部(きさいべ)」に由来するとされている。応永21年(1414)6月21日光通寺鐘銘には「河州交野郡私辺村長寿山光通寺」と見える。永享5年(1433)8月15日の「石清水八幡宮駕輿丁前床神人交名」には、「交野郡下私部」として4人の神人の名が見え、私部の地の名主層もまた石清水八幡宮神人として活動していたことが知られる。

交野市森所在の須弥寺は、やはり石清水八幡宮領であったが、ここで行われた発掘調査(97-1次)では、奈良時代の掘立柱建物跡・溝、11～12世紀の掘立柱列、15世紀の土坑などが検出されている(交野市教育委員会2003)。当調査ではまた、薬師寺および獅子窟寺等と同範関係の認められる蓮華唐草文軒平瓦なども出土しており、大和との関連も伺える。

また、「興福寺官務牒疎」にみえる「開元寺」に比定される開元寺は、創建時は神宮寺集落の南にあったとされているが、鎌倉時代に交野山の山上(岩倉付近、「廃岩倉開元寺」)に移ったとされている。この山上部分では昭和31年、交野市考古学会によってなされた発掘調査で、多宝塔址と推定される礎石列や、鎌倉期および室町期の焼土などが発見され、瓦や懸仏などが出土している。同市傍示所在の八葉蓮華寺にある阿弥陀如来立像は、昭和58年の調査で建久2～建仁3年(1192～1203)頃の快慶(「巧匠安阿弥陀仏」)作であることが確認された。以上のように、交野市域は東高野街道で結ばれる石清水八幡宮と関係を有するとともに、近接する大和とも交渉を密にする地であった。

南北朝期、交野は交野合戦の舞台となり、私部安見清賢・清儀、郡津の今堀新左衛門、星田南荘の和田八郎助、星田北荘の平井兵庫頭、機物神社の神主家からなる倉治郷士、開元寺・獅子窟寺などの郷士は南朝方につき、守護細川顕氏と戦った。安見氏や和田氏はその後も勢力をもち続け、安見氏は戦国期の直政の頃には畠山高政に属し、河内守護代にまでなっている。しかし三好長慶に破れ、一旦大和に逃れている。畠山高政が織田信長によって南河内を与えられると、直政もその居城私部城に戻った。その後、私部城は元亀2・3年(1571・72)に松永久秀・三好義継などに攻められるが死守、しかし天正3年(1575)の信長による破城政策によって廃城になったらしい。

私部城(交野城)は私部の丘陵上、字「城」所在の本郭、二郭、三郭が並ぶ列郭式の居館であり、今日でも南西部に土塁と堀跡の遺構が残る(田代ほか編1981)。昭和44年に二郭址でなされた発掘調査では、弥生中期の包含層(溝?)とともに、土塁築造時の置土と考えられるもの、大坂の陣に焼き払われ

たとされる光通寺の礎石らしいものが見つかっている。

有池遺跡の北東には国人津田氏の居城、津田城遺跡がある。交野山より北にのびる山稜の標高286.5m付近にある国見山の山頂付近には、幅4m、高さ2mの土塁や、虎口などの縄張りが想定されている(国見山城)。昭和31年に行われた発掘調査は、詳細は不明ながら地表下30cmに焼土が広がっており、瓦器や輸入陶磁器などが出土したという(田代ほか編1981)。国見山城廃絶後、四代津田正時が豊臣秀吉に許されて帰郷した後に築城したとされるのが本丸山城である。財団法人枚方市文化財研究調査会によって調査がなされており、「本丸山地区」では数条の堀や柱列などが検出されている〔(財)枚方市文化財研究調査会ほか1992〕。また、在地土豪中原氏の居館跡とされる「古城地区」(中原氏館)では、大濠や土坑などが検出されている〔(財)枚方市文化財研究調査会1976〕。2000年には当センターによって一般国道1号バイパス建設に伴う調査がなされているが、中世に遡る遺構は検出されていない。津田城の北方にある津田トッパナ遺跡では、平安時代末～鎌倉時代前期の掘立柱建物や井戸などが検出されている〔(財)枚方市文化財研究調査会1998〕。

【引用・参考文献】

- 大阪府教育委員会 1994『平成四・五年度有形文化財・無形文化財等総合調査報告書』
- 景守紀子ほか 1986『交野市史』自然編Ⅰ 交野市史編纂室
- 片山長三編 1963『交野町史』改訂増補2 交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団
- 交野市教育委員会 1989『1988年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
- 交野市教育委員会 1997『森遺跡』Ⅵ
- 交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団 2003『鍋塚古墳2000-1次調査 有池遺跡2000-1次調査』
- 交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団 2004『須弥寺遺跡』
- 財団法人大阪府文化財センター 2002『津田城遺跡』
- 財団法人大阪府文化財センター 2003『東倉治遺跡』Ⅰ
- 竹内理三編 1983『角川地名大辞典』27大阪府
- 田代克己ほか編 1981『日本城郭体系』12大阪・兵庫 新人物往来社
- 丹生谷哲一1995 「河内国」『講座日本荘園史』7近畿地方の荘園Ⅱ 吉川弘文館
- 枚方市文化財研究調査会 1976『大阪府住宅供給公社津田団地内遺跡発掘調査概要報告』
- 枚方市文化財研究調査会 1984『枚方市文化財年報』Ⅴ
- 枚方市文化財研究調査会 1985『枚方市文化財年報』Ⅵ
- 枚方市文化財研究調査会 1989『枚方市文化財年報』Ⅸ
- 枚方市文化財研究調査会ほか 1992『津田城遺跡発掘調査概要報告』
- 枚方市文化財研究調査会 1994『枚方市文化財年報』13
- 枚方市文化財研究調査会 1998『新版図録・枚方の遺跡』
- 平凡社 1986『日本歴史地名大系』28 大阪府の地名
- 水野正好 1992『交野市史』考古編 交野市史編纂室

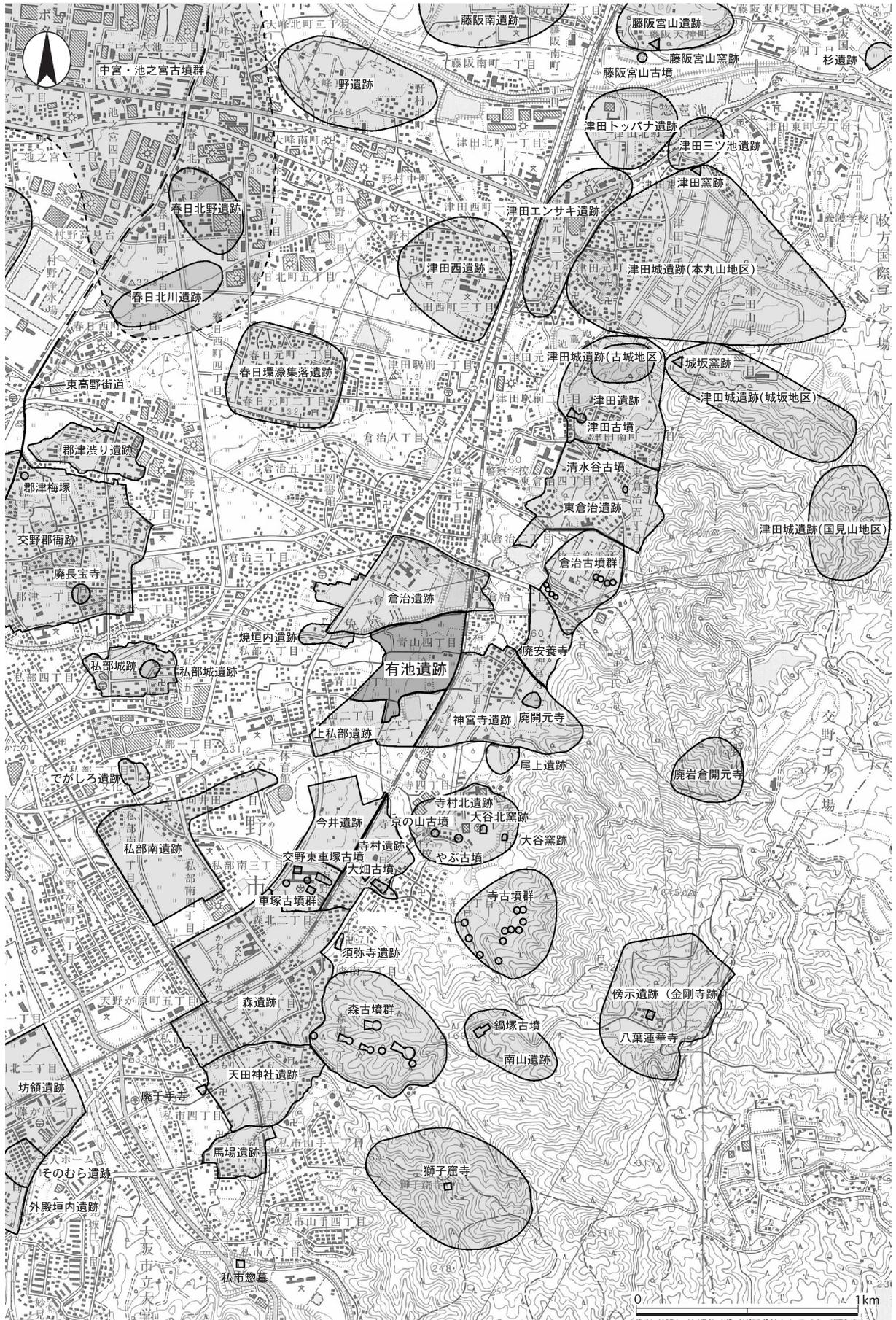


図2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

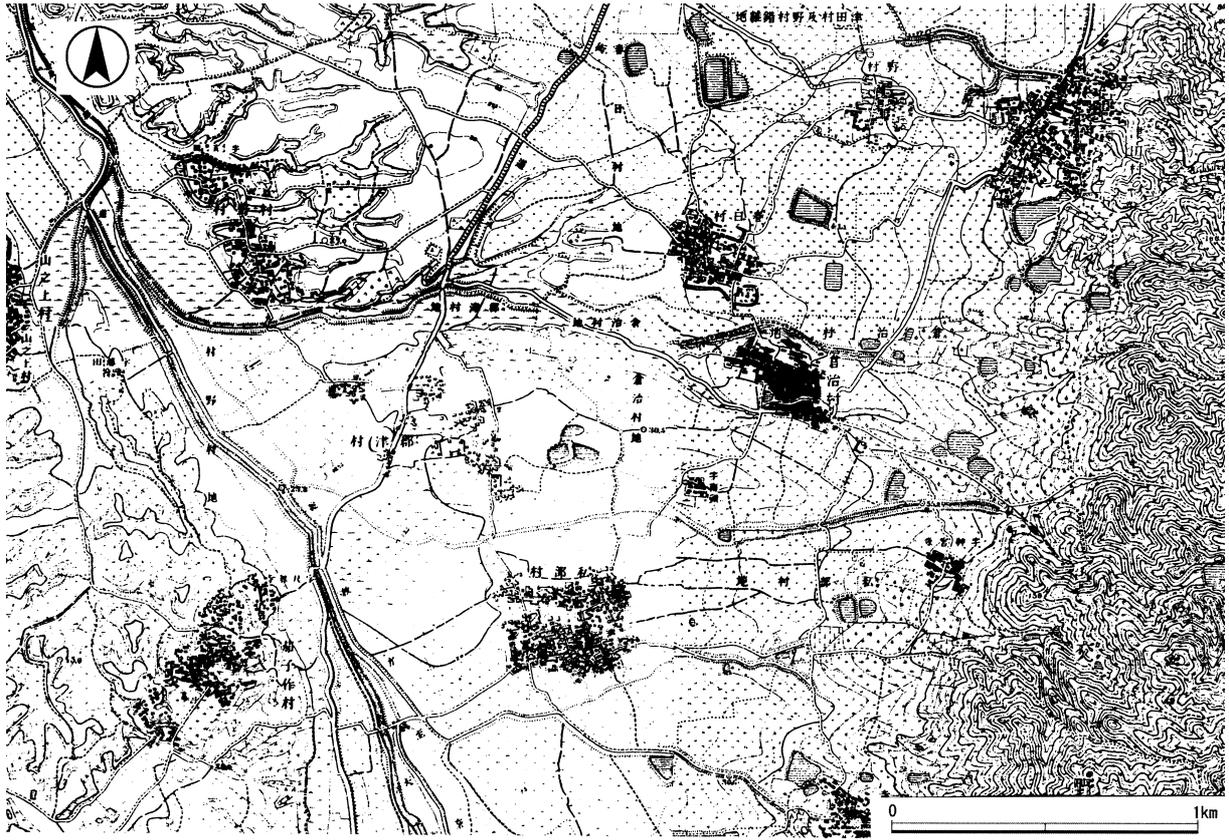


図3 有池遺跡周辺地形図 (1/25,000 『大阪近傍図』明治20年)



図4 有池遺跡周辺字切図 (『交野市全図』昭和52年)

第3章 調査・整理の方法

第1節 調査の方法

有池遺跡02-1・03-1・03-2調査区は従来、生産緑地として利用されており、調査区内には既設水路がめぐらされ、横断可能な里道も数カ所で認められた。そこで調査に際し、地元との協議や個別の聞き取り調査を重ね、それらの施設のなかで現在も機能しているものと、そうでないものの把握に努めた。機能しているものに対しては利用者の希望に添うよう、時期や形状を勘案しながら切り替え工事を

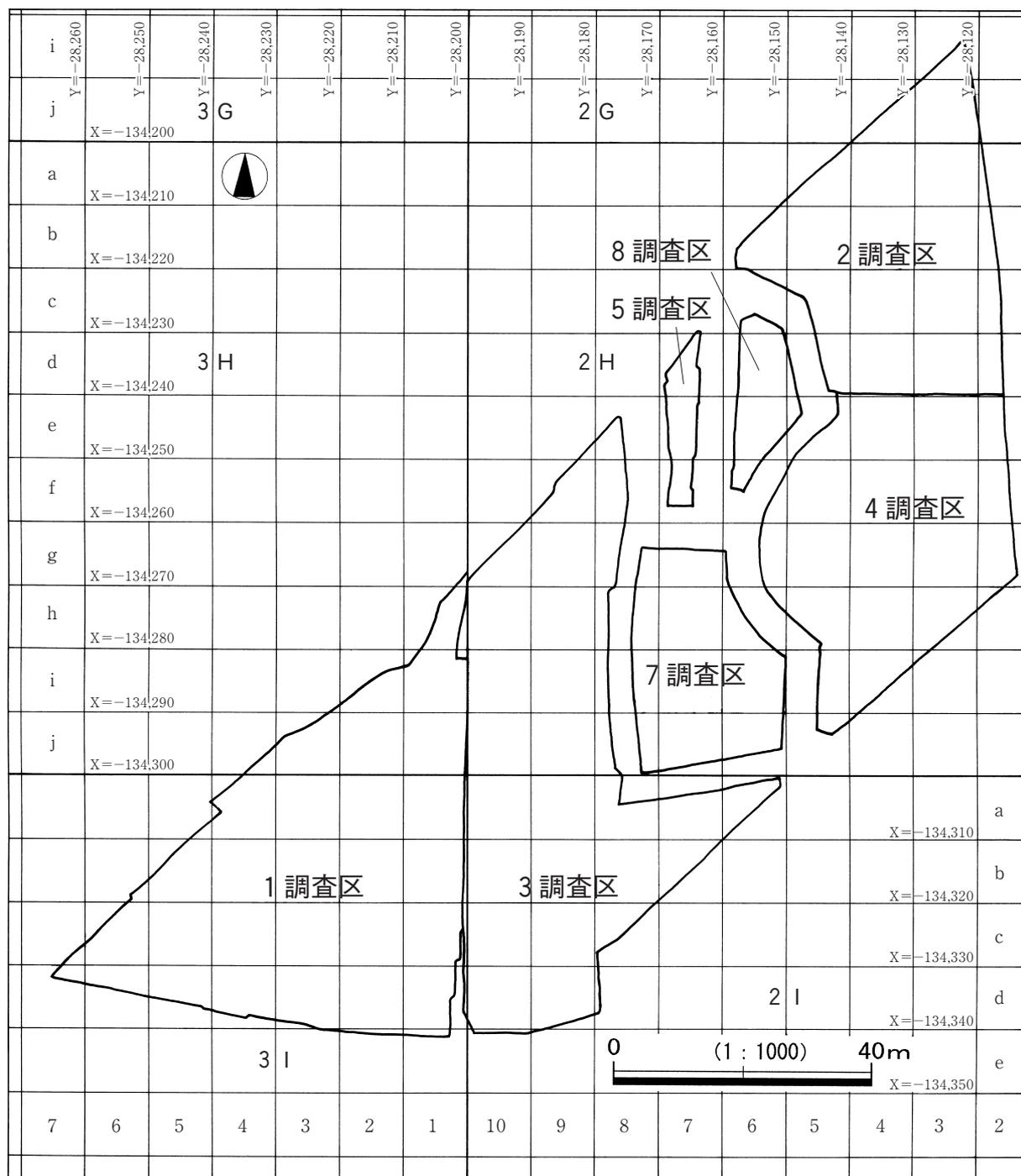


図5 有池遺跡03-2 調査区割・地区割図

行い、必要な場合には調査終了後に復旧工事を行った。

近隣の耕作地に対する配水の要となっている基幹水路に関しては、切り替え作業や調査終了後の復旧が困難なため、基本的にはそれらを保存したまま調査をすすめ、重要遺構が重なっている箇所においてはその部分の遺構の検出に努めることとした。また調査区を横断する市道部分も、切り替え工事が困難なため、今回は調査対象外とした。有池遺跡03-1・03-2で、調査区の区分線が市道や里道、水路に沿っている場合があるのはそのためである。

便宜的に有池遺跡02-1は2区、有池遺跡03-1は6区、有池遺跡03-2は8区に分割し、作業を進めた。各調査区における分割の方法と呼称は図5～7の通りである。

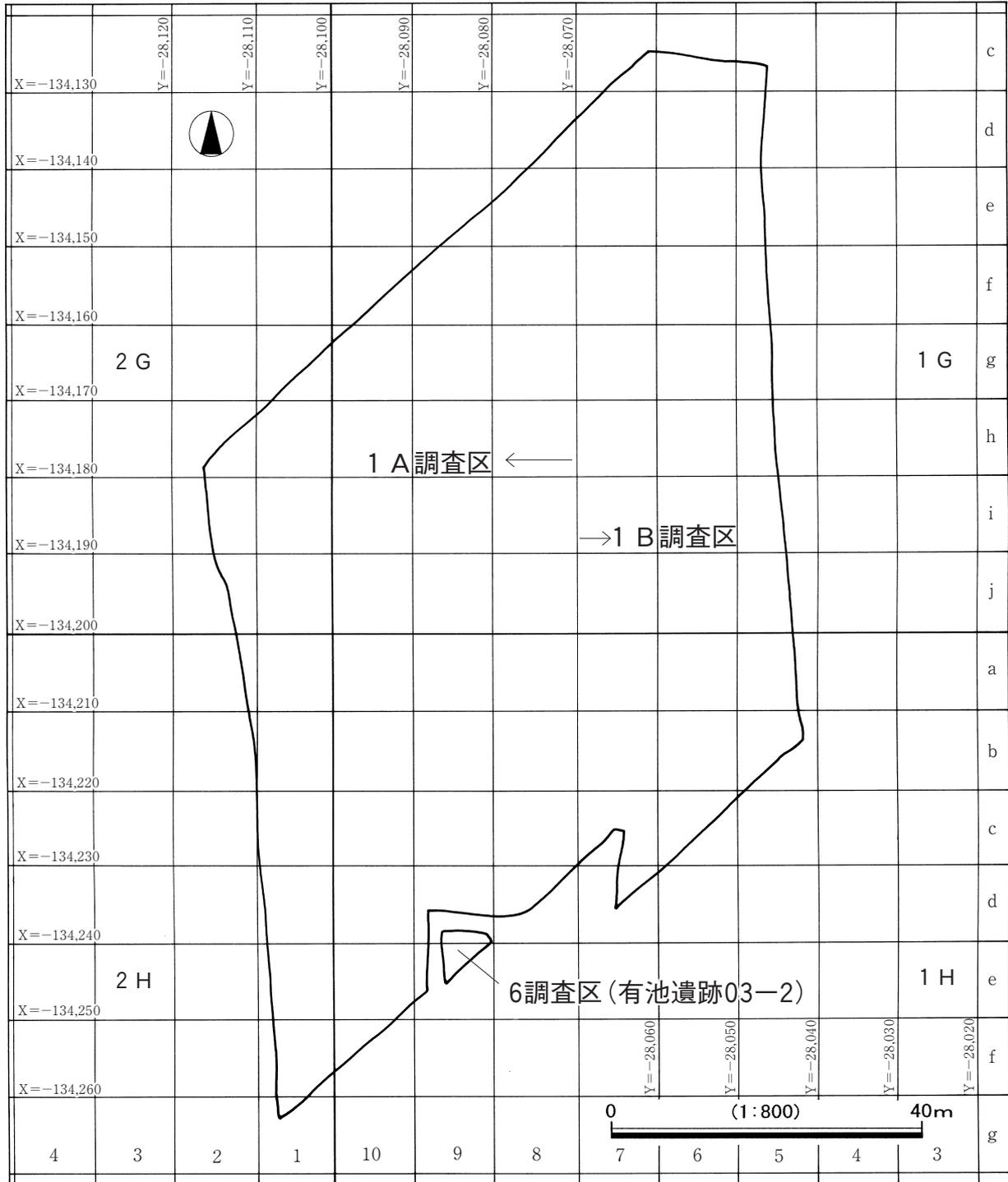


図6 有池遺跡02-1 調査区割・地区割図

調査区への調査関係者以外の人の進入を防ぐため、調査区の周囲はB型バリケードで囲った。

新しい時期の盛土や近世～現代の耕土はバックホーにて除去し、その除去面から遺構検出面までは、人力による掘削・精査を行って遺構・遺物の検出に努めた。遺構番号の付け方は、有池遺跡03-1・03-2に関しては、『遺跡調査基本マニュアル』（以下『基本マニュアル』と表記する 註1）にのっとりた。すなわち調査時の遺構名は種類にかかわらず通し番号とした。ただ各調査とも調査区を細かく区分する必要が生じたこと、遺構の検出数が多かったことから、検出した遺構すべてを通し番号で把握することは困難かつ混乱をきたすことが予想されたため、調査区ごとに1から通し番号を付した。遺構名の記載方法は基本的に、「遺構番号（アラビア数字）－遺構種類」とした。例えば遺構番号が576の遺構が

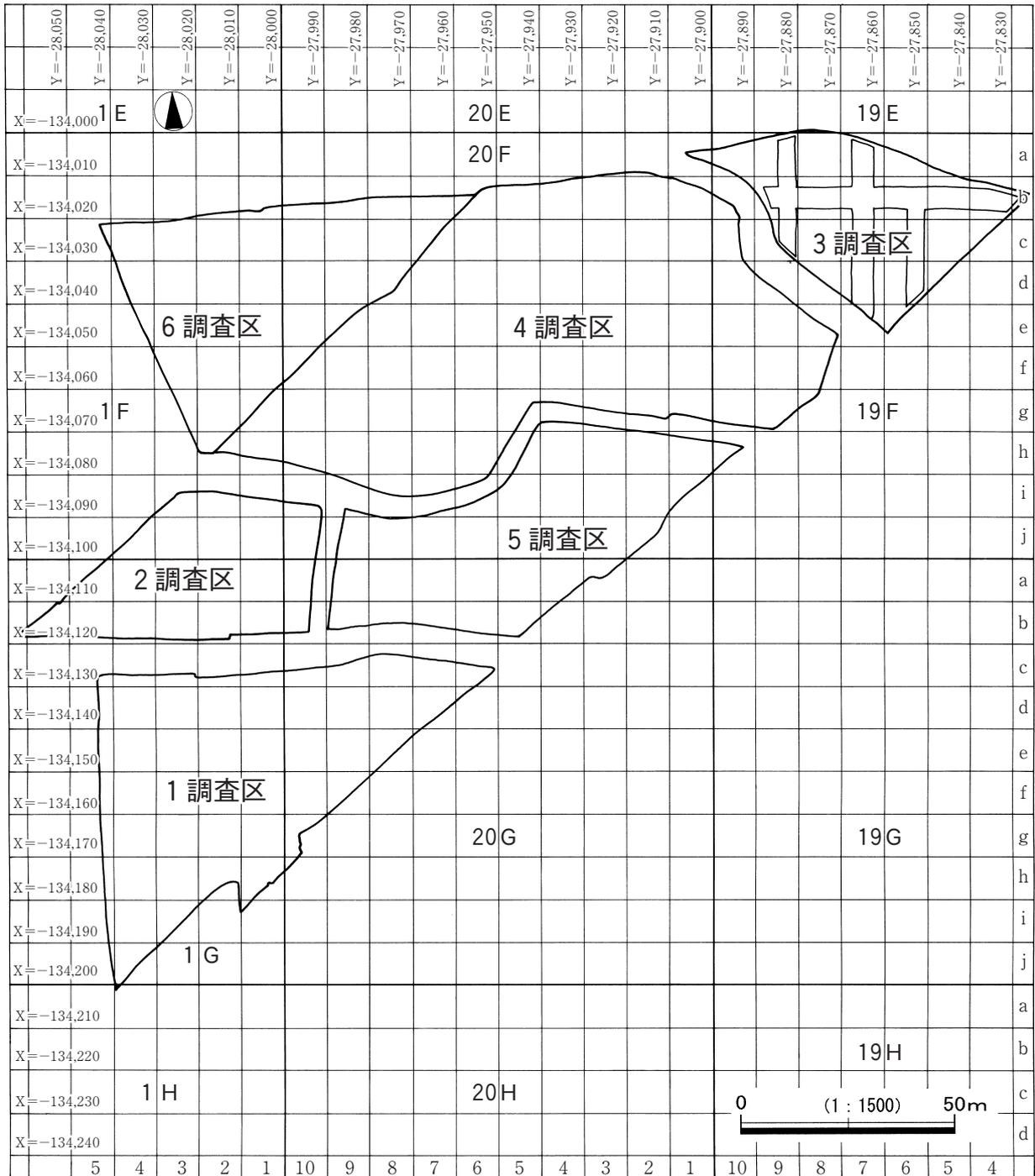


図7 有池遺跡03-1 調査区割・地区割図

溝状の形態であった場合、「576溝」と記載する。ただし、複数の遺構の集合体で一つの遺構が構成される場合、例えば掘立柱建物のような遺構の場合は、通し番号を付したものと区別する必要があるため、建物1というように「遺構種類-番号」という表記を用いる。有池遺跡02-1に関しては調査開始時に『基本マニュアル』が作成されていなかったため、この通りではない。有池遺跡02-1の際は、土坑・溝・ピット等、遺構の種類ごとに1から通し番号を付した。したがって遺構番号に1を有する遺構が複数存在することとなった。そのため有池遺跡03-1・03-2の遺構表記と混同しないよう、表記方法は「遺構種類-遺構番号」とした。有池遺跡02-1と有池遺跡03-1・03-2とで遺構の表記方法が異なるのはそのためである。

遺構検出面の測量と個別の遺構の実測は、世界測地系に基づく平面直角座標第VI系（平成14年度国土交通省告示第9号）をもとに行い、測量はヘリコプター撮影による航空写真測量により、図化作業は50分の1の縮尺で行った。ただ個別の遺構・遺物の検出状況や、土層観察用断面等の実測に際しては、適当な縮尺を選択し、手ばかりで実測を行った。

調査区の全景写真は主に、五段の写真足場から撮影した。

遺物は基本的に世界測地系の座標に基づく10m間隔の基準線によって設けた方形区画ごとに取上げ（図8）、出土地点及び日付を明示して登録番号を付した。ただ有池遺跡02-1調査区では、世界測地系座標の導入前に発掘調査が始まっているため、前半は日本測地系に基づいた基準線にのっとり、遺物を取り上げた。したがってその時点では、『遺跡調査マニュアル』（以下『調査マニュアル』と表記 註2）に則した区画名を踏襲している。調査の中ごろに至り、世界測地系の座標杭を打設した後は、これを基準にした10mメッシュごとに遺物を取り上げた。ただ区画名はそれ以前のものと同様、

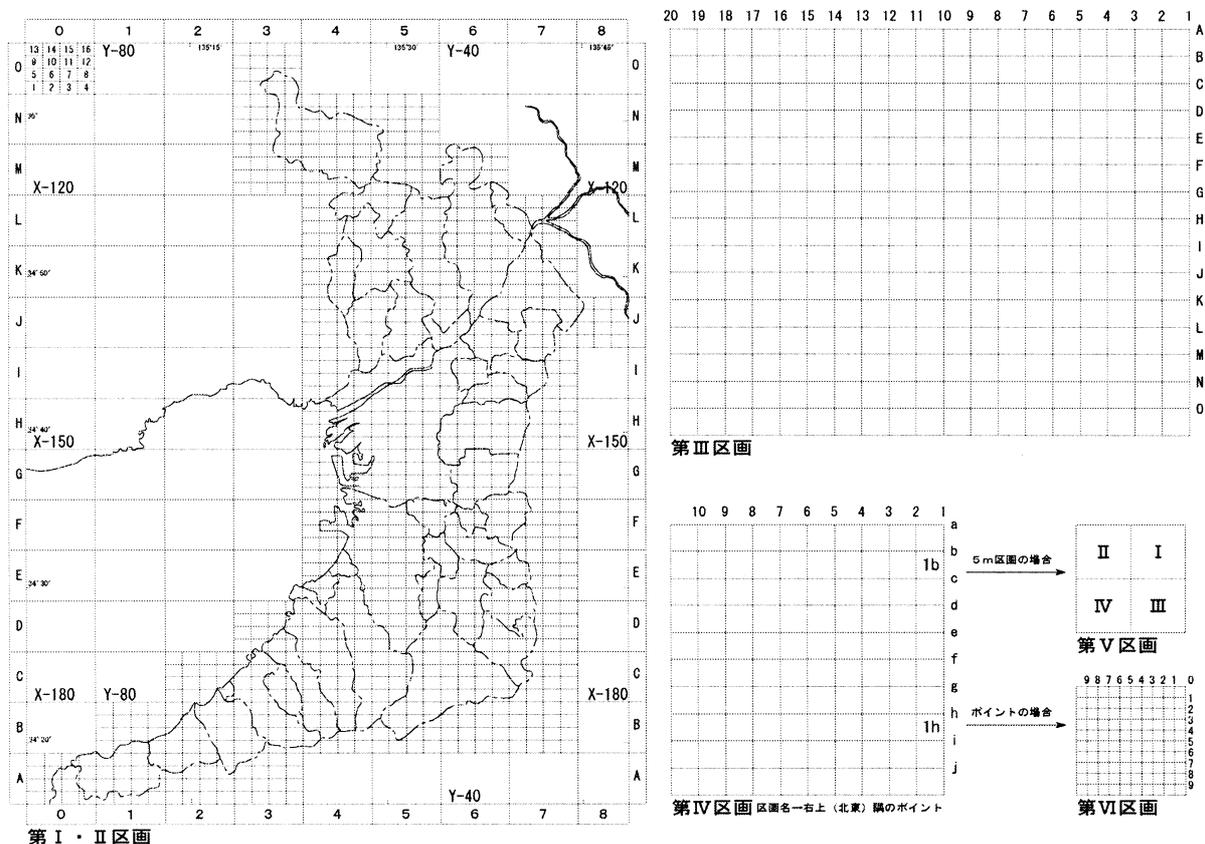


図8 地区割りの基準・名称

マニュアルの規定とは異なる区画名を用いた(図9)。このように有池遺跡02-1の調査では二つの区画を使用することになったため、煩雑な状況が生じたが、これは前述のように調査期間中に用いた座標系が日本測地系から世界測地系へ移行したためである。なお有池遺跡02-1の航空測量および図化に際しては、世界測地系を使用した。

遺物は洗浄・注記後、必要なものは接合・復元し、遺物実測を行った。

調査の過程で古環境復元のため、土層観察用断面などから土壌サンプルを抜き取り、花粉分析等を行った。また基盤層に含まれる黒色化層が生活痕跡に伴うものかどうかを調べるため、最終遺構面の調査終了後、トレンチを設定して部分的に基盤層を掘り抜いた。いずれの作業においても、最終遺構面より下層で遺物や遺構などの生活痕跡を検出することは無かった。なお黒色化層からは土壌サンプルを採り、地層の形成年代等を調べた。それらの理化学分析の成果は第7章でまとめているので、併せて参照されたい。

発掘調査終了後は大阪府教育委員会による立会を受けた。その結果、有池遺跡03-1-1調査区で検出した屋敷地群は歴史的にも意味のあるものなので、遺構が密集する範囲においては平均20cm程度の深度で真砂土をのせ、遺構面を保護した後に埋め戻すようにとの指示を受け、その工事を実施した。したがって井戸の掘りぬきや下層確認の掘削は、屋敷地の残存範囲以外の部分で必要最小限度実施することとした。発掘調査時に発生した廃土は、発掘調査中は調査区内に仮置きし、大阪府教育委員会による立会の後に埋め戻した。

平成15年12月6日(土)に、有池遺跡03-1・03-2と上私部遺跡とで現地説明会を行った。説明時間は13時から15時までで、青山グランド跡地では各現場の航空写真をパネル展示、現場事務所で出土遺物の展示を行った。見学者にはパネル展示場で一旦集合してもらい、上私部遺跡と有池遺跡の概要を説明した後、上私部遺跡から順次北に移動しながら調査成果を説明した。有池遺跡03-1では、その時点で調査が終了していた1調査区の屋敷地を公開した。また有池遺跡03-2では実際の発掘作業が行われている場所で、発掘調査の方法・手順などを説明した。その後希望者20名を募り、遺構(鋤溝)の検出と掘り下げを体験していただいた。当日はぐずつきぎみの天気だったが、公開中は小康を得、地元住民の方々を中心とする238名もの参加を得ることができた(図10)。

第2節 整理の方法

遺物は整理箱(コンテナ)数約360箱が出土した。遺物は洗浄・注記後、台帳登録を行った。ただ金属器は、水洗洗浄をすると腐食がすすむので、表面の泥を落とした後、乾燥剤とともに保管した。また木器は乾燥による変形を防ぐため、整理箱に水付けして保管した。土師器、須恵器、瓦器に関しては、遺構出土遺物を優先的に接合・石膏復元し、口径・底径などの残りのよいものを抽出し、図化・掲載した。陶磁器類については実測可能なものはできるだけ図化するように努めた。また縄文土器・金属器・木器・石器・古墳時代の土器に関しては、遺構出土の有無を問わず、全てをピックアップした。木製品については、加工痕や人為的に付けられたとみられるキズ、もしくは使用痕が認められるものを中心に図化している。

遺物編の中で、土器・陶磁器類は出土遺構、包含層ごとに記述し、木製品、鉄製品類などはまとめて掲載した。

遺物の編年は、主に以下の文献を参考にし、分類名、調整などの用語も做った。

古墳時代須恵器：田辺昭三1966『陶邑古窯址群』平安学園高等学校

古墳時代土師器：辻美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』
大阪大学考古学研究室

土師器皿：伊野近富1987「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』Ⅰ（財）京都府埋蔵文化財調査
研究センター

小森俊寛2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房

橋本久和1991「大阪北部の古代後期・中世土器様相」『高槻市文化財年報』昭和63・平
成元年度高槻市教育委員会

山口均2006「乙訓地域の中世土器（土師器皿）編年について」『向日市埋蔵文化財発掘
調査報告書第71集 長岡宮第431次（7ANBUK-4地区）～北辺官衙（北部）～発
掘調査報告』（財）向日市埋蔵文化財センター

瓦器碗：橋本久和1980『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会

森島康雄1995「瓦器碗」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

輸入陶磁器：山本信夫2000『大宰府条坊跡』XV－陶磁器分類編－太宰府市教育委員会

国産陶器・東播系須恵器・石鍋：日本中世土器研究会1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

瓦質土器：佐藤亜聖1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XⅠ
日本中世土器研究会

楠葉型瓦器碗の実年代については、橋本編年の年代観を森島康雄が補正したものが一般的に用いられ
ており、11～12世紀代のものについてはそれに拠っているが、13世紀以降については土師皿や東播系須
恵器などの共伴関係から若干の補正が必要と考え、小森2005、山口2006などを参考として、以下のよう
に便宜的に付した。

Ⅲ－1：12世紀末～13世紀初頭 Ⅲ－2：13世紀前半 Ⅲ－3：13世紀後半 Ⅳ－2：14世紀前半

Ⅳ－1については、そのみでまとまって出土した資料がなく、Ⅲ－3およびⅣ－2に位置付けられ
ると考えられる資料と共伴して出土する例が多かったため、13世紀後半～14世紀前半の中でとらえてい
る場合が多い。

註1 『遺跡調査基本マニュアル 暫定版』2003.8 （財）大阪府文化財センター

註2 『遺跡調査基本マニュアル』1988 （財）大阪文化財センター

【その他の参考文献】

伊野近富1993「古代～中世洛外産土師器皿の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅹ

小野正敏1985「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」『MUSEUM』416

小森俊寛・上村憲章1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』3 （財）京都市埋蔵文化財研究所

佐藤亜聖2001「大和における出現期の瓦質土器について」『中世土器研究論集』中世土器研究会

菅原正明1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』同論集刊行会

中野晴久1986「槍場・御林古窯址群の編年的研究」『知多古文化研究』2 知多古文化研究

藤澤良祐1982「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』8 東洋陶磁学会

藤澤良祐1991「古瀬戸古窯跡群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X

間壁忠彦・間壁霞子1966～68・84「備前焼き研究ノート」1～5『倉敷考古館研究集報』1・2・4・18

妙見山麓遺跡調査会1989『神出1986－神出古窯址群に関連する遺跡の調査－』

森島康雄1992「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会

森田稔1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯跡群を中心に－」『研究紀要』3 神戸市立博物館

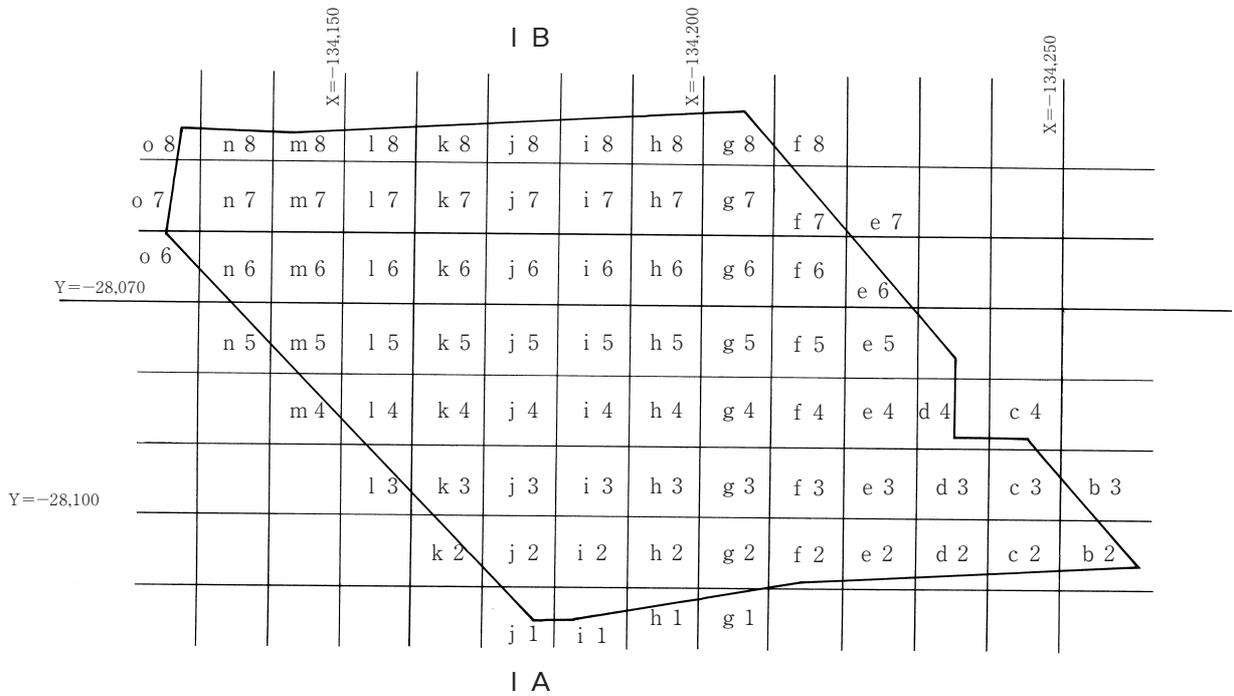
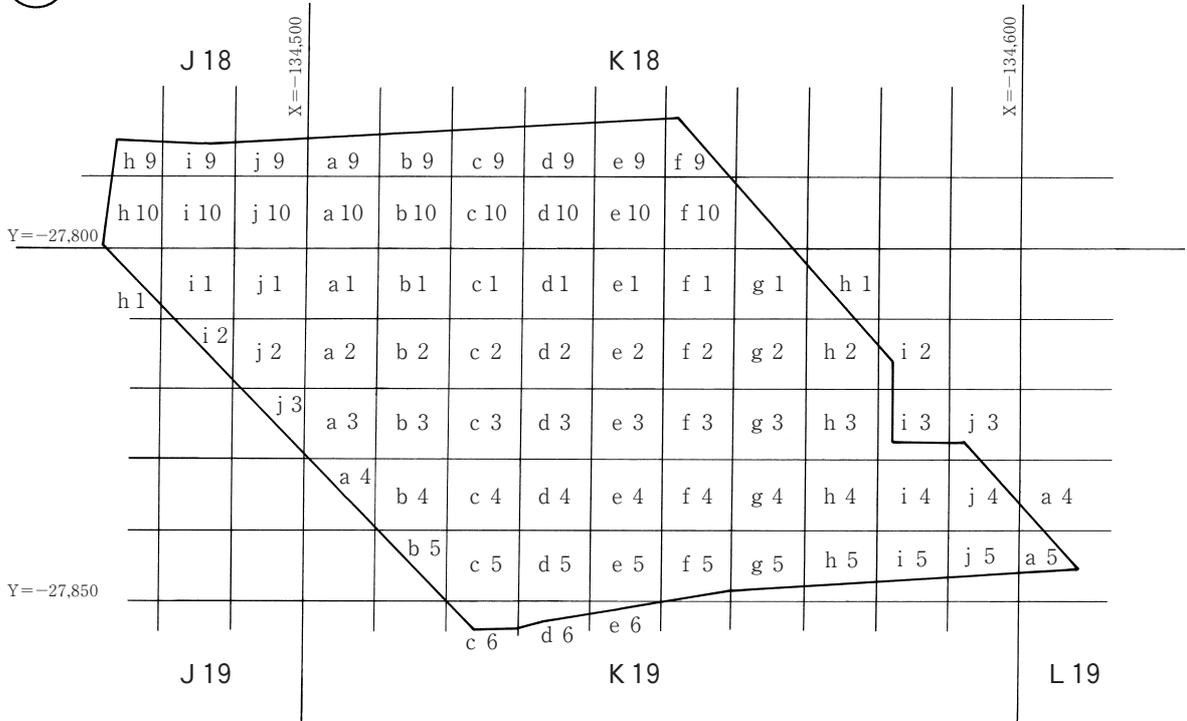


图 9 有池遺跡02-1 地区割図新旧比較図

平成15 (2003) 年12月6日 (土)

かみきさへ ありいけ 上私部遺跡・有池遺跡 (その2・3) 現地公開資料

財団法人 大阪府文化財センター

財団法人大阪府文化財センターは、国土交通省・日本道路公団の委託を受けて、第二京阪道路（北大阪道路）の建設にともなう発掘調査を実施しています。

平成8年度より、遺跡の有無やひろがりを知るため、細長い調査地を道路用地内に設定し、確認調査をおこなってきました。その結果、上私部遺跡、有池遺跡のひろがり確認されました。大阪府教育委員会の指導のもと、平成14年度より有池遺跡の本格的な発掘調査を開始し、平成15年度には上私部遺跡および有池遺跡（その2）、有池遺跡（その3）の発掘調査を実施しています。

上私部遺跡は青山住宅の南側にひろがります。ここでは、古墳時代の中頃（5世紀）から飛鳥時代の初め（7世紀の初め）にかけての集落がみつかりました。この場所は、洪水の跡とみられるまとまった砂や小石の層があまりみられないことから、比較的安定した土地であったことがうかがえます。古墳時代から、人々はこうした住みやすい場所を選んで集落をいとなんできたようです。周辺には集落とほぼ同じ時期の、倉治古墳群や寺古墳群というお墓があり、今回みつかった集落との関連が考えられます。

有池遺跡は、上私部遺跡の東側、旧青山グラウンドから免除川の南側にかけてひろがります。複数の谷と水田のほか、谷にはさまれた高い場所では鎌倉時代から室町時代に営まれた集落がみつかりました。水田は、鎌倉時代には地形にそった区画をもちますが、室町時代には東西南北方向に区画をもつ水田に整備されます。集落では、地面に穴を掘って柱を立てる掘立柱建物という建物や井戸がみつかりました。なかでも、有池遺跡（その2）では方形にめぐる濠や溝に囲まれた屋敷地がみつかり、集落の中心であったと考えられます。南北朝時代以降、集落をまきこんでつづいた戦乱が、このような建物配置の形をつんだと考えられています。

このように、これまでの調査で、古墳時代から室町時代にかけて、交野山のふもとで営まれた人々の生活の一端が明らかになりました。建物の跡や使われた器、道具を見ていただき、約1500年前から400年前にかけてこの地に住んだ人々に思いをはせていただけたら幸いです。これからの調査により、この地でくろひろげられた人々の活動がいっそう明らかになることが期待されます。今後とも、ご協力のほど、よろしくお願ひ申し上げます。



手前より、有池遺跡、上私部遺跡とスタードームをのぞむ（北東から）



屋敷地の周囲をめぐる濠

幅2.5m、深さ1m弱の規模です。濠の底は平らな形状をしており、幅は1mほどです。濠の埋土の様子から、濠が機能している間は水がよこた状態であったと考えられ、屋敷地を囲うだけでなく、水溜りとしての役割もあったと考えられます。



焼土遺構

およそ1.5m×2.5mの長楕円形の範囲に、真っ赤に焼けた土や炭が約20cmの厚さで堆積している部分がありました。それを取り除くと、方形に石を並べた施設の一部とみられるものがみつかったことから、かまどだったのでないかと考えています。



石敷き遺構

浅い掘り込みの中に、円形に、上面をそろえるようにして石が並べられています。浅い掘り込みの四隅に柱穴がみられることから、覆屋が建っていたとみられます。



方形壁穴建物 倉庫かもしれません。



木製の容器や板材を杭でとめています。水場とみられます。



2調査区全景（南から）

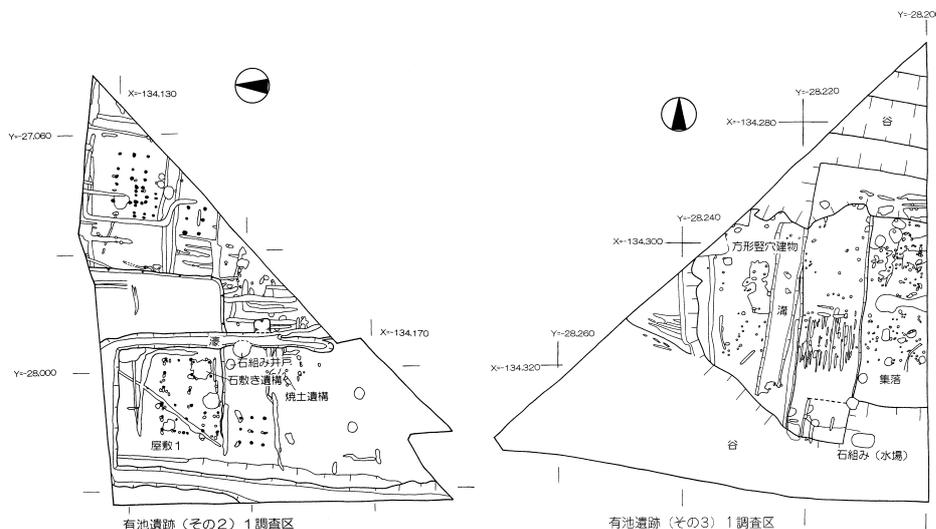


図10 現地公開資料（部分）

第4章 有池遺跡02-1の調査成果

第1節 基本層序

1. 1A・1B調査区（図11・12）

基本的な層序は、調査地のほぼ全域において共通している。ただし、南端の三角地は、現況においても一段高くなっており、土層の堆積も他と比して非常に良好であったため個別に層名を付した。この層序については、南端部として別個に記載する。

層名は、耕土および床土を機械にて除去したのち、上から順に1～4層と名付けた。1層は、中世後半～近世耕土、2層は中世（14～15世紀主体）の遺物包含層、3層は中世（12～13世紀主体）の遺物包含層、4層は飛鳥時代の遺物包含層である。また、地山としたベース土は、黄褐色を呈する花崗岩の風化層であり、非常に硬くしまっている。このベース土は、後述の南端部においても共通する。1・2層は調査地全域においてほぼ均一にみられるが、3層は調査地北半および東半、そして、4層は調査地西端中央の非常に限られた部分にそのひろがりが見とめられた。おそらく、本来は3・4層ともにほぼ全域にひろがっていた可能性も考えられるが、後世の水田耕作などともなう土地の改変などにより、その多くが削平されてしまったものであろう。

また、大溝1や北側の小規模な谷部などのやや低い場所では、整地土を入れるなど地面を水平にならしたうえで、水田耕作をおこなっている様相が看取できた。古くは13・14世紀ごろに遡るものと考えられる。こうした地形の改変が、現風景の原形となっている様相がうかがえる。

遺構面は、1層を除去した面を第1面、2～4層除去後面を第2面とした。ただし、第1面は近世の耕作地面であるため、本書で対象とするのは第2面である。

1層は、明黄褐色粗砂混シルトであり、中世後半～近世の耕土と考えられる。層厚は約10～25cmである。出土遺物は、瓦器・土師器片のほか天目・染付などを含む。この1層除去後面を第1面とした。第1面では、方位ののった南北・東西方向の鋤溝および、水田の区画溝を検出した。さらに、その区画溝が合流する箇所では、方形土坑や井戸などがあり、貯水池的な役割を果たしていたと考えられる。

2層は、灰黄褐色微砂混シルトであり、中世の耕土と考えられる。層厚は約10～30cmである。出土遺物は、高台の退化した瓦器片や土師器皿など中世（14～15世紀）の遺物を主体としている。染付など近世に由来する遺物は含まれない。

3層は、灰黄褐色シルトであり、中世の耕土と考えられる。層厚は約10～25cmである。遺物は、中世（12～13世紀）を主体とする土師器片・瓦器片が出土している。

4層は、灰褐色シルトであり、古墳時代中期後葉～飛鳥時代の遺物包含層と考えられる。ほぼ2×15mの非常に限られた範囲にのみみとめられる。層厚は約10～15cmである。遺物は、古墳時代中期後葉の須恵器甕、飛鳥時代初頭の須恵器杯・甕・土師器片などが出土している。

なお、小規模谷の谷頭付近において、下層確認のため10×2mのトレンチを設け、第2面以下約1.5mの掘削をおこなった。第2面下では、ベース土とした花崗岩風化土であるにぶい黄橙色中～粗砂が最大約25cmの層厚で見とめられ、その下では、火山灰を含む褐灰～灰褐色シルトが約10cmの厚さで見られた。さらに下層は、明黄褐色シルト～にぶい黄橙色中～粗砂混シルトであり、最下層は、明褐灰色粘土と灰

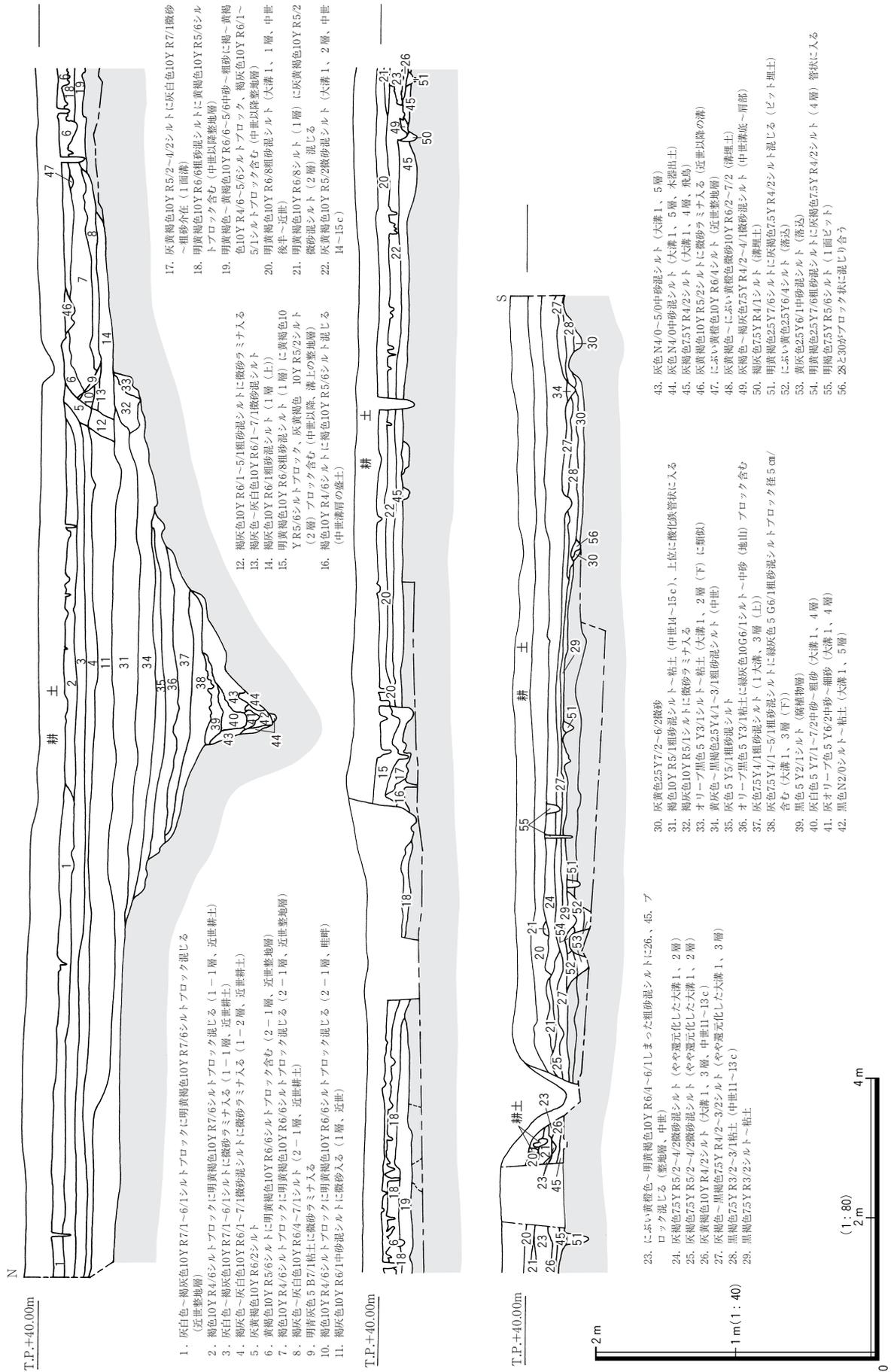


図11 有池遺跡02-1 土層断面図

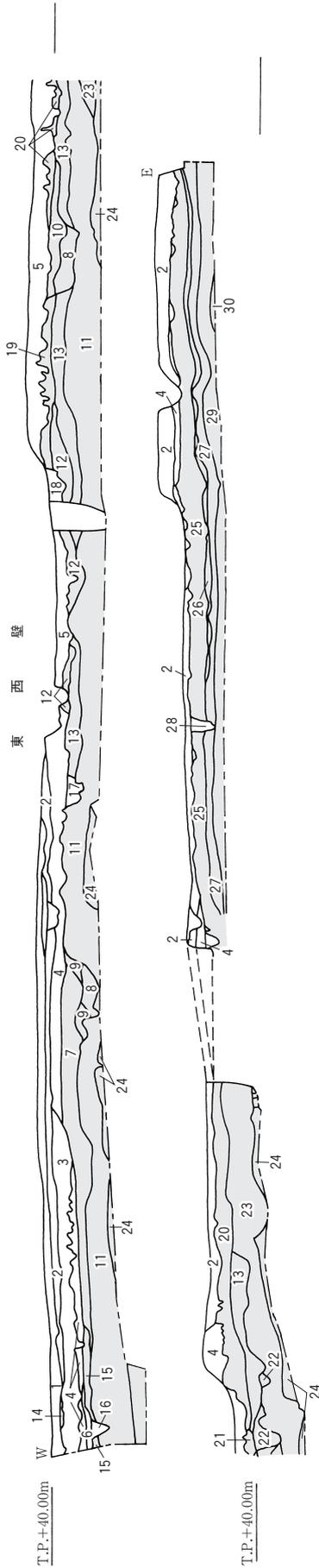
- 17. 灰黄褐色10Y R5/2-4/2シルトに灰白色10Y R7/1微砂～粗砂介在 (1面溝)
- 18. 明黄褐色10Y R6/6粗砂混シルトに黄褐色10Y R5/6シルトプロック含む (中世以降整地層)
- 19. 明黄褐色～黄褐色10Y R6/6-5/6中砂～粗砂に褐～黄褐色10Y R4/6-5/6シルトプロック含む (中世以降整地層)
- 20. 明黄褐色10Y R6/8粗砂混シルト (大溝1、1層、中世後半～近世)
- 21. 明黄褐色10Y R6/8シルト (1層) に灰黄褐色10Y R5/2微砂混シルト (2層) 混じる
- 22. 灰黄褐色10Y R5/2微砂混シルト (大溝1、2層、中世14～15c)

- 12. 褐灰色10Y R6/1-5/4粗砂混シルトに微砂ラミナ入る
- 13. 褐灰色～灰白色10Y R6/1-7/4微砂混シルト
- 14. 褐灰色10Y R6/4粗砂混シルト (1層) に黄褐色10Y R5/2シルト (1層) に黄褐色10Y R5/6シルトプロック、灰黄褐色 (2層) プロック含む (中世以降、溝土の整地層)
- 15. 黄褐色10Y R6/8粗砂混シルト (1層) に黄褐色10Y R5/6シルトプロック、灰黄褐色 (2層) プロック含む (中世以降、溝土の整地層)
- 16. 褐色10Y R4/6シルトに褐色10Y R5/6シルト混じる (中世溝厚の盛土)

- 31. 褐色10Y R5/1粗砂混シルト～粘土 (中世14～15c)、上位に酸化鉄管状に入る
- 32. 褐色10Y R5/1シルトに微砂ラミナ入る
- 33. オリーブ褐色5 Y3/1シルト～粘土 (大溝1、2層 (下) に類似)
- 34. 黄灰色～黒褐色2.5Y4/1-3/4粗砂混シルト (中世)
- 35. 灰白色5 Y5/1粗砂混シルト
- 36. オリーブ黒色5 Y3/7粘土に褐灰色10G6/1シルト～中砂 (地山) プロック含む
- 37. 灰褐色5 Y4/1粗砂混シルト (1次溝、3層 (上) 含む (大溝1、3層 (下)))
- 39. 黒色5 Y2/1シルト (腐植物層)
- 40. 灰白色5 Y7/1-7/2中砂～粗砂 (大溝1、4層)
- 41. 灰オリーブ色5 Y6/2中砂～粗砂 (大溝1、5層)
- 42. 黒色N2.0シルト～粘土 (大溝1、6層)

- 23. におい黄褐色～明黄褐色10Y R6/4-6/1しまった粗砂混シルトに26、45、プロック混じる (整地層、中世)
- 24. 灰褐色7.5Y R5/2-4/2微砂混シルト (やや還元化した大溝1、2層)
- 25. 灰褐色7.5Y R5/2-4/2微砂混シルト (やや還元化した大溝1、2層)
- 26. 灰黄褐色10Y R4/2シルト (大溝1、3層、中世11～13c)
- 27. 灰褐色～黒褐色7.5Y R4/2-3/2シルト (やや還元化した大溝1、3層)
- 28. 黒褐色7.5Y R3/2-3/1粘土 (中世11～13c)
- 29. 黒褐色7.5Y R3/2シルト～粘土

- 43. 灰白色N4/0-5/0中砂混シルト (大溝1、5層)
- 44. 灰白色N4/0中砂混シルト (大溝1、5層、木器出土)
- 45. 灰褐色7.5Y R4/2シルト (大溝1、4層、飛鳥)
- 46. 灰黄褐色10Y R5/2シルトに微砂ラミナ入る (近世以降の溝)
- 47. におい黄褐色10Y R6/4シルト (近世整地層)
- 48. 灰黄褐色～におい黄褐色微砂10Y R6/2-7/2 (溝埋土)
- 49. 灰褐色～褐灰色7.5Y R4/2-4/1微砂混シルト (中世溝底～肩部)
- 50. 褐灰色7.5Y R4/1シルト (溝埋土)
- 51. 明黄褐色2.5Y Y7/6シルトに灰褐色7.5Y R4/2シルト混じる (ピット埋土)
- 52. におい黄色2.5Y6/4シルト (落込)
- 53. 黄灰色2.5Y6/4中砂混シルト (落込)
- 54. 明黄褐色2.5Y7/6粗砂混シルトに灰褐色7.5Y R4/2シルト (4層) 管状に入る
- 55. 明褐色7.5Y R5/6シルト (1面ピット)
- 56. 28と30がプロック状に混じり合う



1. 明黄褐色10Y R6/8粗砂混シルト (1層、中世後半～近世)
 2. 灰黄褐色10Y R5/2微砂混シルト (2層、中世14～15世紀)
 3. におい黄褐色～明黄褐色10Y R6/4～6/6しまった粗砂混シルト (地山) プロックに4、6、プロック混じる (整地層、中世14世紀)
 4. 灰黄褐色10Y R4/2シルト (3層)
 5. 灰褐色7.5Y R4/2シルト (4層、飛鳥)
 6. 灰褐色7.5Y R4/2シルト (4層、飛鳥)
 7. 明黄褐色2.5Y Y7/6粗砂混シルト (地山)
 8. 灰色N4/0粘土 (有機物多く含む)
 9. 灰色7.5Y Y7/1粗砂混シルトに灰色N4/0粘土混じる (有機物多く含む)
 10. オリーブ灰色5G Y6/1粘土に明青灰色5B7/4粘土薄層入る (地山)
 11. 灰白色N7/0中砂～粗砂に明青灰色5B7/4粘土薄層入る (地山)
 12. 緑灰色7.5G Y6/1しまったシルト (地山)
 13. 灰色N6/0粗砂混シルト～粘土 (地山)
 14. 明黄褐色10Y R6/8シルト (1層) に灰黄褐色10Y R5/2微砂混シルト (2層) 混じる
 15. 明黄褐色2.5Y Y7/6粗砂混シルトに褐褐色7.5Y R4/2シルト (4層) 管状に入る (地山)風化土)
 16. 明黄褐色2.5Y Y7/6シルトに灰褐色5.5Y R4/2シルト混じる (ピット埋土)
 17. 黒褐色7.5Y R3/1シルトに明褐色7.5Y R7/4微砂介在する (2面溝)
 18. 灰白色10Y R8/1中～粗砂、肩部に褐灰色10Y R6/1～5/1粗砂混シルト (1面溝)
 19. 緑灰色7.5G Y6/1粗砂混しまったシルトに酸化鉄斑文管状に入る (地山)
 20. 緑灰色7.5G Y6/1粗砂混しまったシルトに酸化鉄斑文管状に入る (地山)
 21. 緑褐色7.5G Y6/1シルトに灰色N6/0シルト混じる、根茎多く入る (地山)
 22. 灰白色N7/0シルトに明オリーブ灰色5G Y7/1シルト混じる、根茎多く入る (地山)
 23. 明オリーブ灰色5G Y7/1中～粗砂に灰色N6/0中砂プロック含む (地山、高い方の土石流埋土)
 24. 灰白色N7/0Lしまった中～粗砂混シルト (地山)
 25. 明黄褐色10Y R6/6しまったシルトに粗砂、小礫径3mm入る (地山)
 26. 褐灰色7.5Y R5/1シルト～粘土 (有機物層、地山)
 27. 明黄褐色2.5Y Y7/6シルト～粘土 (地山)
 28. 25と27がプロック状に混じり合う
 29. オリーブ灰色5G Y6/1中～粗砂 (地山)
 30. 緑灰色7.5G Y6/1微砂と粘土互層 (地山)

図12 有池遺跡02-1 土層断面図

黄褐色中～粗砂の互層である。部分的には有機物層はみられるものの、遺物は全く出土せず、その堆積状況なども安定していることから、自然堆積層である可能性が高いと考えられる。

2. 南端部 (図12)

当箇所は、調査地南側にひろがる、より高位にある棚田の北西隅部にあたる。そのため、土層の堆積は、全体的に北・西側に傾斜してみとめられる。層名は、耕土および床土以下を上から順に1～5層と名付けた。

1層は、黄灰色細～粗砂混シルトであり、近世～近代にかけての耕土と考えられる。全体にひろがる1層と共通する。中央付近から東部にかけて堆積し、西端では、棚田の段落ち際に沿ってはしる溝の上層にもその堆積がみとめられる。層厚は約15～40cmである。1～2層は、にぶい黄褐色シルトであり、1層と同様近世～近代の耕土と考えられる。南半では厚く堆積しているが、北西部では鋤溝の埋土などにみられるにすぎない。層厚は約10～40cmである。

2層は、灰黄褐色微砂混シルトであり、中世耕土(14～15世紀主体)と考えられる。全体の2層と共通するものである。これも当箇所全域に堆積するのではなく、北半のみにみとめられる。この2層を除去した面を南端部第2面とした。主な遺構としては、土坑45・溝77などがある。層厚は、最大約20cmを測る。

3層は、褐灰色～灰黄褐色シルトである。遺物が非常に少ないため、中世の中における時期は特定できないが、2層(14～15世紀)と4層(11～12世紀)に挟まれていることから、中世(12～13世紀)の耕土の可能性が高い。2層と同様に北半にのみみとめられる。この3層除去後面を第3面とした。

4層は、褐灰色～灰黄褐色シルトであり、中世耕土(11～12世紀主体)と考えられる。全体の3層と共通するものである。この4層除去後面を第4面とした。層厚は約10～30cmである。

5層は、灰黄褐色粗砂混シルトである。遺物が出土していないため、その年代は不明といわざるをえないが、少なくとも平安時代末以前であることは確実である。この5層除去後面を第5面とした。層厚約10～20cmである。

第2節 遺構

1. 1A・1B調査区 (図13)

第2面では、中世の居住域、および水田域を確認した。主な遺構としては、掘立柱建物2棟、柵列1列、ピット、土坑、溝などがある。その多くは、2層および3層を埋土とし、3層を埋土とする遺構は、2層を埋土とする遺構に切られている。また、一部には4層を埋土とする飛鳥時代の遺構もみとめられた。

居住域は、調査区北端の微高地上にみとめられた。ただ、当調査区においてはその南端を確認できたにすぎず、その中心は調査区外にひろがる可能性が高い。出土遺物より12～13世紀を中心に存在した集落であったと考えられる。一方、水田域では、中世における新旧2時期の水田を確認した。まず、新しい時期(以下、新段階とする)では、東西南北方向の水田区画をもち、段落ち際にはしる溝や方位にのる鋤溝がみとめられた。これらは、いずれも2層を埋土とする。一方、古い時期(以下、古段階とする)では、地形に沿う水田区画およびそれと並行するような鋤溝がみとめられた。小規模な谷部においては、水田は等高線に沿うよう棚田状に区画され、耕作されている状況が看取できた。これらの埋土は3層を主体としている。古段階の水田は、その出土遺物より、居住域とほぼ同時期に存在していた可能性



図13 有池遺跡02-1 第2面 平面図

が高い。

また4層のひろがりかみとめられた範囲では、飛鳥時代に属するピットや溝を確認した。やや距離を隔てるが、大溝1の下層出土遺物と時期的に符合する。

以上のことから、当調査区においては、微高地上は居住域、そして小規模な谷部周辺および南側谷部（大溝1）に挟まれた低地部は水田域として利用されていたことが明らかとなった。また、水田耕作における土地利用のあり方についても時期により差異がみとめられることが確認できた。

では、おもな遺構についてみていくこととする。

大溝1（図11） 南端に位置する東西方向にはしる谷筋である。最大幅約25m、最深約3mを測る。東西方向の段落ちを2～3段経たのち、谷筋の中心部分では急角度をもって収束する。その断面形はV字状を呈する。この溝は、その埋土および出土遺物より大きく4つの時期に区分できる。上位の3層は、中世～近世であり、下位の層は飛鳥時代に由来すると考えられる。

最上位では、数枚の耕作土の堆積がみとめられ、さらに谷筋の肩部にかけて複数の整地土層の単位がみられる。これらのことから、水田を棚田状に造成し、耕作地として利用していた様相が看取できる。出土遺物は、土師器片・瓦器片・染付などを含む。その下層は、基本層序の2層に類似する褐色微砂混シルト、および3層に類似する灰色シルト～粘土となっており、灰色シルト～粘土の堆積環境は、沼のような状況が想定される。出土遺物は、褐色微砂混シルトが中世（14～15世紀）を中心とした土師器片・瓦器片、灰色シルト～粘土が中世（12～13世紀）を中心とした土師器片・瓦器片である。これより下位では、溝幅が約4mと非常に狭くなる。そして、粗～中砂、中砂混シルト～粘土、そして最下層の中～粗砂層へと変化することから、水流が活発な時期とそうでない時期が交互にあったと想定される。遺物は、上部の粗～中砂では飛鳥時代（6世紀末～7世紀初）の須恵器甕片・土師器甕片などが出土し、また、最下部では、土師器甕片、削り込み・栓をもつ加工木、木製容器、石器が出土している。

建物1（図14） 北端中央部に位置する。ピット7・9・10・14より構成されている。北・西側部分が調査区外に延びていることから、詳細な規模などは不明である。少なくとも、東西1間×南北2間以上の規模を有するものであり、主軸方向はほぼ正方位にのっている。ピットの規模は、直径約38～73cm、深さは約43cmである。埋土はいずれも共通しており、灰黄褐色シルトに地山ブロックを含む。なかでも、ピット9は、その平面形が他と比して大きく楕円形を呈し、また、底面には根石と考えられる扁平な石を有する。ピット7・14は、その半分以上が確認調査トレンチの範囲内にあたり、その大きさなどは詳らかではない。ピット7からは、土師器皿が出土している。

建物2（図14） 北部東端に位置する。ピット27・30～36・62・63より構成されている。その規模は、東西1間×南北4間であり、主軸は正方位にのっている。柱間は東西約2.5m、南北約1.9mである。柱穴の規模は、直径約35cm、深さは約40cmと非常に類似する。埋土は、上層に灰褐色シルト、下層に灰黄褐色シルトを基本とする。遺物は、ピット27では土師器片・瓦器片、ピット33・37・62からは土師器片が出土している。なかでもピット31では、完形の土師器皿1枚が伏せた状態で出土しており、意図的に埋納されたものと考えられる。

柵1（図14） 建物2の北西にあたり、北部東端に位置する。長楕円形のピット39～42の4基がほぼ等間隔に並列する。その軸はやや東よりにふっている。ほぼ同規模のピットが並ぶことから柵と捉えた。大きさは、いずれも長軸が約75～100cm、深さ約10～15cmの範囲内におさまる。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、灰褐色シルトを基本とし、地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

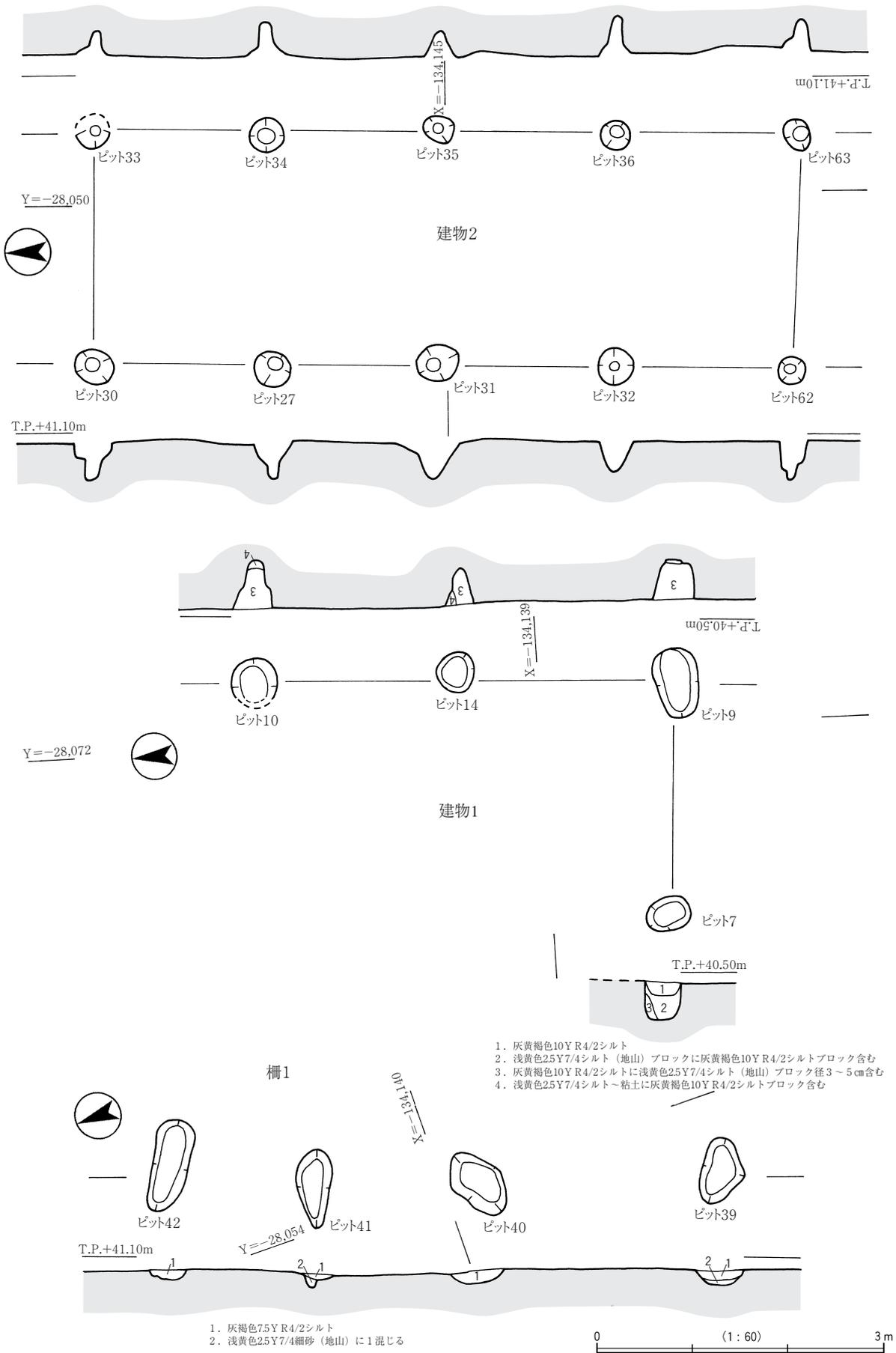


図14 有池遺跡02-1 建物・柵 平・断面図

ピット47 (図15) 建物1と同2の間に広がる空間にあたる、北側東部に位置する。この部分の遺構は、新段階の鋤溝が中心となっており、これらとともに当ピットをはじめ、ピット45・46・48・44・43が点在する。形状は、直径約30cmの円形であり、断面は緩やかなV字状を呈する。深さは約18cmである。埋土は、上部ににぶい黄褐色シルト、下部に褐灰色シルト～粘土が埋積する。遺物は出土していない。

ピット46 (図15) 土坑36の南側にあたる、北側東部に位置する。形状は、直径約24cmの円形であり、断面形は皿状を呈する。深さ約10cmである。埋土は、上部に灰黄褐色シルト、下部に灰黄褐色シルト～微砂である。遺物は出土していない。

ピット48 (図15) 北側東部に位置する。形状は、直径約28cmの歪な円形であり、断面形はV字状を呈する。深さ約20cmである。埋土は、上部に灰黄褐色シルト～微砂、下部に灰黄褐色シルトであり、ピット46のそれと上下の埋積単位が逆転している。遺物は出土していない。

ピット45 (図15) 北側東部に位置する。形状は、直径約39cmの円形であり、断面形はV字状を呈する。深さ約20cmである。埋土は、ピット46と同様、上部が灰黄褐色シルト、下部が灰黄褐色シルト～微砂である。断面観察より柱痕がみとめられる。遺物は出土していない。

ピット8 (図15) 北側東部に位置する。建物1を構成するピット9と切り合い関係をもち、その南半分を切られている。形状は、直径約42cmの円形であり、断面は浅いU字状を呈する。深さは約24cmである。埋土は建物1と同様である。遺物は出土していない。

ピット43 (図15) ピット44の南西にあたる、北側東部に位置する。形状は、直径約23cmの円形であり、断面はV字状を呈する。深さは約34cmである。埋土は、上部は灰黄褐色微砂混シルト、下部には地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

ピット44 (図15) 北側東部に位置する。形状は、直径約28cmの円形であり、断面は緩やかなV字状を呈する。深さは約13cmと浅い。埋土は、灰黄褐色微砂混シルトである。遺物は出土していない。

ピット28 (図15) 北側東部に位置する。周辺には新段階の鋤溝がみられる。形状は、径約30cmの円形であり、断面はU字状を呈する。深さは約10cmと浅い。埋土は、暗灰黄色細～粗砂である。遺物は、土師器皿片・須恵器片が出土している。

ピット12 (図15) 北側中央部に位置する。ピットが南北方向に4基近接して並んでいるうちの1つである。形状は、直径約48cmの歪な円形であり、断面はV字状を呈する。深さは約30cmである。遺物は出土していない。

ピット13 (図15) ピット12の南に位置する。南北方向に4基近接して並ぶうちの1つである。形状は、直径約30cmの楕円形であり、断面はU字状を呈する。深さは約15cmとやや浅い。埋土は、上部には灰黄褐色シルトに地山ブロックを含み、下部は灰黄褐色微砂混シルトである。遺物は土師器片が出土している。

ピット21 (図15) ピット12・13の南に位置する。形状は、直径約52cmの歪んだ円形であり、断面はU字状を呈する。深さは約30cmである。埋土は、灰黄褐色シルトに地山ブロックを含み、下部は灰黄褐色微砂混シルト～粗砂となっている。遺物は出土していない。

ピット49 (図15) 土坑37・38の北にあたる、北側東部に位置する。形状は、直径約26cmのほぼ円形であり、断面はU字状を呈する。深さは約15cmである。断面観察より、柱痕がみとめられる。埋土上部は灰褐色シルト、下部は灰黄褐色シルト混微砂となっている。遺物は出土していない。

ピット50 (図15) 土坑38の南にあたる、北側中央部に位置する。形状は、直径約40cmの楕円形であり、

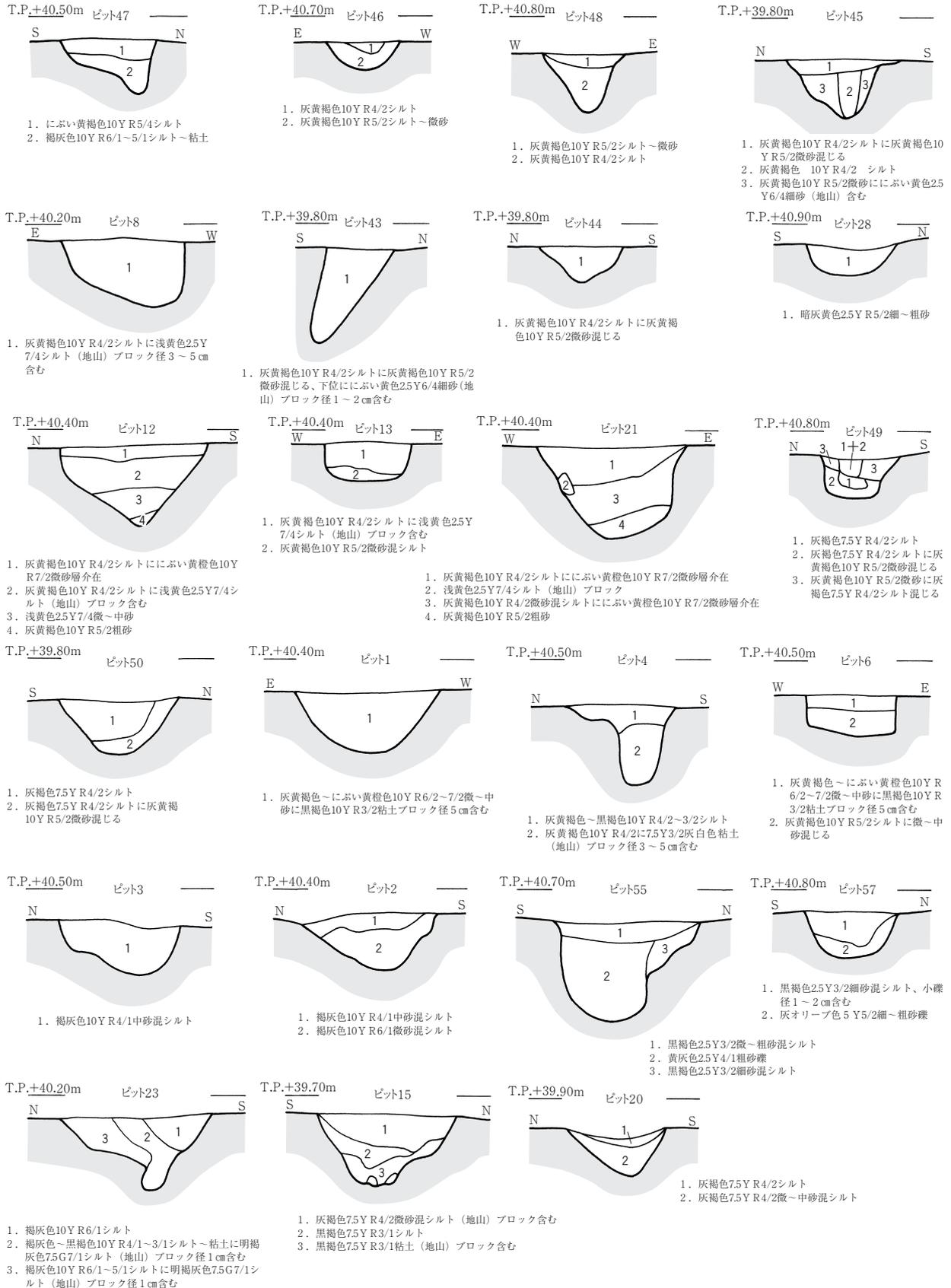


図15 有池遺跡02-1 ピット 断面図

断面は緩やかなV字状を呈する。深さは約20cmである。埋土上部は灰褐色シルト、下部は灰黄褐色微砂混シルトである。遺物は出土していない。

ピット1 (図15) 中央部に位置する。その一部を東西方向の溝に切られている。形状は、直径約50cmの円形であり、深さは約21cmである。断面形は緩やかなV字状を呈する。埋土は灰黄褐色～にぶい黄橙色の微～中砂であり、黒褐色粘土ブロックを含む。遺物は出土していない。

ピット4 (図15) 中央部に位置する。古段階の鋤溝に挟まれている。形状は、直径約38cmの円形であり、断面は深鉢状を呈する。深さは約28cmである。埋土上部は灰黄褐色シルト、下部には灰黄褐色粘土混シルトとなっている。遺物は出土していない。

ピット6 (図15) 中央部に位置する。形状は、直径約30cmの楕円形であり、断面はU字状を呈する。深さは約15cmである。埋土上部は灰黄褐色微～中砂、下部には灰黄褐色微砂混シルトである。遺物は土師器片がわずかに出土している。

ピット3 (図15) 土坑19の北側にあたる、中央部に位置する。形状は、直径約42cmの歪な円形で、断面は歪んだU字状を呈する。深さは約20cmで埋土は褐灰色シルトである。遺物は出土していない。

ピット2 (図15) 中央部に位置し、古段階の鋤溝に囲まれている。形状は、直径約44cmの楕円形であり、断面は緩やかなV字状を呈する。深さは約20cmである。遺物は出土していない。

ピット55 (図15) 東側中央部に位置し、古段階の鋤溝を切っている。形状は、直径約60cmの楕円形であり、断面は上部の開くU字状を呈する。深さは約36cmである。埋土は黒褐色シルトに黄灰色粗砂礫を含む。遺物は出土していない。

ピット57 (図15) 南東部に位置し、新段階の鋤溝に切られている。形状は、直径約30cmの楕円形であり、断面は緩やかな楕鉢状を呈する。深さは約18cmである。埋土は黒褐色シルトと灰オリーブ色細～粗砂礫である。遺物は出土していない。

ピット23 (図15) 中央部の小規模な谷部内に位置する。形状は、直径約51cmの歪な円形であり、断面は中央部の張り出す楕鉢状を呈する。深さは約26cmである。ピット内は徐々に埋積したものとみられる。埋土は褐灰色シルトに地山のブロックを含む。遺物は出土していない。

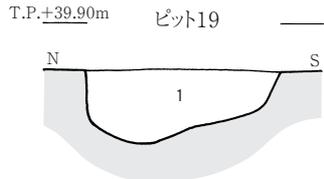
ピット15 (図15) 西端中央部に位置する。ピット16の西に隣接し、2条の溝に挟まれている。形状は、直径約47cmの楕円形であり、断面は楕鉢状を呈する。深さは約25cmである。底面には2本の木が残置しており、北側の1本はやや北に傾き、南側のそれは直立している。両者とも最大径約5cm程度であり、柱根と考えられる。埋土は、灰褐色シルト～黒褐色粘土に地山ブロックを含み4層に類似する。遺物は、土師器片が出土している。

ピット20 (図15) 南西部に位置する。形状は、直径約32cmの楕円形であり、断面は緩やかなV字状を呈する。深さは約16cmである。埋土は灰褐色シルトである。遺物は出土していない。

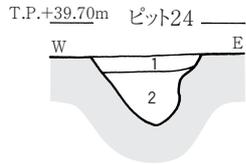
ピット19 (図16) 西側中央部に位置する。南に隣接して東西方向の溝がはしる。形状は、直径約50cmの楕円形であり、断面は浅いU字状を呈する。深さは約19cmである。埋土は褐灰色シルトで地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

ピット24 (図16) 南西部に位置する。大溝1の北肩に近接していることもあり、周囲に遺構は希薄である。わずかに西側に土坑24があるのみである。形状は、直径約30cmの楕円形であり、断面は浅いU字状を呈する。深さは約19cmである。埋土は褐灰色シルトで地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

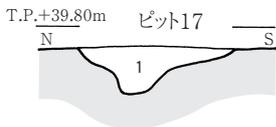
ピット17 (図16) 西側中央部に位置する。その一部を鋤溝に切られている。形状は直径約40cmの楕円



1. 灰褐色7.5Y R4/2微砂混シルト (地山) ブロック含む



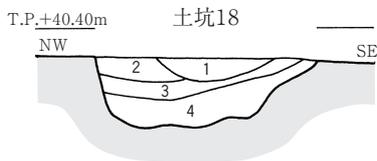
1. 褐色7.5Y R4/6シルト
2. 褐灰色7.5Y R5/1シルト (地山) ブロック含む



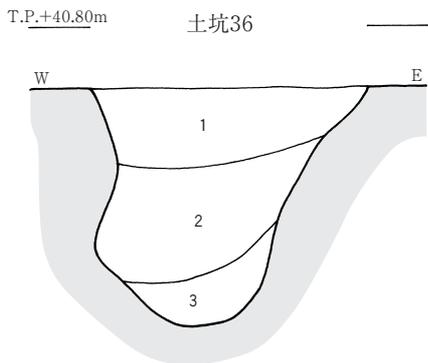
1. 黒褐色7.5Y R3/2シルトに浅黄色5 Y7/3シルト (地山) 含む



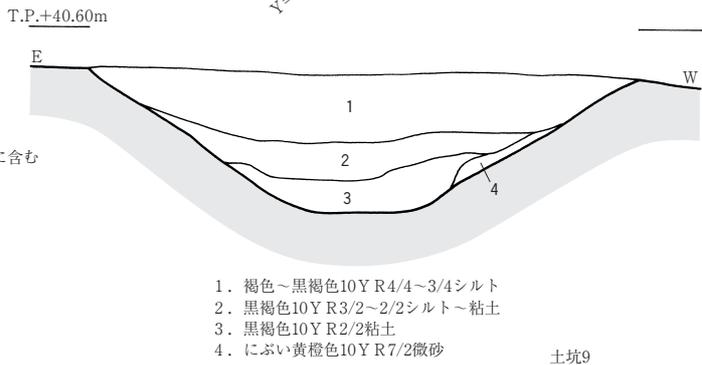
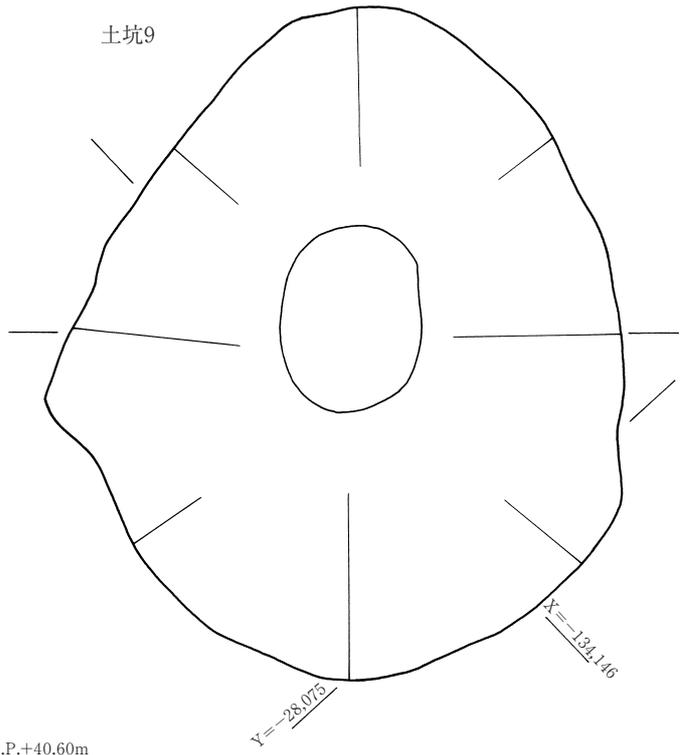
1. 黒褐色7.5Y R3/2シルトに浅黄色5 Y7/3シルト (地山) ブロック下位に含む
2. 灰白色~褐灰色10Y R7/1~6/1微砂



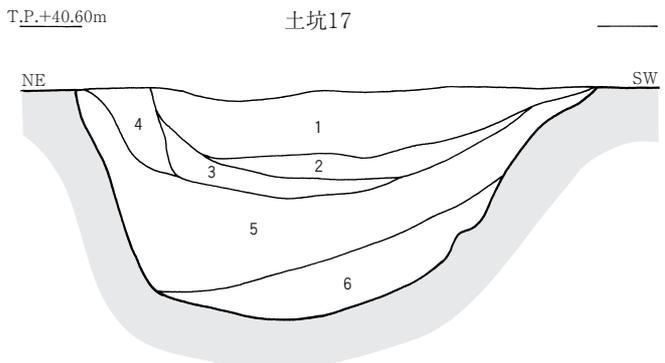
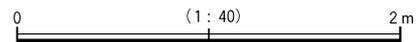
1. 黒褐色10Y R3/2シルト
2. 黒褐色10Y R3/2シルトに浅黄色2.5Y7/4粗砂 (地山) 含む
3. 灰黄褐色10Y R4/2微砂混シルト
4. 灰黄褐色10Y R4/2微砂混シルトに浅黄色2.5Y R7/4粗砂 (地山) 含む



1. にぶい黄褐色10Y R5/4シルト
2. 褐灰色10Y R6/1~5/1微砂混シルトに明黄褐色10Y R7/6シルト (地山) ブロック径1~2cm 含む
3. にぶい黄褐色10Y R6/4シルト



1. 褐色~黒褐色10Y R4/4~3/4シルト
 2. 黒褐色10Y R3/2~2/2シルト~粘土
 3. 黒褐色10Y R2/2粘土
 4. にぶい黄褐色10Y R7/2微砂
- 土坑9



1. 黒褐色10Y R3/2シルト
2. にぶい黄褐色10Y R5/3~4/3シルト
3. 黒褐色10Y R3/2~3/1シルト
4. 灰黄褐色10Y R5/2~4/2粗砂混シルト
5. 褐灰色10Y R5/1シルトに酸化鉄入る
6. 褐灰色10Y R5/1~6/1シルトに明黄褐色10Y R6/6シルト (地山) ブロック径5cm含む

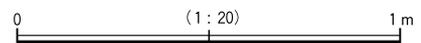


図16 有池遺跡02-1 ピット・土坑 平・断面図

形であり、断面は底の狭い播鉢状を呈する。深さは約12cmと浅い。埋土は黒褐色シルトに地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

ピット18 (図16) 西側中央部に位置する。ピット15の南北に東西方向にはしる溝を切っている。形状は直径約1.0mの楕円形であり、断面は浅い皿状を呈する。深さは約14cmと浅い。埋土は黒褐色シルトと灰白色～褐灰色微砂となっており、一部に地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

土坑9 (図16) 溝31の南側にあたる、北側中央部に位置する。形状は長軸約1.8m、短軸約1.5mの楕円形であり、断面は播鉢状を呈する。深さは最大約40cmである。埋土は褐色～暗褐色シルトと黒褐色シルト～粘土である。底面は砂層に達し、湧水がみとめられることから、井戸の可能性はある。シルトと粘土の層境から瓦器椀2枚と土師器皿1枚が重なった状態で出土しており、意図的に埋納された可能性も考えられる。

土坑18 (図16) 北側中央部に位置する。東側には近接してピット21が位置する。その形状は長軸約90cm、短軸約60cmの楕円形であり、断面は播鉢状を呈する。深さは約18cmである。埋土は黒褐色～灰黄褐色シルトとなっており、地山のブロックを含む。遺物は出土していない。

土坑36 (図16) 北端中央部に位置し、その一部は調査区外にかかる。規模は、現状では長軸約1.0m、短軸約70cmであるが、長軸はさらに延びると考えられる。平面は楕円形の可能性が高く、断面はU字状を呈する。深さは約62cmである。埋土はにぶい黄褐色～褐灰色シルトとなっている。遺物は出土していない。

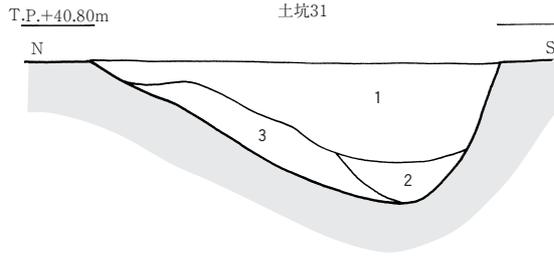
土坑17 (図16) 北端中央部に位置し、その一部は調査区外にかかる。建物1の範囲に含まれているが、直接の切り合い関係はみとめられない。規模は、現状では長軸約1.3m、短軸約1.0m、深さは約60cmである。長・短軸ともさらに延びると考えられる。平面形は楕円になる可能性が高く、断面は播鉢状を呈する。埋土は、上部ではにぶい黄褐色と黒褐色シルトの互層となっており、下部は灰黄褐色～褐灰色シルトに地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

土坑31 (図17) 北側中央部に位置する。形状は長軸約2.7m、短軸約1.2mである。平面形は歪な円形となっており、断面は緩やかなV字状を呈する。深さは約36cmである。埋土は、灰黄褐色細砂混シルト～粘土であり、一部に酸化鉄の集積したブロックを含む。遺物は出土していない。南に近接して風倒木痕と考えられる土坑29・30があり、当土坑の埋土もそれらに非常に類似することから風倒木痕の可能性が高い。

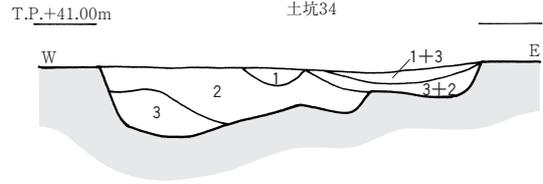
土坑34 (図17) 土坑33の北側にあたる、北側東部に位置する。形状は最大幅約1.2mの隅丸三角形である。断面形は浅いU字状を呈し、底面は凹凸となる。深さは約18cmである。埋土は、土坑33と共通しており、灰黄褐色シルト。遺物は、土師器皿片が出土している。

土坑33 (図17) 北側東部に位置し、北側には隣接して土坑34がある。形状は最大幅約1.2mの歪な平面形であり、断面形は浅いW字状を呈している。深さは約16cmである。埋土は、灰黄褐色シルトを基本とし、一部には細～粗砂を含み、なかには地山ブロックがみとめられる。遺物は、土師器片・瓦器片が出土している。

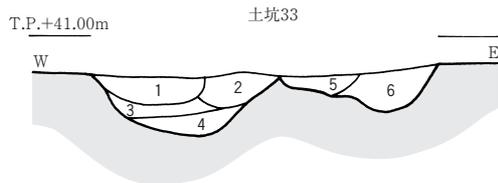
土坑35 (図17) 東側中央部に位置する。周囲には遺構が希薄であり、新段階の鋤溝がわずかにみられるにすぎない。形状は長軸約70cm、短軸約30cmの方形である。断面形は播鉢状を呈し、深さは約20cmである。埋土は、灰褐色～灰黄褐色シルトを基本とし、一部には地山ブロックを含む。遺物は出土していない。



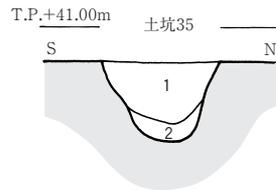
1. 灰黄褐色10Y R4/2シルトに灰黄褐色10Y R5/2微~細砂混じる
2. 灰黄褐色10Y R4/2シルト~粘土に明黄褐色10Y R6/6シルト (酸化鉄集積) ブロック含む
3. 灰黄褐色10Y R6/2粗砂混シルト (地山) に1が入り込む



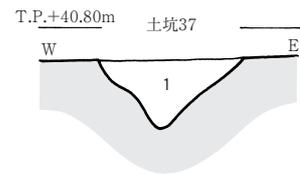
1. 灰黄褐色10Y R5/2微砂混シルト
2. 灰黄褐色~褐灰色10Y R5/2~5/1微砂
3. 灰黄色2.5Y 7/2細~粗砂



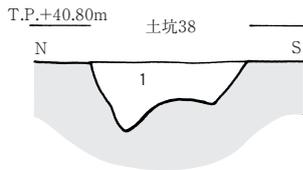
1. 灰黄褐色10Y R5/2微砂混シルト
2. 灰黄褐色~褐灰色10Y R5/2~5/1微砂
3. 灰黄褐色10Y R4/2シルト (3層類似)
4. 灰黄褐色10Y R4/2シルト (3層類似) にぶい黄色2.5Y 6/4細砂 (地山) ブロック含む
5. 灰黄褐色10Y R4/2シルト (3層類似)
6. 灰黄色2.5Y 7/2細~粗砂



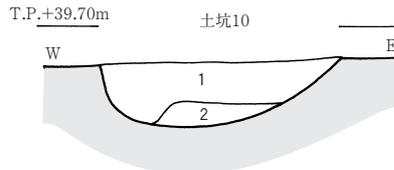
1. 灰褐色7.5Y R4/2シルトに明黄褐色10Y R6/6シルト (地山) ブロック径1cm含む
2. 灰黄褐色7.5Y R4/2シルト



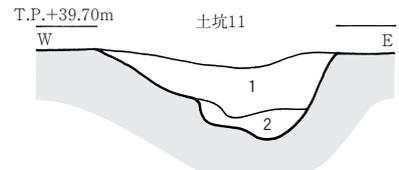
1. 灰褐色7.5Y R4/2シルトに灰黄褐色10Y R5/2微砂ブロック含む



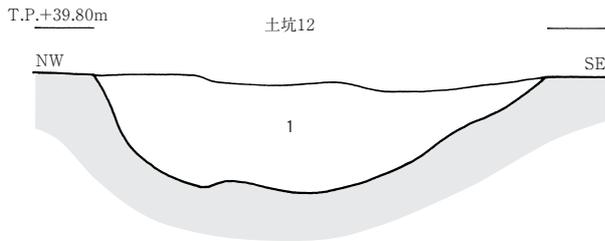
1. 灰褐色7.5Y R4/2シルトに灰黄褐色10Y R5/2微砂ブロック含む



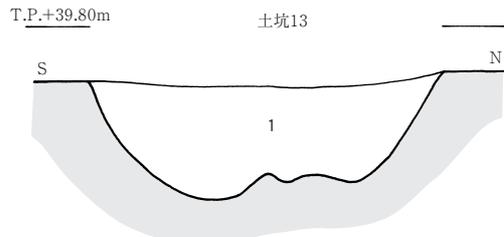
1. 灰黄褐色10Y R4/2シルトに明黄褐色2.5Y 7/6粗砂混シルトブロック含む
2. 明黄褐色2.5Y 7/6粗砂混シルト



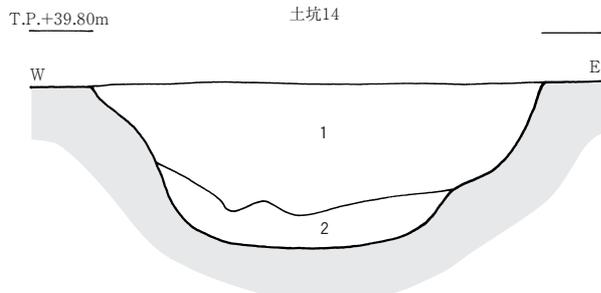
1. 灰黄褐色10Y R4/2シルトに黒褐色10Y R3/1シルト~粘土ブロック含む
2. 黒褐色10Y R3/1シルト~粘土



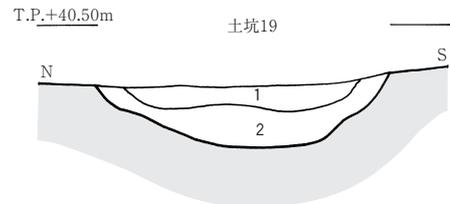
1. 褐灰色10Y R6/1~5/1シルトに明褐灰色7.5G Y7/1粘土 (地山) ブロック径3cm含む



1. 褐灰色10Y R6/1~5/1シルトに明褐灰色7.5G Y7/1粘土 (地山) ブロック径3cm含む



1. 褐灰色10Y R6/1~5/1シルトに明褐灰色7.5G Y7/1粘土 (地山) ブロック径3cm含む
2. 褐灰色10Y R5/1微砂混シルトに明褐灰色7.5G Y7/1粘土 (地山) ブロック径3cm含む



1. 褐灰色10Y R5/1粗砂混シルト
2. 褐灰色10Y R6/1粗砂混シルト~粘土

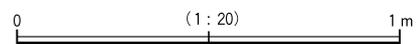


図17 有池遺跡02-1 土坑 断面図

土坑37 (図17) 北側中央部に位置する。近接する遺構にはピット50、土坑38などがある。形状は長軸約80cm、短軸約50cmの楕円形である。断面形はV字状を呈し、深さは約18cmである。埋土は、灰褐色シルトに地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

土坑38 (図17) 北側中央部に位置する。近接する遺構にはピット50、土坑37などがある。形状は長軸約60cm、短軸約50cmの楕円形である。断面形は緩やかなW字状を呈し、深さは最大約18cmである。埋土は、灰褐色シルトに地山ブロックを含み、土坑37と共通する。遺物は出土していない。

土坑10 (図17) 土坑が南北方向に連続して並ぶうちの北端にあたり、北側西部に位置する。北側の一部が削平されているため、本来の大きさは不明である。少なくとも短軸約70cm、長軸は90cm以上の楕円形であったと想定される。断面形は皿状を呈し、深さは最大約17cmである。埋土は、灰黄褐色～明黄褐色シルトを基本とし一部にブロックを含む。遺物は出土していない。

土坑11 (図17) 北側西部に位置し、土坑10・12に隣接する。形状は、長軸は約1.3m、短軸約60cmの方形を呈し、深さは最大約20cmである。埋土は、黒褐色シルト～粘土であり、中にはブロックを含む。遺物は出土していない。

土坑12 (図17) 北側西部に位置し、土坑11の南に隣接する。平面形状は、長軸は約1.8m、短軸は約1.1mの楕円形ぎみの不整円形となっている。断面形は皿状を呈し、深さは最大約30cmである。埋土は、土坑13・14と共通し、褐灰色シルトを基本とし、一部には地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

土坑13 (図17) 北側西部に位置し、南側には土坑14が隣接する。形状は、長軸は約1.3m、短軸約1.0mの楕円形であり、深さは最大約29cmである。埋土は、褐灰色シルトを基本とし、一部には地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

土坑14 (図17) 南北方向に並ぶ土坑群の南端にあたる、北側西部に位置する。形状は、長軸は約1.6m、短軸約1.2mの楕円形である。断面形は楕鉢状を呈し、深さは約44cmである。埋土は、褐灰色シルトを基本とし、一部には地山のブロックを含む。須恵器片・土師器片が出土している。

土坑19 (図17) 中央部に位置する。形状は、長軸は約2.5m、短軸約1.0mの不整な楕円形である。断面形は皿状を呈し、深さは約18cmである。埋土は、褐灰色粗砂混シルト～粘土であり、下部ほどその粒子が細くなる。谷部に向かって延びていること、また、埋土の状況から、古段階の水田区画の水口であった可能性も考えられる。遺物は出土していない。

土坑24 (図18) ピット24の東にあたる、西側南部に位置する。大溝1の北肩に近接していることもあり、周囲は遺構が希薄となっている。形状は、長軸は約1.4m、短軸約80cmの方形であり、断面形は皿状を呈する。深さは約22cmである。埋土は、灰白色～灰オリーブ色微砂とシルトの互層である。遺物は出土していない。

土坑23 (図18) ピット24・土坑24の北東にあたる、西側南部に位置する。先にも述べたとおり、大溝1の北肩に近接するため遺構は希薄である。形状は、長軸は約1.2m、短軸約60cmの楕円形であり、深さは約22cmである。埋土は、灰褐色～黒褐色シルト～粘土である。遺物は出土していない。

土坑15 (図18) 北側中央部に位置する。近接してピット12・13・21、土坑18がある。形状は、直径約3.3mの不整な円形を呈している。断面形は中央部分が浅くなるW状となり、深さは最大約34cmである。埋土は、北半分が暗灰黄色シルトで包含層に近く、南半分が地山に類似するものとなっており、さらに地山ブロックも含まれる。埋土の状態から風倒木痕の可能性が高い。このほかにも、同様な平面形態および埋土の状態を示す土坑が、次に述べる土坑28も含めて19基確認できる。遺物は出土していない。

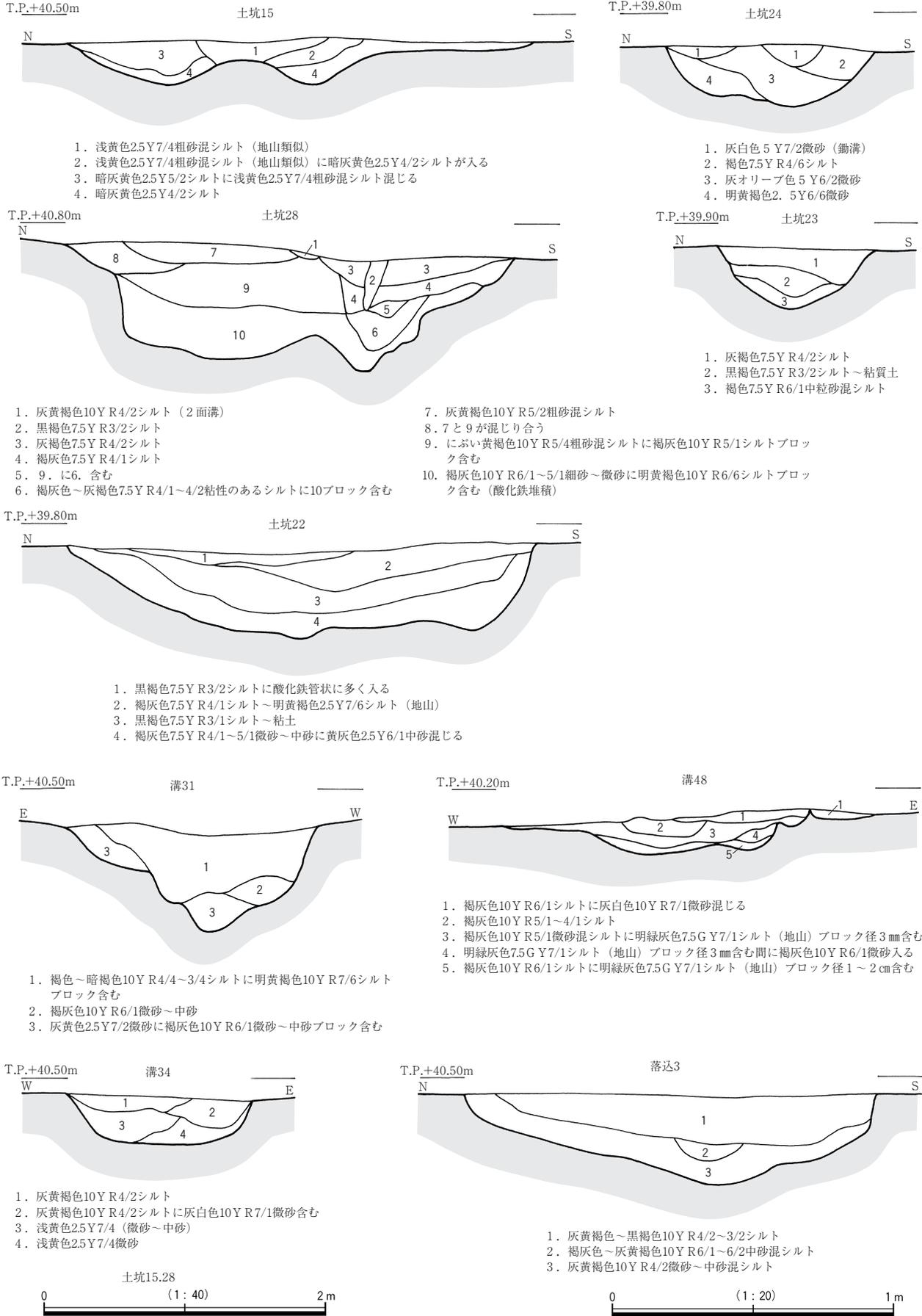


図18 有池遺跡02-1 土坑・溝・落込 断面図

土坑28 (図18) 北側中央部に位置する。形状は、直径約3.3mの円形を呈している。断面形は中央付近が浅い歪なW状であり、深さは最大約80cmである。埋土は、土坑15と同様、北半分に包含層である褐灰色シルトが含まれ、南半分は地山に類似するものとなっている。埋土の状態から風倒木痕の可能性が高い。遺物は出土していない。

土坑22 (図18) 西側中央部に位置する。周辺は遺構が希薄となっており、鋤溝が若干みとめられるにすぎない。形状は、長軸は約3.7m、短軸約1.3mの不整な方形である。断面形は皿状を呈し、深さは約32cmである。埋土は、黒褐色～褐灰色シルト～粘土である。遺物は出土していない。

溝31 (図18) 土坑9の北側を東西方向にはしる溝であり、北側中央部に位置する。溝の方向は、北に位置する建物1の軸に比して、やや西に傾いている。北端が削平されているが、その残存形状は、長さ約3.0m、幅約1.2mとなっている。断面形は不整なV字状を呈し、深さは約36cmである。埋土は、褐色～暗褐色シルトに地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

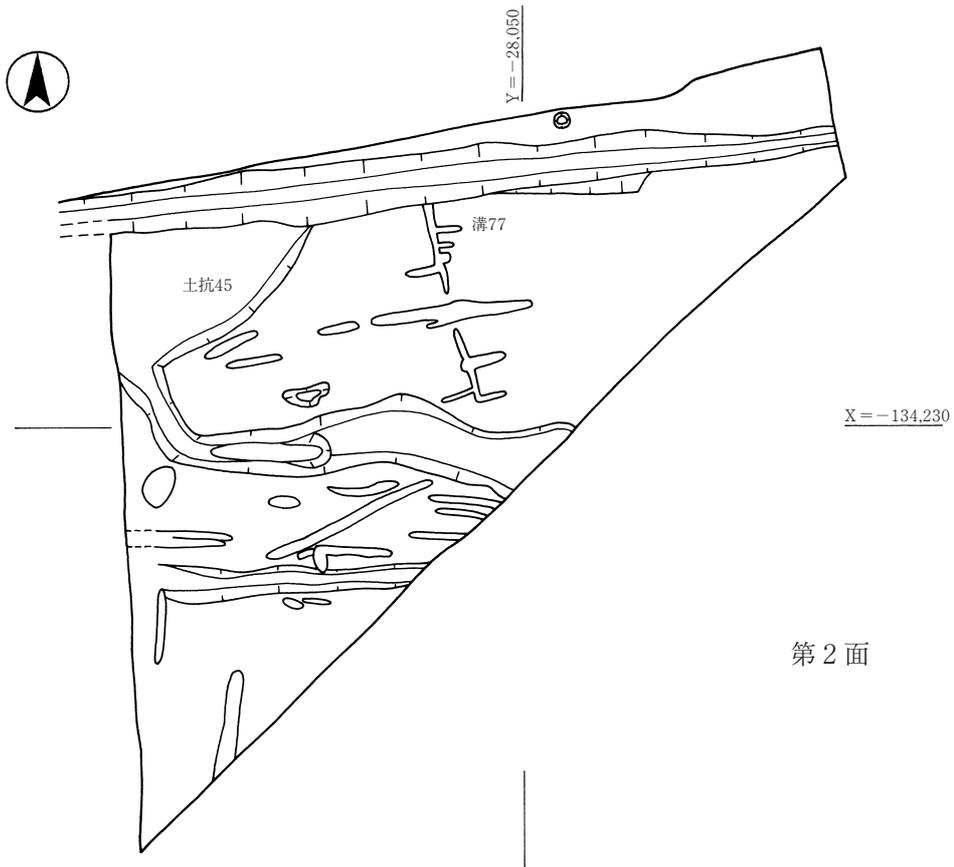
溝48 (図18) 北側中央部に位置する。南北方向にはしる数条の溝の1つである。北側の延長は調査区外に延びており、また、南は小規模な谷筋に合流している。残存形状は、長さ約13.6m、幅約50cmとなっている。断面形は中央付近がやや高くなるW字状を呈しており、深さは約12cmと浅い。埋土は、褐灰色シルトに地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

溝34 (図18) 北側中央部に位置する。調査区のやや東よりを南北方向にはしる溝である。南端は、小規模な谷筋の手前で東西方向の溝と合流し、北端は調査区外に延びる。この溝と先述の溝48との間には建物1や土坑9などの遺構が集中する。建物1を構成するピットの一部分がこの溝に切られていることから、それらよりは新しいことがわかる。集落域と生産域の区画する溝の可能性も考えられる。残存形状は、長さ約21.0m、幅約50cmとなっている。断面形は皿状を呈し、深さは約18cmである。埋土は、灰黄褐色シルト。遺物は、土師器片・瓦器片が出土している。

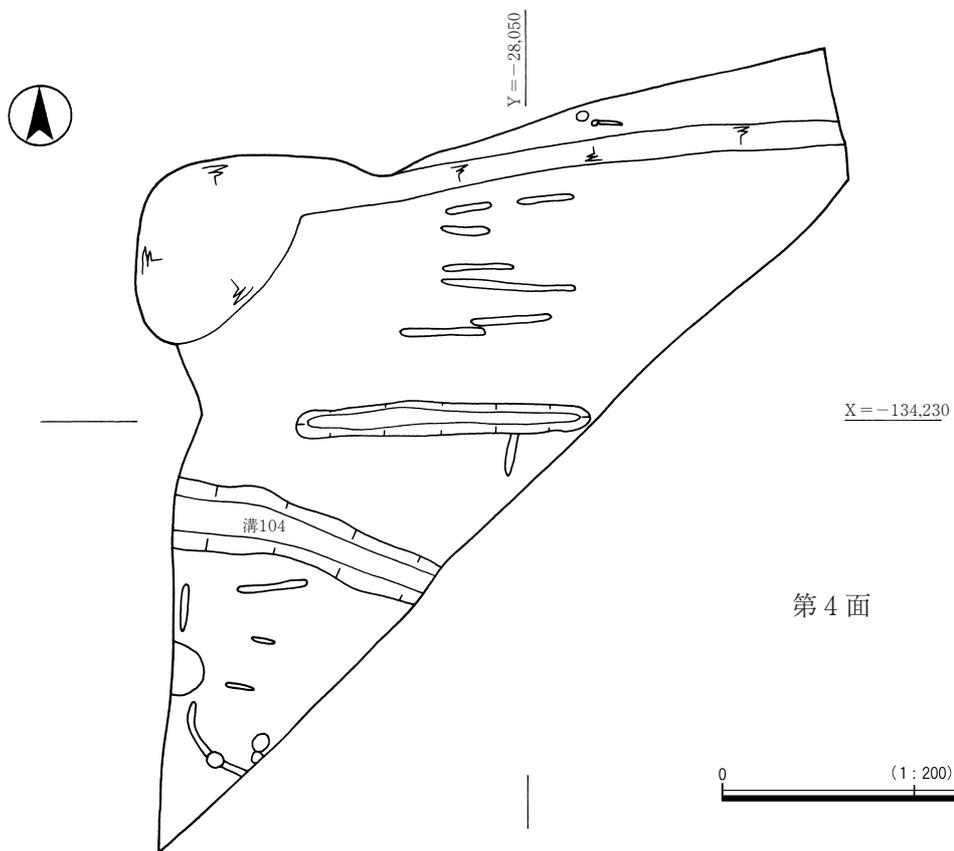
落込3 (図18) 北側中央部に位置する南北に延びる落込である。溝34およびその他の遺構に切られているため、本来の形状は不明である。現存規模は、長軸約3.0m、短軸約1.1mとなっている。断面形は皿状を呈し、深さは約32cmである。埋土は、灰黄褐色～黒褐色シルトに地山のブロックを含む。遺物は、土師器片がわずかに出土している。

2. 南端部 (図19)

当箇所は、その堆積状況が他よりも良好であったためその層名は個別に第1～5層と付したことは基本層序の説明においてすでに述べたとおりである。遺構面については、第2層除去後面を第2面というように、各層除去後面をその遺構面として捉え、第1～5面までを確認した。第1面は近世以降の耕作面であり、本報告では対象外となっている。第2面では、土坑45、溝77のほか鋤溝などを検出した。出土遺物から中世(14～15世紀を主体)と考えられる。第3面では、検出した遺構は溝103のみであり、出土遺物も土師器皿のみで詳細は不明である。ただし、溝103は当箇所西端に位置し、その断面には杭と考えられる痕跡もみとめられることから、段落ち際にはしる溝であった可能性が高く、おそらく当面も耕作地であったと想定される。第4面では、溝104のほか鋤溝を検出した。第2・3面同様耕作地であった可能性が高い。出土遺物より中世(11～12世紀主体)と考えられる。第5面では、土坑・溝などを検出した。しかし、遺物が出土していないことからその時期は不明である。ただ、土坑については、風倒木痕と考えられる土坑15・28などとその平面形態および埋土の状態が非常に類似していることから同類のものと推定される。11～12世紀以前のある段階に風倒木痕がのこされるような環境があったもの



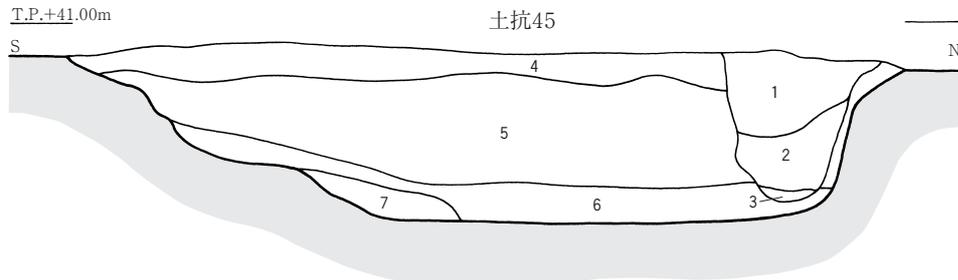
第2面



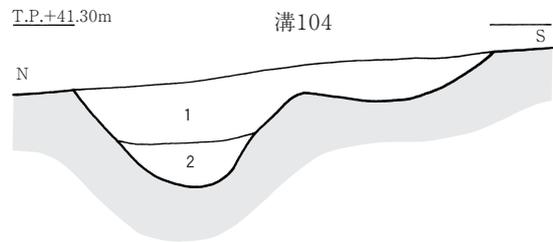
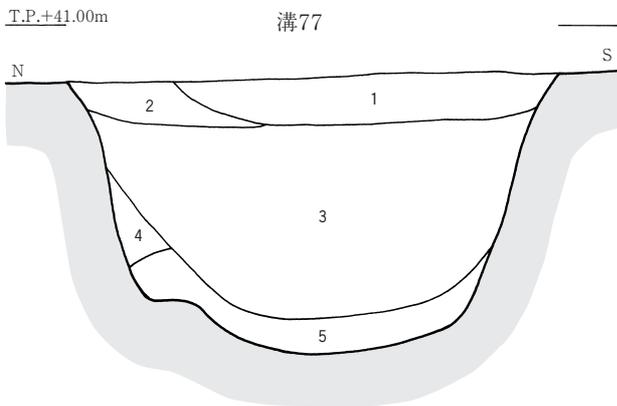
第4面



图19 有池遺跡02-1 南端部 第2・4面 平面図

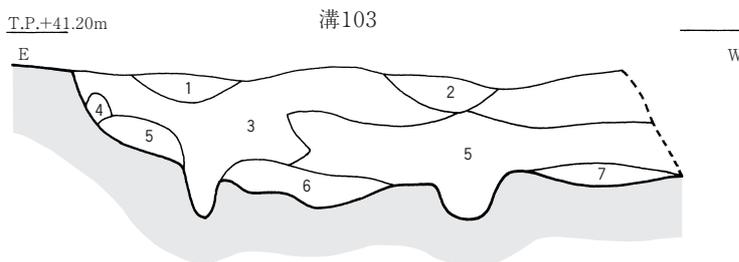


1. 灰色7.5Y4/1シルト～極細砂に小礫径1～3mm多く含む、酸化鉄斑文入る、オリブ灰色 5 Y G5/1シルト (地山) ブロック径1～5cm含む
 2. オリブ黒色7.5Y3/1シルト～粗砂に緑灰色7.5G Y5/1 (地山) ブロック径2～5cm含む 小礫多い
 3. 灰色7.5Y4/1粗砂 (水成堆積)
 4. 黒褐色2.5Y3/2シルト～粗砂、小礫径2～4mm含む、酸化鉄斑文の降下みられる、黄褐色 2.5Y5/4ブロック径2～3cm若干含む
 5. 黄灰色2.5Y4/1～灰色7.5Y4/1シルト～粗砂にオリブ灰色2.5G Y5/1シルト (地山) ブロック径2～10cm含む、小礫径1～2mm多い、酸化鉄斑文顕著
 6. オリブ黒色 5 Y3/1シルトにオリブ灰色 5 G Y5/1シルト (地山) ブロック径2～3cm含む
 7. 灰色7.5Y4/1粗砂に黒色7.5Y2/1シルトブロック、オリブ灰色 5 G Y5/1シルト (地山) ブロック含む
- 0 (1:40) 2m



1. 褐灰色～灰黄褐色10Y R4/1～4/2シルト
2. 褐灰色～灰黄褐色10Y R4/1～4/2シルトに砂が混じる

1. 灰黄褐色～にぶい黄褐色10Y R5/2～5/3シルト (2層) に明黄褐色2.5Y7/6シルト (地山) ブロック径2～3cm含む
2. 褐灰色10Y R6/1～5/1シルト
3. 2. に明黄褐色2.5Y7/6シルト (地山)、緑灰色10G Y6/1シルト (地山還元) ブロック径2～4cm含む
4. 灰色7.5Y5/1シルト
5. 灰色7.5Y4/1シルト、底面微かに微砂混じる



1. 黒褐色2.5Y3/2シルト～極細砂に小礫径3～4mm含む
 2. 黒褐色2.5Y3/1シルト～極細砂に小礫径3～4mm含む
 3. 黒褐色～黄灰色2.5Y3/1～4/1シルト～細砂に灰黄色2.5Y6/2細～粗砂入る、礫径3～4mm、炭化物、酸化鉄斑文有り
 4. 黒褐色2.5Y3/2シルトに暗灰黄色2.5Y4/2シルト～極細砂ブロック径3cm含む
 5. 暗灰黄色～黄褐色2.5Y5/2～5/3砂に黄灰色2.5Y5/1中砂～極細砂ブロック含む
 6. 灰色7.5Y5/1砂混じりシルト、下部に暗灰黄色2.5Y4/2粗砂入る
 7. 黒色2.5Y2/1砂混じりシルト
- 0 (1:20) 1m

図20 有池遺跡02-1 南端部 土坑・溝 断面図

と推測される。

では、各面のおもな遺構について個別にみていくこととする。

土坑45 (図20) 第2面において検出した遺構である。南端部の北西隅に位置する。形状は、南北約3.5m、東西は約5.2mの三角形となる。断面形は逆台形状を呈し、深さは約88cmである。埋土は、下部ではオリーブ黒色シルトに地山ブロックを含み、上部には整地層がみられる。この整地層により人為的に埋め戻された可能性が高く、また、これが埋められたことにより当箇所は方形の区画となり、現地形の原形をつくっている。この土坑が埋め戻されたのち、東西方向にはしる溝77が掘削されている。遺物は、土師器片・瓦器片・須恵器挿鉢・青磁碗などが出土している。

溝77 (図20) 土坑45と同様に第2面において検出した。南端部の北端を東西にはしる溝であり、東は調査区外に延びている。土坑45埋没後にこの溝が掘削されている。その規模は、長さ約19m、最大幅約1.5mである。断面形はU字状を呈し、深さは約74cmである。埋土は、灰黄褐色～褐灰色シルトに地山ブロックを多く含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。ただし、底面近くでは微砂がみとめられ、一時的に流水があったと考えられる。なお、当箇所の西側では、全体の2面においてこの溝の延長と考えられる溝を検出している。遺物は、土師器皿・瓦器片・須恵器壺底部片・青磁片などが出土している。

溝103 (図20) 第3面において検出した遺構である。当箇所の西端を南北方向にはしる溝である。この溝の西端部分は、後世の溝により削平されているため、本来の規模は不明である。現存規模は長さ約7.1m、最大幅約1.8mであり、底部に凹凸がみられた。その深さは最大約38cmとなっている。埋土は、黄灰色～暗灰黄色シルト～粗砂であり、中には炭化物が含まれる。この溝の底部には、杭の痕跡がみとめられることから段落ち際にはしる溝と考えられる。遺物は土師器皿が出土している。

溝104 (図20) 第4面において検出した遺構である。調査区をほぼ東西方向にはしる溝である。西は段落ち際にはしる溝に合流し、東は調査区外に延びている。長さ約7.1m、最大幅約1.8m、その深さは最大約27cmである。断面形はW字状を呈し、北に向かい深さを増している。埋土は、褐灰色～灰黄褐色シルト。遺物は瓦器片・須恵器甕片などが出土している。

第3節 遺物

遺物は、コンテナ約40箱分が出土した。土坑9において完形の瓦器碗がまとまって出土した以外は、包含層、遺構ともに細片の遺物が多い。中世の遺物が大半であり、他には、大溝1の4・5層および包含層から出土した古墳時代後期～飛鳥時代の遺物が少量みられる。なお、大溝1の4・5層からは木器もまとまって出土した。

遺構の記述にのっとり、包含層出土遺物、遺構出土遺物の順に記述し、遺構出土遺物についても基本的に遺構の記述順とした。

包含層出土遺物は、1A調査区、1B調査区ごとに記述し、1B調査区では南端部出土遺物を別記した。南端部を除いた全体において、2層は中世(14～15世紀主体)の遺物包含層、3層は中世(12～13世紀主体)の遺物包含層、4層は飛鳥時代の遺物包含層である。2層、3層出土の峻別が不可能な遺物は、2～3層出土遺物とした。

1. 土器

1A調査区2層 (図21) 1～5は土師器皿。1は厚手の「て」字状口縁をもち、11世紀後半の所産と

みられる。3は口縁部に強いナデを施し外反する。3～5は口径が8cm以下と縮小化がみられ、13世紀後半の所産とみられる。6～14は瓦器椀。6は体部外面にヘラミガキが粗く施され、見込みには格子状の暗文が施される。12世紀後半の所産である。7は内面は密に外面は粗くヘラミガキが施され、口縁内端部に段をもつ(大和型Ⅲ-A)。8は見込みに連結輪状の暗文を施し、高台は断面逆台形である。9は口縁端部を丸くおさめ、外面ユビオサエ、内面に粗いヘラミガキを施す(和泉型Ⅳ-1、2)。10は乳白色であり、焼成不良である。内外面とも磨耗のため調整は不明である。14は灰白色であり、内面見込みに粗いヘラミガキを施す。13世紀後半～14世紀前半の所産である(楠葉型Ⅳ-4)。16は瓦質浅鉢で、口縁端部は剥離のため欠損するものの、口縁部が内湾する形態とみられる。二条の突帯間に雷文のスタンプ文がめぐり。14世紀後半から15世紀の所産である。17は瓦質鉢口縁部であり、内外面ともナデで仕上げる。平面円形で直径40cm前後の大形品になるものとみられる。18は表面剥離と焼成不良のため一見土師器に見えるが、一部残存する器表面からは東播系須恵器甕と考えられる。表面剥離のため明確なタキはみとめられない。頸部には有機質の紐が巡る痕跡がみとめられる。12世紀の所産とみられる。19～22は東播系須恵器の鉢あるいは片口鉢である。12～14世紀の所産であろう。19は口縁部下半から体部外面にヘラの当たり状の強いヨコナデがみられ段状に仕上がる。23は白磁椀。玉縁状の口縁部であり、11世紀後半～12世紀の所産である。24・25は青磁椀。24は鎬蓮弁文が描かれる。25の底部外面は露胎する。26・27は古瀬戸平椀。28・29は陶器播鉢底部である。

以上、1A調査区2層は、12～14世紀前後の遺物が多い。

1A調査区2～3層(図22) 30～45は土師器皿。30はやや崩れた「て」字状口縁をもち、口径9cm、厚さ4mmである。11世紀後半とみられる。31は口縁端部を逆くの字に折り曲げ、器高は1.3cmである。胎土は褐色であり、11世紀末～12世紀前半のものか。32～40は口径8cm前後で、口縁部のヨコナデは1段であり、40の口縁部はやや強く外反する。42～45は口径11cm前後で、口縁部のヨコナデは1段で外反することから、14世紀前半か。45は口縁部の立ちあがり強く、口縁端部が尖り気味で、器壁が薄い。14世紀後半の所産とみられる。46～56は瓦器椀。48・49は口縁内端部に段をもち、内面にヘラミガキが施される。13世紀前半の所産である(楠葉型Ⅲ-1～Ⅲ-2)。50～54は口縁部がわずかに外反し、内面に粗いヘラミガキがめぐり。55・56は断面三角形の低い高台であり、見込みの暗文は連続長楕円状のものである。57・59は瓦質羽釜であり、口縁端部は平坦面をもつ。58は土師質羽釜。60は東播系須恵器の鉢あるいは片口鉢である。口縁部は直線的であるが、口縁端部の拡張は顕著ではない。61・62は白磁椀。62は小さな玉縁状口縁をもつ。11世紀後半～12世紀の所産である。63～65は龍泉窯系青磁椀である。63・64は2点ともに蓮弁文の鎬は不明瞭である。65は見込みにスタンプをする。13世紀後半～14世紀の所産である。66は信楽焼壺である。口縁部がまっすぐに立ち上がり、口縁端部をつまみ出し、やや垂下する。15世紀の所産とみられる。67は瀬戸おろし皿か。口縁端部が内外面につまみ出された形状であり、端面中央は浅くくぼむ。14世紀後半の所産か。

以上、1A調査区2～3層は、11世紀後半の土師器皿から15世紀前後とみられる信楽焼壺を含み、12～14世紀前後の遺物が多い。

1A調査区3層(図23 68～82) 68～72は土師器皿。68・69は口縁部を一段ヨコナデし、端部は丸くおさまる。13世紀後半か。70は口縁部を弱いヨコナデで仕上げ、やや深身となる。内面には炭化物が口縁端部を除き付着することから、灯明皿とみられる。71は口縁部を二段に弱くヨコナデし、端部は丸くおさまる。白色の胎土である。72は直径14cm前後の浅身であり、口縁部はヨコナデで仕上げる。73は瓦

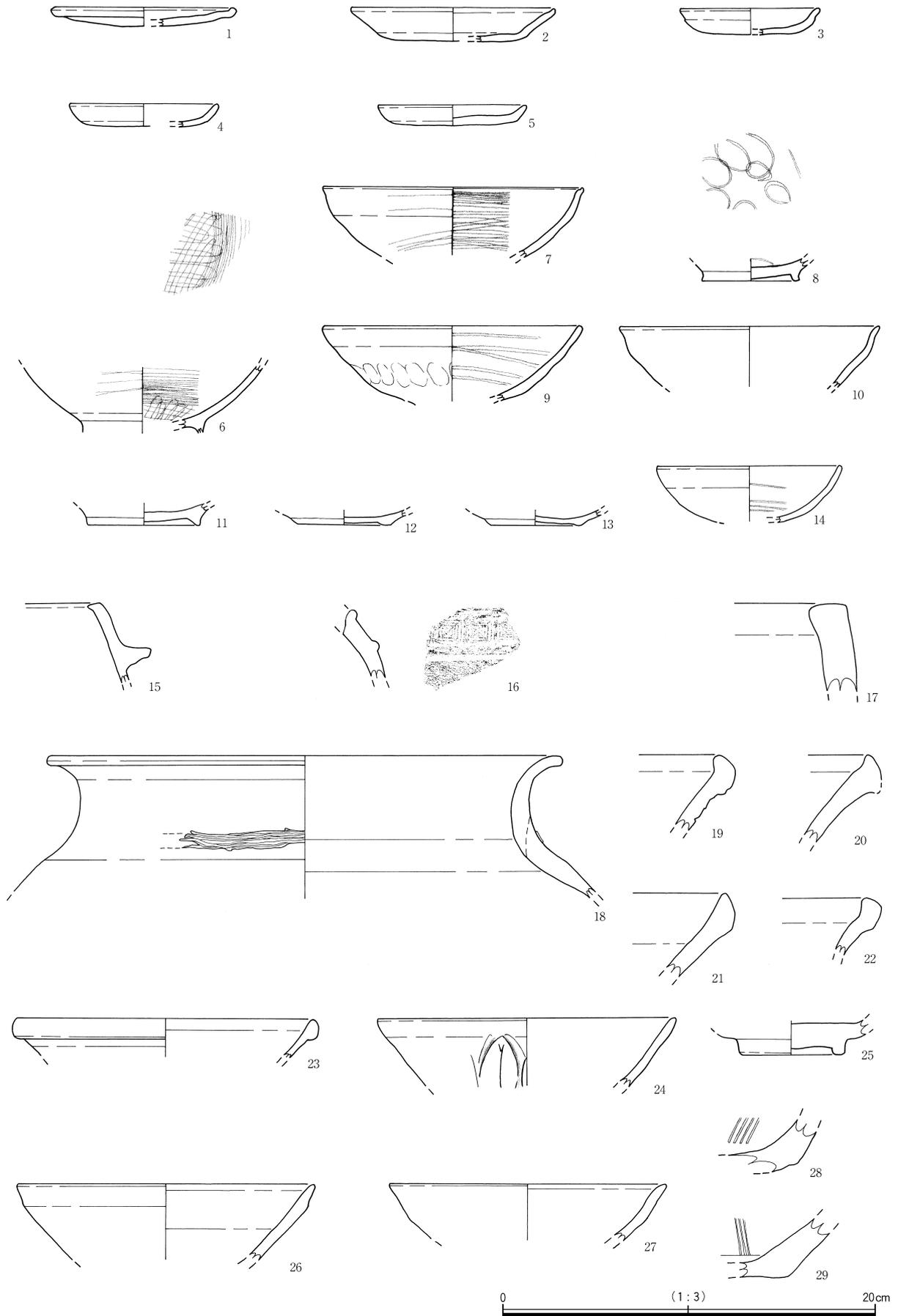


图21 有池遺跡02-1-1 A調査区 包含層出土遺物

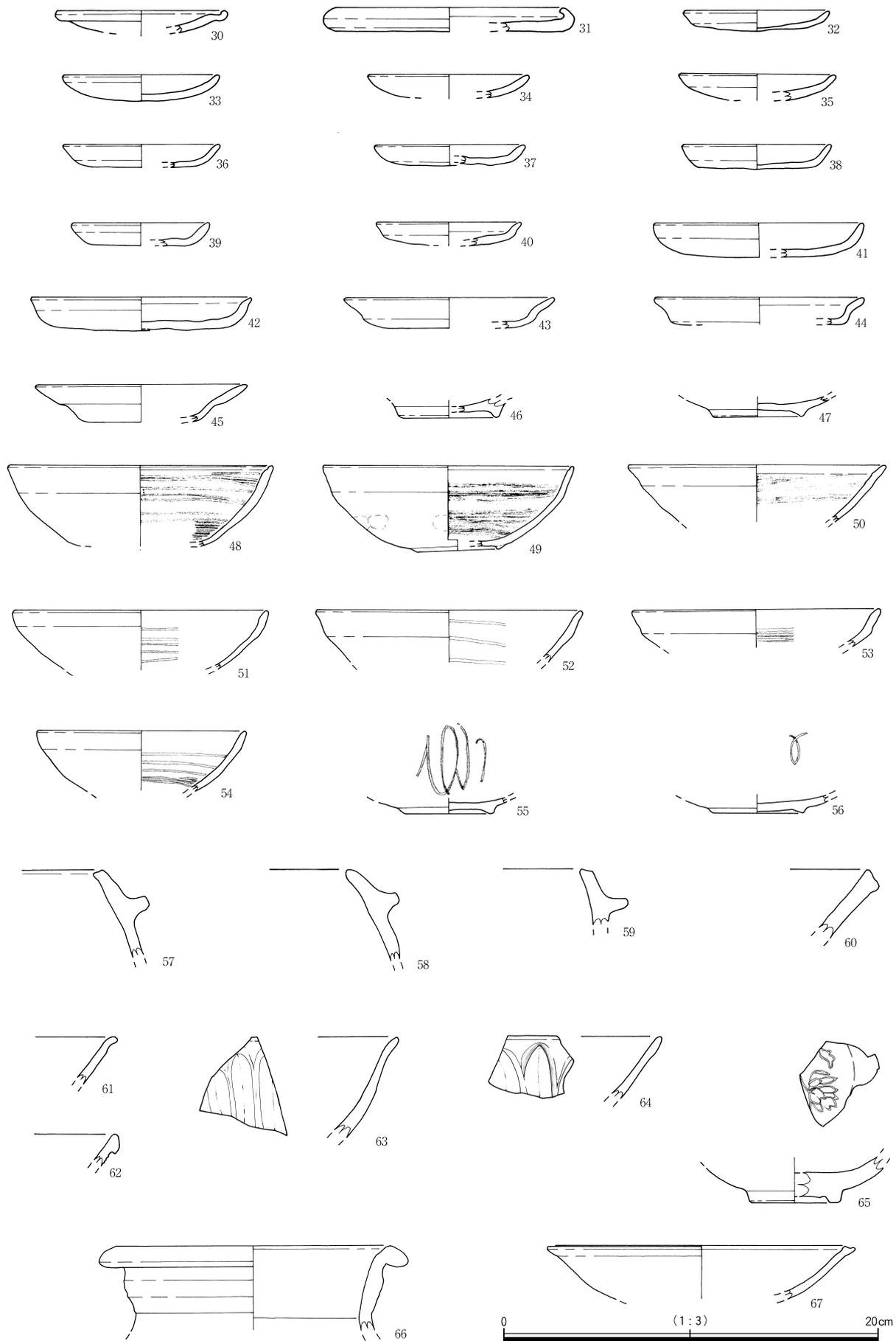


图22 有池遺跡02-1-1 A調査区 包含層出土遺物

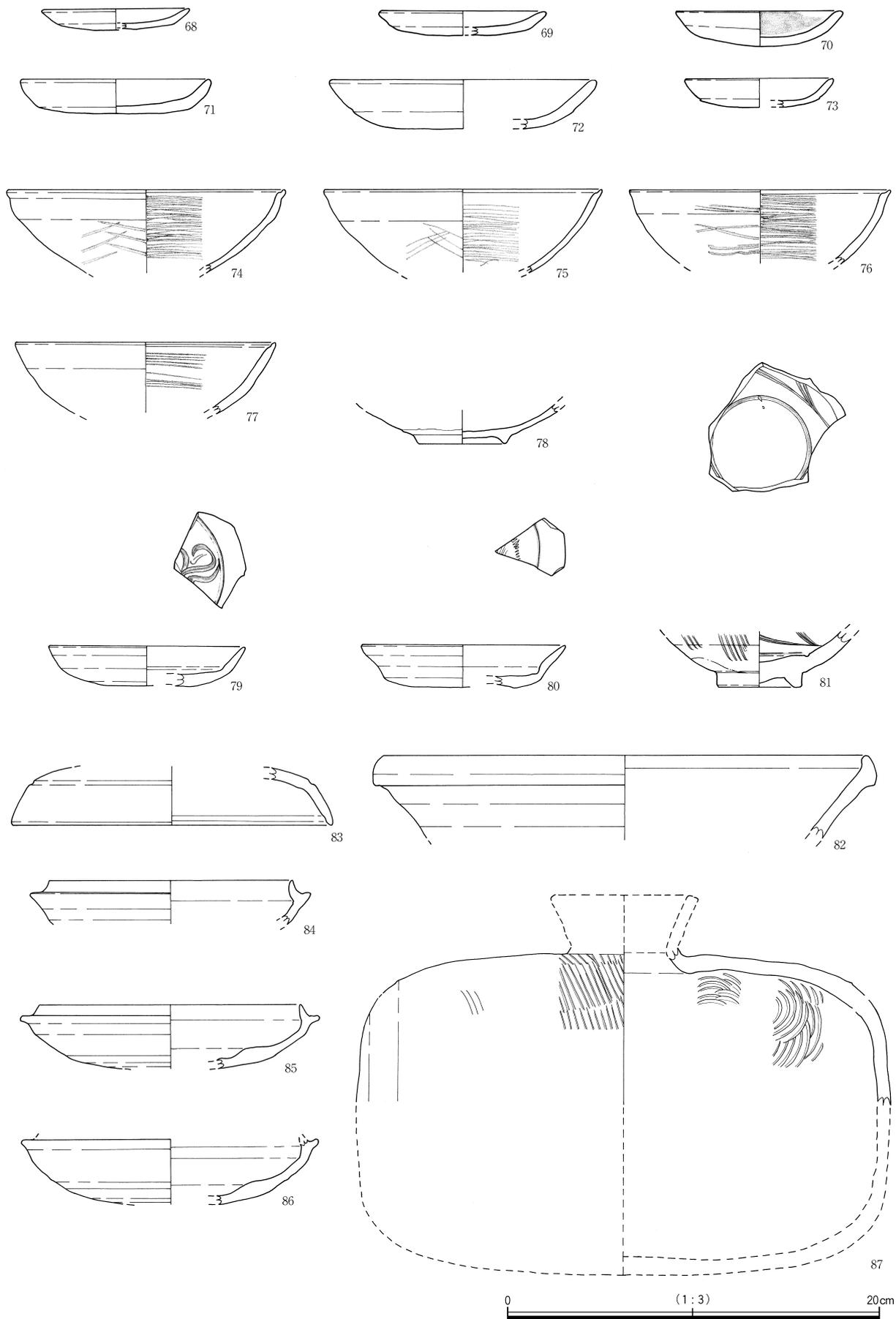


图23 有池遺跡02-1-1 A調査区 包含層出土遺物

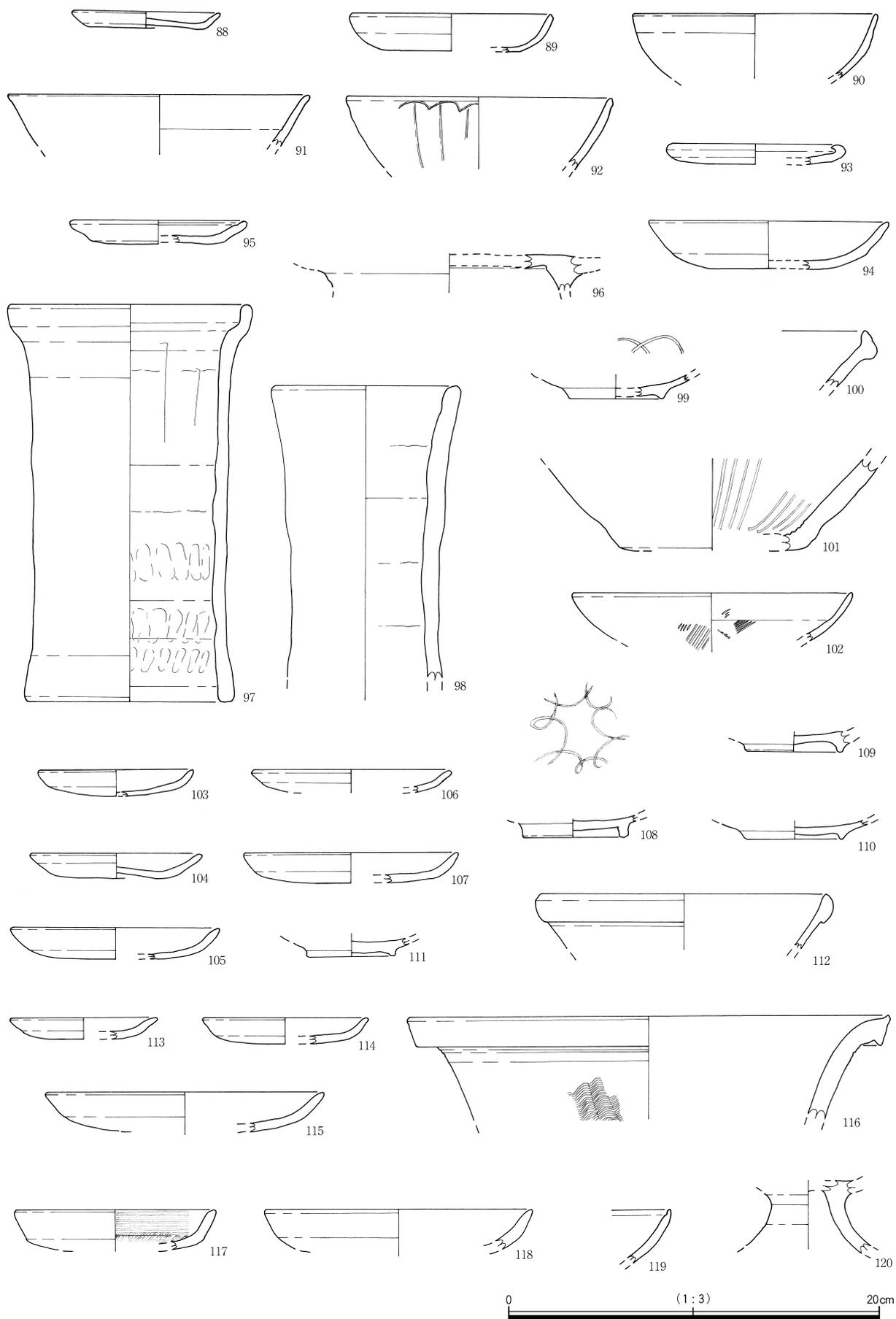


图24 有池遺跡02-1-1 B調査区 包含層出土遺物

器皿である。口縁部および内面をヨコナデし、外面底部はナデで仕上げる。見込みには連続長楕円状の暗文を施す。74～78は瓦器椀。74～76は口縁部が外半し、口縁内端部に段をもつ。内面には密にヘラミガキが施され、外面は分割性が不明瞭な粗いヘラミガキが施される（大和型Ⅲ-A）。75は表面磨耗のため調整が不明瞭であるが、外面にヘラミガキはみとめられず、内面には比較的密なヘラミガキが施される。口縁内端部には斜め上方から施された沈線がめぐる。78も表面磨耗のため調整は不明瞭である。底部には断面三角形の高台がめぐる。79は白磁皿。底部外面には施釉しない。12世紀後半の所産とみられる。80は同安窯系青磁皿。底部外面には施釉しない。12世紀後半の所産とみられる（Ⅲ-1b類）。81は同安窯系青磁椀（Ⅲ-1b類）。高台は内外面とも施釉しない。82は東播系須恵器鉢。口縁端部の上方への拡張が顕著であり、13世紀前半～後半の所産であろう（第Ⅲ期第1段階）。

以上、1A調査区3層は、12世紀後半から13世紀の遺物を含む。

1A調査区4層（図23 83～87） 83は須恵器杯蓋、84～86は須恵器杯身である。MT85またはTK43型式に位置付けられる。87は須恵器横瓶である。肩部から体部にかけての破片のみであり、全体形は不明である。外面に平行タタキ、内面に当て具痕がみとめられる。

1B調査区2層・2面（図24 88～94） 88～92が2層、93・94が2面出土土器である。88・89は土師器皿である。88は口径に対して底径の占める割合が大きく、口縁部ヨコナデが1段で外反する。90は瓦器椀。内面は密なヘラミガキ、外面はヨコナデおよびナデである。口径13cm前後であり、口縁端部はやや尖りぎみに終わる。13世紀後半の所産とみられる（楠葉型Ⅲ-3）。91は白磁椀。灰白色であり、口縁端部が外側にややつまみ出される（Ⅷ類）。92は龍泉窯系青磁椀。縞蓮弁が区画を伴わず、線で表現される。93・94は土師器皿。93は淡い橙色であり、赤色酸化粒を含む。94は口径13cm。口縁部二段ヨコナデで、口縁端部は面取りはなく丸くおさまる。12世紀後半のものか。

以上、1B調査区2層・2面は、12世紀後半から15世紀の遺物を含む。

1B調査区2～3層（図24 95～102） 95は「て」字状口縁をもつ土師器皿。淡い橙色であり赤色酸化粒を含む。11世紀末～12世紀。96は土師器台付皿の高台である。97・98は瓦質土筒である。2点とも混入とみられる。外面はナデ、内面はナデとユビオサエで仕上げる。97は17世紀以降にくだるであろう。99は瓦器椀。見込みに暗文が施される。100は東播系須恵器鉢。口縁端部の拡張が上下にみとめられ、肥厚することから、13世紀前半～後半の所産であろう（第Ⅲ期第1段階）。101は瓦質播鉢の底部である。焼成が不良であり、灰白色を呈する。102は青磁皿である。体部の屈曲は不明瞭であり、口縁部はゆるやかに湾曲して立ちあがる。

以上、1B調査区2～3層は97・98の瓦質土筒の混入を除外するならば、11世紀末～12世紀の土師器皿から13世紀前半～後半の東播系須恵器片口鉢を含む。

1B調査区3層（図24 103～115） 103～107・113～115は土師器皿である。口縁部ヨコナデが1段で、端部は丸くおさまる。口径は、103・104・113が8～9cm、105～107が10～11cm、115が15cmと多様である。108～111は瓦器椀である。108は高台が逆台形であり、見込みのヘラミガキは連結輪状である。12世紀前半にさかのぼる可能性がある。109は焼成不良のためか土師質に近い。112は玉縁状口縁をもつ白磁椀である（Ⅳ類）。

以上、1B調査区3層は、12世紀前半から13世紀の遺物が主体とみられる。

1B調査区4層（図24 116） 116は須恵器甕の口縁部で、頸部に凹線がめぐり、波状文が施される。TK47型式の可能性が考えられる。

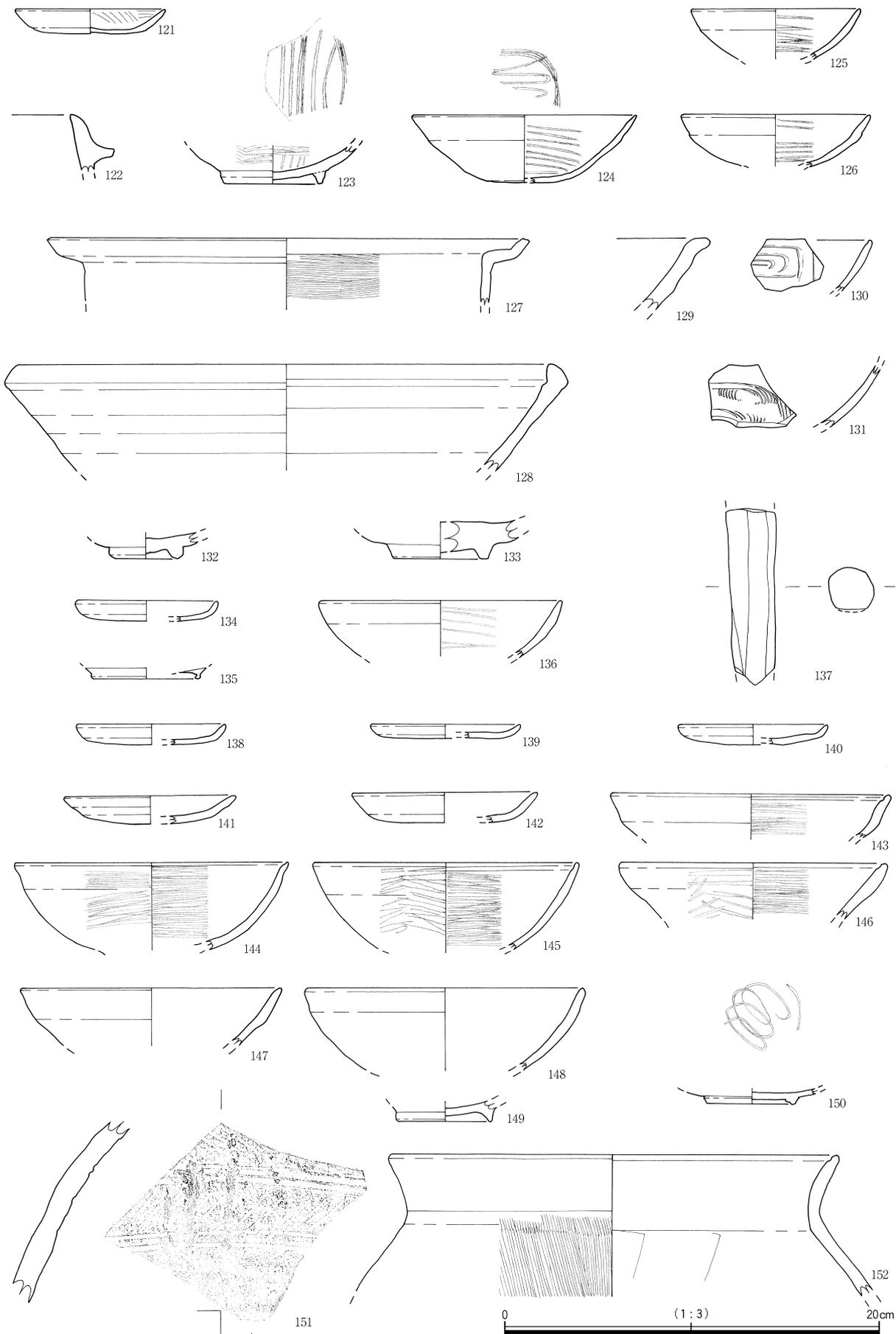


图25 有池遺跡02-1 大溝1 出土遺物

1 B 調査区南端部 (図24 117~120) 117は2面、118~120は4層出土である。

117は瓦器皿。外面は口縁部がヨコナデ、底部がナデで仕上げられ、内面は密なヘラミガキが施される。118は土師器皿であり、口径は14.3cmである。119は瓦器椀であり、口縁内端部に段をもつ。120は須恵器高杯の脚部であり、長脚にはならない。残存部に刺突はみとめられない。回転ナデで仕上げられる。

大溝1 (図25 121~152) 121~133が1層、134~137が2層、138~150が3層、151が4層、152が5層出土土器である。

121は土師器皿。口縁部はヨコナデの後、内面にハケメが施される。122は瓦質羽釜である。外面は土師質、内面は黒色であり、土師器か瓦質土器か判別しがたい。口縁部が内傾し、端部が尖りぎみに仕上げられる。123~126は瓦器椀。123は断面が逆台形の高台がつき、内外面に密なヘラミガキが、見込みには粗い平行線状の暗文が施される。124は高台が形骸化し、わずかに盛りあがる状態である。内面に圏線ミガキが粗くめぐり、見込みの暗文は簡単なジグザグ状である(楠葉型Ⅳ-2)。125は口径9cm、126は口径10cmであり、内面に極細い圏線ミガキがめぐる。127は瓦質鍋である。口縁部および体部外面はナデ、体部内面は板ナデ状の細かいハケメがみられる。128は東播系須恵器鉢。直線的な体部であり、口縁端部は上方に拡張し、内面には凹線状のくぼみがめぐる。13世紀~14世紀前半の所産であろう(第Ⅲ期第1~2段階)。129は信楽焼鉢で、14世紀中頃。130は口縁部に雷文がめぐる青磁椀で、14世紀末~15世紀初頭の所産とみられる。131は内面に櫛描文が施され、同安窯系青磁椀とみられる。132は白磁椀。内面は施釉され、底部外面は施釉されない。133は青磁椀。内外面とも施釉され、畳付にも一部釉がまわる。高台内は施釉されない。

以上、1層は12世紀前半~15世紀初頭の遺物のほか、近世磁器が含まれる。

134は土師器皿。直立気味の口縁部を一段ヨコナデする。135は瓦器椀の高台部分高台である。136は瓦器椀で、内面には粗いヘラミガキが施される。13世紀後半のものか。137は瓦質三足釜の脚部である。

以上、2層は13世紀前後の遺物が主体である。

138~142は土師器皿。138~140は直立気味の短い口縁部を一段ヨコナデする。141・142は、口縁部を一段ヨコナデし、端部は丸くおさまる。141は淡褐色系、142は白色系の精良な胎土である。143~146は瓦器椀である。143はやや外半する口縁内端部に沈線がめぐり、内面に圏線ミガキがめぐる。144はやや外半する口縁内端部に沈線がめぐり、内外面ともにミガキが密に施される(大和型Ⅲ-A)。145は口縁部がやや内湾し、口縁内端部に幅2~3mmの沈線がめぐる。内外面ともにミガキが密に施される(楠葉型Ⅱ-2)。146は口縁部がやや肥厚し、口縁内端部に幅2~3mmの沈線がめぐる。口縁内端部の沈線は、後から施された内面の密な圏線ミガキのため一部不明瞭となる。外面はジグザグ状の分割ヘラミガキが粗く施される(大和型Ⅲ-A)。147~150は形態は瓦器椀に類似するが、焼成不良のためか淡褐色である。147・148は内外面ともナデでしあげる。149は断面三角形のしっかりした高台であり、見込みにはジグザグ状暗文が施される。150は扁平な断面三角形の高台であり、見込みには連続長楕円状暗文が施される。以上、3層は12世紀後半~13世紀中頃の遺物が主体である。

151は須恵器甕口縁部。凹線が2条、二段にめぐり、その間に櫛描刺突文が施される。4層からは他に稜線に凹線がめぐる須恵器杯蓋の小片が出土する。152は土師器甕。頸部の稜がゆるやかで、外面はハケメ、内面は板ナデでしあげる。4層・5層からはMT85~TK209型式の遺物が出土しており、6世紀後半~7世紀前葉に位置付けられる。

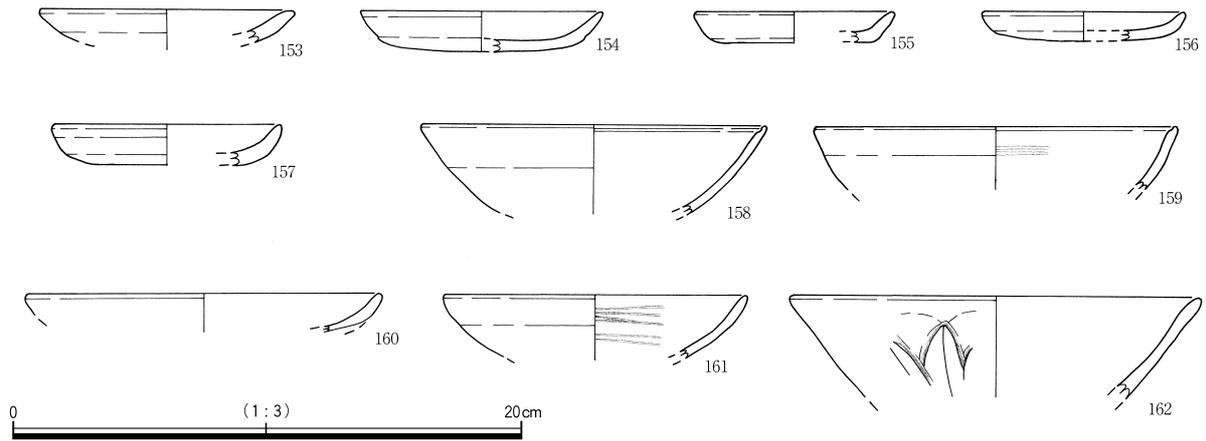


図26 有池遺跡02-1 建物・ピット・土坑 出土遺物

建物1 (図26 153) ピット7から出土した土師器皿である。口縁部を一段ヨコナデし、端部は尖り気味におわる。12世紀の所産とみられる。

建物2 (図26 154) ピット33から出土した土師器皿である。153と同様の特徴を示す。

ピット58 (図26 155) 土師器皿。直立気味の口縁部を一段ヨコナデする。13世紀の所産とみられる。

ピット59 (図26 156) 土師器皿。短く直立気味の口縁部を一段ヨコナデする。13世紀の所産とみられる。

土坑34 (図26 157) 土師器皿。口縁部を一段ヨコナデし、端部は尖り気味におわる。器壁は5mmとやや厚い。

土坑16 (図26 158) 瓦器椀。口縁部は内湾気味にたちあがり、端部は尖り気味におわる。口縁内端部に沈線がめぐり、内外面とも残存状態が不良であり、内面に圏線ミガキを一部みとめるのみである(楠葉型Ⅲ-2)。13世紀前半の所産とみられる。

土坑42 (図26 159) 瓦器椀。口縁部は外反し、口縁内端部に段をもつ。内外面とも残存状態が不良で、内面に圏線ミガキを一部認めるのみである(大和型Ⅲ-A)。12世紀後半の所産とみられる。

土坑45 (図26 160~162) 160は土師器皿である。底部が剥離し全体形が不明瞭であるが、口縁部を二段ヨコナデし、端部は丸くおさまる。赤色酸化粒を多く含む、淡い橙色の緻密な胎土である。161は瓦器椀。口縁部は内湾気味にたちあがり、端部は尖り気味におわる。沈線は無く、内面に粗いミガキが施される(楠葉型Ⅳ-1)。13世紀後半~14世紀前半。162は龍泉窯系青磁椀。片彫蓮弁文が施される(Ⅱ-a類)。13世紀前後。

土坑9 (図27 163~187) 163~166は土師器皿。163~165は口縁部を1段ヨコナデし、口径8cm前後である。166は口縁部を二段ヨコナデし、口縁端部は外反する。端部内面に沈線がめぐり、口径14cmで、褐色系の胎土である。167は瓦器皿。口縁部を一段ヨコナデし、内面に二条の暗文がみとめられる。168~184は瓦器椀。すべて外面にミガキはみとめられない。口縁部は171・172・175がやや外反するほかは、直線的もしくはやや内湾する。168・171・175は口縁内端部に段をもち、172・173・176・179は口縁内端部に沈線がめぐり、内面の圏線ミガキは、隙間があり、幅1mm前後の細いものである。見込みの暗文は178・179が連続長楕円状、180・181がジグザグ状であり、178・180は圏線ミガキの後に暗文が施される。168・179は内面に有機物が付着しており、ミガキの詳細は不明。169は内面に直径3~5mmの円形の剥離がみられる。高台は181が断面台形であるほかは断面三角形の低いものである。口径13~14cm、器高4.5cm、器壁の厚さ3mm前後である。楠葉型Ⅲ-2~3期に並行し、13世中頃を前後する時期とみられ

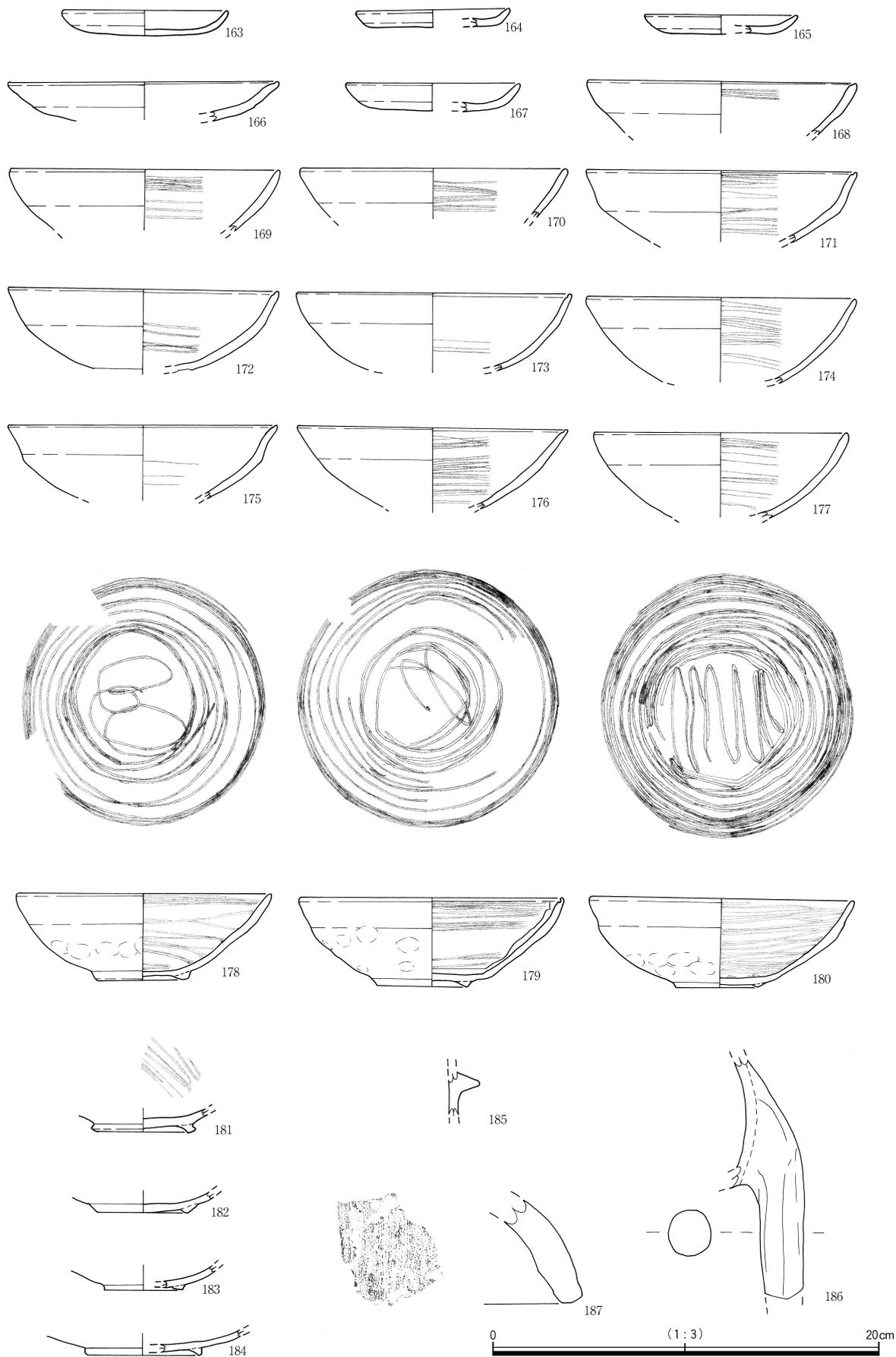


图27 有池遺跡02-1 土坑 9 出土遺物

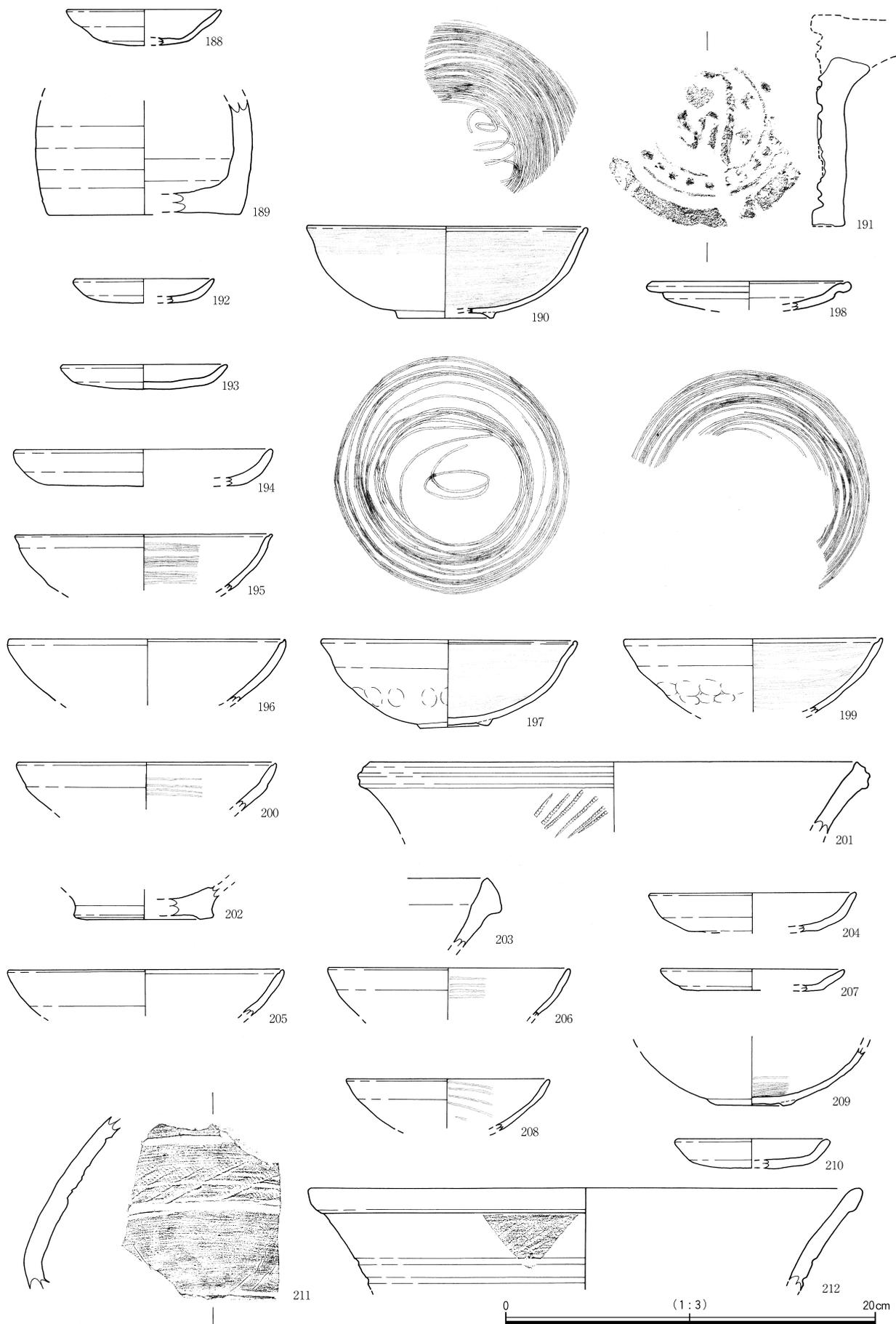


图28 有池遺跡02-1 溝 出土遺物

る。185・186は瓦質羽釜の鍔部と脚部である。187は平瓦で、凹面に布目圧痕がみとめられる。

溝6 (図28 188~191) 188は土師器皿。口縁部はヨコナデされ、直線的である。褐色系の胎土であり、白色系のスリップが施される。14世紀後半の所産とみられる。189は須恵器壺の底部で、内外面とも回転ナデ、底部はナデで仕上げる。底部内面に自然釉の付着がみられる。190は瓦器椀。外面の上位に水平方向のミガキが、内面には圏線ミガキの後、見込みに連結輪状の暗文が施され、口縁内端部に沈線がめぐり、高台は断面三角形のものである(楠葉型Ⅲ-1)。12世紀末~13世紀初頭の所産とみられる。191は「𪛗」(キリーク)の梵字文をもつ軒丸瓦である。梵字文の外側には2条の圏線と圏線間には珠文が密にめぐり、

溝32 (図28 192~197) 192~194は土師器皿。口径は192が7.5cm、193が9cm、194が14cmである。すべて口縁部は一段ヨコナデで、端部は丸くおさまる。195~197は瓦器椀。195・197は口縁部がやや外反し、195は口縁内端部に段をもち、197は沈線がめぐり、2点とも内面のみ圏線ミガキがみとめられる(楠葉型Ⅲ-2)。196はやや内湾する口縁部であり、口縁内端部に沈線がめぐり、内面は磨耗のためミガキは不明瞭である。

溝73 (図28 198) 198は土師器皿で、厚手の「て」の字口縁をもつ。白色系の胎土である。11世紀後半の所産とみられる。

溝74 (図28 199) 199は瓦器椀であり、口縁部内端部に沈線がめぐり、内面のみ圏線ミガキが施される(楠葉型Ⅲ-2)。

溝79 (図28 200) 200は瓦器椀であり、口縁部内端部に段をもち、内面のみ粗い圏線ミガキが施される(楠葉型Ⅲ-2)。

溝80 (図28 201・202) 201は須恵器甕であり、口縁部に2条の凹線が、頸部に櫛描刺突文がめぐり、TK10型式前後か。202は白磁椀の底部で、見込みに段がめぐり、外面は無釉である。

溝81 (図28 203・204) 203は東播系須恵器鉢。直線的な体部であり、口縁端部は上下に拡張する。13世紀前半~後半の所産であろう(第Ⅲ期第1段階)。204は土師器皿で、口縁部を二段にヨコナデし、端部は尖り気味におわる。

溝88 (図28 205) 205は瓦器椀であり、口縁部内端部に沈線がめぐり、表面磨耗のため、ミガキは不明瞭である。

溝90 (図28 206) 206は瓦器椀であり、内面に細い圏線ミガキが粗くめぐり、

溝91 (図28 207) 207は土師器皿であり、口縁部を一段ヨコナデし外反する。

溝94 (図28 208) 208は瓦器椀であり、内面に圏線ミガキが粗くめぐり(楠葉型Ⅳ-2)。

溝102 (図28 209) 209は瓦器椀であり、内面に圏線ミガキがめぐり、扁平な高台が付く。

溝103 (図28 210) 210は土師器皿。表面磨耗のため、調整は不明瞭である。赤色酸化粒を多く含む、淡い橙色の胎土である。

溝104 (図28 211・212) 211は須恵器甕の口頸部で、三条の凹線と中心の凹線上に刺突文がめぐり、212は須恵器甕の口頸部で、口縁端部は肥厚し、頸部には櫛描刺突文と凹線が二条めぐり、211・212は胎土・焼成が類似し、同一個体となる可能性がある。TK10型式前後に位置付けられる。

2. 石器 (図29・30)

当調査区において、計46点の石器が出土している。ここでは、石器を広義の意味で捉え、人為的な痕跡がみとめられる剥片や楔形石器なども含むこととする。なかでもサヌカイト製の石器が20点出土して

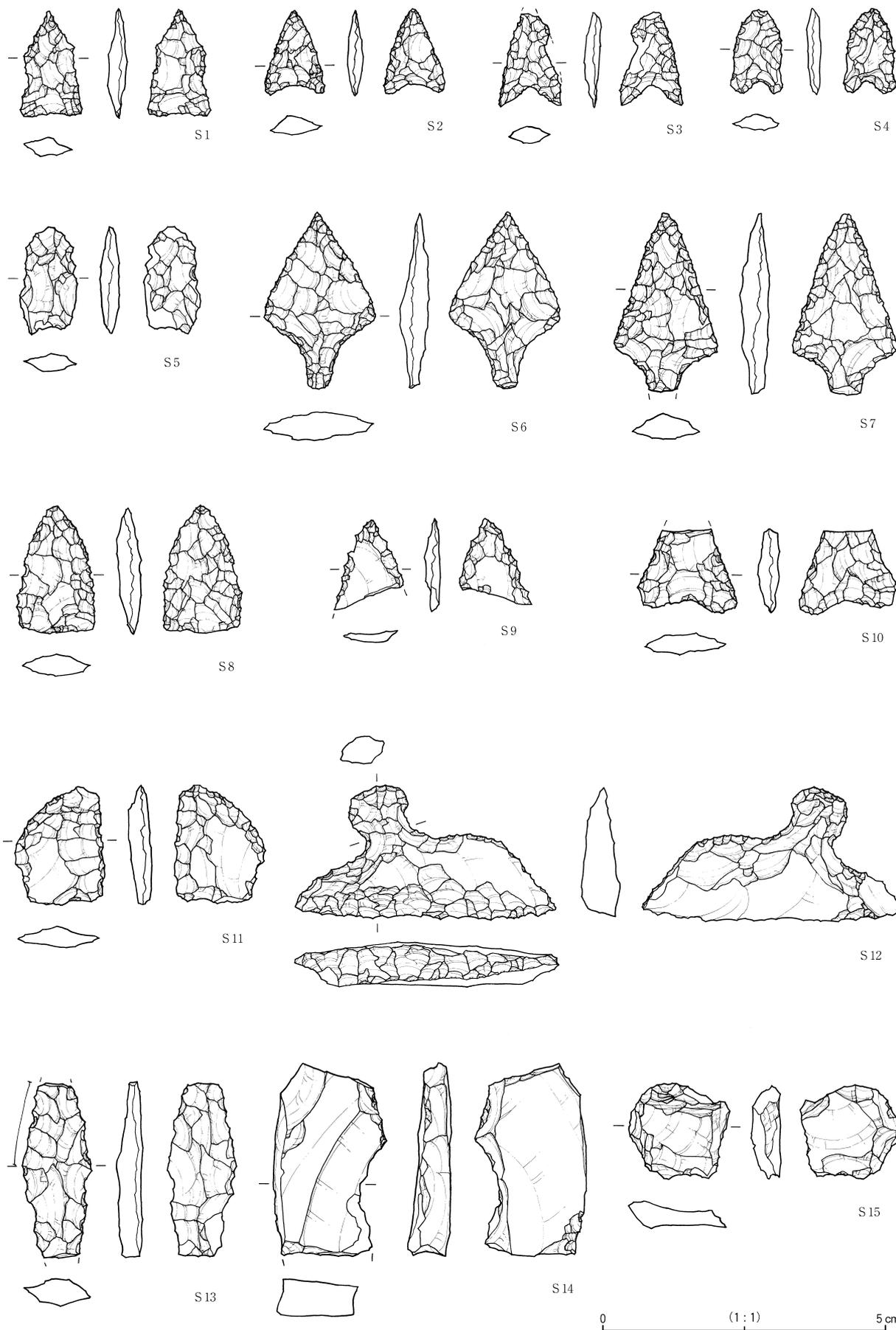


图29 有池遺跡02-1 石器

いる。いずれも原位置を保つものではなく、遊離資料であるが、石器の遺存状態などから当遺跡もしくは周辺の遺跡に由来する可能性が高いと考えられる。ここでは、そのサヌカイト製石器20点を図示し、個別にみていくこととする。

S 1～S 11は石鏃。S 1は、五角形石鏃。両肩がやや張り出し、基部は内湾気味である。先端は尖鋭となっている。右側縁の一部に新欠がみられる以外はほぼ完形である。

S 2～S 5・S 10は凹基式石鏃。S 2は、先端が尖鋭であり、基部はカーブを描いて内湾している。完形である。S 3は、先端と右側縁を欠損するため本来の大きさは不明である。基部は逆V字状を呈し、脚部は尖っている。S 4は、先端・脚部とも丸みを帯びている。右面の一部に素材剥離面が残る。S 5は、S 4と同様に先端・脚部が丸みを帯びている。ただし、S 4に比して脚部のつくりがやや貧弱である。左下部を欠損する。

S 6・S 7は有茎式石鏃。S 6は先端部が尖鋭である。基部は、肩から茎にかけて緩やかなカーブを描いている。表裏ともに中央付近では素材面が残置している。完形品。S 7は、S 6に比して刃部が鋭角となっている。裏面の中央部分には素材の剥離面がみとめられる。基端部を折損する。

S 8は平基式石鏃。表裏面とも平坦剥離で覆われている。3 cm とやや大形である。

S 9は、基部を折損するため本来の形状は不明であるが、剥片の周縁にのみ調整を施し、その形態を整えているものである。これは、弥生時代前期を中心とし、縄文時代晩期からみとめられるものであり、時期を考えるうえで目安になるであろう。

S 10は、凹基式石鏃の基部である。上部を折損するため元来の大きさは不明であるが、基部の大きさから察するに大形であった可能性が高い。基部はやや内湾し、脚部先端は丸くなっている。

S 11は石鏃の未製品か。表裏面の両側縁に調整がみとめられる。とくに右側縁のそれは器体中央付近までのびる平坦な剥離面となっている。また、端部にかけての調整は、基部を作り出すためのものと考えられることから、石鏃の未製品である可能性が高い。

S 12は石匙。刃部は片刃であり、その角度はほぼ直角に近い。形態は、右側には平坦な自然面を残し、左側は先端を作出し、つまみが基軸に対しやや斜行するという特徴を有する。その刃角は72° と非常に鈍角である。

S 13は石錐か。上下部を折損するため、詳細な形態は不明であるといわざるをえない。ただ、器長に対して器幅が狭いこと、さらに器幅が1.7cmに対し器厚が0.6cmとやや厚いことなどから石錐の可能性が高い。

S 14はスクレイパー。幅広の剥片を素材とする。調整は、背面から腹面にかけて施されており、連続した細かな剥離痕と大形のものとなる。後者は剥片剥離の痕跡と捉えることもできることから、石核転用のスクレイパーの可能性もある。上下端および左側縁は折損している。

S 15～S 18は楔形石器。いずれも大きさが2.3～2.5cmの範囲に収まり、その形態は非常に類似している。S 17・S 18は上下端に顕著な潰れ痕がみとめられる。また、S 17はその一部に自然面を残す。

S 19は縦長の剥片。打面は潰れており階段状の剥離痕がみられる。また、端部にも微細剥離痕がみとめられることから、上下両端より力が加わった結果と考えられる。左側縁には微細剥離痕がのこるが、稜線が摩滅していることからローリングを受けた際に生じた可能性がある。

S 20は石核か。厚みのある大形の剥片を素材とする。打面と作業面を交代し、背腹両面より剥片を剥離している。ただし、剥離される剥片は最大でも2 cm未満であることから、剥片剥離というよりは、調

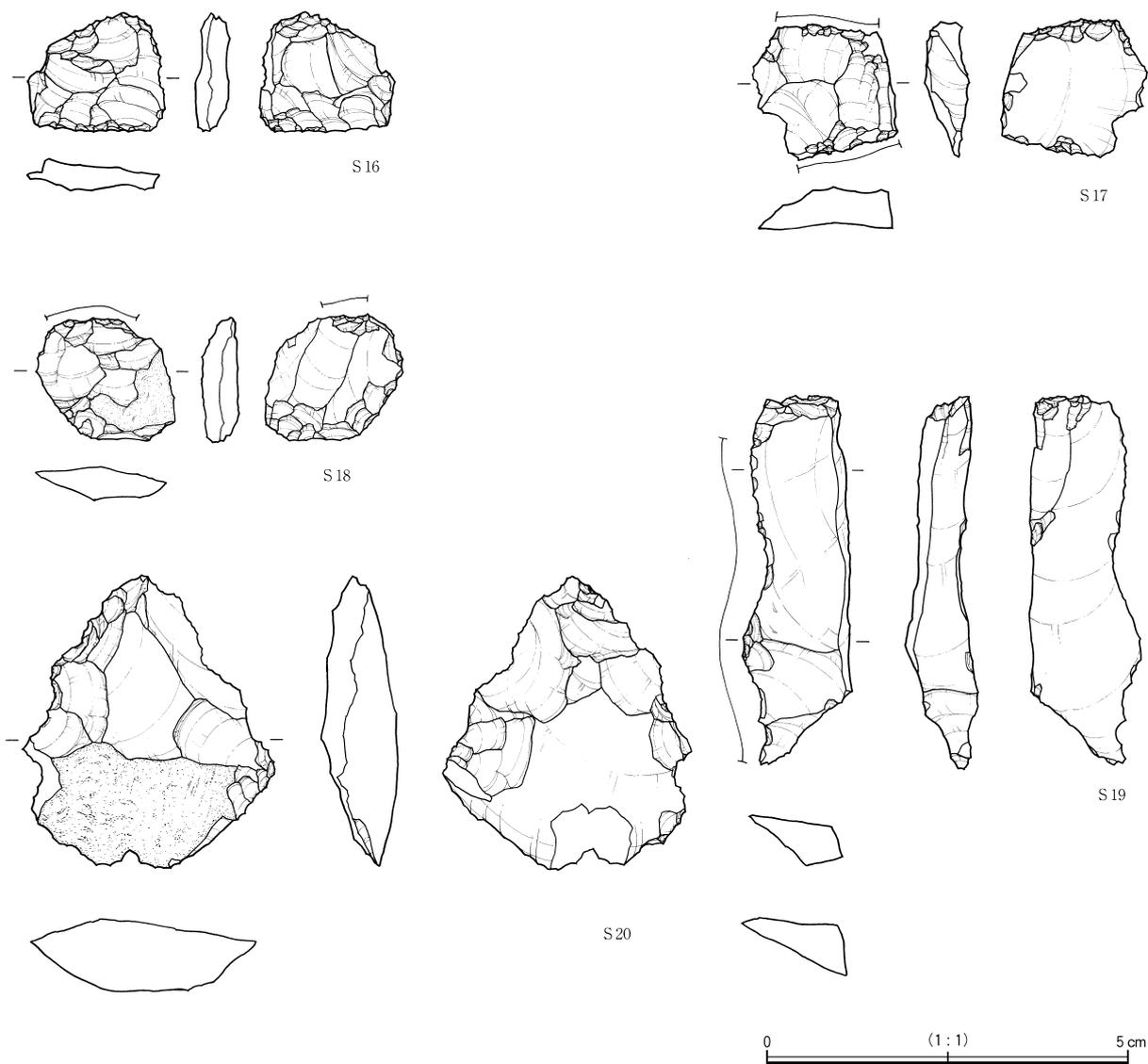


図30 有池遺跡02-1 石器

整剥離の可能性も考えられ、両面加工石器と分類されるべきかもしれない。素材剥片の打面はこれらの剥離により除去されている。背面の一部には自然面が残置する。

3. 木器

大溝1 (図31 W1~5) W1・2は容器で、刳物の楕円形もしくは円形鉢である。口縁部が斜めに立ちあがり、内面の刳り込みには曲面をもたせる。端部上面は平坦面が残る。横木取り。W3は用途不明の加工木である。15~17cmの台形で、厚さ5cmである。片面に6×11cm、深さ2.5cmの長方形の刳り込みがあり、その上方が直径3cmの円形に浅くくぼみ、直径1.5cm、長さ3.5cmの栓が入った状態で出土した。W4は一辺3~4cmの断面方形を呈する棒状の製品であり、浅い刳り込みや幅2cm弱の工具痕がみとめられる。

W1~4は5層から出土しており、5層はMT85~TK209型式の遺物が出土していることから、6世紀後半~7世紀前葉に位置付けられる。

W5は杭である。直径4cmの断面円形であり、先端を1~2cm幅で面取りし尖らせる。2~3層出土であり、12世紀後半~13世紀に位置付けられる。

4. その他の遺物 (図32)

銭貨、煙管、碁石、土人形、縄文土器がある。銭貨の一部を除いて、1層または1面の近世相当層出土である。

○1～○12は銭貨である。○1は1層出土である。腐食が著しく文字が判然としないが「開慶通寶」とみられ、「慶」の字を欠くものと考えられる。背文字はみられない。初鑄は南宋、1259年。○2～○6は1面出土である。○2・○3は背面が合わさった状態で出土した。○2は「祥符元寶」で、初鑄は北宋、1009年である。○3は○2に比べ腐食が進む。行書の「元祐通寶」で、初鑄は北宋、1086年。○4は「天禧通寶」とみられ、初鑄は北宋、1017年。背文字はみられない。○5は不鮮明だが「熙寧元寶」とみられる。○6は二枚の銭貨が合わさった状態であり、一枚は背文字のない背面をみせる。篆書の「元豊通寶」で、初鑄は北宋、1078年。○7は1面溝6、○8は1面溝11出土の「寛永通寶」である。溝6、溝11とも染付磁器が出土する近世の遺構である。○9は2層出土である。篆書の「元豊通寶」で、背文字はみられない。○10・○11は2面出土である。○10は行書の「元豊通寶」で、背文字はみられない。○11は真書の「天聖元寶」で、初鑄は北宋、1023年。○12は大溝1の1層出土である。銭貨は腐食し、湾曲する。右に「元」、下に「淳」がみられ、左は「寶」の可能性あることから「咸淳元寶」の可能性が考えられる。「咸淳元寶」の場合、初鑄は南宋、1265年。背文字の有無は腐食のため不明である。

以上の銭貨は、○2・○3と○6が至近で出土した以外は、とくに水田の区画境から出土する傾向もなく、分散して出土した。

M1は煙管の吸口である。薄い金属板を曲げて成形しており、一直線の継ぎ目が残る。部分的に剥落するものの表面は金色である。内部には棒状の炭化物が残存する。

S21は碁石とみられる。黒色の石を扁平な丸石に仕上げるが、擦痕はとくにみとめられない。

213は土人形である。頭部を欠くものの、座った狐を表現したものとみられる。

214は縄文土器である。口縁端部は平坦であり、外面に山形の押型文が施される。胎土には繊維を多く含み、内外面とも圧痕が明瞭である。縄文時代早期後半、高山寺式以降、石山式までの時期とみられる。

胎土から縄文土器とみられる土器片は他に4点あるが、いずれも無文の小片であり、詳細は不明である。

第4節 まとめ (図33)

調査地では、全体にわたり中世の居住域と水田を確認したほか、南端に位置する谷部の下層において古墳時代後期～飛鳥時代の溝を検出し、部分的に古墳時代中期後半～後期の包含層を確認した。

中世の居住域は、調査地北端の微高地上で、南北30m、東西40mの範囲にひろがり、掘立柱建物2棟、柱穴列、井戸(土坑9)、ピット、土坑、溝からなる。掘立柱建物はほぼ南北方向に主軸をもち、4×1間、2×1間以上の規模である。柱穴列はやや東よりに主軸をもち、掘立柱建物とは主軸を異にする。井戸(土坑9)は掘立柱建物2のすぐ南側に位置する。これらの周辺においてピット、土坑、溝を検出したが、居住域と水田を画する可能性をもつ遺構はみとめられなかった。居住域の出土遺物は細片が主であり、出土量も限られることから、今回検出した居住域は居住域の縁辺にあたるものと考えられる。出土遺物の年代は、概ね13～14世紀に位置付けられ、なかでも13世紀後半の遺物が主体である。井戸(土坑9)からは土師器皿、大和型および楠葉型の瓦器碗がまとまって出土しており、13世紀中頃の良好な

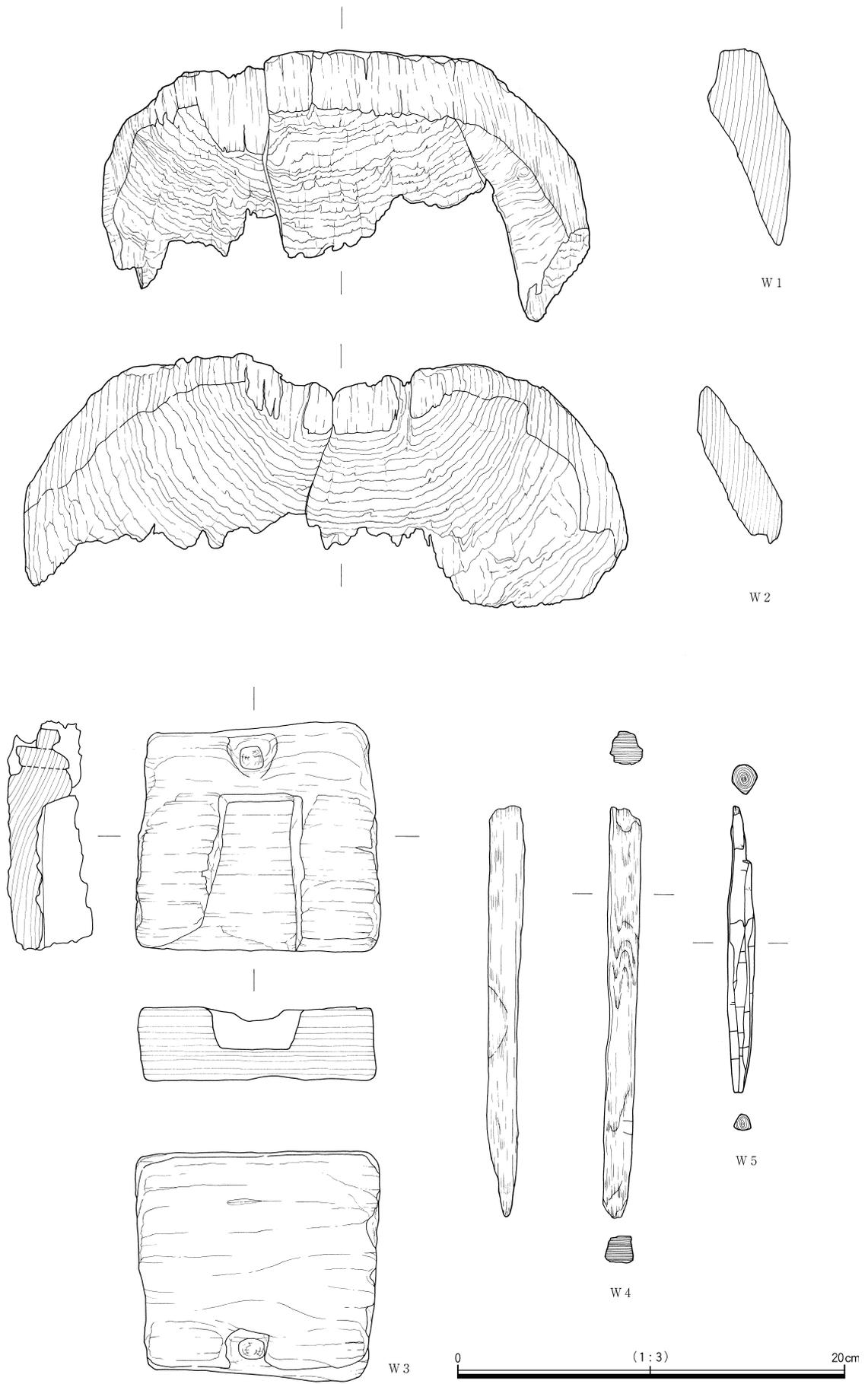


图31 有池遺跡02-1 木器

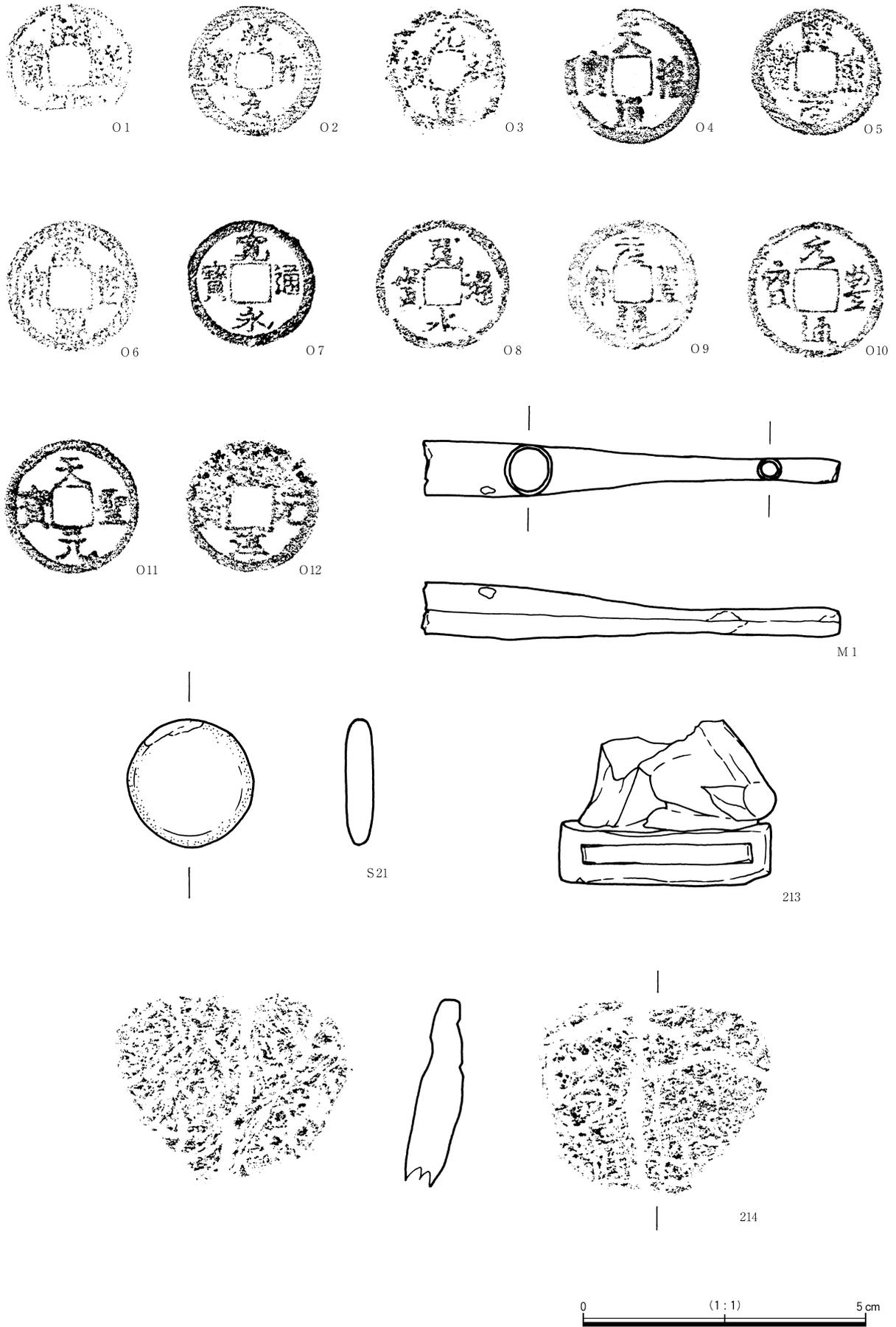


図32 有池遺跡02-1 その他の遺物

一括資料として特筆される。居住域では、溝73から「て」の字口縁をもつ土師器皿が出土し、包含層からも同様の土師器皿が出土していることから、居住の開始は11世紀後半までさかのぼる可能性が残る。すなわち、居住域においては居住の開始は11世紀後半までさかのぼる可能性があり、その後12～13世紀と居住が継続するなか13世紀中頃から後半にかけて盛期を迎えるが、14世紀には廃絶するといった過程が想定される。この動向は、調査地の北側50mの地点で交野市教育委員会が平成14年7～8月に実施された有池遺跡発掘調査における成果とも整合し（註2）、こうした消長をもつ居住域のひろがり周辺にみとめられる。

この北端の居住域とは別に注意される遺構に、南端部として報告した土坑45とこれが埋没後掘削された溝77がある。これらの遺構は北端の居住域の年代よりやや新しくなる可能性があり、調査地の東側に新しい年代の居住域がひろがる可能性が考えられる。

中世の水田は、調査地北端部をのぞく全域にひろがる。調査前の景観が東から西へと段落ちする棚田であり、近世耕土である1層除去後の景観もこれと同じである。9～11世紀の灰釉陶器から16世紀前後の播鉢を含み12～14世紀の遺物が主体である中世耕土層である2層を除去すると、調査地北西部の浅い谷部と調査地南端の大溝1に3層のひろがりが見とめられる。12～13世紀の遺物を主体とする3層を除去すると、大溝1を除き、ほぼ全域が花崗岩由来とみられる砂層主体の地山に至る。本面では先述した居住域のほか、鋤溝、水田区画溝、段落ちからなる中世水田のひろがりを確認し、遺構埋土が2層か3層かの違いで2時期の水田を確認することができた。

埋土を2層とする水田は、鋤溝や水田区画溝が東西南北にはしり、この時期の水田が条里制にのった整備された区画をもつものであることがわかる。また2層を埋土とする鋤溝は居住域の遺構埋土上にみとめられることから、この時期の水田は居住域の廃絶後、すなわち14世紀以降に位置付けられ、16世紀前後まで存続したと考えられる。

埋土を3層とする水田は、調査地東半の比較的高い部分では鋤溝が東西南北方向にはしるが、調査地北西部の浅い谷部では等高線に沿う形で鋤溝が弧を描くようにみとめられる。すなわち、この時期の水田は、条里制にのって東西南北方向の区画を指向するものの、その区画の施行が困難な浅い谷地形などでは微地形に沿った水田の区画割を残す。また、3層を埋土とする鋤溝は居住域の遺構と切り合うことは無く、居住域からやや離れた低い部分で見とめられることから、埋土を3層とする水田が12～13世紀、もしくは14世紀のある時期まで居住域と併存したと考えられる。

調査地南端で確認した谷筋である大溝1は、上層の1～3層は谷筋の斜面を段状に削り造成された中世以降の水田、下層の4・5層は断面V字形で砂層が堆積する古墳時代後期から飛鳥時代初頭の溝である。

上層の1層は12～15世紀の遺物に近世磁器を含み、2層は13世紀前後、3層は12世紀後半～13世紀中頃の遺物が主体であることから、概ね居住域および水田における2層が1層に、同じく3層が2～3層に対応する。すなわち12～13世紀段階では谷は埋積しきらず、まだ窪んだ状態で水田が営まれ、14世紀以降16世紀前後の段階で谷は完全に埋積し平坦な地形となったと考えられる。

下層の古墳時代後期から飛鳥時代初頭の溝は、その断面形から人為的な掘削によるものと考えられ、谷筋全体の断面形と規模から類推すれば、自然地形による谷筋の底部を古墳時代後期から飛鳥時代初頭に整形し溝としたものであろう。溝は5層の砂層で一時に埋積する以前、底部に腐植土や粘土ブロックなどはみとめられないため、ある程度管理された溝とみられ、用水路として機能していた可能性が考え

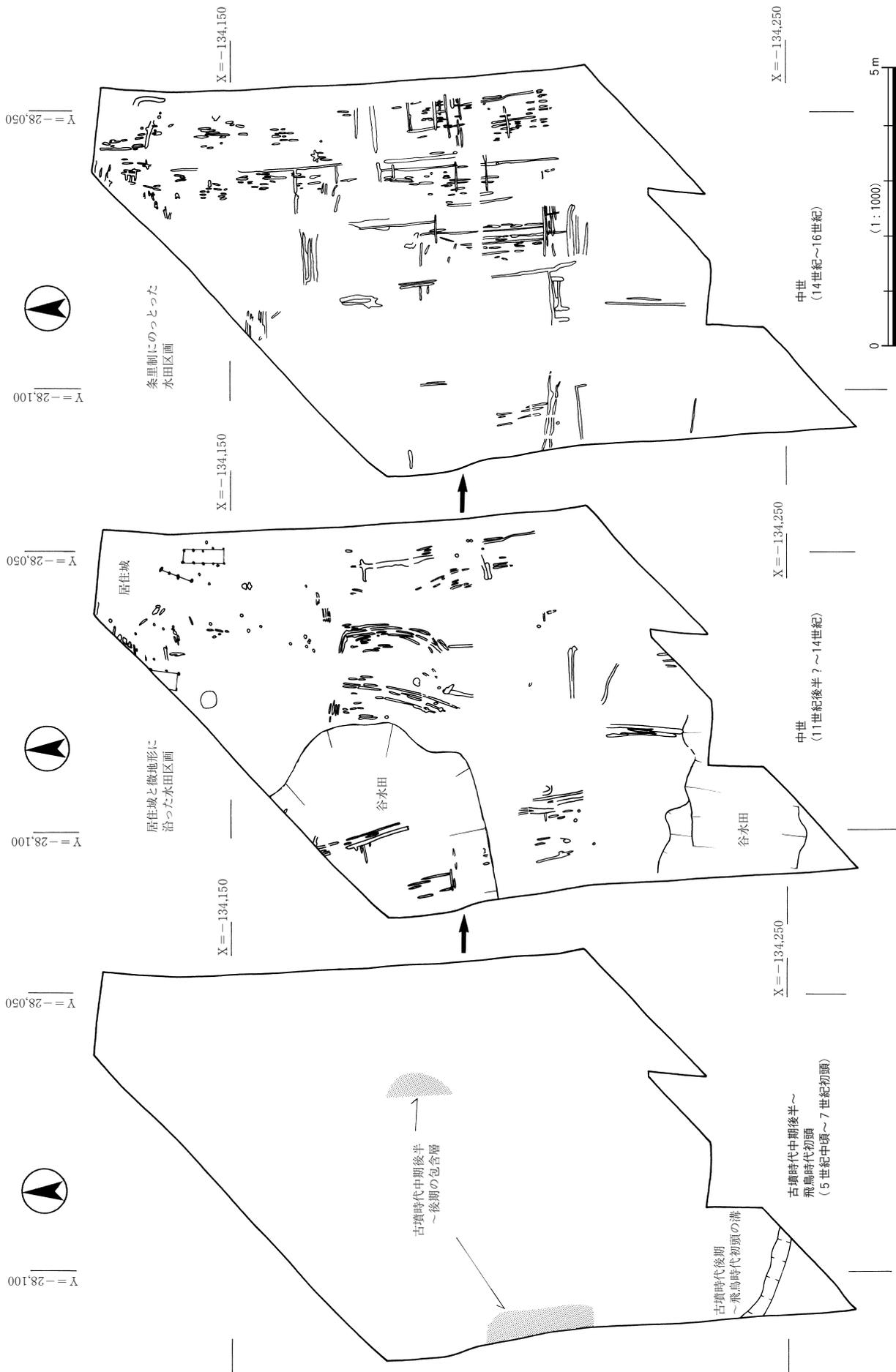


図33 有池遺跡02-1 遺構変遷図

られる。5層は大形の木や木器を含むことから、かなりの水量が一時に流れたものと類推でき、また、土器は少量であることから、古墳時代後期から飛鳥時代初頭の居住域からは一定の距離があるものと類推できる。

5層により埋積した古墳時代後期から飛鳥時代初頭の溝はその後復旧されることは無く、4層の腐植土層の堆積からは沼状によんだ状態であったと考えられる。その上層は谷筋の幅が増し3層下位にはブロック土がみられることから、この時点で谷筋に平坦面を造成し床土としてブロック土を入れたとみられる。それが12世紀後半～13世紀中頃のことであり、これ以降水田として継続的に利用された。

以上、中世についてまとめると、居住のはじまりは11世紀後半にさかのぼる可能性をもつものの、本格的な水田開発は12世紀以降であり、これとともに居住域は盛期をむかえ、13世紀まで谷地形には谷水田が、平坦面には東西南北方向の区画をもつ水田がひろがる景観が復元できる。その後14世紀、居住域の廃絶以降16世紀前後までに谷水田は埋まり、ほぼ平坦な棚田がひろがる景観へと変遷し、これ以降現在に至るまでこの景観は大きく変化することなく継続したと考えられる。また、1～2層とした中近世耕土より北宋銭を中心とした銭貨が多く出土しており、これは水田が居住域に近接するためかと考えられる。

隣接する調査区との関連性から再度、当調査区の状況をとらえたい。有池遺跡02-1は大部分が生産域に当たっており、微高地上に展開した居住域の面積は有池遺跡03-1・03-2のそれと比べると、最も面積が小さく、遺構密度も低い。その一方で、当調査区で出土した11世紀後半にさかのぼる遺物は、有池遺跡における中世集落の初現期を示すととらえられる遺物である。加えて当調査区に東接する有池遺跡03-1調査区においては屋敷地が存続する14世紀の段階に、当調査区では居住域が廃絶し、全面的に水田が展開する。これらの状況をまとめると、次のような展開をとらえることができる。

11世紀後半を端緒とする時期に、有池遺跡02-1調査区に達していたかつての谷地形を基点として、中世段階の水田耕作が始まったと考えられる。ただ12世紀前半までの水田造成は小規模かつ部分的なもので、水田耕作にかかわった人たちの集落規模も小規模かつ断続的なものだった可能性が高い。12世紀後半～13世紀中頃をすぎると水田造成は大規模かつ継続的になり、当初居住域だった部分も含めて生産域が展開することとなる。それにともない、居住域も有池遺跡03-1および03-2へと移動しつつ、大規模化したと考えられる。水田造成と居住域の展開には密接な関連性がとらえられる。

またそれら隣接する調査区で検出された居住域との関連で見ると、当調査区で検出した梵字瓦は大きな意味をもつ。この瓦の存在により、近接する場所に何らかの宗教施設があったことは明らかである。当調査区ではそれに対応する遺構は検出されなかったが、有池遺跡03-1-1調査区で検出した屋敷地では、その周りを囲う大規模な溝から平瓦が出土していることから、両者の関連性がとらえられる。この屋敷地については次の章で詳述するが、2つの方形区画が隣接する形状で、それぞれの区画に複数の掘立柱建物が配置されていたと考えられる。区画溝に平瓦が含まれていたことから、掘立柱建物の中には瓦葺の建物が含まれていたと考えられる。当調査区で出土した梵字瓦がこの屋敷地から排出されたものと考えれば、そこに持仏堂のような施設が存在した可能性を示唆することとなる。

中世以前については、先述した大溝1下層の溝のほか、古墳時代中期後半～後期の包含層を、調査地西辺中央部と調査地のほぼ中央部の2ヵ所において狭い範囲で確認した。2ヵ所とも段落ちする水田の段落ち部分の窪みに堆積しており、浅い谷部に埋積したものが後世の水田造成による削平を免れたものと考えられる。遺物は古墳時代後期後半のものが主体であり、飛鳥時代初頭の遺物は含まないものの、

ほぼ大溝 1 下層の溝に対応するものと考えられ、この時期の居住域のひろがりを考えるうえで重要である。

また、石器は原位置をとどめるものは無く、1～2層からの出土が多いものの、縄文時代の可能性をもつ石匙から弥生時代とみられる石鏃まで20点が出土しており、うち10点が石鏃である。このことは、出土遺物がなく年代は不明であるが多数検出した風倒木痕とともに、調査地周辺の土地利用を推定するにあたり示唆的である。

註

1. 永井久美男1996 『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会

2. 交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団2003 『鍋塚古墳2000-1次調査 有池遺跡2000-1次調査』

表1 有池遺跡02-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考	
						口径	器高	底径	最大径		
21	1	176	1A	2層	土師器皿	[9.4]	1.0	—	—		
	2	164	1A	2層	土師器皿	[10.8]	1.8	—	—		
	3	168	1A	2層	土師器皿	[7.4]	1.4	—	—		
	4	169	1A	2層	土師器皿	[7.9]	1.2	—	—		
	5	166	1A	2層	土師器皿	[7.8]	1.1	—	—		
	6	200	1A	2層	瓦器椀	/	/	/	—	大和型、格子状暗文	
	7	163	1A	2層	瓦器椀	[13.8]	/	/	—	大和型	
	8	174	1A	2層	瓦器椀	/	/	5.2	—	連結輪状暗文	
	9	187	1A	2層	瓦器椀	[13.7]	/	/	—	和泉型	
	10	165	1A	2層	瓦器椀	[13.8]	/	/	—	楠葉型	
	11	172	1A	2層	瓦器椀	/	/	[6.0]	—		
	12	175	1A	2層	瓦器椀	/	/	[5.0]	—		
	13	173	1A	2層	瓦器椀	/	/	[4.8]	—		
	14	167	1A	2層	瓦器椀	[9.7]	/	/	—	楠葉型	
	15	186	1A	2層	土師質羽釜	/	/	/	/		
	16	181	1A	2層	瓦質浅鉢	/	/	/	/		
	17	184	1A	2層	瓦質鉢	/	/	/	/		
	18	235	1A	2層	瓦質甕	[27.2]	/	/	/		
	19	185	1A	2層	須恵器鉢	/	/	/	/	東播系	
	20	179	1A	2層	須恵器鉢	/	/	/	/	東播系	
	21	178	1A	2層	須恵器鉢	/	/	/	/	東播系	
	22	180	1A	2層	須恵器鉢	/	/	/	/	東播系	
	23	183	1A	2層	白磁椀	[15.8]	/	/	/		
	24	211	1A	2層	青磁椀	[15.8]	/	/	—	縞蓮弁文	
	25	177	1A	2層	青磁椀	/	/	5.3	—		
	26	170	1A	2層	古瀬戸平椀	[15.8]	/	/	—		
	27	171	1A	2層	古瀬戸平椀	[14.8]	/	/	—		
	28	207	1A	2層	陶器挿鉢	/	/	/	—		
	29	182	1A	2層	陶器挿鉢	/	/	/	—		
22	30	126	1A	2~3層	土師器皿	[9.0]	/	—	—		
	31	127	1A	2~3層	土師器皿	[12.1]	1.3	—	[13.5]		
	32	233	1A	2~3層	土師器皿	[7.7]	1.1	—	—		
	33	232	1A	2~3層	土師器皿	[8.0]	1.4	—	—		
	34	132	1A	2~3層	土師器皿	[8.4]	/	—	—		
	35	120	1A	2~3層	土師器皿	[8.2]	/	—	—		
	36	122	1A	2~3層	土師器皿	[8.2]	1.4	—	—		
	37	123	1A	2~3層	土師器皿	[7.8]	1.1	—	—		
	38	119	1A	2~3層	土師器皿	[7.8]	1.3	—	—		
	39	125	1A	2~3層	土師器皿	[7.2]	1.3	—	—		
	40	129	1A	2~3層	土師器皿	[7.6]	/	—	—		
	41	128	1A	2~3層	土師器皿	[11.0]	2.0	—	—		
	42	121	1A	2~3層	土師器皿	[11.6]	1.7	—	—		
	43	124	1A	2~3層	土師器皿	[11.0]	/	—	—		
	44	130	1A	2~3層	土師器皿	[11.0]	/	—	—		
	45	131	1A	2~3層	土師器皿	[11.0]	/	—	—		
	46	142	1A	2~3層	瓦器椀	/	/	[5.0]	—		
	47	139	1A	2~3層	瓦器椀	/	/	[4.6]	—		
	48	133	1A	2~3層	瓦器椀	[14.0]	/	/	—	楠葉型	
	49	231	1A	2~3層	瓦器椀	[13.2]	4.7	[4.2]	—	楠葉型	
	50	135	1A	2~3層	瓦器椀	[13.6]	/	/	—	楠葉型	
	51	137	1A	2~3層	瓦器椀	[13.4]	/	/	—	楠葉型	
	52	138	1A	2~3層	瓦器椀	[14.0]	/	/	—	楠葉型	
	53	136	1A	2~3層	瓦器椀	[13.0]	/	/	—	楠葉型	
	54	134	1A	2~3層	瓦器椀	[11.0]	/	/	—	楠葉型	
	55	140	1A	2~3層	瓦器椀	/	/	[4.6]	—	連続長楕円状暗文	
	56	141	1A	2~3層	瓦器椀	/	/	[4.8]	—	連続長楕円状暗文	
	57	147	1A	2~3層	瓦質羽釜	/	/	/	/		
	58	149	1A	2~3層	土師質羽釜	/	/	/	/		
	59	148	1A	2~3層	瓦質羽釜	/	/	/	/		
	60	204	1A	2~3層	須恵器鉢	/	/	/	/	東播系	
	61	146	1A	2~3層	白磁椀	/	/	/	—		
	62	145	1A	2~3層	白磁椀	/	/	/	/		
	63	143	1A	2~3層	青磁椀	/	/	/	—	龍泉窯系	
	64	144	1A	2~3層	青磁椀	/	/	/	—	龍泉窯系	
	65	238	1A	2~3層	青磁椀	/	/	[4.6]	—	龍泉窯系	
	66	236	1A	2~3層	信楽焼壺	[14.6]	/	/	/		
	67	237	1A	2~3層	瀬戸おろし皿?	[15.3]	/	/	[16.6]		
	23	68	196	1A	3層	土師器皿	[7.8]	1.1	—	—	
		69	195	1A	3層	土師器皿	[8.8]	1.3	—	—	
		70	193	1A	3層	土師器皿	[8.8]	1.9	—	—	

単位:cm、〔 〕:復元径、/ :測定不能、— :計測項目なし

表2 有池遺跡02-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
23	71	194	1A	3層	土師器皿	[10.0]	1.9	—	—	
	72	192	1A	3層	土師器皿	[14.0]	2.6	—	—	
	73	198	1A	3層	瓦器皿	[7.9]	1.6	—	—	連続長楕円状暗文
	74	190	1A	3層	瓦器碗	[14.8]	/	/	—	大和型
	75	191	1A	3層	瓦器碗	[14.9]	/	/	—	大和型
	76	188	1A	3層	瓦器碗	[13.9]	/	/	—	大和型
	77	189	1A	3層	瓦器碗	[13.8]	/	/	—	楠葉型
	78	199	1A	3層	瓦器碗	/	/	[4.7]	—	
	79	210	1A	3層	白磁皿	[10.5]	2.2	—	—	
	80	209	1A	3層	青磁皿	[10.8]	2.3	—	—	同安窯系
	81	208	1A	3層	青磁碗	/	/	[4.4]	—	同安窯系
	82	212	1A	3層	須恵器鉢	[25.8]	/	/	[27.2]	東播系
	83	213	1A	4層	須恵器杯蓋	[17.0]	/	—	—	
	84	214	1A	4層	須恵器杯身	[13.0]	/	—	15.2	
	85	217	1A	4層	須恵器杯身	[14.0]	/	—	16.0	
	86	216	1A	4層	須恵器杯身	/	/	—	16.0	
	87	215	1A	4層	須恵器横瓶	/	/	—	28.7	
24	88	100	1B	2層	土師器皿	[7.8]	0.9	—	—	
	89	102	1B	2層	土師器皿	[10.7]	/	—	—	
	90	105	1B	2層	瓦器碗	[13.0]	/	/	—	楠葉型
	91	108	1B	2層	白磁碗	[16.0]	/	/	—	
	92	107	1B	2層	青磁碗	[14.0]	/	/	—	龍泉窯系、縹蓮弁文
	93	103	1B	2面	土師器皿	[9.0]	1.2	—	[9.9]	
	94	101	1B	2面	土師器皿	[12.8]	2.6	—	—	
	95	110	1B	2~3層	土師器皿	[9.2]	1.3	—	—	
	96	116	1B	2~3層	土師器台付皿	/	/	/	—	
	97	1	1B	2~3層	瓦質土筒	—	21.5	—	[12.8]	
	98	118	1B	2~3層	瓦質土筒	—	/	—	[9.8]	
	99	115	1B	2~3層	瓦器碗	/	/	[5.0]	—	連結輪状暗文
	100	117	1B	2~3層	須恵器鉢	/	/	/	/	東播系
	101	60	1B	2~3層	瓦質搗鉢	/	/	[9.8]	—	
	102	114	1B	2~3層	青磁皿	[15.3]	/	/	—	
	103	111	1B	3層	土師器皿	[8.2]	1.4	—	—	
	104	93	1B	3層	土師器皿	[9.0]	1.3	—	—	
	105	95	1B	3層	土師器皿	[11.0]	1.8	—	—	
	106	112	1B	3層	土師器皿	[10.5]	/	—	—	
	107	94	1B	3層	土師器皿	[11.4]	1.6	—	—	
	108	25	1B	3層	瓦器碗	/	/	5.4	—	連結輪状暗文
	109	96	1B	3層	瓦器碗	/	/	[5.0]	—	
	110	97	1B	3層	瓦器碗	/	/	[5.0]	—	
	111	98	1B	3層	瓦器碗	/	/	[4.6]	—	
	112	113	1B	3層	白磁碗	[15.3]	/	/	[16.4]	
	113	43	1B	3層	土師器皿	[6.8]	1.2	—	—	
	114	36	1B	3層	土師器皿	[8.7]	1.4	—	—	
	115	39	1B	3層	土師器皿	[14.8]	/	—	—	
116	64	1B	4層	須恵器甕	[25.7]	/	/	/		
117	106	1B南端部	2面	瓦器皿	[10.6]	/	—	—		
118	49	1B南端部	4層	土師器皿	[14.3]	/	—	—		
119	32	1B南端部	4層	瓦器碗	/	/	/	—		
120	56	1B南端部	4層	須恵器高杯	/	/	/	—		
25	121	70	1A	大溝1 1層	土師器皿	[7.9]	1.3	—	—	
	122	67	1A	大溝1 1層	瓦質羽釜	/	/	/	/	
	123	73	1A	大溝1 1層	瓦器碗	/	/	[5.2]	—	
	124	6	1A	大溝1 1層	瓦器碗	[11.8]	3.6	—	—	楠葉型
	125	71	1A	大溝1 1層	瓦器碗	[8.8]	/	/	—	楠葉型
	126	72	1A	大溝1 1層	瓦器碗	[9.8]	/	/	—	楠葉型
	127	69	1A	大溝1 1層	瓦質鍋	[25.5]	/	/	[26.1]	
	128	68	1A	大溝1 1層	須恵器鉢	[28.4]	/	/	[30.4]	東播系
	129	66	1A	大溝1 1層	信楽焼鉢	/	/	/	/	
	130	74	1A	大溝1 1層	青磁碗	/	/	/	—	
	131	77	1A	大溝1 1層	青磁碗	/	/	/	—	同安窯系
	132	75	1A	大溝1 1層	白磁碗	/	/	[3.2]	—	
	133	76	1A	大溝1 1層	青磁碗	/	/	[5.0]	—	
	134	160	1A	大溝1 2層	土師器皿	[7.4]	1.1	—	—	
	135	80	1A	大溝1 2層	瓦器碗	/	/	[5.6]	—	
	136	155	1A	大溝1 2層	瓦器碗	[12.8]	/	/	—	楠葉型
	137	79	1A	大溝1 2層	瓦質三足釜	/	/	/	/	
	138	158	1A	大溝1 3層	土師器皿	[7.8]	1.2	—	—	
	139	47	1A	大溝1 3層	土師器皿	[7.9]	0.8	—	—	
	140	159	1A	大溝1 3層	土師器皿	[7.9]	1.1	—	—	
	141	40	1A	大溝1 3層	土師器皿	[9.0]	1.6	—	—	

表3 有池遺跡02-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
	142	157	1A	大溝1 3層	土師器皿	[9.8]	/	-	-	
	143	154	1A	大溝1 3層	瓦器碗	[14.7]	/	/	-	
	144	151	1A	大溝1 3層	瓦器碗	[14.4]	/	/	-	大和型
	145	150	1A	大溝1 3層	瓦器碗	[14.0]	/	/	-	楠葉型
	146	152	1A	大溝1 3層	瓦器碗	[14.0]	/	/	-	大和型
	147	156	1A	大溝1 3層	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楠葉型
	148	153	1A	大溝1 3層	瓦器碗	[14.6]	/	/	-	楠葉型
	149	161	1A	大溝1 3層	瓦器碗	/	/	[5.0]	-	ジグザグ状暗文
	150	13	1A	大溝1 3層	瓦器碗	/	/	[4.6]	-	連続長楕円状暗文
	151	245	1A	大溝1 4層	須恵器甕	/	/	/	/	
	152	59	1A	大溝1 5層	土師器甕	[23.7]	/	/	/	
	26	153	48	1A	ピット7(建物1)	土師器皿	[9.8]	/	-	-
154		2	1B	ピット33(建物2)	土師器皿	[9.4]	1.6	-	-	
155		83	1B	ピット58	土師器皿	[7.6]	/	-	-	
156		35	1B	ピット59	土師器皿	[7.8]	/	-	-	
157		51	1B	土坑34	土師器皿	[8.8]	/	-	-	
158		7	1A	土坑16	瓦器碗	[13.4]	/	/	-	楠葉型
159		86	1B	土坑42	瓦器碗	[14.0]	/	/	-	大和型
160		53	1B	土坑45	土師器皿	[13.8]	/	-	-	
161		10	1B	土坑45	瓦器碗	[11.8]	/	/	-	楠葉型
162		88	1B	土坑45	青磁碗	[16.0]	/	/	-	龍泉窯系、片彫蓮弁文
27	163	34	1A	土坑9	土師器皿	[8.4]	1.3	-	-	
	164	50	1A	土坑9	土師器皿	[7.8]	0.9	-	-	
	165	44	1A	土坑9	土師器皿	[7.8]	1.0	-	-	
	166	45	1A	土坑9	土師器皿	[13.8]	/	-	-	
	167	24	1A	土坑9	瓦器皿	[8.8]	1.4	-	-	
	168	22	1A	土坑9	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楠葉型
	169	23	1A	土坑9	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楠葉型
	170	16	1A	土坑9	瓦器碗	[13.6]	/	/	-	楠葉型
	171	18	1A	土坑9	瓦器碗	[13.9]	/	/	-	楠葉型
	172	19	1A	土坑9	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楠葉型
	173	21	1A	土坑9	瓦器碗	[14.1]	/	/	-	楠葉型
	174	15	1A	土坑9	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楠葉型
	175	20	1A	土坑9	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楠葉型
	176	14	1A	土坑9	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楠葉型
	177	17	1A	土坑9	瓦器碗	[13.0]	/	/	-	楠葉型
	178	226	1A	土坑9	瓦器碗	13.0	4.5	4.6	-	楠葉型、連続長楕円状暗文
	179	225	1A	土坑9	瓦器碗	13.7	4.6	4.7	-	楠葉型、連続長楕円状暗文
	180	227	1A	土坑9	瓦器碗	13.6	4.7	4.3	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	181	30	1A	土坑9	瓦器碗	/	/	[4.6]	-	ジグザグ状暗文
	28	182	55	1A	土坑9	瓦器碗	/	/	[4.6]	-
183		31	1A	土坑9	瓦器碗	/	/	[4.0]	-	
184		27	1A	土坑9	瓦器碗	/	/	[5.8]	-	
185		61	1A	土坑9	瓦質羽釜	/	/	/	/	
186		58	1A	土坑9	瓦質羽釜	/	/	/	/	
187		63	1A	土坑9	丸瓦	-	/	-	-	
188		234	1A	溝6	土師器皿	[8.2]	2.0	-	-	
189		219	1A	溝6	須恵器壺	/	/	[10.3]	11.6	
190		228	1A	溝6	瓦器碗	[15.0]	5.0	[5.0]	-	楠葉型、連続輪状暗文
191		241	1A	溝6	軒丸瓦	-	/	-	-	梵字文
192		4	1A	溝32	土師器皿	[7.5]	1.3	-	-	
193		5	1A	溝32	土師器皿	[8.8]	1.3	-	-	
194		52	1A	溝32	土師器皿	[13.8]	2.0	-	-	
195		8	1A	溝32	瓦器碗	[13.6]	/	/	-	楠葉型
196		9	1A	溝32	瓦器碗	[14.8]	/	/	-	楠葉型
197		229	1A	溝32	瓦器碗	13.6	4.8	3.6	-	楠葉型
198		41	1B	溝73	土師器皿	[9.9]	/	-	[11.3]	
199		230	1B	溝74	瓦器碗	[13.9]	/	/	-	楠葉型
200		12	1B	溝79	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楠葉型
201		90	1B	溝80	須恵器甕	[26.7]	/	/	[28.2]	
202	89	1B	溝80	白磁碗	/	/	[7.4]	-		
203	91	1B	溝81	須恵器鉢	/	/	/	/	東播系	
204	82	1B	溝81	土師器皿	[11.0]	/	-	-		
205	26	1B	溝88	瓦器碗	[14.8]	/	/	-	楠葉型	
206	84	1B	溝90	瓦器碗	[12.8]	/	/	-	楠葉型	
207	46	1B	溝91	土師器皿	[9.8]	1.2	-	-		
208	11	1B	溝94	瓦器碗	[10.8]	/	/	-	楠葉型	
209	85	1B	溝102	瓦器碗	/	/	[3.4]	-		
210	81	1B	溝103	土師器皿	[8.0]	1.6	-	-		
211	244	1B	溝104	須恵器甕	/	/	/	/	刺突文	
212	218	1B	溝104	須恵器甕	[29.7]	/	/	/		

表4 有池遺跡02-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
32	213	247	1A	2~3層	土人形	残存高:2.95、幅3.9				縄文早期後半、高山寺式以降石山寺式まで、近畿には少ない、絨織質を混ざる
	214	246	1A	1層-1	縄文土器	/	/	/	/	

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不能、-:計測項目なし

表5 有池遺跡02-1 石器・石製品観察表

図番号	挿図番号	調査区	遺構名	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	自然	折損	備考
29	S1	1B	2面	五角形石鏃	2.6	1.4	0.5	1.2	無	無	
	S2	1B	2面	凹基式石鏃	2.0	1.4	0.4	0.6	無	無	
	S3	1A	2~3面	凹基式石鏃	(2.2)	1.5	0.4	0.8	無	有	
	S4	1A	2~3面	凹基式石鏃	2.1	1.3	0.4	0.6	無	無	
	S5	1A	2層	凹基式石鏃	(2.5)	(1.4)	0.4	1.5	無	有	
	S6	1A	3層	有茎式石鏃	4.2	2.6	0.7	4.4	無	無	
	S7	1A	2面	有茎式石鏃	(4.3)	2.5	0.6	4.6	無	有	
	S8	1A	2面	平基式石鏃	3.0	1.9	0.6	2.8	無	無	
	S9	1A	1-1層	石鏃	(2.2)	1.7	0.3	0.6	無	有	
	S10	1A	溝7	凹基式石鏃	(2.0)	2.4	0.5	1.8	無	有	
	S11	1A	1-1層	石鏃?	2.3	2.1	0.6	2.9	無	無	未製品?
	S12	1A	2~3層	石匙	3.2	6.2	1.0	14.2	有	無	
	S13	1A	1面	石錐?	(4.2)	1.7	0.6	3.9	無	有	
	S14	1B	2面	石核 スクレイパー	(4.6)	2.7	1.0	14.3	無	有	
	S15	1A	2~3面	楔形石器	2.2	2.4	0.7	3.0	無	無	
30	S16	1B	4層	楔形石器	2.2	(2.6)	0.7	3.2	無	有	
	S17	1A	2面	楔形石器	2.5	2.7	0.8	4.4	無	無	
	S18	1B	溝33	楔形石器	(2.3)	2.6	0.6	3.3	有	有	
	S19	1A	河川1 5層	剥片	6.9	2.0	1.3	11.8	無	無	打面は潰れている
	S20	1A	2~3層	石核?	(5.5)	(4.7)	1.3	27.9	有	有	両面加工石器?
32	S21	1A	溝28	基石?	2.25	-	0.5	3.8			

単位:cm、g、():残存、-:計測項目なし

表6 有池遺跡02-1 木器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種別	最大径(cm)	最大長(cm)	最大幅(cm)	高さ(cm)	最大厚(cm)	備考
31	W1	W1	1A	大溝1(5層)	容器	-	/	(33.5)	-	4.5	内側にえぐれている
	W2	W2	1A	大溝1(5層)	容器	-	/	(41.6)	-	/	えぐれている
	W3	W3	1A	大溝1(5層)	加工木	-	16.0	16.9	-	5.1	表面に少々剥離あり
	W4	W4	1A	大溝1(5層)	棒状の製品	-	(57.7)	3.8	-	3.8	角材?4面取りは認められるが顕著な加工痕は他に認められない
	W5	W5	1A	大溝1(2~3層)	杭	-	(40.3)	3.4	-	3.9	面取りあり

単位:cm、():残存、/:測定不能、-:計測項目なし

表7 有池遺跡02-1 金属器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種別	最大径	長さ	幅	高さ	厚さ	重さ	備考
32	M1	242	1A	6溝	キセル	(10)	(74)	-	-	0.8	4.5	表面に剥離部分あり、接合線やや凸状

単位:mm・g、():残存、/:計測不能、-:計測項目なし

表8 有池遺跡02-1 銭貨観察表

図番号	報告 番号	調査区	遺構名(層位)	種類	直径(mm)	孔(辺) (mm)	重さ(g)	直径/質 量	備考
32	O1	1A	1層	開慶通寶	22	7	1.5	14.7	
	O2	1A	1面	祥符元寶	23.5	6	3.6	/	O2とO3は背面で合わさっている
	O3	1A	1面	元祐通寶	22	6			O2とO3は背面で合わさっている
	O4	1A	1面	天禧通寶	24	6.5	1.3	18.5	
	O5	1A	1面	熙寧元寶	23	7	2.3	10.0	
	O6	1A	1面	元豊通寶	23.5	7	4.5	/	2枚合わさっている
	O7	1A	1面溝6	寛永通寶	23	6.5	2.1	11.0	
	O8	1A	1面溝11	寛永通寶	24	6.5	2.7	8.9	
	O9	1B	2層	元豊通寶	23	6	2.5	9.2	
	O10	1A	2面	元豊通寶	24.5	7	2.6	9.5	
	O11	1A	2面	天聖元寶	24	6.5	2.6	9.2	
	O12	1A	大溝1 1層	咸淳元寶	24	7	2.9	8.3	

直径/質量は小数点第二位を四捨五入、単位:mm・g、():残存、/:計測不能、-:計測項目なし

第5章 有池遺跡03-1の調査成果

第1節 基本層序

1. 概要

本調査区は東から西へと緩やかに下降する傾斜地で、一見すると水田が整然と並ぶ平坦な地形が広がっている印象を受ける。ただ調査区より南側の地形に目を転ずると、南東から北西に向けて舌状に延びる微高地が見て取れる。当遺跡で検出した中世集落の居住域が展開する微高地も、生駒山系から派生して、山麓に向けて舌状に延びる末端の尾根筋の一つと言えるだろう。また微高地に接するように、谷地形や河川の旧流路に起因するとみられる湿地が検出された。旧地形では、おおむね東から西に向けて舌状に延びる微高地と、それに沿うように貫入する谷地形が櫛目状に連なっていたことがわかる(図34)。そして、中世以降の水田開発により、微高地の頂部は水平に削平され、谷は徐々にかさあげされて、現在のような比高差の少ない地形に移行したものとみられる。

微高地部分では主に、12世紀後半～14世紀を中心とする時期の居住域が形成され、その廃絶後は現在まで生産域として、整地と耕作が繰り返されてきたことがわかる。基本層序は以下の通りである。

- I層 中世～近世の耕土ないし整地層
- II層 中世後半の耕土ないし整地層
- III層 中世の遺物包含層(黄褐色粘質土・12～13世紀の遺物を主体とする)
- IV層 中世の遺物包含層(灰黄褐色粘質土・14世紀前後の遺物を主体とする)
- 基盤層(地山) 黄褐色砂礫～灰褐色砂層およびその下層の黄褐色シルト～粘土

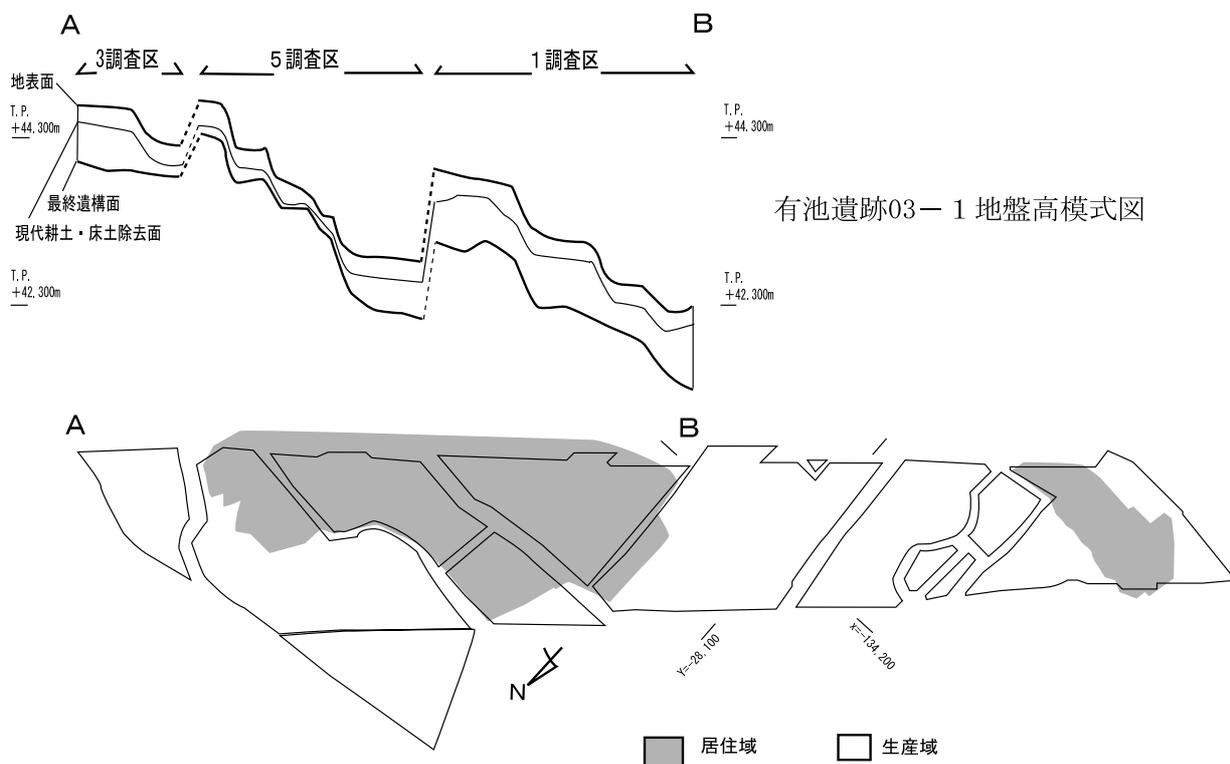


図34 有池遺跡03-1 集落景観と微地形概念図

上記の層序は有池遺跡02-1・03-1・03-2全体を見とおして設定した概念的なものである。大きくはこの傾向のなかで土層の累積過程を理解できるが、調査区毎にみるとそれぞれの地形や、これまでの土地利用の経過に伴い若干の差異が生じている。概して中世集落の居住域を伴う微高地上では、Ⅲ・Ⅳ層の堆積を部分的にでもとらえることができたが、Ⅱ層の堆積は認めなかった。一方、中世集落の生産域とみられる部分ではⅡ層の分布をとらえたが、Ⅲ・Ⅳ層は認めなかった。つまり有池遺跡03-1の調査域においては、Ⅱ層とⅢ層以下の層位的な前後関係を、同一の土層観察用断面上でとらえることはできなかった。両者の出土遺物を見ても多少の時期幅はあるものの、顕著な時期差はないのでむしろ同時並行で形成されたものとみるべきかもしれない。

前述したようにⅢ・Ⅳ層は基本的に、居住域を伴う微高地上で形成されたと見られるが、面積的にはⅠ層を除去した段階で最終遺構面を検出した部分の方が大きい。これは耕作地の造成に伴う微高地頂部の削平が、大規模かつ広範囲に及んだためとみられる。1調査区で顕著にみられた中世後半～近世にかけての整地層に、基盤層（地山）とみられる砂質土と、中世遺物包含層に似た粘質土がブロック状に混ざっていたのはその証左となろう。

一方、中世より生産域として利用されてきた湿地帯は、3・4・6調査区と2調査区の西半部でみられた。4調査区と5調査区を分ける水路、および3調査区と4調査区を分ける水路のカーブとその延長ラインは、大きく見ると微高地と湿地帯の境界に位置する。3・4調査区の湿地帯は、免除川の旧流路ないしその後背湿地に対応すると考えられる。2調査区西半部で検出した生産域は、大きく見ると有池遺跡02-1で検出した生産域と一連の旧谷地形に含まれるものと言えるかもしれない。

次に調査区ごとの基本層序を述べる。3調査区に関しては、トレンチ掘削による土層堆積状況の把握が主たる調査成果となるので、基本層序に加えてそれについても本章で述べる。土層断面図は図41～61を、土層観察用断面の位置は図40を参照されたい。

2. 各調査区の基本層序

1 調査区（図41～45）

当調査区にあたる部分では当初、長方形の水田区画3段が連なっており、それらの区画を全体に三角形に切り取る形で調査区を設定した。バックホーにて現代の盛土や耕土を除去したところ、それらの前身となるやや異なった形状の水田区画が現れた。それを見ると、もとの水田区画は北東から南西方向に調査区をかすめる舌状の地形の高まりを大きくは変えないように、雛壇状に造成されていたことがわかった。また大きく見ると、微高地の上に造られた水田区画と、その下段の水田区画とで層序の異なる様相が見て取れた（図35）。以下に、各地点での基本層序をまとめる。

・高まり上の水田

上段 現代耕土除去面より下では、おおむね耕土・床土と整地層の累積がみられた。これをひとくくりにして2層としたが、地山の砂質土と、中世包含層がブロック状に多く混入する整地層を基準にして、さらにそれを細分した。機械掘削終了面から地山ブロックの混入が顕著な整地層までを2-1層、その下層で基盤層までの層を2-2層とする。2層には地山の土や中世包含層が多量に含まれていることから、広範囲な微高地の削平を伴う、大規模な地形改変によって生じたことが推測される。遺物の含有状況は2-1層・2-2層のいずれも、中世土器の細片を主として近世陶磁器が若干含まれる。また近世陶磁器の含有量に注目すると、前者が後者をしのぐ状況が認められた。2層の下で黄褐色粘質土の中世遺物包含層（3層）を部分的に認め

たが、旧地形で地盤がやや高かったとみられる調査区南東寄りの部分では、水田造成の際に削平されたようで、ほとんど見られなかった。

以上をまとめると上から、2-1層→2-2層→3層→基盤層（地山）の順で土層の堆積を認めた。

下段 上段で認めた2-1層は無く、上から2-2層→基盤層（地山）の順で土層の堆積を認めた。

・高まり裾の水田

現代耕土を除去した段階で部分的に、地山ブロックを多く含む整地層を認めた（0層）。この層には完形品も含む多量の中世土器と、少量の近世陶磁器が含まれていた。0層より下では、最終遺構面までの間に中世後半から近世までの時期の遺物を含む、耕土・床土・整地層の累積層を認めた（1層）。これは2層とは土質が異なり、中～粗砂の含有率が高いため粘性は低いが、全体に攪拌は進んでいる。整地層や耕起痕の下部で、部分的にラミナが認められることから、何度か水田面に洪水砂層の被覆を受けたことが考えられる。しかしその都度、砂層を鋤き込んで土壌化し、あるいは部分的に積み上げる作業を繰り返す過程で、徐々に水田面が高くなるとともに、1層が形成されていったと考える。換言すれば、微高地上の水田区画と下段の水田区画とは、水田土壌の供給要因が異なっていた可能性もある。1 G-1 h・2 hでは調査

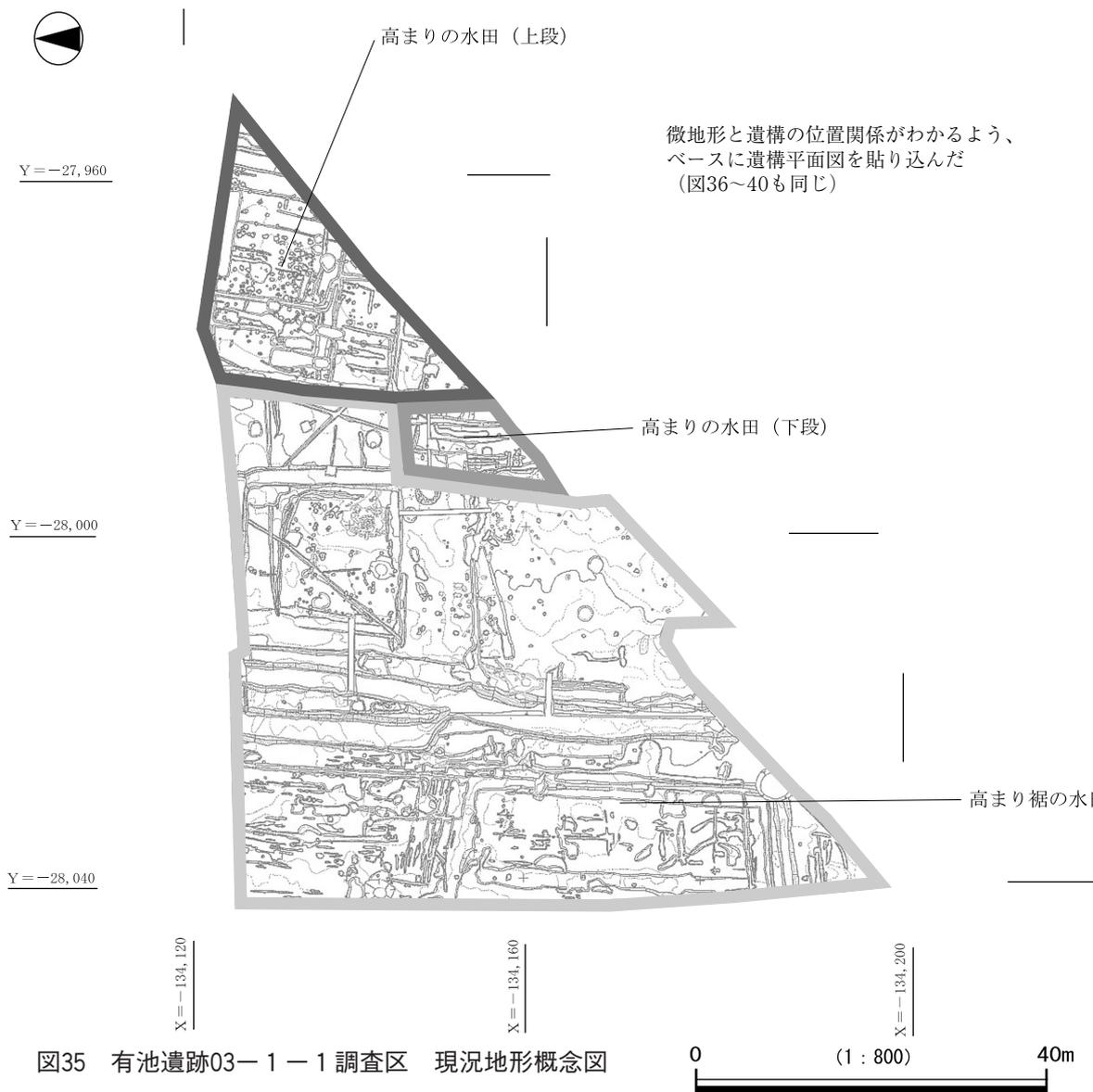


図35 有池遺跡03-1-1 調査区 現況地形概念図

区際に、南北方向に延びる島畑の南端が重なっており、土層観察用断面でもそれを確認することができた。この島畑は、洪水砂層を積み上げたものを基盤にしている。島畑の耕土・基盤層を含む、最終遺構面までの層を、それより上の層と区別することで、1層を細分した。つまり島畑の耕土から最終遺構面までの層を1-2層、それより上の層を1-1層とした。1-1層では完形品も含む多量の中世土器と、少量の近世陶磁器が出土したのに対して、1-2層では中世土器のみが出土した。まとめると、上から0層→1-1層→1-2層→基盤層（地山）の順で土層の堆積を認めた。

高まり上の水田・下段の2層が途切れる部分では、2層に乗り上げるように1-1層が堆積する状況を見ることができた。このことから1層が2層より後に堆積したことは明らかである。2層と1-2層の前後関係は土層断面上で把握することはできなかったが、1-2層とした島畑の耕土およびその基盤層には中世の土器しか含まれていなかったことからそれは、近世土器を含む2層よりも古い時期に形成されたものと見ることができる。

1 調査区全体の土層の堆積順序を古い層から示すと、3層→1-2層→2-2層→2-1層→1-1層→0層の順となる。前述したように中世の遺物包含層は、微高地上で部分的に検出したにとどまった。それ以外の部分では、耕地造成の際に包含層が削平されたと考える。したがって1調査区内で見限り、最下段の水田域の方が微高地上の水田域より大規模かつ広範囲に削平を受けていると言える。

2 調査区 (図46・47)

調査前は長方形の水田区画が、東から西に高さを減じながら4段連なっていた。現代の耕土と床土を除去したところ、現況とそれほど大差無い水田区画が現れた。現代耕作土・床土を除去すると、中～近

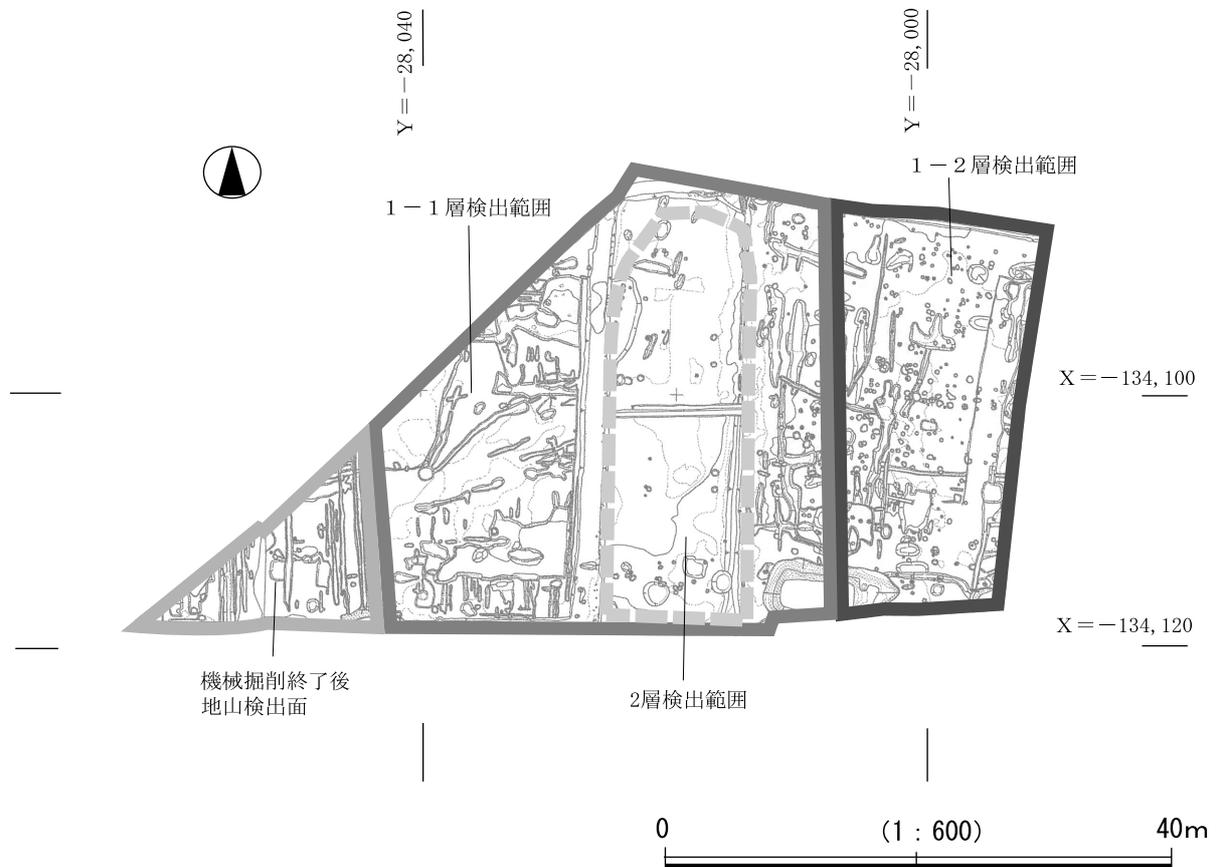


図36 有池遺跡03-1-2調査区 基本層序分布概念図

世の耕土・床土・整地層が10～60cmの厚さで堆積していたため、これを1層とした。中世の包含層はみられず、この1層を除去した段階でおおむね最終遺構面を検出した。ただ2調査区の西端を占める最下段の水田部分では現代の耕土・床土を除去した段階で、最終遺構面を検出した。1層は2調査区の中央部分で最も厚く堆積しており、東端および西端に近づくにつれ徐々に厚さを減じる傾向が認められた。1層は図46-3・4・25層の耕土・畦畔土壌とその下層の耕土層、28・29・41・42層とその東側の耕土層に分けられた。前者を1-1層、後者を1-2層としたが土層断面の観察により、1-1層が1-2層の後に堆積したことを確認した。

ただ東から2段目の細長い水田区画では1層より下に、にぶい黄橙色粘質土を基調とする土層を認めため、これを2層とした。地山の明黄褐色粘質土のブロックが含まれており、一見すると地山に似た土層だが、完形品も含む多量の中世土器と、近世の磁器片2点が出土した。2層は部分的にしか認められず、最上段の水田区画の裾部分から2区中央付近まで幅18mほどの細長い範囲に限られる。また調査区の北西断面際にも達していないため、断面⑦（図46）でその堆積状況を実測した。2層の分布範囲ではこれを除去した面でピット・土坑を伴う最終遺構面を検出した（図36）。

調査区東端の最上段部分では、掘立柱建物や井戸・土坑・ピット等の遺構を多数検出したのに対し、西半部では粘土採穴・耕起痕とみられる溝群・不整形土坑等を検出した。前者が居住域に伴う遺構ととらえられるのに対し、後者は生産域にあたると思われる。その間に位置する2層の分布範囲は、居住域と生産域の中間帯と見られ、遺構密度も低くなっている。

以上をまとめると上から1-1層→1-2層→2層→基盤層（地山）の順に土層の堆積を認めた。

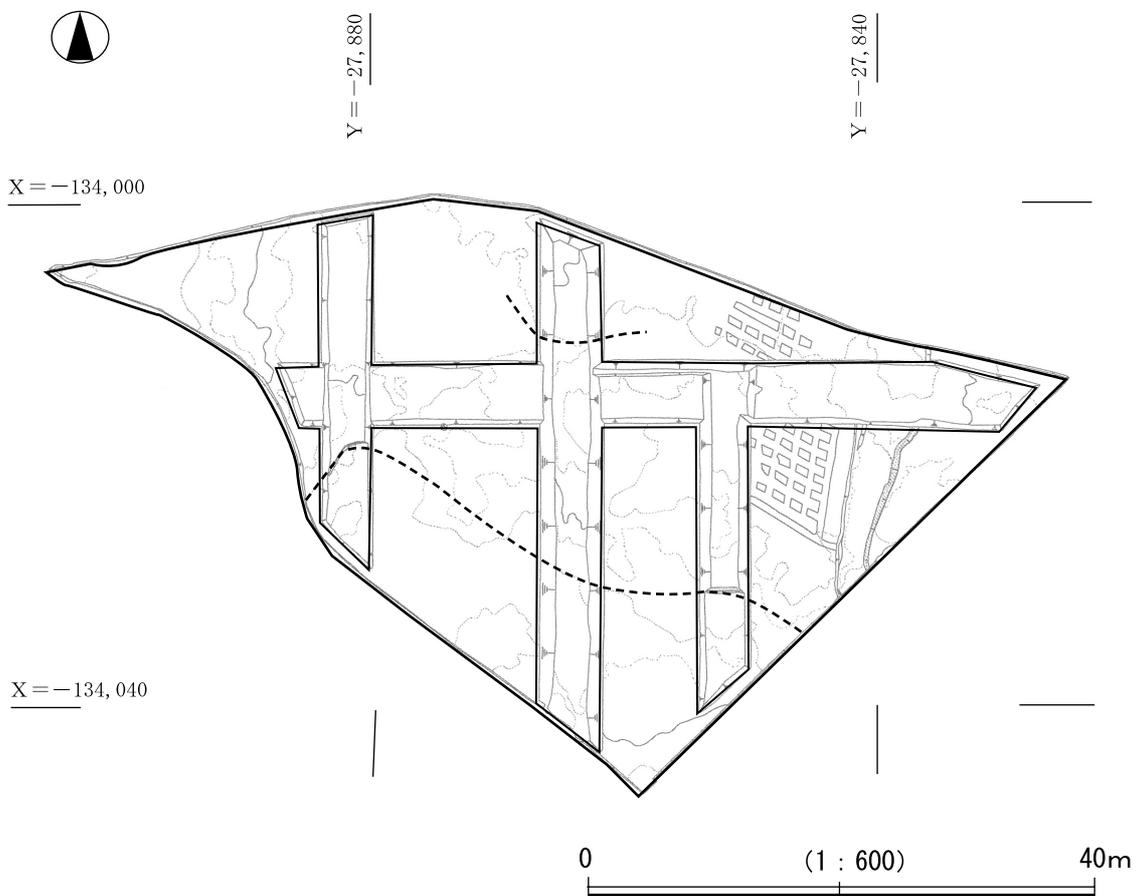


図37 有池遺跡03-1-3調査区 旧地形概念図

3 調査区 (図48～51)

3 調査区は4 調査区で検出した居住域から北西方向に急激に落ち込み、傾斜していく低地部にあたる。側溝の掘削段階においても他の調査区と異なり、水田土壌と洪水砂、湿地堆積土壌の複雑な累積が認められたので、南北に3本、東西に1本のトレンチを設定し、土層の堆積状況を把握することに主眼を置いた (図37)。

調査区内の各土層観察用断面を通覧すると、基本的には土層堆積を大きく4層に分けて把握できる。現代耕土を除去した段階で、洪水砂層を検出した (1層)。これは10cm弱の厚さで、調査区のほぼ全域で認められた。洪水砂のもとの地表部分は耕作に伴う攪拌で土壌化したと見られ、耕起痕埋土の下部にブロック状に残存している場合もある。1層を除去すると3～4枚からなる近世以降の耕土層を認めた (2層)。その下の洪水砂層 (3層) からは中世土器のみが出土している。出土遺物はいずれも磨滅した細片で、帰属時期を判断することは難しいが、この層の堆積した時期と、再度その場所が水田として利用される時期との間に時間差が存在することは確かである。3 調査区の中央部ではほぼ東西方向の帯状に、3層の洪水砂がその下の4層を削り取っている状況がみてとれた。このことから洪水砂に覆われた水田が、直後に復旧されることなくしばらく放置されたことが予想される。換言すればこの洪水砂層は、中世集落の廃絶時期と相前後する時期に堆積したものと言えるかもしれない。3層除去面以下の層を4層として掘削したが、この層は上部の水田土壌とその下の自然堆積層とに細分できる。水田土壌は3～4枚の累積層からなり、4層出土の中世土器はおおむねこれらの層から検出した。中世の水田耕土

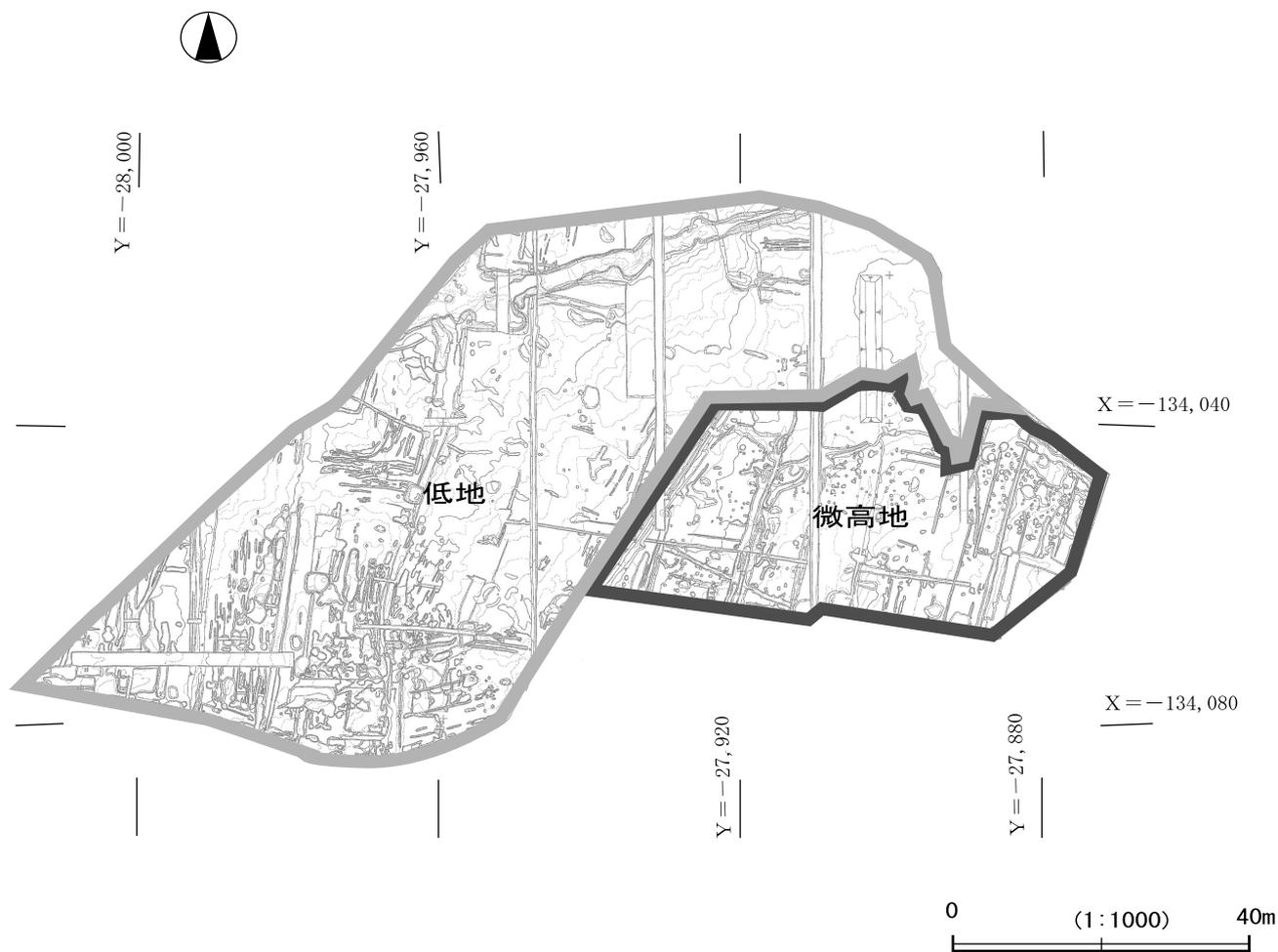


図38 有池遺跡03-1-4 調査区 旧地形概念図

より下では、湿地堆積層と洪水砂層の互層が顕著に認められた。このことから埋積作用が活発ではあるが、大規模な灌漑施設を設けなくても耕作が可能な湿地帯が、中世における耕地堆積の端緒となったことがうかがえる。

なお4層に対応する図48-64～67層に対して、植物珪酸体、花粉、珪藻微化石分析を行った。花粉分析では64～66層でヨシ属が生息する湿地的な様相が見られ、湿地林ないし河辺林と見られるハンノキ属が増加していると推定された。珪藻微化石分析では、流水の影響のある沼沢湿地、不安定な滞水域、湿潤な区域などの環境が示唆され、水田域の環境が反映されていることが分かった。また部分的に寄生虫卵が検出されたが、低密度なため集落周辺における通常の汚染程度と考えられている。中央の南北トレンチは地表下約3.0m (T.P.+42.2m) まで掘り下げたが、調査区東端で検出した基盤層に連なる層までは達しなかった。前述したように4層から時期を決定できる遺物は出土しなかったが、周辺集落からの影響を傍証する寄生虫卵が検出されていることから、4・5調査区で検出した集落と軌を一にして堆積したものと考えられる。

以上、下層確認トレンチを設けて実施した土層観察や自然科学分析によって3調査区が、中世に水田開発がなされた低湿地帯であることを明らかにすることができた。なお自然科学分析の詳細は、第Ⅶ章第3節を御参照されたい。

4 調査区 (図52～56)

当調査区は道路予定地を横断して設定されている。そのため調査区南東寄りの部分では、5調査区から続く、居住域を伴う微高地の北東端を検出した。一方、微高地を外れた北西寄りの部分では、最終遺構面で北西に向かって徐々に地盤が下がる状況と、耕起痕とみられる浅い溝や井戸・水路・風倒木痕と

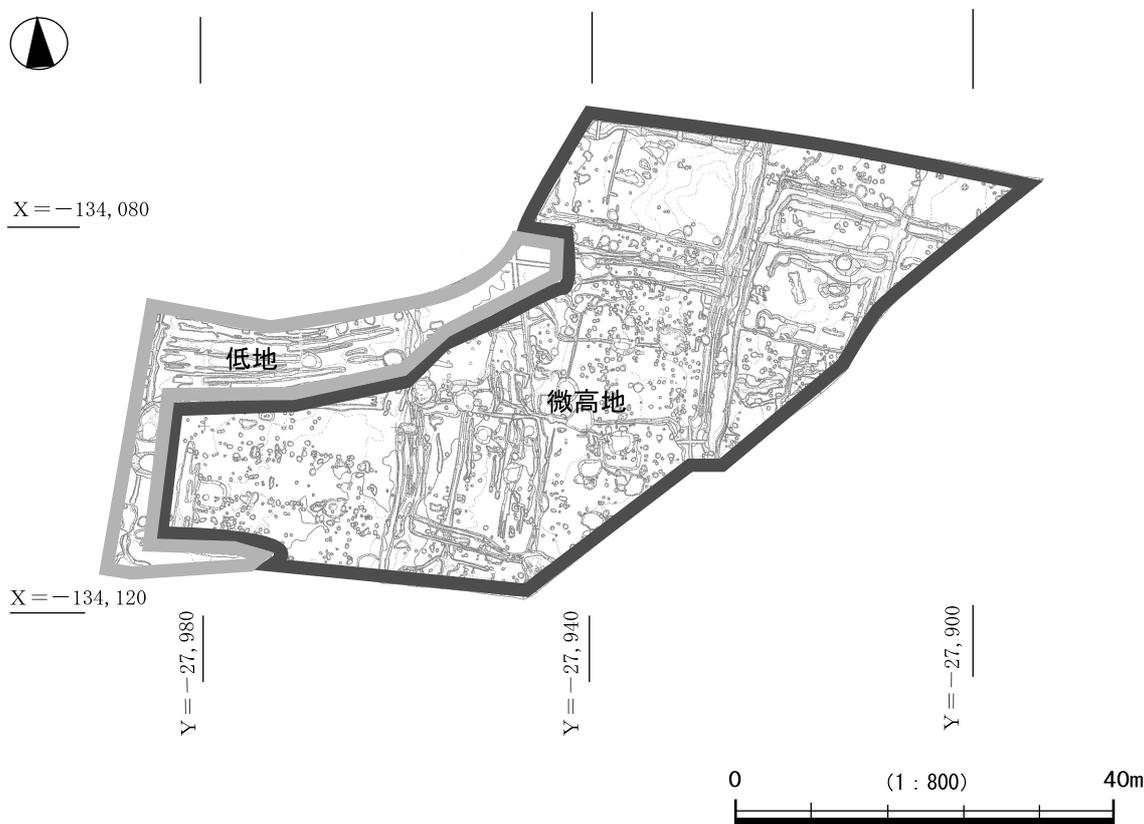


図39 有池遺跡03-1-5調査区 旧地形概念図

みられる不整形な土坑を検出した。したがって後者は中世以降、居住域としては利用されなかったとみられる（図38）。

微高地上ではおおむね中世～近世の耕土・床土（1層）を除去した段階で最終遺構面を検出した。ただ微高地の縁辺部では最終遺構面の直上で整地層（2層）を検出した。それは、地山とみられる黄褐色砂質土と、中世の遺物包含層とみられる暗褐色粘質土がブロック状に混ざり合ったもので、微高地の頂部を削って盛土したことによって生じた土層と考える。この土層から完形品を含む多量の中世土器と、少量の近世土器が出土した。それに対して生産域では近世の耕土・床土とその下層の近世初頭の洪水砂層を除去した段階で、中世の水田面を検出した。中世の耕土層（3層）は4～5枚にわたって累積しており、それらを除去した段階で最終遺構面を検出した。

以上、当調査区では古い方から3層→2層→1層の順で土層の堆積を認めた。

5 調査区（図57～59）

当調査区はほぼ全域が微高地上にあたっており、掘立柱建物・井戸・ピット・土坑・溝・濠等の遺構が極めて高い密度で認められた。調査区北よりの一角で、4調査区との境をなす水路のカーブに沿うような形で、地盤が低い部分がみられ、耕作痕を多数検出した。また調査区南端の市道沿いの部分と、西端の水路沿いの部分でも地盤が徐々に下がるのがみてとれ、ここでは溝や井戸など、水に関連する遺構を集中的に検出した（図39）。

最終遺構面は、おおむね中世後半～近世の耕土（1層）を除去した段階で検出した。この層から完形品を含む多量の中世土器とともに、少量の近世土器が出土した。ただ5調査区東寄りでは部分的に中世の遺物包含層を2枚検出した（2層）。それらを除去して検出した最終遺構面には、上層からの踏み込みで生じた足跡や耕起痕が多数残されており、中世の遺構の輪郭やその切り合い関係が極めてとらえにくい状況だった。そこで5～10cm程の厚さで上部をすきとる作業を行った。その作業の過程で出土した遺物は3層出土として取上げた。3層出土遺物には中世土器しか含まれなかったことから、1層下部に、中世後半のみに時期が限られる耕作土が含まれる可能性があると考えられる。

生産域では1層を除去した段階で中世の水田面を検出した。中世の水田耕土（4層）は3～4層の耕土累積層からなり、それらを除去した段階で最終遺構面を検出した。

6 調査区（図60・61）

当調査区は、北西に向かって徐々に地盤が下がっており、免除川の旧流路に起因するとみられる湿潤な土壌を形成している。3・4調査区で検出した生産域と一連のものと言える。基本層序も4調査区と対応するが、耕土・床土・整地層・洪水砂層の累積は4調査区と比べて顕著である。

当調査区では、近世前半以前の生産域の状況を把握することを目的としたので、現代耕土とその下層の近世耕土・整地層・洪水砂までをバックホーで除去し、それより下層を人力掘削した。機械掘削終了面から最終遺構面までの間に堆積する耕土の累積層は、大きく2層に分けて掘削した。上層の粗砂含有量が多い砂質土を1層とし、それより粘性の強い下層の耕土層を2層とした。おそらく1層直上の洪水砂が堆積する以前にも、水田面は洪水砂による被覆をうけており、水田の復旧のためにそれを鋤き込んで土壌化していく過程で1層が生じたと考える。1層出土遺物は大半が中世土器の破片だが、くらわんか茶碗を含む近世陶磁器も併せて出土した。2層出土土器として回収した遺物には、中世土器の破片に加えて、瓦や近世陶磁器が含まれるが、最終遺構面を検出もしくは精査している段階で出土した土器はすべて中世土器だった。2層下部の水田耕土は、中世に堆積したものの可能性がある。



図40 有池遺跡03-1 土層断面位置図 (1:1500)

断面①

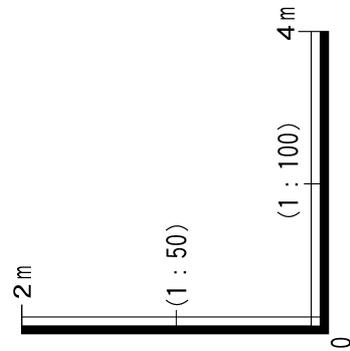
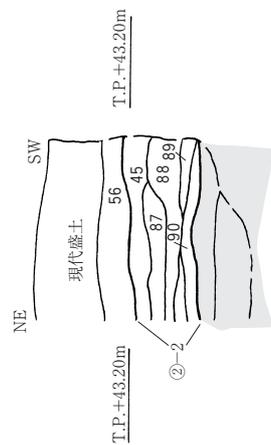
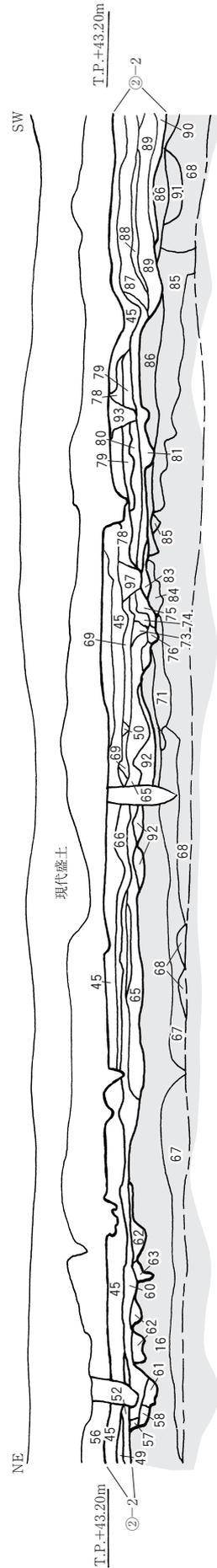
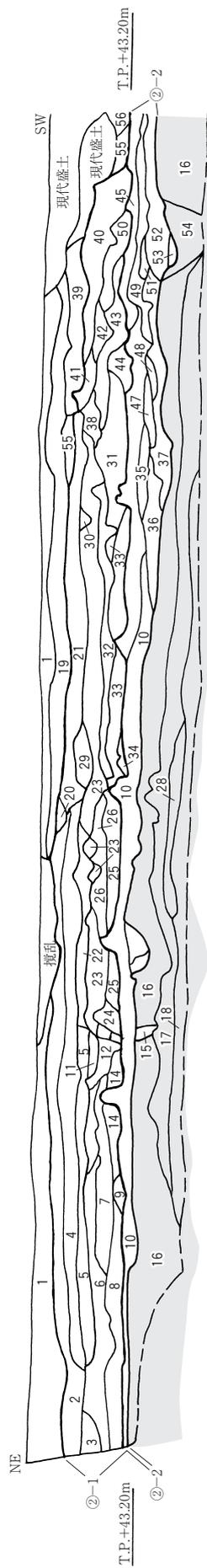


図41 有池遺跡03-1-1 調査区 土層断面図 (断面①)

1. 黄灰色2.5Y4/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む。現代耕土)
2. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
3. におい黄褐色10Y R4/3砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の花崗岩礫を含む)
4. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
5. におい黄褐色10Y R5/3 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の円礫が混ざる。4より粗砂が多い)
6. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫、マンガン斑紋を含む)
7. 灰黄色2.5Y6/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる)
8. におい黄褐色10Y R5/4砂質土 (細砂と、粗砂がブロック状に混ざり合う)
9. 黄灰色2.5Y4/1砂質土 (8と10の土がブロック状に混ざる)
10. 黄灰色2.5Y6/1砂質土 (細砂～中砂が均一に混ざる)
11. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫と、黒褐色粘質土ブロックを含む)
12. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む)
13. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)
14. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、黄褐色砂質土ブロックを含む)
15. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる)
16. におい黄褐色10Y R5/4砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
17. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。地山に含まれる黒色化層)
18. におい黄褐色10Y R5/3粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)
19. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (微砂と、粗砂が均一に混ざる)
20. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微砂と、粗砂が均一に混ざる。19より粘性有)
21. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微砂と、粗砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の花崗岩礫を含む)
22. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の花崗岩礫を含む)
23. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、黒褐色粘質土ブロックを含む)
24. におい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、黒褐色粘質土ブロックを含む)
25. におい黄褐色10Y R6/3砂質土 (24より黒褐色粘質土ブロックが少ない)
26. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
27. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (微～中砂が均一に混ざる)
28. におい黄褐色10Y R4/3粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山に含まれる黒色化層)
29. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる)
30. 暗灰黄色2.5Y5/5砂質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る)
31. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫と、粗砂を含む)
32. 灰黄褐色10Y R6/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫と、マンガン斑紋を含む)
33. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
34. におい黄褐色10Y R6/3砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる)
35. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫と、黒褐色粘質土ブロックを含む。33より粘性有)
36. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる。暗灰色の細砂ブロックを含む)
37. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる。暗灰色の細砂ブロックを36より多く含む)
38. におい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫と、マンガン斑紋を含む)
39. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。地山の黄褐色粘質土ブロックを多く含む)
40. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる。黒褐色粘質土ブロックを含む)
41. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。マンガン斑紋を含む)
42. 褐灰色10Y R5/1砂質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
43. 褐灰色7.5Y5/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む。42より粘性が強い)
44. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫、マンガン斑紋を含む)
45. 灰色10Y5/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。粗砂が僅かに入る。下部にラミナ有)
46. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、粗砂、直径5mm以下の円礫が僅かに入る)
47. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
48. におい黄褐色10Y R5/4砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる。黄褐色粘質土ブロックを含む)
49. 48と同じ
50. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む。酸化鉄斑文有)
51. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。52より粘性が強い)
52. 灰黄褐色2.5Y6/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の円礫を含む)
53. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、16のブロックを含む)
54. 15と同じ
55. 揮り
56. 灰色5Y4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む)
57. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の黄色シルトブロックを含む)
58. 褐灰色10Y R6/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。炭化物が僅かに入る)
59. 52と同じ
60. 灰黄色2.5Y5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロックを含む)
61. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微砂に粗砂が若干混ざる)
62. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、黄褐色粘質土ブロックを含む)
63. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、暗灰色粘質土ブロックを含む)
64. 黄褐色2.5Y6/1砂質土 (微～細砂から成る。ラミナ有)
65. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、褐灰色粘質土を含む)
66. におい黄褐色2.5Y6/4粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。酸化鉄斑文が顕著)
67. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (微砂に中～粗砂が混ざる。地山に含まれる黒色化層)
68. 黄褐色2.5Y5/3粘質土 (微～中砂が均一に混ざる)
69. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。酸化鉄斑文を含む)
70. 明黄褐色10Y R6/6砂質土 (中～粗砂から成る。ラミナ有)
71. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。マンガン斑紋を含む)
72. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。酸化鉄斑文を含む)
73. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロックを含む)
74. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の黄色シルトブロックを含む)
75. 褐灰色10Y R6/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。炭化物が僅かに入る)
76. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微砂に粗砂が若干混ざる)
77. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む。酸化鉄斑文有)
78. におい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。酸化鉄斑文を含む。45よりも粘性が低い)
79. 黄灰色2.5Y6/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。酸化鉄斑文を含む。78よりも粘性が低い)
80. におい黄褐色10Y R6/3粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。下部に灰白色細砂のラミナが入る)
81. 褐灰色10Y R5/1砂質土 (微～中砂が均一に混ざる。直径5mmの円礫と、マンガン斑紋を含む)
82. におい黄褐色10Y R5/4砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、褐灰色粘質土ブロックが入る)
83. におい黄褐色10Y R6/4砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる)
84. におい黄褐色10Y R6/4砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる)
85. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む。地山に含まれる黒色化層)
86. におい黄褐色10Y R6/4砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、20mm以下の円礫が混ざる)
87. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる)
88. におい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
89. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫と、マンガン斑紋を含む)
90. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が入る)
91. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる)
92. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (微～中砂が均一に混ざる)
93. 灰色5Y5/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる)

図42 有池遺跡03-1-1調査区 土色注記(断面①)

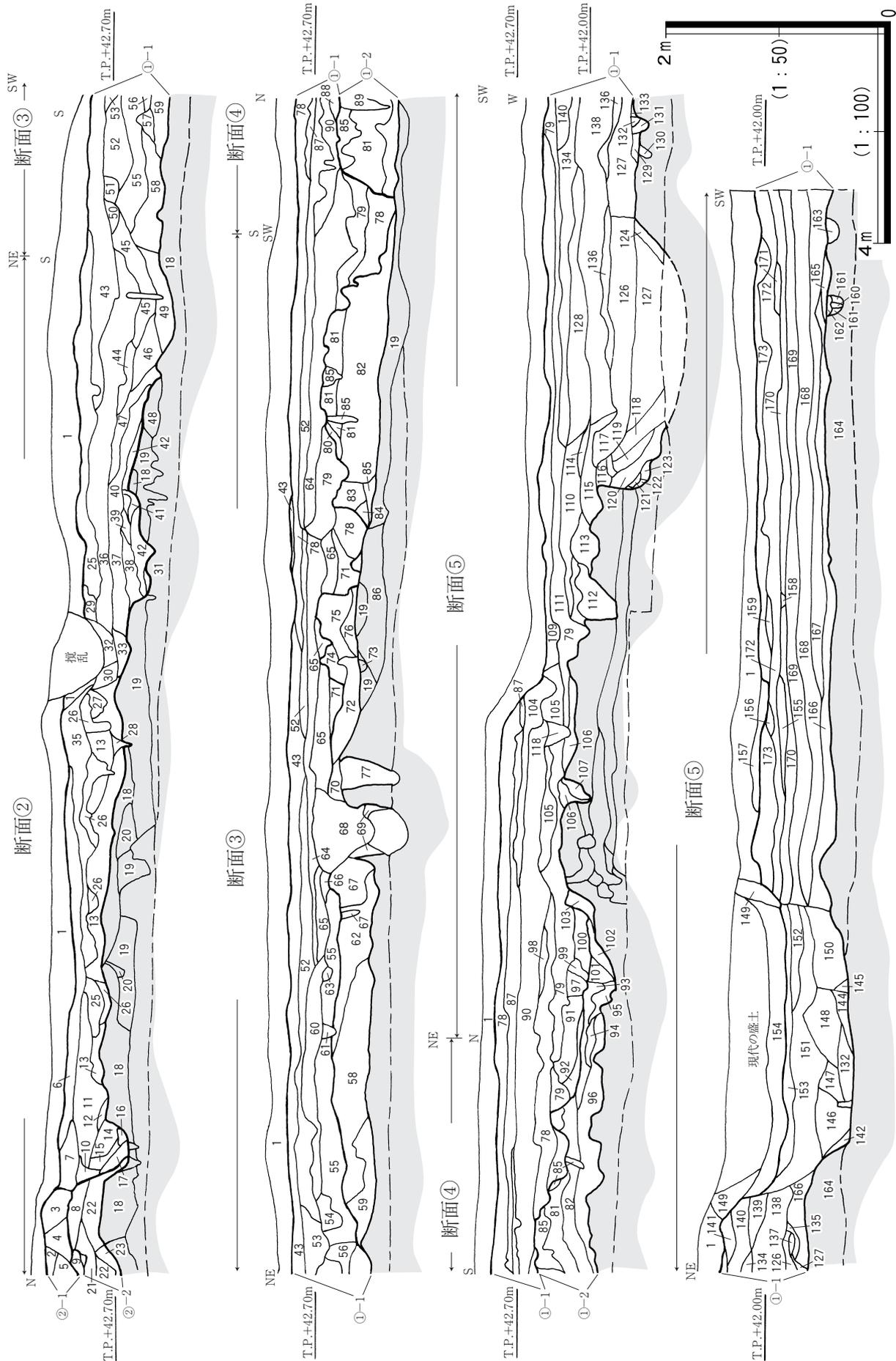


図43 有池遺跡03-1-1調査区 土層断面図 (断面②~⑤)

1. 暗灰黄色2.5Y 5.2/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径3mm大の花崗岩礫を含む。現代耕作土)
2. 黄灰色2.5Y 6.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。近～現代耕作土)
3. 灰黄色10Y R 6.3/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に直径3mm大の円礫を含む。上部に酸化鉄斑文斑紋を含む)
4. 灰黄褐色10Y R 6.2/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径2mm大の円礫を含む。マンガンを含む)
5. 褐灰色7.5Y R 6.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径2mm大の円礫を含む。4に似るが、それより粘性が強い)
6. 褐灰色7.5Y R 4.1/粘質土 (微～中砂が均一に混ざるものを主に、粗砂・直径3mm以下の円礫を含む)
7. 褐灰色7.5Y R 5.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。円礫の含有量が多い)
8. 灰黄色10Y R 7.2/砂質土 (細～中砂が均一に混ざるものを主に、直径2mm大の円礫を含む)
9. 褐灰色10Y R 6.1/粘質土 (微～中砂からなる。直径3mm大の円礫を含む。5に似るが、微砂の含有量がそれより多く、粘性が強い)
10. 黄灰色2.5Y 4.1/粘質土 (灰色の粘質土と、中～粗砂から成る砂質土がブロック状に混ざる)
11. 灰色5Y 6.1/砂質土 (微～粗砂から成る。所々に微～細砂と、中～粗砂がラミナを成しながら互層に堆積する)
12. 灰色N 5.0/砂質土 (細～粗砂が混ざり合う。11に似るが、それより土壌化が進んでいる)
13. 灰白色7.5Y 7.1/砂質土 (細～粗砂が混ざり合う。直径5mm以下の花崗岩礫を多く含む。地山の再堆積層と見られる。)
14. 黄灰色2.5Y 5.1/粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。直径2mm大の円礫を含む)
15. 黄灰色2.5Y 6.1/粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。直径2mm大の円礫を含む。14に似るが、微砂の含有量がそれより多く、粘性が強い)
16. 灰オリーブ色5Y 6.2/砂質土 (13の土と、15の土がブロック状に混ざり合う)
17. 灰黄色10Y R 6.2/砂質土 (13の土と、15の土と、18の土がブロック状に混ざり合う)
18. 灰黄色10Y R 5.4/砂質土 (中～粗砂を主として、直径10mm以下の円礫を多く含む。土砂崩れ等を起因とした堆積土と考えられる。4層対応)
19. 暗灰褐色10Y R 4.3/砂質土 (中～粗砂を主として、直径10mm以下の円礫を多く含む。土質は18に似るが、マンガン斑紋が顕著)
20. 灰黄褐色10Y R 6.3/砂質土 (中～粗砂を主として、直径5mm大の円礫を多く含む。18と19との中間的な土質の層である)
21. 褐灰色10Y R 6.1/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。8に似るが、それより粘性は強い)
22. 褐灰色10Y R 5.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。黒褐色の粘質土ブロックを含む。直径3mm以下の花崗岩礫を含む)
23. 灰黄褐色10Y R 5.2/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。上部に酸化鉄斑文を僅かに含む)
24. 褐灰色10Y R 5.1/粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。褐灰色粘質土ブロックが混ざる)
25. 灰色N 5.0/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。植物根入る。部分的にラミナが入る)
26. 黒褐色2.5Y 3.1/粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。粗砂が入る)
27. 灰黄褐色10Y R 5.2/砂質土 (26と、灰黄色の砂質土がブロック状に混ざる)
28. 灰黄色2.5Y 6.2/砂質土 (中～粗砂が均一に混ざるものを主に、18に似るが、それより粘性が強い)
29. 灰色N 6.0/砂質土 (粗砂を主体に、細砂が混ざる。植物根が入る)
30. 灰色N 6.0/砂質土 (細～粗砂から成る。ラミナ有)
31. 暗灰黄色2.5Y 5.2/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。39層より粘性が強い)
32. 黄灰色2.5Y 5.1/砂質土 (微砂に、中～粗砂が混ざる。部分的にラミナ有)
33. 灰色5Y 6.1/砂質土 (細砂に、中～粗砂が混ざる。部分的にラミナ有)
34. 灰黄褐色10Y R 6.2/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。酸化鉄斑文有。25に似るが、粗砂が含有が多く、土壌化が進む)
35. 灰色7.5Y 6.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。25に似るが、それよりやや締りが強い)
36. 黄灰色10Y R 6.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。下部に中～粗砂のラミナ有)
37. 灰黄褐色10Y R 6.2/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径3mm大の円礫を含む。36より締りが強い)
38. 褐灰色10Y R 6.1/砂質土 (中～粗砂から成る)
39. 褐灰色10Y R 5.1/粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。37に似るが、それより粘性が強い)
40. 灰黄褐色10Y R 6.4/砂質土 (中～粗砂を主に、細砂が混ざる)
41. 褐灰色7.5Y R 4.1/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。黒褐色の粘質土ブロックが入る)
42. 褐灰色10Y R 4.1/粘質土 (中～粗砂が均一に混ざるものを主として、微砂が混ざる)
43. 褐灰色2.5Y 4.1/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。直径5mm以下の円礫を含む。25より粘性は有る)
44. 暗灰黄色2.5Y 5.2/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
45. 灰黄色2.5Y 6.1/砂質土 (微～細砂が均一に混ざり合う中に、部分的に細～中砂のラミナが互層に堆積)
46. 灰黄褐色2.5Y 5.2/砂質土 (微～細砂と、中～粗砂のラミナが互層に堆積)
47. 灰黄色10Y R 6.2/砂質土 (細～粗砂から成る。ラミナ有)
48. 灰黄色10Y R 5.4/砂質土 (19層と、地山の中間的な層。マンガンを僅かに沈着)
49. 緑灰色7.5G Y 5.1/砂質土 (細～粗砂から成るラミナ層。直径5mm大の円礫を僅かに含む)
50. 暗灰黄色2.5Y 5.2/砂質土 (微～中砂が均一に混ざる。上部に僅かに細～中砂のラミナ有)
51. 黄灰色2.5Y 5.1/粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
52. 褐灰色10Y R 5.1/砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。直径5mm以下の花崗岩礫を含む。酸化鉄斑文有)
53. 褐灰色10Y R 4.1/粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。直径10mm以下の花崗岩礫を含む。52に似るがそれより粘性が強い)
54. 黄灰色2.5Y 5.1/砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる。直径5mm以下の円礫を含む)
55. 灰黄褐色10Y R 5.3/粘質土 (微～中砂が均一に混ざるものを主とし、粗砂、礫を含む)
56. 褐灰色10Y R 6.1/砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。直径3mm大の円礫を含む)
57. 灰黄褐色2.5Y 6.2/砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。56に似るが、それより土壌化が弱い)
58. 灰色N 5.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径10mm以下の円礫を含む。57に似るが粘性は弱い)
59. 灰黄色7.5Y 5.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径5mm大の円礫と地山の緑灰色砂質土ブロックが混ざる)
60. 灰オリーブ色5Y 6.2/砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる。地山の黄褐色ないし、緑灰色砂質土がブロック状に入る)
61. 黄褐色2.5Y 5.3/砂質土 (中～粗砂が均一に混ざるものを主とし、微砂を僅かに含む)
62. 褐灰色10Y R 4.1/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。直径10mm以下の円礫・地山に、灰黄色粘質土を含む)
63. 褐灰色10Y R 4.1/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる)
64. 灰黄褐色10Y R 5.2/粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。直径5mm大の円礫を含む)
65. 褐灰色10Y R 5.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径10mm以下の円礫を含む。64に似る)
66. 黄灰色2.5Y 6.1/砂質土 (細～中砂が混ざる中に、中～粗砂のラミナ入る)
67. 褐灰色10Y R 5.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径5mm大の円礫を含む)
68. 灰黄褐色10Y R 6.2/粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。直径3mm大の円礫を含む)
69. 灰黄褐色10Y R 5.3/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径5mm以下の円礫と黒灰色粘質土ブロックが混入)
70. 黄灰色2.5Y 6.1/粘質土 (微砂を主として、粗砂、直径3mm大の礫を僅かに含む)
71. 灰色5Y 6.1/砂質土 (細～中砂を主として、粗砂、直径10mm以下の円礫を含む)
72. 黄灰色2.5Y 6.1/砂質土 (細～中砂を主として、直径10mm以下の円礫を含む)
73. 灰色10Y 5.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
74. 暗灰黄色2.5Y 5.2/砂質土 (中～粗砂を主として、細砂を含む。耕土層)
75. 灰黄褐色10Y R 6.3/砂 (中～粗砂から成る。74層ではないが、攪拌を受け、土壌化がみられる)
76. 黄褐色10Y R 5.6/砂、礫 (粗砂。直径20mm以下の礫が主。ラミナ有)
77. 灰黄褐色10Y R 5.2/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。19と地山に、灰黄色粘質土ブロックが混ざる。)
78. 灰黄褐色10Y R 5.1/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。直径2mm大の円礫を含む)
79. 灰黄褐色10Y R 5.2/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径10mm大の花崗岩礫を含む。65に似る)
80. 褐色7.5Y R 6.6/砂 (中～粗砂が均一に混ざる。それほど土壌化は進んでいない。烏畑の芯と耕作土との中間層)
81. 褐灰色10Y R 6.1/砂質土 (微～中砂が均一に混ざる。直径5mm大の円礫を含む。砂をベースにした耕作土。)
82. 明赤褐色5Y R 5.8/砂 (中～粗砂から成る。ラミナが顕著)
83. 灰黄色2.5Y 6.3/砂 (中～粗砂が攪拌されているが、それほど土壌化は進んでいない)
84. 褐色7.5Y R 7.6/砂 (直径5mm以下の花崗岩の角礫を多量に含む)
85. 灰黄色10Y R 5.4/粘質土 (微～細砂が混ざり合う。直径1～2mm前後の砂礫を含む。烏畑に伴う耕作土)
86. 灰色10Y 5.1/粘質土 (微～中砂を主体に、粗砂が混ざる。グライ化?)
87. 黄灰色2.5Y 6.1/砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる)
88. 灰黄褐色10Y R 6.2/粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。植物の根の侵入顕著)
89. 黄褐色2.5Y 5.3/粘質土 (微～細砂が均一に混ざり合う。土質は85に似る)
90. 灰黄褐色10Y R 5.1/粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径5mm以下の礫を含む。植物の根の侵入顕著)
91. 黄灰色2.5Y 5.1/粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、地山の黄色粘質土ブロックが入る)
92. 灰黄色2.5Y 6.4/粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土層の再堆積土)
93. 褐灰色10Y R 5.1/粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。上部に酸化鉄斑文、斑紋有)
94. 黄灰色2.5Y 4.1/粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の浅黄色粘質土がブロック状に混入する)
95. 黄灰色2.5Y 5.1/粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の浅黄色粘質土がブロック状に混入する)
96. 褐灰色10Y R 4.1/粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土がブロック状に混入する)
97. 灰色5Y 5.1/粘質土 (細～中砂が均一に混ざる)
98. 灰黄褐色10Y R 6.2/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。直径2mm大の円礫を含む)
99. 灰色N 6.0/粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を多く含む)
100. 灰黄色10Y R 4.1/粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う中に、直径5mm大の円礫を含む)
101. 灰色N 6.0/粘質土 (土質は99に似るが、地山ブロックは含まない)
102. 緑灰色10G Y 5.3/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。地山の青灰色砂質土の再堆積層)
103. 緑灰色10G Y 5.1/粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。植物の根の侵入顕著)
104. 灰黄色10Y R 5.3/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。上部に酸化鉄斑文有)
105. 灰色5Y 5.1/粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。植物の根の侵入顕著)
106. 黄灰色2.5Y 5.1/粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)
107. 黄灰色2.5Y 6.1/砂質土 (微～細砂が均一に混ざる。直径5mm大の円礫が入る)
108. 灰黄褐色10Y R 5.2/砂質土 (細～中砂が均一に混ざる)
109. 黄灰色2.5Y 5.1/砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)

図44 有池遺跡03-1-1調査区 土色注記 (断面②～⑤)

110. 灰色N6/0砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。直徑10mm以下の円礫を含む)
 111. 黄灰色2.5Y 4/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。110に土質が似るが、それより粘性が強い)
 112. 黄灰色2.5Y 6/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる)
 113. 褐灰色10Y R 6/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直徑10mm以下の円礫が入る)
 114. 灰黄褐色10Y R 5/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
 115. 灰黄褐色10Y R 6/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
 116. 灰黄褐色10Y R 5/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
 117. 灰黄褐色10Y R 6/2粘質土 (中～粗砂がフロック状に混ざる)
 118. 黄灰色2.5Y 6/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる)
 119. 灰色 5 Y 6/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる)
 120. 黄灰色2.5Y 5/1粘質土 (細砂を主として、中砂・直徑10mm以下の円礫を含む)
 121. 灰黄褐色10Y R 6/2粘質土 (細砂を主として、中砂を含む)
 122. 灰黄褐色10Y R 5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)
 123. 褐灰色10Y R 4/1粘質土 (微10Y R 4/3粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる))
 124. 黒色10Y R 2/1粘質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む)
 125. 暗緑灰色7.5G Y 4/1粘質土に、明緑灰色7.5G Y 7/1シルトが斑状に混ざる
 126. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土に、浅黄色7.5Y 7/3粘質土、酸化マンガンが斑状に混ざる
 127. 黄灰色2.5Y 4/1砂質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む)
 128. 灰オリーブ色 5 Y 5/2粘質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む)
 129. 緑灰色7.5G Y 6/1シルト (直徑1～2mmの砂粒を含む)
 130. 暗緑灰色7.5G Y 4/1粘質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む)
 131. 灰色10Y 4/1粘質土 (直徑3～4mmの砂粒を含む)
 132. 黄灰色2.5Y 6/1粘質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む)
 133. 灰黄色2.5Y 6/2粘質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む)
 134. 明黄褐色10Y R 6/8シルト
 135. オリーブ黒色 5 Y 3/1シルト
 136. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む)
 137. 灰黄褐色10Y R 4/2細砂
 138. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (黒褐色7.5Y R 3/1砂質土が斑状に混ざる)
 139. 灰黄褐色10Y R 6/2粘質土
 140. 黄褐色10Y R 5/6粘質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む)
 141. 灰黄褐色10Y R 5/2粘質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む)
 142. 緑灰色7.5G Y 5/1粘質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む。近世、近代の用水路)
 143. 灰色7.5Y 4/1粘質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む。近世、近代の用水路)
 144. 灰色10Y 4/1粘質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む。近世、近代の用水路)
 145. 暗オリーブ灰色2.5G Y 4/1シルト (近世、近代の用水路)
 146. 黄灰色2.5Y 4/1粗砂 (近世、近代の用水路)
 147. オリーブ黒色10Y 3/1粘質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む。近世、近代の用水路)
 148. 灰色10Y 4/1粘質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む。近世、近代の用水路)
 149. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (近世、近代の用水路)
 150. 黒色10Y 2/1砂質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む。近世、近代の用水路)
 151. オリーブ黒色10Y 3/1粘質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む。近世、近代の用水路)
 152. 灰色 5 Y 4/1粘質土 (近世、近代の用水路)
 153. 灰黄色2.5Y 7/2粗砂 (近世、近代の用水路)
 154. オリーブ黒色 5 Y 3/1砂質土 (微砂を含む。近世、近代の用水路)
 155. 黄褐色2.5Y 5/3シルト
 156. 灰黄褐色2.5Y 5/2粘質土
 157. 黄灰色2.5Y 5/1粘質土 (直徑1～2mmの砂粒を含む)
 158. 灰黄色2.5Y 6/2砂質土
 159. にお黄色2.5Y 6/4砂質土
 160. オリーブ褐色2.5Y 4/4砂質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む)
 161. におい黄褐色10Y R 5/4砂質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む)
 162. 褐色10Y R 4/6砂質土 (直徑2～3mmの砂粒を含む)
 163. におい黄褐色10Y R 5/3砂質土
 164. 黄褐色10Y R 5/6砂質土 (直徑3～4mmの砂粒を含む)
 165. 暗褐色7.5Y R 3/3砂質土 (直徑1～2mmの砂粒を若干含む)
 166. 褐色10Y R 4/6砂質土 (直徑1～2mmの砂粒を若干含む)
167. 褐色7.5Y R 4/3砂質土 (直徑1～2mmの砂粒を若干含む)
 168. 褐色10Y R 4/4砂質土 (直徑1～2mmの砂粒を若干含む)
 169. 暗灰黄色2.5Y 4/2砂質土 (直徑1～2mmの砂粒を若干含む)
 170. 暗灰黄色2.5Y 5/2砂質土 (直徑1～2mmの砂粒を若干含む)
 171. オリーブ褐色2.5Y 4/3シルト
 172. 黄褐色10Y R 7/8シルト
 173. 灰色10Y 5/1粘質土 (酸化したマンガンを粒状に含む旧床土)

図45 有池遺跡03-1-1調査区 土色注記 (断面②～⑤)

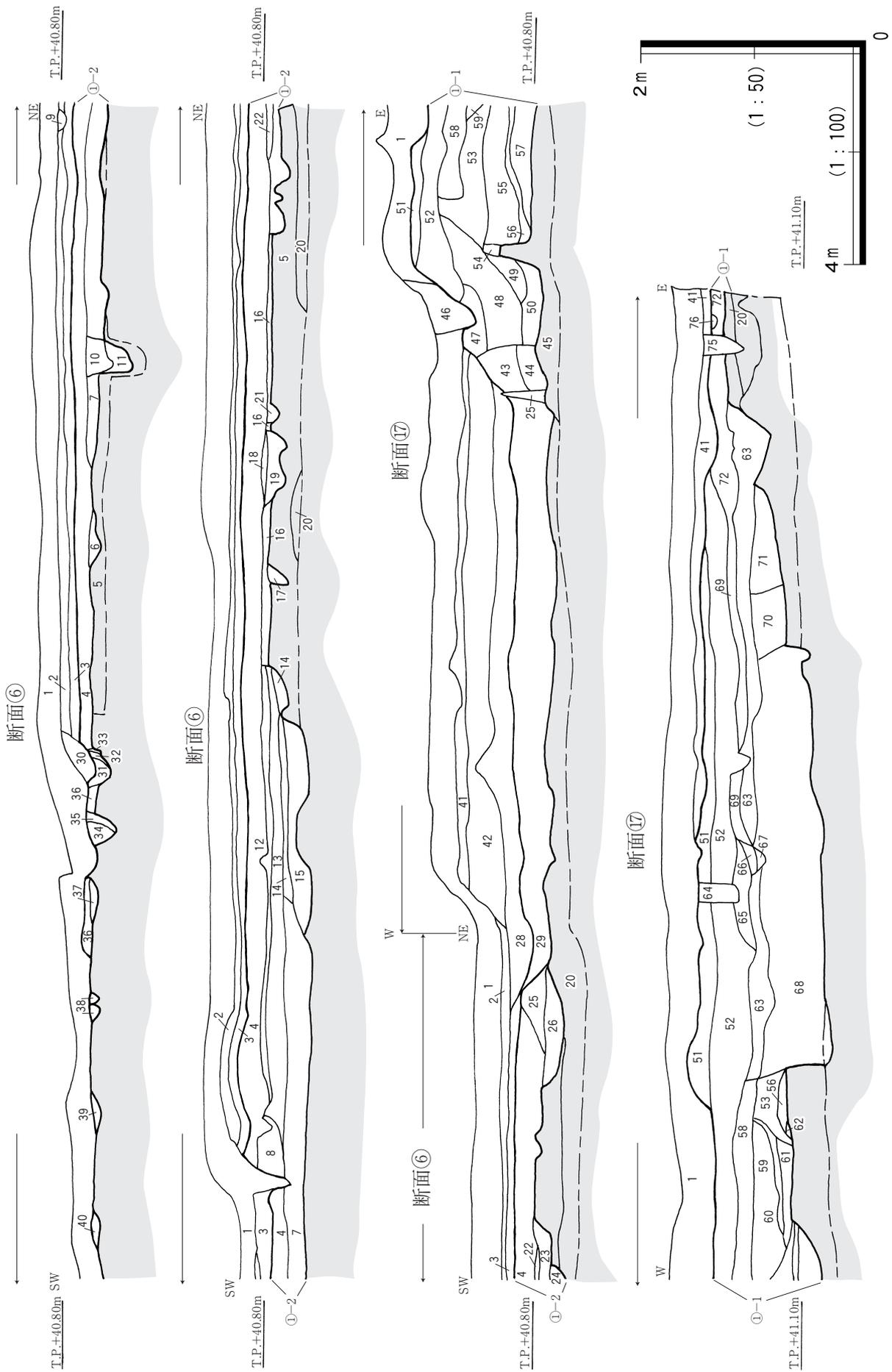


图46 有池遺跡03-1-2調査区 土層断面図 (断面⑥・⑰)

1. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (旧耕土)
2. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (旧耕土)
3. 黄褐色10Y R5/8砂質土 (床土)
4. 暗オリーブ褐色2.5Y 3/3粘質土 (1層)
5. 明黄褐色2.5Y 6/8砂質土 (花崗岩の砂粒を含む。地山)
6. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (溝)
7. にぶい黄褐色10Y R4/3粘質土 (2層)
8. 明褐色7.5Y R5/6砂質土
9. 褐色7.5Y R5/1粘質土
10. 黒褐色2.5Y 3/2粘質土
11. 褐灰色10Y R4/1粘質土
12. 黄褐色2.5Y 5/6砂質土 (2層)
13. にぶい黄褐色10Y R4/3粘質土 (7と同じか? 2層)
14. 明黄褐色10Y R6/8粘質土 (花崗岩の砂粒を含む)
15. 灰色5 Y4/1砂質土 (2層)
16. 黄褐色10Y R5/6砂質土
17. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土
18. 暗灰黄色2.5Y 4/2粘質土
19. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土
20. オリーブ灰色10Y R5/2粗砂混 (シルト、花崗岩の砂粒を含む。地山)
21. オリーブ褐色2.5Y 4/4粘質土
22. 暗灰黄色2.5Y 4/2粘質土
23. 黄褐色2.5Y 4/1粘質土
24. 褐灰色10Y R4/1粘質土
25. 灰オリーブ色5 Y4/2粘質土
26. 灰色7.5Y 4/1粘質土 (溝1)
27. オリーブ黒色7.5Y 3/1粘質土 (溝1)
28. 黒褐色10Y R3/1粘質土
29. オリーブ黒色5 Y3/1粘質土
30. 褐灰色10Y R5/1粘質土
31. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (マンガン含む)
32. にぶ黄褐色2.5Y 6/3粘質土
33. 灰オリーブ色5 Y5/2粘質土
34. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土
35. 黄褐色2.5Y 5/3粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
36. 褐灰色10Y R4/1粘質土
37. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (明黄褐色2.5Y 6/8砂質土を斑状に含む。地山)
38. にぶい黄褐色2.5Y 6/3粘質土 (上面にマンガンの酸化物が堆積)
39. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
40. 灰オリーブ色7.5Y 5/2砂質土 (灰色5 Y4/1砂質土を斑状に含む)
41. 黄褐色10Y R5/8砂質土 (旧床土)
42. 灰色7.5Y 4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
43. 灰色10Y 5/1粘質土
44. 暗褐色7.5Y 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
45. オリーブ黄色5 Y6/4粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
46. 黒褐色10Y R3/2粘質土
47. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (マンガンの酸化物が沈殿)
48. オリーブ褐色2.5Y 4/3粘質土 (直径3～4mmの砂粒を含む)
49. 灰色5 Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
50. 暗灰色3Y 1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
51. オリーブ褐色2.5Y 4/3粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
52. 褐色7.5Y R4/6砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む。マンガンの酸化物を含む)
53. 黄褐色2.5Y 5/3粘質土 (直径3～4mmの砂粒を含む)
54. 黄灰色2.5Y 4/1砂質土
55. にぶい黄褐色10Y R4/3粘質土
56. 灰色5 Y4/1粘質土
57. 黄褐色10Y R5/8粘質土 (直径3～5mmの砂粒を含む)
58. 暗オリーブ褐色2.5Y 3/3砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
59. にぶい黄褐色10Y R4/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
60. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土
61. オリーブ褐色2.5Y 4/6粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
62. 黄褐色2.5Y 5/4粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
63. オリーブ灰色10Y 5/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
64. 褐色10Y R4/4粘質土 (旧耕土が斑状に混ざる。下部に竹を埋め込む。暗梁)
65. にぶい黄褐色10Y R5/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を多く含む)
66. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土
67. 灰オリーブ色5 Y5/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を多く含む)
68. 灰色5 Y5/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を多く含む)
69. 灰オリーブ色5 Y4/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む。マンガン等の酸化物を含む)
70. オリーブ黄色5 Y6/4砂質土 (炭化物を含む)
71. 暗オリーブ褐色7.5Y 5/2砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
72. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
73. 黄褐色10Y R5/8砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
74. オリーブ黒色10Y 3/1粘質土 (炭化物を含む)
75. 灰色10Y 4/1粘質土 (下部に竹を入れる。旧耕土の暗梁排水溝)
76. オリーブ黒色7.5Y 3/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む。動溝)
77. 灰オリーブ色5 Y5/2砂質土

断面⑦

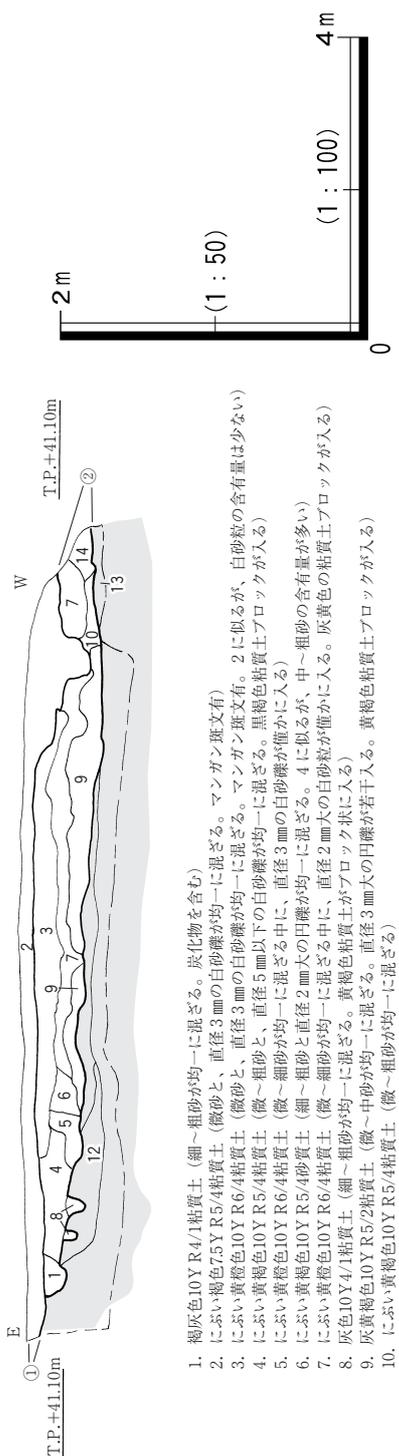


図47 有池遺跡03-1-2調査区 土色注記 (断面⑥・⑦) / 土層断面図 (断面⑦)

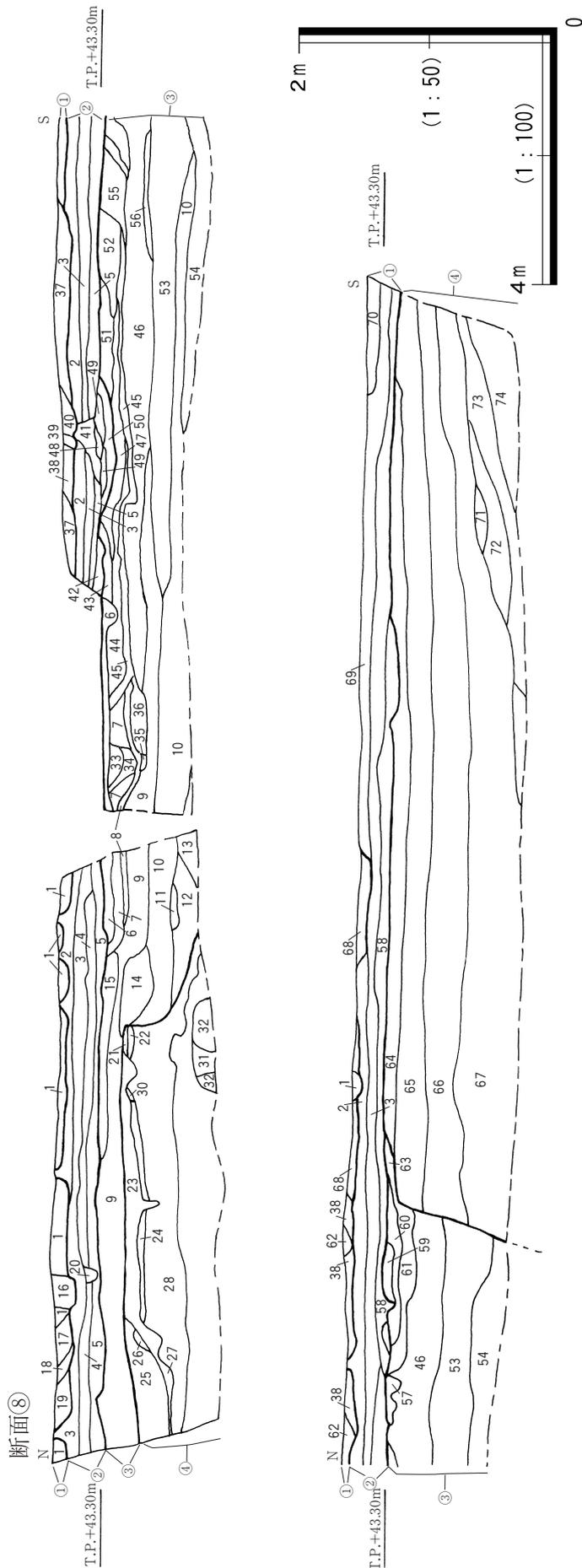
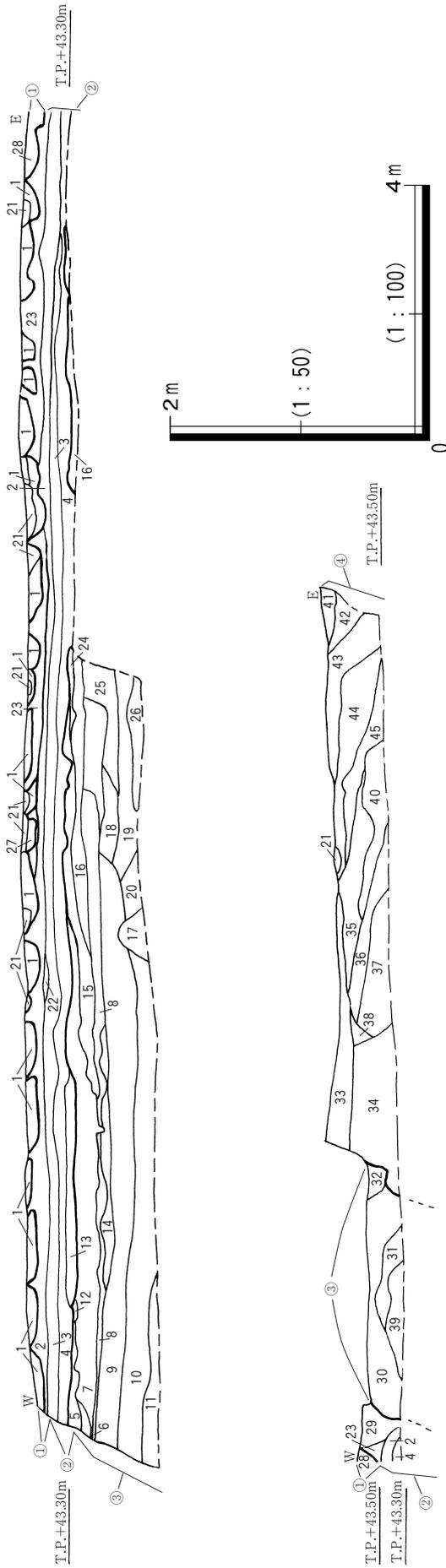


図48 有池遺跡03-1-3調査区 土層断面図 (断面⑧)

1. におい黄色2.5Y6/4粗砂
2. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (耕作土)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土 (耕作土)
4. オリーブ黒色5 Y3/1粘質土 (耕作土)
5. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (耕作土)
6. 灰オリーブ色5 Y5/2粗砂
7. 灰白色5 Y7/4微砂
8. オリーブ灰色10Y4/2シルト
9. 灰白色10Y7/4粗砂
10. 灰白色5 Y7/2粗砂
11. オリーブ灰色10Y4/2シルト
12. 灰白色7.5Y7/2粗砂
13. 明褐色7.5Y R5/8粗砂
14. オリーブ灰色10Y6/2粗砂
15. 黄褐色2.5Y5/3粗砂
16. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
17. オリーブ灰色10Y5/2微砂
18. 灰オリーブ色5 Y5/2粗砂
19. 灰オリーブ黒色10Y3/4粘質土
20. オリーブ黒色10Y3/4粘質土
21. 灰色5 Y4/1粘質土
22. 灰黄褐色10Y R4/2粗砂
23. 黒褐色10Y R3/4粗砂
24. 暗緑灰色7.5G Y4/1シルト
25. 灰白色N7/4粗砂 (黄褐色10Y R7/8粗砂が混ざる)
26. オリーブ灰色10Y5/2微砂
27. 暗緑灰色10G Y3/1シルト
28. 灰色10Y4/1シルト
29. 黒色2.5Y2/1シルト
30. 緑灰色10G Y5/1シルト
31. 黒色2.5G Y2/1粘質土 (よく締まっている)
32. 緑灰色10G Y5/1粗砂
33. 灰オリーブ色7.5Y6/2粗砂
34. 緑灰色5 G5/1シルト (植物遺体を含む)
35. オリーブ灰色10Y5/2粗砂
36. オリーブ灰色2.5G Y6/2粗砂
37. 灰色7.5Y4/1粘質土 (2を斑状に含む)
38. 灰色5 Y5/1粘質土
39. 灰オリーブ色7.5Y5/2粘質土
40. におい黄色2.5Y6/2粗砂
41. 暗緑灰色10G Y4/1シルト (水田畦畔)
42. 褐灰色10Y R4/1粘質土
43. 灰黄色2.5Y6/2粗砂
44. 灰白色5 Y7/2粗砂
45. 暗緑灰色7.5G Y4/1シルト
46. 灰白色10Y8/2粗砂 (直径20~40mmの礫を含む)
47. 黄灰色2.5Y5/1粗砂
48. オリーブ灰色10Y4/2微砂
49. 灰白色5 Y7/4粗砂
50. オリーブ黒色7.5Y3/4粘質土 (直径5mmの砂粒を含む)
51. 灰オリーブ色5 Y6/2粗砂
52. 暗灰黄色2.5Y5/2粗砂
53. オリーブ灰色2.5G Y6/4粗砂
54. 灰オリーブ色7.5Y6/2粗砂
55. 褐灰色10Y R5/1粗砂
56. 暗緑灰色10G Y4/1粗砂
57. 灰オリーブ色7.5Y6/2粗砂
58. 黒色7.5Y2/1粘質土
59. 暗オリーブ色5 G Y4/1微砂
60. オリーブ黒色5 Y3/4粗砂
61. 緑灰色7.5G Y5/1シルト (暗オリーブ色5 Y4/3粘質土が斑状に混ざる)
62. 黒色10Y R17/1粘質土
63. オリーブ灰色10Y5/2シルト
64. オリーブ黒色7.5Y2/2粘質土 (直径2~3mmの砂粒を含む)
65. オリーブ黒色5 Y2/2粘質土 (直径1~2mmの砂粒を含む)
66. 黒褐色2.5Y3/1粘質土 (直径1~2mmの砂粒を含む)
67. 黒色7.5Y R17/1粘質土 (直径2~3mmの砂粒を多く含む。所謂ピート層)
68. におい黄色2.5Y6/4粗砂
69. オリーブ黒色10Y3/2粘質土
70. オリーブ黒色7.5Y3/2粘質土
71. 黒褐色10Y R2/2粘質土
72. 黒色5 Y R17/1ピート
73. 黒色10Y R2/1粘質土 (ピートを含む)
74. 黒色5 Y2/1粘質土 (ピートを含む)

断面⑨



1. にぶい黄色2.5Y6/4粗砂
2. 黄灰色2.5Y4/1粘質土
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
4. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土
5. 灰オリーブ色5 Y5/2粗砂
6. 灰白色5 Y7/1微砂
7. 黄褐色2.5Y5/3粗砂
8. 灰黄褐色10Y R4/2シルト
9. 灰白色10Y7/1粗砂
10. 灰白色5 Y7/2粗砂
11. 明褐色7.5Y R5/8粗砂
12. 灰白色2.5Y7/1粗砂 (下部に厚さ8~10mmの灰色5 Y4/1微砂が堆積)
13. 灰オリーブ色5 Y6/2粗砂 (下部に厚さ8~10mmの、灰色5 Y4/1微砂が堆積)
14. 灰オリーブ色7.5Y5/2砂礫 (直径15~20mmの礫を含む)
15. 灰白色7.5Y7/2粗砂
16. 灰色10Y6/1粗砂 (直径5~6mmの砂粒を含む。他の粗砂より砂粒が粗い)
17. 灰色5 Y4/1粘質土
18. 浅黄色5 Y7/3粗砂
19. 明黄褐色10Y R6/8粗砂と、灰オリーブ色5 Y5/2粗砂が締状に混ざる
20. オリーブ灰色2.5G Y5/4粗砂
21. 灰色7.5Y4/1粘質土
22. 褐色10Y R4/1粗砂
23. オリーブ黒色10Y3/1粘質土

24. 淡黄色7.5Y8/3細砂
25. 明赤褐色5 Y R5/8粗砂
26. 淡黄色7.5Y7/3粗砂
27. オリーブ灰色10Y6/2微砂
28. 灰オリーブ色5 Y4/2粘質土
29. オリーブ黒色7.5Y3/1粘質土
30. 灰白色10Y7/2粗砂
31. オリーブ灰色10Y6/2粗砂
32. オリーブ灰色5 G Y5/1微砂
33. オリーブ黒色7.5Y2/2砂質土 (直径1~2mmの砂粒を含む)
34. オリーブ黒色5 Y2/2砂質土 (直径2~3mmの砂粒を含む)
35. 黒褐色2.5Y3/4粗砂
36. 暗オリーブ灰色5 G Y4/1粗砂
37. 灰色10Y5/1粗砂 (直径4~5mmの砂粒を含む)
38. 黒色5 Y R1.7/1砂質土
39. オリーブ色5 Y5/4粗砂
40. 暗緑灰色7.5G Y4/1粗砂 (直径10mmの砂粒を含む)
41. 黒色10Y R2/1粘質土 (直径2~3mmの砂粒を含む)
42. 緑灰色10G Y6/1シルト
43. 暗灰黄色2.5Y5/2粗砂
44. オリーブ灰色2.5G Y6/1微砂
45. オリーブ黒色7.5Y3/2粘質土 (直径2~3mmの砂粒を含む)

図49 有池遺跡03-1-3調査区 土層断面図 (断面⑨)

断面⑩

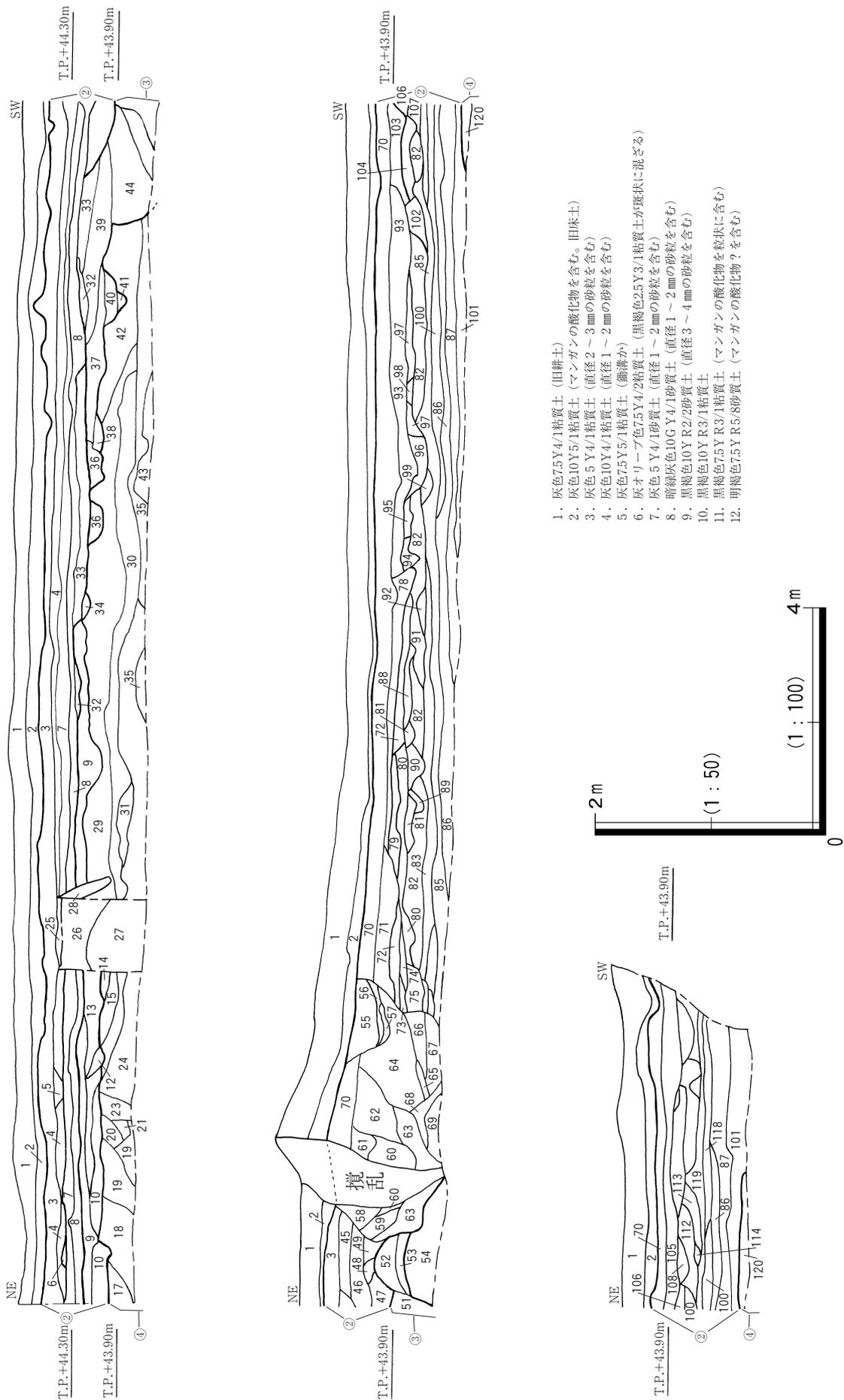


図50 有池遺跡03-1-3調査区 土層断面図 (断面⑩)

13. 黒褐色10Y R 3/2粘質土
14. オリーブ灰色10 Y 5/2微砂
15. 緑灰色7.5 G Y 6/1微砂
16. にぶ黄色2.5 Y 6/4細砂
17. 灰色10 Y 6/1微砂
18. 灰色10 Y 5/1微砂
19. にぶい黄褐色10 Y R 4/3粗砂
20. にぶい黄色2.5 Y 6/3微砂
21. 灰白色7.5 Y 7/2微砂
22. にぶい黄褐色10 Y R 5/4粗砂
23. 緑灰色10 G Y 5/1シルト
24. 浅黄色 5 Y 7/3粗砂
25. オリーブ黒色7.5 Y 3/1粘質土
26. 黒褐色2.5 Y 3/1粘質土 (明黄褐色2.5 Y 6/6粗砂が塊状に混ざる)
27. オリーブ黒色10 Y 3/1粘質土 (明黄褐色2.5 Y 6/6粗砂や、灰色7.5 Y 4/1粘質土等が塊状に混ざる)
28. 灰オリーブ灰色7.5 Y 4/2砂質土
29. オリーブ黄色 5 Y 6/4粗砂
30. 緑灰色7.5 G Y 6/1粘質土
31. 灰黄色2.5 Y 7/2粗砂
32. 黒褐色2.5 Y 3/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
33. 黒褐色10 Y R 3/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
34. 黒褐色7.5 Y R 2/2粘質土 (オリーブ褐色2.5 Y 4/3粘質土が塊状に混ざる)
35. オリーブ灰色10 Y 6/2シルト
36. 黒褐色10 Y R 3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
37. 黄褐色2.5 Y 5/4粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
38. 灰オリーブ色 5 Y 5/2粗砂
39. 暗灰黄色2.5 Y 4/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
40. 暗緑灰色7.5 G Y 4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
41. オリーブ黄色 5 Y 6/3粗砂
42. にぶい黄色2.5 Y 6/4粗砂
43. オリーブ黄色 5 Y 6/3微砂
44. 灰黄褐色10 Y R 4/2粘質土 (直径3～5mmの砂粒を含む)
45. 灰オリーブ色 5 Y 4/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
46. 暗灰黄色2.5 Y 4/2砂質土 (直径3～4mmの砂粒を含む)
47. 暗灰黄色2.5 Y 5/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
48. 黒色10 Y R 2/1砂質土
49. 灰黄褐色10 Y R 4/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
50. オリーブ黒色10 Y 3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
51. 黒色2.5 Y 2/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
52. 褐灰色10 Y R 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
53. 黒褐色2.5 Y 3/1粘質土
54. 灰白色 5 Y 7/2粗砂
55. 灰白色2.5 Y 8/2粗砂
56. 灰色10 Y 4/1微砂
57. 浅黄色 5 Y 7/3粗砂
58. オリーブ黒色10 Y 3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
59. 暗緑灰色10 G Y 3/1微砂
60. 緑灰色7.5 G Y 6/1微砂 (灰白色10 Y R 7/1粗砂が塊状に混ざる)
61. 緑灰色7.5 G Y 5/1微砂
62. 灰色10 Y 5/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
63. オリーブ灰色10 Y 5/2シルト
64. オリーブ黒色10 Y 3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
65. 灰色7.5 Y 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
66. 暗オリーブ灰色 5 G Y 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
67. 暗オリーブ色2.5 G Y 4/1粘質土
68. 緑灰色10 G Y 5/1微砂
69. 白灰色10 Y 7/2粗砂
70. 浅黄色 5 Y 7/3粗砂 (暗緑灰色7.5 G Y 4/1粘質土が混ざる)
71. 灰色7.5 Y 4/1粘質土
72. 灰色10 Y 4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
73. オリーブ黒色10 Y 3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
74. 灰色10 Y 5/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
75. オリーブ黒色7.5 Y 2/2粘質土 (明緑灰色7.5 G Y 7/1微砂が混ざる)
76. オリーブ黒色10 Y 3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
77. オリーブ黒色 5 G Y 2/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
78. オリーブ黒色10 Y 3/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
79. オリーブ黒色7.5 Y 3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
80. 灰色7.5 Y 4/1粘質土 (黒褐色2.5 Y 3/1粘質土が混ざる)
81. 黄灰色2.5 Y 4/1粘質土
82. 灰色 5 Y 4/1粘質土 (明緑灰色7.5 G Y 7/1微砂と、オリーブ黒色7.5 Y 2/2粘質土が混ざる)
83. 暗オリーブ灰色 5 G Y 3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
84. オリーブ黒色7.5 Y 3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
85. オリーブ黒色10 Y 3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
86. 暗オリーブ灰色2.5 G Y 3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
87. 灰色10 Y 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
88. 暗オリーブ灰色2.5 G Y 4/1粘質土 (黒褐色2.5 Y 3/1粘質土が混ざる)
89. 黒色7.5 Y R 2/1砂質土 (灰色10 Y 4/1粗砂が混ざる)
90. 灰色7.5 Y 4/1粘質土 (黒褐色2.5 Y 3/1粘質土が混ざる)
91. 浅黄色2.5 Y 7/4粗砂
92. 緑褐色7.5 G Y 2/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
93. オリーブ黒色7.5 Y 3/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
94. 暗緑灰色10 G Y 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
95. 暗緑灰色7.5 G Y 3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
96. 浅黄色 5 Y 8/4粗砂
97. 緑灰色7.5 G Y 6/1粘質土 (灰色7.5 Y 4/1粘質土が混ざる)
98. 暗灰黄色2.5 Y 4/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
99. 灰色10 Y 4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
100. オリーブ黒色 5 Y 3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
101. 黒色10 Y 2/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
102. オリーブ色 5 Y 5/4粘質土 (黒色10 Y 2/1粘質土が混ざる)
103. 暗緑灰色10 G Y 4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
104. オリーブ黒色10 Y 3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
105. 灰色7.5 Y 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
106. 灰色10 Y 5/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
107. オリーブ黒色7.5 Y 3/1粘質土 (黒色10 Y 2/1粘質土と、淡黄色 5 Y 8/4粗砂が混ざる)
108. 黒色10 Y R 2/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
109. 灰色10 Y 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
110. オリーブ黒色 5 Y 3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
111. 淡黄色 5 Y 8/4粗砂
112. 暗オリーブ灰色2.5 G Y 3/1粘質土 (黒色10 Y 2/1粘質土と、淡黄色 5 Y 8/4粗砂が混ざる)
113. オリーブ黒色7.5 Y 3/2粘質土 (淡黄色 5 Y 8/4粗砂が混ざる)
114. オリーブ黒色7.5 Y 3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
115. 灰色10 Y 4/1粘質土 (オリーブ灰色10 Y 5/2粗砂が混ざる)
116. 灰色10 Y 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
117. 暗オリーブ灰色 5 G Y 3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
118. 暗オリーブ灰色2.5 G Y 4/1粘質土 (淡黄色 5 Y 8/4粗砂が混ざる)
119. 灰色10 Y 4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
120. 黒色10 Y 2/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)

図51 有池遺跡03-1-3調査区 土色注記(断面⑩)

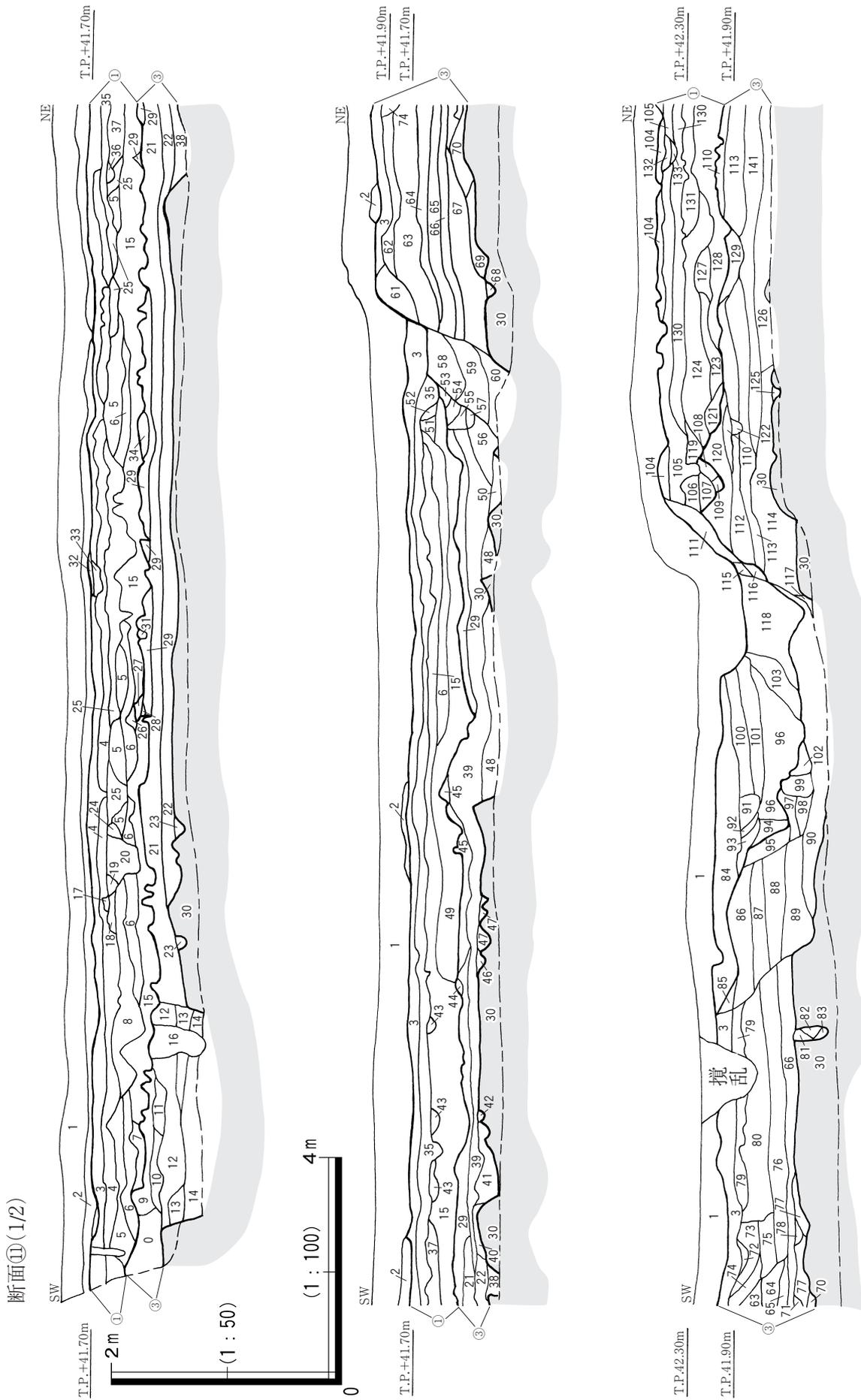
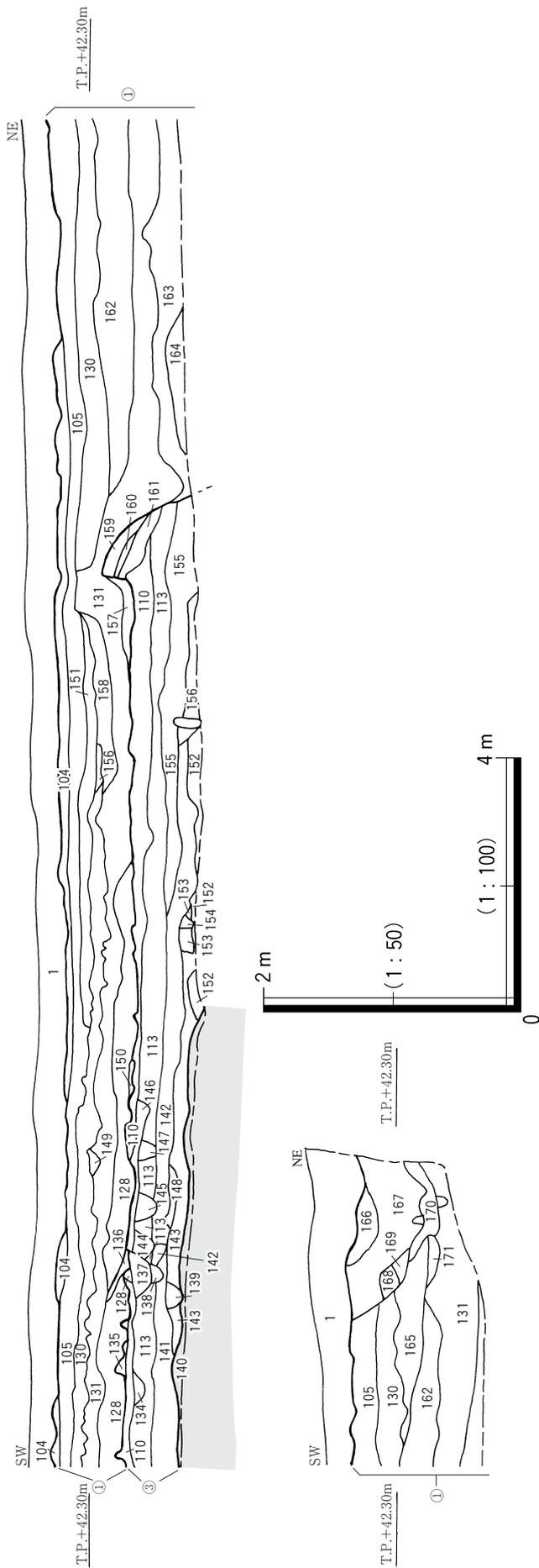


图52 有池遺跡03-1-4 調査区 土層断面図 (断面①)

断面① (2/2)



- 0. 浅黄色7.5Y7/3粗砂
- 1. 旧耕土
- 2. 黒褐色10YR3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む。旧耕土が)
- 3. 灰色7.5Y4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
- 4. 暗緑灰色10GY4/1粘質土
- 5. 浅黄色5Y7/4粗砂
- 6. 明黄褐色10YR6/8粗砂
- 7. 緑灰色10GY6/1微砂 (緑灰色10GY6/1微砂が珠状に混ざる)
- 8. 浅黄色5Y7/4粗砂 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 9. 灰色10Y4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 10. 暗緑灰色7.5GY3/1砂質土 (緑灰色10GY5/1微砂が混ざる)
- 11. 緑灰色10GY5/1微砂
- 12. 灰色10Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 13. 灰色7.5Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
- 14. オリープ黒色7.5Y3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
- 15. 明オリープ灰色5GY7/1粗砂
- 16. 緑灰色10GY5/1シルト (流水堆積)
- 17. 灰色10Y4/1粘質土
- 18. 灰白色7.5Y7/1微砂
- 19. 灰色7.5Y4/1粘質土
- 20. 緑灰色10GY6/1微砂 (明黄褐色10YR6/8粗砂が混ざる。流水堆積)
- 21. オリープ黒色10Y3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)

- 22. 灰色5Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 23. 灰色10Y5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 24. オリープ黄色5Y6/4微砂 (明黄褐色10YR6/8粗砂が混ざる)
- 25. 青灰色5B6G/1微砂 (オリープ黒色7.5Y3/1シルトが混ざる。流水堆積層の粗砂をベースとする土壌化層)
- 26. 青灰色10B6G/1微砂
- 27. 灰色10Y4/1粘質土
- 28. 明黄褐色2.5Y6/6粗砂 (青灰色10B6G/1微砂が混ざる)
- 29. 灰色7.5Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 30. オリープ灰色10Y6/2砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む。地山)
- 31. 青灰色10B6G/1微砂 (灰色10Y4/1粘質土が混ざる)
- 32. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 33. 暗黄褐色2.5Y5/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
- 34. 灰色7.5Y4/1砂質土 (灰白色7.5Y7/2粗砂が混ざる)
- 35. 暗緑灰色10GY4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 36. 灰色10Y4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
- 37. 黄褐色10YR7/8粗砂
- 38. 灰色10Y5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 39. 緑灰色7.5GY5/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
- 40. 黄褐色2.5Y5/4砂質土
- 41. 灰色10Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 42. 暗オリープ灰色5GY4/1粘質土

- 43. 灰色5Y5/1粘質土 (明オリープ灰色5GY7/1粗砂が混ざる)
- 44. 暗緑灰色7.5GY3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
- 45. 暗緑灰色7.5GY3/1砂質土 (明オリープ灰色5GY7/1粗砂が混ざる)
- 46. 灰色7.5Y4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 47. 暗緑灰色7.5GY4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 48. オリープ黒色10Y3/1砂質土 (オリープ灰色10Y6/2砂質土が混ざる)
- 49. 灰白色5Y8/1粗砂
- 50. オリープ黒色10Y3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 51. 灰色5Y5/1粘質土 (明オリープ灰色5GY7/1粗砂が混ざる)
- 52. オリープ灰色7.5GY6/1微砂
- 53. 暗緑灰色10GY4/1砂質土
- 54. 灰色5Y4/1砂質土
- 55. 浅黄色5Y7/4粗砂
- 56. 灰色10Y5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 57. 緑灰色10GY6/1微砂
- 58. 灰色10Y5/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
- 59. 灰色7.5Y4/1粘質土
- 60. 灰色10Y4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
- 61. にがい黄色2.5Y6/3粘質土 (マンガン酸化物を多量に含む)
- 62. 灰黄色2.5Y6/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
- 63. 暗オリープ灰色5Y5/2砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)

図53 有池遺跡03-1-4調査区 土層断面図 (断面①)

64. 灰オリーブ色5 Y5/3砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
65. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
66. 灰色5 Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
67. 灰色10Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
68. 暗緑灰色10G Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
69. 灰オリーブ色7.5Y5/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
70. 灰オリーブ色7.5Y6/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
71. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
72. 灰色7.5Y5/1粘質土
73. 灰色10Y6/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
74. オリーブ灰色2.5G Y5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
75. 暗緑灰色10G Y4/1砂質土
76. 灰色7.5Y5/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
77. 暗オリーブ灰色5 G Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
78. 灰オリーブ色5 Y4/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
79. 緑灰色10G Y5/1粘質土
80. 暗青灰色5 B G3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
81. 暗緑灰色5.5G Y4/1粘質土
82. 暗オリーブ灰色5 G Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
83. 灰色10Y4/1粘質土
84. 緑灰色10G Y5/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
85. 暗緑灰色10G Y4/1粘質土 (灰オリーブ色5 Y5/2粘質土が混ざる)
86. 緑灰色7.5G Y5/1粘質土
87. 暗青灰色5 B G4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
88. 暗緑灰色10G Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
89. 灰色10Y4/1砂質土
90. 灰色7.5Y4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
91. 暗青灰色5 B G3/1粘質土
92. 灰色10Y6/1細砂
93. 緑灰色5 G5/1微砂
94. 灰白色N7/1微砂
95. 灰色5 Y4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
96. 灰白色5 Y7/2粗砂 (直径20～40mmの礫を若干含む)
97. 青灰色5 B G6/1微砂
98. 灰色10Y6/1粗砂
99. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粘質土
100. 緑灰色10G Y5/1粘質土
101. 灰白色5 Y7/2粗砂 (青灰色10B G6/1微砂が綿状に混ざる)
102. 明青灰色10B G7/1粗砂 (直径20～30mmの礫が若干混ざる)
103. 灰白色7.5Y7/2粗砂
104. 灰色7.5Y4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
105. 灰色7.5Y6/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
106. オリーブ黄色5 Y6/4粗砂
107. 灰色10Y8/1粗砂 (灰色10Y5/1粘質土が綿状に混ざる)
108. 灰色10Y5/1粘質土
109. 灰白色10Y8/1粗砂 (直径30～40mmの礫を含む)
110. オリーブ黒色10Y3/1粘質土
111. 黄褐色10Y R7/8シルト
112. 灰色5 Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
113. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
114. 黒褐色10Y R3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
115. 緑灰色10Y R5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
116. 灰色5 Y4/1砂質土 (灰色7.5Y5/1粘質土が混ざる)
117. 黒色10Y2/1砂質土
118. 灰白色7.5Y7/2粗砂
119. 灰白色10Y8/1粗砂
120. 灰白色N8粗砂
121. 灰白色5 G Y8/1粗砂
122. 灰色10Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
123. 灰白色10Y7/1粗砂
124. 灰白色10Y7/2細砂 (直径2～3mmの砂粒を含む)
125. 灰色10Y4/1砂質土 (灰オリーブ色5 Y5/3砂質土・地山の土が混ざる)
126. オリーブ黒色5 Y3/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
127. 灰色10Y8/1粗砂 (直径40mm前後の礫を含む)
128. 灰白色10Y7/1粗砂 (オリーブ灰色10Y6/2微砂が混ざる)
129. オリーブ黒色5 G Y2/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
130. 灰色5 Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
131. 淡黄色5 Y8/3細砂 (灰白色10Y8/1粗砂が綿状に混ざる)
132. 灰色5 Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
133. 灰色7.5Y5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
134. 灰色7.5Y4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
135. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1シルト (直径1mm前後の砂粒を含む)
136. 明緑灰色7.5G Y8/1細砂
137. 灰色7.5Y4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
138. 灰色5 Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
139. 黒褐色7.5Y R3/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
140. 灰白色10Y7/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を多く含む・地山)
141. 黒褐色10Y R3/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
142. 灰色5 Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
143. オリーブ黒色5 Y3/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
144. 灰色10Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
145. 灰色10Y4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
146. 灰色7.5Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
147. 灰色10Y4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
148. 黒褐色2.5Y3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
149. オリーブ黒色5 Y3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
150. 灰白色10Y8/1粗砂
151. 灰色5 Y5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
152. 黒褐色7.5Y R3/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
153. 黒褐色10Y R2/3砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
154. 黒褐色2.5Y3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
155. 黄灰色2.5Y4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
156. オリーブ黒色5 Y3/1粘質土
157. 明褐色7.5Y R5/8粗砂 (灰白色5 Y8/2粗砂が綿状に混ざる)
158. 灰色10Y8/1粗砂
159. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粘質土 (直径1mm以下の砂粒を含む)
160. 黄灰色2.5Y6/1粗砂
161. 灰色7.5Y5/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
162. 灰黄色2.5Y6/2粗砂 (緑灰色10G Y5/1微砂と、暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粘質土が綿状に混ざる)
163. 明褐色7.5Y R5/8粗砂
164. 明黄褐色10Y R6/6粗砂
165. 灰オリーブ色5 Y6/2粗砂
166. 灰色2.5Y8/1粗砂
167. 灰色5 Y4/1シルト (灰白色5 Y7/2粗砂が綿状に混ざる)
168. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
169. 灰色5 Y5/1細砂 (直径3～4mmの砂粒を含む)
170. 灰白色5 Y7/2粗砂
171. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粘質土 (緑灰色10G Y5/1微砂が綿状に入る)

図54 有池遺跡03-1-4調査区 土色注記 (断面①)

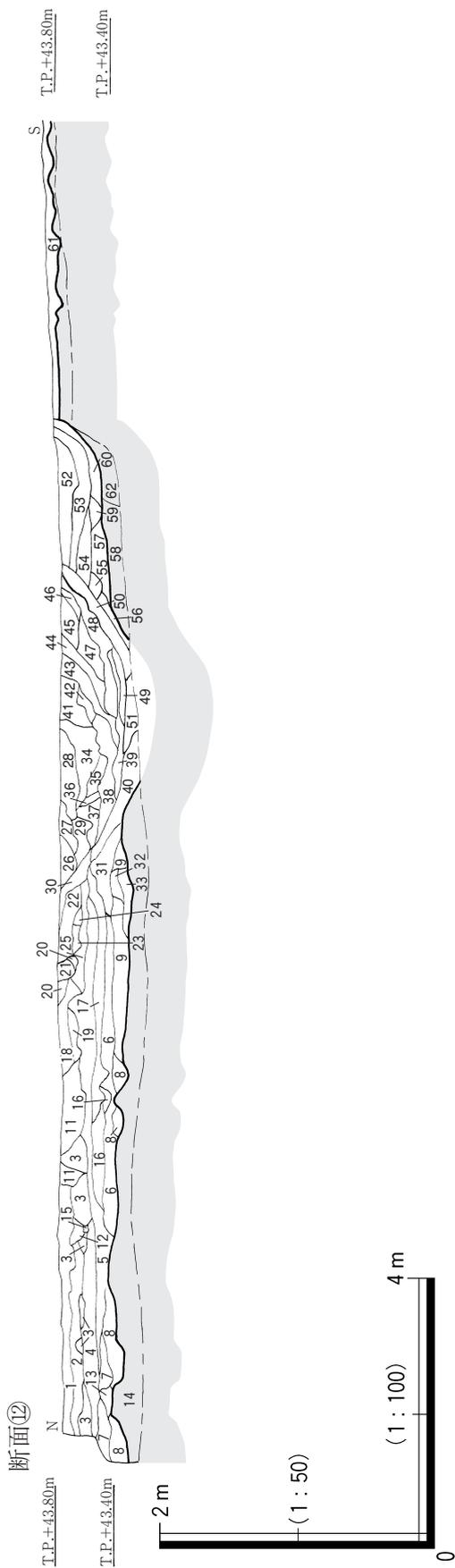
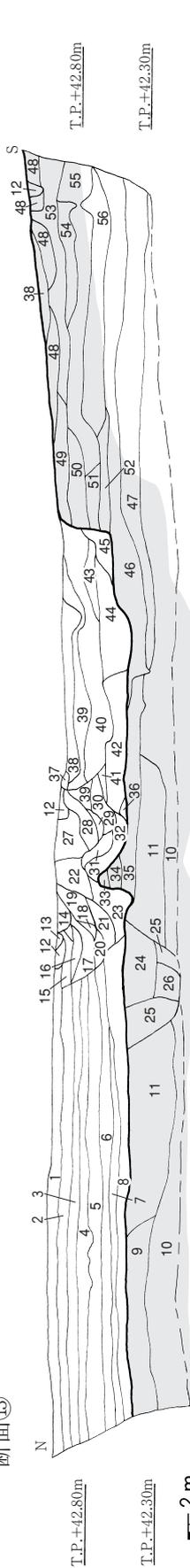


図55 有池遺跡03-1-4 調査区 土層断面図 (断面⑫)

1. 灰褐色7.5Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。黒褐色の粘質土ブロック・直径3mm大の円礫・マンガン斑文を含む)
2. 灰褐色7.5Y R5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。黒褐色の粘質土ブロック・直径3mm大の円礫・マンガン斑文を含む)
3. 赤褐色7.5Y R5/3粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。黒褐色の粘質土ブロック・直径5mm以下の円礫・マンガン斑文含む。2に似るが、粗砂・礫の含有量が多い)
4. 褐色10Y R6/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫・根の貫入痕・灰色粗砂ブロックが入る)
5. 黄灰色2.5Y 6/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。粗砂を伴う跡み込み有)
6. 褐色10Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。粗砂を伴う跡み込み有)
7. 灰褐色10Y R6/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫・根の貫入痕有)
8. 褐色7.5Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざるものを主に、粗砂ブロックが入る)
9. 灰褐色10Y R6/2粘質土 (中砂を主として、細砂、粗砂が均一に混ざる。根の貫入痕有)
11. 灰褐色10Y R4/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の円礫・褐色粘質土ブロックが入る)
12. 褐色10Y R6/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざるものを主に、直径2mm大の円礫が入る)
13. 灰褐色10Y R5/2粘質土 (細～中砂が均一に混ざる)
14. 褐色10Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫・根の貫入痕有。8より粘性有)
15. 灰褐色10Y R4/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫を含む)
16. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫・根の貫入痕有)
17. 灰褐色10Y R5/2粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。明黄褐色粗砂ブロック状に入る)
18. 赤褐色10Y R5/3砂質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、黄褐色粘質土ブロック・直径5mm以下の円礫多く入る)
19. 黄灰色2.5Y 5/4粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫を含む)
20. 赤褐色10Y R6/3粘質土 (黒褐色粘質土がブロック状に混ざる)
21. 赤褐色10Y R4/3粘質土 (20に似るが、黒褐色粘質土が主となる)
22. 黄灰色2.5Y 5/4粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る)
23. 黄灰色2.5Y 6/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる)
24. 黄褐色10Y R5/1粘質土 (23に似た土と、黒褐色粘質土がブロック状に混ざる)
25. 褐色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。赤褐色粘質土と黒褐色粘質土がブロック状に混ざる)
26. 灰褐色10Y R5/2粘質土 (赤褐色粘質土と黒褐色粘質土がブロック状に混ざりあり)
27. 褐色10Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。赤褐色粘質土と黒褐色粘質土がブロック状に混ざる)
28. 赤褐色10Y R4/3粘質土 (細～粗砂の褐色砂質土と、黒褐色粘質土がブロック状に混ざる)
29. 褐色10Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、黒褐色粘質土がブロック状に混ざる)
30. 褐色10Y R6/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、灰色砂質土がブロック状に混ざる)
31. 灰褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る)
32. 灰褐色10Y R6/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。粗砂が僅かに入る)
33. 黄灰色2.5Y 6/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる)
34. 灰褐色7.5Y R5/2粘質土 (中～粗砂が均一に混ざる。褐色粘質土ブロック、直径5mm以下の円礫を含む)
35. 灰褐色10Y R5/2粘質土 (微～粗砂から成る。ラミナ有。褐色粘質土もブロック状に入る)
36. 赤褐色10Y R6/3砂質土 (中～粗砂から成る。ラミナ有)
37. 褐色10Y R6/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、赤褐色粘質土がブロック状に混ざる)
38. 褐色10Y R6/1粘質土 (細～粗砂から成る。ラミナ有)
39. 灰褐色10Y R4/2粘質土 (微～細砂から成る。ラミナ顕著)
40. 黄灰色2.5Y 6/1粘質土 (微～粗砂から成る。ラミナ顕著)
41. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (黒褐色粘質土と、明黄褐色粘質土がブロック状に混ざり合う)
42. 灰褐色2.5Y 6/2粘質土 (細～粗砂から成る。ラミナ顕著)
43. 灰褐色10Y R6/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。黒褐色粘質土ブロックが僅かに入る)
44. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径4mm以下の円礫が入る)
45. 灰褐色10Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。45に似るが、円礫は非常に僅か)
46. 黄灰色2.5Y 5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。45に似るが、円礫は非常に僅か)
47. 灰褐色10Y R5/2粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径4mm大の円礫が入る)
48. 灰褐色10Y R6/2粘質土 (微～粗砂から成る。ラミナ顕著)
49. 灰褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂から成る。ラミナ顕著)
50. 褐色10Y R6/1粘質土 (微～粗砂から成る。ラミナ顕著)
51. 黄灰色2.5Y 6/1粘質土 (微～中砂から成る。僅かにラミナ有)
52. 灰褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、粗砂・礫・マンガン斑文入る)
53. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る)
54. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。53に似るが、微砂の含有量が多い)
55. 黄灰色2.5Y 5/1粘質土 (中～粗砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロックが入る)
56. 褐色7.5Y R6/1粘質土 (細～粗砂から成る。ラミナ有)
57. 褐色10Y R6/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる)
58. 褐色10Y R5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が入る) 3層
59. 赤褐色2.5Y 6/3砂質土 (中～粗砂から成る地山の黄色砂質土ブロックと、褐色粘質土ブロックが混ざり合う)
60. 褐色10Y R3/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る)
61. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (中～粗砂の黄色砂質土と、黒褐色粘質土がブロック状に混ざり合う) 2層
62. 明黄褐色10Y R6/6粘質土 (中～粗砂から成る。最終選層面のベース)

断面⑬



42. 黒色5YR1.7/1シルト (直径2～5mmの砂粒を含む)
43. 黒褐色10YR2/2粗砂
44. オリーブ黒色10Y3/1粗砂 (直径1～2mmの砂粒を含む)
45. 黒褐色7.5Y3/1粗砂
46. 黒色2.5YR1.7/1シルト
47. オリーブ灰色10Y6/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
48. におい黄色2.5Y6/3粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
49. 暗褐色7.5YR3/3粘質土
50. 黒褐色10YR3/2粗砂
51. 灰色5Y4/1粗砂
52. 黒色10YR2/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
53. オリーブ褐色2.5Y4/6粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
54. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
55. 黒色10YR2/1粘質土 (直径3～4mmの砂粒を含む)
56. 暗褐色10YR3/4シルト

1. 暗オリーブ灰色2.5GY3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒、雲母を含む。水田土壌)
2. オリーブ黒色10Y3/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒、雲母を含む。水田土壌)
3. オリーブ黒色7.5Y3/1粘質土 (直径3～4mmの砂粒、雲母を含む。水田土壌)
4. 暗緑灰色7.5GY3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒、雲母を含む。水田土壌)
5. 灰色10Y4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒、雲母を含む。水田土壌)
6. 暗オリーブ灰色5GY3/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒、雲母を含む。水田土壌)
7. 暗青灰色5BG3/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒、雲母を含む。水田土壌)
8. 灰色7.5Y4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒、雲母を含む。水田土壌)
9. オリーブ灰色10Y6/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒、雲母を含む)
10. オリーブ色5Y6/8粗砂
11. オリーブ黒色5Y2/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒、雲母を含む)
12. 黒褐色10YR3/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒、雲母を含む)
13. 灰白色10YR7/1粗砂
14. 暗灰色10YR4/1粘質土 (直径1～3mmの砂粒を含む)
15. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
16. オリーブ黒色7.5Y2/2粘質土 (直径2～4mmの砂粒を含む)
17. 灰色7.5Y4/1粗砂
18. 暗緑灰色7.5GY4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
19. オリーブ黒色10Y3/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
20. 灰色7.5Y5/1粗砂
21. オリーブ灰色5GY4/1粗砂
22. 暗褐色10YR3/4粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
23. 灰色10Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
24. 黒色5Y2/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
25. 緑黒色7.5GY2/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
26. 黒色N2/1粘質土 (直径2～4mmの砂粒を含む)
27. 明黄褐色10YR6/8粗砂
28. 灰色10YR4/1微砂
29. 黒色10YR2/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
30. 黒色7.5Y2/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
31. 緑黒色10GY2/1シルト (直径1～2mmの砂粒を含む)
32. 黒色10YR1.7/1シルト (直径1～2mmの砂粒を含む)
33. 灰色5Y4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
34. 黒色7.5Y2/1シルト
35. 灰オリーブ色7.5Y4/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
36. 黒色10Y2/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
37. 褐色10YR4/4粗砂
38. 褐色10YR4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
39. 灰黄褐色10YR5/2粗砂
40. 黒色7.5YR1.7/1シルト
41. 黄灰色2.5Y4/1粗砂

図56 有池遺跡03-1-4調査区 土層断面図 (断面⑬)



図57 有池遺跡03-1-5調査区 土層断面図 (断面⑭)

1. 暗オリーブ灰色2.5GY3/粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む) 水田
2. 暗黄褐色10YR5/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む) 旧耕土)
3. 暗褐色10YR3/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む) 旧耕土)
4. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
5. 浅黄色5Y7/4シルト (地山)
6. 淡黄色5Y8/3シルト (地山)
7. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
8. 黒褐色5YR3/1粘質土
9. 暗赤褐色5YR3/2砂質土に、灰黄褐色10YR5/2粘質土が斑状に混ざる
10. 黒褐色7.5YR3/2粘質土
11. 黒褐色5YR2/1砂質土 (に、黄褐色10YR5/2粘質土が混ざる)
12. に、黄褐色2.5Y3/3粘質土
13. 黒褐色5YR2/2砂質土
14. 黒褐色7.5YR2/2砂質土 (浅黄色2.5Y7/3微砂が混ざる)
15. 黒褐色10YR2/3砂質土 (浅黄色5Y7/4粘質土が混ざる)
16. オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土 (淡黄色5Y8/3粗砂が混ざる)
17. 黒褐色10YR2/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
18. オリーブ褐色2.5Y4/6粘質土
19. 黄褐色2.5Y5/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
20. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (黒褐色5YR2/2粘質土が混ざる)
21. 灰オリーブ色5Y5/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
22. 黒褐色10YR2/3粘質土に、浅黄色5Y7/4シルトが混ざる
23. 暗赤褐色5YR3/2砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
24. 暗褐色7.5YR4/2粘質土に、浅黄色5Y7/4シルトが混ざる
25. 暗褐色7.5YR3/3粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
26. 黄褐色2.5Y5/3粘質土
27. 黒褐色10YR2/2粘質土
28. 暗オリーブ色5Y4/3粘質土
29. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
30. 黒褐色2.5Y3/2砂質土 (マンガン酸化物が粒状に混ざる)
31. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
32. 黄灰色2.5Y4/1砂質土 (潜埋土)
33. 黒褐色10YR2/2砂質土 (潜埋土)
34. 黒褐色10YR3/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む) 潜埋土)
35. 黒褐色7.5YR3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む) 潜埋土)
36. 黒褐色7.5YR2/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む) 潜埋土)
37. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土 (浅黄色5Y7/4シルトが混ざる)
38. 褐色10YR4/4粘質土
39. 褐灰色10YR5/1砂質土 (現代の杭跡)
40. 暗褐色10YR3/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
41. 黄褐色2.5Y5/4粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
42. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
43. オリーブ黄色5Y6/3粘質土
44. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
45. 黒褐色10YR3/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
46. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
47. 褐灰色10YR4/1粘質土
48. 灰オリーブ色5Y6/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
49. に、黄褐色10YR4/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む) 地山)
50. 黄褐色2.5Y5/3粗砂
51. 黄褐色2.5Y5/4シルト
52. 灰色7.5Y5/6粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む) 旧耕作土)
53. 黄褐色10YR5/6粗砂 (地山)
54. 灰オリーブ色5Y5/2粗砂 (黒褐色5YR3/1粘質土を含む) 地山)
55. 黄褐色2.5Y5/3粗砂 (地山)
56. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
57. に、黄褐色10YR4/3粘質土
58. 黒褐色10YR2/3粘質土
59. 暗褐色10YR3/4粘質土
60. 黄灰色2.5Y4/1粘質土
61. 黒褐色7.5YR2/2粘質土
62. 暗褐色10YR3/3粘質土 (に、黄褐色10YR6/4粘質土が混ざる)
63. に、黄褐色10YR5/3粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
64. 黒褐色7.5YR3/2粘質土
65. 黒褐色7.5YR2/1砂質土
66. 暗灰黄色2.5Y4/2粗砂
67. 灰オリーブ色5Y5/2粗砂
68. 黒褐色2.5Y3/2砂質土
69. に、黄褐色10YR4/3粘質土
70. 黒褐色10YR2/2砂質土
71. 黒褐色7.5YR2/1砂質土
72. に、黄褐色10YR4/3粘質土
73. に、黄褐色10YR5/4粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
74. 黒褐色10YR2/2粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
75. 黒褐色5YR3/1粘質土 (黄褐色10YR5/6粗砂が混ざる)
76. 黒褐色10YR2/3細砂 (直径1～2mmの砂粒を含む)
77. 黒褐色7.5YR3/1砂質土
78. に、黄褐色10YR5/3砂質土 (直径3～5mmの砂粒を若干含む)
79. 黒褐色10YR3/2砂質土
80. 黄褐色2.5Y5/3砂質土
81. 黒褐色2.5Y3/2砂質土 (黄褐色10YR5/8粘質土が混ざる)
82. 褐色7.5YR4/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
83. に、黄褐色10YR4/3粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
84. 灰黄褐色10YR4/2砂質土
85. 灰色5Y4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
86. 黒褐色7.5YR2/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
87. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土
88. 灰オリーブ色5Y4/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
89. 暗褐色7.5YR3/3粘質土
90. 灰オリーブ色5Y4/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
91. 黒褐色10YR3/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
92. 黄灰色2.5Y4/1粘質土
93. オリーブ黒色5Y3/2粘質土
94. 褐灰色7.5YR4/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
95. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
96. 明黄褐色10YR6/8粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
97. 褐灰色7.5YR4/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
98. 褐灰色7.5YR5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
99. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (明黄褐色10YR6/8粘質土を含む)
100. 暗黄褐色10YR4/2粘質土 (黄褐色10YR5/6粗砂が混ざる)
101. 暗褐色7.5YR3/3砂質土 (明赤褐色10YR5/6粗砂が混ざる)
102. に、黄褐色10YR5/4粘質土
103. に、黄褐色10YR5/4粘質土 (黄褐色10YR5/6粗砂が混ざる)
104. 黒褐色10YR2/3砂質土 (明黄褐色10YR6/8粘質土が混ざる)
105. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
106. 黒褐色7.5YR2/2粘質土 (明黄褐色10YR6/8粘質土が混ざる)
107. 黒褐色5YR3/1粘質土
108. 黒褐色5YR2/2粘質土
109. 灰褐色2.5Y5/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
110. 灰オリーブ色5Y4/2砂質土
111. 灰黄褐色10YR4/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
112. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土
113. 黒褐色2.5Y3/2砂質土 (マンガン酸化物を若干含む)
114. 黒褐色10YR3/2粘質土
115. 黒褐色10YR2/3砂質土
116. 黒褐色5YR3/1砂質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
117. 黒褐色5YR2/1砂質土 (粘土塊を多量に含む)
118. 黒褐色10YR3/2粘質土
119. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土
120. に、黄褐色10YR4/3粘質土
121. 黒褐色7.5YR2/2粘質土 (粒状の焼土を若干含む)
122. 灰オリーブ色5Y5/2粗砂
123. 黒褐色2.5Y3/2砂質土 (灰オリーブ色5Y5/2粗砂が混ざる)
124. 黄褐色2.5Y5/3粗砂
125. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
126. 暗灰黄色10YR4/2粘質土 (黄褐色10YR5/6粗砂が混ざる)
127. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
128. に、黄褐色10YR4/3粘質土
129. オリーブ黒7.5Y3/2粘質土
130. 灰オリーブ色5Y4/2砂質土
131. 灰色5Y5/1粘質土
132. 黒褐色2.5Y3/2砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
133. 暗褐色10YR3/4砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
134. オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
135. 灰褐色7.5YR4/2粘質土
136. 黒褐色10YR3/2粘質土
137. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土 (黄褐色10YR5/6粗砂が混ざる)
138. 暗灰黄色2.5Y5/2細砂 (直径1～2mmの砂粒を含む)
139. 明黄褐色10YR6/8シルト (地山)
140. 灰褐色7.5YR4/2砂質土
141. 褐灰色10YR4/1砂質土 (黄褐色10YR5/6粗砂が混ざる)
142. 黄褐色2.5Y5/3粘質土 (黒褐色7.5YR3/1砂質土が混ざる)
143. オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土
144. 褐灰色10YR4/1砂質土 (明黄褐色10YR6/8粘質土が混ざる)
145. 黒褐色10YR3/1粘質土 (黄褐色10YR5/8粘質土が混ざる)
146. 灰黄褐色10YR5/2砂質土
147. 黄灰色2.5Y4/1シルト (地山)
148. 灰黄褐色10YR4/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
149. 褐灰色10YR5/4粘質土
150. 暗黄褐色10YR5/2粘質土
151. 灰黄褐色10YR4/2シルト (ラミナ顕著)
152. 浅黄色2.5Y7/4粗砂 (褐色7.5YR4/3粘質土が層状に堆積)
153. に、黄褐色2.5Y6/3粗砂 (花崗岩を多量に含む)
154. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
155. 褐灰色7.5YR4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
156. 浅黄色7.5Y7/3粗砂
157. に、黄褐色10YR5/4粗砂
158. 黄褐色2.5Y5/3粗砂
159. 灰色7.5Y5/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
160. 灰褐色10YR6/4粘質土 (直径2～3mmの砂粒を含む)
161. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
162. 灰色7.5Y6/1粘質土
163. 褐色7.5YR4/3粘質土

図58 有池遺跡03-1-5調査区 土色注記 (断面⑭)

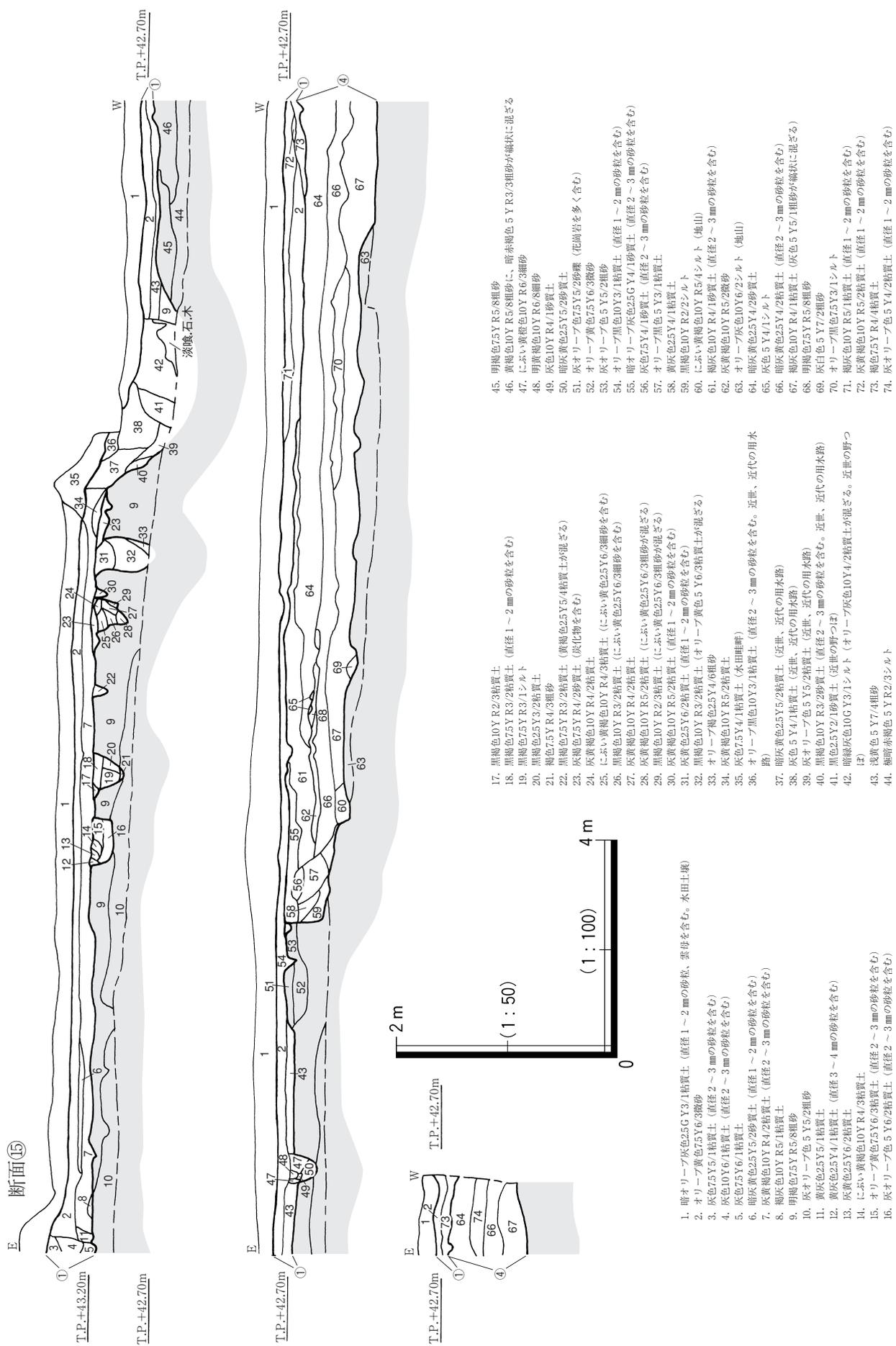
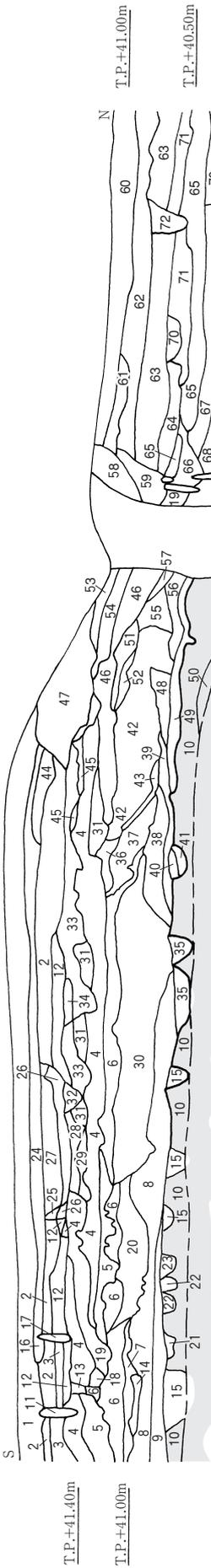
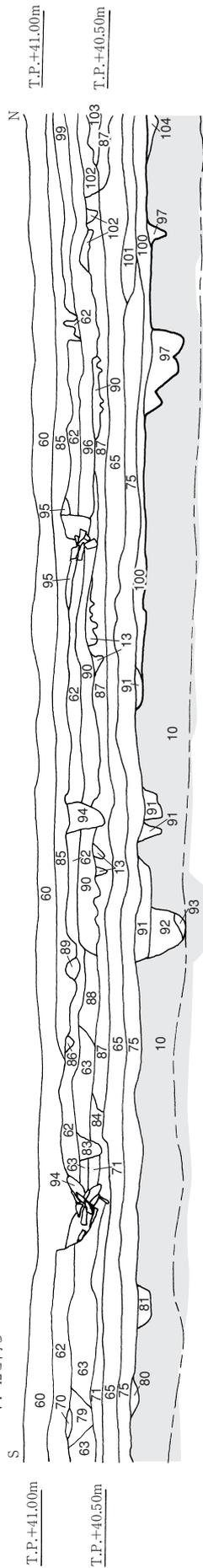


図59 有池遺跡03-1-5調査区 土層断面図 (断面⑮)

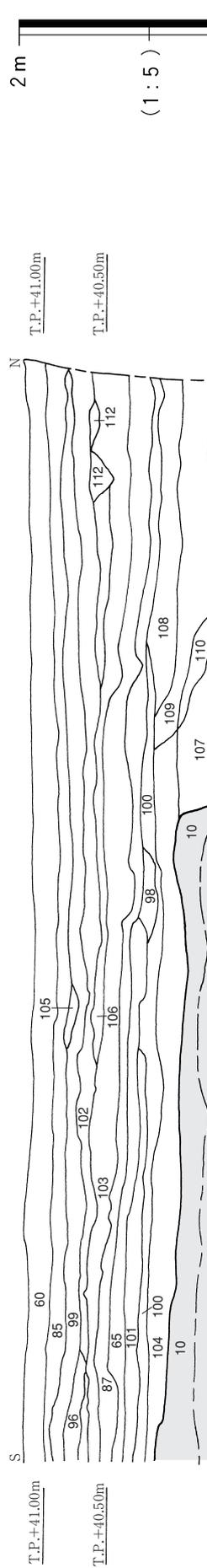
断面⑩



1. 黒褐色2.5Y3.2砂質土 (中砂に直径5mm大の礫が混ざる。粘性弱い)
2. 暗灰黄色2.5Y5.2砂に近い砂質土 (細砂に直径2～5mm大の礫が混ざる。4が斑状に混ざる)
3. におい黄褐色10YR5.3砂質土 (細砂～粗砂)
4. 明褐色7.5YR5.8砂 (粗砂～直径3mm大の礫) と、赤褐色の砂礫が斑状に混ざる
5. オリブ黄色5Y6.3砂 (粗砂～5mm大の礫) 4に近い部分は、明黄褐色2.5Y6.8に染まる
6. 43と同じ
7. 42と同じ



8. 灰色5Y4/1砂質土 (粗砂・直径5mm大の礫が混ざる)
9. 灰色7.5Y4/1砂質土 (直径5mm大の礫が混ざる)
10. オリブ黄色5Y5.3砂質土 (粘性強い。中砂～直径5mm大の礫が多く混じる)
11. 17に、浅黄色2.5Y7/4砂 (粗砂～直径5mm大の礫) が、層状に混入
12. 灰オリブ色5Y5.2砂質土 (細砂に直径2～5mm大の礫が混ざる) に、4とオリブ黄色5Y6/3シルトがブロック状に混入
13. オリブ黄色5Y6/3シルトと、オリブ灰色2.5Y6/1シルトが層状に混ざり合う



14. 8に、オリブ灰色2.5Y6/1シルトのブロックが混入
15. 暗オリブ灰色2.5GY4/1粘質土 (粗砂～直径1mm大の礫が大量に混ざる)
16. オリブ黒色5Y3/1砂質土 (中砂に直径5mm大の礫が混ざる。粘性弱い)
17. 灰色5Y4/1砂質土 (中砂に直径5mm大の礫が混ざる。粘性弱い)
18. 上層は4、下層は5に似る
19. オリブ黄色5Y6/3砂 (細砂) と、オリブ灰色2.5GY6/1砂 (細砂) がラミネ状に混ざり合い、明黄褐色2.5Y7/6砂 (粗砂～礫) や、明褐色7.5YR5/8 (微砂～粗砂) が混入

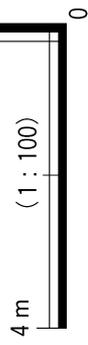


図60 有池遺跡03-1-6調査区 土層断面図 (断面⑩)

20. 42と同じ
21. 15に炭化物が混ざる
22. 灰色7.5Y4/1砂質土 (粗砂、粘性有)
23. 灰色5 Y4/1砂 (粗砂～直径5mm大の礫)
24. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土 (中砂に直径5mm大の礫が混ざる。粘性弱い)
25. 灰色5 Y4/1砂に近い砂質土 (粗砂～5mm大の礫)
26. 4に、黒色2.5Y2/1砂に近い砂質土 (微砂～細砂) と、黄灰2.5Y4/1砂質土 (細砂～直径5mm大の礫) がブロック状に混入
27. 15に黄褐色10Y R6/4砂 (粗砂～直径3mm大の礫)
28. 黄灰2.5Y4/1砂質土 (中砂)、灰オリーブ色5 Y5/2砂質土 (細砂) と、暗灰黄色2.5Y5/2砂 (粗砂～直径3mm大の礫) が層状に堆積する。オリーブ黄色5 Y6/3シルトがブロック状に混入
29. 浅灰色2.5Y7/4砂 (粗砂～直径5mm大の礫)・赤褐色5 Y R4/8礫 (直径5mm以下)・オリーブ黄色5 Y6/3シルト・オリーブ灰色2.5G Y6/1シルトがブロック状に混入
30. 上半は37、下半は42に似る
31. 浅黄色2.5Y7/4砂礫、赤褐色5 Y R4/8砂礫・明黄褐色10Y R6/8砂礫が層状に混ざる
32. 黄灰2.5Y4/1砂質土 (細砂～直径2mm大の礫)・灰オリーブ色5 Y5/2砂礫・暗灰黄色2.5Y5/2砂礫が層状に堆積する中に、赤褐色5 Y R4/81～5mm大の礫が入る
33. オリーブ黄色5 Y6/3シルトと、オリーブ灰色2.5G Y6/1シルトがラミナ状に混ざり合い、明黄褐色2.5Y7/6砂礫や、明褐色7.5Y R5/8砂 (微砂～粗砂) が混入
34. 明褐色7.5Y R5/8砂礫 (オリーブ黄色5 Y6/3シルトがブロック状に混入する)
35. 灰色5 Y4/1粘質土・灰オリーブ色5 Y5/2細砂・黄褐色2.5Y5/4砂礫・灰オリーブ色7.5Y5/3粘質土が塊状に混ざり合う
36. 灰7.5Y4/1砂質土 (中砂～粗砂) からなる。オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土がブロック状に混ざる
37. オリーブ黄色5 Y6/3細砂と、オリーブ灰色2.5G Y6/1砂質土・灰色7.5Y4/1粘土の小塊が混入
38. 黄灰黄色2.5Y4/1砂質土 (粗砂) からなる。粘性弱い)
39. 灰オリーブ色5 Y4/2砂質土 (粗砂)
40. オリーブ黒色7.5Y3/2砂質土 (粗砂・直径3mm大の礫) からなる。暗オリーブ7.5Y4/3粘質土が塊状に混ざる
41. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1砂質土 (粗砂) からなる。
42. オリーブ黄色5 Y6/3シルト (オリーブ灰色2.5G Y6/1シルトと灰色7.5Y4/1粘土の小塊が混入)
43. 灰色7.5Y4/1砂質土 (粗砂) からなる。オリーブ灰色2.5G Y6/1シルトがブロックと、砂礫が混ざる
44. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (細砂～直径5mm大の礫) からなる。粘性弱い)
45. 淡黄色2.5Y8/3砂 (粗砂～直径5mm大の礫) からなる
46. 灰色5 Y4/1砂質土 (中砂)
47. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (中砂～直径5mm大の礫) からなる。黒色5 Y R1. 7/1砂質土が塊状に混ざり
48. 黄褐色2.5Y5/4砂質土 (粗砂)・暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (粗砂)・灰色5 Y4/1砂質土 (細砂～粗砂) が層状に堆積
49. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土 (粗砂) からなる
50. オリーブ灰色5 G Y6/1粘質土 (粗砂が多量に混ざる)
51. 42と同じ
52. 黄灰黄色2.5Y4/1砂質土 (中砂) からなる
53. 15に黄褐色10Y R5/3砂質土 (微砂～直径5mm大の礫) からなる。黒色5 Y R1.7/1砂質土が塊状に混ざり
54. 33に、黒色5 Y R1.7/1砂質土 (微砂～直径5mm大の礫) からなる
55. 灰色10Y4/1砂質土 (粗砂)
56. 灰色5 Y4/1砂質土 (粗砂)
57. 42と同じ
58. 灰色5 Y4/1砂質土 (細砂) からなる。浅黄色2.5Y7/3砂が層状に混入
59. 灰色5 Y4/1砂質土 (細砂)・浅黄色2.5Y7/3砂礫が層状に堆積
60. オリーブ黒色5 Y3/1粘質土 (細砂) からなる。直径3mm大の礫が混ざる
61. 45に、62が塊状に混ざる
62. オリーブ黒色5 Y3/1粘質土 (細砂) からなる。直径5mm大の礫が混ざる
63. 灰色5 Y4/1砂質土 (細砂) と、灰オリーブ5 Y6/2砂 (細砂) ブロック、直径5mm大の礫が混ざる
64. 70に、13がブロック状に混ざる
65. 暗灰黄色2.5Y5/2砂 (中砂～粗砂) からなる。灰色5 Y4/1砂質土がブロック状に混ざる)
66. 暗灰黄色2.5Y5/2砂礫・明黄褐色2.5Y6/6粗砂が層状に堆積。直径15mm大の礫を含む)
67. 暗灰黄色2.5Y4/2砂 (粗砂)
68. 灰色5 Y4/1砂 (中砂) からなる。15に黄褐色2.5Y6/4粗砂がブロック状に混ざる)
69. 灰色5 Y4/1砂質土 (粗砂)・灰色7.5Y4/1粘質土・灰オリーブ色7.5Y5/2砂礫・灰オリーブ色5 Y5/2砂礫がブロック状に混ざる
70. 浅黄色5 Y7/4直径1～5mm大の礫
71. 灰色5 Y4/1砂質土 (細砂) に2～5mm大の礫混入)・灰色10Y4/1 (細砂)・13や45がブロック状に混ざり
72. 灰色10Y5/1砂質土 (中砂～5mm大の礫) からなる。4が塊状に混入。最深部に竹の導水管)
73. 灰色5 Y5/1砂質土 (粗砂～2mm大の礫) からなる
74. オリーブ灰色10Y5/2砂質土 (細砂～粗砂) からなる)
75. 灰色7.5Y4/1砂質土 (中砂～直径2mm大の礫) からなる)
76. 灰色5 Y4/1砂質土 (中砂～粗砂) からなる)
77. 灰色5 Y5/4砂質土 (中砂)・灰オリーブ色5 Y6/2砂 (細砂)・15に黄褐色2.5Y6/4砂礫がラミナを成す
78. 灰色5 Y4/1砂質土 (中砂) と、オリーブ灰色2.5G Y5/1砂質土 (細砂) がブロック状に混ざる
79. 灰色5 Y4/1砂質土 (細砂) に直径5mm大の礫が混ざる。竹と瓦から成る導水管有)
80. オリーブ灰色10Y5/2砂質土 (粗砂) からなる。灰色5 Y4/1砂質土がブロック状に混ざる)
81. 黄灰黄色2.5Y4/1粘質土 (粗砂を多く含む)
82. 灰色10Y4/1砂質土 (粗砂～直径5mm大の礫)
83. 黄灰黄色2.5Y4/1砂質土 (中砂～直径2mm大の礫) と、灰黄褐色10Y R5/2砂 (中砂) がラミナ状に堆積
84. 71と同じ
85. 灰色5 Y4/1砂 (中砂～粗砂) 直径5mm大の礫が混ざる
86. オリーブ黒色5 Y3/1砂質土 (細砂～直径3mm大の礫)
87. 灰色5 Y4/1砂質土 (粗砂) に、黄褐色10Y R5/8砂質土 (微砂) が塊状に混ざる
88. 灰色10Y4/1砂質土 (中砂)。直径2mm大の礫が混ざる)
89. 灰色5 Y5/1砂 (細砂) と、オリーブ黄色5 Y6/3砂 (粗砂) が層状に堆積
90. 暗オリーブ灰色5 G Y4/1砂質土 (細砂) と、オリーブ黄色5 Y6/3シルトがラミナ状に堆積し、直径5mm大の礫を含む
91. 黄灰黄色2.5Y4/1砂質土 (粗砂) からなる)
92. 15に黄褐色2.5Y6/3砂 (粗砂～直径3mm大の礫) からなる)
93. 暗灰黄色2.5Y4/2砂礫
94. 灰色10Y4/1砂質土 (粗砂～直径5mm大の礫) からなる)
95. 灰色5 Y4/1砂質土 (細砂) からなる。直径5mm大の礫が混ざる)
96. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (細砂) からなる。明黄褐色10Y R6/8砂礫が混ざる)
97. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (粗砂が混ざる)
98. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土 (粗砂が多く混じる)
99. 灰オリーブ色5 Y5/2砂 (微砂～粗砂) からなる。明黄褐色10Y R6/8砂礫が混ざる)
100. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土 (粗砂～直径2mm大の礫) からなる)
101. 黄灰黄色2.5Y4/1砂質土 (中砂～粗砂) からなる)
102. 浅黄色5 Y7/4シルトと、灰オリーブ色5 Y5/5粘質土が塊状に混ざり合う。小石を含む
103. 灰オリーブ色5 Y5/2砂質土 (中砂～粗砂) からなる。小石を含む)
104. 黒褐色2.5Y3/1粘質土 (中～粗砂) からなる)
105. 灰オリーブ色5 Y5/3砂 (細砂) からなる。直径5mm大の礫が混ざる)
106. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (細～中砂) からなる。直径5mm大の礫が混ざる)
107. 黒褐色2.5Y3/1粘質土 (直径5mm大の礫を含む)
108. 灰色7.5Y5/1粘質土 (粗砂が多く混ざる)
109. 灰色5 Y4/1粘質土 (粗砂) からなる)
110. オリーブ黒色5 Y3/1粘質土 (粗砂) からなる)
111. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (細～粗砂) からなる)
112. 90と同じ。粒子がやや大きい

図61 有池遺跡03-1-6調査区 土色注記 (断面⑩)

第2節 遺構

1. 1調査区 (図63～68)

調査区の西端に位置し、三角形を呈する調査区である。西辺は有池遺跡02-1と接し、北辺は市道を挟んで2調査区と接する。

最終遺構面の形状は大きくみて2段の平場からなるが、いずれの段においてもほぼ全面的に溝、ピット、井戸、土坑等の遺構を検出した。検出したピットは多数にのぼり、掘立柱建物を9棟復元した。特筆されるのは周囲を溝で囲われた屋敷地が複数存在したとみられる点である。前節でも述べたように後世の水田造成に伴い、かつての地表面はかなり削平されたと考えられる。集落が存在していた当時は東から西に向かってのびる微高地の緩傾斜面を、必要に応じて整形しながら居住域が形成されたものと考ええる。

屋敷地は上段の平場で検出したものと下段の平場で検出したものとの、規模や建物の構造ないし配置

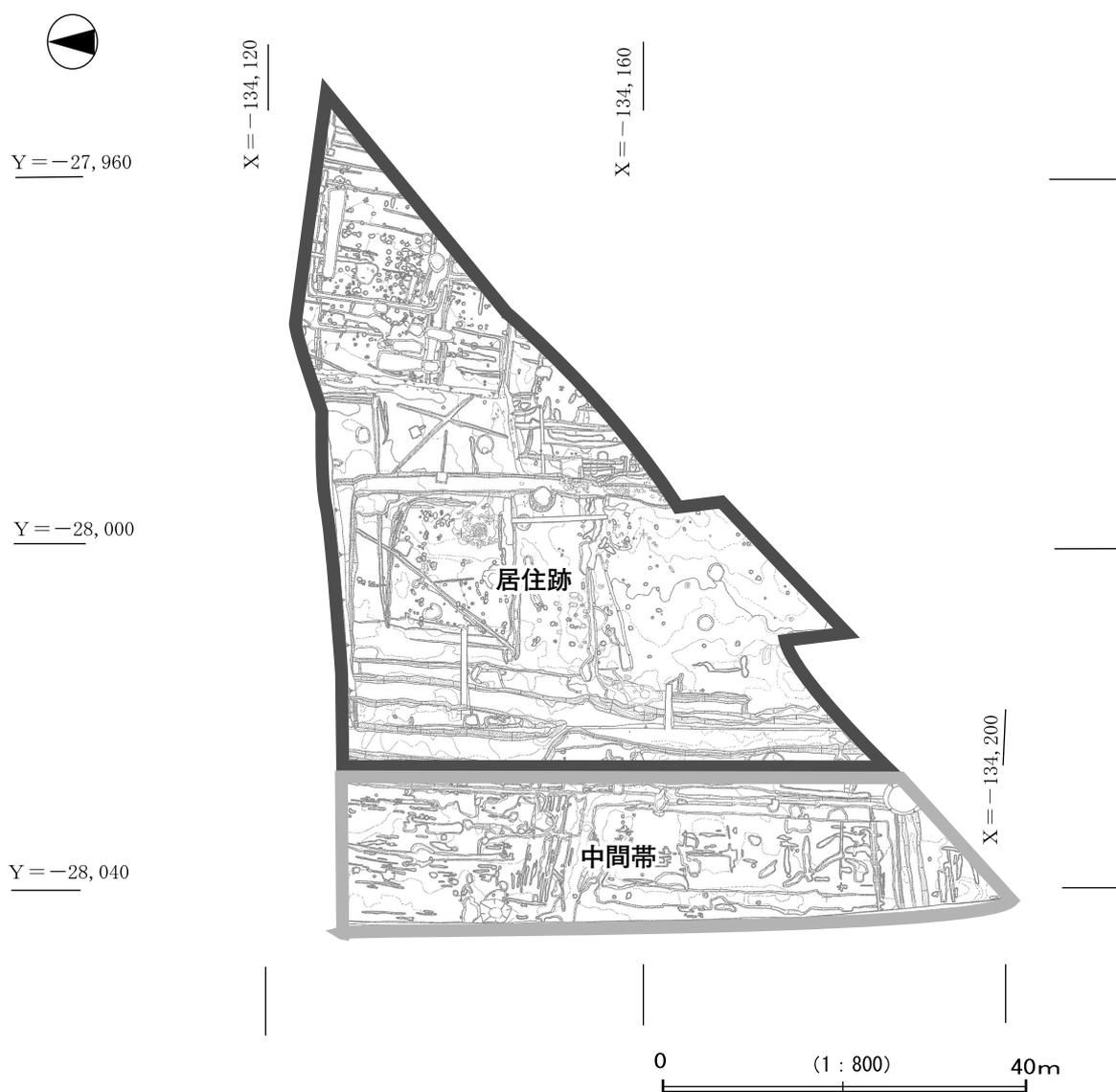


図62 有池遺跡03-1-1調査区 景観概念図

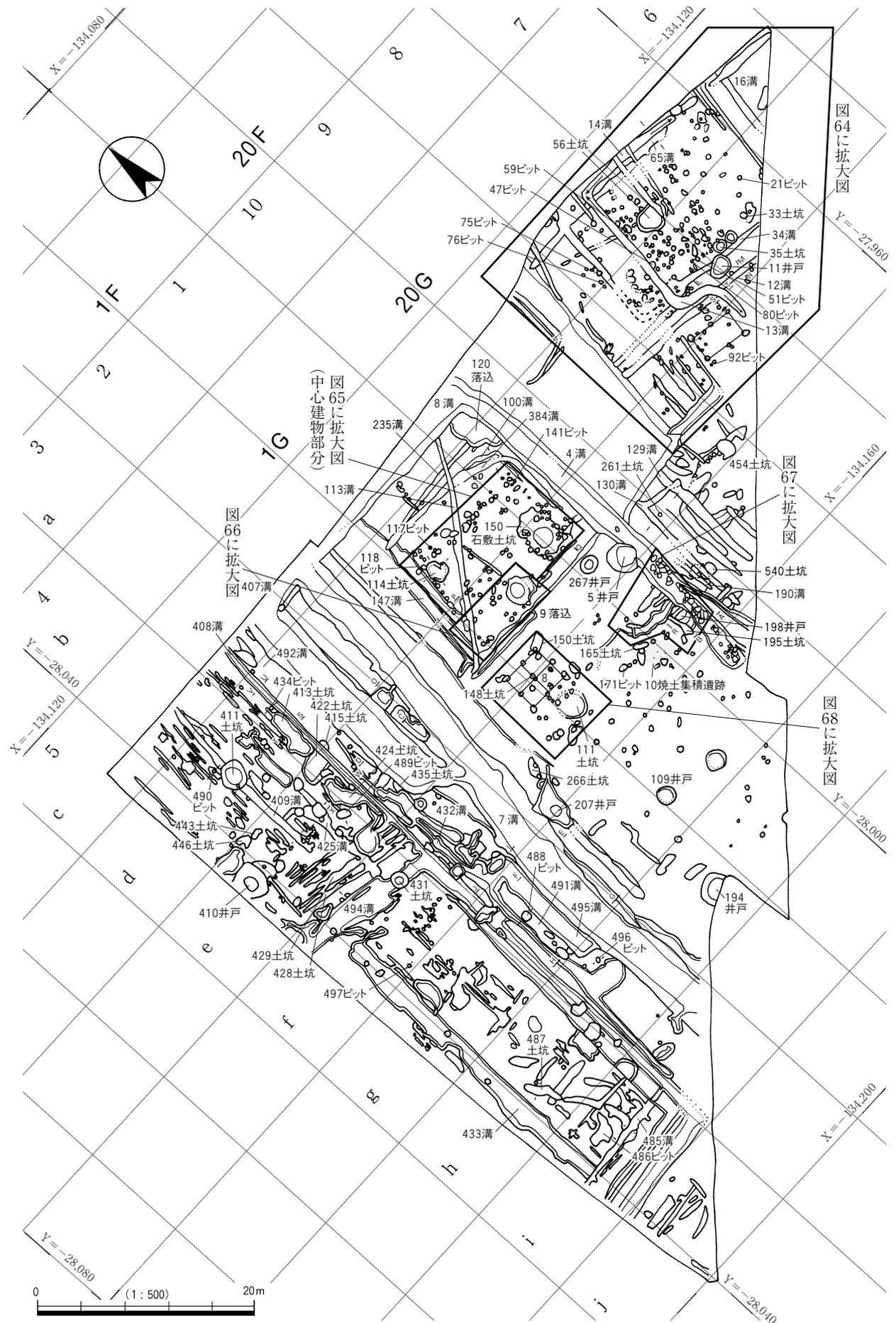


図63 有池遺跡03-1-1調査区 平面図 (全体)



図64 有池遺跡03-1-1 調査区 平面図 (部分拡大)

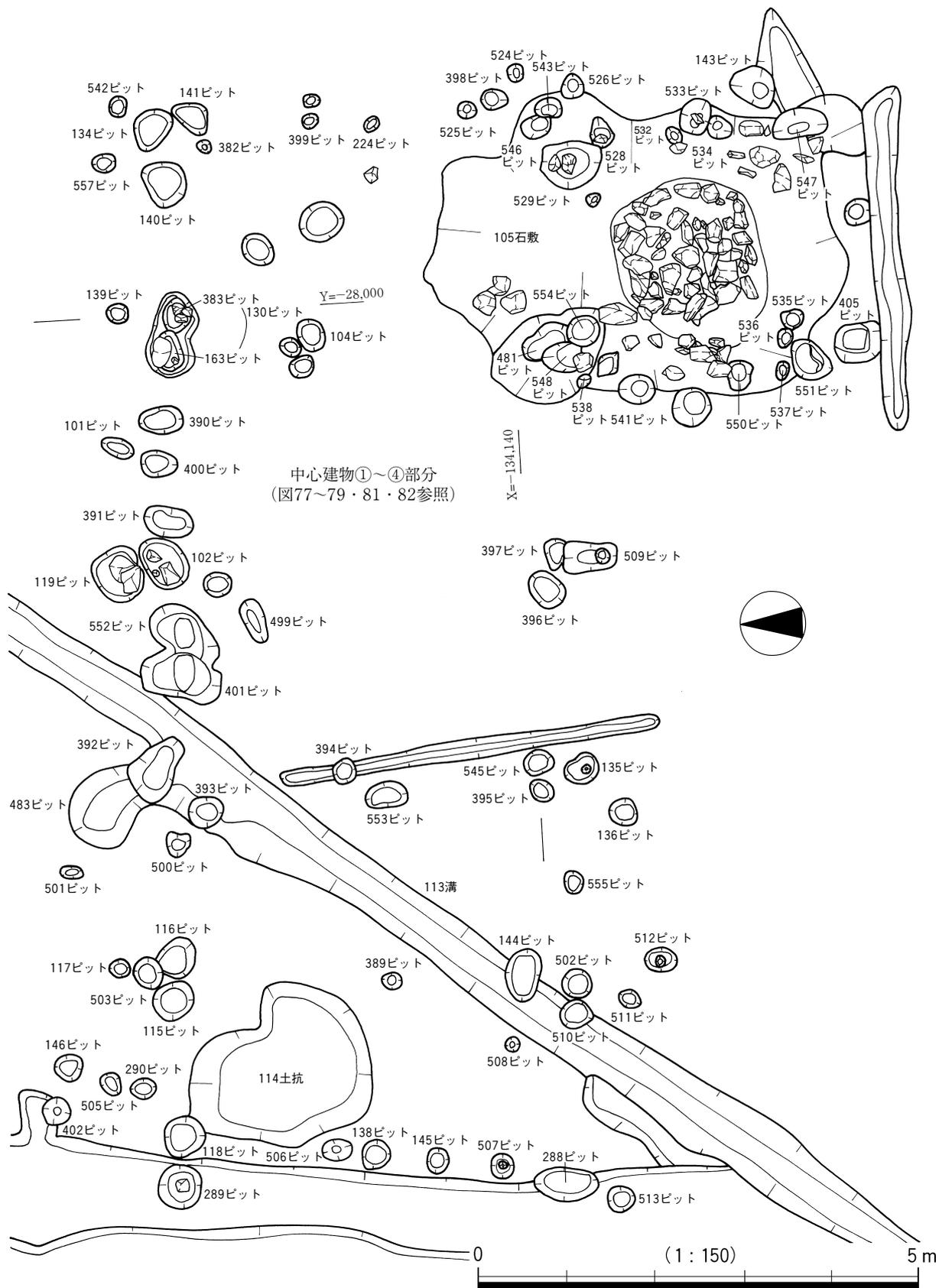


図65 有池遺跡03-1-1 調査区 平面図 (部分拡大)

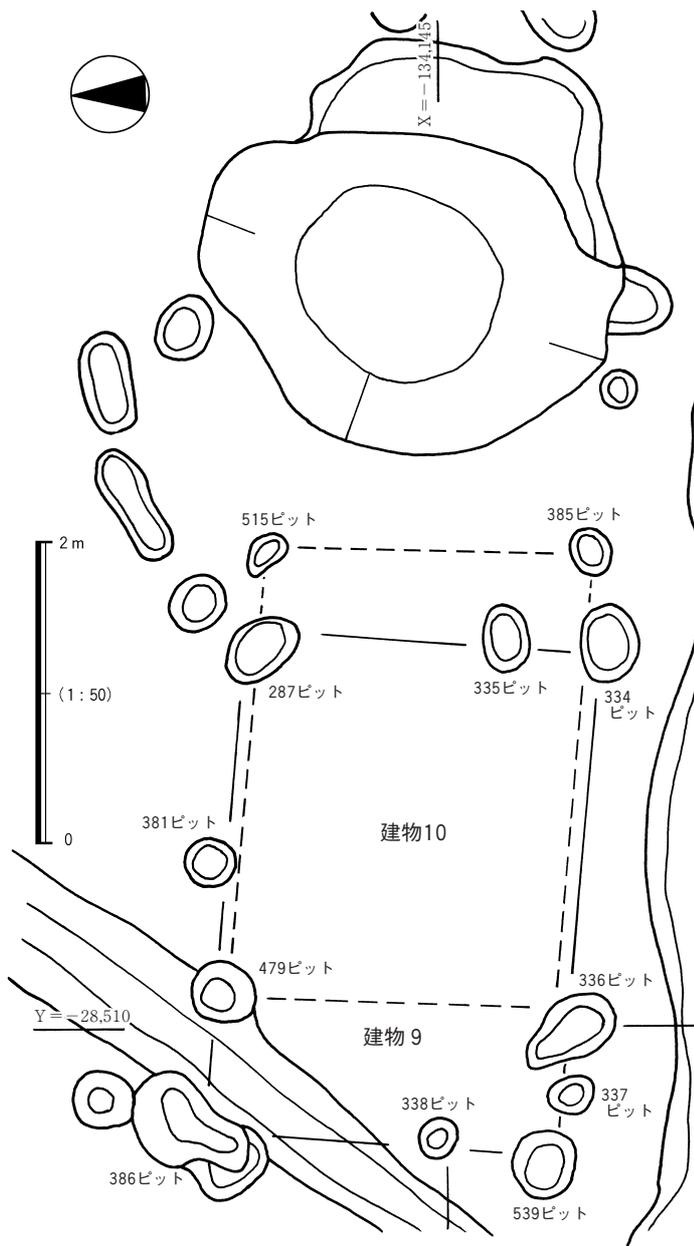


図66 有池遺跡03-1-1 調査区 平面図 (部分拡大)

に顕著な差が認められる。特に下段で検出した屋敷地は周囲を、基幹水路を兼ねるとみられる大規模な溝で「コ」の字状に区切られている。その内部では母屋となる大規模な掘立柱建物を中心として、複数の建物や井戸を井然と配置されている。いずれの屋敷地も遺構の切り合いが顕著なことから、建物の建て替えは数時期にわたると見られる。

屋敷地の西辺を限る溝より西の部分では耕作痕跡とみられる溝と、ピット・土坑が混在する状況が認められた。この部分は他と比べて遺構密度がやや低い傾向もみられたことから、中間帯ととらえた(図62)。

建物1(図69) 北辺と南辺が建物2の北辺・南辺とそれぞれほぼ同じ線上に位置し、建物の方向軸も近似することから、2者には強い相関関係が認められる。

東西2間(5.1m)×南北2間(4.6m)、建物の主軸方向はN-11°-Eを指す。建物の中央にも柱穴を有し、一見すると総柱建物だが、西辺の柱列で中央に位置するはずの28ピットが、20ピット・305ピットの並びより南に寄っている。この3本の柱で棟木を支えていたとは考えにくいことから、302・305・298ピットで棟木を支える南北棟だったと考える。西辺の柱列がイレギュラーな配置になっている要因として、そこに入出口が設けら

れていた可能性が考えられるが、この柱の偏在によって生じる隅柱への加重の偏りを緩和するために建物中央に柱が設けられたことも推測される。

建物の北辺にある313ピットはちょうど299ピットと302ピットの間位置するのに加え、他の柱穴に比べて径が小さいことから東柱と考える。20ピットは切り合い関係が見られたが、20ピットに切られているピットとセット関係をもつ柱列の存在は認めなかった。この建物が部分的に修復された可能性も考えられる。柱穴間は313ピットを除くと、東西列が平均2.3m、西辺の柱列を除外すると南北列が平均2.3mと、規則的な配置の柱穴間では柱間の寸法が統一されている。床面積は約23.5㎡である。

掘方の平面形態は円形で直径45~55cm、深さは20~30cmと浅い。302ピット、299ピット、28ピットで柱穴内から15~30cm大の礫を検出した。うち299ピットから出土した礫は、平坦面が斜めに持ちあがったような状況で、元の位置から動いたとみられるが、それぞれ平坦面を持つ礫で、根石としてピット内に置かれたと考える。

304ピットから土師器片が1点、20ピットから瓦器片が1点、311ピットから瓦器片4点と土師器片2点が出土したが、いずれも細片で時期は特定できない。

建物2（図70）北辺と南辺が建物1の北辺・南辺とそれぞれほぼ同じ線上に位置し、建物の方向軸も近似することから、2者には強い相関関係が認められる。

東西2間（3.9m）×南北2間（4.9m）で南北にやや長い。建物の主軸方向はN-10°-Eを指す。柱穴間は東西列が平均1.95m、南北列が平均2.4mで、床面積は約19.1㎡である。東西より南北方向に長い点、284ピットと24ピットの位置が中央よりやや南側に寄っている点からみて、南北棟と考える。建物1の西辺の柱列にみられるような顕著な偏在はないものの、桁行中央の柱穴がやや南に寄る点は、建物1の構造を踏襲した結果と言えるかもしれない。293ピットの項で述べているように、建物2の西辺には

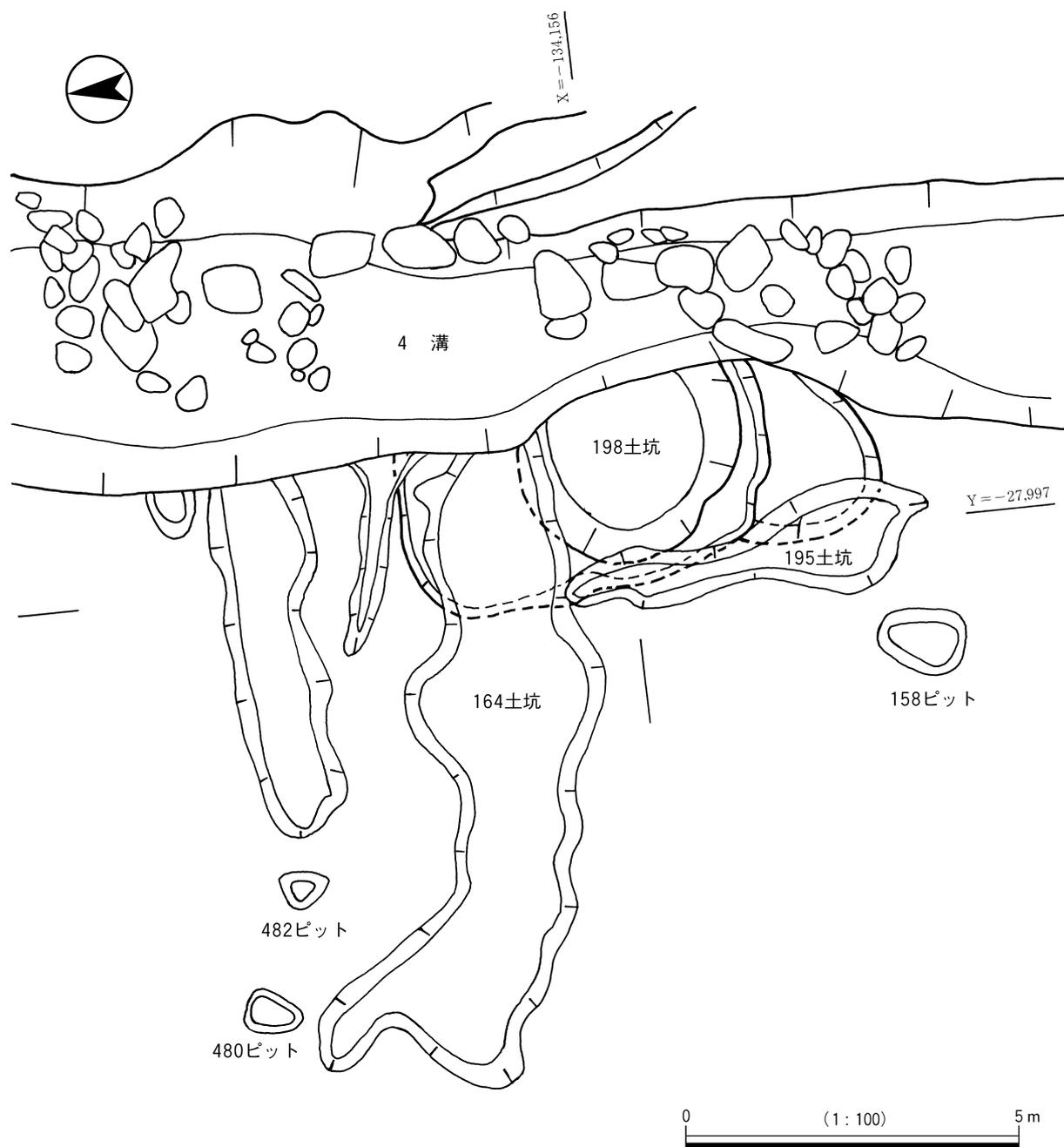


図67 有池遺跡03-1-1 調査区 平面図（部分拡大）

庇もしくは縁がついていた可能性がある。

掘方の平面形態は円形で直径35～50cm、断面形態は皿状、台形、U字形があるが、深さは15～30cmと極めて浅い。541ピットは平面形態が南北に長い楕円形で、柱痕も認められなかったことから、建物の廃絶に際して、柱が引き抜かれた可能性もある。概して柱穴の直径は建物1のそれに比べると小さい。284ピットと317ピットに花崗岩が伴ったが、後者は遺構の検出面で石を検出しているの、それは317ピットより後に掘られた柱穴に伴うものの可能性もある。

遺物は出土しなかったが、55ピットを切っている56土坑から出土した遺物より、この建物の時期の下

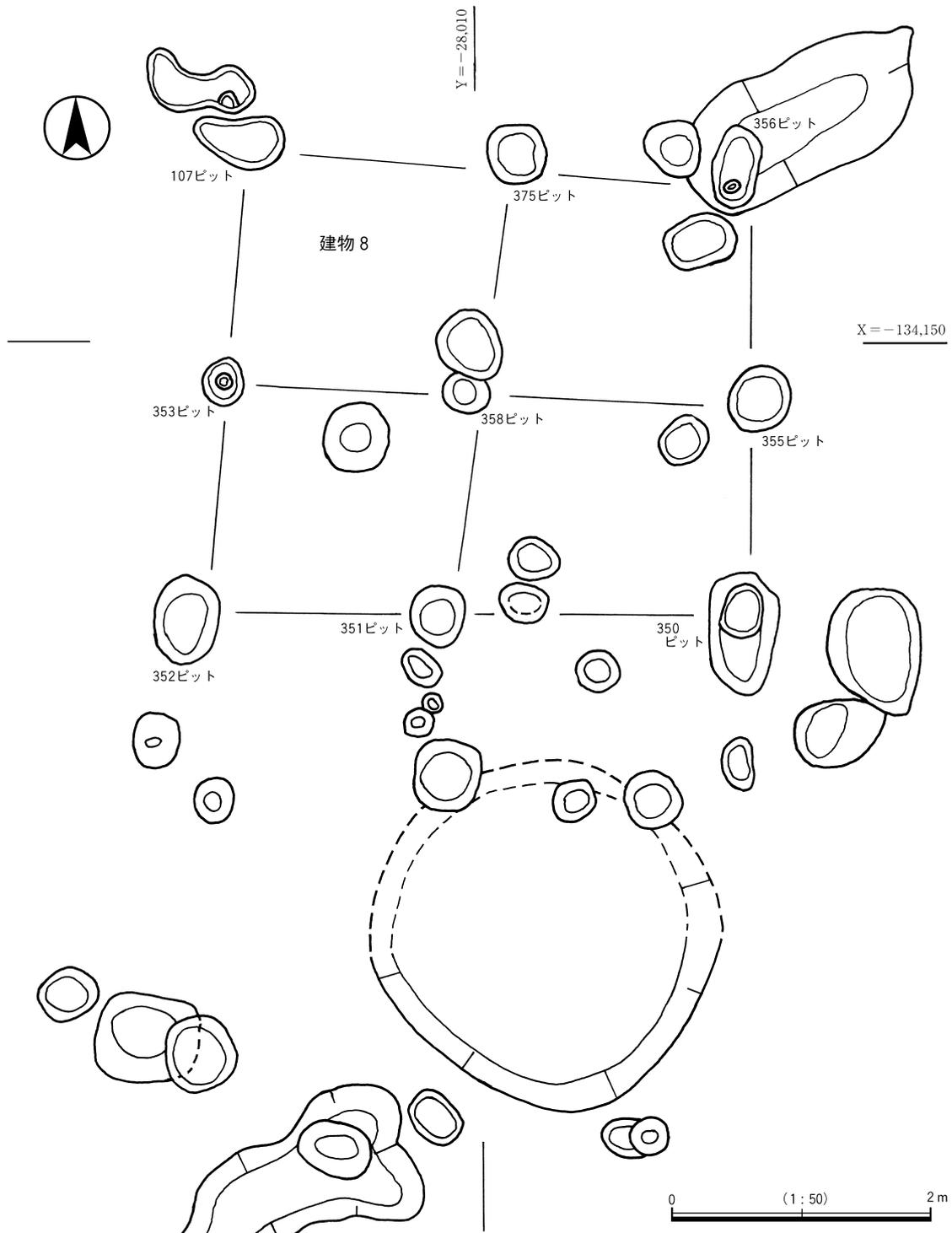


図68 有池遺跡03-1-1 調査区 平面図（部分拡大）

限は13世紀後半～14世紀前半とみなすことができる。

建物 3 (図71) 建物の位置、方向軸、規模などからみて、建物 4 と高い相関性を有することがみとれる。ピットが集中する範囲で検出しており、建物 4 以外にもこれと相関性をもつ建物が存在した可能性は高い。

東西 2 間 (4.5m) × 南北 2 間 (4.1m) とやや東西方向に長いので、東西棟と考えると、主軸方向は W - 6° - N を指す。柱穴間は東西列が平均 1.8m、南北列が平均 1.6m で、床面積は約 18.45m² である。

建物の梁間と桁行とでそれぞれの長さが近似するが、北西隅と南東隅でコーナーの角度が 90 度をやや上回るのので、平面形は平行四辺形ぎみである。北辺の柱列を見るとピットの中心はほぼ直線状に並ぶが、42ピットで根石とみられる角礫をピットの中心より南に寄ったところで検出したため、それと結びと柱列の中央がやや内側に入り込む。建物南辺の中央にあるべきピットの位置は、291ピットの一部を

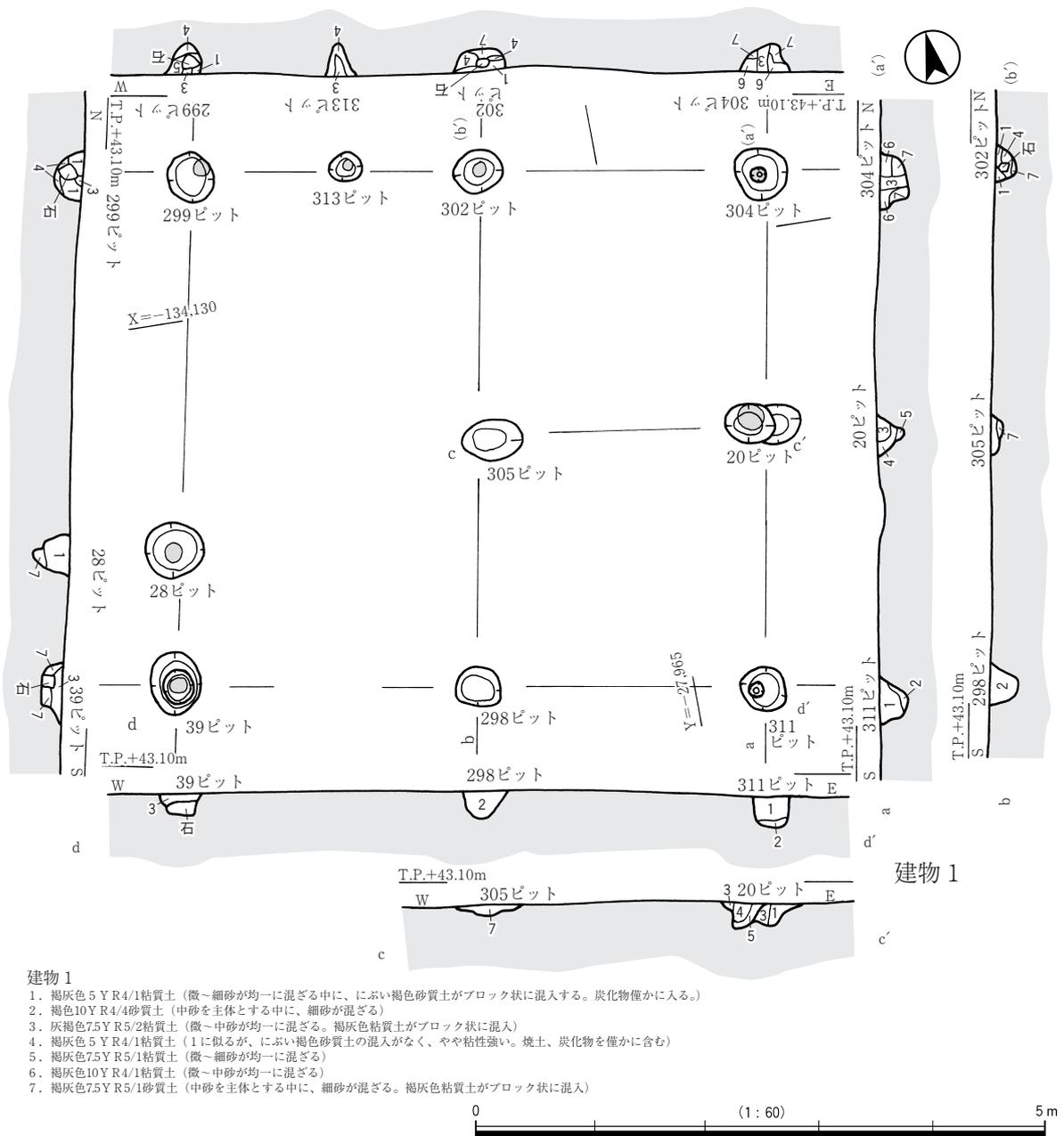
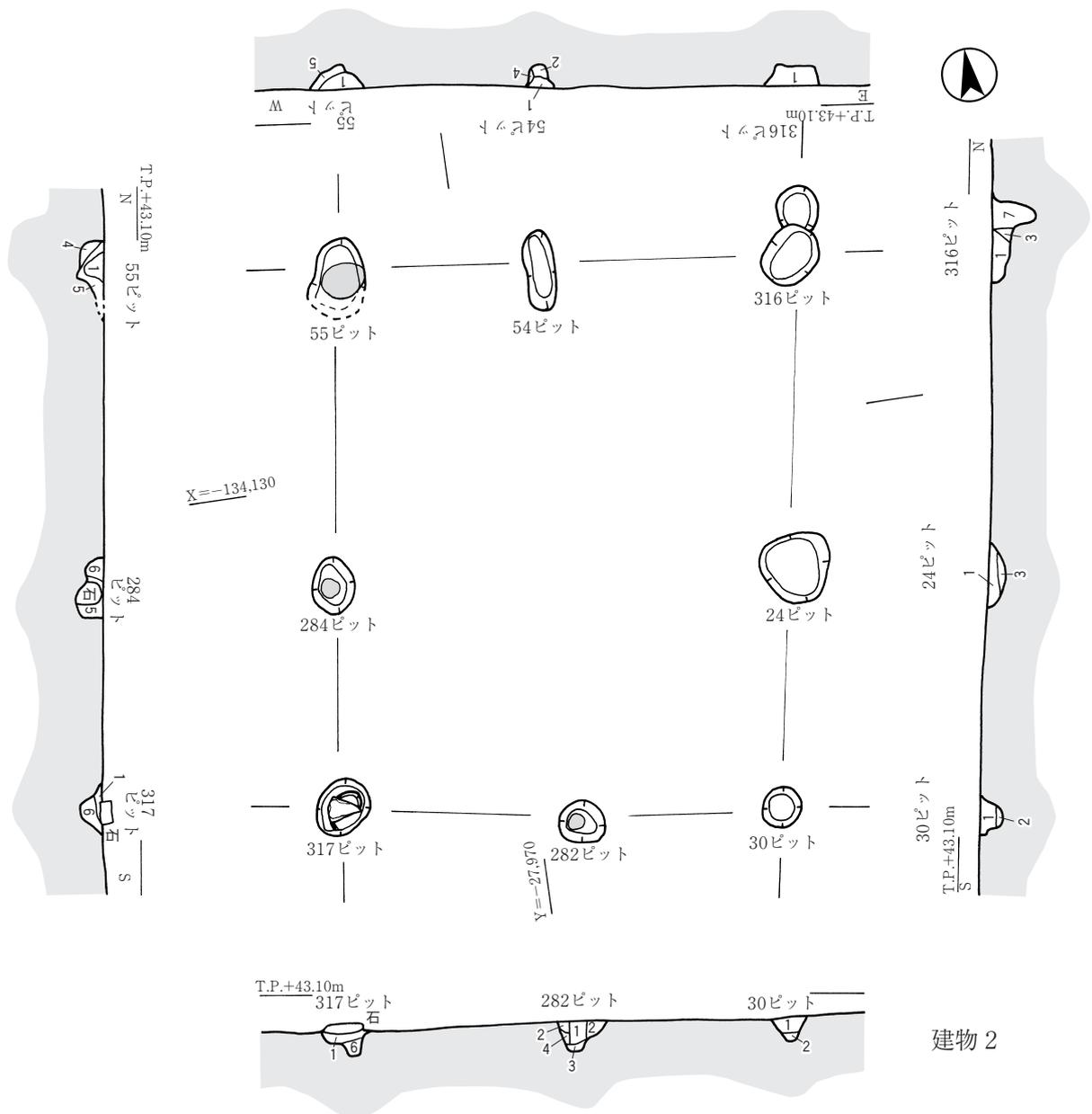


図69 有池遺跡03-1-1 調査区 建物 1 平・断面図



建物2

1. 褐灰色 5 Y R5/1砂質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を僅かに含む。地山のにぶい黄褐色砂質土ブロック入る。建物1-1ないし4に似るが、それより砂の含有量が多い。炭化物を含む)
2. 褐灰色 5 Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざるのを主体とし、中～粗砂が若干混ざる。炭化物含む)
3. 灰褐色 7.5 Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。2に似るが、それよりやや粘性有)
4. にぶい黄褐色 10 Y R5/4粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。地山の黄色粘土ブロックを多く含む)
5. 灰黄褐色 10 Y R5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。1に似るが、中～粗砂の含有量が高いため、それよりしまりが弱い)
6. 灰褐色 7.5 Y R5/2粘質土 (3に似るが、粗砂、直径2mm大の礫、焼土を若干含む)
7. 灰黄褐色 10 Y R5/2砂質土 (1に似るが、円礫、地山のにぶい黄褐色砂質土ブロックの含有量が多い)

図71土色注記

建物3

1. 褐灰色 5 Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、にぶい褐色砂質土がブロック状に混入する。炭化物僅かに入る。)
2. 褐灰色 10 Y R4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる)
3. 褐灰色 7.5 Y R5/1砂質土 (中砂を主体とする中に、細砂が混ざる。褐灰色粘質土がブロック状に混入)
4. 褐灰色 5 Y R4/1粘質土 (1に似るが、にぶい褐色砂質土の混入がなく、やや粘性強い。焼土、炭化物を僅かに含む)
5. にぶい黄褐色 10 Y R6/4粘質土 (地山の黄色粘土ブロックに、褐灰色粘質土ブロックが僅かに入る)
6. 灰褐色 7.5 Y R5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。褐灰色粘質土がブロック状に混入)

建物4

1. 褐灰色 5 Y R5/1砂質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を僅かに含む。地山のにぶい黄褐色砂質土ブロック入る。建物1-1ないし4に似るが、それより砂の含有量が多く、炭化物を含む)
2. 灰黄褐色 10 Y R5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。1に似るが、中～粗砂の含有量が高いため、それよりしまりが弱い)
3. 褐灰色 5 Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざるのを主体とし、中～粗砂が若干混ざる。炭化物含む)

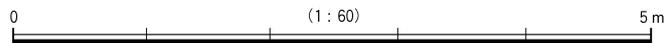


図70 有池遺跡03-1-1調査区 建物2 平・断面図

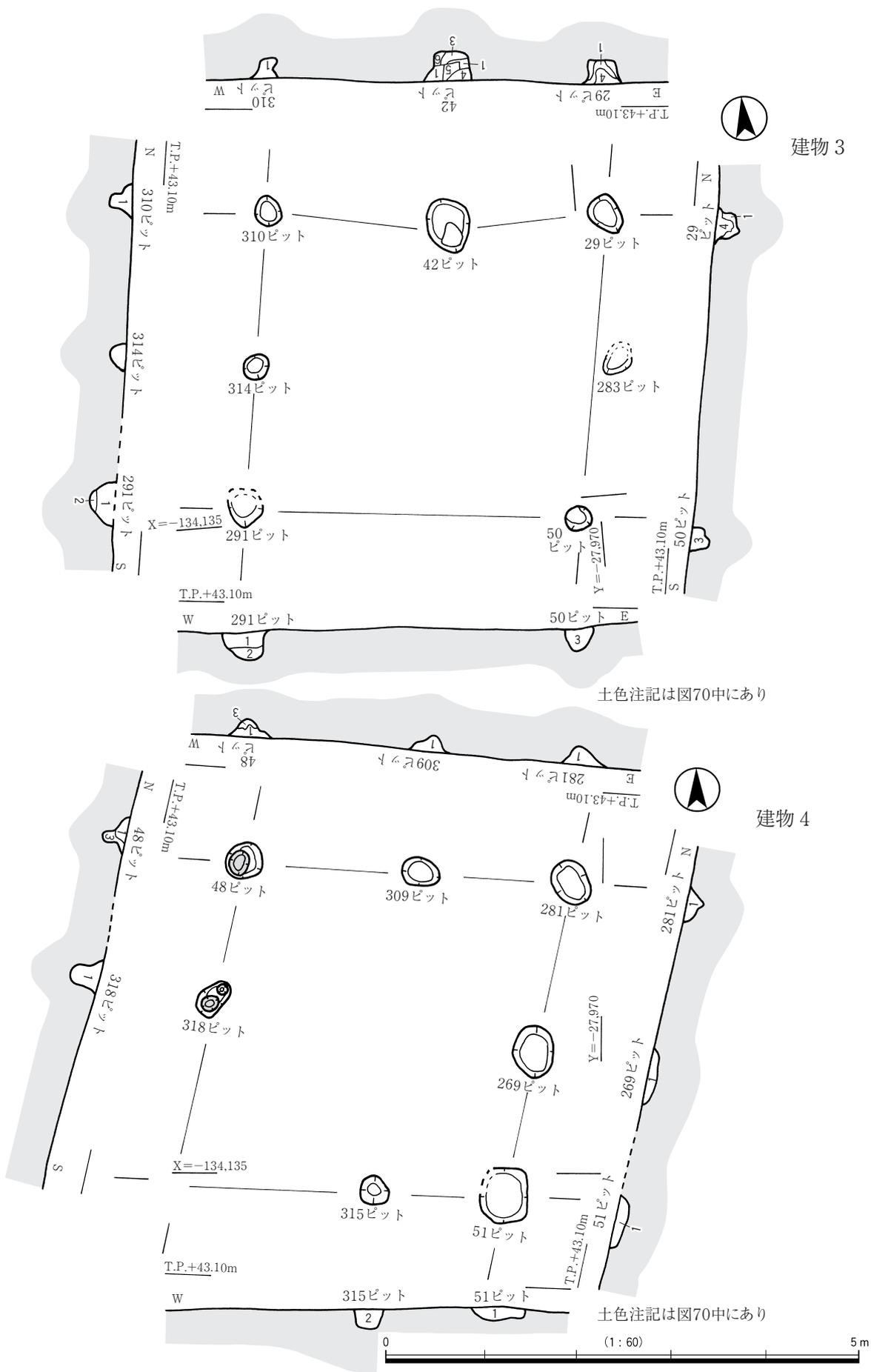


図71 有池遺跡03-1-1調査区 建物3・4 平・断面図

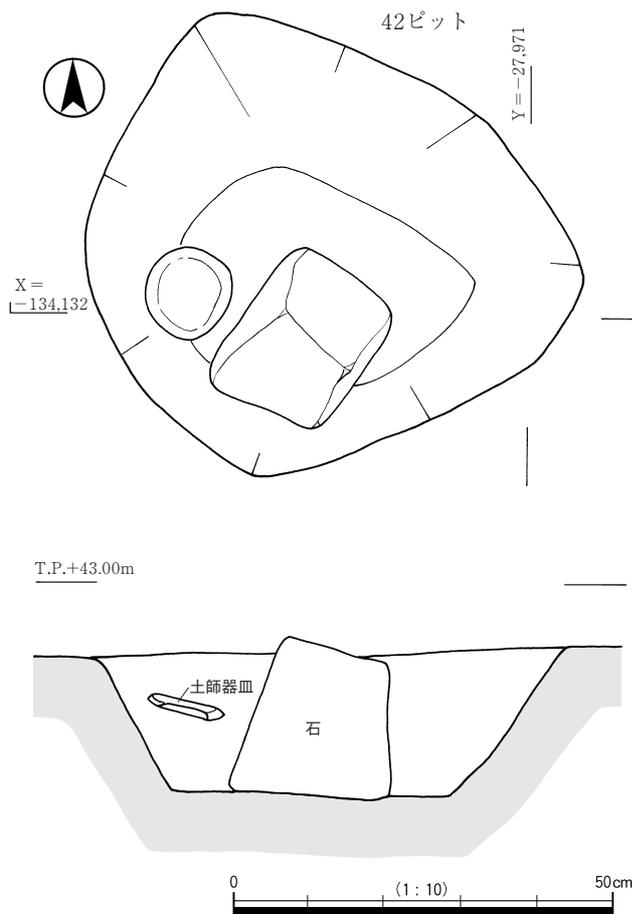


図72 有池遺跡03-1-1 調査区 42ピット 平・断面図

削り取っている攪乱に重なっていることから、この攪乱によって消失した可能性が高い。東辺の中央に位置する柱穴は、40・282・283・270ピットのいずれかの可能性がある。距離的に見て最も妥当なのは283ピットだが、もしそうであれば283ピットの中心が、20ピットと50ピットを結ぶラインより30cmほど外側へ飛び出すことになる。したがってここでは可能性をあげるにとどめる。柱穴掘方の平面形態は42ピットが隅丸方形、29ピットが隅丸三角形なのを除くと円形で、直径は30～60cmである。深さは約20～30cmと浅い。

桁行の中央に位置する42ピットから完形の土師器皿（図207-64）を含む遺物が出土した（図72）。出土遺物の時期は14世紀前半までとみることができる。

建物4（図71） 建物の位置、方向軸、規模などからみて、建物3と高い相関性を有することがみとれる。ピットの検出密度の高い部分で検出しており、建物4以外にもこれと相関性を持つ建物が存在した可能性は高い。

東西2間（4.45m）×南北2間（4.3m）の東西棟である。建物の主軸方向はW-2.5° - N（N-12° - E）を指す。柱穴間は桁行が平均1.75m、梁間が平均1.7mで、床面積は約19.1㎡である。

建物の北辺と南辺、西辺と東辺はそれぞれの長さが近似するが、北西隅と南東隅でコーナーの角度が90度を上回るため、平面形は平行四辺形である。遺構の平面形態は51ピットが隅丸方形である以外は円形で、直径は40～80cm、断面形態は皿形、隅丸方形などである。柱穴の深さは約15～40cmで、特に建物北辺と東辺とで柱穴の残存状態が悪い。南西隅にあるべき柱穴は検出しなかったが、南西方向に地盤の標高が低くなること、柱穴の残存深度が浅いことを勘案すると、後世に削平された可能性が高い。269ピット出土の土師器皿から、時期の下限は13世紀後半とすることができる。

建物7（図73・74） 建物1～4の南側に位置し、建物7の東辺は建物2の西辺の延長線上に近い位置にある。東西2間（4.25m）×南北1間（2.4m）の東西棟である。建物の主軸方向はW-10° - Nを指し、建物2・3に近似する。柱穴間は桁行が平均2.1m、梁間が平均2.4mで、床面積は約10.2㎡である。桁行の柱穴配置を見ると、中央の柱穴の位置が、両端のピットを結んだラインからいずれも同程度に東に寄っている。このような柱穴配置の特徴は建物2と共通する。

柱痕を確認できなかったこと、平面形態が楕円のピットが過半数を占めることから、建物の廃絶に際して柱が抜き取られた可能性がある。

建物の北辺・南辺と西辺・東辺はそれぞれの長さが近似するが、北東隅と南西隅でコーナーの角度が90度をやや上回るため、平面形は平行四辺形である。柱穴掘方の平面形は円もしくは楕円形で直径

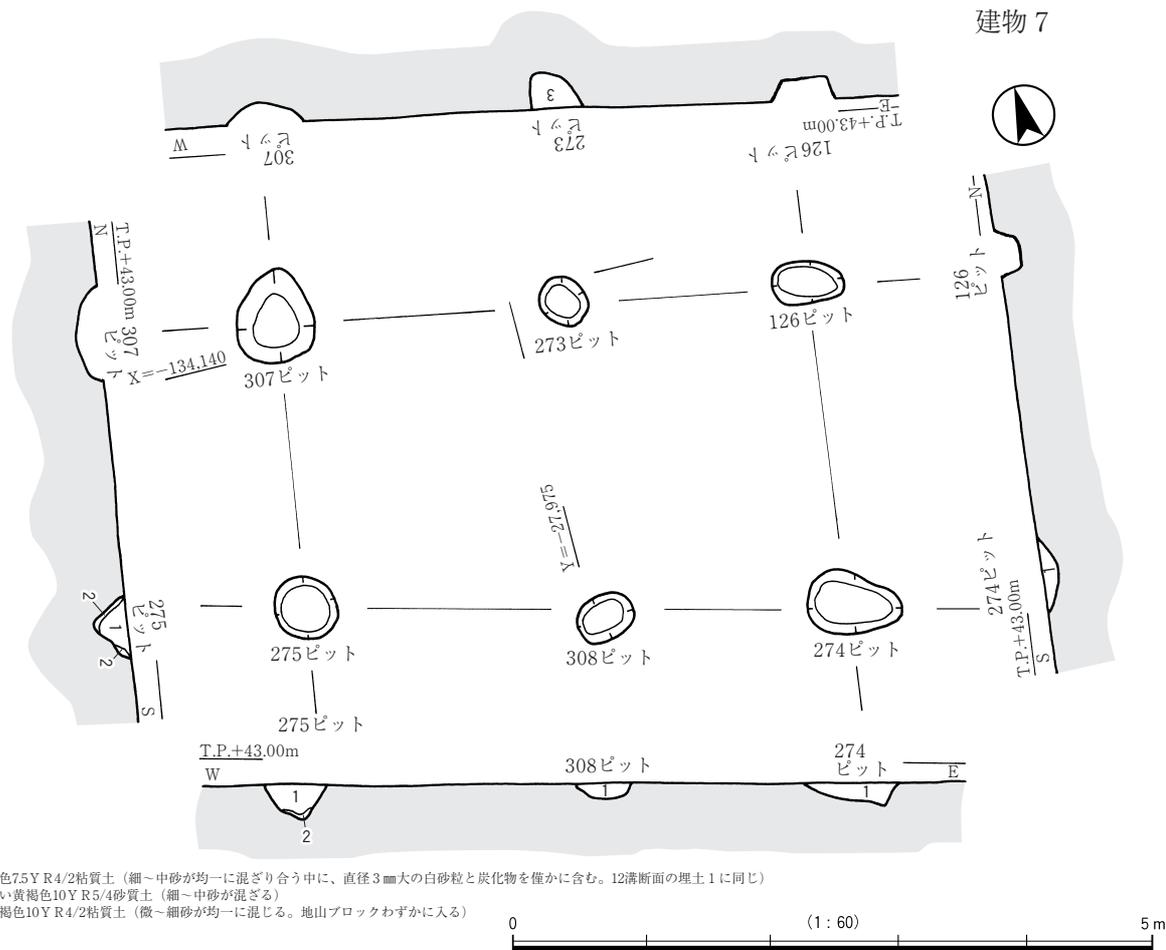


図73 有池遺跡03-1-1調査区 建物7 平・断面図

40～60cm、断面形は皿状・U字・先端が丸いV字形で、深さは10～30cmと極めて浅い。なお建物の北東隅に位置する126ピットから多数の土師器皿を検出した。ピットは長軸67cm・短軸36cmの楕円形で底部はほぼ水平かつ平らだった。そこに土師器皿がおおむね2箇所のかたまりで正位置に積み上げられ、片方のかたまりの一番上に伏せた状態の土師器皿が一枚置かれていた。このピット内で検出した土器は、ほぼ完全な状態まで接合することができた。その中には底部近くに穿孔を施したものが3点あった。それらは土器を重ねると穿孔の位置や、大きさがほぼ重なる。また穿孔の際に生じた破片もピット内に残っていたことから、ピットの中に重ねて土師器皿を置いてから、穴を穿ったことが分かる。土器はピットの中央と東寄りに置かれており、西寄りの部分に隙間が生じている（図74）が、ここに柱が建てられたとは考えにくい。なぜなら土師器皿には完形品も含まれており、柱を据えた後、柱を固定するために埋め戻した土を、つき固めたとは考えにくいからである。したがってこれらの土師器皿は柱を抜き取った直後に埋設されたものとする。出土遺物より、この建物の廃絶時期は13世紀前半とみることができる。

建物8（図75） 下段の平場の一番南側に位置する。東西2間（4.1m）×南北2間（3.6m）の総柱建物である。東西・南北いずれも2間ずつだが、東西方向に若干長いことから東西棟と考える。建物の北西隅の角度が90度を上回っているため、平面形は北辺が南辺よりやや短い台形となっている。建物の主軸方向はW-3.5°-Nを指す。柱間は桁行が平均2.1m、梁間が平均1.85mで、床面積は約14.8㎡である。

柱穴の平面形はほぼ円ないし楕円形で、358ピットのみ隅丸方形である。柱穴は直径45～70cmのもの

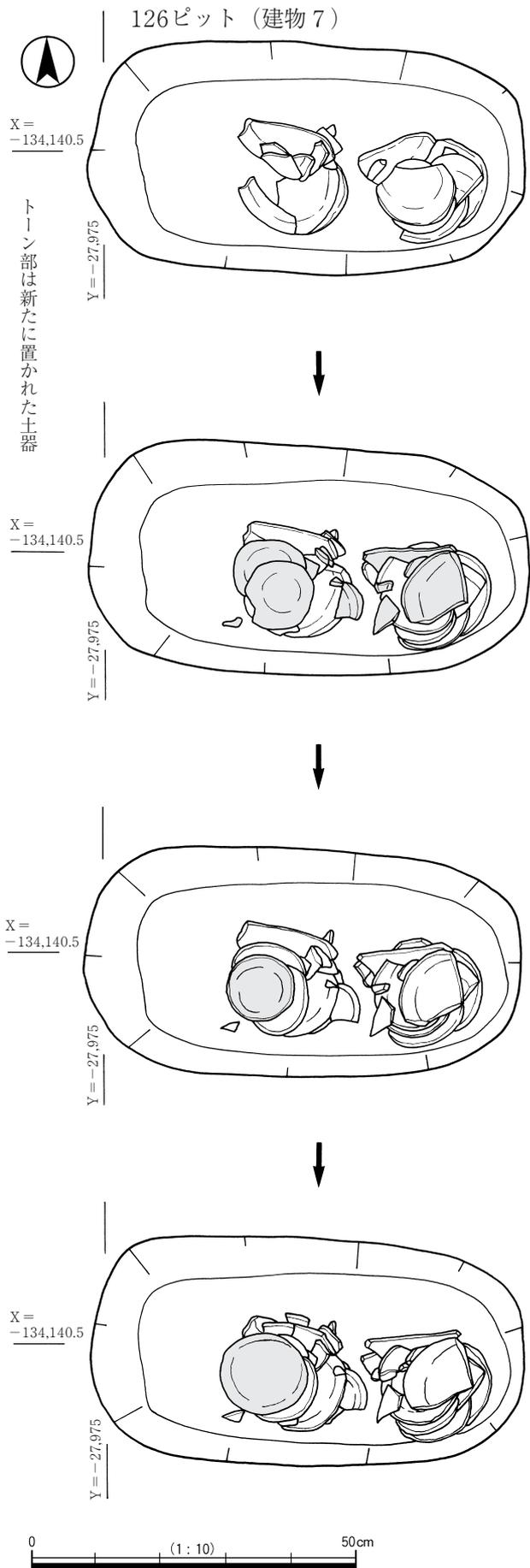


図74 有池遺跡03-1-1調査区 126ピット(建物7) 遺物出土状況図

が大半で、断面形は皿状・先が丸みを帯びるV字形、U字形からなり、深さは10~30cmと極めて浅い。柱穴の残存深度は北西に向けて浅くなっていることが見て取れるが、四隅の柱はその他の柱に比べて深くしっかりと掘られていたことがうかがえる。

356ピットは150土坑の底面で検出した。358ピットの北側を切っている148土坑から土師器の細片1点を検出した。この剥片は細片のため、時期を確認することができなかった。

建物9 (図76) 建物9をやや東にずらした位置に建物10があるのに加え、平面形や大きさにおける両者の類似性は高い。そのためどちらかを廃した後に、建て替えが行われたと考える。ただ柱穴の切り合いから両者の前後関係を知ることはできなかった。建物8の北側に位置し、方向軸も近似する。

東西2間(3.35m)×南北1間(2.35m)の東西棟である。建物の主軸方向はW-4°-Nを指す。柱間は桁行が平均1.7m、梁間が平均2.35m、床面積は約7.9㎡である。

桁行と梁間とでそれぞれの長さが近似するが、北東隅と南西隅でコーナーの角度が90度をやや上回るため、平面形は平行四辺形ぎみである。

建物の南辺で、381ピットに対応する中央のピットを検出することはできなかった。他のピットに加え381ピットの残存深度は浅く、直径も小さいことから、これは東柱だった可能性もある。また北辺より南辺の柱穴の残存深度が浅いことから、南辺中央の柱穴は削平されて失われた可能性が高いと考える。

ピットの平面形は円形もしくは楕円形

で、直径40～110cm、断面形はU字もしくは隅丸方形で深さは20～40cmである。柱穴から遺物は出土しなかったが、386ピットが切っている113溝の出土遺物からみて、建物9の時期の上限は13世紀後半と考えられる。

建物10 (図76) 東西1間 (3.1m) ×南北1間 (2.2m) の東西棟である。建物の主軸方向はW-3°-Nを指し、床面積は約6.8㎡である。

前述したように建物10と建物9には強い相関性が認められる。したがって柱穴配置も同じだった可能性が高いとすれば、東西列の中央に柱穴が存在した可能性がある。東西列と南北列の柱間は、平均する

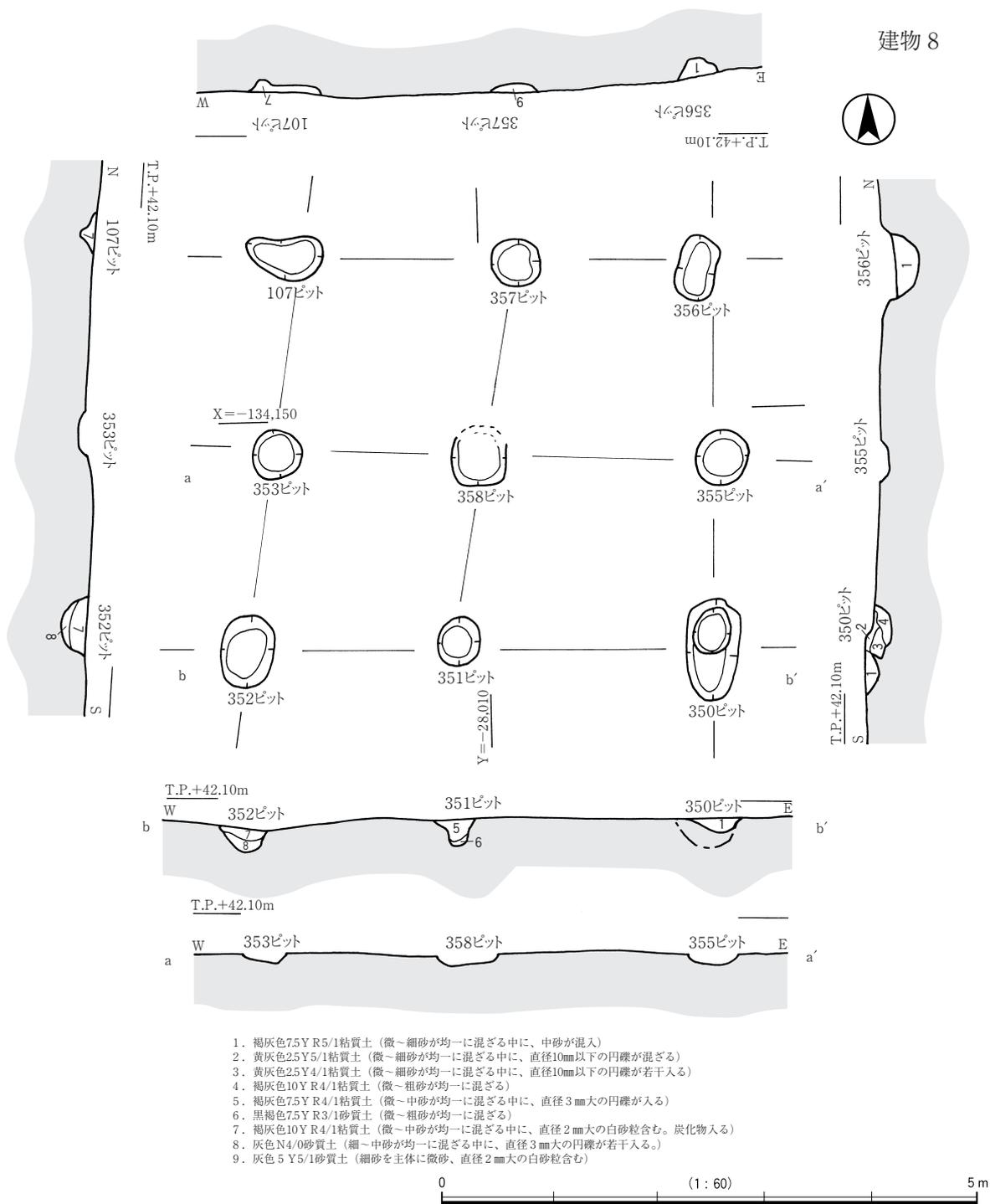
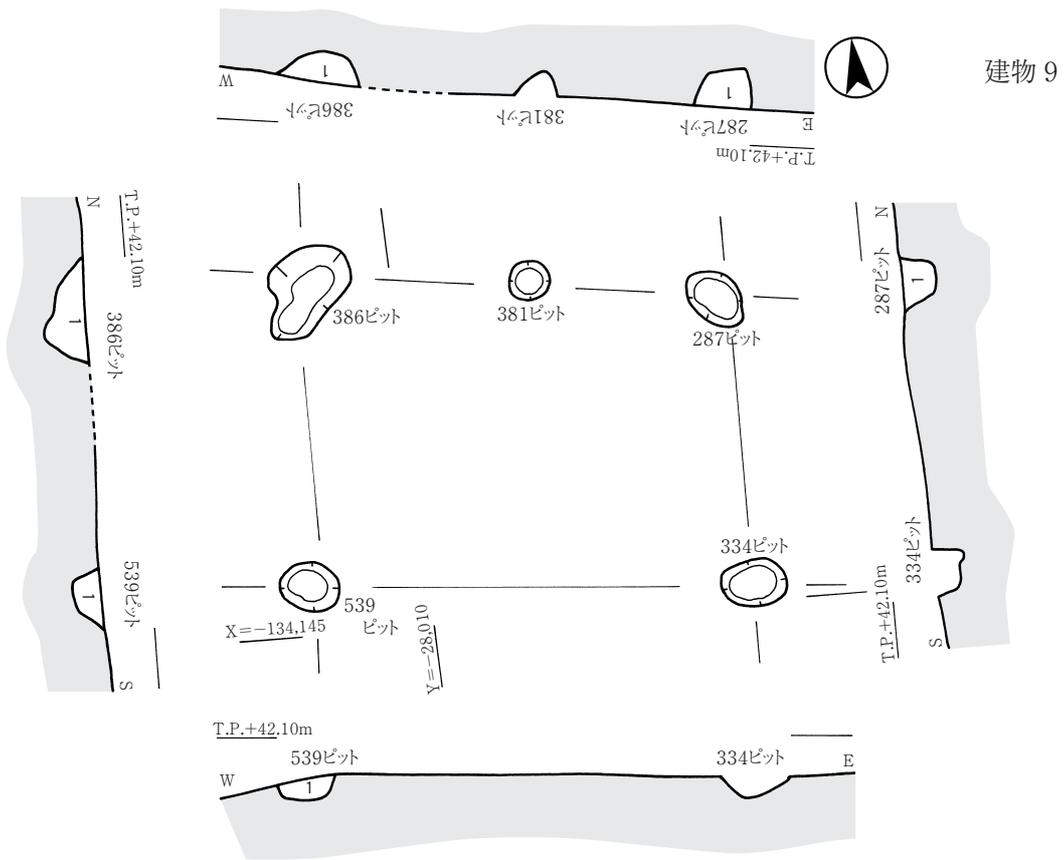
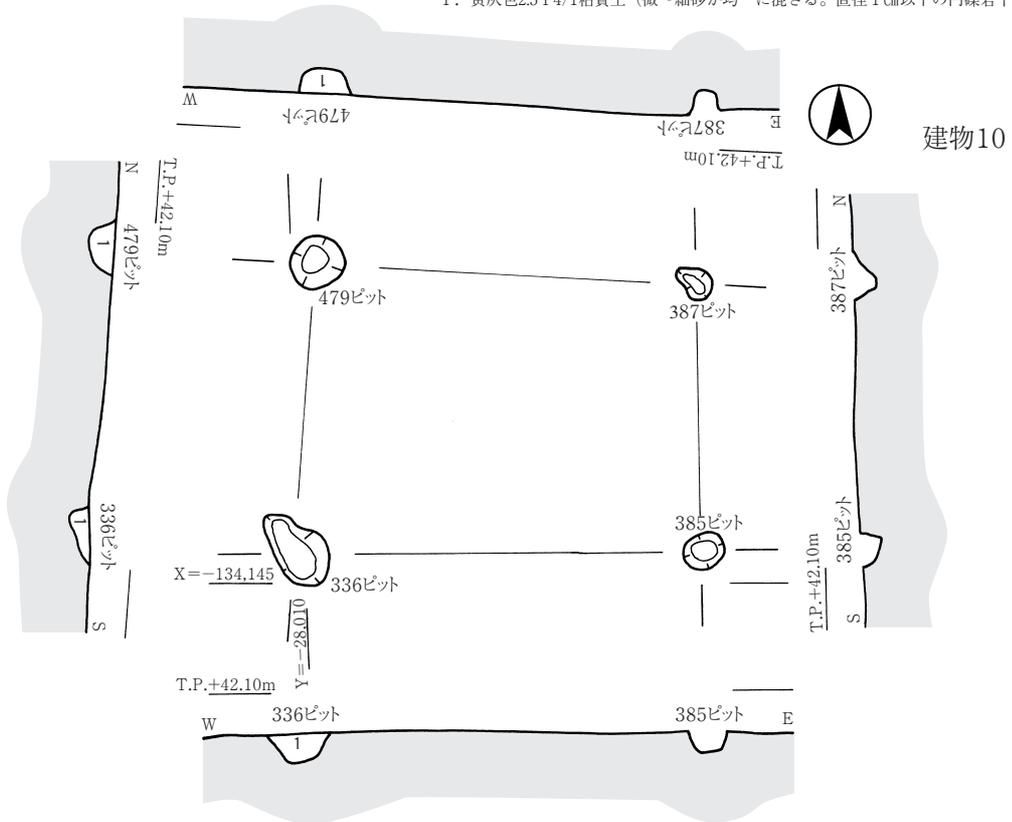


図75 有池遺跡03-1-1調査区 建物8 平・断面図



1. 黄灰色2.5Y4/1粘質土（微～細砂が均一に混ざる。直径1cm以下の円礫若干混じる）



1. 褐灰色10YR4/1粘質土（微～粗砂が均一に混ざる）

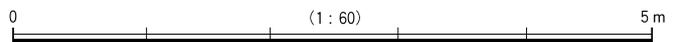


図76 有池遺跡03-1-1調査区 建物9・10 平・断面図

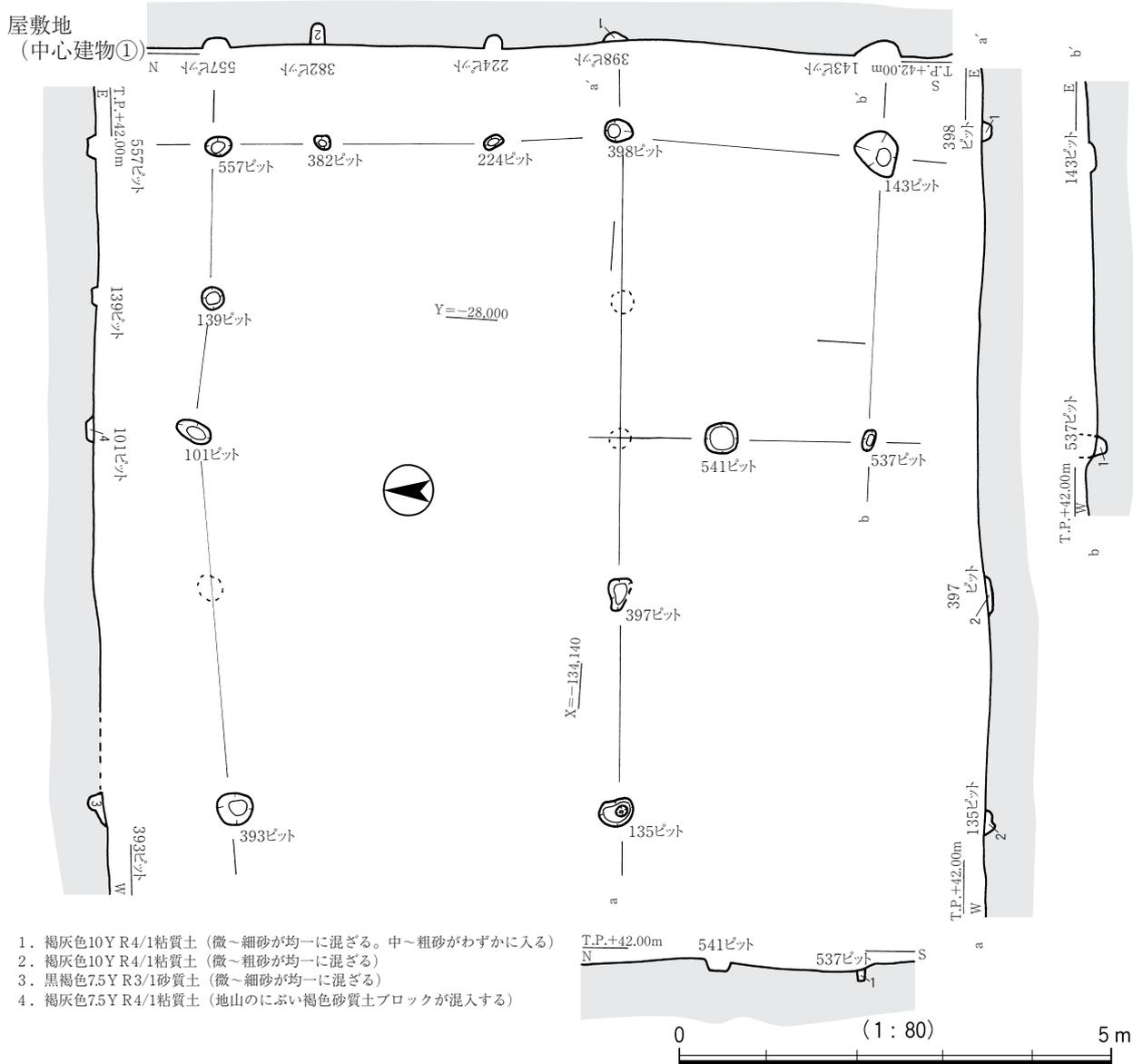


図77 有池遺跡03-1-1調査区 中心建物① 平・断面図

と前者が3.1m、後者が2.2mとなる。

概して建物10の方が建物9より床面積や柱穴の径が小さい傾向がうかがえる。建物の西辺が東辺に対してやや斜行するため、平面形は台形ぎみである。建物8の北側に位置し、建物の方向軸もそれと近似する。ピットの平面形は円形もしくは瓢箪形で、直径は20～70cmである。断面形はU字およびV字形で、深さは20cm強である。柱穴から遺物は出土しなかったが、479ピットが113溝を切っていることから、時期の上限は13世紀後半と考えられる。

中心建物 (図82) 周囲を濠でコの字形に囲われた、集落の中心を成すとみられる屋敷地の母屋にあたる建物である。北面を正面とする東西棟の南東隅に小さな張り出しをもち、L字を反転させた平面形態である。張り出しの柱穴配置は母屋に接するように位置する、石敷き土坑の四隅に配された多数のピットから復元した。ここではその柱配列だけを取り出して、建物の外観を復元することに主眼を置いた。石敷き土坑に関しては後述する。

残存する多数の柱穴とそれらの切り合いから推して、母屋は建物の外観を踏襲しながら数次にわたっ

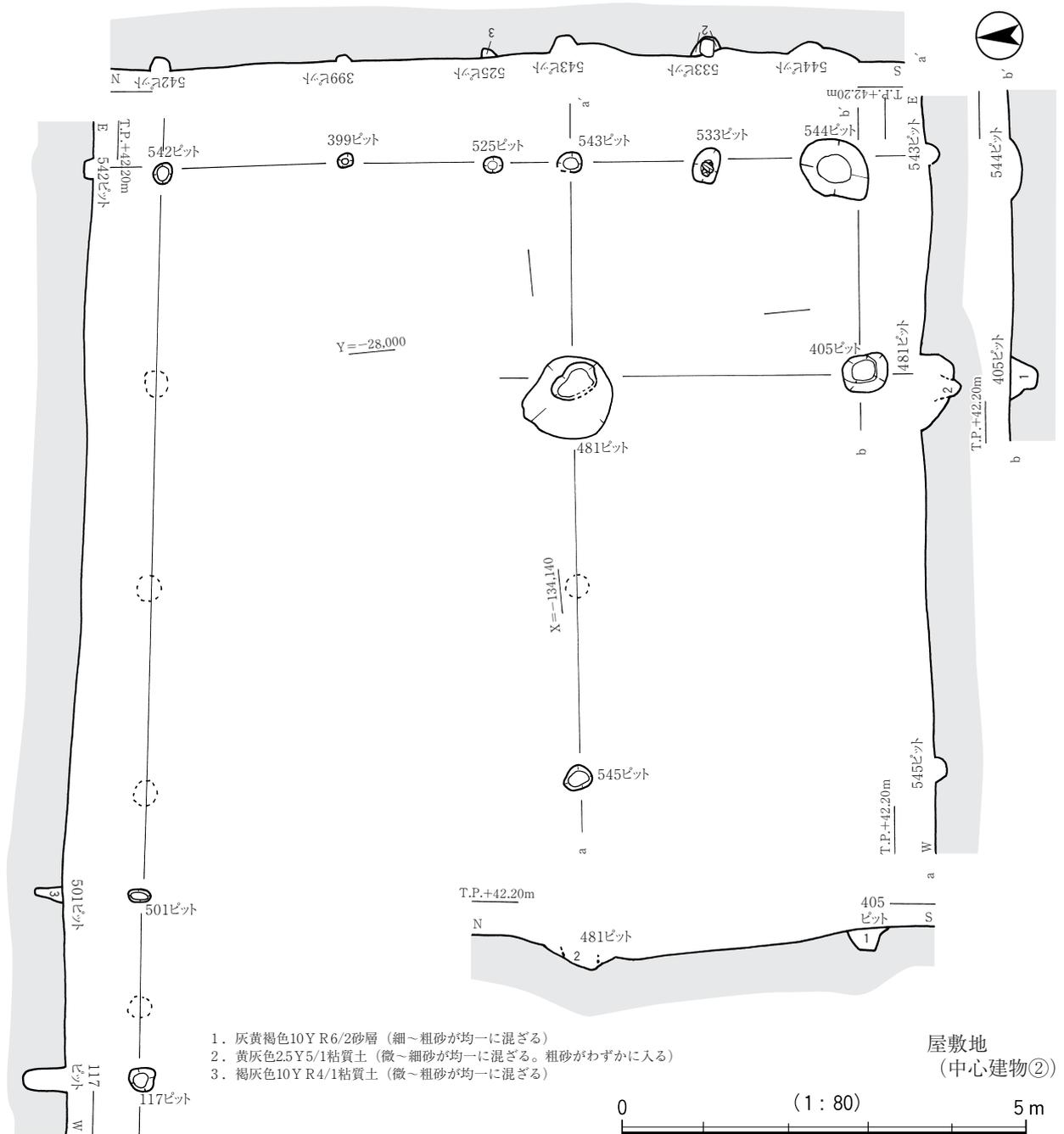


図78 有池遺跡03-1-1調査区 中心建物② 平・断面図

て建替られたと考える。建物の主軸方向や柱間を勘案しながら、規則性を有する柱穴配置の抽出に努めた結果、この母屋の建替は少なくとも4時期にわたることがわかった。ただこの建物の痕跡と見られるピットで、復元した柱配置に含まれないものもあり、建替もしくは補修の回数はそれをさらに上回ることが推測される。建替に際して整地作業が行われたためか、概して初期の段階の母屋は柱穴の残存率が低い。次に各段階の建物〔中心建物①～④（図77～79・81）〕に関して詳述する。

〔中心建物①〕（図77）

東西4間（7.7m）以上×南北2ないし3間（4.5m）の東西棟の南東隅に東西2間（3.3m）×南北2間（3m）の張り出しがつく。建物の主軸方向はW-4°-Nを指す。柱穴の残存率は低く、特に西側に向けて強い削平を受けたと考えられる。柱穴間は桁行、梁間ともにややばらつきがみられる。建物東

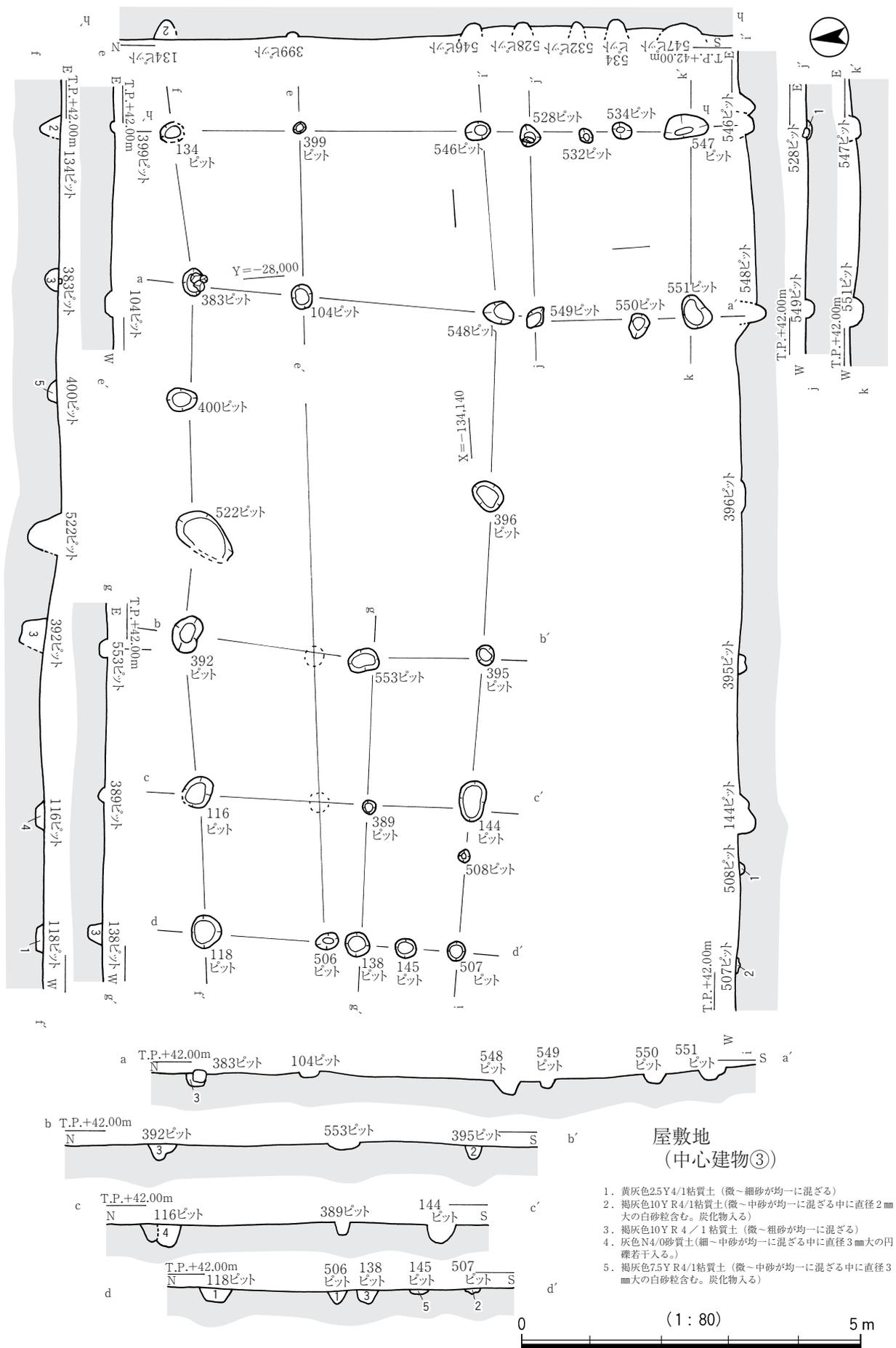


図79 有池遺跡03-1-1調査区 中心建物③ 平・断面図

辺でのみ確認した梁間を見ると、557ピットと382ピット間が1.2m、382ピットと224ピット間が2.0m、224ピットと399ピット間が1.4mとなっている。382ピットと224ピットの間楕円に棟持ち柱があると考えれば、南北列の柱間のばらつきは1.0～1.4mまでの間に収まる。加えてこの建物の外観を踏襲して建替えられたとみられるこれ以降の建物も、南北2間を基本としていることから梁間は2間で、382ピットと224ピットは東柱の可能性が高い。そうであれば張り出し部分の1間の長さともちょうど一致する。

桁行の柱間に目を転じる。101-393ピット間と399-397ピット間で柱穴をおぎなうと、北辺と南辺の柱配置は、位置関係がほぼ一致する。柱間はおおむね1.6mないし1.8mのいずれかだが、397ピットと135ピット間のみ2.5mとなっている。張り出し部分も含めた床面積は44.4㎡以上である。柱穴掘り方の平面形は円形・隅丸方形・隅丸三角形で直径20～50cmである。深さは10～20cmと極めて浅い。なお柱穴から遺物が出土しなかったため、時期は特定できないが、溝の項で述べているように、100溝もしくは384溝のいずれかと対応すると仮定すると、13世紀前半～中葉の時期とみることができる。

〔中心建物-②〕 (図78)

東西4間(11.2m)以上×南北2間(5.0m)の東西棟の南東隅に東西1間(2.6m)×南北1ないし2間(3.4m)の張り出しが付く。建物の主軸方向はW-4.5°-Nを指し、前段階の建物のそれと近似している。柱穴の残存率は低く、北及び西側に向けて強く削平を受けていると見られる。張り出し部分も含めた床面積は64.8㎡である。

東西列の柱間は、残っている柱の位置関係から見て2.5mもしくは2.6m間隔で柱が配置されていたと考えられる。その場合501ピットと117ピットの位置が、545ピットに対応するピットの位置から見て、2分の1間ずつ西に寄ることになる。したがって501ピットと117ピットは東柱と考えたい。

一方、南北列の柱間にはややばらつきが認められる。建物東辺で柱間を見ると542-399ピット間で2.3m、399-525ピット間で1.8m、525-543ピット間で0.9mとなる。525-543ピット間の柱間は、399-543ピット間を1間ととらえると、その3分の1間の場所にあたる。このことから525ピットを東柱、中央よりやや北に寄るが399ピットを棟持ち柱と考える。

張り出し部分では、東辺の中央に533ピットが位置するが、西辺ではこれに対応するピットを検出できなかった。また前後の時期の張り出し部を見ると、おおむね南北1間を指向していることから見て、533ピットを東柱とみなし、南北1間ととらえるのが妥当と考える。

柱穴掘り方の平面形態は円形・隅丸方形からなり、直径は20cm～1mと幅がある。掘り方の断面形は皿形・U字形で、深さは10～50cmである。柱穴から遺物が出土しなかったため、時期の特定はできなかったが、溝の項で述べているように100溝もしくは384溝のいずれかと対応すると仮定すると、13世紀前半～中葉の時期のものとみることができる。

〔中心建物-③〕 (図79・80)

東西5～6間(11.85m)×南北2～3間(4.0m)の東西棟の南東隅に東西1間×南北1間の張り出しが取りつく。張り出し部分も含めた床面積は53.3㎡である。東西棟と張り出しは、それまでの時期の柱配置と異なり、それぞれ独立した4隅の柱を持つ。ただ東西棟の東辺と、張り出しの西辺とは4分の1間ほどの隙間しかないことから、両者が独立した建物だとすると、庇がぶつかり合う形になる。また前後の時期の建物との関連から見て、両者は一続きの建物と見るのが自然と考える。前段階の建物と比べると柱穴の残存率が高いため、全体的な柱配置はうかがえるが、残存深度からみると、東ないし南側に向けてより強く削平されたと見られる。

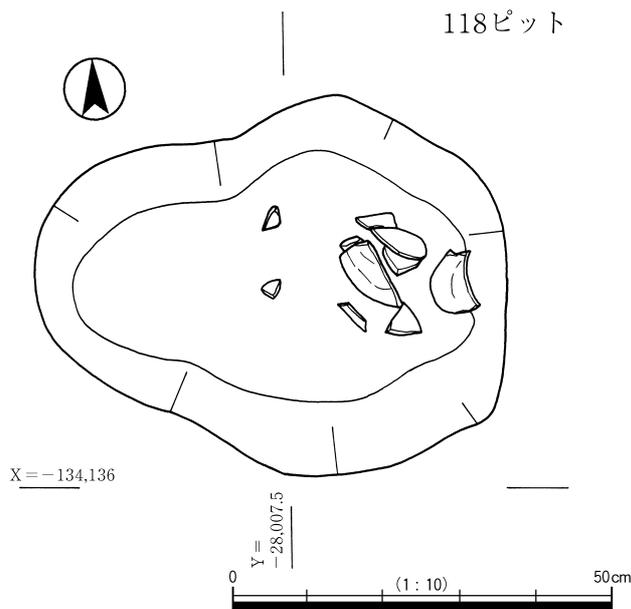


図80 有池遺跡03-1-1調査区 118ピット 遺物出土状況図

建物の平面形は全体的にいびつである。その要因として建物の東辺と西辺とで長さが異なる点、建物の方向軸が東辺からの1間分とそれより西の部分とで異なる点が上げられる。東辺から1間分および張り出し部分の建物の方向軸は平均すると $W-2.5^{\circ}-S(N-7.5^{\circ}-E)$ である。134-383ピット間と、399-104ピット間では柱穴列の方向が東西方向に対してやや南に振るが、546-548ピット間と張り出し部分の北辺と南辺はほぼ東西にのる。383-548ピットより西の部分で見ると、方向軸は平均すると $W-3.5^{\circ}-N(N-8^{\circ}-E)$ である。このことから、383-548ピットから西の部分の方向軸は前段階の建物の方向軸にほぼ一致することがわかる。

柱間は張り出し部分が比較的そろっているのに対し、東西棟の部分ではばらつきが生じている。まず張り出し部を見ると北辺・南辺ともに2.6m、東辺・西辺は2.4mである。張り出しの梁行きには528・534・550ピットがあるが、これらはおそらく東柱と考える。東西棟の梁間の柱間をみると、0.4~2.6mとばらつきが大きい、これは東柱の痕跡が混在しているためと考えられる。建物の西辺でみると506ピットが梁間の中央に位置するので、これを棟持ち柱痕と考えると、1間は1.8mとなり、建物東辺の134-399ピット間とも一致する。また399ピットと506ピットを結んだ線は、建物の北辺とほぼ平行する。このことから、一見するとこの建物の平面形態は全体にねじれている印象を受けるが、建物北辺と399-506ピットラインの関係においては整合性が認められるといえる。この関係を重視して、399-506ピットのラインを棟木の位置とし、553・389・138・145ピットは東柱と考える。

399-506ピットのラインから桁行までの長さを測ると、ある規則性がみとれる。例えば339・546・548・104ピットで囲まれた区画を見ると分かるように、棟持ち柱のピットから、それに対応する桁行のピットまでの長さ、対応する桁行のピットからその西隣の桁行のピットまでの長さがほぼ一致する。建物東辺では棟持ち柱の位置が梁間の中央よりやや北側によるので、この規則性にのっとった区画を作ると、必然的にその北側の区画より面積が大きくなると共に、平面形は台形に近くなる。また東西棟の北半分と南半分のそれぞれで同じ規則性で区画を並べると、北半分では六間分の柱が並ぶのに対して、南半分では5間分の柱が並ぶことになる。

118ピットからスラグ・瓦器碗の破片や多量の土師器皿が出土した。これらの出土遺物は柱穴の埋土にびっしりと詰まっていたことから、柱が抜き取られた後に、柱穴に入れられたものと考えられる。118ピットから出土した2点の瓦器碗は、いずれも体部上半で底部を欠いていた。いずれも直径6cm前後で器高は3cm前後と見られる。外面はユビオサエの後にナデ調整で、内面はナデ調整の後に3~4本/1cmの密度で圈線ミガキをして仕上げられている。口縁内面には沈線もしくは段は認められず、口縁外面にも強い横なでの屈曲は生じていない。口縁端部は直立し、先端を丸くおさめる。これらの特徴から見て、13世紀後半(IV-1)のものとみられる。なお一緒に出土した土師器皿を見ると、直径5cm前後で、

強い横ナデによって底部と体部の境に明瞭な屈曲を持ち、口縁部が外反するものがみられ、同時期かもしくはやや時期の降るものととらえられる。

一方、中心建物③に含まれる392ピットと144ピットは113溝を切っている。このことから建物は、113溝が埋まった時期を上限とし、118ピットに土器が入られる時期を下限とする時間幅で機能したと考えられる。以上のことから建物の存続期間は13世紀後半～14世紀前半に含まれると考えられる。

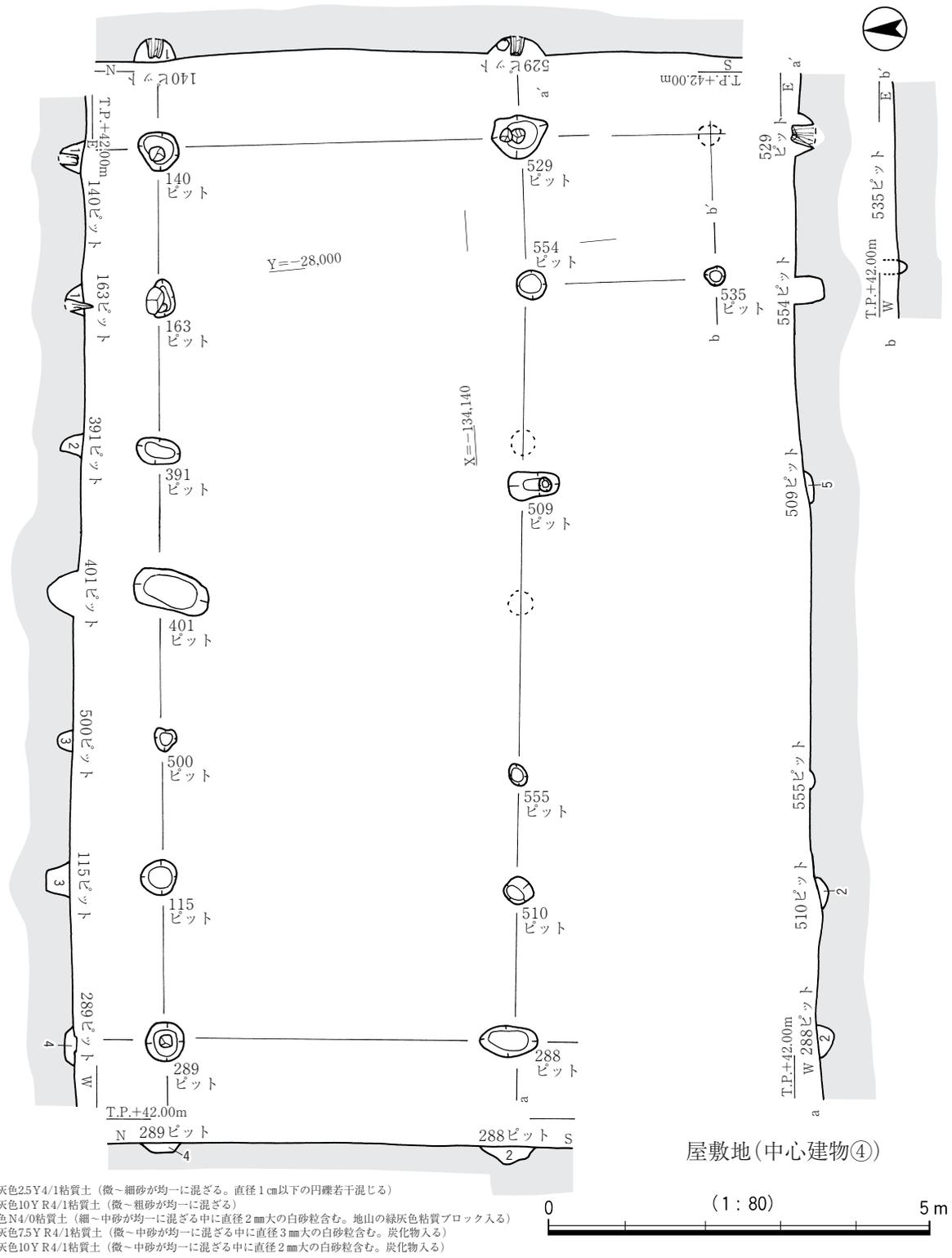


図81 有池遺跡03-1-1調査区 中心建物④ 平・断面図

〔中心建物－④〕（図81）

東西6間（11.6m）×南北1間（4.6m）の東西棟の南東隅に東西1間（2.0m）×南北1間（2.5m）の張り出しが付く。張り出し部分も含めた床面積は58.4㎡である。中心建物－③に比べると、明らかに柱列の方向軸や柱穴配置が整っている様子がうかがえる。主軸方向はW-3°-N（N-2°-E）を指す。東西列の柱間を見ると、1.6～3.8mとなるが、554-509ピット間に391ピットと対応するピットが、509-555ピット間には401ピットに対応するピットがあったと考え、1.6～2.2mの範囲に収まり、平均すると約2mである。梁行きの柱間は4.6mだが、これは2間分に相当すると考えられる。したがって1間は2.3mとみることができ、張り出し部分における南北列の柱間の2.5mよりやや小さい。

140・529・163ピットで柱痕が残存していた。また289では根石を検出したが、柱穴から遺物は出土しなかったが、510ピットが切っている113溝からの出土遺物により、この建物の時期の上限は13世紀後半とみることができ、柱穴掘り方の平面形は円形・楕円形・隅丸三角形等で直径は30cm～1.4m、深さは20～60cm弱である。柱穴の残存深度からみて、南ないし西側に向けて、より強く削平を受けていることがうかがえる。

109土坑（図83） 1G-1g・2gに位置する。平面形は直径約1.7mの円形で、砂礫の含有率が多い地山に掘り込まれた素掘りの井戸の可能性が高い。50cmほど掘り下げた段階で顕著な湧水を認めた。

1G-1g・2gから南側の区画ではそれほど遺構密度が高くなく、掘立柱建物の存在も確認できなかったが、1調査区における各屋敷地の構成を見ると、掘立柱建物と井戸がセットをなす状況が認められた。したがってこの井戸の近くに掘立柱建物があったことも想定できる。

出土遺物は土師器・瓦器椀・東播系土器・白磁・砥石があるが、いずれも細片だったため図化しなかった。瓦器椀をみると12世紀末葉～13世紀初頭の時期の特徴を有するものが1点含まれていたが、それ以外の13点はそれより新しい時期の要素を備える。古相の瓦器は体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁内面にほどこされた幅2mmの沈線のため、口縁端部は外反する。体部外面は磨滅のためミガキの有無は判断できないが、内面のミガキは6本/1cmと比較的密に施されている。それ以外の瓦器を見ると口縁の破片では、内湾ぎみの体部から口縁が直立し、端部は丸くおさめられている。口縁外面の横なでのため、やや屈曲が生じたものと屈曲がみられないものがほぼ同数の割合で認められた。また口縁内面に幅1mm弱の浅い沈線をもつものが若干含まれる。それらはいずれも外面には明瞭なミガキが認められず、内面には4本/1cmの粗い圈線磨きが見られる。瓦器椀高台の破片は4点あり、断面形状が台形のもものが2点、脆弱な三角形のもものが2点だった。以上のことから13世紀後半を下限とする時期の遺構と考えることができる。

11井戸（図83） 上段の平場の遺構密集域（20G-7d・8d）で検出した。建物1～4の南側に位置する。そのうちのいずれかの建物とセット関係を有し、屋敷地を構成していた可能性がある。平面形は長軸2.2m、短軸1.74mの楕円形である。深さは1.0m以上で地表面から約80cm掘り下げた段階で顕著な湧水が認められたことから、素掘りの井戸の可能性が高いと考える。

土師器・東播系土器・瓦器椀が出土した。そのうち瓦器椀には、口縁部の破片4点と高台の破片1点が含まれていた。口縁の破片はいずれも直立し、端部が丸くおさめられ、内面に幅1mm弱の浅い沈線をもつものが2点含まれていた。高台は斜辺を下にした直角三角形ぎみの断面形状である。体部内面の圈線ミガキは3本/1cmの間隔で、外面にミガキを持つものはなかった。

11井戸によって切られている34溝からは13世紀後半の遺物が出土している。両者の遺物には明確な時

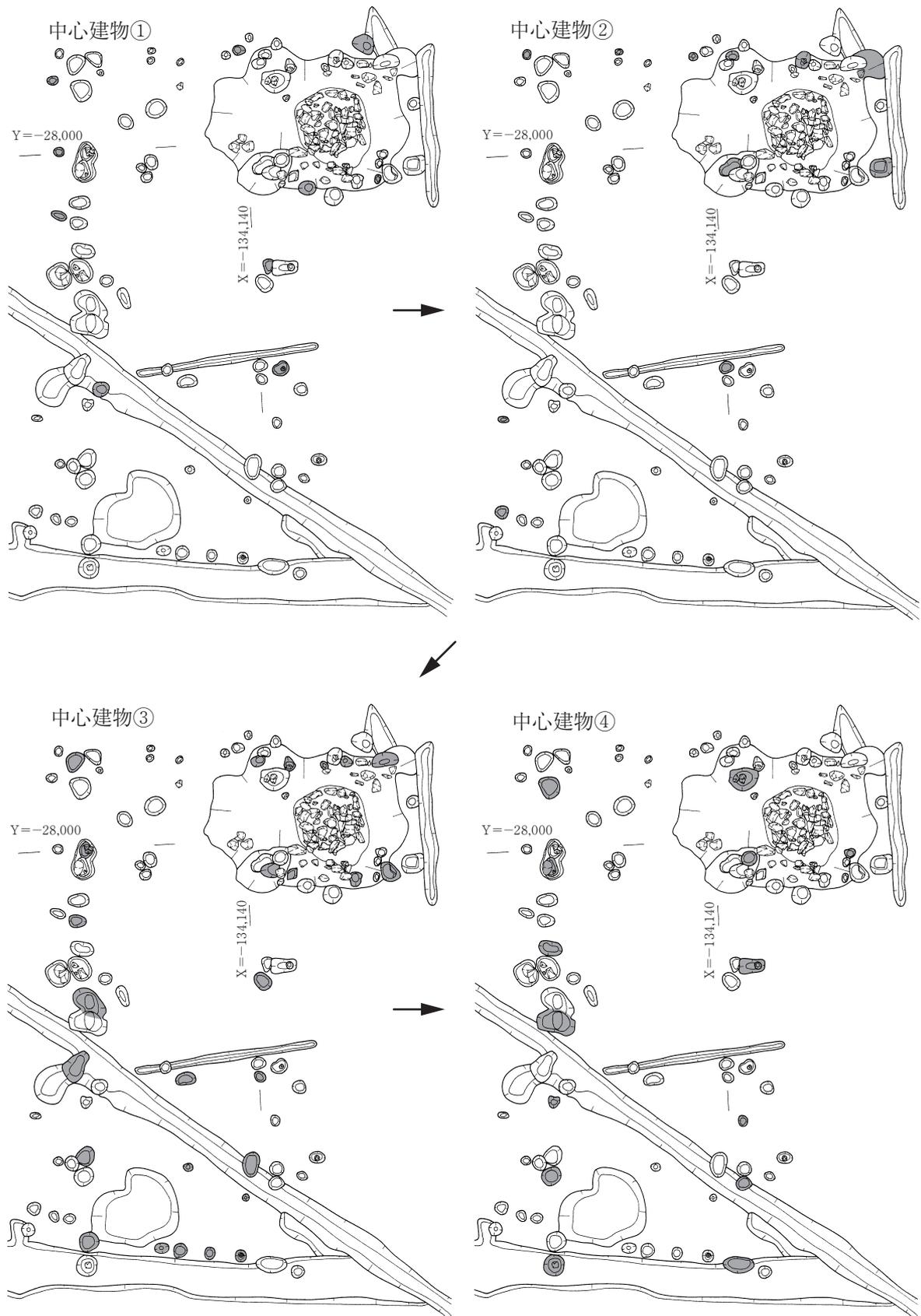


图82 有池遺跡03-1-1 調査区 中心建物 変遷概念図

期差が認められないので、ほぼ同時期のものと言ってもいいかもしれない。

267井戸 (図84) 下段の平場 (20G-10e) で、東西方向に4溝に向かって地盤高を減じる9落込の北側の法尻に接し、5井戸の南西側に近接する位置にある。掘り方の平面形は短軸1.5m、長軸1.75mの楕円形、深さは約1.4mの石積み井戸である。地表から50cmほど掘り下げた段階で顕著な湧水が認められた。後述する5井戸で見られるように、井戸の上部が壊された様子は見られないので、9落込を掘削後に作られたものと考えられる。

瓦質土器・土師質土器・土師器皿・瓦器椀・東播系土器・陶器の破片が出土したが、いずれも破片で図化し得なかった。瓦器椀の破片のうち、口縁部と底部を含むものを抽出すると、14世紀前葉の特徴を示すものが1点あった他は、すべて13世紀の範囲でとらえることができる。13世紀代のものと判断した

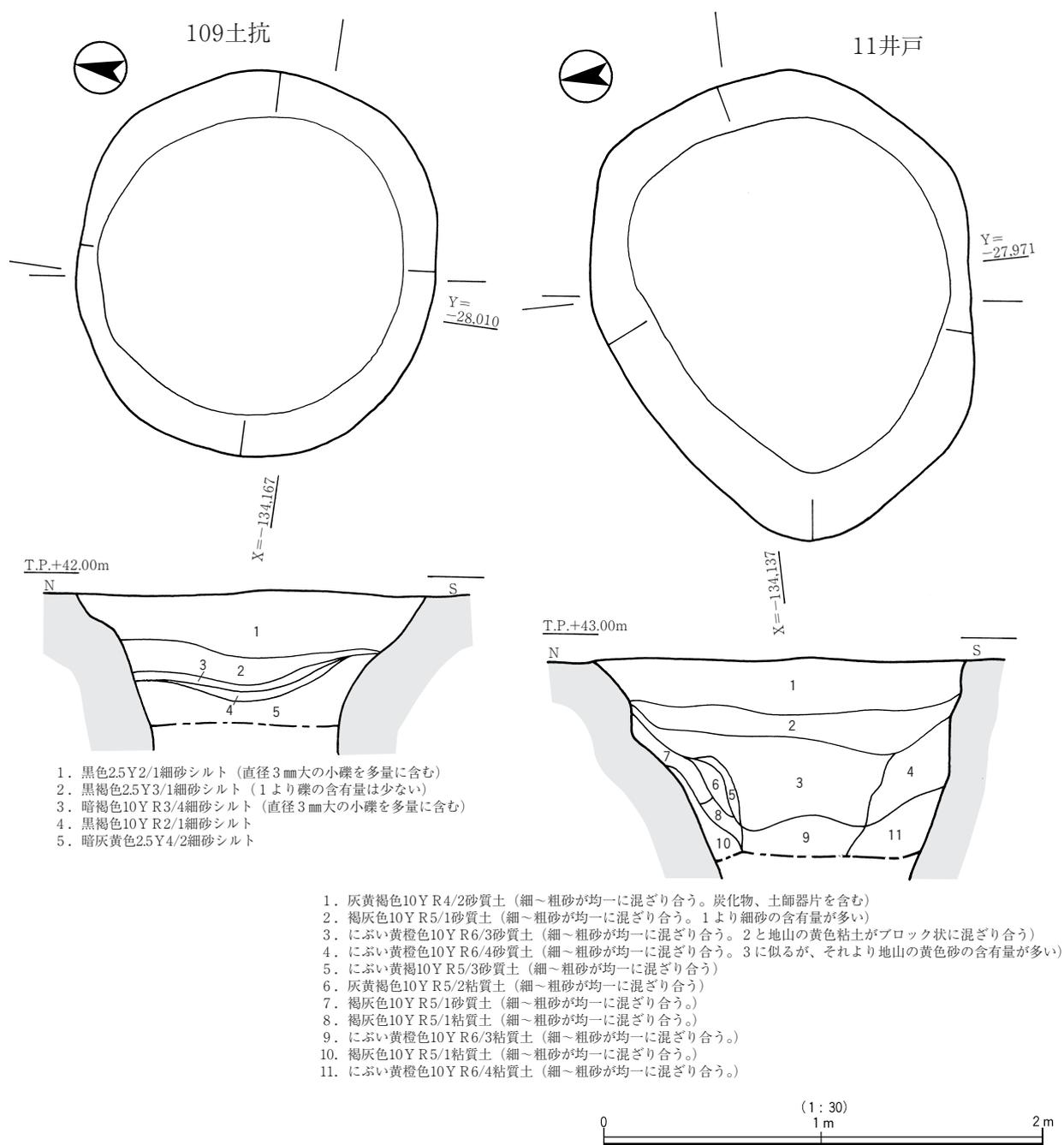


図83 有池遺跡03-1-1調査区 土坑・井戸 平・断面図

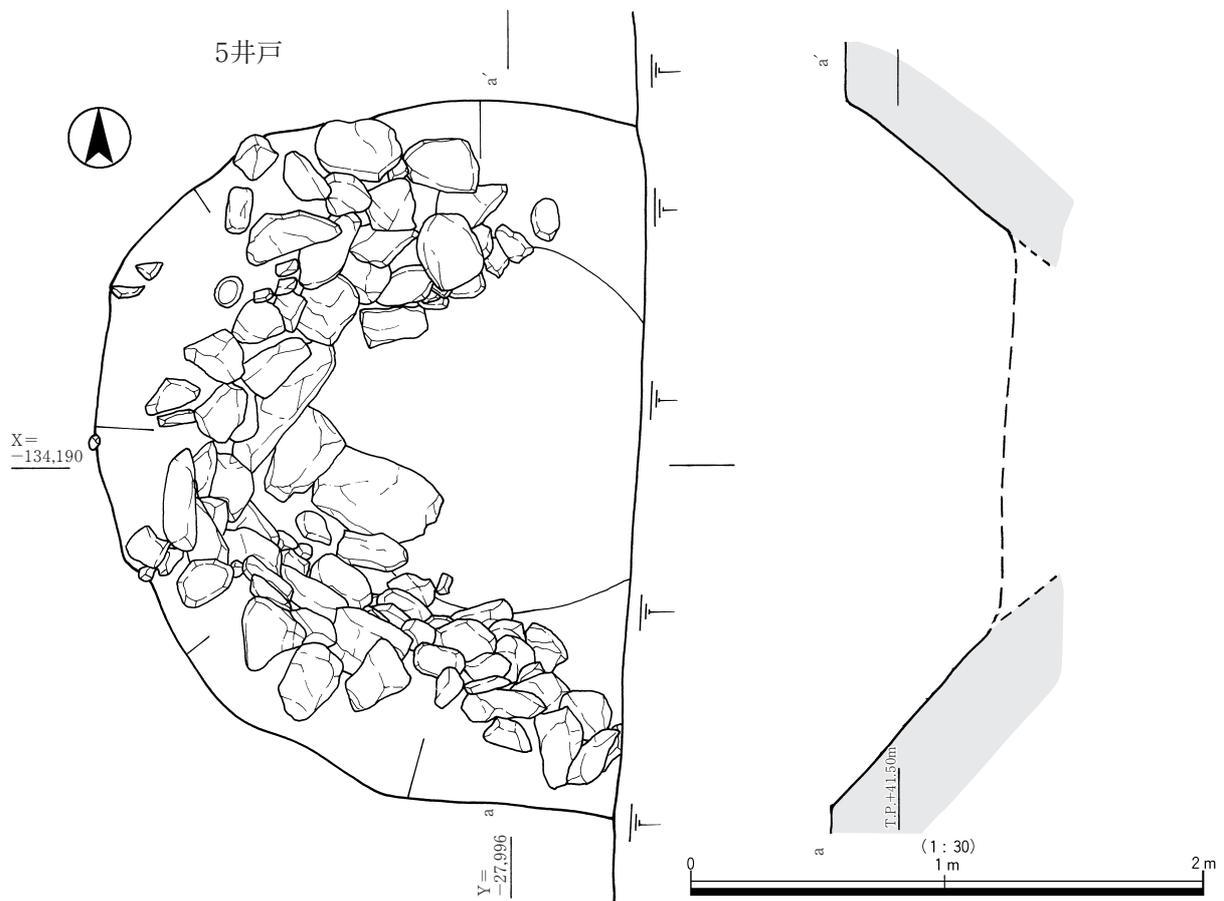
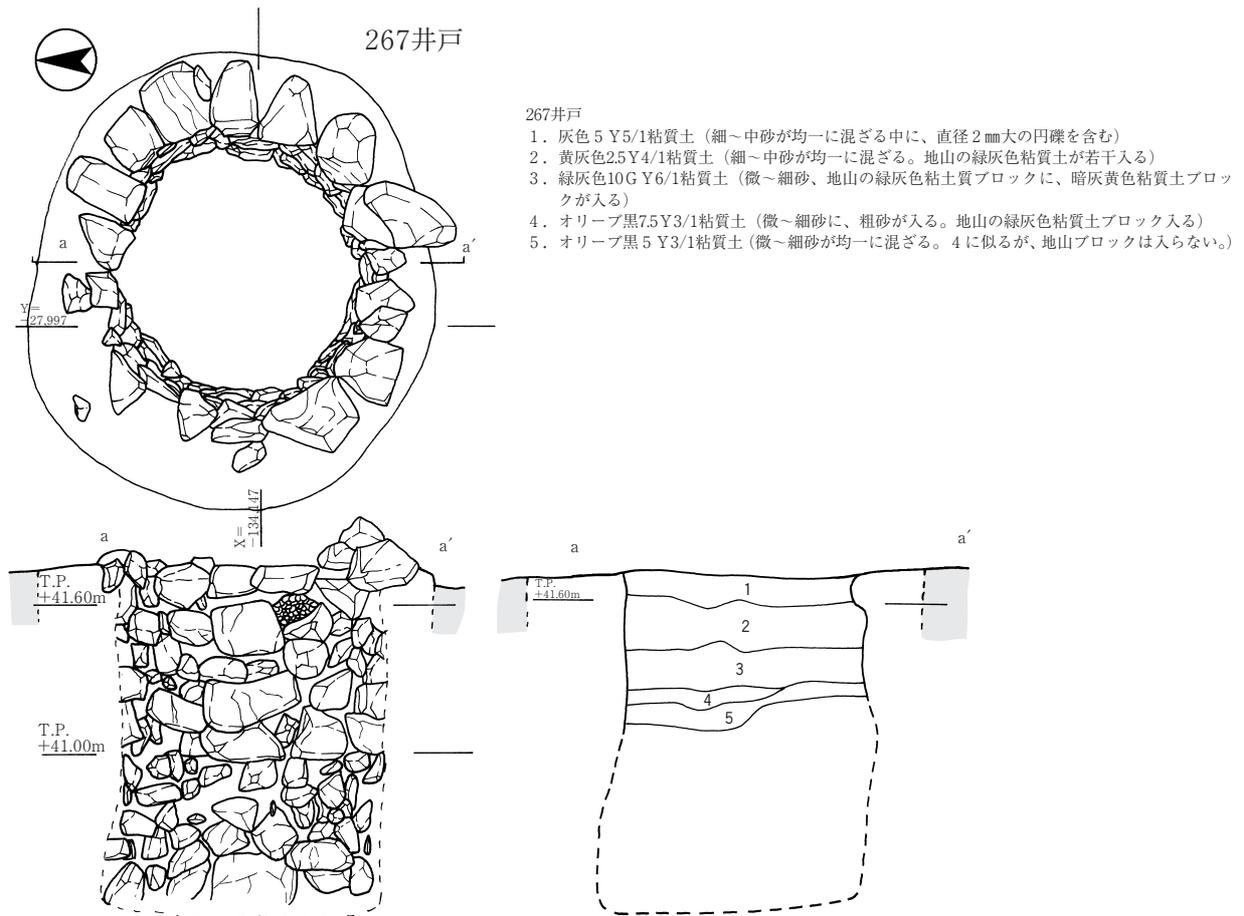
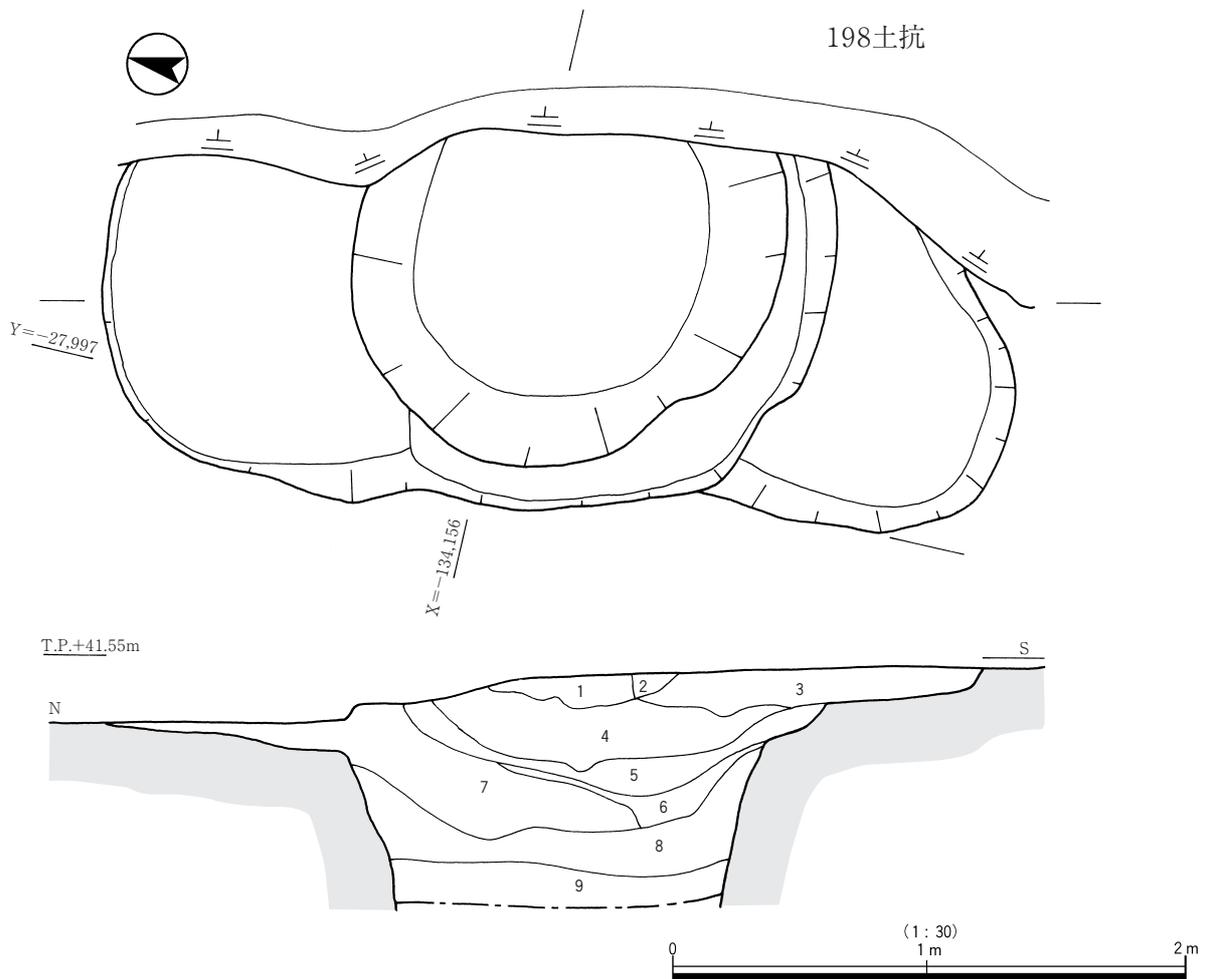


図84 有池遺跡03-1-1調査区 井戸 平・断面図

ものは、内湾する体部から口縁部が直立し、口縁端部は丸くおさめられる。そのうち1点は口縁内面に幅1mm強の浅い沈線がある。またこれを含めた2点は、口縁外面に横ナデがみられ、わずかに屈曲する。体部外面にミガキの見られるものはなく、内面のミガキは3本/1cmの間隔である。断面形が三角形の高台の破片が1点含まれる。14世紀代と判断した破片は胎土が灰白色で、体部が浅く直線的に立ち上がり、薄くて尖りぎみの口縁端部は外面の横ナデのためにわずかな屈曲部をもちながら外反する。内面にみられるミガキは4本/1cmの間隔である。

以上のことから中心となる時期は13世紀で、14世紀前葉まで開口していた状況がうかがえる。

5井戸(図84) 南から北に水を落とす4溝の西肩に接する位置で検出した。掘り方は短軸2.8mの楕円形で、断面形は壁面が上方へ向かって漏斗状に広がる。検出面から60cmほど掘り下げた段階で湧水が激しくなったため正確には測れなかったが、深さは1m弱とみられる。壁面には寄せ掛けるように角礫が詰まっていたが、4溝に接する部分では角礫を検出できなかった。5井戸より南の部分で、4溝の底部から5井戸に積まれていると同様の角礫が多く出土したことから、4溝の掘削に際して5井戸の一部が



1. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径3mm大の円礫を多く含む)
2. におい黄褐色10Y R5/3粘質土 (1に似るが、それより粘性低い)
3. におい黄褐色10Y R6/3粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の円礫を含むが、1より含有量は低い。地山の黄色粘土ブロックを含む。)
4. 灰黄色2.5Y 6/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う中に、直径5mm以下の円礫を含む。地山の黄色砂質土ブロックが主体で、その中に灰黒色の粘質土ブロックが混入)
5. 黒褐色2.5Y 3/1粘質土 (細～中砂が混ざり合う中に、直径2mm大の円礫を含む)
6. 灰色10Y 5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざりあう中に、直径2mm大の円礫を僅かに含む。地山の青灰色粘土ブロックと、灰黒色の粘質土ブロックが混入)
7. オリーブ黒7.5Y 3/1粘質土 (細～中砂が混ざり合うあう中に、直径2mm大の円礫を含む。ラミナ状の層理構造が見られる)
8. 黒色7.5Y 2/1粘質土 (細～中砂が混ざり合うあう中に、直径2mm大の円礫を含む。ラミナ状の層理構造が見られる。7に似るが、それより粘性がやや強い)
9. 黒色2.5Y 2/1粘質土 (8に似るが、それよりやや粘性が低く、植物遺体を含む)

図85 有池遺跡03-1-1 調査区 198土坑 平・断面図

壊され、その際に抜き取られた角礫が4溝の底に放置されたと考えられる。また側壁に積まれた角礫の上端が検出面よりやや下がった位置にあることから、4溝に直行する9落ち込みが掘られた際にも井戸の上部が削り取られ、最上部の石が抜き取られた可能性がある。

5井戸の出土遺物をみると、大半を占める土器は4溝の出土土器とそれほど時期差が認められず、それより古相の土器が若干含まれる状況が見られた。したがって、古相の土器が混入した時期を5井戸が単独で存在していた時期ととらえることができるかもしれない。図化した遺物の中でも東播系の須恵器鉢のように12世紀代にさかのぼる時期のものも含まれるが、14世紀前半の土器が大半を占めることから、4溝の掘削後も5井戸は開口しており、最終的に4溝とほぼ同時期に埋まったと考える。

198土坑 (図85) 下段の平場(20G-10f)で検出した。直径1.7mの円形で、南側と北側にそれぞれ最大長80~100cmのステップ状の平場が付き、それらを合わせた平面形は長軸が約3.7mの楕円形である。遺構の東端は4溝を開鑿した際に削り落とされたとみられる。素掘りの井戸で、最終遺構面から約80cm埋土を掘り下げた段階で著しい湧水が認められた。

瓦質土器(土釜・三足釜)・土師質土器・須恵質土器・陶器・白磁・土師器皿・瓦器椀が出土した。瓦器椀をみると、10点出土した口縁部を含む破片のうち、口縁内面に幅1mm弱の浅い沈線を持つものは1点だった。口縁のカーブからみて、おそらく大半は直径が6cmを超えないとみられる。内湾する体部に先端を丸くおさめたものが8点、口縁部外面の強い横ナデのため、口縁端部がやや外反するものが2点だった。前者には、口縁部外面の横ナデにより、体部から口縁部にかけての境目でわずかな屈曲が認められるものと、明瞭な屈曲が見られないものがほぼ同数だった。土師器皿は口縁部の横ナデにより、底部から口縁部にかけての境目に明瞭な屈曲をもち、口縁が外反ぎみに立ちあがるものが過半数を占める。以上のことから主体となるのは13世紀後半~14世紀前半の時期とみることができる。

207井戸 (図86) 下段の平場の西寄り(1G-2f・2g・3f・3g)で、7溝の東肩に沿うように位置する。直径1.2m前後の円形土坑の周囲に、長軸約5.5m・短軸約3.2mで楕円ぎみの平場が付く。円形土坑の深さは最終遺構面から1.1mで、断面形は台形である。湧水が著しく、1時間もしないうちに周囲の平場の高さくらいまで水が溜まる状況が見られたことから、井戸もしくは水溜めと考えた。

遺物の出土量はコンテナ半分程度で、瓦器椀・土師器皿・須恵器甕および鉢・瓦質の鍋や羽釜、火鉢などが含まれる。土師器皿は口縁部外面に強いナデを施し、底部との境に明瞭な屈曲部をもちながら外反する形態のものが大半を占める。瓦器椀は口縁端部が丸く治められ、器壁の厚さが3mm強で口縁内面に幅1mmの沈線を施されたものと、口縁端部が尖り気味で内面に沈線をもたず、器壁の厚さが2mm程度のものが見られた。底部には厚さ2mm程度の華奢な高台が付くもの、高台の痕跡とみられるナデがみられるもの、高台をもたないものの三者がみられた。これらのことから、出土した遺物は13世紀~14世紀前半の時期のものといえることができるが、量的には13世紀後半~14世紀前半のものが大半を占める。濠で区画された屋敷地の西端に位置することから、徐々に埋まっていく過程で屋敷地の住人が、使用していた土器を投棄した可能性もある。

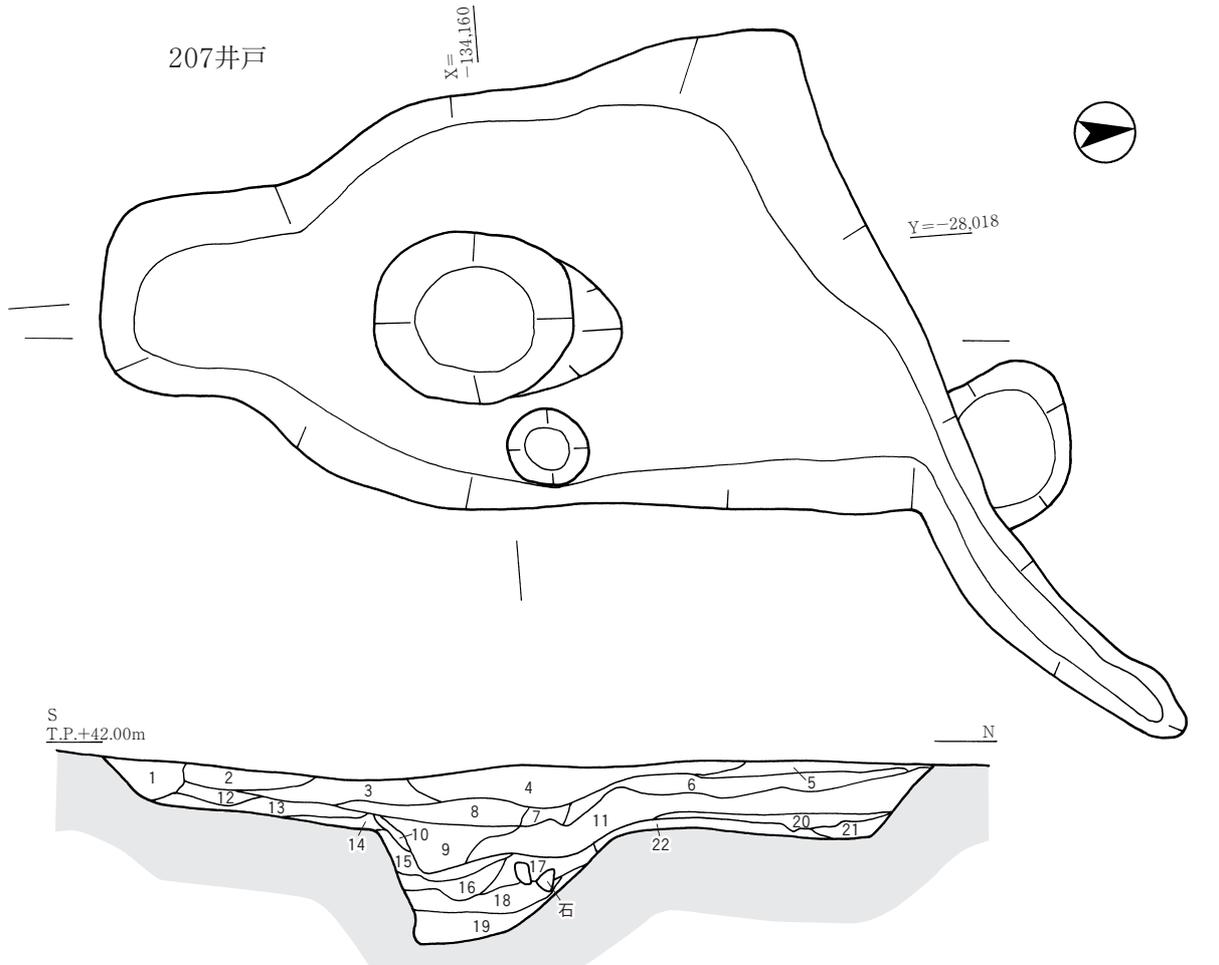
194井戸 下段の平場で、調査区の南東壁際で検出した(1G-2h)、素掘りの井戸である。60cm程掘り下げた時点で顕著な湧水がみられ、そのため壁面が崩落してしまい、土層断面の実測はできなかった。埋土には粘性の強い、黒灰色粘質土の堆積が認められた。

遺構埋土から瓦器椀・土師器皿・青磁椀・瓦質三足釜・瓦質羽釜・瓦質鍋・須恵質土器・陶器が出土した。ほとんどが13世紀後半以降の時期の遺物で、14世紀前半代のもものが過半数を占める。

当調査区で検出した井戸を概観すると、例えば屋敷地内では数棟の掘立柱建物と井戸がセットになっている。この井戸の周辺で耕作痕跡を認めなかったことから、もとは掘立柱建物とセット関係をなす井戸だった可能性がある。ただこの周辺では明確な規則性を見出せるピットを検出しなかった。後世の造成に伴って、この井戸と対応関係を有する建物の柱穴が削平されたことも考えられる。

410井戸 下段の平場であつ、1調査区の西端で検出した(1G-5e)、素掘りの井戸である。直径3.4mの円形で、深さは約80cmである。

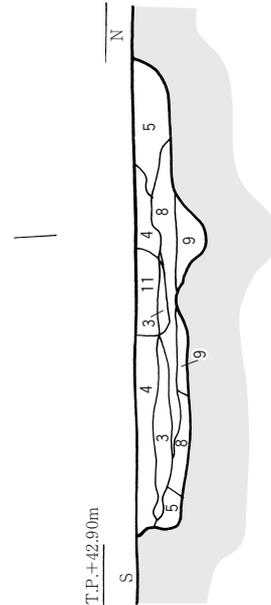
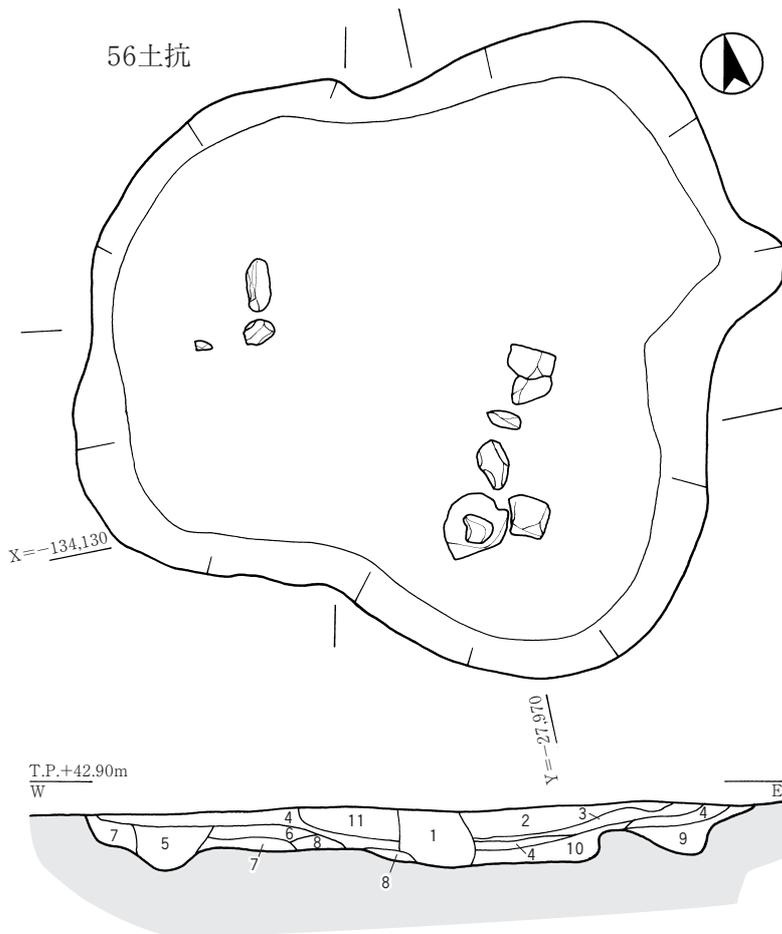
遺構埋土から瓦器椀・土師器皿・土師質羽釜・瓦質羽釜・須恵質土器・白磁が出土した。いずれも細



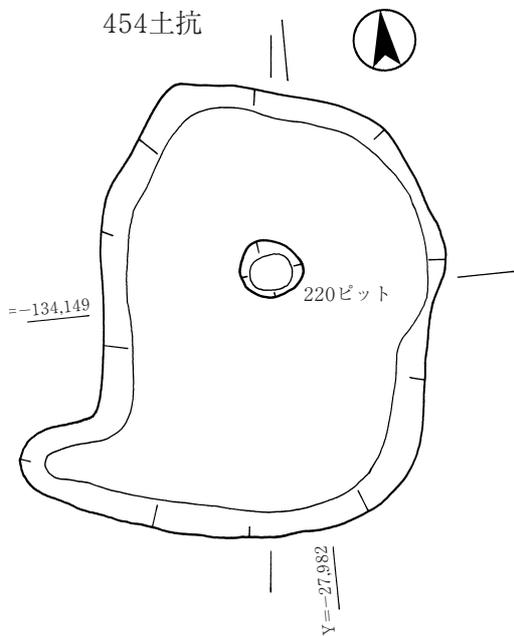
1. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土 (細～粗砂が均一に混入。中位に中～粗砂のラミナ層に入る。炭化物僅かに入る)
2. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径1mm以下の花崗岩円礫を含む)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の白砂粒を多く含む。炭化物、若干含む)
4. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざるのを主体とし、直径2mm大の花崗岩礫、焼土、炭化物を多く含む)
5. 3と同じ
6. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (3に似るが、直径2mm大の白砂粒をそれより多く含む)
7. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。焼土を若干含む)
8. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。焼土、炭化物を僅かに含む)
9. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。粗砂を含む直径100mm大の円礫有)
10. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (9に似るが、粗砂を含まず、それより粘性が強い)
11. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。9より粘性は低い。地山の緑灰色砂質土ブロック含む)
12. 灰オレンジ色5Y6/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の花崗岩礫を僅かに含む)
13. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。12より粘性は強い)
14. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。中～粗砂の割合が高い)
15. 灰色5Y5/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる)
16. 褐灰色10Y R4/1粘土 (僅かに中砂含む)
17. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (微砂と粗砂が混ざり合う。地山の緑灰色砂質土ブロック含む)
18. 黒褐色2.5Y3/1粘質土 (微砂と粗砂が混ざり合う中に、直径50mm大の円礫を含む)
19. 暗灰色N3/1粘質土 (細～粗砂が混ざり合う。18に似るが、それより粗砂の含有量が多い)
20. 灰オレンジ色5Y6/2砂質土 (細～中砂よりなる、直径2mm大の白砂粒も僅かに含む)
21. にぶい黄褐色10Y R6/4砂質土 (細砂よりなる。地山風化土の再堆積層)
22. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。V層)
23. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (灰色粘質土ブロックと、地山の緑灰色砂質土ブロックが混ざり合う)

0 (1:40) 2m

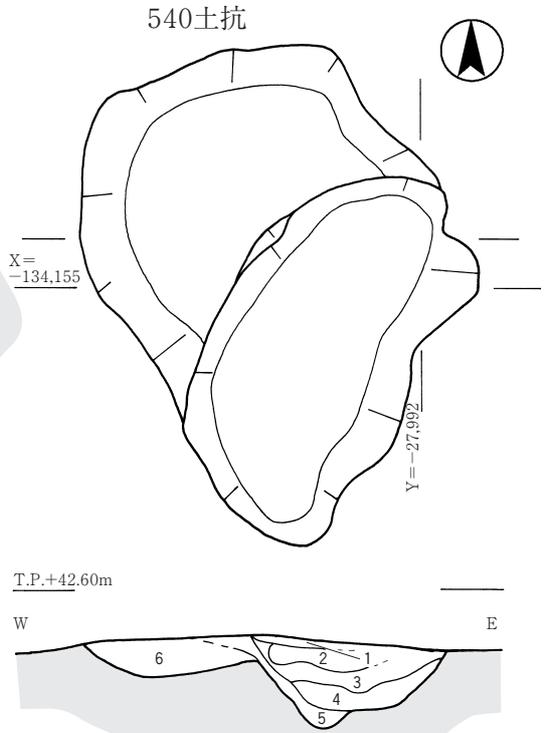
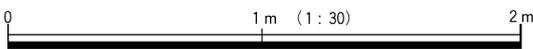
図86 有池遺跡03-1-1調査区 207井戸 平・断面図



1. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土(細～中砂が均一に混ざったものを主として、若干粗砂が混入する)
2. にふい黄褐色10Y R5/3粘質土(微～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫、にふい褐色砂質土の地山ブロック含む)
3. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土(細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫と若干の地山黄色粘土ブロック含む)
4. 明黄褐色10Y R6/6粘質土(微～中砂が均一に混ざる。地山の黄色粘土ブロックと、灰色粘質土が混ざり合うが、前者の占める量が圧倒的に多い)
5. 黄灰色2.5Y 5/1粘質土(微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が混入する)
6. 褐色10Y R5/1粘質土(微～細砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が混入する)
7. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土(細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫が混入する)
8. にふい黄褐色10Y R5/3砂質土(細～粗砂が均一に混ざる。地山の黄色粘土ブロックが混入する)
9. 褐色7.5Y R4/1粘質土(微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫を僅かに含む)
10. にふい黄褐色10Y R6/3砂質土(微～粗砂からなる。ラミナ顕著)
11. 黒褐色10Y R3/1粘質土(微～細砂が均一に混ざる。粗砂が入る)



1. 灰褐色7.5Y R4/2粘質土(微～細砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の砂粒含む)
2. 褐色7.5Y R5/1砂質土(微～細砂が均一に混ざりあう。酸化鉄斑文を含む)
3. にふい黄褐色10Y R5/3粘質土(微～細砂が均一に混ざる中に、粗砂含む)
4. 黄灰色2.5Y 5/1砂質土(細～中砂が均一に混ざる)
5. 灰褐色7.5Y R4/2粘質土(細～粗砂が混ざり合う中に、直径3mm大の円礫を多く含む。酸化鉄斑文有)

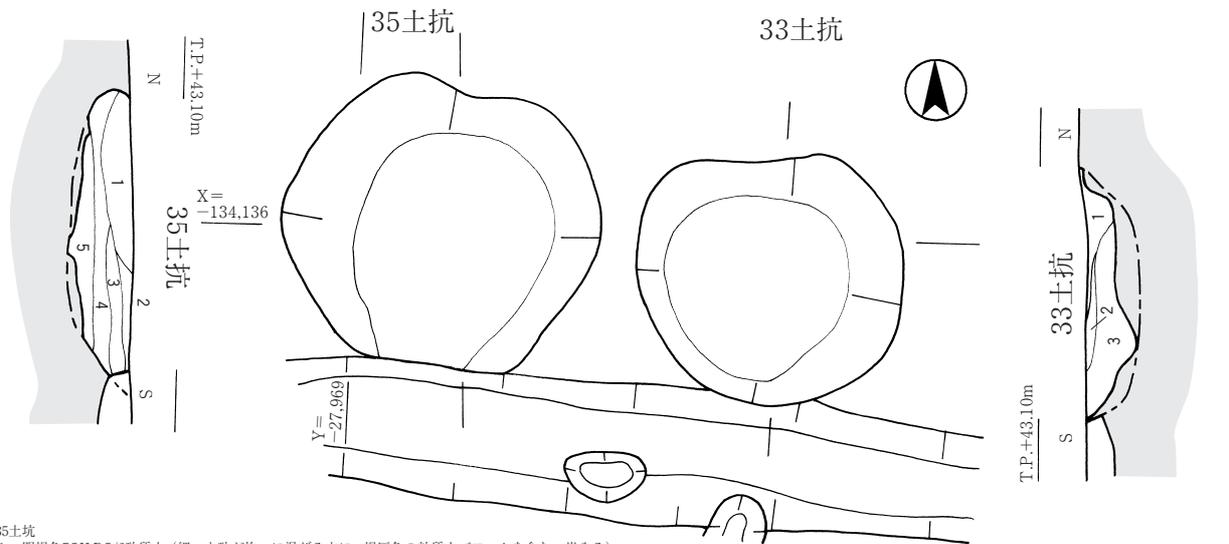


1. 灰褐色7.5Y R4/2粘質土(微～細砂が均一に混ざる中に、直径2mmの白砂粒含む。マンガ斑文顕著)
2. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土(細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の花崗岩礫含む)
3. にふい黄褐色10Y R6/4砂質土(微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の白砂粒含む)
4. 灰色10Y 5/1粘質土(微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の白砂粒含む)
5. 黒褐色2.5Y 3/1粘質土(微～中砂が均一に混ざる)
6. 灰黄色2.5Y 6/2砂質土(細～粗砂が均一に混ざる)

図87 有池遺跡03-1-1 調査区 土坑 平・断面図

片で摩滅していた。そのうち瓦器碗と土師器皿を各1点図化した。図化しなかった遺物に関してみても、瓦器碗にはあまり大きな時期差は認められなかった。詳述すると、口縁内面の沈線は器壁に対して上方からの角度で押し当てた工具で施されているため、口縁端部が外反して段に近い形状になっている。外面のミガキは口縁部付近にわずかに入れられている。内面のミガキは隙間なく密に施されたものと、やや粗くなっているものの二者が認められた。これらのことから、当遺構に含まれる遺物の時期は12世紀後半～13世紀初頭に含まれると考える。

56土坑 (図87) 上段の平場 (20G-8c・8d) で検出した。ピットが密集する部分に位置し、建物2の柱穴を切っている。長軸3.3m、短軸2.4~3.3mで、平面形は不整形である。最終遺構面からの深さは20~25cmで、底部はほぼ平坦だが、ところどころに凹凸が認められた。土層断面の観察により、土

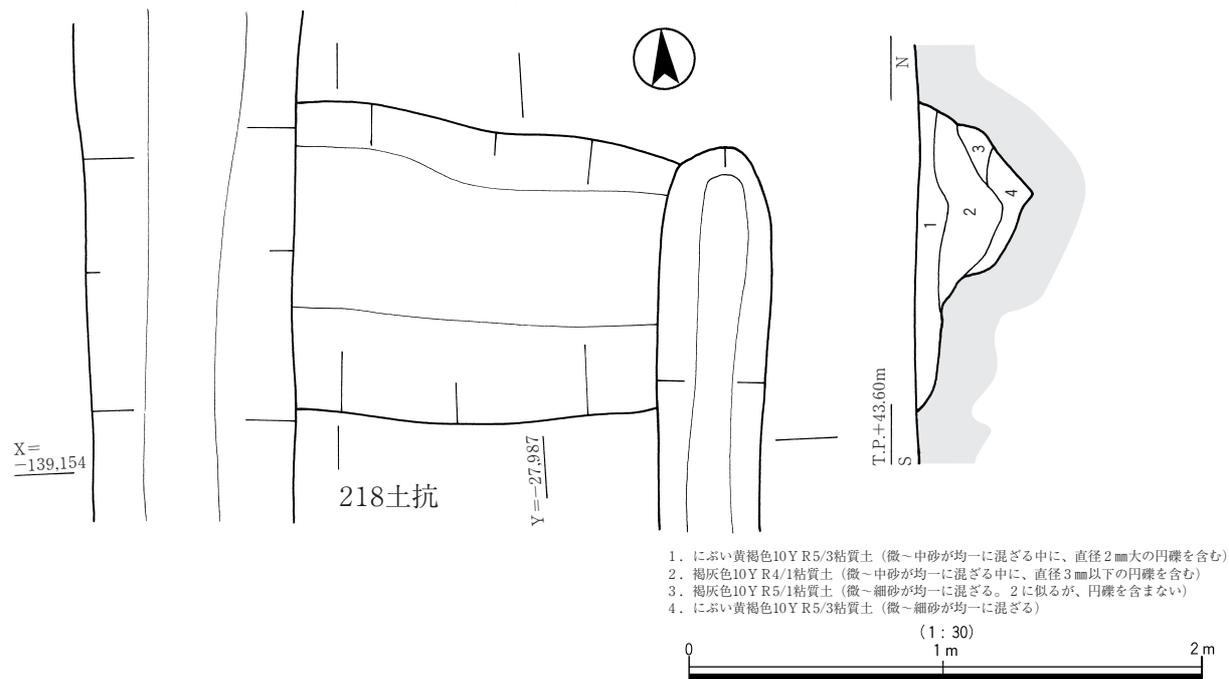


35土坑

1. 明褐色7.5Y R5/6砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、褐灰色の粘質土ブロックを含む。炭入る)
2. 黒褐色5 Y R3/1粘質土 (焼土と炭を含む細～粗砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロック若干と、直径5mm以下の花崗岩礫を含む)
3. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。地山の黄色砂質土ブロックと炭を含む。土質は2より粘性はあり4より粘性は低い)
4. 褐灰色7.5Y R4/1砂質土 (微～中砂が均一に混ざる。焼土、炭が僅かに入る)
5. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微砂を主体に、中砂が入る)

33土坑

1. 黒褐色5 Y R3/1粘質土 (焼土と炭を含む細～粗砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロック若干と、直径5mm以下の花崗岩礫を含む)
2. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
3. 褐灰色7.5Y R4/1砂質土 (微～中砂が均一に混ざる。焼土、炭が僅かに入る)



1. におい黄褐色10Y R5/3粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫を含む)
2. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の円礫を含む)
3. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。2に似るが、円礫を含まない)
4. におい黄褐色10Y R5/3粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)

図88 有池遺跡03-1-1調査区 土坑 平・断面図

坑は一度に埋められたのではなく、徐々に埋まったことがうかがえる。埋土の上部で、有機物を含んでやや黒色化した土層を部分的に認めたが、おおむね地山の風化土が堆積したものととらえられる。径20～30cmの角礫を複数検出したが、これらは遺構底部からやや浮いた状態で出土した。

遺構埋土から瓦器椀・土師器皿・土師質土器の破片が出土した。いずれも細片で摩滅が著しく、形態的特長を看取できる遺物は少量だった。うち土師器皿2点を図化した。その他の遺物を見ると瓦器椀に12世紀末～13世紀初頭にさかのぼると見られる口縁部片が1点認められた。しかしそれ以外は外面にミガキをもたず、内面のミガキは幅0.5mm程度で2～3本/1cmの粗い密度で施されていた。口縁内面には沈線をもつものともたないものの二者が認められ、高台の形状には退化傾向が著しかった。これらのことから出土遺物は、大半が13世紀後半以降のものと考えられる。

454土坑 (図87) 上段の平場 (20G-9 e) に位置する。平面形は長軸1.8m、短軸1.4mの楕円形で、深さは5～10cmと極めて浅い。土坑の底面は平らで、中央よりやや北よりの部分で220ピットを検出した。土坑・ピットいずれの埋土からも土器は出土しなかった。

540土坑 (図87) 上段平場の南西端 (20G-10 f) で、190溝と191溝に上部を切られた状態で検出した。ひとつの土坑として掘削したが、直径1.5m弱の不整形土坑を長軸1.5m、短軸80cmの楕円形土坑が切っているものである。深さは最深部で35cmを測る。楕円形土坑の埋土最下層に中世包含層に似た土が落ち込んでいるが、基本的には地山の風化土によって徐々に埋まったものとみられる。埋土から遺物は出土しなかった。

35土坑 (図88) 上段の平場 (20G-7 d) で、建物1～4が集中する区画に位置する。33土坑や11井戸にも近接する。直径1.25mの円形土坑とみられ、後述する33土坑と形状が似ている。深さは25cmで、ほぼ平らな底部から内湾ぎみに壁面がたちあがる。埋土中に炭化物が含まれていた。

瓦器椀・土師器皿・瓦質三足釜・瓦質羽釜・須恵質土器・瓦質火鉢等が出土したが、いずれも細片で摩滅しており、図化しうるものはなかった。瓦器椀の口縁端部は尖り気味に丸くおさめられており、内面に沈線をもつものともたないものがあった。器壁の厚さは前者が3～4mm、後者は2～3mmである。内面のミガキは幅が0.5mm程度で3～4本/1cmの密度でみられる。全体の形状がわかる遺物がないので断定はできないが、おおむね13世紀後半～14世紀前半の遺物で占められるとみられる。

33土坑 (図88) 前述の35土坑の東隣に位置する。土坑の南端部が34溝を切っていることから、その出現時期は35土坑より後であることがわかる。直径約1.3m、深さ30cm弱の円形土坑で、平らな底部から外方に壁面が立ちあがる。埋土中に焼土・炭化物を含む点も35土坑と類似している。

出土遺物に瓦器・土師器・須恵質土器があるが、いずれも細片で時期を判断することはできなかった。

10焼土集積遺構 (図89・90) 下段の平場 (20G-10 f・1G-1 f) で検出した。高さ30cm弱、平面形が長辺2.3mの隅丸台形状に焼土の集積を認めた。焼土は2層に分けられる。この焼土を除くと複数の角礫が、遺構面に据えられた状態で出土した。それらは一辺30cm以上で、原位置を保っていると見られる5点の角礫の配置から推して、平面形が長方形になるように礫を敷き並べていた可能性が高い。焼土には窯壁状の焼土塊が多量に含まれていたのに加え、土器片も多く含まれていた。これらのことから、もとは平面形が長方形を呈する石組みの遺構で、火に関連する機能を有していたとみられ、竈の可能性が高いと考える。

出土遺物は、焼土に混ざりこむようなかたちで検出した。瓦器・土師器・瓦質土器・土師質土器があり、そのうち瓦器椀と土師器皿を各1点図化した。それ以外は全て細片だった。図化しなかった遺物

を見ても、13世紀後半より時期が遡る可能性のあるものはみられなかった。したがって出土遺物は13世紀後半～14世紀前半までの時期に収まるとみられる。

この周辺で検出したピット・土坑の中には等間隔で並ぶものもあることから、それらがこの遺構を覆っていた構造物の柱穴になると考えるが、その構造を復元することはできなかった。

105石敷土坑(図91) 中心建物の張り出し部分に含まれる施設である。中心に20～40cmの角礫を敷き詰めた直径2 m前後の浅いくぼみを伴う、直径3.0m程度の浅い土坑で、さらにその東側には約1.5mの長さで東西方向に延びるステップ状の平場がつく。角礫はおおむね平坦な面を上にして置かれているが、土坑の縁に位置するものは、直立もしくは壁にもたせかけるような形で検出した。

中心建物の張り出し部分はこの施設の覆い屋とみることができる。覆い屋の柱は土坑の隅に接するように配されているが、東側のステップ状の平場は覆い屋の外側にはみ出す。したがってこの部分は外部からの出入口にあたるかもしれない。

この遺構のように、土坑の底面や側面に平坦面をそろえて石を敷き詰めた遺構には、これよりもっと規模は大きくなるが、「湯殿」や「湯屋」の例がある。これらの遺構は石敷きの施設と湯を沸かす窯場が併設される。それに対してここでは窯場に対応する施設は認めなかった。また前述したように外部か

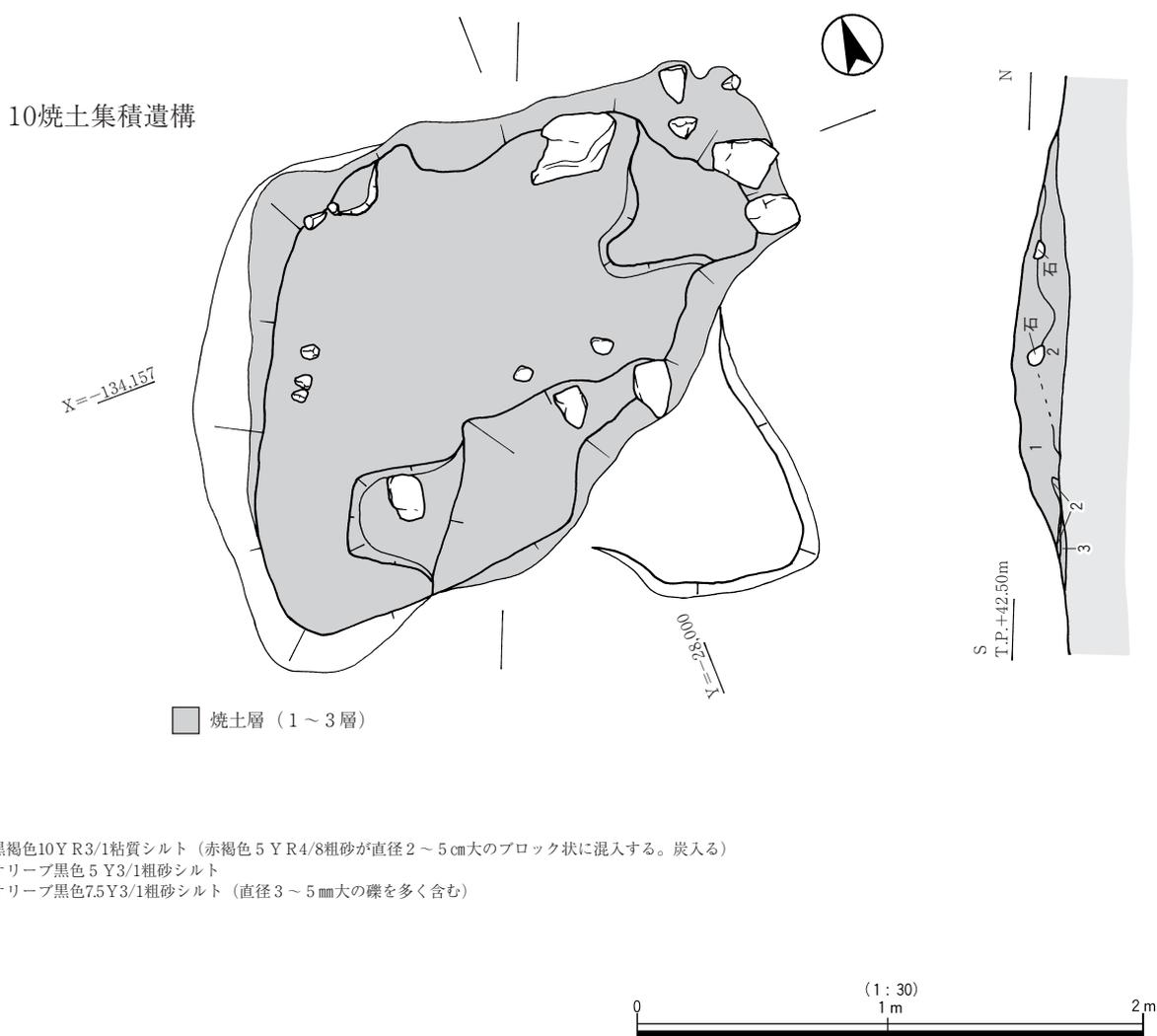
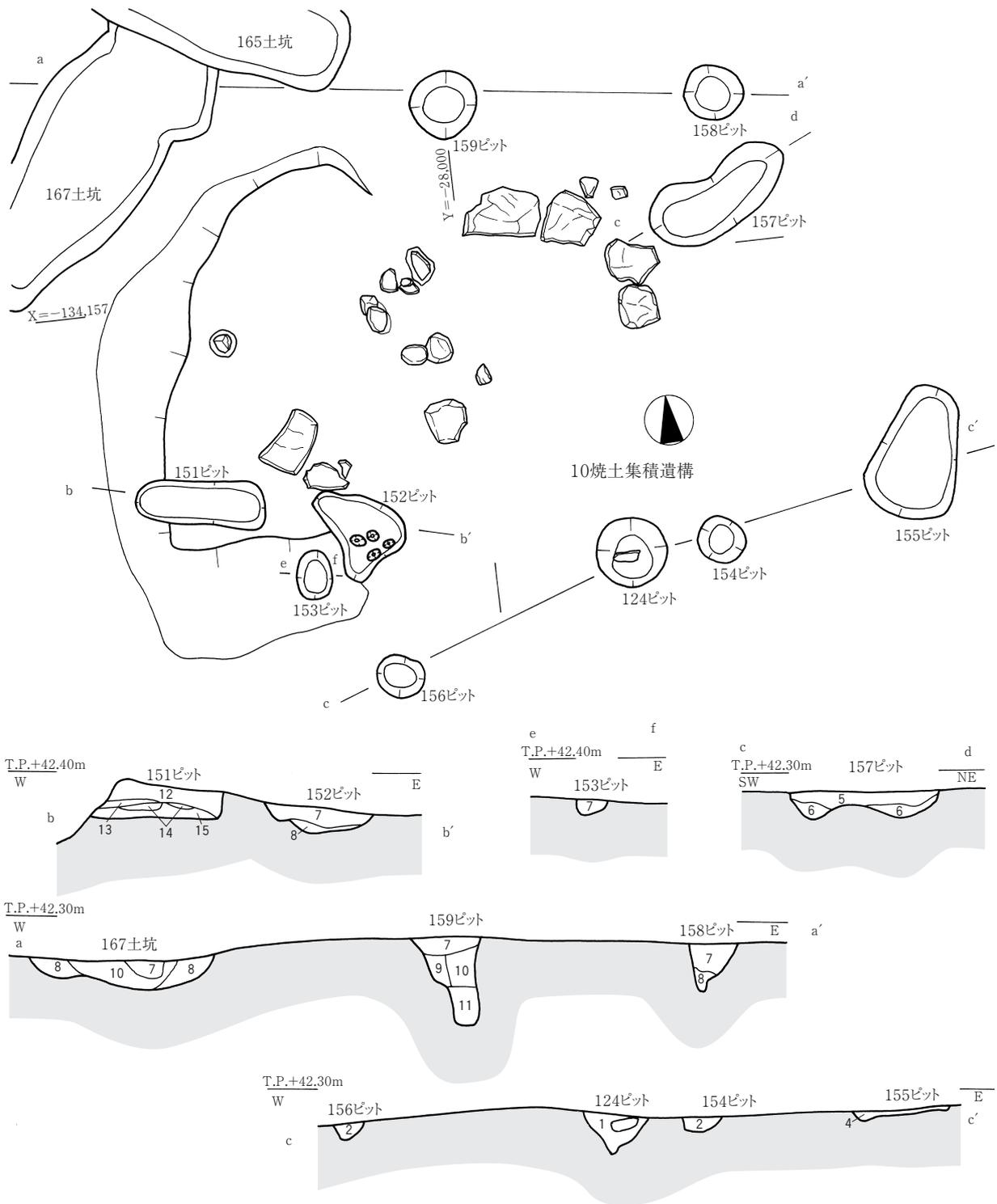


図89 有池遺跡03-1-1 調査区 10焼土集積遺構 平・断面図



1. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (微砂に、粗砂、直径3mm大の花崗岩の円礫を含む)
2. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微砂に、粗砂、直径2mm大の礫を多く含む。地山の黄色粘土ブロックを含む)
3. にぶい黄褐色10Y R5/3粘質土 (微砂に、粗砂が均一に混ざる。地山の黄色粘土ブロックを多く含む。2に似るが、それより粘性が強い)
4. にぶい黄褐色10Y R6/4粘質土 (細砂に、直径2mm以下の花崗岩の円礫を多く含む)
5. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (細砂に、直径2mm大の花崗岩の円礫を多く含む)
6. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細砂～粗砂が均一に混ざる。5に似るが、それより粘性は低い)
7. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂、直径2mm以下の円礫が均一に混ざる。炭化物、地山の黄色粘土ブロックを含む。2に似るが粘性は低い)
8. にぶい黄褐色10Y R5/4粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)
- 8'. にぶい黄褐色10Y R5/4砂層 (細～中砂からなる)
9. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。炭化物を僅かに含む)
10. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘土ブロックを僅かに含む)
11. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の白砂粒を僅かに含む)
12. 黒褐色7.5Y R3/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の礫を含む)
13. にぶい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の礫を含む)
14. 棕色7.5Y R6/6粘質土 (微砂が主体で、直径2mm大の円礫が混ざる。鉄分の沈着が顕著)
15. 黒褐色7.5Y R3/2砂質土 (土質は12に同じ)

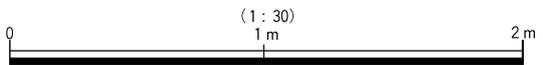


図90 有池遺跡03-1-1調査区 10焼土集積遺構完掘状況と周辺遺構 平・断面図

らの導入部と見られる部分があるのに加え、全体に浅くくぼむ点から馬屋の可能性も考えられる。

出土土器に瓦器椀・土師器皿・瓦質土器・東播系の須恵器鉢があり、ほとんどが細片だった。そのうち瓦器椀と須恵器鉢を各1点図化した。それ以外の遺物を見ても13世紀より前、もしくは14世紀よりも降る時期の遺物と判断できるものはみられなかった。細片を含めての観察なので断定はできないが、出土遺物の時期はおおむね13世紀に収まるのではないかと考える。

114土坑(図92) 下段の平場で中心建物に重なる場所に位置する。平面形は瓢箪形で直径の最長部分が2.3mである。底部は凹凸があって深さは15~35cmと一定しないが、壁面は直立する傾向が認められた。土坑の埋土は2層からなる。土層の堆積状況のからみて、遺構が半分ほど埋まったところで、整地に伴って完全に埋没したと考えられる。中心建物③の柱穴(118ピット)に土坑の縁を切られていた。出土遺物はなく、中心建物の③より前の時期の中心建物と並存したかどうかは不明だが、遺構の時期の下

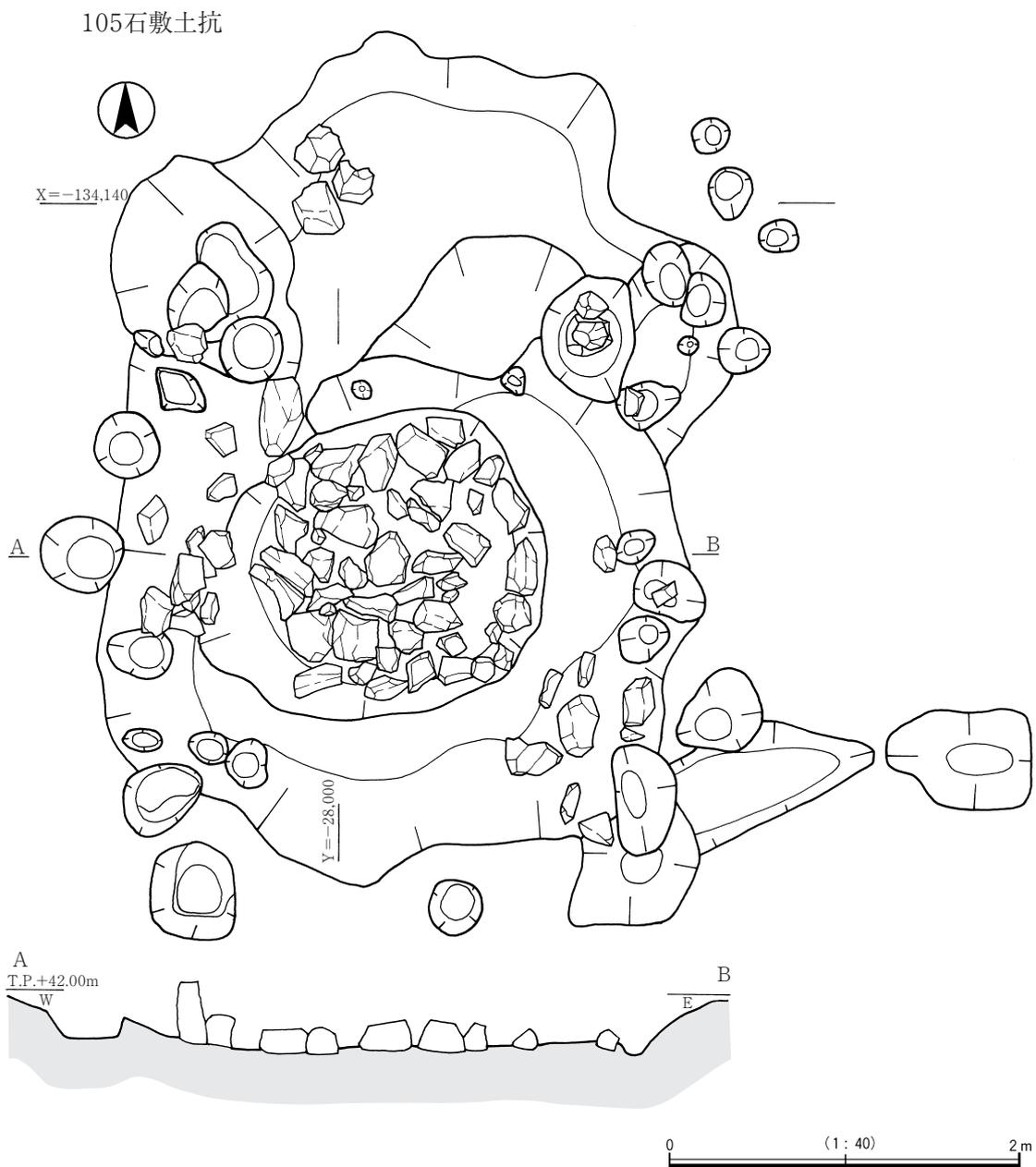


図91 有池遺跡03-1-1調査区 105石敷土坑 平・断面図

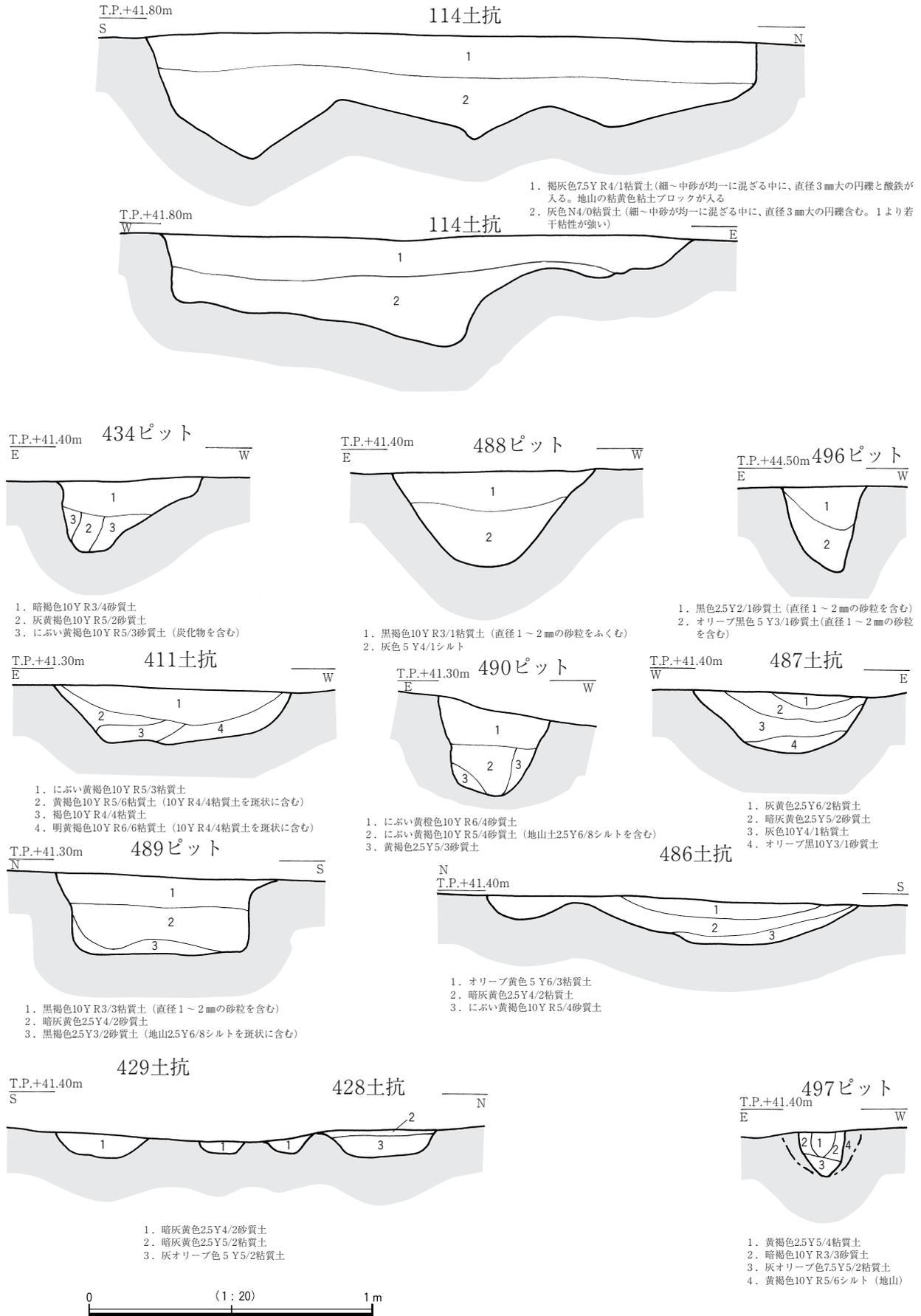


図92 有池遺跡03-1-1調査区 土坑・ピット 断面図

限は13世紀後半に置くことができる。

434ピット(図92) 下段の平場で407溝よりも西側に位置する(1G-3d)。直径50cm・深さ25cm、断面は隅丸のV字形で、土層断面を観察すると柱痕が認められた。ただ周囲では、このピットと関連性のあるピットを検出しなかった。

遺構埋土から瓦器椀・土師器皿・瓦質土器・土師質土器が出土した。いずれも細片で摩滅していたが、図化した土師器皿は12世紀にさかのぼるようである。瓦器椀は口縁部片が3点、高台片が1点出土した。口縁部片は2点が大和型、1点が楠葉型の特徴を有し、摩滅によりはっきりとしないが、いずれも外面にわずかにミガキがほどこされているようである。内面のミガキは比較的緻密にいれられているようで、器壁の厚さは3mm程度である。また高台の断面形は逆台形を呈する。これらの特徴からみて遺物の時期は12世紀～13世紀の初頭におさまると考える。

488ピット(図92) 下段の平場で495溝の西側に近接する位置にある(1G-3g)。短軸70cmで楕円形、深さ35cmで断面形U字形の土坑である。遺構埋土は2層からなる。遺物は出土しなかった。

496ピット(図92) 下段の平場で7溝の西側に位置する(1G-3h)。直径30cm、深さ30cmの円形土坑である。遺構埋土は2層からなる。7溝の西肩に近接して、土坑やピットを何箇所か検出したが、検出数が限られており、溝の堤などに伴うものかどうかは不明である。埋土から遺物は出土しなかった。

411土坑(図92) 下段の平場で407溝よりも西側に位置する(1G-4d)。直径約2.6mの円形の土坑で、深さは25cmと浅い。底部は平坦で断面形は皿状である。411土坑は409溝を切っており、溝に接している土坑南端部で土層断面を実測した。1層が411ピット、2～4層が409溝の土層断面である。

埋土から完形の土師器皿を含め、比較的多量の土器が出土した。そのうち土師器皿と瓦器椀・瓦器皿を図化した。それらの遺物は12世紀におさまるものであるが、図化しなかった遺物の中にⅢ-A(新)期のものが含まれるので、出土遺物は12世紀～13世紀初頭の時期のものからなるといえる。ちなみに409溝の出土遺物も12世紀後半～13世紀初頭の時期に含まれ、両者には大きな時期差は認められない。

490ピット(図92) 下段の平場で、前述の411土坑の北側に隣接する位置にある(1G-4d)。直径35cm、深さ15cmの円形のピットで、埋土の堆積状態から見て、柱穴の可能性はある。ただその周囲にはこのピットとセット関係を有するピットが検出されておらず、どのような施設に伴うものだったかは不明である。埋土から遺物は出土しなかった。

487土坑(図92) 下段の平場で407溝よりも西側に位置する(1G-4h)。北西-南東方向に延びる溝の一部とみるべきかもしれない遺構である。幅65cm、延長4m弱で、中程でやや屈曲する。埋土から遺物は出土しなかった。

489ピット(図92) 下段の平場で7溝よりも西側に位置する(1G-4e)。長軸1.3m弱、短軸80cmの東西方向に長い楕円形の土坑である。深さは30cmで、平坦な底部から壁面が直立する。埋土から遺物は出土しなかった。

486ピット(図92) 下段の平場で7溝よりも西側に位置する(1G-4i)。平面形は水滴を「く」の字に曲げたような形状の不整形円形である。掲載した断面図は短軸の最大部分で実測した。深さは最大15cmと浅く、底面は一定しない。埋土から遺物は出土しなかった。

429・428土坑(図92) 下段の平場で407溝よりも西側に位置する(1G-4f・4e)。両者はほぼ平行しており、西に対してやや北に振る、東西方向の溝の一部とするべきかもしれない。どちらも最大幅約40cm、深さは10cm弱と極めて浅く、底面は平たい。耕作痕跡ととらえることができる。埋土から遺物

は出土しなかった。

497ピット (図92) 下段平場の、7溝よりも西側(1G-4f)で検出した。直径約15cm、深さ約16cmの円形のピットで、埋土の断面観察により柱穴とみられるが、このピットとセット関係を有するピットは出土しなかった。埋土から遺物は出土しなかった。

21ピット 上段の平場で遺構密集範囲の東端であり(20G-7d)、かつ建物1の東側に位置する。長軸50cm、短軸32cmの楕円形のピットである。

遺構埋土より瓦器椀・土師器皿・青磁椀が出土した。いずれも細片だったが、うち土師器皿1点を図化した。図化しなかった遺物のうち瓦器椀は断定はできないが、Ⅲ-A(新)期もしくはⅢ-B段階のものと考えられる。いずれにせよ出土遺物の時期は13世紀全般にわたると言える。

75ピット 上段の平場(20G-8c)で検出した。建物1~4・7がある、遺構の密集部の西側に位置する。建物を検出した範囲に比べると遺構密度は低いが、周囲には土坑・ピットが多数みられる。これらが柵や掘立柱建物に伴うものだった可能性もあるが、周囲は攪乱で大きく最終遺構面が削り取られており、ピット相互の関連性を明らかにすることはできなかった。

東西方向にやや長い、長軸径50cmの楕円形ピットである。深さ28cmで断面形はU字形である。遺構の埋土は大きく上下2層からなり、柱痕は出土しなかった。

遺構埋土より瓦器椀・土師器皿・土師質土器が出土した。いずれも細片で、全体の形状がわかる遺物は少なく、図化し得たのは土師器皿1点である。それをみると14世紀前半代の時期とみられる。図化しなかった遺物のうち、瓦器椀の口縁部片を見ると13世紀後半よりも時期がさかのぼるととれる特徴を見出すことができなかった。これらのことから出土遺物の時期は14世紀前後とみることができる。

76ピット 上段の平場で75ピットの南西側に隣接して位置する(20G-8c・8d)。長軸50cm弱、短軸30cmの南北方向に長い楕円形のピットである。深さは14cmと極めて浅く、断面形は皿形である。土層断面を観察した結果、柱痕らしい粘質土の堆積を認めたが、周囲は攪乱が占めており、他のピットとの関連性を明らかにすることができなかった。

遺構埋土から瓦器椀・土師器皿・須恵質土器の破片が少量出土した。そのうち図化した土師器皿は13世紀後半の特徴を有するものである。図化しなかった瓦器椀の口縁部片をみても、細片により明確な時期は判断できないが、13世紀後半より後の遺物であることは間違いなさそうである。

379ピット 上段の平場(20F-7c)で、建物1西辺の西側に近接して位置する。直径25cmの円形ピットで、深さは25cmである。遺構埋土は建物1の柱穴の埋土に似るが、柱痕は認められなかった。

遺構埋土より瓦器椀・土師器皿・瓦質三足釜・須恵質土器の破片が出土した。ほとんどが細片だったので、図化したのは土師器皿1点である。これは平坦な底部から口縁部が明瞭な屈曲部をもちながら、やや外方に直線的に短く立ち上がるものである。図化しなかった土師器皿で形態的特徴がつかめるもの3点のうち2点は前述の遺物と似た形状である。他の1点は底部から内湾気味に口縁部が立ち上がるものだが、口径は前述のものに近似する。瓦器椀の口縁部片は3点認められ1点は内面に、器壁に対してやや上方からの角度で工具を押し当てて沈線が施されている。他の2点は口縁部内面に沈線を持たず、口縁端部を直立気味に丸くおさめるものと、先細り気味に丸くおさめるものが各1点認められる。これらのことから出土遺物の時期は13世紀全般にわたるとみられる。

195土坑 下段の平場で、4溝の西肩(20G-10f)で検出した。198土坑の検出時に、それと重なった状態で検出した。10焼土集積遺構とその周辺のピット群の東側を限るような位置でもある。長さ約3

m、最大幅1mの南北方向に長い瓢箪形の土坑で、深さは20cm弱である。

遺構埋土より瓦器椀・瓦質土器・土師器皿・土師質土器・須恵質土器が出土した。図化した土師器皿に12世紀後半にさかのぼるとみられるものが含まれるが、それら以外に12世紀にさかのぼりうる遺物はみられなかった。また14世紀以降に含まれると積極的に判断できる遺物も認められなかったことから、出土遺物の時期は13世紀後半の時期にほぼ収まると考える。したがって前述の10焼土集積遺構とこの遺構とは並存していた時期があったと言える。

47ピット 上段の平場で建物3西辺の西側に近接して位置する(20G-8d)。またピットの西半分は13溝によって切られている。ピットの残存部分から推して、長軸1m前後、短軸70cm、深さ33cmの楕円形の土坑とみられる。遺構の埋土は建物2の柱穴の埋土と似る。

瓦器椀・土師器皿・瓦質羽釜・瓦質三足釜が出土したが、ほとんどが細片で図化しえたのは土師器皿1点である。瓦器椀片をみると口縁部では端部を丸くおさめて内面に沈線を施すものと、先細り気味に丸めて内面に沈線をもたないものの二者があった。外面にミガキをもつものは無く、内面のミガキも3~5本/1cmと粗く入れられたものが大半を占める。土師器皿は底部から緩やかなカーブで短く口縁が立ち上がるものと、それよりも屈曲部の変化が明瞭なもの二者があった。これらのことから出土遺物の時期はおおむね13世紀全般にわたるとみられる。

141ピット 中心建物の北東隅の柱穴に接して位置する(20G-10d)。ある時期、中心建物の北東隅の柱穴をなしていたか、もしくはその一部であった可能性が極めて高い。ただ埋土は単層で柱痕は検出できなかった。遺構埋土に含まれる遺物は完形の土師器皿と土師器の細片が各1点である。前者は12世紀の所産とみられる。

443土坑 下段の平場で7溝より西側に位置する(1G-4e)。長軸1.1m、短軸70cmで東西方向に長い楕円形の土坑で、深さは約20cmである。

遺構埋土から瓦器椀・土師器皿・瓦質土器等が出土した。図化した土師器皿は口縁外面に二段の横ナデが施されるもので12世紀の所産と見られる。瓦器椀は口縁部と底部がそれぞれ2個体分出土した。いずれも細片で摩滅しているため断定はできないが、おそらくⅢ-A期に含まれるものと考えられる。したがって出土遺物の時期は12世紀~13世紀初頭とみられる。

80ピット 上段の平場で、建物4の南東隅の柱穴である51ピットに近接してその北西方向に位置する(20G-8d)。長軸55cm、短軸42cmの楕円形ピットで、最終遺構面から測った深さは35cmである。

遺構埋土から瓦器椀・瓦質羽釜・土師器皿・東播系の須恵質土器が出土した。図化した瓦器椀は13世紀後半~14世紀前半の時期のもの、図化しなかった遺物もおそらくその時期におさまる。

27ピット 上段の平場で、建物2の東辺の中央に位置する24ピットに切られている(20G-7d)ため、ピットの東半部は失われている。直径30cmの円形のピットで、深さは14cmと極めて浅く、遺構の埋土は建物1の柱穴の埋土に似る。

遺構埋土から瓦器椀が2点出土した。そのうち図化した1点は12世紀末~13世紀初頭の時期のものである。他の1点は細片のため時期を判断することができなかった。

59ピット 上段の平場で、56土坑と13溝の中間に位置する(20G-8c)。直径50cmの円形ピットで深さは34cmである。遺構埋土は建物2の柱穴の埋土に似る。

瓦器椀・土師器皿が出土した。図化した瓦器椀は12世紀末~13世紀初頭の時期に位置づけられるが、これよりも内面のミガキが粗く、一段階新しい様相を帯びる瓦器椀が1点含まれる。図化しなかったが

土師器皿は口径が4cm前後のもの2点と6.5cm前後のもの1点が出土している。器高はいずれも1～2cmで底部からの口縁部の立ち上がりはなだらかである。これらのことから出土した遺物の時期は12世紀末～13世紀前半の時期に含まれると考える。

293ピット 上段の平場で56土坑と建物3・4の北辺との間に位置する(20G-8d)。長軸55cm、短軸40cmで南北方向に長い楕円形のピットで、深さは30cmである。この遺構の埋土は、建物2の柱穴の埋土と類似している。建物2の西辺の中央に位置する284ピットから1m弱西に位置する。348ピットと44ピットにも、建物2の西辺に並ぶピットとの間で同様な位置関係が認められ、建物2の西側に張り出す庇や縁を支える柱穴だったことが想定される。言い換えれば348-293-44ピットは建物2に付設されたものの可能性がある。

遺構埋土より瓦器碗が2点出土した。うち図化した1点は12世紀後半の所産である。他の1点に関しては細片のため時期を判断することはできなかった。

163・383ピット 下段の平場で中心建物の柱穴が集中する部分に位置する(1G-1d)。遺構の検出時に、163ピットと383ピットが切りあっている状況に気づかず、一つの楕円形のピットとみなして、長軸方向に半掘したため、その段階で出土した土器が、どちらの遺構に帰属するのかを明らかに出来なかった。したがって次節でもこれら二つのピットを併記して、出土遺物を紹介している。埋土の断面観察により、163ピットが383ピットを切っていることを確認した。

遺構埋土より土師器皿と瓦器・土師器の細片が出土した。前者は13世紀後半の所産と考えられるが、その他の遺物に関しては細片のため時期を判断することはできなかった。

102ピット 下段の平場で中心建物の柱穴が集中する部分に位置する(1G-1d)。長軸70cm、短軸50cmの楕円形で、ピット内から根石らしい角礫が2点並んだ状態で出土した。このことから2個のピットが切り合っている可能性も考えられる。ただピットの断面形などからそのような切り合い関係を認めることはできなかった。いずれにせよ4段階にわたる中心建物のある時期に含まれる可能性が高いが、これと明確なセット関係をもつピットを明らかにすることはできなかった。

遺構埋土から瓦器碗・土師器皿・須恵質土器が出土した。そのうち13世紀後半の時期とみられる土師器皿1点を図化した。これと同タイプのもので2個体出土している。瓦器碗は細片のため、時期を判断することはできなかった。

171ピット 下段の平場で、10焼土集積遺構の北西側、かつ165土坑の西側に位置する(1G-1f)。長軸約90cm、短軸55cmの楕円形で、上部が削平されているため残存深度はきわめて浅い。10焼土集積遺構の周辺で検出したピット・土坑からはあまり遺物が出土しなかったが、このピットからは瓦器碗・土師器・瓦質土器が出土した。うち図化したのは土師器皿1点で、13世紀後半の所産と考えられる。その他の遺物は細片のため時期を判断することはできなかった。

431土坑 下段の平場でかつ、7溝の西側に位置する(1G-4f)。東西方向を指向する494溝を切っている。長軸1.7m、短軸1.2mの楕円形土坑で、深さは20cmである。出土遺物に瓦器碗・土師器皿があり、図化した土師器皿は12世紀の所産とみられる。図化しなかったがこれと同タイプの土師器皿が他に1点ある。瓦器碗は細片が2点で口縁部を含むのは1点だった。それを見ると口縁端部はやや外反気味に丸くおさめられ、内面に沈線はもたない。内面のミガキは幅1mm弱で7～8本/1cmと比較的密に施され、器壁の厚さは3～4mmである。全体の形状がわからないため断定はできないが、おそらくⅢ-1期と考える。そうであれば出土遺物の時期は12世紀～13世紀の初頭に含まれるといえる。

435土坑 下段の平場で、7溝に平行する407溝の西肩に接する位置にある（1G-3e）。正確な大きさはわからないが、短軸60cmの楕円形になるとみられる。深さは10cmと極めて浅い。

出土遺物は瓦器碗・土師器皿・土師質羽釜・瓦質三足釜・東播系の須恵器鉢等で、ほとんどが細片だった。図化した土師器皿は14世紀前半の所産とみられるが、図化しなかった他の遺物の破片をみると13世紀前半～14世紀前半までの時期のものが含まれるとみられる。

446土坑 下段の平場で、407溝の西側に位置する（1G-4e）。最大幅1.3mで、「く」の字を反転させたような平面形を呈する。深さは約30cmである。出土遺物は瓦器碗・土師器皿が細片も合わせて7点出土した。図化した土師器皿は12世紀の所産と判断できる。瓦器碗は口縁部を含む破片が2点出土した。それらはいずれも外面に施された強い横ナデにより口縁部が外反気味で、内面に器壁に対して上方から工具を当てて幅2mm程度の沈線が入れている。外面のミガキは摩滅によりわずかしか認められないが、おそらく体部中ほどに達すると見られる。器壁の厚さは2～3mmと全体に薄手で、内面のミガキは幅1mm強で、磨きの軌跡を目でたどることができるが、比較的密に施されている。これらのことから出土遺物の時期はほぼ12世紀後半に収まると考える。

492ピット 下段の平場で407溝よりも西側に位置する（1G-3d）。ピットの西側には408溝が接している。直径40cm程度の円形のピットで、深さは20cm弱と浅い。下段の平場で407溝ないし7溝より西側の部分では主として溝を検出しており、概してピットや土坑の検出数は少ないが、当遺構の周辺は特にピットの検出数が限られている。

遺構埋土から土師器皿・瓦質土器の破片が7点出土した。図化した土師器皿は口縁部に2段ナデを意識したナデが施されており、12世紀前半に属するとみられる。他の土師器皿は口径がおそらく4～5cmの間に含まれるとみられる。器壁の厚さは2mm前後と浅く、器高は不明である。全体の形状が残らないので断定はできないが、底部から口縁部がなだらかかつ浅く立ち上がる形態と考えられる。

422土坑 下段の平場で7溝の西側に位置する（1G-3d・3e・4d・4e）。北端部を413土坑に切られるとともに、南北方向を指向する408溝に東端を切られている。長辺2.8m以上、短辺約2mの隅丸長方形の土坑で、深さは10cm弱である。

遺構埋土から瓦器碗・土師器皿・瓦質羽釜・土師質羽釜・東播系の須恵器鉢・青磁・白磁の破片が70～80点と比較的まとまった量出土した。そのうち白磁碗と瓦器碗を各1点図化した。図化した瓦器碗は12世紀後半～13世紀初頭（Ⅲ-A期）に属すると見られるものである。図化しなかった瓦器碗もそれと同タイプのもので占める。特にⅢ-A（古）期に属する可能性のあるものは1点で、それ以外はⅢ-A（新）期に属すると考えられる。形態のわかる土師器皿に関しては、いずれも底部から内湾して直立気味に口縁部が立ち上がる形態だった。このような状況から、出土した遺物の時期はおおむね12世紀末～13世紀初頭の時期に収まるとみられる。

111土坑 下段の平場（1G-1f・2f）で、建物8の南側に位置する。長軸2.8m・短軸2.0m前後の楕円形の土坑とみられるが、遺構の北半部は検出できなかった。試掘トレンチを設定した際に削平したものとみられる。深さは約40cmで、平坦な底部から直立気味に側壁が立ち上がる。

遺構埋土から瓦器碗・土師器皿・瓦質釜の破片が出土した。いずれも細片であるため図化しなかった。瓦器碗の口縁部片2点をみるといずれも同じ時期の遺物とみてよいようだ。口縁端部は先細り気味に丸くおさめられ、外面にミガキは見られない。口縁部外面に強い横ナデがほどこされ、体部外面にはユビオサエの痕跡が顕著に残る。内面のミガキは3～5本/1cmの密度で施され、器壁の厚さは3mm前後で

ある。土師器皿は口径4cm程度と見られ、ユビオサエが顕著に残る底部から口縁部が直立気味に短く立ち上がる。これらの遺物の特徴から、出土遺物の時期は13世紀後半と見られる。

415土坑 下段の平場で407溝の西側に位置するとともに、南北方向を指向する408溝に西半部を切られている(1G-3d・3e)。現存部分で見ると、直径1.1mの円形の土坑で、深さは約10cmである。位置関係や出土遺物の類似性からみて、422土坑と一連の遺構である可能性があるが、それぞれ408溝に切られていて、平面的につながりを確認できなかったので、別の遺構番号を付した。

出土遺物は瓦器椀・瓦器皿・土師器皿・瓦質土器などがある。瓦器椀は口縁部を含むものが8点あったが、それらは口縁部内面に上方からヘラを押し当てて引いた沈線がみられ、口縁端部が外反する。口縁部外面にミガキが施されるものが1点見られたが、それ以外のは摩滅しており判然としなかった。内面のミガキも摩滅で明瞭には見られないが、1mm程度の幅で密にいれられているようである。2点あった底部片のうち高台の断面形は1点が正三角形気味で、他の1点が外反気味の逆台形を呈する。これらのことから出土遺物は12世紀後半代の時期に含まれると考える。

266土坑 下段の平場で7溝の東肩に近接するとともに、207土坑の北側(1G-2f)に位置する。長軸2.3m、短軸70cmで南北方向に長い楕円形の土坑で、深さは約50cmである。

遺構埋土から瓦器椀・瓦器皿・土師器皿・瓦質土器の細片が出土した。図化した瓦器椀は14世紀前半に属するとみられる。この他に口縁端部を丸くおさめて内面に幅2mm程度の沈線をもち、器壁の厚さが3~4mm、内面のミガキは幅0.5mmで4~5本/1cmの密度で、13世紀前半に属すると見られるもの、それと図化した遺物の中間的な形態で、おそらく13世紀後半に属すると見られるものも2~3点ずつ含まれる。したがって出土した遺物の時期は13世紀~14世紀前半の時期と見ることができる。

120落込 下段の平場で、4溝と8溝が接する屈曲部の西肩の部分にあたる(1G-10c・10d)。周囲の最終遺構面より20cm下がったところに平坦な底面があり、4溝に接している部分は立ち上がりをもたずに溝に移行する。溝と反対側の立ち上がりは明瞭な屈曲部を持たずになだらかである。埋土は地山の黄褐色粘質土ブロックを多く含み、よく締まっていた。

遺構埋土より瓦器椀・土師器皿・瓦質三足釜・瓦質羽釜・須恵質土器・陶器などが50~60点出土した。そのうち甕や釜の破片が半数近くを占める。瓦器椀・土師器皿はいずれも細片で摩滅したものがほとんどなので断定はできないが、14世紀前半まで降ると積極的に判断できるものはみられなかった。それらの器壁は3mm前後と薄く、瓦器椀の口縁端部の形状は先細り気味に丸くおさめられていることから、遺物の時期はおおむね13世紀後半の時期に収まると考える。

413土坑(図97) 下段の平場で407溝の西側に位置し(1G-3d)、408溝の西肩を切りつつ、それとほぼ平行するように南北方向に長い土坑で、南端部がわずかに422土坑を切っている。東西方向の幅は1.3~1.9mと一定しない。底部にはやや凹凸がみられ、深さは10cm弱と極めて浅い。

遺構埋土より瓦器椀・土師器皿・瓦質羽釜などの破片が50点ほど出土した。図化した瓦器椀は13世紀前半の所産と考えられる。図化しなかった瓦器椀もおおむねそれと同時期のものと考えられるが、12世紀後半までさかのぼる可能性のあるものも若干含まれる。また土師器皿には底部から口縁部がなだらかに立ちあがるものと、口縁部を内側に折り曲げた、コースター形の最終形態のものがあつた他、口縁部外面に強い横ナデを施して外反化の初期段階とみられるものも2点認めた。これらのことから出土遺物の時期は大半が13世紀前半までの時期に収まるが、13世紀後半のものも若干含まれると考える。

土器3(図93) 上段の平場で検出した(20G-8d)。13溝が12溝に向けて屈曲する部分の東肩にあ

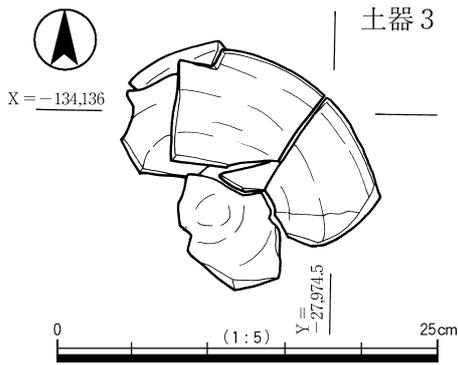


図93 有池遺跡03-1-1調査区 土器3
出土状況図

たる。ほぼ完形の東播系須恵器鉢で、底部を水平に据えつけた状態で検出した。土坑の痕跡を認めることができなかったが、包含層から掘りこまれた土坑の底部に埋置されたものの可能性が高い。

4溝(図94) 下段の平場に位置する南北方向の溝である。屋敷地の東端を限るとともに、南から北へ向けて水を流していた。5井戸よりやや南のあたりを境にして、溝の深さが異なる。つまり5井戸の南側で、溝底部の傾斜が強い部分を認めた。それより北の部分では、溝の幅は約2.5m、深さが60cm前後に達するのに対し、それより南側では溝の西肩と溝の底部との比高が平均40cmになり、徐々に幅を減じながら、調査区の南東壁に接する部分で底部が立ちあがって途切れてしまう。4溝の底部で認められる高低差を反映するような状況が、他の遺構では認められなかったことから、地形的な変化に対応してそうならざるを得なかったというよりは、意図的に深さに変化をもたせたものとする。

このような途中での深さの変化や、延長距離35mで途切れる理由を4溝単体の機能に帰結して述べることは難しい。4溝・8溝・7溝・407溝相互の関係や、これらで囲まれた屋敷地の区画と関連付けられるべき事柄と考える。これに関しては、第4節の中で私見をまとめたので併せて参照されたい。

浅い部分においても底部が湧水層に達しており、常に水がしみだす状況が認められた。また溝の最下層に流水堆積土層が認められることから、溝の開鑿当初には湧水が溝内を流れる状況が見られたと考える。流水堆積土層より上の層は滞水性堆積層と見られることから、溝内が埋まってくるにつれて水がよどんだ状態になったとみられる。さらにその上の層では、地山の粘土ブロックの混入が顕著なことから、整地等に伴って溝が一旦、人為的に埋められたものとする。

屋敷地が廃絶し、耕地に転用されてからは、ほぼ同じ場所に新しい溝が開鑿されている。それが基幹水路として調査着手前の水田にも引き継がれてきたようである。おそらく4溝が機能していた当ても単に区画するだけでなく、基幹水路としての機能も有していたと考える。

遺構埋土から瓦器碗・土師器皿・須恵質土器・陶器・瓦質三足釜・瓦質羽釜・土師質羽釜・青磁碗などが出土した。出土遺物の過半数を甕・釜の破片が占めるのに加えて、細片が多かった。大半を占めているのは13世紀後半～14世紀前半の時期のものと考えられる。

8溝 下段の平場における屋敷地の北を限る東西方向の溝である(20G-10c, 1G-1c・2c)。溝の北肩は調査区北壁の法面と重なっているため、正確な規模は明らかではない。おそらく4溝と同様に溝の幅は2.5m程度と見られるが、深さはそれよりやや深い1m程度と見られる。4溝を通ってきた水はこの溝を介して東から西に流れたと考えられる。埋土の堆積状況に関しては、横断面を部分的にしからえられなかったので、明確に判断できなかった。

埋土から瓦器碗・土師器皿・瓦質三足釜・青磁・白磁・須恵質土器・陶器が出土した。近世段階の遺物が若干出土したことから、近世以降も再掘削され、基幹水路としての役割を担っていたものとみられる。中世の遺物に関してはほとんどが細片で、12世紀中葉～後半に属する青磁皿1点を図化した。白磁碗は口縁部しか残存しなかったが、断面が下膨れのD字形を呈する玉縁が施されている。瓦器碗は全体の形状をとらえられるものがなかったので断定はできないが、口縁部片2点を観察する限り、13世紀前

半代のものと考えられる。土師器皿は平坦な底部から口縁部が短く外方へ直線的に立ち上がる。図化しなかった遺物も含めると、遺物の時期は12世紀中葉～14世紀前半に含まれる。

407溝(図94) 下段の平場で検出した南北方向の溝で、屋敷地の西端を限る。7溝より西に約2m離れて、ほぼ平行するように掘削されるが、7溝から分岐して南東から北西をさす部分は、幅が細くなっている。このように8溝との結節部から南に25mほどのところで7溝から分岐する理由は、屋敷地の区画と関連させて説明する必要があると考える。第4節で私見をまとめているので参照されたい。

幅は約3.9m、深さ90cmで溝底の幅は2.7mである。平坦な底部から壁面が外方に、直線的に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。溝埋土を見ると、流水堆積と滞水性堆積が互層に堆積する。前述したように7溝からの分岐部分の幅が極めて狭くなっていることからみて、その部分で頻繁に水の流れを調整したのではないかと考える。ただ幅が細くなる部分の溝の壁面には、水流によって削られたような状況が見られないことから、こちらの溝に注ぎ込む水量はそれほど多くなかったと考える。

遺構埋土から瓦器椀・土師器皿といった日常雑器に加え青磁杯・白磁椀・瓦質土器火鉢等が比較的量出土した。11世紀後半～12世紀の古相の遺物も若干含まれていたが、14世紀前半を主体とする時期の遺物からなる。

9落込(図95) 下段の平場で検出した東西方向の落込である。北肩は中心建物や建物9・10が占める空間の南端を限る位置にあり、4溝と7溝に直行することから、中心建物を中央に置く方形区画の南側を限るための整地作業の結果生じたものと位置付けたい。ただし視覚的・機能的な面からみて、溝や濠のように明確な区分を示すものではない。

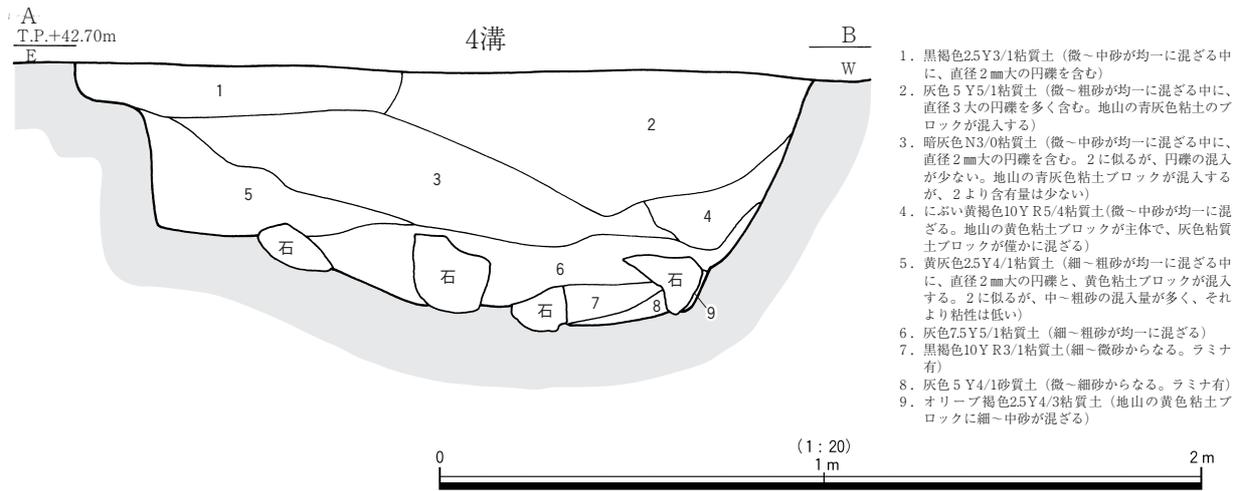
底面は平坦で、最も深いところで見えた断面形は浅い逆台形である。落込内では複数の土坑や、建物8の柱穴を含む多数のピットを検出している。267井戸も同様に、落込の形成後に開鑿されていることから、屋敷地の南側を区切る機能を有していたのは落込そのものではなく、その北側の肩の部分にあたる段差と考える。

底部の地盤高は4溝に向かって徐々に低くなっている。これは居住域内の排水を効率的に行おうとしたためと考えられ、その結果、浅い溝状の落ち込みが生じたのではないかと考える。

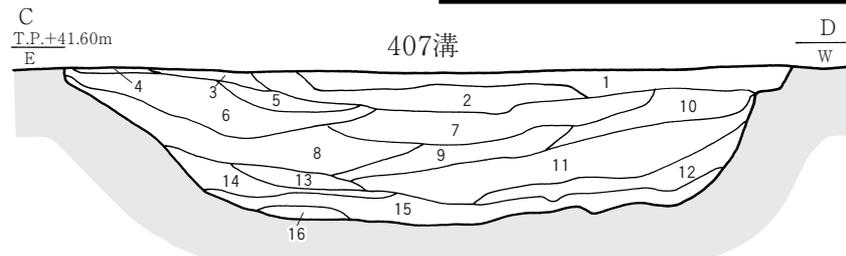
これらをまとめると、9落込の北肩は中心建物を中央に置く空間を区分する機能を有したものの、それを隔絶する機能は持たなかったと考える。換言すると9落込の北肩の段差は、4溝や8溝・407溝・7溝よりもゆるやかな区分を示していると言え、それを境にとりあっている空間、もしくは建物・井戸も何らかの関係を有していた可能性が強いと考える。

出土遺物に瓦器椀・瓦質羽釜・瓦質三足土器・須恵質土器・サヌカイト・緑釉陶器などがある。ただしいずれも細片で摩滅していること、全部で20点弱であるにもかかわらず、古代以前の遺物や中世末の遺物が含まれる割合が比較的高いことから、包含層と同様な遺物の混入状況を呈すると見られ、遺構の形成時期の手がかりとはなりにくいと考える。

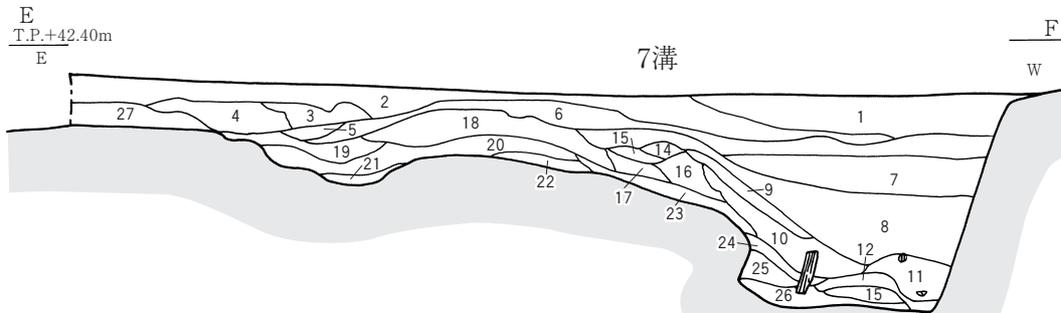
7溝(図94・95・96) 下段の平場で検出した南北方向の溝で、407溝とともに屋敷地の西端を限る溝である。全体の平面形を見ると、溝の北半部が南半部に比べて東側に寄る。また溝の西肩のラインは直線的で滑らかなのに対し、東方のラインはちょうど調査区中ほどで東側にやや張り出す。そしてそれより北側では溝の壁面が直線的に垂直に近い角度で立ち上がるのに対し、南側では立ち上がりの傾斜が緩やかになる。このように7溝の北半と南半とで、やや形状が異なることが指摘できる。このような違いがなぜ生じたかに関しては、第4節の中で私見をまとめているので併せて参照されたい。溝の幅は2～



1. 黒褐色2.5Y3/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫を含む)
2. 灰色5Y5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を多く含む。地山の青灰色粘土のブロックが混入する)
3. 暗灰色N3/0粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫を含む。2に似るが、円礫の混入が少ない。地山の青灰色粘土ブロックが混入するが、2より含有量は少ない)
4. にぶい黄褐色10YR5/4粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の黄色粘土ブロックが主体で、灰色粘質土ブロックが僅かに混ざる)
5. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫と、黄色粘土ブロックが混入する。2に似るが、中～粗砂の混入量が多く、それより粘性は低い)
6. 灰色7.5Y5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
7. 黒褐色10YR3/1粘質土 (細～微砂からなる。ラミナ有)
8. 灰色5Y4/1粘質土 (微～細砂からなる。ラミナ有)
9. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土 (地山の黄色粘土ブロックに細～中砂が混ざる)



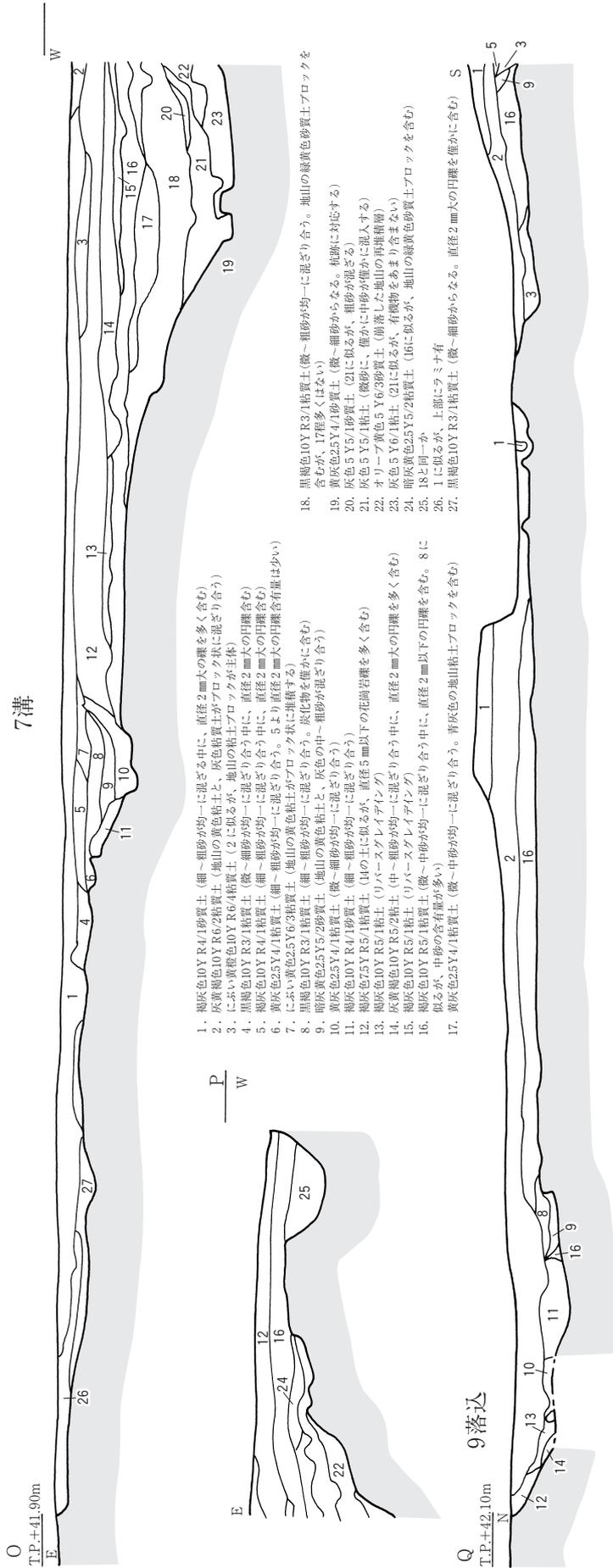
1. 灰黄褐色10YR4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の礫、地山の黄色粘質土ブロックが入る)
2. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の礫が入る。炭化物を僅かに含む)
3. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の礫が入る)
4. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の礫が入る。2に似るが、それより礫の含有量が多い)
5. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (微～細砂を主として、粗砂を含む。ラミナ有)
6. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る)
7. 灰色5Y4/1粘質土 (ラミナ程明瞭ではないが、微砂と細～粗砂との層理が認められる。炭化物が入る)
8. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る。地山の灰緑色粘質土ブロックが若干入る)
9. 灰色5Y4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る。地山の灰緑色粘質土ブロック、自然木の小片が入る)
10. 灰色7.5Y5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が入る。地山の灰緑色粘質土ブロック、自然木の小片が入る)
11. 灰色5Y5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が入る。地山の灰緑色粘質土ブロック、自然木の小片が入る。10に似るが、それより粘性が強い)
12. 緑灰色7.5Y6/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が入る。地山の灰緑色粘質土ブロック、自然木の小片が入る)
13. 黄灰色2.5Y6/1砂質土 (細～粗砂からなる。ラミナ顕著)
14. 灰色7.5Y6/1砂質土 (微～粗砂からなる。ラミナ顕著)
15. 褐色10YR4/1シルト (停水性堆積層)
16. 灰色10Y6/1粘質土 (地山の灰緑色粘質土層の細堆積層)



1. にぶい橙色5YR6/4砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の礫を含む。酸化鉄斑文顕著)
2. 褐色10YR4/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の礫を多く含む)
3. にぶい黄褐色10YR6/4砂質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の礫を多く含む。地山の黄色粘土ブロックが混ざる)
4. 褐色7.5YR4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の礫を多く含む)
5. 橙色7.5YR6/6粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘土ブロックを含む)
6. 灰黄褐色10YR5/2砂質土 (中～粗砂が混ざる。下部に中砂のラミナ層を含む)
7. 褐色7.5YR4/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざり合う中に、直径3cm大の花崗岩礫と、土師器片を含む)
8. 黒褐色10YR3/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざり合う中に、直径3mm大の花崗岩礫と、直径2mm以下の円礫を含む)
9. 褐色10YR6/1砂質土 (細～中砂からなるラミナ層)
10. 褐色10YR5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm以下礫を含む)
11. 灰褐色7.5YR5/2砂質土 (微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径5mm以下の花崗岩を含む)
12. にぶい褐色7.5YR5/4砂質土 (微～中砂が均一に混ざり合う)
13. 灰黄色2.5Y6/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う中に、緑黄色の地山粘土ブロックが混入する)
14. 褐色10YR4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う。8に似るが、粗砂の含有量が多い)
15. 褐色10YR5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う。15に似るが、地山の緑黄色粘土ブロックを含む)
16. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土 (中～粗砂が均一に混ざり合う中に、地山の黄褐色砂質土ブロックを含む)
17. 褐色10YR4/1砂質土 (2に似るが、中砂の含有量が多い)
18. 褐色7.5YR4/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う中に、直径3mm大の円礫を多く含む)
19. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う。18に似るが、粗砂の含有量が多い)
20. 灰褐色7.5YR4/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う中に、直径3mm大の円礫を多く含む)
21. 褐色7.5YR4/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざり合う。21に似るが、粗砂の含有量が多い)
22. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土 (地山の黄褐色砂質土ブロックと、灰色粘土ブロックが混ざり合う)
23. 灰黄褐色10YR5/2粘質土 (10の土と、地山の黄色粘土ブロックが混ざりあう)
24. にぶい褐色7.5YR5/4砂質土 (地山の黄褐色砂質土ブロックと、灰色中砂が混ざり合う)
25. 褐色10YR5/1粘質土 (細～中砂からなる。下部のラミナ有)
26. 灰黄褐色10YR5/2砂質土 (7.5YR4/1粘質土と、10YR5/2砂質土がブロック状に混ざり合う)

図94 有池遺跡03—1—1調査区 溝 断面図

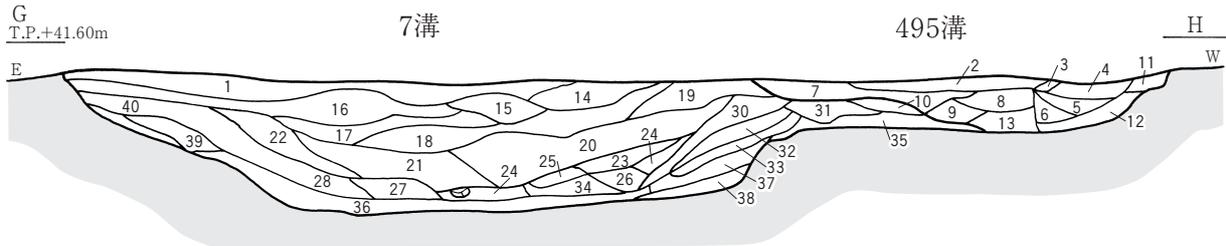
7溝



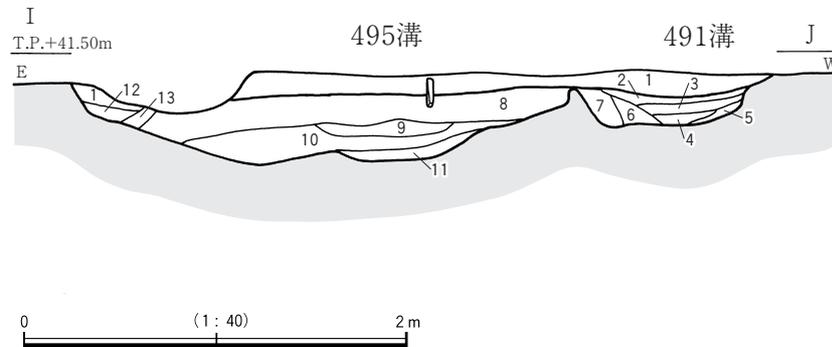
1. 褐灰色10Y R4/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の礫を多く含む)
2. 灰黄褐色10Y R6/2粘質土 (地山の黄色粘土と、灰色粘質土がブロック状に混ざり合う)
3. におい黄褐色10Y R6/4粘質土 (2に似るが、地山の粘土ブロックが主体)
4. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の円礫を含む)
5. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の円礫を含む)
6. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う。5より、直径2mm大の円礫含有量は少ない)
7. におい黄褐色2.5Y 6/3粘質土 (地山の黄色粘土がブロック状に堆積する)
8. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う。炭化物を僅かに含む)
9. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (地山の黄色粘土と、灰色の中～粗砂が混ざり合う)
10. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざり合う)
11. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う)
12. 褐灰色2.5Y R5/1粘質土 (リバーズグレイディンク)
13. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (リバーズグレイディンク)
14. 灰黄褐色10Y R5/2粘土 (中～粗砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の円礫を多く含む)
15. 褐灰色10Y R5/4粘土 (リバーズグレイディンク)
16. 褐灰色10Y R5/4粘質土 (微～中砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm以下の円礫を含む。8に似るが、中砂の含有量が多い)
17. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざり合う。黄灰色の地山粘土ブロックを含む)
18. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざり合う。地山の緑黄色砂質土ブロックを含むが、17程多くはない)
19. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (微～細砂からなる。相映に対応する)
20. 灰色3 Y 5/1粘質土 (微砂に、僅かに中砂が僅かに混入する)
21. オリーブ黄色5 Y 6/3砂質土 (明瞭した地山の再堆積層)
22. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (16に似るが、有機物をあまり含まない)
23. 灰色3 Y 6/1粘土 (21に似るが、有機物をあまり含まない)
24. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (16に似るが、地山の緑黄色砂質土ブロックを含む)
25. 18と同一か
26. 1に似るが、上部にラミナ有
27. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (微～細砂からなる。直径2mm大の円礫を僅かに含む)

1. 黄灰色2.5Y 5/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫を含む。下部に細～中砂のラミナ有)
2. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (微～細砂に、直径2mm大の円礫が混ざる)
3. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微～細に、直径2mm大の円礫が混ざる。2に似るが、それより粘性が強い)
4. 黄灰色2.5Y 5/1粘質土 (微～細砂に、直径2mm大の円礫が混ざる)
5. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (微～細砂に、直径2mm大の円礫が混ざる)
6. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (微～細砂に、直径2mm大の円礫が混ざる。5に似るが、円礫の含有量は僅か)
7. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の円礫を含む)
8. 中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の円礫を含む。7に似るが、それより粘性が強い)
9. 灰黄褐色10Y R4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の円礫を含む。酸化鉄斑文を含む)
10. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の円礫を含む。酸化鉄斑文を含む)
11. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の円礫を含む。酸化鉄斑文を含む)
12. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (細～中砂に直径2mm大の円礫が混ざる)
13. におい黄褐色2.5Y 5/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫を含む)
14. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (3の土と、地山の黄色粘土がブロック状に混ざり合う)
15. 灰黄色2.5Y 6/6粘質土 (微～礫が均一に混ざる。酸化鉄斑文を含む)
16. 明黄褐色10Y R6/6粘質土 (微～礫が均一に混ざる。酸化鉄斑文を含む)

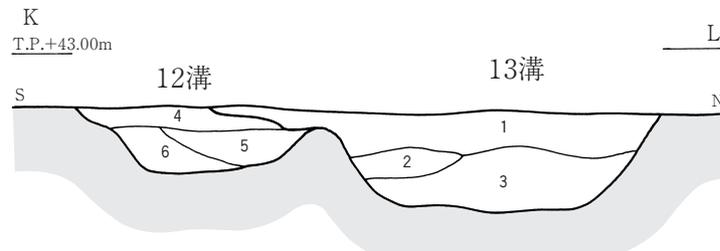
図95 有池遺跡03-1-1調査区 溝・落込 断面図



1. 黄灰色2.5 Y 4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる。焼土塊を僅かに含む)
2. 灰色5 Y 4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫を含む。地山の緑灰色粘質土ブロックが僅かに入る)
3. 灰色5 Y 4/1粘質土 (微～細砂からなる。ラミナ有)
4. 灰色7.5 Y 4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
5. 灰色7.5 Y 5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫と、地山の緑灰色粘質土ブロックが若干入る)
6. 灰色7.5 Y 4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
7. 灰色10 Y 5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫が若干入る)
8. 灰色5 Y 4/1粘質土 (微～粗砂からなる灰色粘質土と、中～粗砂からなる灰色砂質土がブロック状に混ざる。地山の緑灰色粘質土が若干入る)
9. 黄灰色2.5 Y 4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫と地山の緑灰色粘質土ブロックが若干入る)
10. 黄灰色2.5 Y 5/1シルト (炭化物を僅かに含む)
11. 暗灰色2.5 Y 4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)
12. 褐色10 Y R 4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる)
13. 褐色10 Y R 5/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
14. 灰オリブ色5 Y 5/2砂質土 (細～粗砂からなる地山の灰黄色粘質土の再堆積土。灰色粘質土ブロックが若干入る)
15. 灰色10 Y 4/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。1に似るが、それより粘性は弱い)
16. 灰オリブ色5 Y 4/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、灰色シルトブロックが入る)
17. 灰オリブ色5 Y 5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、灰色粘質土ブロック、炭化物が若干入る)
18. 黄灰色2.5 Y 5/1砂質土 (細～粗砂からなる砂質土と、シルトがブロック状に混ざり合う)
19. 黄灰色2.5 Y 4/1砂質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、地山の灰黄色粘質土ブロックが入る)
20. 褐色10 Y R 4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる褐色粘質土と、細～中砂からなる灰白色砂質土が層構造をなす)
21. 黄灰色2.5 Y 5/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる褐色粘質土と、細～中からなる黄灰色砂質土がブロック状に混ざりあう。自然木片含む)
22. 暗灰色2.5 Y 5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰色粘質土ブロックが若干入る)
23. 褐色10 Y R 4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、地山の緑灰色粘質土ブロック、自然木片が混じる)
24. 褐色10 Y R 5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、地山の緑灰色粘質土ブロック、自然木片が混じる)
25. 褐色10 Y R 4/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が混じる)
26. 褐色10 Y R 5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が混じる)
27. 褐色10 Y R 5/1砂質土 (細～粗砂からなる褐色砂質土と、地山の緑灰色粘質土がブロック状に混ざり合う)
28. 褐色10 Y R 4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
29. 灰色10 Y 4/1砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる)
30. 褐色10 Y R 4/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
31. 褐色10 Y R 5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。30に似るが、それより粗砂の含有量は多く、粘性が強い)
32. 褐色10 Y R 4/1粘質土 (微～粗砂からなる。ラミナ有)
33. 褐色10 Y R 6/1砂質土 (細～粗砂からなる。ラミナ有)
34. 褐色10 Y R 5/1砂質土 (微～細砂からなる。ラミナ有)
35. 黄灰色2.5 Y 4/1粘質土 (微～細砂と、粗砂が均一に混ざる)
36. 褐色10 Y R 4/1粘質土 (微～細砂と、直径3mm大の円礫が均一に混ざる)
37. 灰色5 Y 5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、地山の緑灰色粘質土ブロックが入る)
38. 灰黄褐色10 Y R 5/2砂質土 (細～粗砂が混ざり合う)
39. にぶい黄褐色10 Y R 6/3砂質土 (微～粗砂からなる。ラミナ有)
40. 灰黄褐色10 Y R 4/2砂質土 (細～粗砂が混ざり合う)



1. 黒褐色10 Y R 3/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
2. 灰色7.5 Y 4/1シルト
3. オリブ黒色7.5 Y 3/1砂質土 (直径3～4mmの砂粒を含む)
4. 黒色10 Y 2/1シルト
5. オリブ黒色5 Y 3/2砂質土
6. 黒色2.5 Y 2/1シルト (直径1～2mmの砂粒を含む)
7. 黒色10 Y R 2/1砂質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
8. 褐色10 Y R 4/1粘質土 (地山10 Y R 6/2シルトを斑状に含む)
9. 暗オリブ灰色2.5 G Y 4/1粘質土 (直径1～2mmの砂粒を含む)
10. オリブ黒色10 Y 3/1粘質土 (地山10 Y 6/2シルトを斑状に含む)
11. 灰色10 Y 4/1粗砂
12. オリブ黒色5 Y 3/1粘質土
13. オリブ灰色10 Y 6/2シルト (地山の二次堆積土)



1. 灰褐色7.5 Y R 4/2粘質土 (細～中砂が均一に混ざり合う中に、直径3mm大の白砂粒と、炭化物を僅かに含む)
2. 褐色10 Y R 4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざり合う。地山ブロックが僅かに入る。酸化鉄斑文を含む)
3. 灰黄褐色10 Y R 5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の白砂粒を含む。2に似るが、それより粘性が強い)
4. 褐色10 Y R 4/4砂質土 (微～中砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の白砂粒を含む)
5. 灰黄褐色10 Y R 4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざり合う。地山ブロックが僅かに入る)
6. 灰黄褐色10 Y R 5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざり合う。地山ブロックが混ざる。5に似るが、それよりも細砂の含有量が多い)

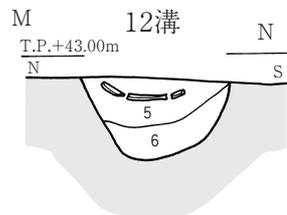


図96 有池遺跡03—1—1調査区 溝断面図

3 m、底部の最大幅は1.7～2.0mで深さは約70cmである。底部は平坦で、断面は407溝と同様に逆台形だが、壁面の立ち上がりの角度は407溝より小さい。

瓦器椀・土師器皿・青磁杯・青磁椀・瓦質土器火鉢・東播系須恵器・白磁椀・常滑焼甕・瓦質播鉢・陶磁器類などからなる遺物がまとまって出土した。13世紀後半～14世紀前半の遺物を主体として、15世紀初頭までの遺物を含む。

495溝（図96） 407溝より南の部分で、7溝から分岐する溝である。延長約13mにわたって7溝の西肩に接するが、それより北の部分で方向を西に転じ、その先でさらに分岐しながら先細る。96図上段の断面図で見ると、7溝と同時に開鑿されてから後は、必要に応じて掘りなおされていくうちにこのような形状になったのではないかと考える。

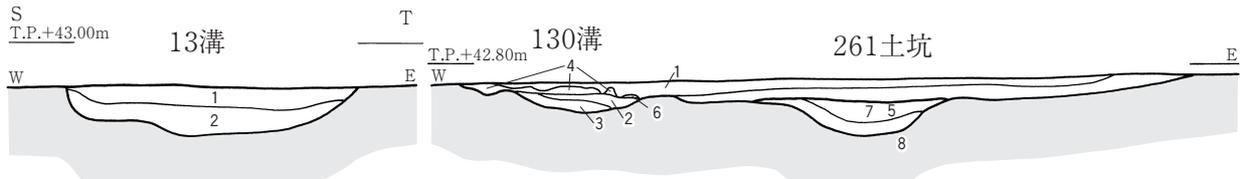
ちなみに7溝から分岐する407溝と比較すると、407溝は7溝と溝底の地盤高がほぼ一致するのに対して、495溝の深さは7溝の半分弱である。このことから両者が同じ機能を有していたとは考えられず、495溝は7溝の余水を西側の耕作地に落とすための導水部と考える。

瓦器椀・瓦質羽釜・東播系の須恵器鉢・土師器皿・瓦質土器火鉢・陶器の破片が出土した。いずれも細片で、復元口径が正確に割り出せるものもなかったため、図化はしなかった。瓦器椀の破片9点は、いずれも同じ形態のものと考えられる。口縁端部は先細り気味に丸くおさめられ、口縁部内外面に指の腹の幅で施された強い横ナデにより、外反ぎみである。器壁の厚さは3mm前後と薄く、体部外面にユビオサエの痕跡が顕著に見られる。内面のミガキは幅0.5mm程度で、2～3本/1cmの密度で施される。土師器皿は器壁の厚さが2～3mmと薄く、口縁部の立ち上がりは外面の強い横ナデにより、底部との境が明瞭に屈曲し、外反する。出土遺物の時期はおおむね14世紀前半にままと考える。

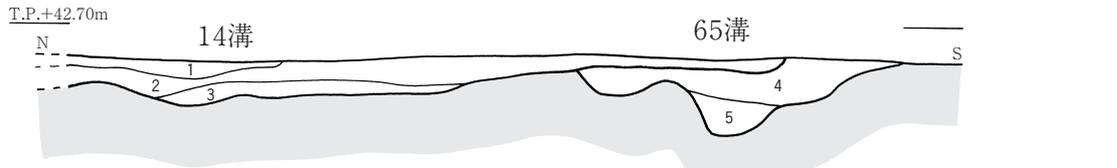
100溝・384溝（図97） 下段の平場で、中心建物の北側と東側を限るように位置する矩形の溝である（20G-10d・10e, 1G-1d）。両者はほぼ同じ位置にあり、土層断面の観察により、100溝がほぼ埋まった段階で384溝が掘り直されたと判断した。溝の幅は100溝が40cm前後、384溝が約70cmで、深さはどちらも40cm前後である。溝と中心建物の方向軸の類似性やコーナー位置の相関性から見て、両者は何らかの関係を有していたとみることができる。仮にこれらの溝が中心建物の雨落ち溝だったとすると、建物の北辺から溝まで2m程も離れてしまい、雨落ち溝としての機能を果たせなくなってしまう。したがってこれらの溝に対応する時期の中心建物には、北側に一間分ほどの庇がはりだしていたと想定することもできる。ちなみに384溝沿いで5個のピットを検出したが、柱の通りや柱間が一定しないことから、それらが庇を支えた支柱の痕跡だと断定できなかった。

いずれにせよ384溝に溜まった水は東から西に向けて落としたとみられる。溝の東端は中心建物の西辺の延長線あたりで、かつ7溝に向けて地盤の傾斜が強まるあたりで途切れている。またその位置は、120落込の項でふれた、225溝の東端の位置とほぼ一致することから、両者の配置には同一の規格または規制がはたらいていた可能性が高いと考える。

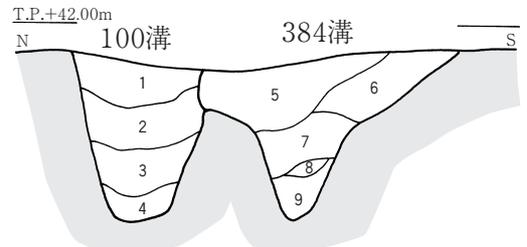
遺構埋土から瓦器椀・土師器皿・瓦質羽釜・瓦質三足釜・東播系須恵器鉢などが比較的まとまった量出土した。そのうち土師器皿・瓦質三足釜・東播系須恵器鉢・瓦器椀を計8点図化した。図化した遺物はいずれも13世紀代のものと考えられる。図化しなかった遺物についても、瓦器椀では13世紀前半代の遺物と13世紀後半代の遺物がほぼ同量含まれているという印象を受けた。瓦質羽釜の鏝で断面形をみると、壁面との接合部分から中ほどにかけての部分が最も厚く、端部にむけて先細り気味に丸く収められたものがあつたが、これ以外には14世紀まで時期が降る可能性があるものは認めなかった。



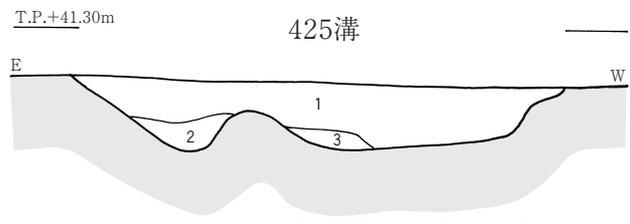
- 1. 灰褐色7.5Y R4/2粘質土(細～中砂が均一に混ざり合う中に、直径3mm大の白砂粒と、炭化物を僅かに含む)
- 2. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の白砂粒を含む。2に似るが、それより粘性が強い)
- 3. 灰褐色7.5Y R4/2粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う中に、2mm大の円礫を含む)
- 4. 褐灰色10Y R4/1砂質土(中～粗砂を主体として、細砂が僅かに混入する。)
- 5. 黒褐色2.5Y 3/1粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の礫を含む)
- 6. 灰褐色7.5Y R4/2粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径3mm大の円礫を多く含む。酸化鉄斑文あり)
- 7. 黄褐色10Y R5/6粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の円礫を僅かに含む。酸化鉄斑文顕著)
- 8. 灰褐色10Y R4/1粘質土(微砂に細砂と直径2mm大の礫が混入するが、その含有量は6より多い)
- 8. 褐灰色10Y R5/1粘質土(微砂に細砂と直径2mm大の礫が混入する)



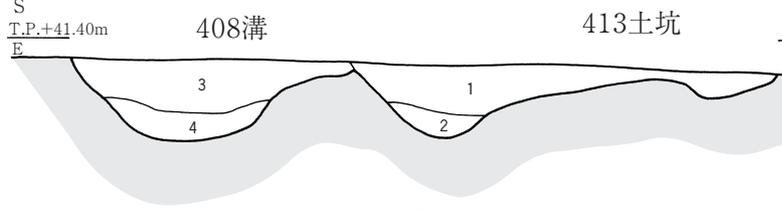
- 1. 灰褐色7.5Y R4/2粘質土(細～中砂が均一に混ざり合う中に、直径3mm大の白砂粒と、炭化物を僅かに含む)
- 2. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の白砂粒を含む。)
- 3. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の白砂粒を含む。2に似るが、それより粘性が強い)
- 4. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土(微～細砂が均一に混ざった中に地山のふい褐色砂質土のブロックを含む)
- 5. 黒褐色7.5Y R3/1砂質土(細～粗砂が混じる。黄褐色砂質土がブロックが入る)



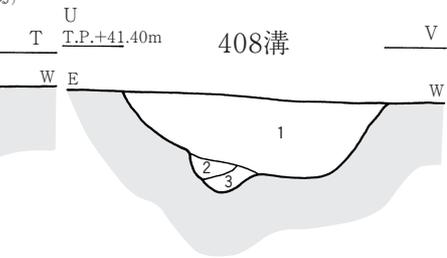
- 1. 褐灰色10Y R5/1粘質土(細～中砂が均一に混ざり合う中に粗砂が入る。酸化鉄斑文が入る。)
- 2. 褐灰色10Y R4/1粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う中に、直径2mm大の円礫が入る。)
- 3. 灰色5Y 5/1粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う中に粗砂が入る。地山の緑灰色ブロックが入る。)
- 4. 褐灰色10Y R4/1粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う。地山のふい褐色砂質土ブロックが入る)
- 5. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土(微～細粗砂が均一に混ざり合う。酸化鉄斑文が僅かに入る)
- 6. 暗黄褐色2.5Y 5/2砂質土(細～中砂が均一に混ざり合う中に粗砂が混入する)
- 7. 灰色N5/0粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う)
- 8. 灰色5Y 5/1粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う。地山の黄色粘質土ブロックが入る)
- 9. 浅黄褐色2.5Y 7/4粘質土(微～細砂が均一に混ざり合う。地山の黄色粘質土ブロックを主体に、黄灰色の粘質土ブロックが僅かに入る)



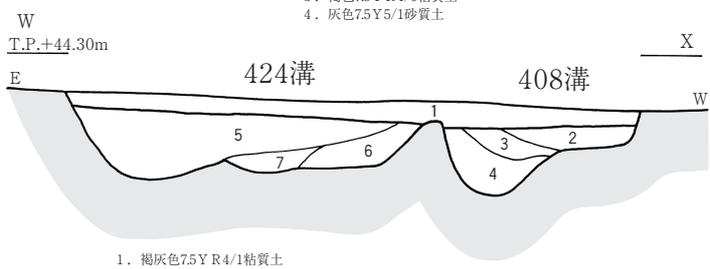
- 1. におい黄褐色10Y R5/3砂質土(炭化物を含む)
- 2. におい黄褐色10Y R4/3砂質土(地山2.5Y 6/8シルトを含む)
- 3. 暗褐色10Y R3/4砂質土



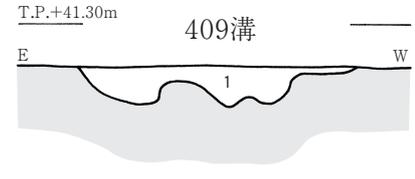
- 1. 褐色10Y R4/6粘質土
- 2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土
- 3. 褐色7.5Y R4/6粘質土
- 4. 灰色7.5Y 5/1砂質土



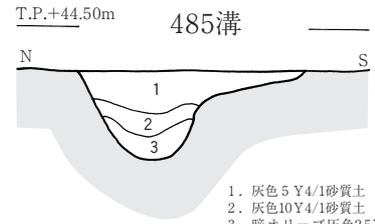
- 1. におい黄褐色10Y R5/3粘質土
- 2. オリーブ褐色2.5Y 4/4砂質土
- 3. 褐灰色10Y R5/3粘質土



- 1. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土
- 2. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土
- 3. 褐色10Y R4/4砂質土(地山2.5Y 6/8シルトを含む)
- 4. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土
- 5. におい黄褐色10Y R4/3砂質土
- 6. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土
- 7. 黄灰色2.5Y 5/1砂質土



- 1. におい黄褐色10Y R5/3粘質土



- 1. 灰色5Y 4/1砂質土
- 2. 灰色10Y 4/1砂質土
- 3. 暗オリーブ灰色2.5Y G 4/1粘質土(直径2～3mmの砂粒を含む)

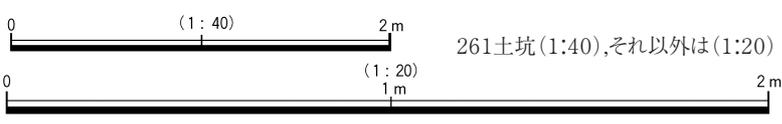


図97 有池遺跡03-1-1調査区 溝・土坑 断面図

中心建物の項でも述べているように、中心建物③・④の時期は13世紀後半以降と考えられるので、これらの溝は中心建物が存在した全時期を通じて並存した可能性がある。

147溝 下段の平場で、中心建物に沿うように位置する。9落ち込みの北肩と一連のものにとらえると、その交点は建物9・10の南西隅に近接する位置である。地盤高が7溝に向けて徐々に低くなる緩傾斜部分で、傾斜に平行していることから、雨水などによる不要な土砂の流出を防ぐためにも必要なものだったと考えられる。

土師器小壺・土師器皿・東播系須恵器鉢・瓦質三足釜・土師質鍋等が出土した。瓦質羽釜の破片で、14世紀まで時期が降る可能性のあるものが2点出土したが、それ以外の遺物に関しては13世紀までの時期に収まると考えられる。出土遺物の組成や時期は、100溝・134溝と共通する部分が多い印象を受ける。それらの溝と147溝が並存していた可能性が高いことから、これらの溝がセットになって屋敷地の中心部分を囲っていたと考えることができる。

113溝 下段の平場における屋敷地の中心部分（1G-1d・1e・2e）で検出した384溝の東西方向部分と斜めに交差する。中心建物を含む空間の対角線をなぞるように位置する。中心建物の項で述べているように、中心建物③・④を構成するいくつかの柱穴はこの溝を切っている。また中心建物①を構成する柱穴を、113溝が切っている状況がみられた。したがって中心建物①を取り壊してから、建物③を建てるまでのある時期に、屋敷地の排水等を意図して、設置されたものとみることができる。溝の幅は約50cm前後、深さは約10～20cmで断面形はU字形である。

遺構埋土から土師器皿が4点出土し、うち1点を図化した。図化しなかった土師器皿のうち、全体の形状が比較的わかるものが1点ある。これは平坦な底部から口縁部が内湾気味に短く立ち上がるもので、13世紀代のものとみることができる。出土遺物が土師器皿に限られるので、断定はできないが出土遺物の時期は13世紀代に収まると考えられる。

113溝における遺物の出土状況と、113溝を切っている中心建物③の遺物の出土状況とを照らしてみると、この溝は比較的短時間で機能を失ったと考えることができる。

432溝 下段の平場で、7溝の西側に位置する（1G-3f）南北方向の溝である。前述した495溝から派生する溝で、明確な連続性はつかめなかったが、溝の方向や位置、埋土の堆積状況から見て、491溝と一連の溝である可能性がある。溝の幅はおおよそ70cm、深さは20cmで、前述した409溝と全体的な形状が似ることから、幅10～20cmの鋤溝が重複した状態のものを一括して掘削したものである可能性がある。

遺構埋土から瓦器・土師器・青磁碗の破片が出土した。青磁碗は13世紀前半のものにとらえられるが、それ以外の遺物はいずれも細片で時期を判断することはできなかった。

491溝（図96） 7溝の西側に位置する南北方向の溝である（1G-3g～3i）。平均すると幅50～80cm、深さ10cm前後の浅い溝で平坦な底部を持ち、断面形は逆台形である。432溝の項で述べているように、495溝から分岐するものの可能性が高い。

瓦器・土師器が数点出土したが、いずれも細片で時期を判断することはできなかった。

425溝（図97） 下段の平場で、407溝よりも西側に位置する（1G-4e）。溝の幅や方向は一定しないが、おおむね南北方向を指向すると考えられる。溝の底部も一定しないことから、明確な切り合い関係は認められなかったが、もとは近接してあった複数の溝と一緒に検出した可能性がある。

埋土からコンテナ1箱程度のまとまった量の遺物が出土した。瓦器碗・瓦質羽釜・土師質羽釜・土師器皿が出土したが、全体の半分強を羽釜が占めている。遺物は細片が多く、その中から土師器皿・瓦器

椀・土師質羽釜・白磁椀を図化した。図化した遺物はおおむね12世紀中葉に属する時期と考えるが、図化しなかった瓦器椀の中に12世紀末～13世紀初頭に属すると見られるものも含まれる。

407溝より西側で検出した遺構の中で遺物の出土量が際立っているうえ、羽釜類が多量に出土している点は屋敷地を囲う溝における遺物の含有状況と一致する。425溝の遺物の時期が、中心建物を囲う濠の遺物の時期よりも先行することを勘案すること、この溝に近接する409溝（後述）の埋土からも比較的まとまった量の遺物が出土していることからみて、12世紀末～13世紀初頭の時期には、居住域がこのあたりまで広がっていた可能性を指摘できる。

408溝（図97） 下段の平場で、407溝よりも西側に位置する（1G-3c～f）、幅約70cm、深さ約25cmの南北方向の溝で、407溝や7溝とほぼ平行する。部分的に溝の西側の肩を413土坑が切っている。埋土中より瓦器椀・土師器皿などが出土した。遺物の点数は全部で20点弱と少量であるうえ、細片で摩滅していた。そのうち図化した土師器皿は12世紀に属するものとみられる。これよりもやや器壁が薄く、口縁がゆるやかにかつ直線的に立ち上がる土師器皿が1点出土している。細片であるため断定はできないが、口径と器高は図化した遺物に近似するのではないかとみられる。瓦器椀では高台部分の破片が1点含まれる。摩滅が著しく調整痕は不明だが、高台の断面形はほぼ正三角形で、接合部分のナデも丁寧である。出土遺物の時期はおそらく12世紀後半に収まるのではないかと考える。

424土坑（図97） 下段の平場で407溝の西側で検出した（1G-4e・3e）。遺構の東端部が408溝に切られているため、全体の形状は正確に把握できないが、おおむね南北方向に長い不整な楕円形の土坑である。短軸は1m弱、深さは20cm強の浅い土坑である。

瓦器・土師器の細片が数点出土したが、時期を判断することはできなかった。

409溝（図97） 下段の平場で、7溝・407溝より西側（1G-4d・4e）に位置する、南北方向の溝である。溝の幅・深さは一定せず、最も広いところで70cm、深さは10cm前後である。幅10～20cmの細い溝が数条重なった状態のものを、一括して検出している可能性がある。

遺構埋土から瓦器椀・土師器皿・土師質羽釜が出土した。点数は70点前後で、瓦器椀が大半を占める。また出土遺物には形態的特徴が把握できるものが数個体分含まれており、耕作痕跡とは考えにくい。比較的遺物がまとまって出土した425溝と近接する位置にあることからみても、この部分まで居住域が広がっていた段階の、区画溝や雨落溝の類の可能性もある。

図化した土師器皿は遅くとも13世紀までの時期、瓦器椀は12世紀後半～13世紀初頭の時期に位置づけられる。図化しなかった遺物の中には12世紀前半までさかのぼる可能性のあるものが1点含まれていたが、瓦器椀・土師器皿とも図化した遺物と同タイプのものがほとんどだった。したがって出土遺物の時

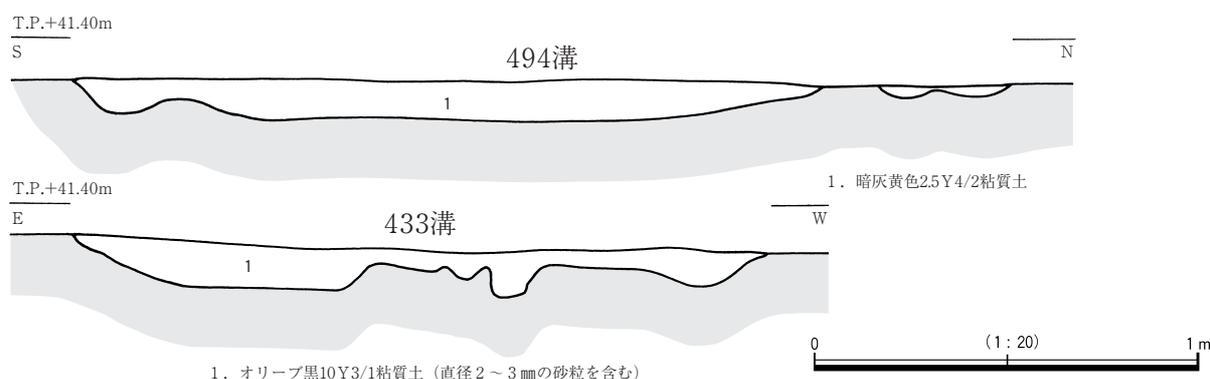


図98 有池遺跡03-1-1調査区 溝断面図

期は12世紀後半～13世紀初頭の中に収まると考える。

485溝 (図97) 下段の平場で、7溝より西側に位置する(1G-4i)東西方向の溝である。溝の幅は約60cmで深さは25cm、断面形はV字形である。遺物は出土しなかった。

494溝 (図98) 下段の平場で、7溝より西側で検出した(1G-4f)、東西方向の溝である。溝の幅は1.4～2.5m程度だが、溝の肩のラインが不整形な部分もあり、一定しない。98図の上段に掲載した土層断面図は溝の幅が広がっている部分で実測した。深さは10cm強と浅く、底部からの立ちあがり是非常にゆるやかである。遺物は出土しなかった。

433溝 (図98) 下段の平場で、7溝より西側で検出した(1G-4g～i・5g～i)、南北方向の溝である。前述した494溝と485溝との間に収まり、溝の東肩はおおむね整った形状をしているが、西肩は一定しない。ただ平均すると溝の幅は1.8m前後である。深さは10cm前後と極めて浅く、底部は若干凹凸があり一定しない。土師器・瓦器が出土したが、いずれも細片で時期を判断できなかった。

12溝 (図96) 上段の平場において、11井戸の南側に位置する東西方向の溝で、34溝にはほぼ平行し、13溝に切られている。幅は50cm前後、深さは20cm前後で断面形は隅丸逆台形である。埋土は2ないし3層に分層でき、常時水が流れていた痕跡は認めなかった。屋敷地を区画するとともに、雨水や生活排水を東から西へ落とす役割を負っていたと見られる。掘直しの痕跡は認められなかった。

遺構埋土より瓦器椀・瓦質三足釜・東播系須恵器鉢・土師質鍋・陶器鉢等が出土した。遺物の大半を占めるのは瓦器椀で、口縁端部を丸くおさめ、内面のミガキが3～4本/1cmの密度で施されるものと口縁端部が先細り気味に丸くおさめられるものの2者があった。量的には前者が後者をしのぐ。器壁の厚さは前者が3mm強、後者が2mm強で、いずれも口縁部外面に強い横ナデが施され、体部外面にユビオサエの痕跡が顕著に認められる。前者と後方で時期差が認められるが、いずれにせよ13世紀代に含まれると考える。出土遺物には12世紀末のものも含まれるが、13世紀代の土器が大半を占める。

13溝 (図96・97) 上段の平場に位置する、建物1～4の東側を限る南北方向の溝である。前述の12溝の手前で2箇所にわたって屈曲しながら12溝を切っている。調査区の北壁沿いで検出した、東西方向の14溝と一連の溝と見られる。

13溝は調査区の南東壁寄りのところで先細りして途切れてしまう。調査区の南東壁寄り、地山がより強く削平されているとみられることから、さらに南側にも溝が延びていた可能性がある。地形から見て13溝内に溜まった水は南から北へ向かって落ち、14溝へ入っていったものとみられる。溝の幅はおおむね90cm、深さは25cmで断面形は隅丸の逆台形である。

瓦器椀・土師器皿・瓦質三足釜・瓦・白磁椀が出土している。細片が多く、図化した土師器皿は14世紀前半に属するとみられる。図化しなかった遺物を通覧すると、13世紀後半の遺物と14世紀前半の遺物がほぼ同量含まれる。ただ13世紀後半の遺物を含む47ピットを13溝が切っていることから、遺構の時期は14世紀前半と考えられる。

14溝 (図97) 上段の平場で、調査区の北壁際に接するような形で検出した東西方向の溝で、前述の13溝と一連の溝とみられる。溝の北肩は調査区際に近接しているため、その全貌は必ずしも明瞭ではないが、溝の幅は最大で2m前後とやや幅広い。しかし深さは10cm強と浅く、底部からの壁面の立ち上がりはゆるやかである。遺構埋土はおおむね2ないし3層に分層できる。

東西方向の65溝が埋まった後、14溝がそのやや北側に新たに掘削されたとみられる。この溝は13溝との結節点から調査区の東端まで伸びるが、中ほどで2箇所にわたって区切れている。遺構埋土より土師

器・瓦器・陶器が出土したが、いずれも細片で時期を判断することはできなかった。

65溝 (図97) 上段の平場で、調査区の北壁際に接するような形で検出した東西方向の溝で、14溝に北肩を切られている。このことから、65溝が一旦、埋まった後に、14溝が掘り直されたものとみることができる。ただ14溝が部分的に途切れながらも調査区の東端まで伸びるのに対し、65溝の方は建物1の東辺の延長線上あたりで途切れてしまう。溝の西端に目を転ずると、上段平場の際まで溝が延びている。南北方向の溝と交差する部分があり、65溝より北の部分ではその東肩を明確には検出しなかったが、それぞれの溝に溜まった水は北および西側に落とすとみられる。

溝の幅は90cm弱、深さは20cm、断面は先端が丸みを帯びたV字状である。遺構埋土より瓦器の細片が4点出土したが、時期を判断することはできなかった。

130溝 (128溝) 上段の平場で検出した南北方向の溝で、4溝から西側に1m前後離れたところを、4溝に平行して位置する。幅約70cm、深さ20cm弱の断面形が皿形の浅い溝である。この溝に溜まった水は南から北へ落されていたとみられるが、土層断面図にも見られるように、129溝から130溝にかけての部分は全体的にやや低くなっていて、その部分に常時、水が滞水した状態だったと見られる。①層はその際に堆積した土層とみられ、南北に細長い帯状の分布を認めた。これを128溝として掘削した。

128溝からは遺物の項で述べているように、13世紀後葉までの時期の遺物が出土している。その下層である130溝からは瓦器碗の破片が2点出土した。いずれも口縁部片だが、1点は12世紀中葉、他の1点は14世紀前半のものともみられる。したがって128溝および130溝の埋土は13世紀後半～14世紀前半にかけて堆積したと考えられる。

261土坑 (図97) 上段の平場で、130溝の東側に位置する(20G-10e)。直径約80cm、深さ20cm弱の円形の土坑で、断面は隅丸の逆台形である。止水性堆積土によって、徐々に埋まったような状況である。遺物は出土しなかった。

16溝 上段の平場で、かつ1調査区の東端部で検出した(20G-6c)、南北方向の溝である。16溝を含む1調査区の東端部は、遺構の検出密度が低く、現況では建物1～4を含む上段平場における遺構密集部の東側を限る溝のように見える。しかしこの部分が強い掘削を受けているとみられること、上段平場の北を限る14溝が調査区の東端まで達していることから、16溝のさらに東側にも居住域が広がっていた可能性はある。溝の幅は60cm、深さは10cm弱である。またこの溝は位置関係から見て5調査区で検出した158溝と一連のものである可能性がある。

埋土より瓦器碗・瓦器皿・土師器皿が出土している。いずれも細片で出土点数は10点と少量である。それらの遺物の中で最も残存率が高い土師器皿の形態を見ると、平坦な底部から短く直線的に口縁部が立ち上がる。器壁の厚さが1～2mmときわめて薄い、外反傾向はまだ認められない。瓦器碗の口縁部片3点はいずれも端部を先細り気味に丸くおさめ、器壁の厚さは2～3mmである。13世紀後半を中心とする時期の遺物が含まれている印象を受けた。ただ前述した、5調査区158溝との関連で言えば、13世紀全般にわたる時期の遺物が含まれる可能性がある。

34溝 上段の平場に位置する(20G-7d・8d)、東西方向の溝である。建物3・4の南側に位置し、11井戸と同時期に並存していたと考える(11井戸の項を参照)。したがって機能面から見ると、居住域の区画と、井戸への導水、排水など多様な目的を負っていたとみることができる。溝の幅は60cm、深さは10cm前後である。瓦器碗・土師器皿・瓦質三足釜・瓦質鍋・東播系須恵器鉢が出土した。出土遺物の中で瓦器碗が大半を占める。瓦器碗の時期は13世紀後半の時期におさまると見られる。

2. 2 調査区 (図100～103)

1 調査区と市道を挟んで北側に隣接する台形の調査区である。水路を挟んで東側には5 調査区、北側には4 調査区と6 調査区が位置する。最終遺構面の形状は現況の地形と同じく、東から西にかけて徐々に地盤高が下がる。

2 調査区は、北辺とそれに隣あう東辺を二辺とする長方形の部分と、それより西側の三角形の部分とで遺構の検出状況が明瞭に異なる。したがってここでは便宜的に長方形部分（以下、東半部と記述）と三角形部分（以下、西半部と記述）とに小区分して記述を進める。

東半部ではバックホーで近・現代の耕作土を除去した段階で、おおむね最終遺構面を検出した。ここでは掘立柱建物や柵・井戸・土坑・柱穴・溝等の遺構を多数検出した。次に述べる西半部に比べて遺構密度は高い。西半部では主として溝や不整形な土坑を検出した。それらに混じって柱穴も散見され、1 調査区の7 溝・407溝より西側と似た状況が見られる。東半部の西寄りの部分は、遺構密度がまばらで、西半部へ向けて緩やかに傾斜する。落込みやピット・土坑を検出した（図99）。

東半部の遺構密集部で検出した掘立柱建物の中には、1 調査区で中心建物と称している掘立柱建物に匹敵する大きさのものが一棟含まれていた。両者はともに東西棟で、当調査区で検出した建物の東辺が、1 調査区で検出した中心建物の東辺の延長上に近いという位置関係である。この建物はすぐ西側にある、これとは直行する方向軸の建物とセット関係を成す。したがってこれらの建物群は、1 調査区で検出した屋敷地と対になる屋敷地だったと考えられる。屋敷地の周囲には1 調査区で検出したような、明瞭に周囲を囲む濠は伴わなかった。しかし西辺ないしは南辺を区画するとみられる溝や雨落溝、さらにその南側に配された水利施設や柵によって周囲と区画されていたとみられる。

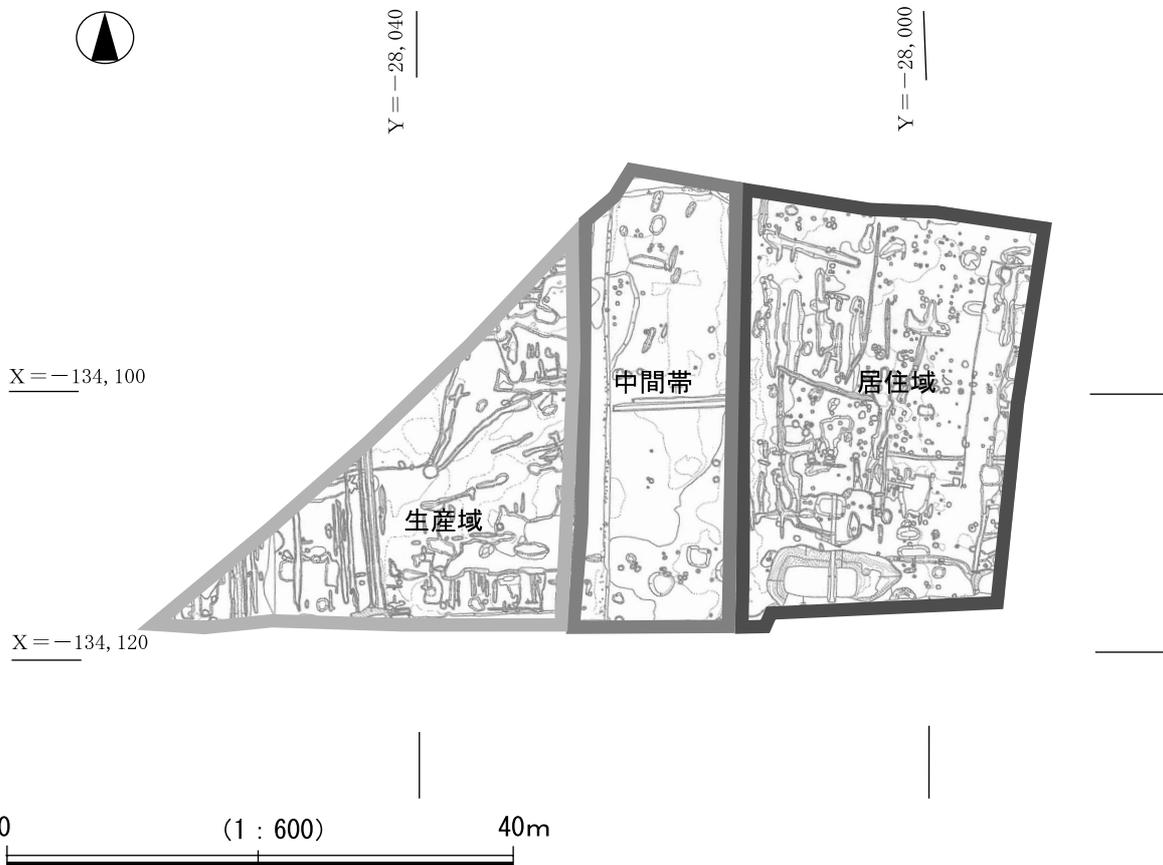


図99 有池遺跡03-1-2 調査区 景観概念図

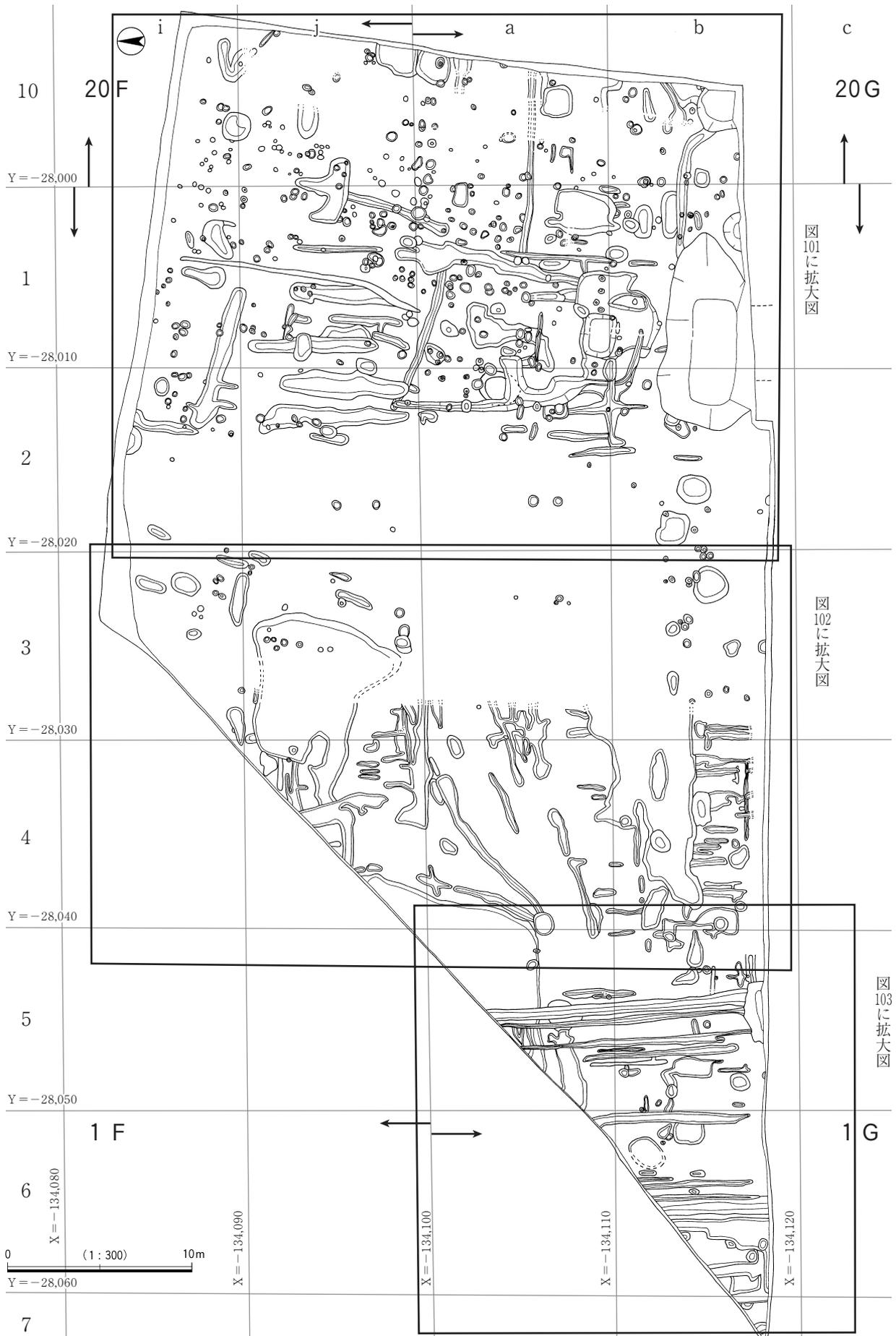


図100 有池遺跡03-1-2調査区 平面図(全体)

建物10 (図104) 東西3間 (7.5m) ×南北3間 (6.6m) で、東西方向にやや長く平面積は49.5㎡、建物の方向軸はW-21° - Nである。東西・南北方向の間数は同じだが、東西辺がやや長いことから東西棟と考える。124土坑・70土坑や126溝に切られているため、東西列の柱穴配置に不明な点が多いが、柱間は東西列が2m、南北列が2.2mとみられる。後述する建物9とほぼ同じ位置にあり、特に建物の西辺の位置はほとんど一致するが、こちらの方が東側にやや長い。

建物の南西隅と南東隅とで柱穴に切り合いが認められる。39ピットは1基のピットとして埋土を掘削したが、平面形態から見て、切り合う2つのピットからなっていた可能性があると考えた。さらに75

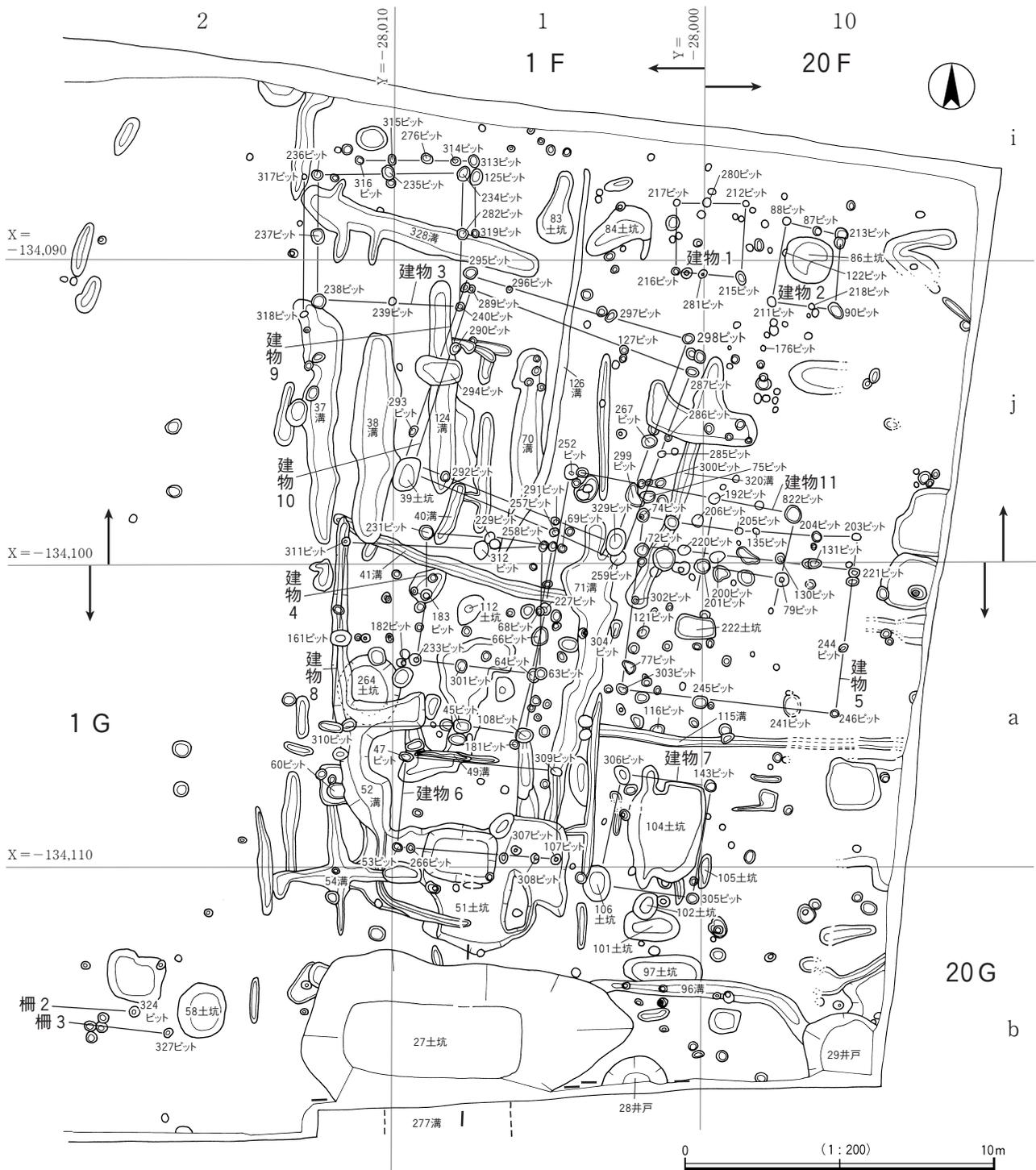


図101 有池遺跡03-1-2調査区 平面図 (部分拡大)

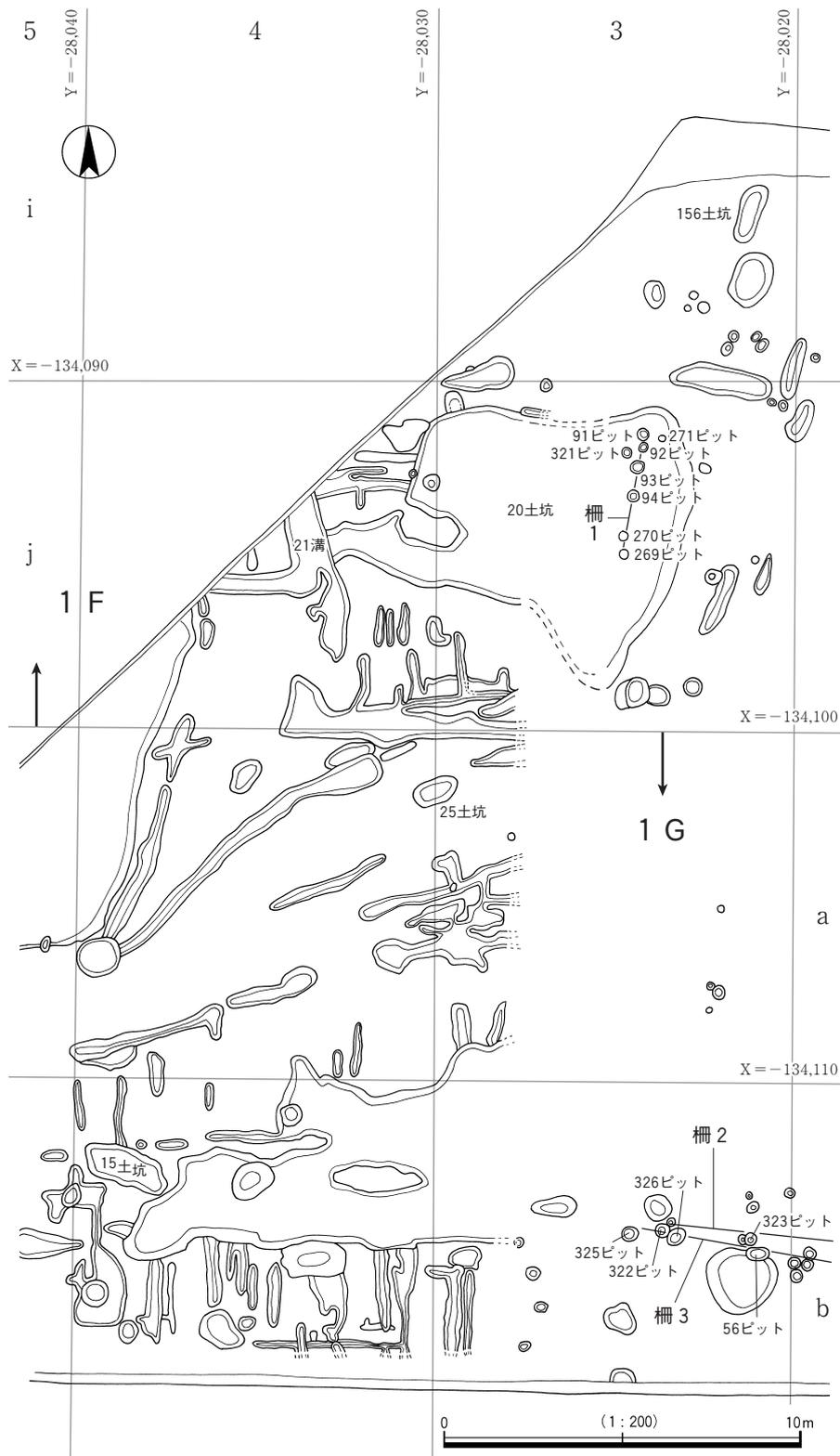


図102 有池遺跡03-1-2調査区 平面図（部分拡大）

ト出土の土師器皿は13世紀代の所産である。土器の形態をうかがえる遺物は土師器皿に限られており、遺物の帰属時期を断定することはできなかった。

41溝出土遺物に関してみると図化遺物は12世紀末葉～13世紀初頭で、それ以外の遺物には外面にミガキを施さない瓦器椀片が4点含まれる。うち3点は口縁部内端に沈線が施されていることから、13世紀前半代のものが含まれると判断した。

ピットや259ピットの切り合い関係からみて、建物10は建物9に先行すると考える。柱穴はおおむね径20～50cmの円形ないし楕円形で、深さ約20～30cmと浅く、断面形は隅丸長方形もしくは皿形である。

建物の南辺と東辺にはほぼ平行するように41溝と320溝がある。これらの溝は全長10mに満たない短いもので、周囲の溝と方向が異なるのに加え、41溝からは形状が把握できる瓦器椀・土師器皿・瓦質羽釜片が比較的まとめて出土した。これらのことから、両溝は耕作痕や水路とは考えにくく、建物に付随する雨落溝ないしは区画溝の可能性があると考えた。

次に出土遺物の時期からこれらの遺構の関係をとらえたい。259ピットから土師器皿1点、75ピットから瓦器片1点と土師器片2点、127ピットから珠洲焼甕片1点・土師器片20数点出土した。図化し得た259ピット

建物9 (図105) 東西3間 (7.3m) ×南北4間 (7.1m)、平面積は38.4㎡である。東西方向へわずかに長いことから見て、東西棟と考えられる。柱間は東西列が平均2.1m、南北列が平均1.5mで、建物北辺・南辺の長さは南北方向の柱列の4間分にはほぼ等しい。東西方向の柱穴配置は等間隔ではなく、中央の柱間が大きい。また建物西辺の長さが建物東辺よりやや短く、平面形態は台形ぎみ、主軸方向はW-18.5°-Nである。柱穴の平面形はおおむね直径20~50cmの円形ないし楕円形で、それより突出して大きい294ピットや39ピットは切り合う複数のピットを一つのピットとして掘削した可能性がある。深さは10~30cmとおおむね浅く、断面形は隅丸長方形・皿形からなる。

267ピットから羽釜片1点が出土したが、細片のため時期は特定できない。

建物11 (図106) 東西3間 (7.3m) ×南北4間 (9.1m) の南北棟で、主軸方向はN-10.5°-Eを指す。柱間は東西列が平均2.4m、南北列が平均2.3mで床面積は66.4㎡である。柱間は比較的揃っているが、南東隅寄りの柱穴を数カ所、検出できなかった。もとの地形が南東から北西にかけて傾斜していたと考えられることから、それらは後世の造成で削平されたことが考えられる。

建物西辺に位置する64ピットは後述する建物4に属する63ピットに切られている。このことから建物11が建物4に先行することが明らかである。ただ64ピットと63ピットの遺物は厳密に掘り分けることができなかった。柱穴の平面形態は円形もしくは楕円形で直径30~50cm、深さは20cm前後である。遺構が密集する東半部の中でも、特に柱穴が密集する部分にあっている。

建物11を構成する柱穴のうち、300ピット・252ピット以外で土器が出土した。遺物はほとんどが瓦器碗・土師器皿の細片で、時期判断の決め手に欠けるが、227ピット出土の土師器皿片は平坦な底部から

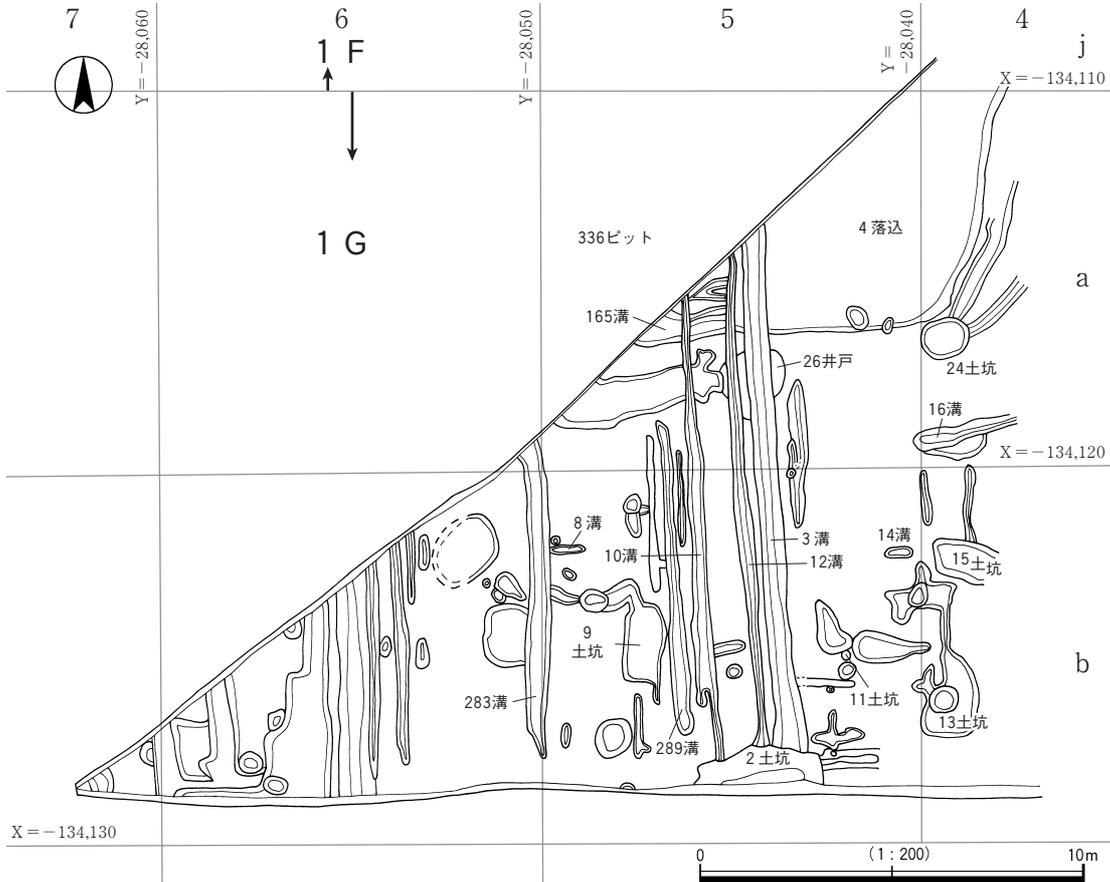


図103 有池遺跡03-1-2調査区 平面図 (部分拡大)

口縁部が直立気味に短く立ち上がり、直径は10cm以下とみられる。64・63ピットからは瓦器碗・土師器皿の破片が出土している。総数20点程で、土師器皿には器形の特徴がわかるものが無かった。瓦器碗の破片は厚さが2mm強～4mm、内面のミガキは幅0.5～1mm、高台の断面形は横幅が広い三角形で退化寸前のものである。出土遺物の時期は13世紀後半～14世紀前半の時期に含まれる可能性が高いと考える。

建物4 (図107) 東西2間(4m)×南北2間(4.2m)で、わずかに南北方向に長い。主軸方向はN-6°-Eを指す。柱間は東西列が平均2.0m、南北列が平均2.1mで床面積は約16.8㎡である。柱間は比

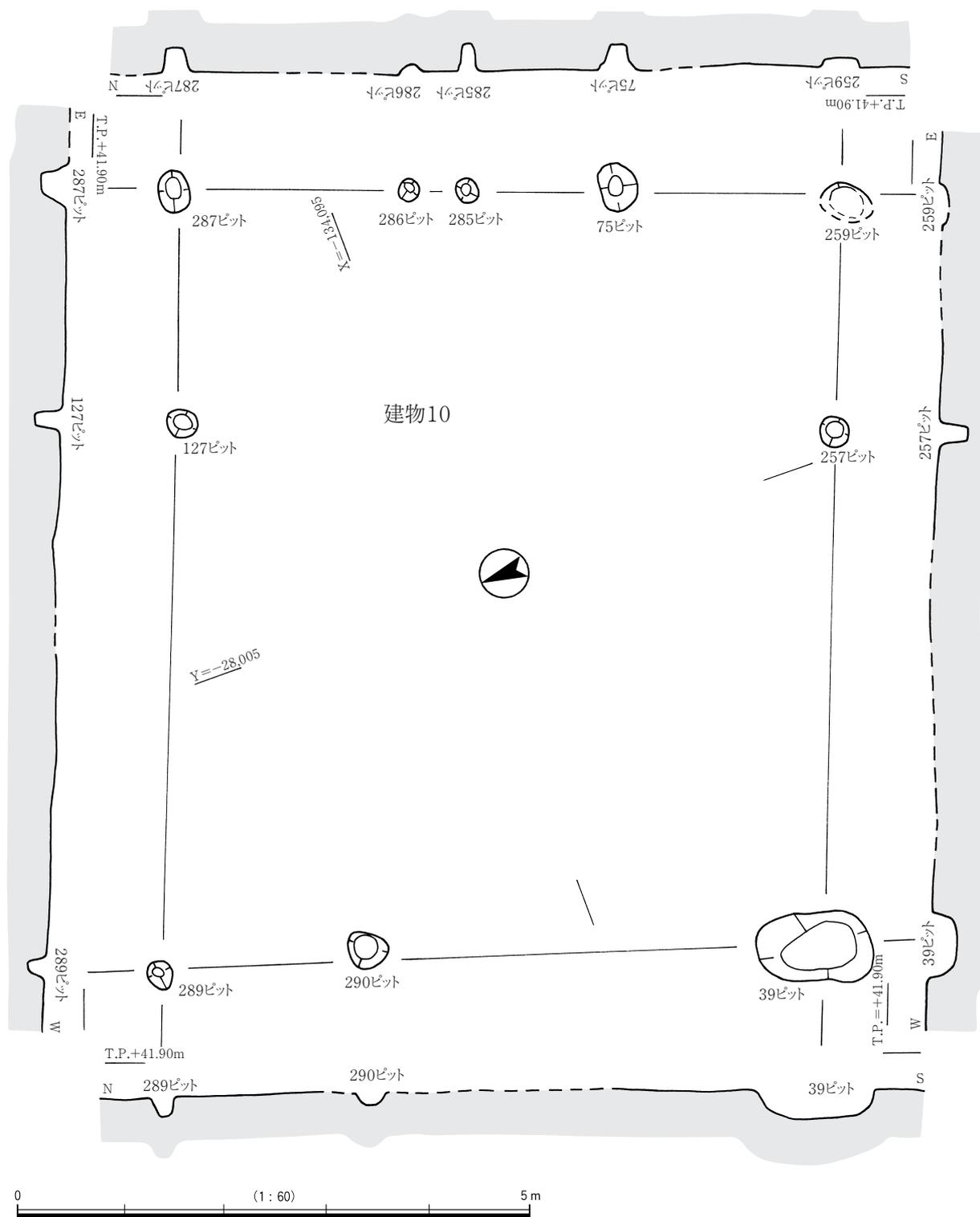


図104 有池遺跡03-1-2調査区 建物10 平・断面図

較的揃っているが、南北辺中央の柱穴がやや内側に寄る。柱穴掘方の平面形態は円形もしくは楕円形で径30~60cm、深さは10~50cmである。根石を伴うピットはなかった。建物11の項で述べたように建物4南東隅の63ピットが建物11の東辺に位置する64ピットを切っている。

また建物4の北辺は、建物5の72-221ピット間の柱列のほぼ延長線上に位置する。近接すること、方向軸がほぼ直行すること等から、両者はセット関係を成すと考えられる。さらに建物4の西側に位置す

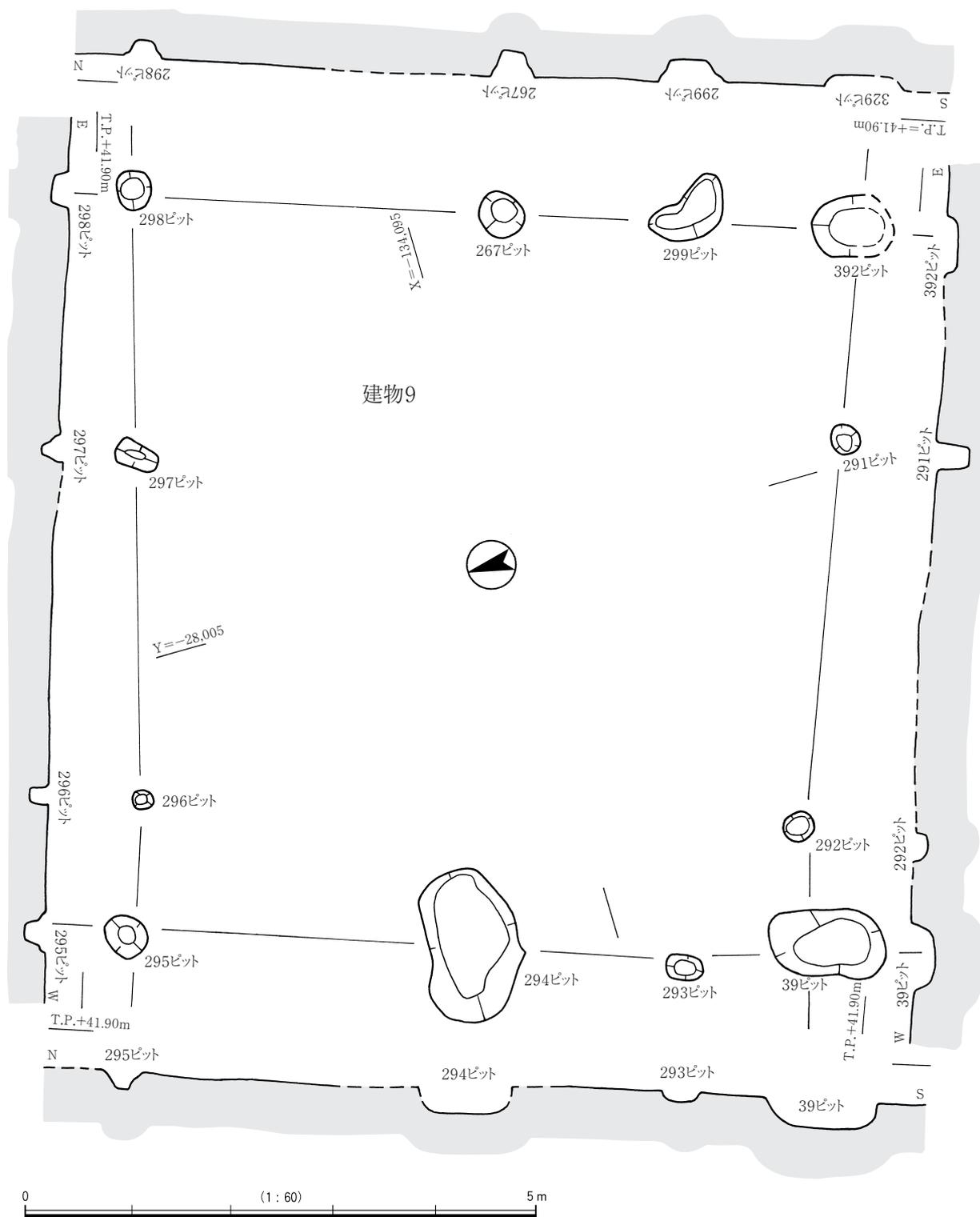


図105 有池遺跡03-1-2調査区 建物9 平・断面図

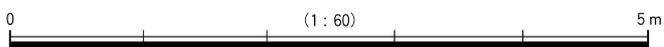
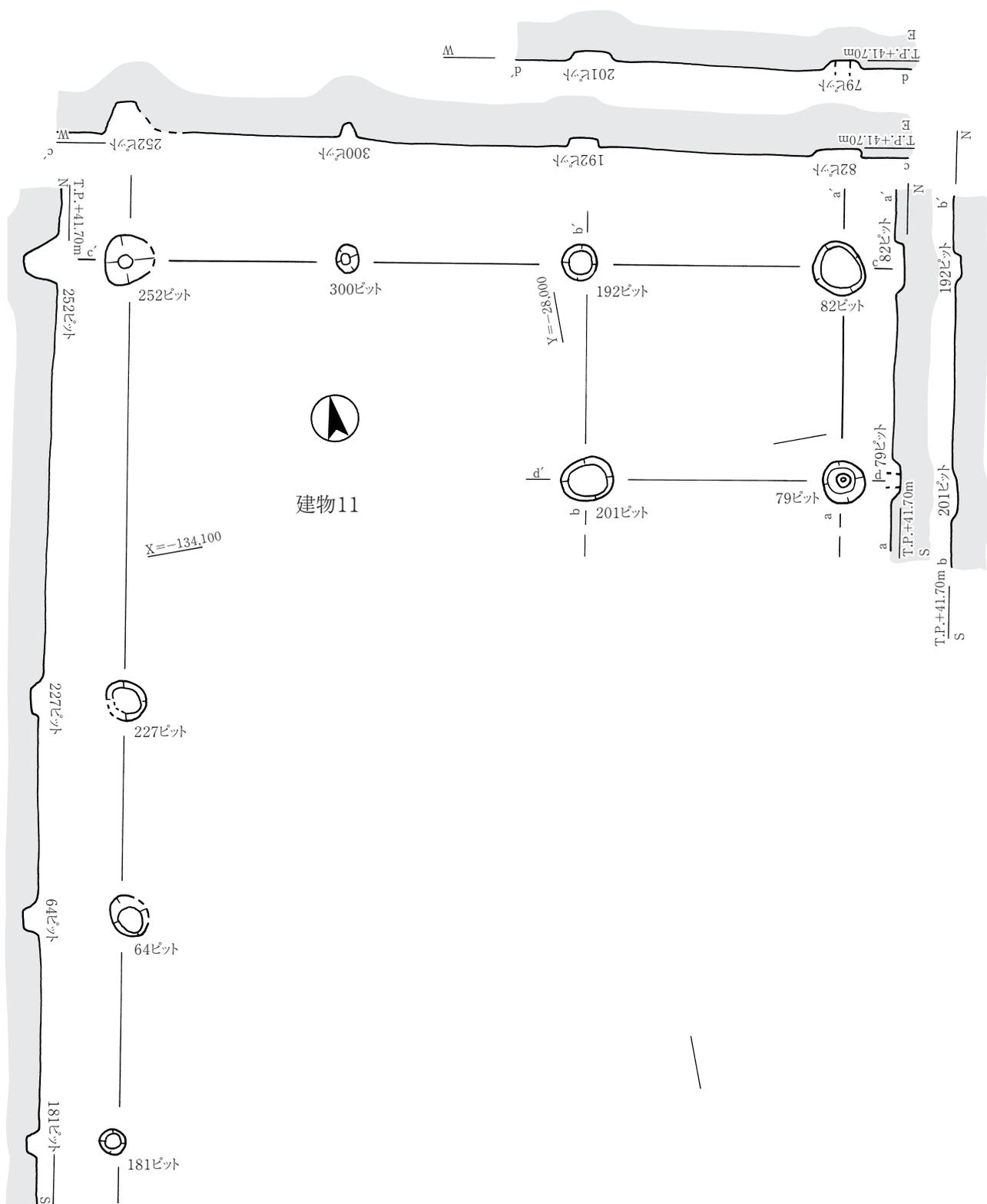


図106 有池遺跡03-1-2調査区 建物11 平・断面図

る52溝が東西方向に分岐する部分の北肩と71溝西肩の輪郭の変化点が、建物4の南西隅と南東隅の位置に対応する位置関係が認められる。

次に出土遺物の時期から、それらの時期的な関係を把握したい。建物4に属する柱穴では301ピットを除くすべてのピットから土器片が出土している。69ピットからは青磁器・瓦器椀・土師器皿・土師質土器・須恵質土器が出土したが、他の遺構からは瓦器と土師器皿が出土した。ほとんどが摩滅した細片で、時期決定は難しいが、63・64ピットと69ピットから出土した遺物を見ると、おおむね13世紀後半～14世紀前半に含まれるとみられる。なお位置的に見て、52溝は建物4と関連性が強いとみられるが、その出土遺物の時期に関しては52溝の項で述べているので参照されたい。

建物5 (図108) 東西6間(6.6m)×南北2間(4.8m)の東西棟で、主軸方向はW-5.5°-Nを指す。柱間は東西列が平均1.2m、南北列が平均2.2mで床面積は約28.4㎡である。東西列の柱間が南北列の柱間の約半分なので、前者の柱穴の中には東柱が含まれている可能性が高い。そうであれば東西列の柱間は3間で、柱間の平均値は2.4mとなる。南辺の長さが北辺よりもやや短く、北西隅が鋭角ぎみなため平面

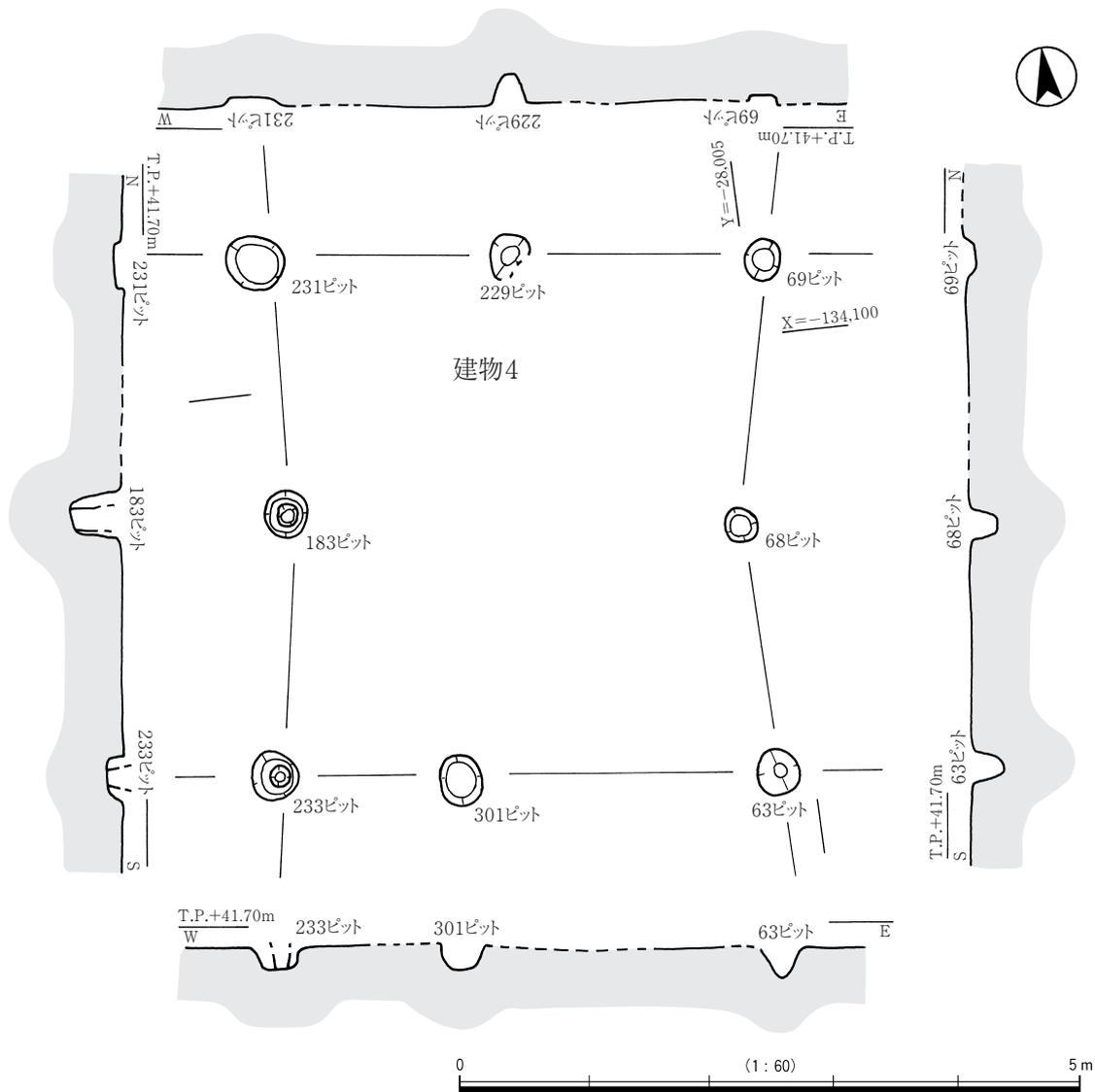
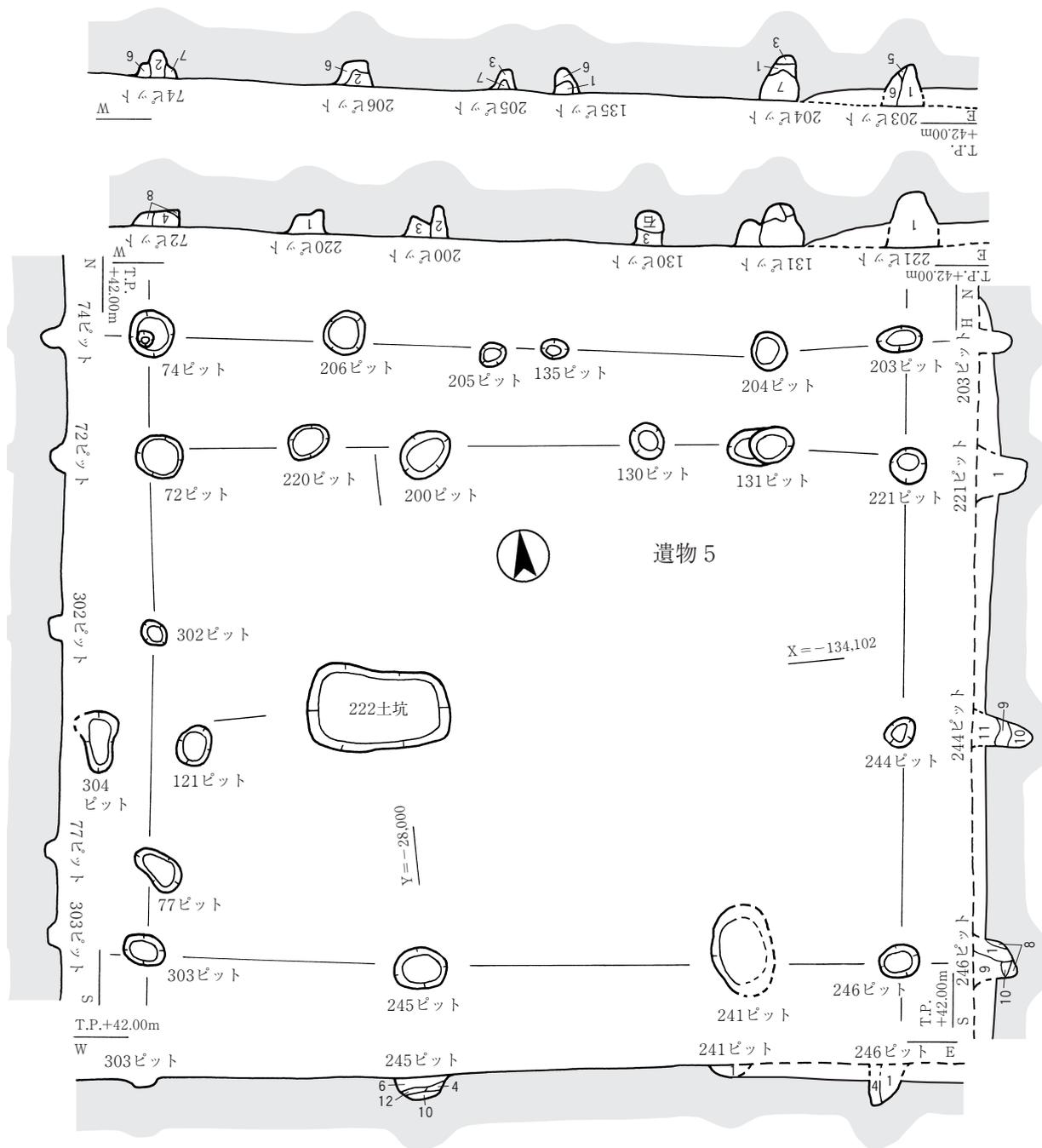


図107 有池遺跡03-1-2調査区 建物4 平・断面図



1. 灰色N4/0粘質土 (微砂と粗砂が均一に混ざる。)
2. 灰色N4/0粘質土 (微砂～中砂が均一に混ざる。1に似るが、それより粘性強い。)
3. 灰色10Y6/1粘質土 (微砂～細砂が均一に混ざる。)
4. 灰色10Y4/1粘質土 (細砂と中砂が均一に混ざる。直径2mm大の白砂粒含む。地山の灰緑色粘質土がブロック状に混入する。)
5. 灰オリーブ色7.5Y5/2粘質土 (微砂と粗砂が均一に混ざる。地山の緑黄色粘質土に似る。)
6. 灰色10Y5/1粘質土 (微砂～中砂が均一に混ざる。直径2mm大の白砂粒をわずかに含む。)
7. 灰色N4/0砂質土 (細砂と中砂が均一に混ざる。炭化物入る。)
8. にぶい黄色2.5Y6/3粘質土 (微砂～細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土がブロック状に入る。)
9. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微砂と中砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土と灰色粘質土のブロック土が混入する。)
10. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (微砂～細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土がブロック若干入る。)
11. 灰色N5/0粘質土 (細砂～中砂が均一に混ざる。直径3mm大の白砂粒、地山の緑灰色粘質土ブロック入る。)

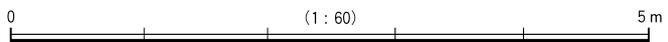


図108 有池遺跡03-1-2調査区 建物5 平・断面図

形はやや台形ぎみである。

柱穴掘方の平面形態は円形・不整円形・隅丸長方形・楕円形で直径30～75cm、断面形態はU字形・隅丸V字形・逆台形・皿型で、深さは10～50cmである。建物南西隅と北東隅のピット、建物北辺に平行する柱穴列のピットに根石が認められた。建物の隅柱にはより大きな重量が加わるため、それらの根石が置かれたと考えられるが、根石が検出されなかった他の隅柱穴に関しては、もともとなかったのか、柱を抜き取った際に根石も抜かれたかは判断できなかった。

建物北辺には、ほぼ平行して2条の柱穴列が近接して認められる。両者の柱穴位置には明確な対応関係は認められないが、74-72ピット間と203-221ピット間の距離は、南北列柱間の2分の1間分にあたる。したがって建物北辺の2条の柱穴列は同一の建物に含まれるもので、74-203ピット間の柱穴列は庇を支える柱だったのではないかと考える。

建物中央より西寄りの部分で、平面形が隅丸長方形の土坑（222土坑）を検出した。この遺構については後述するが、埋土に多くの炭化物が含まれていた。残存深度が極めて浅く、出土遺物もわずかだったことから断定はできないが、建物5と並存する炉だった可能性がある。もしそうであれば222土坑は炉と考えられ、その周辺に柱の痕跡を一切認めなかったこと、また建物北辺以外の柱穴列に束柱が一切含まれないことから、土間を生活面とする建物だったと考えられる。

203・205・206・200・246・303・304・302ピットを除く他のピットから遺物が出土した。瓦器碗・土師器皿の破片がほとんどで、珠洲焼甕の破片も一点含まれていた。大半が細片で、含まれている土器の量も少量だった。131ピットにのみ、比較的まとまった量の瓦器碗・土師器が含まれており、そのうち比較的残存状態の良好な土師器皿1点を図化した。瓦器碗は口縁端部を先細り気味に丸くおさめ、器壁の厚さは4mm程度で、内面の磨きは幅0.5～1mmで3～4本/1cmの粗い密度で施されている。高台は華奢で貼り付け方は雑である。土師器皿は底部から口縁部がなだらかに立ち上がり、その境に明瞭な屈曲はみられない。これらのことから出土遺物の時期はおおむね13世紀後半に含まれると考える。

建物7（図109） 東西1間（3.0m）×南北1間（3.8m）で、南北にやや長いことから南北棟と考える。建物の主軸方向はN-9.5°-Eで、床面積は11.4㎡である。柱穴掘方の平面形態は円形もしくは楕円形で、106ピットのみ長軸1m強と大きい。他は径が40～60cmである。深さは10～20cmと極めて浅い。

143・106ピットから瓦器碗・東播系の片口鉢の破片が出土したが、いずれも細片で時期は判断できなかった。したがって断定はできないが、建物7の内部に位置する104土坑の北辺と東辺が、建物7のそれとほぼ合致することから、両者は並存する可能性が高いと考えた。ちなみに104土坑の東辺の端部は、南北に張り出すような形状である。その北端から306ピットまでの距離は、東西方向の柱穴間のちょうど3分の1に、南端から106ピットまでの距離は2分の1にあたり、両者の位置関係には相互に関連しあう点が認められる。この土坑が建物7と並存したと考えると、この建物は覆い屋かもしくは半地下式の土間建ちの構造だったとみることができる。なお104土坑に関しては後の項で詳述する。

建物6（図109） 平面形は東西に長い長方形であることから、東西棟と考える。検出した柱穴は、南辺を除くと隅柱にあたるもののみだが、47-309ピットのラインにはほぼ合致する位置で49溝を検出した。また47-309ピットのラインは建物7の北辺の延長上に位置し、方向軸も一致する。これらのピットや溝の位置的な関連性から建物と判断したが、おそらくは簡素な覆い屋程度の構造物と考える。

東西5.1m、南北2.9m、床面積は14.8㎡で、方向軸はW-4.5°-Nである。柱穴掘方の平面形は円形もしくは楕円形で、直径は30～40cm、深さは10～40cm、断面形は皿形もしくはU字形である。47・53・

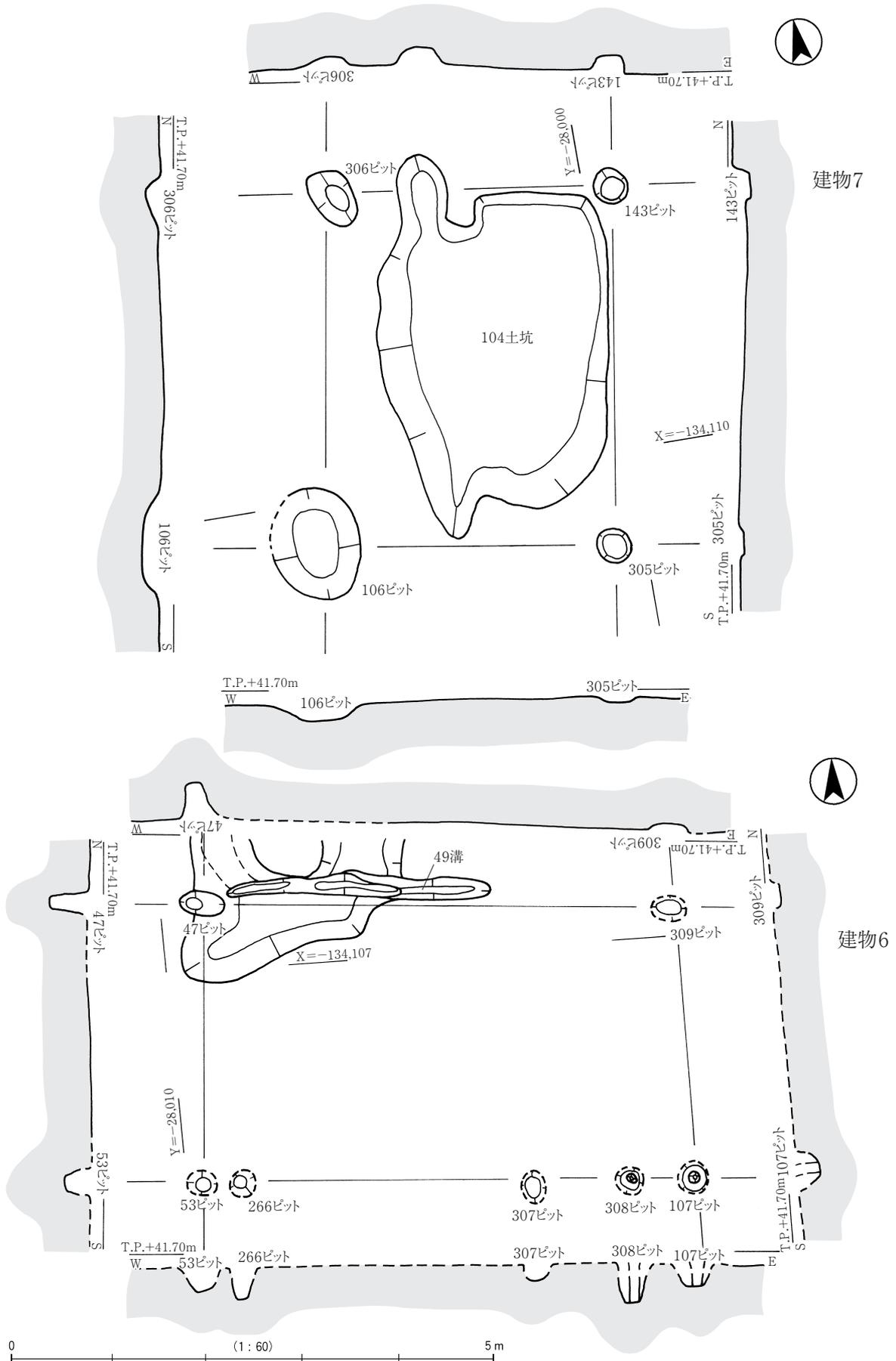


図109 有池遺跡03-1-2調査区 建物7・6 平・断面図

266・107ピットから遺物が出土した。瓦器碗・土師器皿に加えて角礫1点が出土したが、土器はいずれも細片で時期を判断することはできなかった。

建物8（図110） 東西3間（6.4m）×南北2間（6.2m）の東西棟と考えられる。建物の主軸方向は $W-4^{\circ}-N$ で、床面積は39.7㎡である。柱間は東西列で平均2m、南北列は平均3.15mである。柱穴掘方の平面形態は円形・楕円形・隅丸三角形で直径は40～70cm、深さは10～50cmとおおむね浅い。

建物4と建物8の北東隅の位置はほとんど同位置で、後者は前者の西および南側に1～1.5間分広げたような状況で位置する。位置、方向軸、柱穴配置からみると建物4と前後関係を有していたと考えられる。ただ建物8が東西にやや長いのに対して、建物4は南北にやや長いという相違点も認められる。また建物4が建物5とセット関係を有しているのに対し、建物8とセット関係を有する建物は検出できなかった。

312・311・310ピットを除くピットから土器が出土した。おおむね瓦器碗・土師器皿からなり、珠洲焼甕片が一点含まれている。いずれも細片で時期を判断することは難しい。建物西辺のピットが52溝を切っていることから、13世紀を上限とする時期であることは確かである。

建物1（図111） 東西2間（2.2m）×南北1間（2.3m）の南北棟で、建物の主軸方向は $N-1^{\circ}-E$ である。東西列の柱間は平均1.1mで南北列のほぼ2分の1間に相当する。床面積は約5.1㎡である。柱穴掘方の平面形態は円形・楕円形で直径約20～30cm、深さは約10～30cmである。

2調査区で検出した建物の中では、床面積・柱穴の直径ともに小規模である。平面形は正方形に近いが、建物の西辺が東辺よりもやや短いため、平面形は台形ぎみである。建物の東西列が2間なので、中央の柱が棟木を支える南北棟だったと考えられるが、その柱穴の残存深度は、他の柱穴に比べて浅い。これらの構造上の特徴は、建物2にも認められる。両者には何らかの関連性があったと推測されるが、それらの建物の方向軸には若干差異がみられ、建物の北辺の位置もわずかにずれる。

215ピットの埋土に焼土塊が含まれていた他に出土遺物はなく、時期は判断できない。

建物2（図111） 東西2間（2.0m）×南北1間（2.6m）の南北棟で、建物の主軸方向は $N-8^{\circ}-E$ である。東西列の柱間は平均1.0mで南北列1間の2分の1に満たない。柱穴の平面形態は円形・楕円形で直径約20～40cm、深さは約10～40cmである。北東隅の柱穴にのみ根石が認められた。

2調査区で検出した建物の中では、床面積・柱穴の直径ともに小規模である。平面形が南北方向に長い長方形であること、東西列の中央に棟木を支えた柱があったと見られる点から、東西棟だったと考えられる。建物1と同様、この建物でも棟木を支えた柱穴の残存深度は、他に比べて浅い傾向がある。建物1との類似性が多く認められるが、相違点も認められることは建物1の項で述べた通りである。

213・88・90ピットから瓦器碗や土師器皿が出土した。出土土器はほとんどが細片で、図化した土師器皿は13世紀代のものと考えられる。図化しなかった遺物のうち、瓦器碗片は器壁の厚さが3mm強と薄い。土師器皿には口縁部外面に強いヨコナデを施して、外反させるものがある。これらのことから出土遺物の時期は13世紀後半～14世紀前半に含まれる可能性が高いと考えるが、断定はできない。

なお建物2の内部には86土坑が位置する。これは直径1.6mの円形の素掘り土坑で、深さは1m強である。土坑の底部が湧水層を掘り抜いていることから、井戸と考えられる。出土遺物より13世紀後半を下限とする時期に位置付けられる。両者が併存していたと考えると、建物2は86土坑の覆い屋とみることができる。

建物3（図112） 東西2間（4.7m）×南北2間（4.25m）の南北棟で、建物の主軸方向は $W-0.5^{\circ}-$

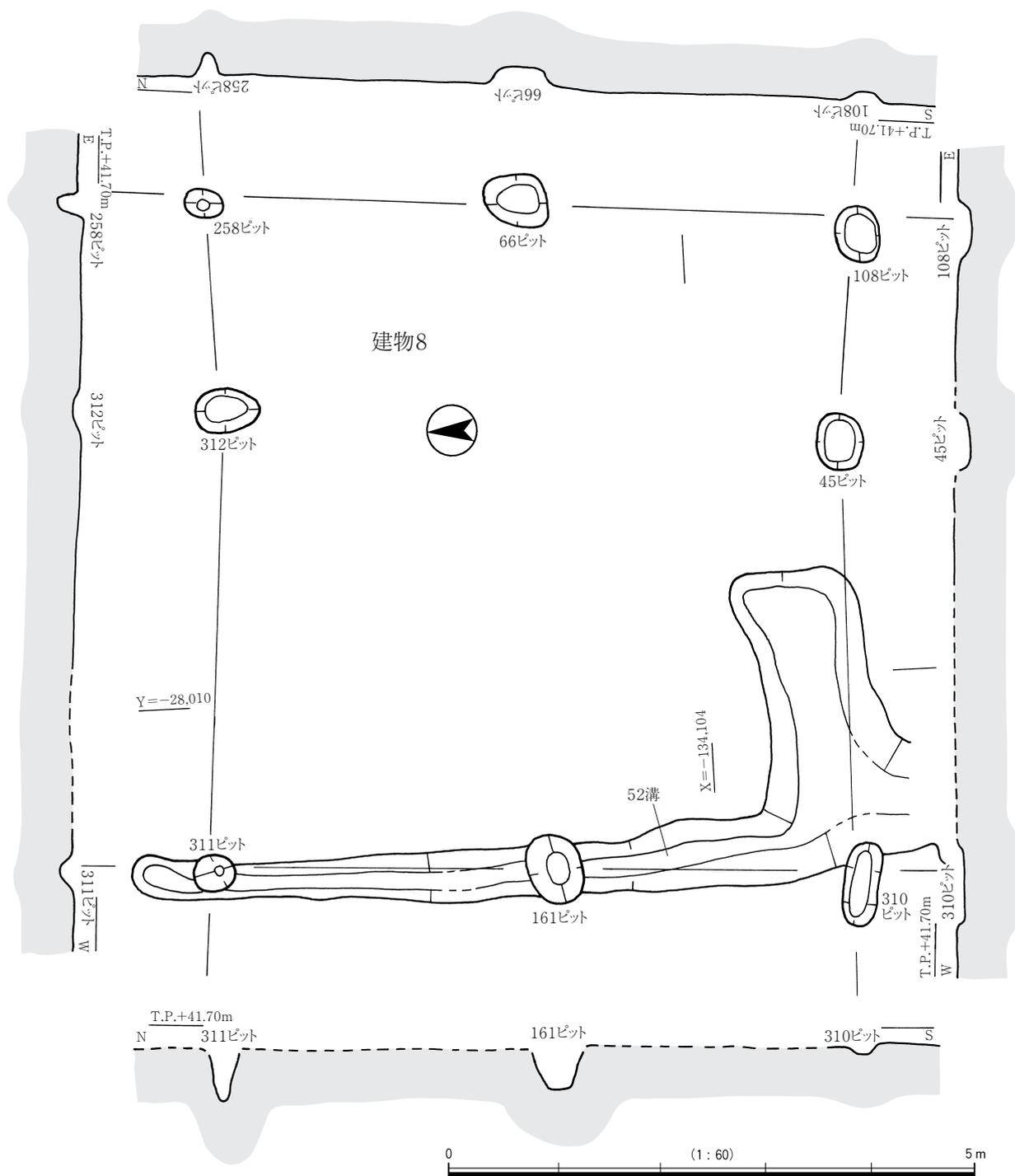


図110 有池遺跡03-1-2調査区 建物8 平・断面図

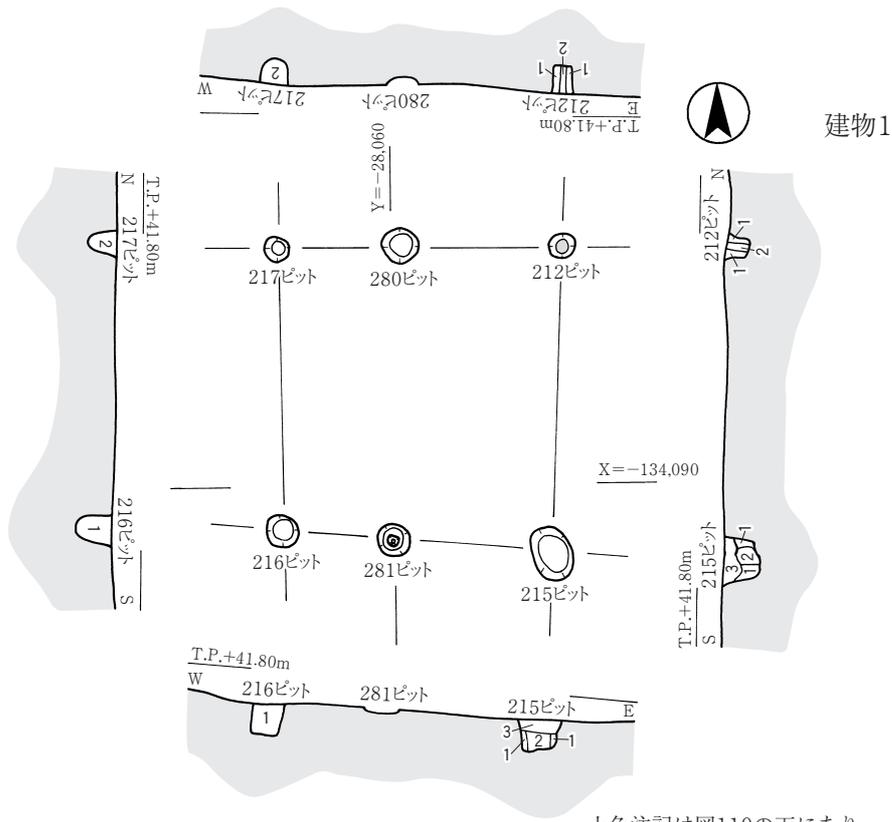
〈図111土色注記〉

建物1

1. 灰色N4/0粘質土（微砂と粗砂が均一に混じる。）
2. にぶい黄橙色10Y R6/4粘質土（細砂～中砂が均一に混じる。地山の黄橙色の再堆積層）
3. 灰色10Y4/1粘質土（細砂と中砂が均一に混じる。直径2mm大の白砂粒含む。地山の灰緑色粘質土がブロック状に混入する。）

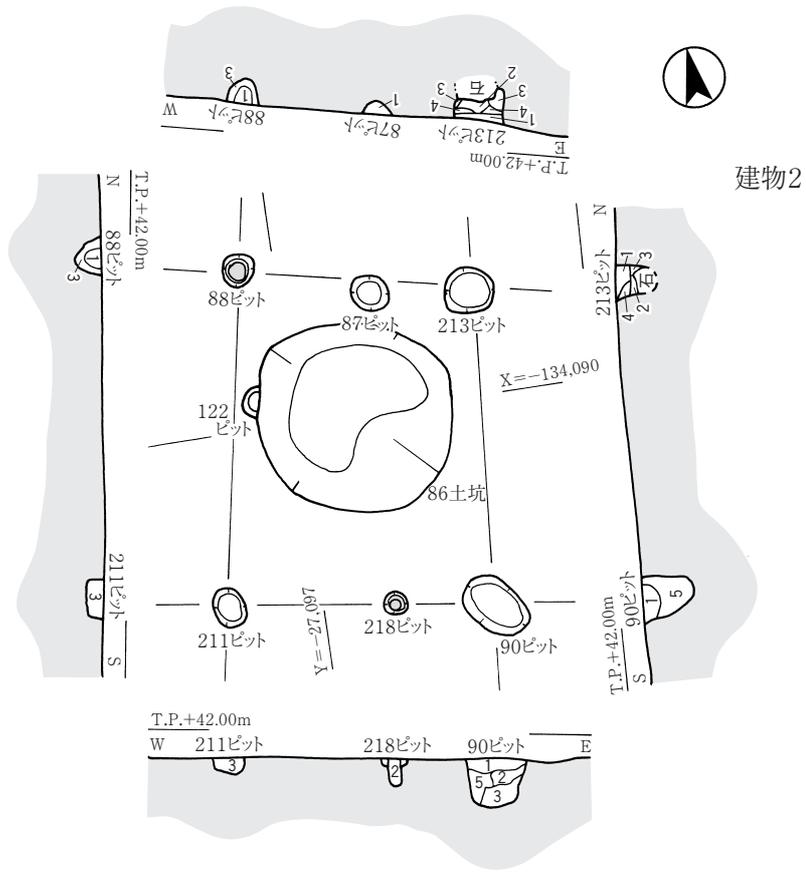
建物2

1. 灰色N4/0粘質土（微砂と粗砂が均一に混ざる。）
2. 黄灰色2.5Y6/1粘質土（微砂～中砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土がブロック状に入る。）
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土（微砂～細砂が均一に混ざりあう。炭化物入る。）
4. 灰色N5/0粘質土（細砂～中砂が均一に混ざる。直径3mm大の白砂粒、地山の緑灰色粘質土ブロック入る。）
5. 黄灰色2.5Y6/1粘質土（微砂～中砂が均一に混ざる。地山黄色粘質土がブロック状に入る。）



建物1

土色注記は図110の下にあり



建物2

土色注記は図110の下にあり

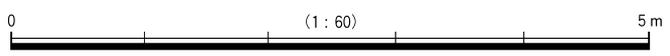


図111 有池遺跡03-1-2調査区 建物1・2 平・断面図

Nである。柱間は東西列が平均2.3m、南北列が平均2.1mで、床面積は約20㎡である。柱穴の平面形態は円形・隅丸三角形で直径約25～50cm、断面形態はU字形・隅丸逆台形等で深さは約20～50cmである。平面形はおおむね正方形だが、東西方向にやや長い。建物の方向軸や、建物北辺と南辺の中央の柱穴が他の柱穴に比べて若干浅い点等、建物1と類似する点が認められる。

建物北辺と東辺の柱穴に近接して、多数のピットを検出した。建物の補修に伴うものの可能性もあるが、建て替えもしくは前身になる別の建物が存在した可能性がある。125・276・240ピットから瓦器・土師器等の破片を検出したが、いずれもかなり細片で時期を判断することはできなかった。

柵1(図113) 東半部の西縁部分(1F-3j)で、かつ20土坑の底部で検出した。前述したように2調査区の東半部はおおむね遺構密度が高く居住域と考えられるが、その西縁部では遺構密度が低く、

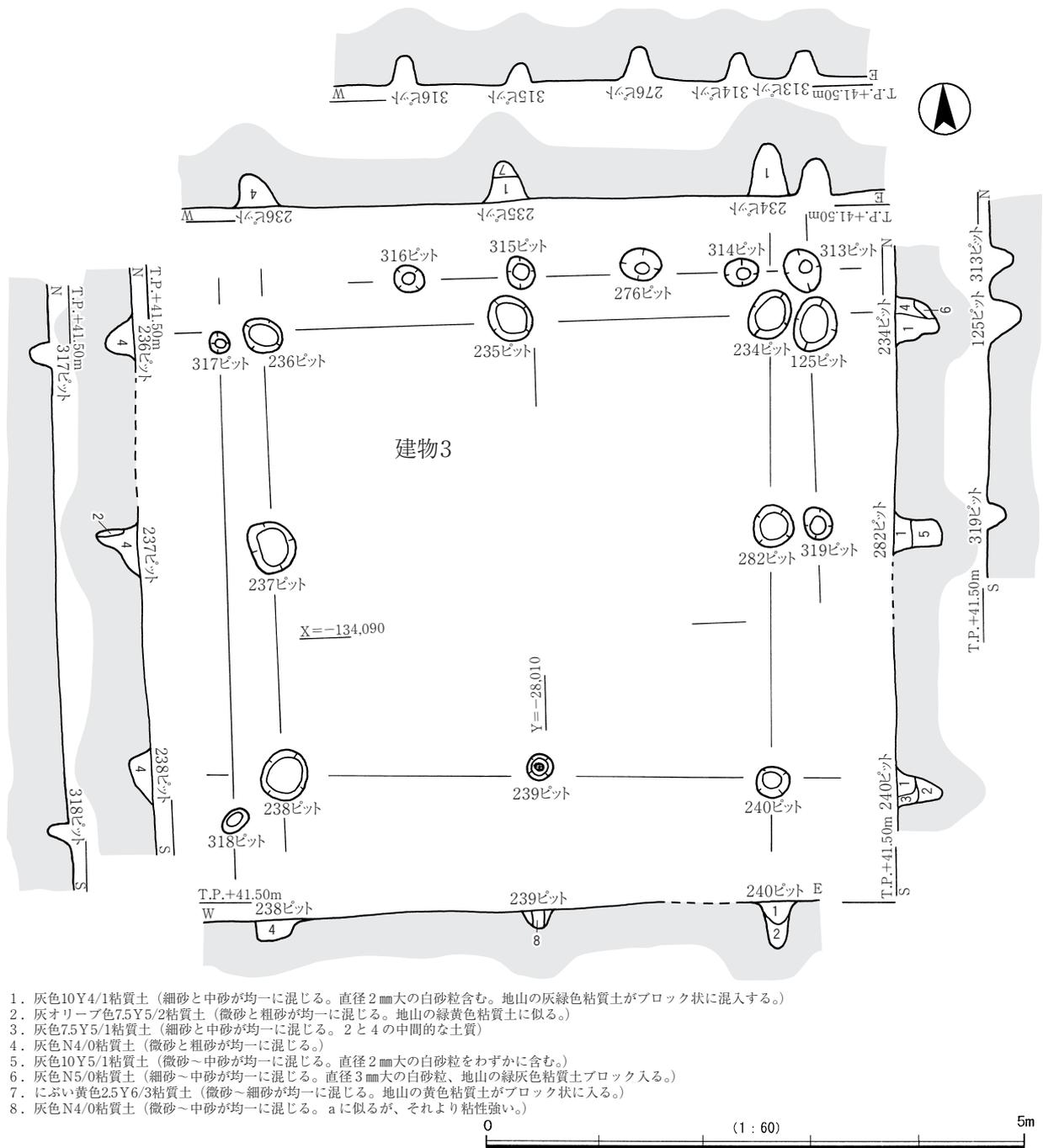


図112 有池遺跡03-1-2調査区 建物3 平・断面図

部分的に遺構がまとまっている状況が認められる。柵列1もそのような遺構のまとまりの一つである。

20土坑の底部で検出したピットは複数あり、それらは20土坑の北隅と南隅を結ぶような方向で列をなす。直径30cm強で、20土坑の底面からの深さは10cm前後である。91ピットと20土坑内で検出した他のピットを結んだピット群の方向はN-9°-Eである。これらのピットはほぼ同一線上に位置するが、ピット間の距離には統一性が認められない。

瓦器椀片2点と土師器台付皿・花崗岩礫が出土した。それらはいずれも被熱のため、赤変ないし表面の黒変が顕著である。

柵2 (図113) 柵1から南に15mほど離れて(1F-2b・3b)位置する。居住域と生産域の間の中間帯南縁に位置する、ピット・土坑からなる東西に広がる遺構のまとまりから抽出したもので、後述

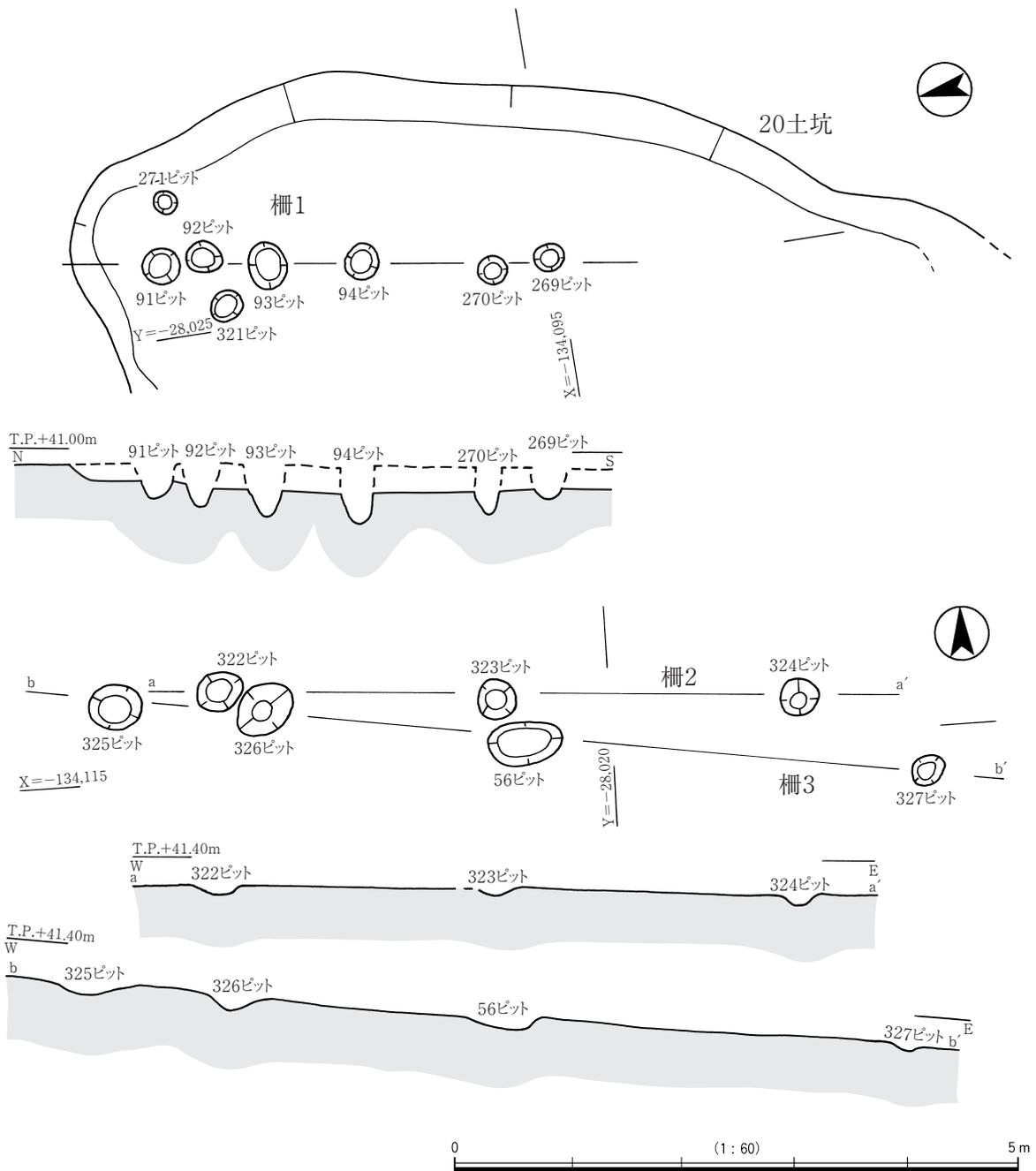


図113 有池遺跡03-1-2調査区 柵1・2・3 平・断面図

する柵3はこの南側に隣接する。

3つのピットがほぼ2.6mの間隔で東西方向に並んでおり、方向軸はW-4.5°-Nである。ピットは直径30~40cmの円形で、深さは10cm前後と極めて浅く断面形は皿形もしくは逆台形である。ピットから遺物は出土しなかった。

柵3(図113) 柵2の南側に隣接する東西方向に並ぶ4つのピットからなり、方向軸はW-9°-Nである。ピットの間隔は326ピットをはずしてみると3.6mである。

ピットの平面形は直径もしくは短軸が40cm前後の円形もしくは楕円形で、深さは10cm強と極めて浅く断面形は皿形もしくは隅丸のV字形である。56ピットから土師器皿・瓦器椀の破片が数点出土したが、いずれも細片で時期は判断できなかった。

27土坑・277溝(図114・119) 東半の遺構密集部の南端(1G-1b)で検出した。長軸11m弱、短軸5m強で、平面形は東西に長い楕円形もしくは隅丸二等辺三角形である。素掘りの土坑で、掘り込み面からの深さは90cm前後である。平坦な底部から側壁が外方に直線的に立ち上がり、南北方向の断面形は隅丸の逆台形を呈する。湧水層を掘りぬいているため、坑内に常時水が溜まっている状態だったとみられる。遺構埋土から、多数の日常雑器に加えて鉄器・木器を検出した。土坑の底部に近い部分からは曲物の杵や刀、完形の瓦器椀が出土している。これらの遺物組成は井戸に多くみられることから、27土坑も井戸もしくはそれに準ずる機能を有する水溜めだったのではないかと考える。

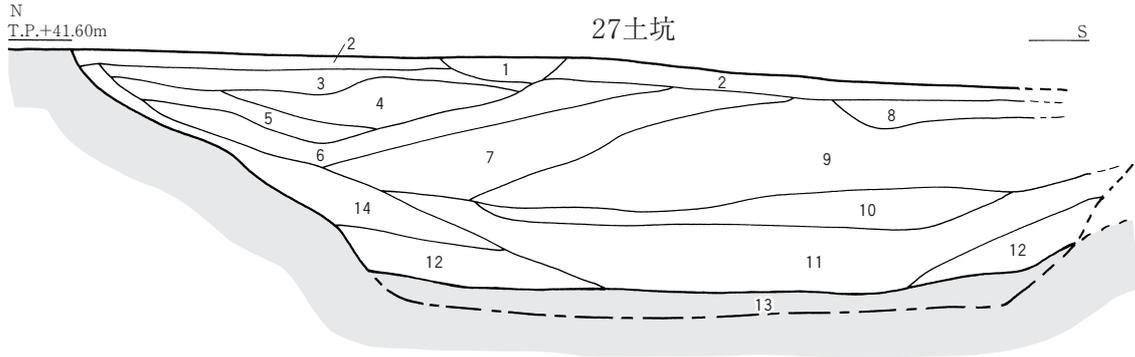
この遺構の南端部分は調査区の南壁に接するような状況になっている。27土坑が接する南壁の土層断面を観察した結果、下半部に流水堆積層を含んだ断面形が隅丸逆台形状の溝の断面を認めた。このことから、今回の調査では平面的には検出しなかったが、27土坑の南端にとりつく溝があったのではないかと推測した(277溝)。27土坑の南北方向の土層断面図を見ると、12層・14層が堆積した後、11層・10層・9層・7層・6層という順に南から北に向かって順次、遺構内が埋まっていった状況がうかがえる。

このことから、前述した溝から27土坑に向けて水や土砂が流入していた可能性がうかがえる。そうであればこの溝は、位置的に見て1調査区で検出した屋敷地を囲う濠から分岐するものである可能性が高い。ただ119図を見ても分かるように、277溝の埋土上半部には部分的にしか流水堆積層が含まれないことから、堆積物により溝の底が高くなってからは、溝内は滞水している時間の方が長い状態だったのではないかと考える。そして必要に応じて溝や土坑を掘り直し、それらの機能を維持していたのではないかとみられる。

27土坑の東端から東西方向にのびる96溝があり、さらにその東端は29井戸へとつながる。これらの遺構は相互に関連性を有していたことがうかがえるが、出土遺物から3者の関係を把握したい。

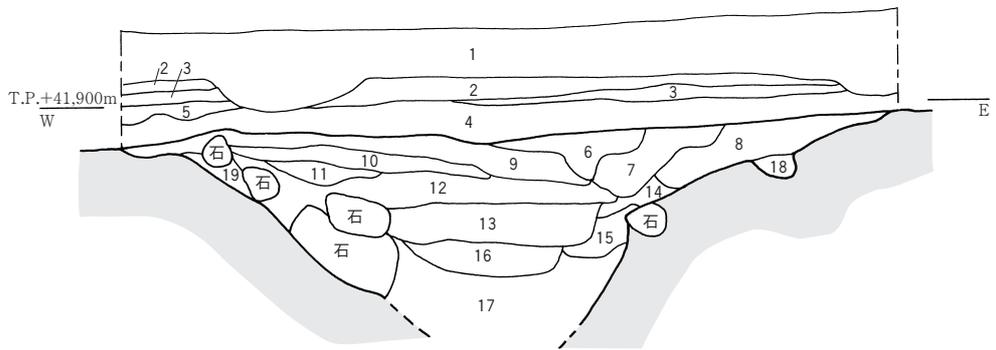
27土坑から出土した遺物は豊富で、破片の状態でコンテナが満杯になる量だった。瓦器・土師器・東播系の鉢・瓦質羽釜や三足釜を主とし、褐釉陶器・鉄器・漆器・曲物が含まれていた。また瓦器椀や土師器皿の中には完形もしくはそれに近い状態のものが多く含まれていた。その中でも保存状態の良いもの、特徴的なものを抽出して図化した。破片まで仔細に検討すると、13世紀前半や後半の遺物も含まれるが、量的には14世紀前半のものが大半を占める。

一方、96溝からは少量の土器が出土したにとどまる。具体的には瓦器・土師器・瓦質の三足釜があるが、時期の特定は難しい。敢えて印象を述べれば、瓦器や土師器の破片は薄くて華奢なものが大半であることから、13世紀後半より古くはならないのではと考える。また29井戸出土遺物は完形品こそみられなかったが、27土坑出土遺物と似た様相をもつ。したがっておそらく、29井戸は96溝を介して27土坑と



- | | |
|---|-----------------------------------|
| 1. 黒褐色2.5Y3/2粘質土 (花崗岩の砂粒を含む。) | 8. 黒色2.5Y2/1砂質土 (花崗岩の砂粒を含む。) |
| 2. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (花崗岩の砂粒を含む。) | 9. 黒色10Y R2/1砂質土 (花崗岩の砂粒を含む。) |
| 3. オリーブ黒色5 Y3/2粘質土 (花崗岩の砂粒を含む。) | 10. 黒褐色10Y R3/1砂質土 |
| 4. 灰オリーブ色5 Y5/2粘質土 (花崗岩の砂粒を含む。) | 11. 灰色5 Y4/1シルト |
| 5. 暗オリーブ色7.5Y4/3粘質土 (花崗岩の砂粒を含む。) | 12. 灰色7.5Y4/1粘質土 |
| 6. オリーブ黒色5 Y2/2粘質土 (7.5Y4/3粘質土が混じる。花崗岩の砂粒を含む。) | 13. 灰色10Y4/1シルト |
| 7. オリーブ黒色7.5Y3/1砂質土 (7.5Y4/3粘質土が混じる。花崗岩の砂粒を含む。) | 14. オリーブ黒色7.5Y2/2砂質土 (花崗岩の砂粒を含む。) |

28井戸



- | | |
|---|---|
| 1. 褐灰色10Y R4/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。現代耕作土) | 10. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。炭化物入る。酸化鉄斑文顕著) |
| 2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。直径3mm大の円礫入る。酸化鉄斑文含む。) | 11. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。炭化物入る。酸化鉄斑文顕著) |
| 3. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。直径3mm大の円礫入る。酸化鉄斑文含む。) | 12. 灰色5 Y5/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径4mm以下の円礫入る。) |
| 4. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径3mm大の円礫入る。酸化鉄斑文含む。) | 13. 黄灰色2.5Y4/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。) |
| 5. 灰黄色2.5Y6/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。直径2mm大の円礫入る。) | 14. 灰色5 Y5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の緑灰色砂質土がブロック状に入る。) |
| 6. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。) | 15. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。) |
| 7. 褐灰色10Y R5/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。直径5mm以下の円礫入る。地山の黄色粘質土ブロック含む) | 16. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。自然木の小片入る。) |
| 8. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径3mm大の円礫入る。) | 17. 灰色5 Y4/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。16層の土質に似るがそれより粘性強い。) |
| 9. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる。直径3mm大の円礫入る。酸化鉄斑文顕著) | 18. 灰色5 Y5/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。直径5mm以下の円礫入る。) |
| | 19. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (細砂と粗砂が混ざる。) |

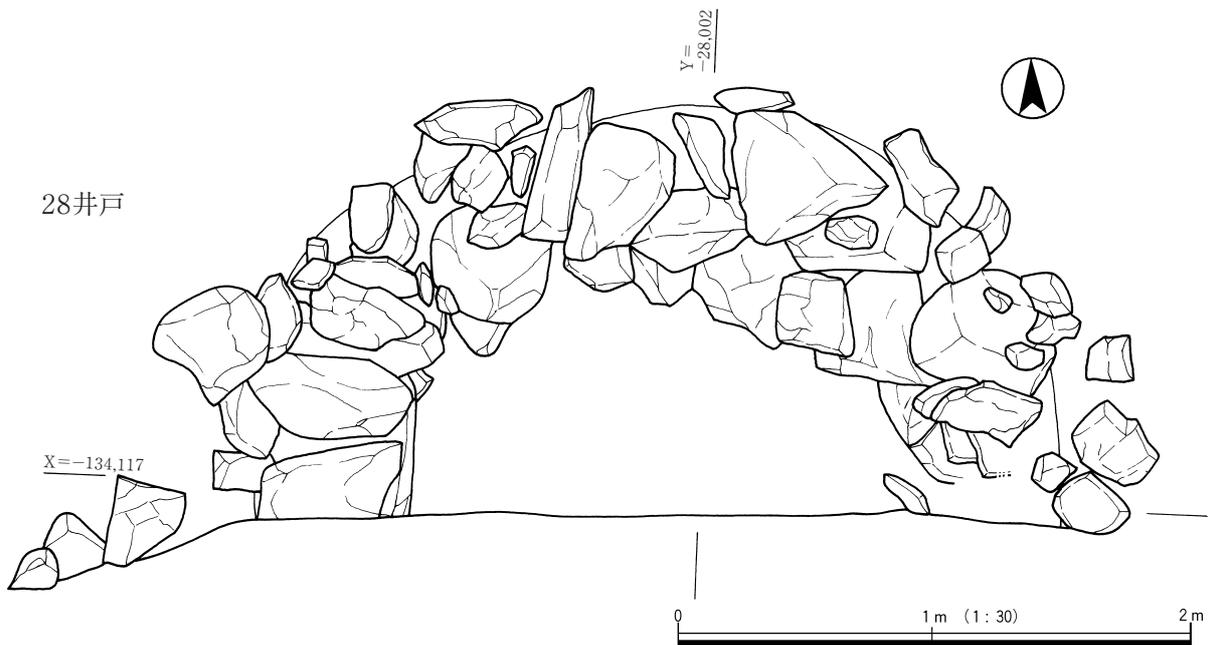


図114 有池遺跡03-1-2調査区 土坑・井戸 平・断面図

つながっており、前者の余水を後者に落とす仕組みになっていたのではないかと考える。

以上のことから、27土坑は277溝を介して1調査区で検出した屋敷地を囲う濠と、96溝を介して29井戸とつながっていたと考えられる。

29井戸 東半部の南東隅（20G-10b）で検出した。直径2.7mの円形の土坑で、40～50cm掘り下げた時点で湧水が顕著に見られた。深さは1m前後だが湧水層を掘り抜いており、常時水が溜まった状態だったとみられる。出土遺物は13世紀後半のものを含みつつ、大半が14世紀前半に位置付けられることから、前述の27土坑と同時並存した可能性が高いと考える。

28井戸（図114） 東半部の遺構密集部南端（1G-1b）で検出した。井戸の南半部は調査区の法面にあたっていたため、遺構全体を検出できなかったが、直径3.1m弱の円形の井戸とみられ、断面形は漏斗状である。側壁に径50cm大の角礫を積んだ石積み井戸で、深さは1m強とみられる。

瓦器椀・須恵質の鉢・瓦質土器・土師質土器・三足釜の脚部など、全部で9点の土器が出土した。いずれも細片のため図化しなかった。うち備前焼の鉢は体部が直線的に外方に伸び、口縁端部が面もち、四角くおさめつつ内面をわずかにつまみ上げたもので、内面に摺り目をもつ。加えて2点の瓦器椀の破片は器壁が2～3mmで、内面に幅0.5mmのミガキが3本/1cmが施されている。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。出土遺物の特徴から見て、この遺構は14世紀前半の段階で埋まったと考えられる。

58土坑（図115） 東半部の遺構密集部分の西縁（1G-2b）で検出した土坑で、平面形は長軸1.8m・短軸1.6mの楕円形である。断面U字形で、深さ1m強である。遺構埋土には中世遺物包含層である黒色粘質土がブロック状に混入し、人為的に埋められたような状況が見受けられる。

瓦器椀、土師器皿と瓦質土器・須恵質土器の破片が出土した。そのうち瓦器椀3点に関しては時期の把握が可能であった。出土遺物の時期は13世紀後半に位置付けられる。

26井戸（図115） 西半部（1G-5a）で検出した。長軸1.8m弱、短軸1.3mの楕円形土坑の北側と南側に、ステップ状の小さな平場が取りついたような形状である。断面形は皿形で、深さ60cmと浅いが、湧水層を掘りぬいており、常時水が溜まっている状態だったと見られる。

出土遺物は土師器皿・瓦器椀が10点弱だった。細片が多いため断定はできないが、出土遺物の時期は13世紀後半～14世紀前半の時期に含まれると考える。

51土坑（図116） 東半部の南寄り（1G-1a・1b）で検出した。27土坑の北隣に位置する。長辺2.4m×短辺1.8mの隅丸長方形の土坑と、その周囲にとりまくステップ状のくぼみからなる。この土坑は、最も深いところで25cm程度と浅い。ステップ状の浅いくぼみも含めた全体的な平面形は不整形ではあるが、長方形の土坑を付け足していったようにも見える。ステップ状の浅いくぼみの底部では、中心となる隅丸長方形の浅い土坑をとりまくように位置する複数のピットを検出した。これらのピットの配置からみて、覆屋を伴う施設だった可能性もある。

出土遺物は瓦器椀・土師器皿・東播系の鉢・土師質の羽釜・瓦質の鉢や三足釜・陶器等である。13世紀全般にわたる時期の遺物が含まれるようだが、大半を占めるのは13世紀後半のものと思われる。

52溝 51土坑の西縁から北側に延びる南北方向の溝（1G-2a）で、中ほどで東側に分岐する部分がある。幅30cm～1.5m、深さ10～20cmで、溝幅が最も広い中程の部分が溝の最深部となっている。溝の埋土から白磁椀・瓦器椀の破片に加え、完形品を含む多量の土師器皿が出土した。耕作痕跡の溝から多量の完形土器が出土するとは考えにくいこと、溝の形状からみて流路とも考えにくいことから、それらとは別の機能もしくは形成要因を有する溝である可能性が高い。ちなみに建物4の項でも述べたように、

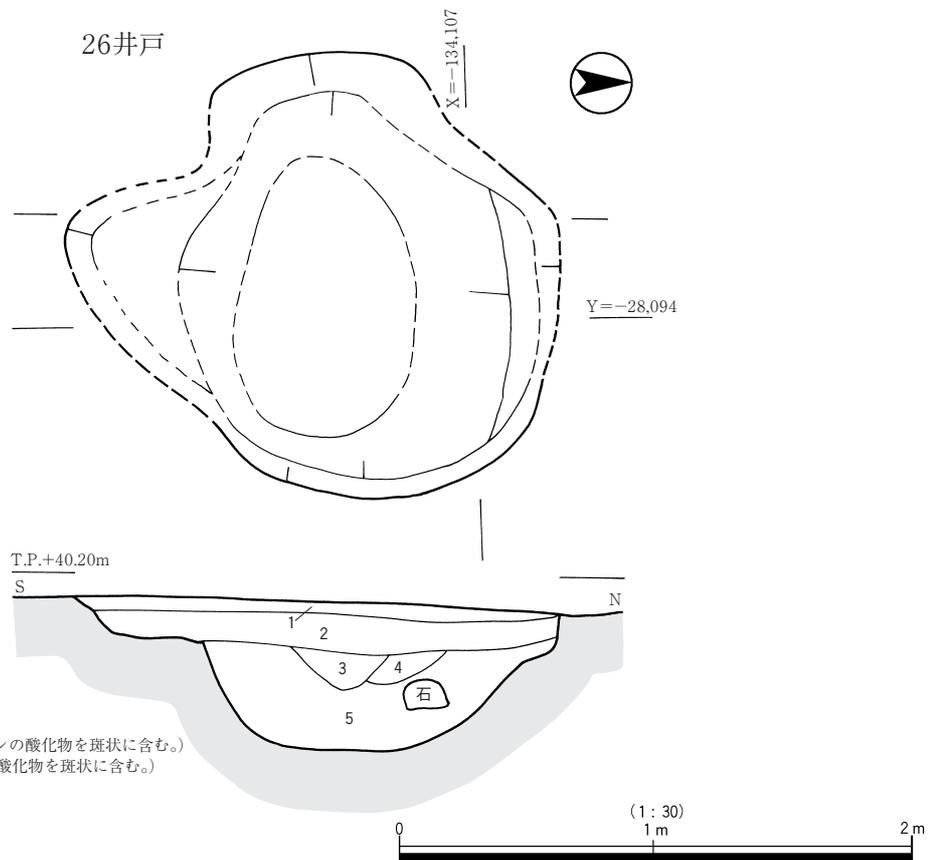
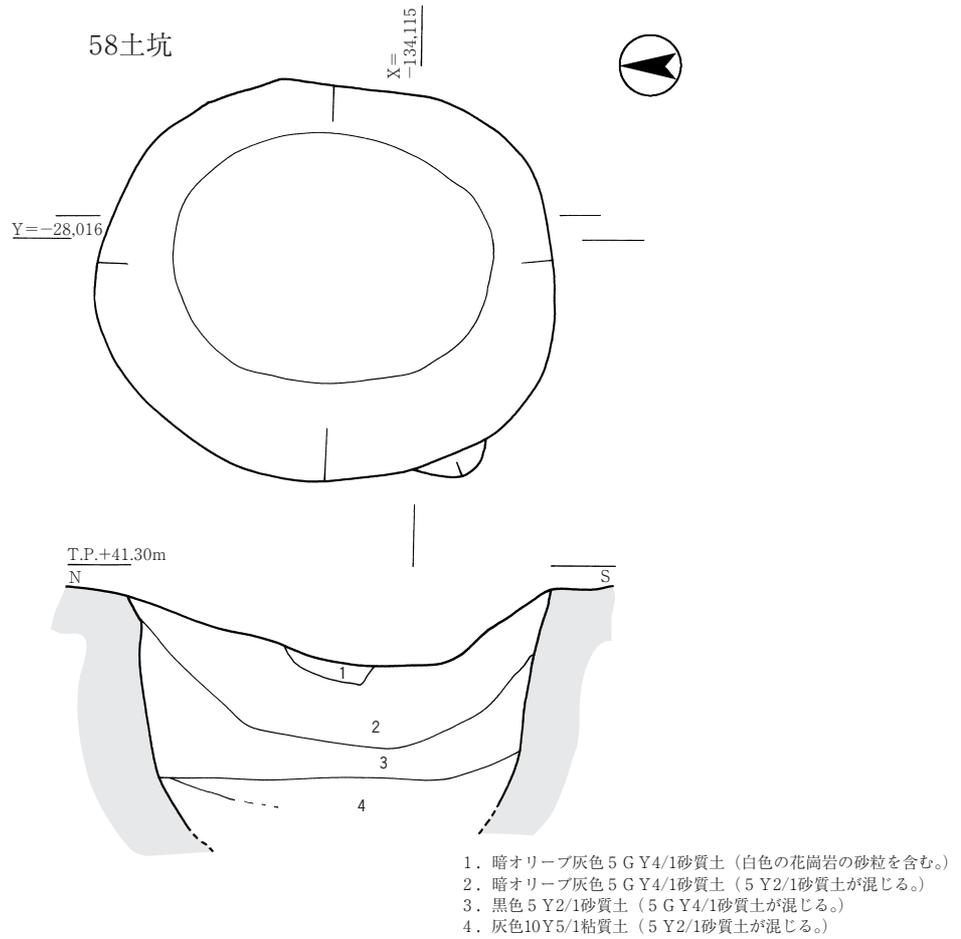
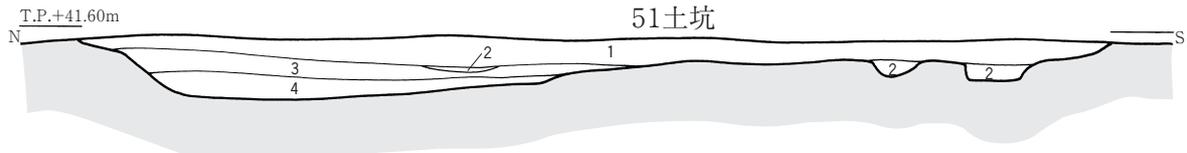
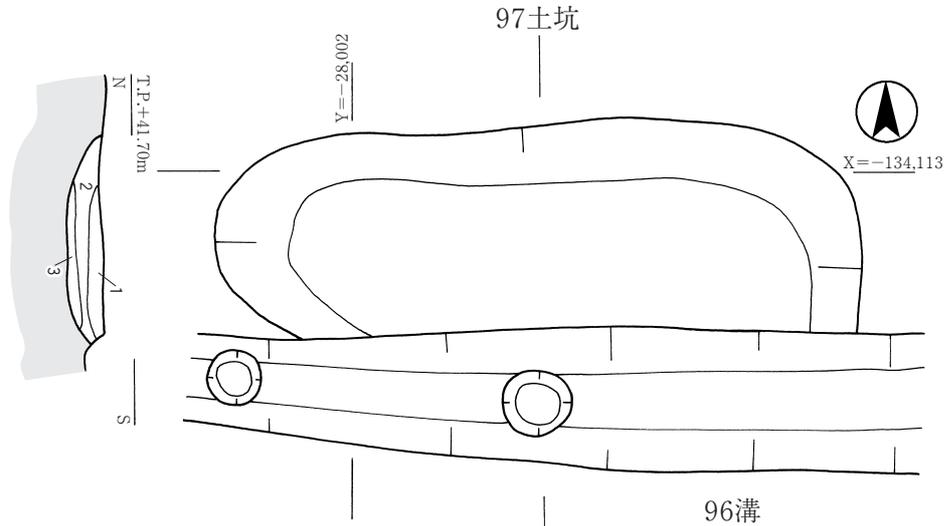


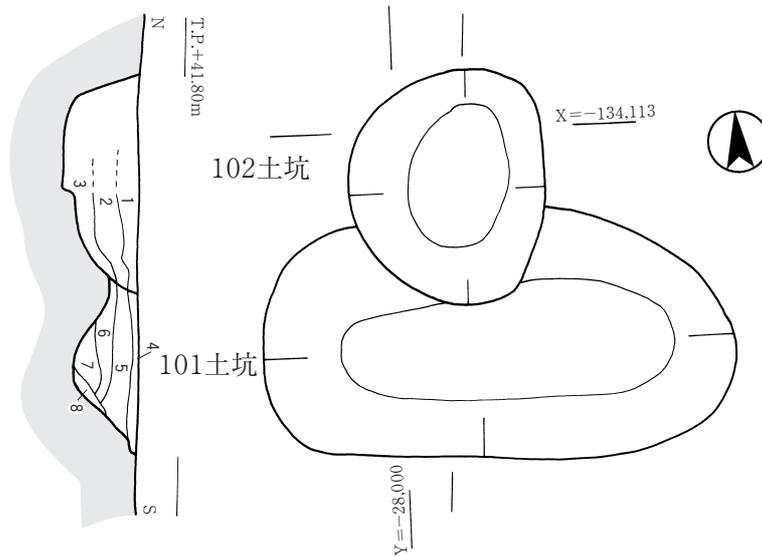
図115 有池遺跡03-1-2調査区 土坑・井戸 平・断面図



1. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。旧耕土)
2. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。地山のにぶい黄色粘質土がブロック状に入る。)
3. にぶい黄色2.5Y 6/4粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm台の円礫含む。地山の再堆積層。)
4. 灰色7.5Y 5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の黄緑色粘質土がブロック状に若干入る。)



1. 黒褐色10Y R2/2粘質土 (直径2～3mmの砂粒を多く含む。)
2. オリーブ黒色10Y 3/3シルト
3. 暗緑灰色7.5G Y4/1粘質土 (直径2～3mmの砂粒を多く含む。)



1. 灰オリーブ色5 Y5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。直径2mm大の円礫含む。暗灰色粘質土がブロック状に若干入る。)
2. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。直径3mm大の円礫含む。地山の緑灰色粘質土ブロック入る。)
3. オリーブ灰色2.5G Y5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。暗灰色粘質土がブロック状に入る。)
4. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。炭化物を若干含む。)
5. 暗黄灰色2.5Y 4/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。4層に似るがそれより粘性強い。)
6. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。炭化物と地山の緑灰色粘質土ブロック若干入る。)
7. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の黄褐色粘質土ブロック入る。)
8. 暗黄灰色2.5Y 5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の灰緑色粘質土ブロック入る。)

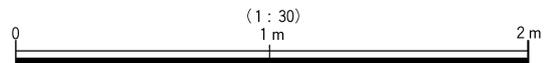


図116 有池遺跡03-1-2調査区 土坑 平・断面図

52溝の分岐部分から北の形状は建物4の西辺・南辺とほぼ平行しており、両者には何らかの関連性があった可能性がある。

図化した遺物の他にも多量の土師器皿が出土したが、それらは極めて均質である。底部と口縁部の境に明瞭な屈曲を伴うものも含まれるが、口縁が外反したものはなかった。瓦器碗では、口縁6点のうち内面に沈線を持つものは4点だった。内面のミガキはいずれも幅1mm前後で、3～5本/1cmである。また高台部分は退化寸前で貼り付けは雑である。出土遺物の時期はおおむね13世紀後半代に含まれると考えられ、両者が並存していたと考えて矛盾はない。

97土坑(図116) 東半部の南端(1G-1b)で、かつ27土坑の北東側に位置する。遺構の南端部を96溝で切られており、全体の形状は残らないが、おそらく長軸2.6m弱、短軸1.1~1.2mの長楕円形の土坑と見られる。最終遺構面からの深さは15cm程度と浅く、断面形は皿形である。この遺構の北側50cmほどのところに、これよりも小さいが方向軸が近似する長楕円形の101土坑がある。

出土遺物はわずかで、青磁と瓦器碗が出土した。いずれも細片だが、前者を図化した。後者は器壁が薄く、口縁部外面にやや強めのヨコナデが施される。内面のミガキは幅0.5mmで2～4本/1cmの密度である。底部の形状はわからないが、13世紀後半をさかのぼることはないと考えられる。出土遺物の時期からみて、後述する101土坑と並存していたとみられる。

101土坑(図116) 前項で述べたように、東半部の南端(1G-1b)で97土坑と隣り合わせに位置する。長軸約1.9m、短軸1mの長楕円形の土坑で、北端部を102土坑が切っている。深さは30cm弱で、断面形は隅丸のV字形である。埋土の上部に若干の炭化物が含まれる。

瓦器碗・土師器皿・東播系の鉢・陶器の破片が出土した。いずれも細片で時期の確定は難しいが、5点の瓦器碗の口縁部片はいずれも端部が尖り気味に丸められており、器壁も薄い。底部～口縁部の形状がわかる4点の土師器皿はいずれも底部が平坦で、口縁部は外方へ直線的に短く立ち上がる。出土遺物の特徴からみて、13世紀後半をさかのぼることはないと考えられる。したがって前述の97土坑と並存していたとみられる。

102土坑(図116) 東半部の南端(1G-1b)に位置し、101土坑の北端を直行するように切っている。長軸95cm弱、短軸80cm弱の楕円形の土坑である。深さは約30cmで、断面形は隅丸長方形である。

瓦器碗の破片と三足釜の脚部が出土している。瓦器碗は底部のみで、明確な時期判断はできないが、13世紀代のものであることは確かである。これが101土坑を切っていることを勘案すると、13世紀後半の時期に含まれる可能性がある。

106土坑(図117) 東半部の南寄り(1G-1b)の部分で検出した長軸11.6m、短軸93cmの楕円形の土坑である。最終遺構面からの深さは20cm強で、底部からの立ち上がりがゆるやかな、隅丸V字形の断面形である。遺構埋土の観察により、壁の部分からの崩落土などで、徐々に埋まっていったような状況がうかがえる。瓦器碗の細片が2点出土したが、その帰属時期は不明である。

222土坑(図108・117) 東半部の中ほど(20G-10a・10b)で、建物5の内部に位置する。長辺約1.3m、短辺約0.8mで、深さは10cmときわめて浅い。建物5の柱穴の残存深度も浅かったので、本来の遺構の形状から見ると上部はかなり削平を受けたものとみられる。断面形は皿形で、底部から側壁への明瞭な立ちあがりは見られなかった。

遺構埋土は2層に分けられる。下層はきめの細かい均質な粘質土からなり、上層は炭化物が多く含まれる粗砂混じりの粘質土である。この土坑埋土に含まれる炭化物の量は、他の遺構埋土に含まれる量よ

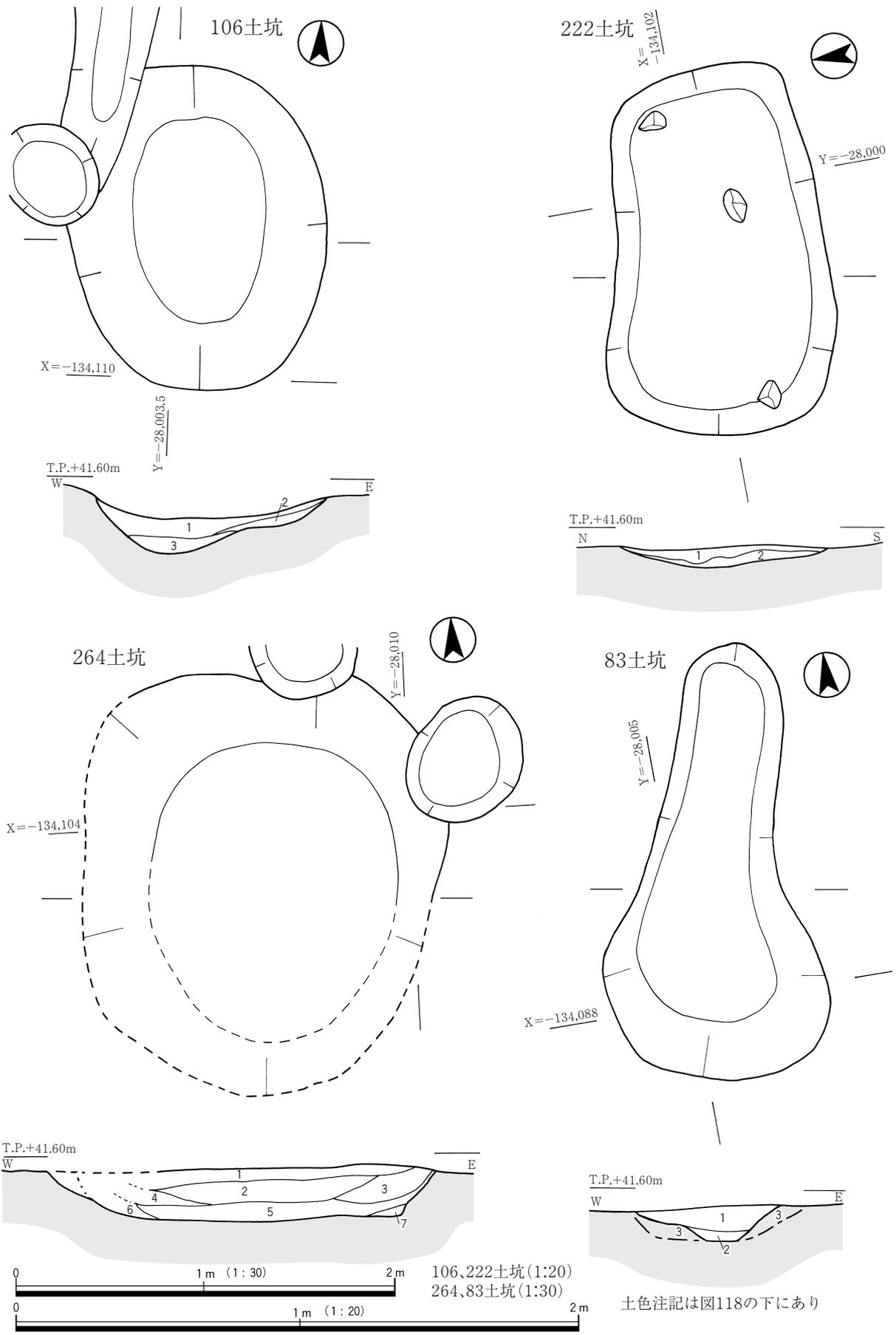


図117 有池遺跡03-1-2調査区 土坑 平・断面図

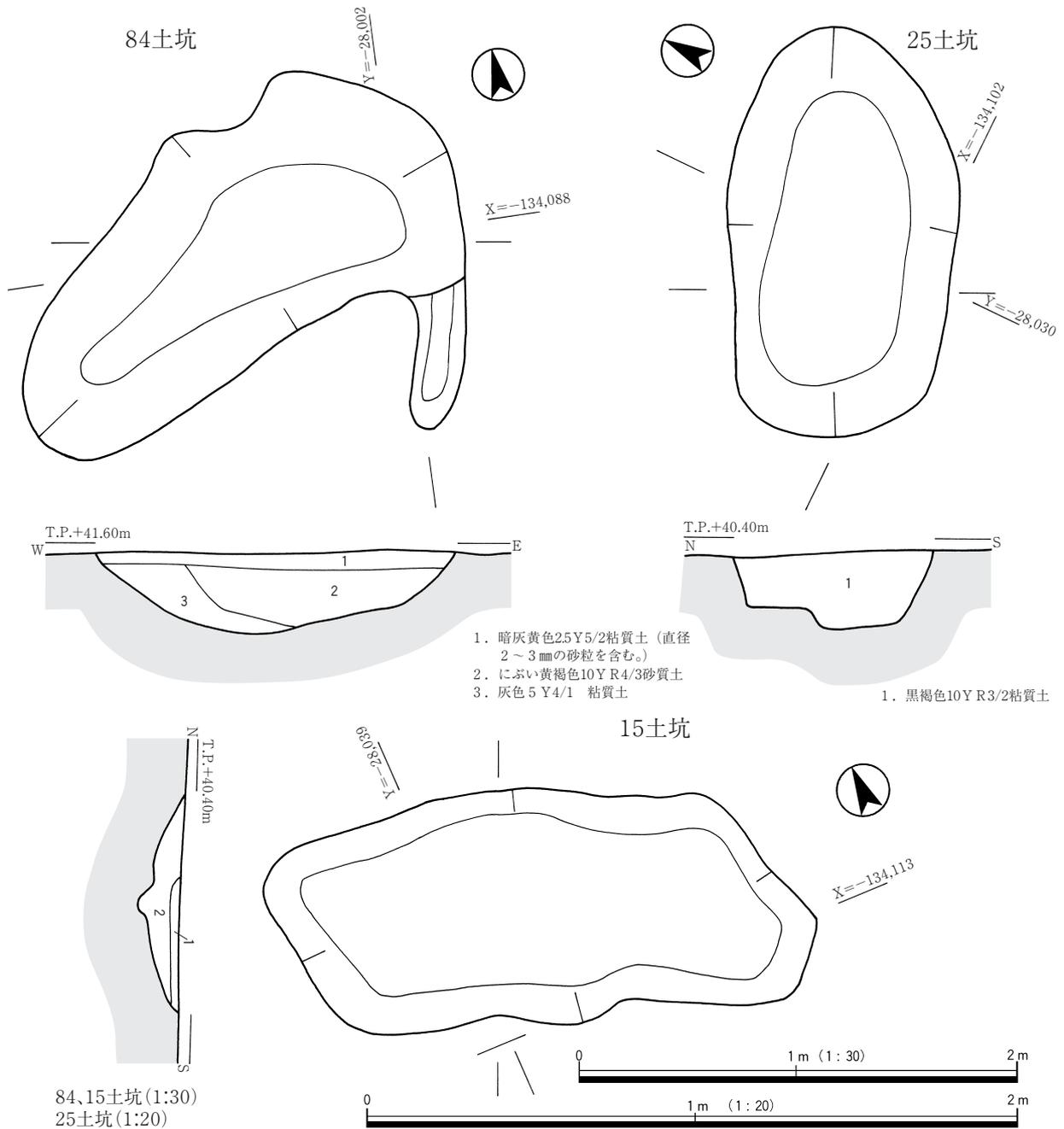


図118 有池遺跡03-1-2調査区 土坑 平・断面図

図117土色注記

106土坑

1. 暗緑灰色10G Y3/1粘質土 (直径1~2mmの砂粒を含む。)
2. オリーブ灰色10Y5/2砂質土
3. 黄褐色2.5Y5/4粘質土

222土坑

1. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (細~中砂が均一に混じり合う中に、若干粗砂含む。下部に、薄い炭化物層を伴う。)
2. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (微~細砂が均一に混じりあう。)
3. オリーブ灰色 5 G Y5/1砂質土 (細~粗砂が均一に混ざる。直径1cm以下の花崗岩礫入る。)

264土坑

1. 灰オリーブ色7.5Y5/2粘質土 (微砂と粗砂が均一に混ざる。地山の緑黄色粘質土に似る。)
2. 灰色7.5Y5/1粘質土 (細砂と中砂が均一に混ざる。)
3. 灰色7.5Y R4/1粘質土 (細砂と粗砂が均一に混ざる。地山の灰緑色粘質土ブロック状に入る。②に似るが、それより粘性が強い。)
4. 灰色 5 Y6/1砂質土 (細~中砂が均一に混ざる。炭化物をわずかに含む。)
5. 灰色N4/0粘質土 (微~細砂が均一に混ざる中に直径5mm以下の円礫含む。地山の緑灰色粘質土ブロックと炭化物含む。)
6. 灰色N5/0粘質土 (微~細砂が均一に混ざる。地山の緑灰色粘質土ブロック含む。)
7. 灰色N5/0粘質土 (微~細砂が均一に混ざる。⑥に似るが地山の緑灰色粘質土ブロックの含有量はわずかに。)

83土坑

1. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土
2. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土 (直径3~4mmの砂粒を含む。)
3. 黄褐色2.5Y5/4粘質土 (地山)

り圧倒的に多く、この遺構を特色付けるものであった。炭化物は下層に接する部分で特に密に含まれている状況だった。ただ土坑の内面には著しい被熱によって生じる赤変は認められなかった。このことから222土坑は炉址ではないかと考える。

出土遺物は瓦器椀片1点と土師器片2点が出土した。いずれも細片で明確に時期はとらえられないが、瓦器椀は口縁部から体部にかけての破片で、外面にはミガキが施されていない。口縁内面には沈線が施されている。沈線の幅は1mm強で工具を器壁に対してやや上方から押し当てて段を成すような形状である。おそらく13世紀前半代までの遺物と考えられる。

222土坑自体の遺存状態が底部付近に限られていること、建物5の柱穴から時期を判断できる遺物が出土しなかったことから断定はできないが、位置関係などからみて222土坑は建物5の内部に設けられていた炉跡の可能性はある。

264土坑 (図117) 建物4の西側に近接して位置する長軸2.3m、短軸2.0mの隅丸方形ないし楕円形の土坑で、52溝で切られている。52溝の底部で、溝底よりも深く掘りこまれて残存している土坑の輪郭を把握したので、実際はそれより若干大きくなると見られる。土坑の底部は平坦で、壁面の立ちあがりは明瞭である。埋土の堆積状況からみて、この遺構は徐々に埋まっていったことがうかがえる。埋土には炭化物が若干含まれる。

出土遺物は瓦器椀を主として、土師器皿・土師質土器・瓦質土器片が含まれる。いずれも細片で図化し得なかった。瓦器椀口縁部の破片8点のうち、口縁部内面に沈線が施されるものは3点あり、外面にミガキを施すものはなかった。内面のミガキは幅1mmで4～6本/1cmの密度である。口縁内面に沈線をもたないものは直立気味の口縁を丸くおさめ、内面のミガキは幅0.5mmで3本/1cmの密度である。高台部分の破片は2点あり、いずれも細い粘土ひもをヨコナデで貼り付けており、断面形状は二等辺三角形である。出土遺物は13世紀に含まれるものと考えられる。

83土坑・84土坑 (図117・118) 東半部の北端部(1F-1i)で建物3と建物1に挟まれるように位置する、南北方向に長い瓢箪形の土坑である。長軸2.3m強、短軸1.2m強で平坦な底部をもち、深さは20cmである。溝を挟んで東側に、隣り合うようにして84土坑が位置する。

84土坑は長軸2.3m、短軸1.1m弱の長楕円形で、深さは40cm弱、83土坑とほとんど同規模である。ただ長軸の方向が異なり、83土坑はほぼ南北方向を指すのに対し、84土坑は北に対して東に振る。

84土坑の出土遺物は瓦器椀片2点と、三足釜の破片が1点である。それらはいずれも細片で、遺構の帰属時期を判断することができなかった。83土坑からは遺物は出土しなかった。

25土坑 (図118) 東半部(1F-3a・4a)で検出した長軸1.3m弱、短軸0.7mの楕円形土坑である。深さは30cm強で、底部から側壁への立ちあがりは明瞭である。土坑埋土は単層で、最終遺構面の上層で見られる、中・近世耕作土に似た土からなることから、この土坑が掘り込まれてからあまり時間を置かずに埋まったとみられる。

珠洲焼甕と瓦器椀の破片が各1点出土した。遺構の帰属時期を判断することはできなかった。

15土坑 (図118) 東半部南寄り(1G-4b)の部分で検出した隅丸長方形の土坑である。この土坑を検出した部分では、この土坑を含めて多数の不整形土坑が、南北方向の溝を切って分布する状況が認められる。長辺約2m、短辺約1mで深さは20cm程度である。底部は凹凸が見られ、側壁への立ちあがりもゆるやかである。遺構埋土の堆積状況からみて25土坑と同じく、この土坑が掘り込まれてからあまり時間を置かずに埋まったと見られる。

出土遺物は瓦器碗の破片が2点、土師器皿の破片が3点、土師質土器の破片が1点である。いずれも細片で摩滅しており、時期の特定はできなかった。

104土坑 東半部南寄り（1G-1a）の部分で検出した土坑である。平面形は長辺4m・短辺2.4mの不整形であるが、南北方向に長い隅丸長方形を基調とした土坑であるようだ。深さは20～30cmである。土坑の周囲に接するように建物7を検出した。建物7の柱穴から時期判断が可能な遺物を検出しなかったため、断定はできないが両者が並存したとすると、建物7は覆屋もしくは半地下式の土間建ちの建物だったと言える。51土坑の核になっていると見られる隅丸長方形の土坑の南辺と、104土坑の南辺がほぼ同一ラインに位置すること、両者の長辺の指す方向がほぼ直行することから、両者は計画性を持って配置された可能性がある。ただ104土坑から出土した遺物を51土坑出土遺物と比較すると、当遺構出土遺物の方が新しい様相を示す。

第5章第3節で掲示した土器は14世紀前半のもの1点であるが、この他に瓦器碗・三足釜の脚・片口鉢を含む須恵質土器の破片が出土した。瓦器碗はおおむね13世紀後半～14世紀前半のものにとらえることができる。土師器皿には口縁に外反化傾向の見られるものが含まれる。

112土坑 東半部の中央付近（1G-1a）で、建物4の内側にあたる部分に位置する。長軸1.2m、短軸0.8mの隅丸三角形ぎみの楕円形土坑である。深さは40cmで断面形は漏斗状である。

瓦器碗3点、東播系の須恵器鉢、土師器皿・瓦質土器・土師質の羽釜各1点が出土し、瓦器碗と須恵器鉢を各1点図化した。図化しなかった瓦器碗2点はいずれも口縁部から体部にかけての破片で口縁部内面に沈線が施されている。沈線は器壁に対して上方から工具が当てられており、段を成す。内面のミガキは幅1mm強で4～5本/1cmの密度で施される。また外面には口縁部付近にのみ粗いミガキが施される。これらの特徴から、出土遺物は12世紀末～13世紀初頭までの時期に位置付けられる。

20土坑 東半部から西半部にかけて広がる（1F-3j）長大な隅丸台形の土坑である。落込というべきかもしれない。深さ20～30cm程度の浅い土坑で、底部は平坦である。東半部の底部で複数のピットを検出した。

遺物は瓦器碗・土師器皿・土師質および瓦質の羽釜・東播系の須恵質土器・珠洲焼の甕の破片等がコンテナ2分の1杯分程度出土した。そのうち土師器皿と瓦器碗・瓦器皿・土師質の羽釜を図化した。図化しなかった他の遺物に関しても、瓦器碗の場合は口縁外面に強いヨコナデが施され、口縁端部が外反して丸くおさめられており、内面端部に施された沈線は器壁に対して上方から当てられた工具で引かれており、段を成す点などが共通している。外面のミガキは体部の半分程度までの広がりを持ちながら粗く施されたもの、口縁部に密に施されるもの、口縁部にまばらに施されるものなどのバリエーションがあるが、おおむね12世紀末から13世紀初頭に含まれ、時期的な斉一性は高いと考える。出土遺物は摩滅した細片と、あまり摩滅していない破片とがほぼ同量含まれている状況だった。

20土坑の南西に広がる4土坑と併せて西側に向かって広がる一連の谷の落ち口である可能性がある。4土坑からは瓦器碗・土師器皿・瓦質羽釜・須恵質土器が30数点出土している。土師器皿は器壁の厚さが3mm強と比較的厚い。瓦器碗は口縁端部を直立気味に丸くおさめたものと、器壁に対して上方から当てた工具で内面に引かれた沈線により、端部が外反するものが同量ずつ認められた。また高台はしっかりなでて付けられており、端部がやや外反するものも認められた。時期判断の決め手に欠けるが、12世紀後半～13世紀前半までの時期のものが含まれると見られる。2調査区において、13世紀前半以前の時期の遺物が検出された遺構は限られており、その点から見ても両遺構には関連性が認められる。

176ピット 東半部の遺構密集部分（20F-10j）で検出した、円形のピットである。建物2の南側に位置し、周辺にも多数のピットが分布する。直径約90cmで、深さは10cm弱である。

土師器皿片5点と瓦質土器片1点が出土した。出土遺物の帰属時期は13世紀とみられる。

156土坑 東半部の北西端（1F-3i）で検出した南北方向に長い楕円形の土坑で、長軸1.8m、短軸0.7m、深さは10cm弱である。土坑埋土に炭化物が含まれる。

瓦器椀・土師器皿が出土しており、遺存状態の良好なものを各1点図化した。図化しなかったが、土師器皿には、口縁部外面に退化した二段ナデを施すと見られるものが1点出土した。底部と体部の境は丸く屈曲させており、体部下半から底部にかけてはユビオサエが顕著である。口縁端部は外反して丸くおさめる。口縁外面には幅2cmにわたって二段のヨコナデが施されているが、それほど強くないため、ナデの境が不明瞭な部分も認められる。器高は2cm強とみられる。口径はおそらく9～10cmとみられる。出土した遺物はおそらく12世紀前半の時期に収まるとみられる。

166ピット 東半部の遺構密集部分（1G-1a）で、建物5の南側に位置する。南半部を115溝に切られているが、直径40cm強の円形と見られ、深さは約5cmである。

瓦器椀片2点、土師器皿片数点が出土した。出土遺物より13世紀後半に位置付けられる。

184ピット 東半部の遺構密集部分（1G-1a）に位置する。建物4の西辺の柱列より若干建物の内側に寄った位置にあることから、建物4に関連する柱穴である可能性がある。42土坑の底面で検出した直径30cm弱の円形のピットである。最終遺構面からの深さは10cm前後である。

土師器皿片が10数点出土した。出土遺物より遺構の帰属時期は13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。

86土坑 東半部の北端（20F-10i・10j）で検出した土坑で、建物2の柱穴に囲まれるように位置する。直径1.6m前後の素掘りの土坑で、50cm程度掘り下げた時点で湧水が顕著にみられた。これにより常時水が溜まっている状態だったと考えられる。深さは1m前後で、規模は小さいが井戸と考える。出土遺物の時期からみて建物2が覆い屋としてこの遺構と並存していた可能性が高いが、それに関しては建物2の項で詳述しているので参照されたい。

土師器皿・瓦器椀・土師質の羽釜・東播系の須恵器鉢・瓦質土器に加えて、焼けた花崗岩礫が1点出土した。遺物の時期は13世紀後半代に収まる。

105土坑 東半部の南端部（20G-10a・10b）で、104土坑の南東部に近接する位置で検出した南北方向に長い楕円形の土坑である。長軸1.1m強、短軸40cm、深さは10cm弱である。

瓦器椀と土師質土器、須恵質土器の破片が出土した。ほとんどが細片だが、比較的遺存状態のよい瓦器椀1点を図化した。土師質土器の鍋は細片のため図化しなかったが、口縁部の形状を知ることができる。それをみると、口縁部は短く水平に外反、端部は平坦な面を作り出しながら上方へつまみあげるような形状である。これらの出土遺物は13世紀後半に含めて考えることができる。

60ピット 東半部の遺構集中部（1G-2a）の西縁に位置する円形のピットである。建物4や51土坑の西側を南北方向に走る、52溝を切っている。平面形は長軸70cm前後、短軸50cmの楕円形で、最終遺構面からの深さは20cm弱である。

瓦器椀・土師器皿・瓦質羽釜・珠洲焼甕と東播系須恵質土器の破片が出土した。桃の種1点も含まれる。土器の大半は細片で時期判断の決め手にかけるが、図化した瓦器椀は13世紀前半に位置付けられる。他の出土遺物もその時期に当てはめて考えても矛盾しないと考える。

91ピット 東半部の西縁部分（1G-2a）で、かつ20土坑の底部で検出した。20土坑の底部で検出したピットは他にも数基あり、それらは20土坑の北隅と南隅を結ぶような方向で列をなす。91ピットは其中で最も北に位置するものである。平面形は直径30cm強の円形で、20土坑の底部からの深さは10cm前後と浅い。ピット列の方向はN-9°-Eである。

時期が判断できない瓦器椀2点と花崗岩礫が出土した。いずれも被熱のため赤変・風化している。

182ピット 東半部（1G-1a）で建物4の西辺の柱穴に近接する位置にあり、遺構の南端部を43ピットで切られている。直径30cm前後の円形のピットで、深さは10cm弱である。

瓦器椀の破片が1点出土したが、時期は不明である。

37溝（図119） 東半遺構密集部（1F-2j）の西縁で検出した南北方向の溝である。長さは約8mで溝の幅は90cm～1.3mと一定しない。深さは20cm弱と浅く、平坦な底部から溝の肩への立ちあがりかゆるやかな皿形の断面形である。後述する38溝とはほぼ平行で隣り合う。またこの溝の北端部を、建物3の南西隅柱穴が切っている。

瓦器椀はおそらく2個体、土師器皿片を7点検出した。いずれも細片で時期判断の決め手に欠ける。瓦器椀は器壁の厚さが3～4mm、口縁端部内面の沈線は幅2mmで、器壁に対してやや上方から工具をあてて入れられている。内面のミガキは目で軌跡を追えるが、比較的密に施されている。高台は断面三角形で比較的しっかりと貼り付けられている。土師器皿は器壁の厚さが3～4mmで底部からの立ち上がりが緩やかである。遺物の時期は13世紀全般におよぶ可能性があるが、13世紀後半の遺物を含む38溝の東隣にほぼ並行して位置することから、両者は並存していた可能性もある。

38溝（図119） 東半遺構密集部（1F-2j）の西縁で検出した南北方向の溝である。溝の幅が1.0～1.4mと一定せず、長さは約7mである。深さは20cm弱で、断面形は皿形である。37溝・124溝に挟まれるように位置し、かつそれらとはほぼ平行する。掘削後あまり時間を置かずに埋積したと考えられる。

瓦質土釜、白磁、東播系須恵器鉢、須恵質土器片、土師器皿、瓦器椀の破片が出土した。瓦器椀の口縁端部は直立気味に丸くおさめ、内面に器壁に対してやや上方から工具を当てて幅1mmほどの沈線が施されている。土師器皿には口縁外面に二段ナデの名残をもつものや、外面に強いヨコナデを施し、外反化傾向がみられるものがあつた。東播系須恵器鉢は第Ⅱ期第2段階のタイプである。破片を観察した印象で言えば、12世紀後半～13世紀前半の遺物が過半数を占めるが、13世紀後半以降の時期のものも若干含まれる。遺構の切り合い関係を勘案すれば、13世紀後半以降を下限とする時期と言える。

39土坑（図119） 前述の38溝の東肩をわずかに切っている。南北方向に長い、長軸1.2m、短軸70cmの楕円形で、深さは約40cmである。掘削後あまり時間を置かずに一気に埋まった状況が見て取れる。

瓦器椀と土師器皿の破片が併せて10数点出土した。いずれも細片で時期を判断することはできない。

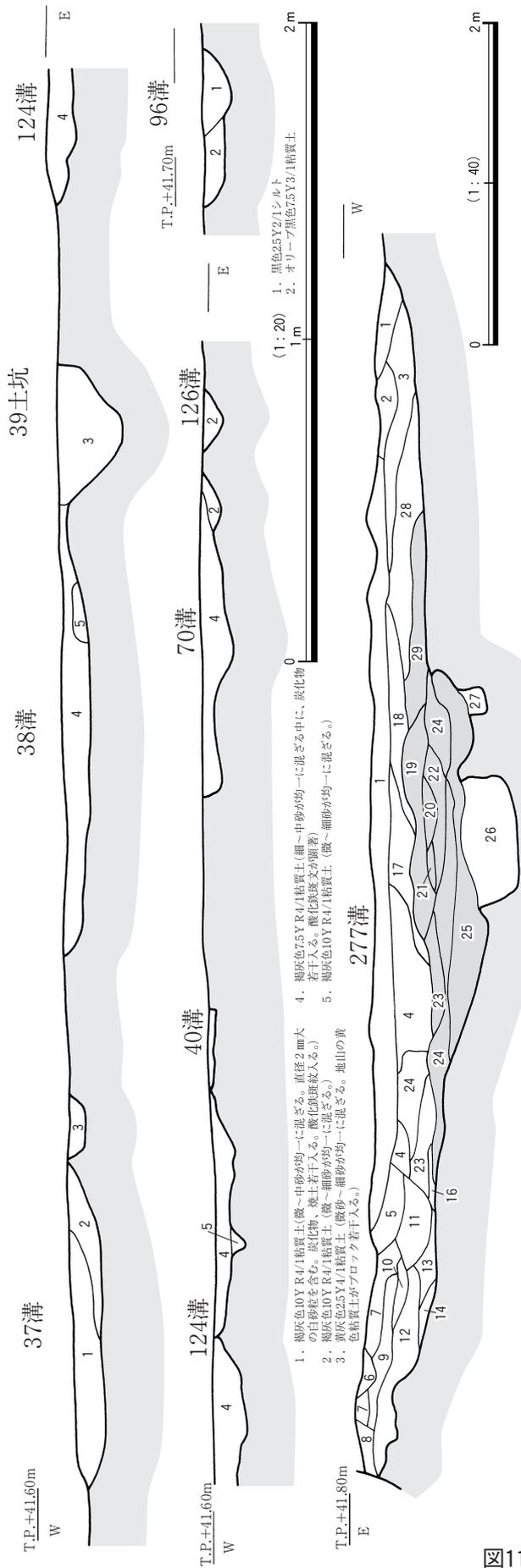
124溝（図119） 東半遺構密集部（1F-1j）で検出した南北方向の溝で、長さは約9mである。37溝・38溝とはほぼ平行する。溝の幅が65cm～1.5mと一定しない点も共通する。深さは20cm弱で底部には若干凹凸があり、溝の肩への立ちあがりかゆるやかである。

須恵質土器の破片が1点出土したが時期を判断することはできなかった。

40溝（図119） 124溝の東側に隣接する（1F-2j・1j・1a）南北方向の溝で、長さは約4mである。幅は50cm、深さは5cm程度と極めて浅い。

瓦器・土師器の細片が10数点出土したが、いずれも細片で帰属時期は判断できなかった。

70溝（図119） 東半遺構密集部（1F-1j）で検出した南北方向の溝で、124溝の東側に位置する。



ラミナを顕著に含む

1. 黄灰色25Y4/1粘質土 (微砂と細～中砂が均等に混ざる。酸化鉄源文脈紋含む。耕作土)
2. におり黄褐色10Y5/3砂質土 (細～粗砂が均等に混ざる中に地山の黄褐色粘質土プロック入る。畦畔)
3. 灰色5Y5/1砂質土 (微～中砂からなる。微砂と細～中砂の層理構造が認められる。)
4. 黄灰色25Y5/1粘質土 (微～粗砂が均等に混ざる。炭化物と、地山の黄灰色粘質土プロック含む。)
5. 黄灰色25Y5/2粘質土 (細～中砂が均等に混ざる。炭化物と、中～粗砂からなる砂質土プロック状に混ざる。)
6. 灰黄褐色10Y R/7粘質土 (細～中砂が均等に混ざる中に直径3mm以下の円礫含む。地山の黄褐色粘質土プロックが若干入る。)
7. におり黄褐色10Y R/7粘質土 (細～粗砂が均等に混ざる。5層の土質に似るが、それより粗砂の含有量が多い。)
8. 灰黄褐色10Y R/5粘質土 (細～中砂が均等に混ざる。6層の土質に似るが、それより粘性強い。マンガン斑紋含む。)
9. 灰黄褐色10Y R/2粘質土 (細～中砂が均等に混ざる。酸化鉄源文脈紋含む。)
10. 灰黄褐色10Y R/2粘質土 (中～粗砂を主に、微砂が混じる。直径5mm以下の円礫含む。)
11. 黄褐色25Y6/1砂質土 (中～粗砂からなる砂質土と、細～中砂からなる粘質土の層理構造がみられる。)
12. 灰色10G Y5/1砂質土 (中～粗砂からなる砂質土と、細～中砂からなる粘質土の層理構造がみられる。⑩に似る。)
13. 灰黄褐色10Y R/6粘質土 (微～粗砂からなるラミナ顕著。)
14. 灰色10Y5/1粘質土 (微～中砂からなる粘質土と、中～粗砂からなる砂質土がプロック状に混ざる。炭化物含む。)
15. 黄灰色25Y5/2砂質土 (微～粗砂が均等に混ざる砂質土と、中～粗砂からなる粘質土がプロック状に混ざる。炭化物含む。)
17. 灰色5Y6/1粘質土 (微～粗砂が均等に混ざる。17層に似るが、それより若干粘性強い。)
18. 灰色5Y6/1粘質土 (細～粗砂が均等に混ざる。直径3mm以下の円礫混じる。)
19. 灰色5Y6/1粘質土 (微～中砂が均等に混ざる。直径3mm以下の円礫混じる。)
20. 灰オリーブ色7.5Y6/2粘質土 (微～中砂が均等に混ざる。黄灰色粘質土プロック、直径4mm以下の礫入る。)
21. 灰色N5.0粘質土 (微～中砂が均等に混ざる。炭化物入る。)
22. 灰色N5.0粘質土 (微～粗砂が均等に混ざる。炭化物入る。21層に似るが、それより粘性強い。)
23. 灰色5Y6/1粘質土 (細～粗砂が均等に混じる。自然木の小片入る。)
24. 灰色10Y6/4粘質土 (微～粗砂が混ざりあつた粘質土と、微～中砂が混ざりあつた粘質土の層理構造がみられる。)
25. 灰色N5.0粘質土 (微～粗砂からなる。ラミナ顕著。)
26. 灰色10Y5/1粘質土 (微～中砂が混じる中に、直径5mm以下の円礫混じる。土塊27埋土の一部と見られる。)
27. 灰色N5.0粘質土 (微～粗砂からなる粘質土と、中～粗砂からなる砂質土がプロック状に混ざりあう。)
28. 黄褐色25Y6/1砂質土 (微～粗砂からなる粘質土と、中～粗砂からなる砂質土を主体とする。ラミナ顕著。)
29. 灰色N5.0粘質土 (微～粗砂からなる粘質土と、中～粗砂からなる砂質土を主体とする。ラミナ顕著。)

図119 有池遺跡03-1-2調査区 溝断面図

溝の南端を126溝に切られているが、長さは6m弱で、幅は1m前後である。深さは20cm弱で、底部には若干凹凸がある。

瓦器・土師器の細片が10数点出土したが、いずれも細片で帰属時期は判断できなかった。

126溝 (図119) 東半遺構密集部(1F-1i・1j)で検出した、南北方向の溝で、長さは約13mである。前述の70溝を切りつつ、やや屈曲する。また70溝とは方向が若干異なる。幅40cm、深さは約10cmで断面の形状は隅丸のV字形である。

瓦器・土師器の細片が5点出土したが、いずれも細片で帰属時期は判断できなかった。

96溝 (図119) 東半部の南端(1G-1b・20G-10b)で検出した、東西方向の溝で、27土坑と29井戸を連結する役割を果たしていたと見られる。おおむね27土坑北辺の延長上に位置するが、東寄りの部分で屈曲し、29井戸に至る溝で、幅は60cm前後である。深さが約15cmと浅いことから、29井戸に余水が生じた際、それを27土坑に導くために設けられた溝と考えられる。ただ遺構埋土に流水堆積層が見られず、溝の壁面からの崩落土も混入していない点から、恒常的に使用されたものではなく、必要が生じた時にだけ復旧して使用されたものと見られる。

土師器・瓦器の細片が10数点出土した他に、被熱したためか風化が激しい花崗岩礫が出土した。いずれも細片で、時期判断の決め手に欠ける状態である。

54溝 東半部の南寄り(1G-2a・2b)の部分に位置し、51土坑や52溝と関連性のある遺構と考えられる。東西方向の溝を基軸にして、南北方向に分岐した溝がとりついた形状である。51土坑に付設された配水施設だろうか。溝の幅は約30~50cm、深さは約20cm弱だった。図化遺物は13世紀の所産であろう。それ以外の遺物は瓦器椀・土師器皿・須恵質土器が合わせて10点ほどで、時期判断は難しい。土師器皿には口縁部が直立気味のもの、瓦器には器壁が薄く退化寸前の高台が付くものが認められる。あくまで印象の域をでないが、出土遺物の時期は13世紀後半以降の可能性はある。

41溝 東半遺構密集部分の中ほど(1F-2j・1j・1a)で検出した東西方向の溝だが、他の東西方向の溝とやや方向が異なる。溝の幅は約50cm、深さは10cm前後である。328溝とほぼ平行し、320溝と直行する。これらの溝がコの字状に位置することから、それらが同時並存した可能性がうかがわれるが、328・320溝から遺物が出土しなかったため断定はできない。

瓦器椀・瓦器皿・土師質羽釜・瓦質羽釜・土師器皿等が出土した。図化した遺物は12世紀末葉~13世紀初頭の所産と考えられる。図化しなかったものの中には口縁端部を直立気味に丸くおさめ、内面に器壁に対して垂直に工具を当てて沈線を施したものがある。それらは図化した瓦器椀より内面のミガキも粗くなっており、時期が下るとみられる。したがって時期の下限は13世紀前半と考える。

21溝 西半部の北端(1F-4j)で検出した溝で、幅60cm~1m、深さ10cm強である。

瓦器椀・土師器皿・瓦質土器・須恵質土器が出土した。そのうち3点の瓦器椀を図化した。図化しなかった遺物もおおむね12世紀中葉~13世紀初頭の時期に含まれると考える。

115溝 東半部の中程(1G-1a)で検出した、東西方向の溝である。幅30~40cm、深さ約10cmで、建物5の南辺から2分の1間ほど離れたところに位置する。建物5の雨落溝と考えられる。

瓦器椀片が数個体分、土師器・瓦質土器・須恵質土器片が数点出土した。時期判断が可能な瓦器椀片より、遺構の帰属時期は13世紀後半に位置付けられる。この溝に近接する建物5の柱穴に含まれる遺物の時期も、これと一致することから推して、この溝は建物5と同時並存した可能性がある。

9土坑 (図120) 西半部(1G-5b)の南北方向溝が集中している部分で検出した、南北方向に長

い不整形な土坑である。長さは最大2.7m、幅は約1.1mで、深さは10cm前後と浅く、底部は凹凸がある。掘削されてからあまり時間を置かずに一気に埋まった状況が見うけられる。

土師質土器・瓦器碗の細片が10数点出土したが、いずれも細片だった。瓦器碗の口縁部片には、端部を直立気味に丸くおさめたものが2点、先細り気味に丸くおさめ、内面に幅1mm程度の沈線を施したものが2点みられた。時期判断の決め手に欠けるが、13世紀代のものとする。

283・284・10・12・3溝 (図120) 西半部の南北方向溝が集中している部分にあたる。これらの溝は方向が一致し、幅なども近似する。また埋土もおおむね単一の層で埋積していることから、おそらく耕作痕跡ととらえられる。

283・284溝から遺物は出土しなかった。10溝から土師器皿・瓦器碗・青磁器の破片が出土した。いずれも細片で時期判断の決め手に欠けるが、おそらく13世紀に含まれると考えられる。12溝から土師器皿が1点、3溝から土師質土器・瓦器の破片が少量出土した。時期を把握することはできなかった。

5落込 (図120) 西半部で検出した東西方向に長い不整形な落込である。土層断面図を見ると深さ10~30cm、幅1m前後の溝が複数切りあったものを1つの遺構として掘削したことがわかる。この落込の周囲でみられる南北方向の溝とはほぼ直行すること、掘削されてからあまり時間をおかず埋積したと考えられることから、これも耕作痕跡である可能性がある。

出土遺物は瓦器碗・土師器皿・須恵質土器・土師質土器・瓦質三足釜等が出土している。うち土師器皿1点を図化した。他の遺物はおそらく13世紀代に含まれるものとする。

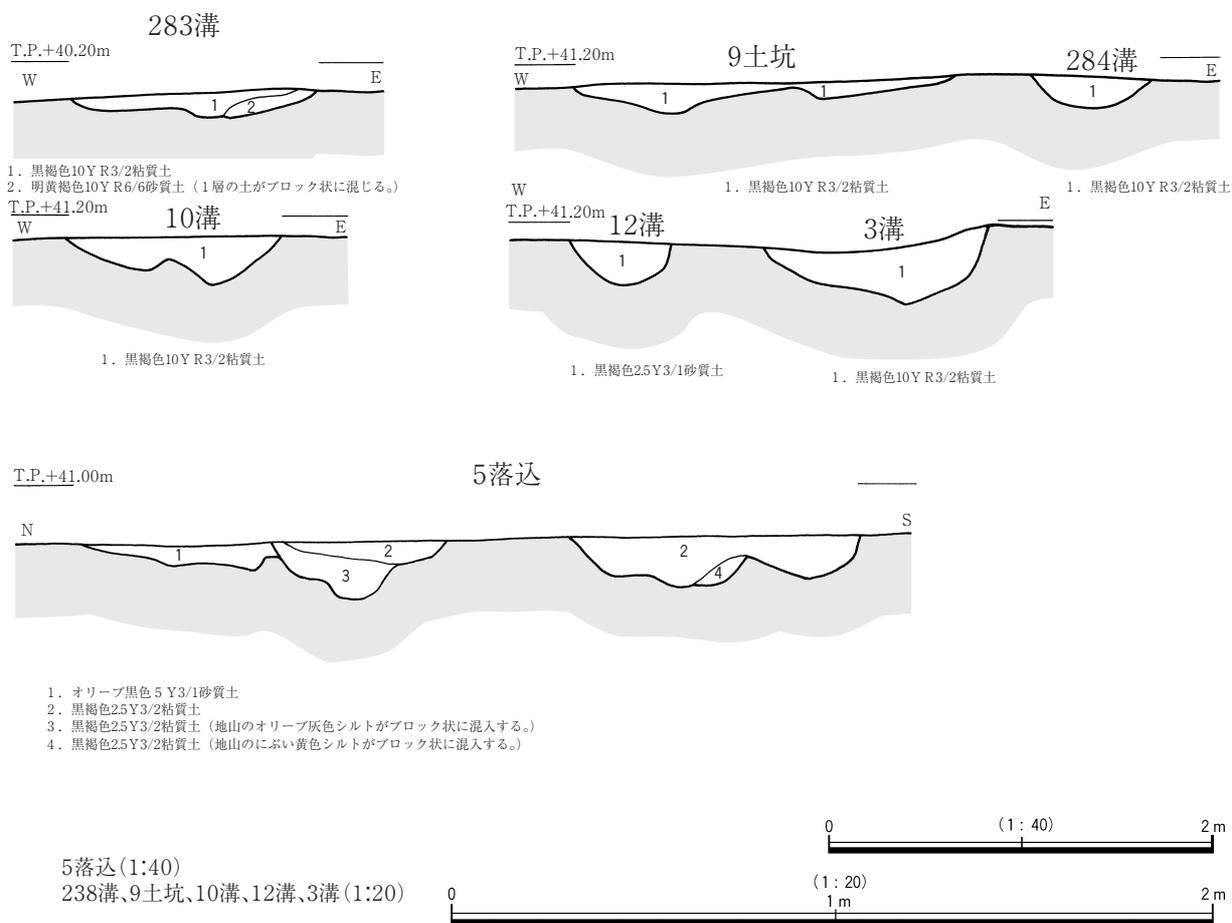
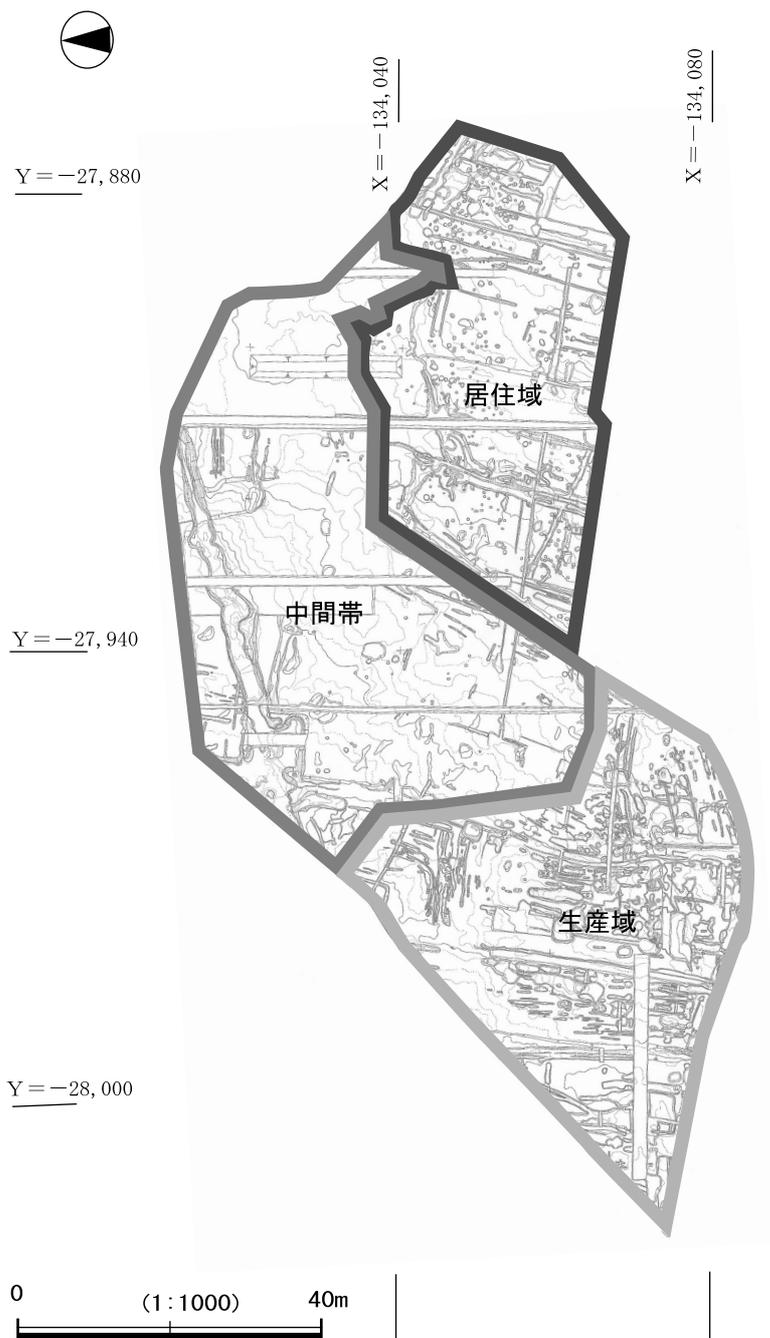


図120 有池遺跡03-1-2調査区 溝・土坑・落込 断面図

3. 4 調査区 (図122～124)

有池遺跡03-2 調査区を横断する2本の水路に挟まれた部分で、西側に6 調査区、北東側に3 調査区が隣接する。調査区の北西半部は、免除川の旧流路に起因するとみられる低地部にあたっており、5 調査区の水路際や2 調査区の西半部、6 調査区で検出した生産域に連なる。一方、4 調査区南東寄りの部分では、5 調査区からのびる微高地の一部がかかる (図121)。

微高地の落ち際の輪郭は、鳥瞰的に見れば免除川の流路に添うものとみられる。ただ北西端部の輪郭は、近世以降の水田区画に合致するため、水田造成に伴う整形や、その裾に配された水路によって改変



され、明確ではない。微高地上ではピットや掘立柱建物・土坑・溝等を検出した。低地部分に比べて遺物の出土量も多く、居住域と考えられる。ただ4 調査区で検出した掘立柱建物は、他の調査区のものに比べると小規模だったのに加え、建て替えや補修に伴う柱穴を伴わなかった。遺物の出土量も、1 調査区や5 調査区の居住域に比べれば少量にとどまることから、使用されたのは比較的短期間にとどまると考える。特に1 間×1 間規模の建物に関しては、住居というより作業小屋といったようなものを想定すべきかもしれない。

低地部分では水路・耕起痕や不整形土坑が多数検出され、生産域として土地利用がなされていたと考えられる。ただ242溝周辺や

図121 有池遺跡03-1-4 調査区 景観概念図



図122 有池遺跡03-1-4調査区 平面図(全体)

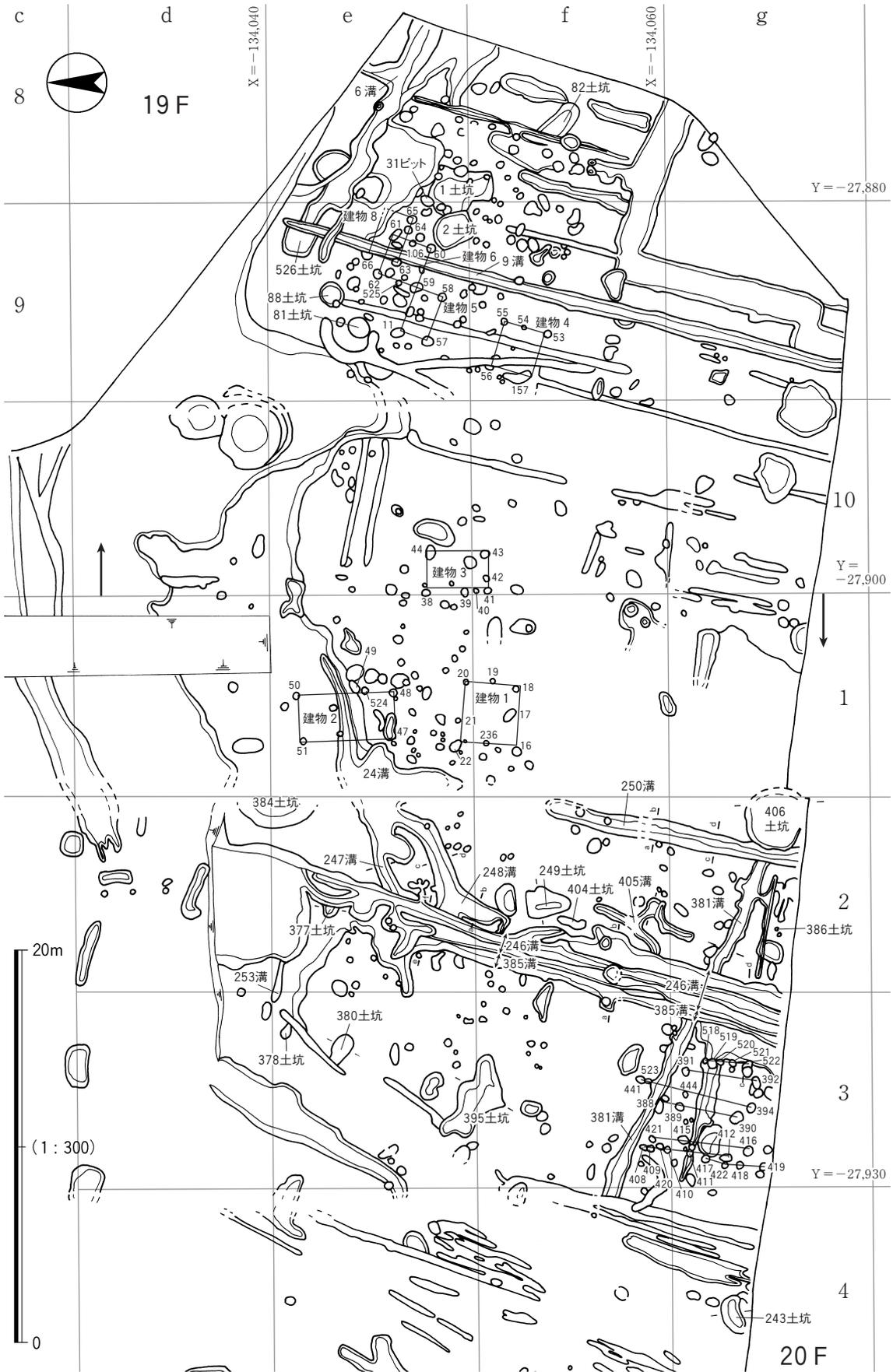


図123 有池遺跡03-1-4調査区 平面図 (部分拡大)

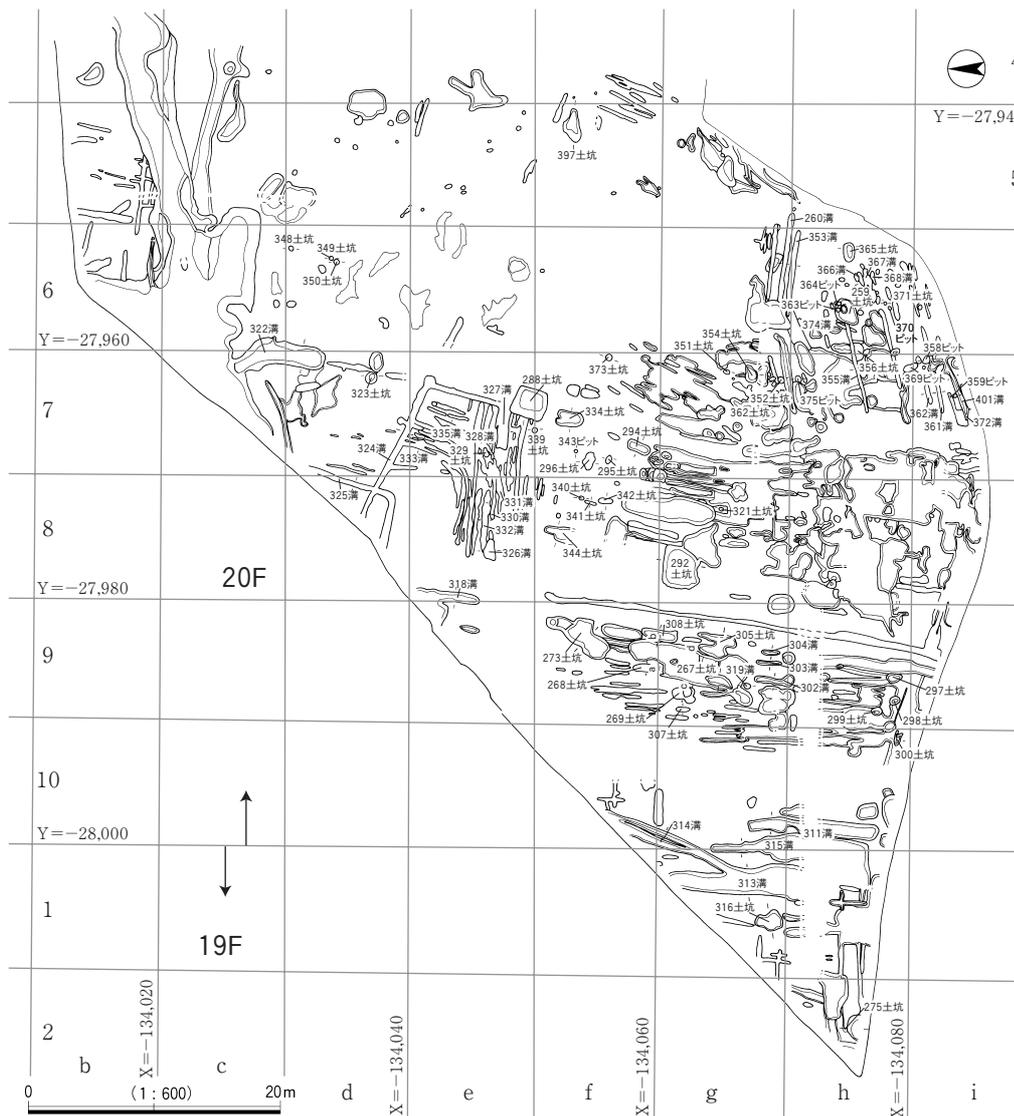


図124 有池遺跡03-1-4 調査区 平面図 (部分拡大)

調査区中央部では
 4 鋤溝があまり検出
 5 されず、土坑や
 ピット・風倒木痕
 が散在する状況が
 認められた。した
 がってこのエリア
 に関しては、生産
 域に含まれる可能
 性が高いものの、
 中間帯ととらえて
 おきたい。

鋤溝もしくは耕
 作痕をみると、ほ
 ぼ座標軸と平行す
 る方向を指向する
 ものと、そうでな
 いものとがみられ
 た。それらの時期
 差を明らかにする
 ことはできなかった
 が、座標軸に対
 して斜行するもの
 の中には、微地形
 に沿ってカーブす

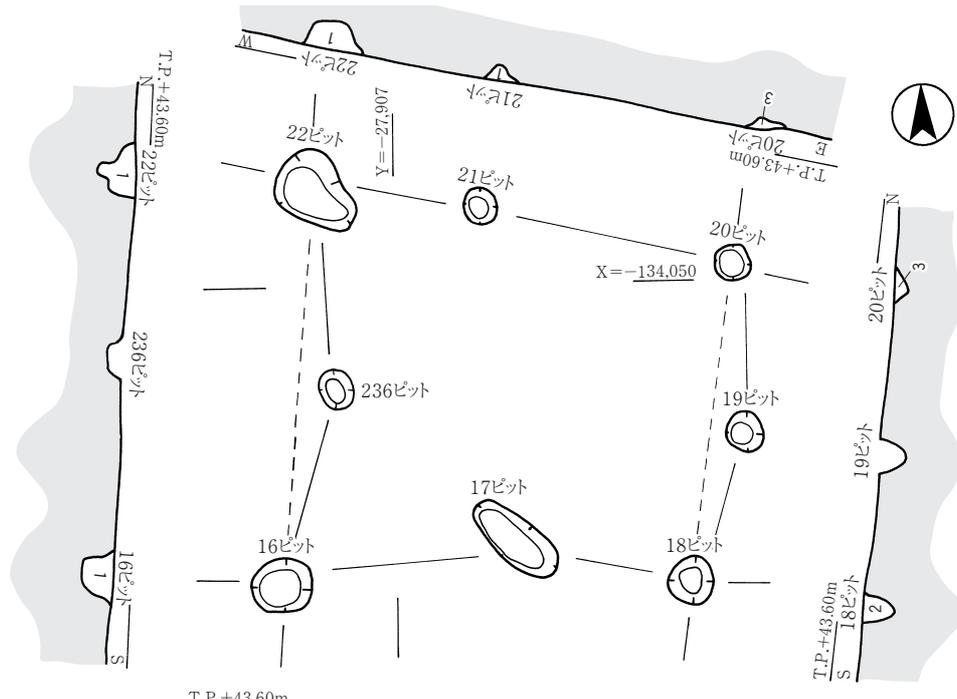
るものもみられる。有池遺跡02-1の調査では、耕作地の畝だてや区画が、周囲の微地形に合わせていた段階から、周囲の地割にあわせた方向性を踏襲した段階へと推移したことがわかった。同様の推移が有池遺跡03-1-4 調査区でもみられたと考える。

調査区の西端部分では耕作に伴うと見られる溝と併せて、それらを切って掘り込まれた、不整形の土坑もしくは落込を検出した。これらはおそらく粘土採掘坑と考えられる。

建物 1 (図125) 微高地の中央部分 (20F-1 f) で検出した、東西 2 間 (3.3m) × 南北 2 間 (2.9m) の掘立柱建物である。東西方向にやや長いことから東西棟と考えると、建物の主軸方向はW-4°-Nを指す。柱穴間は南北列で平均1.5m、東西列で平均1.7m、床面積は9.6㎡である。この建物は建物 2 の南側に隣接し、建物の方向軸はそれとほぼ直行する。また建物 1 の西辺が建物 2 の西辺の延長上に位置することから、両者には相関性が認められる。

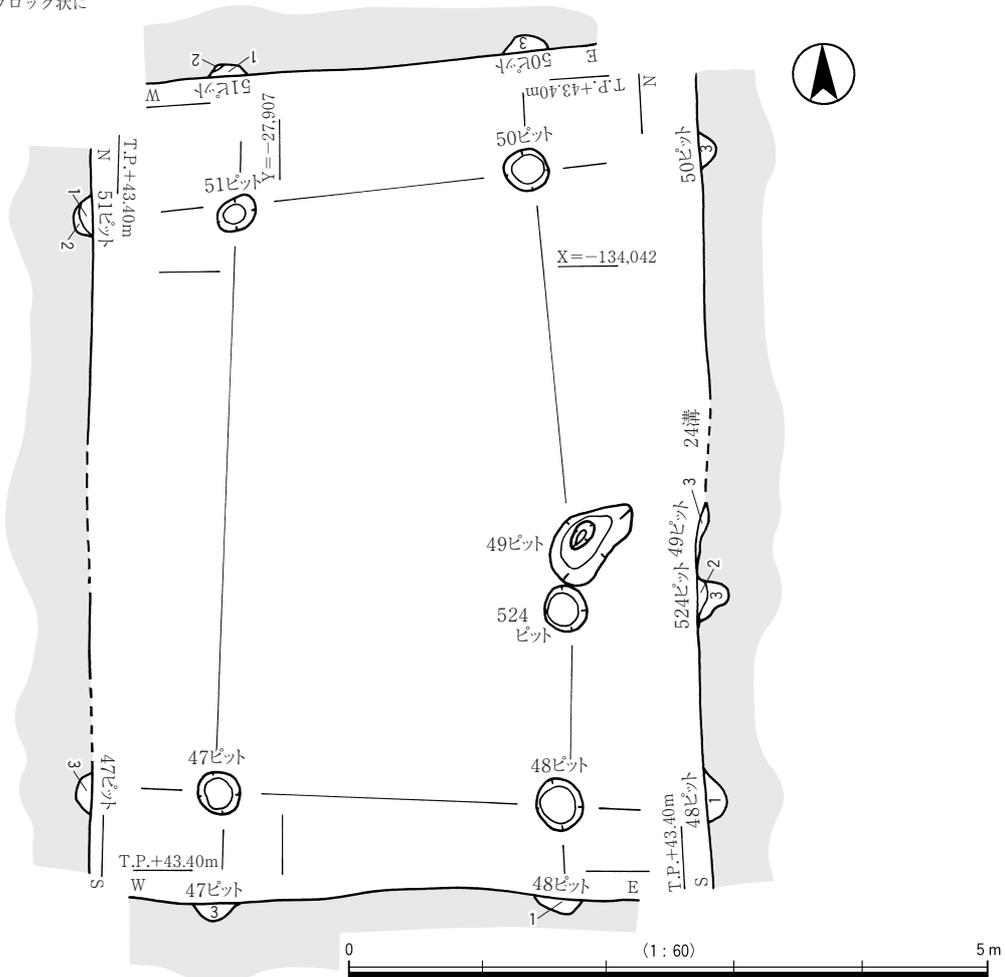
建物の東辺が西辺よりもやや短く、建物の北東隅と南東隅が鈍角ぎみなため、建物の平面形は台形気味である。また南辺中央のピットが北側に、東辺と西辺の中央ピットが西側に寄る傾向がある。建物の柱穴配置としてはいびつな印象を受けるが、それぞれのばらつきがまったくランダムなわけではなく、

建物1



1. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、白砂粒が入る)
2. 黒褐色10Y R3/2砂質土 (1の土と、地山の黄褐色砂質土が混ざり合う)
3. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (1の土と、ベースの黄褐色砂質土がブロック状に混入する)

建物2



1. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、白砂粒が入る)
2. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (1の土と、ベースの黄褐色砂質土がブロック状に混入する)
3. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細砂からなるベースの再堆積土)

図125 有池遺跡03-1-4調査区 建物1・2 平・断面図

特に南北方向の柱穴列においては中央ピットのずれ方に類似性が認められることから、建物の柱配置と認識した。ピットの直径は20～70cm、平面形はおおむね円形で、楕円形・瓢箪形が含まれる。ピットの深さはおおむね30cm前後で根石が置かれた柱穴はなかった。柱穴の断面形はU字形や隅丸のV字形である。遺物は16ピットから土師器片が1点出土したのみで、時期は判断できなかった。

建物 2 (図125) 微高地の中央部分 (20F-1e) で検出した。東西1間 (2.5m) ×南北2間 (4.9m) の南北棟で、建物の主軸方向はN-3°-Eを指す。柱穴間は南北列で平均2.6m、東西列で平均2.5m、床面積は9.6㎡である。建物の東辺が西辺よりもやや長く、南東隅が鋭角気味なのに対して北西隅が鈍角気味なため、平面形は台形気味である。建物西辺の中央ピットは247溝の形成とともに削平されたためか、検出できなかった。建物1の項で述べたように、建物2と建物1には相関性が認められる。

ピットはおおむね直径30cm前後の円形で、長軸75cmの楕円形のピットもある。ピットの深さは15～25cmと極めて浅く、断面形は皿形もしくは隅丸方形で、根石がおかれた柱穴はなかった。524ピットは49ピットと近接しており、両者の埋土は類似することから、524ピットに立てられた柱は、49ピットのそれに対して補助的に設けられた可能性がある。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

建物 3 (図126) 微高地の中央部分 (20F-10e・10f) で検出した。前述の建物1・2の東側にやや距離を置いて位置するが、建物の主軸方向がN-1.5°-Eと、前2者にほぼ平行もしくは直行することから、それらと相関性を有する可能性がある。基本的には東西1間 (2.1m) ×南北1間 (3.1m) の建物と考えられ、床面積は6.5㎡である。隅柱以外の柱穴は隅柱の補助もしくは補修のためのものと考えられる。建物の平面形は南西隅が鋭角気味なのに対して、南東隅が鈍角なため、ややいびつな印象を受ける。

ピットの平面形は直径がおおむね40cm前後の円形もしくは隅丸三角形で、長軸75cm・短軸50cmの楕円形のものが含まれる。ピットの深さは10～30cmと極めて浅く、断面形は皿形・U字形・隅丸V字形などがある。内部に根石が置かれた柱穴はなかった。小規模でややいびつではあるものの、建物1・2とあわせてこれらの建物が、4調査区で検出した建物の中では磁北に対する振れが少ない。加えて補修や補助を思わせる柱穴が伴うものの、建て替えをうかがわせる痕跡が見られない点も3者に共通する。なおいずれのピットからも遺物は出土しなかった。

建物 4 (図126) 微高地の東寄り (19F-9f) の部分で検出した。東西1間 (2.5m) ×南北2間 (2.2m) の東西棟で、建物の主軸方向はN-17°-Eを指す。柱穴間は東西列で平均2.5m、南北列で平均1.0m、床面積は5.5㎡である。建物の平面形は建物西辺が東辺よりやや短く、台形気味である。

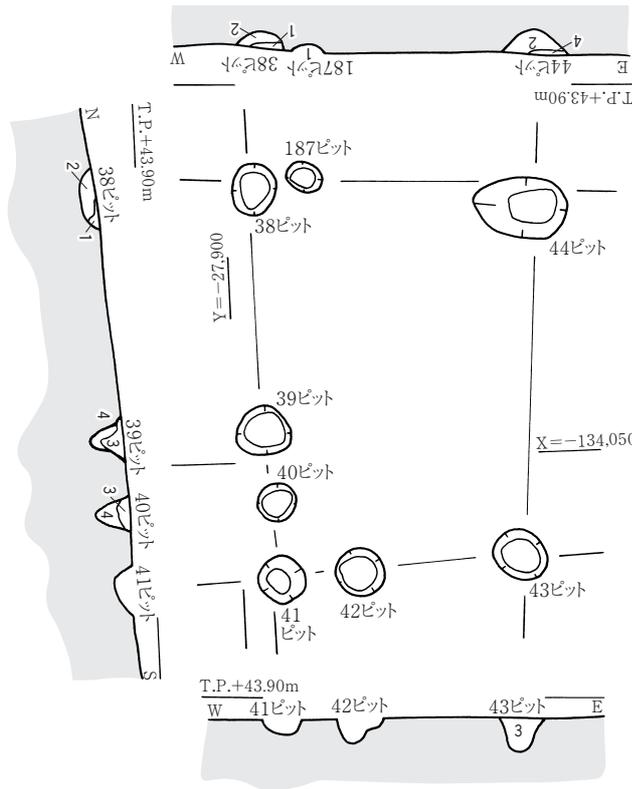
ピットはおおむね直径40cm前後の円形で、長軸1.4m、短軸50cmの長楕円形のピットが含まれる。157ピットがそれだが、柱の抜き取りによって掘方が変形した可能性が考えられる。またこのピットの北端が、南北列の中央ピットに対応する位置に達していることから、柱の抜き取りに伴って変形し、切合いを有する二つのピットを、一つの遺構として掘りあげた可能性がある。

ピットの深さは10～45cmで、南東隅のピットに向けて浅くなる傾向が認められる。ピットの断面形は皿形・U字形・隅丸方形がある。建物の規模が小さいこと、建物の主軸方向の類似から見て建物5～8との相関性をうかがうことができる。いずれのピットからも遺物は出土しなかった

建物 5 (図127) 微高地の東寄り (19F-9e) でかつ、ピットが集中する部分に位置する。建物の北東隅のピットが建物6の南西隅のピットと切りあっていること、2者の規模や建物の方向軸が類似することから、両者には相関関係が認められる。

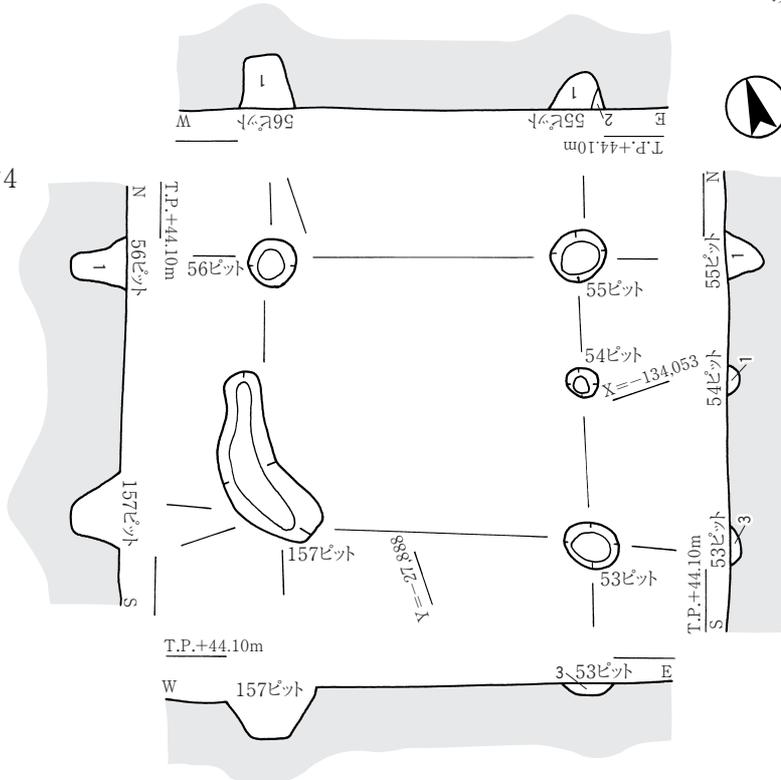
東西1間 (2.4m) ×南北1間 (1.5m) で建物の主軸方向はN-21°-Eを指し、床面積は3.6㎡であ

建物3



1. 黒褐色10Y R3/2砂質土 (pit埋土 1 と地山の黄褐色砂質土が混ざり合う)
2. にぶい黄褐色10Y R6/4砂質土 (中～粗砂が均一に混ざり合う)
3. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる粘質土と、中～粗砂がブロック状に混ざる)
4. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (2 に似た粘質土と、地山の黄褐色粘質土がブロック状に混ざる)

建物4

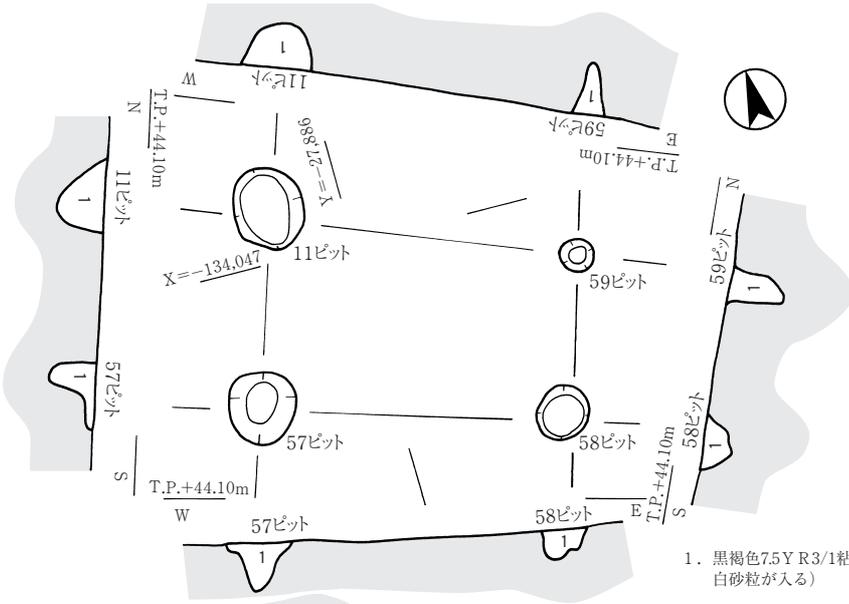


1. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、白砂粒が入る)
2. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (1 の土と、ベースの黄褐色砂質土がブロック状に混ざる)
3. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)



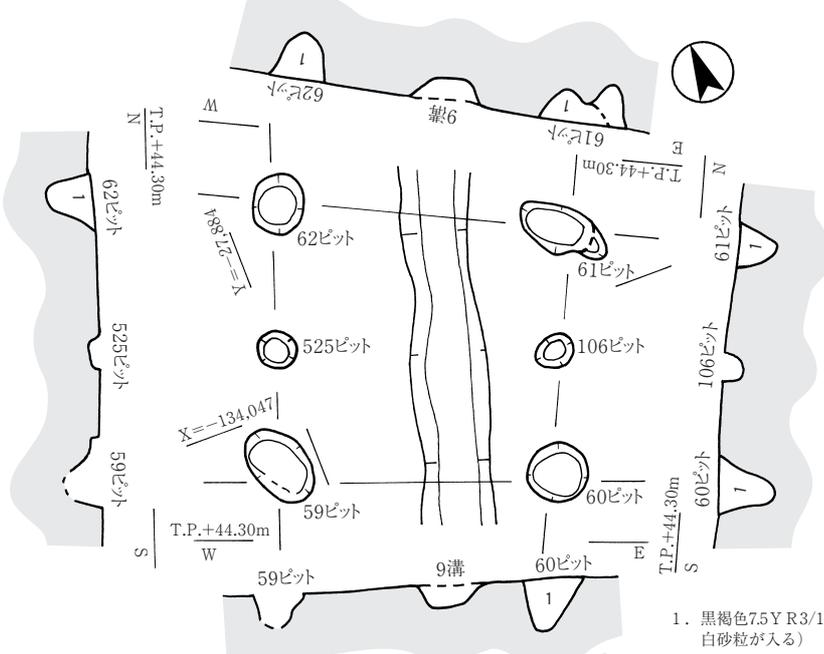
図126 有池遺跡03-1-4 調査区 建物 3・4 平・断面図

建物5



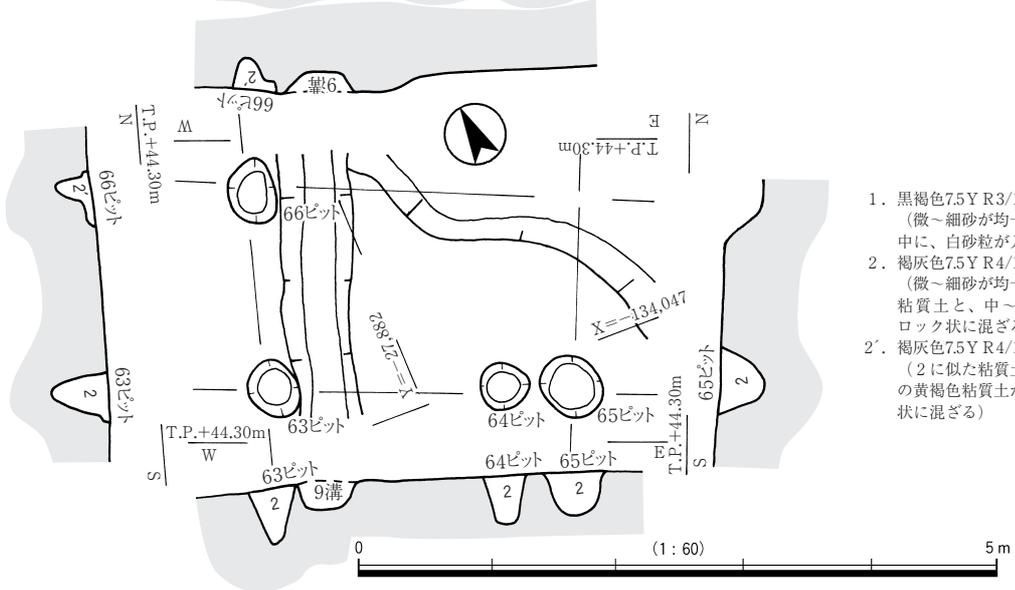
1. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、白砂粒が入る)

建物6



1. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、白砂粒が入る)

建物8



- 1. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、白砂粒が入る)
- 2. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる粘質土と、中～粗砂がブロック状に混ざる)
- 2'. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (2に似た粘質土と、地山の黄褐色粘質土がブロック状に混ざる)

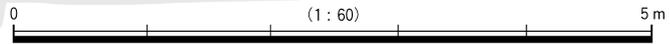


図127 有池遺跡03-1-4 調査区 建物5・6・8 平・断面図

る。建物東辺が西辺よりやや短いため平面形は台形気味である。ピットの直径は25～65cmで平面形は円形・楕円形からなる。ピットの深さは約20～45cmで断面形はU字形からなる。ピット埋土は単一で、各ピットとも共通する。柱根も認められなかったことから、建物の廃棄後に柱が引き抜かれた可能性がある。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

建物6 (図127) 微高地の東寄り (19F-9 e) の部分でかつ、ピットが集中する部分に位置する。前述したように建物5と何らかの相関関係を有することが伺える。また建物の方向軸や床面積が、建物8と近似する。東西1間 (2.2m) ×南北2間 (2.1m) だが南北列の1間の長さは東西列の1間の長さのほぼ2分の1にあたるため、平面形はほぼ正方形である。建物の主軸方向はN-22°-Eを指し、床面積は4.6㎡である。4隅のピットは直径40～80cmの円形もしくは楕円形だが、南北列中央のピットはそれらよりも小さく、直径30cm強の円形である。ピットの深さは30～40cmで断面形はU字形・隅丸のV字形・隅丸台形等である。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

建物8 (図127) 微高地上の東寄り (19F-9 e) の部分でかつ、ピットが集中する部分に位置する。前述したように、建物8と建物5・6とは相関関係が認められる。東西1間 (2.5m) ×南北1間 (1.6m) だが、平面形は東西方向に長い長方形で、建物5・6に比べてゆがみはすくない。北東隅のピットは落込が形成された際に削平されたと思われ、検出できなかった。建物の主軸方向はN-20°-E、床面積は4㎡である。ピットは平面形が35～50cmの円形もしくは楕円形で、深さは25～45cm、断面形はU字形・隅丸V字形からなる。64ピットは65ピットに近接して位置し、埋土も共通することから、後者に対して補助的に用いられた柱に起因するピットと判断した。

建物5・6・8の周囲にはこれらの建物の主軸方向と一致する溝を数条検出したが、それらはいずれも南北方向を指すとともに、これらの建物を囲むものは存在しない。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

柵 (図128) 微高地西寄り (20F-3 f・3 g) の部分に数条の柵が集中する。それらの主軸方向はN-8～15°-Eとやや幅があるものの、N-9°-Eあたりに集中する。主軸方向が近似する柵は、同一の掘立柱建物に含まれる可能性があるが、柱間や相互の位置関係を統一的にとらえられるものがなく、建物の存在は指摘し得なかった。

このピット列を検出した微高地西寄りの部分は、概して遺構の検出密度が低く、遺物の出土量も少ないことから、居住域の周縁部にあたっているのではないかと考える。なおこれらピット列の主軸方向と一致する建物は、4調査区では検出しなかった。ピットは直径が30～80cmの円形もしくは楕円形で、深さは20cm前後ときわめて浅い。ピット断面の形状は皿形もしくはU字形である。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

82土坑 (図129) 微高地東寄りの部分 (19F-8 f) で検出した、楕円形の土坑である。遺構の西端部を溝で切られているため、正確な大きさは示せないが、短軸約1m、長軸は2.5m程度とみられる。深さ約60cmで、断面形は隅丸のV字形である。遺物は出土しなかった。

31ピット 微高地東寄り (19F-8 e・9 e) の遺構密集部分で検出した。長軸75cm、短軸50cmの楕円形の土坑で、北東から南西方向に長軸方向を取る。1土坑の北端を切るように位置し、深さは33cmである。

埋土より東播系の須恵器鉢と土師器が計3点出土し、前者を図化した。鉢の口縁部の形状から見て、遺物は12世紀末～13世紀初頭の所産とみられる。

1. 黄灰色2.5Y4/1粘質土（細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む）
2. 黄灰色2.5Y5/1砂質土（中～粗砂が均一に混ざるものを主として、細砂を若干含む。黄灰色粘質土ブロックが入る）
3. 黒褐色2.5Y3/1粘質土（微～細砂が均一に混ざるものを主として、中砂が若干混ざる）
4. 暗黄灰色2.5Y5/2砂質土（細～中砂が均一に混ざる）
5. 灰黄褐色10YR4/2粘質土（微～細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロックが若干入る）
6. にぶい黄褐色10YR4/3粘質土（微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫が混ざる）
7. 黒褐色10YR3/1粘質土（細砂と粗砂が混ざり合う。黄灰色粘質土ブロックと、直径5mm大の円礫を含む）
8. 灰色5Y6/1砂質土（中～粗砂が均一に混ざり合う。黒褐色粘質土ブロックが入る）
9. 灰黄褐色2.5Y6/2砂質土（中～粗砂が均一に混ざり合う。地山の浅黄色砂質土の再堆積層を主として、黒褐色粘質土ブロックが入る）
10. 黒褐色10YR3/1粘質土（細砂と粗砂が混ざりあう）
11. 褐灰色10YR4/1粘質土（微砂と細砂が混ざり合う）

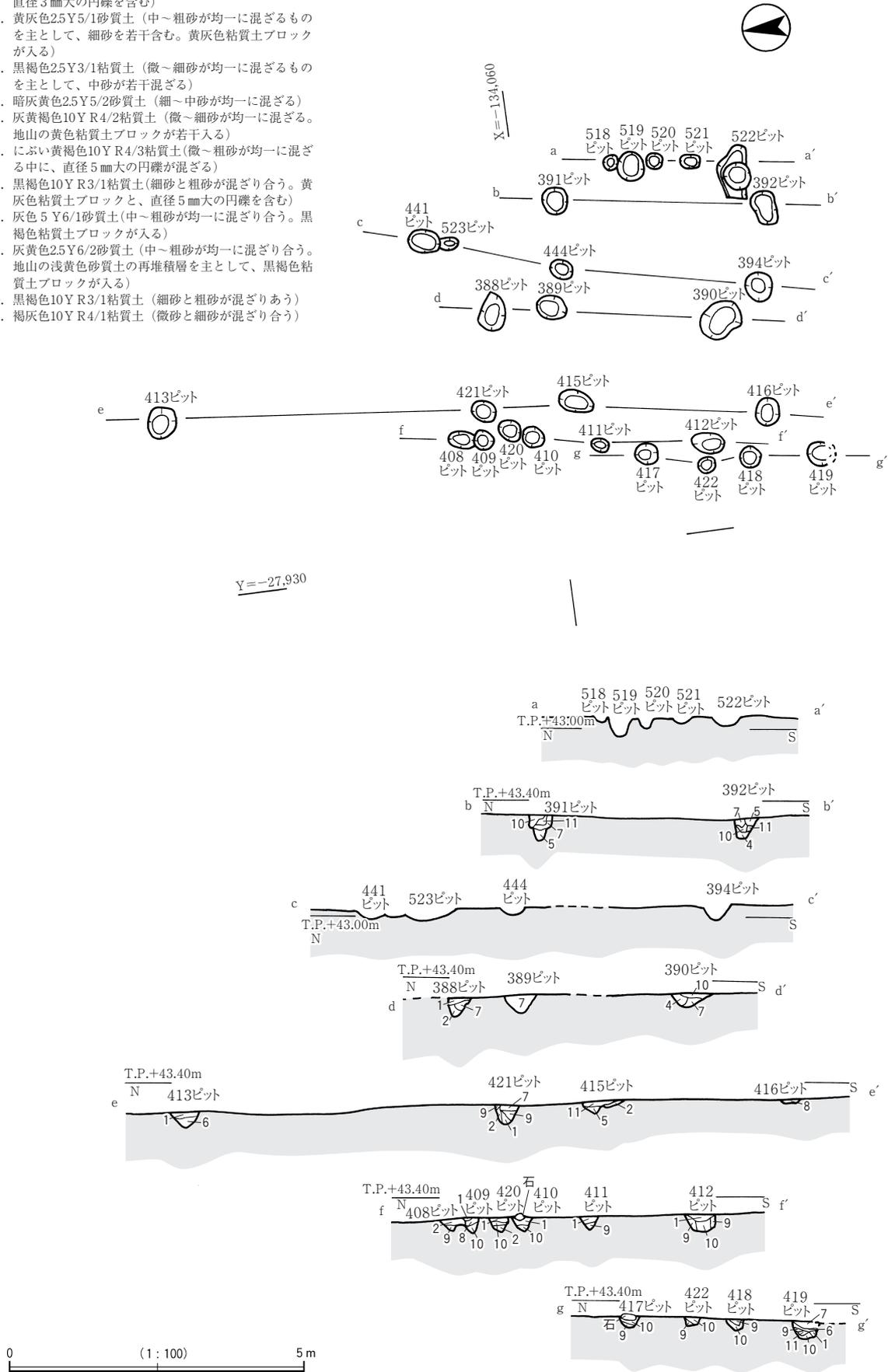
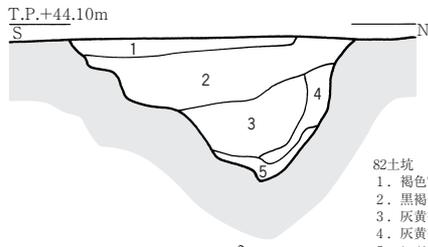
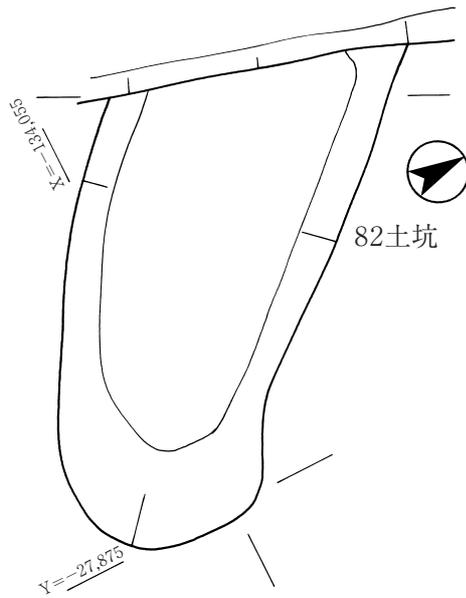
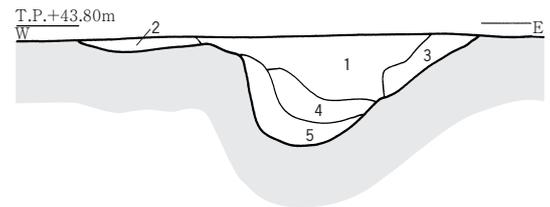
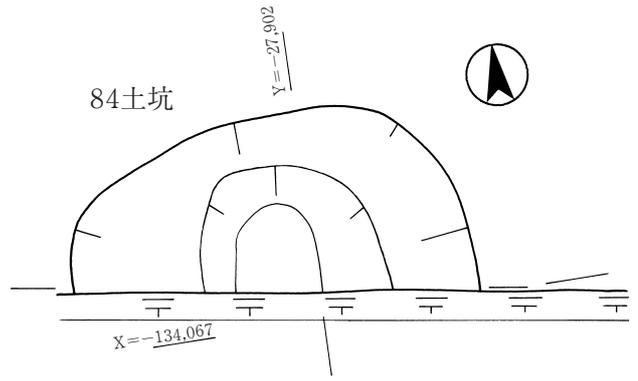


図128 有池遺跡03-1-4 調査区 柵 平・断面図



82土坑

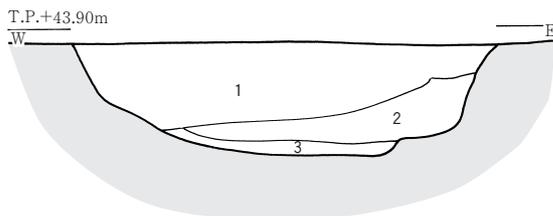
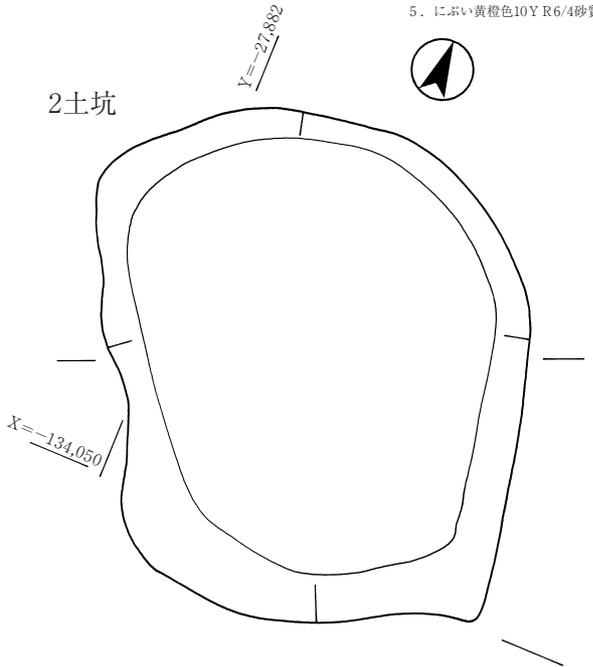
1. 褐色7.5Y R4/3砂質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む)
2. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の円礫が入る)
3. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。粗砂含む)
4. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (褐灰色粘質土と、地山の黄褐色砂質土がブロック状に混ざる)
5. におい黄褐色10Y R6/4砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積土)



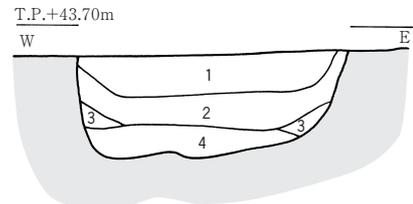
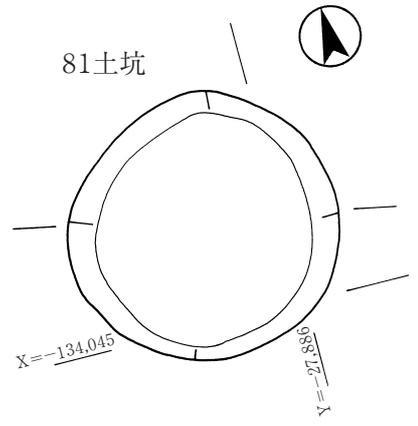
84土坑

1. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
2. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
3. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざるにおい黄褐色砂質土と、褐灰色粘質土がブロック状に混ざる)
4. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
5. 灰黄褐色10Y R4/2 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)。3に似るが、それより褐灰色粘質土ブロックの含有量が多い)

2土坑



81土坑



1. におい褐色7.5Y R5/3粘質土 (砂～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る。マンガン斑文有り)
2. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (細～粗砂均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が入る)
3. におい黄褐色10Y R6/4砂質土 (中～粗砂からなる。地山の再堆積土)
4. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる)

1. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる)
2. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大以下の円礫が混ざる。1に似るが円礫の含有量がそれより少なく、僅かに粘性有)
3. 黒褐色7.5Y R3/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。2に似るが粗砂の含有量はそれより少ない)

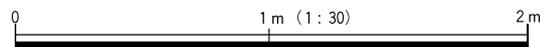


図129 有池遺跡03-1-4 調査区 土坑 平・断面図

84土坑（図129） 微高地の中央部南端（20F－1 g）に位置する円形の土坑である。遺構の南半分を側溝掘削時に削平したため、正確に大きさを計測することはできないが、残存部分の形状から見ると、平面形は長軸約1 m、短軸70cmの楕円形で、深さ45cm程度の円形の土坑の周縁に20～50cm幅の浅いステップがとりついたような形状とみられる。底部からの壁面の立ち上がりは直線的である。遺物は出土しなかった。

2土坑（図129） 微高地東半（19F－9 e・9 f）の遺構密集部分に位置する、隅丸長方形の土坑である。長辺2 m、短辺1.7m、深さ50cm弱で、わずかに丸みをおびた底部から直立気味に壁面が立ち上がる。後述する1土坑はこの遺構の東縁を切っている。したがって2土坑が機能を失ってから、それに替わるものとして1土坑が掘削された可能性が考えられる。

瓦器・土師器皿・東播系の須恵器鉢・土師質土器が出土している。後述する1土坑ほど出土量は多くなく、その4分の1弱である。土師器皿は口径9 cm弱、高さ1.6cmで底部から湾曲しながら口縁部が立ち上がる。東播系の須恵器鉢は口縁端部がほとんど拡張しない。瓦器碗内面のミガキは4～5本／1 cmの密度で施されている。遺物が細片であるため確定はできないが、1土坑出土遺物とあまり時期差はないと考える。

1土坑 微高地東半（19F－8 e・9 e・8 f）の遺構密集部分に位置し、前述の2土坑の東端を切って位置する。この土坑は最大長3.2m、最大幅3 m弱、深さ30cm前後で、平面形が瓢箪形である。直径2 m前後の円形土坑と、一辺1.5mの隅丸正方形の土坑が連結したような形状であることから、切りあう二つの土坑を一つの遺構として掘削した可能性もある。この遺構の底部で複数のピットを検出した。

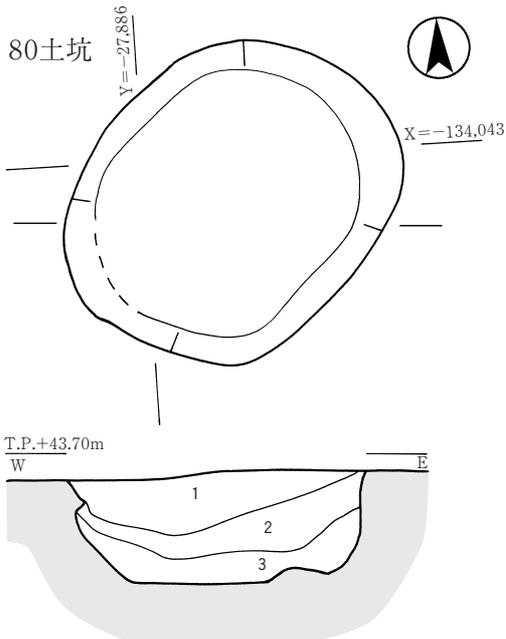
遺物は瓦器碗・土師器皿・瓦質羽釜・土師質羽釜・東播系須恵器鉢・常滑焼甕・須恵器の破片等が数十点出土した。遺物は破片だったがあまり摩滅しておらず、中でも全体の形状がわかる瓦器碗を図化した。図化しなかった瓦器碗に関してみても、高台や口縁端部の形状・ミガキの状態からみて12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。土師器皿は口径8.5cmで平坦な底部から湾曲しながら外方に短く口縁部が立ち上がる。これらのことから、1土坑出土遺物は、おおむね時間的な斉一性が高いといえる。

81土坑（図129） 微高地東半（19F－9 e）の遺構密集部北縁に位置する、直径1 m強の整円形の土坑である。平坦な底面から直立気味に壁面が立ち上がり、深さは40cmである。地盤が免除川に向けて下がる付近、言い換えれば微高地の縁辺に位置している。この遺構の北東側にはこれと規模や形状の似た80土坑がある。遺物は出土しなかった。

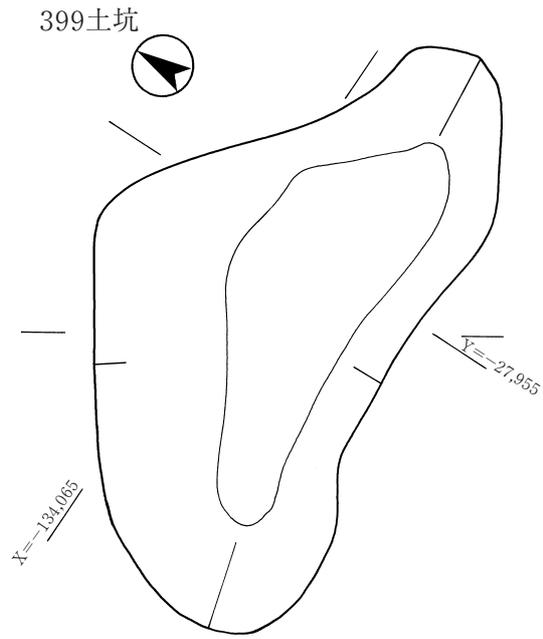
80土坑（図130） 微高地東半（19F－9 e）の遺構密集部北縁に位置する、長軸1.45m、短軸1.1mの楕円形土坑で、平坦な底面から直立気味に壁面が立ち上がり、深さは30cmである。81土坑の項で述べているように、場所が近接していること、遺構の形態が似ていることから両者は相関関係を有する可能性がある。遺物は出土しなかった。

72土坑 調査区東寄り（19F－10 d）の低地部分で検出したが、微高地の落ち際に位置する。長軸3.4m、短軸3.1mの楕円気味の円形で、深さは30cm前後である。この土坑より一回り小さい73土坑を切っている。埋土は中世耕作土の最下層に近似していることから、耕地造成の直後に形成され、比較的短時間のうちに埋まったのではないかと考える。

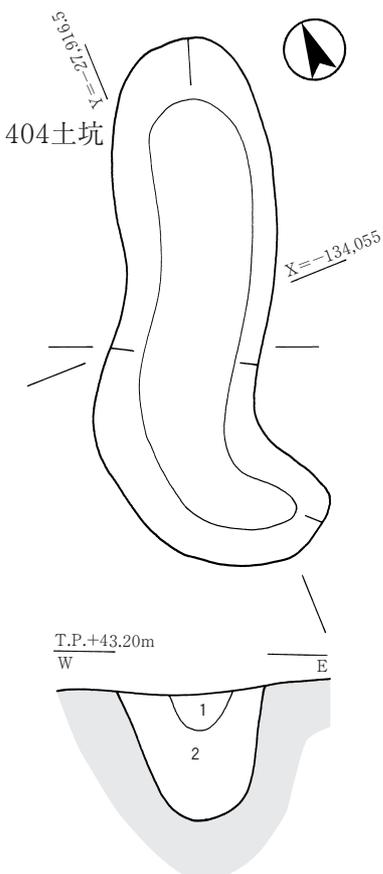
出土土器は瓦器・土師器皿・瓦質土器・土師質土器・陶器と多岐におよぶが、細片が大半を占める。比較的残存状態が良好な瓦器碗・瓦器皿・土師器皿を図化した。東播系の須恵器鉢は口縁端部がやや上方に拡張する傾向が認められる。土師器皿はやや厚手で底部から口縁部への境がゆるやかに湾曲するも



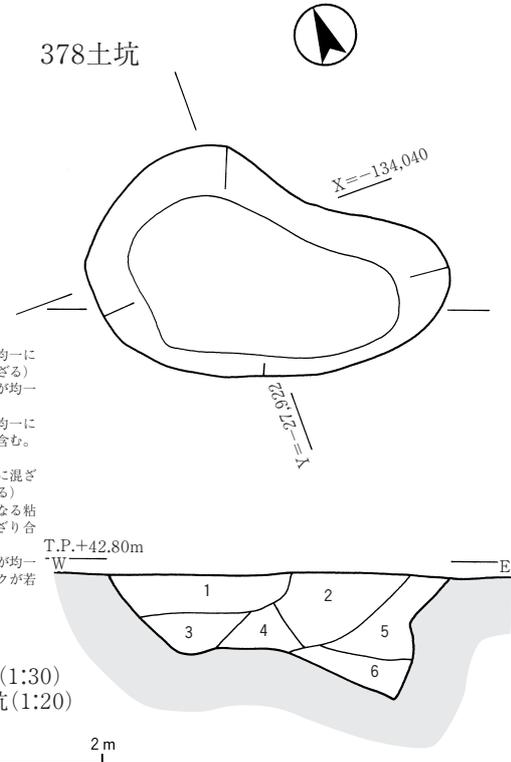
1. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる)
2. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる。1に似るが円礫の含有量がそれより少なく、僅かに粘性有)
3. 黒褐色7.5Y R3/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。2に似るが粗砂の含有量はそれより少ない)



1. 黒褐色2.5Y3/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざるものを主として、中砂が若干入る)
2. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロックが若干入る)
3. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微砂と粗砂が混ざり合う)
4. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (細砂と粗砂が混ざり合う)



1. 黒褐色10Y R3/2砂質土 (細砂に直径1～3mm大の礫が混ざる)
2. 黒色10Y R2/1砂質土 (細砂に直径5mm大の礫が混ざる) と、暗灰黄色2.5Y4/2砂質土 (細砂と3mm大の礫が混ざり合う) が斑状に混ざり合う



1. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が混ざる)
2. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる)
3. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (中～粗砂が均一に混ざるものを主として、細砂を若干含む。黄色粘質土ブロックが入る)
4. 灰色5Y6/1砂質土 (中～粗砂が均一に混ざり合う。黒褐色粘質土ブロックが入る)
5. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～細砂空なる粘質土と、粗砂とがブロック状に混ざり合う)
6. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロックが若干入る)

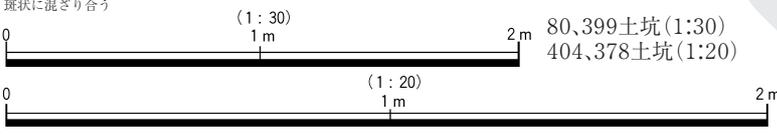


図130 有池遺跡03-1-4 調査区 土坑 平・断面図

のと、薄手で平坦な底部から口縁部が屈曲しながら外方に立ち上がるものの2者を認めた。これらのことから出土した遺物は12世紀後半～13世紀後半に含まれると考える。

73土坑 調査区東寄り（19F-10d・10e）の低地部分で検出したが、微高地の落ち際に位置し、72土坑に切られている。長軸2.8m、短軸2.3m、深さ40cm弱の楕円形の土坑である。72土坑に後続して形成された遺構だが両者の土質は比較的近似しており、こちらも比較的短時間のうちに埋積したとみられる。

埋土より瓦器椀3点と土師器皿1点が出土した。前者に関しては全体の器形がわかるもののみを図化した。図化しなかったものも同タイプの遺物と考えられる。したがって73土坑出土遺物は13世紀後半の所産とみられる。

384土坑 微高地西半（20F-2d・2e）の北寄りの部分で検出した。遺構の一部を側溝掘削時に削平してしまったため全体の形状は不明だが、長軸3m程度、短軸1.5m程度の長楕円形とみられる。

瓦器・土師器皿・瓦質土器・東播系の須恵器鉢が出土しており、その中で全体の形状がわかる瓦器椀と瓦器皿を図化した。図化しなかった遺物に関してもそれと同様の形態的特徴が認められることから、出土遺物の時期は13世紀前半代にままとみられる。

386土坑 微高地西半（20F-2g）の南寄りの部分で検出した、直径20cmの円形土坑で、深さは5cmと極めて浅い。前述したピット列の西側にあたり、この遺構の周囲にも数基のピットを検出したが、それぞれの位置関係には特に規則性が認められなかった。出土した瓦器椀はおそらく12世紀末～13世紀初頭のものと思われる。

399土坑（図130） 調査区の中央部南端（20F-5g）の低地部で、微高地寄りの部分で検出した。長軸2.5m、短軸1.3mの隅丸三角形気味の楕円形土坑である。深さ60cmで断面形は逆三角形である。遺物は出土しなかった。

404土坑（図130） 微高地東半部（20F-2f）で、南北方向を指向する246溝の東肩付近で検出した、「し」の字形の長楕円土坑である。長軸は約1.4m、短軸約40cm、深さ70cm弱で、断面形はU字形である。246溝と385溝の近辺には不定形な土坑が複数散在しており、この土坑の埋土はそれらの遺構の埋土と共通する。遺構埋土は有機物の含有量が多く、黒色化が顕著で、粘性はあるが締まった感じは弱い。風倒木痕と判断した土坑の埋土に似ているが、それらが地山に近い部分で黒色土がにじんだように漸移するのに対し、この遺構では埋土と地山の境目が明瞭な点が相違する。なお遺構埋土より遺物は出土しなかった。

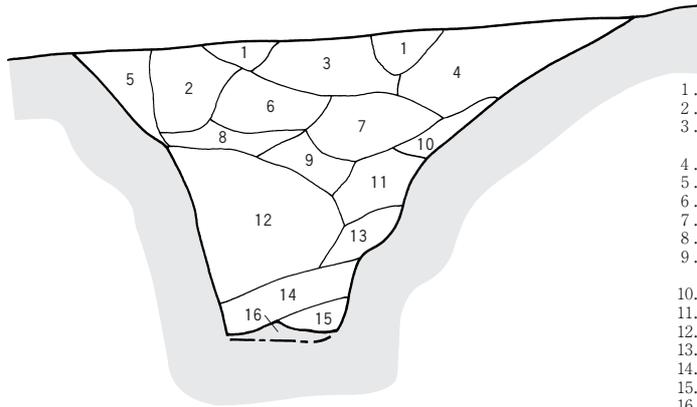
378土坑（図130） 微高地東半部（20F-3e）でかつ、微高地の縁辺部で検出した、長軸90cm、短軸は最大で60cmの瓢箪形の楕円形土坑である。やや平坦な底部から壁面が直立気味に立ち上がり、深さは35cmである。遺構検出時には明確な切り合い関係を認識しなかったが、埋土の土層断面を観察すると、直径50cm前後の断面V字形の土坑が、直径80cm弱の断面皿形の土坑に切られているものを、ひとまとめに掘削した可能性がある。埋土から瓦器片が1点出土したが、細片のため時期は不明である。

249土坑（図131） 微高地東半部（20F-2f）で、南北方向を指向する246溝の東肩付近で検出した。したがって前述した404土坑とも近接する位置にある。最大長2.1m、最大幅1.6mの隅丸方形ぎみの不定形土坑である。ほぼ平坦な底面から壁面が外方に直線的に立ち上がる。深さは1.15mで断面形は逆台形である。埋土は黒色化が顕著で風倒木痕の埋土に類似するが、風倒木痕の土層断面とは異なり、地山との境が明瞭である。埋土から出土した土師質羽釜の破片は、おそらく13世紀代までのものと考えられるが、時期判断の決め手に欠けるものである。

T.P.+43.40m
W

249土坑

E

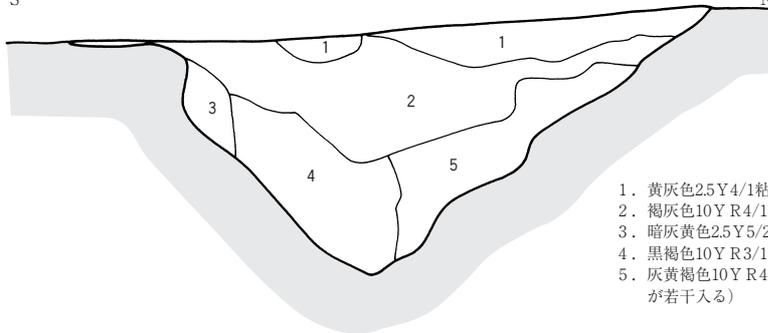


1. 暗褐色10Y R3/3砂質土 (細砂に直径3mm大の礫が混ざる)
2. 黒褐色10Y R2/3砂質土 (微砂に直径3mm大の礫が混ざる)
3. 暗褐色10Y R3/3砂質土 (微砂に直径3mm大の礫が混ざる) と、黒褐色2.5Y3/2砂質土 (微砂に直径3mm大の礫が混ざる) が斑状に混ざる
4. 黒褐色10Y R2/3砂質土 (細砂に直径3mm大の礫が混ざる)
5. 暗褐色10Y R3/3砂質土 (細砂に直径3mm大の礫が混ざる)
6. 黒褐色10Y R3/2砂質土 (細砂に直径3mm大の礫が混ざる)
7. 黒褐色10Y R3/3砂質土 (微砂に直径3mm大の礫が混ざる)
8. 黒色10Y R2/1砂質土 (微砂)
9. 黒褐色10Y R3/2砂質土 (細砂に直径3mm大の礫が混ざる) と、暗褐色10Y R3/3砂質土 (細砂に直径3mm大の礫が混ざる) が斑状に混ざる
10. 黒褐色10Y R3/2砂質土 (細砂直径5mm大の礫が混ざる)
11. 黒褐色10Y R2/2砂質土 (細砂直径5mm大の礫が混ざる)
12. 黒褐色10Y R3/2砂質土 (細砂に直径5mm大の礫が混ざる)
13. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (粗砂に直径5mm大の礫が混ざる)
14. 黒色10Y R2/1砂質土 (中砂)
15. 黒褐色10Y R3/1砂質土 (粗砂)
16. オリブ褐色2.5Y4/3砂質土 (地山)

T.P.+43.00m
S

395土坑

N

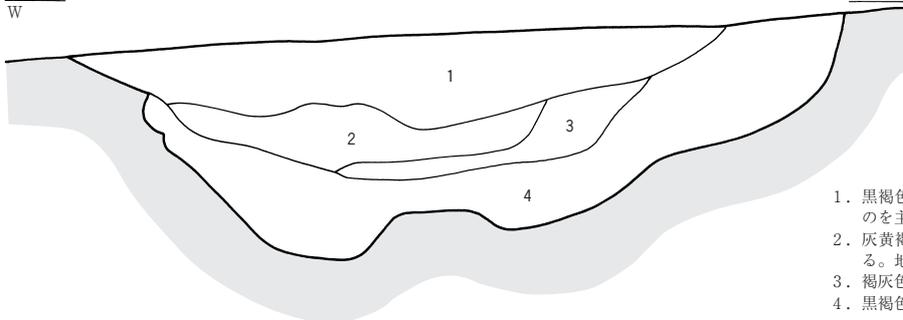


1. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (細~粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む)
2. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微砂と粗砂が混ざり合う)
3. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土 (細~中砂が均一に混ざる)
4. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (細砂と粗砂が混ざり合う)
5. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微~細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロックが若干入る)

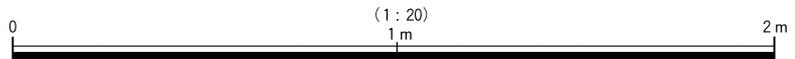
T.P.+42.50m
W

397土坑

E



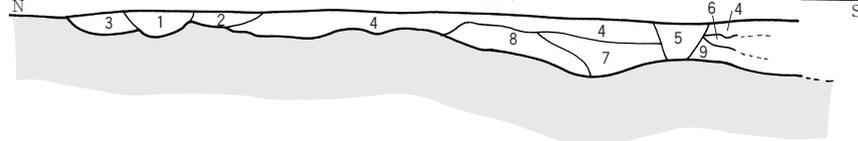
1. 黒褐色2.5Y3/1粘質土 (微~細砂が均一に混ざるものを主として、中砂が若干入る)
2. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (微~細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロックが若干入る)
3. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微砂と粗砂が混ざり合う)
4. 黒褐色10Y R3/1粘質土 (細砂と粗砂が混ざり合う)



T.P.+43.50m
N

406土坑

S



1. 暗褐色10Y R3/3砂質土 (微砂に直径5mm大の礫が混ざる)
2. 黄褐色10Y R5/4砂質土 (粗砂に直径3~5mm大の礫が混ざる)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土 (細砂に直径3mm大の礫が混ざる)
4. 黒褐色10Y R2/3砂質土 (微砂に直径3~10mm大の礫が混ざる) に、暗褐色10Y R3/3砂質土 (微砂に直径3~10mm大の礫が混ざる) がブロック状に混ざる
5. 黒褐色10Y R2/3砂質土 (微砂) と、黒色10Y R2/1砂質土 (微砂) がブロック状に混ざる
6. 黄褐色2.5Y5/4砂質土 (細砂に直径3mm大の礫が混ざり合う)
7. 黄褐色10Y R5/6砂質土 (細砂と直径3mm大の礫が混ざり合う) と、黒褐色10Y R2/3砂質土 (細砂) と、黄褐色2.5Y5/4砂質土 (粗砂) がブロック状に混ざり合う。炭素を含む
8. 黒褐色10Y R3/2砂質土 (細砂)

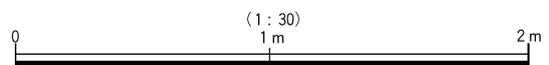


図131 有池遺跡03-1-4調査区 土坑 断面図

395土坑（図131） 微高地東寄り（20F-3 e・3 f）の縁辺部に位置する、不定形な土坑である。大きさは最大長4.7m、最大幅2.5mである。深さ95cmで断面V字形である。遺物は出土しなかった。

397土坑（図131） 調査区の中央部分（20F-5 f）で検出した、最大長3.1m、最大幅1.3mの不定形土坑である。底部には凹凸が顕著で、最深部で85cmを図る。壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土から須恵器の細片が1点出土したが、時期は不明である。

406土坑（図131） 微高地東半（20F-2 g）の南端部で検出した、直径3 m程度の浅い円形の土坑である。深さは最深で20cm強、断面形は皿形である。瓦器の細片1点が出土した。時期は不明である。

360土坑（図132） 調査区の西半部（20F-6 g）で検出した。長軸1.8m、短軸90cm、深さ50cm弱で、隅丸長方形ぎみの楕円形土坑である。南北方向の耕作痕とみられる溝で切られている。遺物は出土しなかった。

312土坑（図132） 調査区西寄り（20F-10 h）の低地部分で検出した、長辺1.8cm、短辺1.3cmの隅丸長方形の土坑である。深さは20cm強と浅く、断面形は皿形である。遺物は出土しなかった。

83土坑（図132） 調査区微高地東寄り（19F-10 g）の部分で検出した、長軸2.4m、短軸約2 mの隅丸台形状の不整形の土坑である。深さは最深部で30cm弱と浅く、底部は凹凸が著しい。遺物は出土しなかった。

316土坑（図133） 調査区西端（1 F-1 g）の低地部に位置する。平面形は長さ約2 m、短幅約1.0m、長幅1.4mの南北に長い瓢箪形である。断面は皿形で若干凹凸し、深さは約20cmである。

この遺構の東側には南北方向を指向する複数の溝が並んでいる。この遺構も、その北側に位置する南北方向の溝と同様の経緯で成立した可能性がある。遺物は出土しなかった。

306土坑（図133） 調査区西端（20F-9 g）の低地部に位置する、南北に細長い土坑で、不整形な267溝の底面で検出した。平面形は長軸2.4m、短軸約1.8mの不定形である。断面は底部に若干凹凸がみられるU字形を呈し、深さは約10cmである。遺物は出土しなかった。

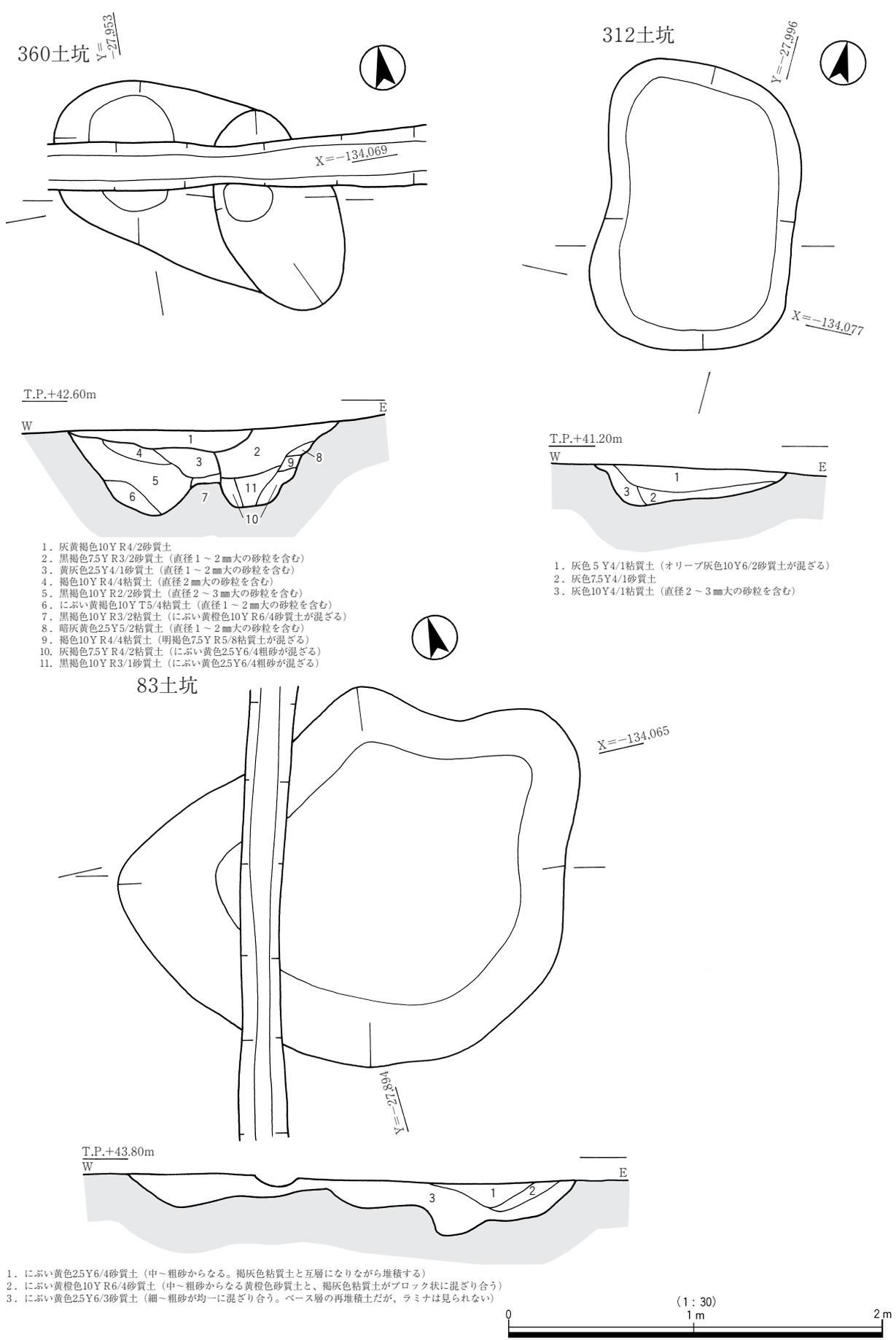
307土坑（図133） 調査区西端（20F-9 g）の低地部に位置する。平面形は長さ約1.2m、幅約20cmの溝状である。断面はU字形を呈し、深さは約5 cmと極めて浅い。この遺構の周辺にはこの遺構と同様に南北方向に細長い長楕円形の土坑が複数認められる。これらの遺構から出土した遺物は少量で、かつ細片で摩滅を受けている。おそらく鋤溝の痕跡だろう。

377土坑（図133） 微高地西半の北寄り（20F-2 e）の部分で検出した。遺構の東端を溝が切っているため正確な大きさはわからないが、直径80cm程度の円形の土坑とみられる。深さは約30cmで瓦器の破片が3点出土した。いずれも細片で時期は不明である。

319土坑（図133） 調査区西端（20F-9 g）の低地部で、鋤溝の痕跡と見られる幅20~30cmの溝もしくは長楕円形土坑が密集する部分で検出した。長軸60cm、短軸50cm弱の楕円形土坑である。断面はU字形を呈し、深さは約19cmである。遺物は出土しなかった。

373土坑（図133） 調査区西寄り（20F-6 f・7 f）の低地部で検出した。直径約50cmの円形で、断面はU字形を呈し、深さは約20cmである。遺物は出土しなかった。

364ピット（図133） 調査区中央（20F-6 h）の低地部で、259土坑の底部で検出した土坑である。平面形は、径約20cmの円形である。断面はU字形を呈し、深さは約15cmである。このピットの周辺には数基のピットが散在するが、それらの配置から規則性を読み取ることはできなかった。遺物は出土しなかった。



360土坑 Y=-27.353

312土坑 Y=-27.996

T.P.+42.60m

T.P.+41.20m

1. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土
2. 黒褐色7.5Y R3/2砂質土 (直径1~2mm大の砂粒を含む)
3. 黄灰色2.5Y 4/1砂質土 (直径1~2mm大の砂粒を含む)
4. 褐色10Y R4/4粘質土 (直径2mm大の砂粒を含む)
5. 黒褐色10Y R2/2砂質土 (直径2~3mm大の砂粒を含む)
6. におい黄褐色10Y T5/4粘質土 (直径1~2mm大の砂粒を含む)
7. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (におい黄褐色10Y R6/4砂質土が混ざる)
8. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (直径1~2mm大の砂粒を含む)
9. 褐色10Y R4/4粘質土 (明褐色7.5Y R5/8粘質土が混ざる)
10. 灰褐色7.5Y R4/2粘質土 (におい黄色2.5Y 6/4粗砂が混ざる)
11. 黒褐色10Y R3/1砂質土 (におい黄色2.5Y 6/4粗砂が混ざる)

1. 灰色5 Y4/1粘質土 (オリーブ灰色10Y 6/2砂質土が混ざる)
2. 灰色7.5Y 4/1砂質土
3. 灰色10Y 4/1粘質土 (直径2~3mm大の砂粒を含む)

83土坑

T.P.+43.80m

1. におい黄色2.5Y 6/4砂質土 (中~粗砂からなる。褐色粘質土と互層になりながら堆積する)
2. におい黄褐色10Y R6/4砂質土 (中~粗砂からなる黄褐色砂質土と、褐色粘質土がブロック状に混ざり合う)
3. におい黄色2.5Y 6/3砂質土 (細~粗砂が均一に混ざり合う。ベース層の再堆積土だが、ラミナは見られない)

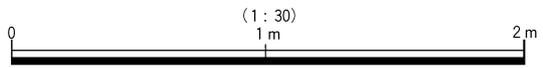
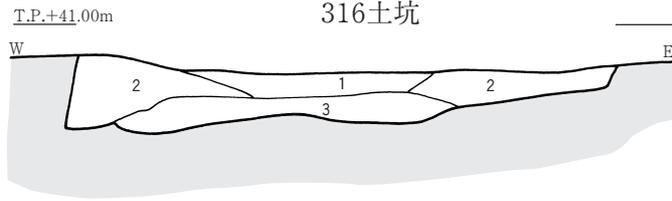


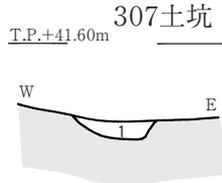
図132 有池遺跡03-1-4 調査区 土坑 平・断面図



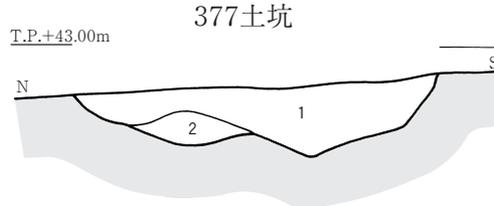
1. 灰色 5 Y4/1粘質土 (オリブ灰色 10 Y6/2砂質土が混ざる)
2. 黒褐色 10 Y R3/1砂質土 (灰色 10 Y4/1シルトが混ざる)
3. オリブ灰色 10 Y6/2砂質土 (オリブ黒色 10 Y3/1砂質土が混ざる)



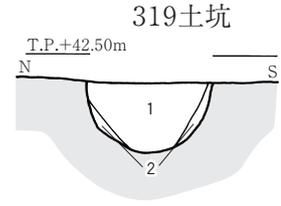
1. 灰色 7.5 Y5/1粘質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
2. 黄灰色 2.5 Y5/1砂質土
3. オリブ灰色 10 Y6/2砂質土 (直径 2 ~ 3mm 大の砂粒を含む。地山)



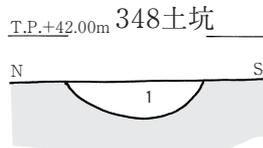
1. 灰色 5 Y4/1粘質土 (灰黄褐色 10 Y R6/2砂質土が混ざる)



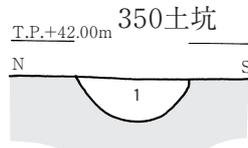
1. 黒褐色 10 Y R3/2砂質土 (細 ~ 粗砂が均一に混ざる中に、直径 3mm 大の円礫を含む)
2. 褐灰色 10 Y R4/1粘質土 (微砂と粗砂が混ざり合う。地山の浅黄色砂質土を含む)



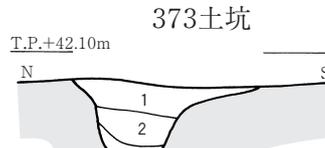
1. 黄灰色 2.5 Y4/1砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
2. 灰色 5 Y4/1砂質土 (オリブ灰色 10 Y 6/2砂質土が混ざる)



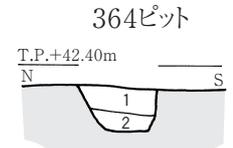
1. 褐灰色 10 Y R4/1粘質土 (直径 2 ~ 6mm 大の砂粒を含む)



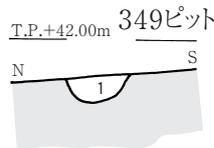
1. 黄灰色 2.5 Y4/1粘質土 (直径 2 ~ 10mm 大の砂礫を含む)



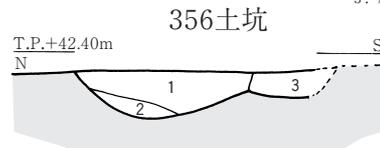
1. 黒褐色 10 Y R3/1砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
2. 灰色 7.5 Y4/1粘質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
3. 灰オリブ 7.5 Y6/2細砂



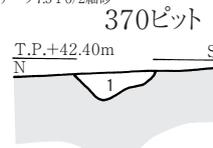
1. 暗黄褐色 2.5 Y5/2砂質土 (直径 2 ~ 3mm 大の砂粒を含む)
2. にぶい黄褐色 10 Y R4/3砂質土 (明黄褐色 10 Y R6/8細砂が混ざる)



1. 褐灰色 10 Y R4/1粘質土 (直径 2 ~ 4mm 大の砂粒を含む)



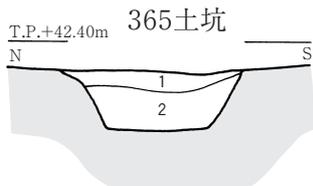
1. 黄灰色 2.5 Y5/1砂質土 (黄褐色 2.5 Y5/4粘質土が混ざる)
2. 褐灰色 10 Y R6/1粘質土 (オリブ色 5 Y5/4粘質土が混ざる)
3. 暗黄褐色 2.5 Y5/2粘質土 (黄褐色 2.5 Y5/4粘質土が混ざる)



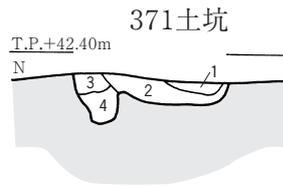
1. 黄褐色 2.5 Y5/3粘質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)



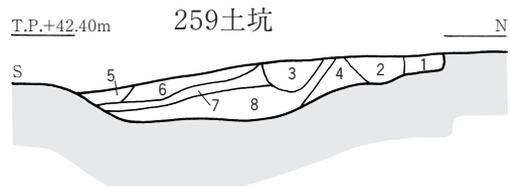
1. 褐灰色 10 Y R5/1粘質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
2. 黄灰色 2.5 Y5/1砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
3. 灰色 5 Y6/1粘質土 (オリブ黄色 5 Y 6/4シルト、地山が混ざる)



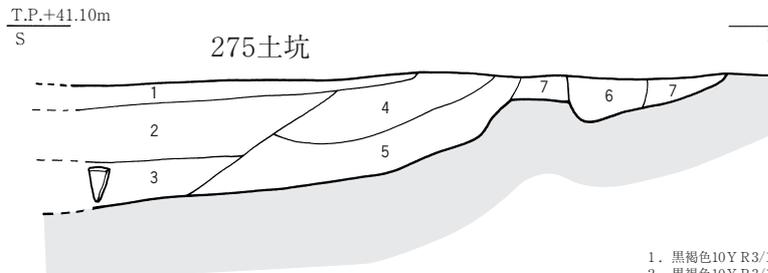
1. 暗褐色 7.5 Y R3/4砂質土 (直径 2 ~ 3mm 大の砂粒を含む)
2. 黒褐色 7.5 Y R3/2砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)



1. 黄灰色 2.5 Y5/1粘質土 (底面 5mm の厚さで酸化物が沈殿する)
2. にぶい黄褐色 10 Y R4/3粘質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
3. 灰黄褐色 10 Y R5/2砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
4. 暗黄褐色 2.5 Y5/2砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)



1. 褐灰色 10 Y R5/1砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
2. 灰黄褐色 10 Y R5/2砂質土 (直径 2 ~ 3mm 大の砂粒を含む)
3. 暗黄褐色 2.5 Y4/2砂質土 (直径 2 ~ 3mm 大の砂粒を含む)
4. 黄灰色 2.5 Y5/1砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
5. 褐色 10 Y R4/4砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
6. 灰オリブ 5 Y5/2砂質土 (直径 2 ~ 3mm 大の砂粒を含む)
7. にぶい黄褐色 10 Y R5/4砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
8. 褐灰色 7.5 Y R4/1粘質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)



1. 灰色 7.5 Y4/1粘質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
2. 灰色 10 Y4/1粘質土 (暗黄褐色 2.5 Y5/2粗砂が縞状に混ざる)
3. 灰色 10 Y5/1粘質土 (直径 2 ~ 3mm 大の砂粒を含む)
4. 暗オリブ灰色 5 G Y4/1粘質土 (オリブ灰色 10 Y6/2砂質土が混ざる)
5. 灰色 10 Y4/1砂質土 (オリブ灰色 10 Y6/2砂質土が混ざる)
6. 黄灰色 2.5 Y4/1粘質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)
7. 暗黄褐色 2.5 Y5/2砂質土 (直径 1 ~ 2mm 大の砂粒を含む)



1. 黒褐色 10 Y R3/1粘質土 (細砂と粗砂が混ざり合う)
2. 黒褐色 10 Y R3/1粘質土 (細砂と粗砂が混ざり合う。黄灰色粘質土ブロックと、直径 5mm 大の円礫を含む)
3. 灰黄褐色 10 Y R4/2粘質土 (微 ~ 細砂が均一に混ざる。地山の黄色粘質土ブロックが若干入る)

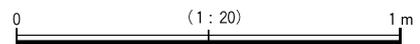


図133 有池遺跡03-1-4 調査区 土坑・ピット 断面図

348土坑（図133） 調査区中央（20F－6 d）の低地部で検出した。直径約40cmの円形で、断面は皿形を呈し、深さは約10cmである。242溝周辺ではこれも含めて複数のピットや不整形土坑を検出したが、遺構密度は概して低い。遺物は出土しなかった。

349土坑（図133） 調査区中央（20F－6 d）の低地部で検出した。前述の土坑も含めて、242溝周辺の遺構密度の低い部分に位置し、後述の350土坑とは近接する。直径約30cmの円形で、断面はU字形を呈し、深さは約10cmである。遺物は出土しなかった。

350土坑（図133） 調査区中央の（20F－6 d）低地部で検出した。242溝周辺の遺構密度の低い部分に位置し、前述の349土坑と近接する。直径約40cm強の円形で、断面は皿形を呈し、深さは約10cmである。遺物は出土しなかった。

356土坑（図133） 調査区中央（20F－6 h）の南寄りの部分に位置する。平面形は長軸約60cm、短軸約40cmの楕円形で、他の遺構との切りあい関係が認められる。断面はW字形を呈し、深さは約10cmである。遺物は出土しなかった。

370ピット（図133） 調査区中央（20F－6 h）の南寄りの部分に位置する。直径約20cmの円形で、断面は皿形を呈し、深さは約10cmである。遺物は出土しなかった。

358ピット（図133） 調査区中央（20F－6 i・7 i）の南端部分に位置する。このピットの北側には、これと大きさが類似する369ピットが近接する。平面形は、径約50cmの円形である。断面は皿形を呈し、深さは約15cmである。遺物は出土しなかった。

365土坑（図133） 調査区中央（20F－6 h）の南端部分に位置する。長軸約1.4m、短軸約45cmの東西方向に長い楕円形で、断面形は皿形を呈し、深さは約15cmである。遺物は出土しなかった。

371土坑（図133） 調査区中央（20F－6 h）の南端部分に位置する。直径約50cmの円形で、断面はW字形を呈し、深さは約15cmである。前述の370ピットはこの遺構の南西方向に近接する。遺物は出土しなかった。

259土坑（図133） 調査区中央の（20F－6 h）南端部分に位置する。平面形は最大長約2.3m、最大幅約1.8mの歪な楕円形である。断面は皿形を呈し、深さは約15cmと極めて浅い。底部で2基のピット（363・364ピット）を検出した。瓦器と土師器の細片3点が出土したが、時期は不明である。

275土坑（図133） 調査区西端部（1F－2 h）に位置する。側溝掘削時に南半部を掘り下げてしまったため、北半部のみが残存する。復元径が約1.8mの円形になると思われる。断面は皿形を呈し、深さは約30cmである。

遺構埋土から瓦器・土師器皿の破片40点ほどに加えて、青磁1点が出土した。そのうち残存状態の良い瓦器碗・瓦器皿を計5点図化した。瓦器碗は図化しなかったものに関しても、Ⅲ－A（古）段階までに収まるとみられる。土師器皿には直径4cm大のものと8cm大の2者がみられるようだが、いずれも底部から丸く口縁部が立ち上がり、底部と口縁部の屈曲は明確ではない。これらのことから出土遺物の時期は12世紀中葉～後半におさまると考える。

243土坑（図133） 微高地の西南端（20F－4 g）に位置し、遺構の南端が調査区際にわずかに重なる。平面形は長軸2m、短軸1mの不整楕円形で、深さは40cm前後である。埋土から大和型の瓦質土器鉢・瓦器・土師器の破片が出土した。いずれも細片のため、時期を判断することは難しいが、瓦器はいずれも器壁の厚さが3mm弱と薄い。したがって出土遺物の時期が13世紀前半までさかのぼる可能性は低いと考える。

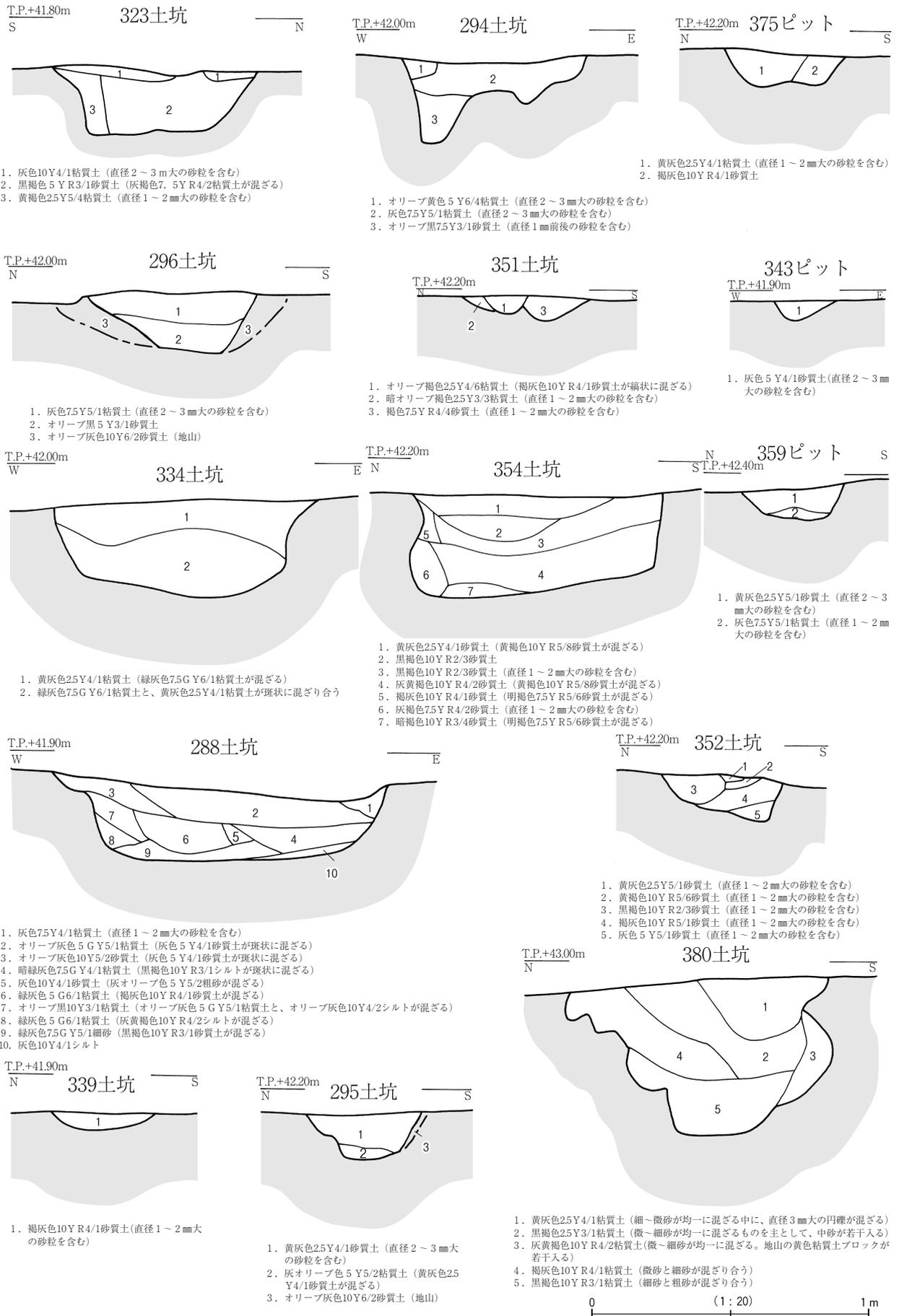


図134 有池遺跡03-1-4 調査区 土坑・ピット 断面図

323土坑（図134） 調査区西半（20F－7 d）の低地部で検出した。242溝の南側で遺構の分布密度が低い部分に位置する。長軸1 m、短軸75cmの東西に長い楕円形で、南北方向を指向する溝に近接して位置する。断面は皿形を呈し、深さは約25cmである。遺物は出土しなかった。

294土坑（図134） 調査区西半（20F－7 f）の低地部で検出した。平面形は長軸約1.9m、短軸約80cmの歪な楕円形である。断面はW字形を呈し、深さは最深部で約30cmである。この遺構の東側に分布する幅20～30cm程度の鋤溝群と同じ方向を指向していることから、この遺構もそれらと同時期に形成された耕作痕跡の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

345土坑 調査区西半（20F－7 h・8 h）の低地部で検出した、最大長4.1m、最大幅3.7mの不整形な土坑である。長軸2.5m・短軸1.6m・深さ30cmの東西に長い楕円形土坑の北側に、深さ20cm弱の平場がとりついたような形状である。

瓦器・土師器・瓦質土器羽釜・土師質土器羽釜・須恵質土器・須恵器が出土した。土師器皿1点を図化した。それ以外の遺物はいずれも細片で摩滅しているため、時期を判断することは難しい。瓦器・土師器とも器壁は2～3mmと薄い。図化した土師器皿は底部から口縁にかけての屈曲が明瞭で、13世紀後半のものと思われる。

375ピット（図134） 調査区西半（20F－7 h）の低地部で検出した。長軸60cm、短軸50cmの楕円形で、断面U字形を呈し、深さは約15cmである。この遺構の北側約1 m弱のところに位置する352ピットも、これと似た大きさと形状だが、どちらの遺構からも遺物は出土しなかった。

296土坑（図134） 調査区西半（20F－7 f）の低地部で検出した。東西方向を指向する鋤溝群が分布するエリアと、北に対してやや東に振る鋤溝群が分布するエリアとの間に位置する土坑のうちのひとつである。長軸約1.5m、短軸約90cmの不整形な楕円形で、断面はU字形を呈し、深さは約20cmである。陶器の破片と瓦器の破片が計3点出土したが、細片のため時期を判断することができなかった。

351土坑（図134） 調査区西半（20F－7 g）の低地部で検出した。北に対して東に振る南北方向の鋤溝と、東西方向を指向する鋤溝との中間に位置する。平面形は長軸50cm、短軸40cmの楕円形である。断面はW字形を呈し、深さは約10cmと極めて浅い。瓦器・土師器の破片が4点出土したが、時期は判断できない。

343ピット（図134） 調査区西半（20F－7 f）の低地部で検出した。東西方向を指向する鋤溝群が分布するエリアと、北に対してやや東に振る鋤溝群が分布するエリアとの間に位置する土坑のうちのひとつである。前述の296土坑はこの遺構の南側に位置する。直径約25cmの円形で、断面は皿形を呈し、深さは約10cmと極めて浅い。須恵質土器の破片が1点出土したが、時期は不明である。

334土坑（図134） 調査区西半（20F－7 f）の低地部で検出した。長軸約2.25m、短軸約70cmのやや不整な楕円形である。断面はU字形を呈し、深さは約35cmである須恵質土器が1点出土したが、時期は不明である。

359ピット（図134） 調査区西半（20F－7 i）の南端部で検出した。長軸約40cm、短軸約30cmの楕円形で、断面はU字形を呈し、深さは約15cmである。遺物は出土しなかった。

288土坑（図134） 調査区西半（20F－7 e・7 f）の低地部で検出した。平面形は一辺約2.5m前後の隅丸方形である。断面はU字形を呈し、深さは約60cmである。東西方向を指向する鋤溝群の東端を切るような形で位置する。瓦器・土師器・須恵質土器・土師質土器が出土したが、いずれも細片で時期は不明である。

352土坑 (図134) 調査区西半 (20F-7g) の低地部で検出した直径約50cmの円形で、断面は皿形を呈し、深さは約15cmである。前述した375ピットはこれより南に1m弱のところに位置する。なおこの遺構から遺物は出土しなかった。

262土坑 調査区西半 (20F-7g) の低地部で検出した。北に対して東に振る南北方向の鋤溝と、東西方向を指向する鋤溝との間に位置する。最大長3.9m、最大幅1.5mの不整形土坑として遺構埋土を掘ったが、異なる方向を指向するいくつかの耕作痕跡が切りあったものの可能性もある。遺物は瓦器椀と土師器皿が出土しており、うち前者を図化した。瓦器椀は13世紀後半のものとみられる。

339土坑 (図134) 調査区西半 (20F-7f) の低地部で検出した。東西方向を指向する鋤溝群が分布するエリアと、北に対してやや東に振る鋤溝群が分布するエリアとの間に位置する複数の土坑のうちの一つである。直径約40cmの円形で、断面は皿形を呈し、深さは約5cm強と極めて浅い。遺物は出土しなかった。

295土坑 (図134) 調査区西半 (20F-7f) の低地部で検出した。東西方向を指向する鋤溝群が分布するエリアと、おおむね南北方向を指向する鋤溝群が分布するエリアとの間に位置する、複数の土坑のうちの一つである。長軸約70cm、短軸約40cm強の東西に長い楕円形で、断面はU字形を呈し、深さは約15cmと極めて浅い。遺物は出土しなかった。

380土坑 (図134) 微高地北西端 (20F-3e) で検出した、長軸2m弱、短軸1m弱の東西に長い楕円形土坑である。瓦器の細片が1点出土したが、時期は不明である。

326土坑 (図135) 調査区西半 (20F-8e) の低地部で検出した。東西方向を指向する鋤溝群の西端を切っている。長軸1.8m、短軸1.0mの東西に長い楕円形で、断面はU字形を呈し、深さは約40cmである。遺物は出土しなかった。

342土坑 (図135) 調査区西半 (20F-8f) の低地部で検出した。東西方向を指向する鋤溝群が分布するエリアと、おおむね南北方向を指向する鋤溝群が分布するエリアとの間に位置する複数の土坑のうちの一つである。長軸1.1m・短軸約45cmの南北に長い楕円形で、断面はU字形を呈し、深さは約30cmである。遺構の方向軸が南側に広がる南北方向の鋤溝群とほぼ一致するので、この遺構も同様のものである可能性が高い。遺物は出土しなかった。

344土坑 (図135) 調査区西半 (20F-8f) の低地部で検出した。遺構南半部を攪乱によって切られているため、全体的な形状は不明だが、検出長約2.0m・幅約1.25mの長楕円形土坑である。断面はW字形を呈し、深さは約30cmである。南北方向を指向する鋤溝群と同じ方向であることから、この遺構も同様のものであったと考えられる。遺物は出土しなかった。

340土坑 (図135) 調査区西半 (20F-8f) の低地部で検出した。東西方向を指向する鋤溝群が分布するエリアと、おおむね南北方向を指向する鋤溝群が分布するエリアとの間に位置する複数の土坑のうちの一つである。長軸45cm、短軸35cmの楕円形で、断面はU字形を呈し、深さは約25cmである。遺物は出土しなかった。

321土坑 (図135) 調査区西半 (20F-8g) の低地部で検出した。南北方向を指向する鋤溝群の中に位置する。直径約35cmの円形で、断面は皿形を呈し、深さは約10cm弱と極めて浅い。遺物は出土しなかった。

341土坑 (図135) 調査区西半 (20F-8f) の低地部で検出した。東西方向を指向する鋤溝群が分布するエリアと、おおむね南北方向を指向する鋤溝群が分布するエリアとの間に位置する複数の土坑のうち

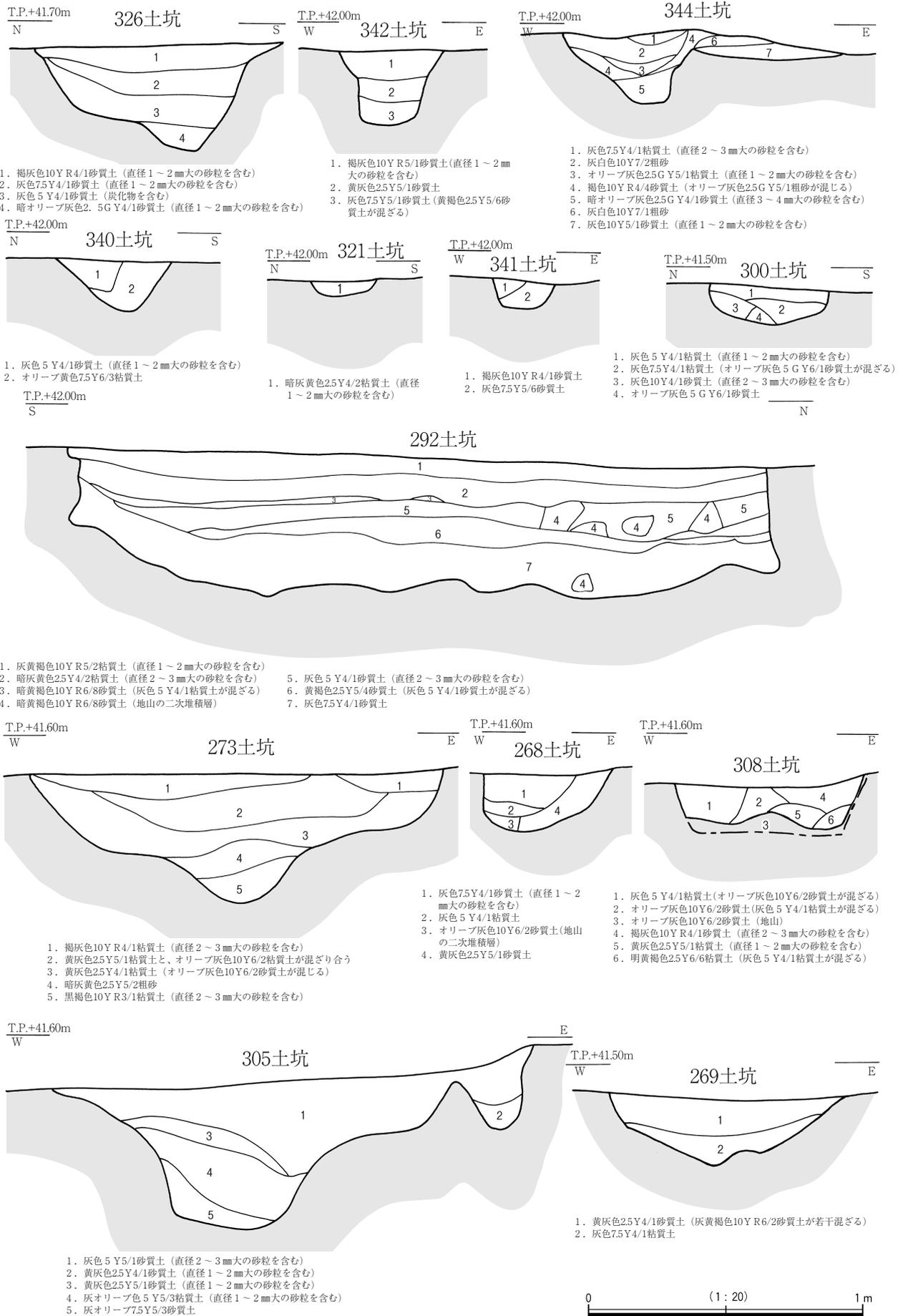


図135 有池遺跡03-1-4調査区 土坑 断面図

ちのひとつである。長軸約90cm・短軸約20cmの南北に長い楕円形で、断面はU字形を呈し、深さは約10cmである。遺構の方向軸が、この南側に広がる南北方向の鋤溝群と同じ方向を指向するので、これも鋤溝の痕跡である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

300土坑(図135) 調査区西端部(20F-10h)に位置する。平面形は、東側が二股に分かれる不整形なもので、長さ約1.2m・幅約50cmである。断面は皿形を呈し、深さは約15cmである。遺物は出土しなかった。

292土坑(図135) 調査区西半(20F-8g)の低地部で検出した。平面形は、隅丸長方形と隅丸三角形の土坑を繋ぎ合わせたような形状で、最大長6.4m・最大幅3.9mである。方形の部分と三角形を呈する部分より深くなっている。記載した断面は、方形部分の中央に設けたもので、皿形を呈し、深さは約50cmである。底面は若干凹凸があり、埋土中に地山ブロックを含む。土を採取した土坑と考えられる。土師器・瓦器・須恵質土器が計5点出土したが、いずれも細片で時期は不明である。

264土坑 調査区西半(20F-8g)の低地部で検出した。前述の292土坑の南側に隣接する遺構である。長軸2.4m弱、短軸1.8m弱の南北に長い長楕円形の土坑で、深さは40cm前後である。この遺構の周囲に広がる南北方向の鋤溝群と方向軸が一致するので、この遺構も鋤溝の痕跡である可能性が高い。出土したのは13世紀前半のものと見られる青磁椀の破片1点のみだった。

273土坑(図135) 調査区西端部(20F-9f)に位置する。平面形は、最大長5.4m・最大幅約2.4mの不整形である。断面は播鉢状を呈し、深さは約55cmである。瓦器・土師器・須恵質土器の細片が計4点出土したが、時期は不明である。

268土坑(図135) 調査区西端部(20F-9f)で、前述の273土坑の南側に位置する。長軸約2.35m・幅約75cmの南北に長い楕円形で、断面はU字形を呈し、深さは約20cmである。この遺構の周囲に広がる南北方向の鋤溝群と方向軸が一致するので、この遺構も鋤溝の痕跡である可能性が高い。

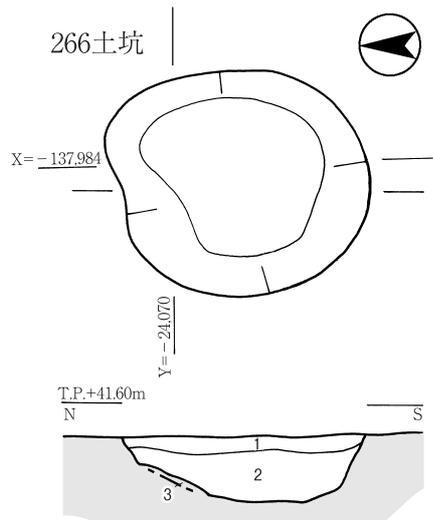
遺構埋土より瓦器椀・土師器皿の破片が計4点出土した。いずれも細片で時期を明確に判断することは難しいが、瓦器椀の口縁端部は尖り気味に丸くおさめられている。口縁内面に沈線が施され、体部内面には幅1mm弱のミガキが3～4本/1cmの密度で見られる。土師器皿2点は平坦な底部から口縁部が屈曲して直立気味に立ち上がる。以上のような特徴から、おそらく13世紀後半に含まれるのではないかと考える。

308土坑(図135) 調査区西端部(20F-9f・9g)に位置する。長さ約2.9m・幅約90cmの楕円形で、断面は皿形を呈し、深さは約20cmである。この遺構の周囲に広がる南北方向の鋤溝群と方向軸が一致するので、この遺構も耕作痕の一部である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

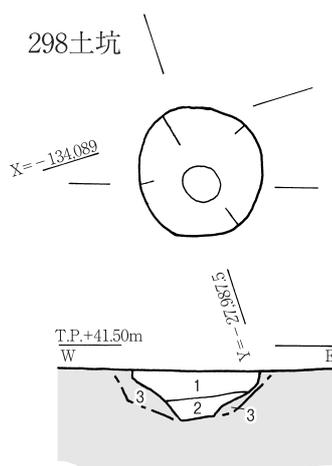
305土坑(図135) 調査区西端部(20F-9g)に位置する。平面形は双胴形で、長さ約3.2m・幅約1.75mである。楕円部分の幅はそれぞれ60～80cmで、前述の308土坑の幅と近似する。またこの遺構も南北方向を指向することが明らかなので、耕作痕の一部である可能性が高い。断面は播鉢状を呈し、深さは約55cmである。遺物は出土しなかった。

269土坑(図135) 調査区西端部(20F-9g)に位置する。長さ約1.8m・幅約1mの南北に長い楕円形で、断面は皿形を呈し、深さは約25cmである。周囲の鋤溝もしくは耕作痕と方向軸が近似するので、この遺構も同様の耕作痕跡である可能性が高い。須恵質土器の細片が1点出土したが時期は不明である。

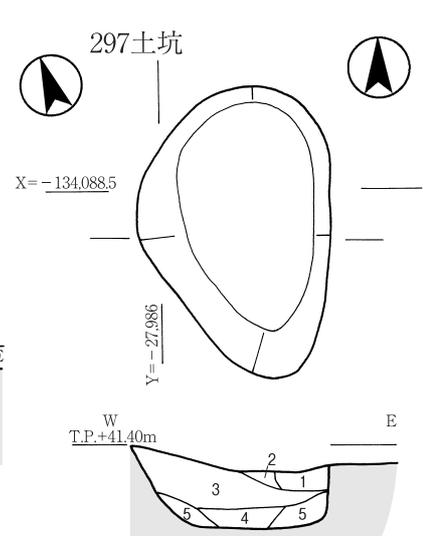
266土坑(図136) 調査区西端部(20F-9g・9h)に位置する。直径約1mの円形で、断面はU字



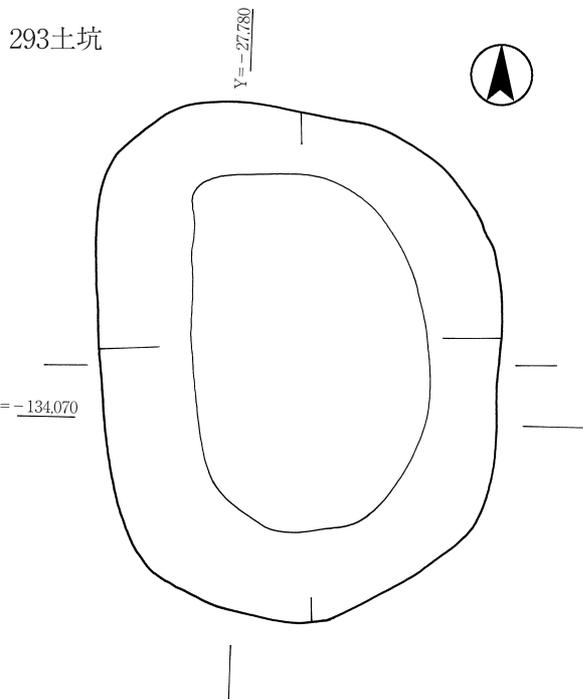
1. 黄灰色25Y6/1粘質土 (直径2~3mm大の砂粒を含む)
2. 灰色7.5Y4/1砂質土 (直径1~2mm大の砂粒を含む)
3. 灰オリーブ7.5Y6/2シルト (地山)



1. オリーブ黒色5Y3/1砂質土 (直径1~2mm大の砂粒を含む)
2. 灰色10Y4/1シルト
3. オリーブ灰色10Y6/2砂質土 (直径2~3mm大の砂粒を含む。地山)

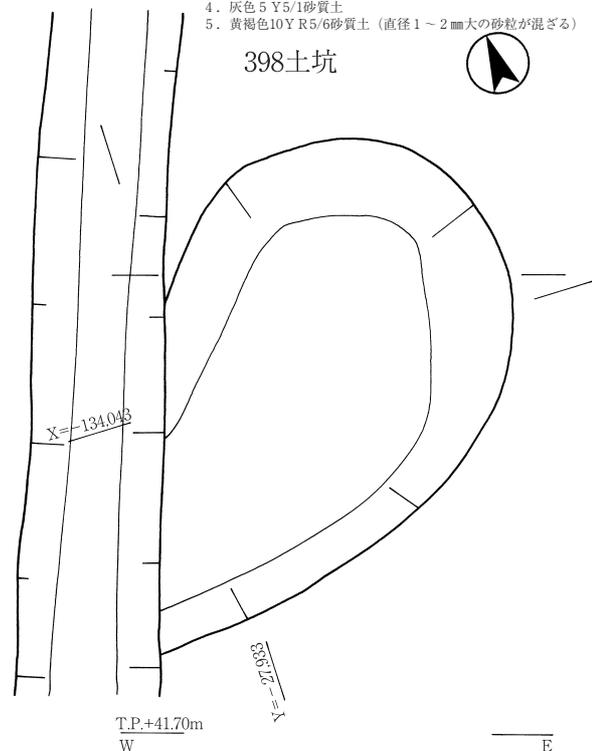


1. 明黄褐色砂質土 (オリーブ黒色10Y3/1粘質土が繻状に混ざる)
2. 灰色10Y4/1粘質土 (褐灰色10Y R4/1粗砂が混ざる)
3. オリーブ黒色10Y3/1粘質土 (明黄褐色10Y R6/8粘質土が混ざる)
4. 灰色5 Y5/1砂質土
5. 黄褐色10Y R5/6砂質土 (直径1~2mm大の砂粒が混ざる)



1. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土 (直径1~2mm大の砂粒を含む)
2. におい黄橙色10Y R6/4砂質土 (マンガン粒を含む地山の二次堆積層)
3. 黄灰色2.5Y4/1砂質土 (直径2~3mm大の砂粒を含む)
4. におい黄褐色10Y R5/4砂質土 (直径2~3mm大の砂粒を含む)
5. 灰色5 Y4/1粘質土 (におい黄橙色10Y R6/4砂質土が混ざる)
6. におい黄橙色10Y R6/4砂質土 (マンガン粒、直径2から3mm大の砂粒を含む。地山)

266・298・297・293土坑 (1:30)
398土坑 (1:20)



1. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微~細砂からなる粘質土と粗砂とがブロック状に混ざる)
2. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (中~粗砂が均一に混ざるものを主として、細砂を若干含む。黄灰色粘質土ブロックが入る)

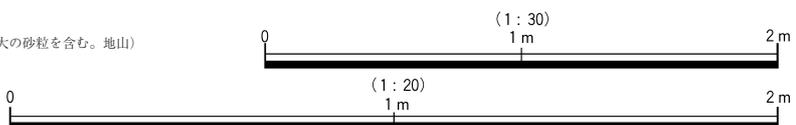
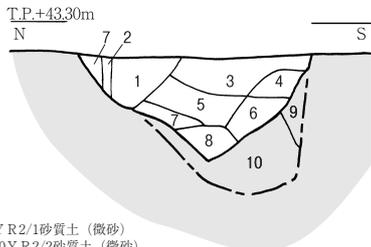
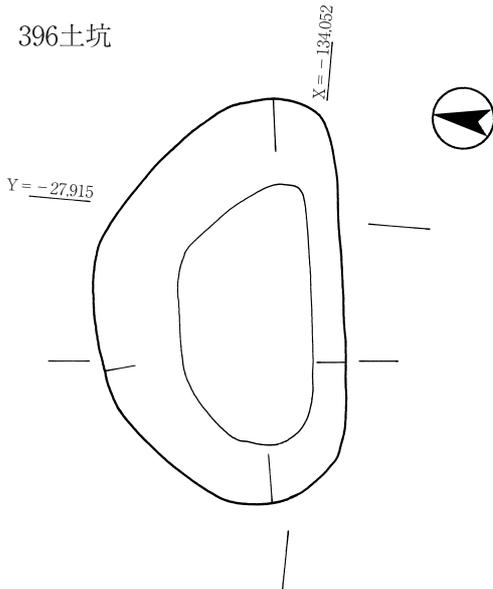


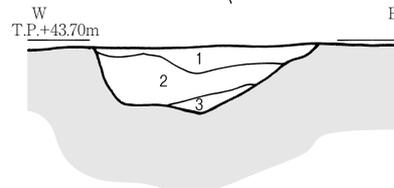
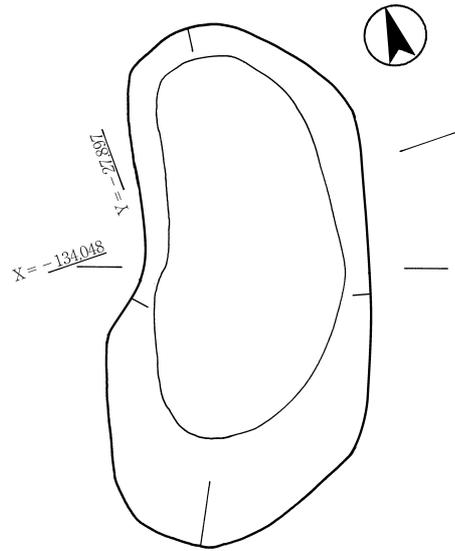
図136 有池遺跡03-1-4 調査区 土坑 平・断面図

396土坑



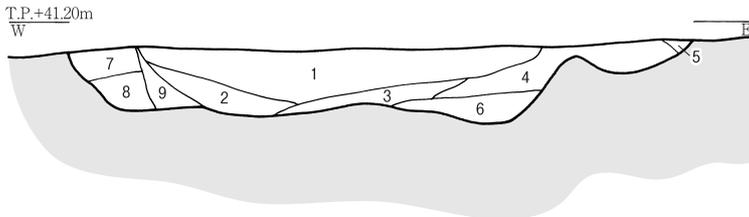
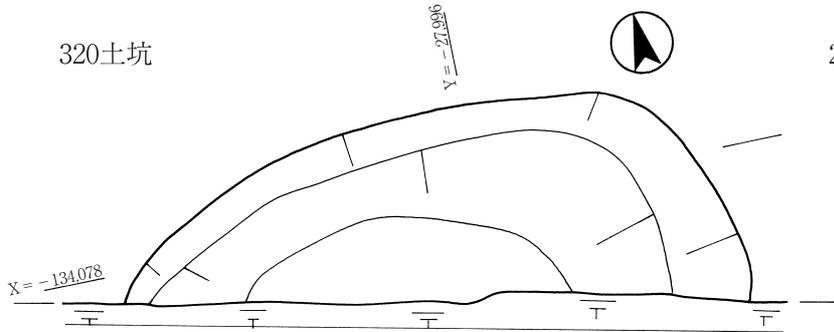
1. 黒色10Y R2/1砂質土 (微砂)
2. 黒褐色10Y R2/2砂質土 (微砂)
3. 黒褐色10Y R2/3砂質土 (微砂に直径5mm大の礫が混ざる)
4. 黒褐色10Y R2/3砂質土 (微砂に直径3mm大の礫が混ざる) と、暗褐色10Y R3/3砂質土 (細砂に3mm大の礫が混ざる) とが斑状に混ざる
5. 黒褐色10Y R2/2砂質土 (微砂に直径5mm大の礫が混ざる)
6. 黒褐色10Y R3/2砂質土 (微砂に3mm大の礫が混ざる)
7. 暗褐色10Y R3/3砂質土 (細砂に直径5mm大の礫が混ざる)
8. 黒褐色10Y R2/2砂質土 (細砂に直径3mm大の礫が混ざる)
9. ぶい黄褐色10Y R4/3砂質土 (中砂) 地山
10. 黒褐色10Y R2/2砂質土 (微砂) と、オリブ褐色2.5Y 4/4砂質土 (細砂) が斑状に混ざり合う地山

14土坑



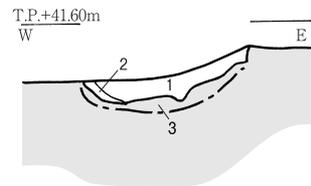
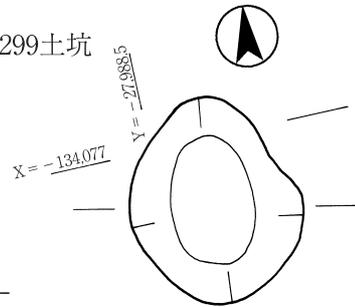
1. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (微~細砂が均一に混ざる中に、白砂粒が混ざる)
2. 黒褐色10Y R3/2粘質土 (微~細砂が均一に混ざる中に直径2mm大の白砂粒が入る。1に似るが白砂粒の含有量が、それより少ない)
3. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (細~中砂が均一に混ざる黒灰色粘質土と、ベースのぶい黄褐色砂質土が混ざる)

320土坑



1. 灰色10Y 4/1粘質土 (直径1~2mm大の砂粒を含む)
2. 暗緑灰色10G Y 4/1粘質土 (灰色10Y 6/1粗砂が混ざる)
3. 灰色7.5Y 4/1微砂
4. 灰色7.5Y 5/1粘質土 (オリブ灰色10Y 6/2砂質土が混ざる)
5. オリブ灰色10Y 6/2砂質土 (地山の二次堆積層)
6. 緑灰色7.5G Y 5/1粘質土 (直径1~2mm大の砂粒を含む)
7. オリブ灰色10Y 6/2砂質土 (灰色10Y 4/1粘質土が混ざる)
8. 暗緑灰色7.5G Y 4/1粘質土 (オリブ灰色10Y 6/2砂質土が混ざる)
9. オリブ灰色10Y 5/2砂質土 (灰色10Y 4/1粘質土が混ざる)

299土坑



1. 暗オリブ灰色2.5G Y 4/1砂質土 (直径2~3mm大の砂粒を含む)
2. オリブ灰色10Y 5/2砂質土
3. オリブ灰色10Y 6/2砂質土 (直径2~3mm大の砂粒を含む。地山)

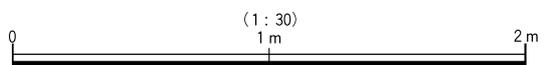


図137 有池遺跡03-1-4 調査区 土坑 平・断面図

形を呈し、深さは約40cmである。瓦器・土師器の細片が各1点出土したが、時期は不明である。

298土坑(図136) 調査区西端部(20F-9h)に位置する。直径約60cmの円形で、断面はU字形を呈し、深さは約20cmである。遺物は出土しなかった。

297土坑(図136) 調査区西端部(20F-9h)に位置する。長軸1.2m、短軸80cmの楕円形で、断面はU字形を呈し、深さは約30cmである。遺物は出土しなかった。

293土坑(図136) 調査区西半(20F-8g・8h・9g・9h)に位置する。長軸約2.1m・短軸約1.6mの隅丸方形気味の楕円形である。断面はU字形を呈し、深さは約50cmである。埋土に地山ブロックを含む。土を採取した土坑と考えられる。遺物は出土しなかった。

398土坑(図136) 調査区中央(20F-4e)の、微高地寄りの低地部で検出した。西端を北に対してやや東に振る南北方向の溝で切られているため、正確な大きさは測れないが、おそらく長軸1.4m、短軸1m、深さ40cm弱の東西に長い楕円形とみられる。瓦器の細片が2点出土したが、時期は不明である。

396土坑(図137) 微高地西半(20F-2f)で検出した。長軸1.65m、短軸1m弱の南北に長い楕円形で、断面が隅丸V字形、深さは40cm強である。この遺構の南側に平面形が不整形な249土坑がある。遺物は出土しなかった。

14土坑(図137) 微高地の東半(19F-10e)で、建物3の東側に隣接して位置する。長軸2.1m・短軸1.15mの南北に長い楕円形で、深さ28cm、断面は隅丸の逆台形である。遺物は出土しなかった。

320土坑(図137) 調査区西端部(20F-10h)で検出した。調査区の南端に位置し、側溝掘削時に遺構の南半を掘り下げてしまったため、全体の形状は不明だが、直径2.5m以上の円形の土坑とみられる。底部はやや凹凸があるもののほぼ平坦で、東側壁にステップ状の浅いくぼみがりつく。深さは約30cmで、遺物は出土しなかった。

299土坑(図137) 調査区西端部(20F-9h)に位置する。長軸80cm・短軸65cmの楕円形で、断面はやや凹凸を伴う皿形、深さは約10cmである。遺物は出土しなかった。

526土坑(図138) 微高地東寄りの遺構密集部北縁(19F-9e)で検出した。遺構全体の形状は明らかではないが、一辺1.4m前後の隅丸正方形の土坑と考えられる。6溝の末端に位置するが9溝に切られているため、両者が一連のものかどうかは確認できなかった。ただ出土遺物からみて、両者にはそれほど大きな時間差は認められない。深さは10cm強で、平坦な底部からゆるやかに側壁が立ち上がる。

土坑の南寄りの部分で、埋土上層から土師質の三足釜・東播系の須恵質甕の破片、完形の瓦器椀や土師器皿を含む土器が比較的まとまって出土した。そのうち遺存状態の良い瓦器椀・瓦器皿を図化した。それらの中には12世紀中葉まで遡りうるものが1点含まれていたが、およそ12世紀末葉から13世紀初頭の時期に含まれると考える。図化しなかった遺物に関して述べると、土師器皿では直径8cm大のものと4~4.5cm大の2者がみられるが、全体の形状はユビオサエの痕跡が顕著な底部からやや外反気味の口縁が外方に立ち上がるもので、形態がほぼ一致するのがみてとれる。瓦器椀をみると、高台の断面形はほぼ正三角形のものと二等辺三角形のもの2者がある。口縁端部の断面には丸くおさめるものと、それよりやや先細り気味のものがあり、前者は内面のミガキが比較的密に施され、幅も1mm強なのに対し、後者は5~6本/1cmの密度で幅も1mm弱と細くなる傾向が認められた。したがってこの遺構に含まれる遺物は12世紀末葉から13世紀前半(Ⅲ-1・Ⅲ-2)のものと考えられる。

250溝(図139) 微高地西半(20F-2f・2g)に位置する。北に対してやや東側に傾く(N-12.5°-E)溝で、南側の5調査区へ続く。4調査区内で検出した長さは約13m、幅は0.75~1.2mである。断



图138 有池遺跡03-1-4調査区 溝・土坑 遺物出土状況図

面はU字形を呈し、深さは15～25cmである。5調査区における延長部の検出状況を見ると屋敷地の区画溝と考えられるが、4調査区ではこの溝に対応する建物は検出しなかった。

この溝と方向がほぼ一致する溝を複数検出しているが、246・385溝以外の溝からは時期判断が可能な遺物は出土しなかった。

247溝 (図139) 微高地西半 (20F-2e) に位置する、南西から北東へ延びる溝である。溝の幅が一定せず、微高地の落ち際に沿うようにゆるやかにカーブしながら延びている。検出した長さは4.4m、幅は約60cmで、断面はU字形を呈し、深さは約30cmである。

瓦器椀・土師器・瓦質羽釜・土師質三足釜が出土した。図化した土師器皿の時期は12世紀後半と考えられる。図化しなかったが、口縁部から体部にかけて残る瓦器椀は、口縁端部を先細り気味に丸くおさめ、内面に沈線を施している。沈線は器壁に対して垂直にヘラ状工具を当て、引いたものである。内面に幅1mm程度のミガキが3本/1cmの密度で施されており、13世紀後半代のもものとみられる。

微高地を縦断するように南北に延びる他の溝とはあきらかに方向が異なるが、それらよりもやや古い時期の土器が含まれるとみられる。

253溝 微高地西半 (20F-2e～2d) に位置する。延長2m、最大幅40cmを測る東西方向の溝で、溝の東端は微高地北端の落ちに達する。

瓦器椀・土師器皿・土師質土器が出土し、その中で残存状態が良好な瓦器椀2点を図化した。図化した瓦器椀は13世紀前半とみられるが、図化しなかったもののなかにはそれらよりも器壁がやや薄く、口縁内面の沈線や体部内面のミガキが粗いものも見られる。また土師器皿には底部から口縁への境目の屈曲が明確化しつつあるものもみられることから、13世紀後半代のももの含まれると考える。

248溝 (図139) 微高地西半 (20F-2e) で検出した。緩やかにカーブしつつ、南西から北東に向けて延びている。微高地を縦断するように延びる、他の南北方向の溝とは明らかに方向が異なる。検出した長さは約7.2m、幅は約90cmである。断面はU字形、深さは約30cmである。

瓦器椀・土師器皿が10点ほど出土した。図化した瓦器椀は12世紀末～13世紀初頭の所産とみられる。これ以外の瓦器椀をみると、おおむね図化したものと同タイプに含まれるとみられるが、これよりもやや時期が降るものも若干含まれていた。したがって出土遺物の時期は12世紀末～13世紀前半に含まれると考える。247溝と同様、他の南北方向の溝よりも古い時期の遺物が含まれるのが見て取れる。

381溝 (図139) 微高地の西半 (20F-2g) で検出した、西に対してやや北に振る東西方向の溝で、微高地よりも西側には延長しない。東へは調査対象外とした部分にあたっており、総延長距離は不明である。幅0.6～1m、深さ20～30cmで、微高地の西側へ向かって水を落としていた溝とみられる。この溝の方向軸はW-26°-Nで、建物5・6・8や6溝と近似しており、これらの遺構と同時期になる可能性がある。遺物は出土しなかった。

6溝 (図138) 微高地の東端 (19F-8e) で検出した、西に対してやや北に振る東西方向の溝である。方向軸はW-30°-Nで、建物5・6・8や、前項で取り上げている381溝と近似している。東寄りの部分で南北方向に分岐する部分を認めた。その分岐箇所まで完形の瓦器椀や土師器皿を含む多数の土器がまとまって出土した。出土状況から見て一括廃棄されたものとみられる。溝の西端は微高地の縁辺部でとぎれている。西側は調査区外に延びているため、総延長距離は不明だが、検出長は12.1mである。溝の肩のラインは不整形で直線的でなく、幅は0.8～1.6m、深さは10～30cmである。

遺構埋土より瓦器椀・土師器・瓦質土器・土師質土器・須恵質土器・白磁等が出土した。完形品も含

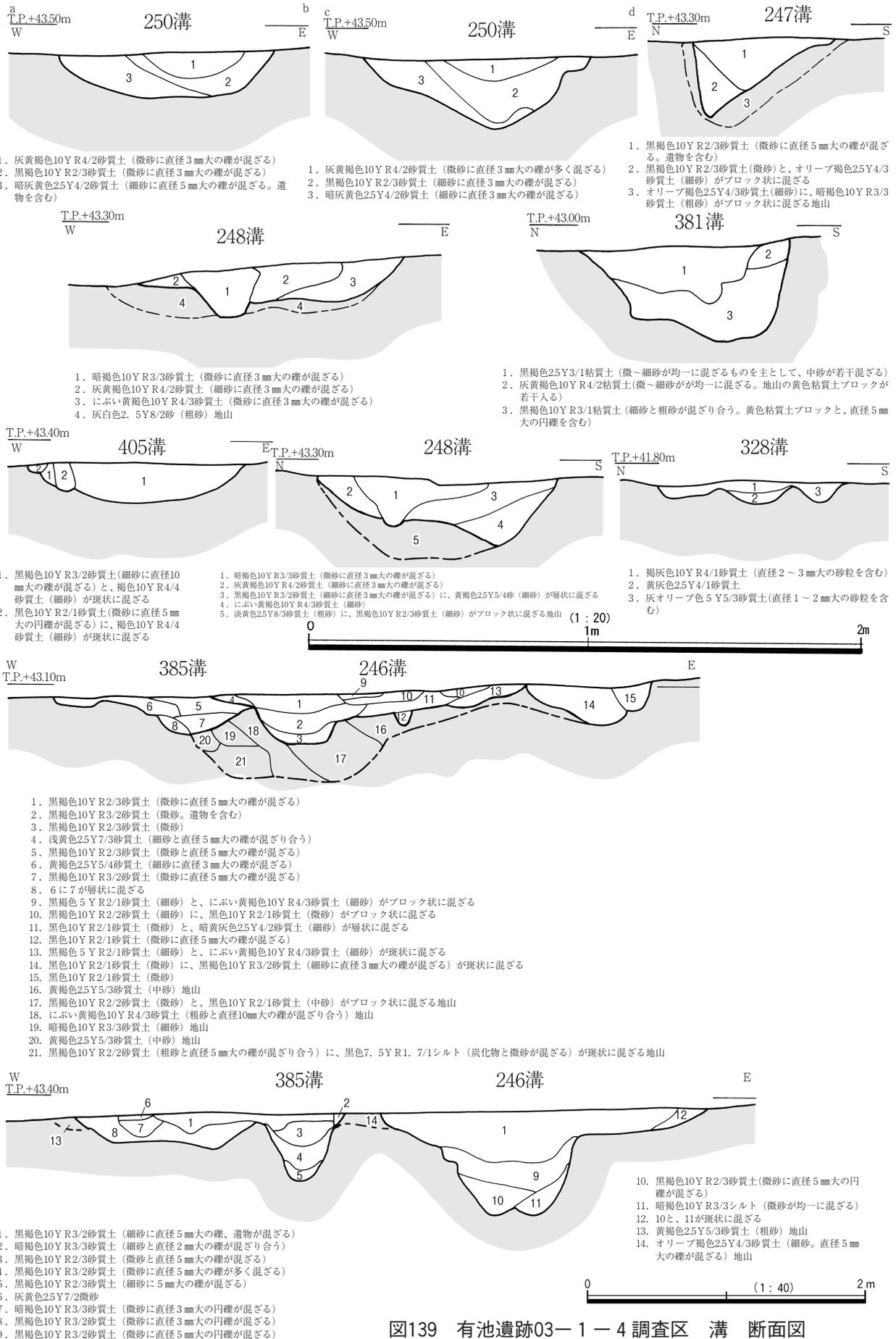


図139 有池遺跡03-1-4 調査区 溝断面図

まれ、比較的まとまった量が出土している。図化は完形品を中心に土師器・瓦器皿・瓦器碗・東播系須恵器鉢・土師質羽釜に対して行った。図化した遺物のうち瓦器碗を見ると、大和型であればⅢ-A段階、楠葉型であればⅢ-1段階のものがみられ、12世紀後半～13世紀初頭の遺物と位置づけられる。図化しなかった遺物に関しても、大半がこの時期のものとみられるが、13世紀前半(Ⅲ-2)に降る時期のものも少量認められた。したがって出土遺物の時期は、12世紀後半～13世紀前半といえる。

405溝 (図139) 微高地西半(20F-2f・2g)に位置する。西側の溝の中央部から東へ延び、さらに南に折れ曲がる不整形な溝である。西側の溝の長さは約4.0m、東へ約1.7m延び、南へは約2.1mを測り、幅約70cmである。断面は皿形、深さは約15cmと極めて浅い。埋土から遺物は出土しなかった。

328溝 (図139) 調査区中央の低地部分(20F-7e・8e)で検出した、東西方向に延びる溝である。検出長は約12.5m、幅約85cmで、断面W字形、深さは約10cmで耕作にともなう溝と思われる。埋土から遺物は出土しなかった。

385溝 (図139) 微高地の西寄りの部分(20F-2e・2g・2f)に位置する南北方向の溝で、微高地北側の湿地状の落込に流れ込む。後述する246・252溝に先行して形成された溝で、掘り直された痕跡はみとめられない。検出した長さは約25.5m、幅は0.3～1.2mである。北側の落込に注ぎ込む流末部分では溝の輪郭が乱れて不明瞭になる。また調査区南端部分で西側の肩が一部、ステップ状の広がり的形成する。なおこの溝は5調査区の389溝に連なると考えられる。瓦器・土師器・瓦質羽釜・瓦質土器が20点程出土したが、全て細片で時期は判断できない。

246溝 (図139・140) 微高地の西寄りの部分(20F-2e～2g・3g)で検出した。溝の方向は北に対してやや東に振り(N-17°-E)、北側の湿地状の落込に流れ込む。落込に接する流末部分では、溝の輪郭が不明瞭になり、自然に分岐したと思われる流路が発生している。この遺構と方向軸がほぼ同じで、西側に隣接する385溝はこれに先行して形成されたもので、264(252)溝はそれを切っている。検出した長さは約25m、幅は1～2m、溝の南半部では東側の側壁の立ち上がりがゆるやかで、ステップ状の段をもつ。また断面がW字形を呈する部分もあることから、複数回掘りなおされた可能性がある。深さは20～35cmである。なおこの溝は5調査区の312溝に連なると考えられる。

瓦器碗・土師器・瓦質三足釜・須恵質土器等の破片が出土した。そのうち瓦器碗と東播系の須恵器甕を実測した。図化した遺物は13世紀代のものと考えられる。細片のため図化しなかったが、瓦器碗に関してみても13世紀のおそらく後半に含まれるものとみられる。

254溝 調査区中央部(20F-4c・5c)で検出した、東西方向の溝である。延長距離は約20mで、242溝から分岐した水を南東方向に落としたものとみられる。溝の南東端は下層確認のためのトレンチ掘りの際に掘り下げてしまったため、部分的に不明であるが、団扇状に広がりつつ底部がくぼむとみられる。幅は1.2～3mで深さは20～30cmである。

土師器・瓦器・東播系の須恵質土器・瓦質土器・陶器・青磁碗の破片が出土した。図化した青磁碗は15世紀の所産と考えられる。それ以外の遺物は細片で時期を判断することはできなかった。

366溝・367溝・368溝 (図140) 調査区中央(20F-6h)の低地部で検出した。西に対してやや南に振る東西方向の鋤溝群が広がる部分にあり、これらの遺構も長軸が同じ方向を指向することから、鋤溝の痕跡とみられる。366・367・368溝は近接し、かつ平行している。断面はU字形・W字形を呈し、深さは約5～10cmである。耕作にともなう溝と思われる。366溝の埋土より土師器・瓦器の細片が数点出土したが、時期を判断することはできなかった。

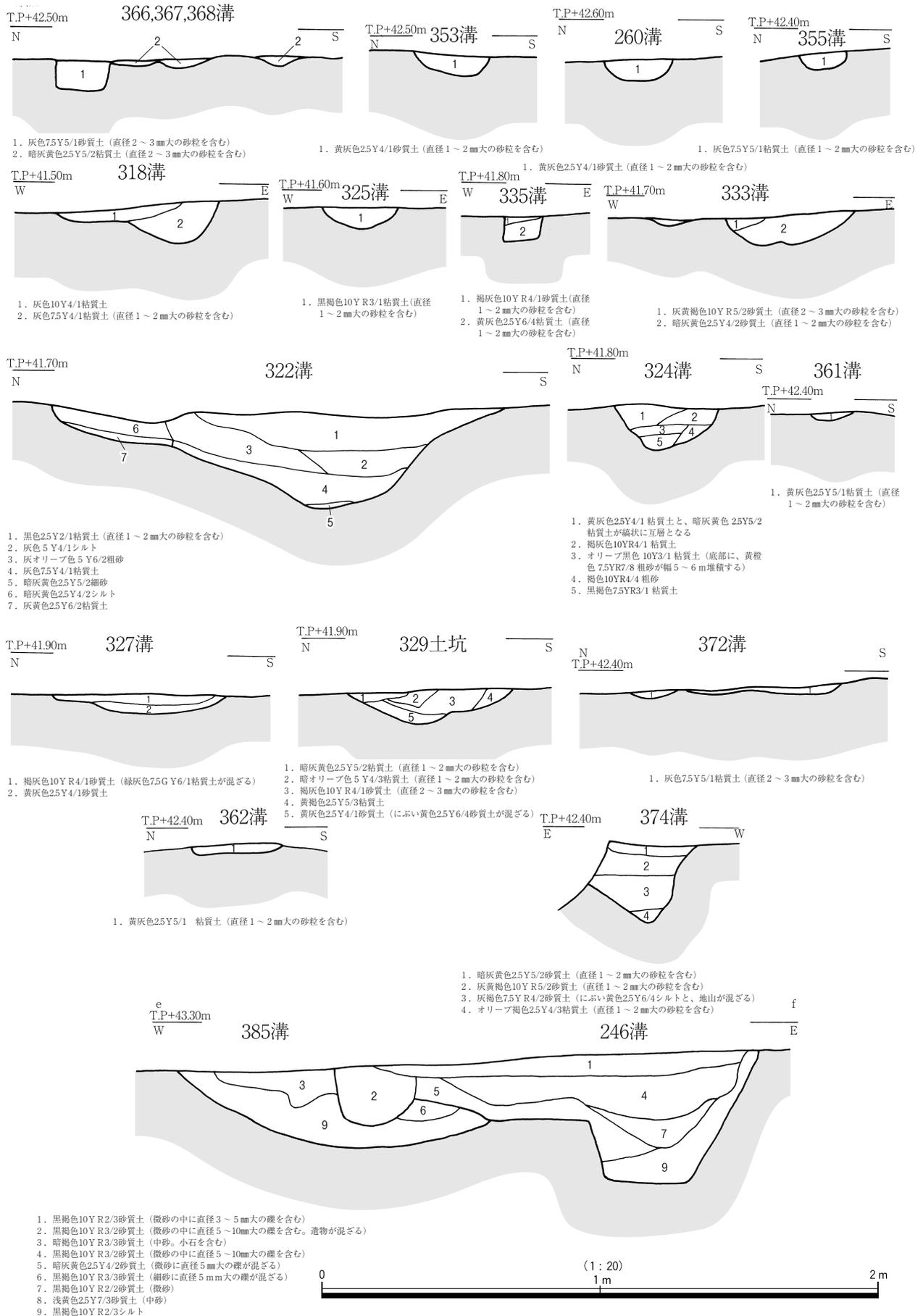


図140 有池遺跡03-1-4調査区 溝 断面図

353溝 (図140) 調査区中央 (20F-6 h) の低地部で検出した。西に対してやや北に傾く東西方向の溝である。検出した長さは約7.1m、幅は約30cmである。断面は皿形を呈し、深さは約10cmである。耕作にともなう溝と思われる。遺物は出土しなかった。

260溝 (図140) 調査区中央 (20F-6 g・6 h) の低地部で検出した。西に対してやや北に傾く東西方向の溝で、前述の353溝の北側に隣接し、方向軸も一致することから、両者は同時期に形成されたとみられる。検出した長さは約7.0m、幅は約25cmである。断面は皿形を呈し、深さは約10cmである。耕作にともなう溝と思われる。須恵質土器・瓦器の細片が各1点出土したが、時期を判断することはできなかった。

355溝 (図140) 調査区中央 (20F-6 h・7 h) の低地部で検出した。西に対してやや南に傾く東西方向の溝で、遺構の方向軸は前述した366・367・368溝と一致する。検出した長さは約7.8m、幅は約20cmである。断面は皿形を呈し、深さは約10cmである。耕作にともなう溝と思われる。遺物は出土しなかった。

318溝 (図140) 調査区西半 (20F-8 e・9 e) の低地部で検出した、南北方向の溝である。検出した長さは約5.0m、幅は約60cmである。断面はW字形を呈し、深さは約15cmである。南北方向の鋤溝群が広がるエリアの北端に位置するため、耕作に伴う溝の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

325溝 (図140) 調査区西半 (20F-7 d・8 d) の低地部で検出した、L字状の溝で、南北方向は北に対してやや東に振り (N-17.5°-E)、東西方向の部分はそれに直行する。東西方向の溝の西端は6調査区にいたっている。溝の幅は30~70cmで深さは10cm前後、延長距離は南北方向で約7m、東西方向は約4mである。土師器の細片が2点出土したが、時期を判断することはできなかった。

335溝 (図140) 調査区西半 (20F-7 e) の低地部で検出した、北に対してやや東に振る南北方向の溝である。溝の延長距離は2.9m、幅は30cm前後、深さ10cm前後である。同様の溝がこの周囲で複数みられ、鋤溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

333溝 (図140) 調査区西半 (20F-7 e) の低地部で検出した。324溝から直行する方向で派生し、カーブを描く。検出した長さは約2.9m、幅は約50cmである。断面はW字形を呈し、深さは約15cmである。耕作にともなう溝と思われる。遺物は出土しなかった。

322溝 (図140) 調査区西半 (20F-6 c・6 d・7 c・7 d) の低地部で検出した。南北方向に延びる溝で、242溝に北側で取り付く。検出した長さは約7.5m、幅は約1.65m、深さは約35cmである。断面は隅丸台形を呈し、幅約30cmの底部から肩部へかけての側壁の立ち上がりはゆるやかである。遺物は出土しなかった。

324溝 (図140) 調査区西半 (20F-7 d・7 e) の低地部で検出した。北西-南西方向に延びる。前述した333溝をはじめ、南側に直行していくつかの溝が派生する。検出した長さは約11.5m、幅は約40cmである。断面はU字形を呈し、深さは約15cmである。耕作にともなう溝と思われる。遺物は出土しなかった。

361溝 (図140) 調査区西半 (20F-7 i) の低地部で検出した。西に対してやや南に傾くが、東西方向を指向する溝である。この溝の周囲には、これと同方向の溝が並列しており、耕作にともなう溝と思われる。検出した長さは約3.0m、幅は約15cmである。断面は皿形を呈し、深さは約5cmである。遺物は出土しなかった。

401溝 調査区西半 (20F-7 i) の低地部で検出した。前述の361溝の南側に位置し、方向もほぼ一致

する。検出長は約2.15m、幅は約30cm、深さは約20cmである。

瓦器碗が2点出土し、残存状態のよい1点を図化した。図化した土器は底部が欠損していたが、おそらく高台が退化もしくは消滅する段階（14世紀前半）のものと考えられる。

327溝（図140） 調査区西半（20F-7e）の低地部で検出した。西に対してやや北に振る東西方向の溝である。検出した長さは3.4m、幅は0.8～1m、深さ10cm弱で周囲にこれと並行する同様な溝が並ぶことから、耕作に伴う溝とみられる。遺物は出土しなかった。

329土坑（図140） 調査区西半（20F-7e）の低地部で検出した。前述した327溝を含む、東西方向を指向する鋤溝群の中に含まれる。形状は、長さは約80cm、幅は約60cmの楕円形である。断面は皿形を呈し、深さは約15cmである。遺物は出土しなかった。

372溝（図140） 調査区西半（20F-7i）の低地部で検出した。東側を頭にしたT字形を呈し、北に対してやや南に傾きながら東西方向に延びる。前述した361溝と同様の方向性をもつ鋤溝群に含まれる。検出長は約5.9m、幅約35cmである。断面は皿形を呈し、深さは約5cmである。遺物は出土しなかった。

374溝（図140） 調査区中央（20F-6h）で検出した。やや東に傾きながら南北方向を指向する遺構で、これを切っている355溝とは異なる方向性をもつ。検出長は約90cm、幅は約27cmである。断面はU字形を呈し、深さは約10cmである。耕作にともなう溝と思われる。遺物は出土しなかった。

302溝・303溝・304溝（図141） 調査区西端部（20F-9g）に位置する。南北方向を指向しながら並列する。幅約30～40cm、断面は皿形ないしU字形を呈し、深さは約5～10cmと極めて浅い。これらの遺構の周囲には同一方向の鋤溝群がひろがっている。いずれの溝からも遺物は出土しなかった。

332溝（図141） 調査区西半（20F-8e）の低地部で検出した。東西方向に延びる。検出長は約4.5m、幅は約35cmである。断面は皿形を呈し、深さは約5cmである。耕作に伴う溝と思われる。遺物は出土しなかった。

314溝（図141） 調査区の西端部（1F-1g）に位置する。313溝から分流する溝で、北東-南西に延び、北側で二股に分かる。検出した長さは約10.5m、幅は約60cmである。断面はU字形を呈し、深さは約15cmである。耕作に伴う溝と思われる。この溝の北側の延長部分は6調査区でも検出された。出土遺物はサヌカイト剥片1点で、全体に摩滅してエッジが丸みを帯びており、二次的に混入したものと見られる。

267土坑（図141） 調査区西半（20F-9f・9g）の低地部で検出した。平面形が隅丸方形気味の長大な浅い土坑で、南北方向を指向するものの、全体的な輪郭は不整形である。長さは11.5m、幅は1.3～2.5mで深さは10～20cmと極めて浅い。土師器・瓦器・須恵質土器が10点程出土したが、すべて細片で時期は判断できない。

311溝（図141） 調査区の西端部（20F-10g・10h）に位置する、南北方向の溝である。検出長は約10.5m、幅は約95cmである。断面は皿形を呈し、深さは約5cmと極めて浅い。遺物は出土しなかった。

313溝（図141） 調査区の西端部（1F-1g・1h）に位置する。南北方向に延び、北側で幅を減じる。南半部では溝の輪郭が不明瞭になり、この溝の東側に隣接する315溝の輪郭との区別がつかない状態だった。前述の314溝はこの溝の中央やや北寄りのところから派生している。検出長は約10.0m、幅は1.85～2.8mである。断面はU字形を呈し、深さは約35cmである。遺物は出土しなかった。

315溝（図141） 調査区の西端部（20F-10g）に位置する。南北方向に延び、北側で幅を減じる。検出長は約7.0m、幅は約0.35～1.1mである。断面は皿形を呈し、深さは約10cmである。前述の313溝の東

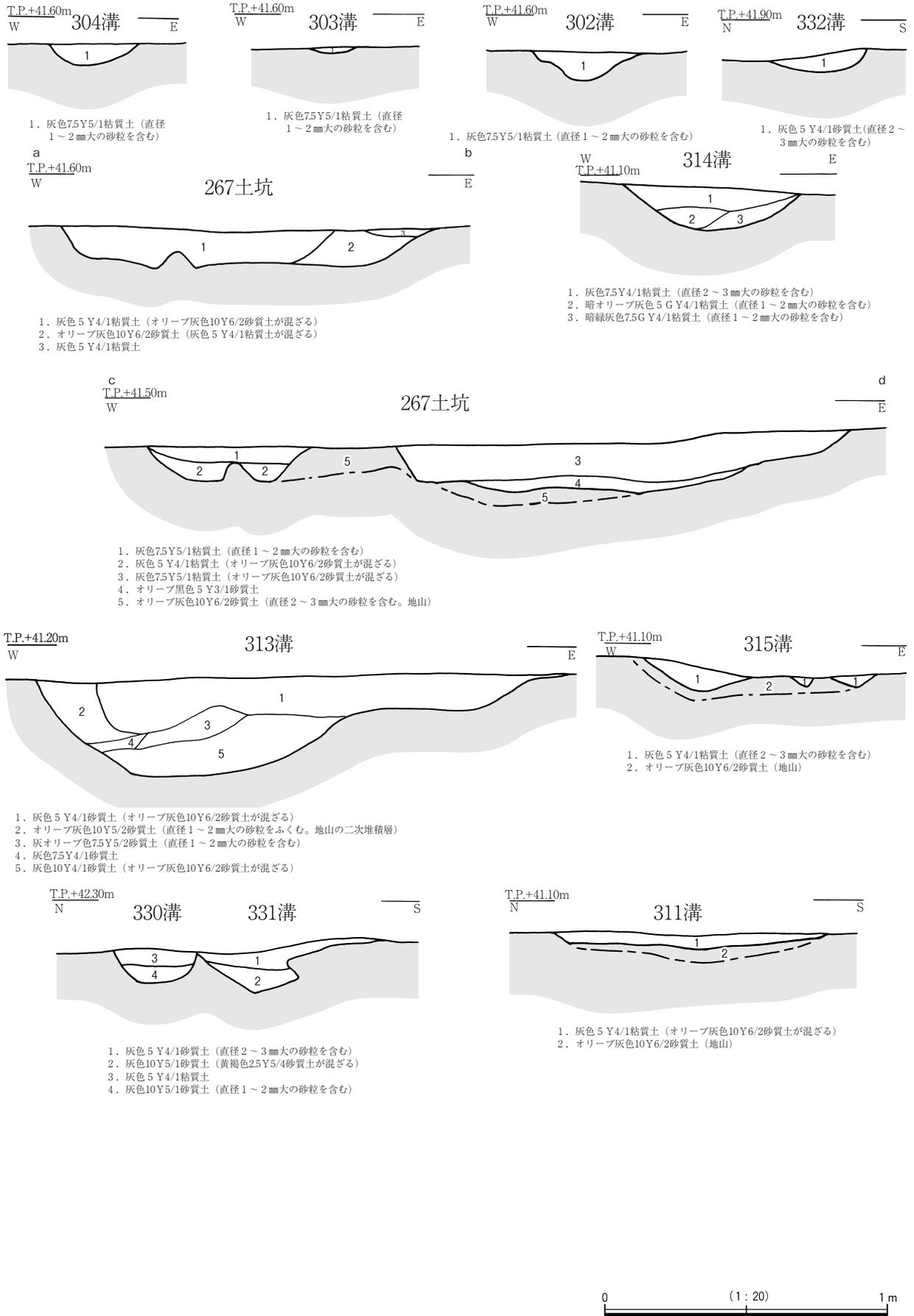
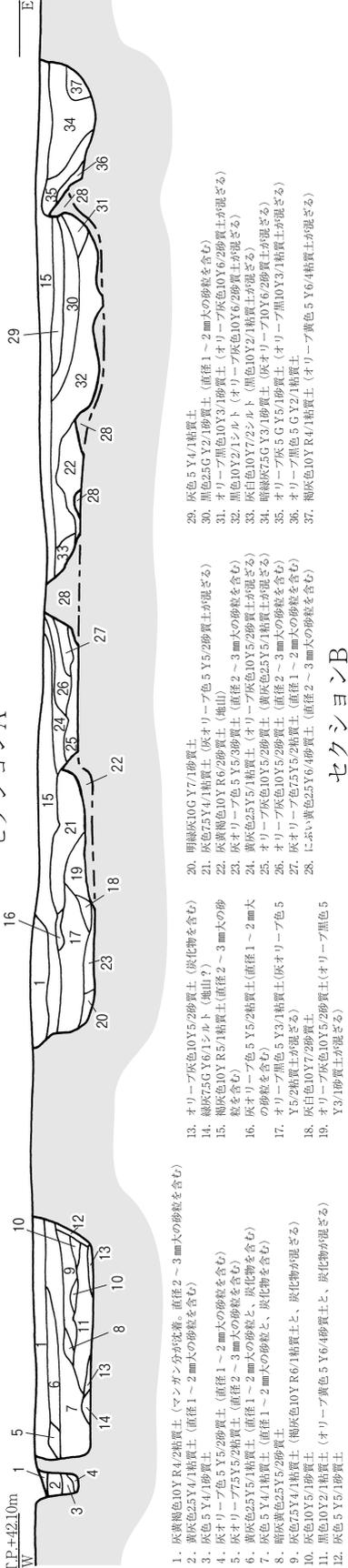


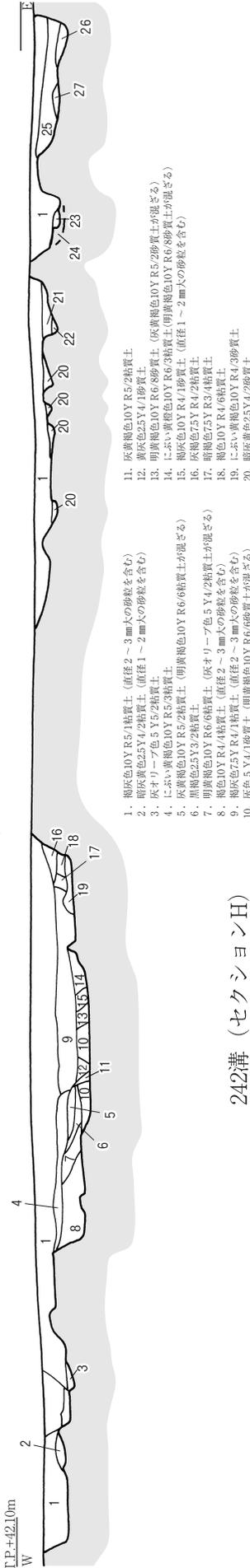
図141 有池遺跡03-1-4 調査区 溝・土坑 断面図

セクションA



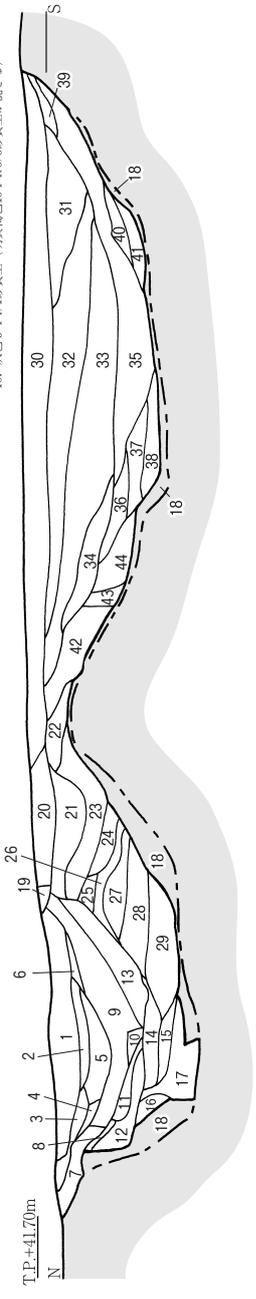
1. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土 (マンガン分が沈着、直径2～3mm大の砂粒を含む)
2. 黄灰色25Y4/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
3. 灰色5 Y4/1粘質土
4. 灰オリーブ7.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
5. 灰オリーブ7.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
6. 黄灰色25Y5/2粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
7. 灰色5 Y4/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒と、炭化物を含む)
8. 暗灰褐色2.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒と、炭化物を含む)
9. 暗灰褐色2.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒と、炭化物が混ざる)
10. 灰色10Y R6/4粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
11. 灰色10Y2/1粘質土 (オリーブ黒色5 Y6/4粘質土と、炭化物が混ざる)
12. 灰色5 Y5/4粘質土
13. オリーブ灰色10Y5/2粘質土 (炭化物を含む)
14. 暗灰7.5G Y6/1シルト (地山?)
15. 褐色10Y R5/4粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
16. 灰オリーブ7.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
17. 灰オリーブ7.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
18. 灰オリーブ7.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
19. 灰オリーブ7.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
20. 明線灰10G Y7/1粘質土
21. 灰褐色10Y R6/2粘質土 (灰オリーブ色5 Y5/2粘質土が混ざる)
22. 灰褐色10Y R6/2粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
23. 灰オリーブ7.5Y5/2粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
24. 黄灰色25Y5/2粘質土 (オリーブ灰色10Y5/2粘質土が混ざる)
25. オリーブ灰色10Y5/2粘質土 (黄灰色25Y5/2粘質土が混ざる)
26. オリーブ灰色10Y5/2粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
27. 灰オリーブ7.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
28. 灰オリーブ7.5Y5/2粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
29. 灰褐色10Y R4/1粘質土
30. 黒色2.5G Y2/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
31. オリーブ黒色10Y3/1粘質土 (オリーブ灰色10Y6/2粘質土が混ざる)
32. 黒色10Y2/1シルト (オリーブ灰色10Y6/2粘質土が混ざる)
33. 灰褐色7.5G Y3/1粘質土 (灰オリーブ7.5Y5/2粘質土が混ざる)
34. 暗線灰7.5G Y3/1粘質土 (灰オリーブ7.5Y5/2粘質土が混ざる)
35. オリーブ黒色5 Y5/1粘質土 (オリーブ黒色10Y3/1粘質土が混ざる)
36. オリーブ黒色5 Y6/4粘質土 (オリーブ黒色10Y3/1粘質土が混ざる)
37. 褐色10Y R4/1粘質土 (オリーブ黒色5 Y6/4粘質土が混ざる)

セクションB



1. 褐色10Y R5/1粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
2. 暗灰褐色2.5Y4/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
3. 灰オリーブ色5 Y5/2粘質土
4. 灰オリーブ色5 Y5/2粘質土
5. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (明黄褐色10Y R6/6粘質土が混ざる)
6. 黄褐色10Y R5/2粘質土
7. 明黄褐色10Y R6/6粘質土 (灰オリーブ色5 Y4/2粘質土が混ざる)
8. 褐色10Y R4/4粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
9. 褐色10Y R4/1粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
10. 褐色10Y R4/1粘質土 (明黄褐色10Y R6/6粘質土が混ざる)
11. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土
12. 暗灰褐色2.5Y4/2粘質土
13. 明黄褐色10Y R6/8粘質土 (灰黄褐色10Y R5/2粘質土が混ざる)
14. 明黄褐色10Y R6/3粘質土 (明黄褐色10Y R6/8粘質土が混ざる)
15. 褐色10Y R4/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
16. 褐色10Y R4/2粘質土
17. 暗褐色7.5Y R4/2粘質土
18. 褐色10Y R4/6粘質土
19. 明黄褐色2.5Y4/2粘質土
20. 暗灰褐色10Y R5/6粘質土 (直径3～4mm大の砂粒を含む)
21. 暗灰褐色10Y R5/6粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
22. 明黄褐色10Y R4/6粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
23. 褐色10Y R4/6粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
24. 明黄褐色10Y R6/8 (地山)
25. 褐色10Y R5/1粘質土 (黄褐色10Y R5/6粘質土が混ざる)
26. オリーブ黒色10Y3/1粘質土
27. 明黄褐色2.5Y6/6粘質土 (褐色10Y R5/1粘質土が混ざる)

242溝 (セクションH)



1. 褐色10Y R4/1粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
2. 明黄褐色10Y R5/4粘質土
3. 褐色10Y R4/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
4. 灰褐色2.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
5. 暗灰褐色2.5Y5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
6. 褐色10Y R2/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
7. 褐色10Y R2/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
8. オリーブ黒色5 Y3/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
9. 暗褐色2.5Y8/2粘質土
10. 灰褐色10Y R4/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒が混ざる)
11. 暗褐色2.5Y8/2粘質土
12. 暗褐色2.5Y2/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
13. 暗褐色10Y R3/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
14. 暗褐色2.5Y7/2粘質土 (暗灰褐色2.5Y5/2粘質土が混ざる)
15. 灰褐色2.5Y7/2粘質土 (暗褐色10Y R3/1粘質土が混ざる)
16. 暗褐色2.5G Y4/1粘質土 (褐色10Y2/1粘質土が混ざる)
17. 褐色2.5Y1/1粘質土 (灰褐色2.5Y6/4粘質土が混ざる)
18. 灰オリーブ色5 Y5/3粘質土 (地山)
19. 灰褐色10Y R5/2粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
20. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
21. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
22. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
23. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
24. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
25. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
26. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
27. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
28. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
29. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
30. オリーブ黒色10Y R3/1粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
31. オリーブ黒色5 Y3/1粘質土 (褐色10Y2/1粘質土が混ざる)
32. 褐色5 Y R1/7粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
33. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
34. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
35. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
36. 暗褐色2.5Y1/1粘質土 (直径1～2mm大の砂粒を含む)
37. オリーブ黒色10Y3/1粘質土
38. 暗褐色10Y R2/1粘質土 (直径4～5cmの花崗岩を若干含む)
39. 暗褐色10Y R2/2粘質土
40. 暗褐色10Y R4/1粘質土
41. 暗褐色2.5Y3/1シルト
42. 暗褐色2.5Y4/2粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
43. 暗褐色10Y R4/1粘質土 (直径2～3mm大の砂粒を含む)
44. 暗褐色2.5Y3/1シルト

図142 有池遺跡03-1-4調査区 セクションA・B・H 断面図

側に隣接し、溝の南半部で313溝の輪郭との違いが不明瞭になる。遺物は出土しなかった。

330溝 (図141) 調査区西半 (20F-8e) の低地部分に位置する、東西方向に延びる溝である。溝の西端で331溝の輪郭と一体化して、区別することができなかった。西に対してやや北に振る東西方向の鋤溝群が広がるエリアに位置するが、前述した333溝と同様のカーブを描くことから、333と同時期に形成されたものである可能性が高い。検出長は約1.9m、幅は約30cmである。断面はU字形を呈し、深さは約10cmである。耕作にともなう溝と思われる。遺物は出土しなかった。

331溝 (図141) 調査区西半 (20F-8e) の低地部に位置し、前述の330溝の南側で平行して延びる東西方向の溝である。溝の西端で330溝との輪郭が不明瞭になっている。330溝の項目で述べたような理由で333溝と同時期に形成されたものである可能性が高い。検出長は約90cm、幅は約65cmである。断面はU字形を呈し、深さは約15cmである。耕作に伴う溝と思われる。遺物は出土しなかった。

242溝 (図142・セクションH) 低地部分 (20F-4b) で、かつ調査区の北壁寄りで見出した。西に対してやや南に振る東西方向の溝で、東から西に向けて水を落としていたとみられる。溝の肩はやや蛇行するような凹凸を見せる部分もあるが、幅はおおむね2~3mを測り、東から西に向けて徐々に幅が広がる。この西側は6調査区に続く。位置や流れの方向からみて、免除川の旧流路をある程度利用しながら掘削されたものと考えられる。また溝の西肩では分岐箇所を複数認めた。これらのことから低地につくられた耕作地に配水する機能も有していたと考えられる。埋土最下層の黒色粘質土ないしシルト層に

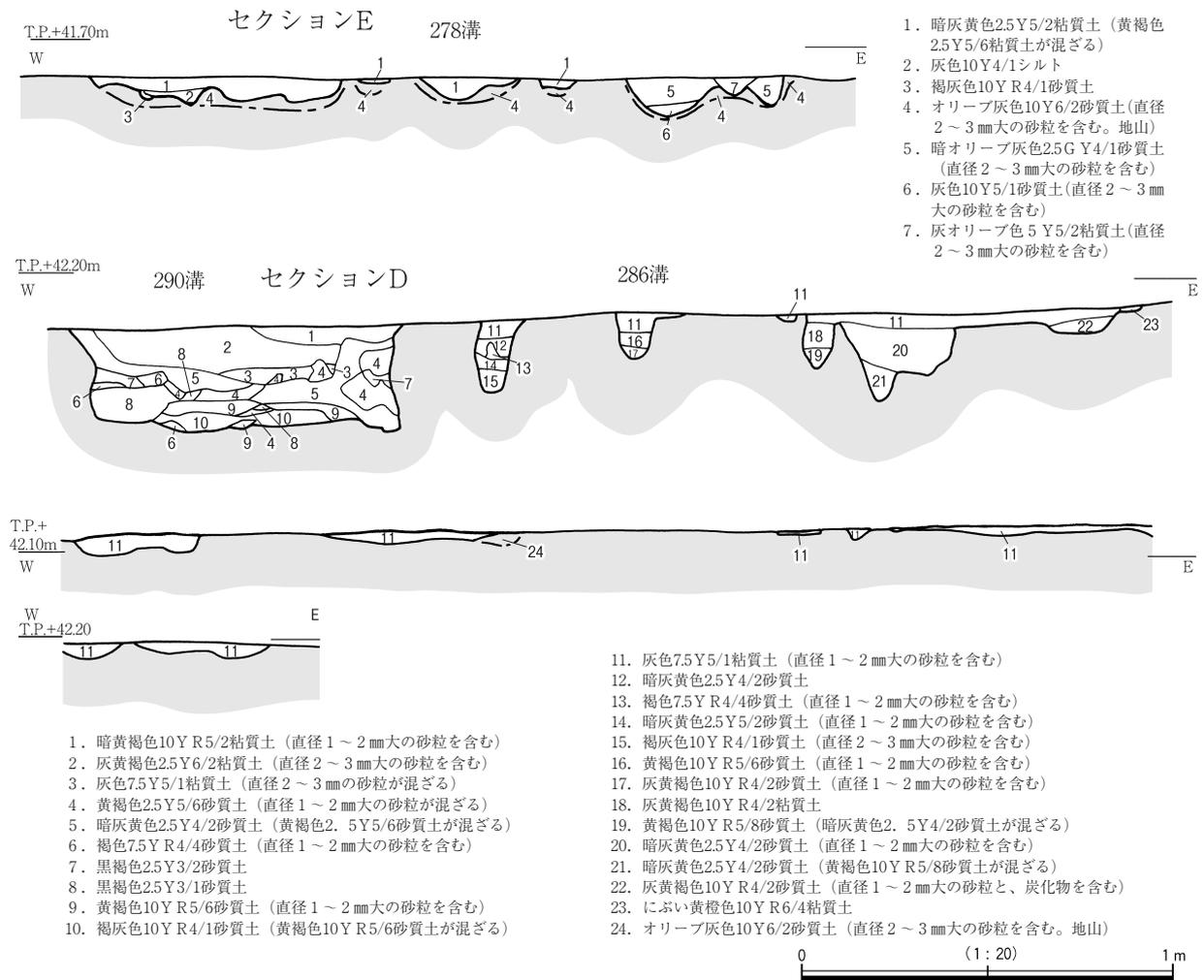


図143 有池遺跡03-1-4調査区 セクションE・D 断面図

は古墳時代から飛鳥時代の遺物が含まれていた。そして埋土上層と中層には中世の遺物が含まれていた。遺構埋土の土層断面観察より、この溝が何度も掘りなおされたことがうかがえる。

埋土より瓦器・土師器・瓦質土器・土師質土器・須恵質土器等が出土した。そのうち瓦器椀・須恵器・瓦・磁器を図化した。細片のため図化しなかった遺物の中には奈良時代に遡るとみられる土師器甕・甗が含まれるが、それ以外の遺物のうち時期判断が可能な瓦器椀に関しては図化した遺物とほぼ同じ時期、つまり13世紀前半の所産と考えられる。

セクションA (図142) 調査区西半部の南端に広がる南北方向に長い不整形な落込を、横断するように設定した東西方向の土層観察用断面である。断面図をみると、1辺2～3mの掘り込みが切りあった様子がうかがえる。それぞれの掘り込みは平坦な底部から側壁が直立しており、断面形は隅丸長方形である。深さはほぼ一定していて、おおむね40～50cmである。遺構断面の土層を観察すると、遺構埋土は徐々に埋積したとみられるが、遺物の混入量は極めて少なかった。

断面隅丸長方形の掘り込みが高密度に一箇所にまとまっている点、遺物の出土量が少ない点などからみて、粘土採掘坑の可能性が高いと考える。ただそうであれば、土坑内が一挙に埋め戻されていない点は疑問点としてあげられる。

セクションB (図142) 前述のセクションAから北に約9mのところ、セクションAに平行して設定した東西方向の土層観察用断面である。セクションAがとらえている不整形な落込の北端部分と、その西側に隣接する落込の中央部分にあたっている。ここでとらえている西側の落込の断面も、平坦な底部から側壁が直立する隅丸長方形である。最深部が50cmに達する点もセクションAで掲示した落込の断面形と一致することから、粘土採掘坑の可能性が考えられる。東側の落込断面の底部は必ずしも平坦ではないが、これは断面の位置が、落込の肩部近くにあたっているためと考える。

セクションE (図143) 調査区西半部の南端で検出した南北方向の溝が密集している部分に設定した。平面的にはそれぞれの溝の輪郭が不明瞭だが、土層断面図を見ると深さ5～10cmで、幅10～30cmを主とする溝が切りあう状況をとらえることができる。耕作に伴う溝と考える。

セクションD (図143) 調査区西半の低地部で、南北方向にのびる土坑や溝、落込が密集する部分に設定した。290土坑は平坦な底部と直立する壁面からなり、断面形は長方形である。セクションA・Bでとらえた不整形土坑の断面の形状と一致する。したがってこの土坑も粘土採掘坑の可能性もある。それ以外の遺構断面は、おおむね幅が10cm前後の溝が隣接したものととらえることができる。溝に関しては遺構埋土の土質は共通するものの、深さが5cm前後と極めて浅いものと、20cm前後のものが認められる。

4. 5 調査区 (図144~148)

南側は市道に、北側と西側は水路に区切られた東西方向に長い区画である。北側は4調査区、西側は2調査区、南側は1調査区が隣接する。調査区のほぼ全域が居住域として利用されていたようで、ピット・土坑・東西もしくは南北方向の溝を多数検出した(図144)。南北方向を指向する溝の中には、1調査区で検出した屋敷地の区画溝に対応する位置関係を持つものもみられ、区画溝を介して複数の屋敷地が隣接する景観は1調査区から5調査区に渡って広がっていたことがわかる。また5調査区の東端部分では埋土に多量の土器を含み、深さが1m近くになる2条の平行する溝と、それよりも幅が狭くて浅い南北方向の溝とに画された部分があった。平行する東西方向溝には陸橋状にとぎれる部分があり、屋敷地の出入り口と考えられる。ただ屋敷地となる方形区画の大部分が調査区外に当たることもあり、その実態は十分につかめなかった。

調査区北西寄りの部分では、現在の水路に並行するように東西方向に細長く地盤が下がるエリアを検出した。この部分では一定方向にのびる耕起痕とみられる溝を多数検出したことから、生産域と考えられる。また西側の水路と南側の市道際の部分でも、地盤高が下がる状況が認められた。こちらの部分では井戸を検出した。この落込は調査区外に広がっているが、1調査区や2調査区には及んでいないことから、生産域を構成するような広がりを持っていないとみられる。

前述したように当調査区では溝で区画された空間で多くのピット群を検出しているが、柱痕跡あるいは礎石など確実に建物の柱穴として認識できるピットは少なく、建物を復原するには困難な状況であった。建物の復元にあたっては、多数検出したピット群から、形状の類似性や位置的關係を手掛かりとした。その結果、9棟の建物および1条の柵を認識できた。



図144 有池遺跡03-1-5調査区 景観概念図

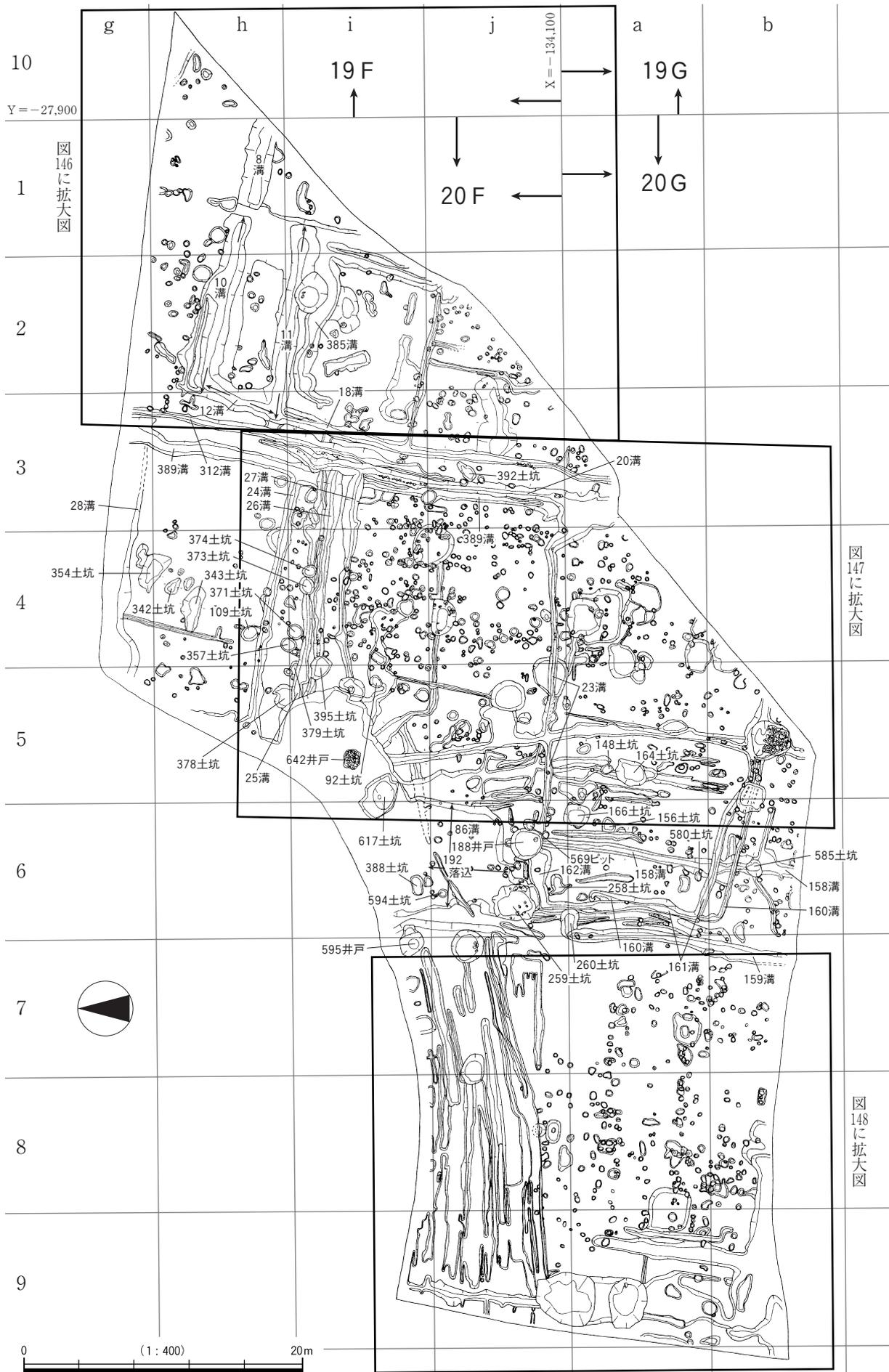


図145 有池遺跡03-1-5調査区 平面図 (全体)

建物1 (図149) 東西3間(7m)×南北2間(4.6m)の東西棟である。建物の主軸方向は、W-2°-Nの振れを持ち、床面積は32.2㎡である。建物の梁間2間のうち南の1間分は柱間1.5mの底部となっており、北側身舎部の柱間は3.1mと広くとる。桁行柱間は中央間が2.5mと広く、両脇柱間は2.2m~2.3mである。柱穴の形状は30cm~60cmの不整形な円形ないし楕円形で、深さは20cm~30cmである。建物南東隅の柱穴を、14世紀前半の遺物を含む79土坑の下層で検出している。建物の南に並行して走る576溝と同時期になる可能性が高く、建物の時期は13世紀に遡ると考えられる。周辺に多数のピットがあり建

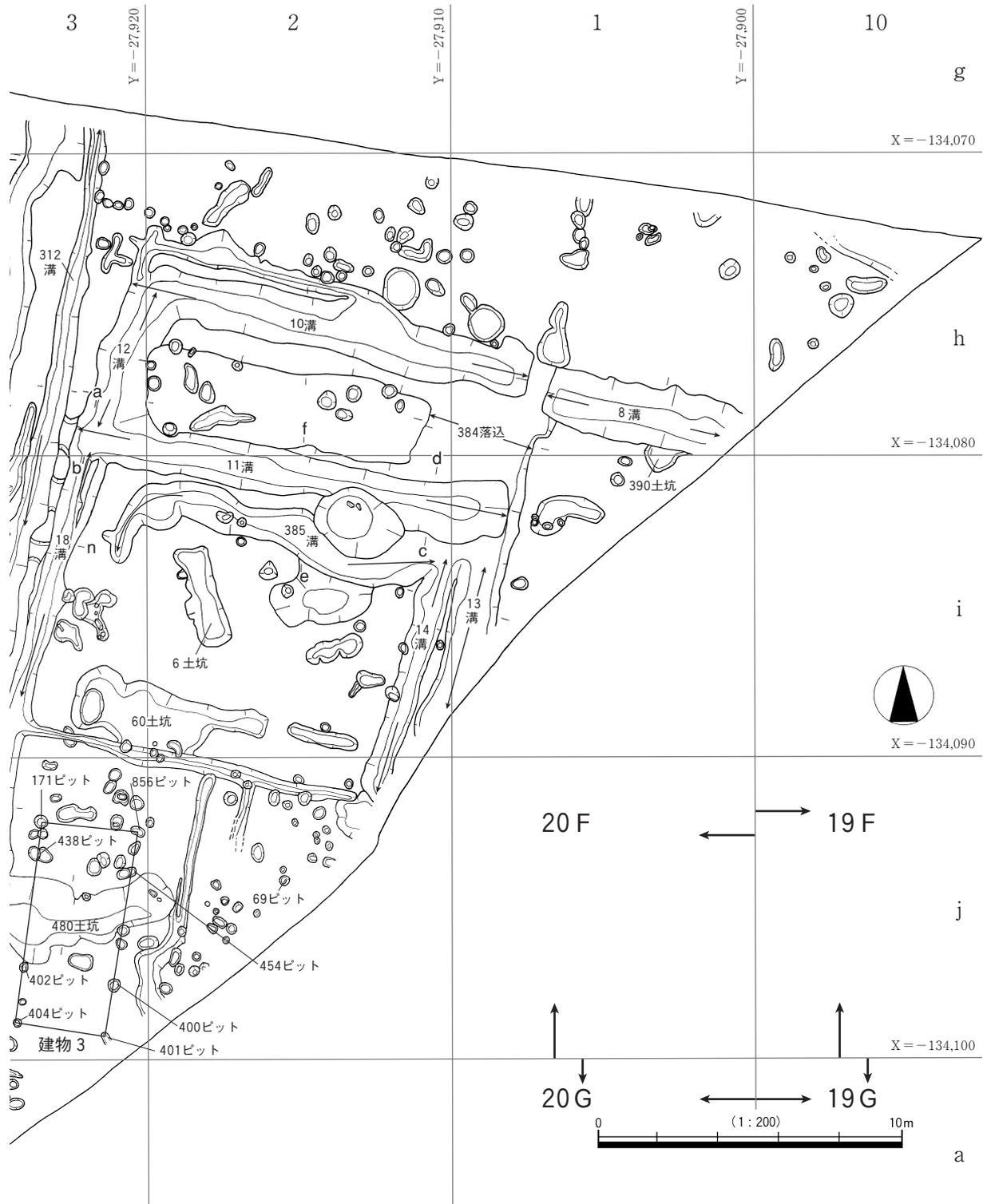


図146 有池遺跡03-1-5 調査区 平面図 (部分)

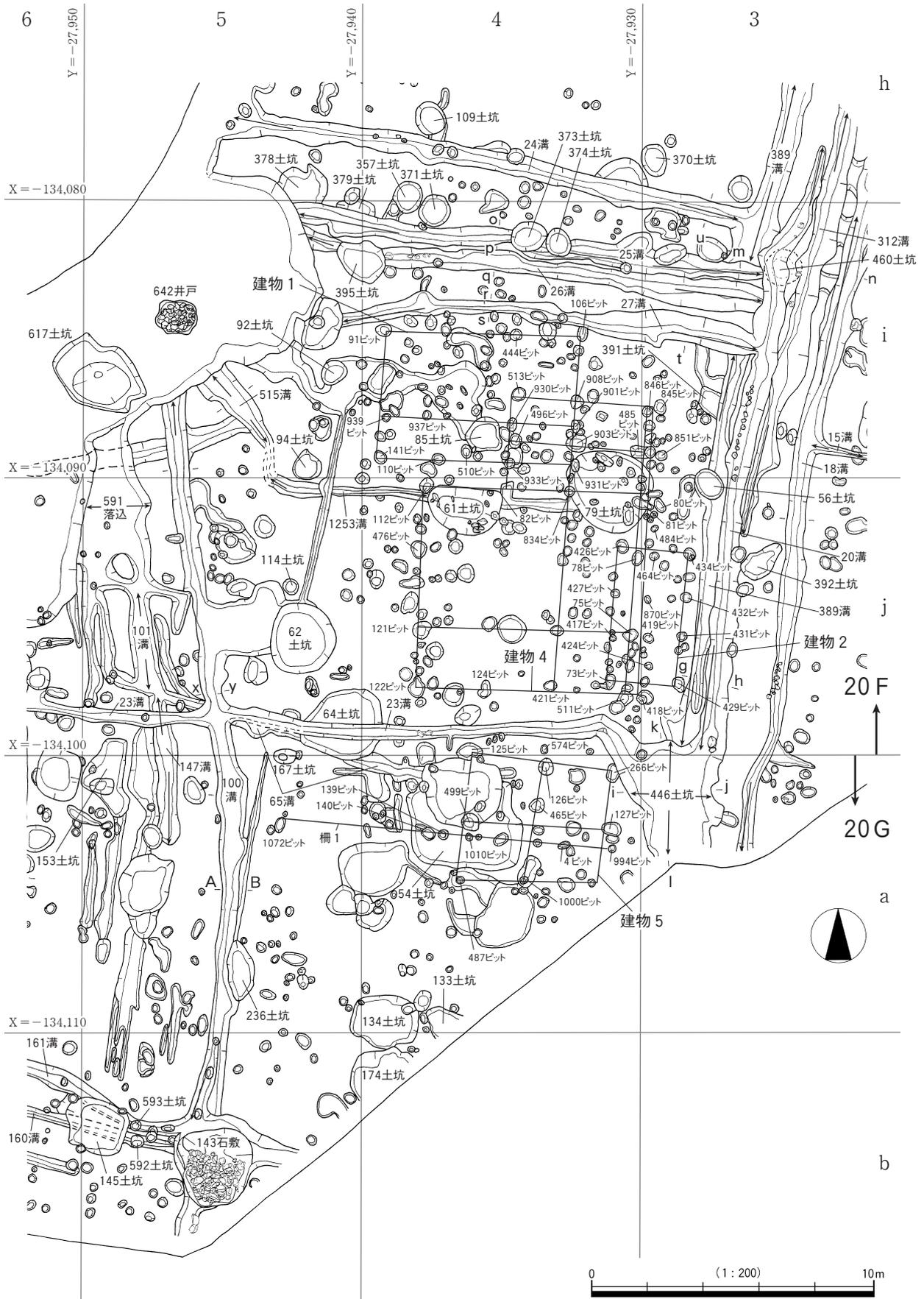


図147 有池遺跡03-1-5 調査区 平面図 (部分)

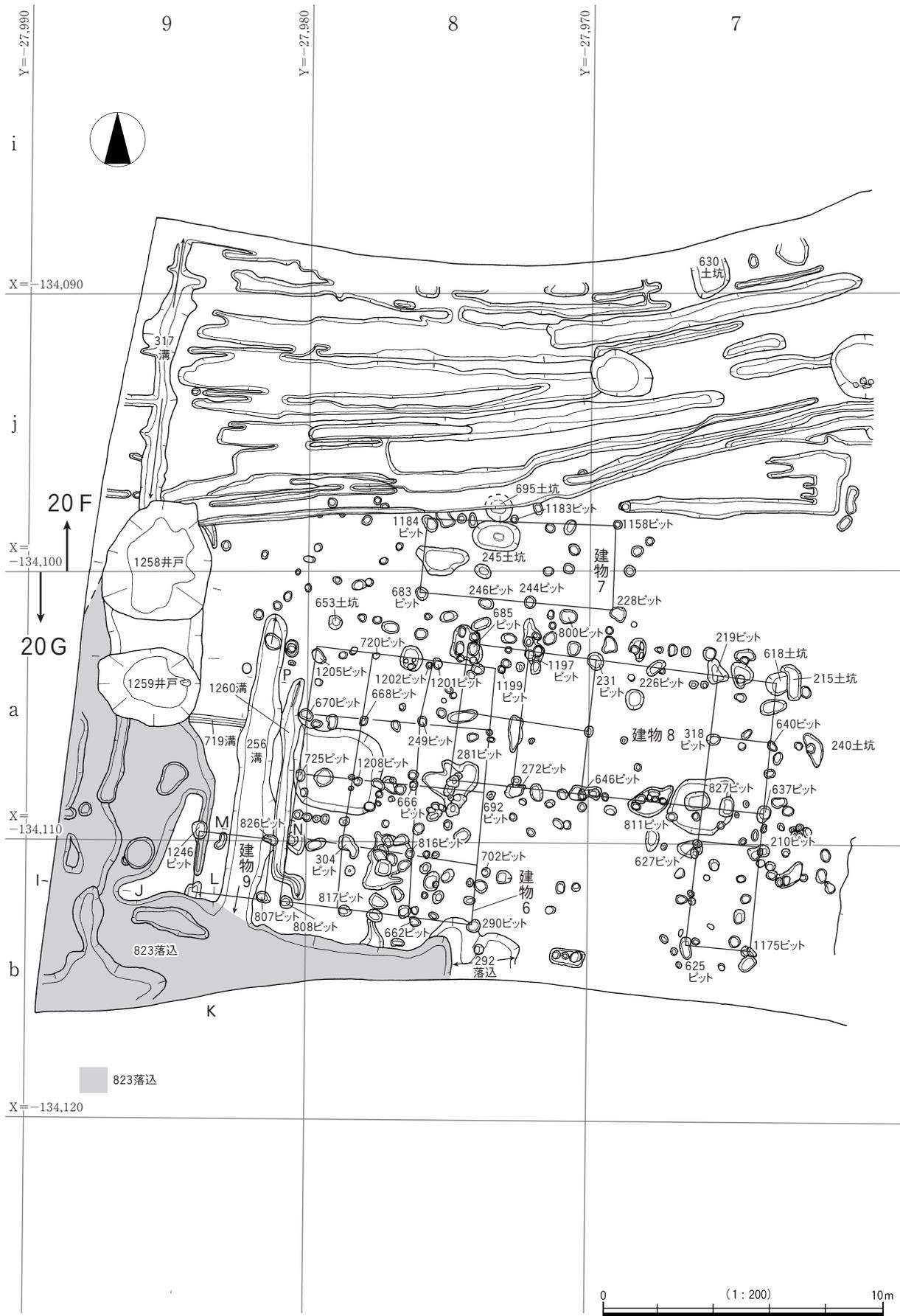


図148 有池遺跡03-1-5調査区 平面図 (部分)

て替えが想定できるが、建物としてのまとまりは他には把握できなかった。

建物 2 (図150) 南北3間(4.9m)×東西1間(2.6m)の南北棟建物で、建物の主軸方向は $N-4^{\circ}30'$ - Eの振れをもつ。桁行の柱間は1.2~1.3mで、床面積は約12.7㎡とやや小規模な建物である。柱穴の形状は20cm~40cmの不整形な円形で、深さも5cm~25cmと一定でない。南西隅柱にはピットの中ほどに拳大の石を据えて、柱高を調節した痕跡が伺える。位置的関係から建物1と同時期と考えられ、建物1と比較して小規模な南北棟であることから、建物1が母屋で、建物2は副屋である可能性が高い。

建物 3 (図150) 南北4間(6.8m)×東西1間(3.05m)の南北棟建物で、建物の主軸方向は $N-8^{\circ}$ - Eの振れをもつ。床面積は約20.7㎡である。西側柱中央の柱穴は攪乱のため検出できなかったが、桁行の柱間は1.2m~1.8mと不揃いとなっている。また、柱穴の形状も30cm~40cmの不整形な円形ないし楕円形で、深さは15cm~30cmである。西辺を18溝が南北にはしり、北辺および東辺にも建物を囲うよう

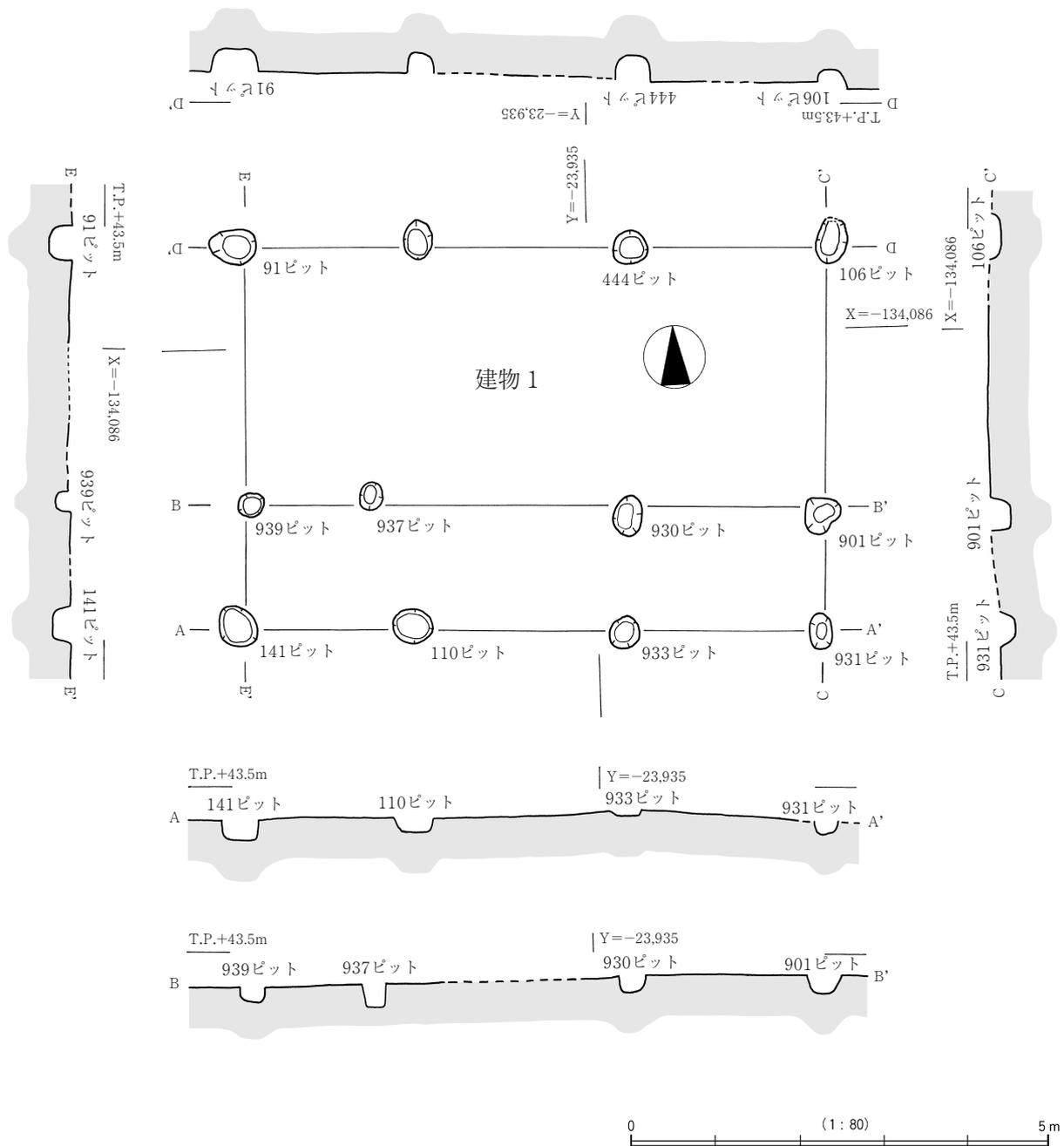


図149 有池遺跡03-1-5調査区 建物1 平・断面図

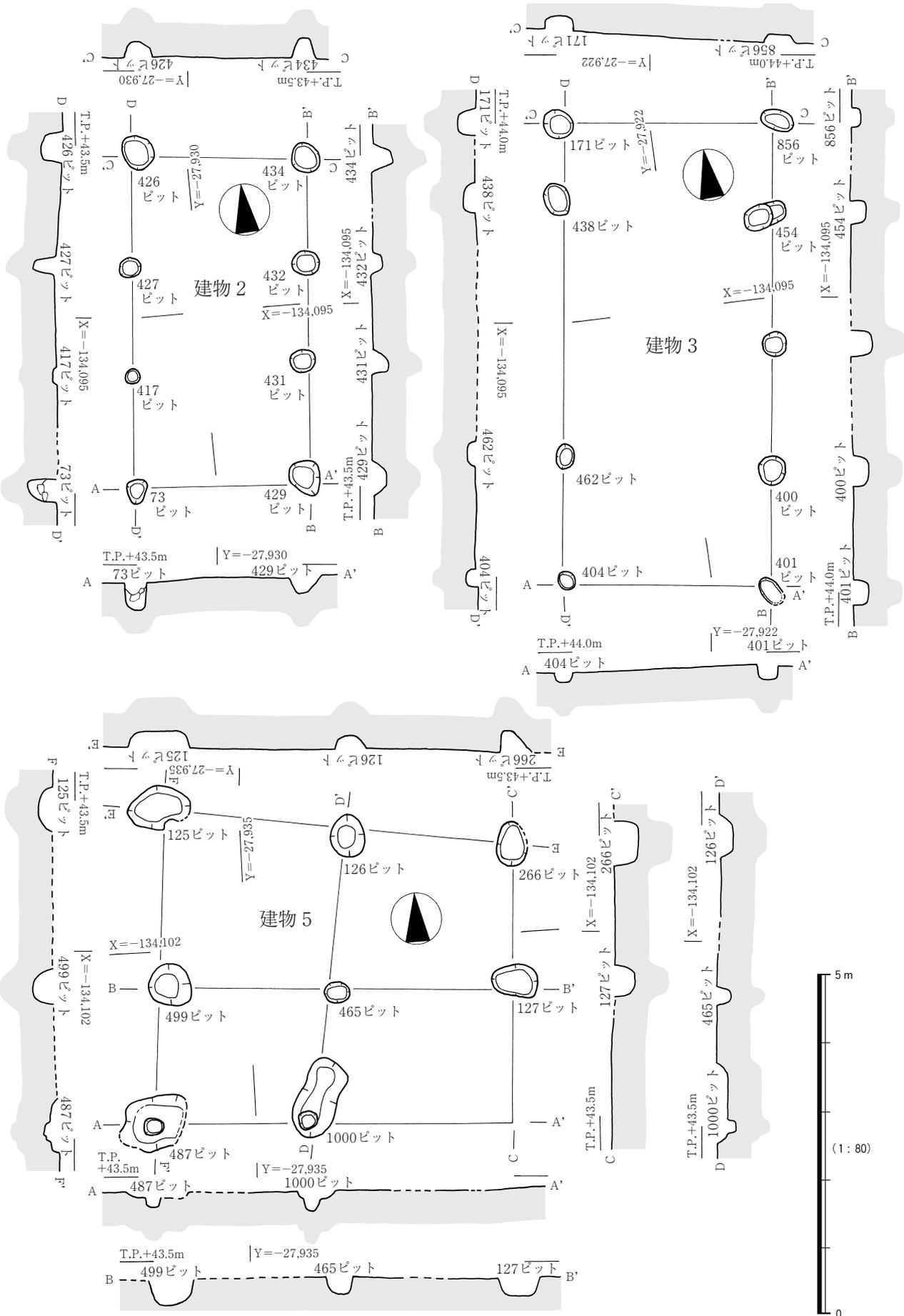


図150 有池遺跡03-1-5調査区 建物2・3・5 平・断面図

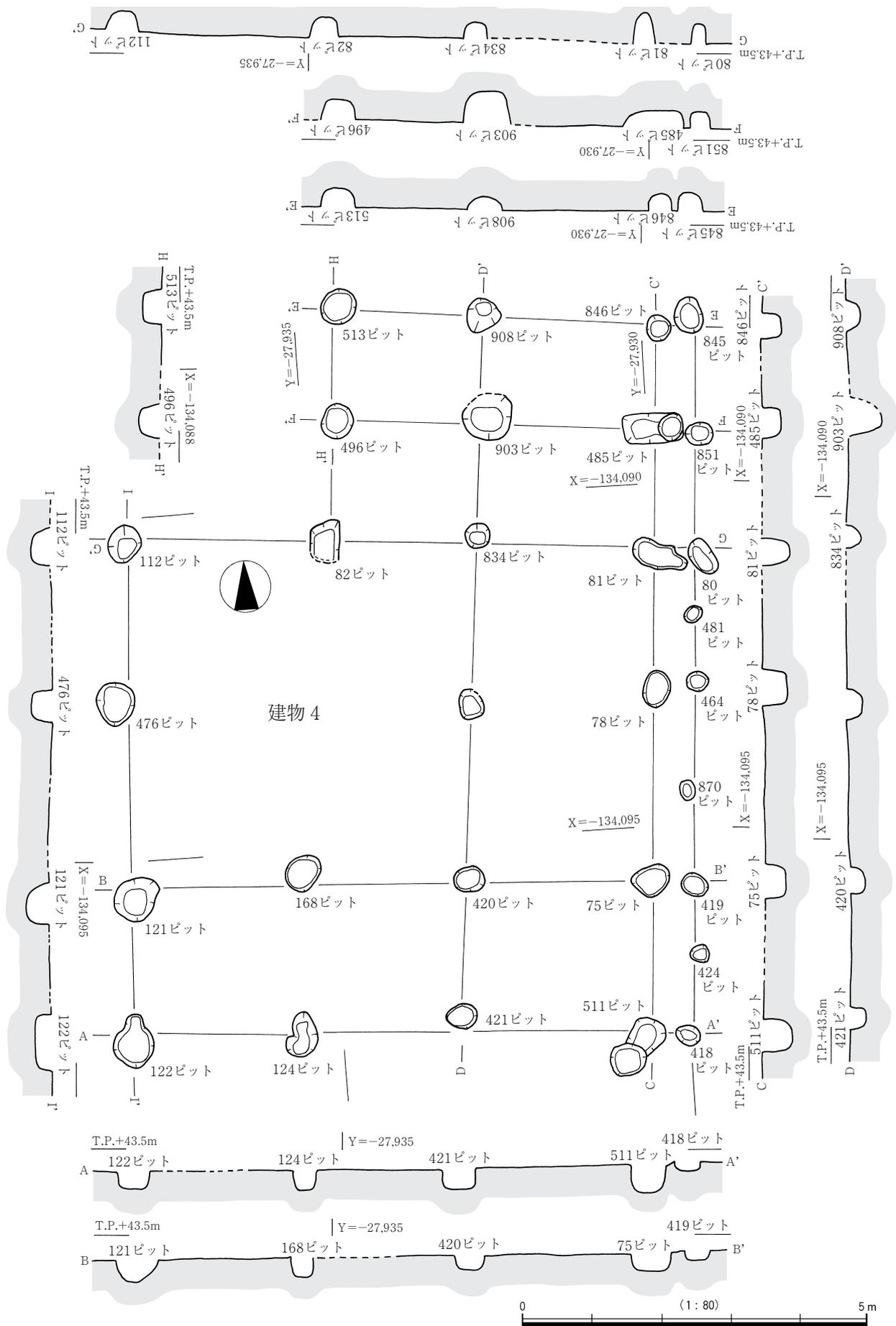


図151 有池遺跡03-1-5調査区 建物4 平・断面図

に小溝が巡っており、これらの溝群は建物3と一連の遺構と考えられる。

建物4 (図151) 建物1・2と重複する位置で検出した南北棟建物である。南北5間(約10.5m)×東西3間(約7.6m)で、北西隅の南北2間×東西1間分が欠けた平面プランとなっている。また、東側柱列から約1.1m東に離れた位置で、柱筋を揃えた南北ピット列を検出している。東側柱からの距離が狭いことや、柱間の中間にも小ピットが設けられていること、柱穴の大きさが全体的に小さいことから、縁束柱になると考えられる。柱穴の形状は35cm～70cmの不整形な円形ないし楕円形で、深さは30cm～50cm、縁想定部の柱穴は20cm～50cmの不整形な円形ないし楕円形で、深さは20cm～30cmである。建物の主軸方向の振れはN-4°-Eで、床面積は縁想定部も含めて約81㎡となっている。

建物の構造をみると、柱間は1.5m～2.7mと不揃いだが、基本的には総柱構造である。ただ、西から2列目、南から3列目の柱穴だけが検出できず、この場所が2間×2間の土間構造になっていた可能性がある。なお、61土坑はこの土間想定部の北側柱西1間に北辺ラインを揃えるように穿たれており、東西幅も柱間に収まっていることから、建物4に関連する遺構と想定できる。土坑からは13世紀後半から14世紀前半の遺物が出土しており、建物の建立時期を示唆している。

建物5 (図150) 建物4の南で検出した東西2間×南北2間に復原できる建物であるが、南東隅柱は検出できなかった。南側柱と東側柱の延長で南東隅柱を復元すると、東西幅が5.2m、南北幅が東側柱列で4.1m、西側柱で4.7mとやや歪んだ平面プランをもつことになる。柱穴の形状は側柱で40cm～90cmのやや大きな不整形円形で、南側柱に残された柱痕跡は直径30cmとなっている。深さは25cm～40cmである。床面積は約22.9㎡で、歪みの少ない南北方向の主軸で振れをみると、N-4°30'-Eとなっている。東側柱を建物4と揃えており、建物4と同時期に建てられた倉庫と想定できる。

なお建物5の柱穴である125ピットと499ピットに関しては後の項で個別に詳述しているので参照されたい。

建物6 (図152) 南北4間(9.2m)×東西3間(6.8m)の南北棟建物である。構造は総柱建物で、側柱の柱筋は通るが柱間は2.0m～2.7mと不揃いになっている。建物の主軸方向の振れはN-6°30'-Eで、床面積は約62.6㎡である。柱穴は全体的に小さく、形状は20cm～50cmの不整形な円形ないし楕円形で、深さは5cm～25cmと浅い。建物内では他にも多くの小ピットを検出しており、その一部は柱筋が通ることから床束になる可能性もある。なお、西側柱列の南端柱間の西には、後述する建物9がある。柱間の長さが若干異なり、柱筋も合わないため別の建物として報告するが、位置的關係から建物9の付属施設となるかもしれない。12世紀中葉から13世紀後半の遺物を包含する256溝あるいは823落込が、建物の南と西に穿たれており、これらの溝と建物6との関係が想定できる。

建物7 (図153) 建物6の北東で検出した、東西4間×南北1間の東西棟建物である。東西方向の桁行は7mあるが柱間が1.5m～2.3mと不揃いで、梁間も東が3.2m、西が2.7mとやや歪んだ平面プランをもつ。建物の主軸方向の振れはW-3°30'-Nで、床面積は約21㎡である。柱穴の形状は20cm～60cmの不整形な円形ないし楕円形で、深さは15cm～25cmと浅い。建物6との位置關係から、同一時期の建物と考えられる。規模から想定すると、母屋にあたる建物6に対して、建物7が副屋に相当するのであろう。

建物8 (図154) 東西5間(11m)×南北2間(4.8m)の東西棟建物の南東隅に、東西1間(2.3m)×南北2間(5.1m)の張り出しがつく。建物の主軸方向の振れはW-6°-Nで、床面積は張り出し部も含めて約64.5㎡である。柱穴の形状は不整形な円形ないし楕円形だが、大きさが20cm～90cmと不揃いになっており、一部は不整形で浅い落込内で検出している。柱穴の深さは20cm～30cmほどである。母屋

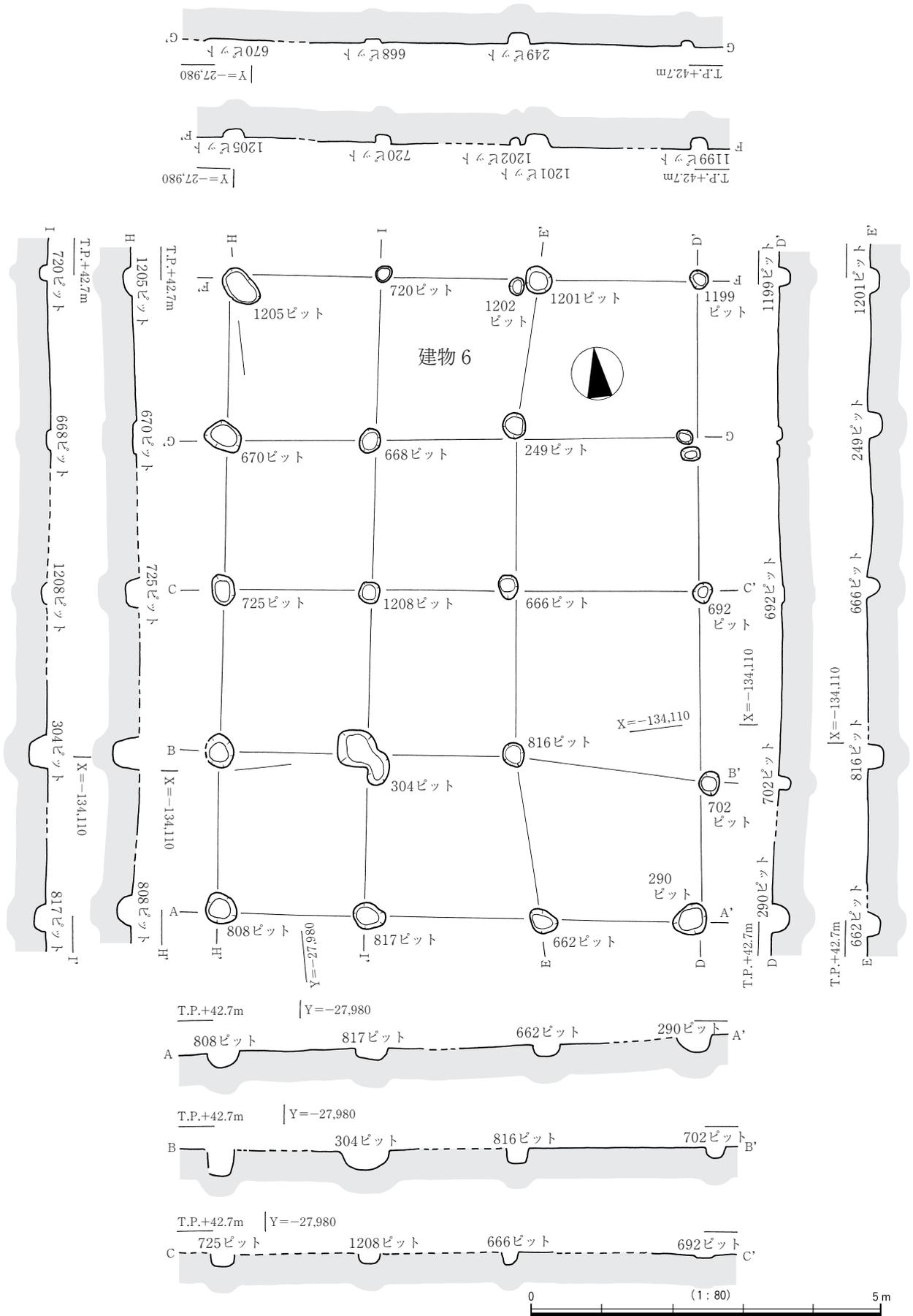


図152 有池遺跡03-1-5調査区 建物6 平・断面図

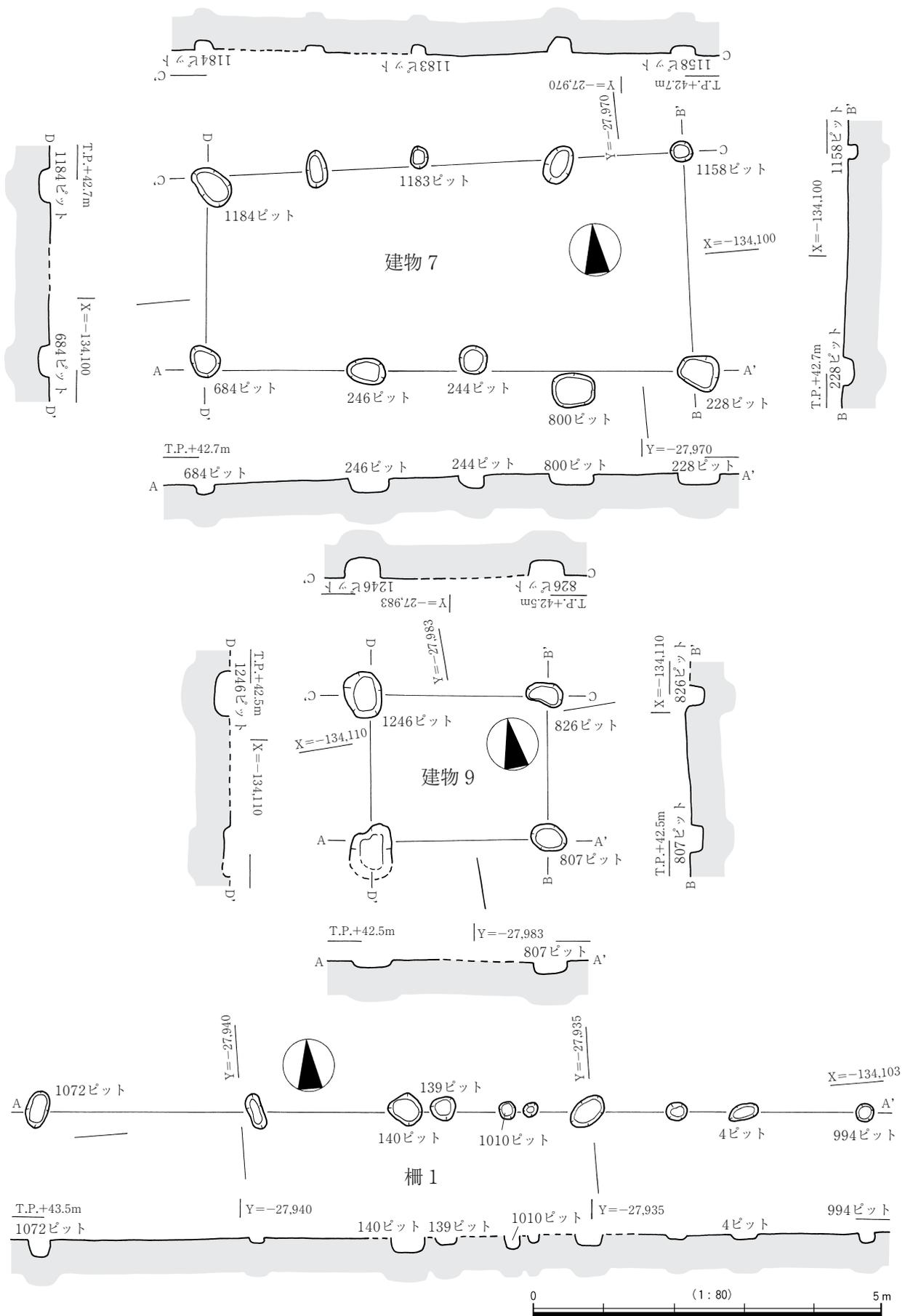


図153 有池遺跡03-1-5調査区 建物7・9・柵1 平・断面図

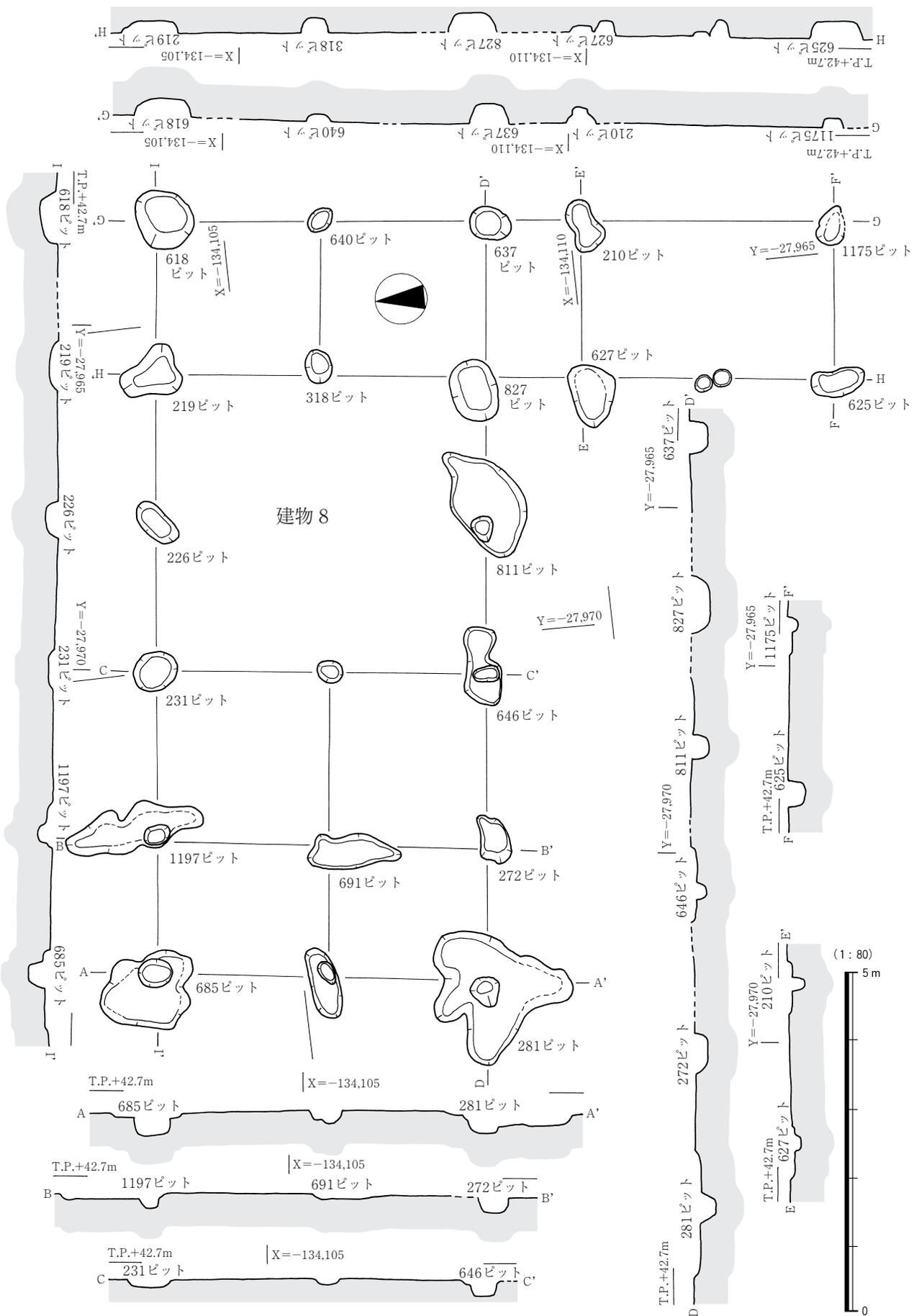


図154 有池遺跡03-1-5調査区 建物8 平・断面図

の梁間はほぼ2.4m等間であるが、桁行の柱間は1.9m～2.6mとばらついている。また、母屋は基本的には総柱建物であるが、東から2間目に中央柱がなく、この部分が2間×2間の土間構造になっていた可能性がある。南東の張り出し部の柱間は、北1間が1.4mと短く、南1間が3.7mとかなり長くなっている。西側柱列の南1間部中央に小さいピットを検出しており、これらのピットを柱穴と認識すれば、南北柱間3間で南2間の柱穴間が1.8m～1.9mとバランスがよくなるが、東側柱列では対応するピットを検出していない。

なお、建物8の柱穴以外にも、柱筋に沿って多くのピットを検出しているが、別建物としては認識できていない。とくに、母屋の北側柱列の北と南側柱の南に沿って並行するピット列を検出しており、これらのピット群は建物の補修か一部建替が行なわれた痕跡と考えられる。また、建物6および建物7との前後関係が問題となるが、検出状況からは前後関係を確定することができなかった。

建物9 (図153) 建物6の西南隅の西に接して検出した、東西1間(2.5m)×南北1間(2.1m)の小規模な建物である。柱穴の形状は40cm～60cmの不整形な楕円形で、深さは10cm～25cmと浅い。建物の振れはN-9°-Eで、床面積は5.25㎡である。前述したように建物6の付属施設となる可能性があり、823落込でL字状に区画された空間の南西隅に位置している。

柵1 (図153) 建物5と重複して検出した東西方向の柱穴列である。検出した長さは約12mで、柱間は0.8m～3.0mと不揃いになっている。柱穴の形状は20cm～60cmの不整形な楕円形で、深さは10cm～25cmと浅い。W-4°-Nの振れを持ち、建物1および建物2と同時期で、建物群の南を画する柵になる可能性が高い。

62井戸 (図155) 調査区の中央部分(20F-5j)で検出した、直径2.5m前後の隅丸方形気味の土坑である。深さは1m程度だが、湧水層を掘り抜いており、常時水が溜まっている状態だったとみられる。遺構埋土に地山の土が、直径5mm以下のブロック状に混入するが、これは土坑の壁面から崩落したものとみられる。徐々に埋まったもので、人為的に埋められたとは考えにくい。

遺構埋土から瓦器椀・青磁椀・東播系須恵器鉢をはじめとする、土器片が比較的多く出土した。出土遺物は図化しなかったものも含めると、13世紀全般にわたる時期のものからなるが、量的には後半代のもものが過半数を占める。

595井戸 (図155) 調査区やや北西寄りの低地部分(20F-6i・7i)で検出した。長軸1.8m・短軸1.5mの隅丸長方形ぎみの楕円形の土坑の東側に、一辺1m弱の隅丸方形のステップがとりついたような形状である。調査区際に位置するのに加え、ほぼ垂直に掘り込まれている遺構埋土が崩落しやすかったため、遺構の底部までは確認しなかったが、素掘りの土坑とみられる。湧水層に達しており、遺構埋土掘削中にも著しい湧水が認められた。

瓦器椀・土師器皿・瓦質鍋が10点弱出土した。そのうち瓦器椀と土師器皿を各1点図化した。それらは14世紀前半の所産とみられる。また図化しなかったが瓦質鍋は口縁部の形態から13世紀後半代のもものとみられる。出土遺物の時期はすべて13世紀後半～14世紀前半におさまるとみられる。

188井戸 (図156) 調査区中央部分(20F-6j)の遺構密集域で検出した。地盤高が北側の生産域に向けて下がる落ち際に位置していて、東西もしくは南北方向を指向する複数の溝を切っている他、複数のピット・土坑との切り合いも認められる。前述の595土坑より10m弱南東に位置する。直径2.2mの円形の土坑で、1m弱掘り下げた段階で著しい湧水が認められた。

瓦器椀・青磁椀・東播系須恵器鉢などが出土した。青磁椀は12世紀中葉～後半代にさかのぼるとみら

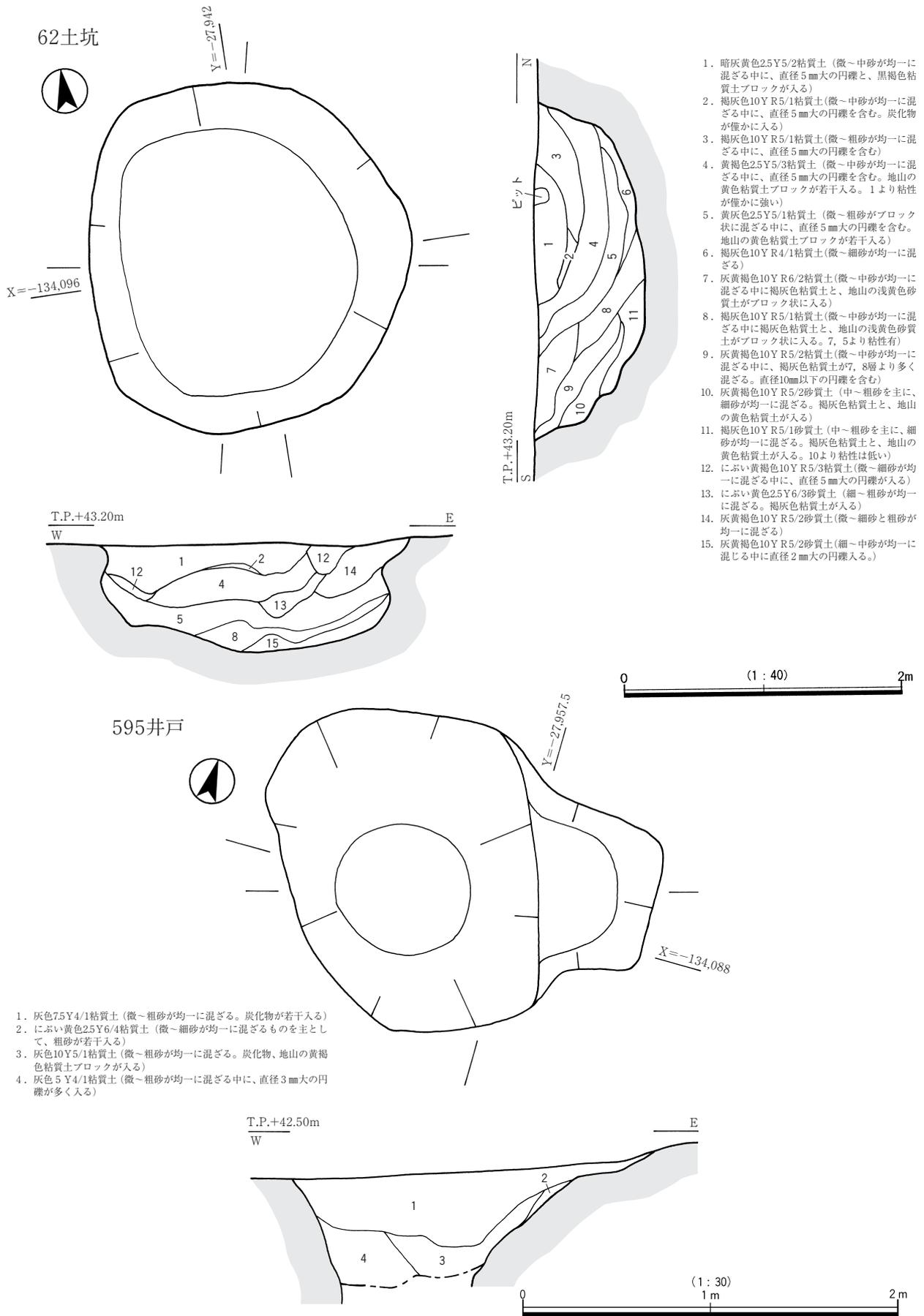


図155 有池遺跡03-1-5調査区 井戸 平・断面図

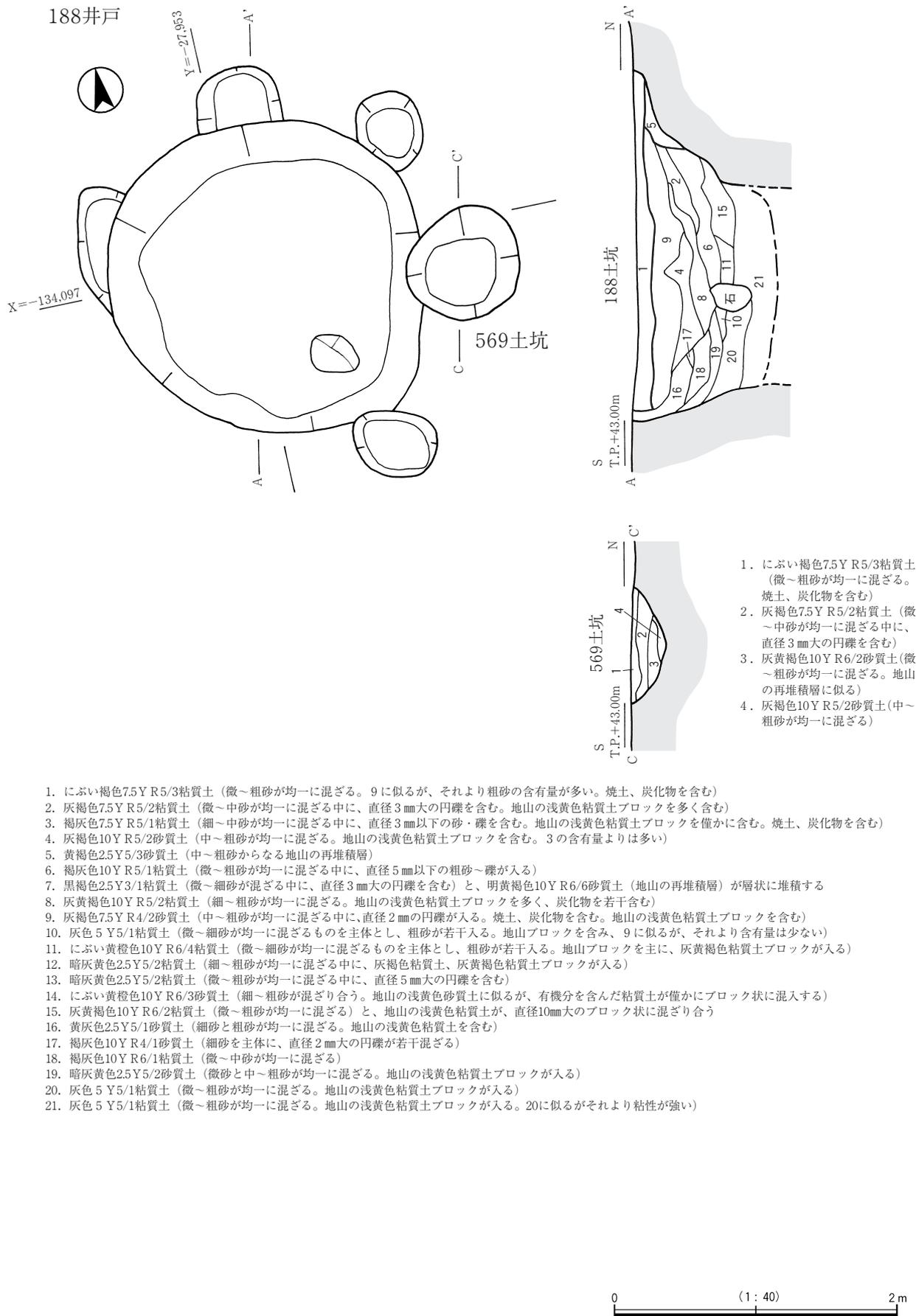


図156 有池遺跡03-1-5調査区 188井戸・569土坑等 平・断面図

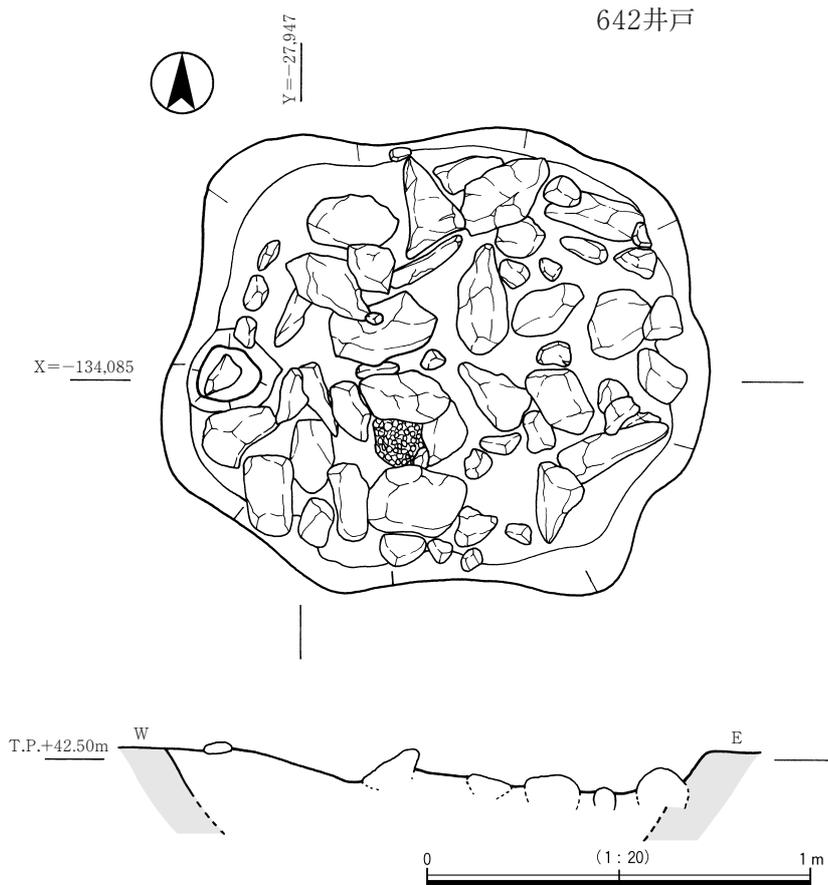


図157 有池遺跡03-1-5 調査区 642井戸 検出状況・断面図

れ、この遺構から出土した遺物の中では最も時期がさかのぼる。瓦器の中には12世紀末葉～13世紀初頭のもものが若干認められるものの、大半は13世紀のもものが占め、13世紀後半のもものが過半数を占める。

569土坑(図156) 前述した188井戸を切っている遺構のうちの一つである(20F-6j)。直径80cm程度の円形の土坑で、断面は隅丸のV字形である。深さは30cm弱と浅く、柱痕は認められなかった。遺構埋土から瓦器碗片が1点出土したが、細片により時期は判断できなかった。

642井戸(図157) 調査区中央(20F-5i)の低地で、かつ最も微高地寄りの部分で検出した。長軸1.4m、短軸1.1m強の楕円形の土坑で、埋土上部に一辺20～30cm程度の角礫が、平らな面をそろえるようにして敷き詰められていた。角礫は一様に

高温を受けて赤変しており、そのうちの花崗岩礫は著しく風化していた。井戸が機能しなくなった時点で埋め戻し、埋土の上面に角礫を敷き並べてその上で何かを長時間燃やしたものと考えられる。

この遺構から出土した大和産の瓦質土器播鉢から、14世紀中頃～後半にかけての時期に埋まったと考えられる。

1258井戸(図158) 調査区西端の低地部(20F-9j・20G-9a)で検出した井戸である。後述する井戸とは南北方向に近接して位置する。両者はほぼ同時期に埋積したとみられ、1258井戸と1259井戸が埋まり切らない段階に、これら2つの土坑を覆う、大きな落込状のくぼみが存在していたとみられる。1258井戸と1259井戸出土遺物とは別に、1258・1259井戸と併記している遺物は、その落込埋土から出土したものである。

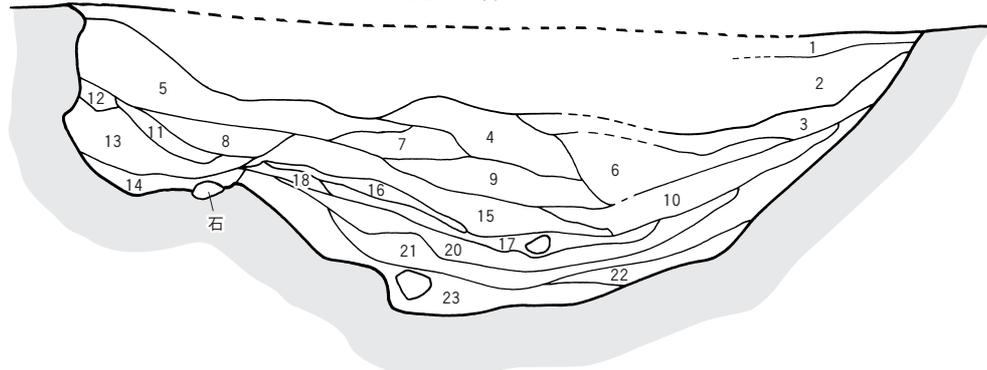
平面形は長軸4.2m・短軸3.8mの、南北に長い隅丸長方形気味の楕円形である。最深部の深さは1.1m強程度、断面はおおむね皿形である。素掘りの井戸とみられるが、埋土下部に径5cm強の円礫が若干含まれていた。湧水層に達しており、埋土掘削中にも著しい湧水が認められた。湧水のため土層観察用断面の上部が実測前に崩落したため、埋土上層の堆積状況を十分に図化することができなかった。

確実に1258井戸に属する遺物だけをとってもコンテナに半分ほどに達する量が出土した。瓦器碗・瓦器皿・土師器皿・瓦質三足釜・瓦質羽釜・東播系の須恵器鉢・陶器・須恵質の甕などが出土している。器種は多種類に及ぶが、量的に大半を占めているのは瓦器碗である。全体の形状をうかがえるものが無かったので断定はできないが、瓦器碗には12世紀後半までさかのぼる可能性があるものが若干含まれて

T.P.+42.30m
E

1258井戸

W

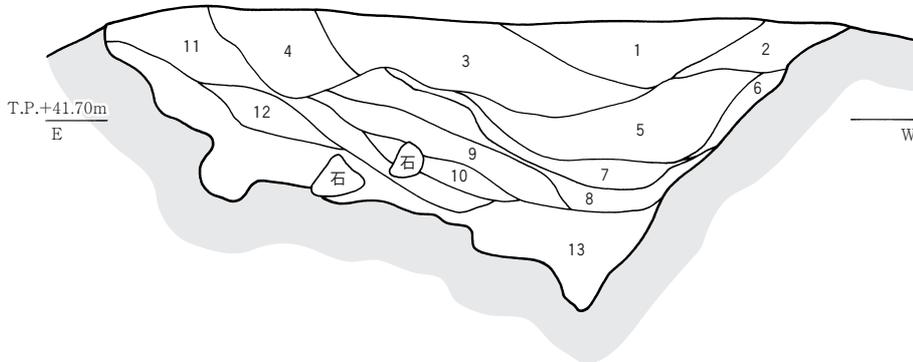


1. 灰褐色7.5Y R6/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる)
2. 褐灰色7.5Y R6/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる。地山の灰緑色粘質土ブロックが入る)
3. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫が混ざる。2より粘性が強い。炭化物が入る)
4. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が若干入る)
5. 灰色7.5Y5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫、炭化物が若干入る)
6. 灰色5 Y5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が若干入る。4、9層より粘性が低い)
7. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が若干入る)
8. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が若干入る。7に似るが中砂、礫の含有量が多い)
9. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、粗砂が混ざる)
10. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、粗砂が混ざる。9より微砂の占める割合が多く、粘性も強い)
11. 灰色7.5Y5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
12. 灰色10Y5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。炭化物が若干入る)
13. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。地山の黄褐色粘質土ブロックが若干入る)
14. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (微砂を主体に、細砂が混ざる。直径100mm大の円礫が僅かに入る)
15. 灰色7.5Y5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の灰緑色粘質土の細堆積層)
16. 灰色7.5Y5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる。10層より粘性が低い)
17. 灰色7.5Y5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径100mm大の円礫が僅かに入る)
18. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、粗砂が若干入る)
20. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (僅かに炭化物、粗砂が入る)
21. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微砂を主体に、粗砂がブロック状に若干混ざる)
22. 黄灰色2.5Y4/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる)
23. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径15cm大の礫が僅かに入る)

1259井戸

T.P.+41.70m
E

W



1. 灰色10Y5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。地山の灰緑色粘質土ブロックと、直径5mm以下の花崗岩礫が混ざる)
2. 灰色7.5Y5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の花崗岩礫が混ざる)
3. 灰色N5/0粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。炭化物と、地山の灰緑色粘質土ブロックを若干含む)
4. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。焼土、炭化物を含む)
5. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の花崗岩礫を含む)
6. 灰色5 Y5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の灰緑色粘質土ブロックを若干含む)
7. 灰色5 Y6/1砂 (細～粗砂からなる。ラミナ顕著)
8. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (木片を含む。粗砂を層状に含み、ラミナが認められる)
9. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の円礫を含む)
10. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (細～粗砂が混ざり合う中に、150mm大の角礫を含む)
11. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う。炭化物を若干含む)
12. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざり合う。炭化物を若干含む)
13. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざり合うものを主として、粗砂、直径10mm以下の円礫、150mm大の角礫を含む)

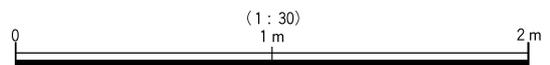


図158 有池遺跡03-1-1-5調査区 井戸 断面図

いた。しかし大半は13世紀代のものとみられ、前半と後半の時期のものがほぼ拮抗するかもしくは後者がやや多い印象を受けた。小型化傾向がみられ、かつ内面のミガキも幅が0.5mm程度の極めて細いものが若干認められた。土師器皿には口縁端部が緩やかに立ち上がるもの、平坦な底部から摘み上げるようにして口縁部が直線的かつ短く立ち上がるもの、口縁外面に強い横ナデを施しながら外反気味に立ち上げるものなどがみられた。これらのことから14世紀前半のものも含まれると考える。ちなみに1259井戸も含めた井戸の最上層から出土した遺物を見ると、13世紀後半の遺物を中心に14世紀前半の遺物が若干含まれる。いずれにせよ13世紀を中心とする時期に機能していた可能性が高く、13世紀後半～14世紀前半の時期に埋積が進んだと考えられる。

1259井戸 (図158) 1258井戸の南側 (20G-9 a) に位置する。平面形は長軸3.6m、短軸2.8mの東西に長い楕円形で、長軸の長さが1258井戸の短軸とほぼ等しい。

断面形はV字形で、最深部が1.5m弱の素掘りである。湧水層に達しており、埋土掘削中にも著しい湧水が認められた。この遺構の埋土下部にも径5cm強の円礫が若干含まれていた。

青磁碗・瓦器碗・瓦器皿・瓦質三足釜・土師質羽釜・東播系の須恵器鉢・須恵質甕などが出土し、量的には瓦器碗が過半数を占める。遺物の出土量は1258井戸と同程度である。12世紀後半～14世紀前半の時期の遺物を含むことも1258井戸と一致するが、13世紀後半以降の時期のものが大半を占め、13世紀前半以前のは少量である点が相違する。これらのことから、1258井戸と1259井戸は全時期に渡って並存していた可能性があるが、1259井戸は13世紀後半の時期に1258井戸の機能を補うために作られた可能性もある。いずれにせよ2つの井戸は同じ東西方向溝を切って並んでいる点から見てこの井戸は、溝に集まってきた水を溜める役割も負っていたと考えられる。また井戸の容積を超えた水は317溝を介して北に流されていたとみられる。

69ピット (図159) 調査区東寄り (20F-2 j) の、ピット集中部で検出した。土坑の形状は直径30cm程度の円形で、深さは15cm弱と浅く、底部は平坦で断面形が隅丸の逆台形を呈する。

遺構埋土から土師器小皿が複数枚出土した。遺物の出土状況から見て、5～10枚の土師器皿を重ねて土坑底部に設置していたことがうかがえる。土師器皿の形態は均一で、形態的特徴から見て13世紀後半の時期に含まれると考える。

60土坑 (図160) 調査区東寄り (20F-2 i・2 j・3 i) の、ピットが集中する部分で検出した。長軸6.4m、短軸2m強で東西に長い、不整形の土坑である。遺構の南端は、東西方向を指向する15溝で切られている。底部はほぼ平坦で、深さは10～25cmと極めて浅い。埋土は周囲の遺構の埋土に比べて砂の粒度が細かく緻密で、土色の様子とあわせると、後述する6土坑と近似している印象を受けた。埋土上部に20～30cm大の角礫を若干含んでいた。

土師器片2点が出土したがいずれも細片で時期を判断することはできなかった。

6土坑 (図161) 調査区東寄り (20F-2 i) で検出した、長辺3.6m強×短辺1.2mの隅丸長方形の土坑である。長辺2.9m弱×短辺1.2mで、深さ20cm弱の土坑の北側に、深さ10cm弱の隅丸方形の土坑が取り付いたような形状である。遺構の長軸方向は北に対して18°西に振る。

埋土からほぼ完形の須恵器杯身と杯蓋、須恵器長頸壺が出土した。遺構の形状や遺物の出土状況から勘案して、土壇墓と考えられる。周囲にこの遺構と埋土の土質が類似する不整形土坑を数基検出したが、いずれも遺物は出土せず、それらの関係を特定することができなかった。したがって当調査区で確実に時期が古墳時代末～飛鳥時代初頭にさかのぼる遺構はこれのみである。

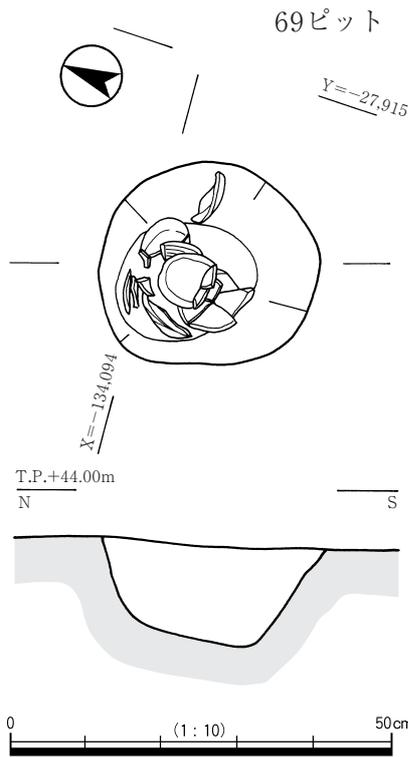


図159 有池遺跡03-1-5調査区
69ピット 遺物検出状況・断面図

390土坑(図161) 調査区の東端(20F-1h・1i)で検出した土坑である。遺構の北端を8溝で切られているが、長軸10m・短軸8m程度の隅丸長方形気味の楕円形とみられる。深さは30~40cmで平坦な底部から側壁がオーバーハング気味に立ち上がる。南北方向の土層断面を観察したところ、遺構埋土に地山がブロック状に混入することから、比較的短時間に埋まったものとみられる。

出土遺物は瓦質羽釜の口縁部から鏝にかけての部分が一個体分である。口縁端部は直立し、端面が内傾する傾向がみられる。また口縁部外面には頸部外面に2段の凹線状のくぼみが生じ、鏝の部分では中ほどに最厚部があり、先端部は先細り気味に丸く仕上げられている。8溝に切られていることを勘案すると、出土遺物の時期は13世紀後半におさまると考える。

370土坑(図161) 調査区中央部の北半(20F-3h)で、遺構密集部の北側にあたる場所に位置する。長軸80cm弱、短軸60cmの南北方向に長い楕円形で、深さは25cmである。やや丸みを帯びた底部から側壁が直立気味に立ち上がる。

土師器・瓦器の細片があわせて5点出土したが、時期を判断することはできなかった。

480土坑(図161) 調査区東寄りの南半部(20F-2j・3j)で

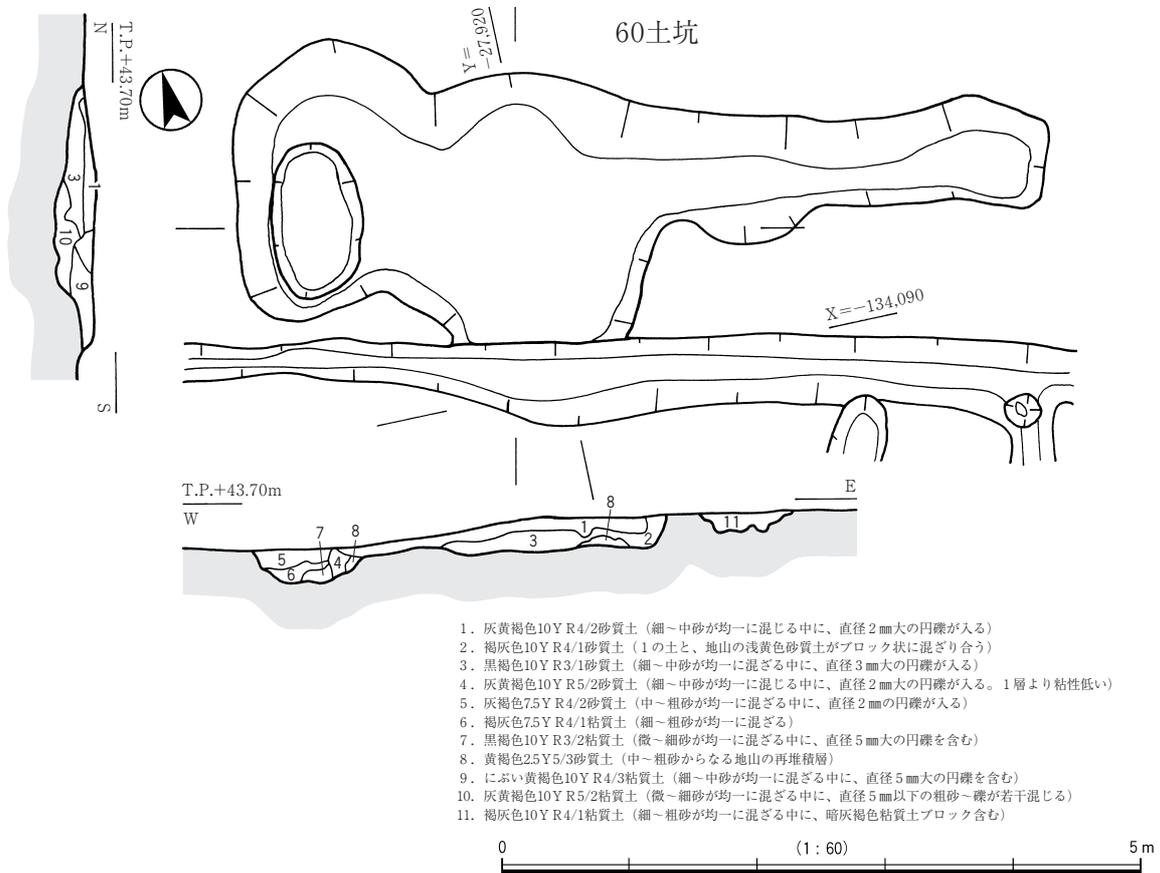


図160 有池遺跡03-1-5調査区 60土坑 平・断面図

1. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土(細~中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
2. 褐灰色10Y R4/1砂質土(1の土と、地山の浅黄色砂質土がブロック状に混ざり合う)
3. 黒褐色10Y R3/1砂質土(細~中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る)
4. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土(細~中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。1層より粘性低い)
5. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土(中~粗砂が均一に混ざる中に、直径2mmの円礫が入る)
6. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土(細~粗砂が均一に混ざる)
7. 黒褐色10Y R3/2粘質土(微~細砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
8. 黄褐色2.5Y 5/3砂質土(中~粗砂からなる地山の再堆積層)
9. ぶい黄褐色10Y R4/3粘質土(細~中砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
10. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土(微~細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂~礫が若干混じる)
11. 褐灰色10Y R4/1粘質土(細~粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロック含む)

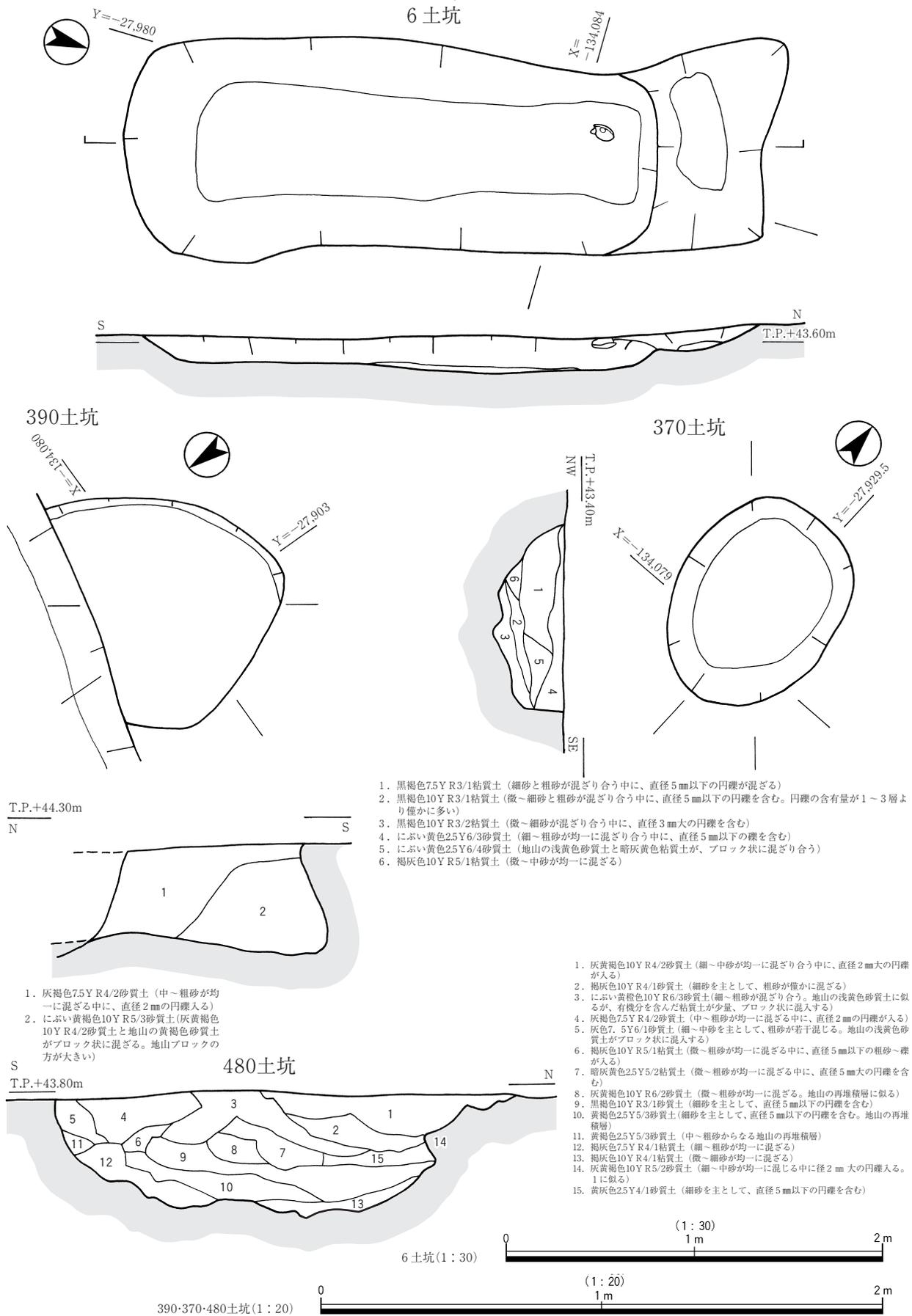


図161 有池遺跡03-1-5調査区 土坑 平・断面図

検出した不整形の土坑である。長辺5 m強、短辺3 m強と長大である。複数の溝ないし土坑に切られていた。断面形は凹凸が著しく、出土遺物も皆無だったことから、居住域が形成される前に生えていた木の根の貫入痕の可能性もある。

354土坑 (図162) 調査区中央の北端部 (20F-4 g・4 h) で検出した長軸3 m・短軸2 m弱の不整形土坑である。平坦な底部から側壁が外方に直線的に立ち上がり、断面形は隅丸逆台形で、深さは70cm強を計る。遺構埋土を観察すると、2層の堆積後に4層や1層を伴う遺構に切られているようにも見えるが、遺構の検出段階では、二つの遺構が切り合っている状況を把握することはできなかった。埋土の下部に炭化物をわずかに含む。埋土中に遺物を含んでいなかったため、時期は不明である。

343土坑 (図162) 前述した354土坑の南側 (20F-4 h) に位置する、長軸3.4m・短軸70cmの長楕円形気味の不整形土坑である。遺構の西端を南北方向の溝でわずかに切られていた。埋土の土質も354土坑と類似しており、炭化物がわずかに含まれていた。断面形は隅丸の逆台形で深さは75cmを測る点も354土坑に類似する。埋土中に遺物を含んでいなかったため、時期は不明である。

342土坑 (図162) 調査区中央の北端部 (20F-4 h) で検出した、長軸1.5m・短軸1 mの、平面形が水滴形の土坑である。前述した354土坑と343土坑のちょうど中央に位置する。深さは最深部で35cmあり、断面形は皿形である。埋土中に遺物を含んでいなかったため時期は不明である。

460土坑 (図163) 調査区東寄りに位置し、南北方向を指向する溝 (20・312・389溝) が切りあう部分

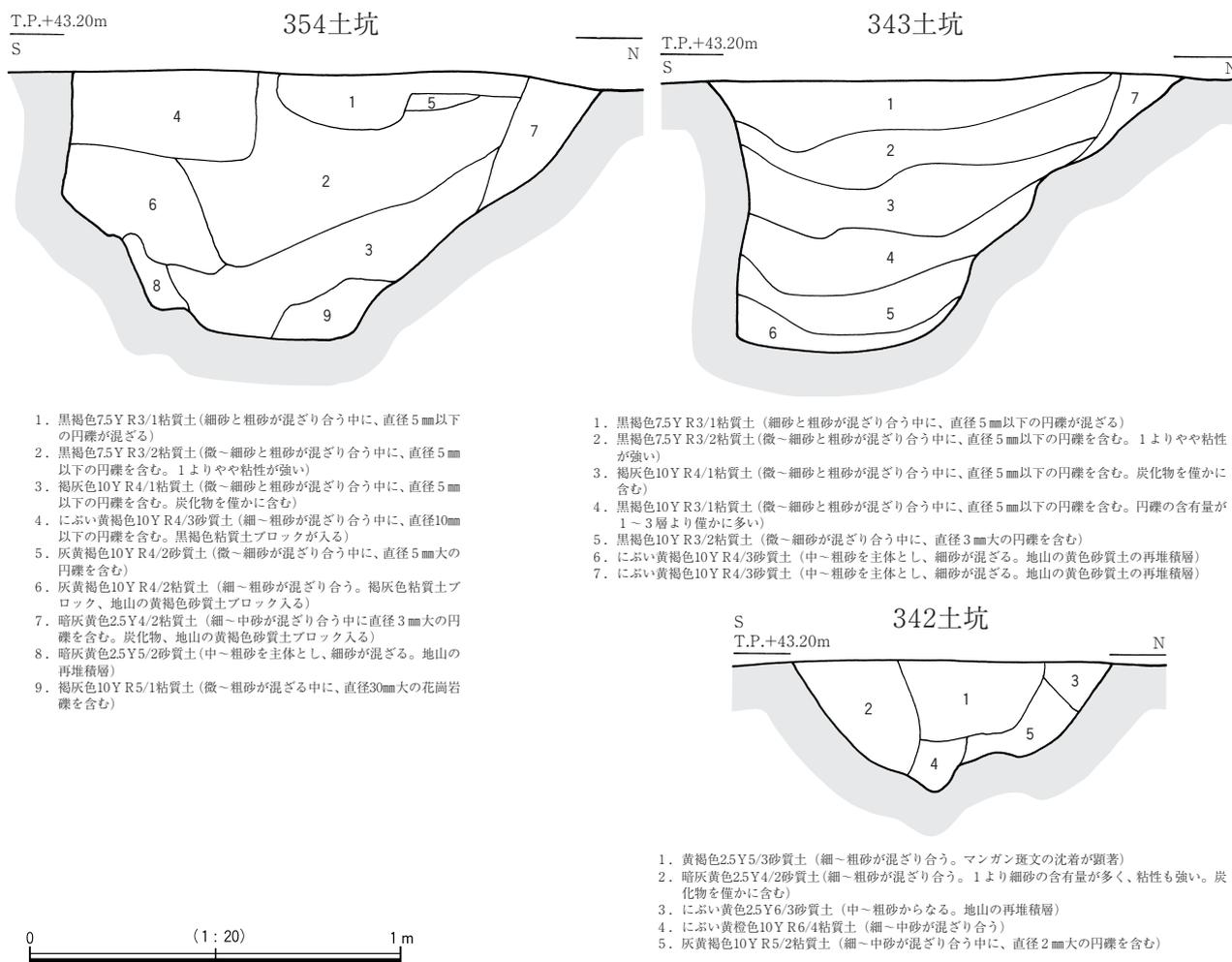


図162 有池遺跡03-1-5調査区 土坑 断面図

で検出した(20F-3 i)。遺構面を精査している時点では把握できず、前述した溝の埋土を掘りあげた段階で土坑の輪郭を検出した。土坑の輪郭を検出した際には遺構埋土を掘削してしまっていたので、溝と遺構の切りあい関係を明確に把握することはできなかったが、検出時の状況から見て、この遺構が溝より後に成立したとは考えにくい。平面形は長軸1.6m・短軸1.2m強の、南北方向に長い隅丸長方形気味の楕円形である。深さは20cm強と浅く、平坦な底面から側壁が外傾して立ち上がる。

この遺構の埋土中からは完形の土器が多数出土している。遺物の出土状況から2～3枚の土器を重ねたものを、正置または倒置して並べ置いたかたまりが複数認められた。土師器皿と瓦器椀が大半を占め、13世紀後半から14世紀前半に位置付けられる。またこれらの遺物の時期は20・312・389溝の帰属時期と並行する。このことからいずれかの溝に先行してこの土坑が形成されたのではなく、並存していた可能性が高いと考える。そして溝が埋まっていく過程で土坑も機能を失ったと考える。

379土坑(図164) 調査区中央の北寄り(20F-4 i・5 i・5 h)で検出した。遺構の南半部は東西方向を指向する25溝に切られているため全体の形状は不明だが、長軸1.5m弱、短軸1m強の楕円形と考えられる。断面形態は平坦な底部から側壁が直立気味に立ち上がると見られるが、遺構の西半の側壁は段状になっており、その限りではない。深さは40cm弱で、遺構埋土に若干焼土が含まれていた。遺物は

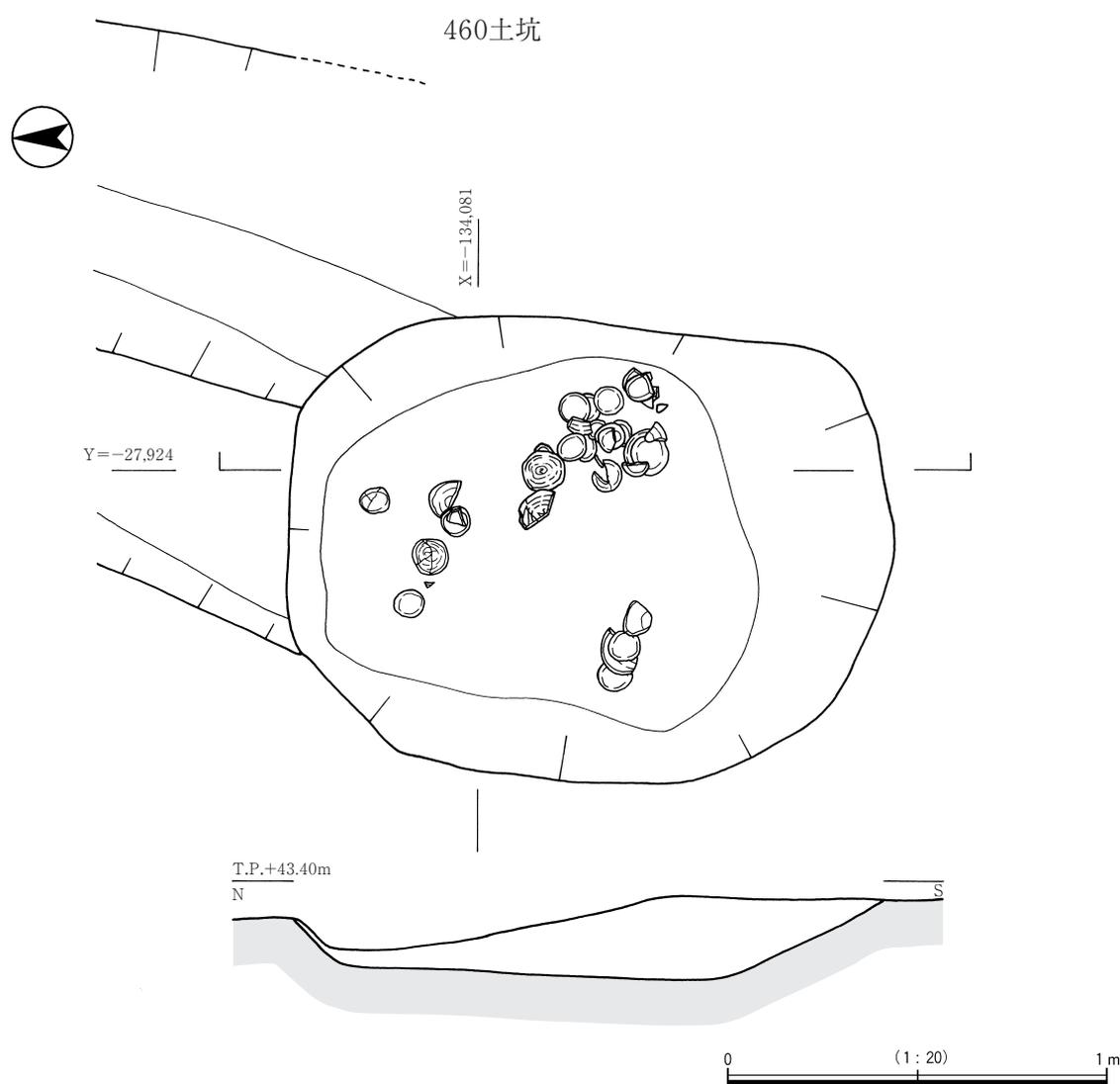
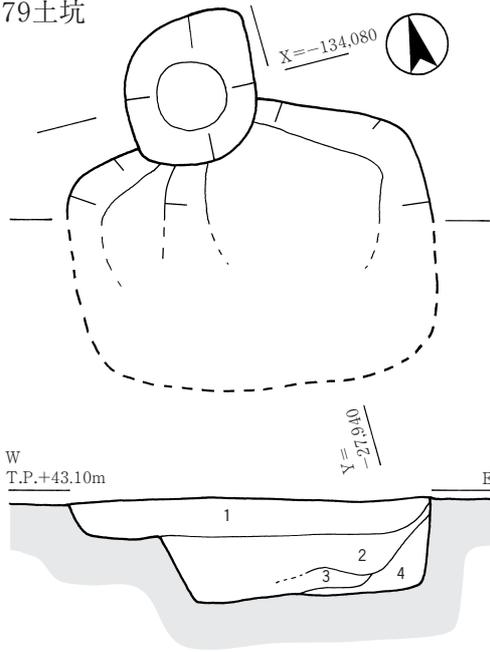
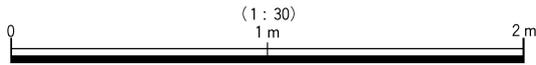


図163 有池遺跡03-1-5調査区 460土坑 遺物出土状況図

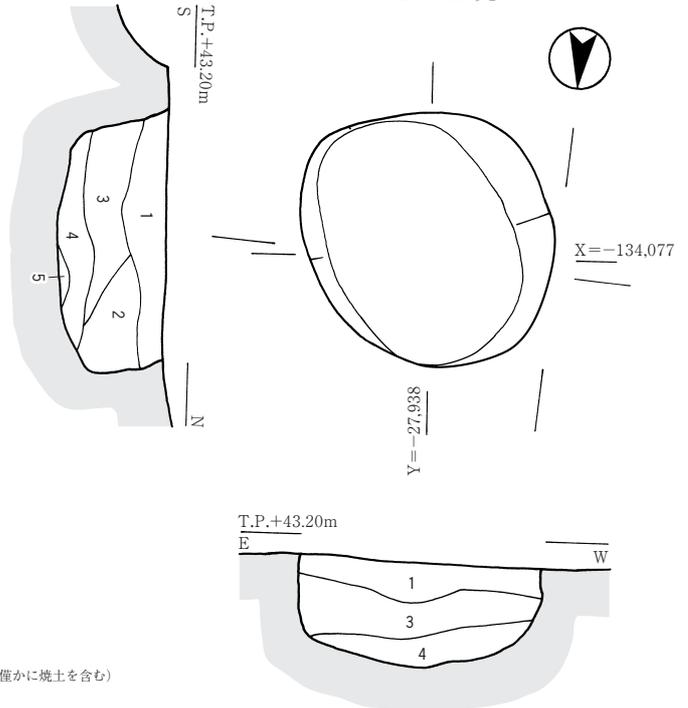
379土坑



1. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土（細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る）
2. 褐灰色10Y R4/1粘質土（細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロック含む。僅かに焼土を含む）
3. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土（中～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mmの円礫が入る）
4. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土（細～粗砂が均一に混ざる）

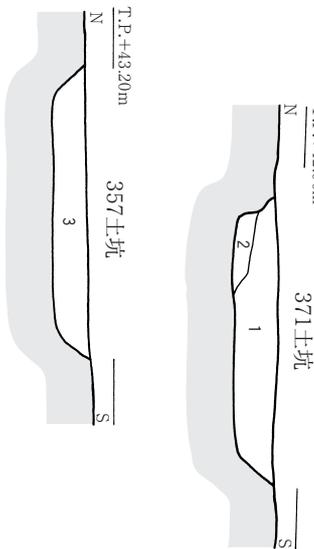


109土坑

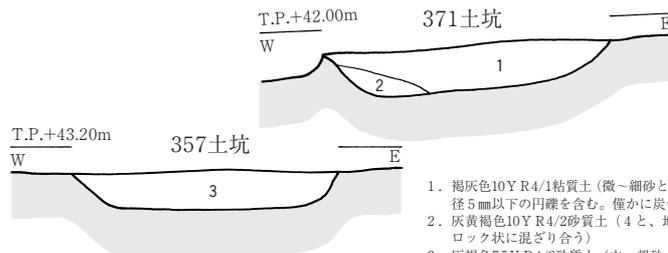
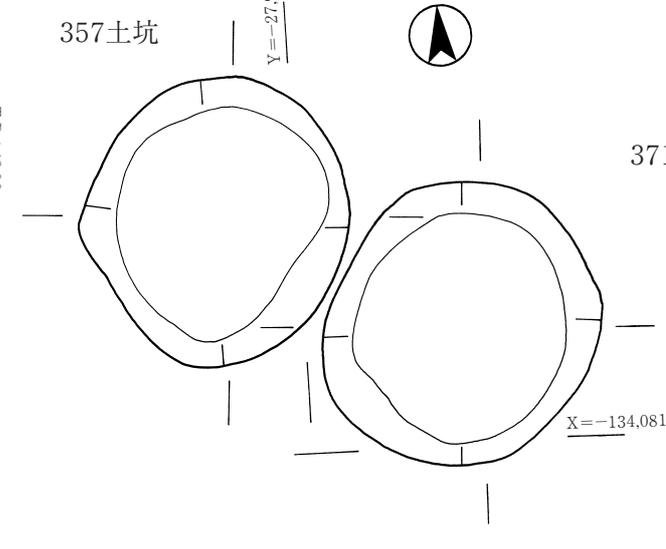


1. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土（微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫、炭化物を含む）
2. 褐灰色10Y R4/1粘質土（微～細砂と粗砂が混ざり合う中に、直径5mm以下の円礫を含む。炭化物を僅かに含む）
3. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土（微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫、炭化物を含む。円礫の含有量は1, 2より少ない）
4. 黒褐色10Y R3/1粘質土（微～細砂と粗砂が混ざり合う中に、直径5mm以下の円礫を含む。円礫の含有量が1～3層より僅かに多い）
5. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土（4と、地山の黄褐色砂質土とがブロック状に混ざり合う）

357土坑



371土坑



1. 褐灰色10Y R4/1粘質土（微～細砂と粗砂が混ざり合う中に、直径5mm以下の円礫を含む。僅かに炭化物を含む）
2. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土（4と、地山の黄褐色砂質土とがブロック状に混ざり合う）
3. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土（中～粗砂が均一に混じる。直径2mmの円礫入る）

図164 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑 平・断面図

出土しなかった。

109土坑(図164) 調査区中央の北寄り(20F-4h)で検出した。東西方向を指向する24溝の北側に近接して位置する。直径1m前後の円形の土坑である。深さは40cmで、若干湾曲する底部から直立気味に側壁が立ち上がる。遺構埋土に炭化物が若干含まれていた。土師器・瓦器・須恵器の細片が全部で10点弱出土した。いずれも細片かもしくは二次的な混入によるものと見られ、時期は判断できない。

357土坑(図164) 調査区中央の北寄り(20F-4i)で検出した。東西方向を指向する25溝の北側に近接して位置する。前述の109土坑の南側、379土坑の東側に位置する。また後述する371土坑とは東西方向に極めて近接して隣り合う。

長軸1.2m・短軸1m強の南北方向に長い楕円形で、深さは15cmと浅く、底部は平坦である。遺構埋土は単一で、短時間で埋まったと考えられる。埋土中から遺物は出土しなかった。

371土坑(図164) 前述の357土坑の東側(20F-4i)に近接して位置する、直径1.1mの円形の土坑である。深さは20cm弱で底部は平坦である。側壁際に部分的に地山の崩落土が堆積しているが、遺構埋土はおおむね単一なことから、短時間に埋積したと考えられる。遺構の形状等は前述の357土坑との共通点が多い。遺物は出土しなかった。

373土坑(図165) 調査区中央の北寄り(20F-4i)で検出した。東西方向を指向する25溝を切っており、後述する374土坑とは東西方向に極めて近接して隣り合う。長軸1.3m弱・短軸1mの、東西に長い楕円形の土坑である。底部は平坦で深さは15cmと浅い。埋土上部が374土坑埋土と共通することから、両者はあまり時期差を持たずに存在した可能性がある。遺物は出土しなかった。

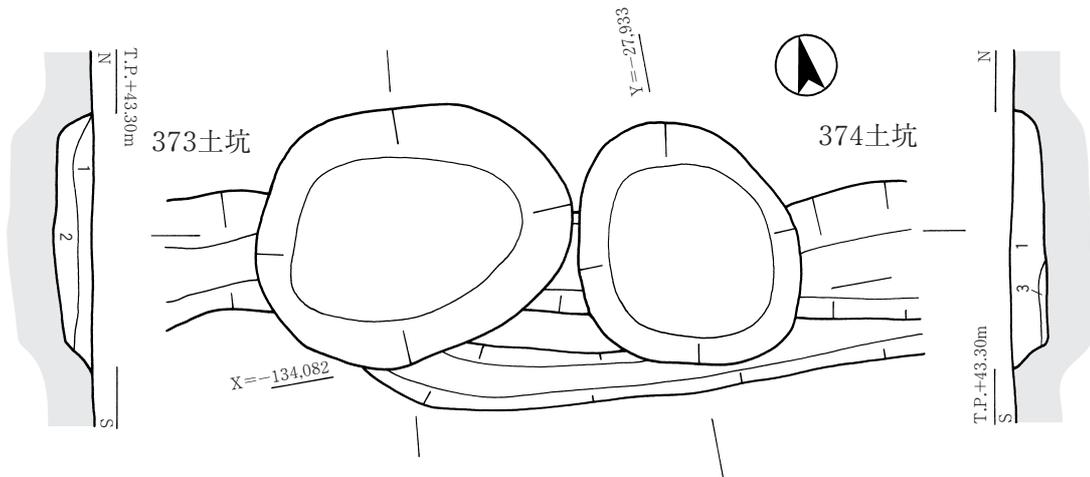
374土坑(図165) 前述の373土坑の東側(20F-4i)に近接して位置する。直径1m前後の円形の土坑で、平坦な底部から側壁が直立気味に立ち上がる。深さは15cm弱と浅く、埋土はおおむね単一で、短時間のうちに埋積したとみられる。また373土坑の項で述べたような理由から373土坑とあまり時期差を持たずに存在したと考える。

土師器・瓦器の破片が5点出土した。土師器皿は口径が4cm程度の大きさである。平坦な底部から口縁が緩やかに短く立ち上がる。器壁は2mm程度で底部中央部分はさらに薄く引き延ばされた状況である。瓦器碗の破片も器壁が3mm程度と薄く、口縁部片1点をみると端部が先細り気味に丸くおさめられる。遺構の切りあい関係を勘案すると、14世紀前半の時期と考えられる。

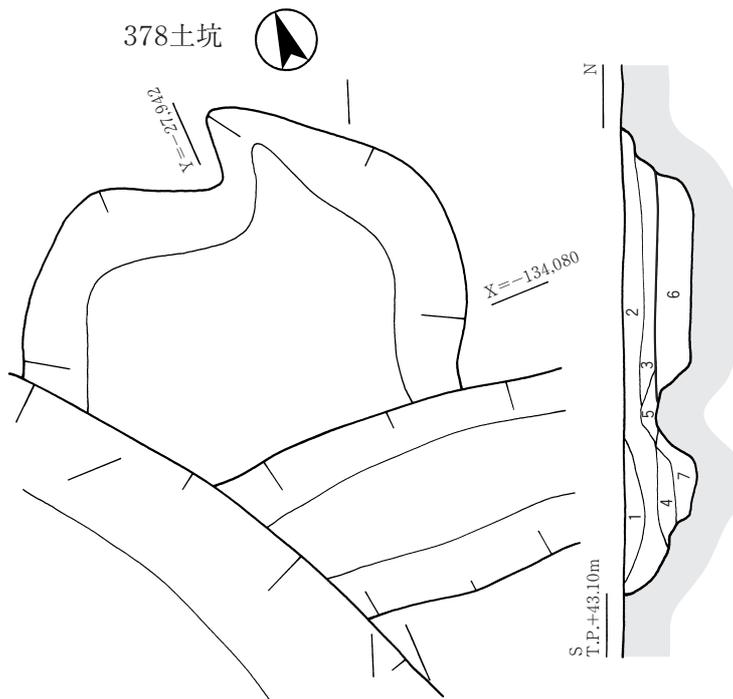
378土坑(図165) 調査区中央の北寄り(20F-5h・5i)の部分で、居住域と生産域との境界部分に位置しており、25溝の西端に切られている。全体の形状は不明だが、不整形な土坑とみられる。底部も若干凹凸がみられるが、深さはおおむね30cm弱である。遺物は出土しなかった。

395土坑(図166) 調査区中央の北寄り(20F-4i・5i)の部分で、居住域と生産域との境界部分に位置しており、26溝の西端を切っている。長軸1.85m・短軸1.35mの不整形な土坑である。底部は凹凸が著しく、側壁の立ち上がりも一定しない。深さは最深部で30cmである。遺構のほぼ西半部で埋土の下部に地山の土がブロック状に混入するのがみられたが、これは意図的に埋め戻された際の土ではなく、地山崩落土とみられる。

土師器皿・瓦器碗・土師質羽釜・瓦質土器が30~40点出土した。ほとんどは細片だったが、図化した土師器皿は13世紀後半以降の所産と見られる。図化しなかった遺物をみると、瓦器碗には口縁内面に入れられた沈線により端部が外反する、13世紀前半までさかのぼる可能性のあるものが2点含まれる。それ以外は口縁端部を先細り気味に丸くおさめ、口縁外面に強い横ナデを施したもので、それらはおそら



1. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土（微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫、炭化物を含む）
2. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土（細～粗砂が混ざり合う中に、直径10mm以下の礫を含む）
3. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土（4と、地山の黄褐色砂質土とがブロック状に混ざり合う）



1. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土（細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む）
2. 灰褐色7.5Y R5/2粘質土（微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む）
3. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土（中～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mmの円礫が入る）
4. 灰褐色7.5Y R5/2砂質土（細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を僅かに含む）
5. 褐灰色10Y R4/1粘質土（細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロックを含む）
6. 褐灰色10Y R5/1粘質土（微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が入る）
7. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土（細～粗砂が均一に混ざる）

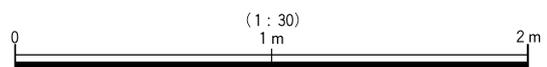
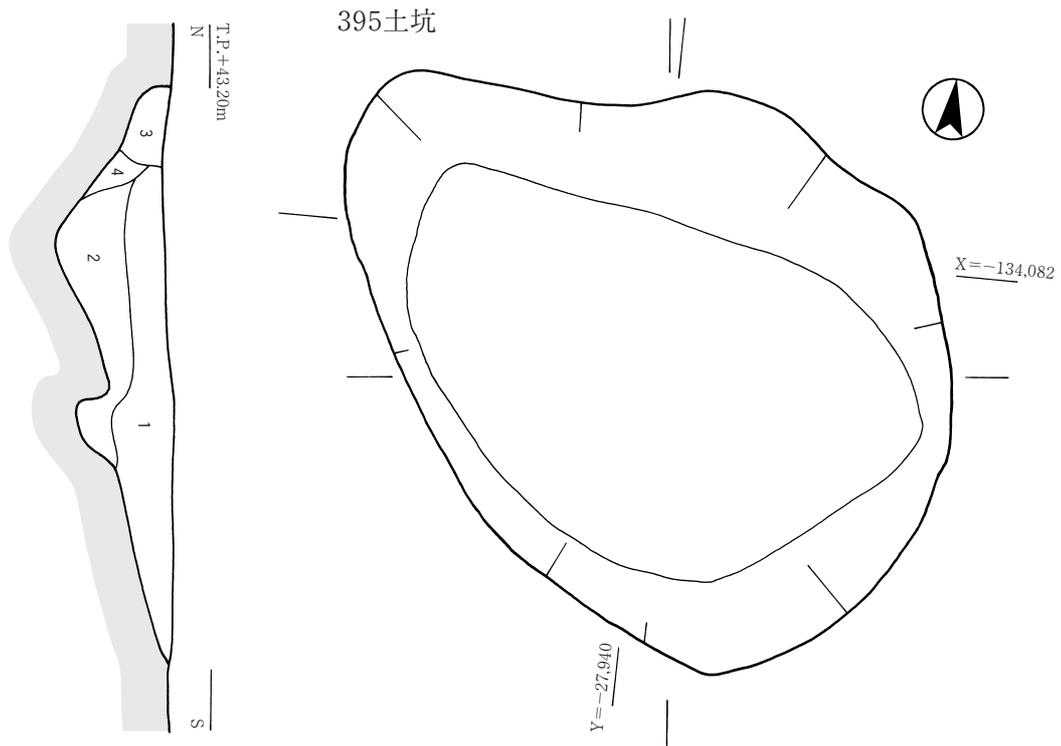
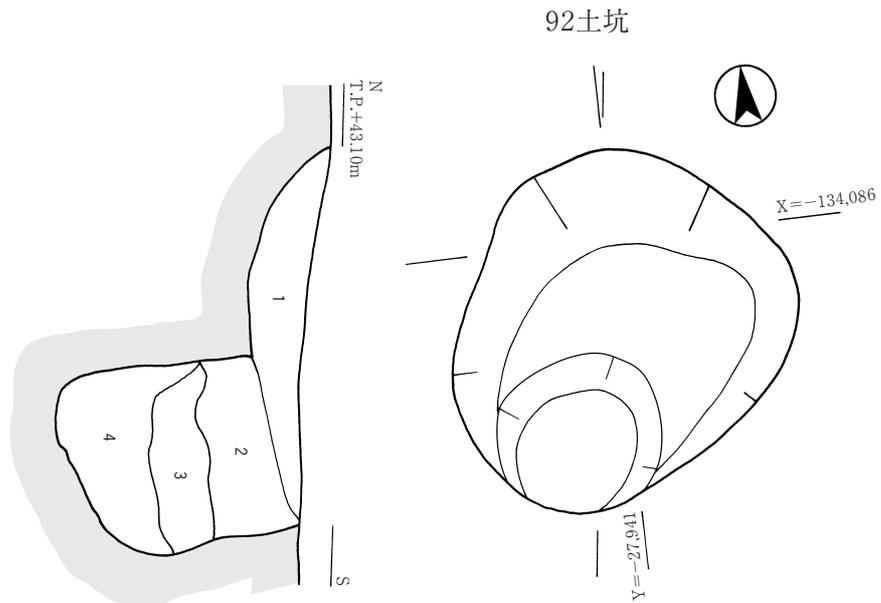
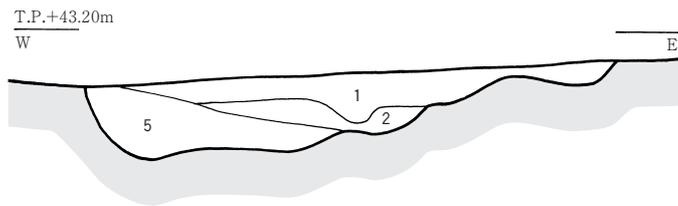


図165 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑 平・断面図



1. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
2. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る)
3. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂～礫が入る)
4. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
5. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)



1. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mmの円礫が入る)
2. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
3. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る。4層より粘性低い)
4. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る)

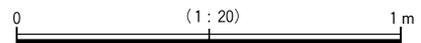


図166 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑 平・断面図

く13世紀後半の時期とみられる。土師器皿には口縁外面に強い横ナデを施した外反化傾向の初期段階のものが3点含まれる。いったん水平に近い角度で外反させた口縁部の端部を内側に折り返した、大和型の羽釜も1点含まれた。遺構の切りあい関係を勘案すると、14世紀前半とみることができる。

92土坑 (図166) 調査区中央(20F-5 i)の土坑・ピットが密集する部分で検出した。居住域と生産域の境界部分にあたる。平面形は長軸95cm・短軸85cmの楕円形だが、その底面で直径45cmの円形のピットの輪郭を認めた。ピットの断面形は隅丸長方形で深さは63cmなのに対し、楕円形土坑の部分の断面形は皿形で深さは16cmと浅い。上部の楕円形土坑がピットを切っている可能性もあるが、ピット部分の埋土上層と土坑部分の埋土とは比較的近似していることから両者は並存していた可能性が高い。

瓦器椀・土師器皿・土師質土器の破片が20点弱出土した。いずれも細片だったため図化はしなかった。土師器皿には口縁部外面に強い横ナデを施したものが2点含まれるが、いずれも底部からの口縁部の立ち上がりはなだらかである。瓦器椀は3点とも器壁が3mm以下と薄い。口縁部外面に強い横ナデがみられ、高台が退化する寸前の形態に対応すると考える。細片を観察した結果なので断定はできないが、13世紀後半の範疇でとらえられると考える。

392土坑 (図167) 南北方向を指向する18溝と、その西側を平行して通る溝の間(20F-3 j)に位置する、長軸1.7m・短軸1mの細長い不整形土坑である。断面は隅丸のV字形で、深さは最深部で68cmある。長軸方向の土層断面を見る限り、複数のピットが切りあったものを一つの土坑として掘削した可能性もある。その場合、新たに掘られたほうのピットの深さは20cm前後と浅い。遺物は出土しなかった。

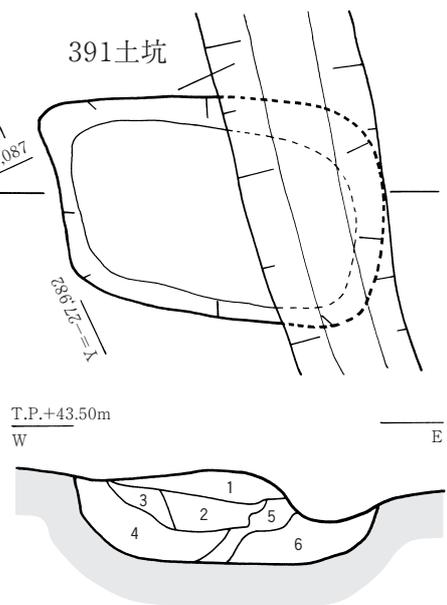
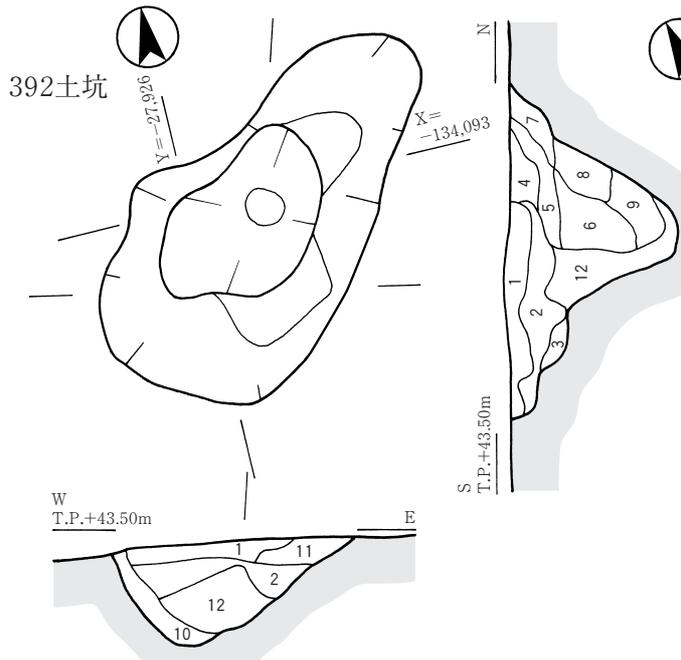
391土坑 (図167) 前述の392土坑の北西側(20F-3 i)に溝を挟んで位置する。遺構の東半を389溝で切られるが、溝の埋土を掘削した段階で土坑の輪郭をとらえることができた。平面形態は長辺1.3m、短辺85cmの隅丸長方形である。ほぼ平坦な底面から湾曲気味に側壁が立ち上がり、深さは36cmある。

瓦器椀・瓦器皿・土師器皿・瓦質羽釜・須恵質土器・焼土が60~70点出土した。図化した瓦器椀・土師器皿は12世紀後半に位置づけられる。図化しなかった遺物を見ると、土師器皿は図化したものほど明瞭な二段ナデは見られないものの、類似した形態のものが1点認められた。それ以外も底部から口縁部の立ち上がりはなだらかである。瓦器椀には13世紀前半のものと後半のものがほぼ同量含まれる印象を受けた。これらのことから出土遺物の時期には12世紀後半~13世紀後半までの幅が認められる。

56土坑 (図167) 前述の392土坑からみると溝を挟んで北西側に位置する(20F-3 j)。南北方向を指向する389・20溝を掘削した段階で検出した。したがってこの土坑はそれらの溝にやや先行して形成されたものと言える。平面形は長軸1.14m・短軸98cmの楕円形で、深さは最深部で80cmある。底面は凹凸があり一定しないが、壁面は一様に直立気味に立ち上がる。

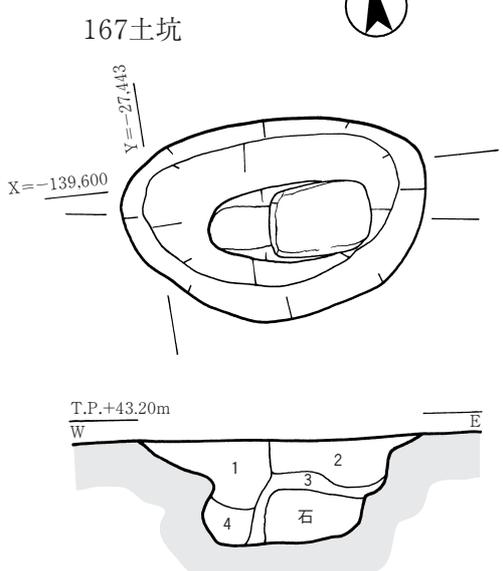
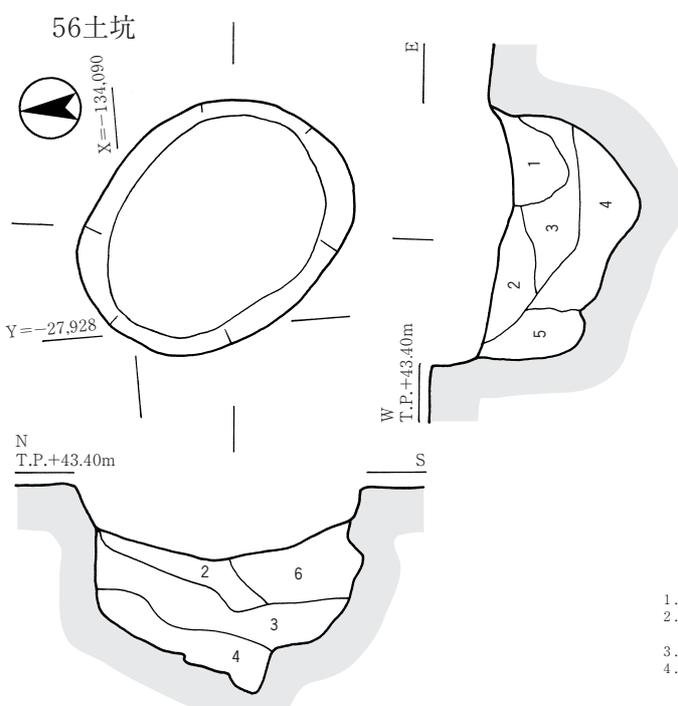
瓦器椀・瓦器皿・土師器皿・瓦質三足釜・東播系の須恵器鉢が20点弱出土した。図化した瓦器椀・瓦器皿は13世紀後半に位置づけられる。図化しなかった遺物の中に、13世紀前半までさかのぼり得る瓦器椀の口縁部片を2点認めた。切りあい関係から見ると、13世紀後半とみることができる。

167土坑 (図167) 調査区中央の南寄り(20G-5 a)の部分で検出した。東西方向を指向する23溝と南北方向を指向する100溝の交点に近く、その南東側に位置する。平面形は長軸80cm・短軸53cmの東西に長い楕円形で、平坦な底面に長辺27cmの角礫が平坦な上面が水平に保つように据えられていた。土坑は2段に掘り窪められており、深さは27cmある。この土坑の周囲で、これとセット関係を有すると考えられる柱穴は認められなかった。ほぼ完形の土師器皿1個体と土師器の細片が3点出土した。形態的な特徴から見て14世紀前半の所産と考える。

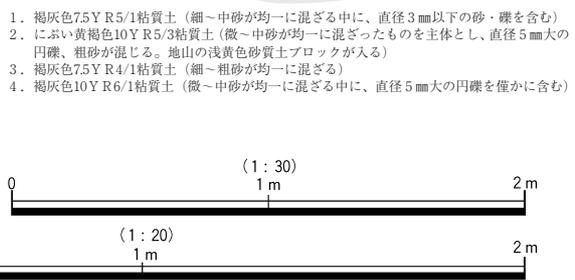


1. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。1と3の中間的な土質)
3. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (1の土、と地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
4. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
5. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂からなる地山の再堆積層)
6. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロックを含む)
7. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (1の土、と地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
8. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
9. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
10. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (1の土と、地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
11. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む)
12. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)

1. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
2. 黄褐色2.5Y 5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層。暗灰褐色粘質土ブロックが入る)
3. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。)
4. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む。炭化物が入る)
5. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロック含む。炭化物が入る)
6. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)



1. 暗灰黄色2.5Y 4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が若干混じる)
2. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。地山ブロックは入らない)
3. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が入る)
4. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
5. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む。炭化物が入る)
6. 灰褐色10Y R5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる)



392・391・56土坑 (1:30)
67土坑 (1:20)

図167 有池遺跡03-1-5調査区 土坑 平・断面図

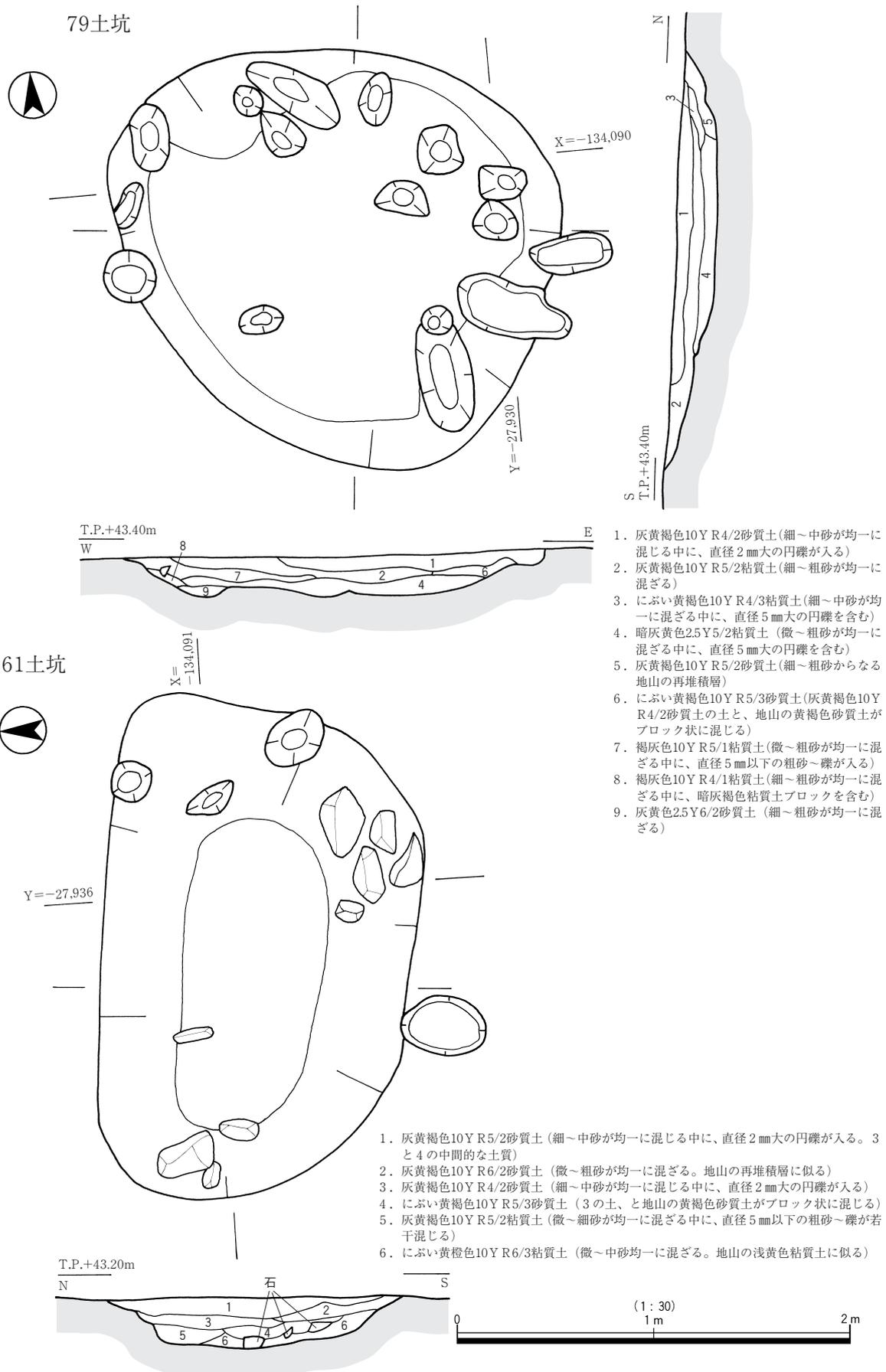


図168 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑 平・断面図

79土坑（図168） 調査区中央（20F－3 i・3 j・4 i・4 j）の土坑・ピットが集中する部分で検出した。平面形は長軸2.4m・短軸2.1mの東西に長い楕円形で、断面は皿形を呈する。平面形が大きい割には深さ20cmと浅い。土層断面の観察により、徐々に埋積した状況がうかがえる。79土坑を検出した段階でも複数のピットを切っている状況を認めたが、土坑埋土を掘りあげてからも、土坑底面において複数のピットを検出した。底部で検出したピットはいずれも直径20cm前後である。

土師器皿・瓦器椀・東播系須恵器鉢・瓦質火鉢等がコンテナに半分近く出土している。全体の過半数を瓦器椀の細片が占める。時期は13世紀後半～14世紀前半の時期に含まれるとみられる。

この土坑の底面で検出した81ピットから、瓦器椀・土師器皿が計6点出土した。図化はしなかったが、形態的特徴を見る限り、79土坑出土遺物とほとんど時期差が認められなかった。したがって81ピットが79土坑に切られているのではなく、両者が並存していた可能性もある。

61土坑（図168） 調査区中央（20F－4 j）の土坑・ピットが密集する部分に位置する。前述した79土坑の西側に位置する。長軸2.6m、短軸1.6mの東西に長い楕円形の土坑である。土坑埋土を掘削した段階で、底面において複数のピットを検出した。断面形は隅丸の逆台形で、底部付近で長軸30cm程度の角礫を数点検出した。深さは30cm弱で、土層断面の観察によりこの遺構が徐々に埋積した状況がうかがえる。

瓦器椀・土師器皿・東播系須恵器鉢が50～60点出土した。そのうち大半を瓦器椀が占める。図化しなかった遺物もおおむね図化した遺物と同タイプに含まれ、遺物の時期は13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。

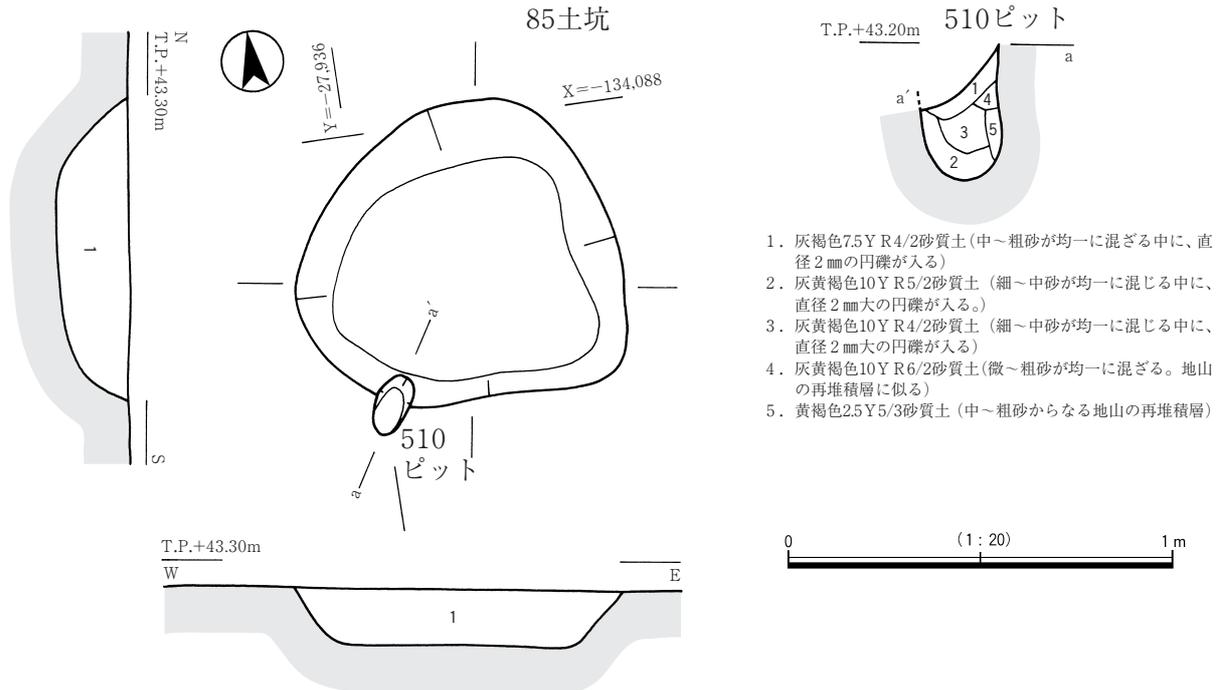
85土坑・510ピット（図169） 調査区中央（20F－4 i）の土坑・ピットが密集する部分に位置する。前述した61土坑の北側に位置する。直径1.3mの円形の土坑で、深さは20cmと浅い。断面形は逆台形を呈し、平坦な底部から外方に直線的に側壁が立ち上がる。遺構埋土は単一だったことから、土坑が掘削されてから短期間のうちに埋まったと考えられる。

土坑の南西で510ピットを検出した。ピットは直径20cm強の円形だったとみられ、断面はU字形で遺構検出面からの深さは35cmである。検出状況から見ると85土坑が510ピットを切っているように見えたが、両者の埋土は非常に類似していた。またピットが埋まりきらない段階で85土坑が形成された場合を考えると、ピット埋土に地山のブロックが多量に含まれるはずだが、そのような状況も見られなかった。これらのことから、両遺構は同時に形成されたものの可能性がある。土師器と瓦器の細片が少量出土したが、時期を判断することはできなかった。

94土坑（図169） 調査区中央（20F－5 i・5 j）の土坑・ピットが密集する部分に位置する。前述の61土坑の西側で、61土坑が切っている東西方向溝より北側に位置する。長軸1.1m・短軸1mで平面形は水滴形を呈する。深さは45cmで、湾曲気味の底部から側壁が直立気味に立ち上がる。土層断面を観察すると柱痕を擁する柱穴埋土の堆積状況と似ているが、他の柱穴と比べると規模が極端に大きい。

瓦器椀・瓦器皿・土師器皿・瓦質土器・白磁が全部で40点ほど出土した。ほとんどが細片だったが、図化した瓦器椀は13世紀前半の所産と見られる。図化しなかった瓦器椀の中にはこれと同タイプのものに加えて、器壁がさらに薄く、外面のユビオサエが顕著なものが見られた。したがって出土遺物の時期は13世紀全般にわたると考えられる。

54土坑（図170） 調査区中央（20G－4 a）の土坑・ピット密集部の南寄りに位置する。平面形態は長辺3.8m・短辺3.3mの隅丸長方形の土坑と、一辺2.5mの隅丸方形の土坑が組み合ったような形状をし



1. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土(中～粗砂が均一に混ざる。直径2mmの円礫入る)

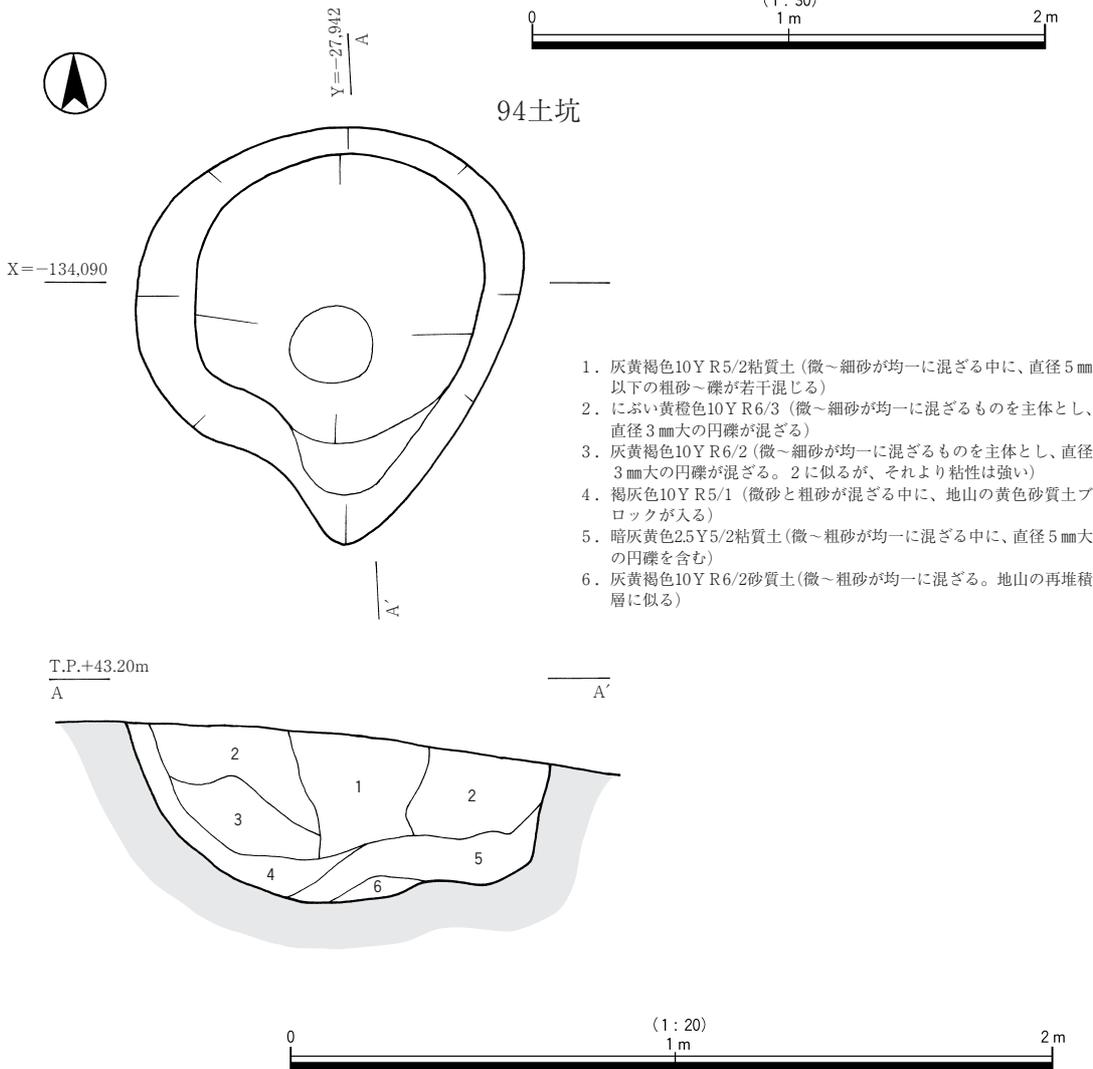


図169 有池遺跡03-1-5調査区 土坑・ピット 平・断面図

ている。遺構埋土の堆積状況を仔細に観察したが、2つの土坑が切りあっている状況を認めることはできなかったことから、両者は同時に形成されたと考える。深さは20cm強あり、隅丸長方形の部分は5cm前後と極めて浅い。したがって断面は最深部に向けて、二段階に掘り窪めた様な形態である。この土坑の底部で検出した複数のピットは、両側の延長上に位置するピットも含めて柵1に含まれるものと考えた。柵1に関しては別途に詳述しているので参照されたい。この土坑の北西隅から65溝が西に向けて延びる状況を認めた。遺構の検出段階では、54土坑が65溝を切っている状況を認めた。この溝から13世紀後半の遺物が出土しており、54土坑出土遺物と時期的な傾向が一致することから、両者は並存していた可能性がある。さらに65溝を介して隣接する64土坑は、この溝を切っていたのでやや後続するとみられる。これについては64土坑・65溝の項を参照されたい。

瓦器椀・土師器皿・瓦質三足釜・白磁・須恵質土器・陶器の破片が60～70点出土した。大半を瓦器の細片が占め、図化した瓦器椀は13世紀後半の所産とみられる。図化しなかった遺物の中に、13世紀前半までさかのぼり得る瓦器椀と口縁が外反化する土師器皿が各1点含まれていた。したがって若干時期幅を含んでいる可能性はあるが、時期はおおむね13世紀後半におさまるとみられる。

499ピット（建物5）（図170） 54土坑の中央部（20G-4a）で検出した。隅丸長方形の土坑の南端に重なるように位置する。54土坑を掘削時にこの土坑の埋土上半部を一緒に掘削してしまったため、上半部の埋土の堆積状況を確認することができなかった。平面形は直径60cm強の円形で深さは30cm強、断面形は隅丸のV字形である。埋土中から遺物は出土しなかった。

574ピット（図170） 調査区中央の土坑・ピット密集部の南寄り（20F-4j・20G-4a）に位置する。平面形は長軸30cm・短軸25cmの南北に長い楕円形で、深さは最深部で25cmを測る。埋土中から遺物は出土しなかった。

125ピット（建物5）（図170） 南端を54土坑（20G-4a・20F-4j）に切られる。長軸92cm・短軸60cm前後の楕円形の土坑で、深さは最深部で35cmある。この遺構埋土には54土坑の埋土に含まれている炭化物は認めなかった。したがってこの遺構が完全に埋まってから54土坑が形成されたと考える。

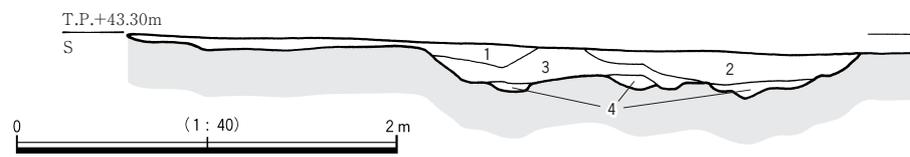
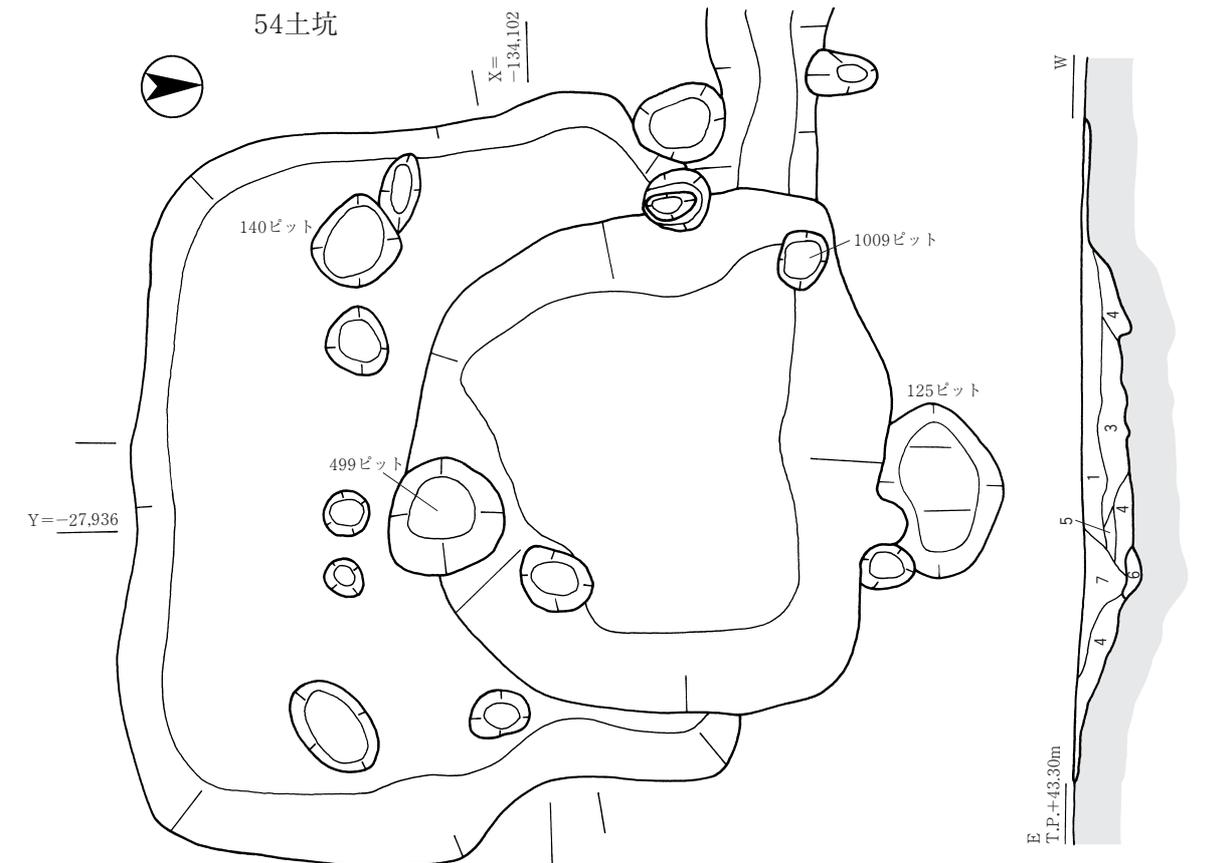
瓦器椀・瓦器皿・土師器・瓦質土器が6点出土した。瓦器椀口縁部の破片2点は、1点が口縁端部を丸くおさめて内面に幅2mmの沈線を持ち、他の1点が器壁に対して上方からの角度で工具を押し当てて入れた沈線により口縁端部が外反する。いずれも細片なので時期判断の決め手に欠けるが、それらは13世紀前半の時期に含まれる可能性がある。

64土坑（図171・172） 調査区中央の土坑・ピット密集部の南寄り（20F-4j・5j・20G-4a・5a）に位置し、東西方向を指向する23溝に切られている。土坑の西端部分で埋土上部から土器が比較的まとまって出土した。またこの土坑は65溝を切っていたことから、それにやや後続して成立したものとみられる。遺構の平面形は長軸2.95m・短軸2.5mの隅丸三角形気味の円形土坑である。平面形は大きい、深さは20cmと浅い。底部は平坦で直立気味に側壁が立ち上がる。

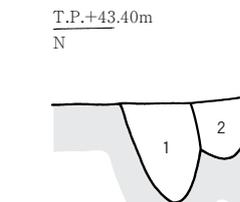
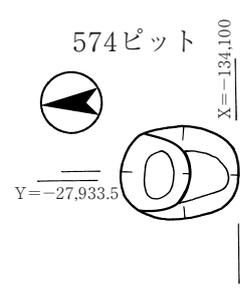
主に13世紀後半～14世紀前半の遺物を含む23溝に切られているのに加え、64土坑の出土遺物は13世紀後半代に収まることから、この時期までに機能を失っていたことがわかる。64土坑は65溝を切っているが、両遺構の出土遺物は13世紀後半の時期にまとまり、ほとんど時期差は認められない。

遺物は土師器皿・瓦質羽釜・土師質羽釜・瓦器椀が、コンテナに軽く1箱分出土した。そのうち形態的特徴がわかるのは釜類で、土坑がある程度埋まった段階で一括して廃棄されたものと考えられる。

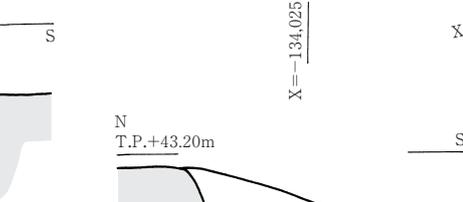
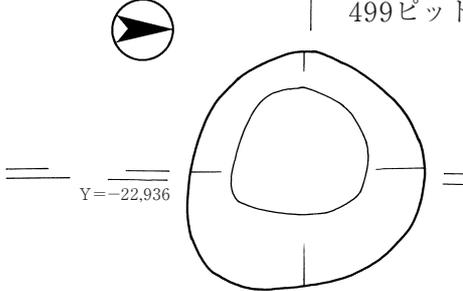
114土坑（図172） 調査区中央部で検出した（20F-5j）、長軸60cm弱・短軸50cm強の南北に長い楕



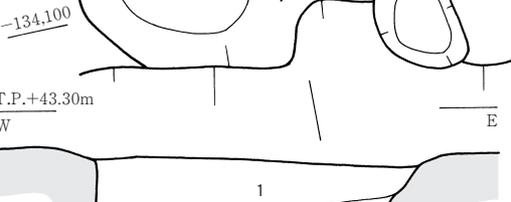
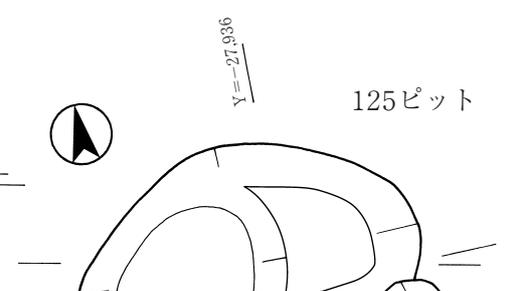
1. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロック、僅かに焼土、炭化物を含む)
2. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。地山の黄褐色粘質土ブロック、炭化物、焼土を含む。焼土、炭化物の含有量は1より多い)
3. 灰褐色7.5Y R5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む。僅かに焼土、炭化物を含む)
4. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
5. 灰黄色2.5Y 6/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。地山の淡黄色ブロックからなる)
6. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土 (7の土と、地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
7. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る)



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る。2層より粘性強い)
2. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土 (灰黄褐色10Y R4/2砂質土の土と、地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)



1. 灰褐色7.5Y R5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む)



1. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土 (4の土と、地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
2. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
3. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る。1と4の中間的な土質)
4. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る)
5. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)

図170 有池遺跡03-1-5調査区 土坑・ピット 平・断面図

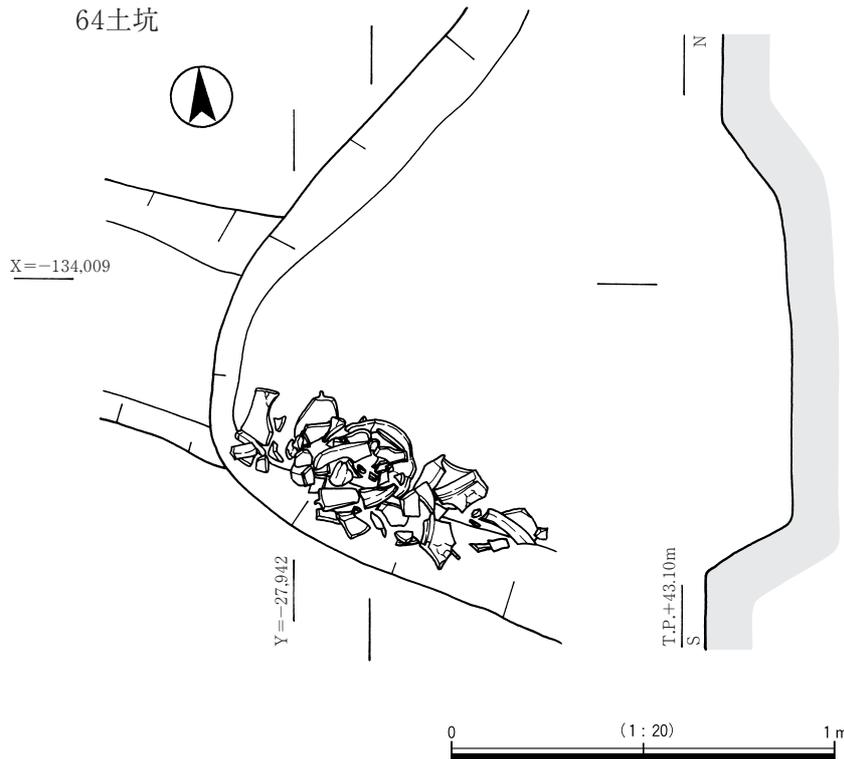


図171 有池遺跡03-1-5調査区 64土坑 遺物出土状況図

円形である。深さは50cm弱あり、断面形はU字形である。この規模の土坑の中では深さもあり、埋土の中層に根石の可能性のある角礫を一点含んでいたことから、柱穴の可能性もある。調査区中央部の中でも土坑・ピットが集中する箇所からやや距離を置いたところに位置しており、周囲にこれとセット関係を有するピットないし土坑は認めなかった。埋土中から遺物は出土しなかった。

388土坑 (図172) 調査区のやや西寄り (20F-6 i) の部分で検出した。生産域にあたる部分に位置するが、周囲

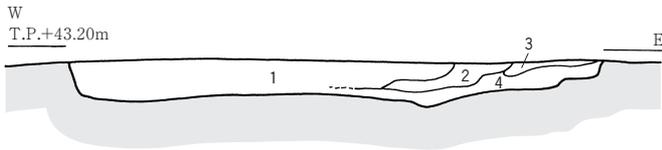
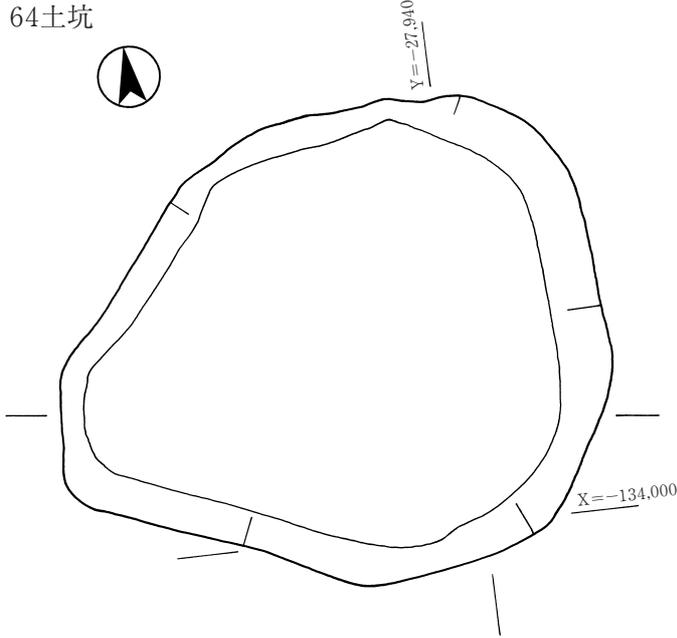
にはこれを含めて複数の土坑・ピットがある。長軸1.5m・短軸90cmの東西に長い楕円形の土坑で、深さは約20cmである。平坦な底面から側壁が外方へ直線的に立ち上がる。388土坑に切られている土坑の断面形もこれと近似している。これが埋まってからあまり時期を置かずに388土坑が掘り直された可能性もある。ちなみに切られている土坑の直径は80cm前後で、388土坑の短軸の長さと同様である。埋土中から遺物は出土しなかった。

630土坑 (図172) 調査区西寄り (20G-7 i・7 j) で検出した土坑で、生産域に位置する。遺構の北端は調査区北縁の側溝掘削時に削平したため、完全な状態で検出できなかったが、平面形は長軸1.2m以上・短軸1.1mの隅丸長方形の楕円形と考えられる。深さ20cm強で、平坦な底面から側壁が直立気味に立ち上がる。埋土中から遺物は出土しなかった。

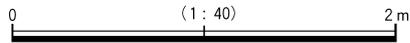
134土坑 (図173) 調査区中央の南端部 (20G-4 a・4 b・5 a・5 b) で検出した。平面形は長辺2.4m前後・短辺1.7mの隅丸長方形で、南辺の中央部がやや張り出す。土坑中央に向けて徐々に窪まるような断面形態で、底部から側壁への明確な立ち上がりは認められない。深さも15cm程度と極めて浅かった。このような形態的特徴は、南側に隣接する174土坑と類似する。底面でピットを2基検出した。瓦器碗・土師器皿・須恵質土器が10数点出土したが、いずれも細片で時期を明確に判断することはできない。ただ器壁が薄く、口縁部が明瞭な屈曲とともに外反気味に立ち上がる土師器皿が1点みられることから、14世紀前半の時期のものが含まれる可能性がある。

133土坑 (図173) 前述の134土坑の東側に隣接して位置する (20G-4 a・4 b)。遺構の南半部は調査区外にあたるため検出できなかった。平面形はおそらく長軸1m以上・短軸1.25mの南北に長い楕円形とみられ、深さは10cm強と浅い。底部から側壁への立ち上がりが明瞭でない点は134土坑と共通する。瓦器・土師器の細片が4点出土したが、時期を判断することはできなかった。

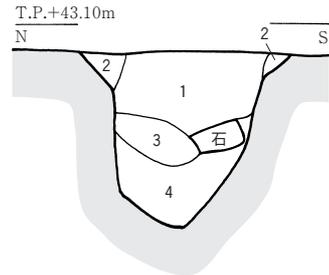
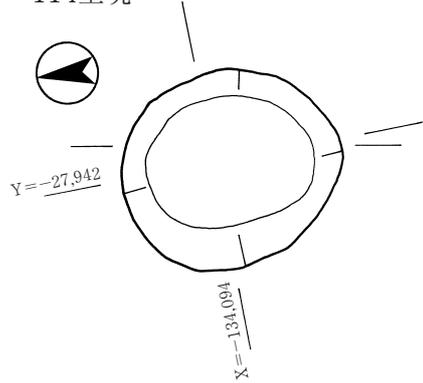
64土坑



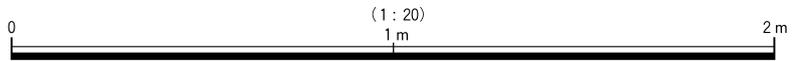
1. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。地山ブロックは含まない)
2. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロック含む。僅かに炭化物が入る)
3. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む)
4. 灰褐色7.5Y R5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む)



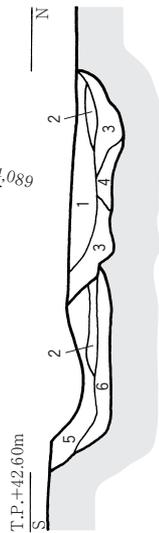
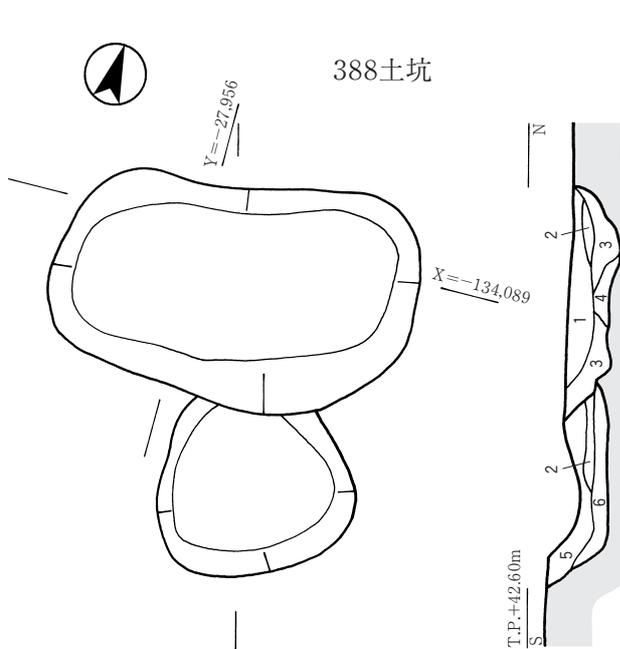
114土坑



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。)
2. 黄褐色2.5Y 5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
3. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロックを含む)
4. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)



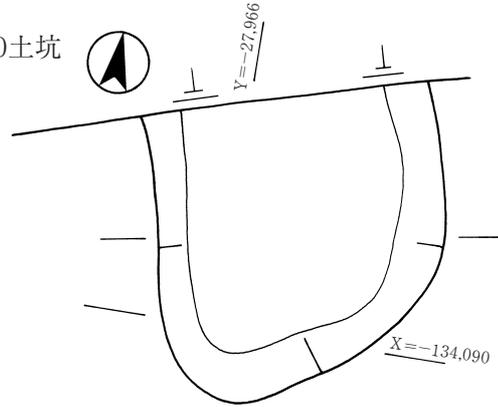
388土坑



1. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が入る。炭化物、焼土を含む)
2. にぶい黄褐色10Y R7/2砂質土 (細～粗砂からなる)
3. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、粗砂若干入る。灰黄褐色10Y R6/2粘質土ブロックと、炭化物が混ざる)
4. にぶい黄褐色10Y R5/3粘質土 (微～中砂が均一に混ざったものを主体とし、直径5mm大の円礫、粗砂が混じる。地山の浅黄色砂質土ブロック入る)
5. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が混ざる中に、炭化物を多く含む)
6. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む)



630土坑



1. 灰色10Y 5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざったものを主とし、粗砂若干混じる)
2. 緑灰色10G Y5/1砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。青灰色粘質土がブロック状に混じる)
3. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が入る)

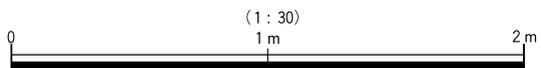
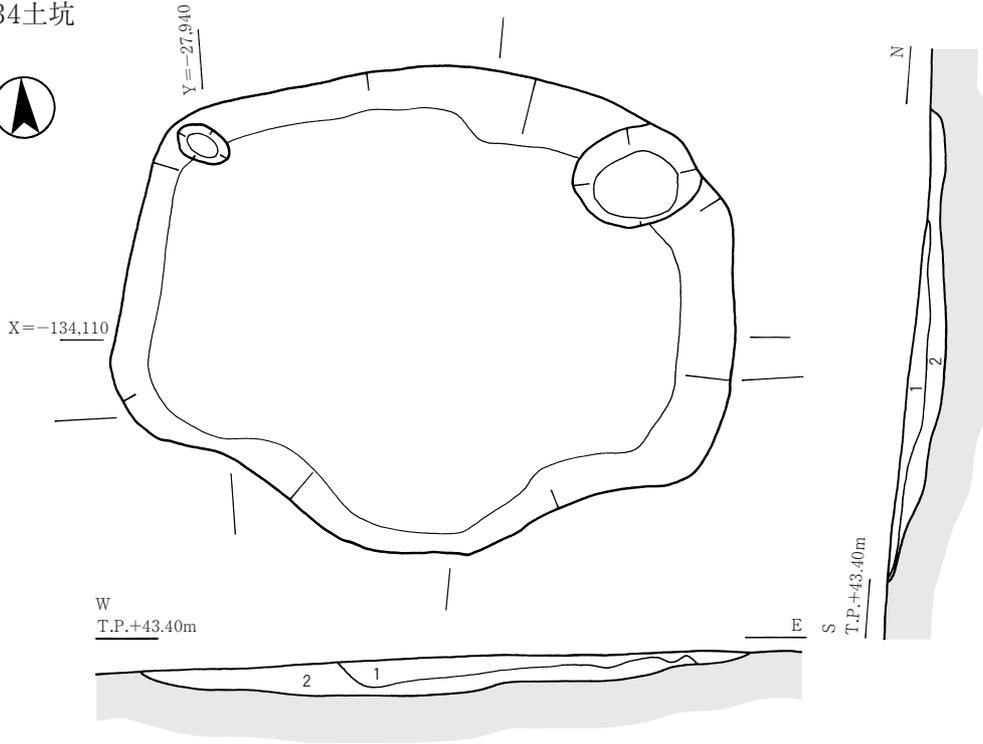


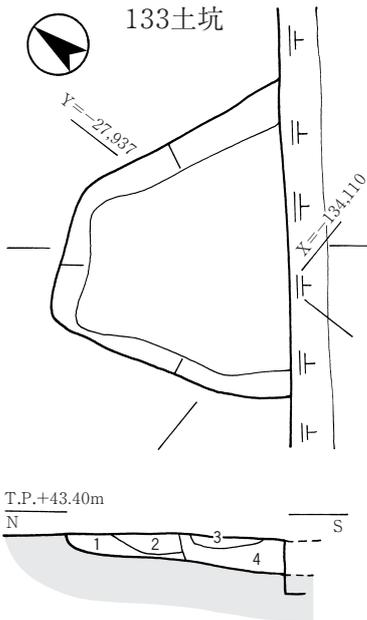
図172 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑 平・断面図

134土坑



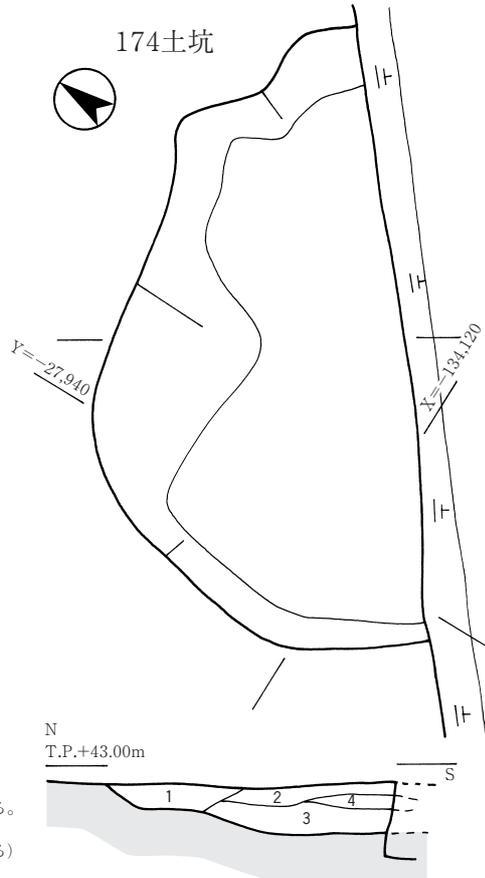
1. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mmの円礫が入る)
2. 灰褐色7.5Y R5/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を僅かに含む)

133土坑



1. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロックを含む)
2. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
3. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む)
4. にぶい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～粗砂が混ざり合う。地山の浅黄色砂質土に似るが、有機分を含んだ粘質土が僅かにブロック状に混入する)

174土坑



1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。3層より粘性低い)
3. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
4. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)

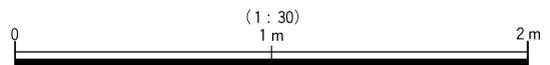
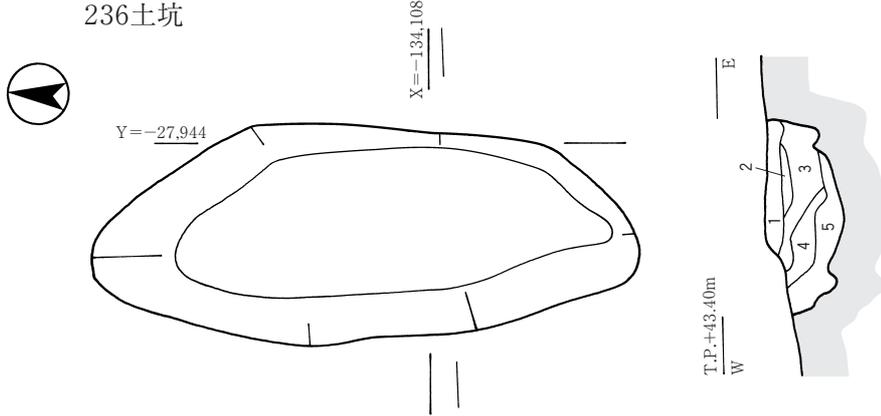


図173 有池遺跡03-1-5調査区 土坑 平・断面図

236土坑



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。3層よりも粘性低い)
2. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
3. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
4. 黄褐色2.5Y 5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
5. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる)

143石敷



1. 黄灰色02.5Y 5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る。暗灰色粘質土と、地山の浅黄色粘質土ブロックが入る)
2. 暗灰色2.5Y 5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む。褐色粘質土と、浅黄色粘質土ブロック、マンガ斑文が入る)
3. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が入る。マンガ斑文を含む)
4. 灰色7.5Y 6/1砂質土 (細～中砂を主として、粗砂が若干混じる。地山の浅黄色砂質土がブロック状に混入する)
5. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む)
6. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を僅かに含む)
7. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰色粘質土ブロックを含む)

図174 有池遺跡03-1-5調査区 土坑・石敷 平・断面図

174土坑（図173） 調査区中央の南端部（20G－4 b・5 b）で検出した遺構で、前述の134土坑はこの北側に近接して位置する。遺構の半分ほどは調査区外にあたり、全体を検出することができなかったが、平面形は長軸2.5m、短軸1.2m以上の楕円形とみられる。深さは20cm程度と浅く、中央にむけて徐々に深くなるような断面形である。

土師器皿・瓦器椀・須恵質土器・陶器が出土した。図化しなかった瓦器椀も、口縁部の先端は先細り気味に丸くおさめられており、器壁は3mm程度と薄い。土師器皿は口縁部を外反する傾向が認められる。これらのことから出土遺物の時期は13世紀後半～14世紀前半の時期とみられる。

236土坑（図174） 調査区中央の南端部（20G－5 a）で検出した、平面形が楕円形の土坑で、南北方向を指向する100溝の東側の肩部をわずかに切っている。長軸2.2m・短軸1.0mで、深さは30cmあり、湾曲気味の底部から側壁が直立気味に立ち上がる。

瓦器椀・土師器皿が全部で10点弱出土した。時期判断の決め手に欠けるが、形態的特徴が比較的わかる瓦器椀1個体に関して言うと、口径は5～6cmで小型化傾向が見られ、高台は退化寸前のものである。器壁は1～3mmと薄く、内面のミガキも粗いことから、14世紀前半の時期に属するとみられる。

143石敷（図174） 調査区中央の南端部（20G－4 a・5 b）で検出した土坑で、南北方向を指向する100溝と東西方向を指向する151・160溝の交点に位置する。溝の交点の部分が全体的に広がっているのを認めたが、溝より新しい時期の土坑が切込む状況は認めなかった。ただこれが溝と同一の遺構であるとも判断できなかったため、この部分に十字形の土層観察用断面を設定して掘り進めたところ、底部に浅い楕円形の窪みと、その底面の3分の2程に、最大長50cm程度の角礫が、平坦面をそろえるような状態で敷き詰められているのを認めた。楕円形の窪みの立ち上がりは極めて浅くかつゆるやかで、石を敷き詰める際に石の面がそろうように底面を整形したことによって生じた窪みと考えられる。土層断面を観察したところでは、東西方向の溝がある程度埋まった段階で、石敷の底面を整地したことがうかがえる。そして石敷土坑がある程度埋まった後にも溝を介した土砂の流入があったと判断する。

したがって143石敷の位置にほぼ対応する、東西および南北溝の交点の部分から出土した遺物に関しては、143石敷と同時性を有する遺物だけでなく、143石敷が形成される前後に存在した溝に伴う遺物も混在していると考えられる。第5章第3節で、143石敷上層として遺物を紹介しているのはそのためである。143石敷上層出土遺物には瓦器・土師器・瓦質羽釜・瓦質三足釜・瓦質播鉢・陶器などが多数含まれるが、いずれも細片である。時期的には12世紀末葉～15世紀までのものが含まれ、量的には13世紀後半以降の遺物が多い。図化できた遺物は少なく、新しい時期のもののみであった。したがって143石敷の成立年代は、上限と下限を抑えられるだけで明確にはできなかった。

617土坑（図175） 調査区中央の北端部（20G－5 i）に位置する不整形な土坑で、生産域に位置する。長軸3.2m弱・短軸2.5mで、深さは20cmと浅い。断面形は2段に掘り窪めた様な形状である。土師器・瓦器・須恵質土器の細片が20点弱出土したが、形態的特徴をつかめるものが無く、時期は不明である。

260土坑（図176） 調査区中央の西端部（20F－6 j）に位置する、長軸2.15m・短軸1.4m弱の東西に長い楕円形である。南北方向を指向する複数の溝と切り合う。断面形は隅丸の逆台形で、深さは40cmある。瓦器の細片が1点出土したが、細片で時期は不明である。

258土坑（図176） 調査区中央の西端部（20F－6 j）に位置する、平面形がT字状を呈する不整形な土坑である。土坑中央に直径60cmの円形のくぼみを有し、深さは最大で40cmを測る。この土坑の南側と西側には南北方向を指向する溝が、北側には東西方向を指す溝が近接することから、この遺構も南北方

向の溝と東西方向の溝の結節部の残存である可能性がある。

瓦器椀と土師器の細片が10数点出土した。いずれも全体の形状がわからないので判断の決め手に欠けるが、瓦器椀の口縁部や底部の破片を見る限り、13世紀全般にわたる時期のものが含まれるようだ。

166土坑(図176) 調査区中央の南寄り(20G-5 a・6 a・20F-6 j)で検出した、平面形が隅丸長方形の土坑で、遺構の東端をわずかに別の遺構で切られている。長辺1.8m・短辺1.6mで、深さは約30cmある。平坦な底部から側壁がなだらかに立ち上がる

瓦器椀・瓦器皿・瓦質土器・土師器皿が出土した。図化しなかった遺物は図化した土師器・瓦器椀とおそらく同タイプに含まれるとみられる。したがって時期は13世紀後半に含まれると考える。

164土坑(図177) 調査区中央の南寄り(20G-5 a)で検出した。長軸2.4m・短軸1.8m強の楕円形気味の不整形土坑である。南北方向を指す複数の溝状の遺構を切っている。遺構検出面からの深さは約30cmあり、湾曲気味の底面から緩やかに側壁が立ち上がる。縦方向の土層断面を観察すると、埋まりかけた段階で、何度か掘り直された可能性もある。平面形や断面形が不整形なのはそのためかもしれない。

瓦器椀・瓦器皿・土師器皿・瓦質羽釜が50点強出土した。量的にみると瓦器椀が大半を占める。ほとんどが細片だったため図化はしなかった。時期判断の決め手に欠けるが、瓦器椀で13世紀前半にさかのぼる可能性のあるものが3点あった他は、13世紀後半以降に属するとみられる。瓦器皿は見込みが無文化しており、瓦器椀では口縁端部が先細り気味に丸くおさめられ、口縁外面に横ナデが施される。器壁は3mm前後と薄い。土師器皿には外反傾向の見られるものがない。これらを勘案すると、出土遺物の時

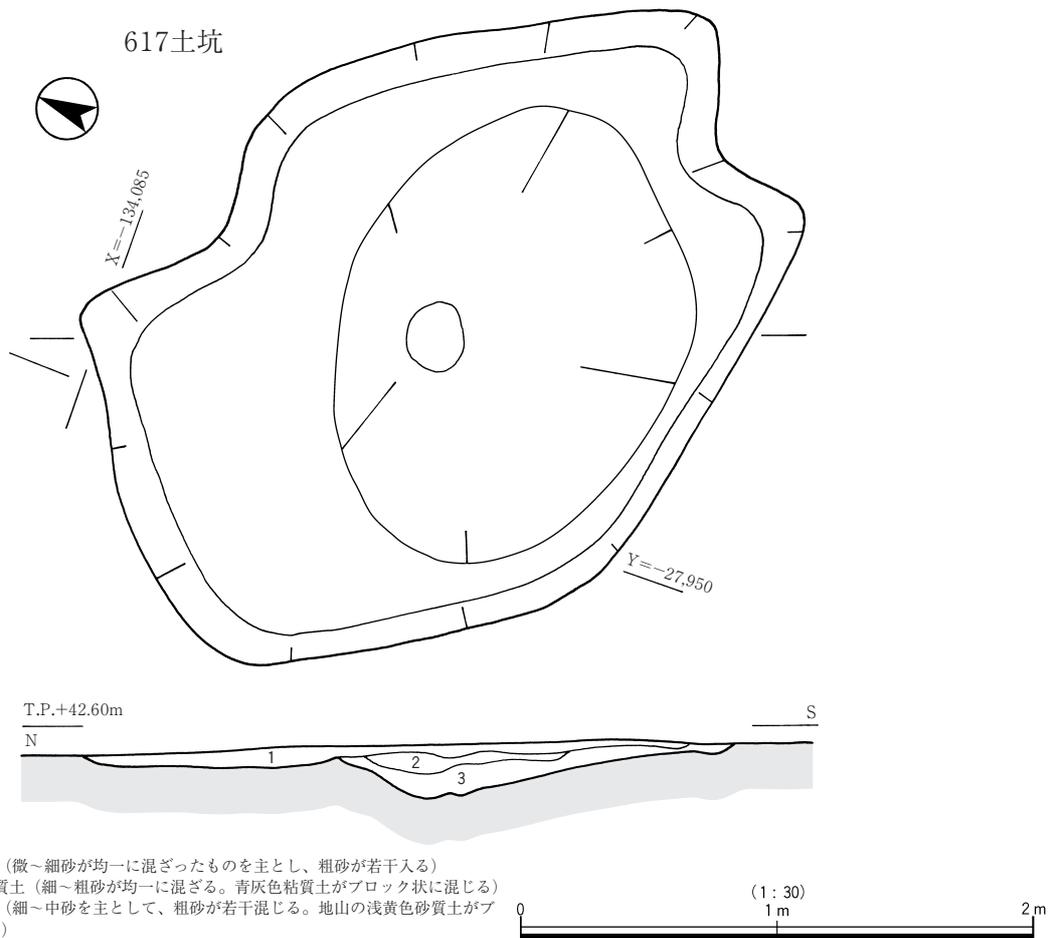
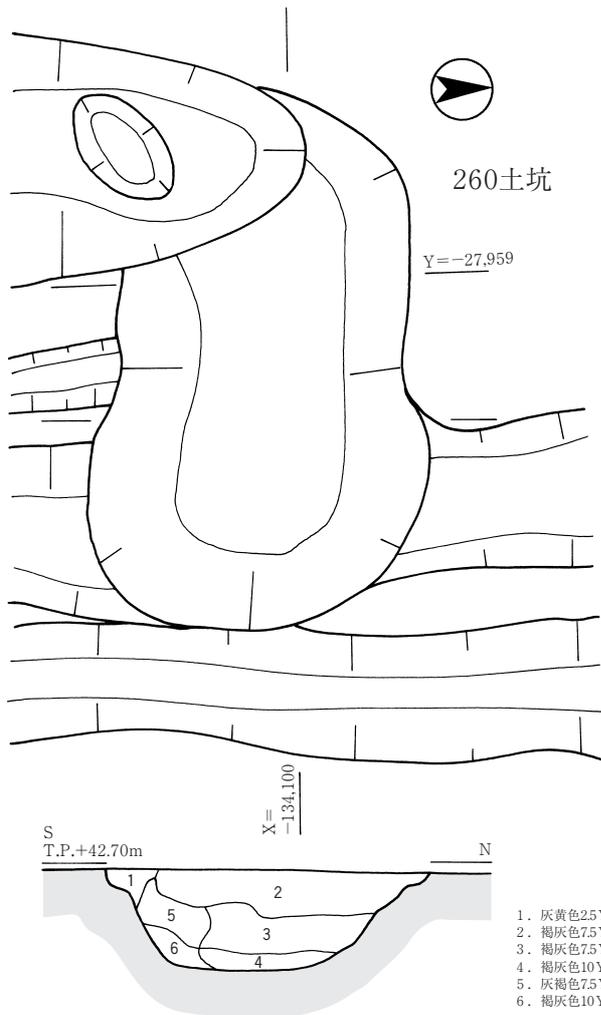
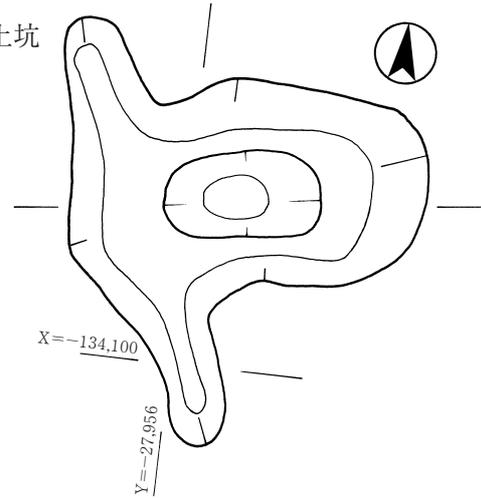


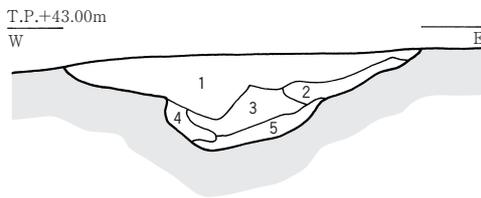
図175 有池遺跡03-1-5調査区 617土坑 平・断面図



260土坑

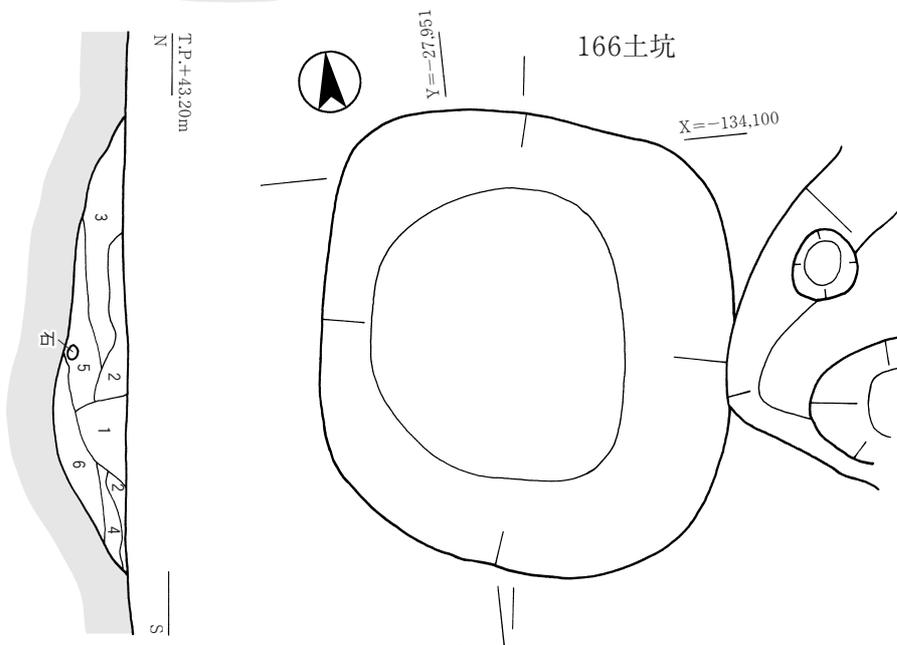


258土坑



1. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が若干混じる)
2. 黄褐色2.5Y 5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
3. にぶい黄褐色10Y R5/3粘質土 (微～中砂が均一に混ざったものを主体とし、直径5mm大の円礫、粗砂が混じる。地山の残黄色砂質土ブロック入る。炭化物を含む)
4. にぶい黄褐色10Y R4/3粘質土 (微～中砂が均一に混じるものを主として、直径5mm以下の円礫、僅かに焼土を含む)
5. にぶい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～粗砂が混ざり合う。地山の浅黄色砂質土に似るが、有機分を含んだ粘質土が僅かにブロック状に混入する)

1. 灰黄色2.5Y 6/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
2. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫、マンガン斑文を含む)
3. 褐灰色7.5Y R6/1粘質土 (微砂と粗砂が混ざり合う)
4. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)
5. 灰褐色7.5Y R5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を多く含む)
6. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を多く含む)



166土坑

1. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る)
3. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る)
4. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土 (4の土と、地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
5. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる。地山の浅黄色粘質土がブロック状に入る)
6. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む。地山の黄褐色砂質土ブロックと、炭化物を含む)

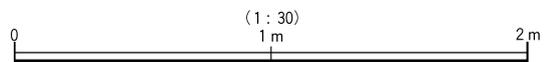


図176 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑 平・断面図

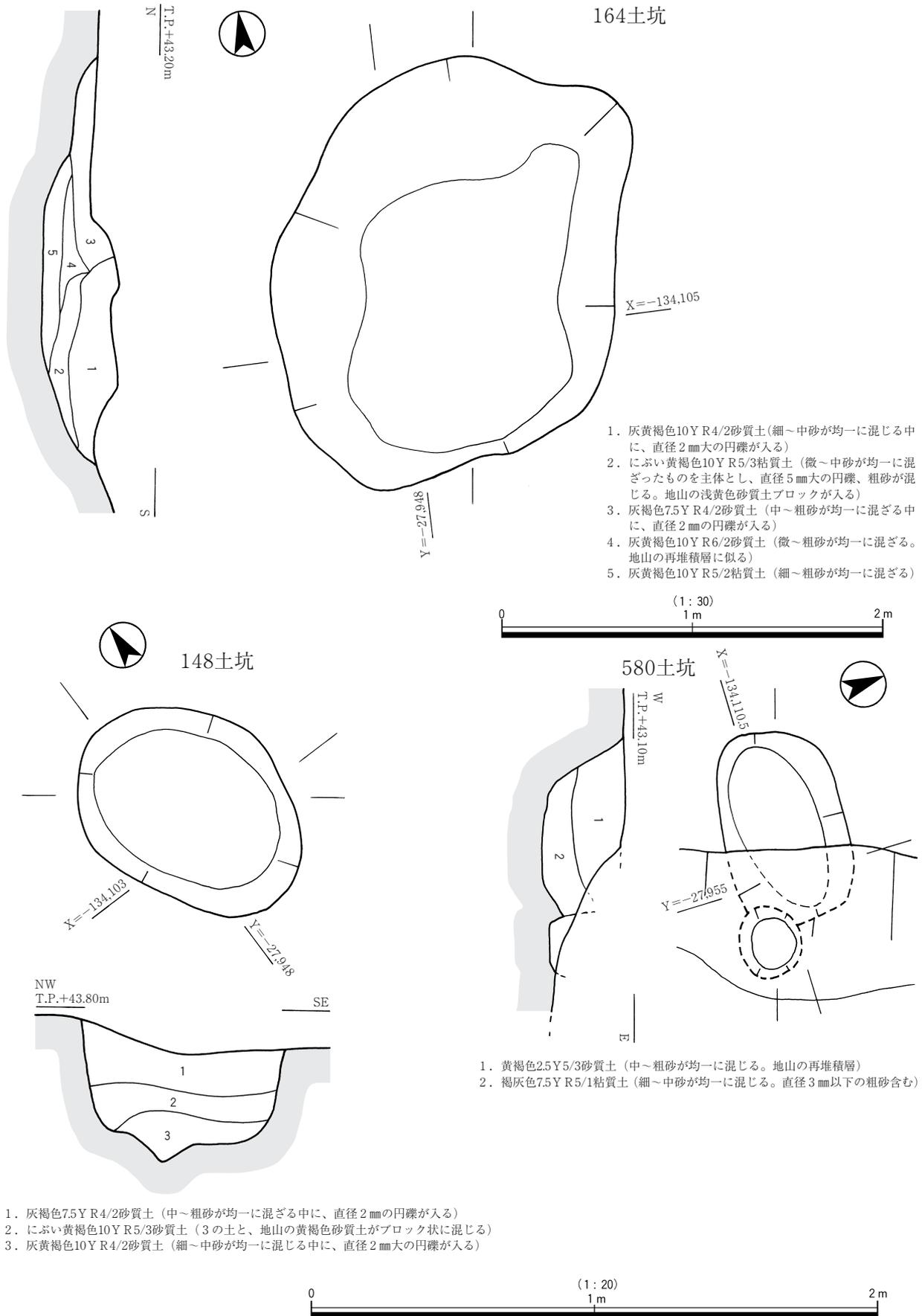


図177 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑 平・断面図

期は13世紀後半におさまるとみられる。

148土坑 (図177) 前述の164土坑の北側に位置し(20G-5 a)、南北方向を指す複数の溝を切っている。長軸90cm、短軸65cmの楕円形土坑である。遺構検出面からの深さは約40cm、断面形はおおむねU字形を呈するが、中央部に小さなくぼみを有する。遺物は出土しなかった。

580土坑 (図177) 調査区中央の南西寄り(20G-6 a)で検出した。南北方向を指向する158溝により遺構の東半を切られていたが、溝の底部で土坑の輪郭をとらえることができた。580土坑の東端を他のピットで切られている。長軸70cm・短軸45cmで東西に長い楕円形で、深さは30cm弱である。580土坑の周囲には158溝を挟んで土坑・ピットからなる遺構のまとまりがみられた。遺物は出土しなかった。

145土坑 (図178) 調査区中央の南端部(20G-5 b)で検出した土坑で、東西を指す151・160溝に切られている。平面形は長辺2.3m・短辺1.9mの隅丸長方形で、深さは最深部で25cmあり、ほぼ平坦な底面から側壁が湾曲気味に立ち上がる。遺構埋土の堆積状態は部分的にしか把握できなかったが、おそらく人為的に短期間で埋め戻されたものではないと考える。

瓦器碗・土師器・陶器・白磁碗・須恵器が20数点出土した。いずれも細片だったため判断の決め手に欠けるが、土師器皿の口縁部に外反傾向がみられることから、13世紀後半～14世紀前半の時期に含まれることは確かと考える。

585土坑 (図178) 調査区中央の南端部(20G-6 b)で検出した。南北方向を指す158溝と重なる位置で検出したが、溝に前後して形成された遺構ではなく両者は並存し、溝が埋まっていく過程で土坑も埋積したと考える。平面形は直径約1mの円形で深さは50cm弱を測り、断面形はU字形である。

瓦器碗の破片が1個体出土した。口径と体部の傾きが正確に割り出せないため図化はしなかった。口縁端部は口縁外面に施された強い横ナデにより口縁端部が外反し、内面には沈線が器壁に対して上方からの角度で工具を当てて入れられている。内外面のミガキは器壁が摩滅しており判然としないが、前述の形態的特徴より13世紀前半に属すると考えられる。

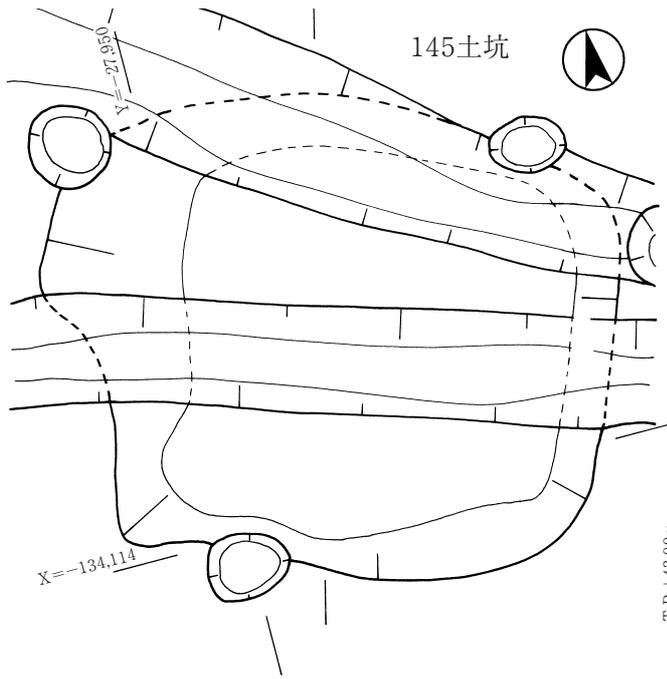
156土坑 (図178) 調査区中央の西寄り(20G-6 a)で検出した。遺構の西端を南北方向に伸びる186溝で切られているため、土坑全体を検出することはできなかったが、長軸2m・短軸1.1mの東西に長い楕円形土坑とみられる。深さは20cmで平坦な底部から側壁がゆるやかに立ち上がる。瓦器・土師器の細片が20点弱出土した。時期は不明である。

593土坑・592土坑 (図178) 調査区中央の南端部(20G-5 b)において、東西方向を指向する161溝の底部で検出した。592土坑はその南側に位置し、東西方向を指向する160溝の底部で検出した。161溝と160溝はほぼ平行している。両土坑の南北方向断面は、これらの溝の断面と合わせて実測した。これを見ると2条の溝は並存しており、短期間のうちに同時に埋まったことがわかる。

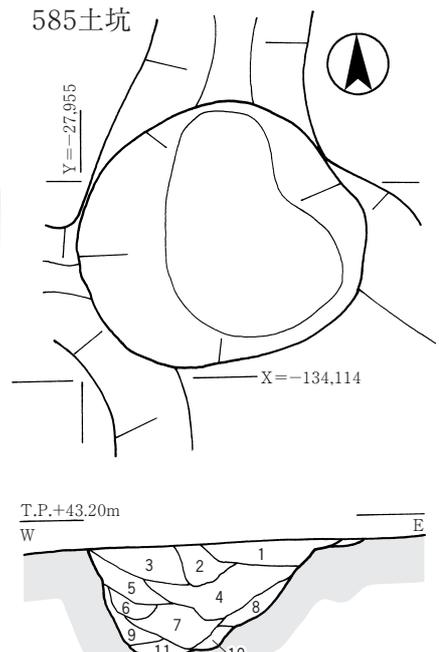
593土坑は直径40cm、深さ30cmの円形土坑で、断面形はU字形である。592土坑は直径約50cmの隅丸三角形気味の円形土坑で、深さは15cmと極めて浅い。遺物は出土しなかった。

695土坑・245土坑 (図179) 調査区西寄り(20F-8 j)で検出した。居住域に含まれるが、生産域との境界際に位置する。これら2つの土坑は南北に接するように並ぶが、切り合いは認めなかった。

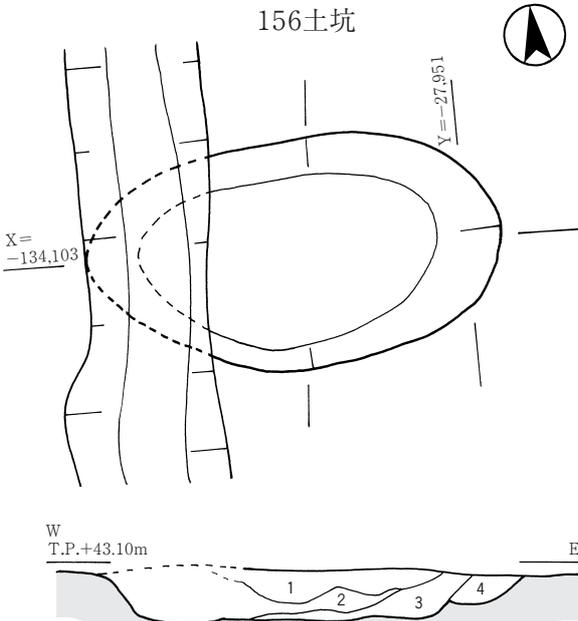
695土坑の北半分は生産域に向かって落ちる肩のラインで切られている。695土坑の西側に目を転じると生産域に含まれる部分で、ピットが3基認められる。これらのピットが調査区西寄りに展開するピット・土坑の密集する範囲の北端に位置するとみると、生産域に向かって下がる地盤の落ち際は時間が降るにつれて南側に寄ったと見ることもできる。



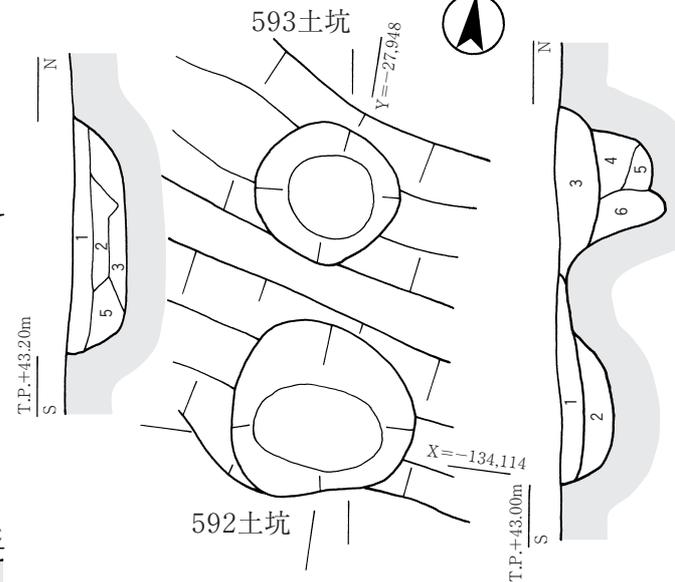
1. 灰褐色10Y R5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる)
2. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mmの円礫が入る)
3. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
4. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、3mm以下の砂・礫を含む)



1. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (3の土と地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。1と3の中間的な土質)
3. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
4. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロック含む)
5. 灰赤色2.5Y R4/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
6. におい黄褐色10Y R6/3粘質土 (微～中砂が均一に混ざる。地山の浅黄色粘質土に似る)
7. 黄灰色2.5Y 4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
8. 黄褐色2.5Y 5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
9. におい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～粗砂が混ざり合う。地山の残黄色砂質土に似るが、有機分を含んだ粘質土が少量ブロック状に混入する)
10. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
11. 黒褐色2.5Y 3/1砂質土 (中～粗砂が混ざる中に、微砂を若干含む)



1. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
2. 灰褐色7.5Y R6/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
3. におい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～粗砂が混ざり合う。地山の浅黄色砂質土に似るが、有機分を含んだ粘質土が少量ブロック状に混入する)
4. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が若干混じる)



1. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (2の土、と地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
2. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
3. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。1と2の中間的な土質)
4. 暗灰黄色2.5Y 5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
5. 灰褐色10Y R5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる)
6. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が若干混じる)

145・585・156土坑 (1:30)
593・592土坑 (1:20)

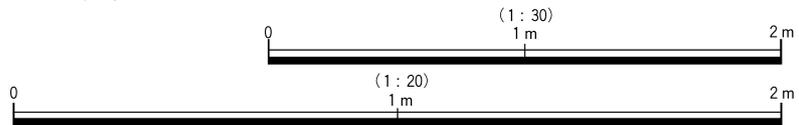


図178 有池遺跡03-1-5調査区 土坑 平・断面図

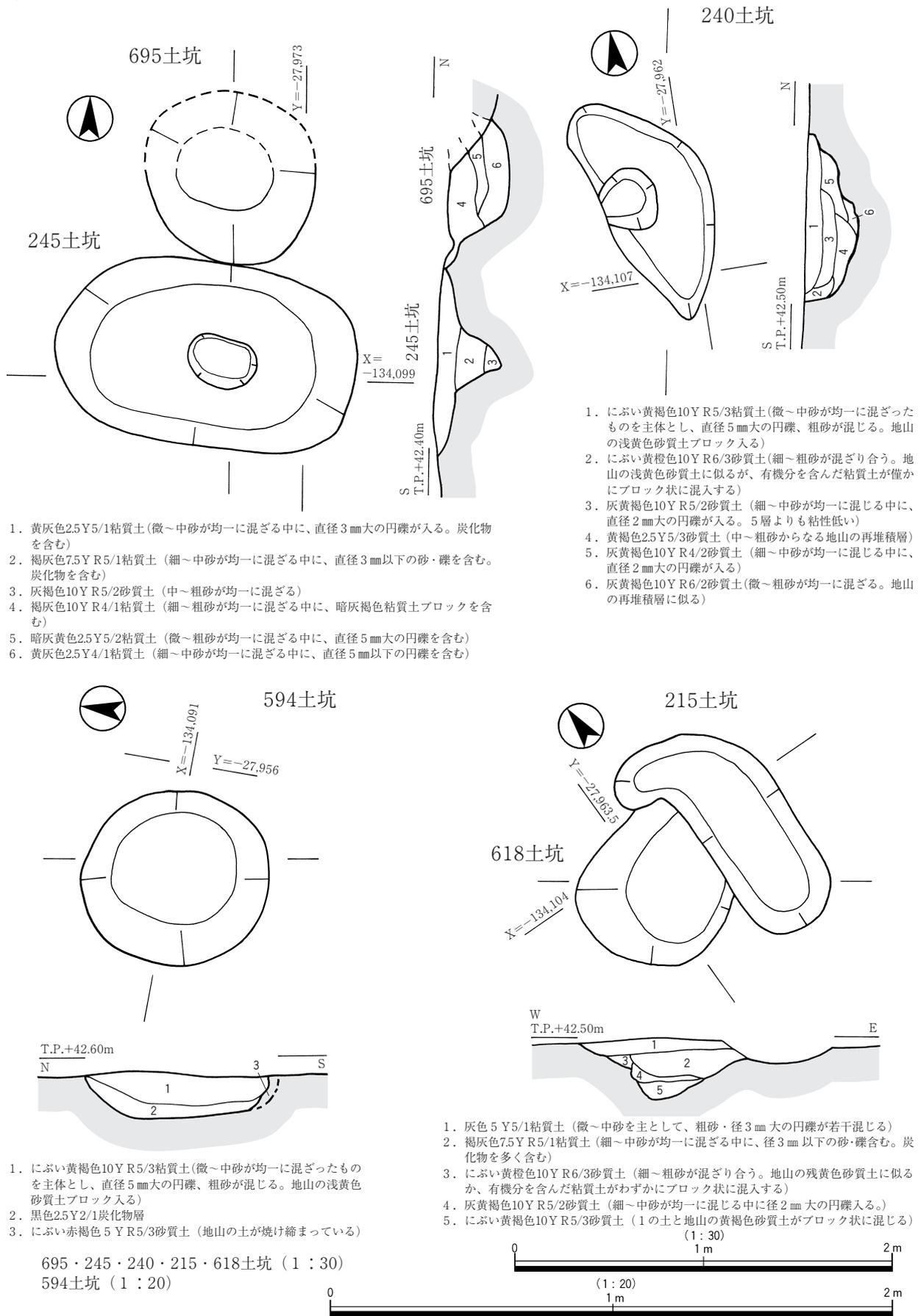


図179 有池遺跡03-1-5調査区 土坑 平・断面図

695土坑の平面形は直径90cm前後の円形とみられ、深さは30cm強ある。平坦な底部から側壁が外方に直線的に立ち上がり、断面形は隅丸逆台形とみられる。245土坑は長軸1.65m・短軸1.05mの東西に長い楕円形で、底部中央に長軸40cm・短軸30cm強の楕円形ピットを検出した。このピットを切って245土坑が掘られた可能性もあるが、ピットが土坑のちょうど中央部に位置し平面形が相似形を呈することから、両者は同時に形成されたと考える。ピットの部分も含めた深さは34cmある。この土坑の埋土から大和型の瓦器椀・楠葉型の瓦器皿・土師器皿が出土している。遺物の出土点数が少ない上、細片であるため時期判断の決め手に欠けるが、13世紀の範疇に含まれることは確実と見られる。

240土坑(図179) 調査区西寄り(20G-7a)の、土坑・ピットが密集する部分で検出した。長軸1.3m・短軸60cmの隅丸三角形気味の楕円形土坑である。底面で直径30cm前後のピットを検出した。土坑の深さは30cmで湾曲気味の底部からゆるやかに側壁が立ち上がる。土師器の細片が1点出土したが、その帰属時期を判断することはできなかった。

594土坑(図179) 調査区中央の北西部(20F-6j)で検出した、直径約70cmの円形土坑である。深さは15cmと浅く、ほぼ平坦な底部から側壁が湾曲気味に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

215土坑・618土坑(建物8)(図179) 調査区西寄り(20G-7a)の土坑・ピットが密集する部分で検出した。前述した240土坑の北西側に隣接しており、215土坑が618土坑を切っている。215土坑は平面形が長軸約1.3m、短軸50cmの楕円形で、深さは10cm強と極めて浅い。一方の618土坑は長軸1m前後、短軸80cmの楕円形の土坑とみられ、深さは30cm強ある。土師器皿・瓦器の破片が3点出土した。いずれも細片で、時期を判断することはできなかった。

653土坑(図180・181) 調査区西寄り(20G-8a)の土坑・ピットが密集する部分で検出した。直径約50cmの円形で、深さは32cmあり、平坦な底部から側壁が直立気味に立ち上がる。底部から埋土上部まで土師器皿が重なった状態で埋置されていた。接合して完全な状態になった土師器皿は30枚にのぼる。それらの器形は法量・形態ともに比較的均一だった。皿は数枚ずつ重ねて、正置もしくは伏せて置かれた状況が見受けられた。これらの皿を埋置した後、土坑を一挙に埋めたものとみられる。出土遺物の時期はおそらく13世紀後半と考えられる。

8溝・10溝・11溝・12溝・13溝・14溝・18溝・385溝・384落込

調査区東寄り(20F-1h・1j・2h・2i・3h・3i)で検出した南北方向ないし東西方向を指向する溝群である。これらの溝は位置や方向性から見て、相互に関連を有することは明らかだが、必ずしも最初から全てが並存していたわけではないとみられる。したがって5調査区平面図にあらわれているこれらの溝の配置は、最終的な景観を示していると考えられる。どのような経緯でこれらの景観が生じたかを把握することは、個々の溝の機能をとらえる上でも重要と考える。ここではまずそれらの遺構が形成された経緯を概観し、次に個々の遺構の詳細を述べる。

遺構埋土の堆積状況や遺物の検出状況から見て、まず8溝・10溝・12溝が形成されたと考える。これらの溝はおそらく13世紀のある段階で開口し、14世紀の前半まで数回の掘りなおしを経て継続したとみられる。8溝と10溝の間は陸橋状の高まりを呈する。これを仮に屋敷地の前面を区切る溝に設けられた出入り口ととらえると、出入り口は中央に位置したとみられることから、その東西辺の長さは24~25mの規模と想定される。これは1調査区で検出した大きい方の屋敷地の東西辺と近似する値である。

11溝は10溝とほぼ平行し、かつ溝東端の位置が意図的にそろえられたような位置関係を有する。加えて12溝の南端部分と11溝の南肩がほぼ一致するので、これらの溝とのセット関係を強く意識して形成さ

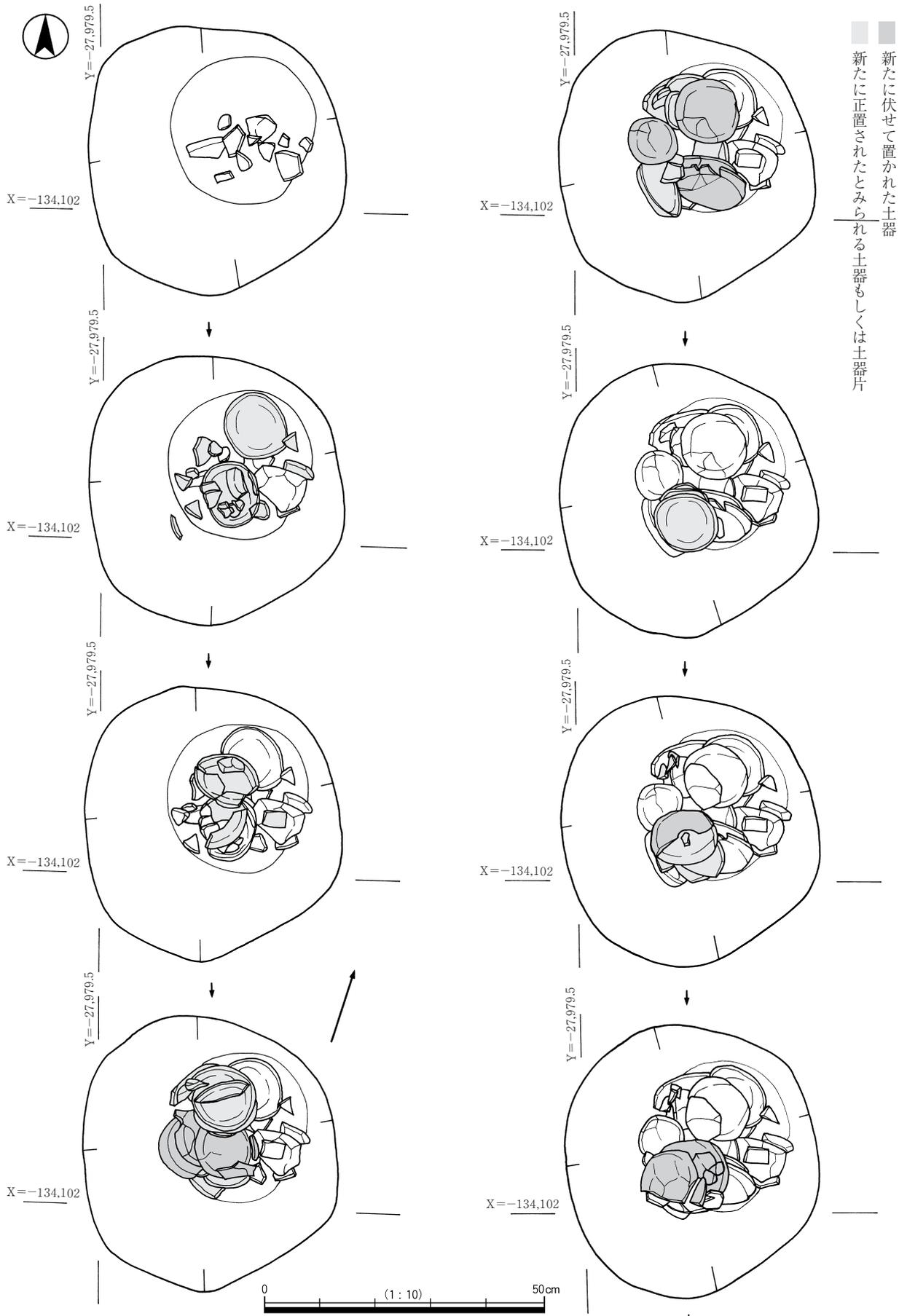
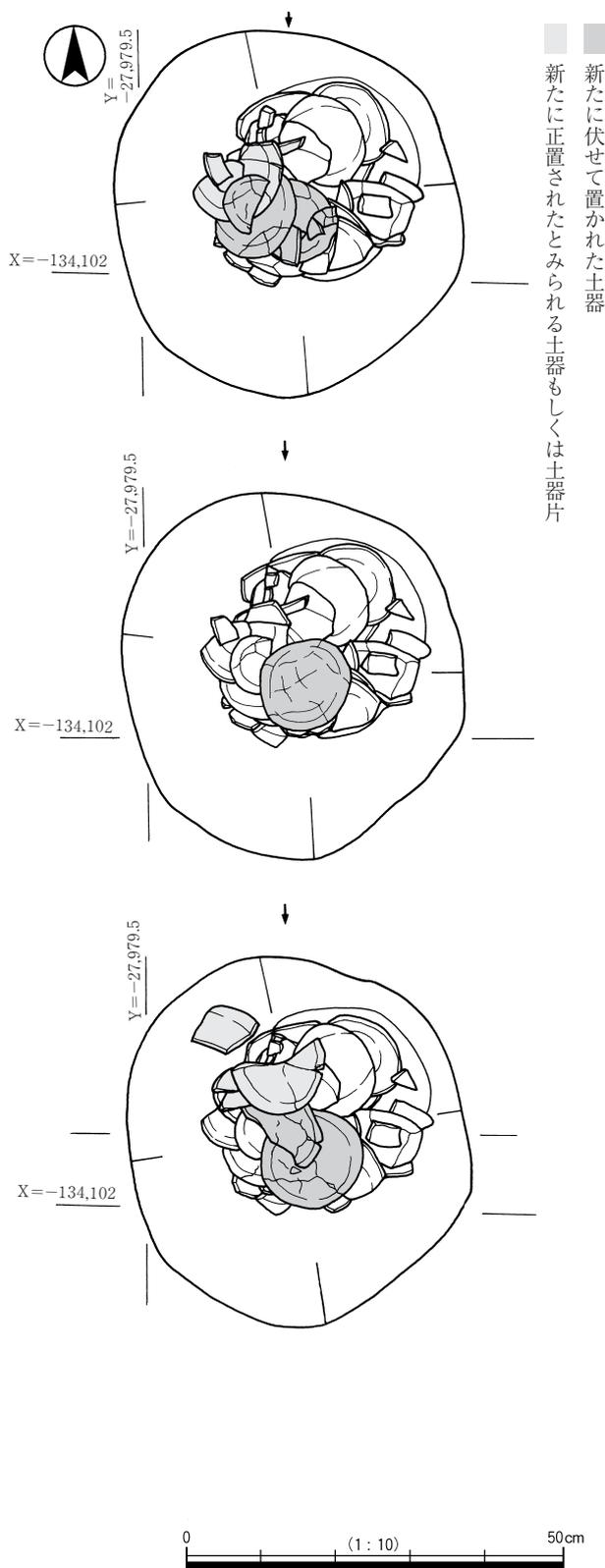


図180 有池遺跡03-1-5調査区 653ピット 遺物出土状況図1



れたことは明らかである。ただ遺構埋土の堆積状況が10溝・12溝とやや異なる点、出土遺物の時期が14世紀前半にくくられることから、11溝は前二者とは別に、この時期にあらたに掘削されたと考える。したがって11溝が形成された段階で、東西方向溝は2条になったと考えられる。

11溝と12溝の切り合い関係は不明瞭だったが、かろうじて11溝が12溝を切る状況をとらえた。ただし出土遺物の時期を見ると時期的にはほぼ平行するので、8溝・10溝・12溝が埋まってから11溝が形成されたとはいえない。断面観察の結果、11溝でも少なくとも2度の掘り直しが認められるので、8溝・10溝・12溝と並存する時期を経て、それらがほぼ埋まってから11溝だけが掘り直されたと考える。

18溝は12溝との連続性が明らかだが、溝の幅や深さ・断面形状が明らかに異なる。また出土遺物の時期も14世紀前半でくくられるので、同じ時期に作られたものではなく、18溝が後から掘り足されたと考えることができる。この溝と平行する13溝・14溝からも14世紀前半の遺物が出土していることから、これらの溝は同時期に掘削された可能性が高い。ただ14溝の東肩の延長部分が比較的明瞭に8溝西端の位置までとらえられたのに対し、14溝の西肩、13溝の輪郭は11溝の手前で不明瞭になり、385溝との境界もはっきりしなかった。

11溝の西端は12溝の西肩でほぼ立ち上がるが、それよりも浅く、数cmの深さで西に延長する部分を認めた。前述の溝群には水が流れ込んできた際、水を流す先がないので、水が溝全体の許容量を越えた時には余水をはかせる導水口が必要になっただろう。11溝の延長部はそのような施設だったとみられる。その先端は南北方向を指向する312溝・389溝に切られており、どのような形状になっていたかを確認することはできなかった。東西・南北方向の溝ないしその先に自然に流れるままにしてあったと考える。

図181 有池遺跡03-1-5調査区 653ピット 遺物出土状況図2

385溝はわずかに11溝を切っているの、これ

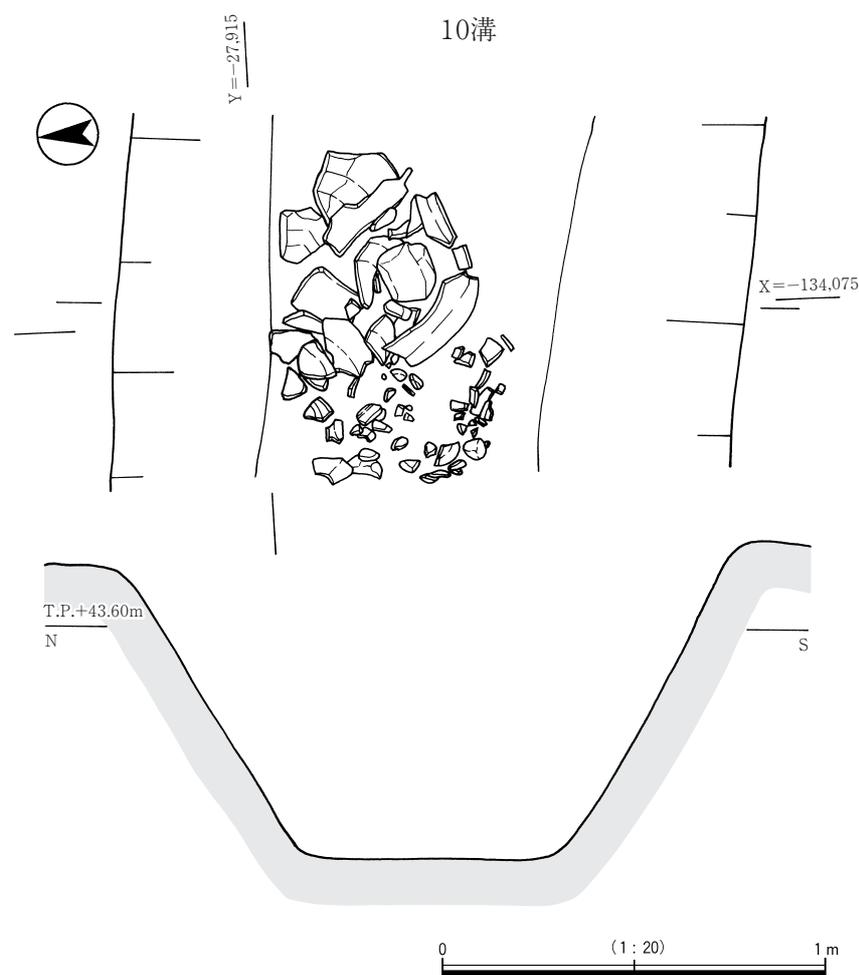
に後続して形成されたと考えられる。ただ11溝と極めて近接するのに加えて、両者がほぼ平行することから、この溝が11溝の機能を引き継ぐ形で掘削されたのは明らかである。ただ形状が不整形で屈曲部の輪郭も明瞭でないことから、この段階では区画溝の役割が形骸化していた可能性もある。

このように14世紀前半に、流末が確保されていない溝に向かって複数の溝が掘り足されているのは、それを導水施設としてとらえた場合、不自然である。したがってこれらは区画を囲うことを目的として形成されたものとする。実際にこれらの溝で囲まれた部分で複数のピットを検出した。しかし復元できた建物の棟数はかならずしも多くはない。特に11溝のすぐ南側の区画では、ピットの検出数は少数にとどまる。この部分が微高地のつけ根により近い部分であることから、耕地造成の際により強い削平を受けた結果、ピットが消失した可能性が高いと考える。

遺構面を精査している段階では、8溝・12溝・11溝・385溝が位置する範囲は、全体的に灰黄褐色の砂質土に覆われていて、個々の遺構の輪郭が判然としない状態だった。おそらくこれらの溝が機能を失った後も完全に埋まりきらず、全体的にぬかるんでいた期間があったと考える。

〔8溝〕(図183) 東西方向(W-12.5°-N)を指す溝で、延長距離は6.5m程度を測るが、東への延長部は調査区外に延びる。幅2m前後で深さは70cmを測る。幅1m弱の陸橋状の掘り残しを挟んで、10溝とセット関係を有するとみられる。

埋土は土質と堆積状況から大きく3つにグルーピングすることが可能である。上から上層・中層・下層



層として埋土の堆積過程を概観したい。下層の下部には粗砂が含まれるが、上部にはそれより粒子の細かい土が堆積する。中層は下部に地山の再堆積層を含み、粗砂と径1cm以下の礫の含有が見られた。上層は下部に地山の再堆積層を認めたが、下層・中層に比べて砂の粒度は小さい傾向がみられた。

18溝が掘られてからは、南から水が送られてくることもあったと考えられるが、10溝と同様、8溝には溝内の水が流れていく先がない。ただベースの土は中～粗砂を主体とする砂層なので、溝内に常時水が溜まっていたわけではないと考える。したがって溝を掘削した当初は壁面から崩落した土、あるいはそれと流

図182 有池遺跡03-1-5調査区 10溝 遺物出土状況図

水時に運ばれて沈殿した土が混ざったものが堆積し、溝が埋まるにしたがって止水性の粒度の細かい土が堆積したものと考える。上層・中層・下層のそれぞれにこのようなサイクルの堆積がみられ、さらに下層から上層に向けて堆積層の粒度が細くなる傾向が見られるのはそのためと考える。

以上のことからこの溝は少なくとも2度にわたって掘り直されたと考える。遺構埋土から遺物は出土しなかったが、次に述べる10溝における遺物の出土状況を参考にすることができる。

〔10溝〕(図182・183) 東西方向(W-14°-N)を指向する溝で、延長距離は12mである。溝の西端は南北方向を指向する12溝に連続する。溝東端の立ち上がりは幅1m弱の陸橋状の掘り残しに続くもので、これを挟んで8溝とセットをなすと見られる。土層観察用断面を設定した箇所では、南側に浅いステップ状のくぼみを取り付くが、幅はおおむね1.5m前後、深さは70cm強である。平坦な底部から側壁が直立気味に立ち上がる。

埋土を9層に細分したが、土質と堆積状況からそれらを大きく3つにグルーピングし、上から上層・中層・下層として埋土の堆積過程を概観したい。下層下部には地山の再堆積層が認められ、上部には円礫混じりの微～中砂の土壌化層を認めた。中層は上・下層に比べると、含まれる砂粒の大きい土壌化層で、上層は円礫を含みつつ、主体となる砂粒は細かい傾向が認められた。これらの状況は8溝埋土の堆積状況と比較すると極めて類似性が高いと考える。以上により、10溝も8溝と同様に、少なくとも2度にわたって掘りなおされたと考える。

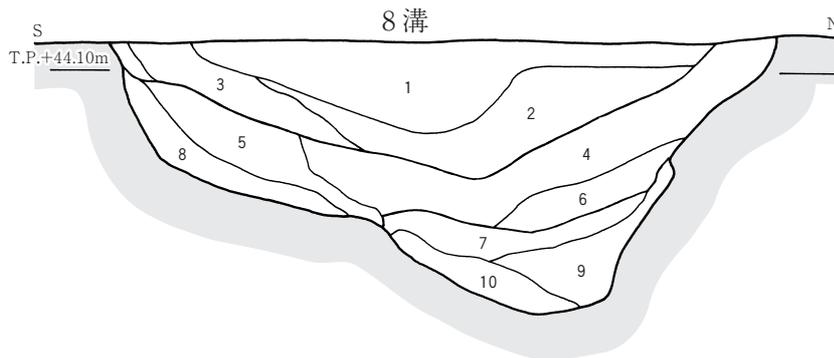
瓦器椀・土師器皿・瓦質三足釜・瓦質羽釜・土師質羽釜・陶器が出土した。図化しなかった瓦器椀・土師器皿も、おおむね図化したものと同タイプである。したがって出土遺物の時期は13世紀前半までさかのぼりうるものを若干含みつつ、大半が13世紀後半～14世紀前半に収まると考える。出土状況から見て、埋土中層から出土した遺物は一括して廃棄されたものとみられる。

〔12溝〕(図183) 南北方向(N-21°-E)を指向する溝である。溝の南端が18溝とつながり、それとほぼ同一の方向を指すことから、一見すると12溝と18溝は一連の溝ととらえられる。実際にその可能性は否定できないが、溝の幅や深さ・埋土の堆積状況が、12溝は10溝と極めて類似するのに対し、18溝はこれよりも幅狭で浅い。さらに埋土の堆積状況にも相違が認められたことから、10溝・11溝・12溝が連続して掘削された後、18溝が掘り足された可能性が高いと考え、それぞれに異なる遺構名を付した。

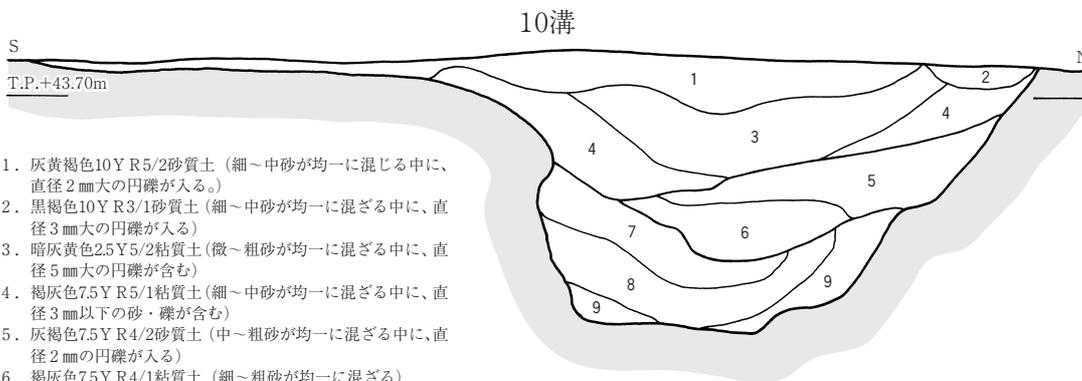
12溝は幅1.4m・深さ80cmで平坦な底部から側壁が外方に直線的に立ち上がる。埋土は11層に細分できたが、土質と堆積状況からそれらを大きく3つにグルーピングし、上から上層・中層・下層として埋土の堆積状況を概観する。下層は下部に粗砂混じりの土層がみられるが、おおむね砂粒の細かい土壌化層からなる。中層では下部に地山の再堆積層もしくは地山のブロック土を含む土層がみられ、上部は粗砂および円礫など、粒子が比較的大きい円礫を含む土壌化層からなる。そして上層は円礫を含みつつ、主体となる砂粒は細かい傾向が認められた。これらの埋土の堆積状況は8溝・10溝との類似性が高いことから、12溝はこれらと一連のものとしてとらえることができる。したがって12溝も少なくとも2度にわたって掘り直されたと考える。ちなみに18溝の土層断面を観察すると、掘り直しの痕跡は認めなかった。このことから両者には継続期間に差があると考えられる。

土師器皿・瓦器椀・瓦質羽釜・瓦質三足釜の破片が40点前後出土した。器種構成や土師器皿・瓦器椀のタイプは前述の10溝とほぼ一致する。

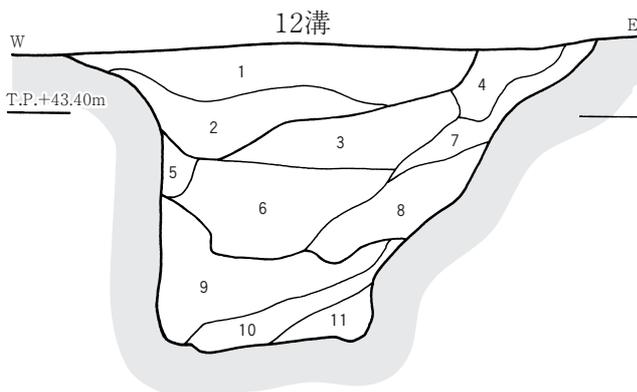
〔11溝〕(図183・184) 東西方向(W-10°-N)を指向する溝で、延長距離13m・幅約1.3m、深さは最深部で65cmあり、東から西に向けて徐々に深くなる。溝の東半で、これにほぼ平行して南側をはし



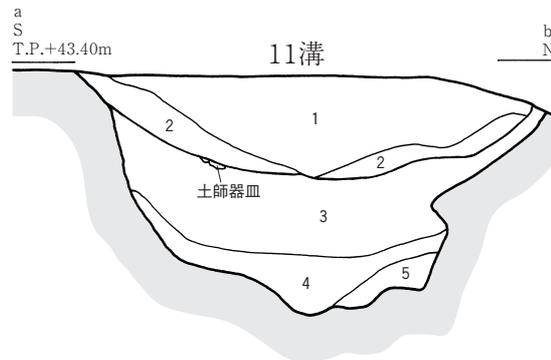
1. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
2. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
3. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。1と6の中間的な土質)
4. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の礫を含む)
5. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
6. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (1の土、と地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
7. 灰褐色7.5Y R5/2粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を含む)
8. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂からなる地山の再堆積層)
9. 灰褐色10Y R5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる)
10. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)



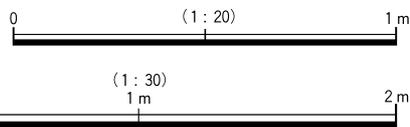
1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。)
2. 黒褐色10Y R3/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る)
3. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
4. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む)
5. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mmの円礫が入る)
6. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
7. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
8. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が若干混じる)
9. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。2と5の中間的な土質)
2. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。直径40mm以下の花崗岩砂と、焼土を若干含む)
3. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が入る)
4. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる)
5. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (2の土と、地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる。7に比べると地山の浅黄色粘質土ブロックが大きい)
6. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む。炭化物を含む)
7. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (2の土と、地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
8. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
9. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む)
10. 褐灰色10Y R6/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を僅かに含む)
11. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)



1. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂・礫が入る)
2. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (灰黄褐色10Y R4/2砂質土と地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる。地山ブロックが大半を占める)
3. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
4. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm以下の砂・礫を含む)
5. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)



8溝・10溝・11溝 (1:20) 12溝 (1:30)

図183 有池遺跡03-1-5調査区 溝 断面図

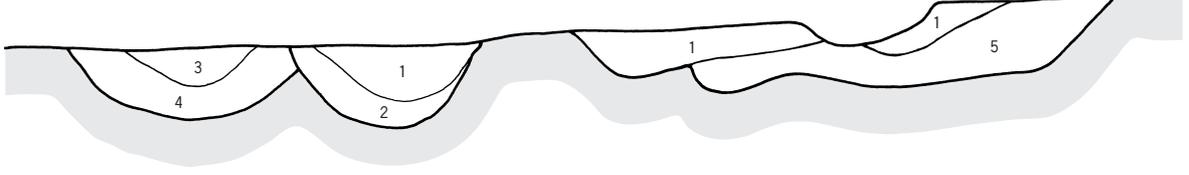
T.P.+44.10m

W

13溝

14溝

E



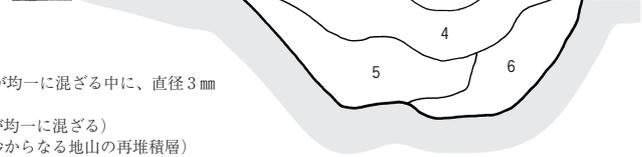
1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土（細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。2と3の中間的な土質）
2. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土（細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る）
3. におい黄褐色10Y R5/3砂質土（2の土と地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる）
4. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土（中～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mmの円礫が入る）
5. 灰褐色7.5Y R5/2砂質土（細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を僅かに含む）

c

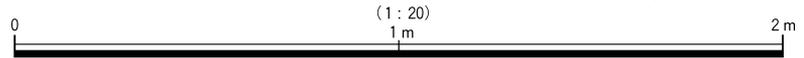
11溝

d

T.P.+43.40m



1. 灰褐色7.5Y R5/2砂質土（細～粗砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫を僅かに含む）
2. 灰褐色10Y R5/2砂質土（中～粗砂が均一に混ざる）
3. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土（細～粗砂からなる地山の再堆積層）
4. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土（細～粗砂が均一に混ざる）
5. 黄褐色2.5Y 5/3砂質土（中～粗砂からなる地山の再堆積層）
6. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土（微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る）



e

385溝

11溝

f

T.P.+43.10m



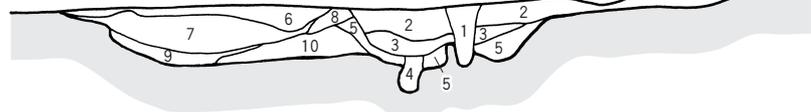
1. 灰褐色7.5Y R4/2砂質土（中～粗砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る）
2. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土（細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る）
3. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土（細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。）
4. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土（細～粗砂が均一に混ざる）
5. 黄褐色2.5Y 5/3砂質土（中～粗砂からなる地山の再堆積層）
6. 黒褐色7.5Y R3/1粘質土（微～中砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む）
7. 黄褐色2.5Y 5/3砂質土（中～粗砂からなる地山の再堆積層。5より礫の含有量が多い）
8. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土（微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る）
9. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土（細～粗砂からなる地山の再堆積層）
10. 褐灰色7.5Y R4/1粘質土（細～粗砂が均一に混ざる）
11. 褐灰色10Y R5/1粘質土（微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂～礫が入る）

T.P.+44.00m

384落込

E

W



1. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土（細～中砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の円礫を含む）
2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土（細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。3と6の中間的な土質）
3. におい黄褐色10Y R5/3砂質土（6の土、と地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる）
4. 灰褐色10Y R5/2砂質土（中～粗砂が均一に混ざる）
5. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土（微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る）
6. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土（細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る）
7. におい黄褐色10Y R7/2砂質土（中～粗砂からなる。ラミナ顕著）
8. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土（微～粗砂が均一に混ざる）
9. 黒褐色10Y R3/2粘質土（微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む）
10. 灰黄褐色10Y R4/2粘質土（9の土と地山の黄褐色粘質土ブロックと、直径5mm大の円礫が混ざり合う）

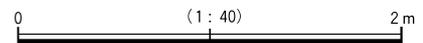


図184 有池遺跡03—1—5 調査区 溝・落込 断面図

る385溝に南肩を切られている。また溝埋土を掘りあげた段階で井戸を1基検出した。遺構埋土の堆積状況をみたところ、中位で地山ブロックが混入する層を薄く認めた。これを溝の掘り直しの際か、その直後に混入したものととらえると、少なくとも1度は掘り直された可能性がある。なお11溝と385溝が埋まった後も、浅い溝状のくぼみが残っていたようで、そこに含まれていた土器についても第3節で11溝・385溝最上層出土遺物としてあげているので参照されたい。

11溝の埋土からは瓦器椀・土師器皿・陶器・瓦質土器が40点出土した。そのうち土師器皿が過半数を占める。瓦器椀は口縁端部を丸くおさめたものが1点あった他はすべて先細り気味に丸くおさめたものだった。後者は器壁が2～3mmと薄く、外面にユビオサエが顕著に残る。底部片は含まれないが、おそらく高台が退化した時期のものと思われる。土師器皿は口縁に外反傾向の認められるものが過半数を占める。これらのことから遺物の時期はおおむね14世紀前半に収まると見られる。

〔13溝〕(図184) 18溝や14溝とほぼ平行する南北方向(N-15°-E)の溝で、11溝の手前で輪郭が不明瞭になり、385溝や11溝の東端を覆う落込に含まれてしまう。南に目を転ずると溝の延長部は調査区外へさらに続く。

遺構底部の状況や土層断面から見て、1度掘りなおされた事は明らかである。それぞれの段階の溝の幅は50～60cmで、後に掘削されたものの埋土の土質が、14溝の掘削しなおされたものの土質と同じことから、両者は時を同じくして埋まったことがわかる。遺物は出土しなかった。

〔14溝〕(図184) 18溝や13溝とほぼ平行する南北方向(N-15°-E)の溝で、東肩の輪郭は8溝の西端に向けて延びるのが明瞭にとらえられたが、西肩のラインは11溝の手前で途切れてしまい、判然としなかった。一方、南へは調査区外へさらに続く。溝の幅は1.4m・深さ20cm強で、遺構底部の形状や土層断面からみて1度、掘削し直された可能性がある。それぞれの時期の溝の幅は1.1～1.2mで、比較的短時間のうちに埋まったと考える。後から掘削された方の埋土の土質が13溝の新しい方の溝埋土と土質が同一であることから、両者はほぼ時を同じくして埋まったと考えられる。

瓦器椀・土師器皿・瓦質土器が20数点出土した。すべて細片だったので図化しなかったが、土師器皿では口縁部に外反傾向のあるものが過半数を占める。瓦器椀は器壁が2～3mmと薄く、体部外面にユビオサエの痕跡が顕著に残る。口縁端部は先細り気味に丸くおさめ、内面に沈線をもつものはなかった。内面のミガキは幅0.5mmで、間隔2～3本/1cmと粗い。これらのことからおそらく出土遺物の時期は14世紀前半に収まると考える。

〔18溝〕(図185) 南北方向(N-10°-E)を指向する溝である。延長距離は24mを測り、南へはさらに調査区外に延びる。溝の幅はおおむね60cm前後だが、12溝と接する部分で徐々に溝の幅が広がるため接続部分にいびつさはない。深さは20～40cmで、12溝にむけて徐々に深くなる。ただ出土遺物の時期が14世紀にくくられることから、12溝と同じ時期に掘削されたのではなく、後から掘り足されたものと考えられる。

土層観察用断面は12溝に近い部分と中央部分で設けた。それぞれの断面で認めた埋土の堆積状況や土質は若干異なるが、いずれにおいても掘り直しの痕跡は明瞭に認められなかった。

溝の西方に延びる部分を2箇所ほど検出したが、これは11溝の項で述べているような理由から、水が溝全体の許容量を越えた際、余水を落とすために設けられた導水施設と考える。

瓦器椀・土師器皿・瓦質三足釜・瓦質羽釜・東播系の須恵器鉢・陶器・備前焼の甕等の破片に加え、焼土が若干含まれていた。出土遺物はコンテナ2分の1箱程度で、量的には瓦器椀と土師器皿が過半数

を占める。遺物量は溝の規模から見ると非常に多いという印象を受ける。土師器皿はいずれも口径が4 cm前後の小型とみられ、底部からの口縁部の立ち上がりがなだらかなものと短く直立するものの二者が認められ、後者が過半数を占める。瓦器碗は器壁が2～4 mmと薄く、体部外面にユビオサエが顕著に残り、口縁端部は先細りぎみに丸くおさめる。おそらく高台が退化する寸前か、退化した時期の瓦器と見られる。瓦質羽釜は口縁部が直立し、内面端部が発達して、口縁端部が傾斜する時期のものである。これらのことから出土遺物の時期はおおむね14世紀前半に含まれると考える。

〔385溝〕(図184) 東西方向(W-11.5° - N)を指向する溝で、西端部で南北方向に向けて、わずかに屈曲する。延長距離は10m程度で、溝の東端は10溝や11溝の東端を覆う浅い落込(384落込)にまぎれてしまい、8溝や11溝の東端にみられるような整形は施されていない。この溝が11溝を切っていることを土層断面で確認できたことから、11溝が埋まってから形成されたことは明らかである。溝の輪郭は全体に不整形なのに加え、底部の形状も一定しないことから、この溝も何度か掘りなおされている可能性がある。深さは最深部で30～40cmを測る。前述したように溝11に後続して形成された溝であるが、この溝があらかた埋まった段階で、11溝と385溝を覆うような浅いくぼみが残し、最終的にそれが埋まったと考えられる。したがって実際には、両者にはそれほど大きな時間差が存在しなかった可能性もある。なお前述のくぼみに含まれていた土器についても第3節で11溝・385溝最上層出土遺物としてあげているので参照されたい。385溝から遺物は出土しなかったが、諸状況から見て上述した経過は、14世紀前半代の中で推移したと想定できる。

〔384落込〕(図184) 南北方向(N-15° - E)を指向し、10溝と11溝・385溝の東端を覆う浅い落込である。幅は4 mにわたり、深さは最深部で30cmほどである。13溝・14溝の項目で述べたように、これらの溝の延長上に位置し、かつ南北方向を指す点、断面に溝状の落ちが2つ見られることから、本来はそれらの溝の延長部ととらえるべきかもしれない。ただ最深部からの立ち上がりはなだらかで13溝や14溝と一致しない、さらに埋土の土質も異なる、等の相違点も認めた。

前述したように12溝や18溝には余水を逃がす施設が複数作られたことがうかがえるが、それでは処理しきれない量の水が集中したときには、侵食を受けやすい部分だった可能性もある。

出土した土師器の破片7点はいずれも細片で、時期を判断できるものは無かったが、埋積の状況から見て14世紀前半あたりの時期に埋まったと考えられる。

389溝・24溝／312溝・25溝・26溝／20溝・27溝・446土坑 調査区中央部分では南北および東西方向の溝を多数検出した。それらはおそらく1調査区の東半部で検出したような屋敷地を囲む区画溝と考えられるが、複数の溝が切り合いながら錯綜する状況だったため、調査の段階ではすべてのセット関係を明確にとらえ難かった。その中で、上記した溝は比較的切り合いやセット関係がとらえやすかったものである。したがってまずそれらの形成過程を概観し、次に個々の遺構について詳述したい。

389溝は南北方向に5調査区を横断し、北の延長部分は4調査区の385溝に対応する。この溝から東西方向を指向する24溝が分岐するが、調査区西端部分で南北に方向を転じる部分を認めた。ちなみに389溝は18溝の西側でほぼ平行し、両者の距離は2.0m前後を測る。

これらの溝の位置関係を踏襲するように312溝・25溝・26溝と、20溝・27溝が掘り直されたと考える。そのうち25溝・26溝は、極めて近接するのに加えて、遺構埋土の土質も近似し、最終的にはほぼ同時に埋まったとみられることから、並存していた可能性が高い。312溝は389溝の東側1 m強のところに平行して位置し、4調査区の246溝(13世紀前半～後半)へと続くとみられるが、溝の南端は調査区中頃で

途切れてしまう。312溝が途切れてしまうのを補完するように、20溝が調査区北寄りの部分から始まって南端までつづく。この溝の途中で東西方向を指す27溝が派生する。遺構検出時の精査により、20溝・27溝が312溝・25溝・26溝を切るのを確認したため、前者が後出するとみられる。

概して南北方向の溝は相互に近接するが、東西方向の溝は時期が降るにつれて南にずれる傾向が認められる。南北方向を指す溝は、相互の切りあい関係がとらえにくかったことから、遺構ごとに埋土を厳密に掘り分けることができなかつた。ただ13世紀後半から14世紀前半の時期に、これらの遺構が形成されたことは明らかである。東西方向の溝における遺物の出土状況を勘案すると、389溝・24溝は13世紀後半に位置づけられる。312溝・25溝・26溝と、20溝・27溝は13世紀後半～14世紀前半の時期に機能したということが出来る。これらを勘案すると389溝・24溝（・23溝）は13世紀後半に成立し、312溝・25溝・26溝へ掘り直されたと考えられる。そして14世紀前半の時期に312溝・25溝・26溝から20溝・27溝へ掘り直されたと考える。

〔389溝〕(図186) 南北方向(N-10.5°-E)を指向する溝で、幅50～60cm、深さ50cmを測り、断面形は隅丸のV字形である。この溝の北への延長部分は4調査区で検出した385溝に対応する。南端部分は徐々に幅が広がり、446土坑へつながる。北寄りの部分で西側に東西方向を指す24溝が分岐する。

調査時に20溝の埋土と掘り分けることができなかつたが、20溝と389溝の埋土から13世紀後半～14世紀前半の遺物が出土することを確認した。389溝の延長部分とみられる4調査区の246溝から13世紀後半～後半の遺物が出土していることを勘案すると、13世紀後半の時期ととらえることができる。

〔24溝〕(図186) 東西方向(W-12.5°-N)を指向する溝で、南北方向を指す389溝につながる。延長距離は約18mを測り、調査区際で溝の西端が南北方向に転じる部分を認めた。しかし4調査区ではこの部分に対応する延長部を検出しなかつた。溝の幅は70～80cmで深さは約35cm、断面形は隅丸V字形もしくは隅丸の逆台形である。

瓦器椀・土師器皿・瓦質羽釜・東播系須恵器鉢等が出土した。図化しなかつた瓦器椀に、口縁部内面に沈線をもつものが2点認められた。また土師器皿には口縁部がなだらかに立ち上がるものと、外反傾向の初期段階ものがほぼ同量含まれていた。これらのことから、出土遺物の時期は13世紀後半を主として、14世紀前半のものも含まれる。

〔312溝〕(図185) 南北方向(N-11.5°-E)を指向する溝で延長距離24mを測り、全長南寄りで東西方向を指す25溝・26溝が西に分岐する。北側へは4調査区で検出した246溝につながると考えられる。25溝と26溝は極めて近接し、遺構埋土も近似することから、両者は並存した可能性が高い。

溝の幅は60cmから1mで、5調査区内では北に向かって細くなる傾向がある。ただ4調査区では溝の幅が、東肩のステップ状の段を含めると1.5m前後を測る。

瓦器椀・土師器皿・陶器が出土した。量的にみると土師器皿が大半を占める。土師器皿口縁部の立ち上がりを見ると、なだらかなものと外反傾向がみられるものがある。瓦器椀の口縁端部はいずれも先細り気味に丸くおさめられていた。これらのことから出土遺物の時期は13世紀後半～14世紀前半にわたると考えられる。

〔25溝〕(図186) 東西方向(W-7°-N)を指向する溝で、位置関係などから見て、312溝へつながると考えられる。延長距離は約18mで、溝の西端は生産域に向かって地盤高が下がる部分で途切れる。この溝の南側にはこれに近接して26溝が位置する。溝の幅50～80cm、深さ20～25cmで複数の土坑と切り合う。溝埋土が25溝と共通することから、両者は並存した可能性が高い。また埋土最上層が26溝の

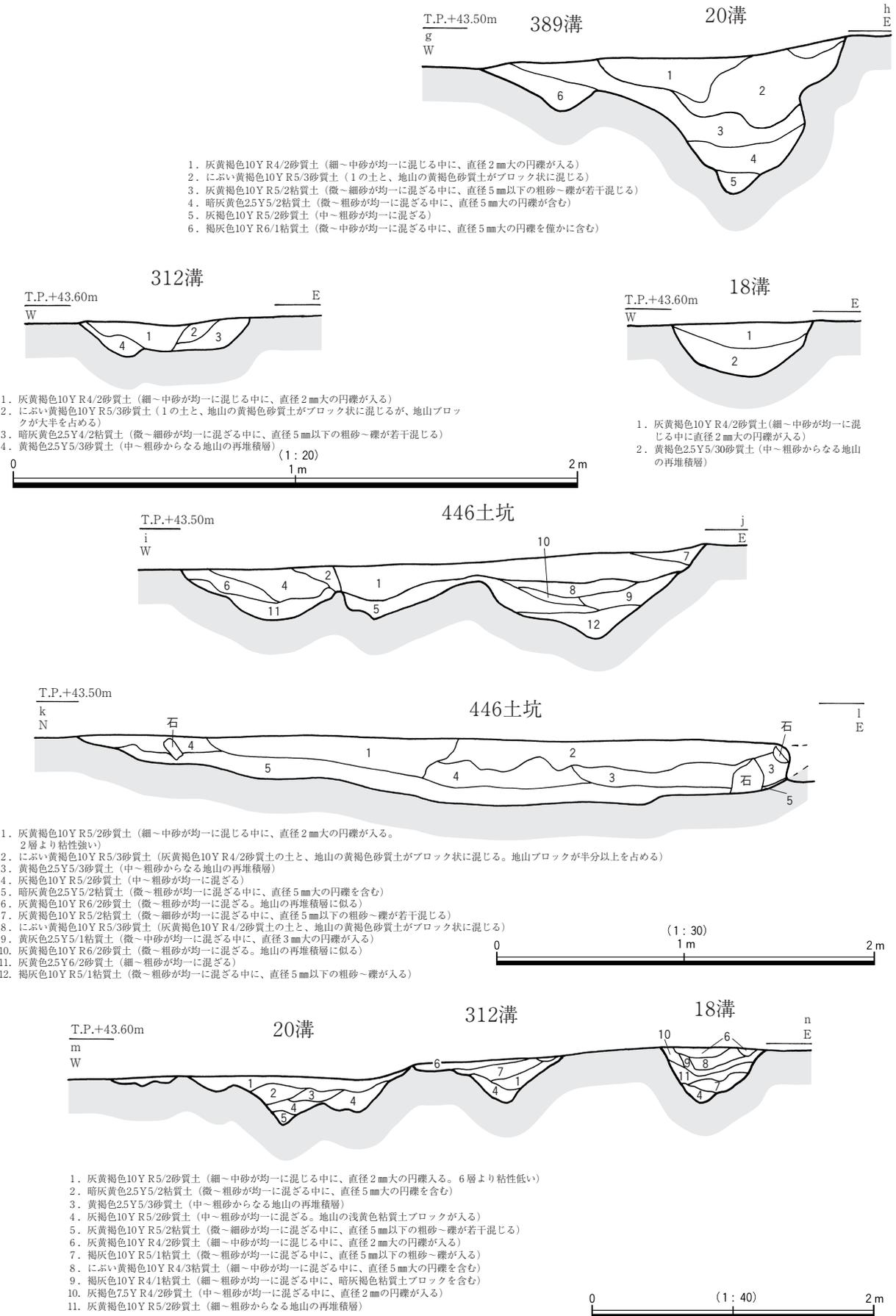
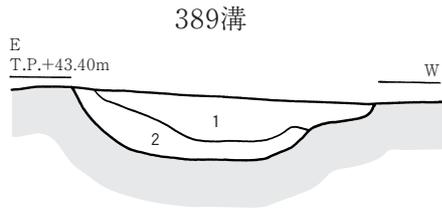
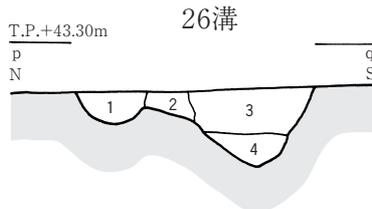


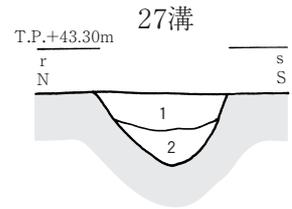
図185 有池遺跡03—1—5 調査区 溝・土坑 断面図



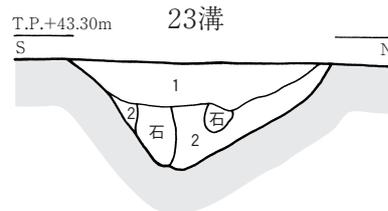
1. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (細～粗砂が均一に混る)
2. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)



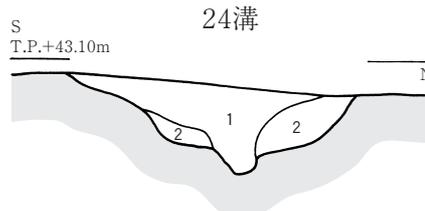
1. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混る中に、直径2mm大の円礫が入る)
2. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
3. 黒褐色10Y R3/1砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る)
4. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、暗灰褐色粘質土ブロックを含む)



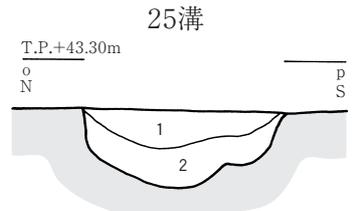
1. におい黄褐色10Y R5/3砂質土 (2の土と地山の黄褐色砂質土がブロック状に混じる)
2. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径2mm大の円礫が入る)



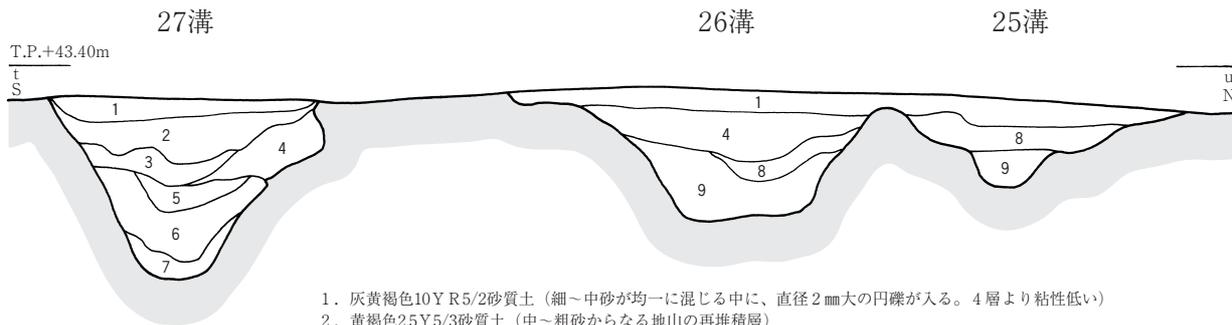
1. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
2. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる)



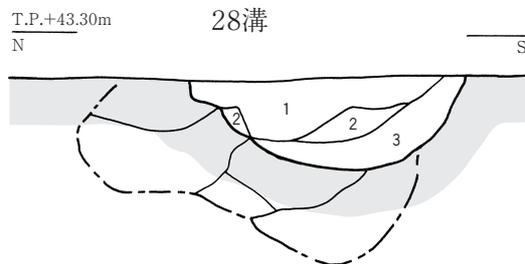
1. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。1層より粘性低い)



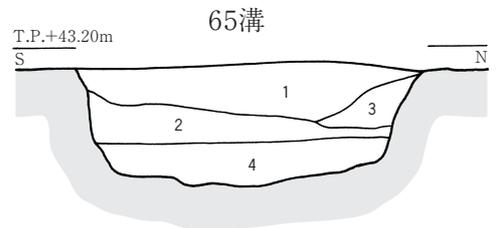
1. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
2. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。4層より粘性低い)
2. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
3. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる)
4. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)
5. 灰褐色10Y R5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる)
6. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂からなる地山の再堆積層)
7. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の礫を含む)
8. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
9. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂～礫若干混じる)



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。3層より粘性低い)
2. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
3. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る)



1. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る)
2. におい黄褐色10Y R5/3粘質土 (微～中砂が均一に混ざったものを主体とし、直径5mm大の円礫、粗砂が混じる。地山の浅黄色砂質土ブロック入る)
3. 灰褐色10Y R5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる)
4. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂～礫若干混じる)

65溝 (1:10)

389溝・26溝・27溝・23溝・24溝・25溝・26溝・27溝・28溝 (1:30)

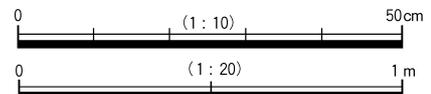


図186 有池遺跡03-1-5調査区 溝 断面図

それと共通するので、両者の埋積時期もほぼ同時期だったとみられる。

遺構埋土より瓦器椀・土師器皿・瓦質羽釜・瓦質三足釜・東播系須恵器鉢・陶器が出土した。細片がほとんどで形態的特徴がとらえられるものはわずかだったが、瓦器椀・土師器皿とも器壁は薄い。土師器皿は底部から口縁部がゆるやかに立ち上がるものと、明瞭な屈曲部を有しながら外反して立ち上がるものがほぼ同数ずつみられた。瓦器椀はいずれも内面のミガキが幅1mm弱で、粗い間隔で施されており、体部外面のユビオサエの痕跡も顕著である。華奢な貼り付け高台をもつ破片も2点含まれる。これらのことから出土遺物の時期は13世紀後半から14世紀前半ととらえられる。

[26溝] (図186) 東西方向(W-7°-N)を指向する溝で、位置関係などから見て312溝へつながると考えられる。延長距離は約17mで、溝の西端は生産域に向かって地盤高が下がる部分で途切れる。この溝の北側にはこれに近接して25溝が位置する。

溝の幅60cm~1m、深さ20~35cmで断面形は隅丸のV字形もしくは隅丸の逆台形である。溝埋土が25溝と共通することから、両者は並存した可能性が高い。また埋土最上層が25溝のそれと共通することから、両者はほぼ同時期に埋積したことがわかる。

瓦器椀・瓦器皿・土師器皿・瓦質三足釜・陶器・須恵質土器が出土した。おおむね細片だったため図化しなかった。量的には瓦器椀が大半を占める。瓦器椀はいずれも口縁端部を先細り気味に丸くおさめるが、器壁が4mmほどのものと、2~3mmの薄いものが認められた。後者は体部外面にユビオサエの痕跡が顕著で、退化寸前の高台をもつもの、高台が退化したものが認められた。一方、器壁がやや厚いものには断面三角形の華奢な高台を伴うものが含まれる。土師器皿では口縁部の立ち上がりがなだらかなものと、外反化が進んだものの二者を認めた。遺物の時期は13世紀後半~14世紀とみられる。

[20溝] (図185) 南北方向(N-10°-E)を指す溝で延長距離26mを測り、北寄りで東西方向を指す27溝が西に分岐する。溝の南端は446土坑へ続き、北端は調査区の中ほどで途切れてしまう。前述したように312溝と補完しあうような位置関係だが、切りあい関係をみるとそれより後に形成されたものである。溝の幅は80~90cmで、深さは20~30cmあり、溝断面は底部・側壁とも凹凸があり一定しない。瓦器椀・土師器皿・瓦質羽釜・瓦質三足釜・瓦質火鉢・東播系の須恵器鉢・土師質土器・陶器がコンテナに軽く一杯分出土した。瓦器椀は底部に高台の代わりにいれたと見られる円形のナデをもつタイプ、高台が全く退化したタイプからなる。両タイプの口径・器壁の厚さ・調整方法は極めて類似する。土師器皿はいずれも口径4cm前後で口縁部の外反が顕著である。瓦質羽釜は口縁部が直立し、内面端部が拡張したため口縁端部が傾斜する。また頸部に2段の凹線状の段整形がみとめられ、鐙の端部はやや上方に反る形態である。これらのことから、出土遺物の時期は14世紀前半に位置づけられる。

[27溝] (図186) 東西方向(W-6.5°-N)を指向する溝で延長距離15mを測り、溝の東端は20溝へつながる。西端は生産域に向かって地盤高が下がる部分で途切れるが、溝端部の幅は広がりつつ深くなっている。

[446土坑] (図185) 調査区中央部の南端部(20G-3a)で検出した遺構で、かつ20溝・389溝・23溝の端部がこれに続く。遺構検出段階で複数の溝が切りあっているのを認めた。しかし平面的にみてもどの遺構とどのような連続性を持つかを見極めることができなかったため、十字形の土層観察用断面を設定して埋土を掘り下げた。土層断面を観察した結果、446土坑の東西方向の断面で、20溝・389溝・23溝に対応する可能性のある遺構埋土に切られていることを把握することができた。

23溝 (図186) 調査区中央の南寄り(20F-4j)に位置する、東西方向を指向する(W-2.5°-N)

溝で、64土坑を切って東端は446土坑に続く。延長距離22mで西端が188土坑に至る。また全長やや西寄りの部分で南北方向を指向する100溝と交差する。遺構検出時にも明確な切りあい関係が認められなかったことから、両者は並存する可能性があるが、これに関しては100溝の項を参照されたい。北に方向を転じ、途切れる。溝の方向は27溝に近い。この溝と27溝・20溝がセットをなしていたとすると、南北15m・東西20mの範囲を区画していたことになる。

出土遺物は瓦器椀・土師器皿・須恵質鉢があるが、いずれも破片で、図化した遺物は1点である。これは65溝と交錯する部分から出土したもので、いずれの遺構に帰属するものかを明確にしえなかった。したがって第5章第3節では23溝・65溝出土遺物と併記している。

確実に23溝から出土した遺物を見ると、結論から言えばほとんどが14世紀前半の時期に含まれる。したがって前述の遺物は65溝に帰属するものである可能性が高い。瓦器椀口縁部の破片11点のうち、内面に沈線をもつものは1点のみだった。内面のミガキは幅0.5mmで4本/1cmと粗い。1点あった底部破片は端部が外方に反る直角三角形気味の断面形状を呈する。底部付近までの器形がわかるものに関しては楠葉型のIV-1に相当すると考える。土師器皿は底部から口縁部への屈曲が明瞭で、外湾ぎみに口縁が立ち上がる。

28溝 (図186) 調査区中央部北端(20F-3g・4g)をはしる、東西方向(W-9.5°-N)の溝である。この溝に重なるように近世の溝が掘削されていたのに加え、側溝際に位置することから溝の北肩は図示することができなかった。おそらく溝の幅は70cm前後とみられ、深さは30cm前後を測る。延長距離は17mで、溝の東端部は近世に作られたとみられる土坑で切られていた。したがって389溝との関係を把握できなかったが、両者は一連のものである可能性もある。西端付近では溝の南肩が外側に張り出す状況がうかがえる。

遺物の出土状況からみてこの溝と、24溝、389溝がセットを有したとすると、これらの溝は南北10m強、東西18mの区画を限っていた可能性がある。実際にその区画で土坑・ピットを検出したが、調査区中央の24溝より南の部分に比べて遺構密度は低い。

65溝 調査区中央部(20G-5j)に位置する溝で、延長距離9mのところ北側にカーブを描きつつ方向を転じ、途切れる。東西方向(W-17°-N)で、西に対して北に振る角度がやや大きい。この65溝を西にずらしたような位置関係を有する102溝や、この南側に14~15m離れて位置する161溝の東西方向部分が、65溝と比較的方向が近い。また24溝の東半部もこれに似た角度を呈するが、西半はこれよりも角度が小さくなる。溝の幅は約90cm、深さは約30cmで、平坦な底部から側壁が直立気味に立ち上がる。

瓦器・土師器・瓦質土器・土師質土器が出土した。第5章第3節で23溝・65溝もしくは65溝・67土坑出土遺物としてあげているものが、65溝の土器様相を示しているのととらえられる。65溝出土遺物の中で、図化しなかったが比較的器形がとらえやすいものに関して言うと、器壁の摩滅のため、内外面のミガキは明瞭ではないが、実測した遺物と同時期のものとして間違いのないと思われる。底部高台の断面形は正三角形ぎみで5mm程度の高さをもつものと、幅広の二等辺三角形で1~2mmの高さのもの2者が含まれる。これらのことから出土遺物の時期はおそらく13世紀後半におさまると考える。

溝の東端は54溝から発しており、その西側に位置する64土坑の南端をかすめながらさらに西方に延長する。前述した65溝出土遺物の時期からみて54土坑、64土坑と並存する可能性がある。

158溝 (図187) 調査区中央の西寄り(20G-6a)の部分で検出した南北方向(N-8.5°-E)の溝である。160溝・161溝などで切られている。溝の幅は60cm~1mで、深さは約20cmを測り、ほぼ平坦な

底部から側壁が直立気味に立ち上がる。5調査区内での延長距離は約18mで、南へは市道を挟んで1調査区の東端で検出した、16溝に続くと思われる。158溝の北端は188土坑に切られているうえに、そのさらに北側は落込を呈していることから、北への延長の有無を明確にしえなかった。

瓦器・土師器が出土したが、いずれも細片で図化し得なかった。瓦器についてみると瓦器椀片は7点、瓦器皿片は2点だった。瓦器椀片のうち口縁端部を含むものは4点で、口縁内面に沈線を施すものが3点だった。沈線の有無にかかわらず、口縁端部は直立ぎみで先端を丸く収める。口縁内面の沈線は端部から1mm程下がったところに工具を器壁に対して垂直に押し当てて入れられている。口縁外面にはヨコナデが施されており、その下端部がやや屈曲する。内面のミガキが観察できるものは1点で、幅1mm程度で5～6本/1cmと比較的密に施されていた。破片を観察した結果なので断定はできないが、13世紀前半代の特徴を備えている。いずれにせよ13世紀代のものであることは確かと考える。

186溝 (図187) 調査区中央の西寄り (20G-6 a) の部分で検出した南北方向 (N-4.5° - E) の溝で、前述した158溝から東に20～30cmのところにはほぼ平行して位置する。延長距離は7m弱であり、この周囲で検出した他の南北方向の溝に比べて短い。幅40cm、深さは15cmと極めて浅く、遺構埋土は158溝の最上層と類似する。

出土遺物に瓦器片2点・土師器片3点があるが、いずれも細片で摩滅が著しく、時期判断はできなかった。ただ前述した状況から、この溝は158溝と並存した可能性が高いと考えられる。

161溝 (図187) 調査区中央の西端 (20G-6 a) で検出した溝で、東西方向から南北方向に屈曲する。溝の北端は259土坑および162溝に接する。161溝の南北方向の部分は中央部分でやや方向軸が異なる。具体的には北半が北に対して3.5°西に振るのに対して、南半は北に対して13.5°東に振る。これにより北半は162溝 (W-3° - N) に対してほぼ直行するのに対し、南半は161溝の東西部分 (W-18° - N) と直行する。そのため162溝と161溝の東西部分は方向軸が異なり、かならずしも整った方形を呈するわけではないものの、これらがセットになって区画溝として機能した可能性を指摘することができる。なお162溝に関しては23溝の項でも触れているので参照されたい。また161溝をやや南にずらしたような位置関係で160溝を検出した。遺構検出段階での観察により、161溝が160溝を切っていると判断した。したがって先に160溝が存在し、その位置をほぼ踏襲する形で掘削されたのが161溝といえる。

溝の幅は約40～80cm、深さは約30cm、断面形は隅丸のV字形である。この溝の西側でも同様の方向を指す南北溝を多数検出した。遺構検出段階ではそれらの切りあい関係が明確に把握できなかったので、159溝から161溝にかけての部分で、最も複雑に遺構が錯綜する部分に土層観察用断面を設定した。それをみると161溝や、後述する159溝の間には、それらの前身になる溝が複数存在したことがわかった。一方、160溝・161溝の東西方向部分ではそれほど顕著な切りあい関係がみられなかった。160溝・161溝が形成される以前に調査区中央部と西端部を限るこの場所にまず南北方向の溝が設定され、それが何度も掘削し直される過程があったと考えられる。

161溝の出土遺物は土師器・瓦器・土師質土器の破片からなる。図化し得たのは少数である。出土遺物に若干の時期幅が見られたが、いずれにせよこの溝は13世紀後半の時期には機能を失ったとみられる。160溝・161溝の東端は143石敷に交差する。おそらくこれらの溝がある程度埋まった段階で143石敷が形成されると考えられるが、それに関しては143石敷の項を参照されたい。

159溝 (図187) 調査区中央部西端 (20G-6 a) に位置する南北方向 (N-6° - E) の溝で、前述の161溝の西側に平行して通る。延長距離16m・幅70cm弱・深さ15cmで、平坦な底部から直立気味に側

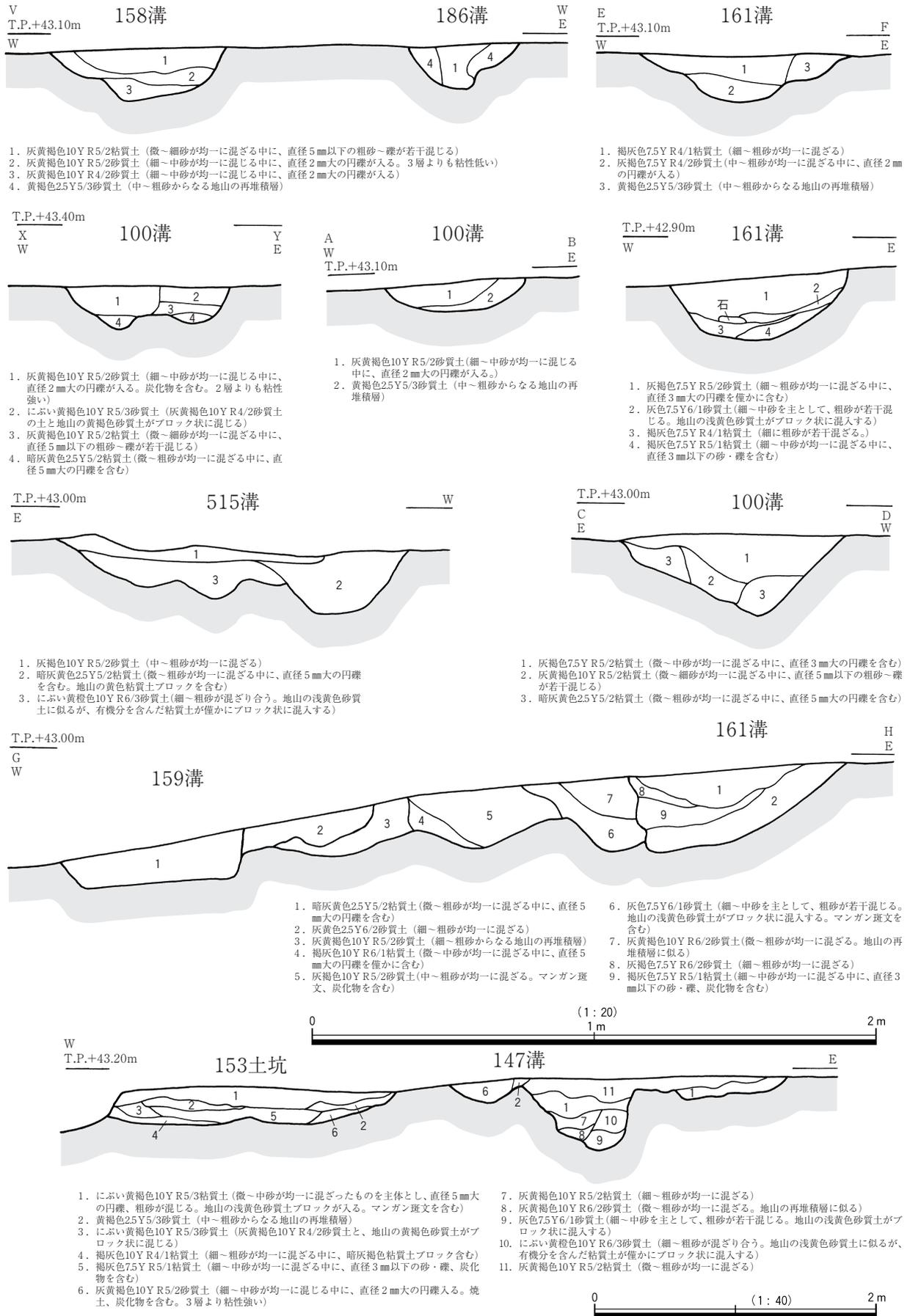


図187 有池遺跡03-1-5 調査区 溝・土坑 断面図

壁が立ち上がる。溝南端は調査区際に達する。土層断面の観察により、この溝の東側に、その前身となる溝があったと考えるが、それに関しては161溝の項を参照されたい。

瓦器椀・土師器皿・瓦質羽釜・瓦質三足釜・須恵質土器・東播系須恵器鉢・土師質土器・白磁が比較的まとまった量出土した。量的にみると釜・甕の破片が過半数を占める。瓦器椀をみると13世紀全般の時期のものが多数を占めるが、12世紀末～13世紀初頭の時期のもの、高台が退化寸前のももの含まれる。土師器皿では口縁部が外反傾向を示すものも含まれることから、出土遺物の時期には時期幅がみられる。換言すると、13世紀代のものを主として12世紀末葉から14世紀前半までの時期のものがある。

100溝 (図187) 調査区中央部 (20G-5 a・20F-5 i・5 j) で検出した南北方向の溝である。延長距離は約26mで方向は北半が (N-9.5°-W) なのに対して南半は (N-6°-E) を指す。溝の幅は50cmで深さは15cm弱と浅い。

瓦器椀・土師器皿・瓦質三足釜・瓦質土器・陶器・東播系須恵器鉢などが出土した。おおむね細片で、図化した遺物は14世紀前半のものである。図化しなかった瓦器椀の中にはそれよりもやや器壁が厚く、口縁端部内面に沈線を持ち、断面三角形の貼り付け高台を有するものがあり、13世紀後半代の遺物も含まれるが、量的には14世紀前半代のものが多数を占めるとみられる。遺構の検出状況や出土遺物の時期から見て、23溝と並存していたと考える。

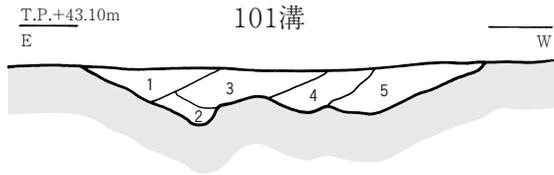
515溝 (図187) 調査区中央北寄り (20G-5 i) の部分で検出した。北西-南東方向を指し (W-36.5°-N)、遺構の北西端は居住域から生産域への地盤高の下がり際に位置する。溝の幅は北西端1.4m・南東端40cm程で、深さは最深部で20cm強を測る

この遺構の南東端は近世の溝に切られており、正確にはとらえられなかった。ただその近世溝を越えて、さらに同一方向の溝が伸びるわけではないことは確かである。この溝の南東端に最も近接するのは1253溝である。さらに1253溝の西端も同一の近世溝に切られており、両者は同一の遺構だった可能性もある。ただ平面的に両遺跡のつながりを確認できなかったため、別の遺構名を付した。ちなみに溝の断面形をみると、底部の凹凸が著しく、側壁の立ち上がりも不明瞭なことから、人為的に掘削されたものではなく、前述の1253溝の西端から派生した水流の痕跡ともとらえられる。そうであれば流末の屈曲も、水流の蛇行によって生じたものともとらえることができる。したがってここでは515溝が1253溝から自然発生的に派生したものである可能性が高いことを指摘しておきたい。

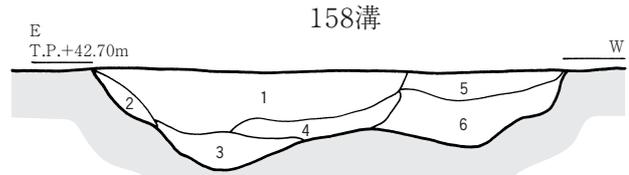
土師器・瓦器の破片が9点出土した。いずれも細片で摩滅している。土師器皿口縁部の破片2点の形態的特徴を見ると、底部から口縁部が明瞭に屈曲して外反しつつ立ち上がる。瓦器椀には退化寸前の高台部の破片が1点含まれており、器壁の厚さは3mm程度である。時期を明確に判断することは難しいが、13世紀後半以降のものであることは確かである。

147溝 (図187) 調査区中央 (20F-5 j・20G-5 a) で検出した南北方向 (N-4°-W) を指す溝で、延長距離は4m強・幅は50~80cmあり、中程がややくびれたような形状である。遺構北端やさらにその北側は複数の溝が錯綜していて判然としなかった。101溝とさらにその北に伸びる、101溝西肩の延長部分ともとらえうる落込の肩部のラインに方向が近似することから両者が連続性を有する可能性が高いと考える。なお101溝と153土坑については次に述べる。

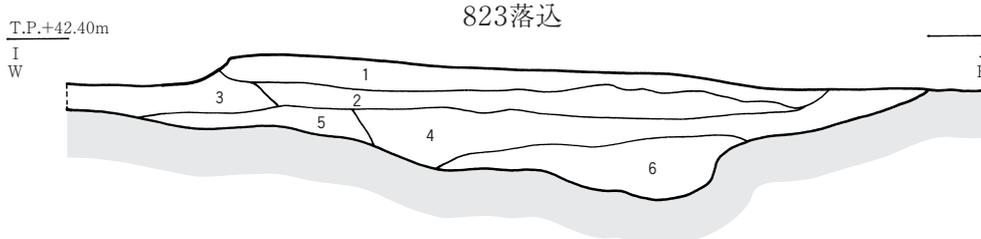
出土遺物は瓦器・土師器・陶器の細片が10点弱である。いずれも細片で摩滅している。土師器皿を見ると、底部から口縁部がなだらかに立ち上がるもの2点と、平坦な底部から口縁部が明瞭な屈曲とともに外反して立ち上がるものが1点あった。それ以外の遺物に関しては形態的特徴を読み取れるものはな



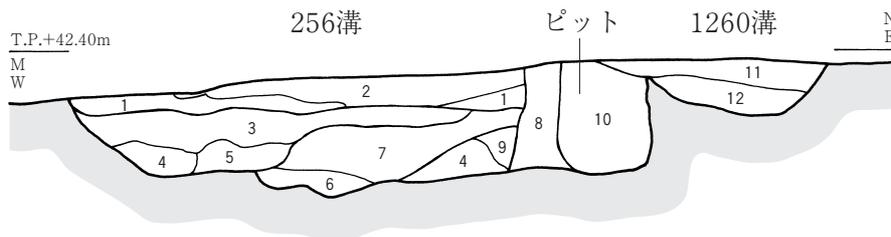
1. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
2. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
3. 灰褐色10Y R5/2砂質土 (中～粗砂が均一に混ざる。マンガンを含む)
4. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫入る。僅かに焼土を含む)
5. 灰黄色2.5Y6/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる。マンガンを含む)



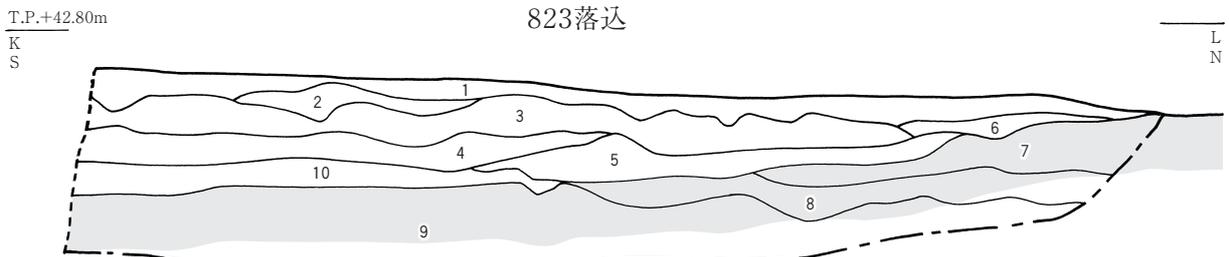
1. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
2. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 (中～粗砂からなる地山の再堆積層)
3. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂～礫が入る)
4. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂～礫が若干混じる)
5. におい黄褐色10Y R5/3粘質土 (微～中砂が均一に混ざったものを主体とし、直径5mm大の円礫、粗砂が混じる。地山の浅黄色砂質土ブロックが入る)
6. におい黄褐色10Y R6/3砂質土 (細～粗砂が混ざり合う。地山の浅黄色砂質土に似るが、有機分を含んだ粘質土が僅かにブロック状に混入する)



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。根の混入痕顕著。)
2. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂～礫が若干混じる。根の混入痕顕著)
3. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～粗砂からなる地山の再堆積層。根の混入痕顕著)
4. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、径5mm以下の粗砂～礫が若干混じる。根の混入痕顕著)
5. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
6. 灰色7.5Y4/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざったものを主とし、粗砂、焼土、炭が若干入る)



1. 灰褐色7.5Y R4/2粘質土 (微～細砂と、直径5mm以下の円礫が均一に混ざる。根の混入痕顕著)
2. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)
3. オリーブ灰色5GY5/1粘質土 (微～細砂と直径5mm以下の円礫が均一に混ざる。1に似るが、それより粘性は強い)
4. 灰黄色2.5Y4/1粘質土 (微～細砂と粗砂が均一に混ざる)
5. 黄灰色2.5Y5/1砂質土 (微～細砂と、中～粗砂がブロック状に混ざる)
6. 褐灰色10Y R4/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる)
7. 灰黄色2.5Y6/2砂質土 (中～粗砂が混ざり合う中に、直径5mm以下の円礫を含む)
8. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の円礫を含む)
9. オリーブ灰色10Y5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、粗砂が若干入る)
10. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、径1cm以下の円礫含む。地山の浅黄色砂質土ブロック入る)
11. 灰黄褐色10Y R5/2粘質土 (微～細砂が均一に混ざる中に、径5mm以下の粗砂～礫が若干混じる)
12. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に径2mm大の円礫入る。)



1. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm大の円礫を含む)
2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 (細～中砂が均一に混じる中に、直径2mm大の円礫が入る。)
3. 灰色5Y5/1粘質土 (微～中砂を主として、粗砂、直径3mm大の円礫が若干混じる)
4. 灰褐色7.5Y6/1砂質土 (細～中砂を主として、粗砂が若干混じる。地山の浅黄色砂質土がブロック状に混入する)
5. 灰黄色2.5Y6/2砂質土 (細～粗砂が均一に混ざる)
6. 褐灰色10Y R5/1粘質土 (微～粗砂が均一に混ざる中に、直径5mm以下の粗砂～礫が入る)
7. 黄灰色2.5Y5/1粘質土 (微～中砂が均一に混ざる中に、直径3mm大の円礫が入る。焼土、炭化物を含む)
8. 灰黄褐色10Y R6/2砂質土 (微～粗砂が均一に混ざる。地山の再堆積層に似る)
9. 灰黄色2.5Y5/1粘質土 (微～細砂が均一に混ざる)
10. 褐灰色7.5Y R5/1粘質土 (細～中砂が均一に混ざる中に、直径10mm以下の円礫を含む。地山の浅黄色砂質土ブロックが入る)

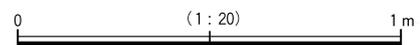


図188 有池遺跡03-1-5調査区 溝・落込・ピット 断面図

いことから、時期判断の決め手に欠けるが、13世紀後半以降に含まれる可能性が高いと考える。

101溝 (図188) 調査区中央 (20G-5 j) で検出した、南北方向 (N-4.5° -W) を指す溝で、前述の147溝の延長部の可能性がある。延長距離は3 m・幅1 m前後で、深さは15cm強と極めて浅い。底部には凹凸が見られ、それが土層の分層線とリンクすることから、何度か掘削し直された可能性がある。

瓦器碗の破片を中心に瓦質土器・土師器・青磁皿の破片が30点弱出土した。いずれも細片で摩滅しており、時期判断の決め手に欠ける。瓦器碗に関しては口縁端部が先細り気味に丸くおさめられ、退化寸前の高台を伴うもの、炭素吸着がほとんどなされず白色化したものも認められることから、14世紀前半のものからなる可能性を指摘しておきたい。

153土坑 (図187) 調査区中央 (20F-5 j・20G-5 a) で検出した南北方向に長い平面形が「く」の字状の土坑で、前述の147溝の西側に位置する。この土坑の南側や東側でもこの遺構と方向軸が近似する溝を複数検出した。最大長3 m・最大幅1.8m・深さ30cm弱で、平坦な底部から側壁がなだらかに立ち上がる。この土坑の底部で長軸80cm・短軸60cmの東西方向に長い楕円形の土坑を1基検出した。

瓦器碗を中心に土師器・瓦質三足釜・東播系須恵器鉢の破片が50~60点出土した。いずれも細片で時期判断の決め手に欠けるが、瓦器碗の口縁端部片を見ると、先細り気味に丸くおさめられており、内面に沈線を持つものともたないものの二者がある。内面のミガキは幅0.5~1 mmで粗い感覚で入れられている。退化寸前の高台をもち、外面にユビオサエの痕跡が顕著な小型化した瓦器碗も1点認めた。これらことから13世紀後半~14世紀前半の時期に含まれると考える。

317溝 調査区西端部 (20F-9 i・9 j) で検出した南北方向 (N-8.5° -E) を指す溝で、1258井戸の北側で検出した。この溝の北への延長部は4調査区へと続く。幅は1 m前後である。溝の位置する場所は生産域に含まれるが、生産域で見られる他の溝と方向が異なることから鋤溝ではなく、823落込や1258・1259土坑に溜まった余水を北に送るための配水施設と考えられる。

瓦器碗を中心に土師器・瓦質土器が若干含まれる。遺物は全部で20点弱を数え、図化しなかったものも口縁端部を丸くおさめ、器壁が3~4 mmである。出土遺物はおおむね13世紀前半に含まれる。

256溝・1260溝 (図188・189) 調査区西端部 (20G-9 a) で検出した南北方向 (N-10° -E) の溝である。両者はほぼ平行するが、256溝が幅1.4m前後・深さ30cm前後なのに対し、1260溝の幅は最大で60cm・深さは15cmと規模が下回る。256溝の断面をみると、底部にみられる凹凸と分層線の位置がリンクしていること等から、数回にわたって掘り直され、溝の位置が徐々に西に寄ったと考えられる。1260溝と256溝の前後関係は、遺構検出段階で明確にとらえることができなかった。ただ256溝の埋土上面から掘り込まれたピットを1260溝が切っていることから、後者が新しいと考える。

256溝はピット集中部のほぼ西端を限る場所に位置しており、5調査区で検出した居住域の西端を区画する機能を有していたと考えられる。溝の延長距離は11mで、溝の南端は823落込に至る。ただ溝の北端が途切れているため、排水路をかねていたわけではないとみられる。反対に溝の南端が823落込に接しているため、落込に水が溜まった折には、256溝にも水が滞水したとみられ、そのために溝が埋まりやすく、繰り返し掘り直す必要が生じたとみられる。一方の1260溝は延長距離8 m程度で溝の南端部は823落込には至らずやや屈曲する。

瓦器碗・瓦器皿・土師器皿・東播系須恵器鉢・青磁皿・瓦質三足釜等が出土した。遺物の量はこれらの溝の規模から見ると多量である。遺物には12世紀中葉~13世紀後半の時期のものが含まれる。

719溝 (図189) 調査区西端 (20G-9 a) で検出した東西方向の溝で、256溝と823溝を繋ぐ位置で検

出した。前述したように、823落込に水が集中した折には256溝も滞水したと考えられることから、その際に溝内の水を落とすために掘削されたものとみられる。溝の幅75cm・深さ15cmと極めて浅い。

瓦器・土師器が20点弱と、白磁碗が1点出土した。いずれも細片で全体的な形状がわかるものはないが、時期は13世紀全般にわたると考える。

823落込 (図188) 5調査区の南西コーナーを中心とする部分(20F-9j)で検出した。1258土坑・1259土坑とは別に、落込の底部で複数の土坑を検出した。

埋土から瓦器・瓦質土器・土師器等が多数出土した。あまり摩滅していなかったが、接合して完形になるものは少なかった。これらは集落域から廃棄されたものと見られる。図化しなかった遺物では12世紀中葉～13世紀後半の遺物がみられ、時期的な量の偏りはみられなかった。加えて確実に14世紀に含まれる遺物は認めなかった。

192落込 (図189) 調査区中央部北寄り(20F-6j)の部分で検出した落込である。この落込の北および西側は微高地に隣接する低地に含まれる。したがって一見すると、低地に連なる部分に位置するが、その東および南辺は直線的で、人為的に掘り窪められたものと考えられた。また落込の底部では複数のピットを検出した。落込を覆っていた埋土には炭化物や地山ブロックが含まれており、中世包含層や遺構面を削平した際に生じた土で人為的に埋められたとみられる。

192落込の埋土からは13世紀後半～14世紀前半の遺物が出土した。したがって192落込が埋められたのは14世紀前半を上限とする時期と考える。

292落込 調査区西寄りの南端部(20G-8b)で、かつ823落込の東端に連なる部分で検出した落込である。遺構検出段階で823落込が292落込を切っているのを確認したため、別の遺構名称を付したが、両者は同一の自然地形に端を発して形成されたと考えられる。

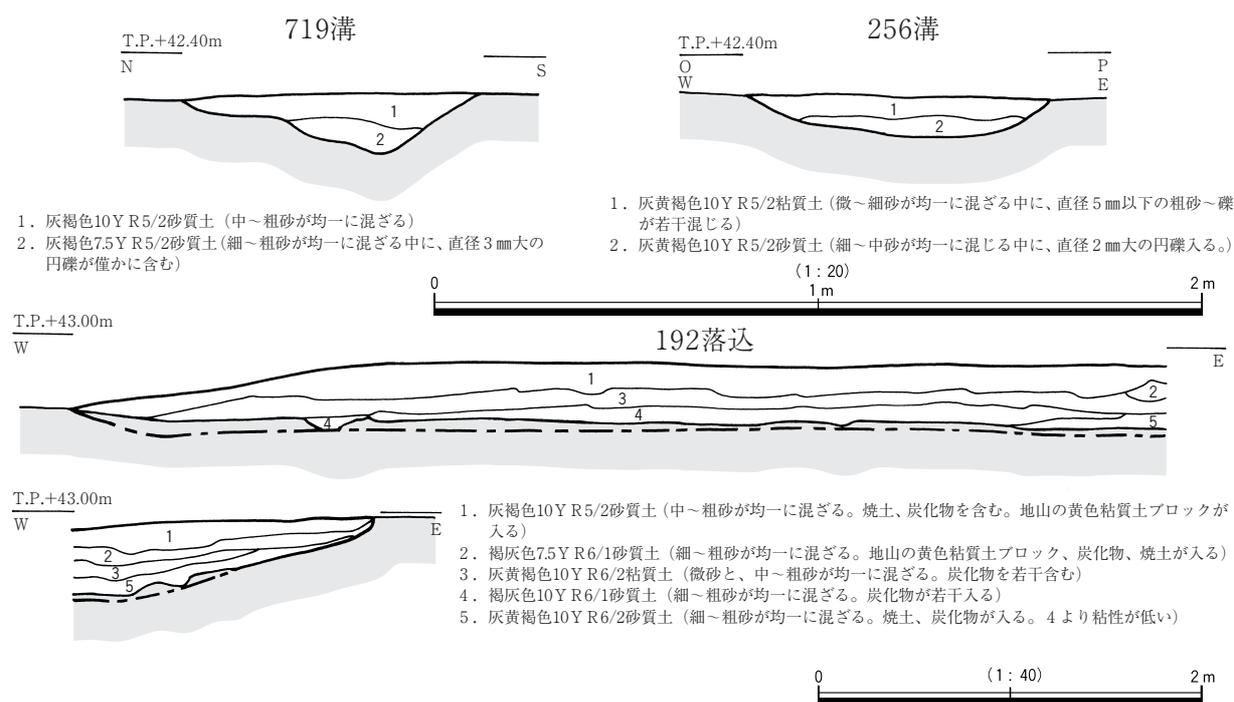


図189 有池遺跡03-1-5調査区 溝・落込 断面図

5. 6 調査区 (図190・191・193・195)

6 調査区は、東西に長い三角形を呈し、北には免除川の南岸が、南東には4 調査区が、南西には有池遺跡04-1〔主要地方道枚方大和郡山線(都市計画道路村野神宮寺線)道路整備事業に係る有池遺跡発掘調査〕の1 調査区が接する。南東から北西に向かって徐々に地盤が下がる。

中世以前の遺構はすべて、近世以降の耕作土層(2層)直下で検出した。調査区全体が近世以降の耕地開発に伴う削平を受けたものとみられる。

中央北部および西側北部で検出した遺構は少なく、風倒木痕とみられる不整形な土坑と排水用とみられる溝を少数検出した。北西端にある62落込は、後述する1溝と同様、免除川旧流路につながる溝の一部とみられる。東側北部、東側南部、中央南部、西側南部では、土坑や溝を多数検出した。いずれも耕作に関連する遺構とみられる。そのなかで、23溝は東北東から西南西に、調査区を横断する。調査区東端は、微高地で西の縁を72溝が流れ、段差を形成する。微高地上では土坑や溝を検出した。溝は東西方向に伸びるものが多い。中央南部および西側南部では、土坑や耕作にともなうものとみられる溝を検出した。溝は、北北東またはそれに直交する西北西を向くものと、ほぼ正方位を指向するものとに分類できる。

出土した遺物は土師器皿や瓦器椀などの生活雑器が主体であり、その多くはローリングを受けた細片である。当調査区が居住域からやや離れた耕作域であることを反映しているとみられる。遺構から出土した遺物の時期は12世紀から14世紀に含まれる。また、2溝からは古墳時代の遺物が出土した。

102ピット(図191) 東側北部に位置する。形状は長軸約60cm、短軸約40cmの楕円形である。断面はU字形を呈し、深さは約30cmである。遺物は出土していない。

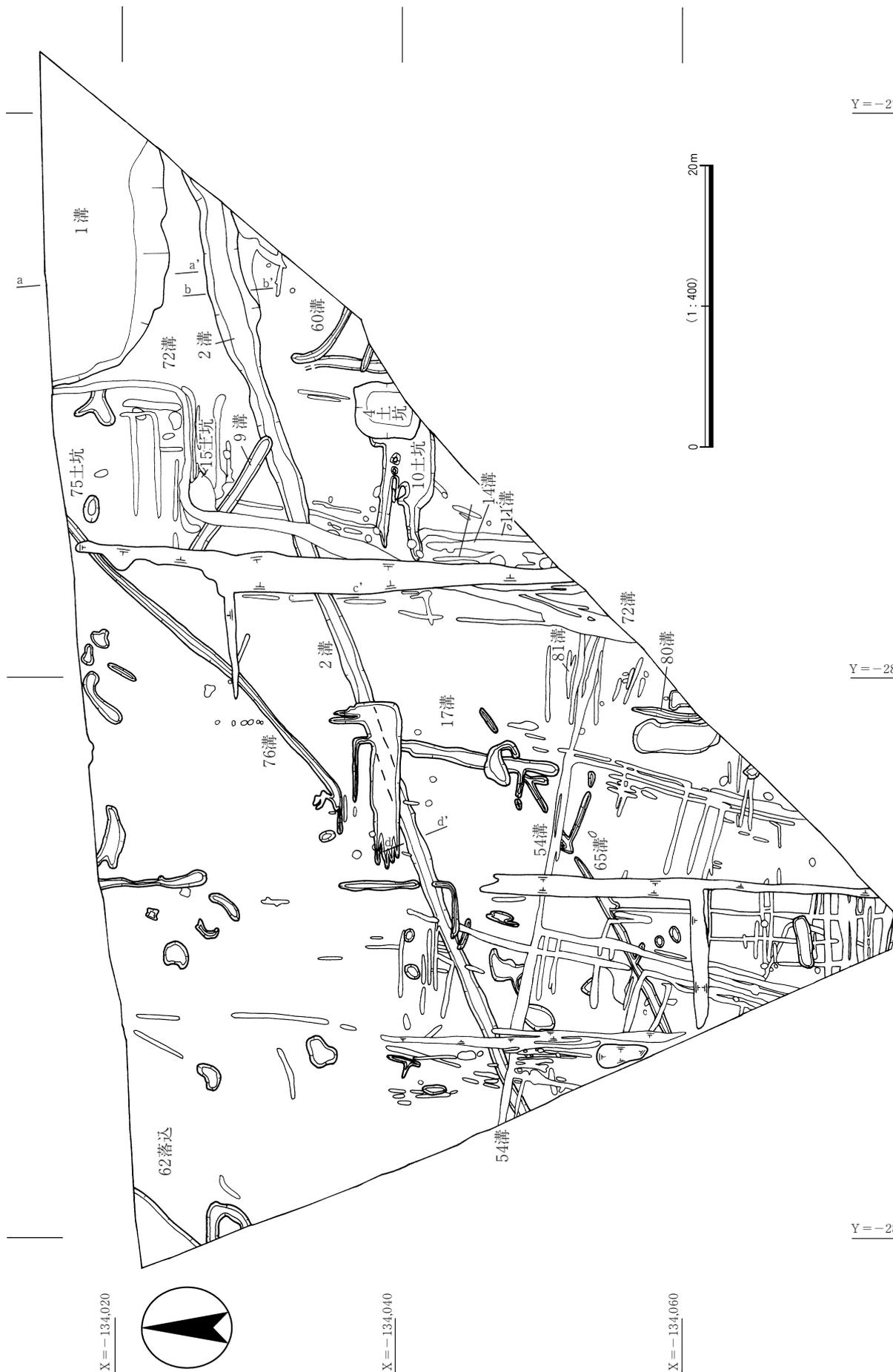
75土坑(図191) 東側北部に位置する。形状は長軸約1.8m、短軸95cmの楕円形である。断面は深い皿形を呈し、深さは約40cmである。埋土は上層が黒褐色粗砂混粘土であり、下層がオリーブ黒色粗砂と灰黄褐色中砂である。遺物は出土していない。

88土坑(図191) 東側北部に位置する。形状は直径1.0~1.1mの歪な円形である。断面は浅い皿形を呈し、深さは約10cmである。埋土は、地山ブロックを含むオリーブ黒色粗砂と、黒褐色細砂~粗砂である。遺物は出土していない。

15土坑(図191) 東側北部に位置する。72溝に切られており、形状は直径1.8~3.0mの歪な円形である。断面は播鉢形を呈し、深さは約50cmである。埋土は、最上層に灰黄褐色微砂が堆積する。その下層は大きく3層に分けられ、上層が黒褐色粘土、中層が灰オリーブ色中砂、下層が灰色粗砂とオリーブ黒色細砂である。これらは止水堆積による層とみられ、当土坑が機能時に湛水していたことを示す。このことから当土坑は水溜の可能性がある。土師器皿、瓦器皿等が出土した。

4土坑(図192) 東側南部に位置する。南東隅は調査区の範囲内では検出できなかった。形状は南北約4.5m、東西約4.0mの隅丸長方形である。断面は深い皿形を呈し、深さは約1.0mである。埋土は大きく3層に分けられる。上層が黒褐色微砂~礫、オリーブ黒色細砂~礫など砂を中心とした堆積層である(土色番号1~4)。中層が黒褐色微砂とオリーブ黒色粘土の互層である(土色番号6)。下層が黒色粘土であり、壁面近くに暗灰黄色中砂~礫や灰色中砂など砂の流入がみられる(土色番号7~16)。中層以下は止水堆積による層とみられ、当土坑が機能時に湛水していたことを示す。よって、当土坑は水溜と考えられる。土師器皿、瓦器椀、須恵器播鉢、青磁椀、白磁、備前播鉢が出土した。土師器皿には14世紀のものとみられる個体が混じる。

Y = -27,960



Y = -28,000

Y = -28,040

X = -134,020

X = -134,040

X = -134,060

图190 有池遺跡03-1-6調査区 平面図 (全体)

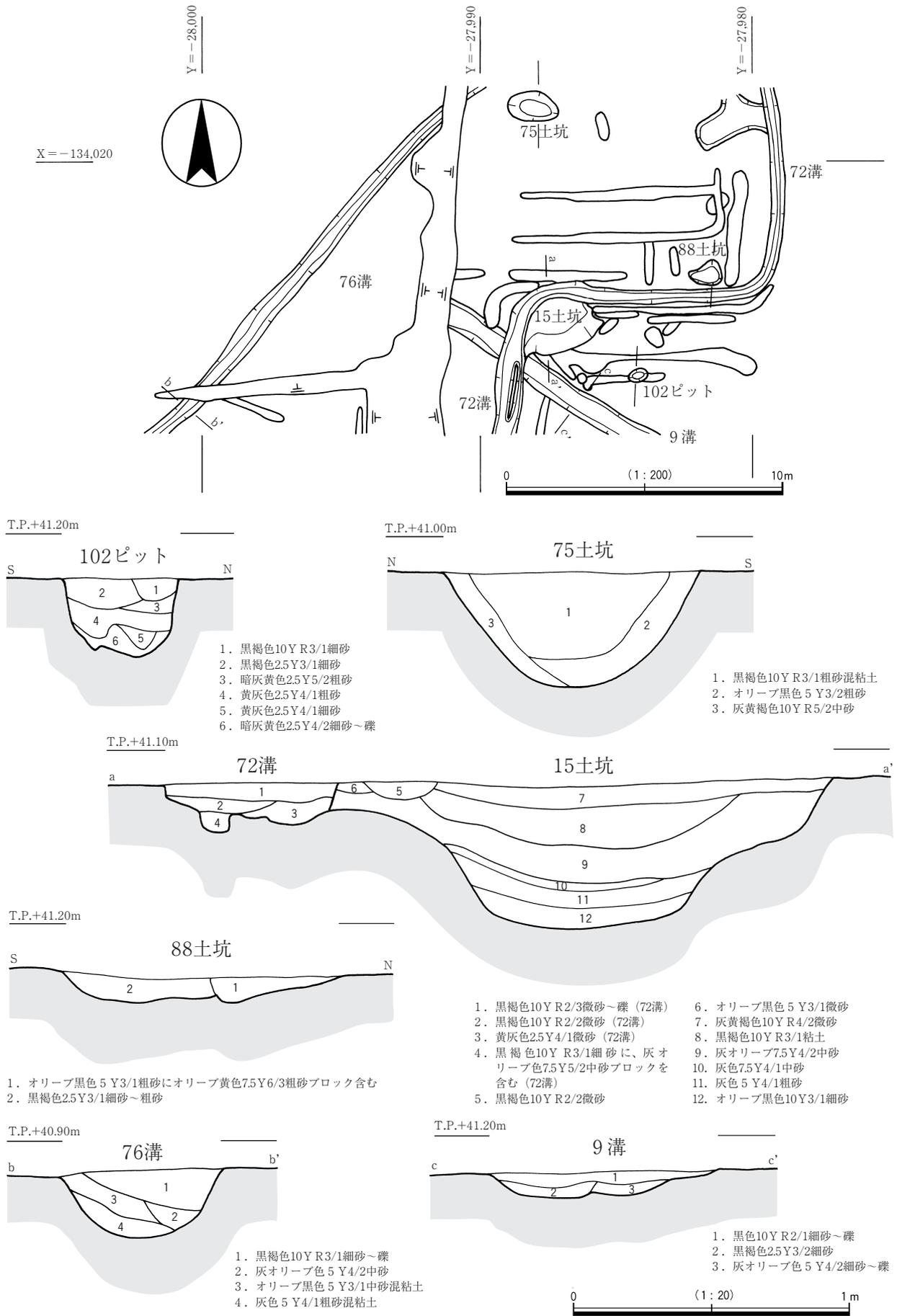
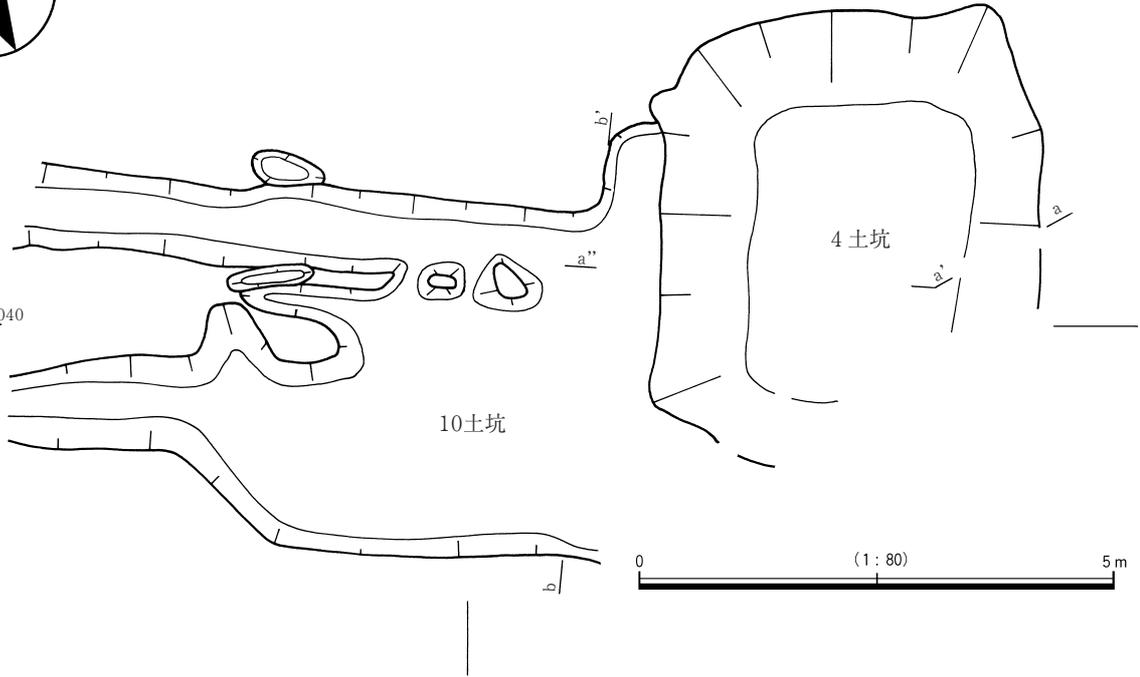


図191 有池遺跡03-1-6調査区 平面図(部分拡大)／遺構 断面図

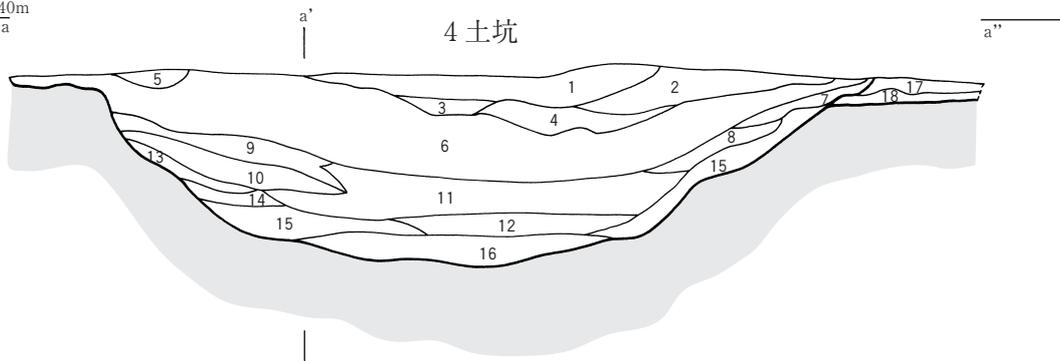


Y=-27,985

X=-134,040

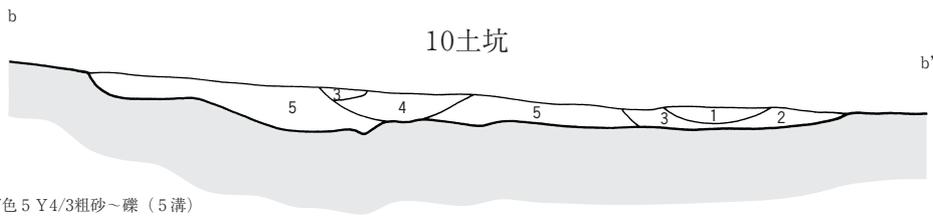


T.P.+41.40m
a



- | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 黒褐色2.5Y3/2微砂～礫 | 10. オリーブ黒色 5 Y3/1中砂～礫 |
| 2. オリーブ黒色 5 Y3/1細砂～礫 | 11. オリーブ黒色 5 Y2/2粘土 |
| 3. 2と同じ | 12. オリーブ黒色 5 Y2/2中砂混粘土 |
| 4. 灰オリーブ色 5 Y4/2微砂～礫 | 13. 灰色 5 Y4/1中砂 |
| 5. 暗灰黄色2.5Y4/2細砂 | 14. 12と同じ |
| 6. 黒褐色2.5Y3/2微砂と、オリーブ黒色 5 Y3/1粘土の互層 | 15. 黒褐色2.5Y3/1粘土と、暗灰黄色2.5Y4/2中砂の互層 |
| 7. 灰オリーブ色 5 Y5/3中砂～礫 | 16. 11と同じ |
| 8. 暗灰黄色2.5Y5/2中砂～礫 | 17. 暗オリーブ色 5 Y4/3粗砂～礫 |
| 9. 暗灰黄色2.5Y4/2粗砂～礫に、植物遺体含む。花崗岩片有り | 18. オリーブ黒色 5 Y3/1中砂～礫 |

T.P.+41.70m



- | |
|---------------------------|
| 1. 暗オリーブ色 5 Y4/3粗砂～礫 (5溝) |
| 2. オリーブ黒色 5 Y3/1中砂～礫 (5溝) |
| 3. 黄灰色2.5Y5/1礫 |
| 4. 灰オリーブ色 5 Y4/2中砂～礫 |
| 5. 暗灰黄色2.5Y4/2中砂～礫 |

0 (1:40) 2m

図192 有池遺跡03-1-6 調査区 土坑 平・断面図

10土坑(図192) 東側南部に位置する。東北隅を4土坑に切られる。東西約5.0m、南北約4.0mの範囲に形成された不整形土坑である。断面は浅い皿形を呈し、深さは10~20cmである。埋土は暗灰黄色中砂~礫である。また、当土坑の西側は、東西方向に延びる2条の溝状を呈する。北側の溝状部分は幅80cm~1.2m、深さ約10cm、断面は浅い皿形であり、埋土は暗オリーブ色粗砂~礫とオリーブ黒色中砂~礫である。南側の溝状部分は幅約80cm、深さ15cm、断面形状は皿形であり、埋土は灰オリーブ色中砂~礫である。土師器皿、瓦器椀、備前播鉢が出土した。

82土坑(図194) 中央南部に位置する。最大幅1.7mの不整形土坑である。断面は深い皿形を呈し、深さは約50cmである。遺物は出土していない。

112土坑(図194) 中央南部に位置する。78溝の底面で検出した。形状は長軸約1.1m、短軸85cmの楕円形である。断面は深い皿形を呈し、深さは35cmである。1・2層は78溝の埋土である黒褐色微砂である。瓦器椀が出土した。

79土坑(図194) 中央南部に位置する。南東部は側溝掘削時に削平してしまった。形状は直径約90cmの円形である。深さは35cmである。遺物は出土していない。

40土坑(図194) 中央南部に位置する。南東隅は調査区の範囲内では検出できなかった。南東側に80溝が平行する。形状は南北約6.0m、東西約2.0mの歪な長方形である。底部に凹凸がみられ、深さは10~20cmである。埋土は地山ブロックを含む暗灰黄色細砂~礫である。土師器皿、瓦器椀等が出土した。

93土坑(図195) 西側南部に位置する。形状は東西約3.0m、南北80cm~1.0mの歪な隅丸長方形である。断面は皿形を呈し、深さは約10cmである。埋土は上層が黄灰色粗砂混粘土、下層が灰オリーブ色粗砂~

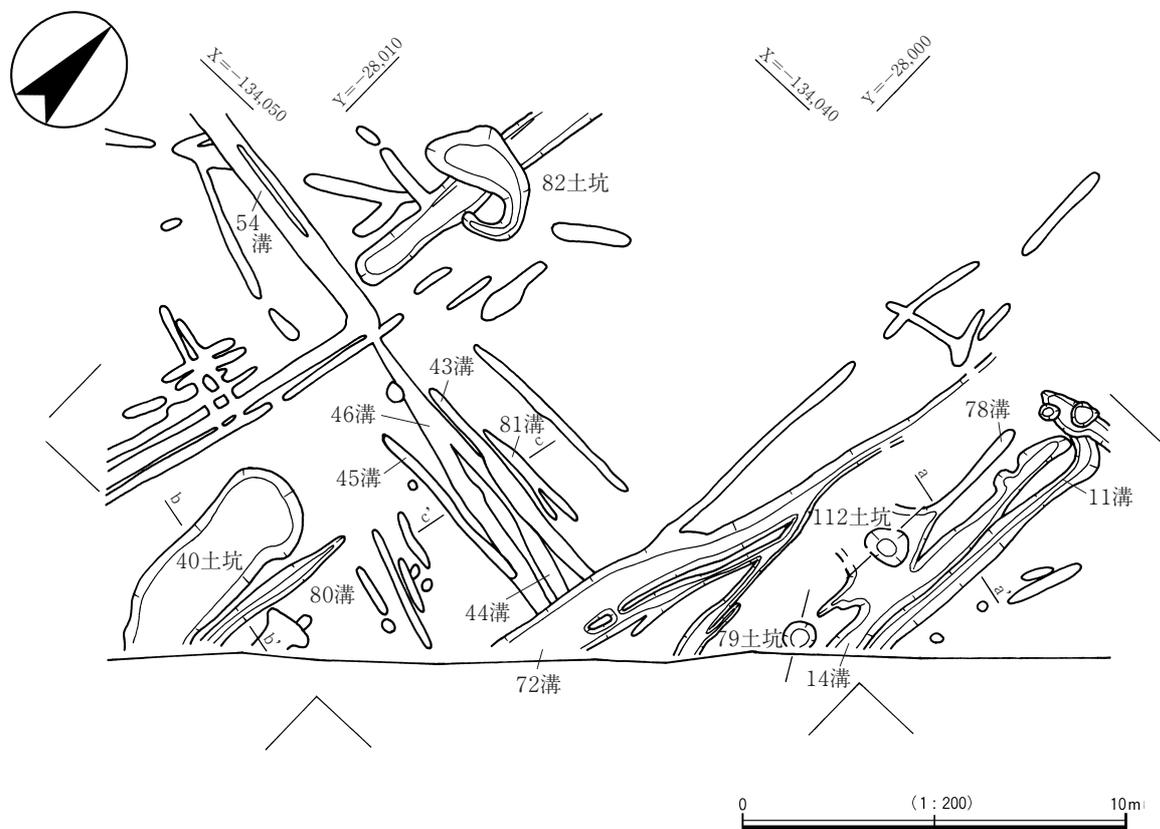
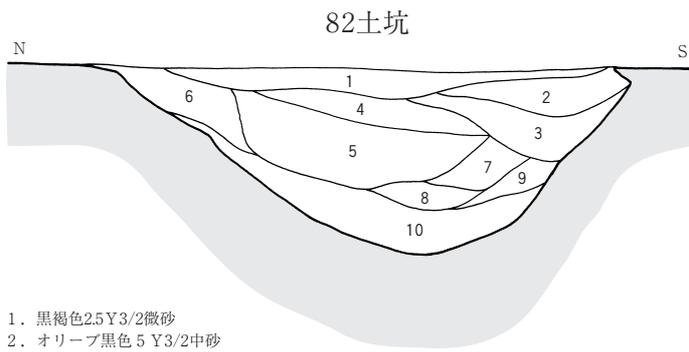


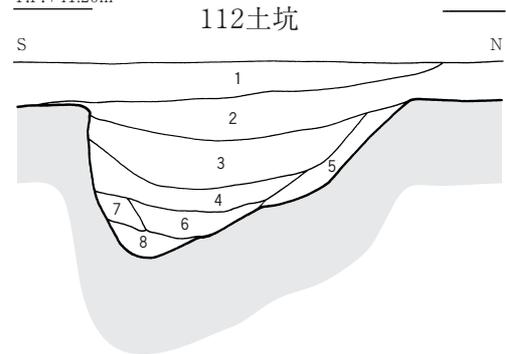
図193 有池遺跡03-1-6調査区 平面図(部分拡大)

T.P.+41.00m



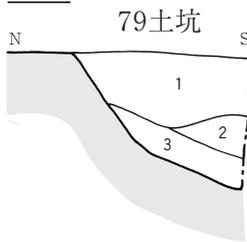
1. 黒褐色2.5Y3/2微砂
2. オリーブ黒色 5 Y3/2中砂
3. 灰色 5 Y4/1粗砂
4. オリーブ黒色 5 Y2/2中砂～礫
5. 黒色 5 Y2/1粘土
6. 黒色7.5Y R1.7/1中砂混粘土
7. オリーブ黒色 5 Y3/1粗砂
8. 暗灰黄色2.5Y4/2粗砂と、灰色 5 Y4/1中砂～礫の互層
9. 灰色7.5Y4/1中砂～礫
10. オリーブ黒色 5 Y3/1粗砂混粘土

T.P.+41.20m



1. 黒褐色2.5Y3/2微砂 (78溝)
2. 黒褐色10Y R3/2微砂 (78溝)
3. 灰黄褐色10Y R5/2粗砂混粘土
4. 灰黄褐色10Y R4/2粘土に、褐灰色10Y R4/1粘土ブロックが入る
5. 灰色 5 Y4/1粘土
6. 黒褐色10Y R3/1粘土
7. オリーブ黒色 5 Y3/1粗砂混粘土
8. オリーブ黒色7.5Y3/1粗砂混粘土

T.P.+41.00m



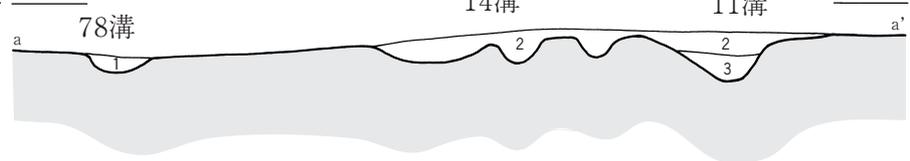
79土坑

N

S

1. 灰黄褐色10Y R4/2粗砂～礫
2. 黄灰色2.5Y4/1粗砂～礫
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粗砂

T.P.+41.20m



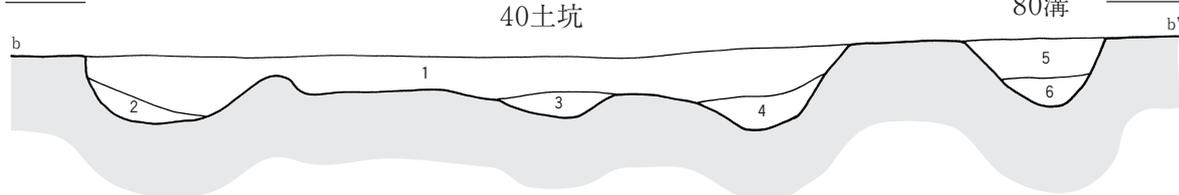
78溝

14溝

11溝

1. 黒褐色2.5Y3/2中砂 (78溝)
2. 黒褐色2.5Y3/2細砂 (11溝、14溝)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2中砂

T.P.+41.10m



40土坑

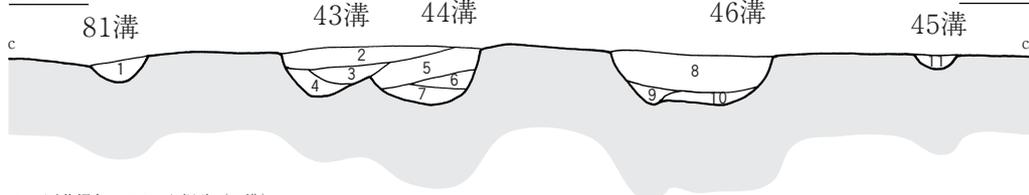
80溝

b

b'

1. 暗灰黄色2.5Y4/2細砂～礫に、オリーブ色 5 Y5/4粗砂ブロックを含む
2. 暗灰黄色2.5Y4/2粗砂に、オリーブ色 5 Y5/4粗砂ブロックを含む
3. 黒褐色2.5Y3/2中砂に、オリーブ色 5 Y5/4粗砂ブロックを含む
4. 灰色 5 Y4/1中砂～礫
5. 暗灰黄色2.5Y4/2細砂～礫に、オリーブ色 5 Y5/4粗砂ブロックを含む (80溝)
6. 灰オリーブ色 5 Y4/2粗砂～礫に、オリーブ色 5 Y5/4粗砂～礫ブロックを含む (80溝)

T.P.+41.10m



81溝

43溝

44溝

46溝

45溝

c

c'

1. 灰黄褐色10Y R4/2細砂 (81溝)
2. 暗灰黄色2.5Y5/2微砂 (43溝)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2細砂 (43溝)
4. 暗灰黄色2.5Y4/2細砂に、灰オリーブ色7.5Y5/2細砂ブロックを含む (43溝)
5. 暗灰黄色2.5Y4/2微砂～礫 (44溝)
6. オリーブ黒色 5 Y3/1細砂～礫 (44溝)
7. 灰オリーブ色 5 Y6/2シルトと、オリーブ黒色 5 Y3/2シルトの互層 (44溝)
8. 暗灰黄色2.5Y4/2微砂～礫 (46溝)
9. 黒褐色2.5Y3/2細砂～礫 (46溝)
10. 灰オリーブ色 5 Y4/2中砂～礫に、灰オリーブ色7.5Y5/3粗砂ブロックを含む (46溝)
11. 暗灰黄色2.5Y5/2微砂 (45溝)

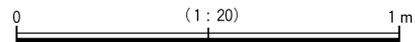


図194 有池遺跡03-1-6 調査区 土坑・溝 断面図

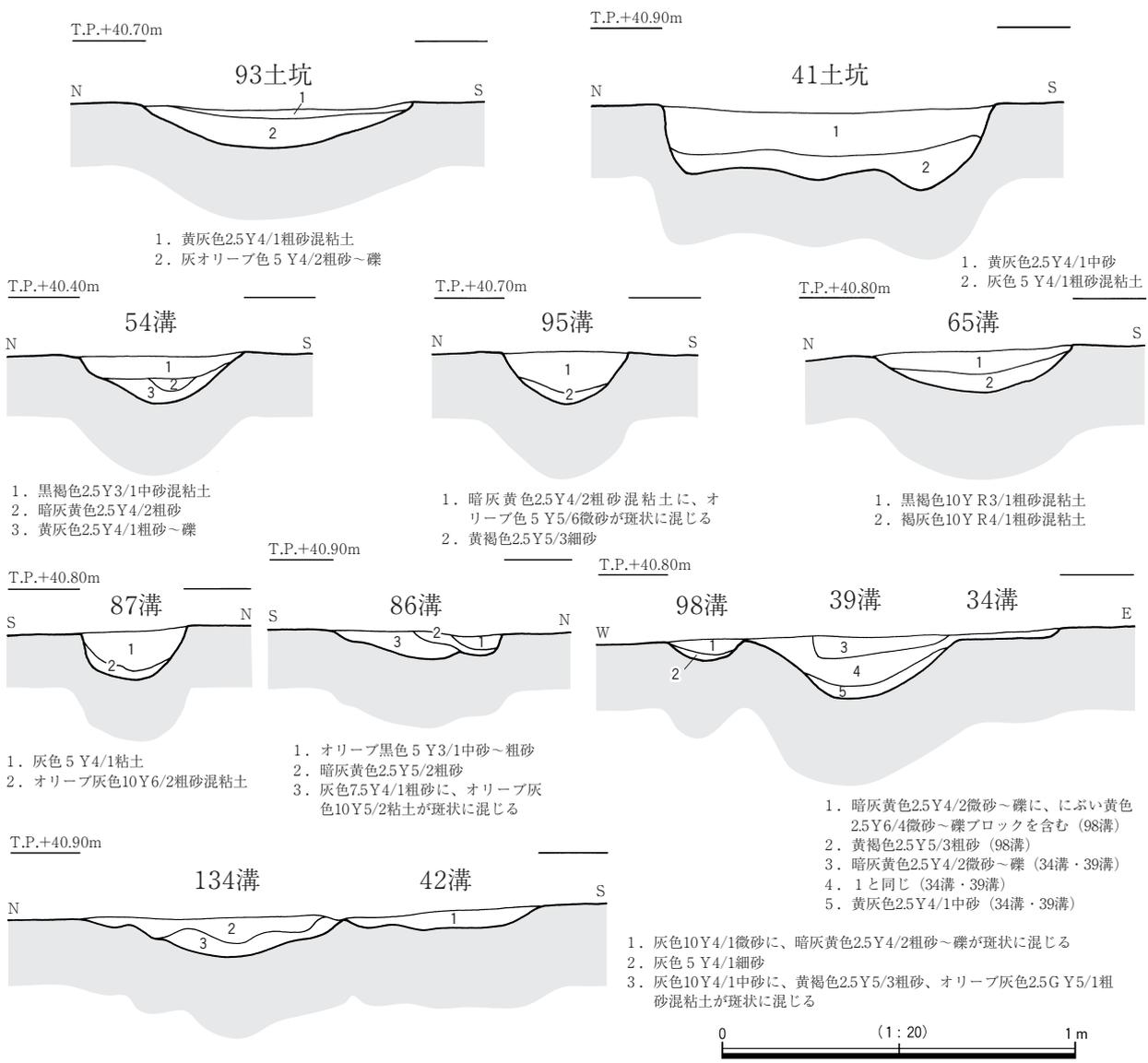
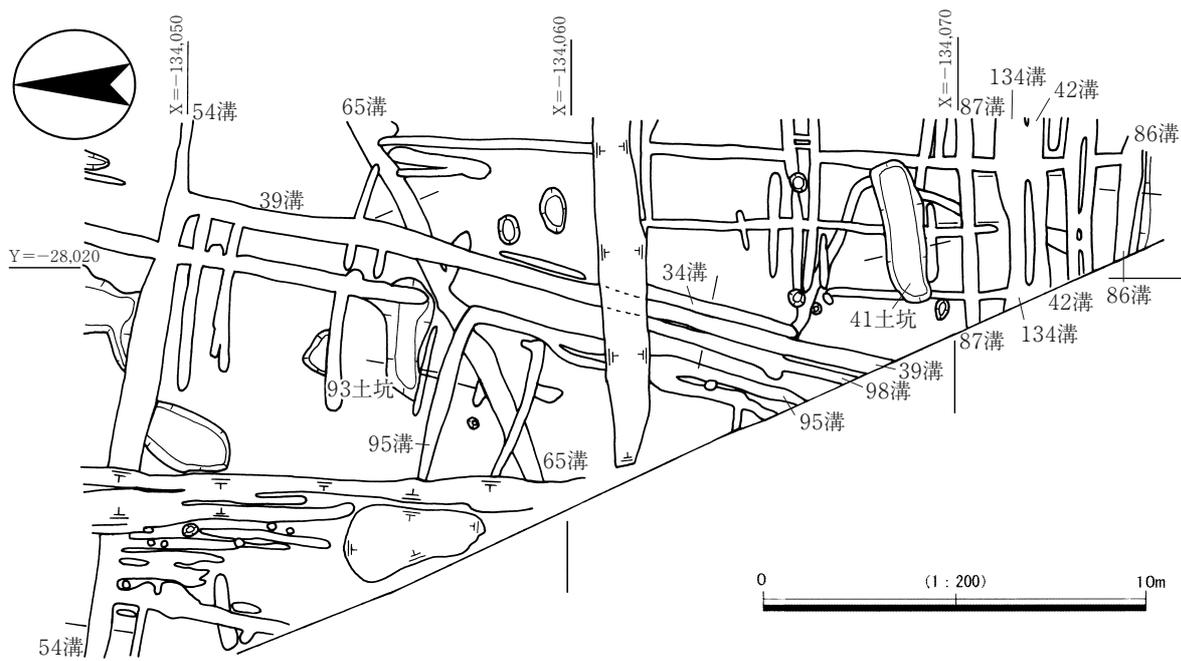


図195 有池遺跡03-1-6調査区 平面図(部分拡大) / 土坑・溝 断面図

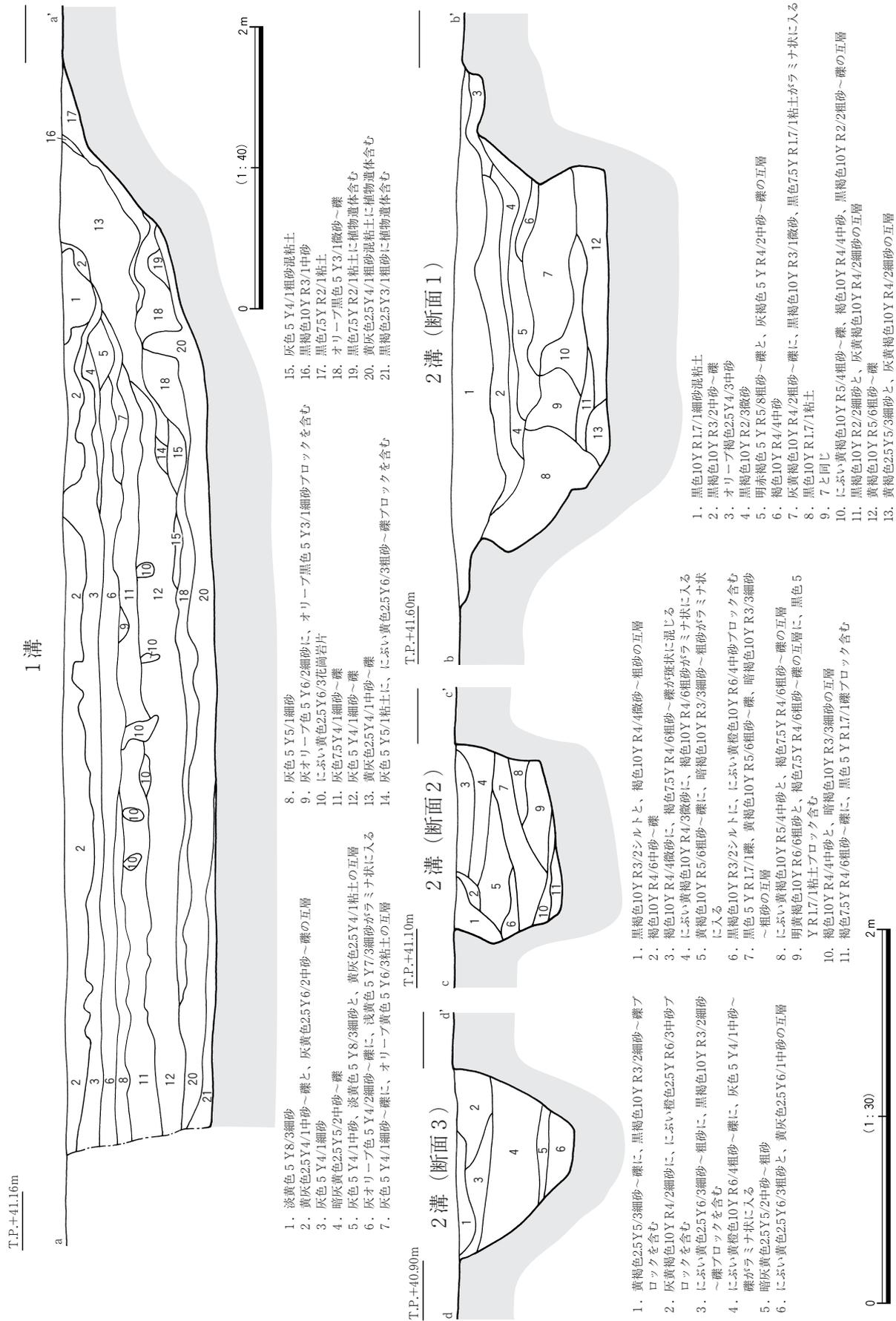


図196 有池遺跡03-1-6調査区 溝 断面図

礫である。遺物は出土していない。

41土坑(図195) 西側南部に位置する。形状は東西約3.7m、南北95cmの隅丸長方形である。断面は逆台形を呈し、深さは約20cmである。埋土は上層が黄灰色中砂、下層が灰色粗砂混粘土である。瓦器皿、須恵器鉢が出土した。

1溝(図196) 北東端部に位置する。検出したのは南肩と西肩であり、大部分は調査区外に続く。検出規模は東西約24.0m、南北約7.8mである。断面は逆台形を呈し、深さは約1.0mである。埋土は大きく3層に分けられる。4調査区中央北部に広がる湿地状の落込から集まった水が、西北西方向に集まって1溝となり、免除川旧流路につながっていた可能性が考えられる。また、4調査区242溝の断面観察から、2溝が埋没した後に1溝が形成されたとみられる。土師器皿、土師質羽釜、瓦器椀、瓦質挿鉢、瓦質三足釜、瓦質羽釜、瓦、須恵器、須恵器杯身、須恵器鉢、青磁、白磁、備前挿鉢、灰釉陶器が出土した。土師質羽釜、瓦質羽釜は14世紀のものとみられる。

2溝(図196) 西南西方向にほぼ直線状に延びる。検出長は約70.0mである。幅と断面形状は場所によって異なる。東側(断面1)では、幅約2.8mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは約80cmである。この付近では、下層から土師器甕、須恵器杯身が出土した。土師器甕は底部とみられ、外面にはハケメ調整、内面にはケズリ調整がみられる。土師器、須恵器ともに古墳時代の遺物とみられる。中央(断面2)では、幅約1.0mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは45～55cmである。壁面がオーバーハングする部分もある。この付近では、土師器皿、緑釉陶器が出土した。西側(断面3)では、幅約1.0mを測る。断面はV字形を呈し、深さは約60cmである。埋土は、にぶい橙色中砂ブロックを含む灰黄褐色細砂の層、灰色中砂～礫がラミナ状に入るにぶい黄橙色粗砂～礫の層、にぶい黄色粗砂と黄灰色中砂の互層など、粗砂を中心とする層が混じりあう。この付近では遺物は出土していない。

2溝の東側は、4調査区242溝の東北東から西南西に延びる部分に続く。また、前述のように、2溝が1溝より先行することが4調査区242溝の断面観察からわかる。2溝の西側は、有池遺跡04-1の1調査区で検出した7溝に続く。この溝は、2溝よりも規模を減じており、幅約60cm、深さ約20cmである。4調査区242溝、6調査区2溝、有池遺跡04-1の1調査区7溝を合わせた延長は約140.0mにおよび、東西は調査範囲外にさらに延びるとみられる。

6調査区で検出された遺構の多くは黒褐色～灰色の粘土～中砂を埋土の主体としているが、2溝は黄褐色の粗砂を埋土の主体としている点で、6調査区の中で特異な遺構である。なお、中世の遺物が出土したことから、2溝が完全に埋没したのは中世以降とみられる。

9溝(図191) 東側北部に位置する。西北西に延び、西側は攪乱(近世以降の南北溝)に切られる。東側は2溝を切っており、中央は72溝に切られる。検出長は約10.0m、幅は約80cmである。断面は浅い皿形を呈し、深さは約10cmである。

76溝(図191) 中央北部に位置する。北東方向に延び、北側は調査区外に続く。検出長は約35.0m、幅は約60cmである。断面は半円形を呈し、深さは25cmである。

72溝(図191) 中央南部から東側北部に位置する。北側と南側は調査区外に延びる。検出長は約50.0mである。断面観察から、15土坑が埋没した後に72溝が形成されたものとみられる。

中央を攪乱(近世以降の南北溝)に切れ、南端は隣接する4調査区314溝へと連続する。幅は約60cm～1.6mで、断面はW字形を呈しており、複数回の浚渫がなされたものとみられる。深さは15～20cmである。黒褐色微砂～礫、黄灰色微砂、地山ブロックを含む黒褐色細砂が重なり合う。流路が北北東を向

くのは、南東から北西に向けて低くなる地盤の影響によるものと思われる。溝の東側は西側よりも地盤が高いことから、この溝は段状を呈する耕作地を区画する溝と考えられる。

北側は15土坑付近で流路方向を変え、ほぼ真西に延びた後、ほぼ真北に折れ曲がって延びる。北側は調査区外に続く。幅は40～60cmである。溝の両岸に高低差はみられない。土師器皿、瓦器皿、瓦器椀が出土した。

11溝(図194) 中央南部に位置する。南北方向に延びる。西側に14溝が接する。検出長は約8.0m、幅は40～50cmである。断面はV字形を呈し、深さは15cmである。土師器皿、瓦器椀が出土した。

14溝(図194) 中央南部に位置する。南北方向に延びる。東側に11溝が接する。検出長は約8.0m、幅は50～60cmである。断面は底面に凹凸のみられる皿形を呈する。深さは約10cmである。土師器が出土した。

78溝(図194) 中央南部に位置する。南北方向に延びる。西側に14溝が接する。検出長は約7.0m、幅は15cmである。中央南寄り部分は幅が1.5m以上に広がり、底面から112土坑が検出された。断面は浅い皿形を呈し、深さは5～10cmである。瓦器椀が出土した。

81溝(図194) 中央南部に位置する。東西方向に延び、東端が二股に分かれる。検出長は約3.5m、幅は15cmである。断面は浅い皿形を呈し、深さは5cmである。遺物は出土していない。

43溝(図194) 中央南部に位置する。東西方向に延びる。検出長は約6.5m、幅は20～40cmである。断面はV字形を呈し、深さは15cmである。土師器皿が出土した。

44溝(図194) 中央南部に位置する。真西より約10度北に傾いた方向に延びる。東端は72溝に切られ、西側では46溝と合流したのち、54溝に連続する。検出長は約8.5m、幅は30～40cmである。断面はU字形を呈し、深さは15cmである。瓦器椀が出土した。

46溝(図194) 中央南部に位置する。真西より約10度北に傾いた方向に延びる。東端は72溝に切られ、西端は54溝に連続する。検出長は約8.5m、幅は45cmである。断面はU字形を呈し、深さは15cmである。土師器皿が出土した。

45溝(図194) 中央南部に位置する。東西方向に延びる。検出長は約5.0m、幅は約10cmである。断面は浅い皿形を呈し、深さは5cmである。土師器皿が出土した。

80溝(図194) 中央南部に位置する。南北方向に延び、西側に40土坑が隣接する。検出長は約5.0m、幅は35cmである。断面はV字形を呈し、深さは約20cmである。遺物は出土していない。

54溝(図195) 西側南部に位置する。真西より約10度北に傾いた方向に延びる。西側は調査区外に延び、東側は44溝に連続する。また、両溝の接合部には南北方向の溝が直交する。検出長は約26.0m、幅は45cmである。断面は皿形を呈し、深さは15cmである。土師器皿が出土した。

95溝(図195) 西側南部に位置する。真北から12度東に傾いた方向に延び、ほぼ直角に折れ曲がって、真西より15度北に傾いた方向に延びる。西側は攪乱(近世以降の南北溝)に切られ、南側は調査区外に続く。検出長は約13.5m、幅は35cmである。断面は半円形を呈し、深さは15cmである。遺物は出土していない。

65溝(図195) 西側南部に位置する。南西方向に延びる。検出長は約14.0m、幅は55cmである。断面は皿形を呈し、深さは15cmである。瓦器椀、須恵器が出土した。なお、北東方向の延長上に同一方向の溝が断続的にみられ、南西方向の延長上には、隣接する有池遺跡04-1の1調査区に同一方向の溝がみられる。これらの延長は約38.0mにおよぶ。北北東または西北西を向く溝とも正方位を指向する溝とも方

角を違えており、これらに先行する溝とみられる。

34溝(図195) 西側南部に位置する。真北より12度東に傾いた方向に延びる。北側で攪乱(近世以降の東西溝)に切れ、検出長は約5.5m、幅は約30cmである。断面は浅い皿形を呈し、深さは30cmである。遺構検出時に39溝に先行する溝と判断し、別に遺構番号を付したが、断面観察の結果39溝と同一の遺構と考えられる。土師器皿が出土した。

39溝(図195) 西側南部に位置する。真北より12度東に傾いた方向に延びる。北端で54溝とほぼ直角に合流し、南側は調査区外に延びる。検出長は約19.0m、幅は約60cmである。断面は皿形を呈し、深さは約20cmである。土師器皿、瓦器椀、白磁椀が出土した。

98溝(図195) 西側南部に位置する。真北より12度東に傾いた方向に延びる。南側は調査区外に延び、北側で攪乱(近世以降の東西溝)に切られる。検出長は約4.0m、幅は約20cmである。断面は皿形を呈し、深さは7cmである。遺物は出土していない。

87溝(図195) 西側南端部に位置する。東西方向に延びる。西側は調査区外に続き、東側は攪乱(近世以降の南北溝)に切られる。検出長は約5.5m、幅は約30cmである。断面は半円形を呈し、深さは15cmである。遺物は出土していない。

134溝(図195) 西側南端部に位置する。東西方向に延びる。東側は攪乱(近世以降の南北溝)に切られる。検出長は約5.5m、幅は40~75cmである。断面は皿形を呈し、深さは12cmである。土師器皿、瓦器椀が出土した。

42溝(図195) 西側南端部に位置する。東西方向に延びる。東側は攪乱(近世以降の南北溝)に切られる。検出長は約4.8m、幅は30~55cmである。断面は皿形を呈し、深さは5cmである。土師器皿、瓦器椀、器種不明白磁が出土した。

86溝(図195) 西側南端部に位置する。東西方向に延びる。西側は調査区外に続き、東側は攪乱(近世以降の南北溝)に切られる。検出長は約3.0m、幅は約50cmである。断面はW字形を呈しており、複数回の浚渫がなされたものとみられる。深さは8cmである。

以上の87溝、134溝、42溝、86溝をはじめとする西側南端部に展開する溝のほとんどは正方位を指向するのに対し、これらの北西側には、真北より10~14度ほど東へ傾いた方向に延びる95溝、34溝、39溝、98溝とそれらと直交する方向に延びる54溝がみられる。これら流路方向を違える溝の間には時期差があるものとみられるが、出土遺物がいずれも小片であり、遺物の年代によってこれらの時期を決定することはできない。ちなみに、隣接する有池遺跡04-1の1調査区でも方向を違える溝が重複する様相がみられた。

第3節 遺構のまとめ（図197～201）

各調査区における遺構・遺物の検出状況から集落の動向を概観した後、有池遺跡03-1の調査で検出した屋敷地を区画する溝の配置が、時間とともにどのように変化したかを概観する。遺構出土遺物を概観すると、おおむね12世紀前半から15世紀にかけての時期のものが含まれる。量的には13世紀後半から14世紀前半の遺構・遺物が多数を占めるので、この時期に集落がピークを迎えるとみられる。

時期によって居住域の範囲や集落構成に変化が認められる。その状況を加味すると12世紀、13世紀前半、13世紀後半、14世紀前半に集落の画期がまとめられる。

図197～199では基本的に、遺構埋土に含まれる遺物の時期（瓦器編年の年代観を中心とする）に応じて遺構を着色している。例えばある遺構に12世紀前半の遺物と、13世紀後半の遺物が含まれていた場合、それぞれの時期で同一の遺構を着色している。それをそのまま集落の動態に関連付けてしまうと齟齬をきたしてしまうが、一方でそこから間接的にでも受け止められる情報もあると考える。

例えば12世紀段階に関してみると、遺物は出土するものの、当該期の遺構と特定できるものは極めて希薄で、具体的な集落構成を把握することはできない。その主たる理由として、この時期の居住域が13世紀以降に比べて集住の度合いが低かったことがあげられるだろう。加えて12世紀段階の居住域が13世紀以降のそれとややずれることから、生産域の拡大・居住域の再編に伴い、13世紀以降の段階で12世紀以前の居住域が削平され、痕跡がほとんど残らなかったことが考えられる。それにもかかわらず12世紀代の遺物を包含する遺構の分布域が調査区西寄りに限定されることは明白である。これにより12世紀段階の居住域が、13世紀以降の居住域よりも、西に広がっていたことを想定することができる。したがって、出土遺物の下限の時期より古い時期の遺物を単にノイズととらえ、排除するのではなく、居住域や集落構成を間接的にでも把握するための材料としてとらえていきたい。

他方、遺構によって埋土に含まれる遺物の時期幅が広いものと、極めて一括性が高いものがある。前者に関しては遺構自体が長時間継続して機能したためにそのような状況が生じている場合と、各時期の居住域が重なる部分に位置し、偶然に古い時期の遺物が混入した場合を考えることができる。当調査区では明確に広がりをとらえられなかったが、もともと遺物包含層は居住密度の高い部分を中心に堆積していたと考えられる。実際に時期をまたいで、遺構が稠密する箇所では、遺物包含層が複数枚堆積しているのを部分的に認めた。したがって前の時期に形成された包含層を掘りぬいて遺構が形成された場合、前時期の遺物が転入する可能性が生じることとなる。

ここでは各遺構の時期決定の判断根拠を示すことはしない。それについては第2章のなかで詳述を試みたので、そちらを参照されたい。なお前述したように出土遺物に時期幅がある場合で、遺構がその時期に帰属していると判断した場合とそうでない場合とで彩色のトーンを変えている。

1 調査区（図197）

〔12世紀〕 12世紀前半からの遺物が出土している。概してこの時期の遺構・遺物は希薄だが、おおむね大型の屋敷地の西を限る7溝よりも、西側に遺構の分布がみられる。遺構には井戸や、遺物の時期幅が限られるピットも含まれ、掘立柱建物の柱穴やそれに付随する施設が含まれている可能性は高い。ただ遺構の検出数が少なく、具体的な状況をとらえることはできなかった。

この時期の居住域の中心が調査区西寄りの部分であることは確かとみられるが、それより東に位置する5井戸や8溝・7溝でも当該期の遺物の分布を認めた。したがって居住域は1調査区の中央部まで広

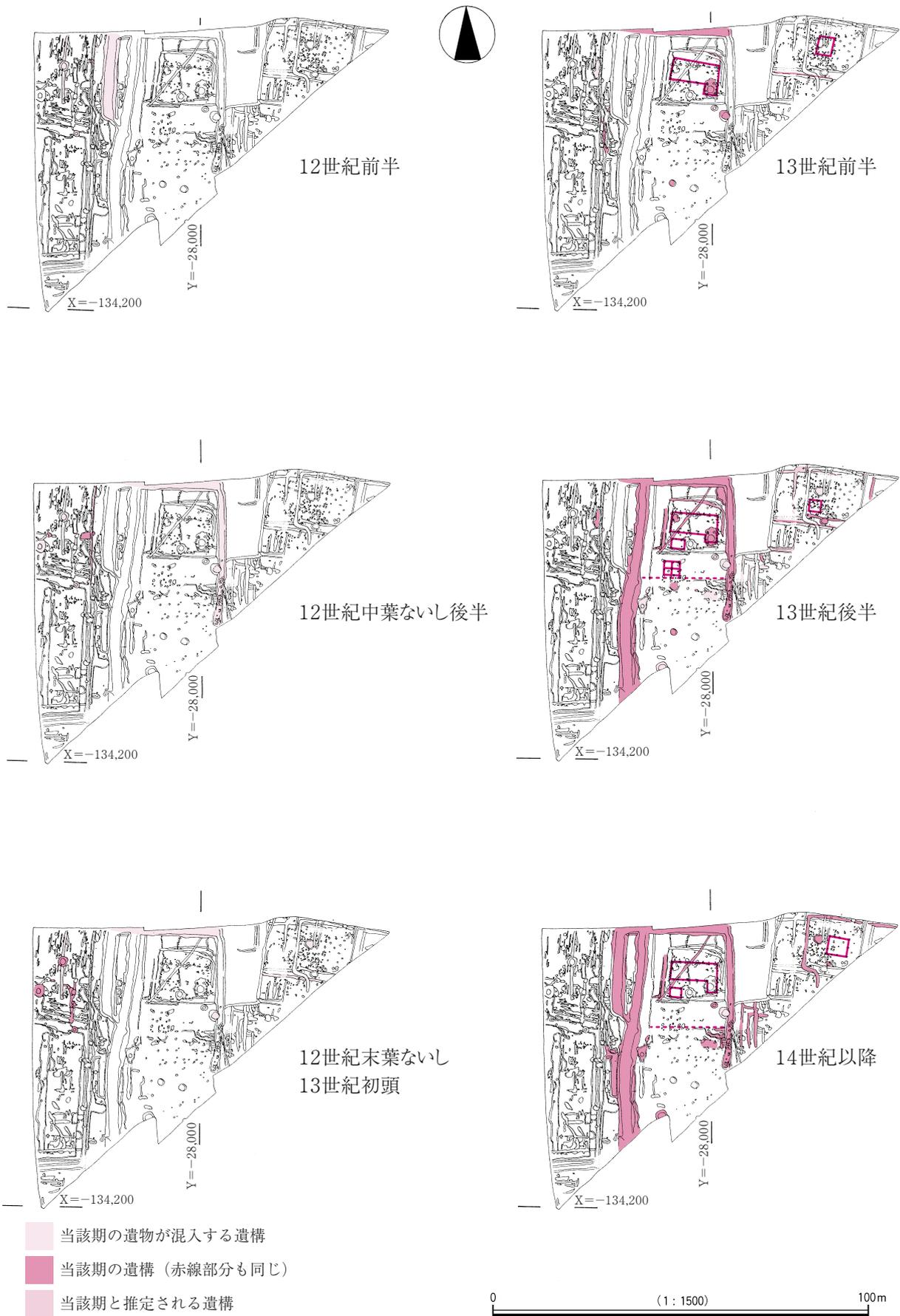


図197 有池遺跡03-1-1調査区 遺構変遷図

がる可能性がある。ただし1調査区中央部に点在する遺構のうち、この時期に帰属する可能性があるものは皆無に等しい。その一方で、12世紀後半を経て12世紀末～13世紀初頭へと時期が降るにつれ、遺構ないし遺物の分布域が徐々に東へ拡大する傾向は確かに認められる。

〔13世紀前半〕 遺構・遺物の分布範囲が全体に東へ移る。その中には中心建物とその周囲に配された雨落溝、井戸も含まれる。したがって大型の屋敷地はこの時期に出現する可能性が高い。ただこの段階の大型屋敷地の区画溝は北辺だけに置かれ、周りを囲う形状にはなっていない。

12世紀末～13世紀初頭から13世紀前半を経て14世紀前半まで、各時期の遺物がコンスタントに含まれるのは8溝のみである。8溝は13世紀後半以降になると、4溝・7溝と一連の溝として機能したとみられるが、この段階では単独で存在した可能性が高い。溝底部の高さが8溝と4溝とで一致せず、平面的に見ても両溝の結節部分にわずかに違いが生じているのは、後から後者を掘削して8溝へ繋げたためと考える。このように屋敷地北辺の区画溝をまず掘削し、その後別の溝を掘りつなげていく過程は、5調査区東寄りでも検出した屋敷地でもみられた。したがってこれら2つの屋敷地は、極めて類似した経過をたどって形成されたといえる。

居住域の西限は413土坑や432溝を結んだあたりのラインになるようだ。次の段階で大型の屋敷地の西辺を限ることになる7溝や407溝が、この時期にはまだ開鑿されていないので、この時期の集落の西限がそれらとずれることは矛盾しない。ただずれ幅は若干に過ぎず、この段階で示された居住域の輪郭が、後世にもおおむね引き継がれていった様子がうかがえ、興味深い。

中心建物を含む大型屋敷地の状況に比べ、上段の平場での遺構・遺物の検出状況はさらに希薄で、この時期のものと考えられるのは59ピットのみである。加えて13世紀前半から後半にかけての時期にまたがって、継続的に機能した可能性のあるものも少なく、東西方向を指す12溝がかるうじてその範疇に含まれるかどうかというところである。ただわずかであれ、当該期の遺構・遺物が検出されていることは看過できない。この時期に小型の屋敷地が出現していたかどうかは別としても、居住域がここまで広がっていたことは確かと考える。

〔13世紀後半〕 遺構・遺物の検出数量が大幅に増加し、集住化が一段と進む様子がうかがえる。集落の範囲や屋敷地のあり様は13世紀前半の形を踏襲しているものの、大型の屋敷地ではその西と東を限る南北方向の大型溝が新たに掘り足され、コの字状の溝で周りを囲われた形態に発展する。

大型屋敷地の東西幅は約21mである。中心建物を含んだ少なくとも3棟の建物群と、井戸からなる区画の南限には溝が配されていない。ただ7溝の東肩のラインには、東にやや張り出す部分が、4溝には溝底の傾斜が変化する部分があり、それらの位置は8溝との連結部分から測ると、どちらも25mのあたりである。さらにそれらを結んだラインは建物8の南辺のわずかに南を通る（図197破線位置参照）。

これを南限ととらえると、東西21m、南北25mの範囲を1つの区画ととらえることができる。南限ととらえられる部分に散在するピットは、明確に列を成すものではないが、ここに柵や柴垣等、空間を仕切る何らかの施設があった可能性は高いと考える。

この区画のさらに南側では、掘立柱建物の柱穴配置を復元することができなかった。ただ調査区南寄りの部分の方が、後世の耕地造成に際してより強い削平をうけているため、柱穴を消失している可能性は高い。10焼土集積遺構の西側に散在するピットの分布状況から見て、そこに東西棟の掘立柱建物があった可能性は指摘できるだろう。加えて10焼土集積遺構が竈の痕跡である可能性のあること、この区画内に複数の井戸が存在することから、ここに複数の建物と井戸のセットからなる居住施設が存在して

いた可能性は高いと考える。4溝が延長距離35mで途切れるのは、そこが南側の屋敷地の出入り口に当たっていたからかもしれない。ちなみに北側の屋敷地の南限から4溝が途切れる部分までの距離は10mである。幅5mの出入り口を介して4溝を反転させると、南側の区画も東西幅21m、南北幅25mとなり、北側の区画と同じ大きさになる。

このように8溝・7溝・4溝に区画された部分は、柵等でさらに二つに分割されていた可能性がある。換言すると、コの字状に溝で囲まれた部分には、ゆるやかな区分を介して、二つの区画が並列していた可能性が指摘できる。ちなみに次の14世紀前半の段階になると、7溝の西側に407溝が掘削されるが、これが北の区画の南限に近い場所で7溝から分岐するのは、北側の区画の西辺を二重に限る、ということに起因するとも考えられる。

調査区東半に展開する小型の屋敷地に目を転ずると、東西および南北方向の溝を組み合わせた区画溝が配される状況が明確にとらえられる。それらの溝のうち、確実に13世紀後半の中でとらえられる溝で、位置的にみれば3m程度のずれで並行するものがあることから、少なくとも1回は場所をずらして区画溝を掘り直すことをしていたらしい。

次にその一区画の大きさを考えてみたい。小型の屋敷地の区画溝を見ると、東西溝はしっかりと掘られており、相互のセット関係を想像することができる。それに対して南北溝は概して細く、延長距離も5m前後で途切れてしまうものが多いため、相互の関係を明確に捉えることはできなかった。

ただ区画の南北幅においては12~14m、というパターンを把握することができる。

一方、南北方向の溝で、出土遺物からこの段階に属すると判断できるのは、16溝のみである。ただ14世紀前半に13溝と相似形で、これに先行する溝があり、これを13世紀後半の段階のものにとらえることができる。この溝は上部が強く削平されており、遺物は検出されなかった。また南半部は攪乱でけずられており、南への延長部分を明確に捉えることはできなかったが、おそらく34溝の西側延長部分と接していたのではないかと考える。この溝と13溝とのずれ幅が、建物1と建物2のずれ幅とほぼ一致することから、建物1と13溝、建物2と13溝に先行する溝にはセット関係が成立すると考えた。

このように建物2とそれに対応する溝は、13世紀後半に帰属する可能性が高いと考える。そうであれば建物2を伴う屋敷地は、南北幅11~12m、東西幅は最大20mと東西に長い長方形の区画となる。あくまで可能性の域をでないが、ひとつの可能性としてこのような規模の区画を想定しておきたい。

区画溝と検出した掘立柱建物の位置関係をみると、小型の屋敷地では全体の区画に占める建物の位置にアンバランスが生じている。大型屋敷地での状況も勘案すると、小型の屋敷地の場合も、区画内に2~3棟の建物と、場合によっては井戸が配されていたのではないかと考える。なお65溝を北限とする屋敷地に関しては、北側を出入り口としていたと考える。

〔14世紀以降〕 7溝の西側に407溝が掘り足され、その部分のみ、屋敷地の西側を限る溝が2条になる。この他には13世紀後半の集落の様相と比較して、大きな変化は見られず、基本的に13世紀後半の集落形態が踏襲されたととらえることができる。

そこで北側の屋敷地の西側にだけこの時期、2重に溝が配された要因について考えたい。まず西側に新たな溝を掘削する際、すでに南側の区画が機能を失い、居住機能が北側の区画に集約されていた可能性を検討する。南側の区画の構造を具体的にとらえることができないのは前述したとおりだが、そこに含まれる井戸には、この時期の遺物を多量に含むものがあつた。また7溝はこの時期においても、引き続き基幹水路としての役割を果たしていたと見られる。

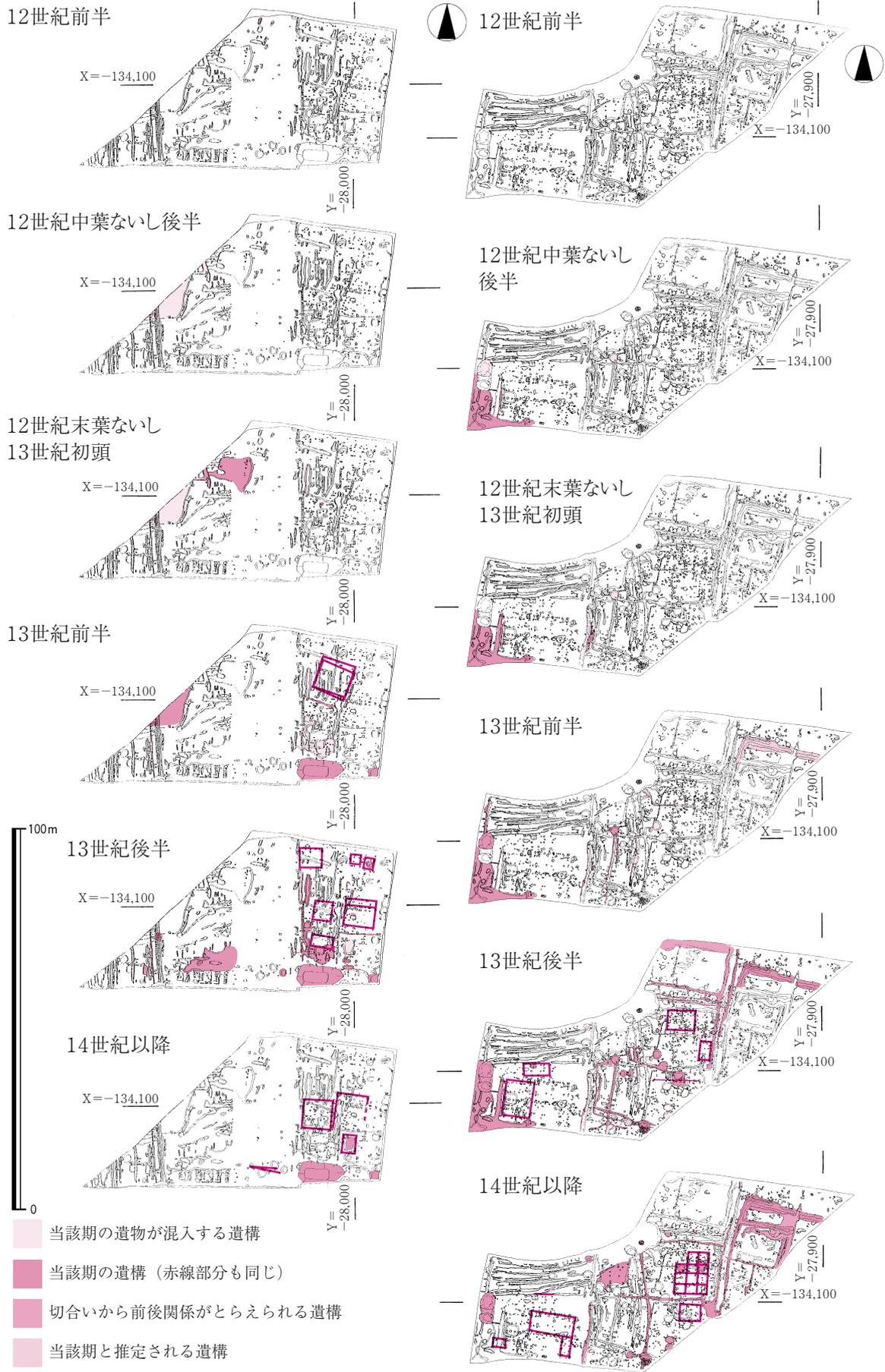


図198 有池遺跡03-1-2調査区・5調査区 遺構変遷図

このように407溝が掘り足されたことを除いては、大型屋敷地そのものや、それをとりまく状況に変化が生じたことを跡付けることはできない。したがってこの段階でも、南側の区画が生活スペースとして機能していたと考えられる。この段階に二つの区画の機能が明確に分化したか、何らかの階層分化が生じた結果、その違いを外観に投影させる必要が生じて北半にだけ、二重に溝が配されたと考える。

上段で検出された小型の屋敷地には、基本的に前段階と変わらない状況がみられるが、13世紀後半の項で説明したように、区画溝・建物を含めて全体に東に3mほど移行したとみられる。

2 調査区 (図198)

〔12世紀〕 12世紀前半からの遺物が出土するが、それは156土坑に含まれていただけで、遺構や遺物の分布傾向がとらえられるようになるのは12世紀中葉～後半になってからである。12世紀末～13世紀初頭にいたるまでの時期の遺物が含まれるのは、遺構密集域より西の部分である。

位置的にみて4落込と20土坑は、調査区の西側に広がっていたかつての谷の落ち口と考えられる。その埋土に12世紀代の遺物が含まれていることから見て、この時期の居住域は谷の落ち口に近接して広がっていたと考える。そして13世紀における耕地の拡大に際し、従来の生産域をかさ上げするために12世紀の居住域を含む部分が削平され、谷に向かって敷きならされたのではないかと考える。

12世紀末～13世紀初頭になると、遺構・遺物の分布域が調査区東半の遺構密集域に向けて拡大する。38溝・41溝に含まれる遺物は二次的に混入したものとみられることから、この時期に帰属すると考えられるのは112土坑のみだった。しかし13世紀以降、居住域が東半部に集中するきざしがこの時期すでに生じているととらえられる。

〔13世紀前半〕 遺構・遺物の分布域の中心が全体に東に移行する。出土遺物の下限時期が13世紀後半～14世紀前半である遺構から、13世紀前半の遺物が出土する状況がみられる。この段階で成立した居住域の輪郭が、それ以降の段階へも引き継がれたためだろう。

出土遺物からこの時期の遺構と判断できるものは微量である。そのうち41溝は他の遺構とは方向軸がやや異なる。この遺構に並行もしくは直行する遺構に、320溝・建物9・建物10があり、同時期のものととらえられる。遺構密集部の南限に配されている27土坑でもある程度まとまった量の遺物が出土していることから、この時期すでに開口していた可能性がある。

この遺構密集部の位置は、1調査区で検出した大型屋敷地に北面するが、こちらでは屋敷地ととらえられるような、区画溝を配した遺構の複合体は認められない。

〔13世紀後半〕 居住域の範囲は前段階をほぼ踏襲する。方向軸が並行または直行し、桁行ないし梁行をそろえるようにして整然と配された掘立柱建物群は、おおむねこの時期のものと考えられる。

特に位置的にみてまとまりの明確な南半部の3棟は、相互に近接する。ただこれらの建物群に付随する溝は、個々の建物に対応するような形態を呈しており、屋敷地の区画溝とは区別すべきものである。雨落溝もしくは排水施設とみるべきだろう。52溝や54溝・51土坑の複雑な切りあい関係などからみて、この時期の遺構は少なくとも2時期に分けられる。

前述したように当調査区で検出した居住域では、建物群を囲う区画溝が存在しない。相互の建物が近接することから、集住化傾向は顕著に現れているものの、1調査区や5調査区で検出されている屋敷地の形態をとっていないといえる。別の見方をすればそれらの建物は、相互に関連性をもちながら、個々に独立性も保持していたと考えられる。

〔14世紀以降〕 この段階になると居住域の範囲が南半部に集中する。この時期の遺構とみられるもの

に、13世紀後半に埋まった52溝を切って柱穴が並ぶ建物8と、柱穴からこの時期の遺物が出土している建物11、方形の土坑を伴い厩と考えられる建物7がある。また27土坑・29井戸もこの時期に埋まっており、遺構や遺物の分布域は前段階に比べると収縮する印象を受ける。

建物8と建物11は極めて近接していることから、それらは時期をずらして存在したとみられる。二者は大きさや形態が異なるが、東西に1棟分ずらした位置関係で、相互に関連性が認められる。13世紀後半の建物配置と比べると、整然と配された複数の建物群が、1棟の大型の掘立柱建物に集約されるような状況がある。

4 調査区 (図199)

〔12世紀〕 12世紀後半からの遺物が出土している。この時期の遺物が認められるのは微高地北寄りの部分に限られ、分布域もきわめて狭い。12世紀末～13世紀初頭の時期においても状況はあまり変わらないが、その範囲が若干南側に広がる傾向が認められる。1土坑・2土坑、6溝に含まれるこの時期の土器には、ほぼ完形でありあまり摩滅していないものが含まれる。したがってこの範囲に当期の居住域が展開していたことは確かと考える。

1調査区・2調査区・5調査区におけるこの時期の居住域が、相互に比較的近接しているのに比べ、ここだけはぽつんと離れている印象を受ける。前三者では12世紀前半ないし12世紀中葉の遺構・遺物が見られるのに対し、ここでは後半以降のものしかみられないことを勘案すると、前三者が構成する居住域の複合体から、後者が派生した可能性も考えられる。

〔13世紀前半〕 6溝・248溝・253溝は、この時期もしくはこの時期まで継続した遺構とみられる。4調査区で検出した溝はほとんどが南北方向を指すが、その中で東西方向の6溝・381溝は南北溝とは直行しない。南北方向溝は13世紀後半以降に成立し、その前段階にはやや異なる方向軸の、東西溝が掘削されたと考えられることから、381溝はこの時期のものである可能性が高いと考える。6溝や381溝と同一の方向軸にのっており、この時期に属するとみられる掘立柱建物4・5・6・8は、6溝の南側に集中する。これらの建物は概して小規模で、住居とは考えにくいものも含まれる。また他の調査区の居住域と比べて遺構の密度が低いことから、小規模な建物が散在していたのではないかと考える。低地部では、基幹水路として機能していたとみられる242溝が次の段階までに埋積し、機能を失う。

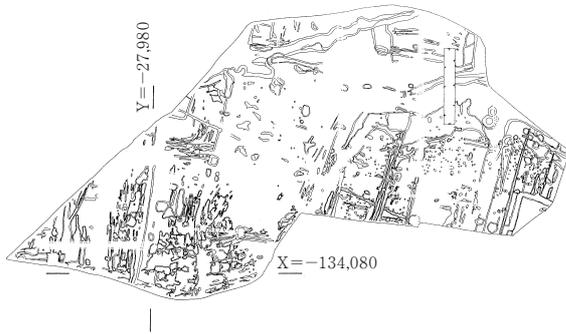
〔13世紀後半〕 この時期になると、溝が南北方向に掘り直されるようだ。うち385溝と246溝は5調査区で検出されている屋敷地の区画溝に連なるものである。その他に出土遺物などからこの時期のものとして判断できたのは9溝だが、これらと方向軸が近似し、おそらく同時期のもものとみられる遺構に建物1・2・3がある。それらは南北溝に挟まれるように位置し、その場を占有する配置をとっている。しかし建て替えの痕跡がないこと、遺構密度や遺物の出土量からみて、継続的なものではなかったようだ。

〔14世紀以降〕 生産域に含まれる遺構から、わずかにこの時期の遺物が出土している。微高地上ではこの時期の遺物を伴う遺構が認められないので、居住域として使われていなかったと考える。微高地上が畑地として転用された可能性もあるが、明確な耕作痕跡が認められないことから、ここは空地として残されていた可能性が高いと考える。

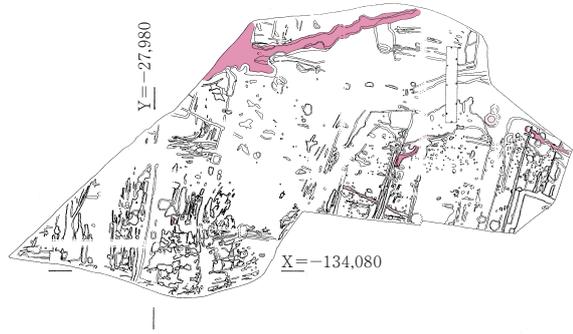
5 調査区 (図198)

〔12世紀〕 12世紀中葉以降の遺物が、調査区南西隅の823落込を中心に出土している。調査区の中央部分でも出土しているが、検出箇所や出土量は希薄である。おそらく住居域は調査区西寄りの部分に展開していたとみられる。12世紀末～13世紀初頭の段階になると、159溝や256溝といった南北溝が設けら

12世紀前半



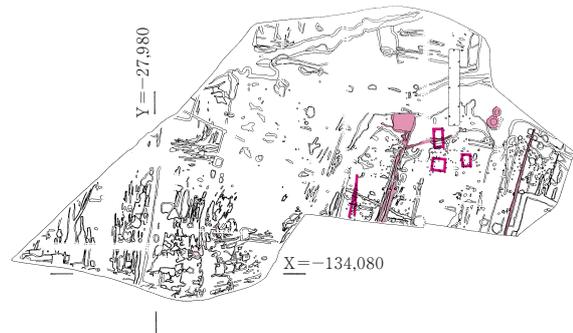
13世紀前半



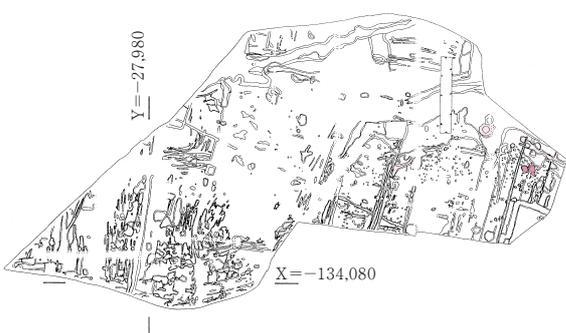
12世紀中葉ないし後半



13世紀後半



12世紀末葉ないし13世紀初頭



14世紀以降



- 当該期の遺物が混入する遺構
- 当該期の遺構（赤線部分も同じ）
- 当該期と推定される遺構

0 (1:2000) 100m

図199 有池遺跡03-1-4調査区 遺構変遷図

れる。このことから区画溝の萌芽が、この時期に生じている可能性がある。

〔13世紀前半〕 居住域が調査区のほぼ全域に及ぶ。調査区東寄りの部分では、大型屋敷地の区画溝が出現する。南側に短い屈曲部をもつ矩形の溝であることから、区画の北辺を限っていたものとみられる。それには陸橋状の掘り残しがみられる。それを軸に反転させると東西幅は25m前後となり、1調査区で検出した大型屋敷地よりやや大きい規模になる。大型屋敷地の北辺だけに区画溝を置き、後の時期に溝を掘り足す状況は1調査区における大型屋敷地でも認められた。

新たな南北溝が数条出現する。その中には前段階に成立したものを引き継いだとみられるものもある。東西溝には13世紀後半の遺構に切られることから、この時期にさかのぼる可能性があるものを認めるだけである。

〔13世紀後半〕 調査区のほぼ全域に居住域が展開し、集住化が顕在化する。区画溝や土坑、ピットには切りあうものが多数あり、少なくとも2時期に細分できる。遺物の組みあわせなどから見ても、当該期を前段階と後段階に分けられるとみられることから、前者をⅠ、後者をⅡとして図200・201に示した。

幅50cm前後の溝によって囲まれた方形区画が確立する。これは1調査区で検出した小型の屋敷地と一連のものともみられる。最大で東西30m、南北35mの区画を呈するが、その内部はさらにいくつかに分けられていたとみられる。65溝の存在に注目すると、少なくとも2分割されていたことがうかがえる。その北側には南北10m、東西20m前後の大きさの横長の区画が隣接する。こちらの内部では掘立柱建物を明示できなかったが、ピットが散在する状況からみて、建物を伴う居住空間だったと考えられる。

建物は大小の別はあってもおおむね相似形である。そして屋敷地の区画に沿うよう、2棟をくの字に配置する傾向がある。建物を抽出できなかった区画でも、おそらく同様の状況が見られたと考える。

大型の区画溝を伴う屋敷地では、この時期に屋敷地の周りを囲うよう、溝を掘り足すことはしていない。西側に隣接する屋敷地の区画溝が、この段階で四周を囲うのとは対照的である。ちなみに1調査区で検出した大型屋敷地はこの時期に、周囲を大規模な溝でコの字に区画する。一方、5調査区の南西隅を占める823落込が、この段階で埋積する。

〔14世紀以降〕 13世紀後半の空間構成をほぼ引き継ぐが、幅50cm前後の溝で4周を囲った小型の屋敷地の位置が南寄りに集約される。それは4調査区の微高地上にみられた居住域が、この時期には継続しないのと軌を一にする現象ととらえられる。

大型の区画溝を伴う屋敷地では北辺の溝の南側に、それと並行する溝が掘り足され、2重になる。これは1調査区で検出した大型屋敷地において、西辺の溝を2重にするのと共通した現象と見られる。また西辺の溝が延長し、区画溝が周りを囲む状態になる。ただ西を限る溝は小型屋敷地の区画溝と同規模である。それらの区画溝はこの段階で埋積しており、1調査区で検出した大型屋敷地と比べると継続期間が短かったとみられる。小型屋敷地では、13世紀後半から引き継がれた一辺約30mの外周の内部が明確に四分割される。そのため他の区画より面積が小さい北西の区画では、地盤の落ち際を整地し、平坦面を広げたとみられる。建物は、一区画内に複数配置されていたものが、1棟の大型建物に集約される。同様の現象は2調査区でも認められた。また823落込が埋積してから調査区西寄りのスペースでは、その中央に主殿造りを思わせるくの字型の大型建物出現し、注目される。

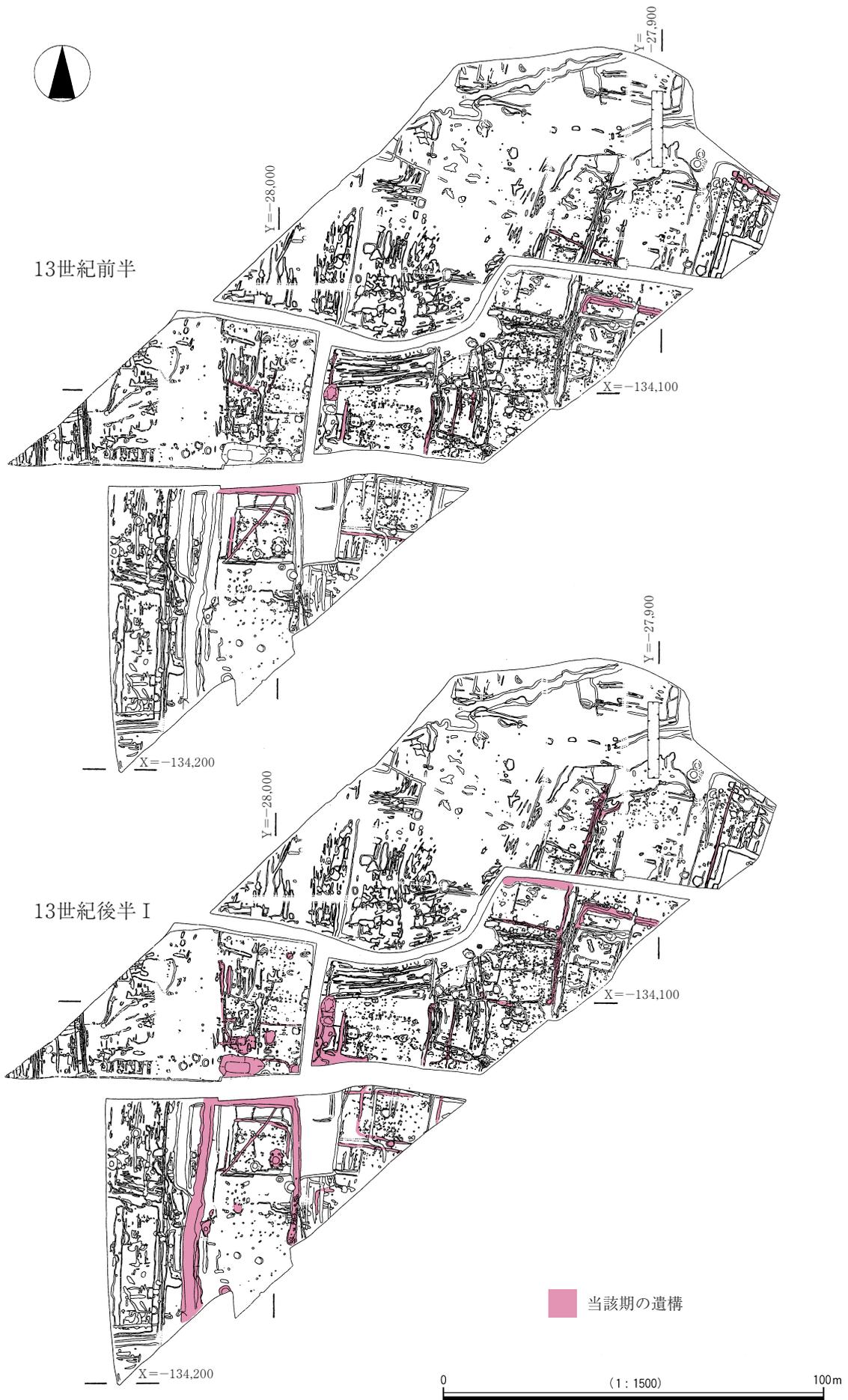


図200 有池遺跡03-1 屋敷地区画溝配置変遷図1



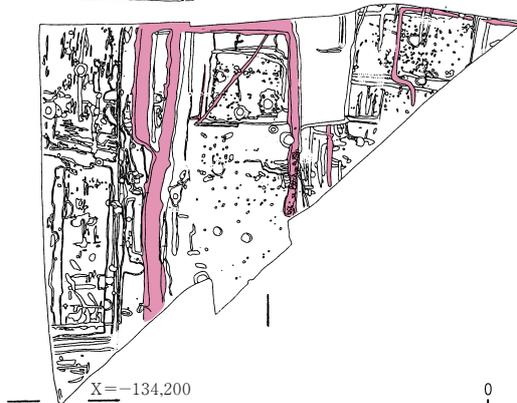
13世紀後半Ⅱ



14世紀以降



当該期の遺構



0 (1:1500) 100m

図201 有池遺跡03-1 屋敷地区画溝配置変遷図 2

第4節 遺物

1. 土器・土製品

(1) 1調査区

1層 (図202-1~9・図218-215) 1~6は土師器皿。1、2、6は口径7.5~8cm程度の小皿。1、2は白色系であるのに対し、6は褐色系である。6は底部に接合痕がある。4、5は口径11~12cm程度のもので、口縁部は上方に強く屈曲する。3は器高が高く、口縁部がゆるやかに広がる器形で、端部はヨコナデにより外反する。7は楠葉型瓦器椀で、IV-2期(14世紀前半)に位置付けられるものである。8は東播系須恵器鉢である。第Ⅲ期第1段階(13世紀前半~後半)の所産である。9は瓦質羽釜である。口縁端部はわずかに内傾し、口縁部外面にはヨコナデによって段が付く。内面は板ナデ調整。215は土師器皿である。口径7.9cmを測る。口縁部は上方に屈曲させる。13世紀後半の所産と考えられる。

以上、1層出土遺物は概ね13世紀~14世紀の遺物を包含する。

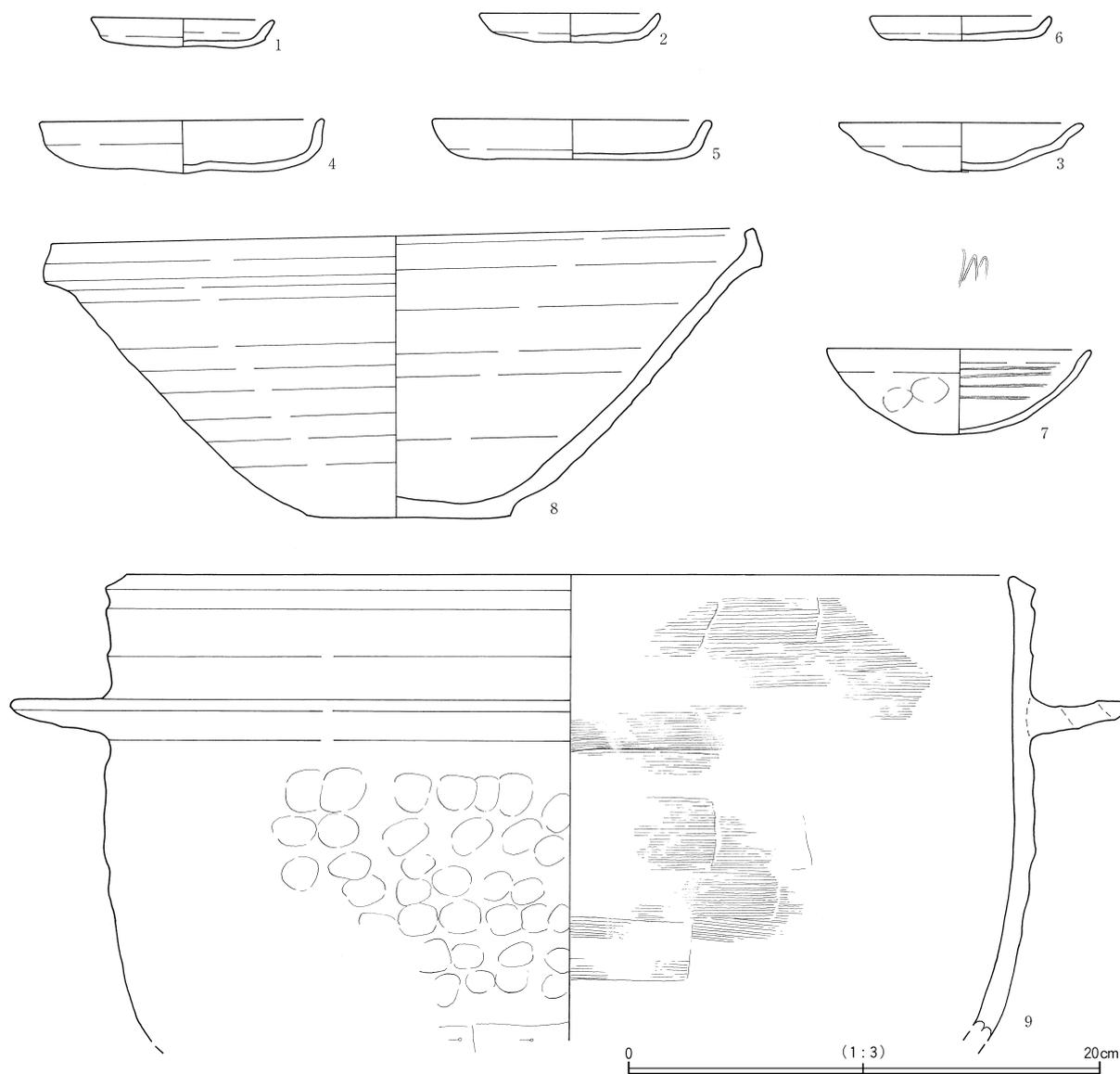


図202 有池遺跡03-1-1調査区 包含層出土遺物

118ピット [中心建物③] (図203-10, 11) 10, 11は土師器皿。口縁部は上方へ屈曲させる。13世紀後半に位置付けられるものであろう。

269ピット [建物4] (図203-12) 12は土師器皿で、口縁部はやや外反ぎみに立ち上がる。外面にはヨコナデにより稜線が入る。13世紀後半の所産であらう。

126ピット [建物7] (図203-13~35) 13~23は土師器皿で、法量から口径7.5~8.5cm程度の一群と口径11.5~12.5cm程度の一群に二分できる。前者は、器高が低く口縁部を短く上方につまみあげる。色調は褐色系のもの(14, 16)と白色系のもの(13, 15, 17)の二種がある。後者は、口縁部にヨコナデを施し上方に屈曲させ、底部はややまるみをおびる。淡橙色を呈し、胎土には雲母、石英、長石粒などを微量含む。21, 28の底部には、埋納時に施されたとみられる穿孔を有する。13世紀前半の所産と考えられる。

267井戸 (図204-36) 36は土師器皿。乳白色を呈し、口縁部はゆるやかに外反する。13世紀後半の所産であらう。

5井戸 (図204-37~44) 37, 38は土師器皿である。37は口縁部が大きく外反する。39は白磁碗(V-4 a類)で、12世紀中葉~後半に位置付けられるものである。40, 43, 44は瓦質羽釜である。43は鐔が上位に付き、やや下膨れの胴部をもつ。44は口縁部外面に二条の凹線を施す。41は東播系須恵器甕。口縁部は強く外反し、端部は断面方形を呈する。体部外面は平行タタキによって調整する。12世紀前半の所産である。42は土師質羽釜。口縁部は大きく外折して、端部は内側に折り返すものである(菅原分類大和B型)。5井戸出土遺物は若干12世紀代の遺物が混じるが、概ね14世紀前半の所産である。

207井戸 (図205-45~49) 45は楠葉型瓦器碗。Ⅲ-2~Ⅲ-3期(13世紀前半~後半)に位置付けられるものである。46は土師器皿。口縁部は大きく外反する。底部には接合痕が明瞭に残る。47は瓦質羽

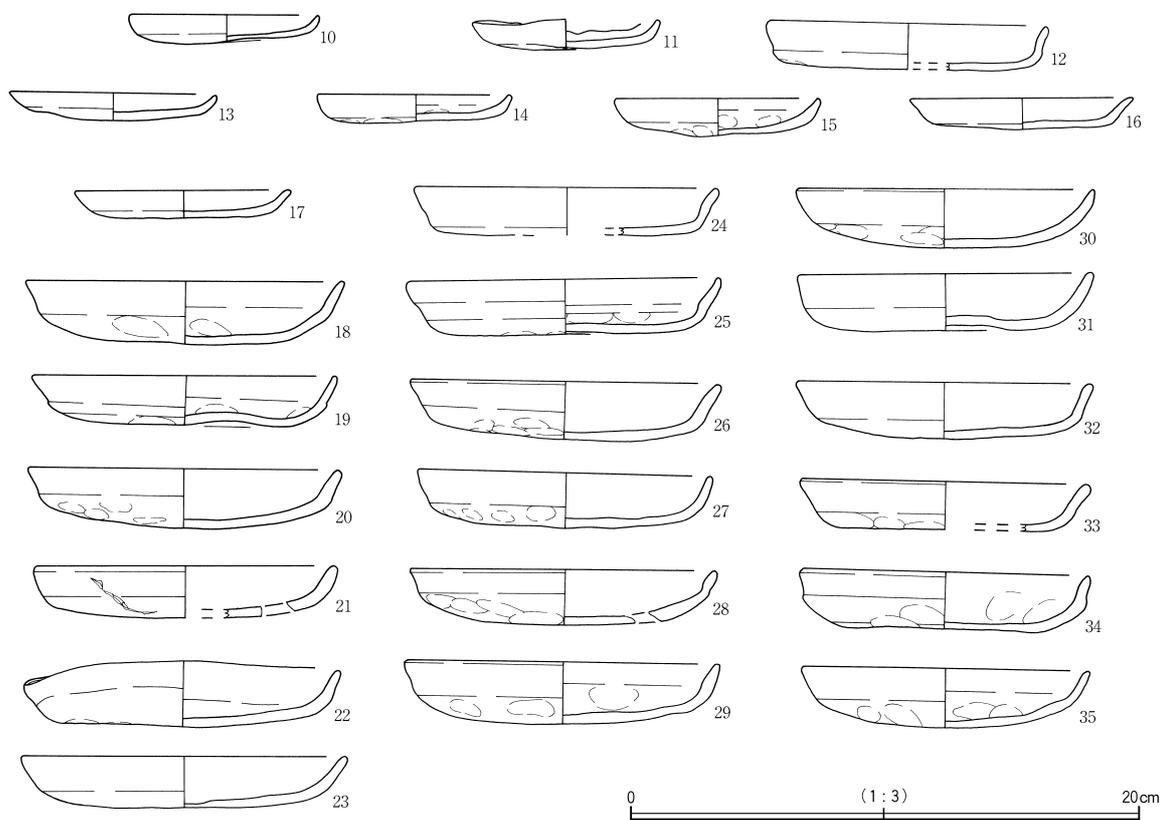


図203 有池遺跡03-1-1 調査区 ピット出土遺物

釜と考えられるが、焼成は土師質になっている。鋳は短く、口縁部は内傾する。鋳下には煤が付着している。48は瓦質土器火鉢で、口縁部は断面方形を呈する。体部内外面にはミガキを施すが密ではない。大和産か。49は甕で、口縁端部の形状から常滑産と考えられるが、口径が小さく頸部が直線ぎみに立ち上がる。以上、207井戸出土遺物は、13世紀～14世紀前半に位置付けられる。

194井戸（図206-50～59） 50、51は土師器皿である。口縁部は外反ぎみに立ち上がる。52、53は楠葉型瓦器椀。52はフラットに近い底面と、斜め上方に立ち上がる口縁部をもつが、53は内湾する口縁をもつ。口径がやや小さい。Ⅲ-3～Ⅳ-2期（13世紀後半～14世紀前半）に属するものと考えられる。54は龍泉窯系青磁椀。外面には鎬蓮弁を有する。13世紀前半の所産である。55、56は瓦質三足釜。57は瓦質羽釜である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は内側へつまみだされる。58は瓦質鍋である。口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部は内側に拡張させる。59は東播系須恵器甕。口縁部は大きく外反し、

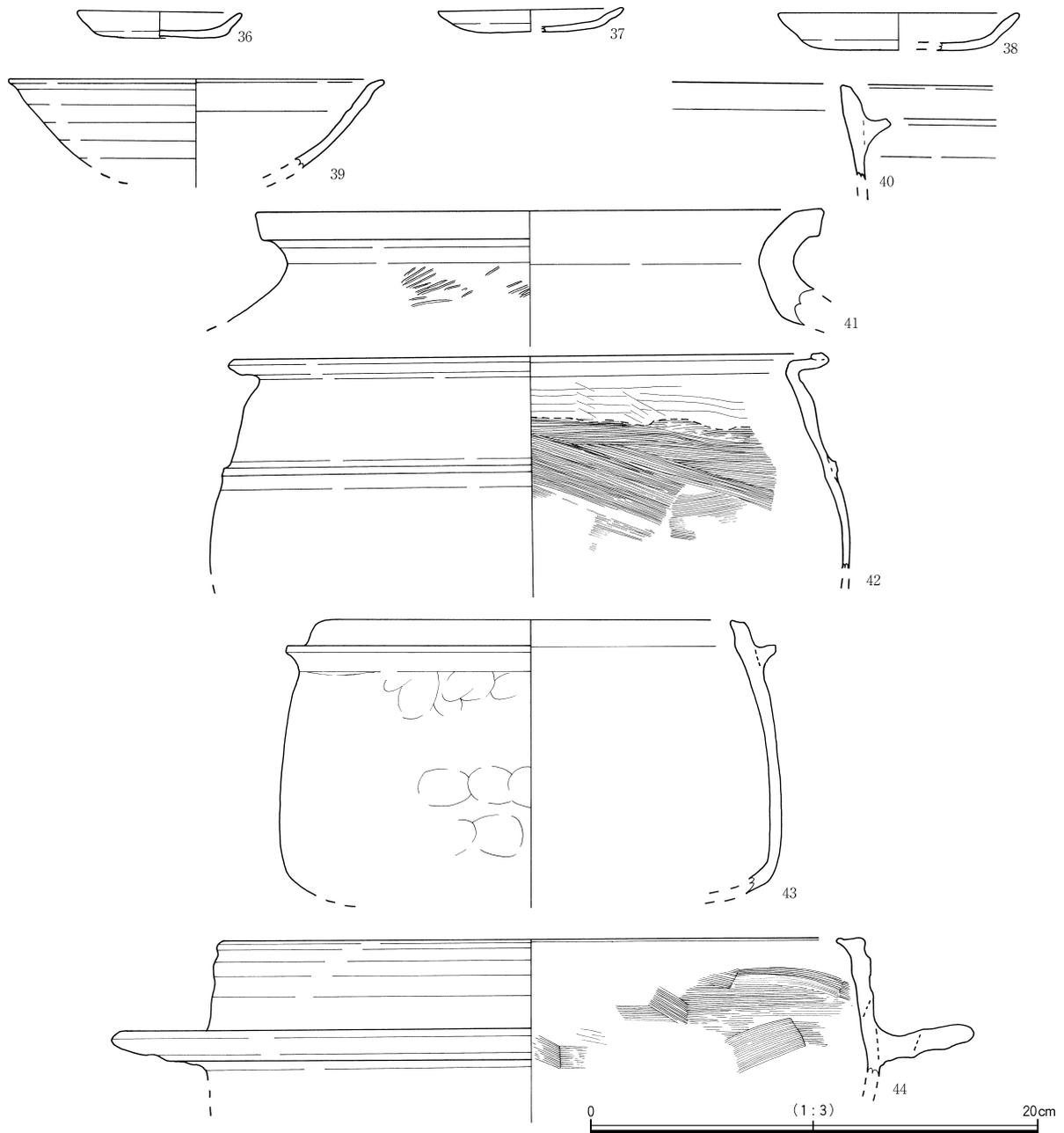


図204 有池遺跡03-1-1 調査区 井戸出土遺物

端部はヨコナデを施し肥厚させる。以上、194井戸出土遺物は、おおむね13世紀後半以降に位置付けられる。

410井戸 (図206-60、61) 60は土師器皿。復元口径は14.8cmを測り、口縁部はゆるやかに外反する。61は瓦器椀の底部。体部内面のミガキは密で、見込みには同心円状暗文を描く。以上410井戸出土遺物は12世紀後半の所産と考えられる。

56土坑 (図207-62、63) 62、63は土師器皿。62は上方に短く立ち上がる口縁部をもつ。63は口縁部が外方に大きく屈曲する。56土坑出土遺物は、図化可能な遺物以外に12世紀末～13世紀初頭の瓦器椀などを含み、やや時期幅がある。

42ピット (図207-64) 64は内外面に段をもって大きく外反する土師器皿である。14世紀前半の所産である。

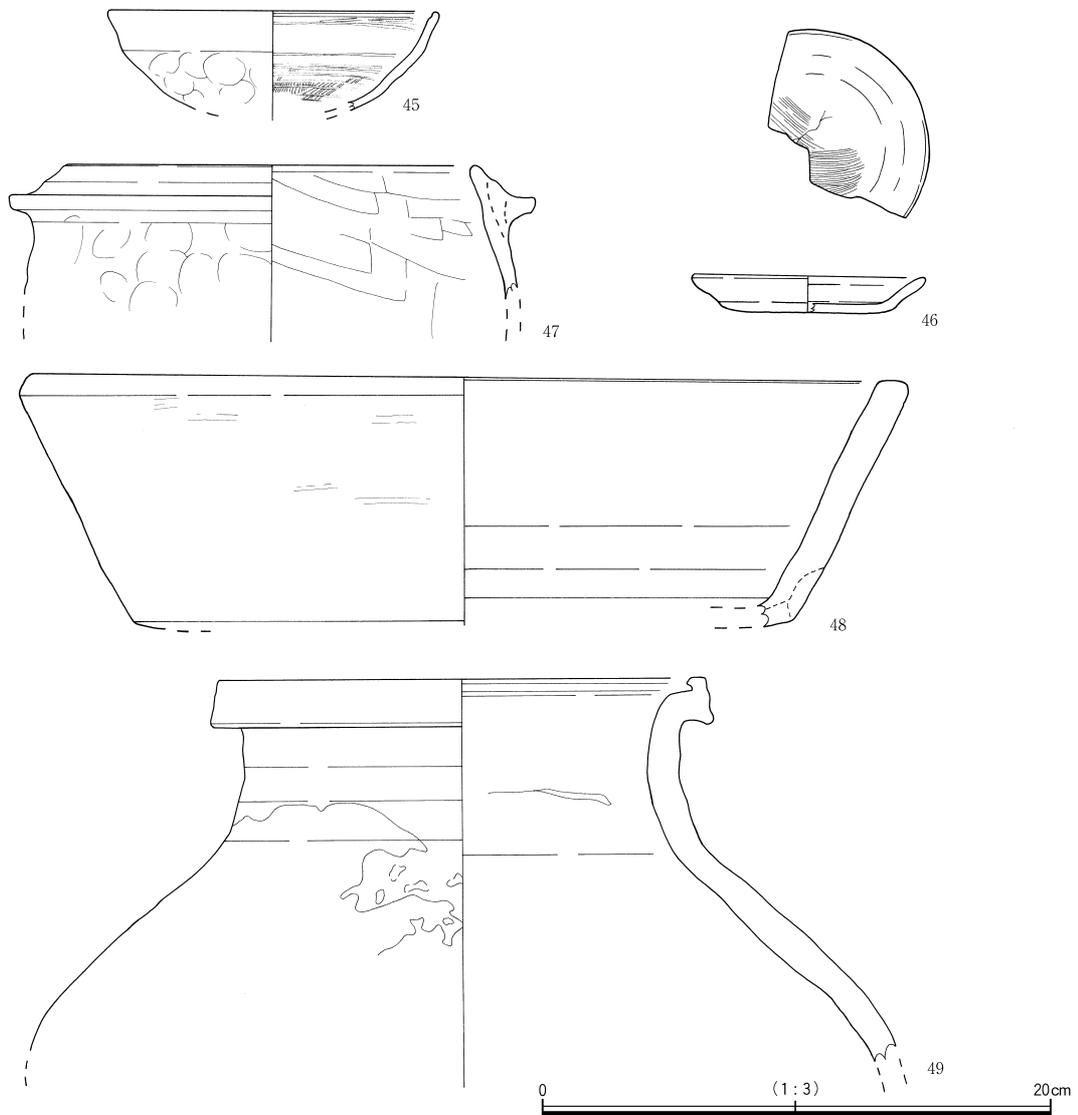


図205 有池遺跡03-1-1 調査区 井戸出土遺物

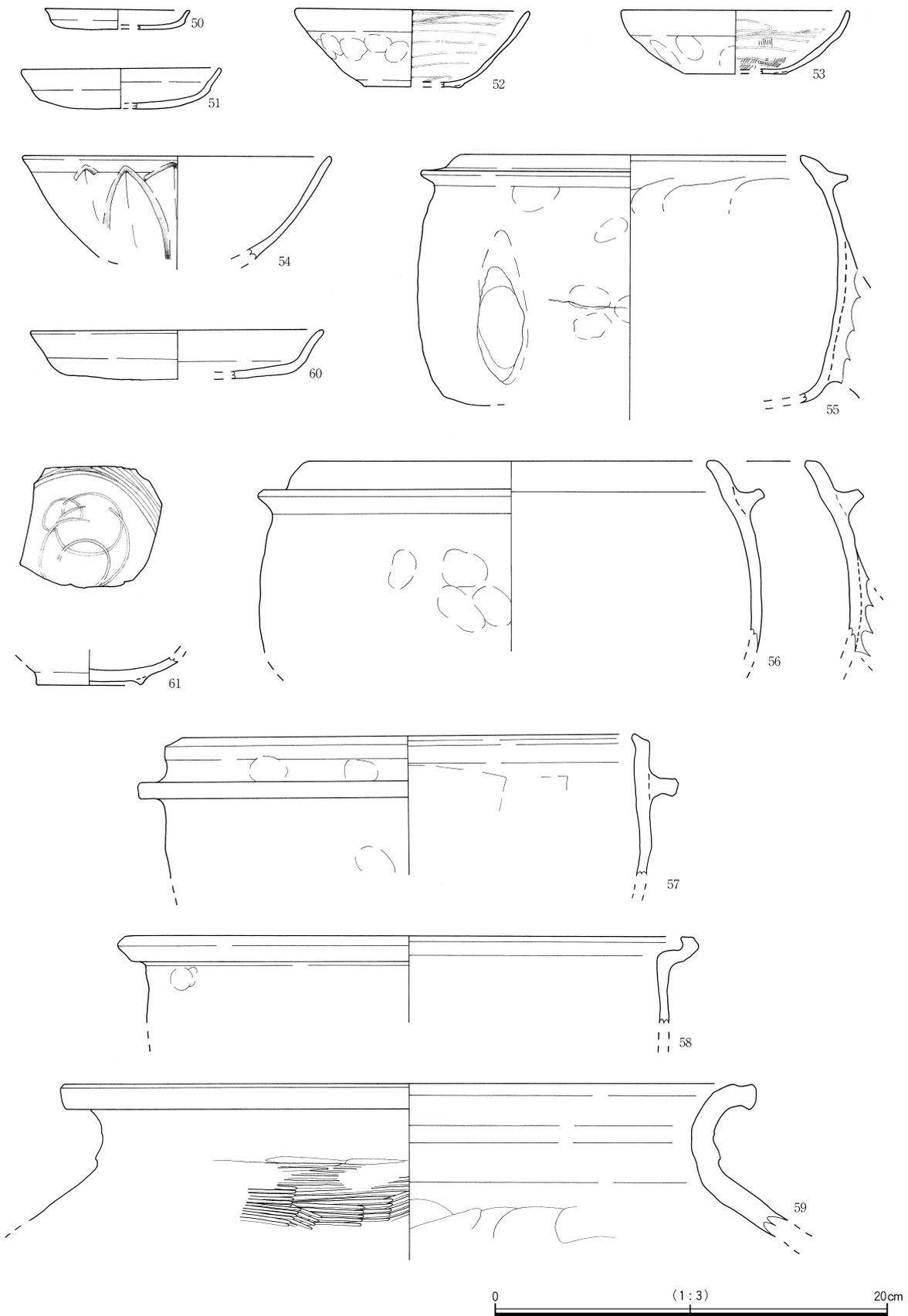


図206 有池遺跡03-1-1調査区 井戸出土遺物

10焼土集積遺構 (図207-65、66) 65は土師器皿。口縁部はゆるやかに外反する。66は楠葉型瓦器椀である。口縁部は外方に開く。IV-2期 (14世紀前半) の所産と考えられる。

105石敷土坑 (図207-67、68) 67は楠葉型瓦器椀である。III-3期 (13世紀後半) の所産である。68は東播系須恵器鉢。第III期第1段階 (13世紀前半~後半) に位置付けられる。

434ピット (図207-69) 69は土師器皿。口径は8.8cmを測る。器壁が厚く、底部はまるみをおびている。12世紀の所産である。

411土坑 (図207-70~80) 70、73は土師器皿。70は淡橙色を呈し、底部はまるく、口縁部はゆるやかに立ち上がる。73は、口縁部を斜め方向に屈曲させるものである。71、72、74は瓦器皿である。71、72

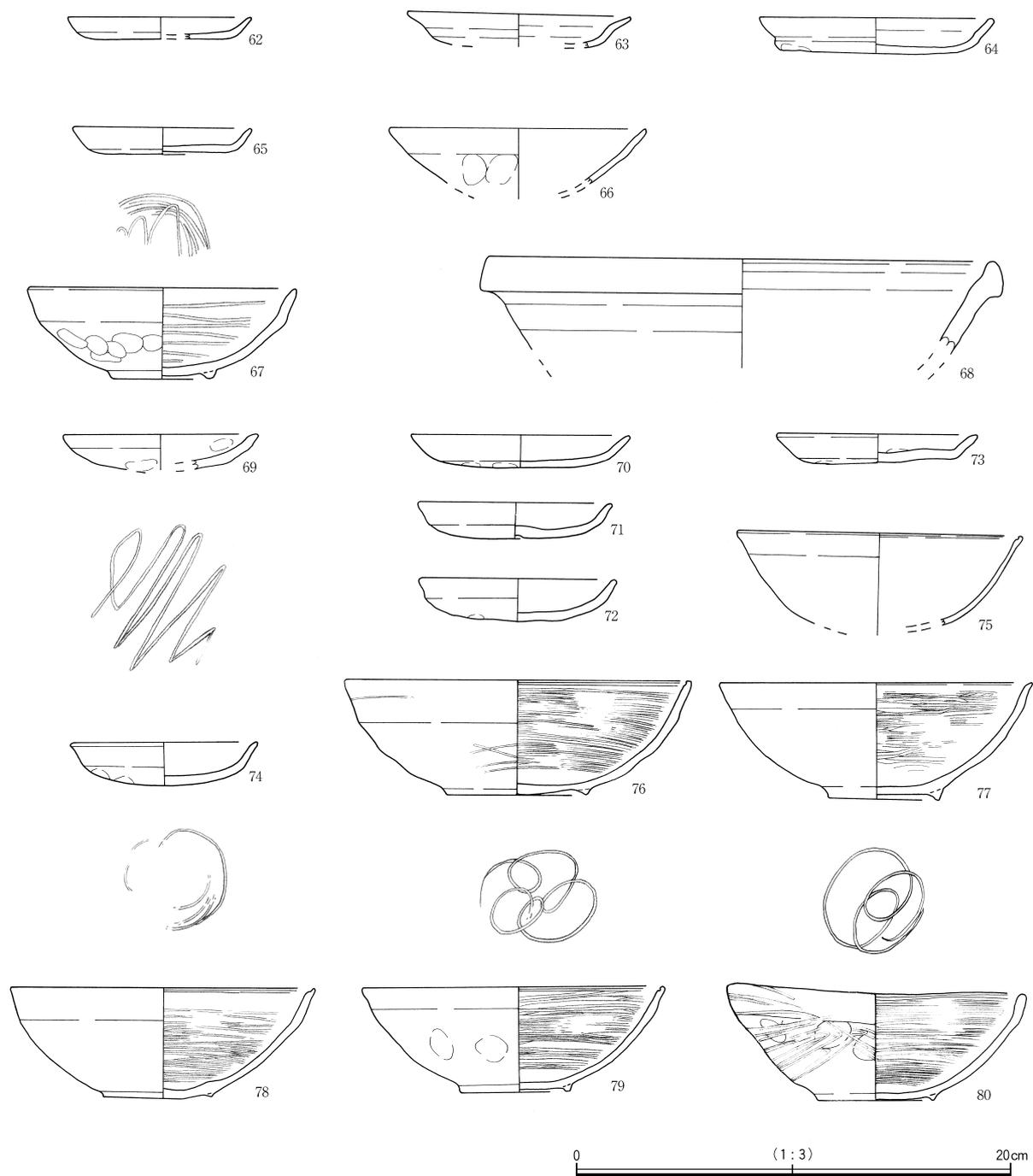


図207 有池遺跡03-1-1調査区 土坑・ピット等出土遺物

は器壁が磨耗しており、暗文は不明瞭である。74は内面に五往復程度のジグザグ状暗文を施す。76は楠葉型瓦器碗。内面のミガキは密で、見込みの暗文は連結輪状暗文かと思われる。外面は磨耗しているが分割ヘラミガキが認められる。Ⅱ-1期（12世紀前半）に位置付けられるものであろう。75、77~80は大和型瓦器碗である。80は外面に分割ヘラミガキが認められるが、その他は不明瞭である。Ⅱ-B~Ⅲ-A段階（12世紀中葉~後半）に属するものと考えられる。以上、411土坑出土遺物は、12世紀中葉~後葉の所産である。

21ピット（図208-81） 81は土師器皿である。13世紀後半の所産と考えられる。

75ピット（図208-82） 82は土師器皿。口縁部は外方に開く。14世紀前半の所産であろう。

76ピット（図208-83） 83は土師器皿で、上方に立ち上がる口縁部をもつ。13世紀後半の所産と考えられる。

379ピット（図208-84） 84は土師器皿で、13世紀後半に位置付けられる。

195土坑（図208-85~89） 85~88は土師器皿。85、86は口縁部が外方へ開く。87、88は口縁部が内湾する形態をなし、端部は上方に立ち上がる。12世紀後半の所産と考えられる。89は楠葉型瓦器碗で、口縁部には沈線が残る。Ⅲ-3期（13世紀後半）に位置付けられるものと考えられる。

47ピット（図208-90） 90は土師器皿で、口縁端部を短く上方へ屈曲させるものである。13世紀前半の所産であろう。

141ピット（図208-91） 91は土師器皿である。器高が高く、底部は丸みをおびる。12世紀の所産と考えられる。

443土坑（図208-92） 92は土師器皿である。口縁部には二段ナデを施し、端部は上方へたちあげる。12世紀前半の所産であろう。

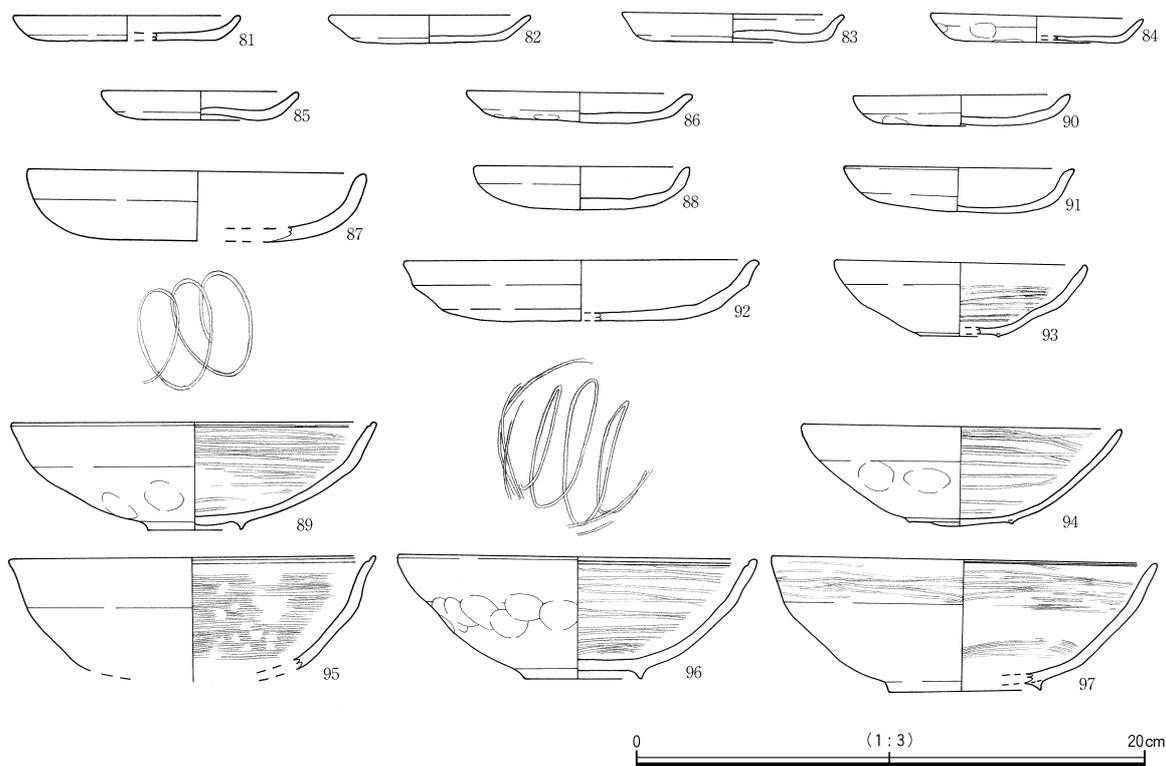


図208 有池遺跡03-1-1調査区 土坑・ピット出土遺物

80ピット (図208-93, 94) 93, 94は楠葉型瓦器椀。93は口径が小さく、口縁部はヨコナデによって内湾させておりⅣ-1期に、94はⅢ-3期 (13世紀後半) に位置付けられるものである。

27ピット (図208-95) 95は楠葉型瓦器椀と考えられる。口縁部には強くヨコナデを施し、口縁端部の沈線は比較的上位から施される。Ⅲ-1期 (12世紀末~13世紀初頭) の所産であろう。

59ピット (図208-96) 96は楠葉型瓦器椀である。外面のヘラミガキは省略され、内面には細かいヘラミガキを粗く施す。Ⅲ-1期 (12世紀末~13世紀初頭) に位置付けられるものと考えられる。

293ピット (図208-97) 97は楠葉型瓦器椀と考えられる。内外面とも器壁が磨耗しておりヘラミガキは不明瞭である。端部には非常に浅い沈線を入れる。Ⅱ-3期 (12世紀後半) に位置付けられるものと考えられる。

163・383ピット [中心建物③・④] (図209-98) 98は土師器皿である。口縁部には強くヨコナデを施す。13世紀後半の所産である。

102ピット (図209-99) 99は土師器皿である。口縁部は強く屈曲させ、斜め上方へ立ち上げる。13世紀後半の所産であろう。

171ピット (図209-100) 100は土師器皿である。胎土には長石粒を含む。13世紀後半の所産と考えられる。

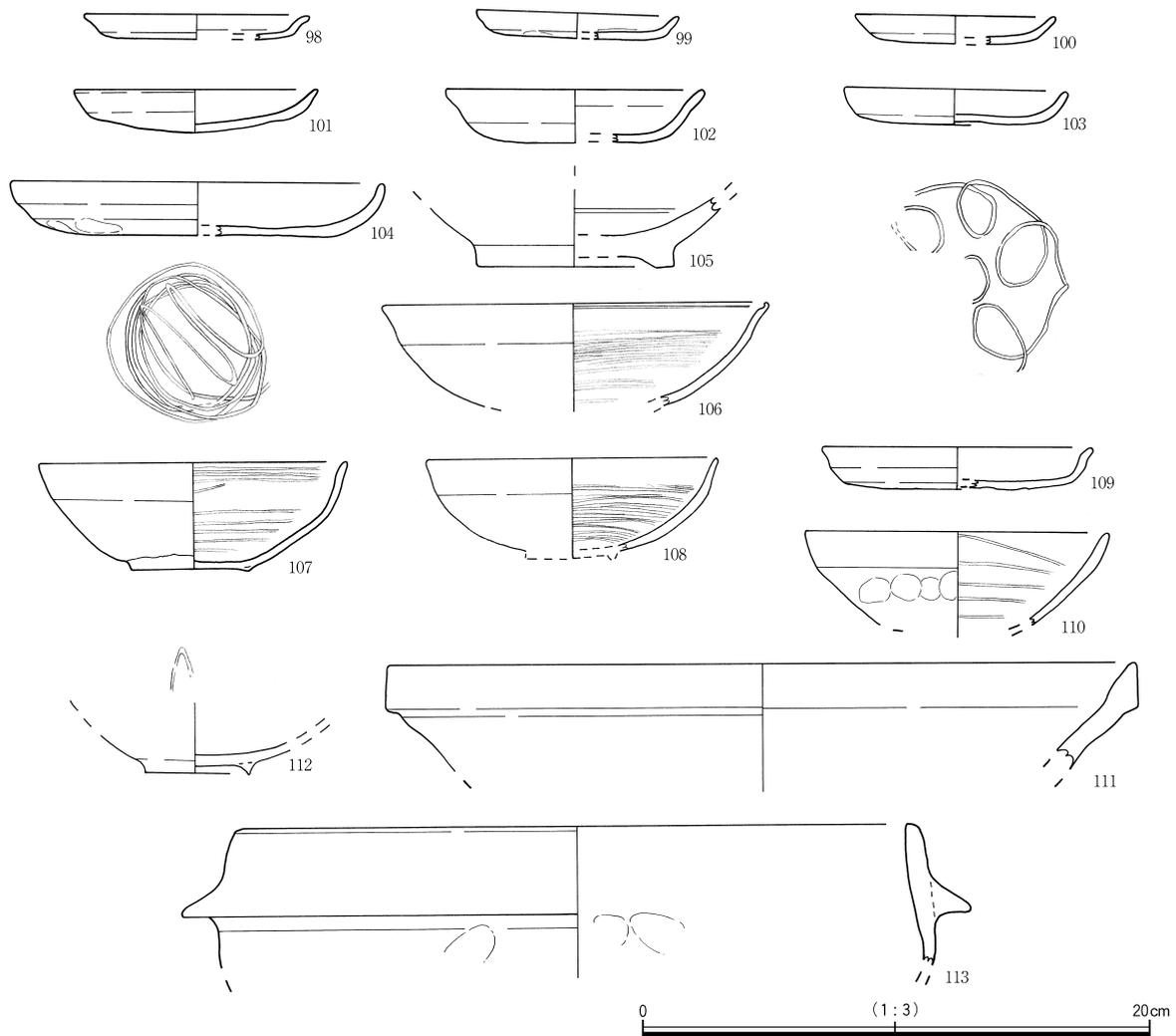


図209 有池遺跡03-1-1調査区 土坑・ピット・落込出土遺物

431土坑（図209-101） 101は土師器皿である。復元口径9.4cm、器高1.7cmを測る。底部から口縁部にいたる屈曲はまるみをおびている。12世紀の所産であろう。

435土坑（図209-102） 102は土師器皿で、大きく外反する口縁部をもつ。14世紀前半の所産である。

446土坑（図209-103） 103は土師器皿で、復元口径8.7cmを測る。12世紀の所産と考えられる。

92ピット（図209-104） 104は土師器皿である。口縁部は二段ナデを意識し、端部は上方へ立ち上げる。器壁が比較的薄く、焼成もややあまい。12世紀前半の所産であろう。

422土坑（図209-105、106） 105は口縁部が玉縁になる白磁椀（Ⅳ類）の底部と考えられる。見込みには段が付く。106は大和型瓦器椀。外面は磨耗しており、ヘラミガキは確認できない。Ⅲ-A段階（12世紀後半～13世紀初頭）に位置付けられるものと考えられる。

111土坑（図209-107、108） 107、108は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀後半）の所産と考えられる。

415土坑（図209-109） 109は瓦器皿である。口縁部は直立ぎみに立ち上がり、端部は外反する。見込みには連結輪状暗文を施す。

266土坑（図209-110） 110は楠葉型瓦器椀である。Ⅳ-2期（14世紀前半）に位置付けられる。

120落込（図209-111） 111は東播系須恵器鉢。第Ⅲ期第1段階（13世紀前半～後半）の所産である。

413土坑（図209-112、113） 112は楠葉型瓦器椀の底部である。13世紀前半の所産であろう。113は土師質羽釜で、断面三角形の短い鰐を有する。

407溝（図210-114～122） 114～118は土師器皿で、口径7cm程度のものと口径9cm程度のものに二分できる。いずれも口縁部はヨコナデにより大きく外反する。119は楠葉型瓦器椀。底部からゆるやかに広がる形状をなす。Ⅳ-2期の所産である。120は龍泉窯系青磁杯。13世紀中葉～14世紀初頭の標式磁器とされる見込みに双魚文を貼り付けるタイプのもの（Ⅲ-4b類）と考えられる。底部は畳付を除いて全面施釉を施している。121は白磁椀で、高台は低く無釉で、斜めに削りこんで作り出している（Ⅱ

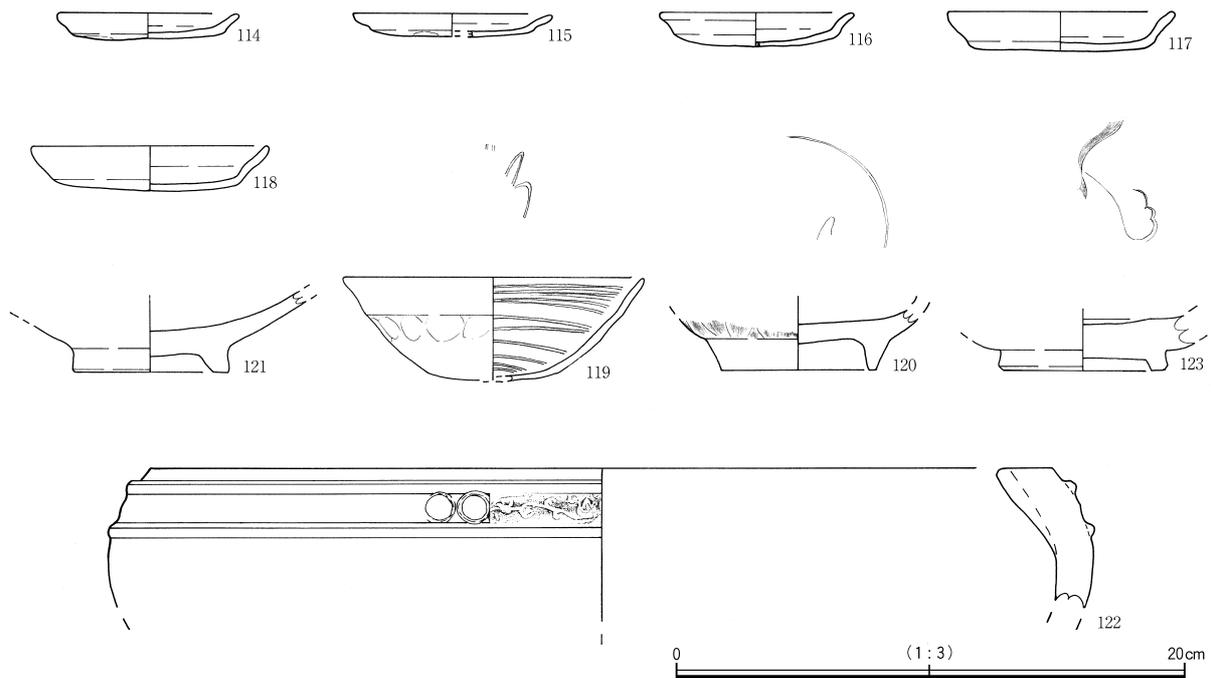


図210 有池遺跡03-1-1調査区 溝出土遺物

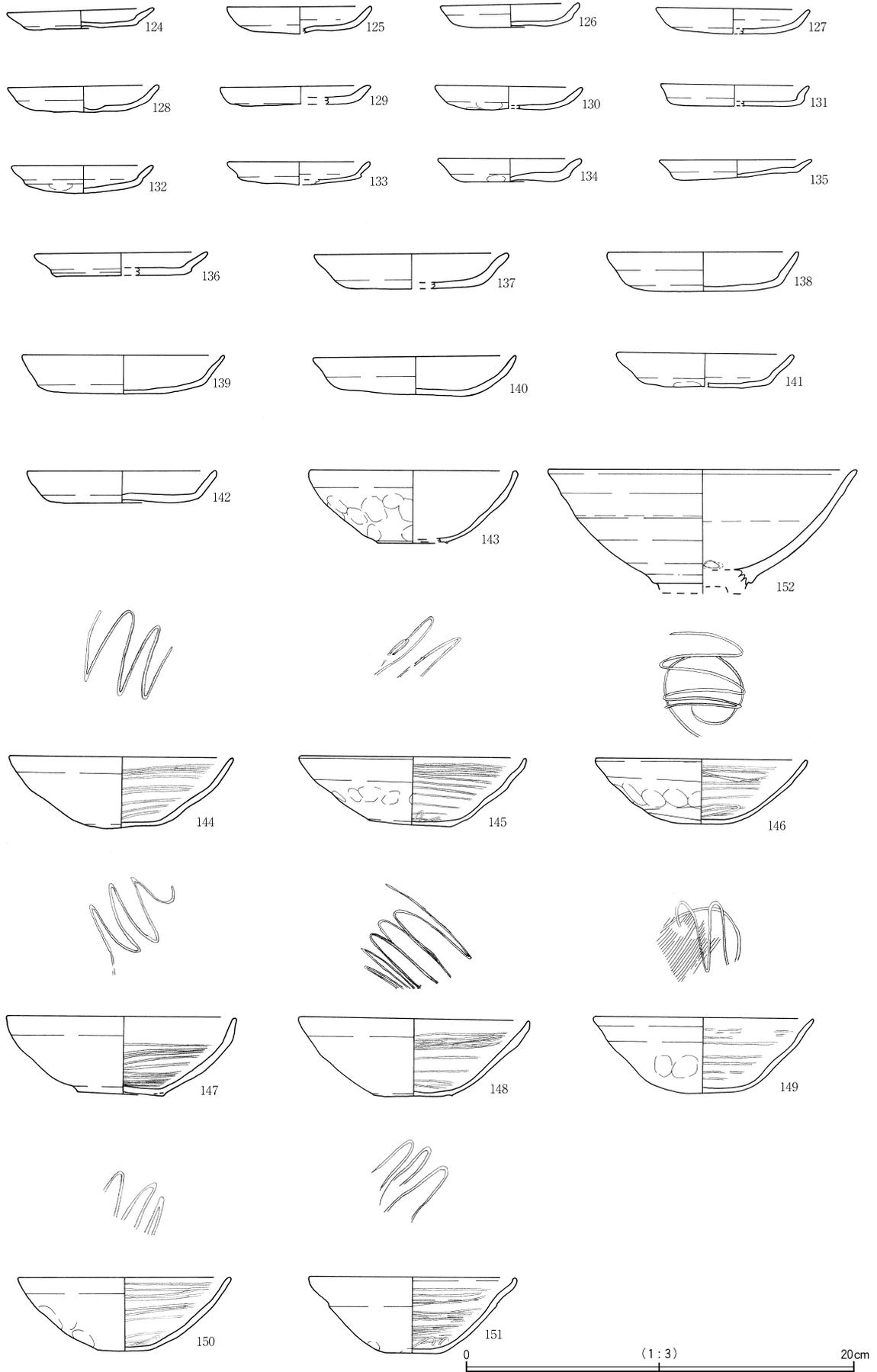


图211 有池遺跡03-1-1 調査区 溝出土遺物

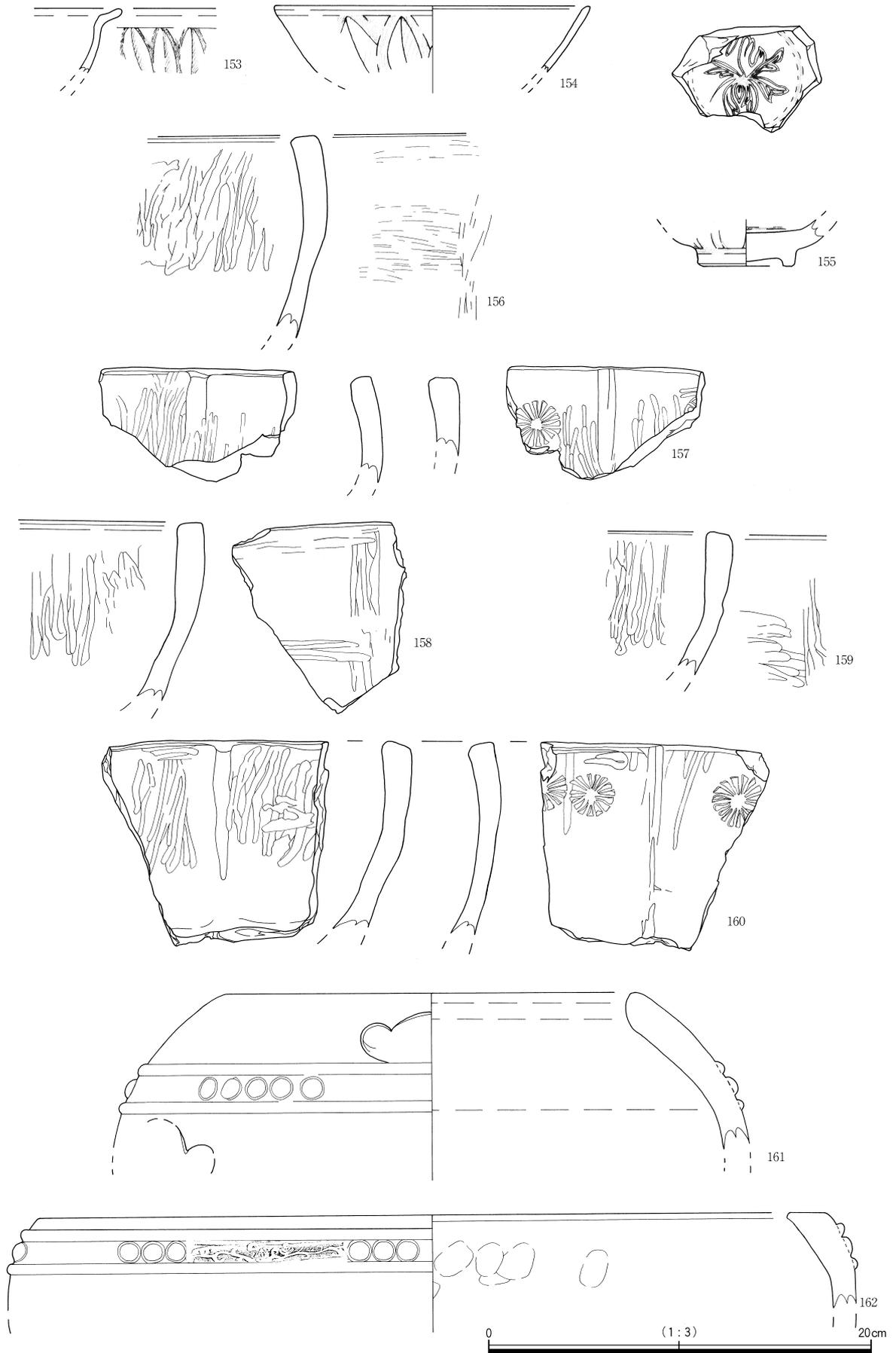


图212 有池遺跡03-1-1 調査区 溝出土遺物

類)。11世紀後半～12世紀の所産である。122は瓦質土器火鉢。体部外面には円形浮文と蓮華唐草文を二条の突帯間に施している。蓮華唐草文はスタンプかヘラ描きかの判別が難しい。

以上、407溝出土遺物は、14世紀前半を主体とするものと考えられる。

4 溝 (図210-123) 123は龍泉窯系青磁碗 (I類)の底部と考えられる。高台内および畳付は無釉、内面には草花文を陰刻する。12世紀中葉～後半の所産である。

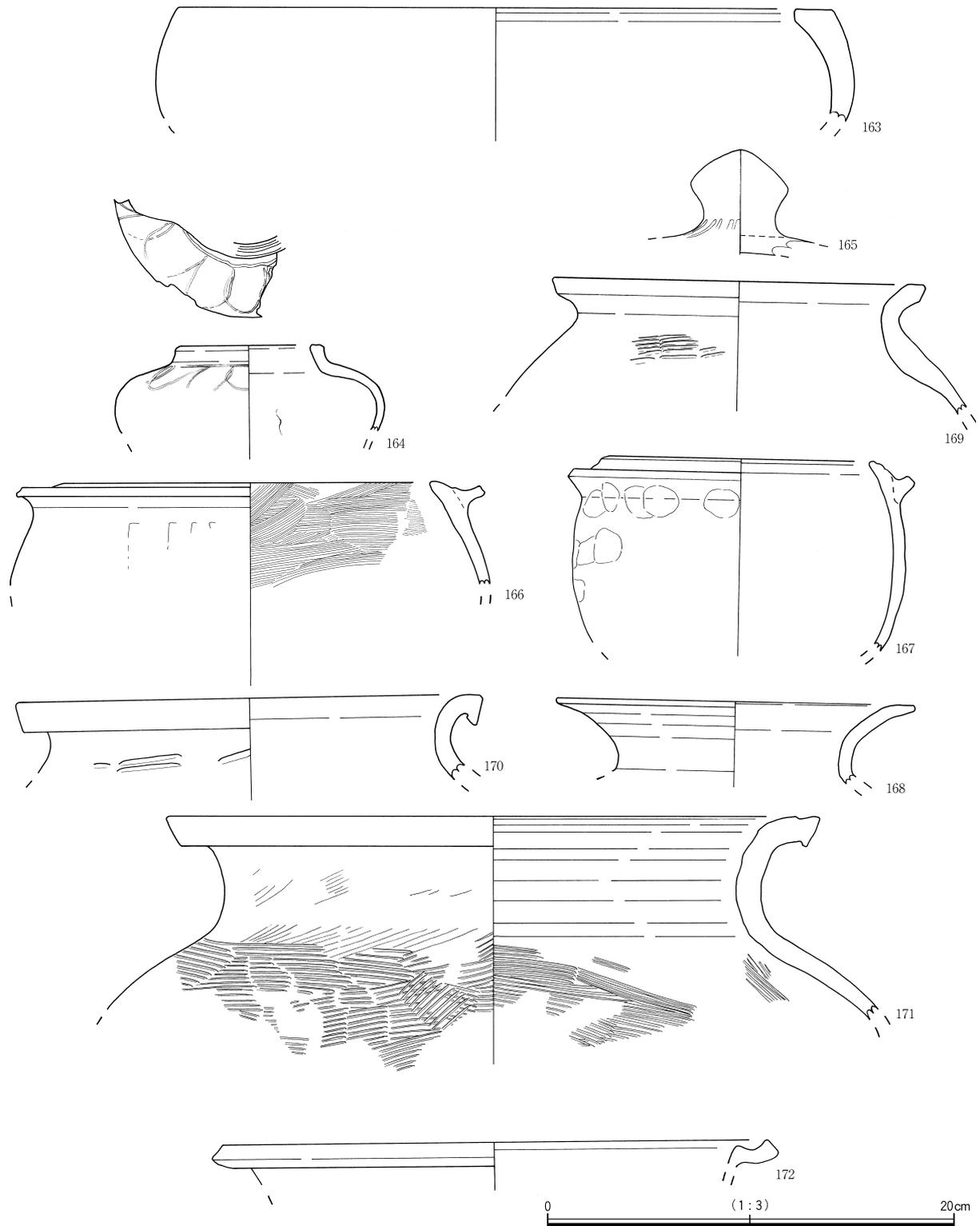


図213 有池遺跡03-1-1調査区 溝出土遺物

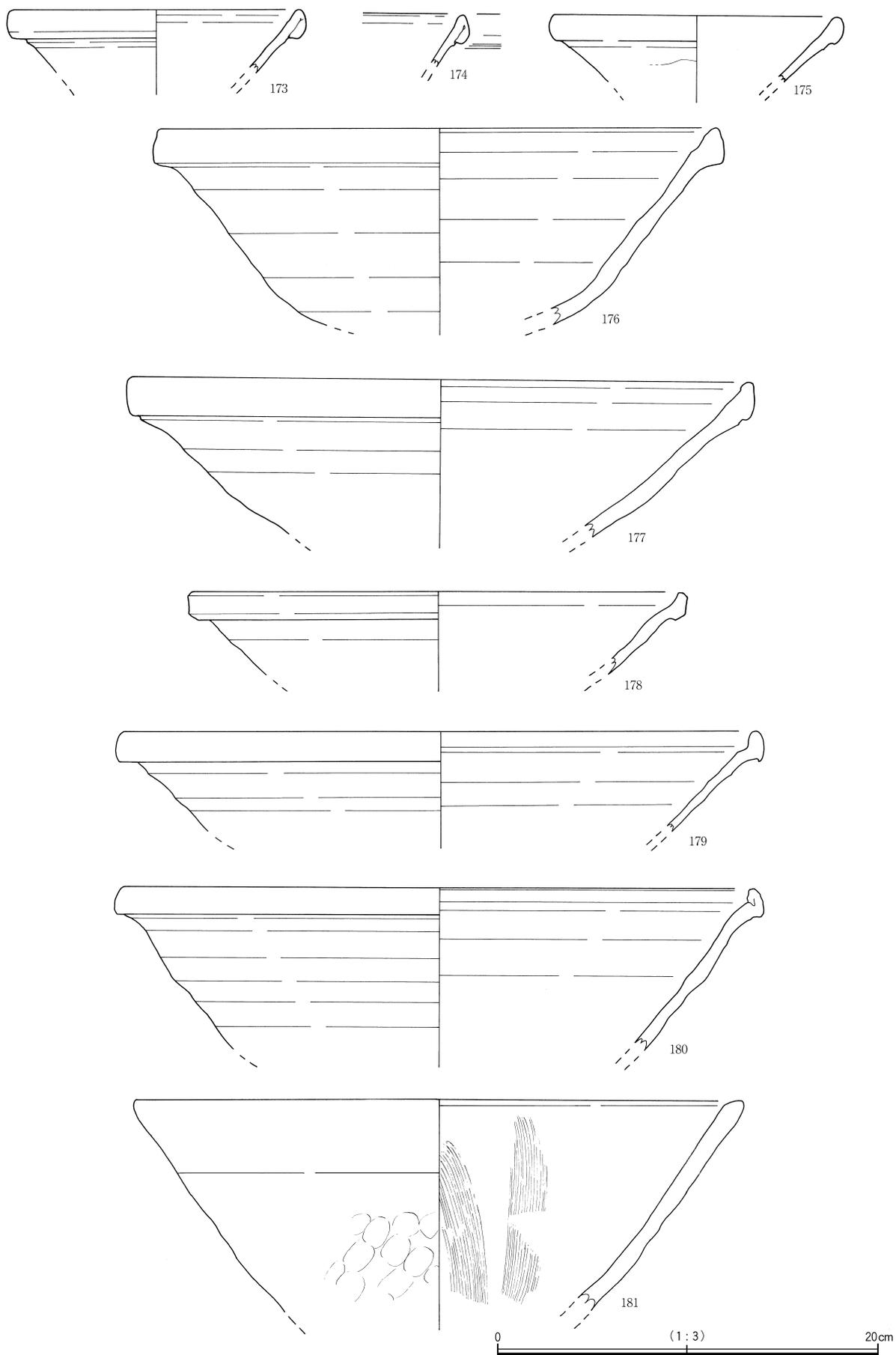


图214 有池遺跡03-1-1 調査区 溝出土遺物

7 溝 (図211~215-124~183) 124~142は土師器皿。口径9~10.5cm程度のものと口径7~7.5cm程度のものに二分できる。口縁部に強くヨコナデを施すことによって外面に段がつき、口縁部が大きく外反するものが多く、概ね14世紀前半に位置付けられるものと考えられる。143~151は楠葉型瓦器椀。Ⅳ-1~Ⅳ-2期に位置付けられる。146は底部を貼り付けるのではなく、高台を意識して円形にナデている。149には内面にハケメが残る。152は古瀬戸平椀。底部から外方に開く口縁部をもち、外面は上三分の一程度まで施釉する。内面には目跡を有する。後Ⅱ期(14世紀末~15世紀初頭)に位置付けられるものと考えられる。153は龍泉窯系青磁杯。口縁部は外折し、外面には鎬蓮弁文を有する(Ⅲ-4類)。13世紀中葉~14世紀前後の所産である。154は龍泉窯系青磁椀で、外面に鎬蓮弁文を刻むものである(Ⅱ-B類)。155は龍泉窯系青磁椀の底部。見込みには花卉の印文を有する(Ⅱ-C類)。13世紀中葉~14世紀初頭の所産である。156~160は瓦質土器輪花形火鉢である。内外面ともミガキは密で、外面には菊花文のスタンプが施される。161は瓦質土器風炉である。口縁部は内傾し、外面には円形浮文を二状の突帯間に貼りつけ、2ヶ所以上の透しを有する。162は122と同タイプの瓦質火鉢である。163も瓦質土器火鉢で、口縁部が内湾するものである。外面および口縁部上端には丁寧にミガキ調整を施す。164は瓦器

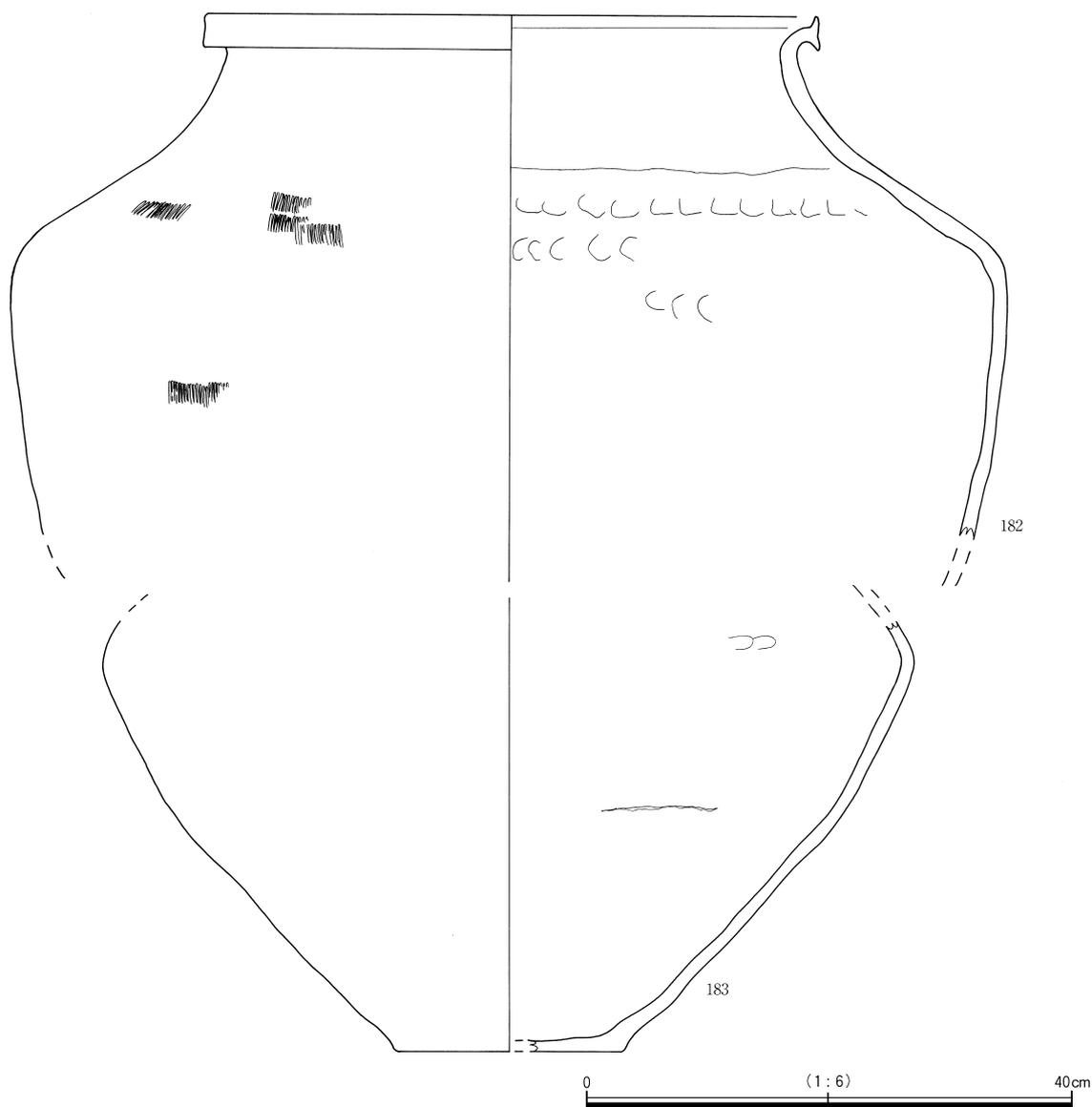


図215 有池遺跡03-1-1調査区 溝出土遺物

の壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部はやや肥厚する。肩部には蓮華文状の暗文が施される。165は瓦質土器蓋のつまみである。宝珠形を呈し、つまみの接合部にはヘラで縦線を入れて加飾している。166、167は瓦質羽釜。166は口縁部が内傾し、鐔は上位に貼りつけられる。三足が付くものか。167は同じく鐔が上位に付くが、口縁部外面には段を有し、やや土師質焼成になる。168は古瀬戸壺の口縁部と考えられる。大きく外反し、端部にはヨコナデを施す。内外面に鉄釉を掛けている。169～171は東播系須恵器の甕であるが、焼成が悪く軟質焼成になっている。169は土師質で、口縁部は外反し、端部は断面四角形になる。170は口縁部が下方に垂下し、上端部には面を有する。頸部外面にもタタキメが残る。171は口縁部が外方へ長くのび、上端はナデにより凹む。体部内面はハケ調整。172は瓦質鍋の口縁部である。端部は三角形になり、受口の屈折部分は上方へ張り出している。14世紀前半の所産である。173～175は白磁椀（Ⅳ類）で、口縁部は玉縁状になる。176～180は東播系須恵器鉢である。176～178は端部が断面三角形を呈し、179、180は端部に強くナデを施し、上下に拡張したようになる。前者は第Ⅲ期第2段階（14世紀前半）、後者は第Ⅲ期第3段階（14世紀後半）の所産と考えられる。181は大和産の瓦質土器播鉢である。口縁端部には内傾する面をもつ。佐藤編年B期（14世紀末～15世紀前半）。182、183は常滑焼甕である。182は肩部外面にタタキメが認められる。6b型式（13世紀末）の所産と考えられる。

以上、7溝出土遺物は、概ね14世紀前半～15世紀初頭の範疇で捉えられるものと考えられる。

12溝（図216-184～187） 184は土師器皿で、口縁部が外方に屈曲するものである。185も土師器皿である。口縁部は外方にのびる。上村編年Ⅸ期（新）併行（14世紀後半）に位置付けられるものの可能性がある。186は楠葉型瓦器椀。Ⅲ-3期（13世紀後半）に位置付けられる。187は東播系須恵器鉢。第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）の所産である。

図化しなかったものも含めてみると、若干時期幅をもっているが、13世紀代の土器が大半を占める。100溝・384溝（図217-188～195） 188～190は土師器皿。口径8cm前後を測る。191～193は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-2～Ⅲ-3期（13世紀前半～後半）に位置付けられるものである。194は瓦質三足釜で、口縁部が大きく内傾するものである。体部内面は板ナデ調整。195は東播系須恵器鉢。口縁部には摩滅痕があり、使用時に何らかの目的で削られたものと思われる。第Ⅲ期第1段階（13世紀前半～後半）に位置付けられる。以上、100溝出土遺物は13世紀前半～後半の所産である。

408溝（図217-196） 196は土師器皿。口径13.9cmを測り、口縁部は直立ぎみにのびる。12世紀前半の所

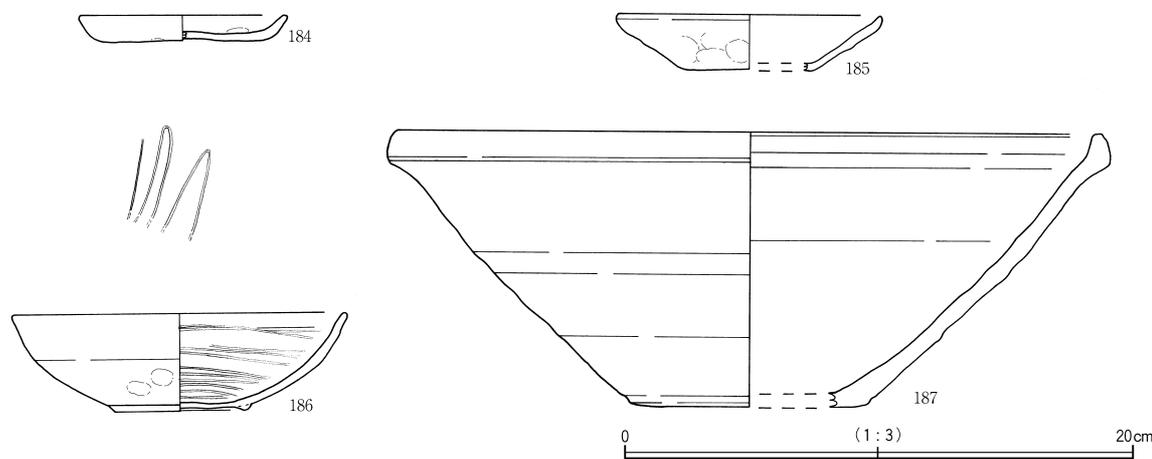


図216 有池遺跡03-1-1調査区 溝出土遺物

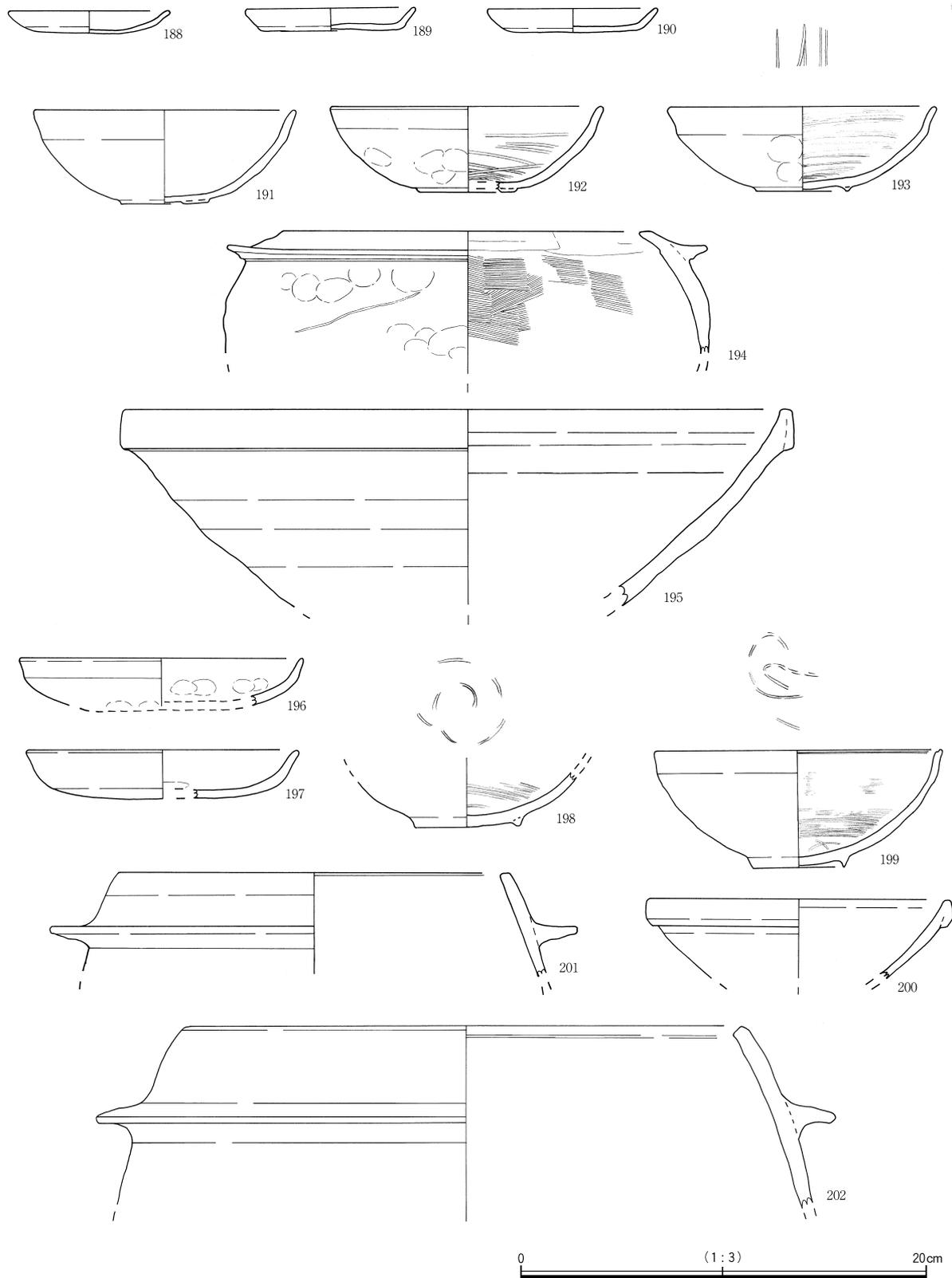


图217 有池遺跡03-1-1 調査区 溝出土遺物

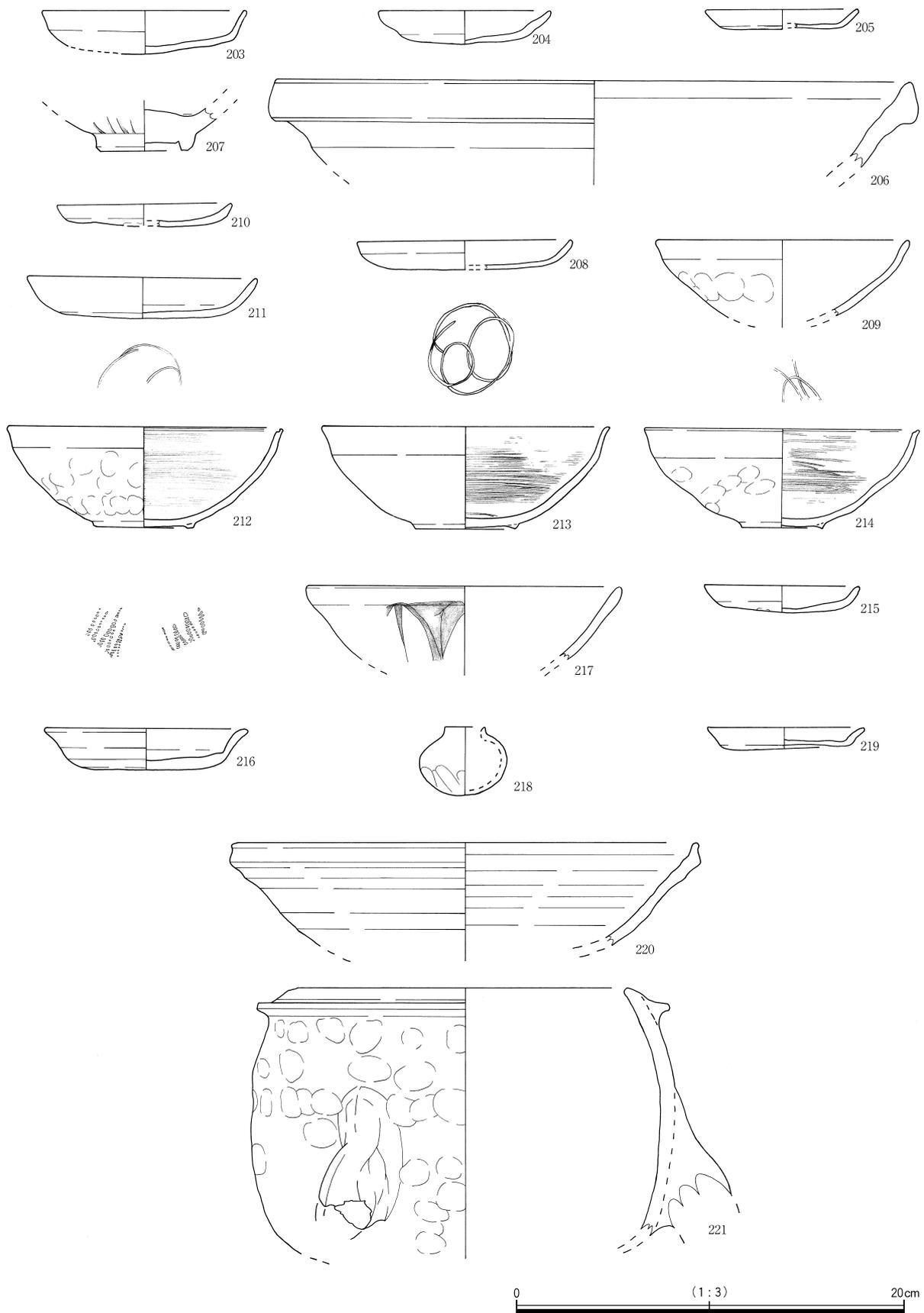


图218 有池遺跡03-1-1 調査区 溝等出土遺物

産である。

425溝 (図217-197~202) 197は土師器皿。復元口径は13.3cmを測る。口縁部はゆるやかにたちあがる。198、199は瓦器椀である。199はⅡ-B段階 (12世紀中葉) の大和型瓦器椀。198は楠葉型であろう。200は白磁椀 (Ⅳ類) である。201、202は土師質羽釜。いずれも胎土は粗い。罫は比較的下位に付き、直線的にのびる口縁部を有する。以上、425溝出土遺物は12世紀中葉の所産である。

113溝 (図218-203) 203は土師器皿である。口縁部が強く屈曲することから、13世紀後半の所産と考えられる。

13溝 (図218-204) 204は土師器皿で、口縁部は比較的長く外方へのびる。14世紀前半の所産であろう。

128溝 (図218-205、206) 205は土師器皿。13世紀後半の所産と考えられる。206は東播系須恵器鉢で、第Ⅲ期第1段階 (13世紀前半~後半) の所産である。

16溝 (図218-207) 207は龍泉窯系青磁椀。外面は片彫り蓮弁文で、見込み部分は無文である (Ⅱ-A類)。13世紀前半の所産である。

34溝 (図218-208、209) 208は土師器皿。口縁部はゆるやかな屈曲をもって外反する。209は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期 (13世紀後半) の所産である。

409溝 (図218-210~214) 210、211は土師器皿。211は口縁部がゆるやかに立ち上がる。212~214は瓦器椀である。212、214は大和型で、Ⅲ-A (新) 段階に位置付けられるものである。213は口縁端部に沈線を持たないが、形態的な特徴や焼成は大和型に近似している。見込み部分はいずれも連結輪状暗文を有する。以上、409溝出土遺物は12世紀後半~13世紀初頭の所産である。

8溝 (図218-216) 216は同安窯系青磁皿で、内面には櫛点描文を施す (Ⅰ-2b類)。12世紀中葉~後半の標式磁器とされるものである。

432溝 (図218-217) 217は龍泉窯系青磁椀。外面には鎬蓮弁文を有する (Ⅱ-B類)。13世紀前半の所産である。

147溝 (図218-218~221) 218は土師器小壺である。体部外面はユビオサエ、口縁部はナデ調整によって仕上げる。219は土師器皿。口縁部は外方に大きく開く。14世紀前半の所産であろう。220は東播系須恵器鉢である。第Ⅱ期第2段階 (12世紀末~13世紀初頭) の所産である。221は瓦質三足釜である。体部外面には煤が付着する。147溝出土遺物は、ほかに楠葉型瓦器椀や瓦質鍋なども出土しているが、これらの年代も考慮しても12世紀末~14世紀前半と、やや時期幅をもっている。

(2) 2 調査区

1層 (図219-222、223) 222、223は楠葉型瓦器椀。222はⅢ-3期 (13世紀後半)、223はⅢ-2期

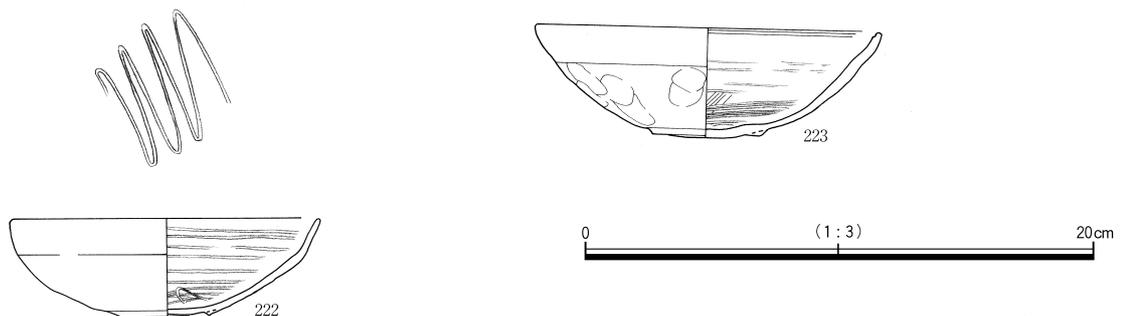


図219 有池遺跡03-1-2調査区 包含層出土遺物

(13世紀前半)に属するものと考えられる。223は見込み部分にハケメが認められる。以上1層出土遺物は13世紀前半～後半の所産である。

127ピット (図220-224) 224は土師器皿。口縁部は上方へのびる。13世紀後半の所産であろう。

131ピット [建物5] (図220-225) 225は土師器皿。口縁部は短く上方へのびる。13世紀代の所産である。

81ピット (図220-226~229) 226、227は土師器皿。227は口縁部が短く上方につまみだされる。228は龍泉窯系青磁椀。畳付および高台内部は無釉である。見込みには草花文が印刻される。13世紀後半～14世紀前半の所産である。229は陶器蓋と考えられる。上層からの混入の可能性がある。以上、81ピット出土遺物は大半が13世紀前半～後半の所産である。

80ピット (図220-230~232) 230、231は土師器皿である。230はゆるやかに内湾する口縁部をもつ。231は口縁部を強く屈曲させ、端部が外反するものである。232は瓦器皿。内面には暗文を有しない。以上は13世紀後半に位置付けられるものであろう。

132ピット (図220-233) 233は土師器皿。復元口径13.8cmを測る。口縁部は斜め上方へ屈曲させ、端部にはわずかに面取りを施す。12世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

27土坑 (図221-237~253、図226-294) 237~245は土師器皿。237~242は口径7.5~8.5cm程度と小型で、扁平な底部と斜め上方に屈曲する口縁部をもつものである。243~245は口径10.5cm程度を測り、底部と口縁部境には明瞭な屈曲をもち、口縁端部は外反する。245は底部に穿孔を有する。246~249は楠葉型瓦器椀。246は口径10.7cm、器高3.2cmと小型であるが、247~249は口径12~12.5cm程度とひとまわり大きい。246と248は高台をもたないが、247と249は高台を意識してわずかに粘土を貼りつけている。IV-1~IV-2期(14世紀前半)に位置付けられる。250は瓦質三足釜。足は比較的下位に付く。251は瓦質羽釜である。内面はハケ調整によって仕上げる。252、253は東播系須恵器甕。252は頸部が直線的に立ち上がり、口縁端部はまるく肥厚し、上端には一条の沈線がめぐる。253は口縁部が大きく外反して端面が内傾する。上端部はヨコナデにより凹線状に凹み、下端は垂下する。以上、27土坑出土遺物は14世紀前半の所産である。294は土師器皿で、口縁部にはヨコナデにより斜め上方に屈曲する。13世紀前半の所産であろう。

26井戸 (図222-254) 254は土師器皿である。口縁部はヨコナデによって外面に段が付く。底部には接合痕が残る。14世紀前半の所産である。

58土坑 (図222-255~257) 255~257は楠葉型瓦器椀。口径は13cm程度で、内面のミガキは粗い。III-2~III-3期(13世紀前半～後半)の所産である。

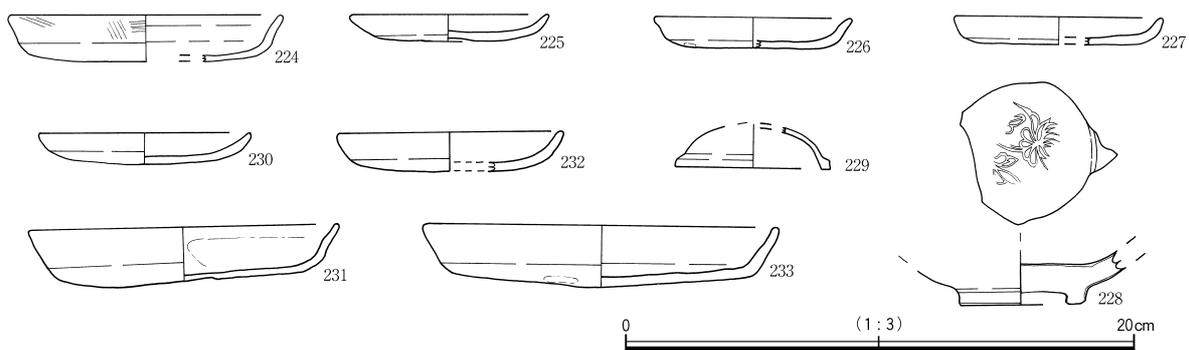


図220 有池遺跡03-1-2調査区 ピット出土遺物

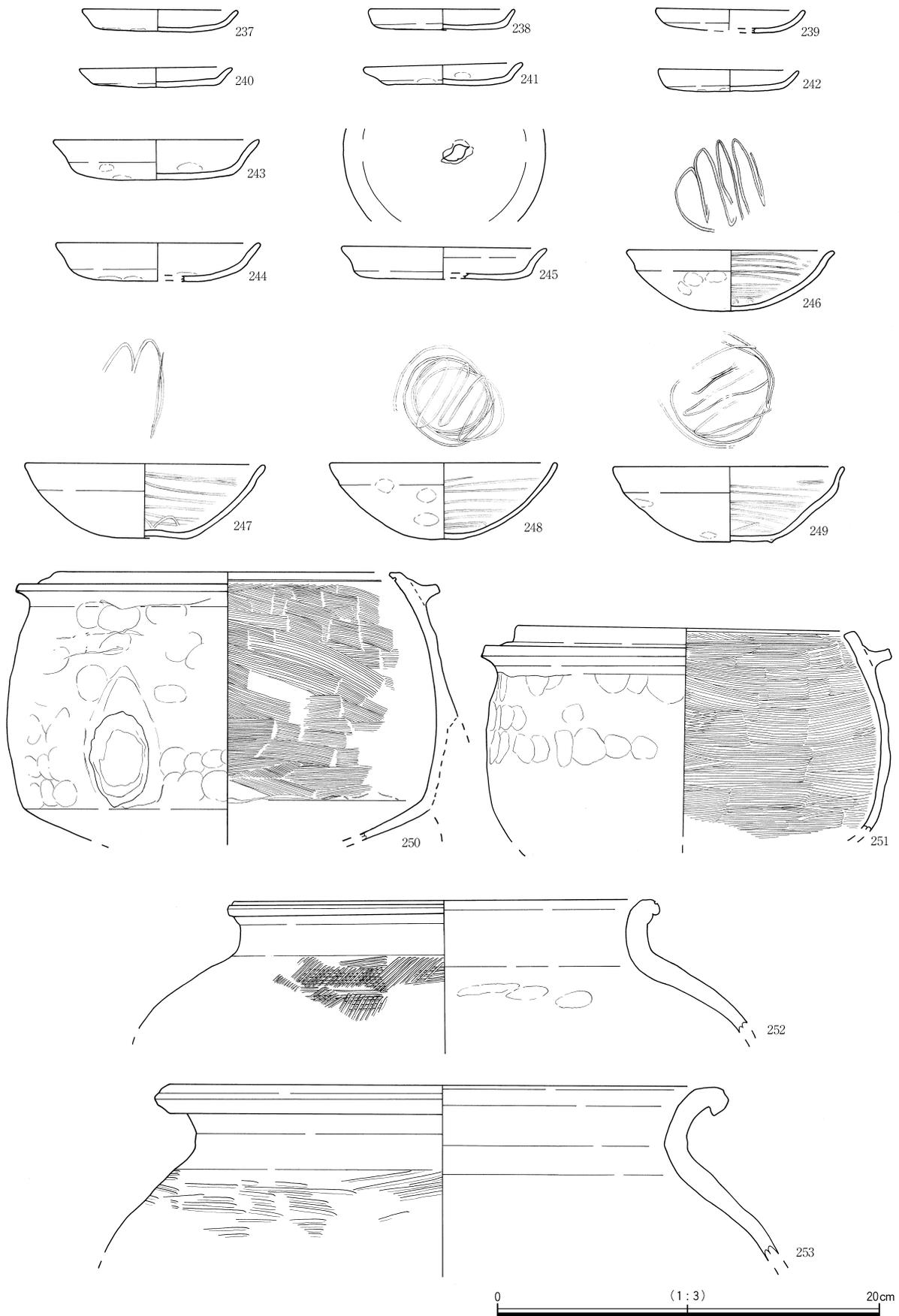


图221 有池遺跡03-1-2 調査区 土坑出土遺物

97土坑（図223-258） 258は龍泉窯系青磁椀。内面には印花文、外面には蓮華文を有する。13世紀後半～14世紀初頭の所産である。

83土坑（図223-259） 259は古瀬戸水注の体部片と考えられる。外面には草花文が線刻される。

63 [建物4]・64ピット（図223-260） 260は土師器皿。口縁部はゆるやかに立ち上がる。13世紀の所産である。

51土坑（図224-261～265） 261、262は土師器皿。263、264は楠葉型瓦器椀。263はⅢ-3期、264はⅢ-1期に属するものであろう。265は東播系須恵器鉢。第Ⅲ期第1段階（13世紀前半～後半）の所産である。以上、51土坑出土遺物は、13世紀前半～後半に位置付けられる。

5落込（図224-266） 266は土師器皿である。器高が低く扁平で、口縁部は短く上方へのびる。13世紀前半の所産であらう。

104土坑（図224-267、268） 267は土師器皿。口縁部のナデは強く、屈曲をもって外反する。268は楠葉型瓦器椀。口径は10.2cmと小さく、内湾する口縁部をもつ。Ⅳ-1期（13世紀後半～14世紀前半）の所産である。

112土坑（図224-269、270） 269の器形は楠葉型瓦器椀に類似する。器壁は磨耗していて、ミガキは不明瞭である。Ⅲ-A段階（12世紀後半～13世紀初頭）に属するものと考えられる。270は東播系須恵器鉢。森田編年第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に位置付けられる。

20土坑（図224-271～275） 271は土師器皿。口縁部は二段ナデを意識しており、端部は上方へたちあげる。272、273は瓦器皿である。272は口縁部が内湾ぎみに立ち上がるが、273は強いナデを施し外反させる。274は大和型瓦器椀。見込みには連結輪状暗文を施す。Ⅲ-A（古）段階（12世紀後半～13世紀初頭）。275は土師質羽釜である。以上、20土坑出土遺物は、12世紀後半の所産である。

176ピット（図225-278） 278は土師器皿で、口縁部は短く上方につまみだされる。13世紀の所産である。

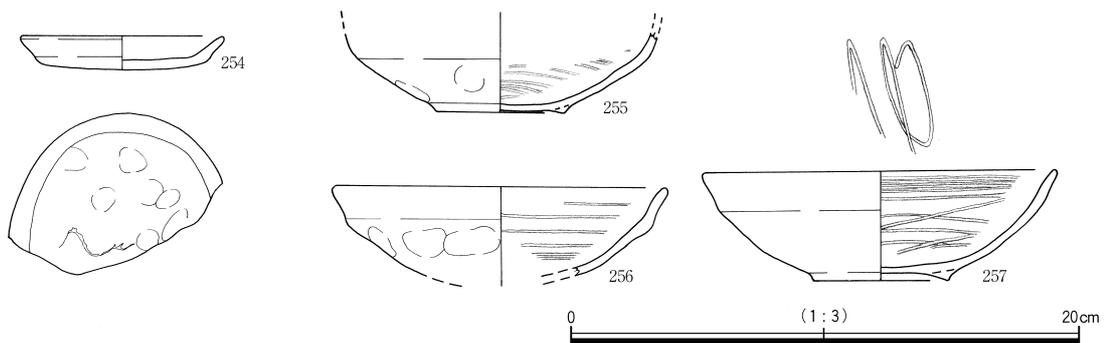


図222 有池遺跡03-1-2 調査区 井戸・土坑出土遺物

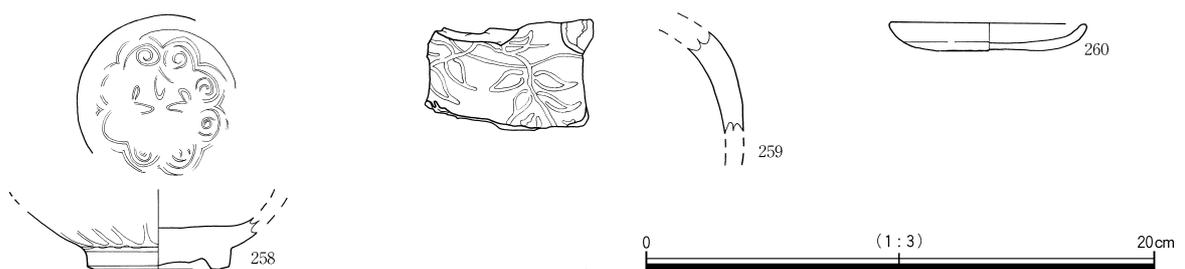


図223 有池遺跡03-1-2 調査区 土坑・ピット出土遺物

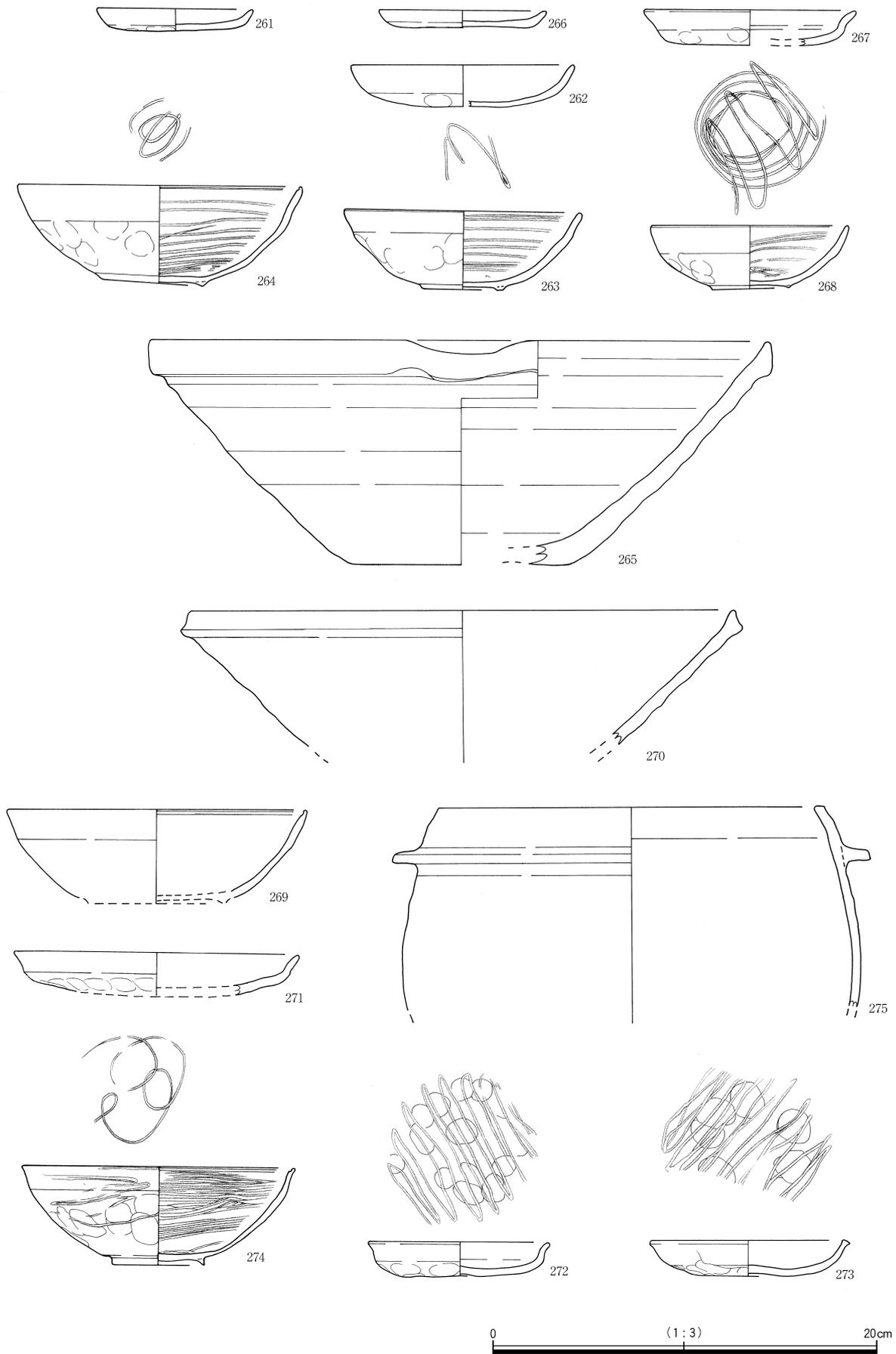


图224 有池遺跡03-1-2調査区 土坑・落込出土遺物

90ピット [建物 2] (図225-279) 279は土師器皿で、内面には煤が付着する。13世紀の所産であろう。

156土坑 (図225-280、281) 280は土師器皿。口径9.1cmを測り、扁平である。281は大和型瓦器碗。外面には分割ヘラミガキが上三分の二程度まで施される。見込みはジグザグ状暗文。Ⅱ-A段階 (12世紀前半) の所産であろう。

259ピット (図225-282) 282は土師器皿である。口縁部は斜め上方に屈曲する。13世紀後半の所産であろう。

166ピット (図225-283) 283は土師器皿。13世紀後半の所産であろう。

184ピット (図225-284) 284は土師器皿。口縁部は上方に強く屈曲する。14世紀前半の所産である。

86土坑 (図225-285、286) 285は土師器皿。口縁部は屈曲をもって立ち上がる。286は楠葉型瓦器碗で、Ⅲ-3期 (13世紀後半) の所産であろう。以上、86土坑出土遺物は13世紀後半に位置付けられる。

29井戸 (図225-287~289) 287、288は楠葉型瓦器碗である。287は高台を意識して、わずかに粘土を貼りつけて底部を円形にナデている。287はⅣ-2期 (14世紀前半)、288はⅣ-1期の所産と考えられる。289は東播系須恵器鉢。第Ⅲ期第1段階 (13世紀前半~後半) の所産である。以上、29土坑出土遺物は、13世紀後半~14世紀前半に位置付けられる。

60ピット (図225-291) 291は楠葉型瓦器碗で、器壁に炭素が吸着せず、灰白色を呈しており、調整は不明瞭である。Ⅲ-2期 (13世紀前半) に位置付けられるものであろう。

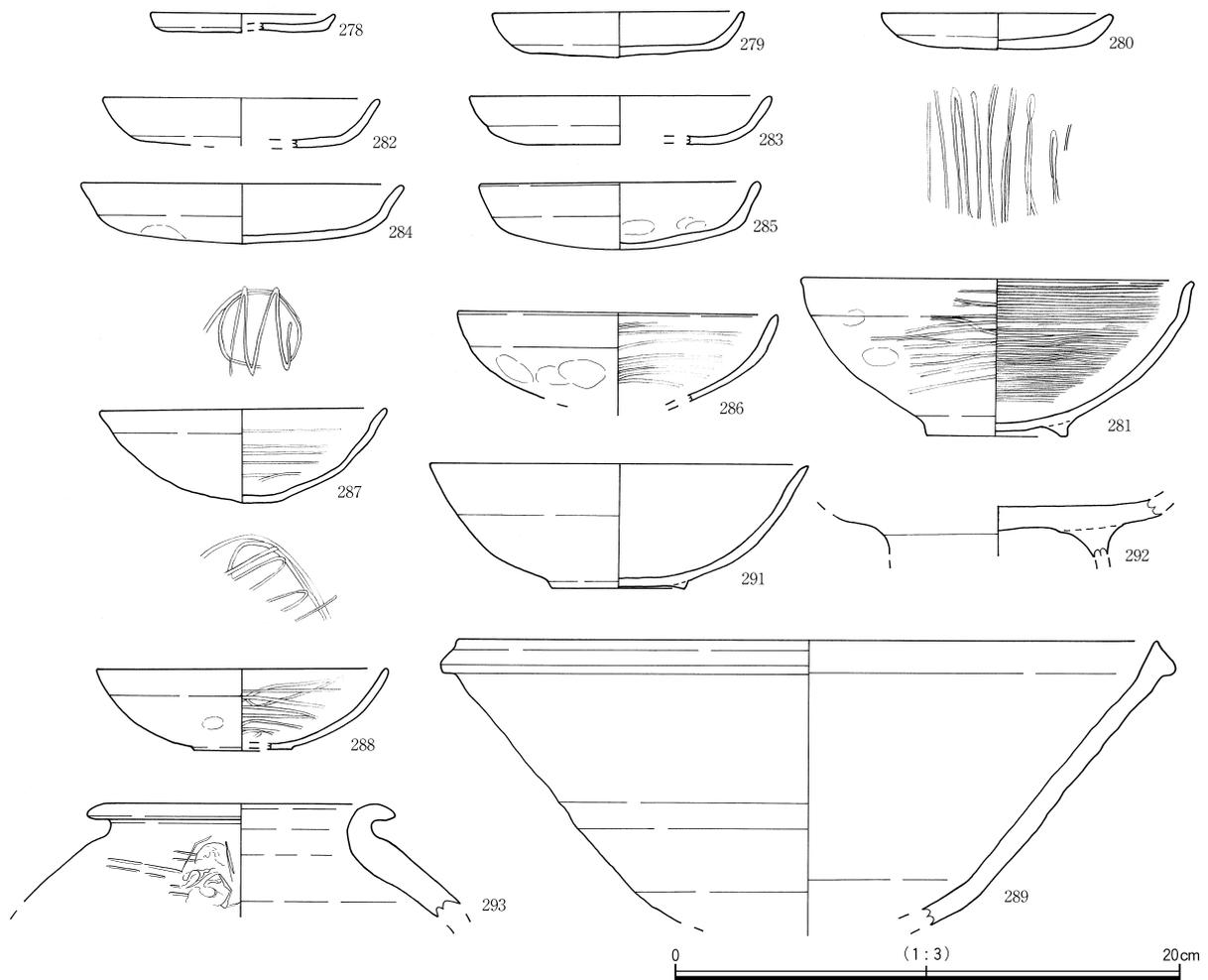


図225 有池遺跡03-1-2調査区 土坑・ピット・井戸等出土遺物

91ピット [柵1] (図225-292) 292は土師器台付皿の底部である。器壁は厚く、外方に開く高台が貼り付けられる。

182ピット (図225-293) 293は須恵器壺。口縁部は大きく外反し、押しつぶしたような形状となる。体部外面には平行タタキを施す。肩部には耳が貼り付けられていたものと思われる。焼成は堅緻で灰色を呈する。

54溝 (図226-295) 295は土師器皿。口縁部は短く上方に屈曲する。13世紀の所産である。

41溝 (図226-296-300) 296-298は土師器皿。口径は8.5-9 cmを測り、口縁部はゆるやかに内湾する。299は楠葉型瓦器椀で、外面には指頭圧痕が残る。見込みには螺旋状暗文を施す。Ⅲ-1期 (12世紀末-13世紀初頭) のものであろう。300は大和型瓦器椀で、外面のヘラミガキは分割性が崩れている。Ⅲ-A (新) 段階 (12世紀末-13世紀初頭) のものと考えられる。以上、41溝出土遺物は12世紀末-13世紀初頭の所産である。

52溝 (図226-301-305) 301-304は土師器皿。口縁部は上方へ短くのびる。13世紀の所産であろう。305は口縁端部が外反する白磁椀 (V-4類) である。12世紀中葉-後半の所産である。

115溝 (図226-307, 308) 307は楠葉型瓦器椀。器高は低く、内湾する口縁部をもつ。Ⅳ-1期 (13世紀後半-14世紀前半) の所産であろう。308は瓦質羽釜で、三足が付くものと思われる。口縁部外面はゆるい段をもって内傾する。

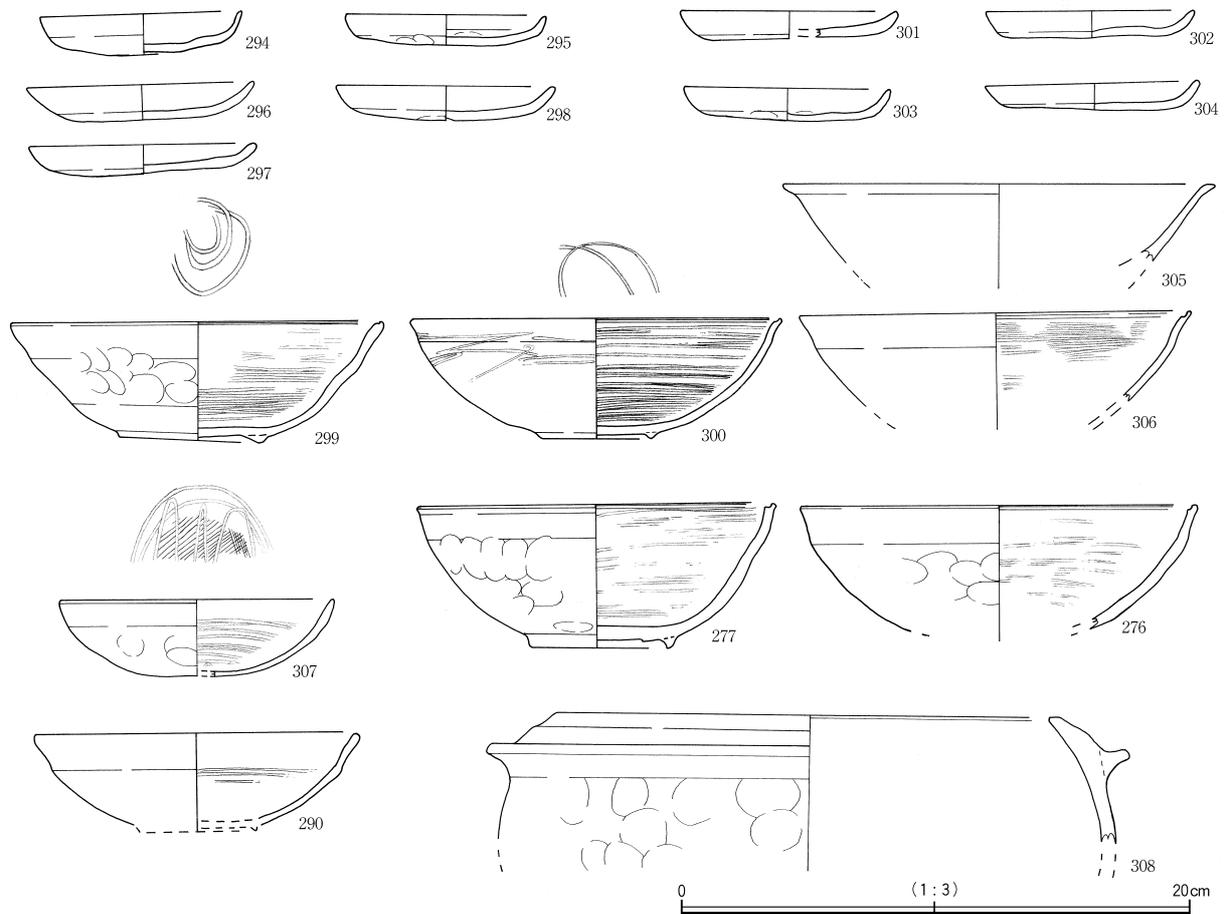


図226 有池遺跡03-1-2 調査区 土坑・溝出土遺物



図227 有池遺跡03-1-4調査区 包含層出土遺物

21溝 (図226-306、276、277) 306は大和型瓦器碗である。器壁が磨耗しており、調整は不明瞭であるが、Ⅲ-A段階 (12世紀後半～13世紀初頭) の所産である。276、277は大和型瓦器碗。277は磨耗しているため、体部外面のミガキは不明瞭である。Ⅱ-B段階 (12世紀中葉) の所産である。

105土坑 (図226-290) 290は楠葉型瓦器碗で、Ⅲ-3期 (13世紀後半) に位置付けられるものである。

(3) 4調査区

2層 (図227-309～312) 309は土師器皿。復元口径13.0cm、器高2.5cmを測る。口縁部は内湾し、端部は上方へ立ち上げる。12世紀後半の所産であろう。310は瓦器皿。見込みには比較的密にジグザグ状暗文を施す。楠葉型であろう。311は大和型瓦器碗と考えられるが、体部外面は指頭圧痕が顕著に残り、ヘラミガキは認められない。12世紀末～13世紀初頭の所産であろう。312は土師質羽釜。鏝は下位に付き、口縁部は内湾気味にのびる。以上、2層出土遺物は、概ね12世紀後半に位置付けられる。

3層 (図231-347) 347は古瀬戸耳壺か。体部外面には草花文を線刻する。

68ピット (図228-313) 313は土師器皿。器壁は厚く、口縁部の屈曲はゆるやかである。口縁端部にはわずかに面取りを施す。12世紀後半の所産であろう。

73土坑 (図229-314、315) 314は土師器皿。315は楠葉型瓦器碗である。Ⅲ-3期 (13世紀後半) の所産と考えられる。口縁端部には沈線を有する。

72土坑 (図229-316～318、234～236) 316、317は土師器皿である。口径は12cm程度で、器壁は厚く、口縁部はゆるやかに内湾する。12世紀後半の所産と考えられる。318は楠葉型瓦器碗である。口縁端部には非常に細い沈線が入る。Ⅲ-3期 (13世紀後半) に位置付けられる。234は瓦器皿。口縁部は上方に向かって屈曲し、見込みに

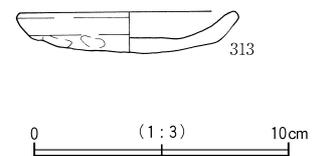


図228 有池遺跡03-1-4調査区 68ピット出土遺物

は8往復程度のジグザグ状暗文が施される。235、236は楠葉型瓦器椀。口縁部には強くヨコナデが施され、端部には細い沈線が入る。Ⅲ-1～Ⅲ-2期（12世紀末～13世紀前半）に位置付けられるものと考えられる。以上、72土坑出土遺物は、やや時期幅があるが、概ね12世紀後半～13世紀後半の所産である。

1土坑（図229-319～323） 319は土師器皿で、口縁部は内湾ぎみにのびる。320は瓦器皿。見込みには密にジグザグ状暗文を施す。321は楠葉型瓦器椀。内面のミガキは粗く、見込みには連結輪状暗文を施す。Ⅲ-1期（12世紀末～13世紀初頭）の所産である。322は土師質羽釜。口縁部はゆるやかに内傾し、

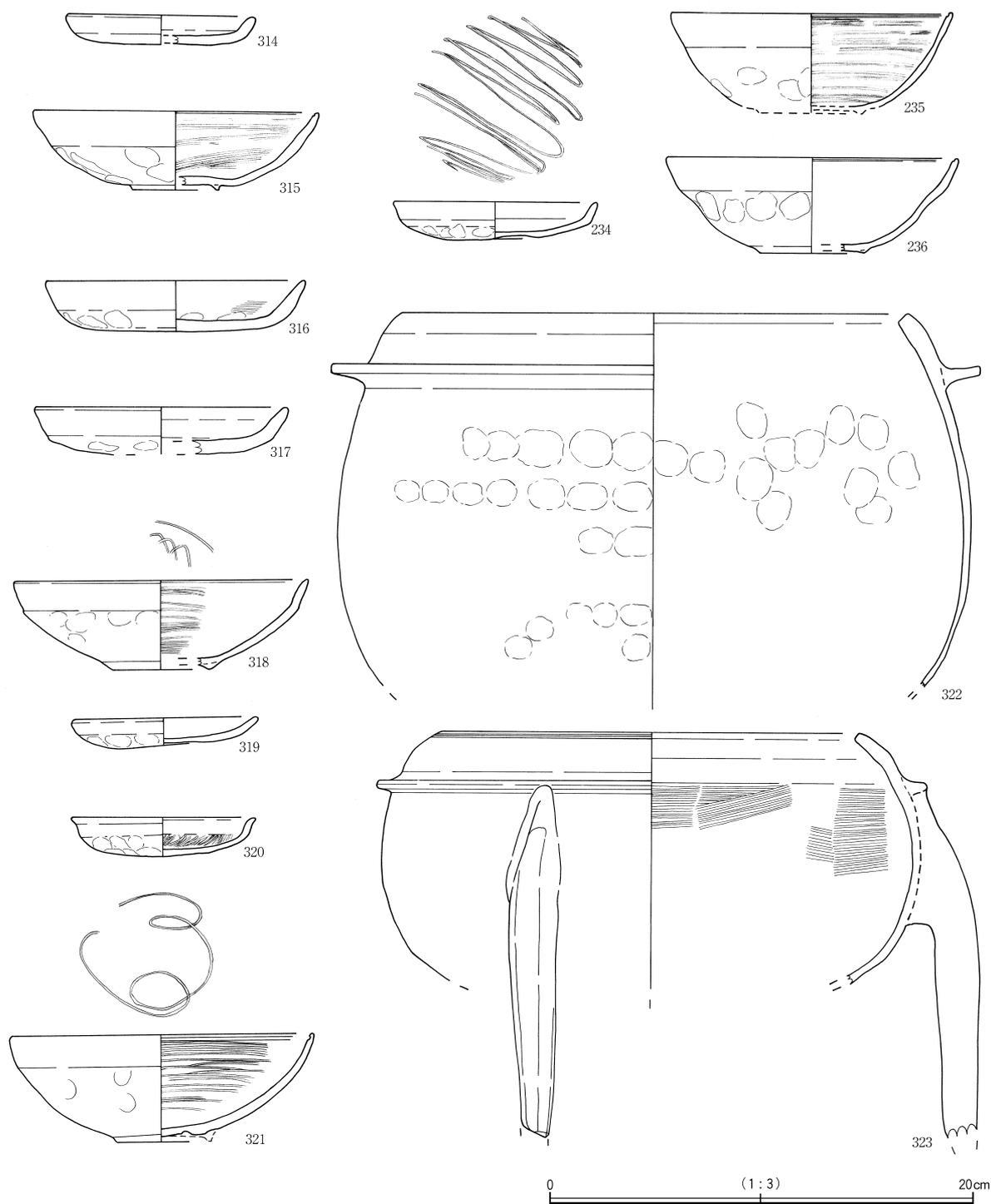


図229 有池遺跡03-1-4調査区 土坑出土遺物

鏝は断面方形を呈する。内外面ともタタキによると思われる圧痕が認められる。323は瓦質三足釜である。鏝は比較的下位に付き、口縁部はゆるく内折する。以上、1土坑出土遺物は、12世紀末～13世紀初頭の所産である。

345土坑 (図230-324) 324は土師器皿で、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。13世紀後半の所産であろう。

262土坑 (図230-325) 325は楠葉型瓦器椀。Ⅲ-3期 (13世紀後半) に位置付けられる。

384土坑 (図230-326~328) 326は瓦器皿である。内面にはジグザグ状暗文を施す。327、328は楠葉型瓦器椀。いずれもⅢ-2～Ⅲ-3期 (13世紀前半～後半) に位置付けられるものである。口縁部には沈線を有するが、328は大和型のように上位から工具を当てている。以上、384土坑出土遺物は、13世紀前半～後半の所産である。

386土坑 (図230-329) 329は瓦器皿である。口縁部はヨコナデにより大きく外反する。見込みはジグザグ状暗文。

275土坑 (図230-330~335) 330、331は瓦器皿。口縁部内面には横方向のヘラミガキ、見込みにはジグザグ状暗文を施す。332~335は大和型瓦器椀である。334は外面に分割ヘラミガキが認められるが、332はそれが崩れている。333および335は器壁が磨耗しているため、外面調整は不明瞭である。Ⅱ-B～Ⅲ-A (古) 段階 (12世紀中葉～後半) に位置付けられるものと考えられる。

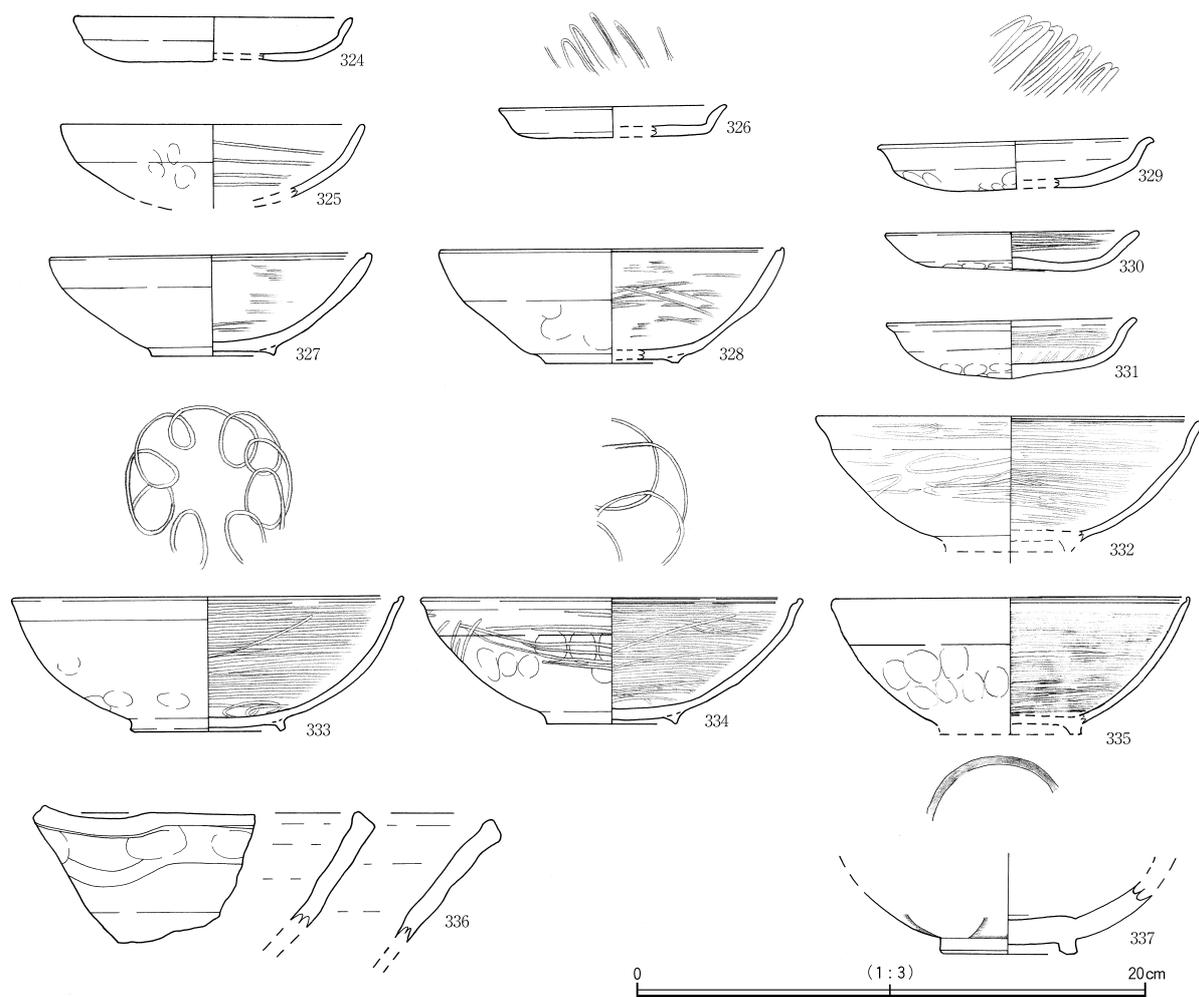


図230 有池遺跡03-1-4 調査区 土坑・ピット出土遺物

31ピット(図230-336) 336は東播系須恵器鉢。口縁端部は内側にわずかに拡張する。第Ⅱ期第2段階(12世紀後半~13世紀初頭)の所産である。

264土坑(図230-337) 337は龍泉窯系青磁碗。外面には蓮弁文を、見込みには圈線を有する(Ⅱ-A類か)。13世紀前半の所産である。

253溝(図231-338、339) 338、339は楠葉型瓦器碗。338は器壁が非常に厚く、軟質焼成である。口縁部は内湾する。見込みは螺旋状暗文。Ⅲ-2期(13世紀前半)に属するものと考えられる。

401溝(図231-340) 340は楠葉型瓦器碗。口縁部は強く内湾する。Ⅳ-1期(13世紀後半~14世紀前半)の所産である。

248溝(図231-341) 341は大和型瓦器碗である。口縁部には強くヨコナデを施す。焼成は還元化しておらず、灰白色を呈する。Ⅲ-A(新)段階(12世紀末~13世紀初頭)に位置付けられるものであろう。

246溝(図231-342、348) 342は楠葉型瓦器碗。口縁部の歪みが大きく、端部にはやや上位から工具を当てた沈線を有する。Ⅲ-2期(13世紀前半)の所産であろう。348は東播系須恵器甕。口縁端部は垂下させ、上端部はわずかに凹む。13世紀後半の所産であろう。

247溝(図231-343) 343は土師器皿。底部はまるく、口縁部はゆるやかに外方にのびる。12世紀後半の所産と考えられる。

254溝(図231-345、346) 345、346は青磁碗。345は外面に蓮弁文を線彫りする。いずれも15世紀の所産と考えられる。

攪乱(図231-344) 344は古瀬戸花瓶の口縁部である。内外面ともに鉄釉を施す。古瀬戸中期様式か。

6溝(図232-349、350、352~357、361、362) 349~350は土師器皿。口径は13~13.5cm程度、器高は

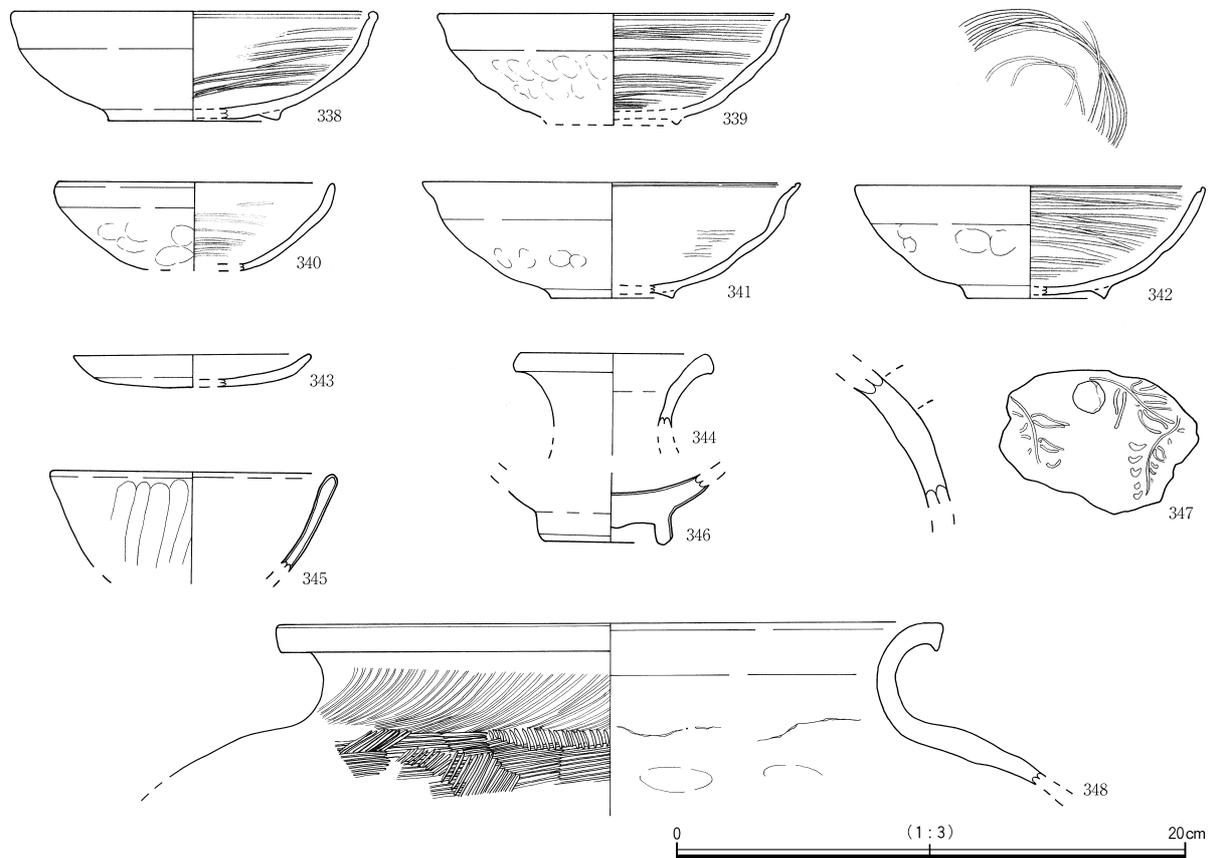


図231 有池遺跡03-1-4調査区 溝・包含層出土遺物

2～2.5cm程度で、口縁部は上方にゆるやかに屈曲する。352～357は瓦器碗である。352、357は楠葉型、353、355、356は大和型と考えられる。352は外面のヘラミガキがなく、断面三角形の高台が貼り付けられる(Ⅲ-1期)。大和型瓦器碗はいずれもⅢ-A段階の範疇で捉えられるものである。355、356は口縁部に強いヨコナデを施すなどの特徴をもっている。361は東播系須恵器鉢。第I期第1段階(11世紀後半)の所産である。362は土師質羽釜。大型であるが鐙は短く、口縁部は断面方形を呈する。内面および外面下位はハケ調整。以上、6溝出土遺物は、12世紀末～13世紀初頭の所産である。

526土坑(図232-351、358、359、360) 358は楠葉型、359は大和型の瓦器碗である。358は外面のヘラミガキが無く、断面三角形の高台が貼り付けられる(Ⅲ-1期)。359はやや古相を呈し、Ⅱ-B段階(12世紀中葉)に位置付けられる。360は楠葉型と考えられる瓦器皿である。底部はまるみをおびる。これらのことから526土坑出土遺物は12世紀中葉～13世紀初頭の所産とみることができる。

242溝(図233・234-363～373) 363～365は楠葉型瓦器碗である。364は見込み部分を中心にハケ調整が認められる。これらはⅢ-2～Ⅲ-3期(13世紀前半～後半)の所産である。366は古瀬戸天目碗。口縁部は上方に立ち上がり、口唇部は外反する。腰部はヘラケズリ。古瀬戸後期様式に位置付けられるものか。367は須恵器杯蓋である。368は須恵器杯身である。扁平な天井部をもつ。受部は上方へのびる。370は須恵器甕。369は土師器壺である。小型で肩が大きく張り、外面はハケ調整、口縁部内面および体部上位は板ナデ調整によって仕上げる。371は雁振瓦である。突起状のものが付くが、玉縁を有しないので隅に葺かれるものと考えられる。凹面にはコビキ痕と布目が残る。凸面はナデ調整。372、373は丸瓦。372は凹面に右上がりのコビキ痕と吊り紐痕、布目痕が残る。凸面はケズリ調整。373には凹面に布目痕と吊り紐痕を有する。

(4) 5調査区

1層(図235-374～393) 374～390は土師器皿である。13世紀代のものが多いが、概ね12世紀後半～14世紀前半の範疇におさまるものである。391～393は楠葉型瓦器碗。391はⅣ-1期(13世紀後半～14世紀前半)、393はⅢ-3期(13世紀後半)のものである。392は調整が不明瞭であるが、12世紀代のものと思われる。

2層(図235-394～399) 394～399は土師器皿である。概ね13世紀～14世紀前半に位置付けられるものである。

3層(図235-400～410) 400～404は土師器皿。405は瓦器皿である。406、497は楠葉型瓦器碗。Ⅲ-3期(13世紀後半)に位置付けられるものと思われる。408は龍泉窯系青磁碗。内面は無文、外面には鎬蓮弁文を刻む。409は東播系須恵器鉢。410は瓦質羽釜。口縁部外面には二条の凹線文を入れる。鐙下には煤が一部付着する。これらは概ね13世紀～14世紀前半の所産である。

4層(図235-411) 411は龍泉窯系青磁碗。外面には鎬蓮弁文を有する。

413ピット(図236-412) 412は土師器皿である。胎土は精良で内面にはわずかに煤が付着する。13世紀後半の所産であろう。

68ピット(図236-413) 413は土師器皿である。口縁部は屈曲をもって立ち上がる。13世紀前半の所産である。

71ピット(図236-414) 414は土師器皿。口縁部には強くヨコナデを施し、口縁部を立ち上げる。13世紀前半の所産と考えられる。

1250ピット(図236-415) 415は楠葉型瓦器碗。Ⅳ-2期(14世紀前半)の所産である。

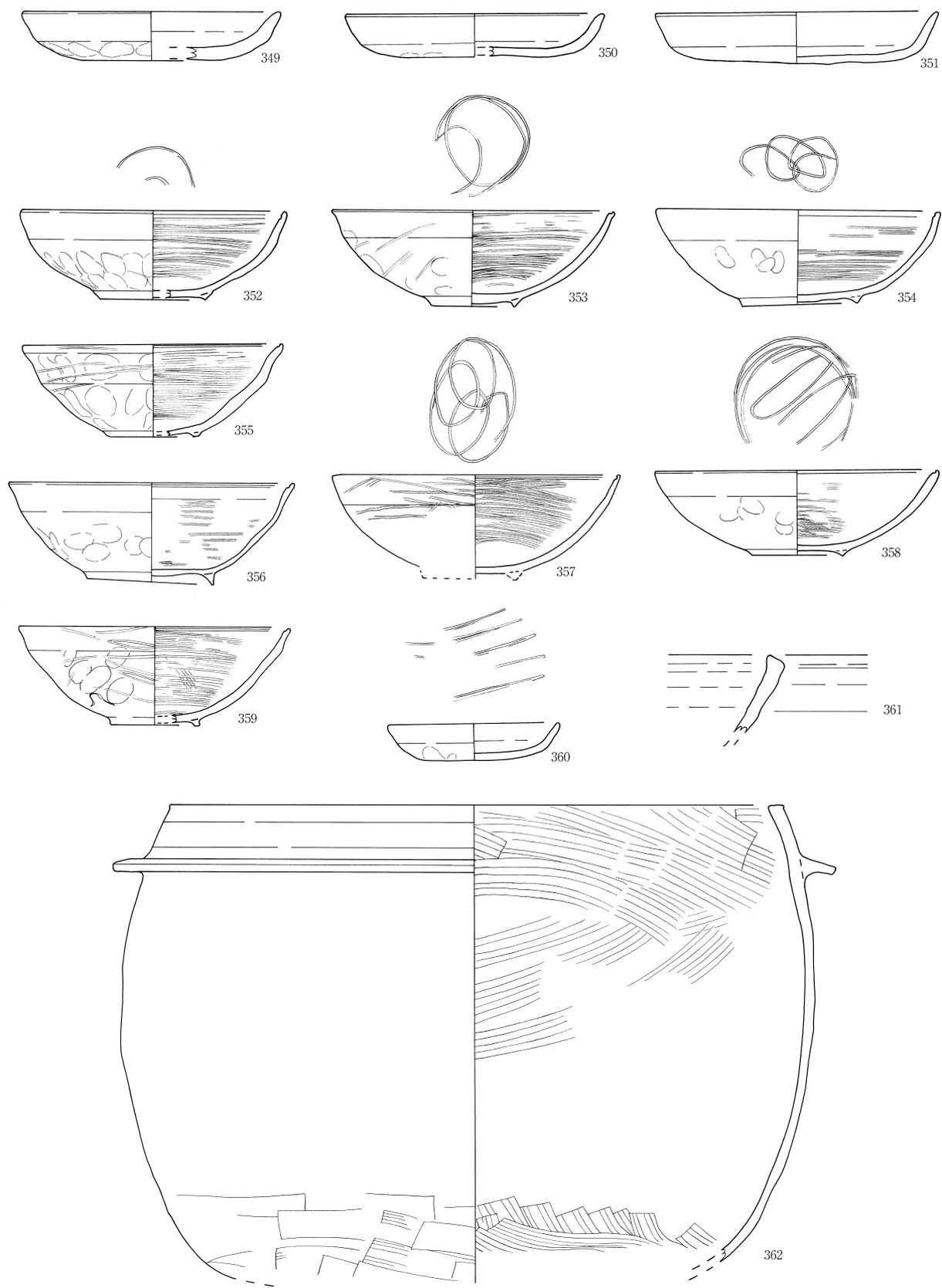


图232 有池遺跡03-1-4 調査区 溝・土坑出土遺物

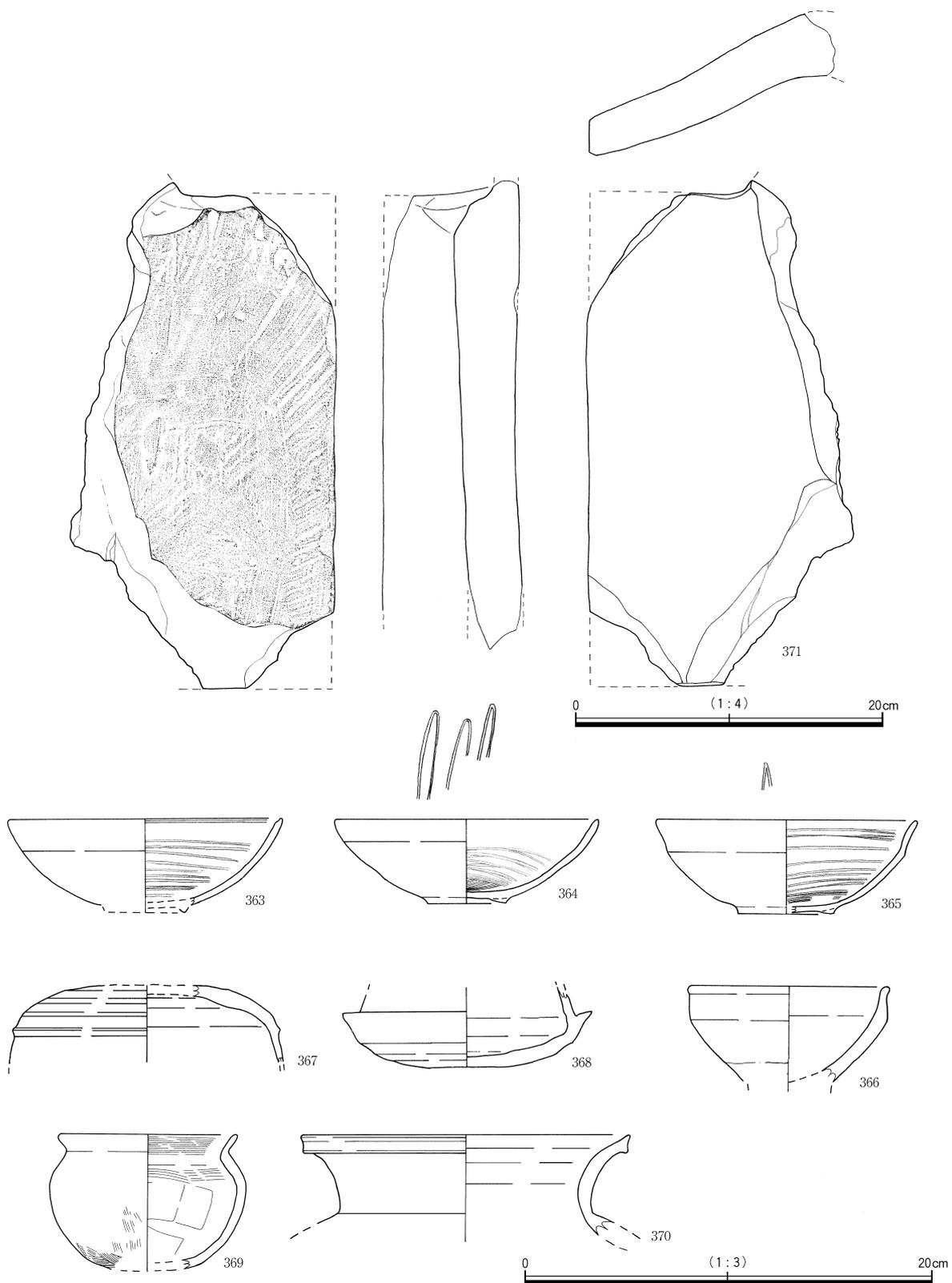


图233 有池遺跡03-1-4 調査区 溝出土遺物

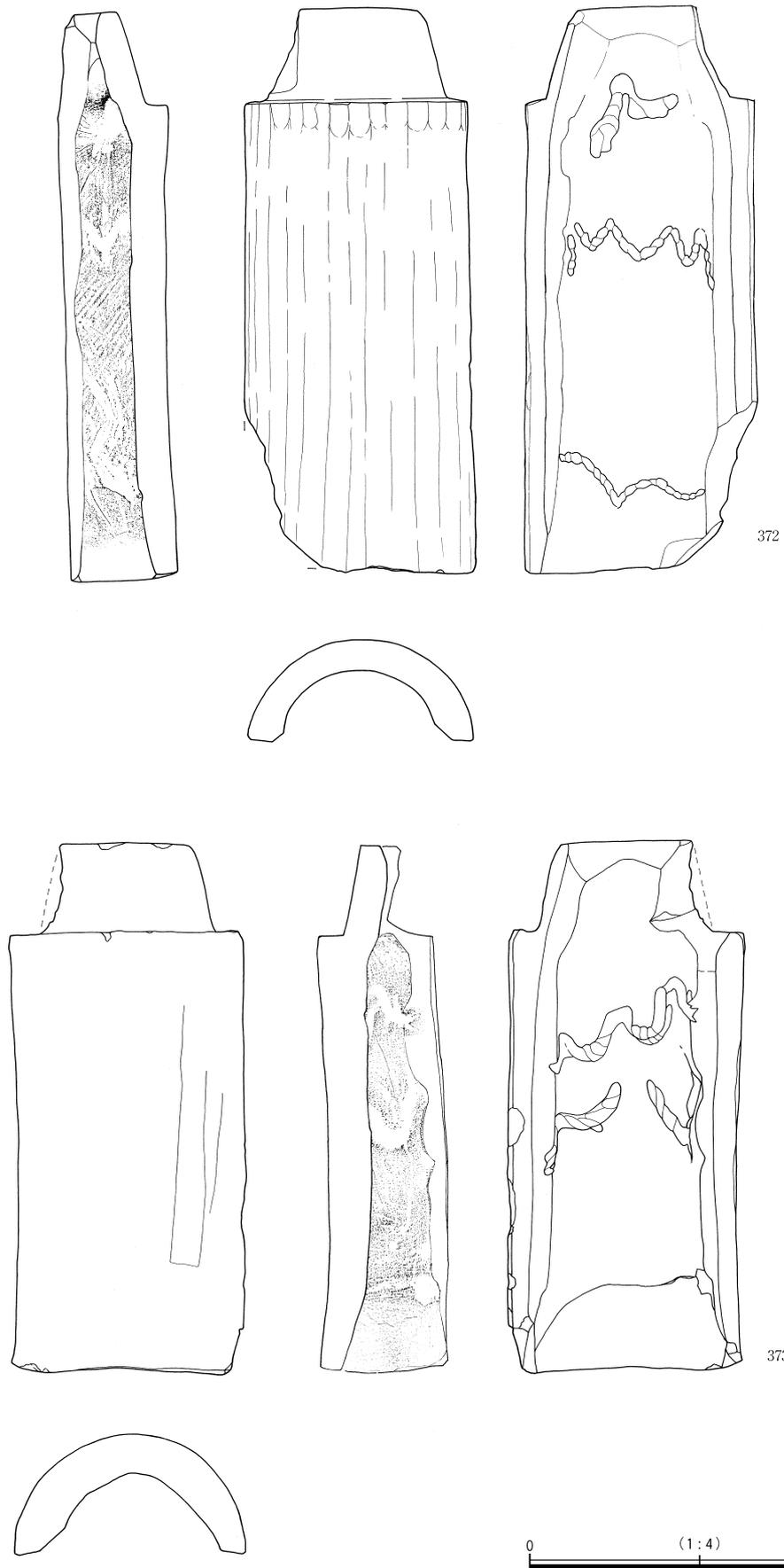


图234 有池遺跡03-1-4 調査区 溝出土遺物

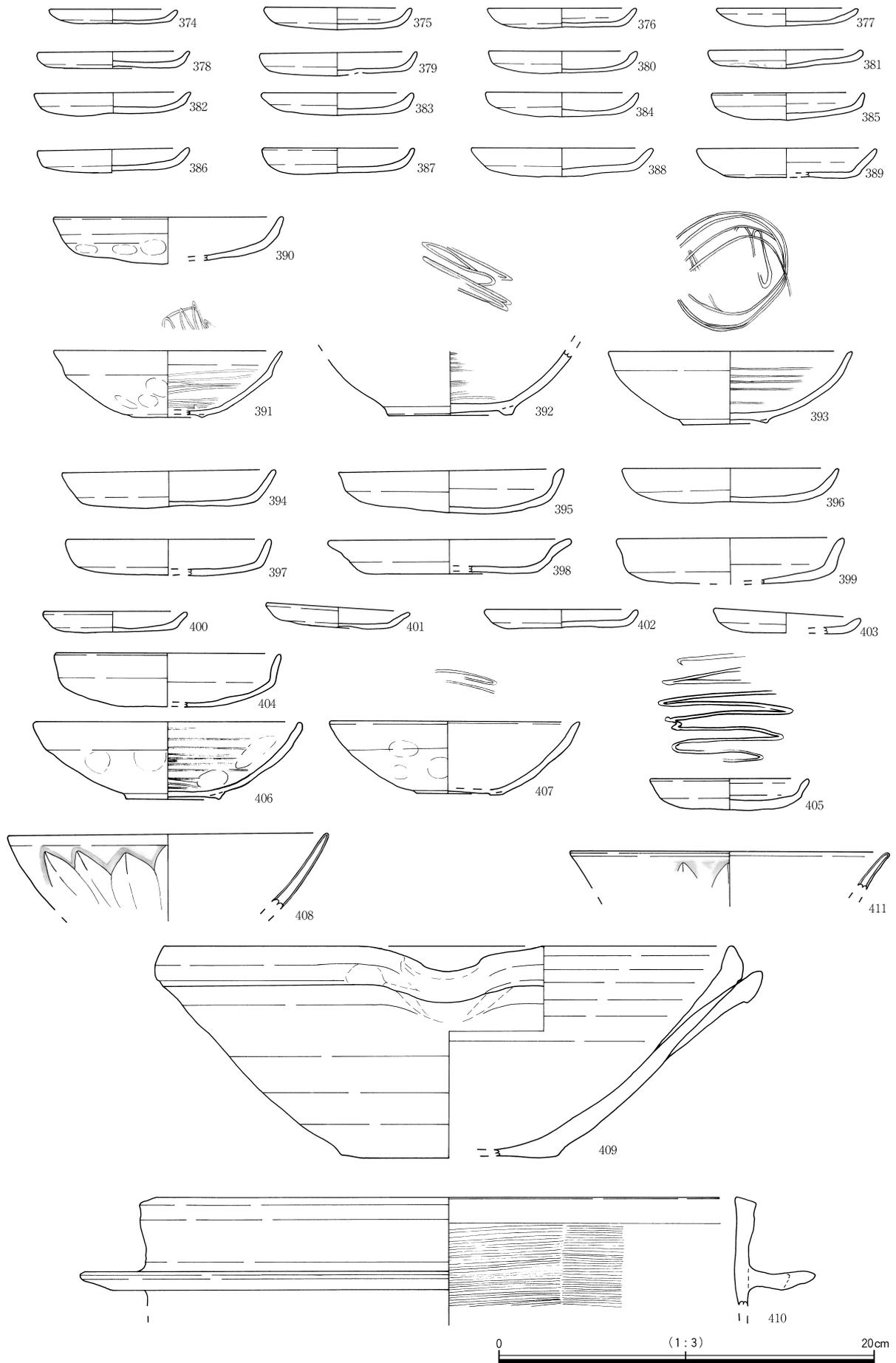


图235 有池遺跡03-1-5調査区 包含層出土遺物

408ピット (図236-416) 416は楠葉型瓦器椀で、口縁部は内湾し、内面には幅の太いヘラミガキを施す。Ⅲ-2期(13世紀前半)の所産と考えられる。

70ピット (図236-417) 417は楠葉型瓦器椀である。Ⅳ-2期(14世紀前半)の所産である。

485ピット (図237-418) 418は楠葉型瓦器椀。口縁端部内面には浅い沈線がめぐる。Ⅲ-2期(13世紀前半)の所産である。

486ピット (図237-419) 419は土師器皿。復元口径12.4cm、器高2.3cmを測り、内湾する口縁部をもつ。12世紀後半の所産であろう。

434ピット (図237-420) 420は土師器皿である。口縁部はヨコナデにより、大きく外反する。14世紀前半の所産である。

81ピット (図237-421~426) 421~423は土師器皿。口縁端部はわずかに面取りを施す。424は瓦器皿。口径は8.9cmを測り、見込みには3~4往復程度のジグザグ状暗文を有する。425、426は楠葉型瓦器椀。425はⅣ期のものと思われるが、426はⅢ-2期に位置付けられるものである。81ピット出土遺物は425を除いて13世紀前半に位置付けられる。

78ピット (図237-427) 427は土師器皿。器壁が浅く、非常に扁平である。13世紀代の所産であろう。

426ピット (図237-428) 428は土師器皿で、口縁部を上方へ屈曲させるものである。13世紀後半の所産であろう。

75ピット (図237-429~431) 429は土師器皿。口縁部はゆるやかに屈曲する。430は瓦器皿。口縁部はゆるやかに内湾する。431は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期に位置付けられるものである。これらは13世紀後半に位置付けられる。

106ピット (図237-432) 432は土師器皿で、口縁部は上方へ短くのびる。13世紀代の所産であると思われる。

105ピット (図237-433) 433は土師器皿で、口縁部は短く上方へ屈曲させる。13世紀代の所産であろう。

361ピット (図237-434) 434は楠葉型瓦器椀。口縁端部には沈線を有する。Ⅲ-2期(13世紀前半)の所産であろう。

320ピット (図237-435) 435は瓦器皿。器壁は厚く、見込みには暗文はなくハケメが残る。13世紀後半の所産であろう。

442ピット (図237-436~464) 436~464は土師器皿。すべてはほぼ同法量、同形のものである。口径は約8cm、器高は約1.2cmを測る。口縁部はゆるやかな稜線をもって屈曲する。色調は黄橙色を呈し、胎土は精良である。448、449、452は口縁部付近に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたものと考

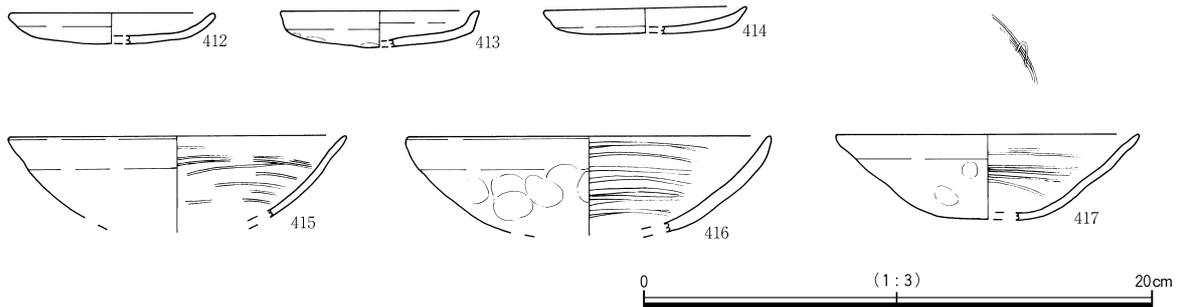


図236 有池遺跡03-1-5調査区 ピット出土遺物

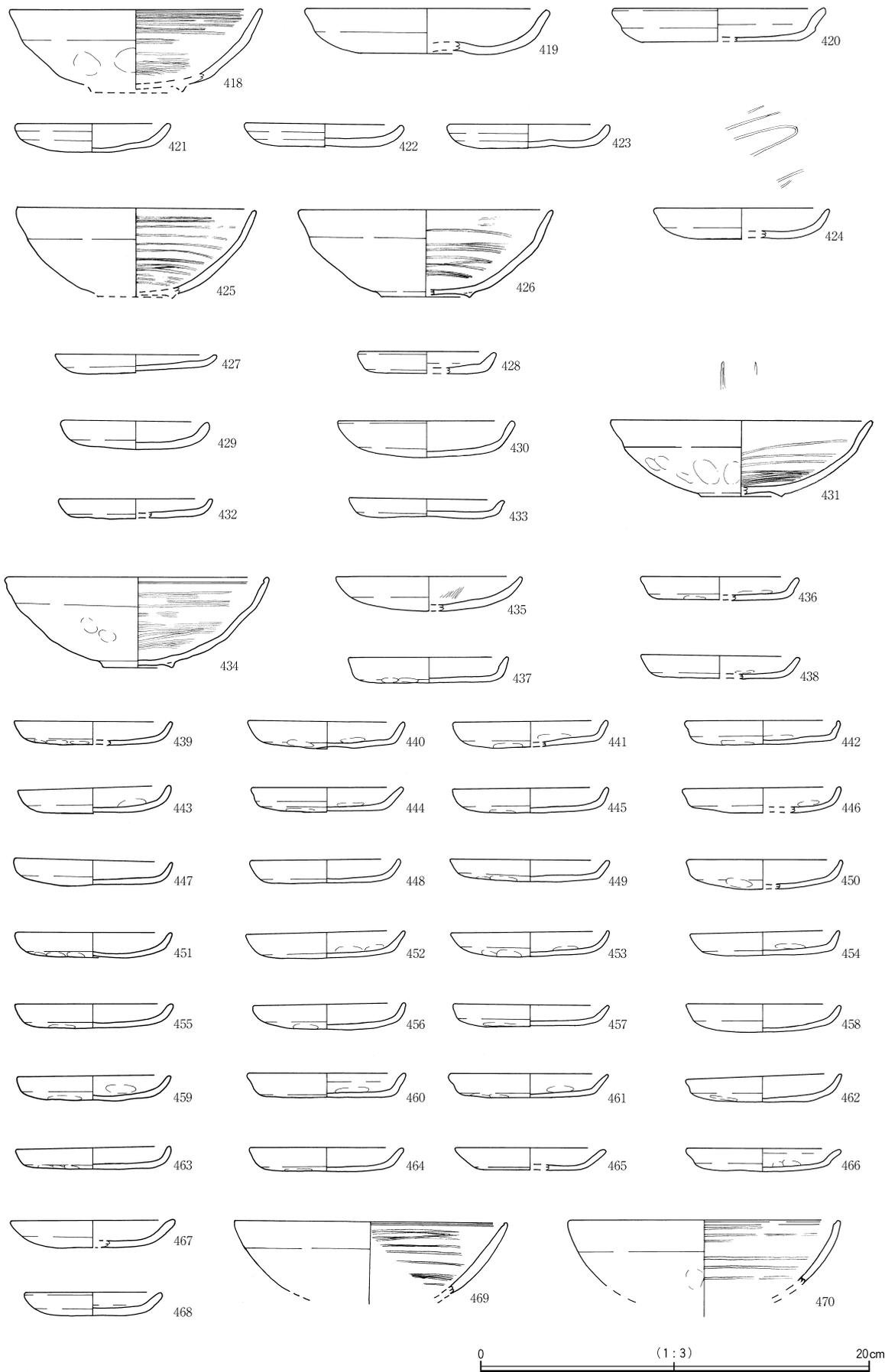


図237 有池遺跡03-1-5調査区 ピット出土遺物

えられる。13世紀後半の所産であろう。

83ピット (図237-465) 465は土師器皿である。口縁部は比較的長くゆるやかに外反する。13世紀後半の所産であろう。

110ピット (図237-466) 466は土師器皿で、口縁部は底部との境に段をもって外反する。14世紀前半に位置付けられる。

263ピット (図237-467) 467は土師器皿である。底部からゆるやかにのびる口縁部を有する。12世紀後半の所産であろう。

512ピット (図237-468) 468は土師器皿。胎土には1mm大の石英、長石、チャートなどの砂粒を含む。13世紀後半の所産と考えられる。

117ピット (図237-469) 469は楠葉型瓦器椀である。口縁端部には沈線を有し、口縁部は内湾ぎみにのびる。Ⅲ-2期(13世紀前半)に位置付けられるものである。

509ピット (図237-470) 470は楠葉型瓦器椀で、口縁端部には非常に細い沈線がめぐる。Ⅲ-2期(13世紀前半)の所産である。

4ピット (図238-471) 471は土師器皿。口縁部は開きぎみに立ち上がる。13世紀前半の所産であろう。

532ピット (図238-472) 472は土師器皿で、大きく外反する口縁部をもつ。14世紀前半の所産である。

5ピット (図238-473) 473は瓦質三足釜。鏝は短く、内傾する口縁部をもつ。体部外面には煤が付着する。

136ピット (図238-474) 474は楠葉型瓦器椀。内面にはハケメが明瞭に認められる。Ⅲ-2期(13世紀前半)の所産である。

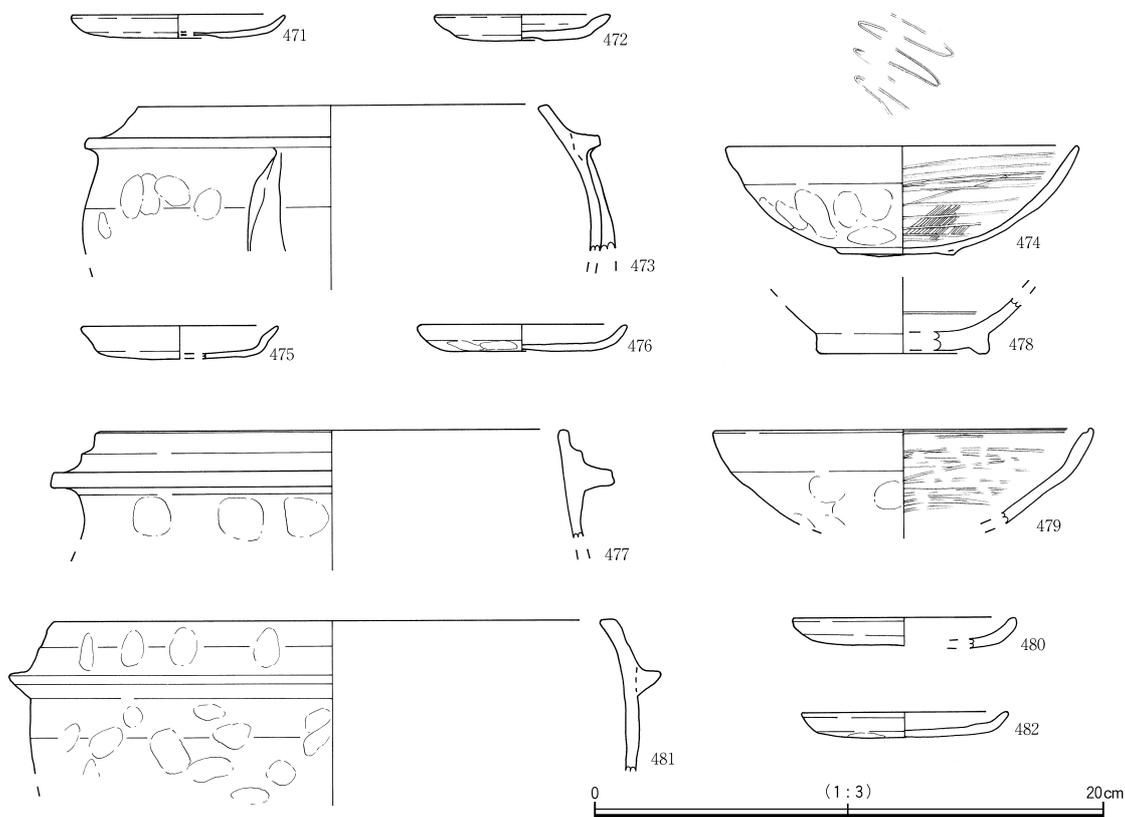


図238 有池遺跡03-1-5調査区 ピット出土遺物

- 140ピット (図238-475) 475は土師器皿である。14世紀前半の所産である。
- 165ピット (図238-476) 476は土師器皿。口縁部は上方に屈曲する。13世紀後半の所産であろう。
- 182ピット (図238-477) 477は瓦質羽釜である。炭素が十分に吸着せず部分的に土師質となる。口縁部外面には段を有する。
- 146ピット (図238-478) 478は白磁椀 (Ⅳ類) の底部と考えられる。見込みには圏線がめぐる。11世紀後半～12世紀前半の所産であろう。
- 529ピット (図238-479、480) 479は楠葉型瓦器椀である。Ⅲ-1期 (12世紀末～13世紀初頭) の所産と考えられる。480は土師器皿である。口縁部および内面数ヶ所に煤が付着する。
- 582ピット (図238-481、482) 481は瓦質羽釜である。口縁部は内傾ぎみにのび、断面三角形の鏝を貼り付ける。外面には指頭圧痕が明瞭に残る。482は土師器皿。口縁部を短く上方へ屈曲させる。13世紀前半の所産であろう。
- 222ピット (図239-483) 483は楠葉型瓦器椀。Ⅲ-3期 (13世紀後半) に属するものと考えられる。
- 219ピット (図239-484) 484は楠葉型瓦器椀である。端部には細く沈線をめぐらせる。Ⅲ-2～Ⅲ-3期 (13世紀前半～後半) の所産であろう。
- 622ピット (図239-485) 485は楠葉型瓦器椀である。内面の調整は磨耗しており確認できない。Ⅲ-3期 (13世紀後半) の所産であろう。
- 216ピット (図239-486～488) 486は楠葉型瓦器椀である。Ⅲ-3期の所産である。487、488は土師器皿。口縁部は上方に屈曲させる。これらは13世紀後半に位置付けられる。
- 229ピット (図239-489～492) 489は楠葉型瓦器椀である。内面には見込み部分を中心にハケメが残る。底部は高台を意識して円形にナデを施している。490も楠葉型瓦器椀であるが、こちらは底部にしっかりと粘土を貼り付けて高台を作り出している。491、492は土師器皿。これらは13世紀後半～14世紀前半に位置付けられるものである。
- 267ピット (図239-493) 493は楠葉型瓦器椀。口縁部には強くヨコナデを施す。Ⅲ-3期 (13世紀後半) の所産である。
- 203ピット (図239-494) 494も楠葉型瓦器椀である。Ⅲ-2～Ⅲ-3期 (13世紀前半～後半) に位置付けられるものであろう。
- 224ピット (図239-495) 495は土師器皿。口縁部は屈曲をもって立ち上がる。12世紀後半～13世紀前半の所産であろう。
- 226ピット (図239-496～499) 496～498は土師器皿である。496、497は口縁部がゆるやかに屈曲する。499は楠葉型瓦器椀である。口縁部はゆるやかに内湾する。Ⅲ-2～Ⅲ-3期 (13世紀前半～後半) の所産と考えられる。
- 638ピット (図239-500、501) 500は龍泉窯系青磁椀で、口縁部は輪花形を呈する。外面は無文、内面には劃花文を有する (Ⅰ-4c類)。12世紀中葉～後半の所産である。501は瓦器皿である。
- 810ピット (図239-502) 502は瓦器皿である。口縁部は屈曲をもって立ち上がる。
- 218ピット (図239-503) 503は東播系須恵器鉢と考えられる。焼成は土師質で、口縁部には煤が付着している。第Ⅱ期第2段階 (12世紀末～13世紀初頭) の所産と考えられる。
- 661ピット (図239-504、505) 504、505は東播系須恵器鉢。どちらも内面には使用痕が認められる。第Ⅲ期第2段階 (13世紀前半～後半) に位置付けられるものであろう。

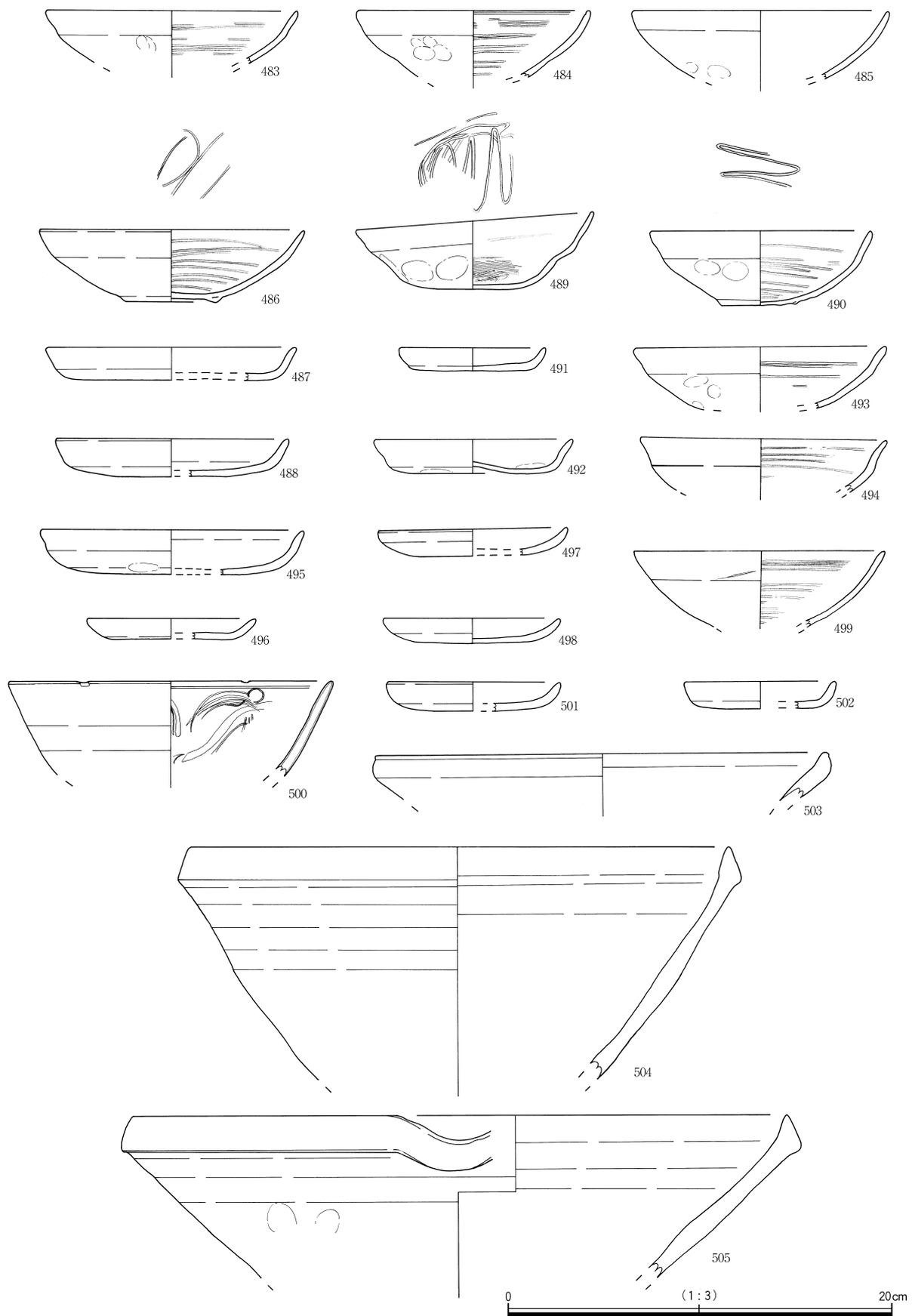


図239 有池遺跡03-1-5調査区 ピット出土遺物

681ピット (図240-506) 506は白磁椀 (X II類か?)。口縁部外面をケズリ、段をなして外反させる。体部にはヘラ描文を施す。11世紀後半~12世紀前半の所産であろう。

246ピット (図240-507) 507は白磁皿 (VII類か?)。底部は無釉で、円盤状を呈する。見込みには草花文を陰刻する。11世紀後半~12世紀前半の所産であろう。

713ピット (図240-508、509) 508は土師器皿。口径は14.6cmを測る。口縁部には二段ナデを意識しているものと考えられるが、下段のナデは段階的で外面には指頭圧痕が横方向に連続する。509は楠葉型瓦器椀。内面のヘラミガキには若干隙間があり、見込みには連結輪状暗文が描かれる。高台は高い。II-1~II-2段階のものと思われる。これらは、12世紀前半~中葉の所産である。

248ピット (図240-510、511) 510は土師器皿である。口縁部はゆるやかに内湾する。12世紀後半の所産と考えられる。511は楠葉型瓦器椀で、IV-1期 (13世紀後半~14世紀前半) に位置付けられる。

277ピット (図240-512) 512は楠葉型瓦器椀で、内湾する口縁部を有する。IV-1期 (13世紀後半~14世紀前半) の所産である。

275ピット (図240-513) 513は瓦器皿である。見込みに暗文は認められない。13世紀後半の所産であろう。

673ピット (図240-514) 514は土師器皿。口縁部はゆるやかに外反する。12世紀後半の所産であろう。

656ピット (図240-515) 515は土師器皿である。口縁部には面取りを施す。13世紀前半に位置付けられるものであろう。

278ピット (図240-516) 516は土師器皿。口縁部は斜め上方に屈曲させる。13世紀後半の所産であろう。

686ピット (図240-517) 517は土師器皿。13世紀後半の所産であろう。

281ピット (図240-518、519) 518は土師器皿。器壁は非常に厚い。519は楠葉型瓦器椀である。口縁端部には非常に細い沈線を有する。III-1~III-2期 (12世紀末~13世紀前半) の所産と考えられる。

684ピット (図240-520) 520は瓦器皿。見込みには暗文がなく、ナデ調整によって仕上げる。13世紀後半の所産であろう。

672ピット (図240-521) 521は楠葉型瓦器椀。底部には断面三角形の大きな高台が貼り付けられる。13世紀後半 (III-3期) に位置付けられる。

249ピット (図240-522) 522は大和型瓦器椀である。口縁部には強くナデを施し、外面のヘラミガキには分割性は認められない。III-A (新) 段階 (12世紀末~13世紀初頭) に位置付けられるものである。

272ピット (図240-523、524) 523は土師器皿。口縁部はゆるやかに内湾する。524は楠葉型瓦器椀である。端部には沈線を有する。内面のヘラミガキは粗い。III-2期 (13世紀前半) の所産である。

666ピット (図240-525) 525は瓦器皿。内面には太いジグザグ状暗文を施す。13世紀前半の所産と考えられる。

812ピット (図240-526~528) 526~528は楠葉型瓦器椀である。526、527は端部に沈線が残る。528は断面三角形の高台が貼り付けられるが、粘土紐の端が処理されておらず、ひしゃげた高台となっている。これらはIII-2~III-3期 (13世紀前半~後半) の所産である。

307ピット (図240-529、530) 529は土師器皿。口縁部は幅広くナデを施し内湾する。内面には不定方向のナデを施す。12世紀後半の所産と考えられる。530は楠葉型瓦器椀である。底径に比して口径が

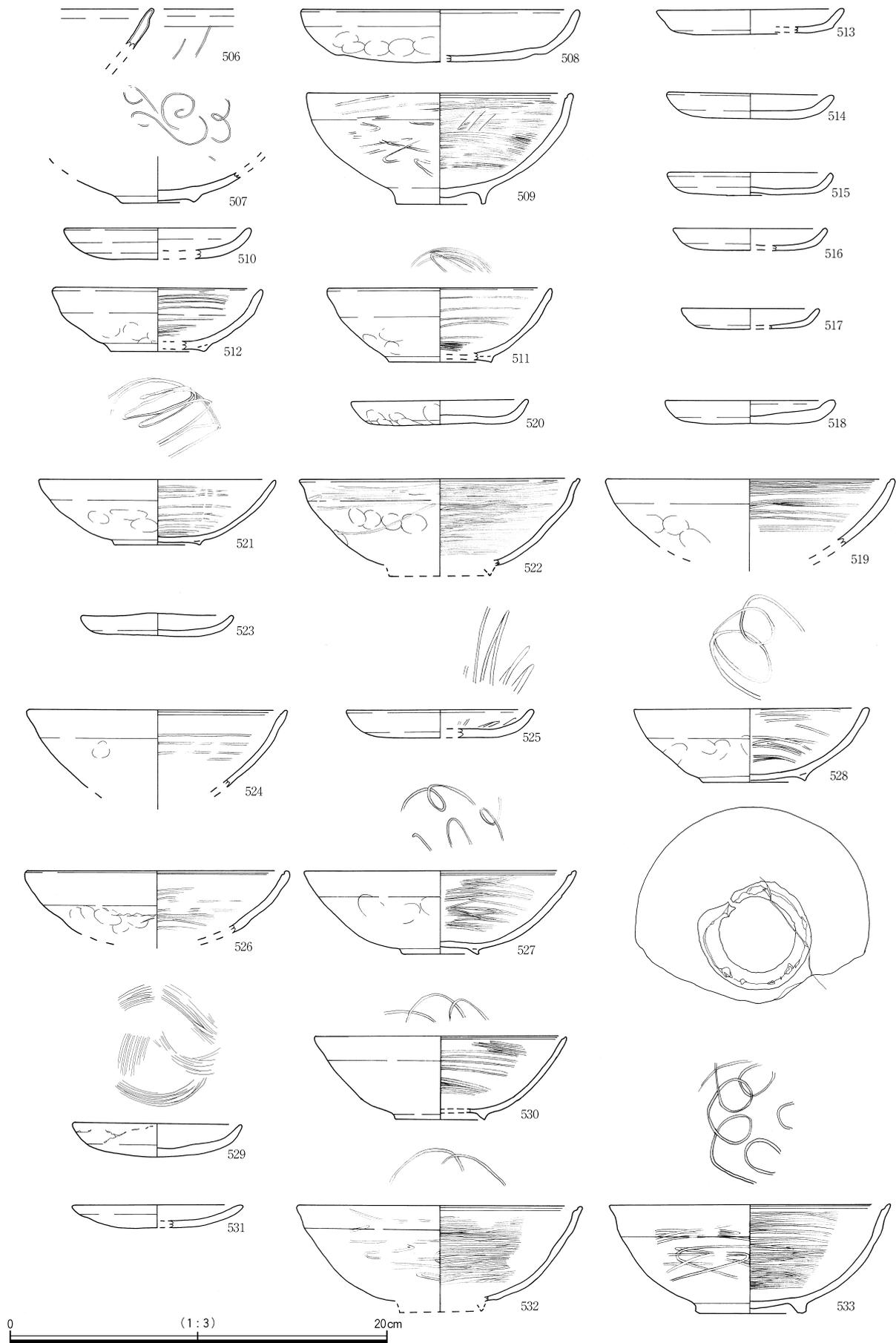


図240 有池遺跡03-1-5調査区 ピット出土遺物

大きい。Ⅲ-2期（13世紀前半）の所産であろう。

304ピット（図240-531） 531は土師器皿である。口縁部はゆるやかに立ち上がる。12世紀後半の所産と考えられる。

284ピット（図240-532、533） 532、533は楠葉型瓦器椀である。内面のヘラミガキは密で、外面には分割ヘラミガキを施す。Ⅱ-2期（12世紀中葉）の所産と考えられる。

818ピット（図241-534） 534は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期（13世紀後半）に位置付けられるものである。

663ピット（図241-535） 535は楠葉型瓦器椀である。内湾する口縁部を有する。Ⅲ-3期（13世紀後半）の所産である。

283ピット（図241-536） 536は土師器皿。口縁部はゆるやかに屈曲する。13世紀後半の所産であろう。

288ピット（図241-537） 537は楠葉型瓦器椀。内面にはハケメが明瞭に認められる。Ⅲ-3期（13世紀後半）の所産である。

671ピット（図241-538） 538は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期（13世紀後半）の所産と考えられる。

728ピット（図241-539） 539は大和型瓦器椀と考えられる。外面には粗く分割ヘラミガキが施され

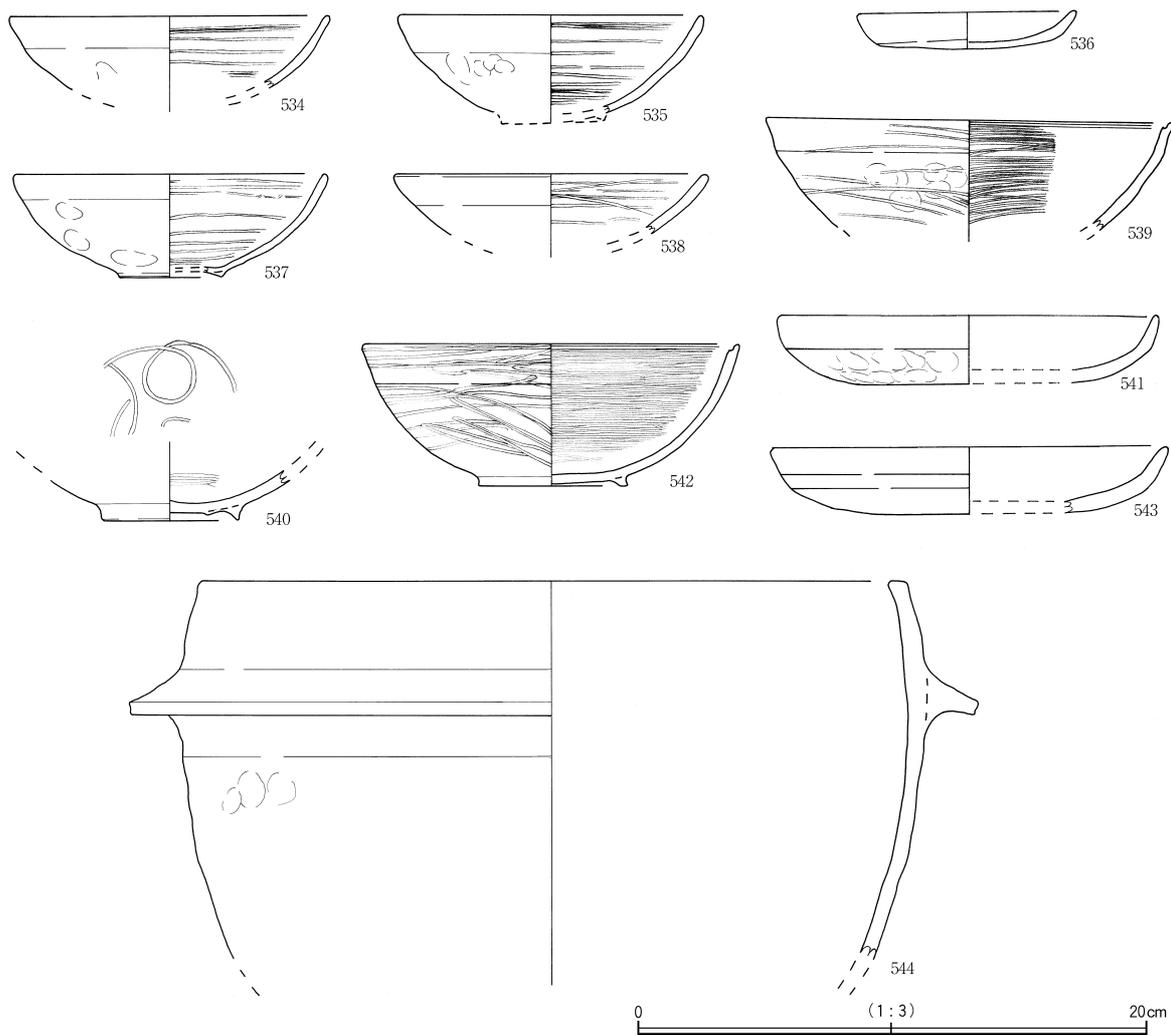


図241 有池遺跡03-1-5調査区 ピット出土遺物

る。Ⅲ-A（古）段階（12世紀後半）に位置付けられるものであろう。

728ピット（図241-540） 540は瓦器椀の底部である。内面には密にヘラミガキが施される。見込みは連結輪状暗文。12世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

670ピット（図241-541） 541は土師器皿である。口縁部は二段ナデを意識し、端部は直立ぎみに立ち上げる。12世紀代前半の所産であらう。

724ピット（図241-542、543） 542は大和型瓦器椀。外面には分割ヘラミガキが認められる。Ⅱ-B段階に位置付けられるものであろう。543は土師器皿である。復元口径は15.4cmと大きく、器壁は厚い。以上724ピット出土遺物は、12世紀中葉の所産である。

826ピット（図241-544） 544は土師質羽釜。断面方形の鏝をめぐらし、口縁部は内傾ぎみにのびる。

62井戸（図242-545~547） 545は楠葉型瓦器椀。Ⅲ-3期（13世紀後半）に位置付けられる。546は

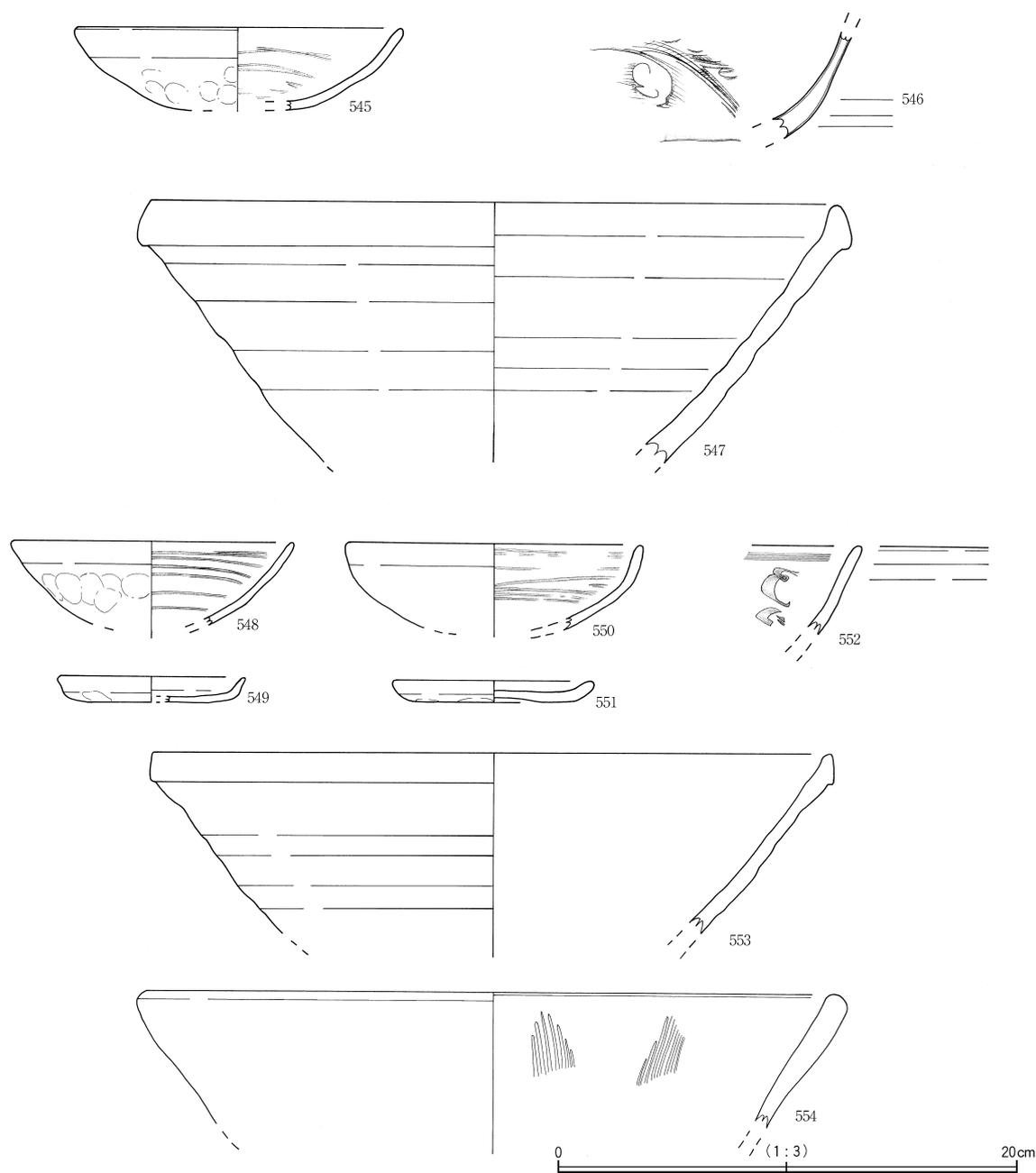


図242 有池遺跡03-1-5調査区 井戸出土遺物

龍泉窯系青磁椀。外面は無文、内面には劃花文を有する。547は東播系須恵器鉢。第Ⅲ期第2段階（13世紀前半～後半）の所産である。

62・63井戸最上層（図249-686） 686は楠葉型瓦器椀でⅣ-2期（14世紀前半）に位置付けられるものである。内面にはハケメが残る。

595井戸（図242-548、549） 548は楠葉型瓦器椀。Ⅳ-2期（14世紀前半）に位置付けられるものと思われる。549は土師器皿。口縁部は強く外反し、外面には稜線を有する。これらは14世紀前半の所産である。

188井戸（図242-550～553） 550は楠葉型瓦器椀である。口縁部は大きく内湾する。Ⅲ-3期（13世紀後半）の所産と考えられる。551は土師器皿。器高が低く扁平で、口縁部は短く上方へつまみあげる。552は龍泉窯系青磁椀。内面には劃花文を有する（Ⅰ-4類）。12世紀中葉～後半。553は東播系須恵器鉢と考えられる。器壁は薄く、焼成はあまく土師質になっている。内面はひどく磨耗している。以上、188井戸出土遺物はやや時期幅があり、12世紀後半～14世紀までの遺物を包含する。

642井戸（図242-554） 554は大和産の瓦質土器播鉢である。口縁部にはヨコナデを施し、断面は四角形になる。佐藤編年A期（14世紀中葉～後半）の所産である。

1258・1259井戸最上層（図243-555～564、図244-576～584） 555、556は瓦器皿。555は見込みに5往復程度のジグザグ状暗文を施す。557～560は楠葉型瓦器椀で、557、560はⅣ-1期、558はⅢ-2期、559はⅢ-3期の所産である。561は口縁部が上方へ立ち上がる土師器皿である。562も土師器皿で、底部にはまるく器高がやや深くなるものである。563は瓦質鍋。口縁部は外折させ、端部は上方につまみあげて受け口状を呈する。564は東播系須恵器甕であるが、焼成はあまく土師質になっている。口縁端部の下方への拡張はわずかで、ほぼ断面方形を呈する。1258・1259井戸最上層出土遺物はやや時期幅があり、13世紀前半～14世紀前半の遺物を含む。576～579は楠葉型瓦器椀。576～578はⅢ-1～Ⅲ-2期、579はⅣ-1期のものである。580、581は瓦器皿。内面はナデ調整を施し、暗文はない。582、583は土師器皿。583は内面に煤が付着している。584は東播系須恵器鉢。第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に位置付けられる。以上、出土遺物は12世紀末～13世紀初頭までの遺物を中心として、13世紀後半の遺物を含む。

1258井戸（図244-565～568） 565、566は土師器皿。567は瓦器皿で、見込みには連結輪状暗文を施す。568は土師質羽釜で、口縁部は内傾ぎみに立ち上がる。

1259井戸（図244-569～575） 569～574は瓦器椀。570は大和型でⅢ-B段階と考えられるものである。571～574は楠葉型。571～573はⅢ-2～Ⅲ-3期（13世紀前半～後半）、574はⅡ-2～Ⅱ-3期（12世紀後半）に位置付けられるものと考えられる。575は土師質羽釜。1259井戸出土遺物は12世紀後半～13世紀後半の遺物を包含する。

6土坑（図245-585～588） 585は須恵器長頸壺。胴部は扁平で、底部は不定方向のケズリ調整を施している。586、587は須恵器杯蓋。586は天井部に比較的丁寧なヘラケズリを施している。588は須恵器杯身。たちあがりは低く、底部のヘラケズリは二分の一程度にのみ施す。586～588は焼成があまく、灰白色を呈する。以上、6土坑出土遺物はTK209～217型式（6世紀末～7世紀前葉）に位置付けられるものと考えられる。

69ピット（図245-589～603） 589～603は土師器皿で、ほぼ同法量、同形である。口径は約8.5cm、器高約1.2cmを測る。口縁部は外方に屈曲し、底部との境には明瞭な境界を有する。胎土には雲母、石英、長

石、チャートなどの砂粒が若干混じり、淡橙色を呈する。598は底部内面をナデによって調整した後、中心部分にユビオサエを施すことにより凹んでいる。595と603は底部に穿孔を有する。13世紀後半の所産と考えられる。

321土坑（図245-604） 604は楠葉型瓦器椀。Ⅳ-2期（14世紀前半）の所産である。

108土坑（図245-605~608） 605は石鍋で、鏝を削り出すタイプのものである。滑石製。内面には擦痕が、口縁端部には削った痕跡が認められる。606は楠葉型瓦器椀。口縁部は強くヨコナデを施すことによって屈曲する。Ⅲ-3期の所産であろう。607、608は土師質羽釜。いずれも鏝が大きく、内傾ぎみにのびる口縁部を有するが、608は口縁端部がヨコナデによって内側に突出する。以上、108土坑出土遺物は、13世紀後半に位置付けられる。

460土坑（図246-609~648） 609~639は土師器皿。609~635は口径7.5~8cm程度の小皿である。口縁部はゆるやかに外反するものと、ナデによって外面に段がつき外反するものがある。636~639は口径10.5~11cmのもので、口縁部に強くナデを施し外反させる。内面には口縁部の屈曲部によって段が付く。640は同安窯系青磁皿。見込みには櫛状工具によるジグザグ状の点描文が描かれる（1-2b類）。641~

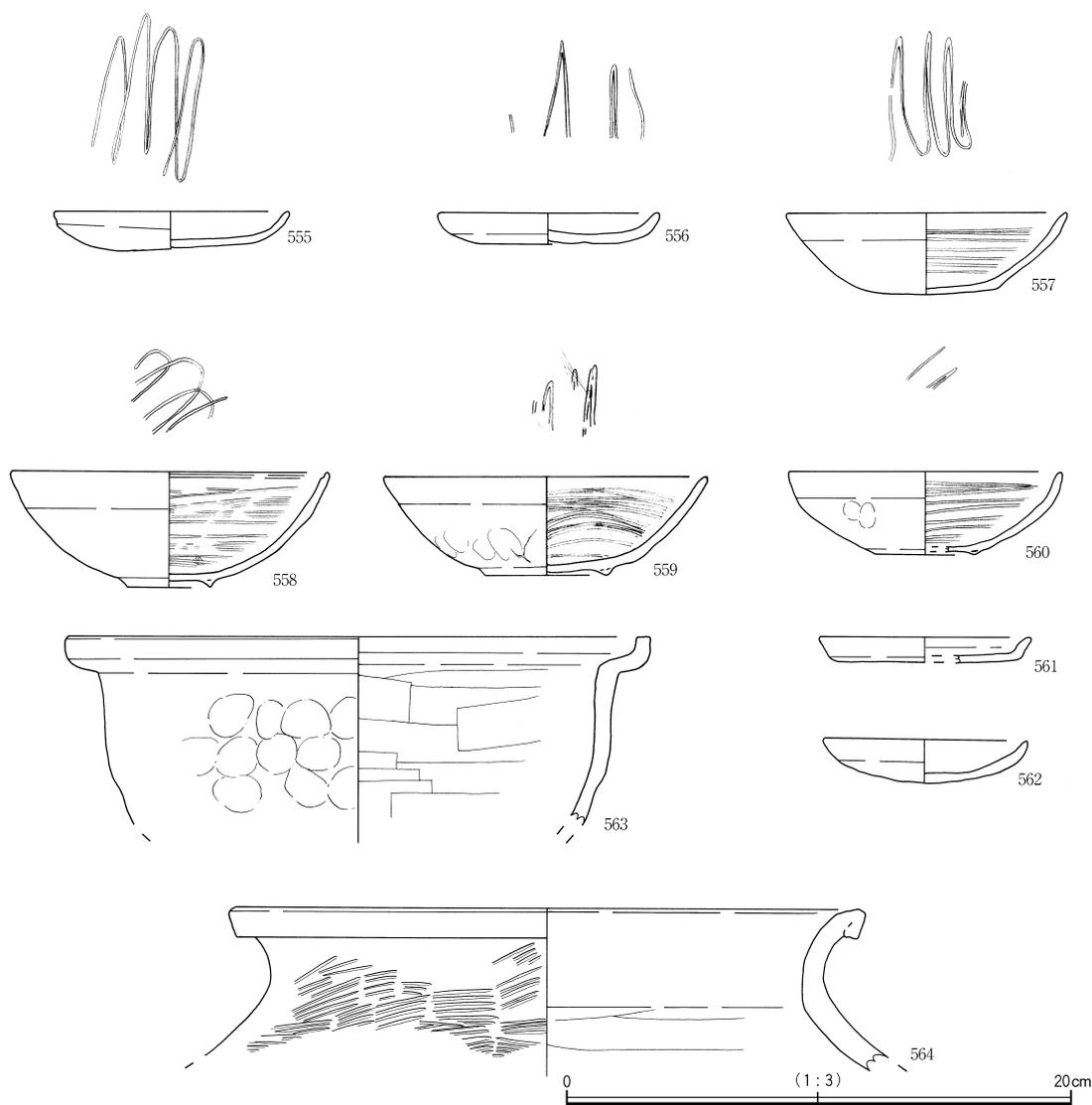


図243 有池遺跡03-1-5調査区 井戸出土遺物

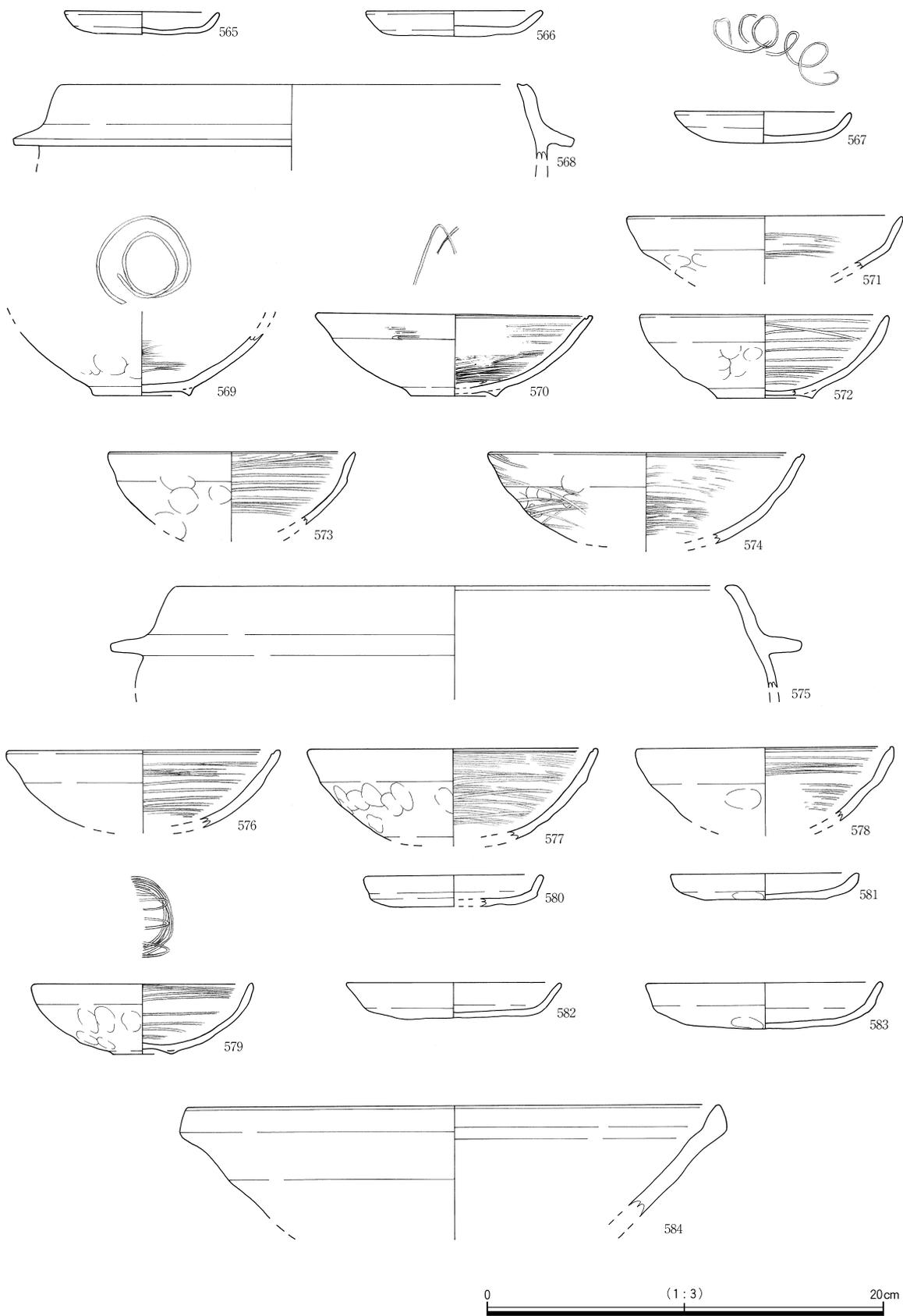


图244 有池遺跡03-1-5 調査区 井戸出土遺物

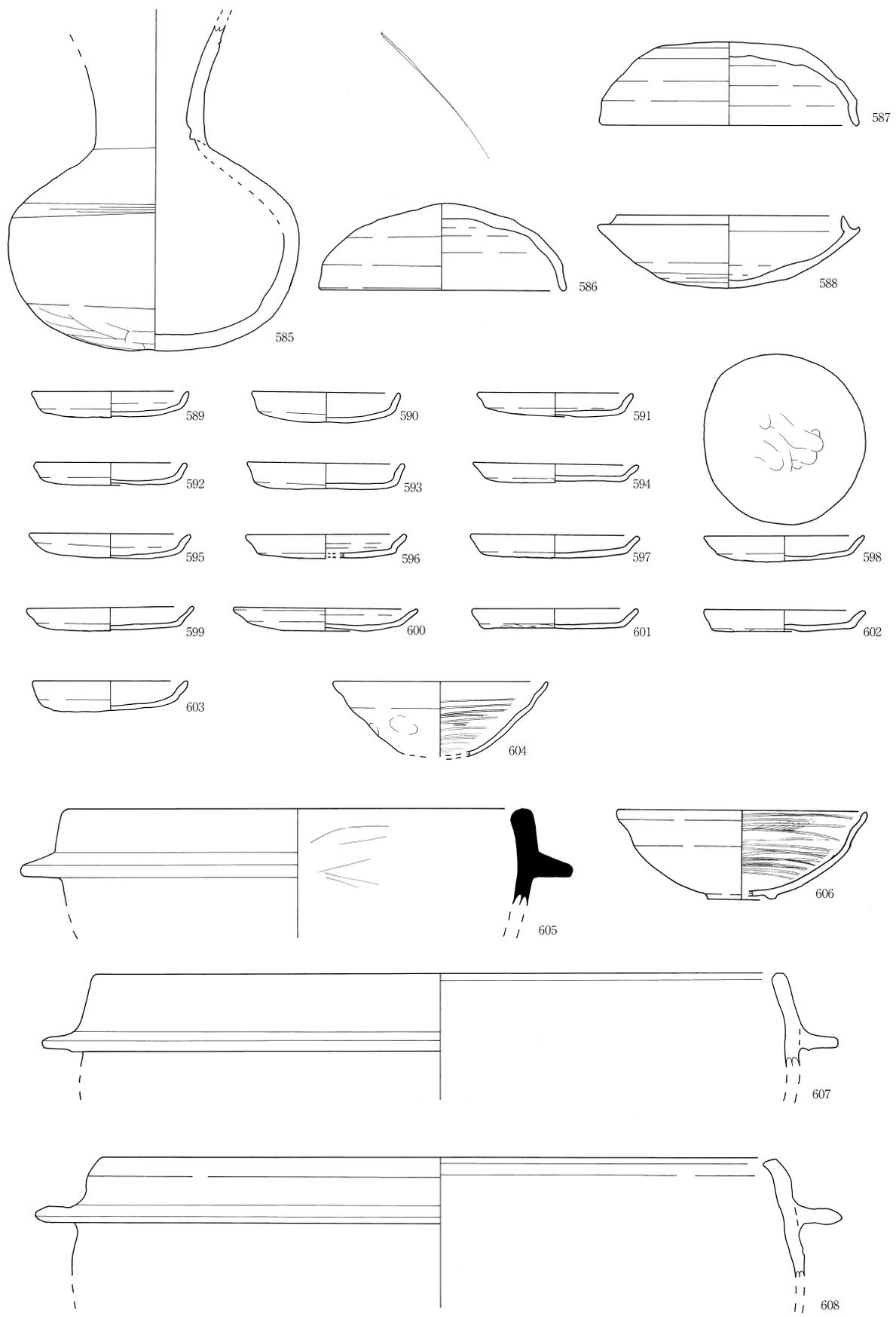


図245 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑・ピット出土遺物

648は楠葉型瓦器椀。Ⅳ-1～Ⅳ-2期（14世紀前半）に位置付けられるものであるが、法量や形態には個体差が大きい。底部を有するもの（641～647）、有しないもの（648）、口縁端部が強いナデによって上方に屈曲するもの（641、642、644～646）、底部からゆるやかにのびるもの（643、647、648）など様々である。見込みにはいずれも2～3往復程度のジグザグ状暗文が施される。以上、460土坑出土遺物は、13世紀後半～14世紀前半の所産である。

56土坑（図247-649、650） 649は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期（13世紀後半）の所産である。650は楠葉型の瓦器皿。見込みの暗文はなく、扁平で口縁部は大きく歪む。

167土坑（図247-651） 651は土師器皿である。14世紀前半の所産と考えられるものである。

79土坑（図247-652～656） 652～654は土師器皿。653は口縁部が大きく外反するものである。654は口径が大きく、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。655、656は楠葉型瓦器椀。656は底部にわずかに粘土を貼り付け高台を作り出している。Ⅳ-2期（14世紀前半）に位置付けられる。これらは654を除いて14世紀前半に位置付けられる。

61土坑（図247-657～659） 657は土師器皿。658、659は楠葉型瓦器椀で、Ⅳ-1～Ⅳ-2期（13世紀後半～14世紀前半）の所産である。

94土坑（図247-660～662） 660は白磁椀（Ⅳ類）である。661は土師器皿。662は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-1～Ⅲ-2期（13世紀前半）の所産である。

54土坑（図247-663～666） 663は瓦質三足釜の脚部。664は龍泉窯系青磁椀で、外面には片切彫りの蓮華文を刻む（Ⅱ-A類）。665、666は瓦器皿である。いずれも楠葉型と考えられ、見込みには暗文を有しない。13世紀後半の所産であろう。

395土坑（図247-667） 667は土師器皿で、口縁部はゆるやかに上方へ屈曲する。13世紀後半に位置付けられるものであろう。

64土坑（図247-668～672） 668は土師器皿。669、670、672は瓦質三足釜。669は鏝が比較的下位に付き、口縁部外面にはヨコナデにより段が付く。内面はナデ調整。670、672は口縁部外面に段がなく、まるくおさめている。672には鏝の直下に1ヶ所、穿孔を有する。671は土師質羽釜。胎土は非常に粗く、器壁も厚い。内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残っている。

以上、64土坑出土遺物は、13世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

391土坑（図247-673～676） 673は瓦器皿。内面には8往復程度のジグザグ状暗文を有する。674は土師器皿である。復元口径8.2cm、口縁部は面取りに近い二段ナデを施す。675、676は楠葉型瓦器椀と考えられる。675は断面三角形の底部を貼り付ける。体部外面のヘラミガキは磨耗している。676は口縁部外面にヘラミガキが認められる。Ⅱ-2～Ⅱ-3期（12世紀後半）の所産と考えられる。以上、391土坑出土遺物は12世紀後半に位置付けられる。

174土坑（図248-677、678） 677は土師器皿。外反する口縁部をもつ。678は楠葉型瓦器椀で、Ⅳ-1期の所産である。以上、174土坑出土遺物は13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。

245土坑（図248-679） 679は楠葉型と考えられる瓦器皿。口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。見込みの暗文は磨耗しており不明瞭である。

166土坑（図248-680、681） 680は楠葉型瓦器椀。681は土師器皿で、口縁部内面は段をもって立ち上がる。これらは13世紀後半の所産である。

143石敷上層（図248-682～685） 682は瓦質鍋である。体部外面はユビオサエ、内面はハケ調整に

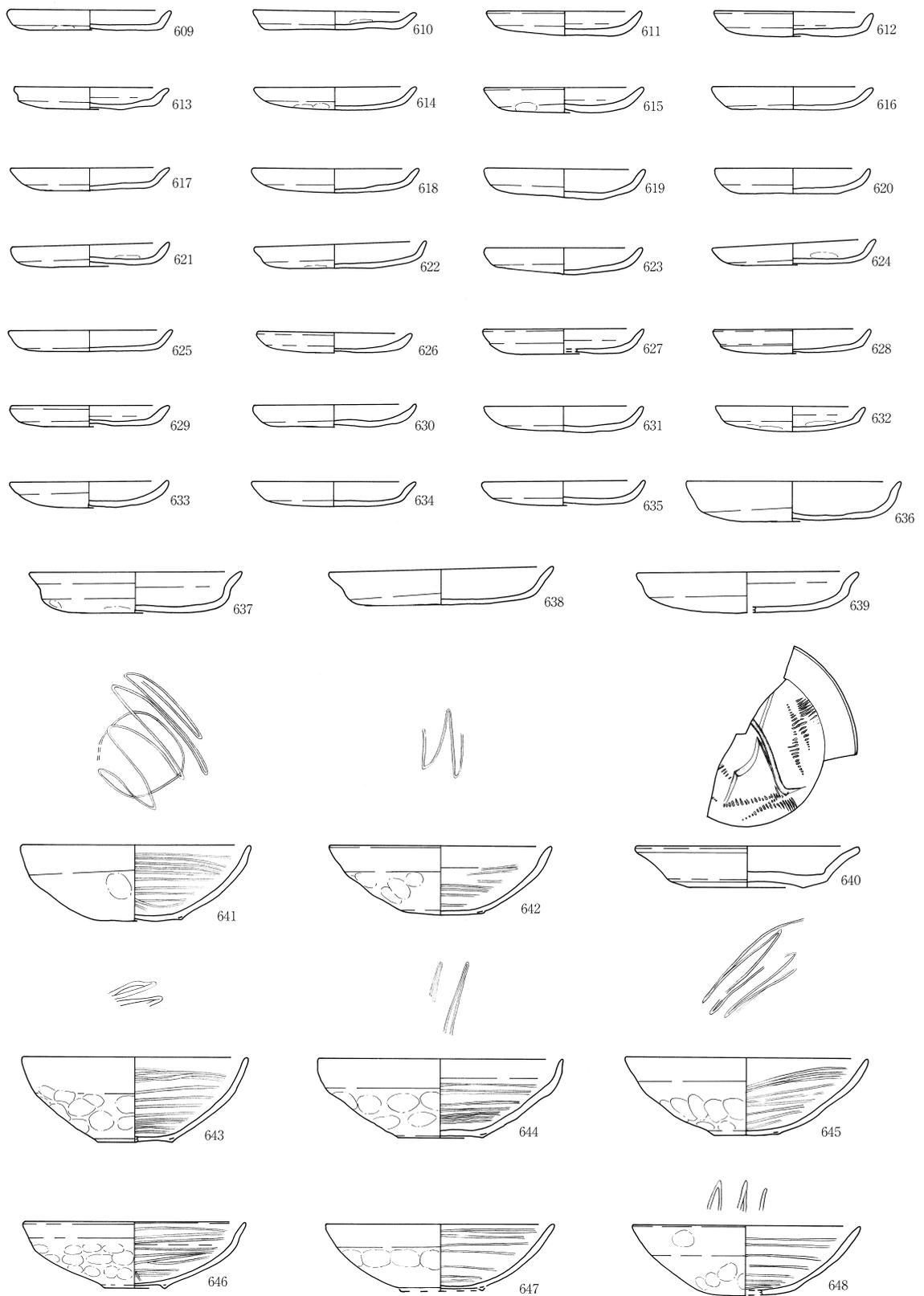


图246 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑出土遺物

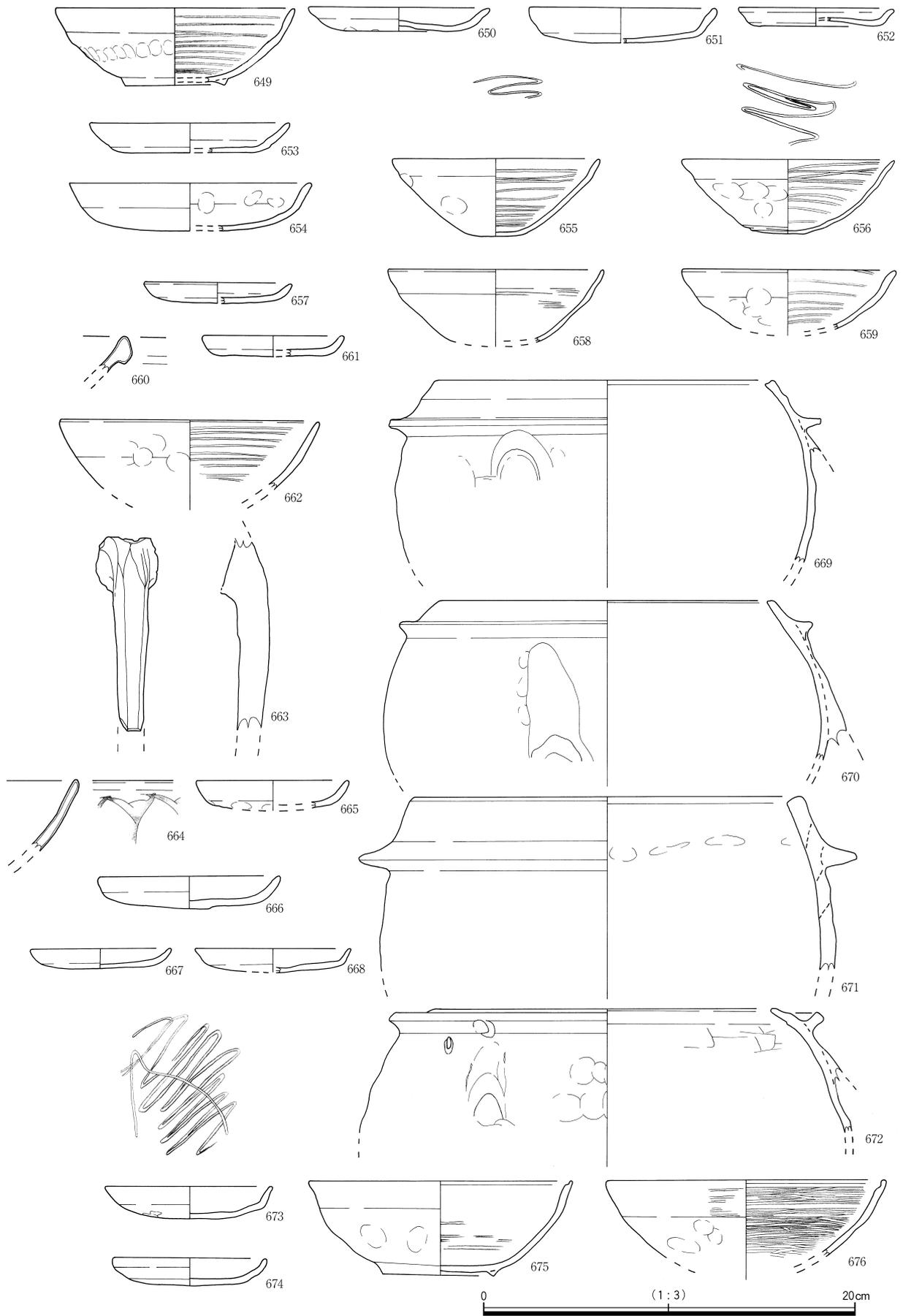


图247 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑出土遺物

よって仕上げる。片口を有し、把手が付くものと思われる。683、684は大和産の瓦質土器播鉢。684は口縁端部にヨコナデによって面をもつ。佐藤編年B期（14世紀末～15世紀初頭）の所産である。685は東播系須恵器鉢。第Ⅲ期第3段階（14世紀後半）に位置付けられるものと考えられる。以上、143石敷出土遺物は14世紀後半～15世紀初頭の所産である。

98土坑（図249-687） 687は楠葉型瓦器椀。内面のヘラミガキは磨耗しており不明瞭である。Ⅲ-1期（12世紀末～13世紀初頭）の所産であろう。

259土坑（図249-688～690） 688は土師器皿で、口縁は斜め上方に屈曲させるものである。689は龍泉窯系青磁椀。外面には鎬蓮弁文を有する（Ⅱ-B類）。690は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期の所産である。以上、259土坑出土遺物は、概ね13世紀後半に位置付けられる。

313土坑（図249-691～695） 691～693は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期～Ⅳ-1期に位置付けられる。693は内面にハケメが明瞭に残る。694、695は土師器皿である。口縁部は外反ぎみに立ち上がる。以上、313土坑出土遺物は、13世紀後半に位置付けられるものであろう。

314土坑（図249-696～699） 696、697は楠葉型瓦器椀。Ⅲ-2～Ⅲ-3期に位置付けられる。698は瓦質羽釜で三足が付くものと思われる。699は東播系須恵器甕である。口縁端部の下方への拡張はそれほど大きくはなく肥厚する程度で、端部上端のナデもゆるい。以上、314土坑出土遺物は13世紀前半～後

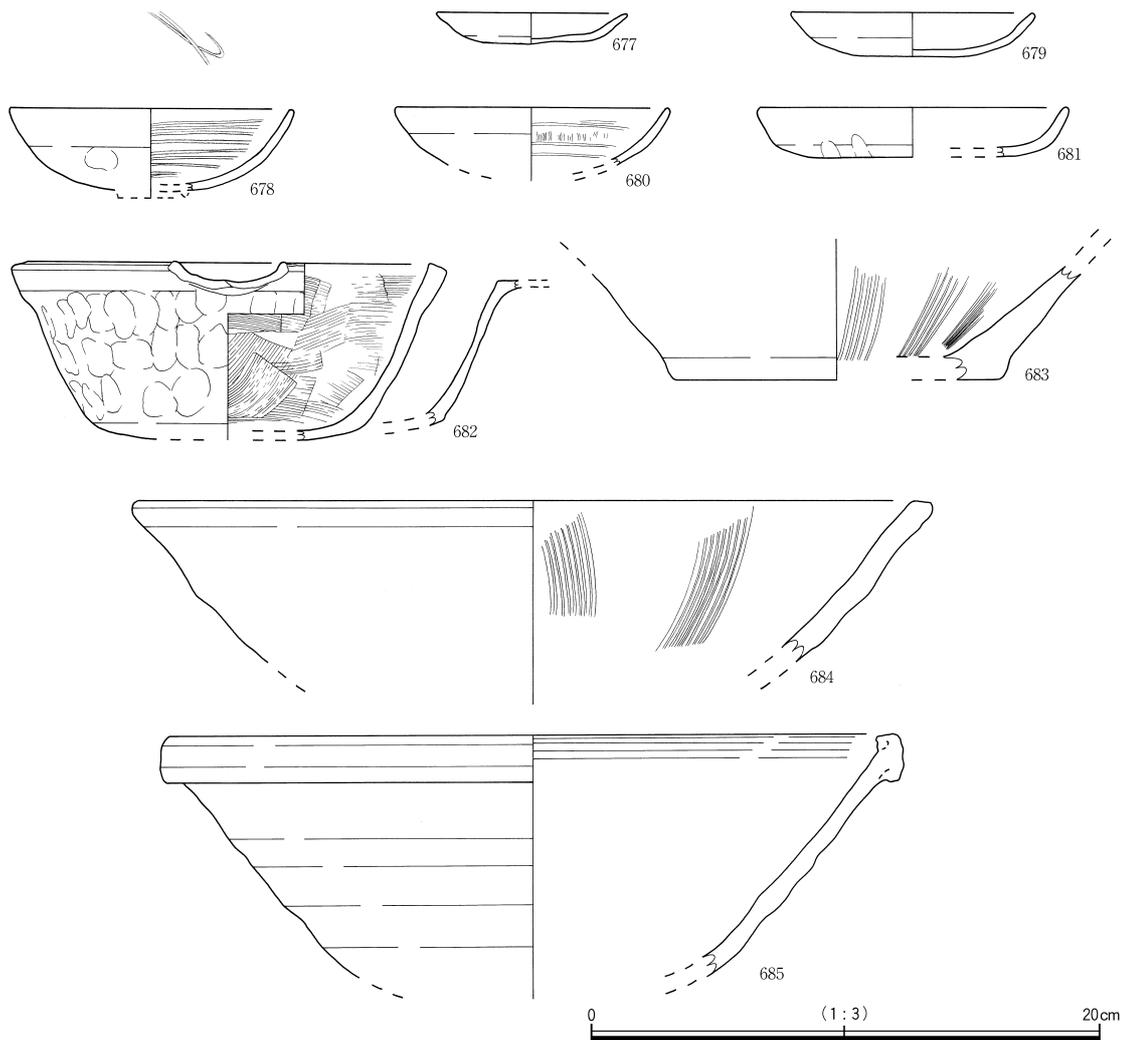


図248 有池遺跡03-1-5調査区 土坑等出土遺物

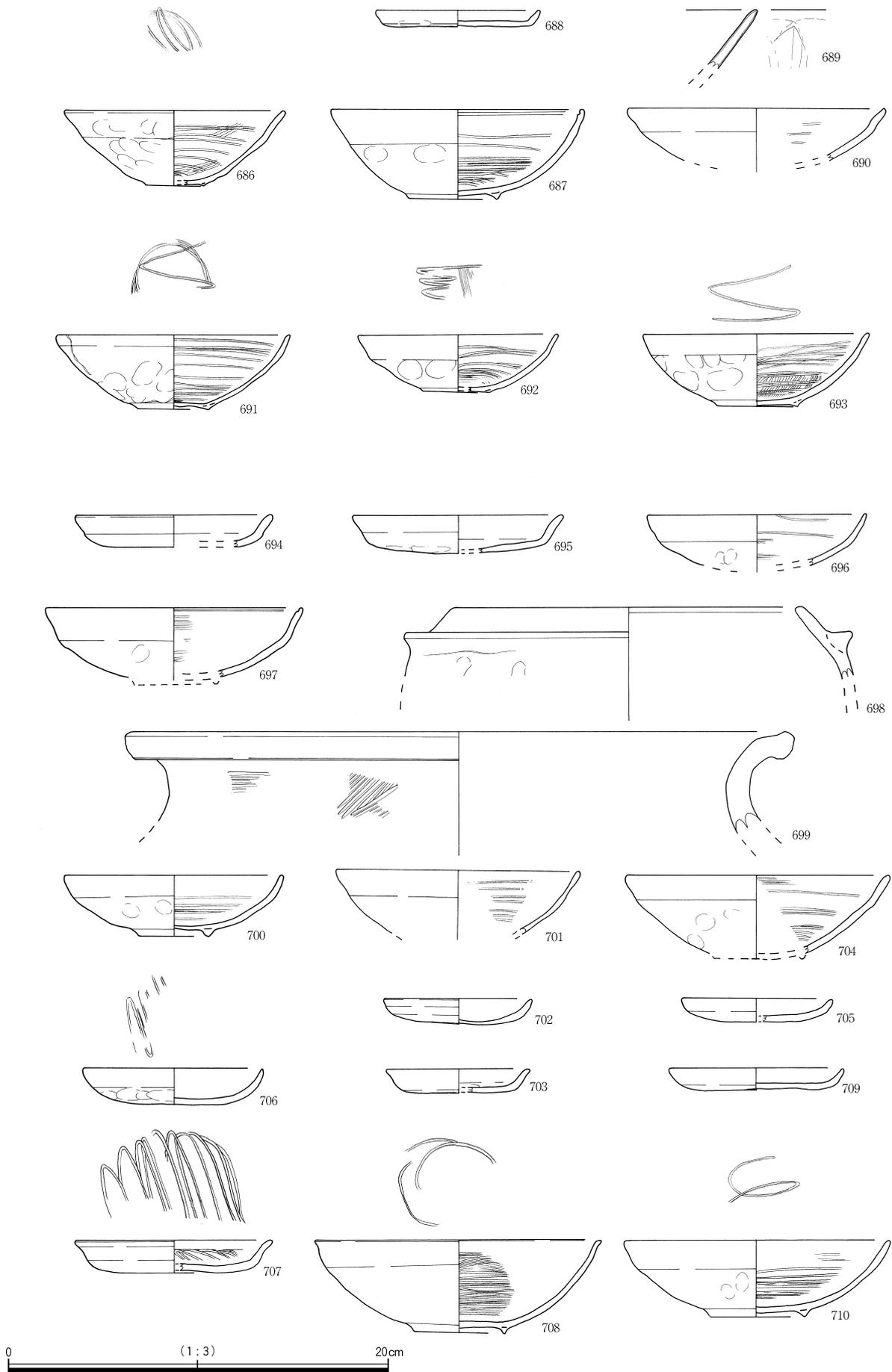


图249 有池遺跡03-1-5 調査区 土坑出土遺物

半の所産である。

678土坑 (図249-700) 700は楠葉型瓦器椀。Ⅳ-1期 (13世紀後半) に位置付けられるものであるが、断面三角形のしっかりした底部が貼り付けられる。

610土坑 (図249-701~703) 701は楠葉型瓦器椀。Ⅲ-1~Ⅲ-2期 (12世紀末~13世紀前半) に位置付けられるものと考えられる。702は土師器皿で、底部はまるく、口縁部を短く上方へ屈曲させるものである。703は瓦器皿。これらは13世紀前半の所産であろう。

820土坑 (図249-704、705) 704は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-2期 (13世紀前半) の所産である。705は土師器皿。口縁部が内湾気味にたちあがるもので、灰白色を呈する。

729土坑 (図249-706~708) 706、707は瓦器皿である。706は口縁部がゆるやかにたちあがるが、707は直立ぎみに立ち上げ、端部を外反させるものである。708は大和型瓦器椀。外面のヘラミガキは磨耗しており確認できないが、12世紀後半に位置付けられるものである。見込みには螺旋状暗文を施す。

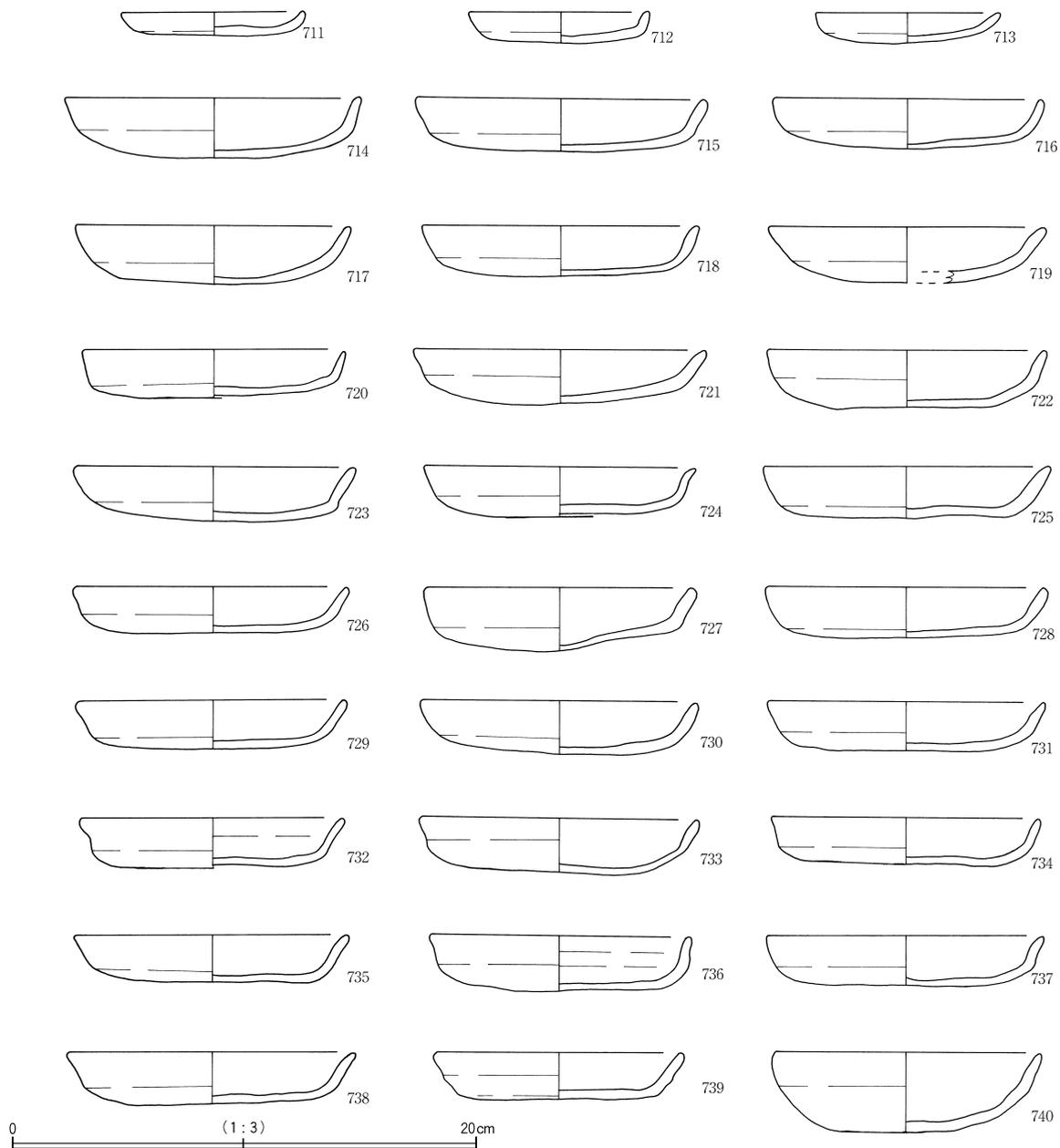


図250 有池遺跡03-1-5調査区 ピット出土遺物

306土坑（図249-709、710） 709は瓦器皿である。器高が低く扁平で、口縁部は斜め上方に屈曲させる。見込みの暗文はない。710は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期（13世紀後半）に位置付けられるものである。

653ピット（図250-711~740） 711~740は土師器皿である。口径7.5~8cm前後のもの（711~713）と、口径12cm前後のもの（714~740）に大別できる。前者は口縁端部を短く上方に屈曲させる。後者は若干形態差があるものの、口縁部を直立ぎみに立ち上げ、内面の底部と口縁部境には圏線状に段が付くものが多い。740は器高が高く杯形を呈する。伊野分類Gタイプに近い形状をなす。色調は概ね淡褐色系であるが、739は灰白色を呈する。以上、653ピット出土遺物は13世紀後半の所産と考えられる。

10溝（図251-741~754） 741~746は土師器皿。口径は7.5~8cm程度を測り、口縁部は大きく外反する。747、748は楠葉型瓦器椀である。いずれもⅣ-2期（14世紀前半）の所産であるが、748のみ高台の貼り付け痕が認められる。749、750は瓦質三足釜。口縁部外面はヨコナデによりゆるい段を形成している。751は瓦質羽釜と考えられるが、土師質焼成になっている。口縁部には段を有するが胴部の張りは弱い。鏝以下には煤が付着している。752は瓦質羽釜で、鏝はやや下位に付く。753は瓦質羽釜。幅広の鏝を有し、鏝上はヨコナデにより二条の凹線が入ったようになっている。754は東播系須恵器鉢。第Ⅲ期第1段階（13世紀前半~後半）。以上、10溝出土遺物は概ね14世紀前半に位置付けられる。

11溝（図251-755~757） 755~757は土師器皿である。756は口縁部を短く上方に屈曲させる。757は口縁部が底部と明確な境界をもって屈曲する。これらは概ね14世紀前半に位置付けられる。

11・385溝最上層（図260-891~896） 891は土師器皿である。口縁部は大きく外反し、外面はヨコナデにより段が付く。892は楠葉型瓦器椀で、Ⅳ-1期に位置付けられるものである。底部には幅広く粘土を貼り付けて高台を作り出している。893、894は東播系須恵器甕。いずれも焼成はあまく土師質になっている。895は東播系須恵器鉢。焼成は非常にあまく、土師質になる。第Ⅲ期第1段階（13世紀前半~後半）に位置付けられるものであろう。896は瓦質羽釜。口縁部は内傾ぎみに立ち上がり、外面には二条の沈線を入れる。以上、出土遺物は14世紀前半までに位置付けられるものと考えられる。

12溝（図251-758~761） 758、759は土師器皿。759は口縁部が直立ぎみに立ち上がる。760、761は楠葉型瓦器椀である。いずれもⅣ-2期（14世紀前半）の所産である。以上、12溝出土遺物は13世紀後半~14世紀前半に位置付けられる。

58溝（図252-762~765） 762、763は土師器皿である。764は楠葉型瓦器椀である。内面にはハケメが明瞭に認められる。Ⅳ-2期（14世紀前半）。765は常滑焼甕で、6a型式（12世紀後半）に属するものと考えられる。以上、58溝出土遺物は概ね14世紀前半の所産である。

389・20溝、20溝（図253・254-766~788） 766~771は土師器皿。766、767は口縁部が短く上方へのびるもの、768、770は大きく外反する口縁部を有するものである。772~776は楠葉型瓦器椀である。772、773は見込みにハケメが明瞭に残る。体部は開きぎみに立ち上がり、口縁部には強くヨコナデを施している。773は土師質で、内面のヘラミガキは細く粗い。775は底部に砂粒を多く含む質の異なる粘土を貼り付け高台を作り出す。これらはⅣ-1~Ⅳ-2期（14世紀前半）に位置付けられる。777~784は瓦質羽釜。778は三足が付く可能性が高い。口縁部は内傾し、鏝は水平ではなく斜方向に貼付られる。779、780は瓦質三足釜。781、782は炭素が十分に吸着しておらず土師質に近い焼成である。鏝は上位に貼り付けられている。783、784も外面が瓦質、内面は土師質焼成になっている。784は大型で、口縁部外面には凹線が2本入る。785は土師質羽釜で、口縁を外方に強く屈曲させ端部を折り返す。菅原分類大和B型。786は東播系須恵器鉢である。787、788は東播系須恵器甕であるが、土師質になっている。787

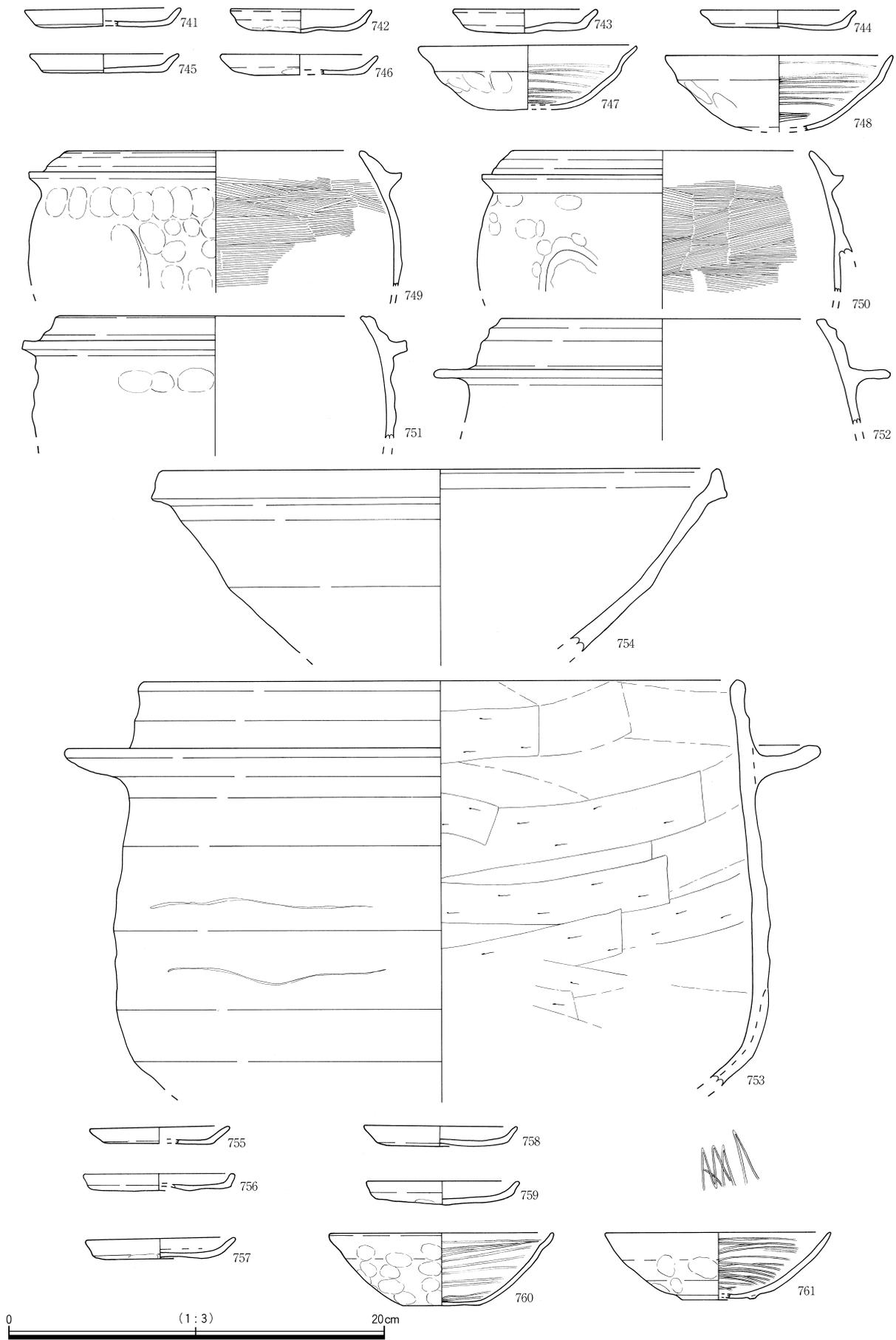


图251 有池遺跡03-1-5調査区 溝出土遺物

は口縁上端部がヨコナデにより凹線状に凹み、端部の面が大きく外傾する。788は口縁部が強く外反する。ともに体部外面は平行タタキを施す。以上、出土遺物は概ね13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。

446土坑（図254-789～791） 789、790は土師器皿。790は口縁部が長く、強く外反する。791は東播系須恵器鉢と考えられるが、焼成は非常にあまく土師質になっている。第Ⅲ期第2段階（14世紀前半）に位置付けられるものであろう。以上、446土坑出土遺物は14世紀前半の所産と考えられる。

20溝・312溝（図254-792～797） 792～795は土師器皿である。792、795は口縁部下位にヨコナデによる段がつき、外反するものである。793、794は口縁部がゆるやかに立ち上がる。796は楠葉型瓦器椀で、Ⅳ-2期（14世紀前半）の所産であらう。内面にはハケメが明瞭に残る。797は東播系須恵器鉢。第Ⅲ期第2段階（14世紀前半）の所産である。以上、20溝・312溝出土遺物は13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。

18溝（図255-798～809） 798～802は土師器皿。798は口縁部が強く外反するものである。799、800は上方へ短くのびる口縁部を有する。801は口縁部が直立ぎみに立ち上がる。803～808は楠葉型瓦器椀。Ⅲ-3～Ⅳ-2期（13世紀後半～14世紀前半）に位置付けられるものである。809は瓦質羽釜で、焼成はややあまい。胴部が張っていることから、三足が付く可能性がある。以上、18溝出土遺物は13世紀後半～14世紀前半の所産である。

土器溜り①（図256-810～813） 810は土師器皿。口縁部はゆるやかに外反する。811は楠葉型瓦器椀である。内面にはハケメが顕著に残る。Ⅳ-1期（13世紀後半～14世紀前半）に位置付けられる。812は東播系須恵器鉢。813は東播系須恵器甕であるが、土師質焼成になっている。口縁部は反りかえり、端部は下方に垂下する。以上、土器溜り①出土遺物は、概ね13世紀後半～14世紀前半に位置付けられるものと考えられる。

土器溜り②（図256-814～827） 814～823は土師器皿。814～817は口径8cm前後の小皿、818～823は口径11cm前後の大皿である。口縁部は外反してのびる。824～827は楠葉型瓦器椀で、口縁部は直線的に外方へのびる。Ⅳ-2期（14世紀前半）に位置付けられるものである。以上、土器溜り②出土遺物は14世紀前半の所産である。

23溝・65溝（図257-828） 828は土師器皿である。口縁部は短く上方へ立ち上がる。13世紀前半の所産であらう。

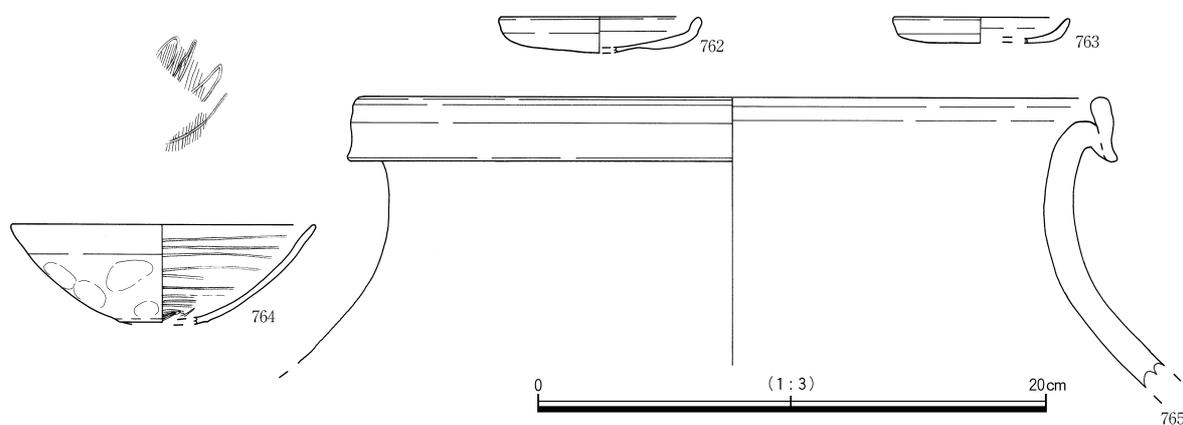


図252 有池遺跡03-1-5調査区 溝出土遺物

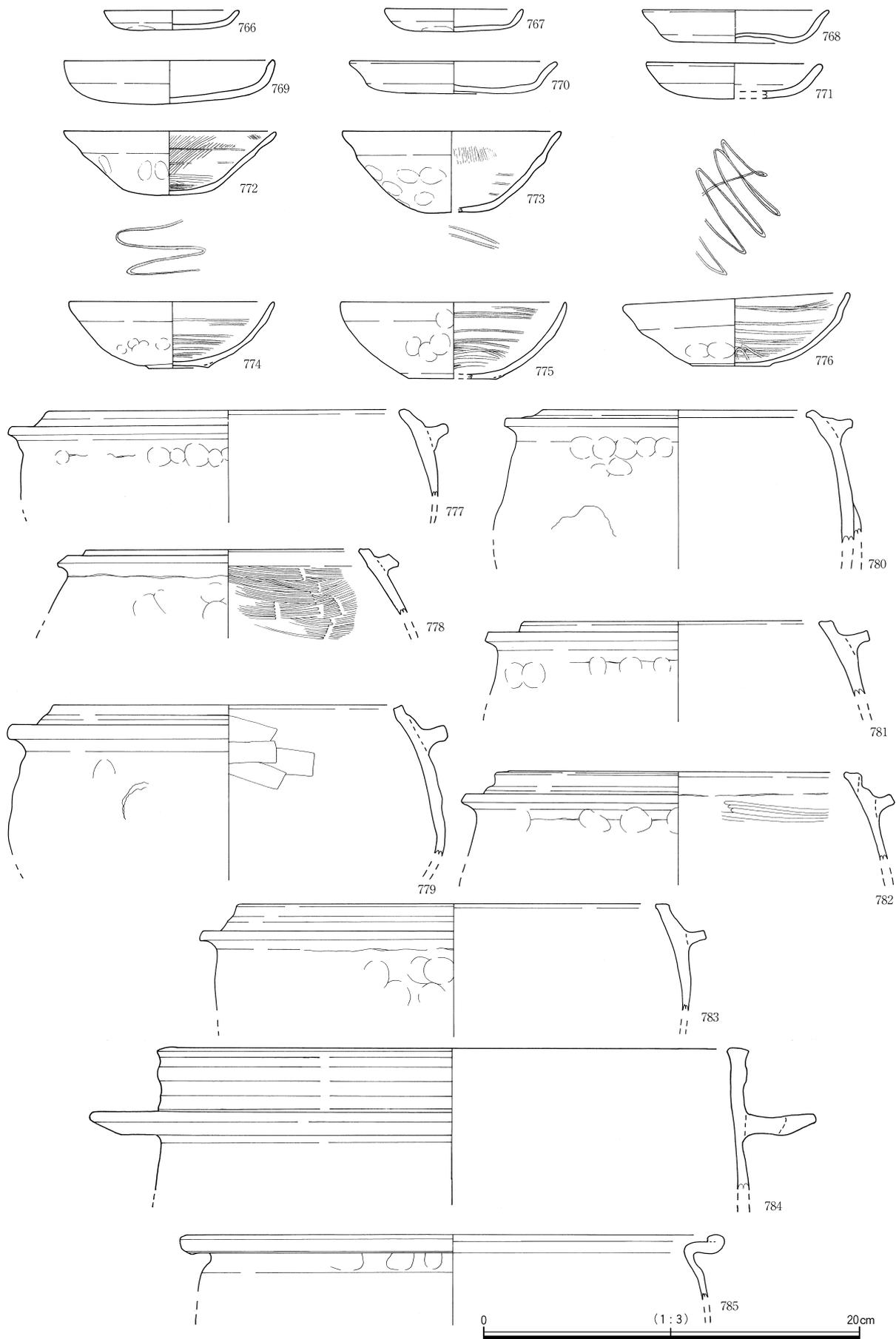


图253 有池遺跡03-1-5調査区 溝出土遺物

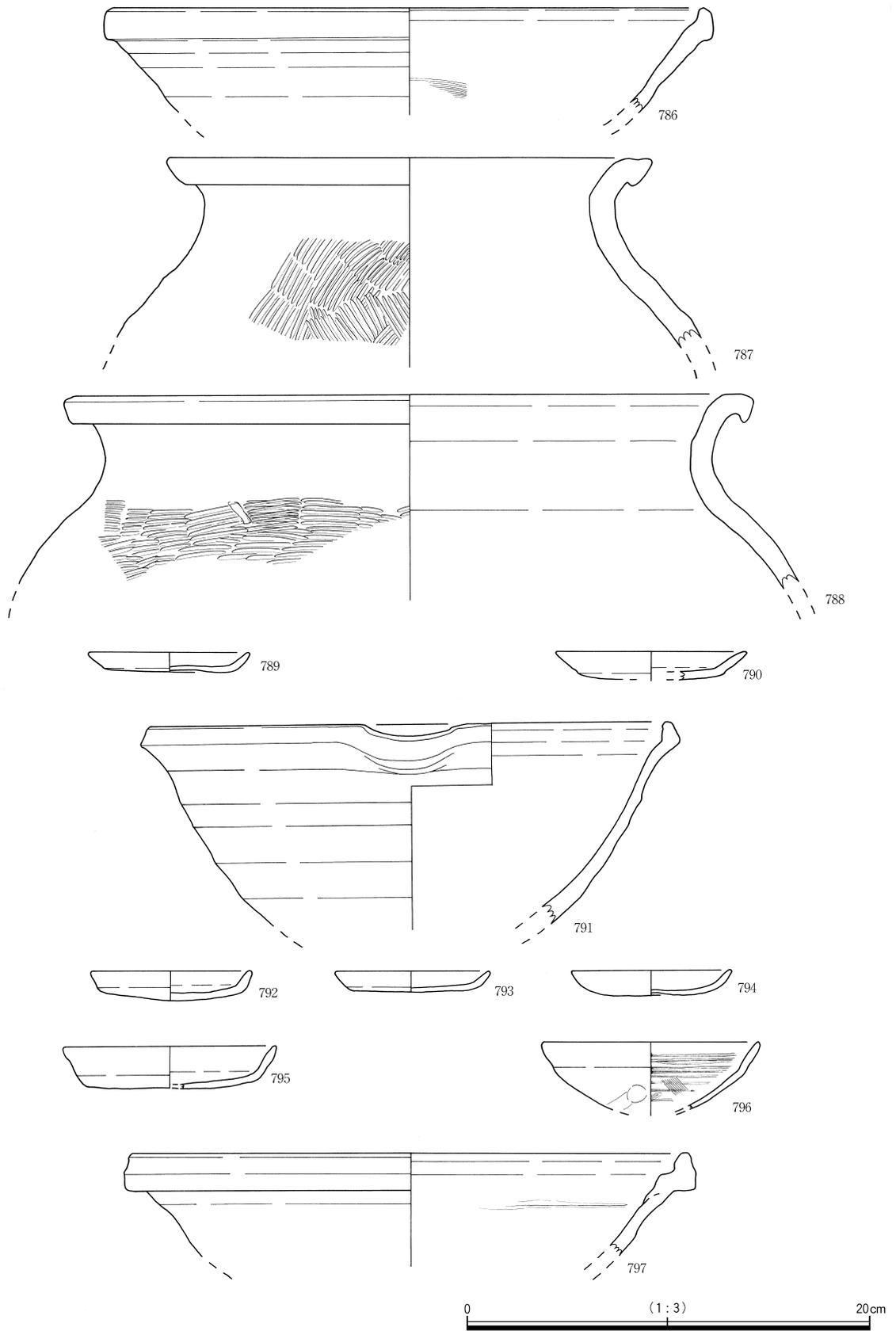


图254 有池遺跡03-1-5 調査区 溝・土坑出土遺物

65溝・67土坑（図260-906~910） 906、907は土師器皿である。906は口径9.9cm、907は復元口径12.5cmを測る。12世紀後半の所産と考えられる。908、909は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期（13世紀後半）に位置付けられるものである。910は瓦質三足釜と考えられるが、焼成があまく、灰白色を呈する。内面はハケ調整。

24溝（図257-829~840） 829~833は土師器皿。829~831は口縁部が上方に立ち上がる。831は内外面に煤が付着する。833は口縁部が底部との境に明瞭な屈曲をもって立ち上がる。834~838は楠葉型瓦器椀。Ⅳ-1~Ⅳ-2期（13世紀後半~14世紀前半）に位置付けられるものであるが、いずれも高台を有する。839は瓦質羽釜。胎土はやや粗く、1~2mm大の石英、長石、雲母などの砂粒を多く含む。840は東播系須恵器鉢。内面には使用痕が認められる。第Ⅲ期第1段階（13世紀前半~後半）に位置付けられる。以上、24溝出土遺物は概ね13世紀後半の所産である。

25溝（図257-841~843） 841は土師器皿。口縁部は大きく外反する。842は楠葉型瓦器椀で、Ⅳ-1期に位置付けられるものと考えられる。843は土師質羽釜。口縁部は内傾ぎみにのびる。これらは13世紀後半~14世紀前半の所産である。

26溝（図257-844） 844は常滑焼甕で、口縁端部は上方へつまみあげるが垂下はしていない。5型式（13世紀前半）に位置付けられるものである。26溝からはほかに、Ⅳ-2期（14世紀前半）に位置付けられる楠葉型瓦器椀や土師器皿、羽釜などの破片が出土している。

27溝（図257-845） 845は楠葉型瓦器椀。見込みには目の細かいハケメが認められる。Ⅲ-3期（13世紀後半）の所産である。

28溝（図257-846） 846は石鍋。断面三角形の鑊が口縁部直下にめぐる。内面には擦痕が、口縁部には摩滅痕が認められる。木戸編年Ⅲ-b（13世紀）に位置付けられるものであろう。28溝からはほか

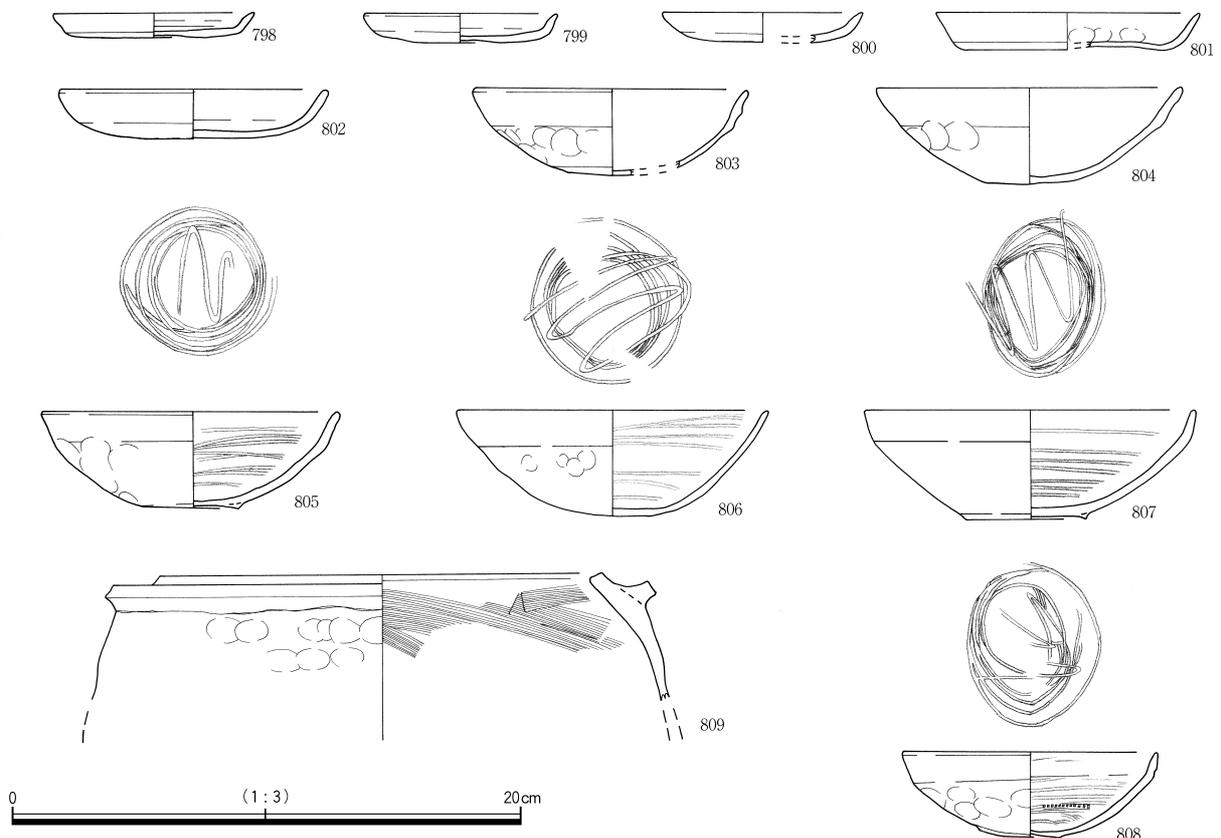


図255 有池遺跡03-1-5調査区 溝出土遺物

に、Ⅲ-1期（12世紀末～13世紀初頭）の楠葉型瓦器碗や羽釜などの破片が出土している。
 100溝（図258-847～849） 847は土師器皿である。848は白磁碗Ⅳ類である。849は楠葉型瓦器碗。器壁には炭素が吸着しておらず、灰白色を呈する。Ⅳ-2期（14世紀前半）に位置付けられる。
 159溝（図258-850～855） 850は土師器皿。口縁部は短く上方へ立ち上がる。851は瓦器皿である。見込みに暗文は認められない。852は白磁碗。口縁端部は内面に面をもって外反する。853は瓦質羽釜である。口縁部外面にはヨコナデにより段を有する。854は瓦質鍋。受け口の屈曲部は突出せず、口縁端部

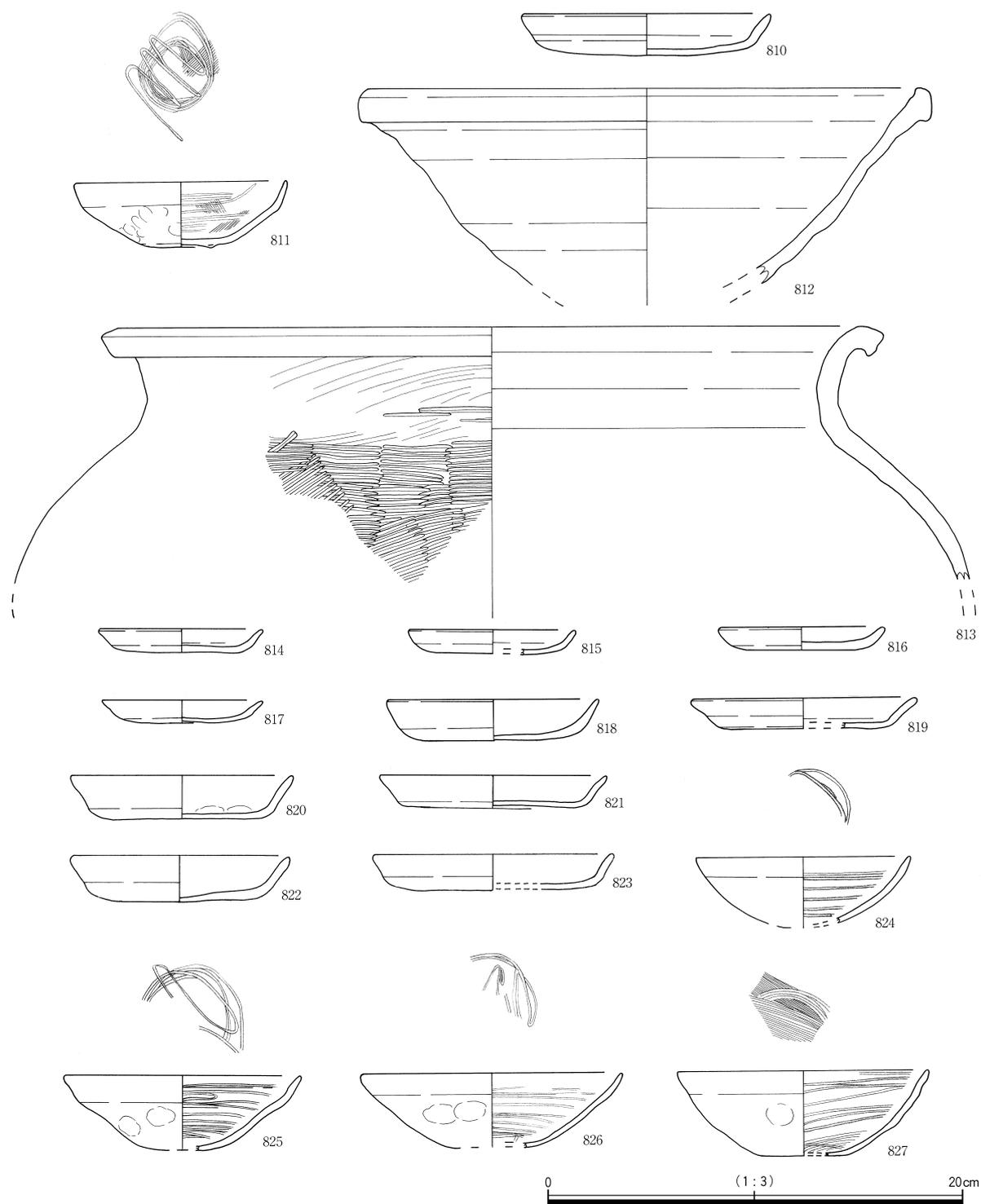


図256 有池遺跡03-1-5 調査区 土器溜り出土遺物

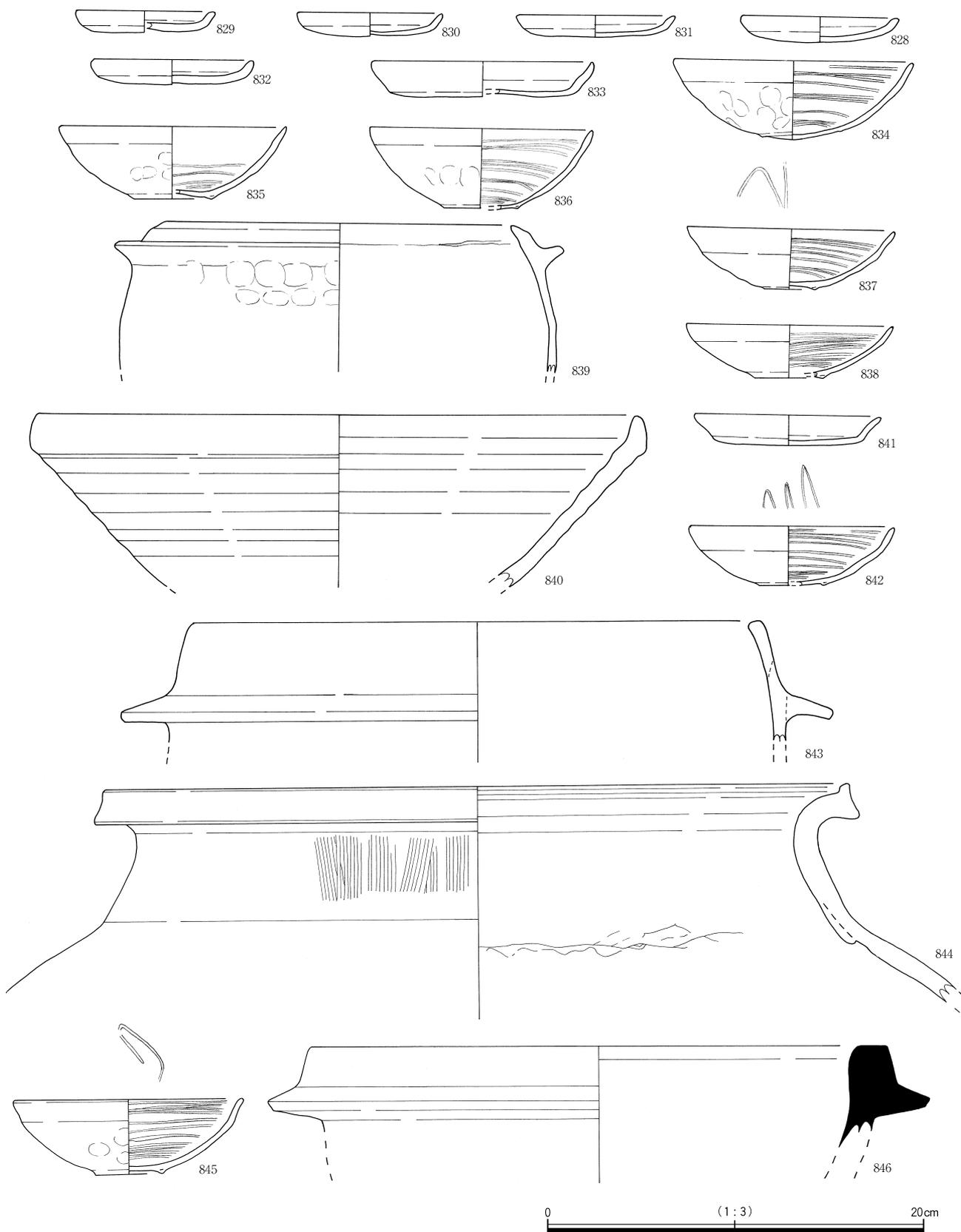


图257 有池遺跡03-1-5調査区 溝出土遺物

は断面三角形状になる。855は東播系須恵器鉢。第Ⅲ期第2段階(13世紀前半～後半)の所産である。159溝出土遺物は、ほかにⅢ-2～Ⅲ-3期(13世紀前半～後半)に位置付けられる楠葉型瓦器碗や、第Ⅱ期第2段階(12世紀末～13世紀初頭)の東播系須恵器鉢なども出土しており、やや時期幅があるが、13世紀前半～後半の遺物を多く含む。

153土坑(図258-856) 856は土師器皿。口縁部はゆるやかに開く。13世紀後半の所産であろう。

161溝(図258-857、858、図260-911) 857は土師器皿で、口縁部がゆるやかに上方に屈曲するものである。858は楠葉型瓦器碗。Ⅲ-3期(13世紀後半)に位置付けられるものである。911は瓦器皿。内面にはジグザグ状暗文を描く。楠葉型と考えられる。12世紀末～13世紀初頭の所産と考えられる。

823落込(図258-859～862、864) 859は土師器皿である。口縁部は外反ぎみに立ち上がる。860は楠葉型瓦器碗で、外面には下位まで分割ヘラミガキが認められる。Ⅰ-3～Ⅱ-1期(11世紀末～12世紀前半)のものである。861は大和型瓦器碗と思われる。内面のヘラミガキは粗く隙間が目立つ。外面のヘラ

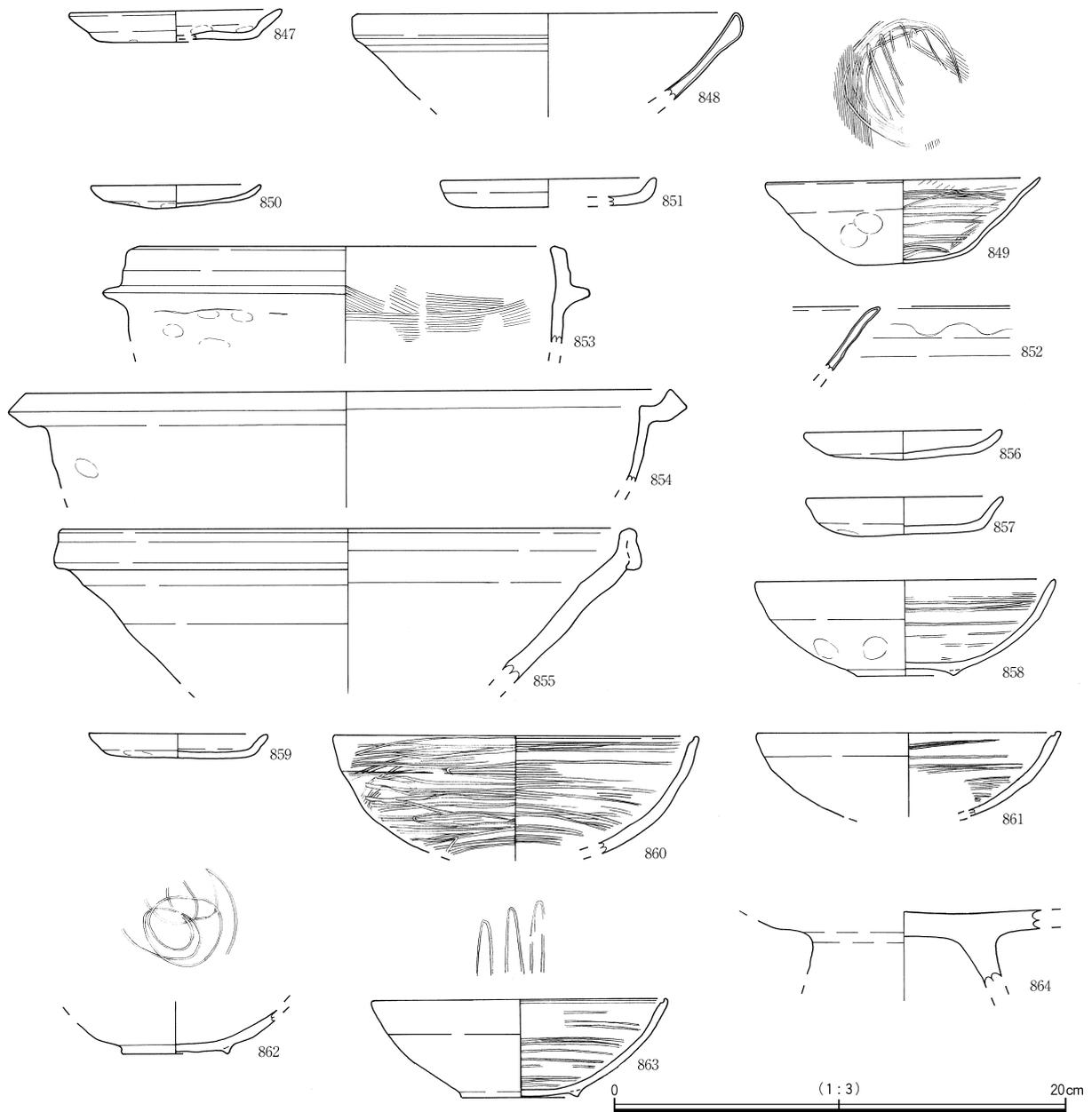


図258 有池遺跡03-1-5調査区 溝・土坑・落込出土遺物

ミガキは認められない。862は瓦器碗の底部で、見込みには連結輪状暗文が描かれる。大和型であろう。864は土師器台付皿の底部である。器壁は厚く、灰白色を呈する。823落込出土遺物はやや時期幅があり、概ね11世紀末～13世紀後半に位置付けられるものが含まれる。

317溝（図258-863） 863は楠葉型瓦器碗で、口縁端部には沈線を有する。Ⅲ-2期（13世紀前半）の所産である。

256溝・1260溝（図259-865～871） 865～867は土師器皿である。866、867は口縁部が上方に強く屈曲するものである。868は同安窯系青磁皿。体部外面は釉を掻き取っている。869、870は瓦器碗。869は外面に分割ヘラミガキを施し、見込みには連結輪状暗文を描く。口縁端部の沈線は太い。大和型Ⅲ-A（古）段階（12世紀後半）に位置付けられるものと考えられる。870は楠葉型瓦器碗で、Ⅳ-1期に位置付けられる。871は瓦質三足釜。体部には煤が付着する。以上、256溝出土遺物はやや時期幅があり、12世紀中葉～13世紀後半の遺物を含む。

192落込（図259-872～890） 872～876は土師器皿。872は口縁部の立ち上がりが短い。873、874は口縁部がゆるやかに内湾する。875は底部に接合痕が明瞭に残る。876は口縁部が直立ぎみに立ち上がる。877～880は瓦器皿である。877、879、880は器高が低く扁平であるが、878は器高がやや高く、口縁部が斜め上方へのびる。見込みはいずれもジグザグ状暗文。881～886は楠葉型瓦器碗で、Ⅲ-3～Ⅳ-1期（13世紀後半）に位置付けられるものである。884は口縁部の歪みが大きい。887、888は龍泉窯系青磁碗で、外面には鎬蓮弁文を有する（Ⅱ類）。889は白磁碗で、端部は釉を掻き取っている（Ⅸ類）。13世紀後半～14世紀前半。890は瓦質土器火鉢。口縁部外面は横方向に連続する指頭圧痕が明瞭に残り、端部は外方に肥厚する。胎土には雲母、石英、長石粒を含む。以上、192落込出土遺物は13世紀後半の所産である。

14溝（図260-897） 897は楠葉型瓦器碗。底部には高台を一部分のみ貼り付ける。Ⅳ-2期（14世紀前半）の所産である。

15溝（図260-898） 898は土師器皿。13世紀の所産である。

102溝（図260-899、900） 899、900は土師器皿。底部は平坦で、口縁部を斜め上方へゆるやかに屈折させる。13世紀前半の所産と考えられる。

104溝（図260-901） 901は土師器皿である。口縁部は大きく外方に開く。14世紀前半の所産であろう。

55溝（図260-902～905） 902～905は土師器皿。口縁部は強くヨコナデを施し、外反させる。14世紀前半の所産であろう。

158溝（図260-912） 912は瓦器碗である。口縁端部の沈線は比較的上位から入れているが、器壁には内外面ともに円形の剥離が多く認められ、焼成も楠葉型に近似する。外面には上位三分の一程度にヘラミガキを施す。Ⅱ-2期（12世紀中葉）に位置付けられるものであろう。

断面①（図261-913） 913は瓦質三足釜である。内面は板ナデ調整を施す。

292落込（図261-914） 914は白磁碗（Ⅳ類）である。釉には貫入が顕著にみられる。

（5）6調査区

6溝（図262・263-915～918） 915～917は丸瓦である。915、916は凹面に吊り紐痕および布目痕を有する。916は凸面に縄タキ痕が一部残り、13世紀以前のものである可能性が高い。918は平瓦である。

23溝（図263-919） 919は丸瓦ないし軒丸瓦の玉縁片である。

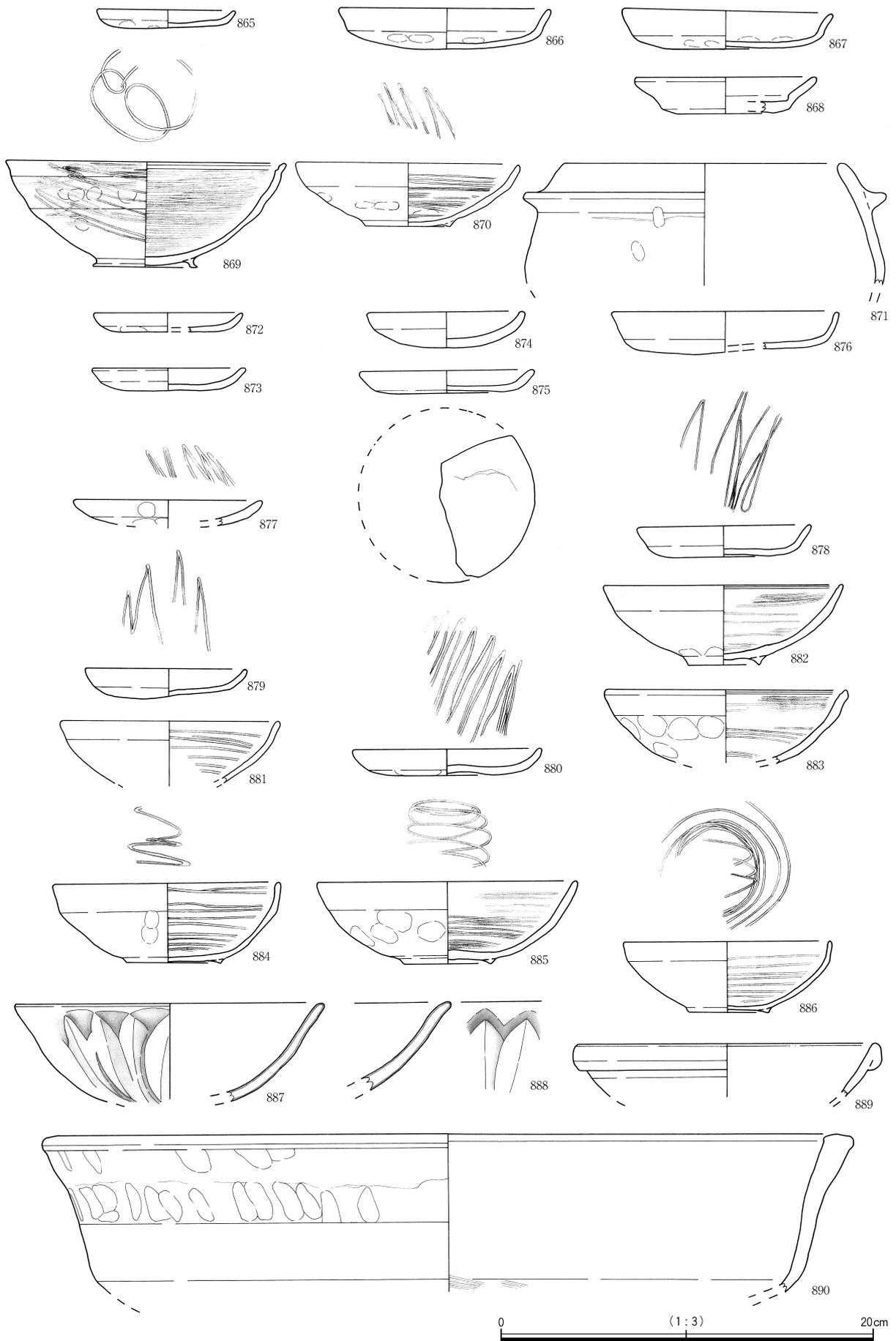


图259 有池遺跡03-1-5 調査区 溝・落込出土遺物

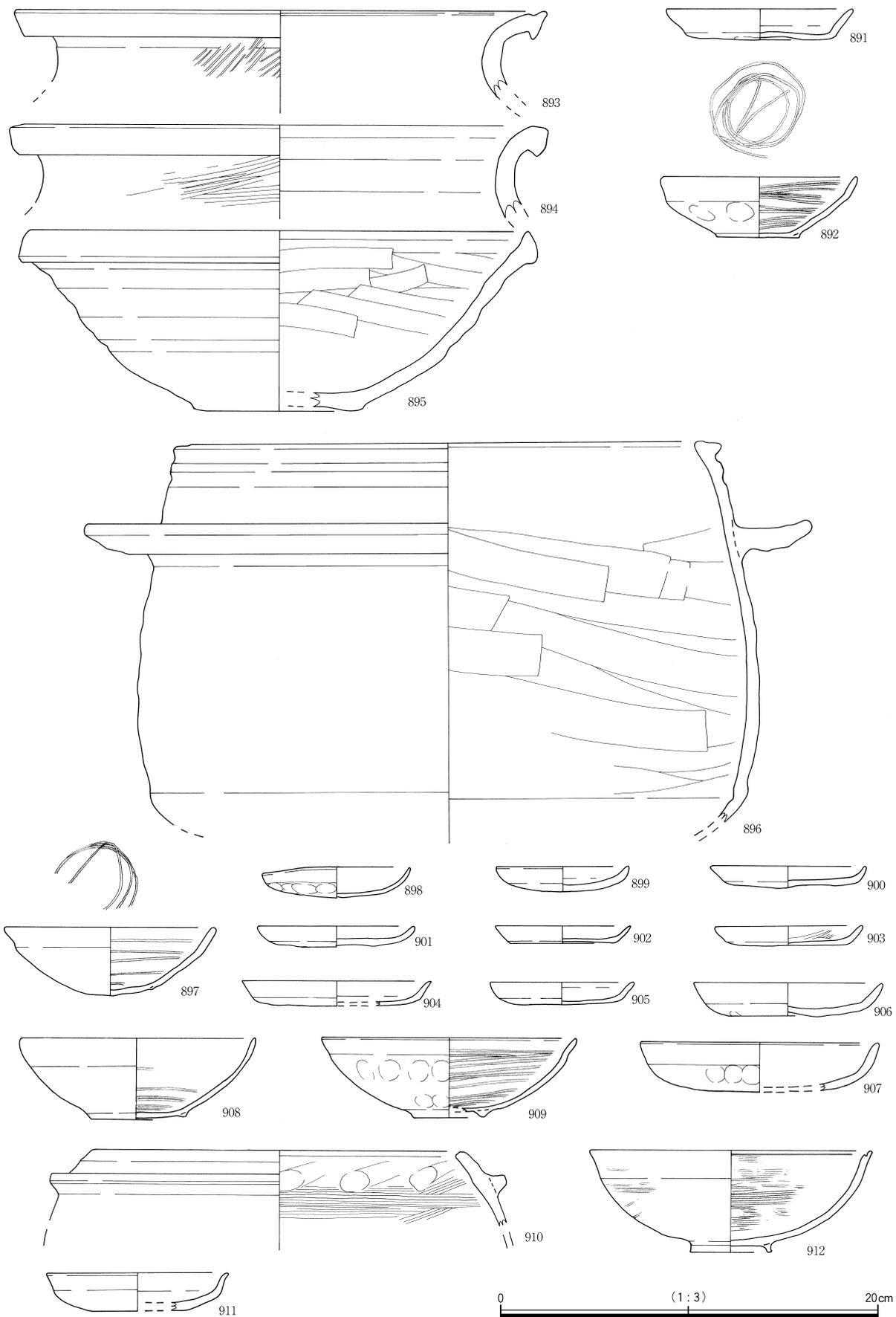


图260 有池遺跡03-1-5 調査区 溝・土坑出土遺物

56土坑（図263-920） 920は瓦質羽釜の耳である。粘土を貼りつけ、棒状工具を突き刺して穿孔している。

2層（図263-921） 921は須恵器杯蓋である。焼成はあまく作りも粗であるが、TK217型式に併行するものと考えられる。

4土坑（図263-922、923） 922は土師器皿である。口縁部は段をもって強く外反する。14世紀前半に位置付けられるものであろう。923は龍泉窯系青磁椀。高台内は無釉で、外面には片切彫蓮弁文を有する（Ⅱa類）。

1溝（図263-924~926） 924は備前焼播鉢の底部である。内面には10条1単位の櫛描摺目を有する。925は白磁皿の底部。高台は無釉で、内面は見込み部分の釉を輪状に掻き取る（Ⅲ-1類）。12世紀中葉に位置付けられる。926は東播系須恵器鉢の口縁部である。13世紀の所産である。

17溝（図263-927） 927は土師器皿である。器壁は厚く、口縁部はゆるやかに内湾する。12世紀の所産である。

39溝（図263-928） 928は白磁椀。口縁端部が強く外反（V類）し、12世紀に位置付けられる。

62土坑（図263-929） 929は楠葉型瓦器椀で、Ⅳ-2期（13世紀後半~14世紀前半）の所産である。

（6）土製品（図264）

930~932は縄文土器である。930、931は4調査区1層、932は3調査区3層から出土した。930は深鉢の口縁部で、口縁部外面に突帯文帯を有し、口縁部上端および突帯上には縄文を有する。931は深鉢の頸部~口縁部片で、外面上部には突帯、下部には縄文が認められる。これらは北白川C式（中期後半）に位置付けられるものと考えられる。932も深鉢の口縁部で、外面直下に刻目突帯がめぐる。船橋式~長原式（晩期後半）。933は瓦質土器土製品であるが、器種および用途は不明である。現存する部分は、断面長方形で、U字形の抉りをもち、四面ともヘラ描きなどにより施文している。図中上面は、抉り周囲に放射状のヘラ描きを施し、四周を縁取りする。正面は方形区画内に4条の横線を入れる。図中右面は方形区画内に放射状のヘラ描きを施している。

933は精良な胎土で、ヘラ描きの前に全面が丁寧に磨かれているために、光沢を帯びている。意図して丁寧に作られていることがわかる。抉りは一部が欠損しているものの、残存部の断面形からみて円形のくぼみだったと考えられる。

前述した縄文土器はいずれも細片で、摩滅が著しい。有池遺跡02-1・03-2で出土したものを含めても10点に満たない点数である。ただ石鏃にも縄文時代までさかのぼりうる、小型で鋭い逆刺をもち、深い抉りをもつ凹基式のものがある。有池遺跡全体で数点出土していることから、近くにキャンプサイトのよ

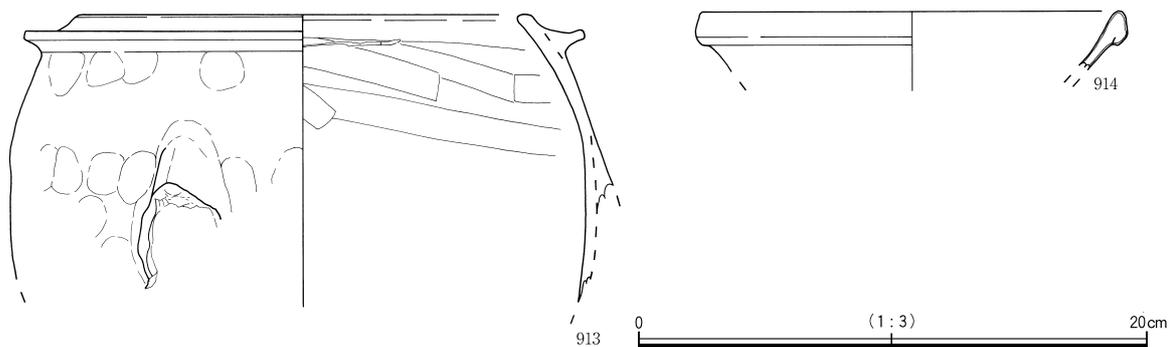
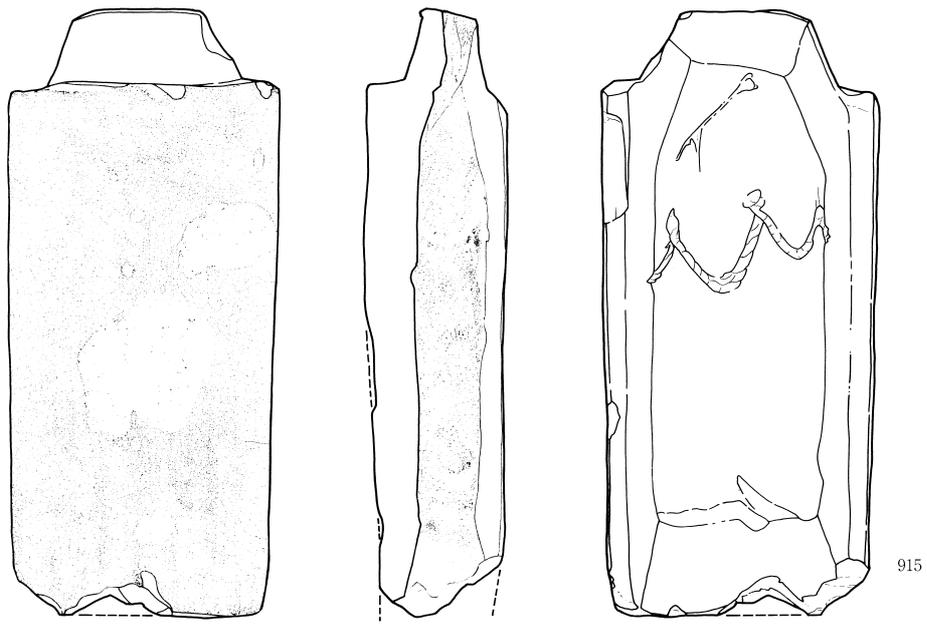
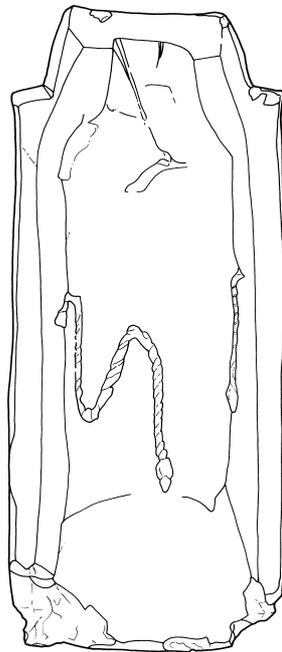
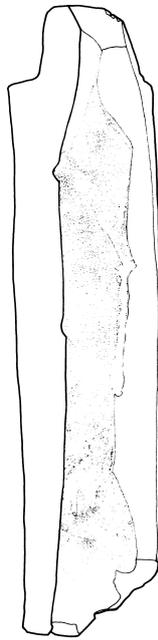
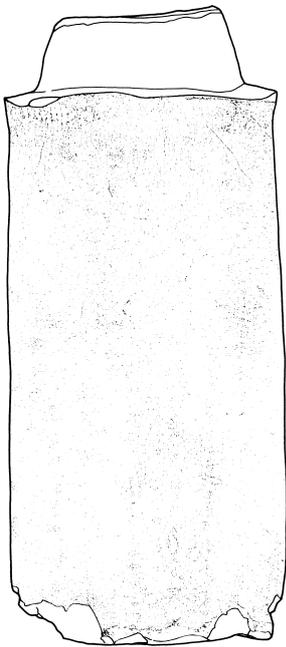
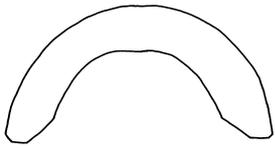


図261 有池遺跡03-1-5調査区 落込等出土遺物



915



916

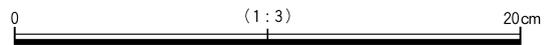
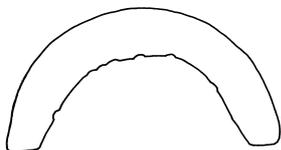


图262 有池遺跡03-1-6 調査区 溝出土遺物

うな小規模の縄文時代集落が存在していた可能性は否めない。

2. 石器・石製品 (図265~267)

S1は石錐と考えられる。もとの素材が薄いため全体的に華奢で、右面中央に大きく素材面が残るが、全周にわたって丁寧な調整剥離が施される。そして1つの先端部には両面から丁寧な調整剥離が施されていることから、その部分を錐部ととらえた。その先端はわずかに欠損している。おそらく使用の際の加圧で折損したと見られる。S2は石器の未成品か。全体にローリングを受けて、エッジが丸みをおびている。右面中央に背面、左面に腹面からなる素材面が大きく残るが、縁辺部に両面から調整剥離

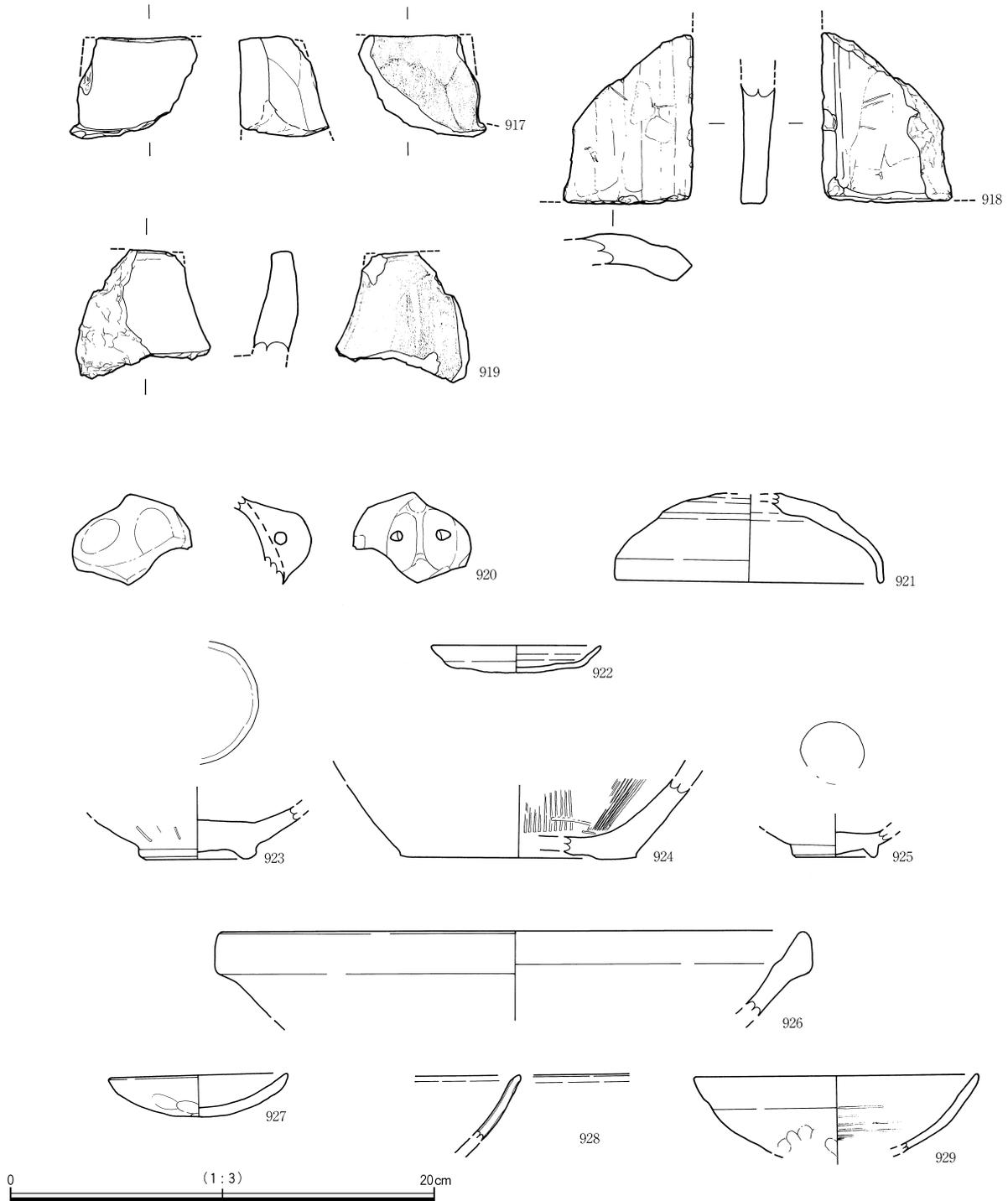


図263 有池遺跡03-1-6調査区 遺構・包含層出土遺物

を施している。剥離は中央部分までいたらないが、最長辺には両面から剥離が施されていることから、その部分を機能部とした刃器の可能性もある。S 3は有茎式石鏃である。基部から茎にかけてのラインはゆるやかなカーブからなり、明瞭な逆刺はもたない。そのため全体的に見ると柳葉形に近い形状である。全体に丁寧なつくりで、両面とも鏃から茎にかけて研磨されている。厚さを調整するために研磨された可能性もある。S 4は柳葉形の石鏃である。先端部を欠くため全長は不明だが、おそらく4 cm前後とみられる。両面とも中央部に大きく素材面が残るため鏃は無く、平坦な印象を受ける。S 5は右面に素材剥片の主要剥離面を、左面に大剥離面を残す。素材剥片の段階の腹・背面の打点の位置と方向はほぼ同じである。打点を囲むように3方が折損し、平面形は長方形を呈する。左面には調整剥離を施しているが、エッジを作り出すにはいたっていない。S 6は同じ作業面で、打点の位置を交互に換えながら打ち割っていく過程で生じたものである。打面調整の際に生じた剥片か。S 7の剥離面はいずれも背面からなり、石核とみられる。2側辺に自然面を残し、素材剥片の腹面も残らないことから、拳大のサヌカイト礫を素材としている可能性がある。S 8は凹基式石鏃である。刃縁はなだらかなS字状のカーブを有し、鋭い逆刺が作り出されており、前述の石鏃よりも古い時期のものとの可能性が高い。縄文時代の所産か。S 1～S 8はサヌカイトを素材とする。S 9～S 15は砥石である。いずれも風化しており、表面の剥離や破断が生じたものがほとんどだった。特にS 11は機能面が1面、S 13とS 14は2面しか残存していなかったが、本来はもっと大きなものだったと見られる。S 9は機能面の中央部分に刃潰しの際に生じたような溝状の研磨痕が認められた。S 16はおそらく砥石として使用されたか、砥石の素材として持ち込まれたものと考えられるが、全面破断面からなり砥石として使用された痕跡は認められなかった。S 17は滑石製品の破片である。もとの形状はほとんど残っていないため、本来の用途は不明だが、材質は石鍋に類似する。

有池遺跡03-1で検出した石器のうち、砥石と石鍋は出土状況などからみて中世に属する遺物と考えられる。それ以外のサヌカイト製石器に関しては、形態的な特徴から帰属時期を決定するのは困難である。3点の石鏃のうち、S 8は小型で精巧に作られており、抉りの深い凹基と鋭い逆刺を有することか

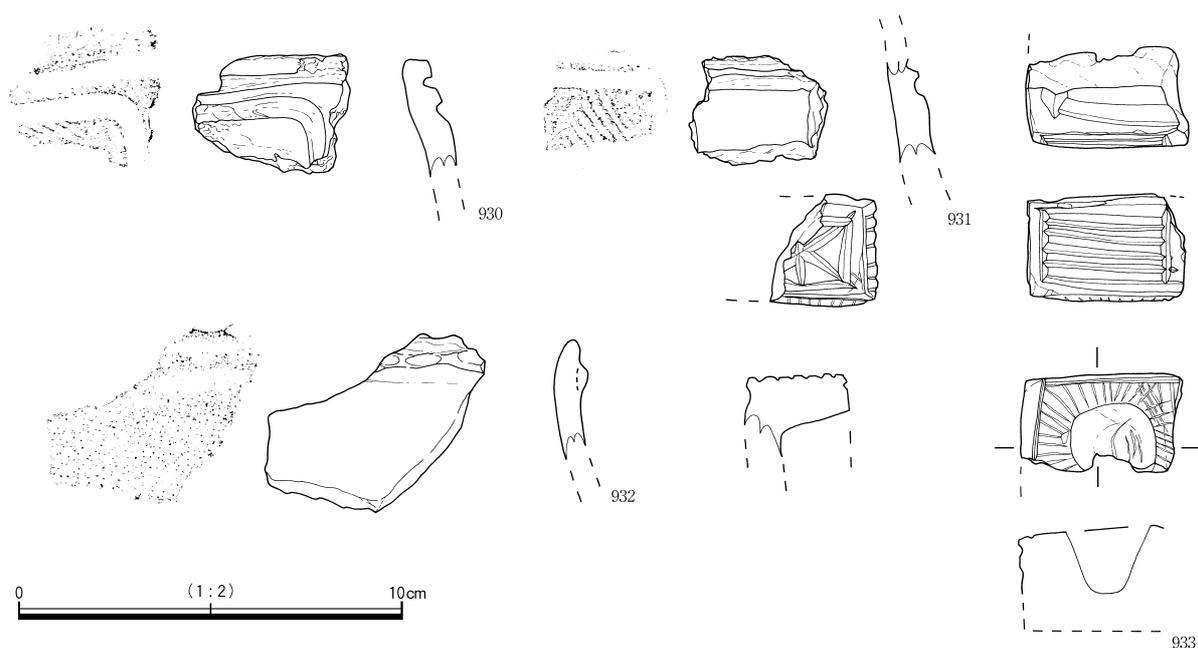


図264 有池遺跡03-1 縄文土器・土製品

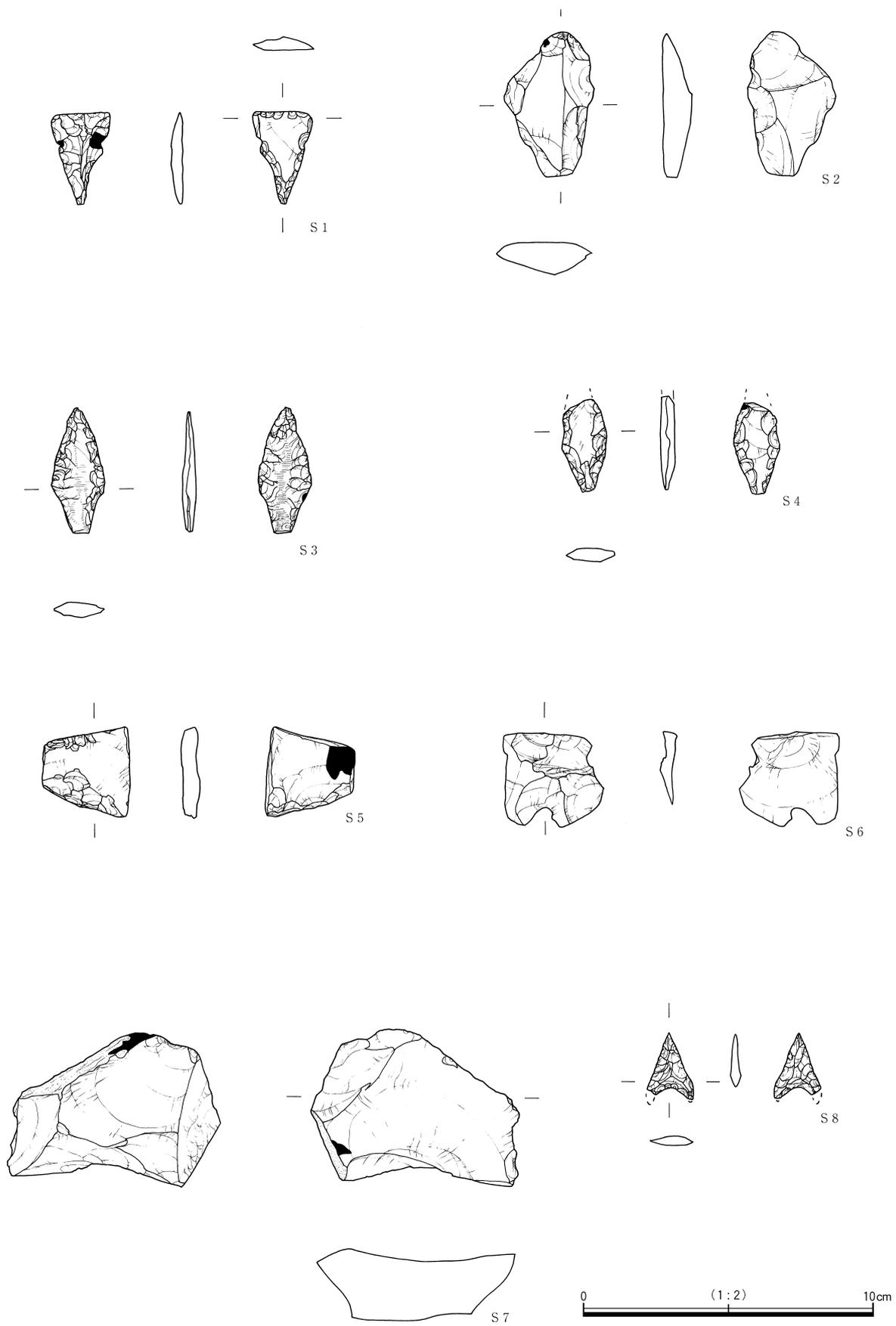


图265 有池遺跡03-1 石器

ら、縄文時代にさかのぼる可能性がある。S 3 のように部分的に研磨された石鏃は量的には少ないが、縄文時代から弥生時代を通じてみられる製作技法である。全体的にみてもそれぞれ摩滅や風化の度合いが異なっており、縄文時代以降の各時期の遺物が混在している可能性が高い。

砥石は凝灰岩もしくは粘板岩質のきめの細かい石材と、砂岩もしくは花崗岩質のざらざらした触感をもつもととに大きく2分できる。前者にはS 9・10・12があり、仕上げ砥と考えられる。おおむね小ぶりによく使い込まれている。それに対して後者は中砥もしくは荒砥と考えられ、前者に比べて大きく重量もあると考えられる。

3. 木器・漆器 (図268~270)

W 1~W 5、W 7~W 9、W 12は曲物の一部である。側板はW 5とW 7のみで、他は蓋板もしくは底板である。W 5は側板の接合箇所を樹皮でかかった部分で、長方形の切り込み窓が1つある。おそらく

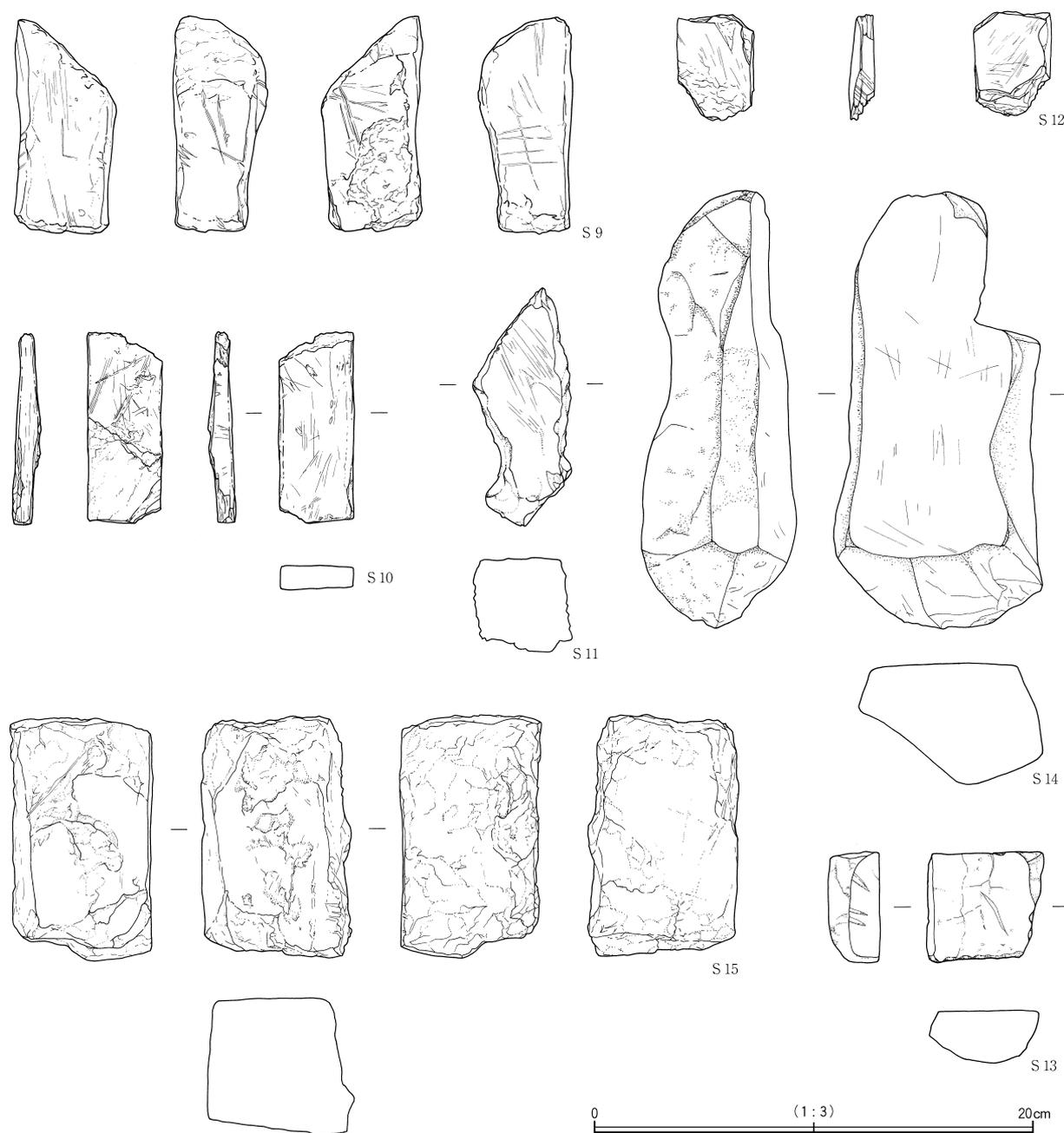


図266 有池遺跡03-1 石器

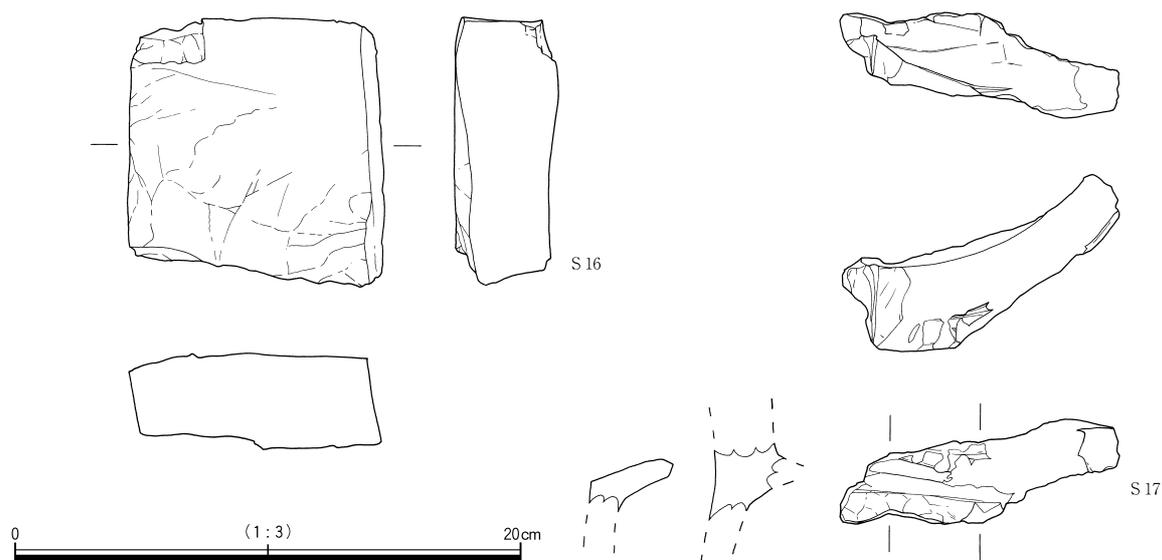


図267 有池遺跡03-1 石器・石製品

柄杓の柄を差し込んだ部分と見られる。蓋板もしくは底板とみられるもののうち、竹釘の位置を確認できたのはW3・W4・W9だった。竹釘の穴が無かったものに関して言えば、W1には両面とも縁の部分に幅1mm程度の輪状の圧痕が認められた。W8は表面が焼けて炭化しており、穿孔が2ヶ所認められた。W12には前面に黒漆様の塗料が塗布され、ところどころそれがはがれているのを見て取れる。W10・W13は板状の材だが、用途は不明である。W6は漆器の椀である。W11は下端部を尖らせているので、おそらく杭とみられるが、素材の形状によるものか、全体に弓なりに湾曲している。出土位置や層位から見て、これらの木器は中世の所産と考えられる。

4. 金属器 (図271・273)

M1～M4、M9～M12は円柱状の鉄器である。釘の類とみられるが、端部の形状を明確に把握できるものは無かった。M5はキセルの雁首である。素材は真鍮とみられ、火皿と脂返しの境に接合部が無いことから、一枚の金属板を丸め、火皿とそれ以外の部分の形状を打ち出したものと見られる。火皿は小ぶりで脂返しのカーブは緩やかである。M6は鋏もしくは鋤の刃先で腐食が進み、先端部と基部・袋部が欠損する。刃幅は15cm弱と幅狭な印象を受ける。M7は2調査区の27土坑から出土した短刀で、腐食が著しく進んでいるが、ほぼ全体の形状が残る。刃部は刃こぼれが著しく、棟のラインからみて内反りの形態と考えられる。切っ先は欠損しているが、身の長さは21cm強(7寸)と考えられる。両面穿孔の目釘穴が一箇認められる。柁目鍛えと見られる点、栗尻の形状が刃部にむけて傾斜する点などからみて、大和系の刀工の手によるものと考えられる。M18も刀の茎から刃部にかけての部分とみられる。腐食によるためか、関の部分における形状を明確にとらえることはできなかった。M8は断面の形状がレンズ状の細長い鉄片の一部で、両刃の利器の可能性はあるが、断定はできない。M13・M14・M16・M17は形状に大小あるものの現状では板状の鉄器であるということしか把握できなかった。M15はピンセット状の細長い鉄板を三つに折り曲げたもので、片方の端部は先端を尖らせているのを見て取れる。

5. 鑄造関連遺物 (図274)

F1・F2は鞆の羽口、F3～F7は椀形滓である。羽口はいずれも先端部の破片である。F1は器壁の厚さが均一で円筒状の羽口とみられる。先端部に付着する黒色ガラス質滓は光沢を帯び、気泡は先端部を中心にまばらに散らばっている。黒色ガラス質滓が及ばない部分は被熱により赤変している。残

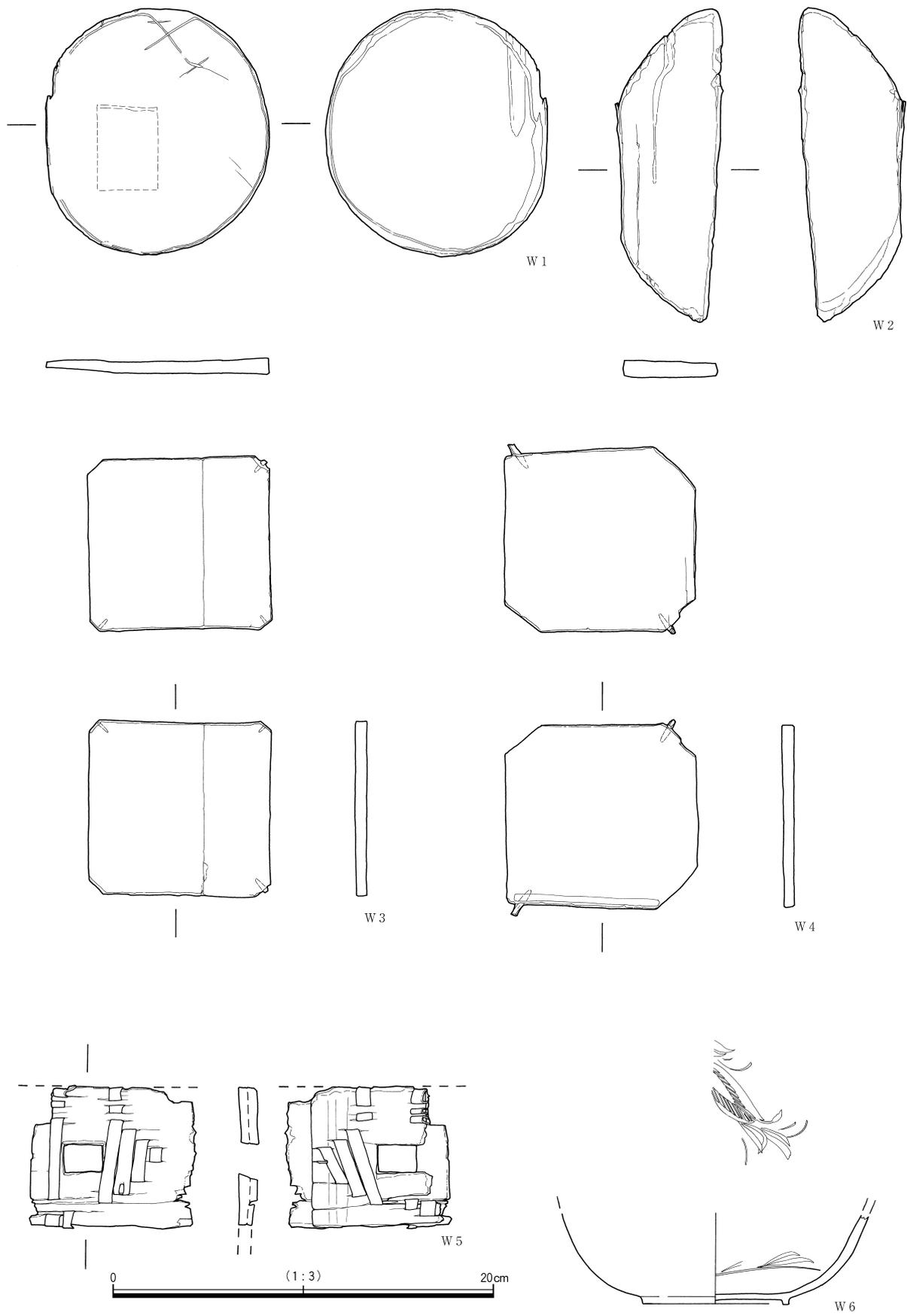


图268 有池遺跡03—1 木器・漆器

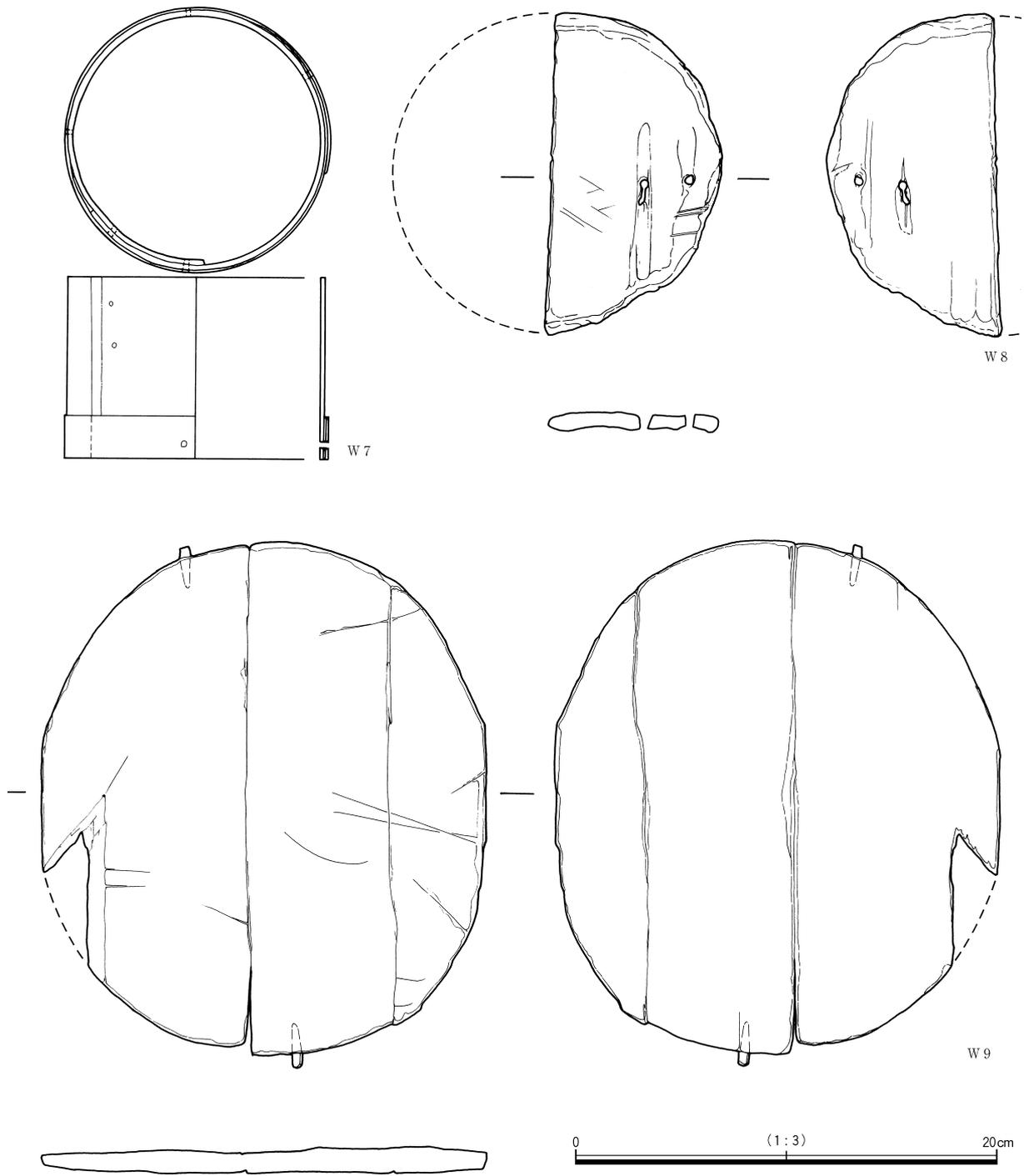


图269 有池遺跡03-1 木器

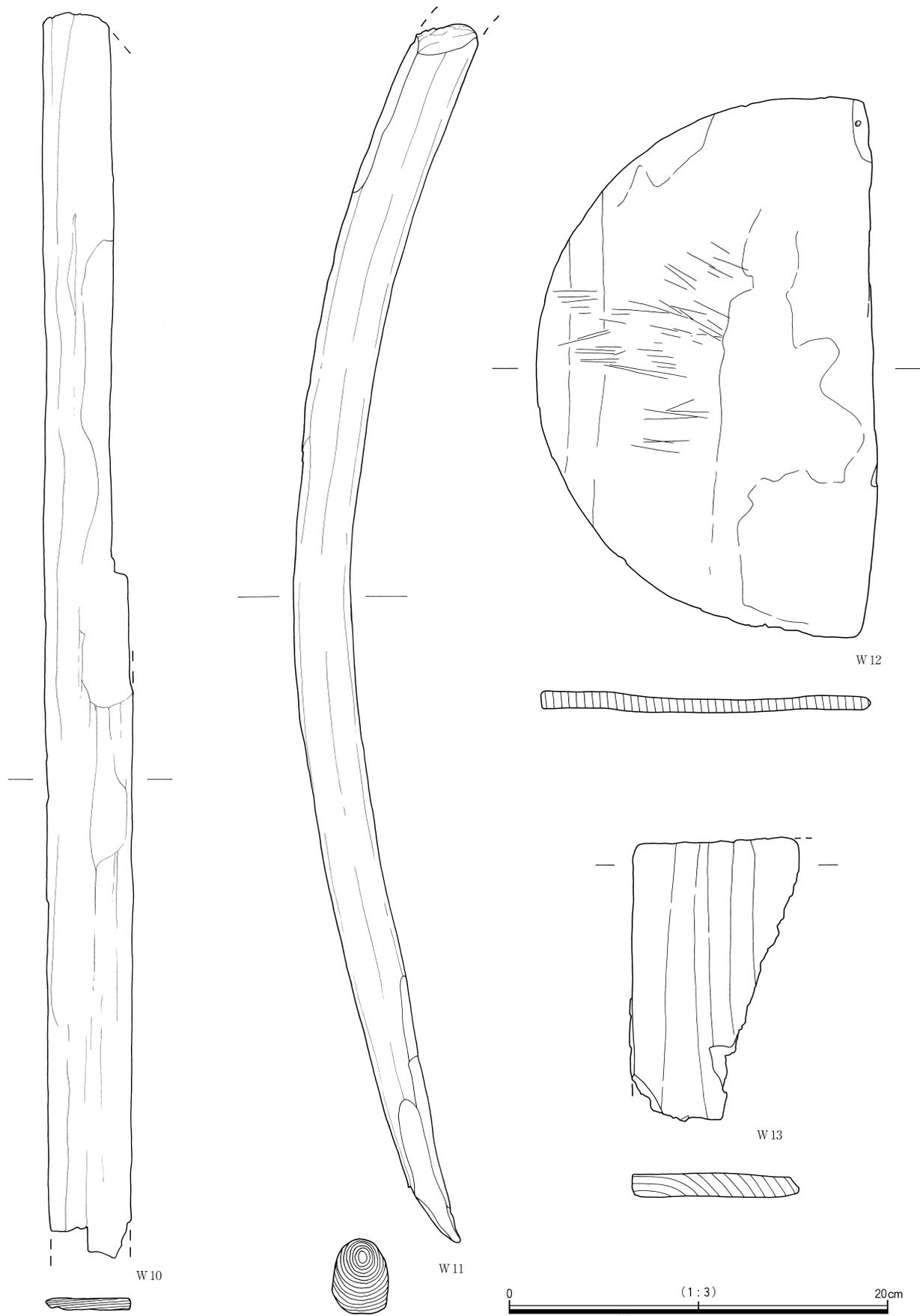


图270 有池遺跡03-1 木器

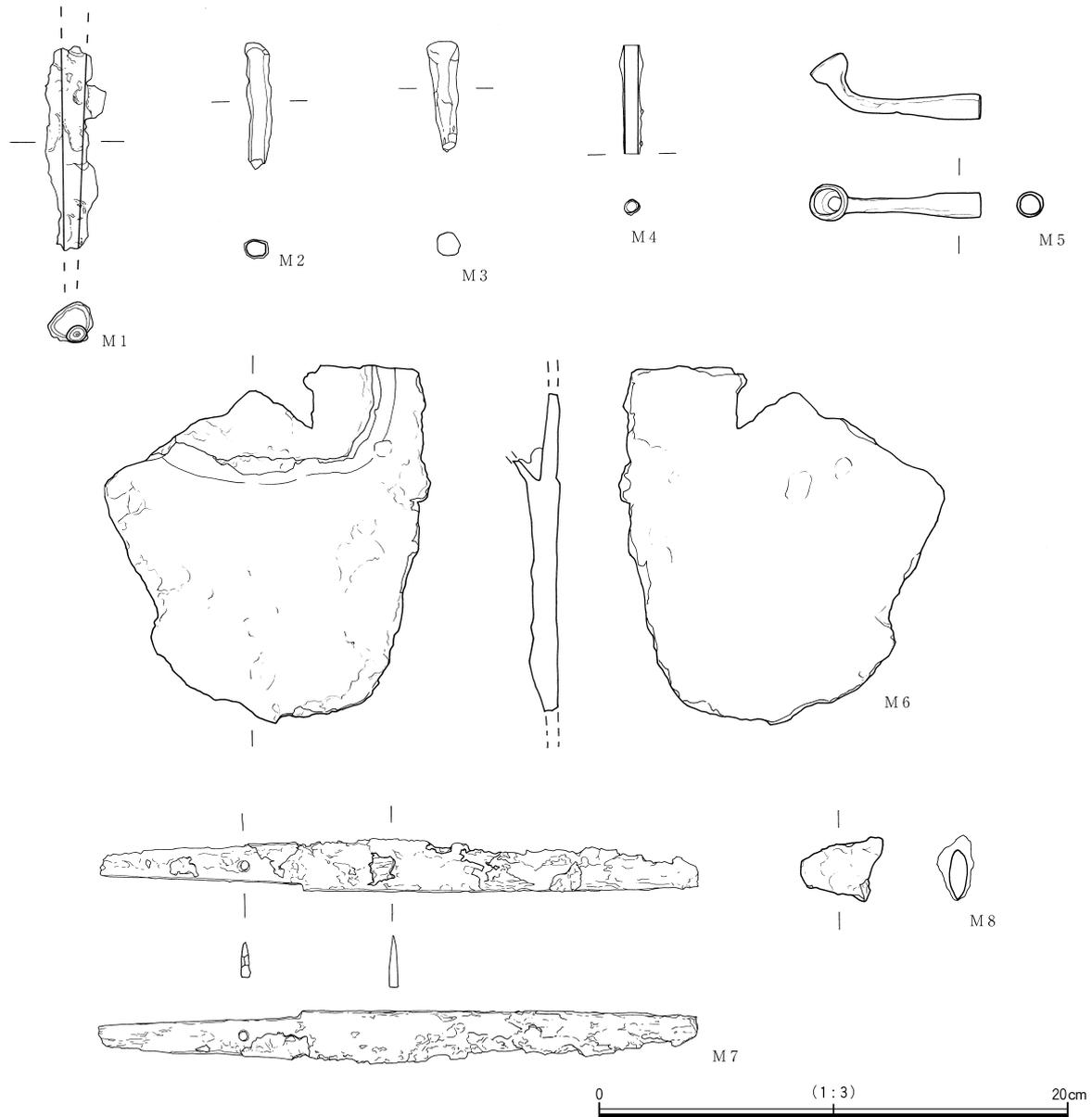


図271 有池遺跡03-1 金属器

存率が低いため断定はできないが、面取りは認められない。F 2は全体に被熱のため赤変しており、先端部は黒色化している。黒色化は無光沢の黒色ガラス質滓の付着によるものか。器壁の厚さは比較的均一である。それほど明瞭ではないが、羽口の表面を軽く面取りしているのが見て取れる。椀形滓の断面形をみるとF 3とF 6・F 7は上面・下面とも緩やかに湾曲するが、F 4・F 5は上面がほぼ平坦で下面がやや湾曲する。F 3・F 4は上面に木炭痕が認められる。F 3の下面とF 4は上面にやや大きい気泡が認められるが、後者下面の気泡は小さくまばらで、表面は全体的に滑らかである。F 5は上面・下面とも気泡が小さく、かつ中央に集中する傾向がある。F 6・F 7は引き伸ばされた部分があり、平面形は水滴形である。F 7は全体的に凹凸が目立つ。F 8とF 9は全体的に滓の表面にみられるような凹凸と、気泡が散見されるが、全体的に平坦で板状を呈する。特に後者は鉄片が滓に巻き込まれたような状態で含まれるのが明確に見て取れる。

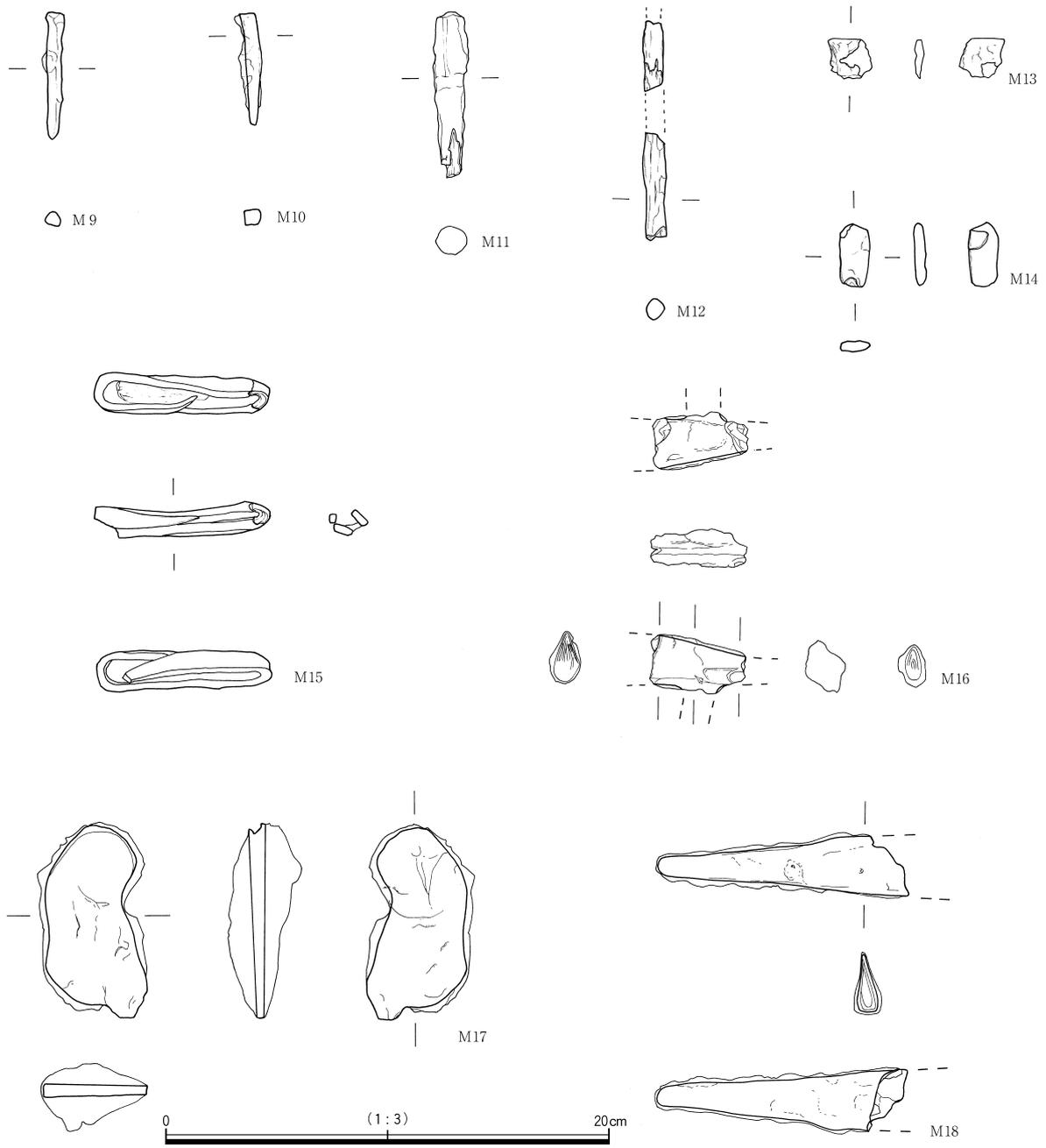


图272 有池遺跡03-1 金属器

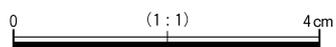


图273 有池遺跡03-1 錢貨

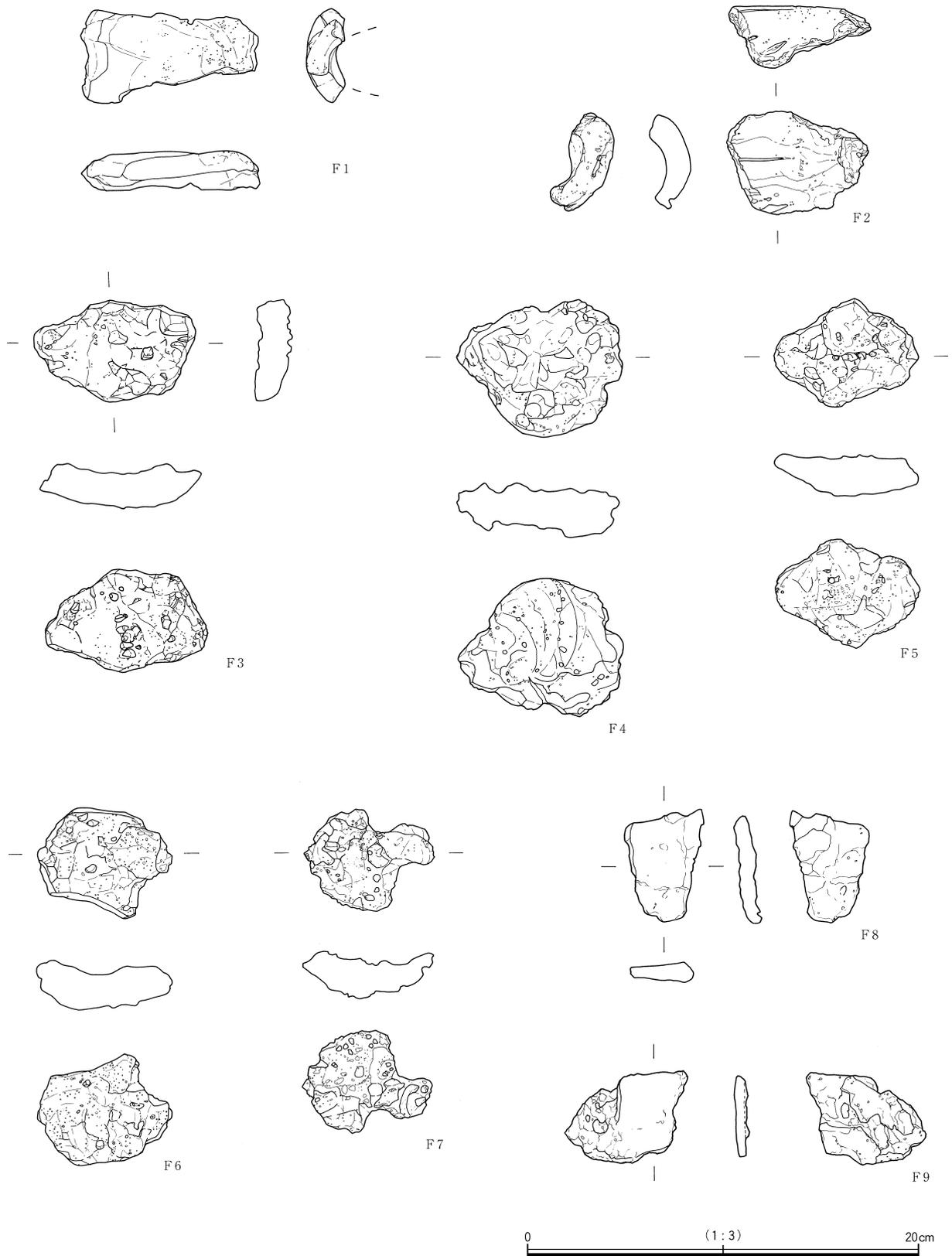


図274 有池遺跡03-1 鑄造関連遺物

表9 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
202	1	121	1	1層	土師器皿	[7.8]	1.2	-	-	
	2	205	1	1層	土師器皿	7.6	1.2	-	-	外面底部に接合痕有
	3	317	1	1層	土師器皿	[10.2]	2.1	-	-	
	4	124	1	1層	土師器皿	[11.9]	2.2	-	-	
	5	123	1	1層	土師器皿	[11.6]	1.8	-	-	
	6	170	1	1層	土師器皿	7.6	1.0	-	-	内面に接合痕有
	7	122	1	1層	瓦器椀	11.1	3.6	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	8	41	1	1層	須恵器鉢	[29.8]	11.9	[8.7]	[30.5]	東播系
	9	135	1	1層	瓦質羽釜	[37.5]	/	-	[47.4]	外面下部全体に煤付着、内面板ナデ
203	10	523	1	118ピット[中心建物③]	土師器皿	7.4	1.2	-	-	
	11	524	1	118ピット[中心建物③]	土師器皿	7.1	1.1	-	-	
	12	201	1	269ピット[建物4]	土師器皿	[10.8]	1.8	-	-	
	13	319	1	126ピット[建物7]	土師器皿	10.0	1.1	-	-	
	14	112	1	126ピット[建物7]	土師器皿	7.6	1.1	-	-	
	15	120	1	126ピット[建物7]	土師器皿	8.0	1.5	-	-	
	16	321	1	126ピット[建物7]	土師器皿	8.6	1.25	-	-	
	17	320	1	126ピット[建物7]	土師器皿	[8.4]	1.1	-	-	
	18	109	1	126ピット[建物7]	土師器皿	12.4	2.2	-	-	
	19	111	1	126ピット[建物7]	土師器皿	11.9	1.9	-	-	
	20	115	1	126ピット[建物7]	土師器皿	12.0	2.35	-	-	
	21	129	1	126ピット[建物7]	土師器皿	[11.6]	2.0	-	-	埋納時の穿孔(内→外)あり
	22	118	1	126ピット[建物7]	土師器皿	12.4	2.6	-	-	歪みあり
	23	104	1	126ピット[建物7]	土師器皿	[12.7]	2.0	-	-	
	24	328	1	126ピット[建物7]	土師器皿	[11.8]	1.9	-	-	
	25	108	1	126ピット[建物7]	土師器皿	[12.2]	2.1	-	-	
	26	113	1	126ピット[建物7]	土師器皿	12.1	2.3	-	-	
	27	116	1	126ピット[建物7]	土師器皿	[11.4]	2.2	-	-	
	28	101	1	126ピット[建物7]	土師器皿	11.9	2.2	-	-	埋納時の穿孔あり
	29	119	1	126ピット[建物7]	土師器皿	12.4	2.5	-	-	
30	107	1	126ピット[建物7]	土師器皿	11.5	2.3	-	-		
31	110	1	126ピット[建物7]	土師器皿	11.4	2.2	-	-		
32	114	1	126ピット[建物7]	土師器皿	11.4	2.2	-	-		
33	117	1	126ピット[建物7]	土師器皿	[11.2]	1.9	-	-		
34	128	1	126ピット[建物7]	土師器皿	[11.2]	2.3	-	-		
35	106	1	126ピット[建物7]	土師器皿	[11.2]	2.3	-	-		
204	36	198	1	267井戸	土師器皿	[7.2]	1.1	-	-	
	37	60	1	5井戸	土師器皿	[8.1]	1.0	-	-	
	38	58	1	5井戸	土師器皿	[10.6]	1.6	-	-	
	39	48	1	5井戸	白磁椀	[16.7]	/	/	-	
	40	57	1	5井戸	瓦質羽釜	/	/	-	/	外面に煤付着
	41	56	1	5井戸	須恵器甕	[26.2]	/	-	/	東播系
	42	54	1	5井戸	土師質羽釜	[26.1]	/	-	/	
	43	51	1	5井戸	瓦質羽釜	17.8	/	-	21.7	外面全体に煤付着
	44	59	1	5井戸	瓦質羽釜	[29.4]	/	-	[39.4]	
205	45	186	1	207井戸	瓦器椀	[12.8]	/	/	-	楕葉型
	46	187	1	207井戸	土師器皿	[9.0]	1.5	-	-	内面底部に粘土板接合痕有
	47	193	1	207井戸	瓦質羽釜	[15.6]	/	-	[21.0]	下部全体に煤付着
	48	188	1	207井戸	瓦質土器火鉢	[34.0]	/	25.8	-	
	49	189	1	207井戸	常滑焼甕	[19.0]	/	/	/	
206	50	211	1	194井戸	土師器皿	[7.4]	1.0	-	-	
	51	214	1	194井戸	土師器皿	[10.1]	2.1	-	-	
	52	212	1	194井戸	瓦器椀	[11.8]	3.9	[4.85]	-	楕葉型
	53	213	1	194井戸	瓦器椀	[11.4]	3.2	[5.1]	-	楕葉型
	54	190	1	194井戸	青磁椀	[15.6]	/	/	-	龍泉窯系、蓮弁文
	55	202	1	194井戸	瓦質三足釜	[17.4]	/	-	[21.8]	全面に煤付着
	56	215	1	194井戸	瓦質三足釜	[20.0]	/	-	[25.8]	外面下部に煤付着
	57	216	1	194井戸	瓦質羽釜	[23.0]	/	-	[27.8]	全面に煤付着
	58	197	1	194井戸	瓦質鍋	[28.0]	/	-	[29.6]	
	59	222	1	194井戸	須恵器甕	[35.0]	/	/	/	東播系
	60	149	1	410井戸	土師器皿	[14.8]	2.0	-	-	
207	61	150	1	410井戸	瓦器椀	/	/	5.3	-	連結輪状暗文
	62	65	1	56土坑	土師器皿	[8.3]	1.0	-	-	
	63	64	1	56土坑	土師器皿	[10.3]	/	-	-	
	64	102	1	42ピット	土師器皿	10.65	1.7	-	-	
	65	218	1	10焼土集積遺構	土師器皿	8.0	1.2	-	-	
	66	865	1	10焼土集積遺構	瓦器椀	[11.8]	/	/	-	楕葉型
	67	53	1	105石敷土坑	瓦器椀	[12.2]	4.2	[4.5]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	68	55	1	105石敷土坑	須恵器鉢	[23.2]	/	/	[24.0]	東播系
	69	248	1	434ピット	土師器皿	8.8	/	-	-	
	70	245	1	411土坑	土師器皿	[10.0]	1.5	-	-	

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不可能、-:計測項目なし

表10 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
207	71	226	1	411土坑	瓦器皿	9.0	1.7	-	-	
	72	234	1	411土坑	瓦器皿	9.2	1.9	-	-	
	73	243	1	411土坑	土師器皿	9.2	1.3	-	-	
	74	225	1	411土坑	瓦器皿	8.6	1.9	-	-	ジグザグ状暗文
	75	219	1	411土坑	瓦器椀	[13.0]	/	/	-	
	76	240	1	411土坑	瓦器椀	[15.8]	5.3	[6.4]	-	楠葉型、底部外面に植物?のプリント有
	77	232	1	411土坑	瓦器椀	14.2	5.3	5.1	-	大和型
	78	246	1	411土坑	瓦器椀	13.9	5.1	5.0	-	大和型、螺旋状暗文
	79	244	1	411土坑	瓦器椀	[13.8]	4.8	5.1	-	大和型、連結輪状暗文
	80	235	1	411土坑	瓦器椀	13.5	5.4	5.3	-	大和型、連結輪状暗文
208	81	314	1	21ピット	土師器皿	[8.8]	1.0	-	-	
	82	316	1	75ピット	土師器皿	[7.8]	1.1	-	-	
	83	171	1	76ピット	土師器皿	[8.6]	1.1	-	-	
	84	779	1	379ピット	土師器皿	[8.4]	1.0	-	-	
	85	62	1	195土坑	土師器皿	[7.8]	1.1	-	-	
	86	63	1	195土坑	土師器皿	8.9	1.15	-	-	
	87	61	1	195土坑	土師器皿	[13.2]	2.75	-	-	
	88	52	1	195土坑	土師器皿	8.4	1.7	-	-	
	89	68	1	195土坑	瓦器椀	[14.3]	4.2	[3.6]	-	楠葉型、連続長楕円状暗文
	90	184	1	47ピット	土師器皿	8.5	1.2	-	-	
	91	103	1	141ピット	土師器皿	8.9	1.8	-	-	
	92	252	1	443土坑	土師器皿	[14.2]	2.4	-	-	
	93	175	1	80ピット	瓦器椀	[9.8]	2.9	[3.05]	-	楠葉型
	94	174	1	80ピット	瓦器椀	12.5	3.9	4.1	-	楠葉型
	95	318	1	27ピット	瓦器椀	[14.2]	/	/	-	楠葉型
	96	99	1	59ピット	瓦器椀	[14.0]	4.8	[4.6]	-	楠葉型、連続長楕円状暗文
	97	100	1	293ピット	瓦器椀	15.0	5.3	6.0	-	楠葉型
209	98	652	1	163・383ピット[中心建物③・④]	土師器皿	[8.8]	/	-	-	
	99	651	1	102ピット	土師器皿	[7.8]	1.0	-	-	
	100	199	1	171ピット	土師器皿	[7.9]	1.1	-	-	
	101	783	1	431土坑	土師器皿	[9.4]	1.7	-	-	
	102	208	1	435土坑	土師器皿	[10.0]	2.1	-	-	
	103	251	1	446土坑	土師器皿	[8.7]	1.4	-	-	
	104	470	1	492ピット	土師器皿	14.5	2.1	-	-	
	105	224	1	422土坑	白磁椀	/	/	[7.8]	-	
	106	217	1	422土坑	瓦器椀	[15.2]	/	/	-	大和型
	107	239	1	111土坑	瓦器椀	12.0	4.2	4.6	-	楠葉型
	108	96	1	111土坑	瓦器椀	[11.4]	/	/	-	楠葉型
	109	134	1	415土坑	瓦器皿	[10.6]	1.7	-	-	連結輪状暗文
	110	195	1	266土坑	瓦器椀	[12.0]	/	/	-	楠葉型
	111	221	1	120落込	須恵器鉢	[29.3]	/	/	[29.8]	束播系
112	1000	1	413土坑	瓦器椀	/	/	4.1	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
113	152	1	413土坑	土師質羽釜	[26.0]	/	-	[31.2]	鏝以下に煤付着	
210	114	177	1	407溝	土師器皿	7.0	1.1	-	-	
	115	138	1	407溝	土師器皿	[7.8]	0.9	-	-	
	116	137	1	407溝	土師器皿	[7.6]	1.3	-	-	
	117	133	1	407溝	土師器皿	8.8	1.7	-	-	
	118	176	1	407溝	土師器皿	9.2	1.75	-	-	
	119	147	1	407溝	瓦器椀	[11.9]	4.1	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	120	132	1	407溝	青磁杯	/	/	[6.2]	/	龍泉窯系 蓮弁文 見込みに双魚文
	121	136	1	407溝	白磁椀	/	/	6.0	/	
	122	146	1	407溝	瓦質土器火鉢	[35.4]	/	/	[38.8]	
	123	220	1	4溝	青磁椀	/	/	[6.3]	-	龍泉窯系
211	124	86	1	7溝	土師器皿	[7.4]	0.9	-	-	
	125	80	1	7溝	土師器皿	[7.4]	1.4	-	-	
	126	92	1	7溝	土師器皿	[7.2]	1.2	-	-	
	127	72	1	7溝	土師器皿	[8.0]	1.3	-	-	
	128	5	1	7溝	土師器皿	7.8	1.3	-	-	
	129	18	1	7溝	土師器皿	7.6	0.8	-	-	
	130	227	1	7溝	土師器皿	[7.4]	1.2	-	-	
	131	90	1	7溝	土師器皿	[7.6]	1.1	-	-	
	132	85	1	7溝	土師器皿	[7.3]	1.4	-	-	
	133	71	1	7溝	土師器皿	[7.3]	1.3	-	-	
	134	77	1	7溝	土師器皿	[7.3]	1.2	-	-	
	135	7	1	7溝	土師器皿	7.8	1.1	-	-	
	136	87	1	7溝	土師器皿	[8.8]	1.15	-	-	
	137	89	1	7溝	土師器皿	[10.0]	1.8	-	-	
	138	75	1	7溝	土師器皿	[9.9]	2.0	-	-	
	139	6	1	7溝	土師器皿	10.4	2.0	-	-	一部、タタキ状の跡有
	140	8	1	7溝	土師器皿	10.4	2.1	-	-	

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不可能、-:計測項目なし

表11 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
211	141	126	1	7溝	土師器皿	[9.0]	1.7	-	-	
	142	125	1	7溝	土師器皿	[9.8]	1.6	-	-	
	143	228	1	7溝	瓦器椀	10.5	3.75	3.6	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	144	2	1	7溝	瓦器椀	11.6	3.7	3.1	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	145	10	1	7溝	瓦器椀	11.6	3.6	4.3	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	146	223	1	7溝	瓦器椀	10.8	3.3	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	147	3	1	7溝	瓦器椀	[11.8]	4.1	4.5	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	148	1	1	7溝	瓦器椀	[11.8]	4.05	4.1	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	149	230	1	7溝	瓦器椀	[11.2]	3.85	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	150	4	1	7溝	瓦器椀	[10.9]	3.8	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	151	140	1	7溝	瓦器椀	[10.6]	3.9	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	152	229	1	7溝	古瀬戸平椀	[15.8]	/	/	-	
212	153	97	1	7溝	青磁杯	/	/	/	-	龍泉窯系、鎬蓮弁文
	154	73	1	7溝	青磁椀	[16.8]	/	/	-	龍泉窯系、蓮弁文
	155	67	1	7溝	青磁椀	/	/	4.5	-	龍泉窯系
	156	954	1	7溝	瓦質土器火鉢	/	/	/	/	輪花形
	157	160	1	7溝	瓦質土器火鉢	/	/	/	/	輪花形
	158	304	1	7溝	瓦質土器火鉢	/	/	/	/	輪花形
	159	162	1	7溝	瓦質土器火鉢	/	/	/	/	輪花形
	160	958	1	7溝	瓦質土器火鉢	/	/	/	/	輪花形
	161	279	1	7溝	瓦質土器風炉	[21.4]	/	-	/	
	162	260	1	7溝	瓦質土器火鉢	[41.2]	/	/	/	
213	163	83	1	7溝	瓦質土器火鉢	[33.2]	/	/	[35.4]	
	164	98	1	7溝	瓦器壺	[6.8]	/	/	[13.2]	肩部に蓮華文状暗文
	165	1013	1	7溝	瓦質土器蓋	/	/	/	/	
	166	78	1	7溝	瓦質羽釜	[18.2]	/	-	[23.4]	
	167	131	1	7溝	瓦質羽釜	[13.0]	/	-	[17.0]	煤付着
	168	82	1	7溝	古瀬戸壺?	[17.7]	/	/	/	
	169	84	1	7溝	須恵器甕	[18.2]	/	-	/	東播系
	170	76	1	7溝	須恵器甕	[22.6]	/	-	/	東播系
	171	88	1	7溝	須恵器甕	[31.7]	/	-	/	東播系
	172	95	1	7溝	瓦質鍋	[26.8]	/	-	[27.9]	外面に煤付着
214	173	94	1	7溝	白磁椀	[15.0]	/	/	[15.7]	
	174	74	1	7溝	白磁椀	/	/	/	/	
	175	70	1	7溝	白磁椀	[15.1]	/	/	[15.4]	東播系
	176	93	1	7溝	須恵器鉢	[29.2]	/	/	[30.0]	東播系
	177	91	1	7溝	須恵器鉢	[32.7]	/	/	[33.0]	東播系
	178	139	1	7溝	須恵器鉢	[25.8]	/	/	[26.2]	東播系
	179	81	1	7溝	須恵器鉢	[33.4]	/	/	[34.2]	東播系
	180	130	1	7溝	須恵器鉢	[33.2]	/	/	[34.1]	東播系
	181	148	1	7溝	瓦質土器播鉢	[31.8]	/	/	-	大和産、摺目8条1単位
	215	182	936	1	7溝	常滑焼甕	[50.0]	/	/	[82.0]
183		937	1	7溝	常滑焼甕	/	/	[18.4]	[66.8]	
216	184	178	1	12溝	土師器皿	[8.0]	1.0	-	-	
	185	194	1	12溝	土師器皿	[10.3]	2.15	-	-	
	186	179	1	12溝	瓦器椀	[13.0]	3.8	[5.2]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	187	153	1	12溝	須恵器鉢	[27.6]	10.75	[8.0]	[28.5]	東播系
217	188	165	1	100溝・384溝	土師器皿	7.8	1.1	-	-	
	189	167	1	100溝・384溝	土師器皿	[8.3]	1.1	-	-	
	190	166	1	100溝・384溝	土師器皿	[8.4]	1.15	-	-	
	191	307	1	100溝・384溝	瓦器椀	[12.7]	4.7	[4.2]	-	楠葉型
	192	151	1	100溝・384溝	瓦器椀	[13.2]	4.2	[4.9]	-	楠葉型
	193	173	1	100溝・384溝	瓦器椀	[13.0]	4.2	[4.6]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	194	154	1	100溝・384溝	瓦質三足釜	[17.4]	/	-	[23.8]	
	195	163	1	100溝・384溝	須恵器鉢	[31.9]	/	/	[33.2]	東播系、口縁部に摩滅痕
	196	785	1	408溝	土師器皿	[13.9]	/	-	-	
	197	238	1	425溝	土師器皿	[13.3]	2.35	-	-	
	198	1001	1	425溝	瓦器椀	/	/	[5.0]	-	楠葉型か、螺旋状暗文か
	199	242	1	425溝	瓦器椀	[14.0]	5.7	[4.4]	-	大和型、連結輪状暗文
	200	237	1	425溝	白磁椀	[14.8]	/	/	[15.2]	
	201	236	1	425溝	土師質羽釜	[19.2]	/	-	[26.2]	外面下部に煤付着
202	419	1	425溝	土師質羽釜	[27.2]	/	-	[36.6]	内外面共に煤付着部分有	
218	203	241	1	113溝	土師器皿	10.5	2.2	-	-	
	204	46	1	13溝	土師器皿	[8.9]	1.7	-	-	
	205	191	1	128溝	土師器皿	[7.8]	1.0	-	-	
	206	192	1	128溝	須恵器鉢	[32.6]	/	/	[33.6]	東播系
	207	69	1	16溝	青磁椀	/	/	4.6	-	龍泉窯系、蓮弁文
	208	185	1	34溝	土師器皿	[11.0]	1.5	-	-	
	209	196	1	34溝	瓦器椀	[12.8]	/	/	-	楠葉型
	210	172	1	409溝	土師器皿	9.0	1.2	-	-	
	211	143	1	409溝	土師器皿	[11.8]	2.1	-	-	

表12 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
218	212	141	1	409溝	瓦器碗	[14.0]	5.2	5.0	-	大和型、連結輪状暗文
	213	142	1	409溝	瓦器碗	[14.7]	5.4	[5.3]	-	大和型、連結輪状暗文
	214	145	1	409溝	瓦器碗	[14.2]	5.1	[4.2]	-	大和型、連結輪状暗文
	215	169	1	1層	土師器皿	7.9	1.4	-	-	
	216	49	1	8溝	青磁皿	10.25	2.1	6.4	-	同安窯系
	217	210	1	432溝	青磁碗	[16.1]	/	/	-	龍泉窯系、蓮華文
	218	45	1	147溝	土師器小壺	2.1	3.5	-	4.5	
	219	42	1	147溝	土師器皿	8.0	1.1	-	-	
	220	47	1	147溝	須恵器鉢	[23.8]	/	/	[24.2]	東播系
219	221	44	1	147溝	瓦質羽釜	16.9	/	-	[21.4]	全面に煤付着
	222	296	2	1層	瓦器碗	12.0	3.85	3.35	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
220	223	278	2	1層	瓦器碗	[13.4]	4.3	[4.2]	-	楕葉型
	224	336	2	127ピット[建物10]	土師器皿	[10.6]	1.85	-	-	
	225	309	2	131ピット[建物5]	土師器皿	7.7	1.05	-	-	
	226	255	2	81ピット	土師器皿	[7.6]	1.2	-	-	内面に付着物有
	227	253	2	81ピット	土師器皿	[8.0]	1.1	-	-	
	228	294	2	81ピット	青磁碗	/	/	[4.8]	-	龍泉窯系
	229	254	2	81ピット	陶器蓋	[6.0]	/	-	-	
	230	249	2	80ピット	土師器皿	[8.2]	1.2	-	-	
	231	308	2	80ピット	土師器皿	12.0	2.35	-	-	
	232	250	2	80ピット	瓦器皿	[8.8]	1.55	-	-	ジグザグ状暗文
221	233	247	2	132ピット	土師器皿	[13.8]	2.4	-	-	
	237	361	2	27土坑	土師器皿	8.0	1.15	-	-	
	238	298	2	27土坑	土師器皿	7.5	1.0	-	-	
	239	297	2	27土坑	土師器皿	7.8	1.2	-	-	
	240	285	2	27土坑	土師器皿	8.0	1.1	-	-	
	241	360	2	27土坑	土師器皿	8.2	1.1	-	-	
	242	299	2	27土坑	土師器皿	7.25	1.1	-	-	
	243	362	2	27土坑	土師器皿	[10.6]	2.1	-	-	
	244	359	2	27土坑	土師器皿	10.6	2.0	-	-	
	245	363	2	27土坑	土師器皿	10.6	1.6	-	-	底部中央付近に穿孔有
	246	358	2	27土坑	瓦器碗	10.7	3.2	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	247	356	2	27土坑	瓦器碗	12.4	3.9	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	248	355	2	27土坑	瓦器碗	11.7	4.0	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	249	357	2	27土坑	瓦器碗	11.9	4.0	3.9	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	250	305	2	27土坑	瓦質三足釜	[18.0]	/	-	[21.2]	外面底部全体に煤付着
	251	50	2	27土坑	瓦質羽釜	17.7	/	-	21.5	外面に煤付着
	252	300	2	27土坑	須恵器甕	[21.8]	/	-	/	東播系
253	43	2	27土坑	須恵器甕	[28.6]	/	-	/	東播系	
222	254	209	2	26井戸	土師器皿	[7.8]	1.2	-	-	外面底部に接合痕有
	255	333	2	58土坑	瓦器碗	/	/	[5.0]	-	楕葉型
	256	334	2	58土坑	瓦器碗	[13.0]	/	/	-	楕葉型
	257	261	2	58土坑	瓦器碗	[13.9]	4.3	[5.2]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
223	258	276	2	97土坑	青磁碗	/	/	5.0	-	龍泉窯系
	259	301	2	83土坑	古瀬戸水注	/	/	/	/	内面に煤付着
224	260	258	2	63[建物4]・64ピット	土師器皿	[7.6]	1.1	-	-	
	261	289	2	51土坑	土師器皿	8.0	1.15	-	-	外面に煤付着
	262	288	2	51土坑	土師器皿	[11.4]	2.15	-	-	
	263	302	2	51土坑	瓦器碗	[12.2]	4.1	[4.2]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	264	286	2	51土坑	瓦器碗	14.6	5.2	5.25	-	楕葉型、螺旋状暗文
	265	287	2	51土坑	須恵器鉢	[32.2]	11.6	[11.2]	[32.4]	東播系
	266	306	2	5落込	土師器皿	[8.6]	0.9	-	-	
	267	343	2	104土坑	土師器皿	11.0	2	-	-	内面外面共に黒褐色の付着物有
	268	342	2	104土坑	瓦器碗	10.15	3.35	4.0	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	269	323	2	112土坑	瓦器碗	[15.4]	/	/	-	楕葉型？
	270	322	2	112土坑	須恵器鉢	[28.2]	/	/	[29.1]	東播系
	271	331	2	20土坑	土師器皿	[14.7]	/	-	-	外面一部に煤付着
	272	273	2	20土坑	瓦器皿	10.1	1.9	-	-	ジグザグ状暗文
	273	295	2	20土坑	瓦器皿	9.2	1.8	-	-	ジグザグ状暗文
	274	332	2	20土坑	瓦器碗	[14.0]	5.1	[4.75]	-	大和型、連結輪状暗文
	275	315	2	20土坑	土師質羽釜	[20.0]	/	-	[24.8]	外面に煤付着
	225	278	264	2	176ピット	土師器皿	[7.2]	0.7	-	-
279		256	2	90ピット[建物2]	土師器皿	[9.9]	1.75	-	-	底部外面に粘土板の接合痕有
280		324	2	156土坑	土師器皿	9.1	1.4	-	-	
281		310	2	156土坑	瓦器碗	[15.2]	6.25	[5.6]	-	大和型、ジグザグ状暗文
282		262	2	259ピット	土師器皿	[10.8]	1.9	-	-	
283		257	2	166ピット	土師器皿	[11.8]	1.9	-	-	
284	265	2	184ピット	土師器皿	[12.6]	2.35	-	-		

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不可能、-:計測項目なし

表13 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考	
						口径	器高	底径	最大径		
225	285	339	2	86土坑	土師器皿	[11.0]	2.65	-	-	楠葉型	
	286	338	2	86土坑	瓦器碗	[12.6]	/	/	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
	287	312	2	29井戸	瓦器碗	11.2	3.7	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
	288	311	2	29井戸	瓦器碗	[11.4]	3.2	[3.9]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文か	
	289	313	2	29井戸	須恵器鉢	[27.6]	/	/	[29.1]	東播系	
	291	263	2	60ピット	瓦器碗	[14.8]	4.95	[5.2]	-	楠葉型	
	292	259	2	91ピット[柵1]	土師器台付皿	/	/	/	-		
293	267	2	182ピット	須恵器壺	[10.6]	/	/	/			
226	294	327	2	27土坑	土師器皿	[8.0]	1.6	-	-		
	295	284	2	54溝	土師器皿	7.9	1.2	-	-		
	296	290	2	41溝	土師器皿	9.0	1.4	-	-		
	297	291	2	41溝	土師器皿	8.8	1.2	-	-		
	298	292	2	41溝	土師器皿	[8.4]	1.4	-	-	底部外面に粘土板接合痕有	
	299	303	2	41溝	瓦器碗	14.6	4.75	5.7	-	楠葉型、螺旋状暗文	
	300	293	2	41溝	瓦器碗	[14.4]	4.7	[4.2]	-	大和型、連結輪状暗文	
	301	326	2	52溝	土師器皿	8.4	1.1	-	-		
	302	281	2	52溝	土師器皿	8.1	1.1	-	-		
	303	282	2	52溝	土師器皿	8.0	1.3	-	-		
	304	283	2	52溝	土師器皿	8.4	1.3	-	-		
	305	325	2	52溝	白磁碗	[16.8]	/	/	-		
	306	329	2	21溝	瓦器碗	[15.2]	/	/	-	大和型、ジグザグ状暗文	
	276	345	2	21溝	瓦器碗	[15.4]	/	/	-	大和型	
	277	344	2	21溝	瓦器碗	14.0	5.65	5.3	-	大和型	
	307	341	2	115溝	瓦器碗	[10.7]	3.0	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
	308	340	2	115溝	瓦質三足釜	[19.8]	/	-	[25.4]	外面下部に煤付着	
290	335	2	105土坑	瓦器碗	[12.8]	/	/	-	楠葉型		
227	309	514	4	2層	土師器皿	[13.1]	2.5	-	-		
	310	519	4	2層	瓦器皿	9.8	1.7	-	-	ジグザグ状暗文	
	311	516	4	2層	瓦器碗	[14.1]	4.7	[3.7]	-	大和型、連結輪状暗文	
	312	515	4	2層	土師質羽釜	[29.2]	/	-	[36.8]		
228	313	944	4	68ピット	土師器皿	8.5	1.65	-	-	内面に全体的に薄く有機物が付着	
229	314	946	4	73土坑	土師器皿	[8.7]	1.4	-	-		
	315	942	4	73土坑	瓦器碗	[13.4]	3.7	[4.1]	-	楠葉型	
	316	155	4	72土坑	土師器皿	[12.0]	2.4	-	-		
	317	945	4	72土坑	土師器皿	[11.8]	2.3	-	-		
	318	925	4	72土坑	瓦器碗	[13.9]	4.2	[4.6]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
	234	156	4	72土坑	瓦器皿	9.4	1.8	-	-	ジグザグ状暗文	
	235	157	4	72土坑	瓦器碗	[13.3]	/	/	-	楠葉型	
	236	158	4	72土坑	瓦器碗	[13.7]	4.55	[4.85]	-	楠葉型	
	319	517	4	1土坑	土師器皿	8.7	1.5	-	-		
	320	518	4	1土坑	瓦器皿	8.8	1.8	-	-	ジグザグ状暗文	
	321	541	4	1土坑	瓦器碗	14.2	/	/	-	楠葉型、連結輪状暗文	
	322	521	4	1土坑	土師質羽釜	[23.8]	/	-	[30.7]	内外面ともに煤付着	
	323	530	4	1土坑	瓦質三足釜	[19.6]	/	-	[26.6]	外面煤付着	
	230	324	886	4	345土坑	土師器皿	[10.8]	1.75	-	-	
325		710	4	262土坑	瓦器碗	[11.8]	/	/	-	楠葉型	
326		871	4	384土坑	瓦器皿	[8.9]	1.2	-	-	ジグザグ状暗文	
327		870	4	384土坑	瓦器碗	[12.5]	3.95	[4.85]	-	楠葉型	
328		872	4	384土坑	瓦器碗	[13.5]	4.5	[5.2]	-	楠葉型	
329		876	4	386土坑	瓦器皿	[10.6]	1.9	-	-	連続長楕円状暗文	
330		533	4	275土坑	瓦器皿	9.95	1.6	-	-	ジグザグ状暗文	
331		537	4	275土坑	瓦器皿	9.8	2.3	-	-	ジグザグ状暗文	
332		890	4	275土坑	瓦器碗	[15.2]	/	/	-	大和型	
333		556	4	275土坑	瓦器碗	[15.4]	5.3	[5.7]	-	大和型、連結輪状暗文	
334		547	4	275土坑	瓦器碗	[15.0]	5.0	[5.1]	-	大和型、連結輪状暗文	
335		552	4	275土坑	瓦器碗	[14.0]	/	/	-	大和型	
336		948	4	31ピット	須恵器鉢	/	/	/	/	東播系	
337		713	4	264土坑	青磁碗	/	/	[5.2]	-	龍泉窯系、蓮弁文	
231		338	383	4	253溝	瓦器碗	[14.2]	4.3	[6.65]	-	楠葉型
		339	622	4	253溝	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楠葉型
		340	875	4	401溝	瓦器碗	[10.8]	/	-	-	楠葉型
	341	621	4	248溝	瓦器碗	[14.7]	4.45	[4.7]	-	大和型	
	342	623	4	246溝	瓦器碗	[13.6]	4.45	[5.4]	-	楠葉型、螺旋状暗文か	
	343	620	4	247溝	土師器皿	[9.3]	1.3	-	-		
	344	714	4	攪乱	古瀬戸花瓶	[7.2]	/	/	/	近世溝出土	
	345	790	4	254溝	青磁碗	[11.0]	/	/	-		
	346	794	4	254溝	青磁碗	/	/	4.6	-		
	347	663	4	3層	古瀬戸耳壺?	/	/	/	/		
	348	619	4	246溝	須恵器甕	[26.0]	/	/	/	口縁部内面薄く煤付着、東播系	
232	349	941	4	6溝	土師器皿	[12.9]	2.5	-	-	内外面共に煤付着	
	350	934	4	6溝	土師器皿	[13.0]	2.2	-	-		

表14 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
232	351	933	4	526土坑	土師器皿	[14.2]	2.6	-	-	底部内面に僅かに炭化物付着
	352	943	4	6溝	瓦器椀	[13.4]	4.5	[5.4]	-	楕葉型、螺旋状暗文か
	353	924	4	6溝	瓦器椀	[14.35]	4.85	[4.2]	-	大和型、連結輪状暗文
	354	932	4	6溝	瓦器椀	14.4	4.9	5.9	-	連結輪状暗文
	355	940	4	6溝	瓦器椀	[13.2]	4.7	[4.6]	-	大和型、連結輪状暗文
	356	231	4	6溝	瓦器椀	14.4	5.2	6.4	-	大和型？
	357	520	4	6溝	瓦器椀	14.6	/	/	-	楕葉型、連結輪状暗文
	358	926	4	526土坑	瓦器椀	[14.4]	4.3	[4.7]	-	楕葉型、連続長楕円状暗文
	359	993	4	526土坑	瓦器椀	[13.8]	5.0	[4.6]	-	大和型
	360	935	4	526土坑	瓦器皿	[8.6]	1.8	-	-	ジグザグ状暗文、楕葉型
	361	947	4	6溝	須恵器鉢	/	/	/	/	東播系
	362	496	4	6溝	土師質羽釜	31.2	/	-	36.9	内面・外面下部ハケ、外面上部ナデ
233	363	697	4	242溝	瓦器椀	[13.4]	/	/	-	楕葉型
	364	777	4	242溝	瓦器椀	[13.0]	4.2	3.85	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	365	512	4	242溝	瓦器椀	[12.8]	4.6	[4.7]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	366	522	4	242溝	古瀬戸天目椀	9.9	/	/	10.0	
	367	649	4	242溝	須恵器杯蓋	/	/	/	-	
	368	641	4	242溝	須恵器杯身	/	/	-	[12.2]	
	369	377	4	242溝	土師器壺	[8.6]	/	-	[9.6]	外面、口縁部内面ハケ、体部外面ナデ
	370	650	4	242溝	須恵器甕	[16.0]	/	/	/	
	371	974	4	242溝	雁振瓦	残存長33.5、高[9.2]				凹面布目痕、コビキ痕
234	372	727	4	242溝	丸瓦	最大長33.9、幅13.3、高6.2				凹面吊り紐痕、布目痕、コビキ痕
	373	973	4	242溝	丸瓦	最大長31.7、幅13.9、高7.2				
	374	531	5	1層	土師器皿	6.9	0.8	-	-	
235	375	527	5	1層	土師器皿	7.8	1.15	-	-	
	376	526	5	1層	土師器皿	7.8	1.1	-	-	
	377	538	5	1層	土師器皿	7.5	0.95	-	-	
	378	534	5	1層	土師器皿	8.1	0.9	-	-	
	379	529	5	1層	土師器皿	8.2	1.35	-	-	
	380	535	5	1層	土師器皿	7.9	1.2	-	-	
	381	382	5	1層	土師器皿	9.1	0.95	-	-	
	382	510	5	1層	土師器皿	8.3	1.2	-	-	
	383	513	5	1層	土師器皿	8.0	1.2	-	-	
	384	508	5	1層	土師器皿	8.1	1.3	-	-	
	385	509	5	1層	土師器皿	8.1	1.5	-	-	
	386	206	5	1層	土師器皿	8.2	1.3	-	-	
	387	528	5	1層	土師器皿	8.1	1.4	-	-	
	388	204	5	1層	土師器皿	9.6	1.5	-	-	外面底部に粘土接合痕有
	389	381	5	1層	土師器皿	9.5	1.6	-	-	底部中央に穿孔有
	390	511	5	1層	土師器皿	12.05	2.5	-	-	
	391	994	5	1層	瓦器椀	[12.0]	3.5	[3.6]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	392	740	5	1層	瓦器椀	/	/	[6.5]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	393	277	5	1層	瓦器椀	[12.8]	3.95	[4.4]	-	楕葉型、連続長楕円状暗文
	394	539	5	2層	土師器皿	11.3	2.0	-	-	
	395	540	5	2層	土師器皿	11.9	2.85	-	-	
	396	721	5	2層	土師器皿	[11.4]	1.8	-	-	内外面に共に部分的に薄く煤付着
	397	722	5	2層	土師器皿	[10.7]	1.9	-	-	
	398	723	5	2層	土師器皿	[12.8]	1.9	-	-	
	399	720	5	2層	土師器皿	[12.0]	2.5	-	-	
	400	386	5	3層	土師器皿	7.5	1.1	-	-	口縁付近に一部煤付着
	401	387	5	3層	土師器皿	7.6	1.0	-	-	
	402	378	5	3層	土師器皿	8.0	1.0	-	-	
	403	385	5	3層	土師器皿	7.8	1.15	-	-	
	404	384	5	3層	土師器皿	11.9	2.8	-	-	
	405	388	5	3層	瓦器皿	8.4	1.7	-	-	ジグザグ状暗文
	406	349	5	3層	瓦器椀	14.0	4.1	4.95	-	楕葉型
407	995	5	3層	瓦器椀	[13.2]	3.85	[4.6]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文	
408	506	5	3層	青磁椀	[17.0]	/	/	-	龍泉窯系、蓮弁文	
409	350	5	3層	須恵器鉢	[30.0]	11.3	[8.45]	-	東播系	
410	561	5	3層	瓦質羽釜	[30.8]	/	-	[39.2]		
411	852	5	4層	青磁椀	[16.8]	/	/	-	龍泉窯系、蓮弁文	
236	412	656	5	413ピット	土師器皿	[8.0]	1.2	-	-	
	413	743	5	68ピット	土師器皿	[7.8]	1.5	-	-	
	414	753	5	71ピット	土師器皿	[8.0]	1.0	-	-	
	415	780	5	1250ピット	瓦器椀	[13.3]	/	/	-	楕葉型
	416	647	5	408ピット	瓦器椀	[14.1]	/	/	-	楕葉型
	417	658	5	70ピット	瓦器椀	[11.8]	3.35	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文か
237	418	683	5	485ピット	瓦器椀	[12.8]	/	/	-	楕葉型
	419	675	5	486ピット	土師器皿	[12.4]	2.3	-	-	内面に煤付着
	420	648	5	434ピット	土師器皿	[10.9]	1.75	-	-	

単位: cm、〔 〕: 復元径、/ : 測定不可能、- : 計測項目なし

表15 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
237	421	588	5	81ピット	土師器皿	7.8	1.5	-	-	
	422	598	5	81ピット	土師器皿	[8.0]	1.2	-	-	
	423	597	5	81ピット	土師器皿	[8.2]	1.2	-	-	
	424	599	5	81ピット	瓦器皿	[8.9]	1.55	-	-	ジグザグ状暗文
	425	681	5	81ピット	瓦器椀	[12.0]	/	/	-	楕葉型
	426	642	5	81ピット	瓦器椀	[13.0]	4.5	[4.5]	-	楕葉型
	427	562	5	78ピット	土師器皿	8.2	1.0	-	-	内外面共に薄く煤付着
	428	670	5	426ピット	土師器皿	[7.0]	1.1	-	-	
	429	596	5	75ピット	土師器皿	[7.4]	1.4	-	-	
	430	646	5	75ピット	瓦器皿	9.0	1.9	-	-	
	431	645	5	75ピット	瓦器椀	[13.4]	3.9	[4.0]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	432	604	5	106ピット	土師器皿	[7.8]	1.0	-	-	
	433	270	5	105ピット	土師器皿	7.8	1.0	-	-	
	434	626	5	361ピット	瓦器椀	[13.4]	4.7	[3.6]	-	楕葉型
	435	624	5	320ピット	瓦器皿	[9.5]	1.8	-	-	
	436	831	5	442ピット	土師器皿	[8.0]	1.2	-	-	口縁部一部に薄く煤付着
	437	818	5	442ピット	土師器皿	[8.0]	1.3	-	-	
	438	833	5	442ピット	土師器皿	[8.0]	1.15	-	-	口縁部一部に薄く煤付着
	439	832	5	442ピット	土師器皿	[8.0]	1.2	-	-	内・外面ともに薄く煤付着
	440	827	5	442ピット	土師器皿	8.0	1.4	-	-	
	441	698	5	442ピット	土師器皿	7.8	1.4	-	-	口縁部に部分的に煤付着
	442	798	5	442ピット	土師器皿	7.9	1.2	-	-	口縁部付近に濃く煤付着
	443	699	5	442ピット	土師器皿	7.7	1.35	-	-	口縁部に薄い斑点状の煤付着
	444	826	5	442ピット	土師器皿	7.7	1.25	-	-	口縁部に部分的に集中して煤付着
	445	700	5	442ピット	土師器皿	7.95	1.3	-	-	外面・口縁部に点状に煤付着
	446	707	5	442ピット	土師器皿	7.9	1.3	-	-	点状に薄く煤付着
	447	702	5	442ピット	土師器皿	8.0	1.25	-	-	口縁部外面に煤付着 内面極薄く煤付着
	448	703	5	442ピット	土師器皿	7.6	1.2	-	-	口縁部に部分的に煤付着
	449	704	5	442ピット	土師器皿	8.1	1.15	-	-	口縁部に部分的に煤付着
	450	709	5	442ピット	土師器皿	7.9	1.5	-	-	
	451	706	5	442ピット	土師器皿	8.0	1.3	-	-	
	452	705	5	442ピット	土師器皿	8.1	1.35	-	-	口縁部に部分的に濃く煤付着
	453	701	5	442ピット	土師器皿	8.1	1.3	-	-	内面点状に煤付着
	454	708	5	442ピット	土師器皿	7.6	1.2	-	-	
	455	799	5	442ピット	土師器皿	8.0	1.25	-	-	口縁部に煤付着
	456	800	5	442ピット	土師器皿	7.7	1.3	-	-	口縁部付近に薄く煤付着
	457	801	5	442ピット	土師器皿	7.9	1.1	-	-	外面口縁部、底部に一部点状の煤付着
	458	830	5	442ピット	土師器皿	7.9	1.5	-	-	内外面共に点状に薄く煤付着
	459	821	5	442ピット	土師器皿	7.8	1.2	-	-	外面の口縁部付近に点状に煤付着
	460	828	5	442ピット	土師器皿	[8.0]	1.2	-	-	内外面共、口縁一部に集中して薄く煤付着
	461	820	5	442ピット	土師器皿	8.1	1.2	-	-	内外面共に点状に煤付着
	462	819	5	442ピット	土師器皿	[7.9]	1.4	-	-	
	463	802	5	442ピット	土師器皿	7.8	1.1	-	-	内外面共に点状に煤付着
	464	829	5	442ピット	土師器皿	7.9	1.2	-	-	内外面共に点状に薄く煤付着
	465	684	5	83ピット	土師器皿	[7.6]	1.1	-	-	口縁に部分的に薄く煤付着
	466	587	5	110ピット	土師器皿	7.8	1.2	-	-	
	467	575	5	263ピット	土師器皿	[8.4]	1.45	-	-	
468	669	5	512ピット	土師器皿	[7.0]	1.2	-	-	口縁、部分的に煤付着	
469	676	5	117ピット	瓦器椀	[13.9]	/	/	-	楕葉型	
470	659	5	509ピット	瓦器椀	[13.8]	/	/	-	楕葉型	
238	471	775	5	4ピット	土師器皿	[8.4]	0.9	-	-	
	472	674	5	532ピット	土師器皿	[6.8]	1.1	-	-	
	473	744	5	5ピット	瓦質三足釜	[17.0]	/	-	[20.5]	外面に煤付着
	474	274	5	136ピット	瓦器椀	13.6	4.3	4.5	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	475	568	5	140ピット	土師器皿	[7.6]	[1.3]	-	-	
	476	680	5	165ピット	土師器皿	[8.0]	1.0	-	-	
	477	614	5	182ピット	瓦質羽釜	[18.0]	/	-	[22.2]	外面に煤付着
	478	569	5	146ピット	白磁椀	/	/	6.6	-	
	479	673	5	529ピット	瓦器椀	[14.8]	/	/	-	楕葉型
	480	615	5	529ピット	土師器皿	8.6	1.2	-	-	
	481	553	5	582ピット	瓦質羽釜	[22.0]	/	-	[25.6]	
	482	550	5	582ピット	土師器皿	[8.0]	1.0	-	-	
239	483	717	5	222ピット	瓦器椀	[13.0]	/	/	-	楕葉型
	484	718	5	219ピット	瓦器椀	[12.0]	/	/	-	楕葉型
	485	839	5	622ピット	瓦器椀	[13.3]	/	/	-	楕葉型
	486	542	5	216ピット	瓦器椀	[13.7]	3.75	[4.6]	-	楕葉型、連続長楕円状暗文
	487	815	5	216ピット	土師器皿	[12.9]	1.7	-	-	
	488	805	5	216ピット	土師器皿	[12.0]	2.0	-	-	口縁部に一部煤付着
	489	376	5	229ピット	瓦器椀	12.3	3.7	4.6	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
490	593	5	229ピット	瓦器椀	[11.4]	3.9	[3.8]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文	

単位:cm、〔 〕:復元径、/ :測定不可能、- :計測項目なし

表16 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
239	491	719	5	229ピット	土師器皿	[7.5]	1.2	-	-	内外面共に点状に付着物有
	492	594	5	229ピット	土師器皿	[10.2]	1.8	-	-	
	493	724	5	267ピット	瓦器碗	[12.9]	/	/	-	楕葉型
	494	695	5	203ピット	瓦器碗	[13.0]	/	/	-	楕葉型
	495	696	5	224ピット	土師器皿	[13.6]	2.3	-	-	
	496	715	5	226ピット	土師器皿	[8.7]	1.1	-	-	
	497	887	5	226ピット	土師器皿	[9.8]	1.4	-	-	口縁部に部分的に煤付着
	498	595	5	226ピット	土師器皿	[9.0]	1.3	-	-	
	499	716	5	226ピット	瓦器碗	[13.0]	/	/	-	外面に粘土の接合痕有、楕葉型
	500	824	5	638ピット	青磁碗	[16.8]	/	/	-	龍泉窯系、劃花文、口縁端部輪花有
	501	854	5	638ピット	瓦器皿	[9.0]	1.5	-	-	
	502	896	5	810ピット	瓦器皿	[7.8]	1.4	-	-	
	503	694	5	218ピット	須恵器鉢	[23.4]	/	/	-	東播系、内面に煤付着
	504	545	5	661ピット	須恵器鉢	[28.0]	/	/	[29.5]	東播系
	505	549	5	661ピット	須恵器鉢	[34.0]	/	/	[35.5]	東播系
240	506	851	5	681ピット	白磁碗	/	/	/	-	
	507	591	5	246ピット	白磁皿	/	/	[3.8]	-	
	508	525	5	713ピット	土師器皿	[14.6]	2.8	-	-	
	509	840	5	713ピット	瓦器碗	[14.0]	5.9	[4.8]	-	楕葉型
	510	804	5	248ピット	土師器皿	[9.8]	1.6	-	-	
	511	808	5	248ピット	瓦器碗	[11.8]	3.9	5.4	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	512	807	5	277ピット	瓦器碗	[11.0]	3.35	5.0	-	楕葉型
	513	689	5	275ピット	瓦器皿	[9.8]	1.3	-	-	
	514	806	5	673ピット	土師器皿	[8.7]	1.3	-	-	
	515	892	5	656ピット	土師器皿	[8.6]	1.2	-	-	
	516	835	5	278ピット	土師器皿	[8.0]	1.2	-	-	
	517	891	5	686ピット	土師器皿	[7.2]	1.1	-	-	
	518	822	5	281ピット	土師器皿	[8.8]	1.3	-	-	
	519	690	5	281ピット	瓦器碗	[15.0]	/	/	-	楕葉型
	520	730	5	684ピット	瓦器皿	9.4	1.2	-	-	
	521	883	5	672ピット	瓦器碗	[12.4]	3.5	[4.5]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	522	880	5	249ピット	瓦器碗	[14.8]	/	/	-	大和型
	523	536	5	272ピット	土師器皿	7.8	1.1	-	-	
	524	725	5	272ピット	瓦器碗	[13.6]	/	/	-	楕葉型
	525	853	5	666ピット	瓦器皿	[9.9]	1.5	-	-	ジグザグ状暗文
	526	877	5	812ピット	瓦器碗	[13.7]	/	/	-	楕葉型
	527	502	5	812ピット	瓦器碗	[14.4]	4.4	[4.1]	-	楕葉型、連結輪状暗文
	528	503	5	812ピット	瓦器碗	12.4	3.9	5.4	-	楕葉型、連結輪状暗文
	529	36	5	307ピット	土師器皿	8.9	1.7	-	-	外面に粘土接合痕有
	530	543	5	307ピット	瓦器碗	[13.2]	4.4	[4.8]	-	楕葉型、連結輪状暗文か
531	563	5	304ピット	土師器皿	[8.8]	1.2	-	-		
532	836	5	284ピット	瓦器碗	[14.9]	/	/	-	楕葉型、連結輪状暗文	
533	726	5	284ピット	瓦器碗	[14.8]	5.8	[5.4]	-	楕葉型、連結輪状暗文	
241	534	904	5	818ピット	瓦器碗	[12.4]	/	/	-	楕葉型
	535	894	5	663ピット	瓦器碗	[11.8]	/	/	-	楕葉型
	536	183	5	283ピット	土師器皿	8.4	1.5	-	-	
	537	882	5	288ピット	瓦器碗	[12.2]	4.05	[4.0]	-	楕葉型
	538	691	5	671ピット	瓦器碗	[12.2]	/	/	-	楕葉型
	539	889	5	728ピット	瓦器碗	[15.9]	/	/	-	大和型
	540	888	5	728ピット	瓦器碗	/	/	[5.3]	-	大和型、連結輪状暗文
	541	855	5	670ピット	土師器皿	[14.8]	2.7	-	-	
	542	346	5	724ピット	瓦器碗	[14.6]	5.6	[5.8]	-	大和型
	543	895	5	724ピット	土師器皿	[15.4]	3.1	-	-	
	544	907	5	826ピット	土師質羽釜	[27.6]	/	-	[33.4]	内外面共に煤付着
242	545	666	5	62井戸	瓦器碗	[14.1]	/	/	-	楕葉型
	546	879	5	62井戸	青磁碗	/	/	/	-	龍泉窯系、劃花文
	547	532	5	62井戸	須恵器鉢	[29.6]	/	/	[31.0]	東播系
	548	817	5	595井戸	瓦器碗	[12.2]	/	/	-	楕葉型
	549	816	5	595井戸	土師器皿	[8.1]	1.1	-	-	
	550	610	5	188井戸	瓦器碗	[12.8]	/	/	-	楕葉型
	551	611	5	188井戸	土師器皿	[8.6]	0.95	-	-	
	552	609	5	188井戸	青磁碗	/	/	/	-	龍泉窯系、劃花文
	553	693	5	188井戸	須恵器鉢	[29.6]	/	/	-	東播系
	554	692	5	642井戸	瓦質土器播鉢	[30.0]	/	/	[30.9]	内外面に煤付着、大和産、摺目7条1単位
243	555	396	5	1258・1259井戸最上層	瓦器皿	9.2	1.55	-	-	ジグザグ状暗文
	556	635	5	1258・1259井戸最上層	瓦器皿	[8.6]	1.25	-	-	ジグザグ状暗文
	557	397	5	1258・1259井戸最上層	瓦器碗	10.9	3.25	4.2	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	558	399	5	1258・1259井戸最上層	瓦器碗	[12.4]	4.6	[3.3]	-	楕葉型、連続長楕円状暗文
	559	400	5	1258・1259井戸最上層	瓦器碗	[12.8]	3.9	[4.8]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	560	398	5	1258・1259井戸最上層	瓦器碗	[10.7]	3.3	[4.0]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文

単位:cm、〔 〕:復元径、/ :測定不可能、- :計測項目なし

表17 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
243	561	634	5	1258・1259井戸最上層	土師器皿	[8.3]	1.0	-	-	
	562	395	5	1258・1259井戸最上層	土師器皿	8.0	1.75	-	-	
	563	633	5	1258・1259井戸最上層	瓦質鍋	[22.9]	/	-	[23.3]	外面に煤付着
	564	636	5	1258・1259井戸最上層	須恵器甕	[24.6]	/	/	/	東播系
244	565	546	5	1258井戸	土師器皿	7.8	1.1	-	-	
	566	548	5	1258井戸	土師器皿	8.8	1.3	-	-	
	567	554	5	1258井戸	瓦器皿	8.8	1.6	-	-	連結輪状暗文
	568	902	5	1258井戸	土師質羽釜	[23.6]	/	-	[28.4]	
	569	913	5	1259井戸	瓦器椀	/	/	[4.8]	-	楕葉型、螺旋状暗文
	570	911	5	1259井戸	瓦器椀	[13.8]	4.1	[4.4]	-	大和型、連続長楕円状暗文か
	571	914	5	1259井戸	瓦器椀	[13.8]	/	/	-	楕葉型
	572	910	5	1259井戸	瓦器椀	[12.5]	4.2	[4.8]	-	楕葉型
	573	909	5	1259井戸	瓦器椀	[12.4]	/	/	-	楕葉型
	574	912	5	1259井戸	瓦器椀	[15.8]	/	/	-	楕葉型
	575	903	5	1259井戸	土師質羽釜	[28.2]	/	-	[34.9]	
	576	917	5	1258・1259井戸最上層	瓦器椀	[13.6]	/	/	-	楕葉型
	577	922	5	1258・1259井戸最上層	瓦器椀	[14.6]	/	/	-	楕葉型
	578	915	5	1258・1259井戸最上層	瓦器椀	[12.8]	/	/	-	楕葉型
	579	916	5	1258・1259井戸最上層	瓦器椀	[11.0]	3.55	[3.0]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文か
	580	919	5	1258・1259井戸最上層	瓦器皿	[8.95]	1.65	-	-	
	581	918	5	1258・1259井戸最上層	瓦器皿	[9.4]	1.3	-	-	
	582	920	5	1258・1259井戸最上層	土師器皿	[10.8]	1.8	-	-	内外面共に煤付着
	583	921	5	1258・1259井戸最上層	土師器皿	[11.6]	2.35	-	-	内面に煤付着
	584	923	5	1258・1259井戸最上層	須恵器鉢	[26.8]	/	/	[27.6]	東播系
245	585	375	5	6土坑	須恵器長頸壺	/	/	-	15.1	
	586	373	5	6土坑	須恵器杯蓋	12.65	4.5	-	-	
	587	367	5	6土坑	須恵器杯蓋	13.2	4.4	-	-	内外面共一部煤付着
	588	374	5	6土坑	須恵器杯身	11.8	3.8	-	13.7	
	589	464	5	69ピット	土師器皿	8.1	1.3	-	-	
	590	629	5	69ピット	土師器皿	[7.6]	1.55	-	-	
	591	466	5	69ピット	土師器皿	8.0	1.25	-	-	
	592	463	5	69ピット	土師器皿	7.8	1.2	-	-	
	593	628	5	69ピット	土師器皿	[8.0]	1.35	-	-	
	594	421	5	69ピット	土師器皿	[8.5]	1.0	-	-	
	595	439	5	69ピット	土師器皿	8.2	1.3	-	-	
	596	627	5	69ピット	土師器皿	[8.2]	1.25	-	-	遺物中央部に穿孔有
	597	465	5	69ピット	土師器皿	8.6	1.15	-	-	
	598	422	5	69ピット	土師器皿	8.3	1.3	-	-	
	599	438	5	69ピット	土師器皿	8.6	1.3	-	-	内外面共部分的に煤付着
	600	559	5	69ピット	土師器皿	[9.5]	1.05	-	-	
	601	462	5	69ピット	土師器皿	8.6	1.05	-	-	
	602	461	5	69ピット	土師器皿	8.3	1.1	-	-	
	603	440	5	69ピット	土師器皿	8.0	1.55	-	-	内外面に煤付着
	604	625	5	321土坑	瓦器椀	[11.1]	/	-	-	楕葉型
605	711	5	108土坑	石鍋	[24.0]	/	/	[28.8]	外面に煤付着	
606	605	5	108土坑	瓦器椀	[13.0]	4.6	[3.6]	-	楕葉型	
607	712	5	108土坑	土師質羽釜	[35.0]	/	-	[42.0]		
608	606	5	108土坑	土師質羽釜	[35.0]	/	-	[42.2]	外面に煤付着	
246	609	458	5	460土坑	土師器皿	7.9	1.0	-	-	内外面共部分的に煤付着
	610	426	5	460土坑	土師器皿	7.9	0.9	-	-	
	611	451	5	460土坑	土師器皿	7.5	1.2	-	-	
	612	449	5	460土坑	土師器皿	7.7	1.2	-	-	内面に薄く煤付着
	613	450	5	460土坑	土師器皿	7.5	1.1	-	-	
	614	486	5	460土坑	土師器皿	7.8	1.1	-	-	内外面ともに部分的に煤付着
	615	452	5	460土坑	土師器皿	7.8	1.25	-	-	内外面ともに部分的に煤付着
	616	460	5	460土坑	土師器皿	7.8	1.1	-	-	
	617	482	5	460土坑	土師器皿	7.7	1.1	-	-	
	618	481	5	460土坑	土師器皿	8.1	1.2	-	-	
	619	473	5	460土坑	土師器皿	7.8	1.5	-	-	
	620	472	5	460土坑	土師器皿	7.4	1.25	-	-	
	621	457	5	460土坑	土師器皿	7.6	1.1	-	-	
	622	459	5	460土坑	土師器皿	8.3	1.2	-	-	
	623	427	5	460土坑	土師器皿	7.6	1.3	-	-	
	624	455	5	460土坑	土師器皿	7.9	1.15	-	-	
	625	454	5	460土坑	土師器皿	7.9	1.0	-	-	口縁部に薄く煤付着
	626	786	5	460土坑	土師器皿	[7.7]	1.0	-	-	
	627	773	5	460土坑	土師器皿	[7.8]	1.2	-	-	
	628	789	5	460土坑	土師器皿	[7.6]	1.2	-	-	
	629	448	5	460土坑	土師器皿	7.75	1.05	-	-	
	630	447	5	460土坑	土師器皿	7.8	1.1	-	-	中央部分に穿孔か

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不可能、-:計測項目なし

表18 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
246	631	446	5	460土坑	土師器皿	7.7	1.25	-	-	内外面共部分的に煤付着
	632	428	5	460土坑	土師器皿	7.2	1.2	-	-	
	633	445	5	460土坑	土師器皿	7.6	1.8	-	-	
	634	425	5	460土坑	土師器皿	8.0	1.2	-	-	
	635	442	5	460土坑	土師器皿	7.8	1.2	-	-	
	636	444	5	460土坑	土師器皿	10.35	2.0	-	-	
	637	456	5	460土坑	土師器皿	[10.2]	2.0	-	-	内外面共に薄く煤付着
	638	443	5	460土坑	土師器皿	10.8	1.9	-	-	内面に薄い付着物有
	639	429	5	460土坑	土師器皿	10.8	1.9	-	-	
	640	771	5	460土坑	青磁皿	[10.8]	2.0	[5.5]	-	同安窯系
	641	441	5	460土坑	瓦器椀	11.1	3.75	4.1	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	642	453	5	460土坑	瓦器椀	10.8	3.4	3.7	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	643	797	5	460土坑	瓦器椀	[11.1]	4.2	[3.65]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	644	791	5	460土坑	瓦器椀	[12.0]	3.9	[4.25]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	645	483	5	460土坑	瓦器椀	11.6	3.85	3.0	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	646	774	5	460土坑	瓦器椀	[10.8]	3.2	[3.1]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
647	778	5	460土坑	瓦器椀	[11.1]	/	/	-	楠葉型	
648	788	5	460土坑	瓦器椀	[11.1]	3.4	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
247	649	782	5	56土坑	瓦器椀	[13.0]	4.1	[5.3]	-	楠葉型
	650	746	5	56土坑	瓦器皿	[9.8]	1.3	-	-	楠葉型
	651	572	5	167土坑	土師器皿	9.9	1.9	-	-	
	652	685	5	79土坑	土師器皿	[8.2]	1.0	-	-	
	653	686	5	79土坑	土師器皿	[10.6]	1.6	-	-	
	654	737	5	79土坑	土師器皿	13.0	2.6	-	-	
	655	687	5	79土坑	瓦器椀	[11.0]	4.2	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	656	161	5	79土坑	瓦器椀	11.6	4.0	4.2	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	657	644	5	61土坑	土師器皿	[7.9]	1.1	-	-	
	658	756	5	61土坑	瓦器椀	[11.5]	/	/	-	楠葉型
	659	643	5	61土坑	瓦器椀	[11.5]	/	/	-	楠葉型
	660	600	5	94土坑	白磁椀	/	/	/	/	
	661	601	5	94土坑	土師器皿	[7.3]	1.1	-	-	
	662	667	5	94土坑	瓦器椀	[13.8]	/	/	-	楠葉型
	663	873	5	54土坑	瓦質三足釜	/	/	/	-	
	664	878	5	54土坑	青磁椀	/	/	/	-	龍泉窯系、蓮弁文
	665	781	5	54土坑	瓦器皿	[8.2]	/	-	-	
	666	467	5	54土坑	瓦器皿	[9.6]	1.7	-	-	底部に粘土の接合痕有
	667	586	5	395土坑	土師器皿	7.4	1.1	-	-	
	668	268	5	64土坑	土師器皿	8.2	1.3	-	-	
	669	499	5	64土坑	瓦質三足釜	17.9	/	-	23.2	外面の一部に煤付着
	670	500	5	64土坑	瓦質三足釜	17.7	/	-	22.4	外面に部分的に煤付着
	671	501	5	64土坑	土師質羽釜	[20.7]	/	-	[26.8]	外面に部分的に煤付着
	672	616	5	64土坑	瓦質三足釜	[17.8]	/	-	[23.4]	脚貼付け断面に煤付着・罅下に穿孔(外→内)
	673	423	5	391土坑	瓦器皿	8.8	1.75	-	-	ジグザグ状暗文
	674	632	5	391土坑	土師器皿	[8.2]	1.45	-	-	口縁内部に一ヶ所煤付着
675	424	5	391土坑	瓦器椀	14.0	5.1	6.0	-	楠葉型、口縁部の内外面共に部分的に煤付着	
676	631	5	391土坑	瓦器椀	[14.8]	/	/	-	楠葉型	
248	677	664	5	174土坑	土師器皿	[7.4]	1.2	-	-	
	678	665	5	174土坑	瓦器椀	[11.0]	/	/	-	楠葉型、ジグザグ状暗文か
	679	592	5	245土坑	瓦器皿	[9.4]	1.7	-	-	楠葉型
	680	661	5	166土坑	瓦器椀	[10.6]	/	/	-	楠葉型
	681	662	5	166土坑	土師器皿	[12.0]	2.0	-	-	
	682	608	5	143石敷上層	瓦質鍋	[15.8]	/	-	[17.2]	
	683	809	5	143石敷上層	瓦質土器搗鉢	/	/	[12.8]	-	大和産、摺目5条1単位
	684	810	5	143石敷上層	瓦質土器搗鉢	[31.0]	/	/	[31.6]	大和産、摺目8条1単位
	685	607	5	143石敷上層	須恵器鉢	[28.5]	/	/	[29.2]	東播系
	686	869	5	62・63井戸	瓦器椀	[11.5]	3.95	[3.0]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
249	687	182	5	98土坑	瓦器椀	13.2	4.7	4.7	-	楠葉型
	688	573	5	259土坑	土師器皿	[8.6]	0.9	-	-	楠葉型
	689	574	5	259土坑	青磁椀	/	/	/	-	龍泉窯系、蓮花文
	690	834	5	259土坑	瓦器椀	[13.4]	/	/	-	楠葉型
	691	365	5	313土坑	瓦器椀	12.1	3.9	3.7	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	692	364	5	313土坑	瓦器椀	10.4	3.1	3.5	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	693	366	5	313土坑	瓦器椀	11.8	3.8	4.25	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	694	996	5	313土坑	土師器皿	[10.3]	1.7	-	-	
	695	637	5	313土坑	土師器皿	[10.9]	2.0	-	-	全体的に煤けている
	696	899	5	314土坑	瓦器椀	[11.4]	/	/	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	697	898	5	314土坑	瓦器椀	[13.4]	/	/	-	楠葉型
	698	900	5	314土坑	瓦質三足釜	[18.4]	/	-	[23.6]	
	699	901	5	314土坑	須恵器甕	[34.4]	/	/	[35.4]	内外面ともに煤付着、東播系
	700	893	5	678土坑	瓦器椀	[11.4]	3.25	3.7	-	楠葉型

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不可能、-:計測項目なし

表19 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考	
						口径	器高	底径	最大径		
249	701	837	5	610土坑	瓦器碗	[12.9]	/	/	-	楕葉型	
	702	507	5	610土坑	土師器皿	7.7	1.35	-	-		
	703	838	5	610土坑	瓦器皿	[7.4]	1.2	-	-		
	704	906	5	820土坑	瓦器碗	[13.8]	/	/	-	楕葉型	
	705	905	5	820土坑	土師器皿	[7.9]	1.25	-	-		
	706	504	5	729土坑	瓦器皿	9.5	1.9	-	-	ジグザグ状暗文	
	707	884	5	729土坑	瓦器皿	[10.3]	1.7	-	-	ジグザグ状暗文	
	708	558	5	729土坑	瓦器碗	15.0	4.9	4.8	-	大和型、螺旋状暗文	
	709	564	5	306土坑	瓦器皿	9.1	1.15	-	-		
	710	565	5	306土坑	瓦器碗	[13.8]	4.0	[4.9]	-	楕葉型、ジグザグ条暗文、口縁部に煤付着	
250	711	34	5	653ピット	土師器皿	7.8	1.0	-	-		
	712	31	5	653ピット	土師器皿	7.6	1.4	-	-		
	713	24	5	653ピット	土師器皿	8.0	1.35	-	-		
	714	23	5	653ピット	土師器皿	12.5	2.6	-	-		
	715	40	5	653ピット	土師器皿	12.2	2.3	-	-		
	716	39	5	653ピット	土師器皿	11.5	2.2	-	-		
	717	38	5	653ピット	土師器皿	11.8	2.5	-	-		
	718	37	5	653ピット	土師器皿	11.8	2.2	-	-		
	719	35	5	653ピット	土師器皿	11.8	2.5	-	-		
	720	33	5	653ピット	土師器皿	11.3	2.1	-	-		
	721	32	5	653ピット	土師器皿	12.4	2.4	-	-		
	722	30	5	653ピット	土師器皿	12.0	2.6	-	-		
	723	29	5	653ピット	土師器皿	12.0	2.4	-	-		
	724	28	5	653ピット	土師器皿	11.6	2.2	-	-		
	725	27	5	653ピット	土師器皿	12.25	2.3	-	-		
	726	26	5	653ピット	土師器皿	11.7	2.0	-	-		
	727	25	5	653ピット	土師器皿	11.4	2.75	-	-		
	728	22	5	653ピット	土師器皿	11.8	2.2	-	-		
	729	21	5	653ピット	土師器皿	11.5	2.1	-	-		
	730	20	5	653ピット	土師器皿	12.0	2.3	-	-		
	731	19	5	653ピット	土師器皿	11.8	2.1	-	-		
	732	17	5	653ピット	土師器皿	11.2	2.15	-	-		
	733	16	5	653ピット	土師器皿	12.0	2.4	-	-		
	734	15	5	653ピット	土師器皿	11.5	2.1	-	-		
	735	14	5	653ピット	土師器皿	11.7	2.1	-	-		
	736	13	5	653ピット	土師器皿	11.1	2.4	-	-		
	737	12	5	653ピット	土師器皿	11.8	2.2	-	-		
	738	11	5	653ピット	土師器皿	12.4	2.2	-	-		
739	897	5	653ピット	土師器皿	[10.5]	2.0	-	-			
740	9	5	653ピット	土師器皿	11.5	3.5	-	-			
251	741	654	5	10溝	土師器皿	[8.2]	1.0	-	-		
	742	796	5	10溝	土師器皿	[7.4]	1.3	-	-		
	743	505	5	10溝	土師器皿	7.7	1.3	-	-		
	744	468	5	10溝	土師器皿	8.2	1.1	-	-	内外面とも部分的に煤付着	
	745	655	5	10溝	土師器皿	[7.9]	1.0	-	-	内外面ともに薄く煤付着	
	746	469	5	10溝	土師器皿	[8.2]	1.1	-	-		
	747	795	5	10溝	瓦器碗	11.6	3.4	-	-	楕葉型	
	748	485	5	10溝	瓦器碗	12.0	/	-	-	楕葉型	
	749	793	5	10溝	瓦質三足釜	[15.6]	/	-	[19.8]	外面鏝以下に煤付着	
	750	369	5	10溝	瓦質三足釜	[15.8]	/	-	19.4		
	751	370	5	10溝	瓦質羽釜	[16.4]	/	-	[30.5]		
	752	653	5	10溝	瓦質羽釜	[17.2]	/	-	24.4		
	753	413	5	10溝	瓦質羽釜	[31.2]	/	-	[40.4]	外面に煤付着	
	754	348	5	10溝	須恵器鉢	[29.4]	/	/	[30.5]	東播系	
	755	380	5	11溝	土師器皿	7.2	1.0	-	-		
	756	784	5	11溝	土師器皿	[8.0]	0.9	-	-		
	757	368	5	11溝	土師器皿	7.8	1.1	-	-		
	758	352	5	12溝	土師器皿	8.0	1.1	-	-		
	759	351	5	12溝	土師器皿	8.0	1.3	-	-		
	252	760	757	5	12溝	瓦器碗	[11.8]	3.8	-	-	楕葉型
761		776	5	12溝	瓦器碗	12.0	3.6	4.0	-	楕葉型、ジグザグ状暗文	
762		998	5	58溝	土師器皿	[7.8]	[1.4]	-	-		
763		997	5	58溝	土師器皿	[6.9]	[1.0]	-	-		
764		435	5	58溝	瓦器碗	11.9	/	[3.4]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文	
765		731	5	58溝	常滑焼甕	[29.4]	/	/	/		
253		766	415	5	389・20溝	土師器皿	7.1	1.0	-	-	
		767	353	5	20溝	土師器皿	7.2	1.2	-	-	
	768	391	5	389・20溝	土師器皿	9.8	1.7	-	-		
	769	394	5	389・20溝	土師器皿	11.0	2.35	-	-		
	770	747	5	389・20溝	土師器皿	[11.0]	1.7	-	-		

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不可能、-:計測項目なし

表20 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
253	771	999	5	389・20溝	土師器皿	[9.3]	[1.9]	-	-	
	772	792	5	20溝	瓦器碗	[11.2]	3.4	-	-	楕葉型
	773	767	5	389・20溝	瓦器碗	[11.6]	4.3	-	-	楕葉型、内面に煤付着
	774	411	5	20溝	瓦器碗	10.8	3.55	3.05	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	775	762	5	389・20溝	瓦器碗	[12.0]	4.1	[4.6]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	776	414	5	389・20溝	瓦器碗	11.9	3.6	4.0	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	777	758	5	389・20溝	瓦質羽釜	[19.3]	/	-	[23.4]	
	778	392	5	389・20溝	瓦質羽釜	[15.1]	/	-	[18.4]	
	779	407	5	389・20溝	瓦質三足釜	[18.4]	/	-	[23.7]	
	780	406	5	389・20溝	瓦質三足釜	[14.5]	/	-	[18.6]	
	781	760	5	20溝	瓦質羽釜	[16.3]	/	-	[20.5]	外面に煤付着
	782	761	5	20溝	瓦質羽釜	[17.8]	/	-	[23.2]	
	783	742	5	20溝	瓦質羽釜	[22.7]	/	-	[27.0]	
	784	393	5	389・20溝	瓦質羽釜	[29.3]	/	-	[38.8]	外面に煤付着
785	759	5	389・20溝	土師質羽釜	[28.3]	/	-	[29.2]		
254	786	752	5	389・20溝	須恵器鉢	[29.2]	/	/	[30.2]	東播系
	787	412	5	20溝	須恵器甕	[23.8]	/	-	/	東播系
	788	354	5	20溝	須恵器甕	[32.8]	/	-	/	東播系
	789	678	5	446土坑	土師器皿	7.8	0.95	-	-	
	790	679	5	446土坑	土師器皿	[9.3]	1.4	-	-	
	791	555	5	446土坑	須恵器鉢	[25.8]	/	/	[26.6]	東播系
	792	436	5	312溝	土師器皿	[7.8]	1.5	-	-	
	793	437	5	312溝	土師器皿	7.5	1.0	-	-	
	794	372	5	20・312溝	土師器皿	7.8	1.2	-	-	
	795	371	5	20・312溝	土師器皿	10.4	2.1	-	-	
	796	566	5	20・312溝	瓦器碗	[10.6]	/	/	-	楕葉型
797	630	5	312溝	須恵器鉢	[27.6]	/	/	[28.3]	東播系	
255	798	787	5	18溝	土師器皿	[8.0]	0.95	-	-	
	799	432	5	18溝	土師器皿	7.5	1.15	-	-	
	800	402	5	18溝	土師器皿	7.7	1.3	-	-	
	801	769	5	18溝	土師器皿	[10.4]	1.5	-	-	
	802	431	5	18溝	土師器皿	[10.5]	1.9	-	-	
	803	433	5	18溝	瓦器碗	10.7	3.4	/	-	楕葉型
	804	401	5	18溝	瓦器碗	11.8	3.7	-	-	楕葉型
	805	430	5	18溝	瓦器碗	11.55	3.8	3.7	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	806	403	5	18溝	瓦器碗	12.0	4.15	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	807	347	5	18溝	瓦器碗	12.8	4.3	4.7	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	808	434	5	18溝	瓦器碗	10.0	3.3	3.2	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
809	768	5	18溝	瓦質羽釜	[17.4]	/	-	[21.9]		
256	810	478	5	土器溜り①	土師器皿	[11.8]	2.0	-	-	
	811	471	5	土器溜り①	瓦器碗	10.05	3.2	3.0	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	812	498	5	土器溜り①	須恵器鉢	[26.2]	/	/	[27.5]	東播系
	813	497	5	土器溜り①	須恵器甕	[36.2]	/	-	/	東播系
	814	476	5	土器溜り②	土師器皿	7.8	1.2	-	-	
	815	480	5	土器溜り②	土師器皿	7.95	1.2	-	-	
	816	474	5	土器溜り②	土師器皿	[7.8]	1.1	-	-	
	817	492	5	土器溜り②	土師器皿	[7.6]	1.1	-	-	
	818	475	5	土器溜り②	土師器皿	10.1	2.05	-	-	
	819	477	5	土器溜り②	土師器皿	[10.8]	1.6	-	-	内外面共に薄く煤付着
	820	489	5	土器溜り②	土師器皿	[10.6]	2.1	-	-	内外面共に、部分的に煤付着
	821	493	5	土器溜り②	土師器皿	[10.8]	1.55	-	-	
	822	479	5	土器溜り②	土師器皿	10.4	2.2	-	-	口縁部に部分的に有機物付着
	823	494	5	土器溜り②	土師器皿	[11.6]	[1.7]	-	-	
	824	490	5	土器溜り②	瓦器碗	[10.2]	/	/	-	楕葉型、ジグザグ状暗文か
825	487	5	土器溜り②	瓦器碗	[11.2]	3.6	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文	
826	488	5	土器溜り②	瓦器碗	[12.4]	3.6	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文	
827	491	5	土器溜り②	瓦器碗	[12.0]	4.1	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文	
257	828	269	5	23溝・65溝	土師器皿	8.2	1.35	-	-	
	829	418	5	24溝	土師器皿	[7.3]	1.1	-	-	
	830	738	5	24溝	土師器皿	[7.7]	1.3	-	-	
	831	417	5	24溝	土師器皿	[8.4]	1.1	-	-	内外面共に薄く煤付着
	832	682	5	24溝	土師器皿	[8.4]	1.3	-	-	内外面共に煤付着
	833	416	5	24溝	土師器皿	[11.6]	1.9	-	-	
	834	735	5	24溝	瓦器碗	[12.6]	/	/	-	楕葉型
	835	755	5	24溝	瓦器碗	[12.0]	3.85	[4.1]	-	楕葉型
	836	741	5	24溝	瓦器碗	[11.7]	4.2	[3.85]	-	楕葉型
	837	739	5	24溝	瓦器碗	11.1	3.2	2.8	-	楕葉型、ジグザグ状暗文か
838	736	5	24溝	瓦器碗	[10.9]	2.8	[3.6]	-	楕葉型	
839	732	5	24溝	瓦質羽釜	[18.2]	/	-	[23.9]		
840	733	5	24溝	須恵器鉢	[31.8]	/	/	[33.0]	東播系	

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不可能、-:計測項目なし

表21 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考	
						口径	器高	底径	最大径		
257	841	734	5	25溝	土師器皿	[10.0]	1.6	-	-		
	842	728	5	25溝	瓦器椀	[10.8]	3.2	3.4	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
	843	668	5	25溝	土師質羽釜	[30.0]	/	-	[37.6]		
	844	764	5	26溝	常滑甕	[39.6]	/	/	/		
	845	729	5	27溝	瓦器椀	[12.2]	4.0	[3.6]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文か	
	846	772	5	28溝	石鍋	[30.8]	/	/	[35.2]		
258	847	750	5	100溝	土師器皿	[9.4]	1.35	-	-		
	848	560	5	100溝	白磁椀	16.8	/	/	17.4		
	849	159	5	100溝	瓦器椀	12.0	3.8	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
	850	551	5	159溝	土師器皿	7.6	1.0	-	-		
	851	612	5	159溝	瓦器皿	[9.4]	1.2	-	-		
	852	803	5	159溝	白磁椀	/	/	/	-		
	853	571	5	159溝	瓦質羽釜	[18.4]	/	-	[21.8]		
	854	570	5	159溝	瓦質鍋	[28.5]	/	-	[30.0]	外面に煤付着	
	855	613	5	159溝	須恵器鉢	[24.8]	/	/	[26.0]	東播系	
	856	660	5	153土坑	土師器皿	[8.6]	1.3	-	-		
	857	181	5	161溝	土師器皿	8.6	1.8	-	-		
	858	275	5	161溝	瓦器椀	[13.2]	4.2	[4.2]	-	楠葉型	
	859	823	5	823落込	土師器皿	[7.8]	1.05	-	-		
	860	640	5	823落込	瓦器椀	[16.0]	/	/	-	楠葉型	
	861	638	5	823落込	瓦器椀	[13.4]	/	/	-	大和型	
	862	825	5	823落込	瓦器椀	/	/	[4.7]	-	大和型、連結輪状文	
	863	657	5	317溝	瓦器椀	[13.0]	4.3	[5.2]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文、口縁部内面に煤付着	
	864	639	5	823落込	台付皿	/	/	/	-		
	259	865	409	5	256・1260溝	土師器皿	7.3	1.0	-	-	
		866	404	5	256・1260溝	土師器皿	11.2	2.2	-	-	
867		408	5	256・1260溝	土師器皿	11.1	2.0	-	-		
868		881	5	256・1260溝	青磁皿	[9.6]	1.95	[5.2]	-	同安窯系	
869		410	5	256・1260溝	瓦器椀	[14.8]	5.6	[5.6]	-	大和型、連結輪状暗文	
870		405	5	256・1260溝	瓦器椀	[11.8]	3.4	[4.6]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
871		567	5	256・1260溝	瓦質三足釜	[14.7]	/	-	19.4	外面に、部分的に煤付着	
872		577	5	192落込	土師器皿	[7.8]	1.0	-	-		
873		544	5	192落込	土師器皿	8.2	1.2	-	-		
874		812	5	192落込	土師器皿	[8.2]	1.9	-	-		
875		580	5	192落込	土師器皿	[9.2]	1.2	-	-	外面底部に接合痕有	
876		266	5	192落込	土師器皿	12.0	2.3	-	-		
877		811	5	192落込	瓦器皿	[10.0]	/	-	-	ジグザグ状暗文	
878		578	5	192落込	瓦器皿	[9.1]	1.6	-	-	ジグザグ状暗文、外面底部に接合痕有	
879		164	5	192落込	瓦器皿	8.6	1.5	-	-	ジグザグ状暗文	
880		579	5	192落込	瓦器皿	[10.0]	1.4	-	-	ジグザグ状暗文、外面底部に接合痕有	
881		814	5	192落込	瓦器椀	[11.6]	/	/	-	楠葉型	
882		583	5	192落込	瓦器椀	[12.8]	4.3	[3.8]	-	楠葉型	
883		576	5	192落込	瓦器椀	[12.8]	/	/	-	楠葉型	
884		180	5	192落込	瓦器椀	12.0	4.3	5.05	-	楠葉型、ジグザグ状暗文	
885		813	5	192落込	瓦器椀	[13.8]	4.4	[4.7]	-	楠葉型、連続長楕円状暗文	
886		168	5	192落込	瓦器椀	11.0	3.8	4.3	-	楠葉型、連続長楕円状暗文	
887		582	5	192落込	青磁椀	[16.4]	/	/	-	龍泉窯系、縞蓮弁文	
888		581	5	192落込	青磁椀	/	/	/	-	龍泉窯系、縞蓮弁文	
889		584	5	192落込	白磁椀	[16.0]	/	/	[16.6]		
890		585	5	192落込	瓦質土器火鉢	[41.6]	/	/	[43.4]		
891		379	5	11・385溝最上層	土師器皿	9.8	1.65	-	-		
892		390	5	11・385溝最上層	瓦器椀	10.2	3.2	4.25	-	楠葉型、連続長楕円状暗文	
893		765	5	11・385溝最上層	須恵器甕	[28.2]	/	/	/	東播系	
894		770	5	11・385溝最上層	須恵器甕	[27.0]	/	/	/	東播系	
895	389	5	11・385溝最上層	須恵器鉢	[26.4]	9.5	[7.6]	[27.4]	東播系		
896	688	5	11・385溝最上層	瓦質羽釜	[26.6]	/	-	[38.5]			
897	484	5	14溝	瓦器椀	11.0	3.6	/	-	楠葉型、連続長楕円状暗文か		
898	766	5	15溝	土師器皿	7.8	1.6	-	-			
899	672	5	102溝	土師器皿	[7.0]	1.3	-	-			
900	602	5	102溝	土師器皿	8.1	1.1	-	-			
901	603	5	104溝	土師器皿	[8.2]	1.05	-	-			
902	749	5	55溝	土師器皿	[7.2]	0.9	-	-			
903	590	5	55溝	土師器皿	7.7	1.0	-	-			
904	745	5	55溝	土師器皿	[10.0]	1.3	-	-			
905	589	5	55溝	土師器皿	7.5	1.2	-	-	内面に赤色顔料? 薄く付着		
906	271	5	65溝・67土坑	土師器皿	9.9	1.75	-	-			
907	748	5	65溝・67土坑	土師器皿	[12.5]	2.6	-	-			
908	272	5	65溝・67土坑	瓦器椀	[12.4]	4.3	[5.0]	-	楠葉型		
909	754	5	65溝・67土坑	瓦器椀	[13.4]	4.2	[3.7]	-	楠葉型		
910	751	5	65溝・67土坑	瓦質三足釜	[19.2]	/	-	24.6			

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不可能、-:計測項目なし

表22 有池遺跡03-1 土器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
260	911	671	5	161溝	瓦器皿	[9.6]	2.0	-	-	ジグザグ状暗文
	912	280	5	158溝	瓦器椀	[14.8]	5.4	[4.3]	-	楕葉型
261	913	677	5	断面①	瓦質三足釜	[17.2]	/	-	-	外面に煤付着
	914	495	5	292落込	白磁椀	[16.4]	/	/	[16.9]	
262	915	929	6	6溝	丸瓦	長:32、幅:14.2、厚:2.3				
	916	928	6	6溝	丸瓦	長:33.1、幅:14.2、厚:2.6				
263	917	867	6	6溝	丸瓦	-				
	918	868	6	6溝	平瓦	-				
	919	866	6	23溝	丸瓦	-				
	920	856	6	56土坑	瓦質羽釜	/	/	-	/	
	921	860	6	2層	須恵器杯蓋	[12.4]	4.1	-	-	
	922	858	6	4土坑	土師器皿	[7.9]	1.25	-	-	
	923	859	6	4土坑	青磁椀	/	/	[4.8]	-	外面、蓮花文、龍泉窯系
	924	863	6	1溝	備前播鉢	/	/	[11.0]	-	摺目8~9条
	925	862	6	1溝	白磁椀	/	/	3.5	-	
	926	861	6	1溝	須恵器鉢	[27.4]	/	/	[28.1]	東播系
	927	874	6	17溝	土師器皿	[8.3]	1.9	-	-	
	928	864	6	39溝	白磁椀	/	/	/	-	
	264	929	857	6	62土坑	瓦器椀	[13.2]	/	/	-
930		965	4	1層	縄文土器	/	/	/	/	
931		966	4	1層	縄文土器	/	/	/	/	
932		964	3	3層	縄文土器	/	/	/	/	
933		617	5	719溝	瓦質土製品	長:(3.9)、幅:(5.6)、厚4.4				

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不可能、-:計測項目なし

表23 有池遺跡03-1 石器観察表

図番号	挿図番号	調査区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	自然	折損	備考
265	S1	2	1層	石錐	3.25	2.1	0.4	2.2	無		
	S2	4	314溝	不明	5.0	3.1	1.1	13.3	無		
	S3	4	2層	石鏃	4.4	1.8	0.5	3.3	無		
	S4	4	345土坑	石錐	(3.2)	1.6	0.5	2.7	無	有	
	S5	4	1層	剥片	3.2	3.1	0.6	7.0	無		
	S6	4	244溝	剥片	3.35	3.5	0.4	5.0	無		
	S7	4	側溝	不明	5.3	7.4	2.4	97.8	有		
	S8	6	2層	石鏃	(2.3)	(1.6)	0.35	0.8	無	有	基部の欠損は最近のもの
266	S9	2	20土坑	砥石	9.7	4.3	4.2	225.9			
	S10	1	7溝	砥石	(8.65)	3.3	1.1	48.8			
	S11	2	86土坑	砥石	(10.75)	(4.5)	(4.3)	248.8			
	S12	1	105石敷土坑	砥石	(4.7)	3.6	1.1	20.5			
	S13	1	171ピット	砥石	(4.9)	(5.0)	(2.4)	83.4			劣化のためにヒビわれしている、被熱を受け全体に赤変している
	S14	1	7溝	砥石	19.9	9.4	5.5	1350			
267	S15	1	407溝	砥石	11.0	6.7	6.2	655			
	S16	5	20溝	不明	10.5	10.0	3.7	800			黒雲母で形成されている?
	S17	5	314土坑	石鍋?	/	/	(1.4)	136.6		有	

単位:cm、():残存、/:計測不能

表24 有池遺跡03-1 木器・漆器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種別	最大径	最大長	最大幅	高さ	最大厚	備考
268	W1	978	3	2溝	曲物底板か蓋板	12.9	-	-	-	8.5	酸化鉄のような赤茶色い跡がある
	W2	984	4	1層	曲物底板か蓋板	16.1	-	-	-	0.9	
	W3	980	2	27土坑	曲物底板か蓋板	-	9.0	9.4	-	0.6	
	W4	981	2	27土坑	曲物底板か蓋板	-	9.6	10.0	-	0.6	圧痕あり
	W5	983	6	北側側溝	柄杓側板	-	7.2	(8.3)	-	0.95	
	W6	985	1	7溝	漆器椀	復元底径7.6	-	-	(4.7)	-	全面黒漆塗、文様は赤漆
269	W7	979	2	27土坑	曲物側板	12.2	-	-	8.6	-	
	W8	982	2	27土坑	曲物底板か蓋板	15.1	-	-	-	0.8	表面に焼けた跡がある、シミ付着
	W9	986	5	1258・1259井戸最上層	曲物底板か蓋板	23.2	-	-	-	1.1	
270	W10	1005	1	7溝	棒状木製品	-	(65.6)	4.4	-	0.6	
	W11	1006	3	4層	杭か	-	(64.1)	2.9	-	3.9	けずりあり
	W12	1004	2	27土坑	曲物底板か蓋板	28.5	-	-	-	0.9	刃物傷が所々残る、表面黒漆塗、所々はがれがある
	W13	1007	6	1層	板状木製品	-	(14.8)	(8.2)	-	1.2	

単位:cm、():残存、/:測定不能、-:計測項目なし

表25 有池遺跡03—1 金属器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種別	最大径	長さ	幅	高さ	厚さ	重さ
271	M1	952	1	1層	鉄片	10	(86)	—	—	—	36.8
	M2	951	1	1層	釘	10	(53.5)	—	—	—	7.2
	M3	949	1	1層	釘?	14	47	—	—	—	8.1
	M4	203	1	439土坑	不明	6	47	—	—	—	4.8
	M5	962	1	436溝	キセル	15	72	—	—	—	9.2
	M6	961	1	3層	鋤	—	(151)	(139)	—	(9)	354.5
	M7	953	2	27土坑	短刀	—	254	22	—	4	47.8
	M8	975	4	1層	不明	—	(35)	/	—	/	11.7
273	M9	939	5	1層	釘	9	57	—	—	—	5.0
	M10	957	5	107土坑	釘	7	50	—	—	—	5.4
	M11	969	5	2層	不明	15	75	—	—	—	20.9
	M12	970	5	2層	不明	9	/	—	—	—	9.8
	M13	930	5	227ピット	不明	—	17	19	—	1	1.4
	M14	938	5	64土坑	鉄片	—	28	14	—	5	4.1
	M15	956	5	306土坑	鉄片	—	78	/	—	/	16.1
	M16	950	5	79土坑	鉄片	—	(42)	22	—	11	20.1
	M17	931	5	1層	不明	—	88	44	—	7	83.8
	M18	959	5	79土坑	刀類	—	(114)	29	—	12	43.0

単位:mm・g、():残存、/:計測不能、—:計測項目なし

表26 有池遺跡03—1 鑄造関連遺物観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種別	径(mm)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
274	F1	987	1	194井戸	羽口	/	(91)	—	11	54.9	
	F2	955	1	7溝	羽口	/	(72)	—	14	54.1	黒色化、被熱による変色あり
	F3	990	1	413土坑	滓	—	53	81	20	105.7	
	F4	988	1	2-2層	滓	—	71	83	26	154.2	
	F5	989	1	413土坑	滓	—	56	73	21	87.2	
	F6	991	1	118ピット	滓	—	57	68	22	76.3	
	F7	992	1	118ピット	滓	—	53	65	21	44.8	
	F8	968	5	3層	滓	—	57	40	9	30.7	
	F9	977	5	216ピット	滓	—	48	62	29	54.8	

():残存、/:計測不能、—:計測項目なし

表27 有池遺跡03—1 銭貨観察表

図番号	報告番号	調査区	遺構名(層位)	種類	直径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	直径/質量	備考
272	O1	1	1層	開元通寶	24.5	6.5	1.8	13.6	
—	O2	2	1層	不明	/	/	1.2	/	写真のみ

直径/質量は小数点第二位を四捨五入、/:計測不能

第6章 有池遺跡03-2の調査成果

第1節 基本層序

1. 概要

本調査区は1～8調査区にわたり、6調査区がやや離れて有池遺跡02-1調査地に接する他は、有池遺跡02-1と里道を隔ててまとまっており、基本層序はほぼ共通するため、ここでは本調査区全体の層序の概要を述べる。

本調査区は、東から西へとゆるやかに下降する傾斜地であり、調査前、地形に沿って段状の水田が東から西へと下がる状態であった。基本的に条里地割に沿うものの、一部、帯状に乱れた水田区画があり、結果的に帯状に乱れた水田区画は谷地形を埋積した部分であることがわかった。

本調査区は、やや微視的にみると、もとは東から西へと人の手状に微高地がのび、その間に谷地形が入る地形であったものが、中世以降の水田開発により微高地上は水平に削平され、谷は埋積し水田として利用されるなかで、徐々に現地形にみられるようなほぼ水平に段状に下降する傾斜地へと移行している。

現代の盛土、耕土および床土を機械にて除去したのち、人力による調査に移行し、層名は基本的に上から順に付けた。6調査区を除く調査区で共通する層は、以下のとおりである。

1層	黄灰色シルト層	中世～近世	床土
1-2層	灰褐色シルト～砂層	中世～近世	耕土（1～3調査区のみ分布）
2層	茶灰色シルト層	中世	耕土・床土
基盤層（地山）	黄褐色砂礫～灰褐色砂層およびその下層の黄褐色シルト～粘土		

調査地は扇状地にあり、斜めに堆積する基盤層が中世以降の水田開発により削平された水平面で複数層みられる場合が多くあり、その主たる二層を基盤層としてあげている。

1～2層を除去した段階で、微高地上は基盤層にいたり、谷では中世に谷水田として利用された層が下層へとつづく状況であった。また、谷底部では古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝を検出した。

なお、上記各層の詳細については次項で、谷の層序については、各調査区の遺構のなかで個別に後述する。

遺構面は、1層除去後面を1面、2層除去後面（基盤層上面）を2面とした。1面は近世の耕作面であり、本書で報告するのは2面である。

6調査区は有池遺跡02-1調査地に接しており、有池遺跡02-1の基本層序にそった。

なお、有池遺跡02-1の基本層序との対応をみると、1層、2層は基本的に対応し、有池遺跡02-1の3層は有池遺跡03-2では平面的なひろがり確認できない。谷底部の中世水田初期段階の堆積層が対応する可能性がある。有池遺跡02-1-1A・1Bの4層は有池遺跡03-2では、1調査区129落込および2調査区16溝埋土に認められるのみであった。

2. 各調査区の基本層序（図275）

1調査区 調査区北端に東から西へはしる1大溝、調査区のほぼ南辺に沿って東から西へ開く2流路の二筋の谷があり、これら谷にはさまれた調査区中央部分が微高地である。

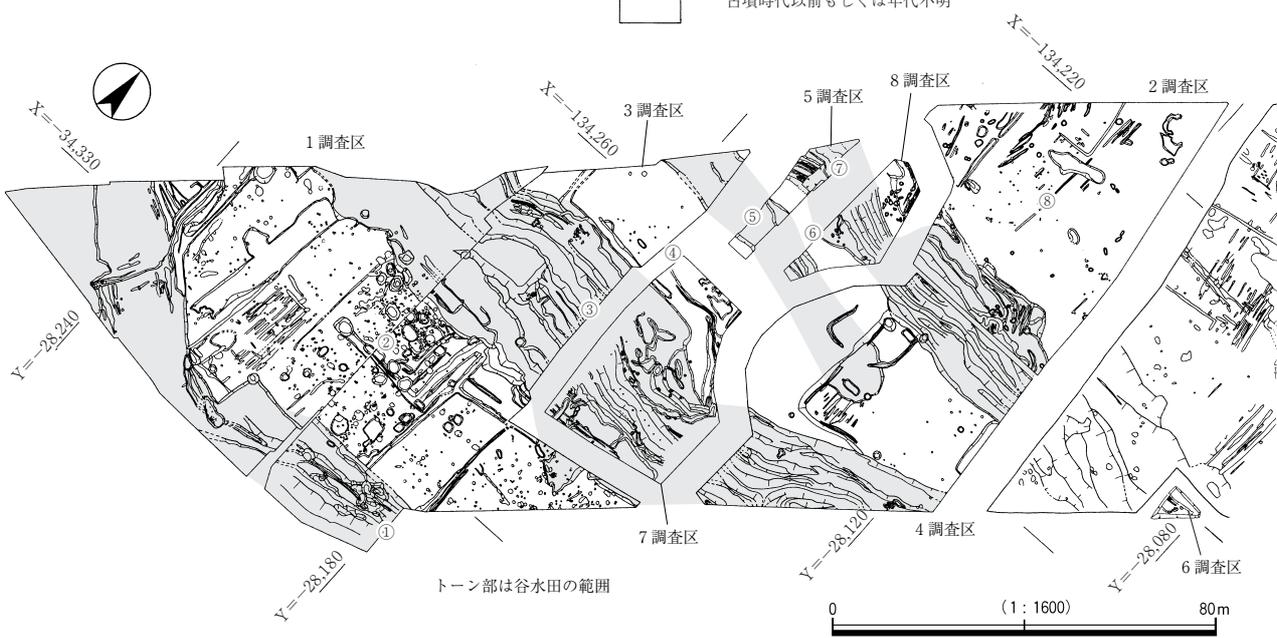
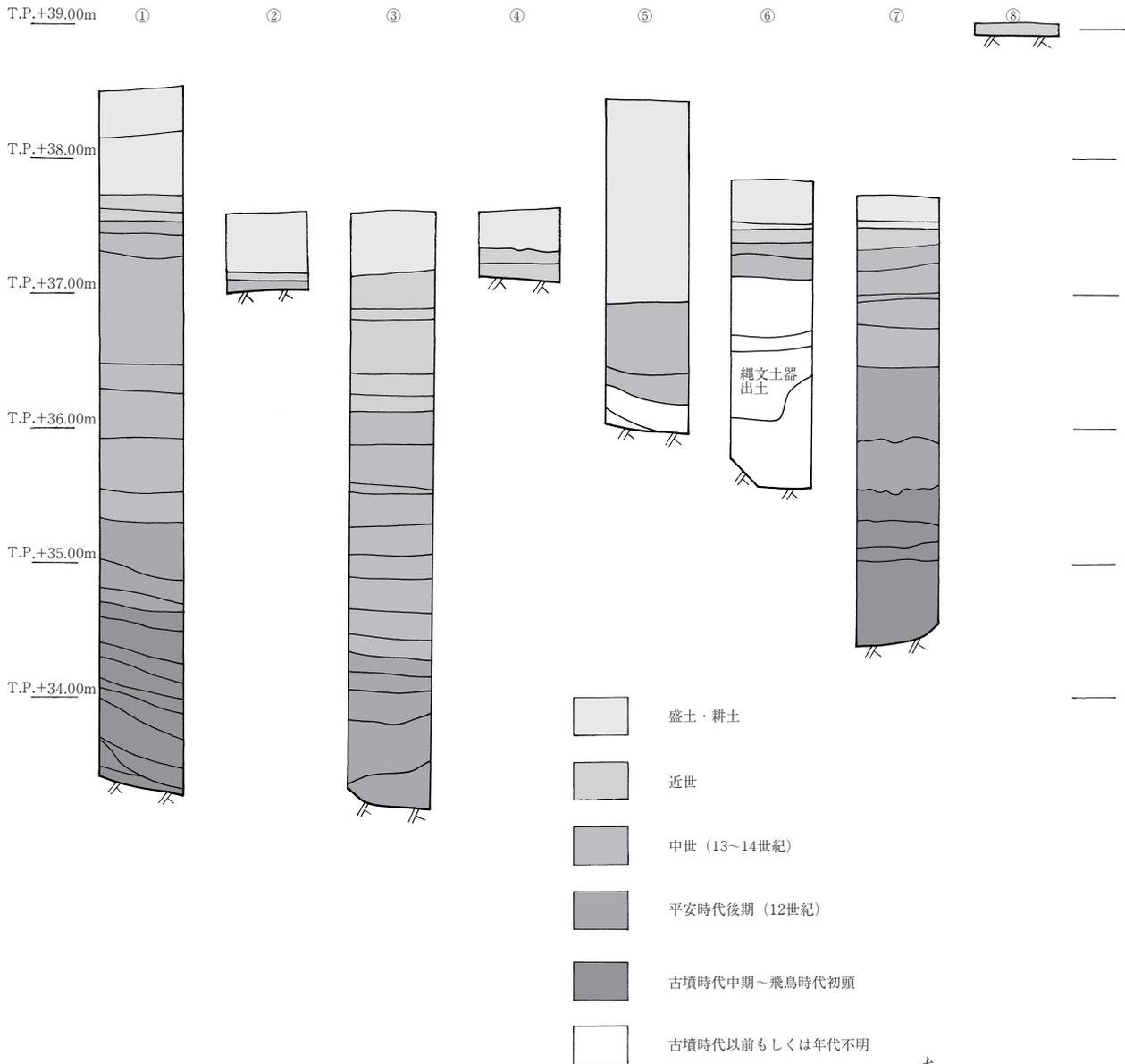


図275 有池遺跡03-2 基本層序図

微高地は東から西へとゆるやかに下降しており、南北方向の段落ちを境に東から上段、中段、下段の三面の平坦面を検出した。上段では1層（橙色7.5Y R6/8シルト）除去後2層（褐色7.5Y R4/3細砂混シルト）がひろがり、これを除去後基盤層にいたる。中段～下段では1層除去後、1－2層（灰黄色2.5Y 6/2シルト）がひろがり、1－2層上面を1面とし精査した。1－2層除去後、基盤層の凹部に貼りつく状態で部分的に2層のひろがりが見られ、これを除去後2面（基盤層上面）にいたる。一部、調査区西側、微高地下段のほぼ中央に位置する129落込は、出土遺物が瓦器を含まず古墳～飛鳥時代遺物のみであり、飛鳥時代包含層の残存部とみられ、有池遺跡02－1－1A・1Bの4層に相当する可能性がある。

1大溝、2流路は近世以降一部、溜池となっており、その溜池および1層（明黄褐色10Y R6/6シルト）、2層を除去後、谷を埋積するやや還元化した谷水田耕土層にいたる。

2調査区 現代耕土を機械掘削によって除去した後、人力による調査に移行し1層除去後、1－2層（暗灰黄色2.5Y5/2細砂混シルト）上面において、近世の耕作関連の遺構を確認し1面とした。近世の1面は本報告の対象外であるために詳細は省略する。

1面以下の全体的な遺物包含層の堆積状況は、緩傾斜の地形に沿って標高の高い北東部では比較的薄く、その直下には自然堆積の基盤層（黄褐色2.5Y5/4粘質シルト）などの堆積もみられることから、中世以降の水田耕作などの生産活動に伴い、相当規模の削平を受けている状況であると判断される。

2面はほぼ全体に薄く堆積する2層、すなわち中世耕土（暗灰黄色2.5Y5/2小礫混シルト）、床土（黄褐色2.5Y5/6シルト）などの耕作関連土を除去した後に検出した最終遺構面である。

調査区北半で検出した16溝の埋土は、有池遺跡02－1－1A・1Bの基本層序でいう飛鳥時代遺物包含層の4層であり、削平を免れ残存したものとみられる。

3調査区 1調査区の東に接しており、基本的に1調査区と共通する。調査区北端に東から西へはしる3流路、その南側に1調査区に連続する1大溝、調査区南端に1調査区に連続する2流路の三筋の谷があり、これら谷にはさまれた部分が微高地である。微高地は東から西へとゆるやかに下降する。1大溝と2流路間の微高地は、東端で調査区が三角形に突出した部分を上段、その西側に続く部分を中段、下段とした。

上段では1層（橙色7.5Y R6/8シルト）除去後2層（にぶい黄褐色10Y R4/3～5/3細砂混シルト）が北へ層厚を増してひろがり、これを除去後基盤層にいたる。中段では1層、1－2層（黄灰色2.5Y5/1～6/1シルト）除去後基盤層にいたる。下段では上段同様、1層、2層除去後基盤層にいたる。上～下段とも基盤層上面を2面として精査した。

2流路、3流路では1層、2層除去後谷を埋積するやや還元化した谷水田耕土層にいたる。1大溝はその東西で様相が異なる。西半では溜池および1層除去後、2層以下の還元化した谷水田耕土層にいたる。東半では1層除去後これに伴う整地層がレンズ状に堆積しており、整地層除去後2層以下の還元化した谷水田耕土層にいたる。

4調査区 2調査区から南側に反転して設けた調査区である。4調査区の現況は、2調査区と同様、緩傾斜の地形に沿って低い棚田造成を施した耕作地である。基本層序は、現耕作土層、1層の近世遺物包含層、2層の中世遺物包含層、自然堆積の基盤層と続き、最終遺構面の平坦面頂部の標高はT.P.+38.5m前後を測る。

機械掘削によって現代耕土層を除去し、人力掘削によって近世耕土の1層（黄褐色10Y R5/6細～粗砂混シルト）を除去した後、中世耕土の2層（灰黄褐色10Y R4/2細～粗砂混シルト）が層厚10～20cmで

薄く堆積し、その上面において近世耕作関連の鋤溝群などを確認したことから、1面とした。本報告では近世を対象外とするためその詳細については省略する。中世耕土の2層を除去した後に検出した2面を最終遺構面として精査した。

5調査区 3調査区の北東側、7調査区の北側、8調査区の西側に位置する小規模な南北方向の調査区である。現況は、調査開始時点では更地の状態であり、それ以前の状況は明らかでない。機械掘削では約1.5m厚の盛土と大型の攪乱坑内の攪乱土を除去し、機械掘削後の状況は地山面が剝削されている状況である。従って調査区全体にひろがる堆積層は検出されていない。

6調査区 有池遺跡02-1調査地の南側に位置する小規模な調査区である。現況や基本層序などは基本的に有池遺跡02-1と共通し、上層より現代耕土層、有池遺跡02-1-1A・1Bの1層である近世耕土層(図40の3層)、同2層である中世耕土層(図40の4・5層)、同3層である中世耕土層(図40の6・7層)となる。

7調査区 3調査区の東側、4調査区の西側に位置し、基本的に1・3調査区と共通する。調査区南半に1・3調査区および4調査区に連続する1大溝がほぼ東西にはしり、その北側が微高地である。

1層(褐色10Y R4/6粗砂混粘土)および2層(灰黄褐色10Y R4/2粗砂)を除去した段階で、調査区北側の微高地は基盤層にいたり、基盤層上面を2面として精査した。1大溝の部分は還元化した谷水田耕土層にいたった。

8調査区 5調査区の東側、2調査区の西側に位置し、基本的に7調査区と共通する。調査区北半に2・4調査区および5調査区に連続する12大溝がほぼ東西にはしり、その南側の微高地をへて南端には5調査区1流路へと続く小さな谷がある。

1層(黄褐色2.5Y 5/4微砂)および2層(オリーブ褐色2.5Y 4/3礫混微砂)を除去した段階で、調査区南側の微高地は基盤層にいたり、基盤層上面を2面として精査した。12大溝の部分は2層に類似する谷水田耕土層にいたった。調査区南端ではやや還元化した層厚10~20cmのレンズ状の堆積をへて地山に類似するシルト~粘土(にぶい黄褐色10Y R4/3中砂混粘土)にいたる。この層は地山に類似するものややしまりが弱いため下層を確認したところ、砂を埋土とする溝状の遺構を確認し、縄文土器片が出土した。

第2節 遺構

1. 1調査区(図276)

調査対象地の西端に位置し、三角形を呈する調査区である。東辺は3調査区と接し、南辺は里道をはさんで上私部遺跡と接する。

2面では、調査区北端に東から西へはしる1大溝、調査区のほぼ南辺に沿って東から西へ開く2流路、およびこれら谷にはさまれた調査区中央部分の微高地で中世居住域を確認した。

1大溝、2流路は上層が中世谷水田であり、最下層は古墳時代中期~飛鳥時代初頭の溝である。

微高地は東から西へとゆるやかに下降しており、南北方向の段落ちを境に東から上段、中段、下段の三面の平坦面からなる。上段および2流路北肩部が最も遺構密度が稠密であり、中・下段は疎である。中段南半に南北方向にはしる鋤溝埋土は1-2層であり、中世~近世の耕作痕である。遺構埋土は基本的に2層に類似し、上段の遺構では炭化物、焼土を含むものがある。

もとはゆるやかに東から西へと下降する地形に中世居住域が展開していたものが、2層、1-2層に



図276 有池遺跡03-2-1 調査区 平面図 (全体・部分拡大)

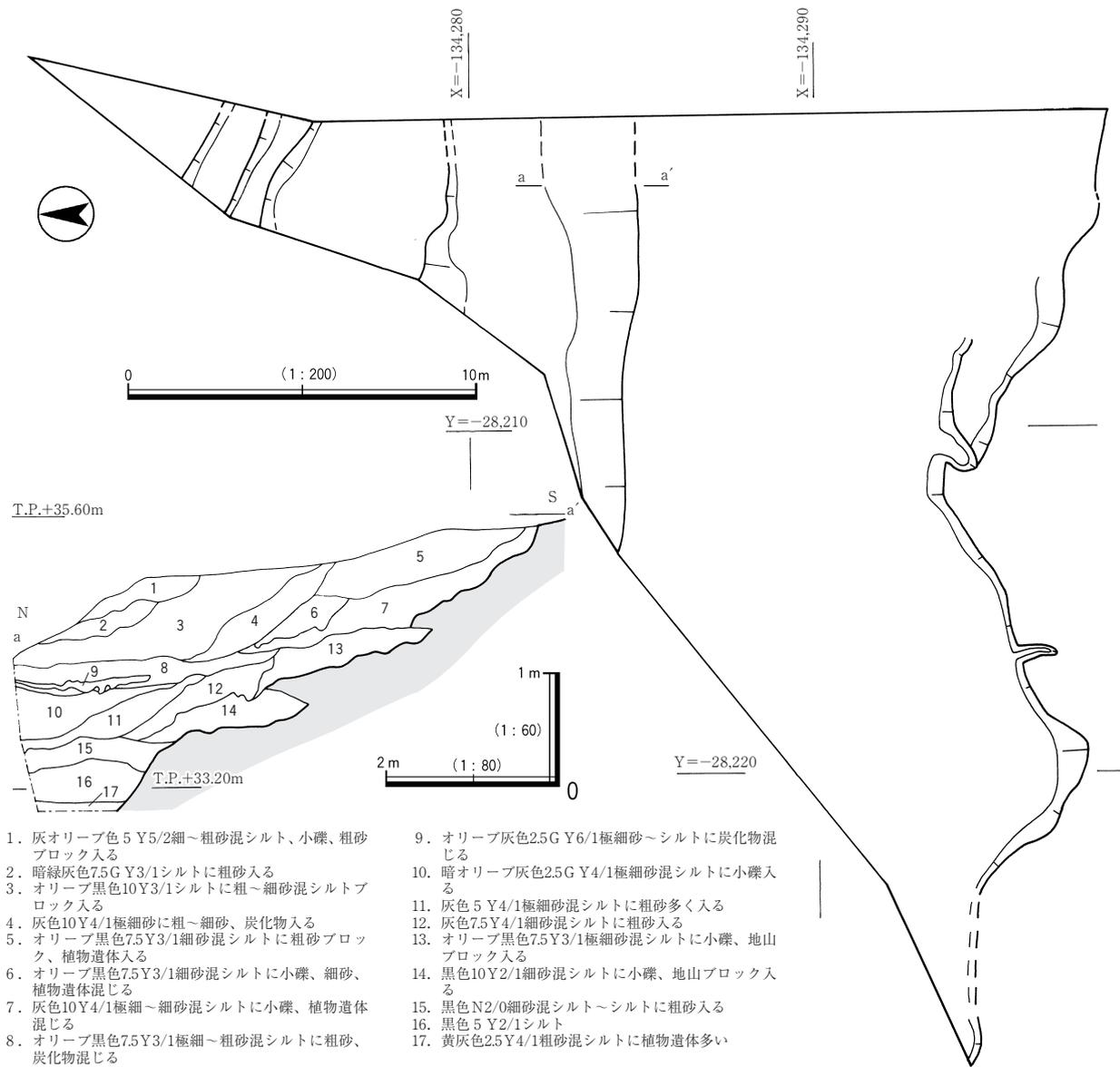
みられる中世以降の水田開発により段状に削平され、このとき中・下段の遺構の多くが削平のため消失したと考えられる。下段東端を南北にはしる23溝は、規模と規格性から有池遺跡03-1でみられる屋敷地をめぐる掘状の遺構が削平されたものとなる可能性が考えられる。

1大溝（図277） 北端に位置する東西方向にはしる谷である。最大幅約26.5m、最深約2.4m以上である。南肩部は中世水田面である東西方向の平坦面が段状に落ち、谷の中心にいたる。谷の中心は幅6.5m、北肩部からの深さ40cm、南肩部からの深さ1.3m、断面U字状であり、両肩部に杭列がのびる。

1大溝は、近世以降、溜池として利用されており、溜池を埋めた礫、ブロック土を機械掘削にて除去した後の状況は、南肩部に2層茶灰色シルトに類似する2-2層以下7層まで中世耕土層が堆積し、谷の中心は窪み、黒色粘土およびその下層に灰色砂層が堆積する状況であった。本遺構断面は崩落のため全体を記録できず、6-7層にあたる部分のみ図277に断面図を掲載した。

南肩部では、上層から順に2-2層~7層まで掘削し基盤層にいたった。2-2層~7層、基盤層は下記のとおりである。

1大溝南肩部 2-2層 茶灰色シルト 中世 耕土



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰オリーブ色5 Y5/2細~粗砂混シルト、小礫、粗砂ブロック入る 2. 暗緑灰色7.5G Y3/1シルトに粗砂入る 3. オリーブ黒色10Y3/1シルトに粗~細砂混シルトブロック入る 4. 灰色10Y4/1極細砂に粗~細砂、炭化物入る 5. オリーブ黒色7.5Y3/1細砂混シルトに粗砂ブロック、植物遺体入る 6. オリーブ黒色7.5Y3/1細砂混シルトに小礫、細砂、植物遺体混じる 7. 灰色10Y4/1極細砂~細砂混シルトに小礫、植物遺体混じる 8. オリーブ黒色7.5Y3/1極細~粗砂混シルトに粗砂、炭化物混じる | <ol style="list-style-type: none"> 9. オリーブ灰色2.5G Y6/1極細砂~シルトに炭化物混じる 10. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1極細砂混シルトに小礫入る 11. 灰色5 Y4/1極細砂混シルトに粗砂多く入る 12. 灰色7.5Y4/1細砂混シルトに粗砂入る 13. オリーブ黒色7.5Y3/1極細砂混シルトに小礫、地山ブロック入る 14. 黒色10Y2/1細砂混シルトに小礫、地山ブロック入る 15. 黒色N2/0細砂混シルト~シルトに粗砂入る 16. 黒色5 Y2/1シルト 17. 黄灰色2.5Y4/1粗砂混シルトに植物遺体多い |
|--|---|

図277 有池遺跡03-2-1調査区 1大溝 平・断面図

3層	緑灰色粘土	中世	床土
4層	茶色シルト	中世	段落ち際耕土
5層	茶色シルト	中世	耕土
6層	灰色粘土	平安時代後期	床土
7層	灰色粘土（腐植物多く含む）	平安時代後期	耕土
基盤層	青色粘土～シルト		

3層、6層が粘質土であり床土とみられ、それぞれ上層が耕土とみられる。7層は腐植物を多く含む下層の青色粘土を床土とする耕土とみられる。7層からは瓦器、瓦質羽釜とともに古墳時代後期の須恵器杯身、提瓶が出土した。北肩部は南肩部に比べ急な傾斜をもって落ちる。概ね12世紀中葉～13世紀前半に位置付けられる。

谷の中心には黒色粘土が堆積するが遺物は出土せず、その下層の灰色砂層からは瓦器、瓦質羽釜が出土した。なお、灰色砂層以下にも堆積土がみられたが、狭小で掘削がおよばなかったため、機械掘削により下層確認したところ（深掘トレンチ④）古墳時代中期～飛鳥時代初頭の土器が出土した。後述する3調査区1大溝下層で検出した古墳時代中期～飛鳥時代初頭溝に連続するものとみられ、4調査区（18大溝）・7調査区（1大溝）でも延長部を検出している。

2流路（図278）南辺に沿って約50mにわたり北肩部を検出した。東から西にいくにつれて低くなり、北側にひろがる。流路の中心は南接する現在の市道の下になるものとみられ、対応する肩部は上私部遺跡において確認されている。

2流路は、機械掘削終了後、調査地南辺中央にあった旧溜池を境に、東側は微高地上にほぼ連続する状態、西側はこれより1.3m前後落ちた湿地状の状態であり、様相が異なるため東側、西側にわけて報告する。東西の境は図278の断面の位置と一致する。

東側の高い部分は、微高地上の2面に連続する面を肩部とする。肩部は東西方向にのび、ちょうど微高地上の段落ちと交差する箇所には5井戸が設けられる。この東西方向の段落ちを肩部として2-2層があり、これを除去すると黄色と茶灰色の2単位のブロック土層（2-3、2-4層）が水平に検出され、これを除去するとほぼ水平面となることから、2-2層が耕土、ブロック土層が床土と考えられる。3層除去後、集石がみられる31石組を検出した。本谷の対応する肩部は上私部遺跡で検出されており、31石組の対岸にあたる部分では石組遺構がみられることから両者は関連する可能性が考えられる。ただし、上私部遺跡の石組の高さがT.P.+35m前後、31石組はT.P.+36m前後と1m前後異なり即断にはいたらない。その下層、4層、5層までが微高地上の2面に連続する面を肩部としており、いずれも耕土とみられる。6層以下は微高地の基盤層とした黄色砂礫およびシルトの下部にもぐるものであり、2面の遺構を残すため、2面に連続する肩部を残した状態で掘削した。9層を除去した段階で谷の基盤層とみられる青色シルトがみられ、これを肩部として下層の掘削をすすめた。基本的に8層、10層のブロック土が介在して黒色土が水平に埋積しており、ブロック土が床土、黒色土が耕土とみられる。10層除去面では青色シルトの基盤層の落ち際に沿う溝を検出した。遺物は瓦器椀、瓦質羽釜、陶器体部片がみられ、12～15層では12世紀の瓦器椀が出土した。2-2層～15層、基盤層は下記のとおりである。

2流路東側	2-2層	茶灰色シルト	中世	耕土
	2-3層	黄色シルトブロック	中世	床土
	2-4層	茶灰色シルト（焼土含む）ブロック	中世	床土

- 3層 灰色シルト 中世 耕土
- 4層 灰色微砂混シルト 中世 耕土
- 5層 黒色砂混シルト 中世 耕土
- 6層 灰黒色粘土 中世 耕土
- 7層 黒色砂混シルト 中世 耕土
- 8層 青色砂混粘土ブロック 中世 床土
- 9層 黒色粘土 中世 (古墳後期須恵器杯含む)
- 10層 青色粘土ブロック 中世 床土 除去面で地山下端に溝
- 11層 黒色砂混シルト 中世 耕土

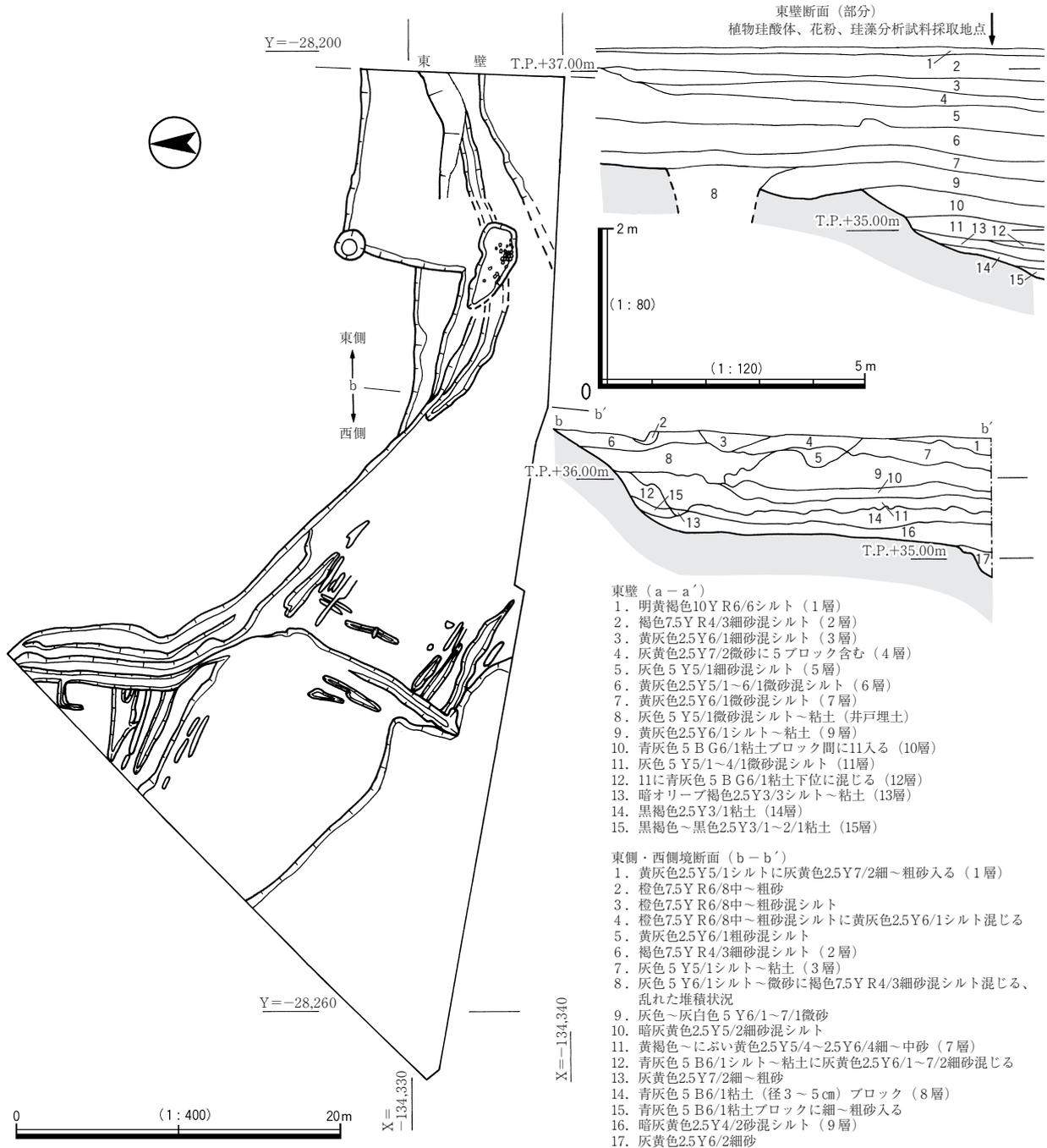


図278 有池遺跡03-2-1調査区 2流路 平・断面図

12層 茶色シルト 平安時代後期 耕土
 13層 茶色粘土 平安時代後期 耕土
 14層 黒色粘土 平安時代後期 耕土
 15層 黒色粘土 平安時代後期 耕土
 基盤層 青色粘土～シルト

西側の低い部分については、微高地上およびこれに連続する2流路東側の層序と区別するために、1層（下）、2層（下）というように層名に（下）を付けた。

西側の低い部分では、なだらかな谷の落ちを利用した中世の水田耕土の堆積がみられた。谷の中心に近い部分では、青色砂礫～シルトの基盤層を段状に削り、4～7層（下）を耕土とする水田が営まれたと考えられる。なお、流心の南辺ぞいには7層（下）に連続する層がみられたため、深掘トレンチ①～③を設定し確認したところ、深掘トレンチ①から土師質羽釜、須恵器杯身が出土した。

1層（下）～7層（下）、基盤層は下記のとおりである。

2流路西側	1層（下）	青色粘土	近世以降	床土
	2層（下）	灰黒色砂混シルト	中世	耕土
	3層（下）	灰色粘土	中世	耕土
	4層（下）	黒色粘土	中世	耕土
	5層（下）	黒色粘土	中世	耕土
	6層（下）	灰青～灰黒色粘土	中世	段落ち際耕土
	7層（下）	茶色シルト	中世	耕土
	基盤層	青色砂礫～シルト		

なお、本流路は3調査区の南端へと続き、3調査区南端では中世耕土層の下層で古墳時代溝を検出した。本調査区では古墳時代溝を検出できなかったが、これは古墳時代溝が残存する谷の中心部が、調査区に南接する市道の下に存在するためと考えられる。

31石組（図286） 2流路東側の北肩部において3層除去後検出した。長径4.8m、短径約2mの不整な楕円形の土坑であり、断面はU字状である。深さは70cm。埋土は、上層が黄灰色粗砂混シルト、中層がオリブ黒色粗砂混シルト、下層が灰色粗砂混シルトである。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質三足釜、陶器甕などが多量に出土した。石組は直径6～20cmの礫からなり、ほぼ平面的に出土した。敷くあるいは積んだ状態は看取できない。谷水田の水口になる可能性が考えられる。概ね13世紀に位置付けられる。

78竪穴（図279） 北西辺中央に位置する。東辺3.6m、南辺3.3mを検出した。深さは5～20cmであり、北側に深くなる。埋土は二層であり、上層は2層に類似し炭化物を含み、下層は上層に地山ブロックを含む。東・南辺に沿って直径15～30cm、深さ10cm前後のピットを検出した。遺物は土師器片のみであり、年代は不明である。

1大溝の南肩部に位置し、3調査区では同じ1大溝の南肩部で古墳時代中期～飛鳥時代初頭の294竪穴を検出しており、同じ方向性をもつことから古墳時代の竪穴住居になる可能性があるが、遺物が出土していないことから、可能性を指摘するにとどめる。

建物1（図280） 微高地北側の中段～下段に位置する。建物西側のピットは23溝埋土除去後の検出である。南北1間×東西2間であり、主軸方向はほぼ正方位にのる。柱間は東西・南北とも約2.0mである。

いずれも2層類似土に地山ブロックを含む。遺物は出土しておらず、年代は不明であるが、23溝以前に位置付けられ、埋土から中世の遺構とみられる。

柱穴列 1 (図280) 東辺中央に位置する。円形のピットが7.6mにわたり4基(153・69・169・19ピット)並ぶ。軸はほぼ南北方向である。柱穴間は2.1~3.3m、大きさは、直径20~40cm、深さ約15~60cmである。埋土は、黄褐色~褐色細砂混シルトである。69ピットから土師器皿、常滑焼壺が出土した。他に遺物は土師器・瓦器・陶器が出土した。

柱穴列 2 (図280) 東辺中央、柱穴列 1 の西側に位置する。円形のピットが5.5mにわたり3基並ぶ。軸はほぼ南北方向である。柱穴間は2.6~2.9m、大きさは直径20~45cm、深さ約10~60cmである。埋土は黄褐色~褐色細砂混シルトである。遺物は土師器・瓦器・陶器が出土した。

柱穴列 3 (図280) 東辺中央よりやや南側に位置する。円形のピットが7.8mにわたり4基並ぶ。軸はやや南にふる東西方向である。柱穴間は2.0~3.3m、大きさは、直径35~40cm、深さ約15~50cmである。埋土は、黄褐色~褐色細砂混シルトである。遺物は土師器・瓦器が出土した。

柱穴列 4 (図281) 東辺中央よりやや南側、柱穴列 3 の南側に位置する。円形、楕円形のピットが南北5.5mにわたり3基、東西21.5mにわたり9基並ぶ。軸はほぼ南北、東西方向である。柱穴間は1.4~3.9

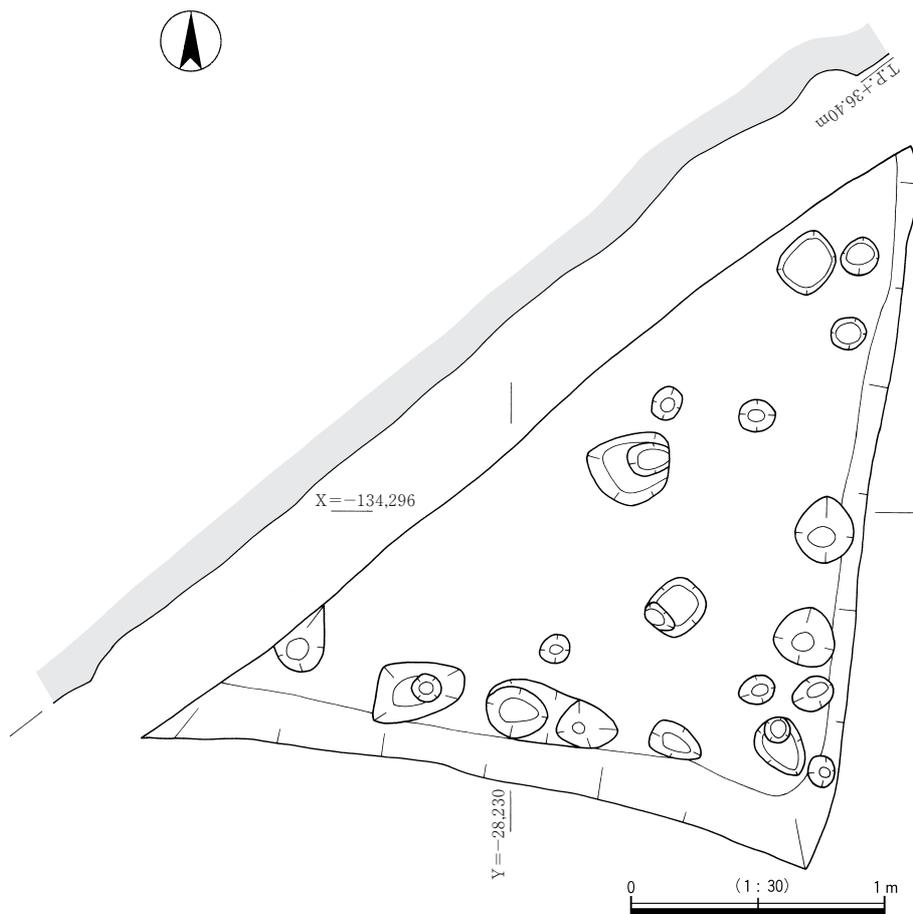


図279 有池遺跡03-2-1調査区 78豎穴 平・断面図

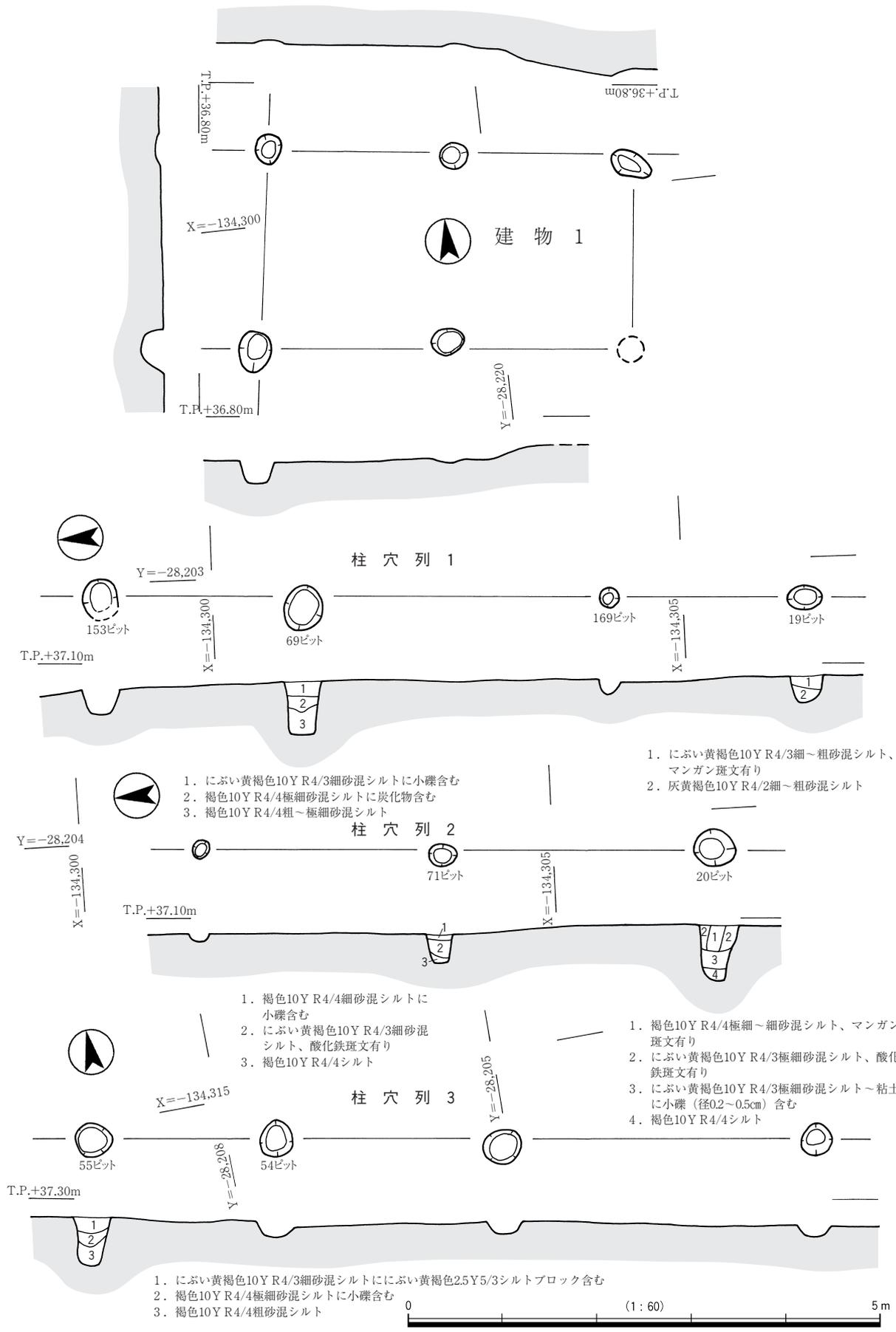
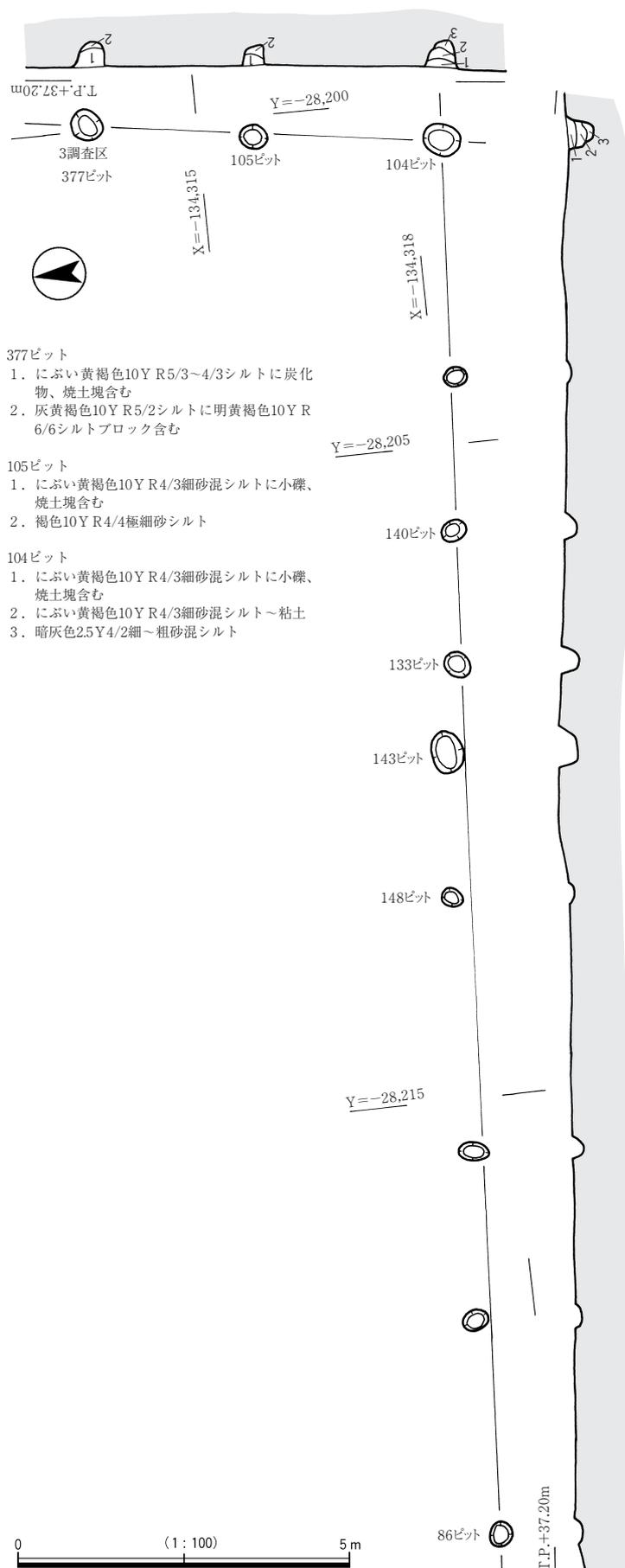


図280 有池遺跡03-2-1調査区 建物1・柱穴列1～3 平・断面図



- 377ピット
1. にぶい黄褐色10Y R5/3~4/3シルトに炭化物、焼土塊含む
 2. 灰黄褐色10Y R5/2シルトに明黄褐色10Y R6/6シルトブロック含む
- 105ピット
1. にぶい黄褐色10Y R4/3細砂混シルトに小礫、焼土塊含む
 2. 褐色10Y R4/4極細砂シルト
- 104ピット
1. にぶい黄褐色10Y R4/3細砂混シルトに小礫、焼土塊含む
 2. にぶい黄褐色10Y R4/3細砂混シルト~粘土
 3. 暗灰色2.5Y4/2細~粗砂混シルト

m、大きさは、直径30~60cm、深さ約10~40cmである。埋土は、黄褐色~褐色細砂混シルトである。遺物は土師器・瓦器が出土した。

91ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約40cmの円形であり、断面はゆるやかなV字状である。深さは20cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色シルトである。遺物は土師器が出土した。

90ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。長径約50cm、短径約40cmの楕円形であり、断面は浅いU字状である。深さは14cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色シルトである。遺物は土師器・瓦器が出土した。

94ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約20cmの円形であり、断面はU字状である。深さは35cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が褐色シルト~極細砂、下層が褐色粗砂混シルトである。遺物は出土していない。

93ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約25cmの円形であり、断面はU字状である。深さは28cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が褐色極細砂混シルト、下層が褐色粗砂混シルトである。遺物は出土していない。

98ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約25cmの円形であり、断面はV字状である。深さは40cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色細砂混シルトである。遺物は出土していない。

97ピット(図282) 調査区東辺に沿う微

図281 有池遺跡03-2-1 調査区 柱穴列4 平・断面図

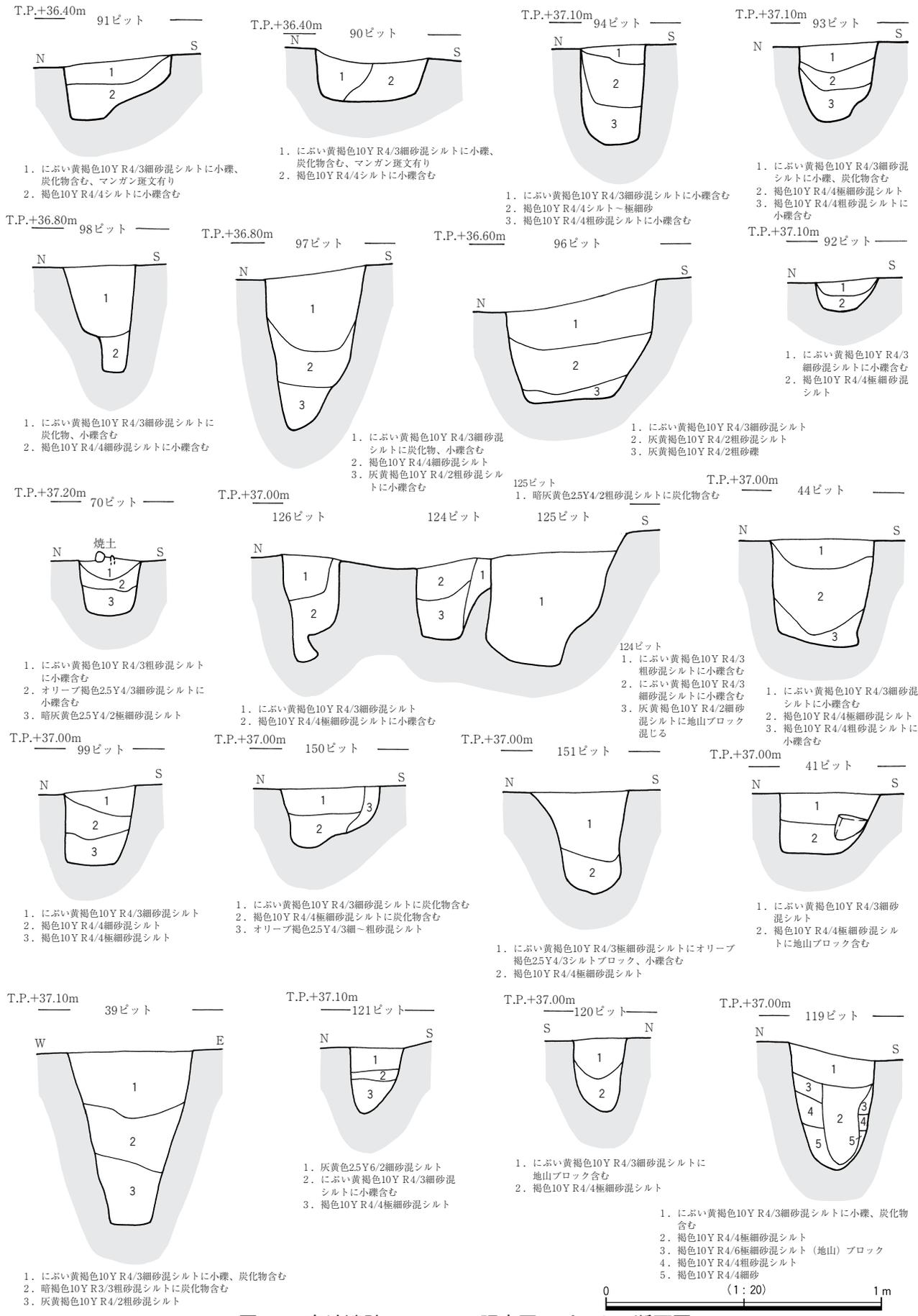


図282 有池遺跡03-2-1 調査区 ピット 断面図

高地上段の北端に位置する。直径約35cmの円形であり、断面はV字状である。深さは55cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が褐色細砂混シルト、下層が灰黄褐色粗砂混シルトである。遺物は出土していない。

96ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端、63土坑の北西肩部に位置する。直径約55cmの円形であり、断面はU字状である。深さは40cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が灰黄褐色粗砂混シルト、下層が灰黄褐色粗砂礫である。遺物は出土していない。

92ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約20cmの円形であり、断面は浅いU字状である。深さは10cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

70ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約20cmの円形であり、断面はU字状である。深さは20cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色粗砂混シルト、中層がオリーブ褐色細砂混シルト、下層が暗灰黄色極細砂混シルトである。遺物は土師器・瓦器が出土した。

126ピット(図282) 微高地上段の北端、調査区東辺に位置する。直径約20cmの円形であり、断面はU字状で、底部が突出する。深さは40cm。埋土上面には焼土塊があり、埋土は上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

124ピット(図282) 微高地上段の北端、調査区東辺に位置する。直径約25cmの円形であり、断面はU字状である。深さは30cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が灰黄褐色細砂混シルトに地山ブロックが混じる。遺物は出土していない。

125ピット(図282) 微高地上段の北端、調査区東辺に位置する。直径約45cmの円形であり、断面はU字状である。深さは50cm。埋土は、暗灰黄色粗砂混シルトである。遺物は出土していない。

44ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約37cmの円形であり、断面はU字状である。深さは40cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が褐色極細砂混シルト、下層が褐色粗砂混シルトである。土師器皿、瓦器椀、須恵器壺が出土した。13世紀後半に位置付けられる。

99ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置し、小溝の埋土除去後検出した。直径約25cmの円形であり、断面はU字状である。深さは28cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

150ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置し、溝状の浅い落込の埋土除去後検出した。直径約35cmの円形であり、断面はU字状である。深さは23cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。

151ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置し、溝状の浅い落込の埋土除去後検出した。直径約35cmの円形であり、深さは38cm。

41ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約35cmの円形であり、断面はU字状である。深さは23cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。

39ピット(図282) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約45cmの円形であり、断面はV字状である。深さは65cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が暗褐色粗砂混シルト、下層が灰黄褐色粗砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。

121ピット（図282） 微高地上段の北端、調査区東辺に位置する。直径約20cmの円形であり、断面はV字状である。深さは25cm。埋土は、上層が灰黄色細砂混シルト、中層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

120ピット（図282） 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約18cmの円形であり、断面はU字状である。深さは27cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

119ピット（図282） 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。直径約30cmの円形であり、断面はU字状である。深さ45cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細～粗砂混シルト、柱痕とみられる部分が褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

166ピット（図283） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の北肩部に位置する。長径40cm、短径約25cmの楕円形であり、断面はU字状である。深さは21cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

108ピット（図283） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の北肩部に位置し、22土坑の埋土除去後検出した。直径約35cmの円形であり、断面はU字状である。深さは25cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がにぶい黄褐色粗砂混シルトである。遺物は出土していない。

165ピット（図283） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の北肩部に位置する。直径約35cmの円形であり、断面はU字状である。深さは20cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が黄褐色細砂混シルト、下層がにぶい黄褐色細砂混シルトである。遺物は出土していない。

42ピット（図283） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の西側に位置する。直径約25cmの円形であり、断面はU字状である。深さは18cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器が出土した。

26ピット（図283） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の南東側に位置する。直径23cmの円形であり、断面はU字状である。深さは17cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

27ピット（図283） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の南側に位置する。直径約25cmの円形であり、断面はU字状である。深さは22cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルト、柱痕とみられる部分が黒褐色シルトである。遺物は土師器が出土した。

28ピット（図283） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の南側に位置する。直径約34cmの円形であり、断面はU字状である。深さは30cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色細砂混シルトである。遺物は出土していない。

29ピット（図283） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の南西側に位置し、30ピットに切られる。直径約33cmの円形であり、断面はU字状である。深さは50cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色シルト、柱痕とみられる部分がにぶい黄褐色細砂混シルト（Feが顕著）である。柱痕とみられる部分は、その底面に平らな石があり根石の可能性がある。遺物は土師器、瓦器が出土した。

30ピット（図283） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の南西側に位置し、29ピットを切る。直径約50cmの円形であり、断面は二段に落ちるU字状である。深さは52cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が褐色極細砂混シルト、下層が褐色シルトである。遺物は土師器皿、瓦器碗が出土した。

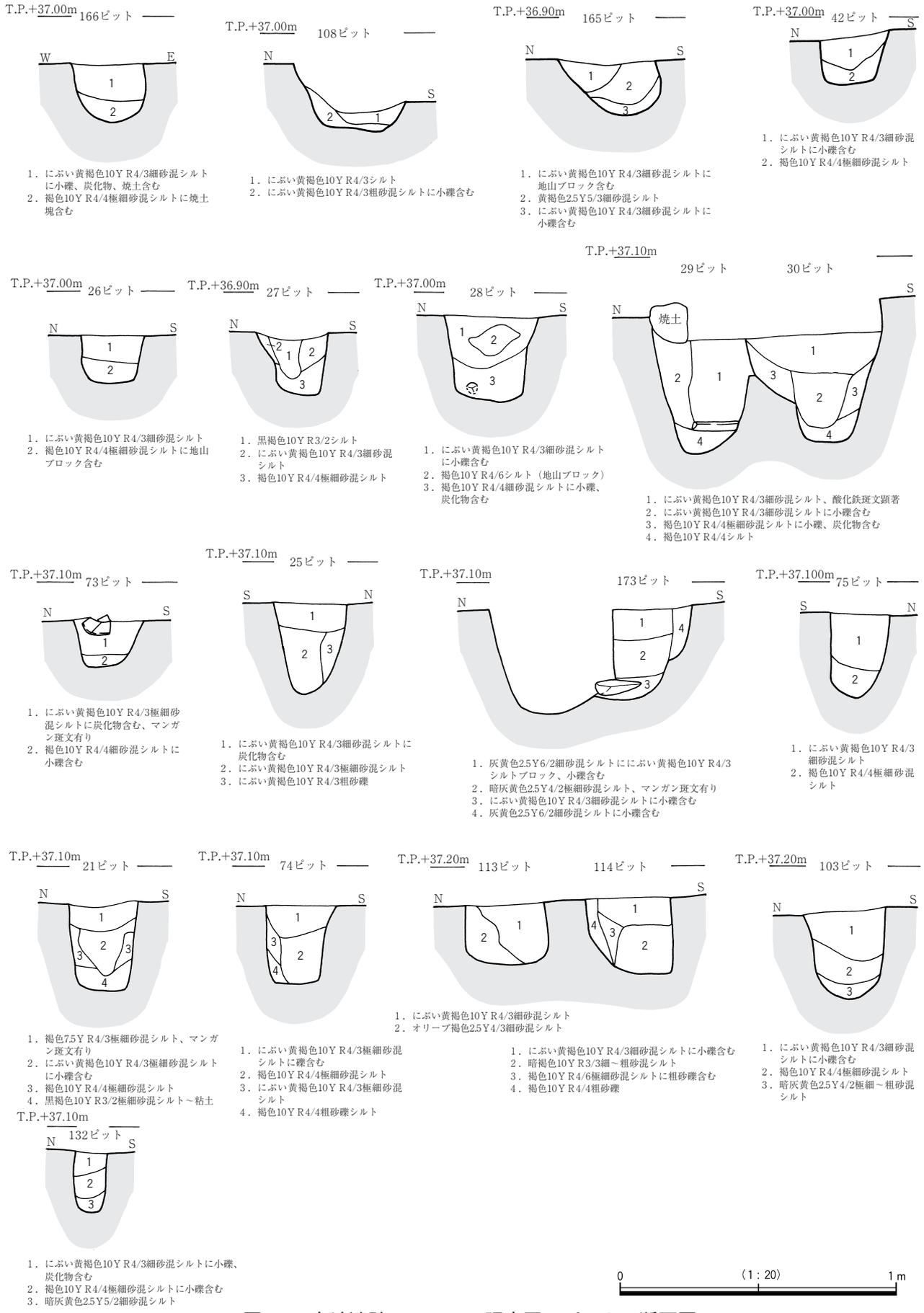


図283 有池遺跡03-2-1調査区 ピット 断面図

土した。

73ピット(図283) 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の南西側に位置する。直径約25cmの円形であり、断面はU字状である。深さは16cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色極細砂混シルト、下層が褐色細砂混シルトである。遺物は上層から瓦器椀が出土した。13世紀前半に位置付けられる。

25ピット(図283) 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、22土坑の南東側に位置する。直径約26cmの円形であり、断面はU字状である。深さは34cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層がにぶい黄褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

173ピット(図283) 調査区東辺に沿う微高地上段の北側に位置する。直径約29cm以上の円形であり、断面は2段に落ちるU字状である。深さは35cm。埋土は、上層が灰黄色細砂混シルトとにぶい黄褐色シルト、中層が暗灰黄色極細砂混シルト、下層がにぶい黄褐色細砂混シルトである。底面に平らな石があり根石の可能性がある。遺物は瓦器が出土した。

75ピット(図283) 微高地上段の北側、調査区東辺に位置する。直径約22cmの円形であり、断面はU字状である。深さは31cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

21ピット(図283) 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、48土坑の北側に位置する。直径約25cmの円形であり、断面はU字状である。深さは32cm。埋土は、上層が褐色極細砂混シルト、下層が黒褐色極細砂混シルト～粘土、柱痕とみられる部分がにぶい黄褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器が出土した。

74ピット(図283) 調査区東辺に沿う微高地上段の北側、48土坑の北側に位置する。直径約25cmの円形であり、断面はU字状である。深さは29cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色極細砂混シルト、下層が褐色粗砂礫シルト、柱痕とみられる部分がにぶい黄褐色極細砂混シルトである。遺物は出土していない。

113ピット(図283) 調査区東辺に沿う微高地上段の南側、52土坑の南西側に位置する。直径約29cmの円形であり、断面はU字状である。深さは22cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層がオリーブ褐色細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。

114ピット(図283) 調査区東辺に沿う微高地上段の南側、52土坑の南西側に位置する。直径約30cmの円形であり、断面はU字状である。深さは28cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が暗褐色細～粗砂混シルトである。遺物は出土していない。

103ピット(図283) 調査区東辺に沿う微高地上段の南側に位置する。直径約29cmの円形であり、断面はU字状である。深さは33cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が褐色極細砂混シルト、下層が暗灰黄色極細～粗砂混シルトである。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

132ピット(図283) 調査区東辺に沿う微高地上段の南側に位置する。直径約12cmの円形であり、断面はU字状である。深さは22cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が褐色極細砂混シルト、下層が暗灰黄色細砂混シルトである。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

80井戸 調査区西側、微高地下段の北側に位置する。直径1.4mの円形であり、断面はU字状である。深さは99cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色細～粗砂混シルトである。遺物は瓦器椀が出土した。底面から湧水があり、居住域内の井戸として利用された可能性が考えられる。12世紀末～13世紀初頭に位置付けられる。

115井戸(図284) 調査区東辺に沿う微高地上段の南側に位置する。長径1.45m、短径1.23mの楕円形で

あり、断面はU字状である。深さは92cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が暗灰黄色シルトである。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。底面から湧水があり、居住域内の井戸として利用された可能性が考えられる。

5井戸 (図284) 調査区東辺に沿う微高地上段の南端、2流路の北肩部にある水田区画の隅部に位置する。長径1.42m、短径1.25mの楕円形であり、断面はU字状である。深さは52cm。埋土は、上層がにぶい褐色細砂混シルトに灰黄色細砂ブロックを含み、下層がにぶい黄褐色細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦質羽釜が出土した。浅く、湧水がないため、水田用の水溜として利用された可能性が考えられる。

127土坑 (図285) 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。長径2.74m、短径2.32mの不整形円形であり、断面は2段に落ちる浅いU字状である。深さは68cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が褐色粗砂混シルト、下層がにぶい黄褐色極細砂混シルトである。遺物は瓦器がわずかに出土した。

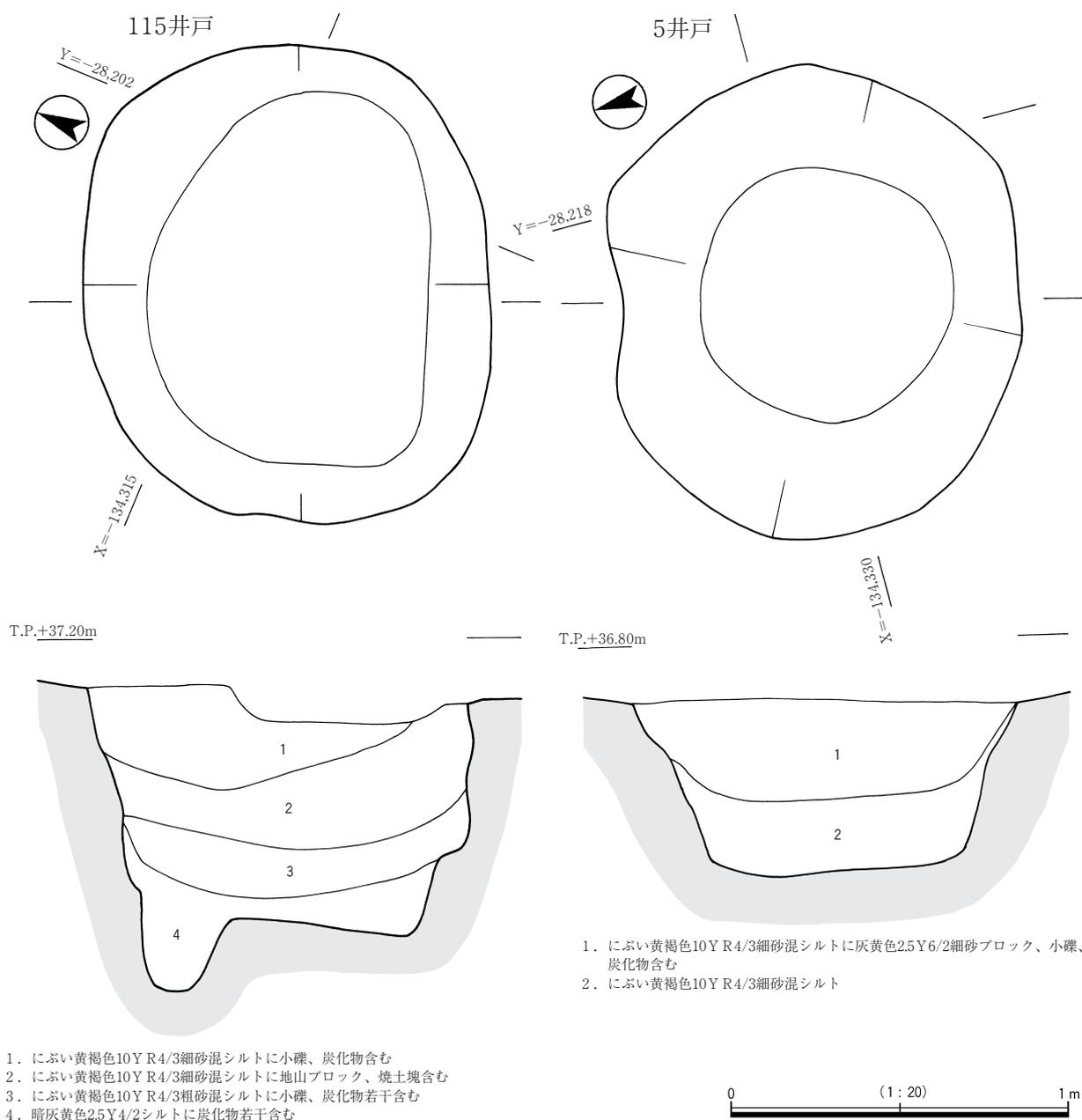


図284 有池遺跡03-2-1調査区 井戸 平・断面図

22土坑（図285） 調査区東辺に沿う微高地上段の北側に位置する。長径3.0m、短径2.15mの楕円形であり、断面は浅いU字状である。深さは43cm。埋土は、上層が黒褐・暗褐色細砂混シルト、下層が灰黄褐色細砂混シルト、黒褐色粗砂混シルトである。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。埋土がブロック土主体であるため人為的に埋め戻したとみられ、墓の可能性も考えられたが、据えられた状態の遺物はなく、断定にはいたらない。

58土坑（図285） 調査区東辺に沿う微高地上段の中央、東西方向にはしる溝の西端に位置する。直径2.7～2.9mの不整形円形であり、断面はU字状である。深さは80cm。埋土は、上層が灰黄褐色極細砂混シルト、にぶい黄褐色細～粗砂混シルト、下層がオリーブ褐色細～粗砂礫、黄褐色粗砂混シルトである。遺物は土師器皿、須恵器播鉢、瓦器が出土した。

52土坑（図286） 調査区東辺に沿う微高地上段の南側に位置する。長辺2.18m、短径1.3mの隅丸長方形であり、断面は浅いU字状である。深さは30cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器皿、瓦器椀が出土した。主軸が南北方向で、整った形状であるため墓の可能性も考えられたが、埋土にブロック土を含まず、据えられた状態の遺物はないため断定にはいたらない。13世紀前半に位置付けられる。

63土坑（図287） 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。長径3.0m、短径1.4mの不整形楕円形であり、断面は浅いU字状である。深さは24cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。上下二層を貫く暗灰黄色細砂混シルトは乾痕とみられる。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜が出土した。

162土坑（図287） 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。長径2.3m、短径1.3mの不整形楕円形であり、ほぼ中央にピットが位置し、断面は二段に落ちる浅いU字状である。深さは40cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細～粗砂混シルト、にぶい黄褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。

123土坑（図287） 調査区東辺に沿う微高地上段の北端に位置する。北端をピットに切られる。直径90cmの不整形円形であり、断面は浅いU字状である。深さは27cm。埋土は、上層が灰黄色細砂混シルト、中層が灰黄褐色細砂混シルト、下層が褐色粗砂混シルトである。遺物は出土していない。

18土坑（図287） 調査区東辺に沿う微高地上段の中央、東西方向にはしる溝の北側に位置する。北東側は土坑に切られる。長径1.0m、短径70cmの楕円形であり、断面は北西側が二段に落ちるU字状である。深さは41cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色極細砂混シルト、中層が褐色極細砂混シルト、にぶい黄褐色細砂礫、下層が黒褐色細砂混シルトである。遺物は出土していない。

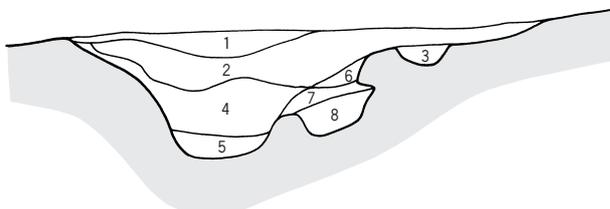
48土坑（図287） 調査区東辺に沿う微高地上段の中央、東西方向にはしる溝の北肩部に位置する。東側は3調査区へのびる。長径3.9m、短径1.4mの楕円形であり、断面は浅いU字状である。深さは16～20cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が暗灰黄色極細砂混シルトである。遺物は土師質羽釜、瓦質三足釜が出土した。

101土坑（図287） 調査区東辺に沿う微高地上段の南側に位置する。長径1.4m、短径80cmの楕円形であり、断面は南側が二段に落ちるU字状である。深さは37cm。埋土は、にぶい黄褐色細砂混シルトと暗褐色細砂混シルトの互層である。遺物は瓦器、磁器が出土した。

106土坑（図287） 調査区ほぼ中央、微高地中段の南側に位置する。長径4.4m、短径3.3mの不整形円形であり、断面は浅いU字状である。深さは13cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細～粗砂混シルト、下層

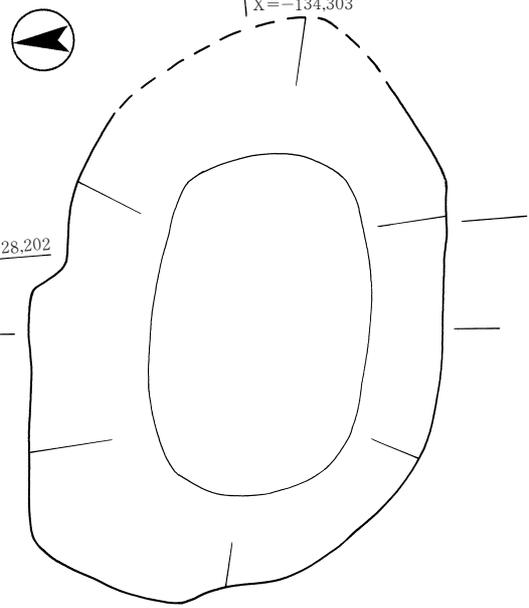


T.P.+37.00m

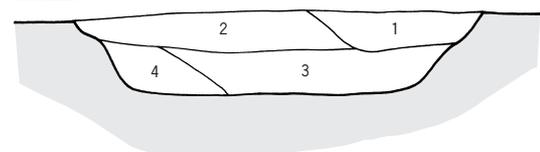


1. にぶい黄褐色10Y R4/3細砂混シルトに小礫、炭化物含む
2. にぶい黄褐色10Y R4/3極細砂混シルトに地山ブロック、小礫含む
3. にぶい黄褐色10Y R4/3細砂混シルト
4. 褐色10Y R4/4粗砂混シルトに地山混じる
5. にぶい黄褐色10Y R4/3極細砂混シルト
6. 4と同じ
7. 褐色10Y R4/4細砂混シルトに地山混じる、炭化物含む
8. 5と同じ

22土坑

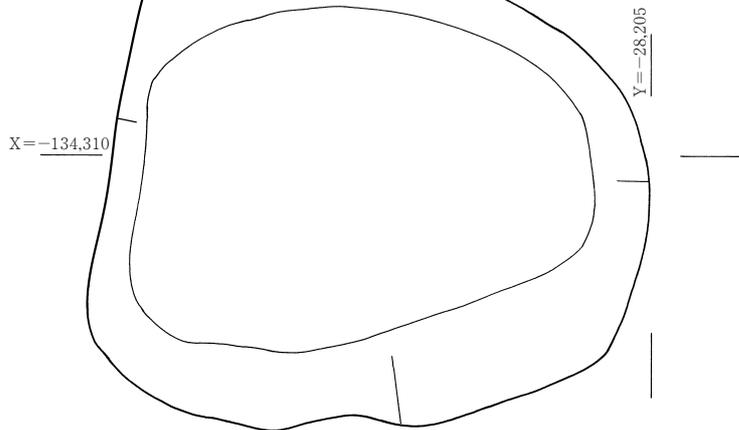


T.P.+37.00m

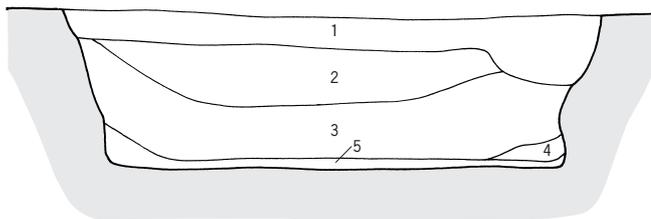


1. 黒褐色10Y R3/2極細～細砂混シルトに小礫（径0.1～1cm）、炭化物含む
2. 暗褐色10Y R3/3細～粗砂混シルトに褐色10Y R4/6シルトブロック、焼土塊、小礫含む
3. 灰黄褐色10Y R4/2細砂混シルトに褐色10Y R4/6シルトブロック、炭化物含む
4. 黒褐色10Y R3/2粗砂混シルトに炭化物、焼土片含む

58土坑



T.P.+37.40m



1. 灰黄褐色10Y R4/2極細砂混シルトに褐色10Y R4/6シルトブロック含む
2. にぶい黄褐色10Y R4/3細～粗砂混シルト
3. オリーブ褐色2.5Y 4/3細～粗砂礫
4. にぶい黄色2.5Y 6/3シルト
5. 黄褐色2.5Y 5/3粗砂混シルト

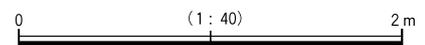


図285 有池遺跡03-2-1調査区 土坑 平・断面図

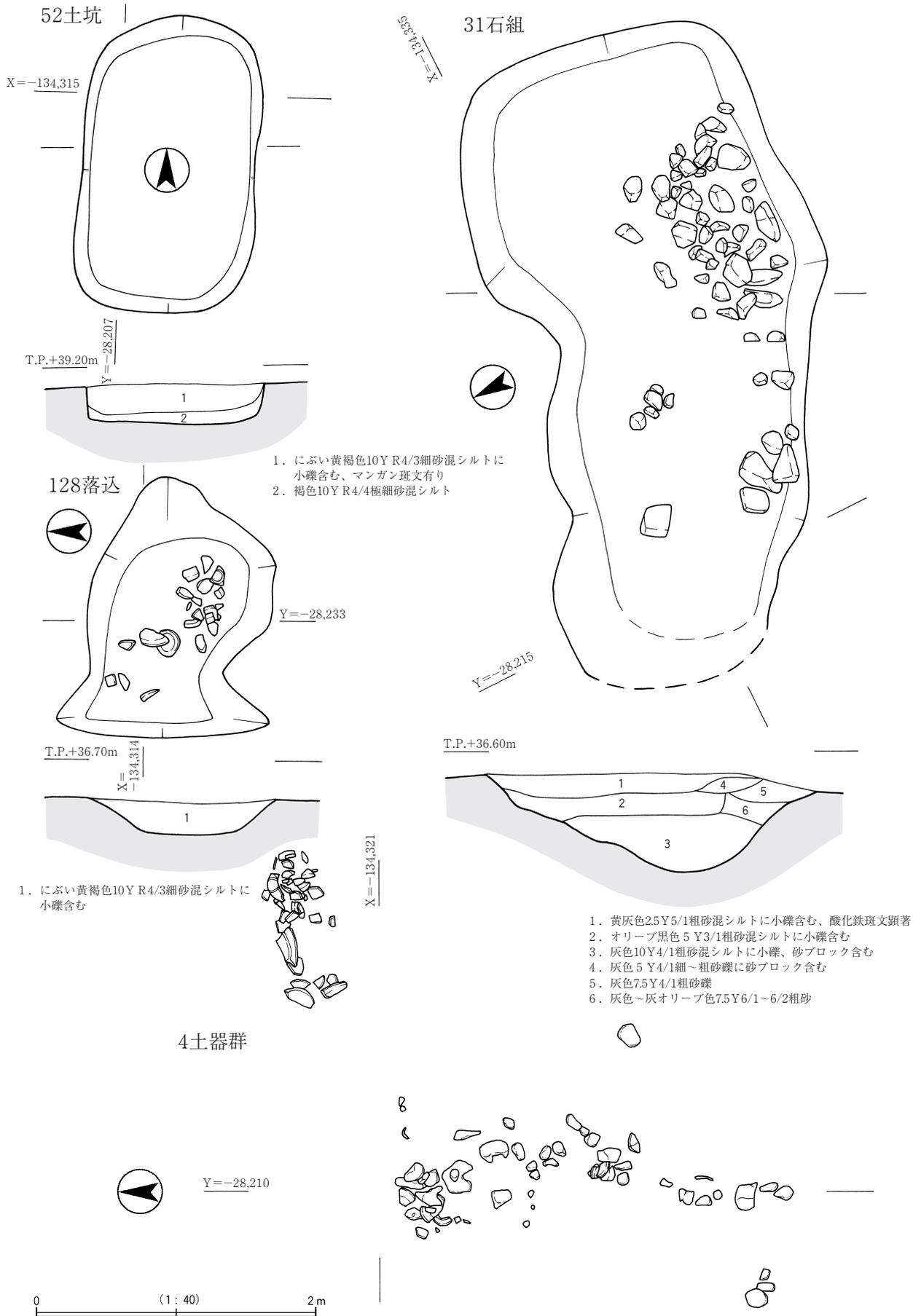


図286 有池遺跡03-2-1調査区 遺構 平・断面図/土器群 出土状況図

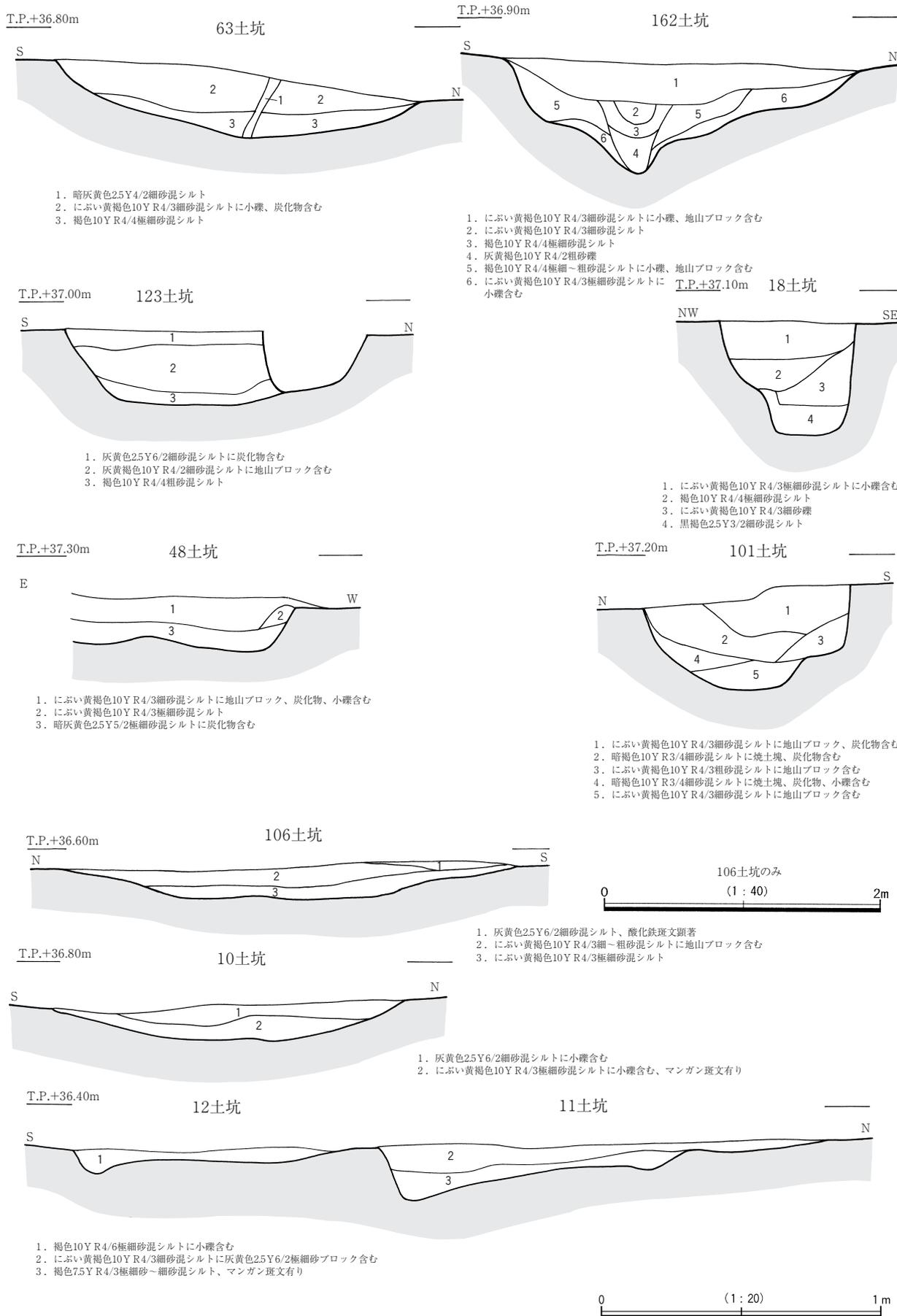


図287 有池遺跡03-2-1 調査区 土坑 断面図

がにぶい黄褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

10土坑（図287） 調査区ほぼ中央、微高地中段の南側に位置する。長径1.3m、短径1.1mの楕円形であり、断面は浅いU字状である。深さは14cm。埋土は、上層が灰黄色細砂混シルト、下層がにぶい黄褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。

12土坑（図287） 調査区ほぼ中央、微高地中段の南端、2流路の北肩部に位置する。長径2.6m、短径1.3mの楕円形であり、断面は南側に深いV字状である。深さは10cm。埋土は褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。微高地中段の南西隅部に位置し、2流路北肩部に沿うことから、微高地中段にひろがる水田の排水口になる可能性が考えられる。

11土坑（図287） 調査区ほぼ中央、微高地中段の南端、2流路の北肩部に位置する。長径3.0m、短径1.3mの楕円形であり、断面は南側に深いV字状である。深さは20cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色極細～細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。12土坑と同じく、微高地中段の南西隅部に位置し、2流路北肩部に沿うことから、微高地中段にひろがる水田の排水口になる可能性が考えられる。

66・67溝 調査区東辺に沿う微高地上段の北側に位置する東西方向の平行する溝である。長さ4.5～5m、幅50～90cmであり、断面は浅いU字状である。深さは10cm。埋土はにぶい黄褐色細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器椀、須恵器播鉢が出土した。1大溝の南肩部にあたり、1大溝上層の中世水田面に伴う鋤溝と考えられる。66溝からは13世紀前半～後半、67溝からは12世紀末～13世紀初頭に位置付けられる遺物が出土した。

43溝 調査区東辺に沿う微高地上段の北側に位置する南北方向の溝である。長さ1.5m、幅50cmであり、断面は浅いU字状である。深さは10cm。埋土はにぶい黄褐色細砂混シルトである。遺物は土師器皿、瓦器椀がまとめて出土した。13世紀後半に位置付けられる。

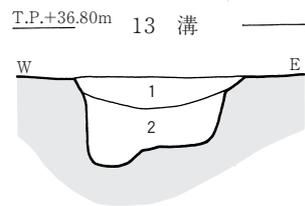
13溝（図288） 調査区ほぼ中央、微高地中段の南端に位置する南北方向の溝である。長さ5m、幅約40cmであり、断面は西側が二段に落ちるU字状である。深さは49cm。埋土は、上層が灰黄色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。微高地中段の南西隅部に位置し、2流路の北肩部である6溝へ連続することから、微高地中段にひろがる水田の排水口と考えられる。また、微高地中段の削平以前に連続する溝であった可能性が考えられる。

16溝（図288） 調査区ほぼ中央、微高地中段の南西端に位置する南北方向の溝である。長さ3.8m、幅97cmであり、溝3条が重複する。深さは18cm。埋土は、上層が灰黄色細～粗砂混シルト、中層が灰黄色細砂混シルト、下層が褐色極細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。微高地中段西側の段落ち際溝の南端であり、2流路の北肩部へ連続することから、微高地中段にひろがる水田の排水口とみられ、東側から埋積したと考えられる。

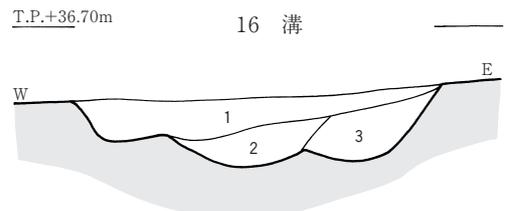
6溝（図288） 調査区ほぼ中央、微高地中段の南端、2流路北肩部にあたる東西方向の溝である。長さ7.4m、最大幅2.8mであり、断面は北側が落ちる浅いU字状である。深さは17cm。埋土は、上層が灰黄色細砂混シルト、下層が褐色細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器椀が出土した。2流路の北肩部であり、本溝の北肩部はほぼ東西方向であることから、2流路が埋積する過程において営まれた最終段階の谷水田となる可能性がある。また、遺物が比較的多いことから、微高地上段から続く居住域が微高地中段周辺までひろがっていた可能性が考えられ、23溝に直角に連なる居住域を画する溝である可能性も考えられる。13世紀後半に位置付けられる。

7溝 (図288) 2流路北肩部に位置する南北方向の溝である。長さ1.0m、幅33cmであり、断面はU字状である。深さは14cm。埋土は、上層が褐色細砂混シルト、下層が暗灰黄色極細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。2流路が埋積する過程において営まれた谷水田の排水口となる可能性がある。

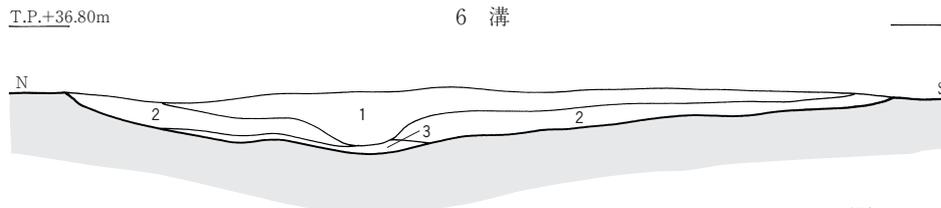
23溝 (図288) 調査区ほぼ中央、微高地下段の東端、微高地中段西端の落ち際に並行する南北方向の溝である。長さは29.5m、最大幅5.0m、断面は浅いU字状である。深さは20cm。埋土は、上層が褐色細砂混シルトに褐灰色シルト、下層が褐灰色シルトに褐色細砂シルト混ブロックを含む。遺物は土師器、瓦器、陶器、青磁が出土した。南北方向の規模の大きな溝であり、その西側は2流路に連なる谷に移行することから、居住域を画する溝が後世の削平により底面が残存したものである可能性が考えられる。



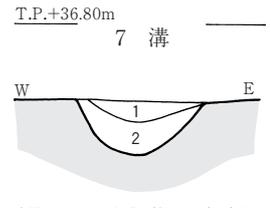
- 1. 灰黄色2.5Y6/2細砂混シルトに小礫含む、酸化鉄斑文顕著
- 2. 褐色7.5Y R4/3極細砂混シルトに地山ブロック含む



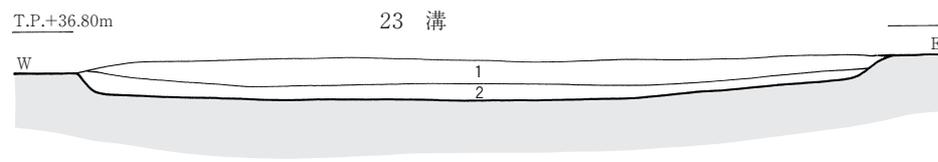
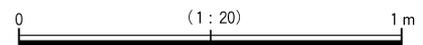
- 1. 灰黄色2.5Y6/2細～粗砂混シルトに小礫含む、酸化鉄斑文顕著
- 2. 灰黄色2.5Y6/2細砂混シルト
- 3. 褐色10Y R4/4極細砂混シルトに小礫含む、酸化鉄斑文有り



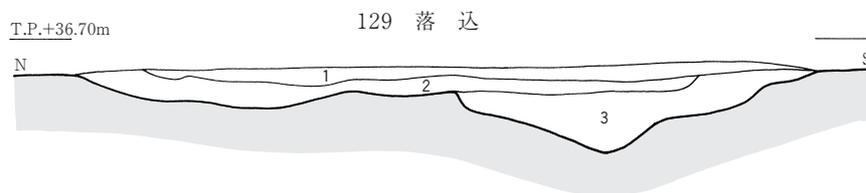
- 1. 灰黄色2.5Y6/2細砂混シルト
- 2. 褐色7.5Y R4/3細砂混シルト
- 3. 2に地山ブロック混じる



- 1. 褐色7.5Y R4/3細砂混シルトに小礫 (径0.2cm) 含む
- 2. 暗灰黄色2.5Y5/2極細砂混シルト、酸化鉄斑文顕著



- 1. 褐色7.5Y R4/3細砂混シルトに褐灰色10Y R6/1シルト含む
- 2. 褐灰色10Y R6/1シルトに褐色7.5Y R4/3細砂混シルトブロック含む



- 1. 暗褐色10Y R3/4細砂混シルトに焼土塊、炭化物、小礫含む
- 2. にぶい黄褐色10Y R4/3細砂混シルトに地山ブロック、小礫含む
- 3. 褐色10Y R4/4細～粗砂混シルトに地山ブロック含む
- 4. 暗灰黄色2.5Y4/2細～粗砂に地山ブロック含む
- 5. 暗灰黄色2.5Y4/2極細砂

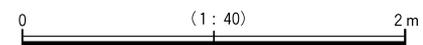
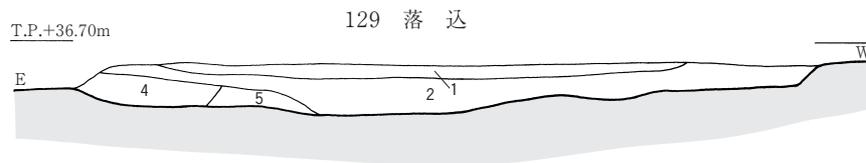


図288 有池遺跡03-2-1調査区 溝・落込 断面図

60溝 調査区ほぼ中央、微高地下段西端の落ち際に並行し、79土坑に連なる南北方向の溝である。長さ17.5m、最大幅90cmであり、断面は浅いU字状である。深さは15cm。埋土は、褐色細砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器椀が出土した。西側は2流路に連なる谷に移行することから、微高地と谷を画する溝もしくは微高地下段が水田であったときの水田区画溝である可能性が考えられる。13世紀前半に位置付けられる。

59落込 調査区東辺に沿う微高地上段のほぼ中央、58土坑の南側に位置する。長さ1.0m、最大幅90cmの不整な三角形であり、断面は浅いU字状である。深さは5cm。埋土は、灰黄褐色極細砂混シルトである。遺物は瓦器椀が出土した。14世紀前半に位置付けられる。

128落込 (図286) 調査区西側、微高地下段のほぼ中央に位置する。長さ1.9m、最大幅1.35mの不整な円形であり、断面は浅いU字状である。深さは22cm。埋土は、にぶい黄褐色細砂混シルトである。遺物は土師器皿、瓦器椀がまとまって出土した。2流路東肩部に並行する溝に取り付くことから、微高地下段および2流路東肩部の削平以前にひろがっていた水田の段落ちに伴う排水溝の可能性が考えられる。12世紀後半に位置付けられる。

129落込 (図288) 調査区西側、微高地下段のほぼ中央に位置する。直径4.4mの不整な円形であり、断面は北側が二段に落ちる浅いV字状である。深さは45cm。埋土は、上層が暗褐色細砂混シルト、中層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層が褐色細～粗砂混シルトである。遺物は高杯を含む古墳時代の土師器がまとまって出土した。出土遺物は瓦器を含まず古墳～飛鳥時代遺物のみであり、中世の溝である23溝より下層であることから、飛鳥時代包含層の残存部と考えられ、有池遺跡02-1-1A・1Bの4層に相当する可能性がある。

4土器群 (図286) 調査区東辺に沿う微高地上段の南側に位置する。L字形に北側と南側の二群の土器群があり、北側は東西1.2m、南北50cmの範囲で、南側は東西1m、南北約3mの範囲で土器が集中して出土した。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜の他、直径5cm前後の焼土塊がまとまって出土した。12世紀末～13世紀前半に位置付けられる。

2. 2調査区 (図289)

2調査区は、有池遺跡03-2調査対象地の北端、4調査区の北側、8調査区の東側に位置しており、前年度に調査した有池遺跡02-1とは里道をはさんで西側に位置している。2調査区の現況は、緩傾斜の地形を利用して低い棚田造成を施した耕作地であり、比較的狭小な棚田5面が確認できる。

調査では現代耕土を機械掘削によって除去した後、暗灰褐色系の砂質土層(1-2層)をベースとする面において、近世の耕作関連の遺構を確認し1面とした。この1面では耕作関連の小溝群(鋤溝群)がわずかに残存する水田4枚および水田区画境界の土留め杭列、同段差下の溝3条(1-3溝)の他、井戸4基(4-7井戸)を確認したが、近世の1面は本報告の対象外であるために詳細は省略する。

1面以下の全体的な遺物包含層の堆積状況は、緩傾斜の地形に沿って標高の高い北東部では比較的薄く、その直下には自然堆積の基盤層である黄灰色粘質シルト層などの堆積がみられることから、中世以降の水田耕作などの生産活動に伴い、相当規模の削平を受けている状況であると判断される。

2面はほぼ全体に薄く堆積する中世耕土の暗灰黄色小礫混シルト、床土の黄褐色シルトなどの耕作関連土を除去した後に検出した最終遺構面で、微高地上には中世から近世の南北方向の鋤溝やほぼ直角に屈曲する区画溝、不規則に散在する小ピットなどが確認される。主要遺構としては、調査区南辺部を東西方向にはしる谷の12大溝、この谷を利用した11水田、その肩斜面上部で検出した平安時代後期の水場

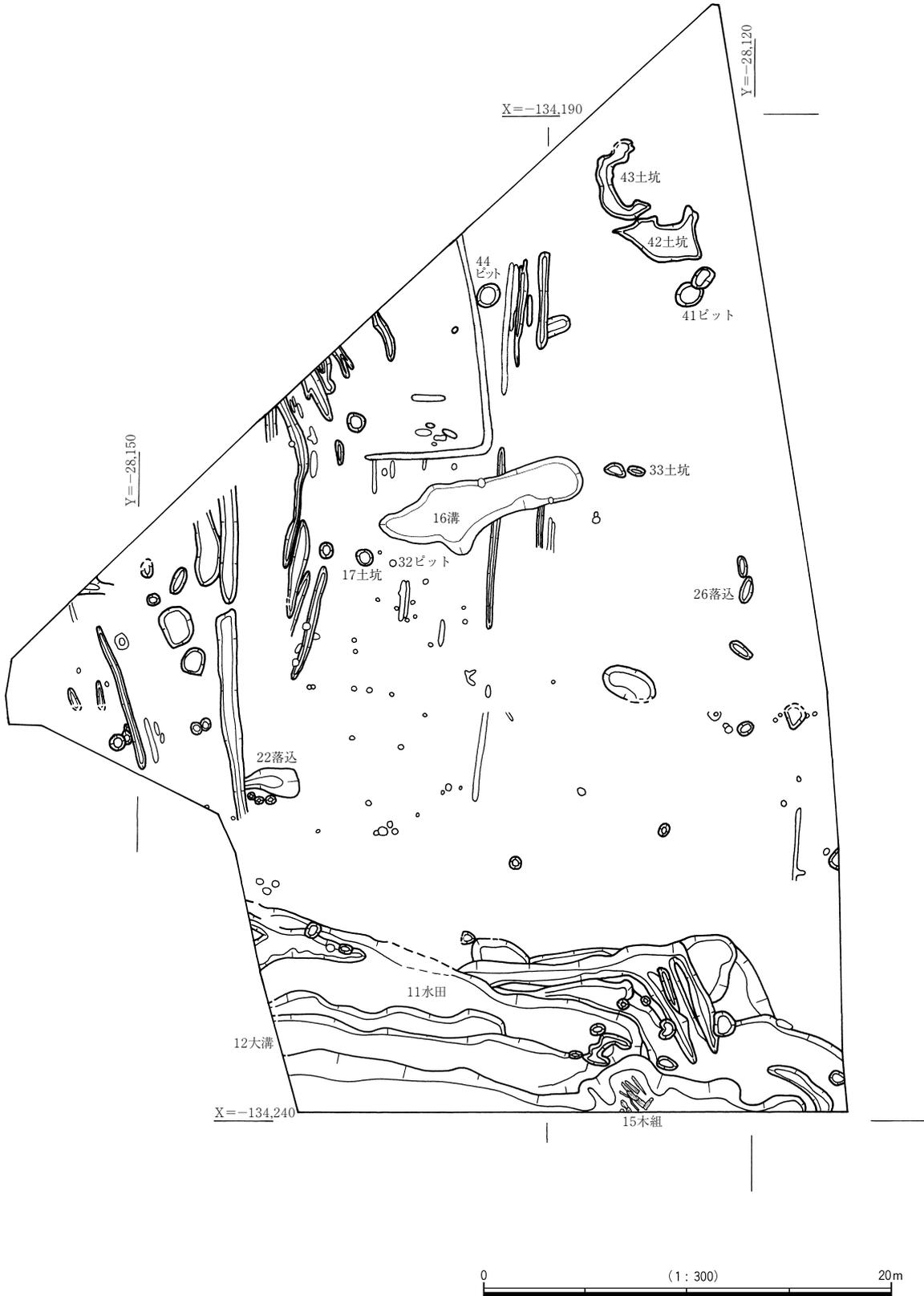


図289 有池遺跡03-2-2調査区 平面図(全体)

遺構と推定される15木組、下層の古墳時代中期～飛鳥時代初頭溝がある。12大溝は、有池遺跡02-1調査や本調査4・5・8調査区でも延長部を検出している。

12大溝(図290) 調査区南辺部を東西方向にはしる谷である。谷上層を11水田上層とし、谷下層を11水田下層とした。この谷は4調査区の12大溝と一体となるものであり、当調査区ではその北肩部の途中までを検出した。なお、12大溝は有池遺跡02-1で検出した大溝の延長にあたる。

[11水田] 上層は、東西方向の谷北側傾斜面を平坦に区画造成し水田としている。検出規模は東西約27m、南北最大約10m、深さ0.8～1.0m、底面の標高はT.P.+37.61～38.61mである。堆積土は谷深部に向かって南側がやや低くなるが、ほぼ水平な堆積状況であり、大別して4層に分かれる。1層が灰黄褐色細～粗砂混シルト、2層が灰色極細～粗砂、3層が灰色極細～細砂混シルト、4層がオリーブ黒色細砂混シルトである。2・3層の下部では灰オリーブ色細砂混シルト(地山)がブロック状に混在する状態が認められる。出土遺物は1層では中世の土師器・瓦器のほか染付磁器などの近世遺物が含まれ、2・3層では中世(14～15世紀)を中心とする土師器・瓦器、4層では平安時代後期～中世(12～13世紀)を中心とする土師器・瓦器がみられる。

下層は平安時代後期の耕土とみられる。当調査区南端の調査区境に沿ってみられ、溝の肩部から傾斜部までの検出に留まり、溝本体の底面は南側の4調査区に位置する。検出規模は東西長約27m、南北最大幅約10.5m、深さ1.4m、傾斜面深部の標高はT.P.+36.76～37.20mである。5層が黒色極細砂混シルト、6層が灰色粗砂～シルト、7層がオリーブ黒色シルトであり、これらはほぼ水平に堆積し、傾斜部には灰色細砂～シルトが認められる。平安時代後期の瓦器碗が出土した。

[15木組](図291) 12大溝の北肩部落ち際の平坦部分に位置する。遺構は階段状に長さ1.8m、幅20cmの板材を細杭で杭止めし、上段には踏み板と思われる長さ85cm、幅14cmと、長さ1.15m、幅10～18cmの板材2枚を並行に敷き並べ、下段にはやや密集した状態で30～40cmの川原石三個が認められる。一種の水場遺構と推定される。底面は上段がT.P.+37.32m、下段がT.P.+37.16mである。埋土は12大溝の平安時代後期の耕土とみられる6層に相当する。木製容器の槽や浅鉢が木組と共に検出され、他に平安時代後期の土師器皿、瓦器碗などが出土した。11世紀末～12世紀前半に位置付けられる。

41ピット(図292) 調査区北端部に位置する。直径1.1～1.4mの不整な楕円形であり、深さ28cm、底面はT.P.+38.82mである。埋土はにぶい黄褐色シルト混中～粗砂である。遺物は出土していない。

44ピット(図292) 調査区北端部に位置する。直径1.0～1.2mの不整な楕円形であり、深さ39cm、底面はT.P.+38.51mである。遺物は出土していない。

32ピット(図292) 調査区中央やや北西側、17土坑の東側80cmに位置する。直径40cmの不整な円形であり、深さ約5cm、底面はT.P.+38.67mである。埋土は炭化物を多量に含む黒褐色中砂である。遺物は出土していない。32ピットと17土坑以外に周辺部では炭化物を含む遺構が検出されていないので、両遺構が炭窯遺構などの残欠部分である可能性も想定されるが断定は難しい。

17土坑(図292) 調査区中央やや北西側に位置する。直径70～80cmの不整な円形であり、深さ23cm、底面はT.P.+38.46mである。底面に一對の小ピットが認められる。ピットは小杭の抜き取り痕で、直径8cm前後、深さ8～10cmである。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、中層が炭化物や焼土塊を含む灰黄褐色極細～粗砂混シルト、下層が炭化物であり、炭化物は小ピット底面におよぶ。側壁面の一部では焼土壁状になった赤褐色極細砂～シルトが認められる。遺物は出土していない。

43土坑(図292) 調査区北端部、42土坑の北側に位置する。42土坑と同様に不定形であり、幅50～80cm

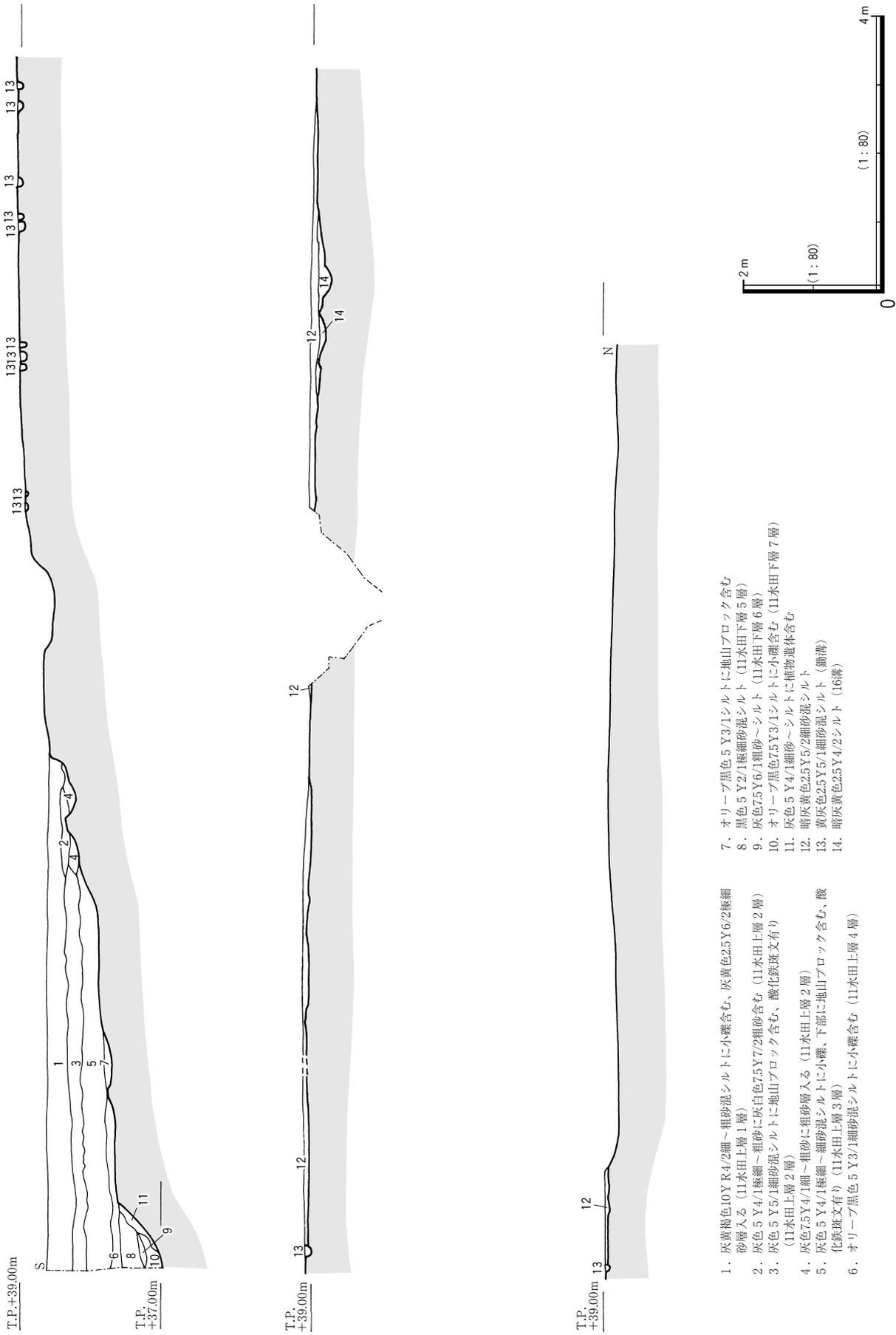


図290 有池遺跡03-2-2調査区 中央アゼ 断面図

の溝状遺構が屈曲する状態とも考えられる。深さ約10cm、底面はT.P.+38.95mである。埋土はにぶい黄褐色シルト混中砂である。遺物は出土していない。42土坑を含め風倒木の根回り痕の可能性が考えられる。

42土坑（図292） 調査区北端部に位置する。東西約4.0m、南北約2.7mの不定形な遺構であり、深さ18cm、底面はT.P.+38.84mである。埋土は、上層が灰黄褐色シルト混粗砂、下層がにぶい黄褐色シルト混極細砂～粗砂である。遺物は出土していない。

33土坑（図292） 調査区北部東側に位置する。長径74cm、短径46cmのやや不整な楕円形であり、深さ20cm、底面はT.P.+38.81mである。埋土は、上層が暗灰黄色中砂混シルト、下層が黄褐色中砂混シルトである。遺物は出土していない。

16溝（図292） 調査区中央やや北側に位置する。溝方向は東に向かって若干北偏するがほぼ東西方向で、長さ約10m、幅約2.0m、深さ10～25cm、底面はT.P.+38.68～38.90mである。埋土は、上層が暗灰黄色中～粗砂混シルト、暗灰黄色シルト、オリーブ褐色中砂混シルトであり、有池遺跡02-1-1A・1Bの基本層序でいう飛鳥時代遺物包含層の4層に類似する。

遺物は土師器の小片が20点程出土するが、時期は明確ではない。東西方向に溝状を呈することから、溝底部の深い部分のみを検出し、溝本体の上部は削平されたものと考えられる。底面形状からは溝2条が併走していた可能性がある。

26落込（図292） 調査区中央部東辺に位置する。長辺1.3m、短辺60cmの楕円形に近く、深さは11cm、底面はT.P.+38.90mである。埋土は黒褐色粗砂混シルトである。遺物は土師器と瓦器の小片が各1点

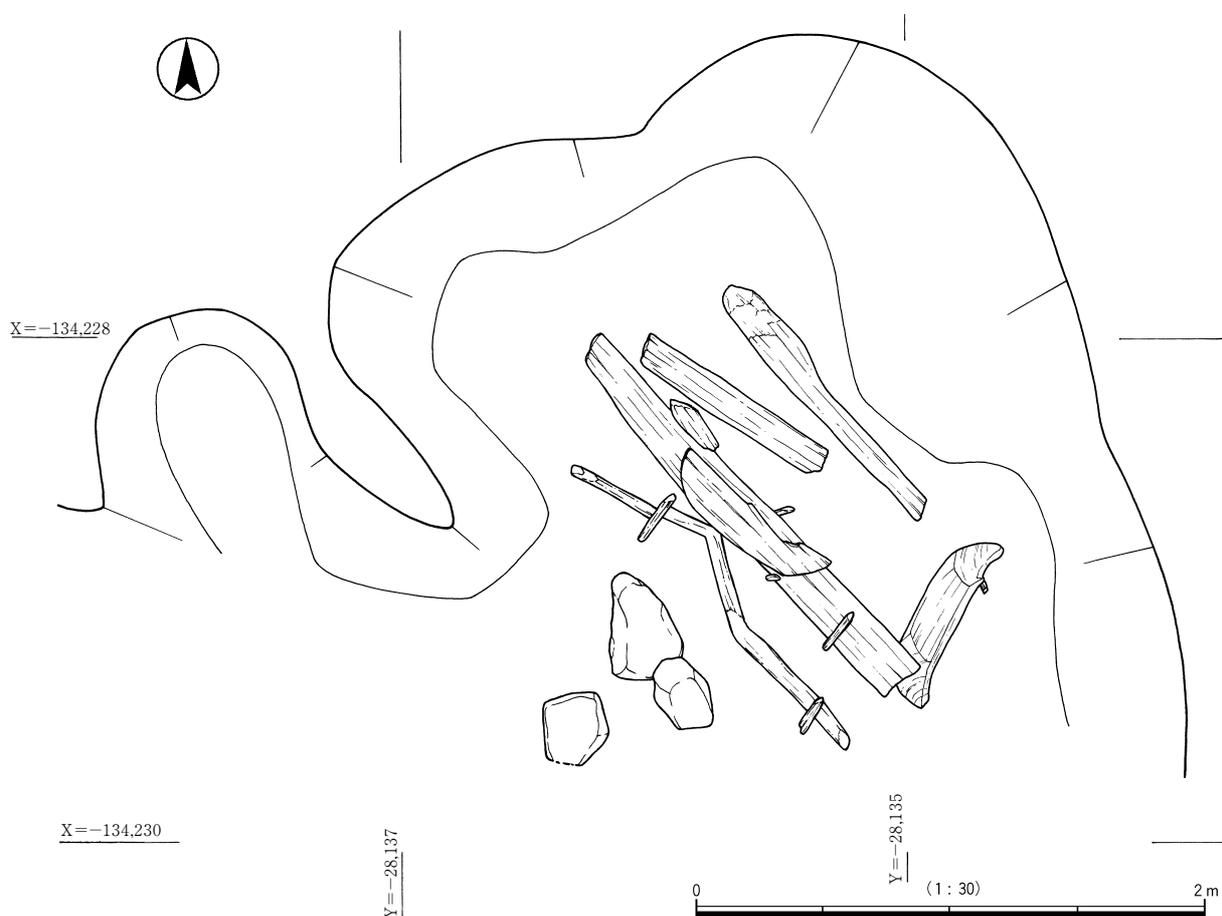


図291 有池遺跡03-2-2調査区 15木組 出土状況図

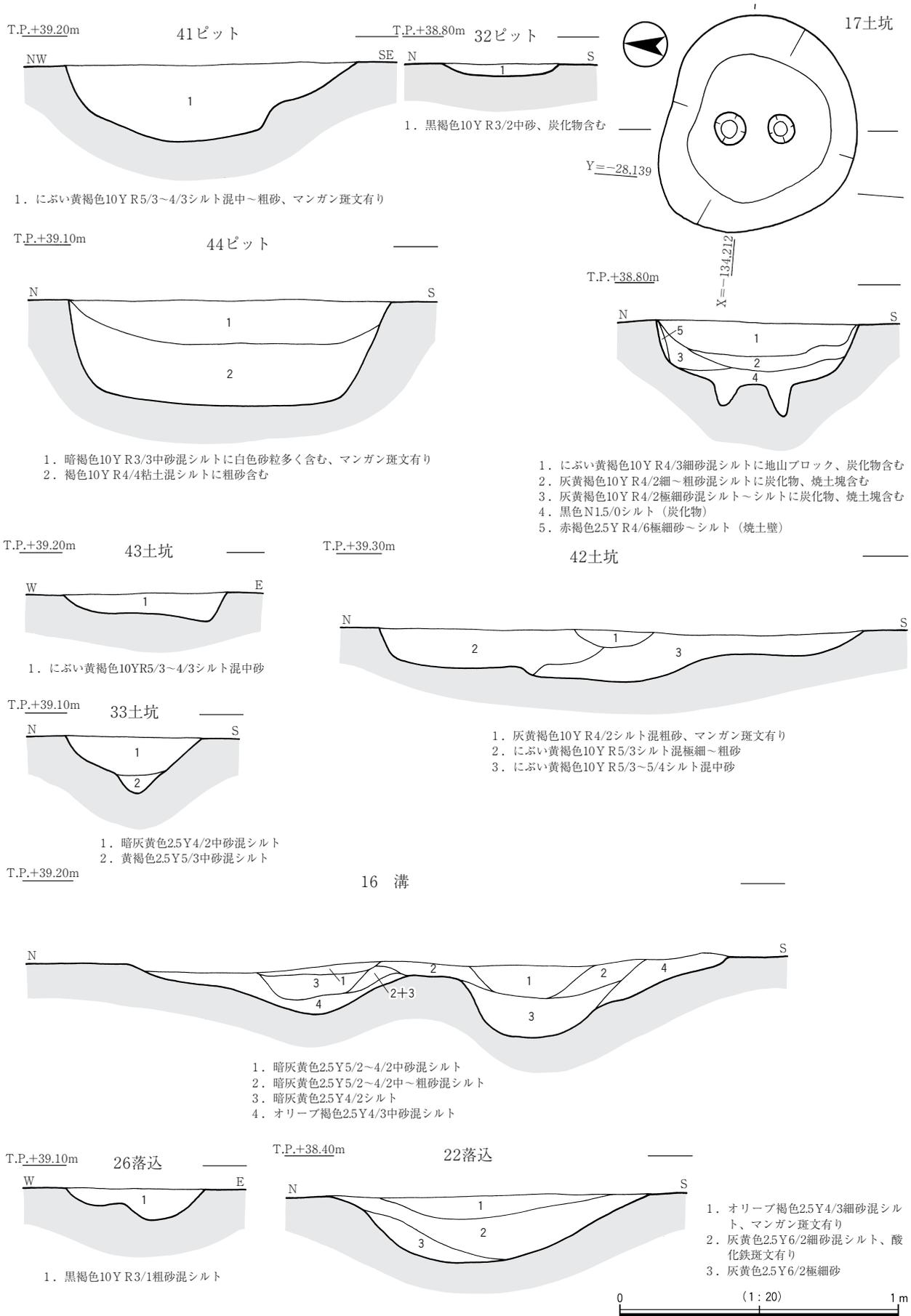


図292 有池遺跡03-2-2調査区 遺構 平・断面図

出土した。

22落込(図292) 調査区南半部西辺に位置する。東西2.6m、南北0.5～1.5mで、不定形ながら、東辺部の状態から長方形に近い形状の遺構であった可能性がある。深さは24cm、底面はT.P.+38.00mである。埋土は、上層がオリーブ褐色細砂混シルト、中層が灰黄色細砂混シルト、下層が灰黄色極細砂である。遺物は出土していない。

3. 3 調査区(図293)

1 調査区の東側、5・7調査区の西側に位置する南北に長い調査区である。

2面では、調査区北端で東から西へはしる3流路、調査区のほぼ中央で東から西へはしる1大溝、調査区南端で東から西へはしる2流路、および1大溝と2流路にはさまれた調査区南半の微高地で中世居住域を確認した。

3流路では中世谷水田を確認したのみであるが、1大溝、2流路は上層が中世谷水田であり、最下層は古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝である。1大溝の南肩部では、古墳時代の竪穴住居(294竪穴)を1棟確認した。竪穴住居はその端部の検出にとどまり、大半は中世谷水田により削平されている。

微高地は東から西へとゆるやかに下降する。1大溝と2流路間の微高地は、東端で調査区が三角形に突出した部分を上段、その西側の部分を中段、下段とした。下段が最も遺構密度が稠密であり、上段がこれに次ぐ。中段は遺構密度が比較的疎であり、柱穴も浅い。南北方向の段落ち境にはしる溝は、中世～近世の水田に伴うものである。遺構埋土は基本的に2層に類似し、上・下段の遺構では炭化物、焼土を含むものが多い。

1調査区同様、もとはゆるやかに東から西へと下降する地形に中世居住域が展開していたものが、中世以降の水田開発により段状に削平され、とくに中段の遺構の多くが削平のため消失したと考えられる。下段東半を東西南北に屈曲する125溝は、屋敷地を区画する溝の可能性が考えられる。

3流路(図294) 北端に位置する東西方向にはしる谷である。北肩部は調査区外であり、南肩部のみの検出である。遺構延長部は東側の5調査区(1流路)、8調査区(9流路)で検出した。幅約12.4m以上、検出面からの深さ1.2mである。南肩部は中世水田面である東西方向の平坦面が段状に落ち、落ち際には溝がはしり、杭列がのびる。谷の中心は南肩部沿いにある。埋土は、上層はシルト～粘土の水平堆積、下層の谷の中心部は粗砂混シルトが主体であり、谷の埋積後、平坦面を確保し水田として利用したと考えられる。遺物は、土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜、陶器などが多く出土しており、14世紀～15世紀初頭に位置付けられる。

[10土器](図294) 3流路の南肩部では南北80cm、東西1.2mの範囲で、土師器皿、瓦器椀を主体とする13世紀後半の土器群を検出した。特に置かれたような状態を示さず、廃棄されたものと考えられるが、完形の土器が比較的多い。3流路と1大溝間の微高地は、遺構が希薄であるが、この土器群からは、もともこの微高地上に居住域がひろがり遺構が残存していたものが、後世に削平された可能性が考えられる。

1大溝(図295) 調査地中央からやや北側を東西方向にはしる。最大幅約30m、検出面からの深さ約3mである。上層は谷に設けられた中世の水田であり、北肩部および南肩部から東西方向の平坦面が段状に落ちる。これを除去後、最下層の谷の中心部で古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝を検出した。溝の延長部は西側の1調査区、東側の7・4調査区で検出している。

上層の谷では下段、上段、下段南南側、下段南側、下段北側とした五面の棚田を掘削しており、層名

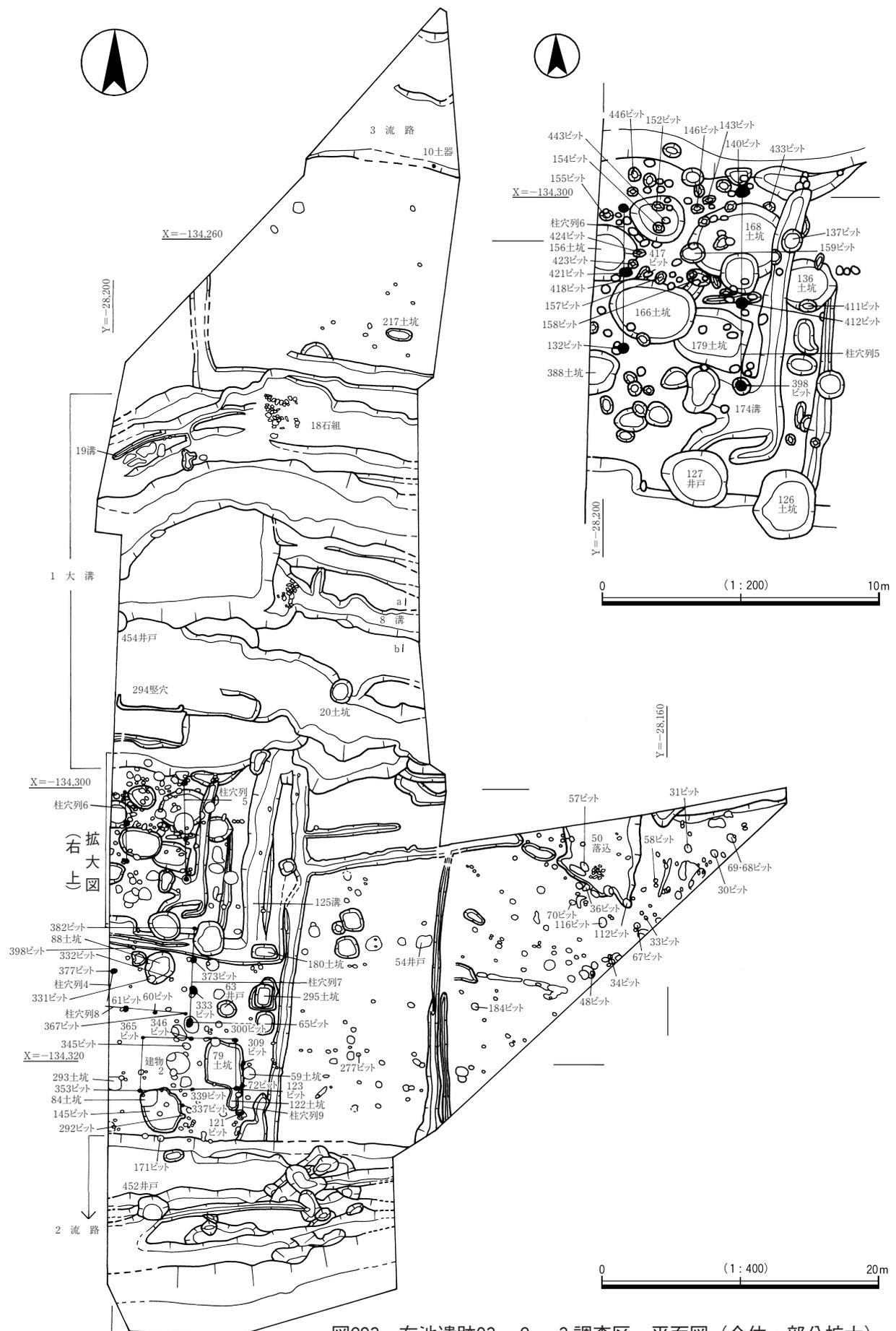
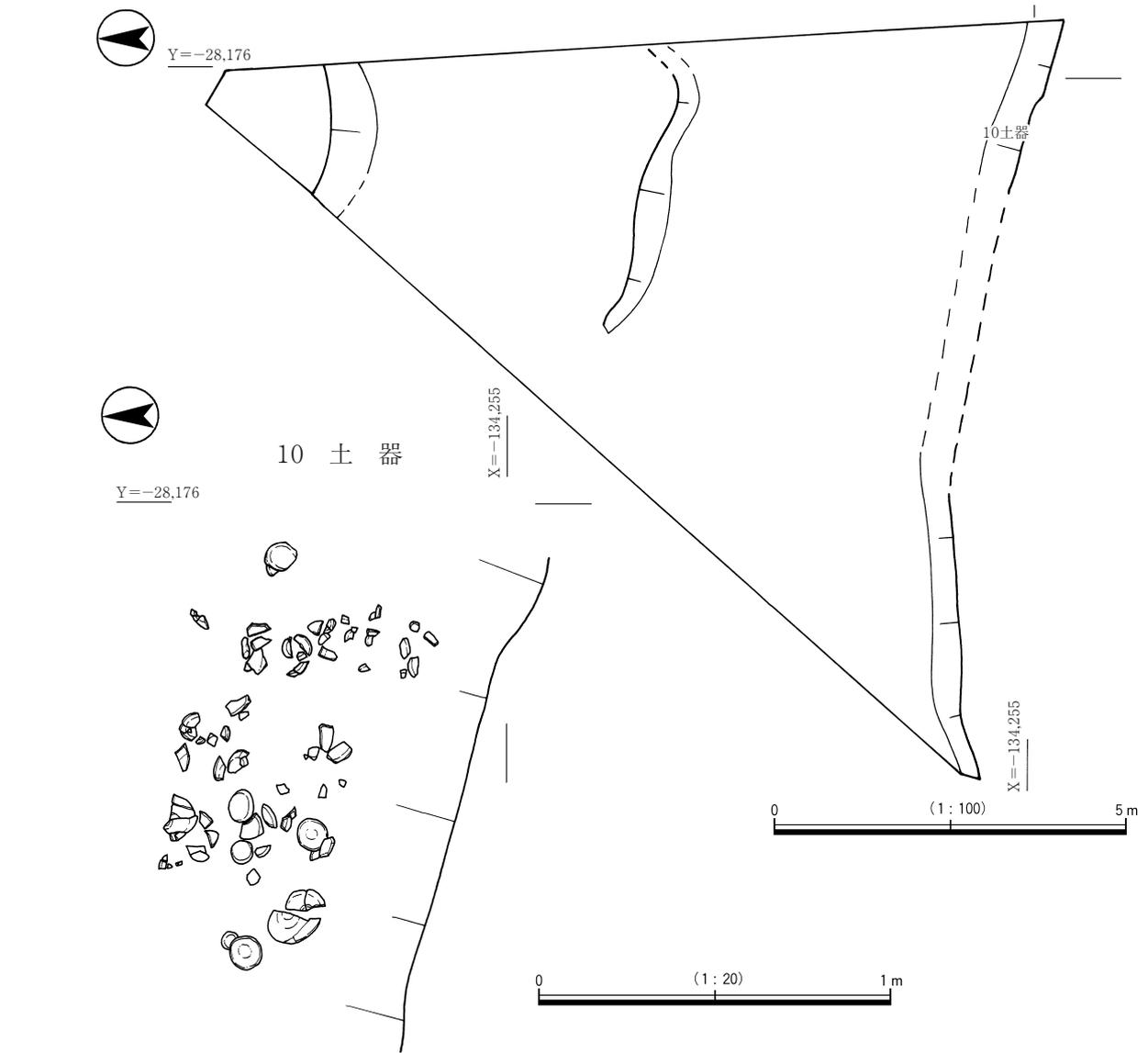
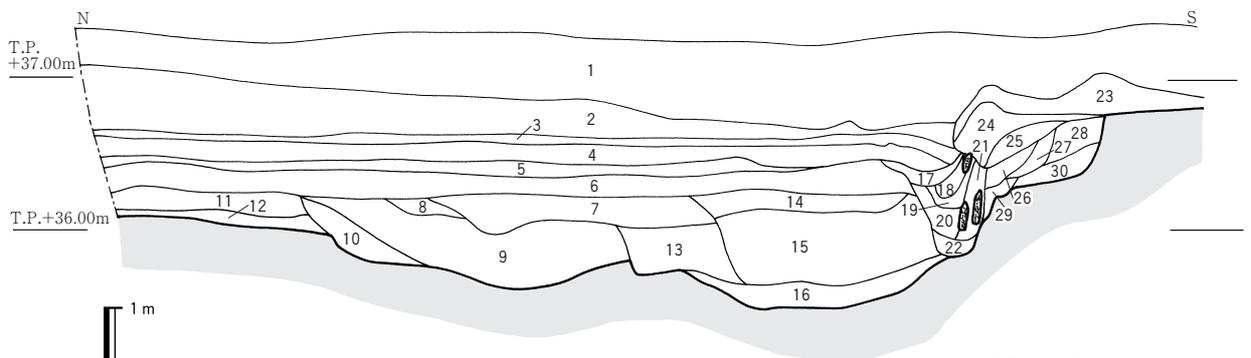


図293 有池遺跡03-2-3調査区 平面図 (全体・部分拡大)



東壁断面



- | | |
|------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 暗褐色10Y R3/3~3/4粗砂混シルト | 16. 灰色7.5Y4/1細砂混シルト~粘土 |
| 2. 黄褐色2.5Y5/6シルト混粗砂 | 17. オリーブ黒色10Y3/1粗砂混シルト |
| 3. オリーブ黒色5 Y3/1シルト | 18. オリーブ黒色7.5Y3/1粗砂混シルト |
| 4. オリーブ黒色5 Y3/1~3/2粗砂混シルト | 19. オリーブ褐色2.5Y4/3~4/4粗砂に小礫含む |
| 5. 灰オリーブ色5 Y4/2粗砂混シルト | 20. 灰色5 Y4/1粗砂混シルト |
| 6. 灰色5 Y4/1粗砂混シルト~粘土 | 21. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1~3/1粗~細砂混シルト~粘土 |
| 7. 灰色7.5Y4/1粗砂混シルト | 22. 暗緑灰色10G Y4/1~3/1粗砂混シルト |
| 8. 灰色10Y4/1粗砂混シルト | 23. 黒褐色2.5Y3/1~3/2細砂混シルト |
| 9. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1シルト混粗砂 | 24. 灰オリーブ色7.5Y4/2粗砂混シルト |
| 10. 暗緑灰色7.5G Y4/1粗砂混シルト | 25. オリーブ灰色10Y4/2粗砂混シルト |
| 11. オリーブ灰色2.5G Y5/1粗砂混シルト~粘土 | 26. 灰色7.5Y5/1~4/1シルト混粗砂 |
| 12. 灰オリーブ色7.5Y5/2粗砂混シルト~粘土 | 27. オリーブ灰色10Y5/2シルト~粘土混細砂 |
| 13. 黄褐色2.5Y4/1粗砂混シルト | 28. 灰オリーブ色7.5Y5/2粗砂混シルト |
| 14. 黒褐色2.5Y3/1~3/2粗砂混シルト | 29. 暗緑灰色7.5G Y4/1粗砂混シルト |
| 15. オリーブ黒色5 Y3/1粗砂混シルトに小礫含む | 30. 灰色7.5Y4/1粗砂混シルトに白色砂粒含む |
- ※ 3~22、24~30が3流路

図294 有池遺跡03-2-3調査区 3流路 平・断面図/10土器 出土状況図

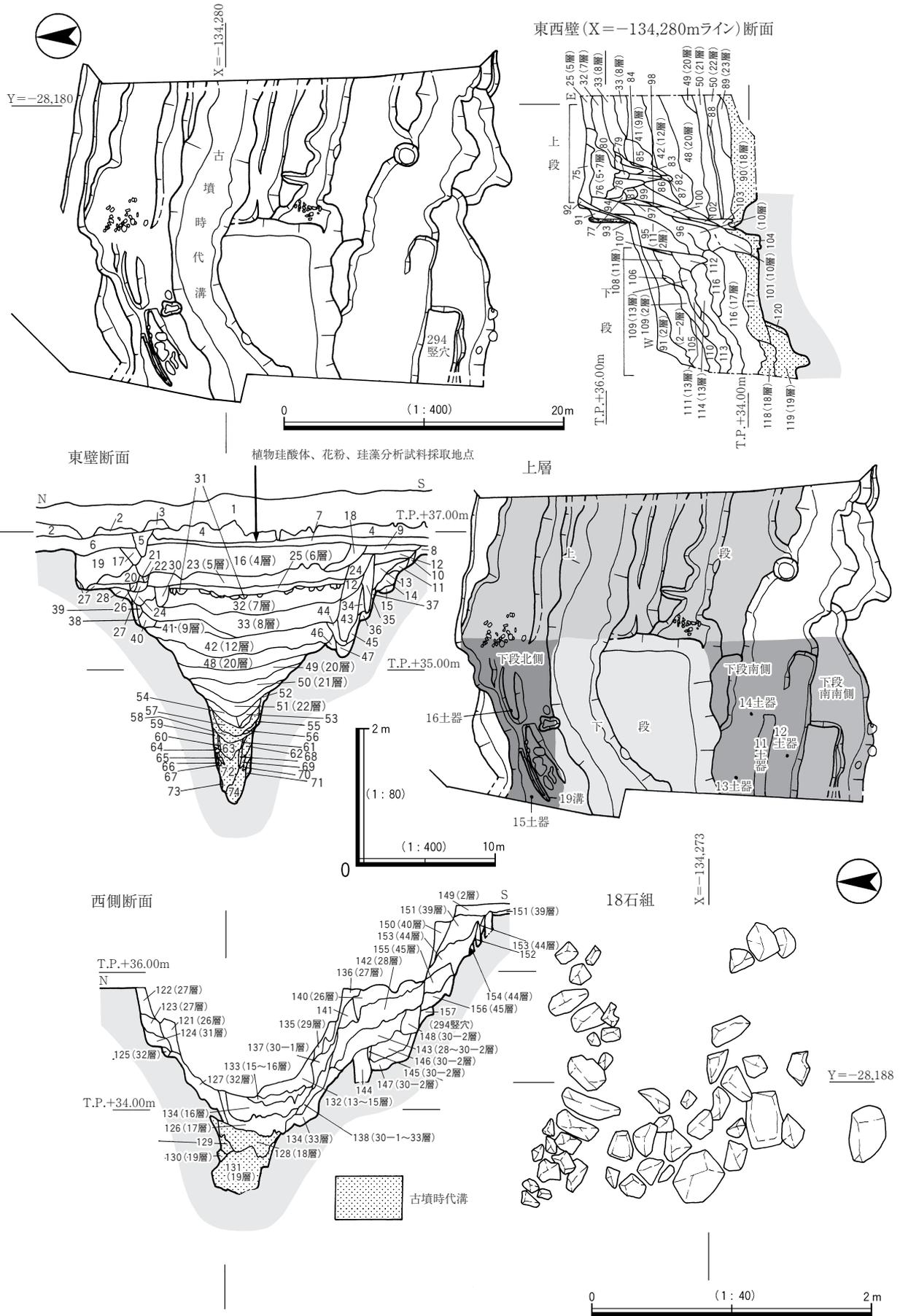


図295 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝 平・断面図/18石組 平面図

1. 暗褐色10Y R3/3~3/4シルト
2. 暗褐色10Y R3/3~3/4粗砂混シルト
3. オリーブ黒色7.5Y3/1粗砂混シルト
4. 黒褐色10Y R3/1粗砂混シルトに白色砂粒含む
5. オリーブ黒色7.5Y3/2~2/2シルト、砂、粗砂の互層
6. 黒褐色10Y R3/1~3/2細砂混シルトに粗砂含む
7. 暗灰黄色2.5Y4/2粗砂混シルト
8. 暗緑灰色7.5G Y4/1粗砂混シルトに白色砂粒含む
9. 灰オリーブ色5 Y5/2~5/3粗砂混シルト
10. 暗緑灰色10G4/1粗砂混シルト~粘土
11. 暗オリーブ灰色5 G Y4/1粗砂混シルトに青灰色シルトブロック、炭少量含む
12. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粗砂混シルト
13. オリーブ黒色10Y3/1~3/2粗砂混シルト
14. オリーブ灰色5 G Y5/1粗砂混シルトに青灰色シルト含む、植物根有り
15. 暗緑灰色10G Y4/1粗砂混シルト、植物根有り
16. オリーブ黒色7.5Y3/2粗砂混シルト、酸化鉄斑文有り (4層)
17. オリーブ黒色7.5Y3/1粗砂混細砂シルト
18. 灰オリーブ色5 Y5/2~4/2粗砂混シルト
19. 灰オリーブ色7.5Y5/2~4/2細砂混シルト、酸化鉄斑文有り
20. オリーブ黒色10Y3/1~3/2粗砂混シルト
21. オリーブ灰色10Y5/2細砂混シルト
22. オリーブ灰色10Y4/2粗砂混シルト
23. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粗砂混シルトに細砂含む (5層)
24. オリーブ灰色5 G Y5/1粗砂混シルトに白色砂粒含む
25. 灰オリーブ色5 Y4/2粗砂混シルト (6層)
26. 灰オリーブ色7.5Y5/2細砂
27. オリーブ黒色10Y3/1シルト混細砂に青灰色5 B5/1シルト~粘土ブロック含む
28. 29に類似、やや砂質
29. 灰色5 Y4/1粗砂混シルトに青灰色5 B5/1シルトブロック含む
30. 灰色10Y4/1粗砂混シルト
31. 暗灰黄色2.5Y5/2粗砂にシルトブロック含む
32. 灰色7.5Y4/1粗砂混シルト (7層)
33. オリーブ黒色5 Y3/1粗砂混シルト~粘土、酸化鉄斑文有り (8層)
34. 暗緑灰色10G4/1粗砂混シルト
35. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粗砂混シルト、白色砂礫との互層
36. 暗オリーブ灰色5 G Y3/1粗砂混シルト
37. 暗緑灰色7.5G Y4/1粗砂混シルトに青灰色シルトブロック含む
38. 灰色5 Y4/1粗砂・粘土混シルト、木根多し
39. 暗緑灰色10G Y4/1~3/1粗砂混シルト
40. 黒褐色10Y R3/2~2/2シルトに粗砂~細砂、腐植土、ブロック状に含む
41. 33に類似 F e少量、白色砂粒含む (9層)
42. 黒褐色2.5Y3/1~3/2粗砂混シルトに白色砂粒含む (12層)
43. 暗オリーブ灰色2.5G Y3/1粗砂混シルトにシルト~細砂層、青灰色シルトブロック含む
44. オリーブ黒色5 Y3/2粗砂混シルト
45. オリーブ黒色5 Y3/1粗砂混シルトに砂層入る
46. オリーブ黒色10Y3/1粗砂混シルト
47. 灰色7.5Y4/1細砂混シルトに白色砂層入る、小礫含む
48. 黒褐色2.5Y3/1粗砂混シルトに白砂粒含む、42に類似 (20層)
49. オリーブ黒色10Y3/1~3/2粗砂混シルトに青灰色シルトブロック、白色砂粒含む (20層)
50. オリーブ黒色10Y3/1粗砂混シルトに青灰色シルトブロック含む、49に類似 (21層)
51. 灰色~オリーブ黒色5 Y4/1~3/1粗砂混シルトに青灰色シルト・細砂ブロック、白色砂粒含む (22層)
52. 58に類似
53. 50に類似
54. オリーブ黒色5 Y2/2粗砂混シルトに白色砂粒含む
55. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粗砂混シルト
56. 暗灰黄色2.5Y5/2粗砂
57. 黒褐色10Y R2/2~2/3腐植土に木片含む
58. 黒褐色10Y R2/2砂質腐植土に白色砂粒含む
59. 青灰色5 B G5/1粗砂混シルト
60. 褐灰色10Y R4/1粗砂混シルト
61. 暗オリーブ灰色2.5G Y3/1粗砂混シルト~粘土
62. 緑灰色10G Y5/1粗砂混シルト
63. 57に類似
64. 灰黄褐色10Y R4/2シルト混粗砂
65. 黒褐色10Y R2/2腐植土に木片含む
66. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粗砂混シルトに65混入
67. 緑灰色10G5/1粗砂混シルト
68. 黒褐色2.5Y3/1粗砂混シルトに粗砂、粘土ブロック含む
69. 黄灰色2.5Y4/1粗砂混シルト
70. 暗緑灰色10G Y4/1粗砂混シルト
71. オリーブ灰色2.5G Y6/1~5/1砂に礫含む
72. 灰黄褐色~黄褐色10Y R5/2~5/8礫混粗砂に腐植土層入る
73. 暗緑灰色5 G3/1粗砂混シルト
74. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1礫混粗砂に灰色粘土、青灰色シルトブロック、腐植土、木片含む
75. 灰オリーブ色5 Y4/2粗砂混シルト、白色砂粒含む
76. 灰色5 Y4/1中砂混シルトに褐色10Y R4/4シルト、酸化鉄斑文多く含む (5・7層)
77. 暗青灰色10B G4/1中砂混シルト
78. 暗青灰色10B G4/1~3/1細砂混シルト、にぶい黄褐色10Y R5/3~5/4粗砂、灰白色10Y R8/1~7/1粗砂礫などやや互層堆積
79. 暗青灰色5 B G4/1中砂混シルト、77に対応か?
80. オリーブ黒色10Y3/2中~粗砂混シルト
81. 暗青灰色5 B G4/1~3/1粗砂混シルト、緑灰色5 G5/1粗砂やや互層堆積
82. 暗オリーブ灰色5 G Y4/1~3/1中砂混シルトやや砂質に灰白色7.5Y8/1~7/1粗砂礫が下層に堆積
83. オリーブ黒色5 Y3/2粗砂混シルトに青灰色粗砂混シルト、灰白色粗砂ブロック混入
84. オリーブ黒色5 Y3/1~3/2細砂混シルト
85. オリーブ黒色5 Y3/1粗砂礫混シルト、細砂礫小ブロック
86. オリーブ黒色10Y3/1~3/2粗砂混シルト、白色砂粒含む
87. 灰白色2.5Y8/1~灰黄色2.5Y6/2粗砂礫
88. 暗灰黄色2.5Y4/2粗砂礫
89. 黒色7.5Y2/1中砂混シルト、白色砂粒、青灰色シルト小ブロック含む (23層)
90. 89に類似 黒褐色7.5Y R2/2腐植土・灰白色粗砂など含む (18層)
91. オリーブ黒色7.5Y3/1粗砂混シルト (2層)
92. 暗オリーブ灰色5 G Y4/1中砂混シルト、白色砂粒含む
93. 暗緑灰色7.5G Y4/1粗砂混シルト、白色砂粒含む
94. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1粗砂礫混シルト
95. 暗青灰色5 B G4/1~3/1粘土混シルト、粗砂混入、根多い (11~2層)
96. 黒褐色2.5Y3/2粗砂礫混シルト (10層)
97. 暗緑灰色7.5G Y4/1中砂混シルト、青灰色5 B5/1粘質シルト、緑灰色7.5G Y5/1粗砂など西下がり互層堆積
98. オリーブ黒色7.5Y3/2粗砂混シルト
99. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1細砂混シルトに灰白色7.5Y8/1粗砂礫粒を含む
100. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1~3/1シルト混粘土、暗オリーブ灰色5 G Y4/1粗砂礫がやや互層堆積
101. 暗緑灰色7.5G Y4/1粗砂礫、細砂間層有り (10層)
102. オリーブ黒色10Y3/1粗砂礫混シルト、やや粘質
103. 灰色7.5Y4/1中砂混シルト、粗砂礫含む
104. オリーブ黒色10Y3/1粗砂混シルト、灰白色粗砂礫間層が西下がり堆積
105. オリーブ黒色10Y3/1粗砂混シルト微砂~シルトブロック多く混入、青灰色シルト小ブロック多く含む (2~2層)
106. 暗青灰色5 B G3/1中砂混シルト
107. 暗緑灰色5 G4/1中砂混シルト、木片 (根) 多数含む
108. 暗オリーブ灰色2.5G Y3/1粗砂礫混シルト、白色砂・青灰色シルト小ブロック含む (11層)
109. 暗オリーブ灰色2.5G Y3/1シルト、灰色10Y4/1粗砂の間層有り (13層)
110. 105に類似 腐植土多く含む
111. 109に類似 やや粘質 (13層)
112. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1~3/1粗砂混シルト、白色粗砂礫ブロック含む
113. 暗オリーブ灰色2.5G Y3/1シルト混粘土
114. 暗オリーブ灰色5 G Y3/1中砂混シルト、白色砂ブロック・炭化合物含む、粘土間層有り (13層)
115. オリーブ黒色7.5Y3/2粗砂混シルト (14層)
116. 暗オリーブ灰色2.5G Y3/1シルト混粘土、暗緑灰色5 G4/1細砂、オリーブ灰色2.5G Y6/1中砂など互層堆積 (17層)
117. オリーブ黒色5 Y3/1粘土混シルト、灰オリーブ色5 Y5/2粗砂礫が互層堆積
118. オリーブ黒色5 Y3/1~3/2粘土混シルト、腐植土含む (18層)
119. 赤黒色2.5Y R2/1~1.7/1シルト混粘土、有機質粘土多く含む (19層)
120. 暗オリーブ灰色2.5G Y3/1粗砂混シルト、有機質含む
121. 黄灰色2.5Y6/1白色粗砂混シルト (26層)
122. 灰オリーブ色5 Y5/2白色粗砂混シルト (27層)
123. 灰色5 Y5/1白色粗砂混シルト (27層)
124. 黄灰色2.5Y5/1白色粗砂混シルト (31層)
125. 黄灰色2.5Y4/1シルト (32層)
126. 灰オリーブ色7.5Y6/2シルトブロック (径10cm) 間に灰白色7.5Y7/2~7/1粗砂入る (17層)
127. 黄灰色2.5Y4/1~5/1白色粗砂、中砂混シルト (32層)
128. 黒褐色2.5Y3/1シルト~粘土 (18層)
129. 灰色5 Y4/1~10Y5/1白色粗砂混シルト
130. 灰色5 Y4/1~10Y5/1白色粗砂混シルト (19層)
131. 灰黄色2.5Y7/2粗砂に灰色5 Y4/1シルト、緑灰色10G Y6/1シルト (地山) ブロック (径5cm) 含む (19層)
132. にぶい黄褐色2.5Y6/4白色粗砂混シルト、下に灰白色2.5Y7/1極細砂まき込む (13~15層)
133. 褐灰色10Y R4/1シルトブロックに緑灰色10G5/1シルト (地山) ブロック (15~16層)
134. 灰色10Y5/1シルト~粘土ブロック間に灰白色2.5Y7/1細~粗砂含む (16層)
135. 黄灰色2.5Y5/1白色粗砂混シルト木片含む (29層)
136. 灰色10Y5/1シルト木片含む (27層)
137. 緑灰色10G Y5/1白色粗砂混シルト (30~1層)
138. 緑灰色10G Y5/1白色粗砂混シルトに灰白色7.5Y7/1粗砂入る (30~1~33層)
139. 黄灰色2.5Y4/1シルトに焼土ブロック (径7cm)、緑灰色10G Y5/1シルト (地山) ブロック含む (33層)
140. にぶい黄褐色10Y R5/3シルト、土器片多く含む (26層)
141. 灰色10Y6/1白色粗砂混シルト、木片含む
142. 黄灰色2.5Y5/1白色粗砂混シルト (28層)
143. 灰色7.5Y6/1~5/1白色粗砂混シルト、南半に炭化物、焼土ブロック (28~30~2層)
144. 灰色5 Y5/1白色粗砂混シルト、灰白色ラミナ入る (454井戸)
145. 灰色5 Y5/1白色粗砂混シルト、灰白色ラミナ入るにオリーブ黄色5 Y6/3~6/4白色粗砂混シルト、土器片含む (30~2層) 入る
146. オリーブ黄色5 Y6/3~6/4白色粗砂混シルト、土器片含む (30~2層)
147. 灰オリーブ色5 Y6/2シルト (30~2層)
148. 灰色7.5Y5/1白色粗砂混シルト、炭化物、焼土ブロック (径3~5cm) 含む (30~2層)
149. 明黄褐色10Y R6/6白色粗砂混シルト、土器片多く含む (2層)
150. 浅黄色2.5Y7/4白色粗砂混シルト、土器片多く含む (40層)
151. にぶい黄褐色10Y R5/3白色粗砂混シルト、土器片多く含む (39層)
152. 灰黄褐色10Y R4/2白色粗砂混シルト、土器片多く含む
153. にぶい黄褐色10Y R4/3白色粗砂混シルト (44層)
154. 灰黄褐色10Y R4/2白色粗砂混シルト、土器片多く含むにぶい黄褐色10Y R4/3白色粗砂混シルト (44層) 入る
155. 灰色10Y5/1シルト~粘土、上位に管状酸化鉄入る (45層)
156. 灰オリーブ色7.5Y5/2シルト~粘土 (45層)
157. 灰色5 Y4/1シルト~粘土、炭化物、炭材多く含む

図296 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝 土色注記

は掘削順に付けた。各層はやや西に下降するものの基本的に水平堆積である。下段と上段の境には11層青色シルト、10層砂層が厚く堆積しており、棚田造営当初から下段と上段の区画となっていたと考えられる。

上段は南北22m、東西10mにわたり検出した区画で、南肩部に杭が打ち込まれる。灰色～灰黒色シルトが主体であり、4～6層が中世末以降の耕土、7～23層が中世の耕土である。4層が黄色シルトブロック、21層は青色粘土ブロックが主体であり床土とみられる。12-1層除去後に5溝を、12-2層、20層を除去する段階で6溝、7溝、18石組を検出した(図295)。5～7溝は区画境の溝、18石組は上段と下段の境にある谷に面した水場とみられる。5溝から土師器皿、瓦器が、6溝から土師器、瓦器、須恵器甕・鉢が出土した。23層の下層は古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝(18・19層)である。

下段南南側は東西12m、南北2～5mにわたり検出した区画である。上層が茶色シルト、下層が灰色シルトであり、2層が中世末以降の耕土、39・44層が中世の耕土、40～43層は棚田の段落ちの堆積である。39・44層除去後面で1大溝南肩部では中世の遺構を検出し、45層除去後、294竪穴を検出した。

下段は一辺10～12mのやや西側がひろがる方形区画であり、周囲に杭が打ち込まれる。茶色細砂混シルト～粘土が主体であり、1～2-2層が近世以降の耕土、その下層の下段南側から一部ひろがる3-2層およびその下層の13～16層が中世の耕土である。17層からは平安時代後期の土師器が出土した。2-2層および17層は青色粘土ブロックが主体であり、床土とみられる。17層の下層は古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝(18・19層)である。

下段南側は東西12m、南北6～10mにわたり検出した区画である。26層の上層には3-3-2層が堆積する。26～28層は下段南側にひろがる中世の耕土である。3層では、東西方向にはしる焼土ブロックおよび土器の集積を検出し、これを11土器とした。11土器の南側、段落ち下で、3-2層から26層にかけて検出した土器の集積を12土器とした。11土器の北側で27層において検出した土器の集積を13土器とした。下段への肩部には27～33層が斜面堆積する。30-2層は下段南側の南半部から微高地にかけての斜面堆積であり、その北側では中世の遺物が、南側では古墳時代の遺物が出土した。本層中の土器の集積を14土器とした。下段南南側から下段南側へ落ちる斜面において、294竪穴を検出していることから、30-2層の古墳時代の遺物はこれに伴っていたものが、中世の耕作で攪拌されたものとみられる。

下段北側は東西12m、南北4～7mにわたり検出した区画である。上層が灰オリーブ色シルト、下層が黄灰色シルトであり、26～32層が中世の耕土である。段落ち下の26層において検出した西側の土器の集積を15土器、東側の土器の集積を16土器とした。31・32層除去後の基盤層上面で、段落ち下に沿ってはしる19溝を検出した。19溝は、幅50cm、深さ14cmである。19溝からは土師器皿、瓦器椀が出土した。

以上の中世の棚田を掘削した後、最下層において東から西へとやや蛇行してはしる溝を検出した。幅3～5m、肩部からの深さ1.5m、断面V字状であり、上層18層が黒色粘土、下層19層が砂層である。18～19層からは古墳時代中期～飛鳥時代初頭の土師器、須恵器がコンテナ5箱程度出土した。

また、1層からセンダン、2層からアカマツ、19層からブドウ属、エゴノキ、サデグサ、ノブドウ、モモ、コナラ属の大型植物遺体が出土した。また、1層からセンダン、2層からアカマツ、19層からブドウ属、エゴノキ、サデグサ、ノブドウ、モモ、コナラ属の大型植物遺体が出土した。

18石組(図295) 1大溝の北肩部において20層を除去する段階で6溝、7溝とともに検出した。東西2m、南北2.8mの範囲に直径10～30cmの礫がほぼ水平にひろがる。北側は東西方向に2m石列がのび、北面がほぼそろい、北西隅部では四段の石積み認められる。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質三足釜が

出土した。上段と下段の水田の境にあたり、谷に面した水場とみられる。

2 流路 (図297~299) 南辺に沿って約22mにわたり北肩部を検出した。北肩部から東西方向の中世水田である平坦面が段状に落ち、段下には溝が伴う。上層の中世水田を除去後、下層で東西方向の古墳時代溝を検出した。下層の古墳時代溝は調査地の南端沿いで、北肩部を幅2~3mの狭い範囲で検出した。流路の中心は南接する現在の市道の下になるものとみられる。

上層(2~12層)はほぼ水平堆積であり、12世紀末~13世紀初頭前後の耕土とみられ、1調査区でみられた成果同様、南側へ向かって下降する谷を棚田として利用したものと考えられる。埋土の状況は東半と西半でやや異なっており、南北方向の溝や畦畔など明らかな遺構はないものの、水田区画が異なる可能性がある。2~12層のうち、8層は砂層で洪水砂とみられ、10層はブロック土で整地層、12層は青灰色シルト層で床土とみられる他は、灰色粘土を主体とする耕土層が連続する。11層までは陶器片が目立ち、12世紀末~13世紀初頭前後の遺物が主体であるが、12層では11世紀末~12世紀前半の瓦器碗が混在する。12層からは火打ち金が出土したほか、東半部の12層では溝状遺構の肩部から下駄が出土した。

中層(13~14層)はやや南へ下降するなだらかな斜面堆積である。13層はオリーブ灰色細砂混シルト、14層は暗オリーブ灰色細砂混シルトであり、両層とも12世紀の瓦器碗をはじめとする遺物が出土しており、14層は古墳時代中期~飛鳥時代初頭の遺物が混在する。13層からは、鉄鏃、鉄滓が出土し、14層と15層の層境から下駄が出土した。

下層(15~20層)は南へ下降する斜面堆積である。15層はオリーブ黒色細砂混シルトに炭化物を含み、以下の層も黒色細砂混シルトに炭化物、木片を含む層が主体である。下層は古墳時代中期~飛鳥時代初頭の遺物が出土しており、土師器高杯・甕、須恵器杯・高杯・器台・甕などが多量に出土した。16層以下では須恵器を含むものの土師器が主体であり、特に土師器高杯が多く出土した。下層では、木片を多く含む直径20cm前後の丸太材が出土する他、17層からは木錘二個体およびナスビ形木製品、面取りを施し穴が穿たれた部材が出土し、18層以下の腐植土層からは原色に輝いた光沢を保持している昆虫類の細片や、種子、葉などの植物遺体が出土した。

17層中では、丸太材および遺物が集中して出土したことから、出土状況を記録した。丸太材は長さ70cm~1m、直径10~20cmのものが主に南北方向に出土した。縦方向に突き刺さった状態の丸太材は東半中央部で1本認められた。土師器・須恵器・木製品がこれら丸太材の間に散在する状態で出土しており、西端では直径1mの範囲で土師器が集中して出土した。丸太材の集中から、何らかの護岸施設の存在が考えられるが、材の組み合わせや連続して打設した痕跡などは認められず、断定にはいたらない。

また、11層からアカマツ、モモ、12~13層からヒメビシ、13層からアカマツ、15層からモモ、17層からスモモ、モモ、ヤマブドウ、カナムグラ、アサ、ノブドウ、16~20層からアラカシ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ、コナラ属、ツブラジイ、シイノキ属、サカキ、エゴノキ、ハクウンボク、エゴノキ属、ミクリ属、ホタルイ属、ミゾソバ、サデクサ、ボントクタデ、ヤナギタデ、ヒツジグサ、ドングリ属またはセリ属、イヌコウジュ属またはシソ属の大型植物遺体が出土した。

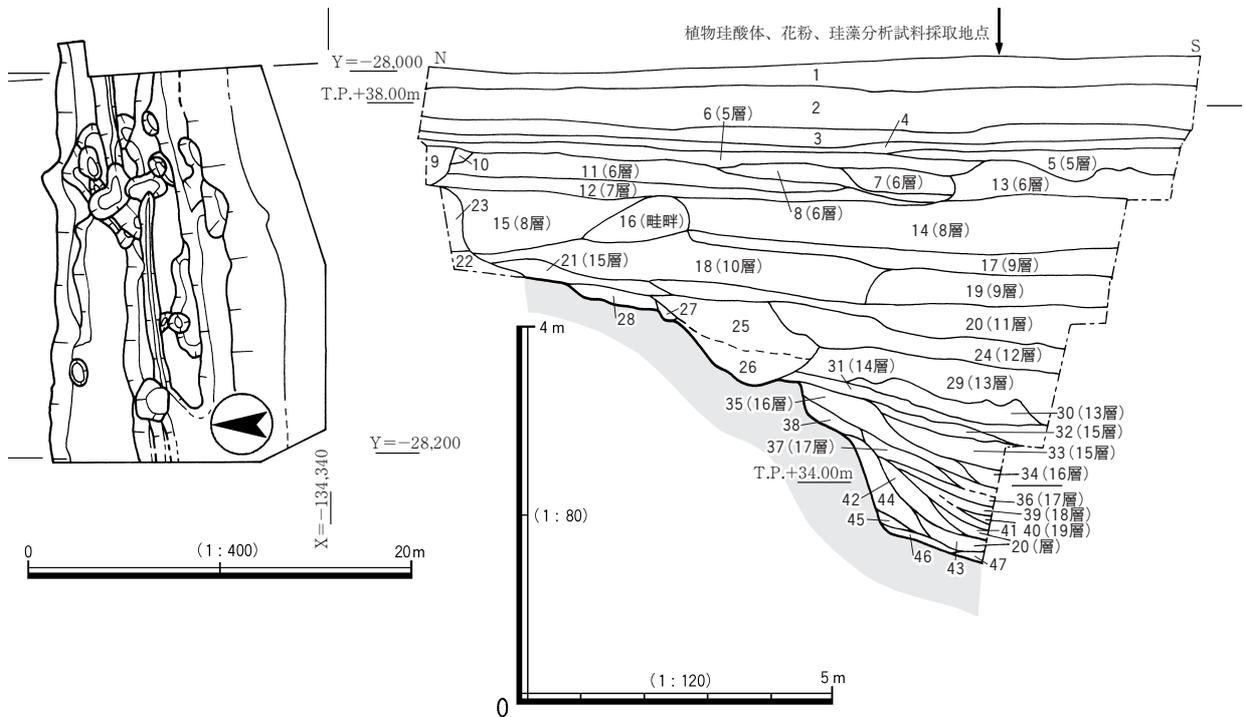
294 竪穴 (図300) 1 大溝南肩部の西端に位置する。中世水田掘削後、南辺4.9m、東辺30cm、西辺1.0mを検出した。深さは30cmである。埋土は3層であり、上層は暗灰黄色細~中砂混シルトに小礫含む、中層は灰色細砂混シルトに小礫含む、下層はオリーブ黒色極細~中砂混シルトに炭化物を含む。基盤層は灰色細砂混シルト~粘土である。上・中層からは土師器、須恵器杯蓋の天井部、石器が、下層からは土師器、須恵器が出土した。下層は床土とみられるが、壁溝周辺では炭化物および壁溝埋土が混在してお

り、下層上面では壁溝を検出することはできなかった。壁溝を明瞭に検出できたのは下層除去後の面である。

上・中層を除去した上面で、炭化材、土器のひろがりを認めた。炭化材は直径5cm前後の棒状のものが南辺から西辺に沿ってひろがり、幅10cm前後の板状のものが南辺から北側に倒れたような状態だった。板状の炭化材は羽目板の可能性が考えられる。遺物は西半部で炭化物の上面において正位で出土しており、焼失後に置かれたものと考えられる。土器2・3・5・6・7は土師器甕であり、土器7は甕の上半部が正位に置かれ、中にミニチュア土器が一個体入った状態で出土した。土器1・4は器種不明(図352-305・306)。土師器高杯の杯部または二重口縁壺の口縁部に類似するが、器厚が厚く、やや内湾する点が異なる。土器4は外面が一部黒色である。

炭化材、土器および下層を除去後、壁溝を検出した。壁溝は幅10~20cm、深さ8cm前後である。東端では壁溝にかかるピットを二カ所検出した。

竪穴住居の北側は、中世の棚田造営のため30~40cm前後の比高をもって一段落ち、下降する斜面となっており、柱穴の痕跡はわからなかった。古墳時代中期~飛鳥時代初頭に位置付けられる。1大溝と



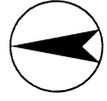
1. 黒褐色2.5Y3/2細~粗砂混シルトに小~大礫含む
2. ぶい黄褐色10Y R5/3~5/4粗砂混シルトに礫含む
3. オリーブ黒色7.5Y3/2細砂混シルトに粗砂ブロック含む
4. 灰色7.5Y4/1細砂混シルトに粗砂含む
5. 灰色7.5Y5/1~4/1細砂混シルトに微~粗砂ブロック含む (5層)
6. 灰色5 Y5/1~4/1微~細砂混シルトに微~粗砂ブロック含む (5層)
7. 灰色5 Y4/1微~細砂混シルト (6層)
8. 灰色10Y5/1~4/1微砂に細~粗砂層入る (6層)
9. 灰黄色2.5Y7/2~6/2細砂~粗砂
10. 灰色5 Y4/1細~粗砂混シルトに微砂ブロック多く含む
11. 灰褐色7.5Y5/1微~細砂混シルトに粗砂含む、酸化鉄斑文有り (6層)
12. 灰褐色5 Y4/1細~粗砂混シルトに微~粗砂ブロック含む (7層)
13. 灰黄色2.5Y7/2~6/2細砂に粗砂含む (6層)
14. 灰白色10Y8/1~7/1微~細砂に粗砂含む (8層)
15. 14に類似 (8層)
16. オリーブ灰色10Y5/2~4/2シルト~粘土、灰オリーブ色7.5Y6/2~5/2細砂の互層 (畦畔)
17. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1~3/1シルト~粘土 (9層)
18. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1~3/1細~粗砂混シルト (10層)
19. 暗オリーブ灰色2.5G Y4/1~3/1細~粗砂混シルト (10層)
20. 暗オリーブ灰色5 G Y4/1~3/1粗砂混シルトに細砂含む (11層)
21. 灰褐色10Y4/1粗砂混シルト~粘土 (15層)
22. 暗緑灰色5 G4/1微砂混シルト~粘土
23. 16に類似 シルト多し
24. 暗オリーブ灰色2.5G Y3/1細砂混シルト (12層)
25. オリーブ灰色10Y4/2細~粗砂混シルト
26. 青灰色5 B G6/1シルトに粗砂ブロック含む
27. 暗緑灰色7.5G Y4/1細砂混シルト~粘土
28. 26に類似 粗砂やや多し
29. オリーブ黒色10Y3/2細砂混シルトに灰白色粗砂、炭化物含む (13層)
30. 黒褐色2.5Y3/2細砂混シルトに灰白色粗砂、炭化物、青灰色シルトブロック含む (13層)
31. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3シルト混細砂 (14層)
32. 黒褐色2.5Y3/1細~粗砂混シルト (15層)
33. 黒褐色5 Y R2/1シルト (腐植土) に微~細砂、木片含む (15層)
34. 33に類似 灰白色粗砂少量含む (16層)
35. オリーブ黒色7.5Y2/2細~粗砂混シルト腐植土、灰白色粗砂、小ブロック含む (16層)
36. 33に類似 木片多く含む、やや粘質 (17層)
37. オリーブ黒色7.5Y3/1~3/2腐植土混細砂、粗砂含む、土器包含 (17層)
38. 暗緑灰色5 G4/1細~粗砂混シルト
39. オリーブ黒色7.5Y2/2細~粗砂混シルト (腐植土) (18層)
40. 灰オリーブ色7.5Y6/2~5/2細~粗砂 (19層)
41. 灰褐色10Y4/1細~粗砂混シルト (20層)
42. 暗緑灰色5 G4/1~3/1細~粗砂混シルト
43. オリーブ黒色7.5Y2/2細~粗砂混シルト~粘土に木片多く含む (20層)
44. 暗緑灰色10G Y4/1~3/1細~粗砂混シルト
45. 青灰色10B G6/1~5/1細~粗砂混シルト
46. 暗オリーブ灰褐色2.5G Y4/1~3/1粗砂混シルトに微砂ブロック、炭化物、木片含む
47. 灰オリーブ色7.5Y6/2~5/2細~粗砂

図297 有池遺跡03-2-3調査区 2流路 断面図

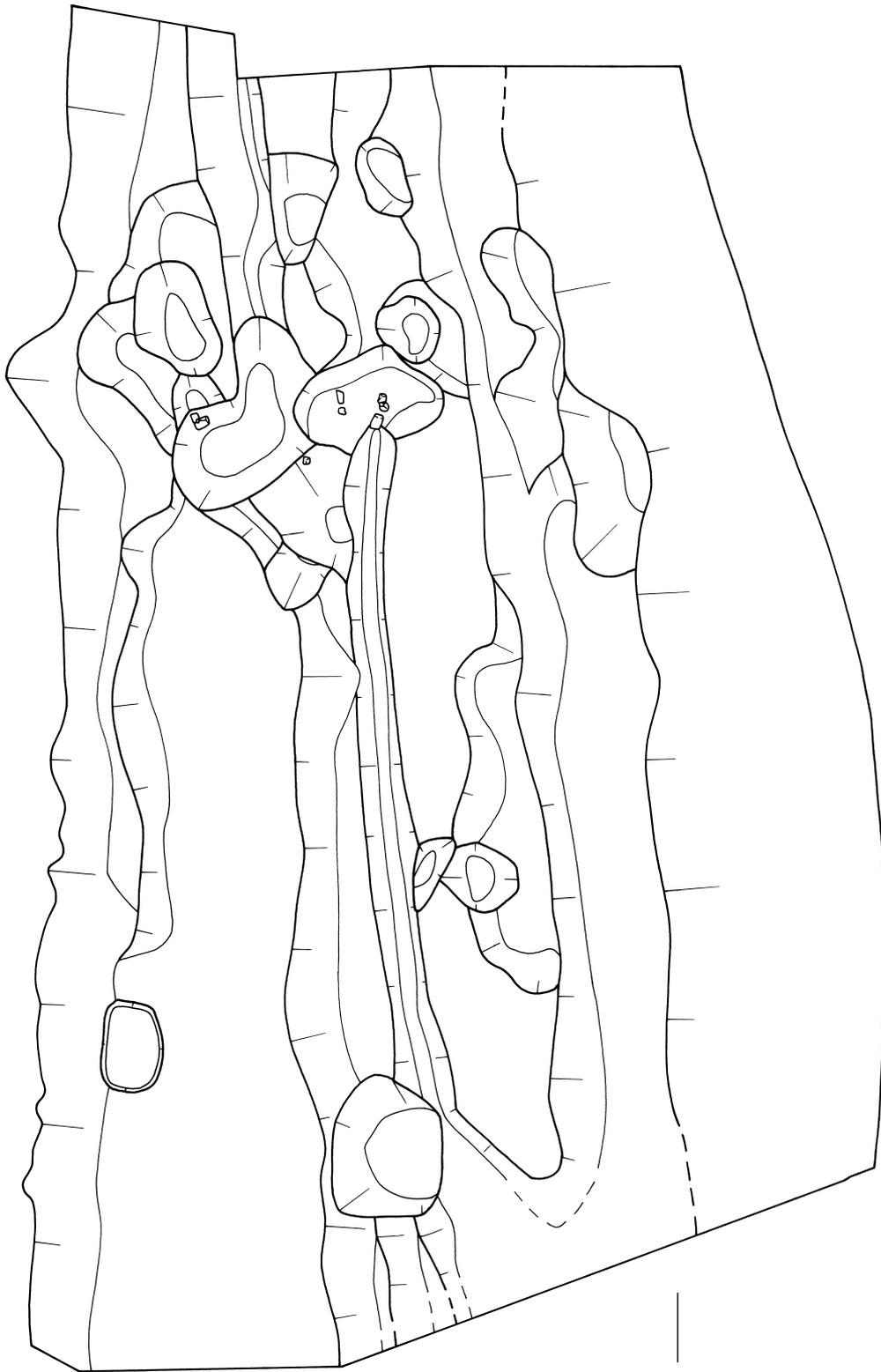
Y=-28.180

X=-134.325

X=-134.335



Y=-28.200



0 (1:100) 5m

图298 有池遺跡03-2-3調査区 2流路北肩部 平面図

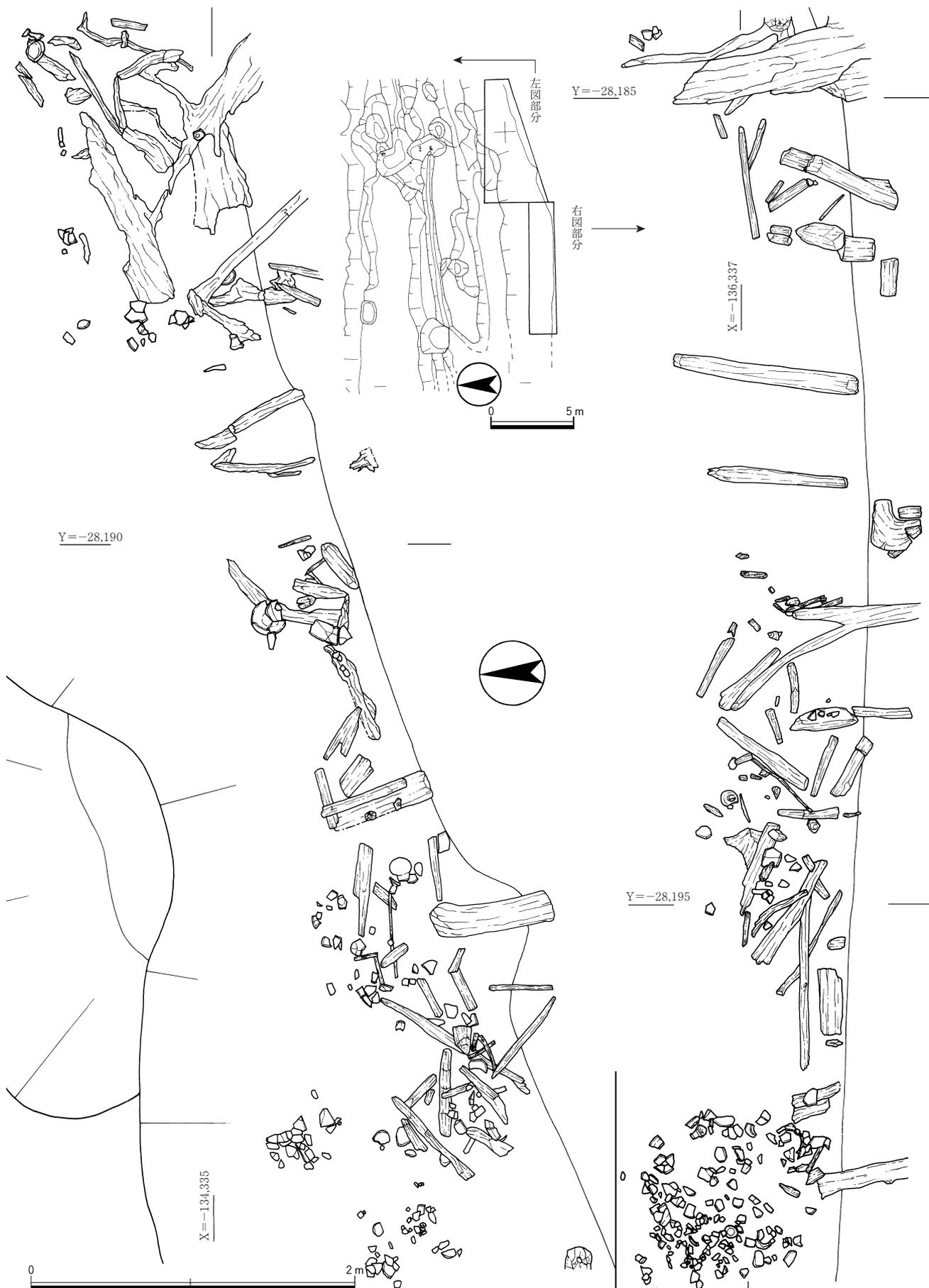
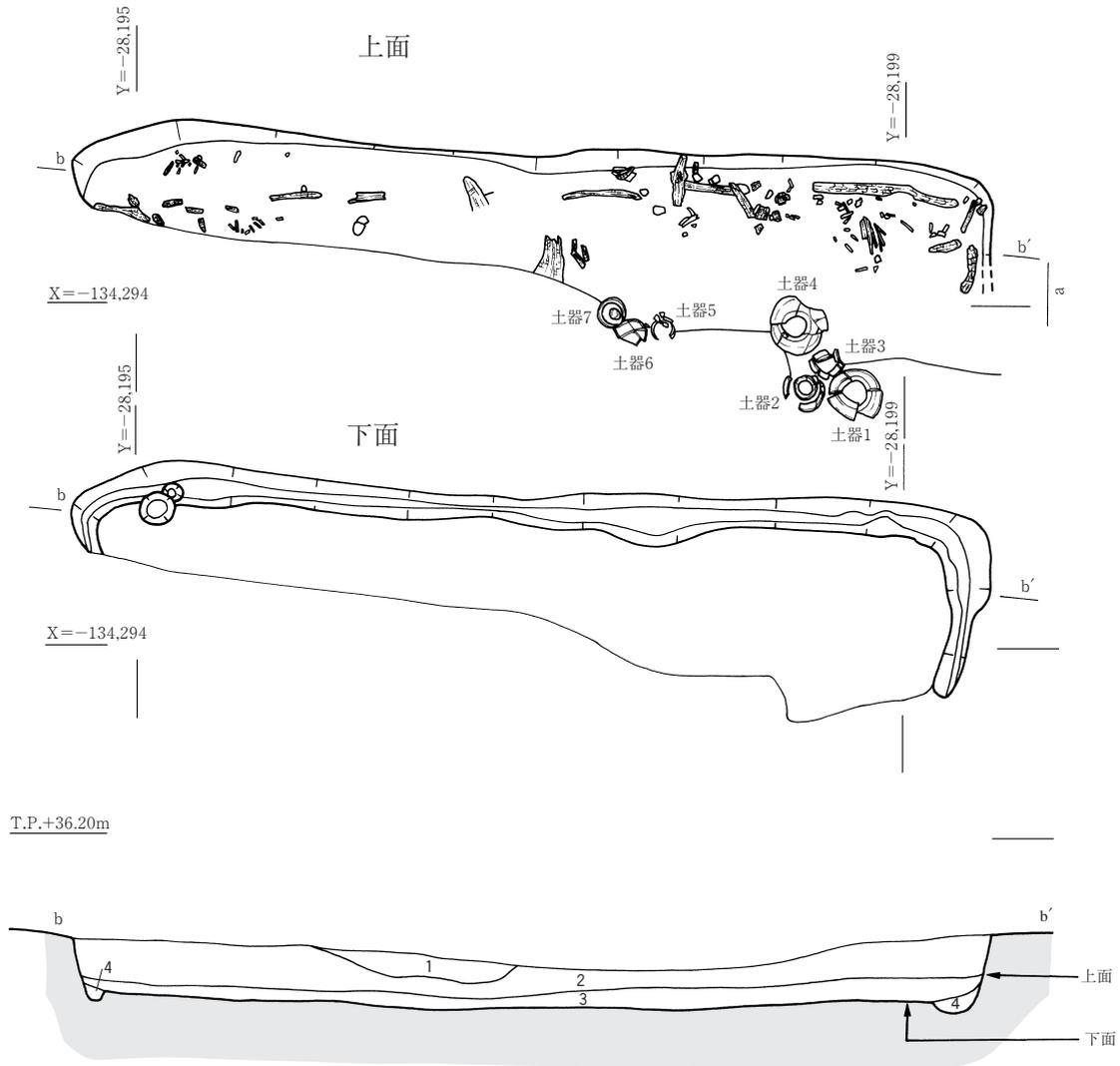


图299 有池遺跡03-2-3調査区 2流路 遺物出土狀況図



1. 暗灰黄色2.5Y4/2細～中砂混シルトに小礫含む、酸化鉄斑文有り
2. 灰色7.5Y4/1細砂混シルトに小礫含む、上部に酸化鉄斑文有り
3. オリーブ黒色5 Y3/2極細～中砂混シルトに小礫、炭化物含む
4. オリーブ黒色7.5Y3/2細～中砂混シルトに炭化物含む

図300 有池遺跡03-2-3調査区 294竪穴 平・断面図

した谷の斜面地に構築された竪穴が、中世の棚田造営による削平を免れて、その端部のみが残存したものと考えられる。竪穴出土遺物は、1大溝最下層の古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝出土遺物の範疇に含まれることから、1大溝最下層の溝と竪穴は一時期併存したものとみられる。溝出土遺物は多量であることから、より多くの竪穴住居を含む集落域のひろがりが見込まれるが、03-2調査地においては、谷底部の溝のほか顕著な古墳時代中期～飛鳥時代初頭の遺構は本遺構のみである。

建物2 (図301) 微高地下段の南側に位置する。南北1間×東西2間であり、主軸方向はほぼ正方位にのる。柱間は南北が3.6～3.8m、東西が3.1～3.8mと建物とするには大きいため、柱穴列の可能性も十分に考えられるが、79・122土坑と関連する可能性もあり建物とした。ピットは、直径約20～35cm、深さ5～15cmである。埋土はいずれも2層類似土に地山ブロックを含む。遺物は瓦器が出土した。

79・122土坑 (図301) 微高地下段の南側、建物2の東側に位置する。79土坑は長辺3.4m、短辺2.7mの隅丸方形であり、南東隅部から南へ長さ1.5m、幅70cmの122土坑が溝状にのびる。両土坑の断面は浅いU字状である。79土坑は深さ25cm、122土坑は深さ16cm。埋土は、上層が共通し、にぶい黄褐色礫混シルト、下層が79土坑は暗褐色シルトに地山ブロック、焼土、炭化物を含む、122土坑は褐灰色～灰黄褐色礫混シルトである。遺物は79土坑から土師器、瓦器が、122土坑から土師器皿、瓦器椀、青磁椀が出土した。焼土、炭化物が多くみられ、建物2に伴う施設の可能性が考えられる。122土坑は13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。

柱穴列5 (図302) 微高地下段の北側に位置する。円形のピットが7.2mにわたり3基(140・412・398ピット)並ぶ。軸はほぼ南北方向である。柱穴間は3.0～4.2m、大きさは、直径45～55cm、深さ約15～35cmである。埋土は、にぶい黄褐色～灰黄褐色シルトである。遺物は土師器・瓦器が出土した。

柱穴列6 (図302) 微高地下段の北側に位置する。円形のピットが5.0mにわたり3基(番号なし・421・132ピット)並ぶ。軸はほぼ南北方向である。柱穴間は2.4～2.6m、大きさは、直径15～35cm、深さ約5～20cmである。埋土は、にぶい黄褐色細砂混シルトである。遺物は土師器・瓦器が出土した。

柱穴列7 (図302) 微高地下段の中央に位置する。円形、楕円形のピットが7.0mにわたり4基(382・373・333・65ピット)並ぶ。軸はほぼ南北方向である。柱穴間は2.2～2.4m、大きさは直径35～75cm、深さ約10～30cmである。埋土は、にぶい黄褐色～灰黄褐色シルトである。遺物は瓦器が出土した。

柱穴列8 (図302) 微高地下段の中央よりやや南側に位置する。円形のピットが6.5mにわたり4基〔106(1調査区)・61・60・367ピット〕並ぶ。軸はほぼ東西方向である。柱穴間は約2.2m、大きさは、直径25～35cm、深さ約15～30cmである。埋土は、にぶい黄褐色～褐色細砂混シルトである。遺物は61ピットからは焼土塊がまとまって出土し、他のピットからは瓦器が出土した。

柱穴列9 (図301) 79土坑の東端に位置する。円形のピットが3.7mにわたり3基(309・72・121ピット)並ぶ。軸はほぼ南北方向である。柱穴間は1.7～2.0m、大きさは直径25～30cm、深さ10～25cmである。埋土は、2層類似土に地山ブロックを含む。遺物は土師器・瓦器が出土した。

137ピット (図303) 微高地下段の北側に位置する。長径約75cm、短径約62cmの楕円形であり断面は浅いU字状である。深さは20cm。埋土は、にぶい黄褐色細砂混シルトである。遺物は瓦質羽釜が出土した。

143ピット (図303) 微高地下段の北側に位置する。直径約30cmの円形であり、断面は浅いV字状である。深さは45cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルトに炭化物を含む。遺物は土師器・瓦器が出土した。

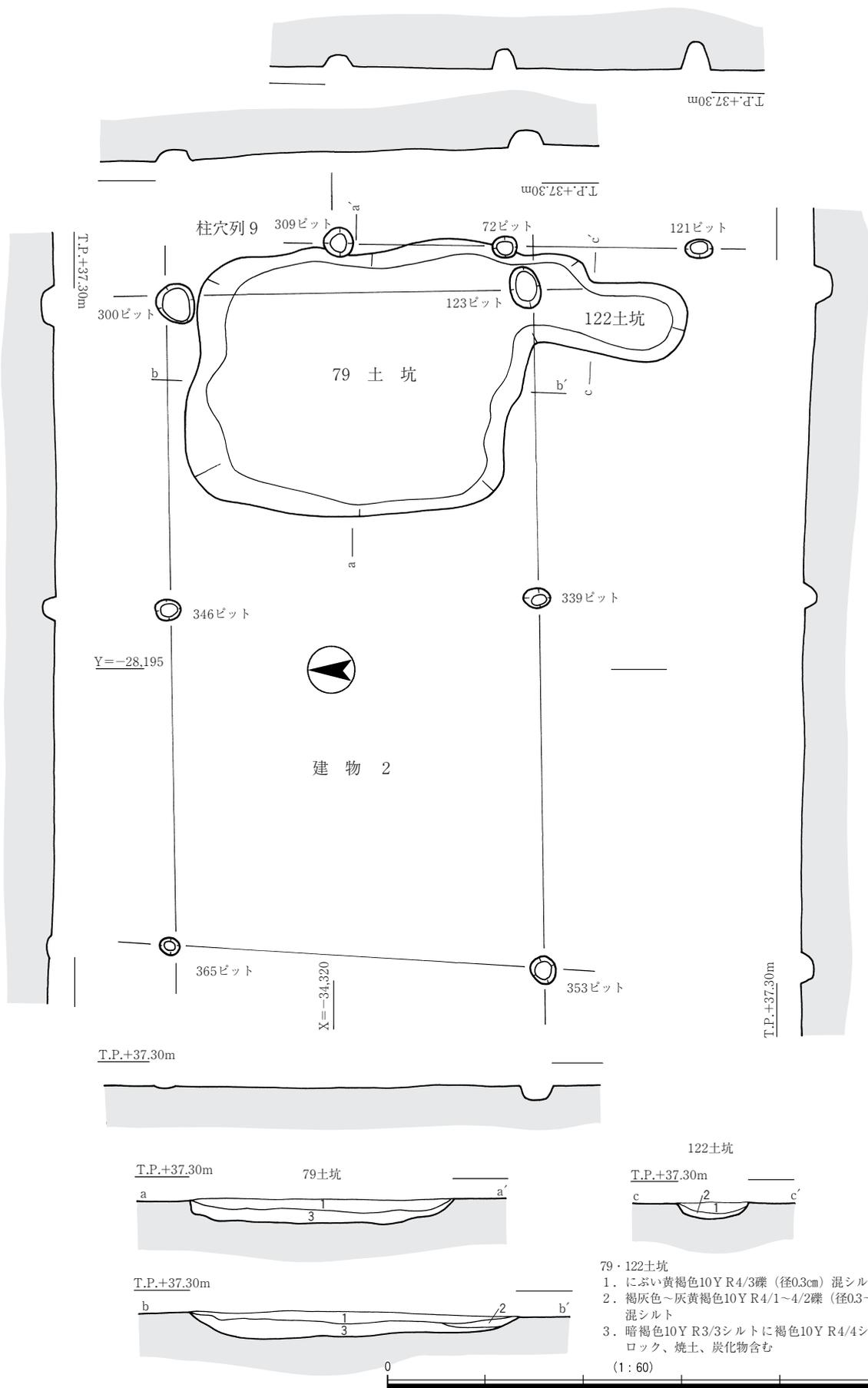
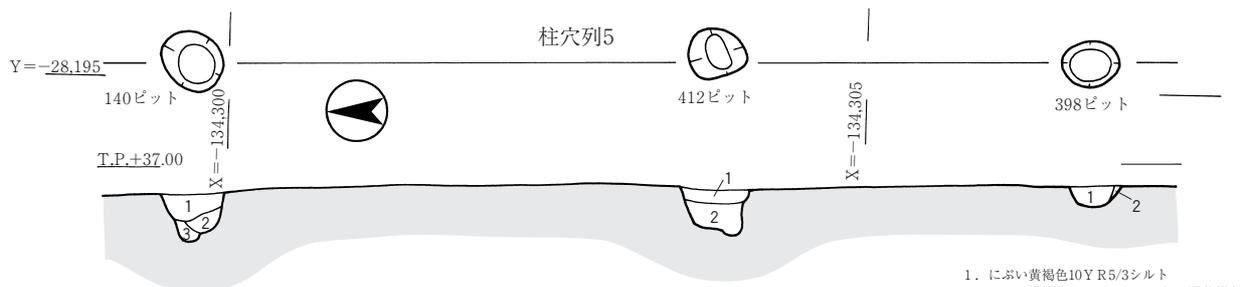


図301 有池遺跡03-2-3調査区 建物2・柱穴列9・79土坑 平・断面図

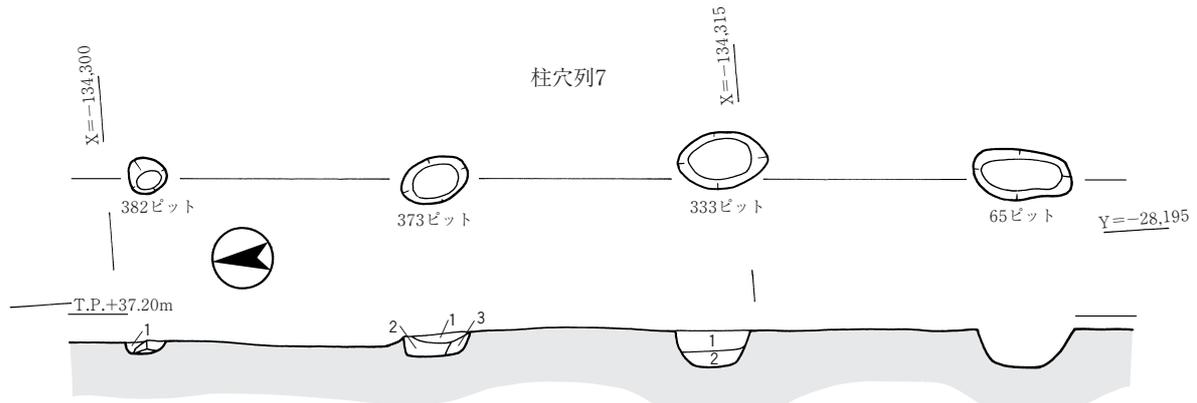
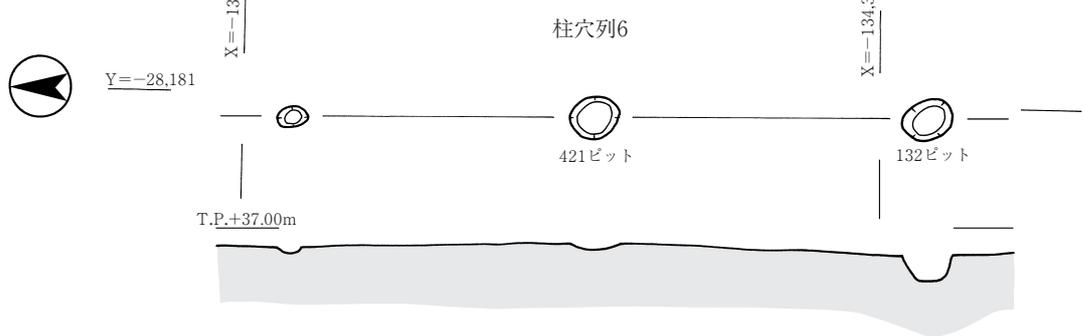
- 446ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約45cmの円形であり、断面はU字状である。深さは22cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がにぶい褐色シルトに地山ブロック、炭化物を含む。上層下面で扁平な石が認められるほか遺物は出土していない。
- 146ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約40cmの円形であり、断面はU字状である。深さは35cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト、下層がにぶい黄褐色シルトである。遺物は瓦器・土師器が出土した。
- 152ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約47cmの円形であり、断面はV字状である。深さは41cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルト～粘土に地山ブロックを含む。遺物は瓦器、須恵器が出土した。
- 433ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約34cmの円形であり、断面はU字状である。深さは21cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルト～粘土に地山ブロックを含む。遺物は土師器・瓦器が出土した。
- 155ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約40cmの円形であり、断面はU字状である。深さは26cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルトに地山ブロックを含む、下層がにぶい黄褐色シルトである。遺物は土師器皿、瓦器が出土した。13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。
- 443ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約27cmの円形であり、断面はコ字状である。深さは41m。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がにぶい黄褐色粘性のあるシルトに地山ブロックを含む。遺物は出土していない。
- 154ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約37mの円形であり、断面はU字状である。深さは35cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がにぶい黄褐色粘性のあるシルトに地山ブロックを含む。遺物は土師器が出土した。
- 159ピット（図303） 微高地下段の北側、168土坑の西肩部に位置する。長径66cm、短径50cmの楕円形であり、断面は浅いU字状である。深さは23cm。埋土はにぶい黄褐色シルトに炭化物を含む。遺物は土師器、瓦器が出土した。
- 424ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約43cmの円形であり、断面はU字状である。深さは28cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層が灰黄褐色シルトに炭化物を含む。上層と下層の境から平たい石が出土した。他に遺物は出土していない。
- 423ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約30cmの円形であり、断面はU字状である。深さは26cm。埋土は、にぶい黄褐色シルトであり、石が2個体上位から出土した。他に遺物は出土していない。
- 157ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約45cmの円形であり、断面はU字状である。深さは28cm。埋土は、灰黄褐色シルトであり、石が上位から出土した。他に瓦器が出土した。
- 158ピット 微高地下段の北側に位置する。長径1.04m、短径60cmの楕円形であり、断面は北西側が深いU字状である。深さは36cm。埋土は、灰黄褐色シルトである。遺物は土師器皿が出土した。
- 417ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約24cmの円形であり、断面はU字状である。深さは15cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色粗砂混シルトである。遺物は出土していない。
- 418ピット（図303） 微高地下段の北側に位置する。直径約52cmの円形であり、断面は二段に落ちるU字状である。深さは31cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色粗砂混シルト、下層がにぶい黄褐色シルトであ



1. におい黄褐色10Y R5/3シルト
2. 灰黄褐色10Y R4/2シルト
3. 灰黄褐色10Y R4/2シルトに明黄褐色10Y R6/6シルト (地山) ブロック含む

1. におい黄褐色10Y R5/3-4/3シルトに炭化物含む
2. におい黄褐色10Y R5/3シルトに炭化物(径0.5cm)、明黄褐色10Y R6/6シルト (地山) ブロック (径1cm) 含む

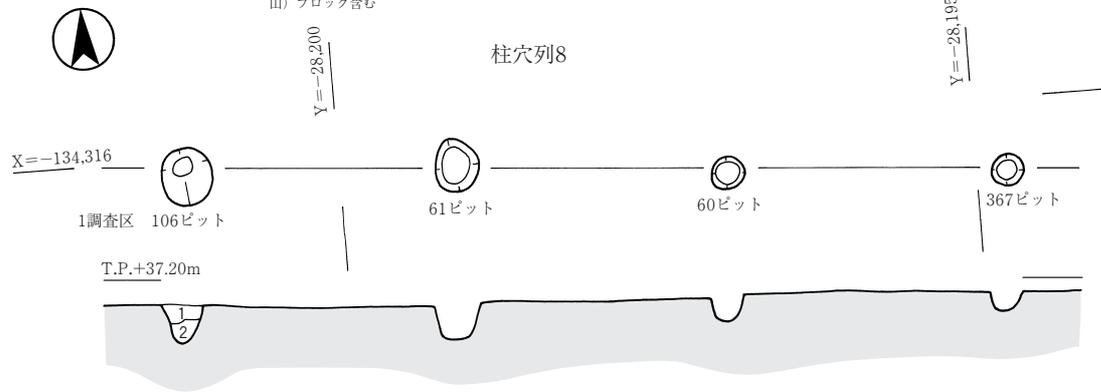
1. におい黄褐色10Y R5/3シルト
2. におい黄褐色10Y R5/3シルトに明黄褐色10Y R6/6シルト (地山) ブロック含む



1. におい黄褐色10Y R5/3細砂混シルト

1. におい黄褐色10Y R5/3粗砂混シルト
2. におい黄褐色10Y R4/3シルトに炭化物、焼土ブロック多く含む
3. におい黄褐色10Y R4/3シルトに明黄褐色10Y R6/6シルト (地山) ブロック含む

1. 灰黄褐色10Y R4/2シルト、下位に炭化物多く含む
2. 灰黄褐色～褐灰色10Y R4/2-4/1シルトに地山ブロック多く含む



1. におい黄褐色10Y R4/3細砂混シルトに小礫含む
2. 褐色10Y R4/4極細砂シルト



図302 有池遺跡03-2-3調査区 柱穴列5~8 平・断面図

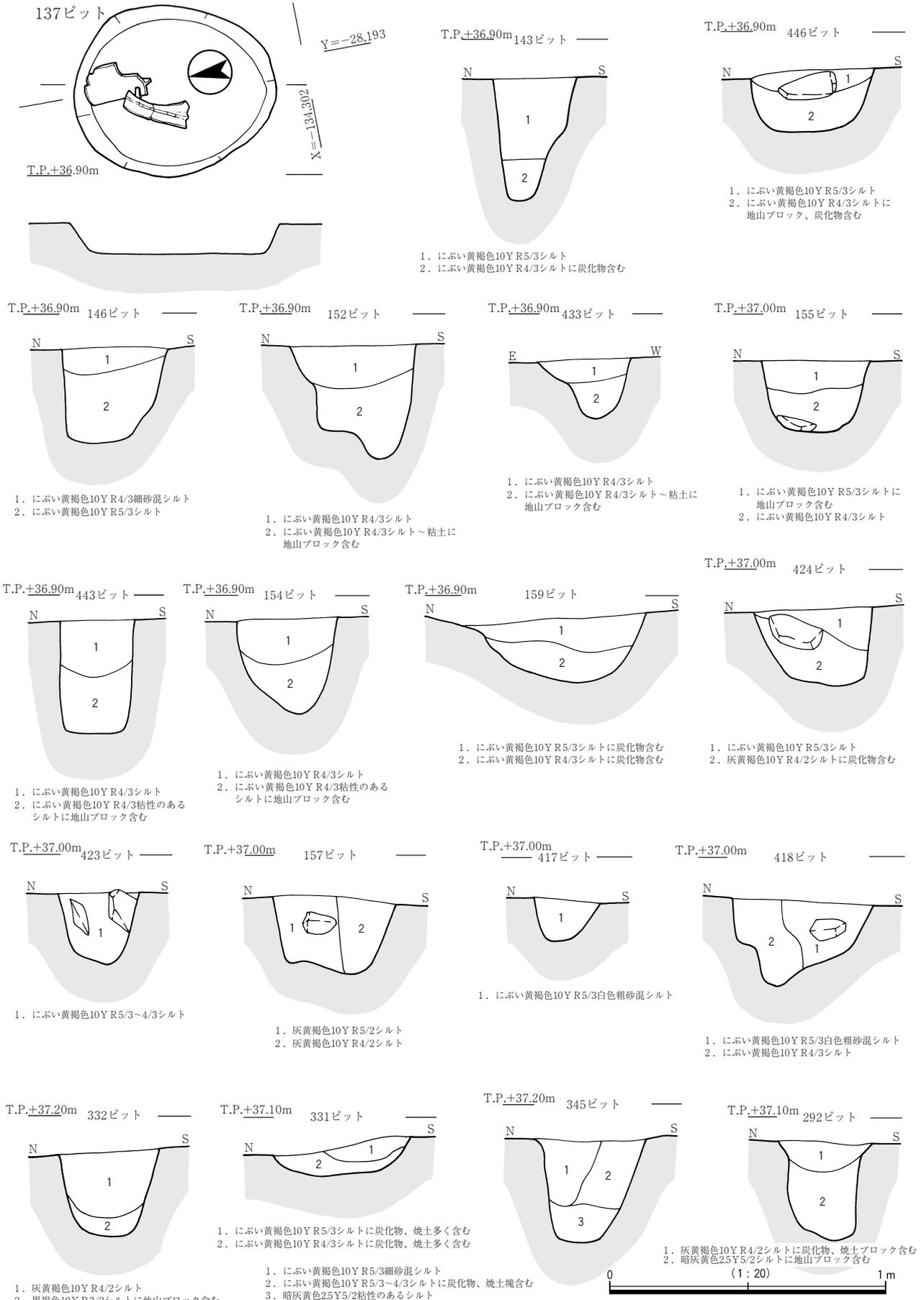


図303 有池遺跡03-2-3調査区 ピット 平・断面図

る。遺物は出土していない。

378ピット 微高地下段の中央、東西方向にはしる125溝の南肩部に位置する。直径40cmの円形であり、断面はU字状である。深さは20cm。埋土は、上層が灰黄褐色シルト、下層が黒褐色シルトである。遺物は土師器皿、瓦器椀が出土した。14世紀前半に位置付けられる。

332ピット（図303） 微高地下段の中央、88土坑の南東肩部に位置する。直径約37cmの円形であり、断面はU字状である。深さは30cm。埋土は、上層が灰黄褐色シルト、下層が黒褐色シルトに地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

331ピット（図303） 微高地下段の中央、88土坑の南西肩部に位置する。直径約50cmの円形であり、断面は浅いU字状である。深さは11cm。埋土は、にぶい黄褐色シルトに炭化物、焼土を多く含む。遺物は出土していない。

345ピット（図303） 微高地下段の南側に位置する。直径約40cmの円形であり、断面はU字状である。深さは37cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色細砂混シルト～シルトに炭化物、焼土塊を含む、下層が暗灰黄色粘性のあるシルトである。遺物は出土していない。

292ピット（図303） 微高地下段の南側、145土坑の東肩部に位置する。直径約35cmの円形であり、断面はU字状である。深さは32cm。埋土は、上層が灰黄褐色シルトに炭化物、焼土ブロックを含む、下層が暗灰黄色シルトに地山ブロックを含む。遺物は出土していない。

337ピット 微高地下段の南側、145土坑の東肩部に位置する。直径18cmの円形であり、断面は浅いU字状である。深さは7cm。埋土は、灰黄褐色シルトである。遺物は土師器皿が出土した。13世紀に位置付けられる。

171ピット（図304） 微高地下段の南端、2流路の北肩部に位置する。直径37cmの円形であり、断面はU字状である。深さは42cm。埋土は、上層が灰黄褐色粗砂混シルト、下層が灰黄褐色シルトである。遺物は土師器が出土した。

69・68ピット（図304） 微高地上段の東端に位置する。直径約72cmの円形であり、断面は浅いU字状である。深さ25cm。埋土は、にぶい黄褐色シルト～細砂混シルトである。遺物は出土していない。

30ピット（図304） 微高地上段の東端に位置する。直径約50cmの円形であり、断面はU字状である。深さは40cm。埋土は灰黄褐色細砂混シルトを主体とし、柱痕とみられる部分がにぶい黄褐色シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。

31ピット（図304） 微高地上段の東端に位置する。直径約52cmの円形であり、断面は浅いU字状である。深さは19cm。埋土は、上層が灰黄褐色シルトに炭化物、焼土ブロックを含む、下層が黄褐色細砂混シルトである。遺物は瓦器椀が出土した。

57ピット（図304） 微高地上段の中央、50落込の西肩部に位置する。2基のピットが切り合う。北側は直径約50cm、南側は復元直径約20cmの円形であり、断面はU字状である。深さは26cm。埋土は、暗褐色～灰黄褐色シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。

58ピット（図304） 微高地上段の東端、50落込の東側に位置する。直径約32cmの円形であり、断面はU字状である。深さは18cm。埋土は、上層が褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルトに炭化物を含む。遺物は出土していない。

56ピット（図304） 微高地上段の中央、50落込の西肩部に位置する。直径31cmの円形であり、断面はV字状である。深さは36cm。埋土は、にぶい黄褐色シルト～灰黄褐色細砂～中砂である。遺物は土師器、

瓦器が出土した。

112ピット (図304) 微高地上段の中央に位置する。直径約59cmの円形であり、断面は浅いU字状である。深さは20cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層が灰黄褐色中砂～黄褐色小礫混中砂である。遺物は出土していない。

70ピット (図304) 微高地上段の中央に位置する。直径約37cmの円形であり、断面はU字状である。深さは25cm。埋土は、上層が灰黄褐色シルト、下層が暗褐色シルトで両層とも焼土ブロック、炭化物を含む。遺物は土師器、瓦器が出土した。

116ピット 微高地上段の中央に位置する。長径68cm、短径47cmの楕円形であり、断面は浅いU字状である。深さは6cm。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は瓦器碗が出土した。14世紀前半に位置付けられる。

33ピット (図304) 微高地上段の中央に位置する。直径約25cmの円形であり、断面はU字状である。深さは28cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層が灰黄褐色シルト、柱痕とみられる部分がにぶい黄褐色シルトである。遺物は瓦器が出土した。

67ピット (図304) 微高地上段の中央に位置する。直径42cmの円形であり、断面は浅いU字状である。

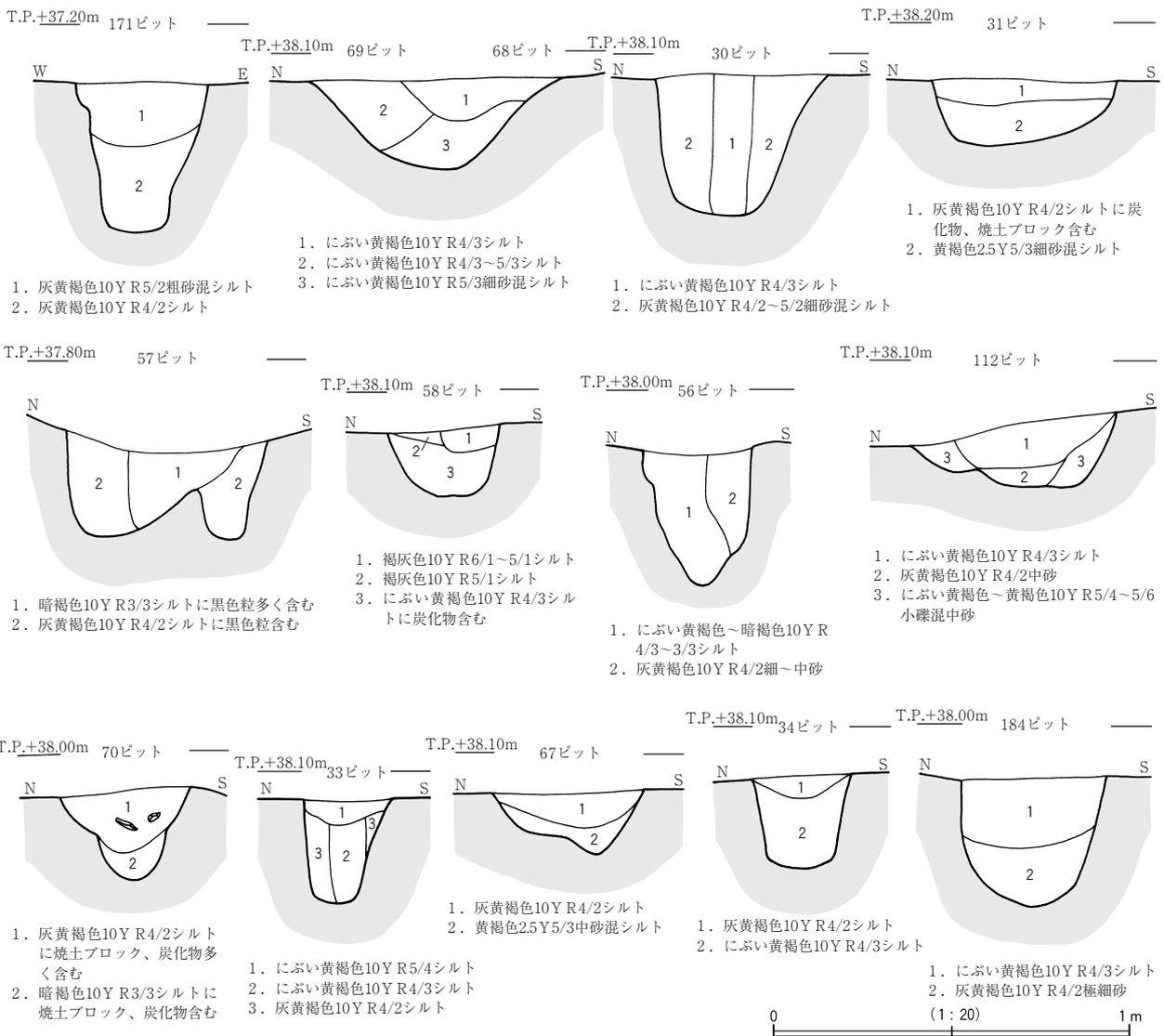


図304 有池遺跡03-2-3調査区 ピット 断面図

深さは17cm。埋土は上層が灰黄褐色シルト、下層が黄褐色中砂混シルトである。遺物は出土していない。

34ピット (図304) 微高地上段の中央に位置する。直径28cmの円形であり、断面はU字状である。深さは26cm。埋土は上層が灰黄褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルトである。遺物は土師器が出土した。

48ピット 微高地上段の中央に位置する。長径1m、短径60cmの楕円形であり、断面は南側が深いU字状である。深さは28cm。埋土は上層が灰黄褐色シルト、下層が黄褐色シルトである。遺物は土師器皿2個体、瓦器が出土した。13世紀に位置付けられる。

184ピット (図304) 微高地上段の西端に位置する。直径40cmの円形であり、断面はU字状である。深さは35cm。埋土は上層がにぶい黄褐色シルト、下層が灰黄褐色極細砂である。遺物は出土していない。

277ピット 微高地中段の中央より南側に位置する。直径32cmの円形であり、断面はU字状である。深さは9cm。埋土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は土師器皿、瓦器が出土した。13世紀後半に位置付けられる。

63井戸 (図305) 微高地下段の中央に位置する素掘りの井戸である。直径約1.2mの円形であり、断面は筒形である。掘削深度は74cmである。埋土は上層が灰黄褐色～黒褐色シルトに炭化物、焼土ブロックを含む、下層が暗灰黄色中砂混シルトである。遺物は土師器皿、須恵器鉢、瓦器椀、瓦質三足釜、焼土塊が上層からまともに出て出土した。居住域内の井戸として利用され、上層は機能停止後、廃棄された遺物を主体とする堆積とみられる。

127井戸 (図305) 微高地下段の中央に位置する素掘りの井戸である。直径約2mの円形であり、断面は筒形である。掘削深度は76cmである。埋土はにぶい黄褐色シルトに地山ブロック、炭化物を含む。遺物は土師器皿、須恵器鉢、瓦器椀、瓦質三足釜が出土した。筒形の断面形から、居住域内の井戸として利用されたと考えられるが、埋土および出土遺物からは廃棄土坑の可能性を残す。

454井戸 (図305) 調査区中央を東西にはしる1大溝の南肩部に位置する素掘りの井戸である。1大溝で造営された棚田の中世の耕土を除去した段階で検出した。上面は直径2.54m、上面から70～80cm下がったところで直径1.55mの円形であり、断面は筒形のもので上面に向けて開くラップ形である。湧水のため掘削深度は1.1mである。埋土は上層が灰色シルト、中層が暗褐色～青灰色シルトに腐植物、植物遺体を多く含む、下層が青灰色細砂である。遺物は土師器、13世紀後半の瓦器椀2個体が中層から出土した。また、クロモジ属、センダンの大型植物遺体が出土した。微高地上の居住域に伴う井戸とみられる。14世紀前半に位置付けられる。

452井戸 (図305) 調査区南端を東西にはしる2流路の北肩部に位置する素掘りの井戸である。2流路で造営された棚田の中世の耕土を除去した段階で検出した。直径2.1mの円形であり、断面は筒形のもので上面に向けてやや開く形状である。湧水のため掘削深度は1mである。埋土は灰色～青灰色細砂～粗砂である。遺物は瓦質三足釜が出土した。微高地上の居住域に伴う井戸とみられる。

59井戸 (図305) 微高地下段の南側、79土坑の東に位置する素掘りの井戸である。直径1.86mの円形であり、断面は筒形のもので上面に向けてやや開く形状である。掘削深度は1.6mである。埋土は、上層が灰黄褐色粗砂混シルト～にぶい黄褐色シルトに炭化物を含む、下層が黄灰色細砂混シルト～粘土である。遺物は土師器、瓦器、陶器が出土した。居住域内の井戸として利用された可能性が考えられる。

54井戸 (図305) 微高地中段の北側に位置する素掘りの井戸である。直径1.6mの円形であり、断面は筒形である。湧水のため掘削深度は1.12mである。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルトに炭化物を含む、

下層が黒褐色シルトである。遺物は土師器、瓦器釜が出土した。微高地中段は削平のため遺構密度が低いものの、埋土および出土遺物からは、居住域内の井戸として利用された可能性が考えられる。

168土坑 (図306) 微高地下段の北側に位置する。直径3.4mの不整円形であり、断面は浅いU字状である。深さは44cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルトに地山ブロックを含む、下層が灰黄褐色～褐灰色シルトに地山・焼土ブロックを含む。遺物は土師器、須恵器鉢、瓦器椀、瓦質三足釜が出土した。埋土上面でピットを多く検出しており、居住域内でも初期の遺構とみられる。

388土坑 (図306) 微高地下段の北側に位置する。直径1.6mの不整円形であり、断面は浅いU字状である。深さは20cm。埋土は、上層が明黄褐色粗砂混シルトブロック、下層がにぶい黄褐色シルトに地山ブロックを含む。遺物は瓦器が出土した。埋土がブロック土主体であるため人為的に埋め戻したとみられる。

180土坑 (図306) 微高地下段の中央、屈曲する125溝の屈曲部に位置する。長辺1.76m、短辺1.1mの長方形であり、断面は浅いU字状である。深さは14cm。埋土は、上層が褐灰色シルト、下層が褐灰色粗砂混シルトである。遺物は土師器、陶器が出土した。125溝埋土上面で検出していることから、居住域廃絶後に営まれた中世の水田に伴う区画隅部の貯水池とみられる。この場合、居住域の区画が踏襲されたこととなる。

166土坑 (図306) 微高地下段の北側に位置する。長辺3m、短辺2.22mの隅丸長方形であり、断面は浅いU字状である。深さは20cm。埋土は、上層が灰黄褐色シルト、中層がにぶい黄褐色シルトに焼土ブロック、炭化物を含む、下層がにぶい黄褐色シルトである。遺物は土師器皿、瓦質羽釜、青磁椀が出土した。79土坑と大きさ、形状、埋土が類似する。

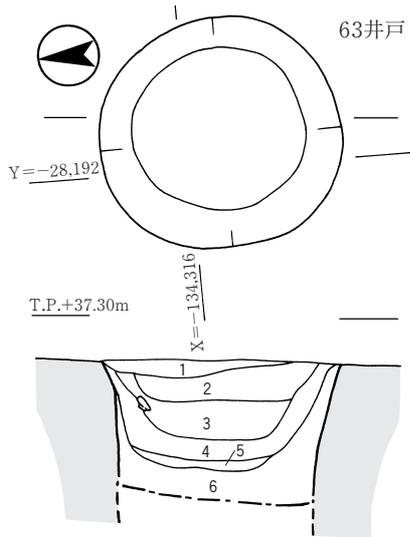
126土坑 (図306) 微高地下段の中央に位置する。長径2.5m、短径2.12mの不整な円形であり、断面は浅いU字状である。深さは28cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルトに地山ブロックを含む、下層がにぶい黄褐色シルトに焼土、炭化物を含む。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質三足釜が出土した。

88土坑 (図307) 微高地下段の中央に位置する。長径2.6m、短径2.14mの不整な楕円形であり、断面は浅いU字状である。深さは28cm。埋土は、上層が灰褐色シルトに焼土、炭化物、地山ブロックを含む、下層が灰褐色細砂混シルトである。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。埋土がブロック土主体であるため人為的に埋め戻したとみられる。

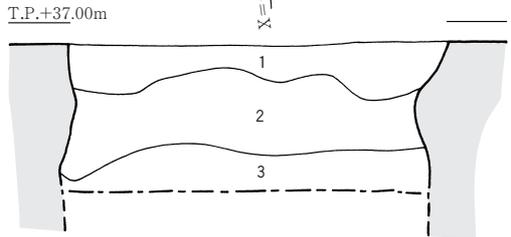
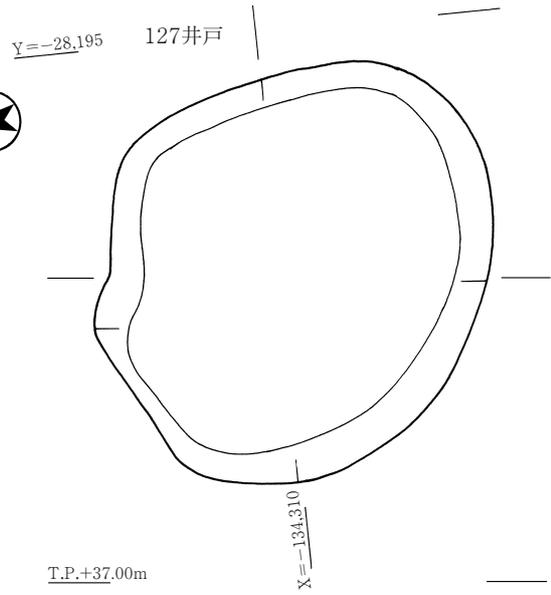
295土坑 (図307) 微高地下段の東端中央、180土坑の南側に位置する。長辺2.54m、短辺1.9mの浅い皿状の土坑の底部に長辺1.7m、短辺1.2mの方形土坑が掘り込まれる。断面は二段に落ちる浅いU字状である。深さは40cm。埋土は、上層が灰色～灰白色粗砂混シルト、下層が灰色中砂混シルトに灰オリーブ色シルト～粘土ブロックを多く含む。遺物は瓦器が出土した。埋土が異なり、180土坑との位置関係から、180土坑と同じく中世の水田に伴う区画隅部の貯水池とみられる。

145土坑 (図307) 微高地下段の南端に位置する。北西側は84土坑に切られる。直径3.2～3.3mの不整な円形であり、断面はU字状である。深さは38cm。埋土は、上層が灰褐色～黒褐色シルトに焼土、炭化物、地山ブロックを含む、下層が黒褐色シルトに炭化物を含む。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質三足釜が出土した。168土坑と同じく埋土上面でピットを検出しており、居住域内でも初期の遺構とみられる。

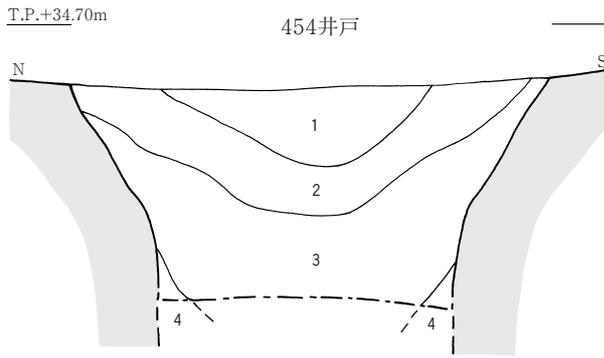
217土坑 (図308) 調査区の北側、1大溝の北側に位置する。長軸2m、短軸0.8mの楕円形であり、断面は浅いU字状である。深さは20cm。埋土は、上層が灰黄褐色粗砂混シルト、下層が褐灰色シルトに炭化物を含む。遺物は出土していない。主軸が東西方向で、整った形状であるため墓の可能性も考えられ



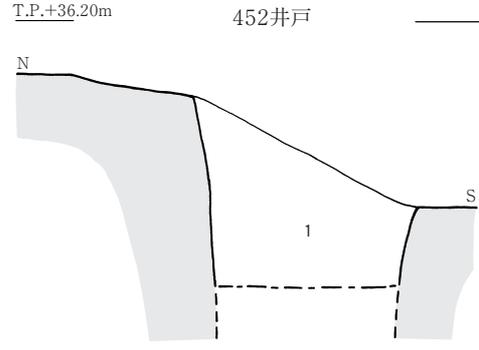
1. にぶい黄褐色10Y R4/3礫混シルト
2. 灰黄褐色10Y R4/2シルトに炭化物、焼土ブロック含む
3. 暗褐色10Y R3/3シルトに粗砂含む
4. 暗褐色10Y R3/4シルトに焼土ブロック含む
5. 黒褐色10Y R3/2シルトに炭化物、焼土ブロック多く含む
6. 暗灰黄色2.5Y5/2中砂混シルト



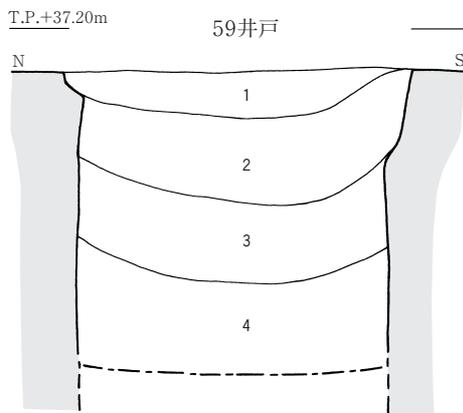
1. にぶい黄褐色10Y R5/3~4/3シルトに地山ブロック、炭化物含む
2. にぶい黄褐色10Y R4/3シルトに地山ブロック含む
3. にぶい黄褐色10Y R4/3シルトに地山ブロック、炭化物含む



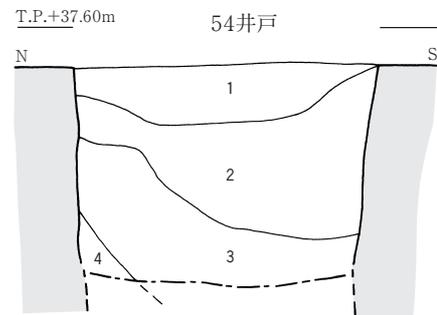
1. 灰色 5 Y5/1白色粗砂混シルト、灰白色砂ラミナ入る
2. 暗褐色10Y R3/4シルト~粘土に腐植物多く含む
3. 青灰色10B G6/1~5/1細砂混シルトに植物遺体多く含む
4. 青灰色10B G6/1細砂



1. 灰色~青灰色 5 Y6/1~10B G6/1細砂~粗砂



1. 灰黄褐色10Y R4/2粗砂混シルト
2. にぶい黄褐色10Y R4/3シルトに炭化物含む
3. 黄灰色2.5Y5/1細砂混シルト
4. 黄灰色2.5Y4/1細砂混シルト~粘土



1. にぶい黄褐色10Y R4/3シルトに焼土、炭化物含む
2. 灰黄褐色10Y R4/2シルト
3. 灰黄褐色~黒褐色10Y R4/2~3/2シルト
4. 黒褐色10Y R3/2シルト

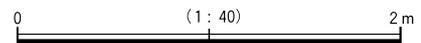


図305 有池遺跡03-2-3調査区 井戸 平・断面図

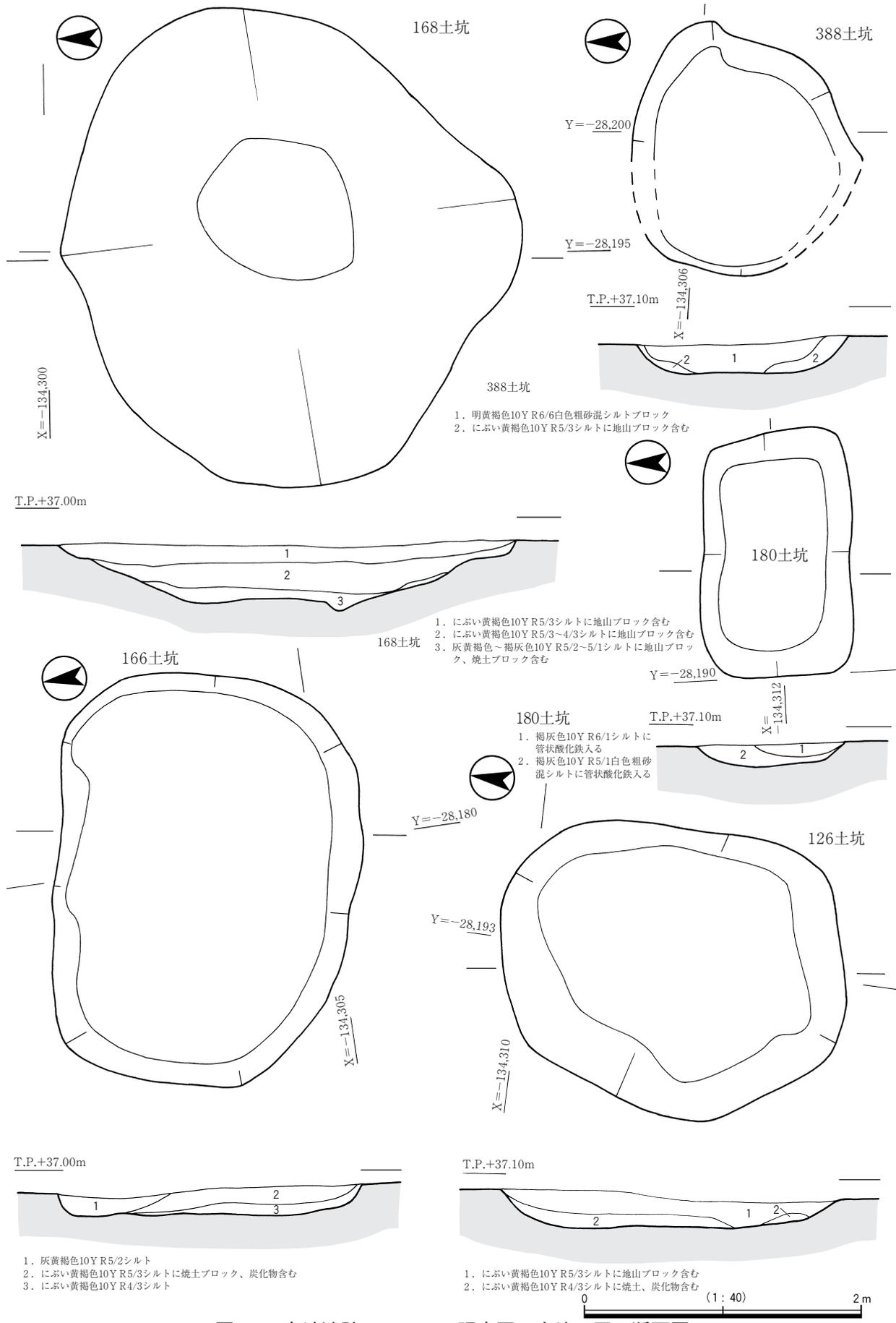
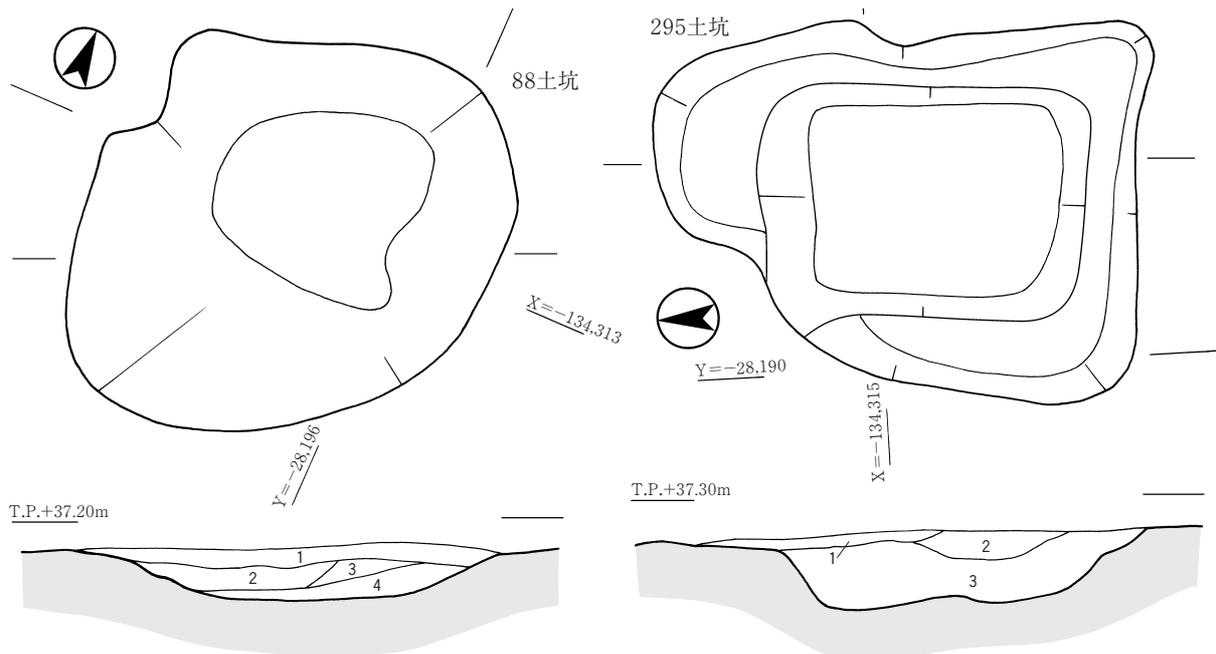
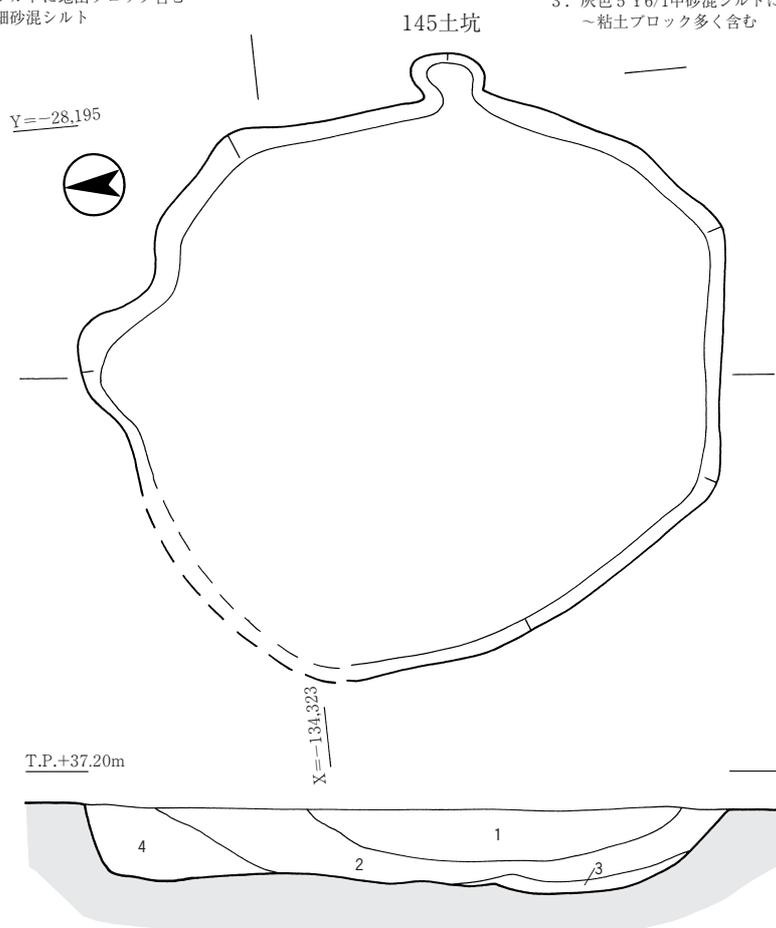


図306 有池遺跡03-2-3調査区 土坑 平・断面図



1. 灰黄褐色10Y R5/2シルトに焼土ブロック、炭化物多く含む
2. 灰黄褐色10Y R4/2シルトに地山ブロック含む、下位に炭化物含む
3. 灰黄褐色10Y R4/2シルトに地山ブロック含む
4. 灰黄褐色10Y R5/2細砂混シルト

1. 灰色 5 Y6/1シルト
2. 灰色 5 Y6/1～灰白色 5 Y7/1粗砂混シルト
3. 灰色 5 Y6/1中砂混シルトに灰オリーブ色 5 Y6/2シルト～粘土ブロック多く含む



1. 灰黄褐色10Y R4/2シルトに焼土、炭化物、地山ブロック含む
2. 灰黄褐色～黒褐色10Y R4/2～10Y R3/2シルトに焼土、炭化物、地山ブロック含む
3. 黒褐色10Y R3/2シルトに炭化物含む
4. にぶい黄褐色10Y R4/3シルトに地山ブロック、炭化物含む

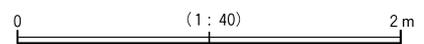


図307 有池遺跡03-2-3調査区 土坑 平・断面図

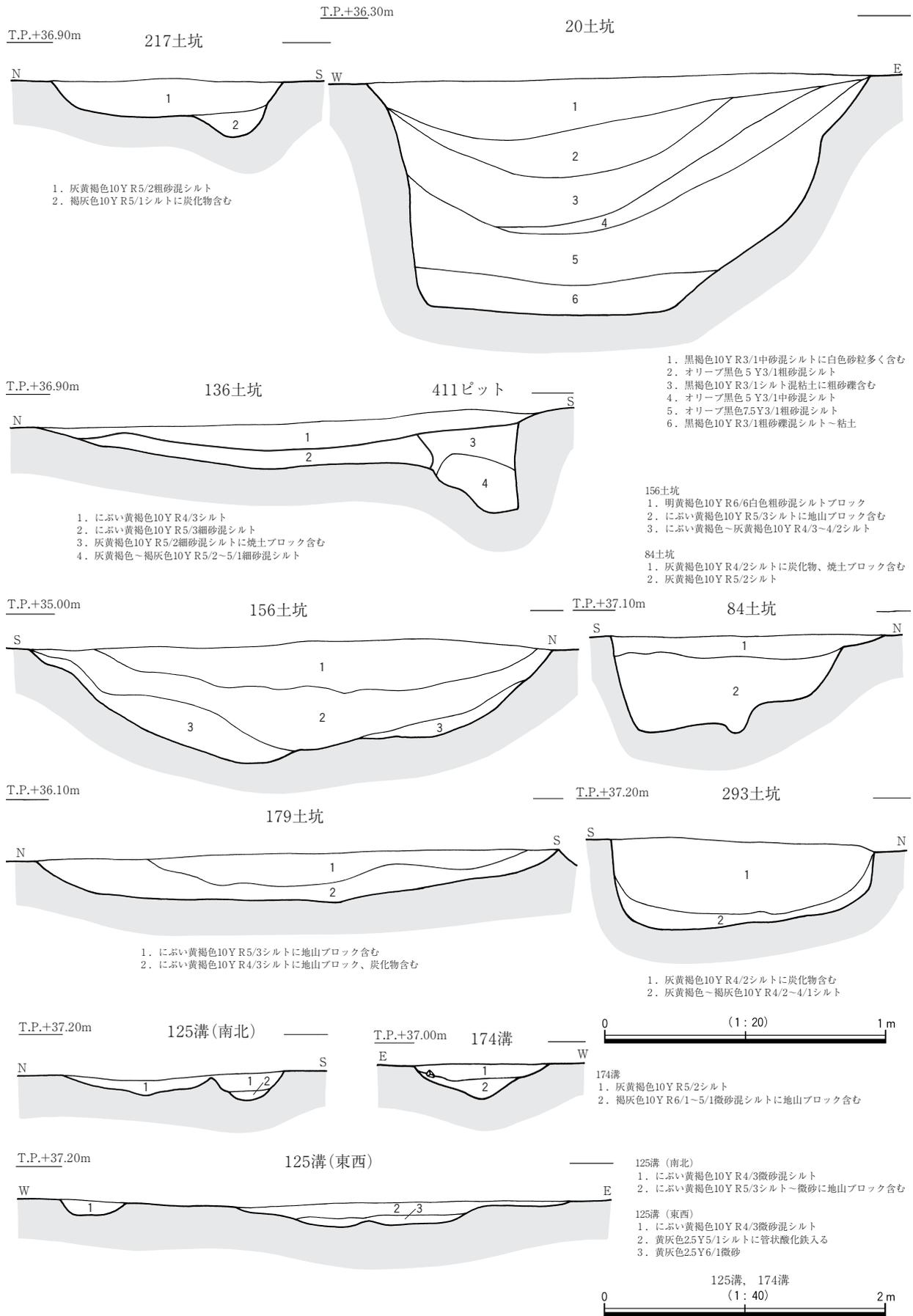


図308 有池遺跡03-2-3調査区 土坑・ピット・溝 断面図

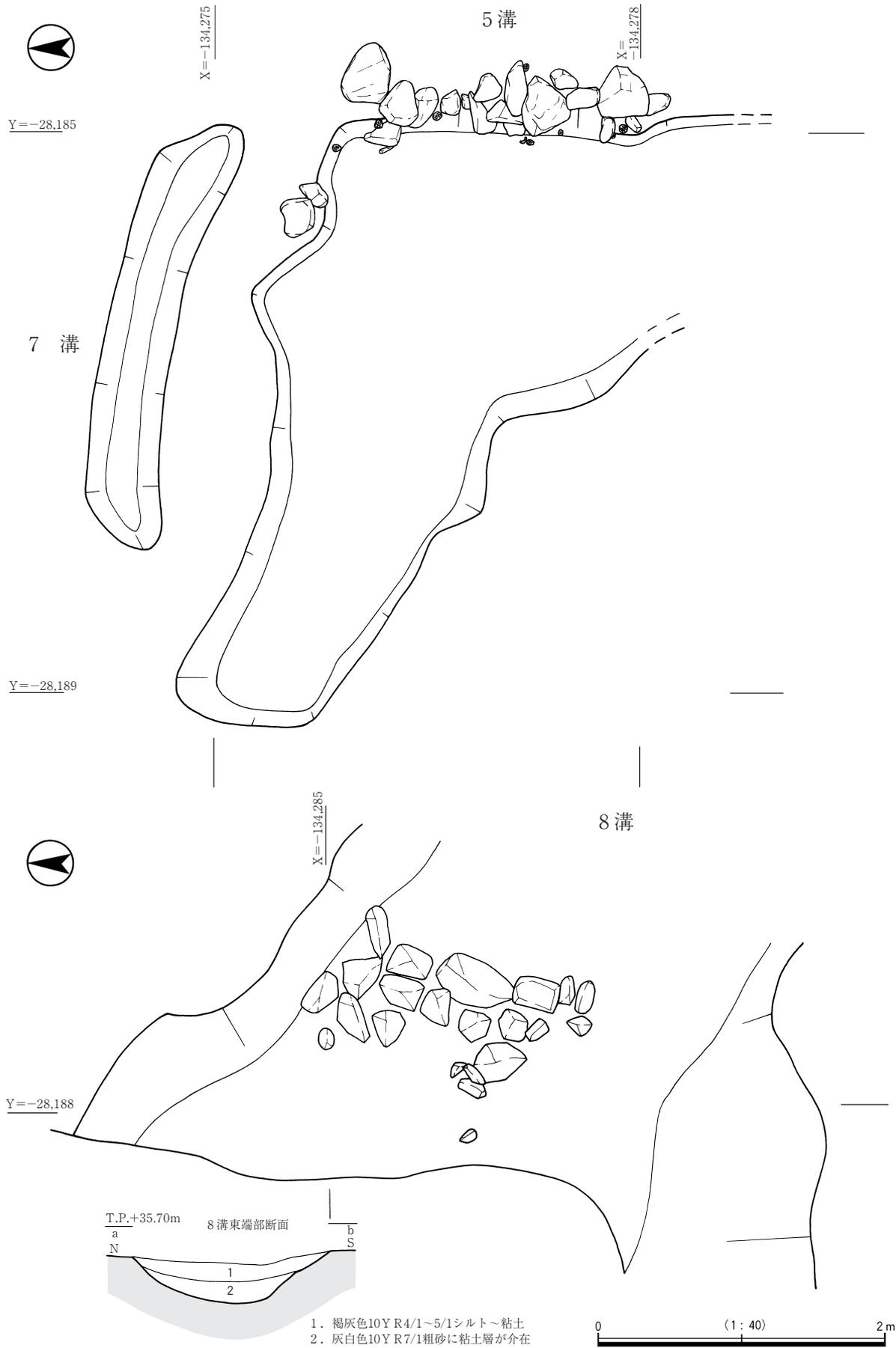


図309 有池遺跡03-2-3調査区 溝 平・断面図

たが、埋土にブロック土を含まず、据えられた状態の遺物はないため断定にはいたらない。

20土坑（図308） 調査区の中央、1大溝の南肩部に位置する。1大溝で造営された棚田の中世の耕土を除去後、遺物を含まないオリーブ褐色シルトを除去した段階で検出した。直径1.6～1.8mの円形であり、断面は東側が二段に落ちるU字状である。深さは82cm。埋土は、黒褐色中砂混シルト～オリーブ黒色粗砂混シルトである。遺物は土師器、瓦器椀、瓦質羽釜が出土した。

136土坑（図308） 微高地下段の北側に位置する。直径1.8mの不整な円形であり、断面は浅いU字状である。深さは16cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がにぶい黄褐色細砂混シルトである。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。上面で174溝、上層除去面で411ピットを検出しており、168・145土坑と同じく、居住域内でも初期の遺構とみられる。

156土坑（図308） 微高地下段の西端北側に位置する。直径1.9mの不整な円形であり、断面はU字状である。深さは41cm。埋土は、上層が明黄褐色粗砂混シルトブロック、中層がにぶい黄褐色シルトに地山ブロックを含む、下層がにぶい黄褐色～灰黄褐色シルトである。遺物は土師器、瓦器、白磁椀が出土した。埋土がブロック土主体であるため人為的に埋め戻したとみられる。

84土坑（図308） 微高地下段の南側、145土坑の北西肩部に位置する。直径1mの不整な円形であり、断面はU字状で、底面中央に浅い窪みをもつ。深さは35cm。埋土は上層が灰黄褐色シルトに炭化物、焼土ブロックを含む、下層が灰黄褐色シルトである。遺物は土師器、瓦器椀が出土した。

179土坑（図308） 微高地下段の北側に位置する。長径2.9m、短径1.9mの不整な円形であり、断面は浅いU字状である。深さは18cm。埋土は、にぶい黄褐色シルトに地山ブロック、炭化物を含む。遺物は須恵器、瓦質羽釜、青磁が出土した。上面でピットを検出し、166土坑に切られていることから、168・145土坑と同じく、居住域内でも初期の遺構とみられる。

293土坑（図308） 微高地下段の西端南側に位置する。直径1mの不整な円形であり、断面はU字状である。深さは32cm。埋土は上層が灰黄褐色シルトに炭化物を含み、下層が灰黄褐色～褐灰色シルトである。遺物は瓦器が出土した。

125溝（図308） 微高地下段の北側に位置する、東西－南北方向に屈曲する2条の溝である。東西方向が長さ13m、幅1.6m、南北方向が長さ16m、幅3.68mであり、断面は浅いU字状である。深さは10～20cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色微砂混シルト、下層が黄灰色シルト～微砂である。遺物は土師器皿、須恵器鉢、瓦器、青磁椀が出土した。溝の北西側は遺構が稠密であり、溝の南・東側と様相が異なることから、居住域内における区画溝と考えられる。

174溝（図308） 微高地下段の北側、125溝の北西側に位置する南北方向の溝である。長さ9.5m、幅98cmであり、南端が西へやや屈曲する。深さは24cm。埋土は、上層が灰黄褐色シルト、下層が褐灰色微砂混シルトに地山ブロックを含む。遺物は土師器皿、瓦質羽釜が出土した。125溝とほぼ並行することから、125溝の前段階の区画溝と考えられる。

8溝（図309） 調査区ほぼ中央、1大溝の南肩部をはしるほぼ東西方向の溝である。長さ10.8m、幅1.5m、西端では最大幅5.2mであり、断面は浅いU字状である。深さは28cm。埋土は、上層が褐灰色シルト～粘土、下層が灰白色粗砂に粘土層が介在する。遺物は土師器皿、須恵器鉢、瓦器、瓦質羽釜が出土した。西端では直径20～50cmの川原石が長さ2m、幅80cmにわたり集積し、その東側で北へ小溝がのびることから、川原石により水を堰きとめ、北側へ水を落としたものとみられる。また、1大溝南肩部の段落ちに並行し、西端は1大溝下段の方形区画に連なることから、谷水田を区画する段落ち際の溝と考え

られる。13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。

50落込（図310） 調査区東側、微高地上段のほぼ中央に位置する。南北の長さ6.5m、最大幅5.7mの北へ向かってやや開く形状であり、断面は浅いU字状である。深さは南側で44cm、北側で34cm。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルトに焼土、炭化物を含む、下層が暗褐色シルトに焼土、炭化物を含む。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜、陶器がまとまって出土した。南端は皿状に窪み、直径10～30cmの川原石が集積し、北側は微高地北辺を東西にはしる段落ちから7調査区1大溝の南肩部に取り付くことから、水田の段落ちに伴う水場および排水溝の可能性が考えられる。

4. 4 調査区（図311）

4 調査区は、2 調査区から南側に反転して設けた調査区である。4 調査区の現況は、2 調査区と同様、緩傾斜の地形に沿って低い棚田造成を施した耕作地である。基本層序は、現耕作土層、近世遺物包含層、中世遺物包含層、自然堆積の基盤層と続く。調査区西側は一段低く、調査区東側は西側に比べ高い平坦面をなし、平坦面頂部の標高はT.P.+38.50m前後を測る。

調査では機械掘削によって現耕土層を除去し、人力掘削によって近世耕土の黄褐色細～粗砂混シルトを除去した後、中世耕土の灰黄褐色細～粗砂混シルトが層厚10～20cmで薄く堆積する検出面において近

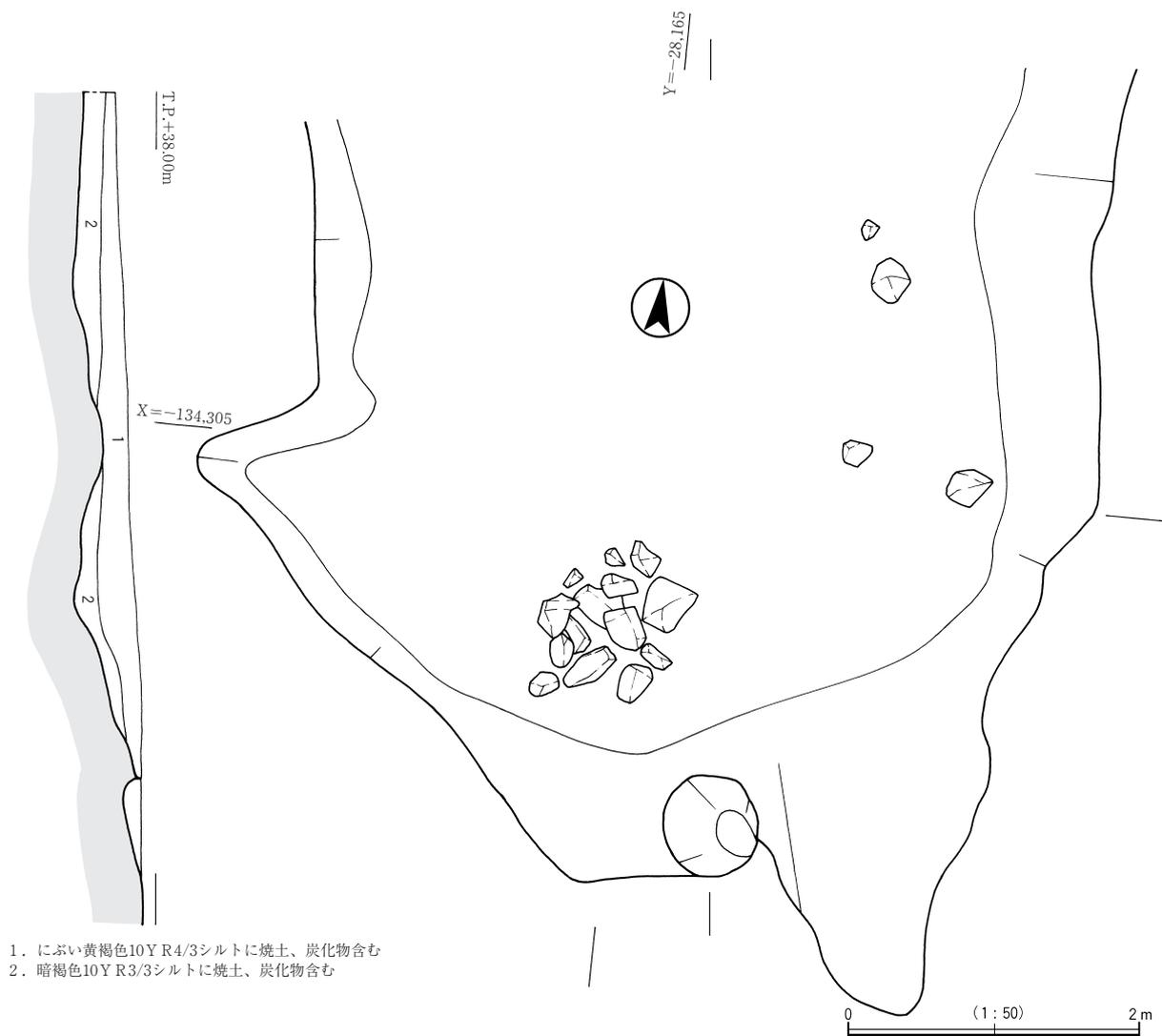


図310 有池遺跡03-2-3調査区 50落込 平・断面図

世耕作関連の小溝群（鋤溝群）などを確認したことから、1面とした。本報告では近世を対象外とするためその詳細については省略する。2面は、中世耕土の灰黄褐色細～粗砂混シルトなどの耕作関連土を除去した後に検出した最終遺構面である。主要遺構としては、有池遺跡02-1の発掘調査や本調査2・5・8調査区でも延長部を検出している12大溝、1・3・7調査区でも延長部を検出している18大溝、平安時代の炭窯の可能性のある17土坑などがあげられる。17土坑周辺は西側へと落ちる浅い谷頭状の落込であり、8調査区9流路へ続く可能性がある。

12大溝（図312） 調査区北辺部で検出した。遺構延長部は西側の8調査区（12大溝）、5調査区（2流路）で検出した。上層が2調査区11水田と共通し、下層が古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝となる。

上層は東西谷の南側傾斜面を平坦に区画造成し谷水田としている。検出規模は東西約28m、南北最大約10m、深さ0.3～1.2m、底面の標高はT.P.+37.31～38.10mである。堆積土は上層部では谷深部の北側がやや低くなるが、ほぼ水平な堆積状況であり、下層部では溝本体である自然流路の影響を受けてやや窪んだ堆積状況となり、全体としては大別して8層に分かれる。1層が炭化物や直径0.2～0.5cmの小礫を含む暗灰黄色細～中砂混シルト、2・3層が下部に灰オリーブ色極細砂混シルト（地山）ブロックを含む暗灰黄色極細～中砂混シルト、4層が若干の炭化物や灰色細～粗砂礫ブロックを含み直径0.1～0.5cmの小礫を多く混入する灰色中・粗砂混シルト、5層がオリーブ褐色粗砂礫ブロックを含む灰色中・粗砂混シルト、6層が直径0.1～0.3cmの小礫と極細砂混シルト（地山）ブロックを含むオリーブ黒色極細～細砂混シルト、7層が直径2～5cmの緑灰色極細砂（地山）ブロックを含むオリーブ黒色極細砂混シルト、8層が直径1～3cmの緑灰色細～粗砂混シルト（地山）ブロックを若干含むオリーブ黒色細・中砂混シルトである。出土遺物は1層では中世の土師器・瓦器のほか染付磁器などの近世遺物が含まれ、2～6層では中世（14～15世紀）を中心とする土師器・瓦器、7・8層では平安時代後期（12世紀）を中心とする土師器・瓦器がみられる。

谷水田の下部には削平を免れた古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝が遺存する。検出規模は東西長約27m、南北最大幅約6m、深さ1.7～2.2mである。底面の標高は東端T.P.+36.36m、西端T.P.+35.20mで、高低差は1.16mである。V字状に近い断面形状であり、ゆるく蛇行しながら西方向に流下する状態である。断面形状からは自然流路を人為的に加工し、溝として利用したと考えられる。埋土は基本的にほぼ均等な層厚で上下2層に分かれ、上層がオリーブ黒色中～粗砂混シルト～粘土、下層が灰黄色粗砂礫と灰色極細砂混シルトの互層である。また北側傾斜部では灰色極細砂混シルトの堆積が認められる。底面では流木片が数箇所検出される。出土遺物は完存品を含む古墳時代中期～飛鳥時代初頭の土師器甕・須恵器杯などの他、少量ながら縄文土器もみられる。

なお、完掘後基盤層の確認のため東壁周辺を掘削したところ、溝の肩部から約2m北の地点で火山灰とみられる層のひろがりを確認し、分析の結果、始良T_n火山灰に同定された。

18大溝（図311・312） 調査区南辺部で検出した。遺構延長部は西側の7調査区（1大溝）、3調査区（1大溝）、1調査区（1大溝）で検出した。12大溝同様、上層は中世を中心とする谷水田、下層が古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝である。

上層は東北東～西南西に軸をもつ谷の北側傾斜面を平坦に区画造成し水田としている。ほぼ南北断面を設けたラインで東西二区画の水田に分かれ、東側が高く西側が低い。検出規模は2区画を合わせて、東西約35m、南北最大約17m、深さ1.7～2.3m、底面の標高は東端T.P.+37.53m、西端T.P.+36.95mである。堆積土は上層部では谷深部の南側がやや低くなるが、ほぼ水平な堆積状況であり、下層部では溝

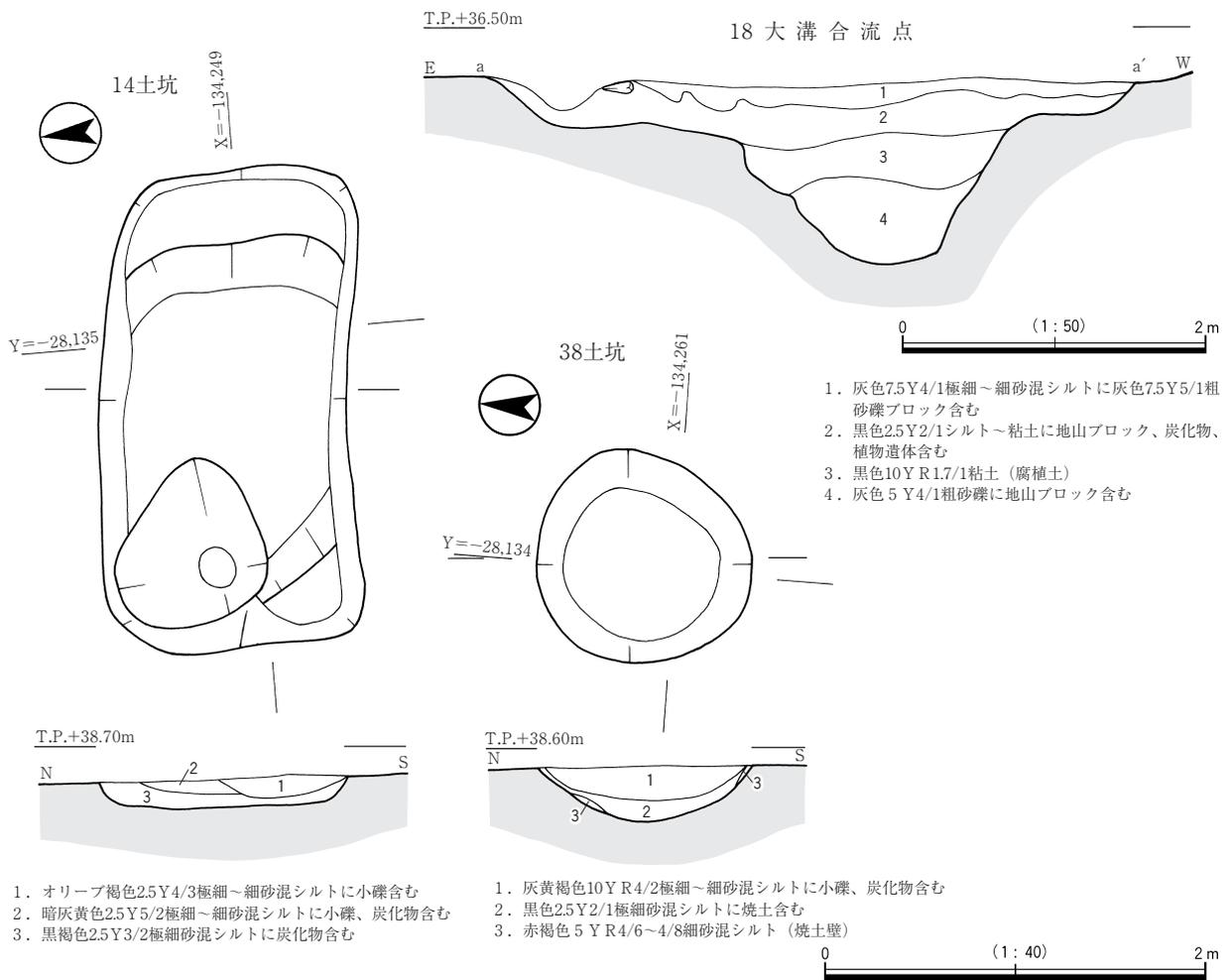
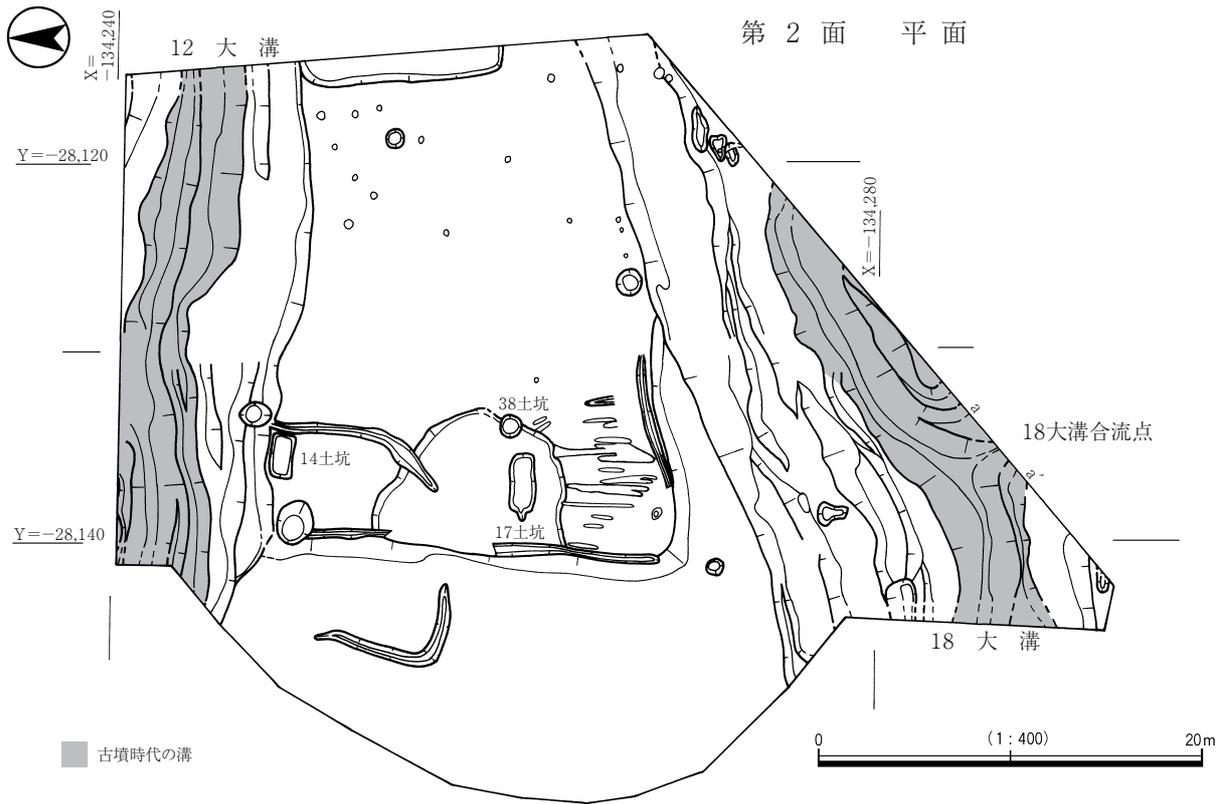
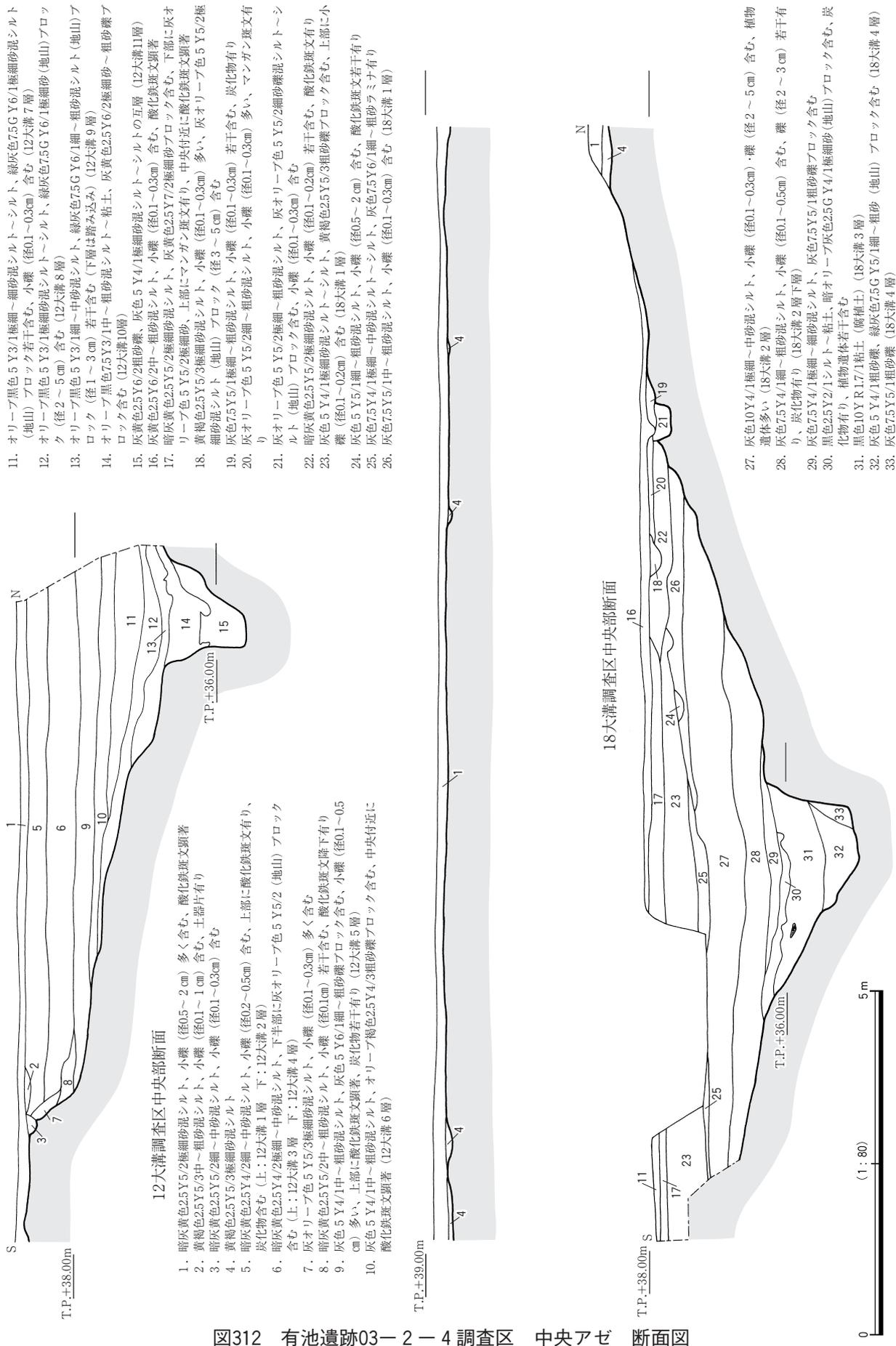


図311 有池遺跡03-2-4調査区 平面図(全体) / 土坑・溝 平・断面図



12大溝調査区中央部断面

1. 暗灰黄色2.5Y5/3中～粗砂混シルト、小礫 (径0.5～2cm) 多く含む、酸化鉄斑文顕著
2. 暗灰黄色2.5Y5/2細～中砂混シルト、小礫 (径0.1～1cm) 含む、土器片有り
3. 暗灰黄色2.5Y5/3極細砂混シルト
4. 暗灰黄色2.5Y4/2細～中砂混シルト、小礫 (径0.1～0.3cm) 含む
5. 暗灰黄色2.5Y4/2細～中砂混シルト、小礫 (径0.2～0.5cm) 含む、上部に酸化鉄斑文有り、炭化物含む (上：12大溝1層 下：12大溝2層)
6. 暗灰黄色2.5Y4/2極細～中砂混シルト、下半部に灰オリーブ色5Y5/2 (地山) プロック含む (上：12大溝3層 下：12大溝4層)
7. 灰オリーブ色5Y5/3極細砂混シルト、小礫 (径0.1～0.3cm) 多く含む
8. 暗灰黄色2.5Y5/2中～粗砂混シルト、小礫 (径0.1cm) 若干含む、酸化鉄斑文降下有り
9. 灰色5Y4/1中～粗砂混シルト、灰色5Y6/1細～粗砂混シルト含む、小礫 (径0.1～0.5cm) 多い、上部に酸化鉄斑文顕著、炭化物若干有り (12大溝5層)
10. 灰色5Y4/1中～粗砂混シルト、オリーブ褐色2.5Y4/3粗砂混シルト含む、中央付近に酸化鉄斑文顕著 (12大溝6層)

18大溝調査区中央部断面

11. オリーブ黒色5Y3/1極細～細砂混シルト～シルト、緑灰色7.5GY6/1極細砂混シルト (地山) プロック若干含む、小礫 (径0.1～0.3cm) 含む (12大溝7層)
12. オリーブ黒色5Y3/1極細砂混シルト～シルト、緑灰色7.5GY6/1極細砂 (地山) プロック (径2～5cm) 含む (12大溝8層)
13. オリーブ黒色5Y3/1細～中砂混シルト、緑灰色7.5GY6/1細～粗砂混シルト (地山) プロック (径1～3cm) 若干含む (下層は踏み込み) (12大溝9層)
14. オリーブ黒色7.5Y3/1中～粗砂混シルト～粘土、灰黄色2.5Y6/2極細砂～粗砂混シルト含む (12大溝10層)
15. 灰黄色2.5Y6/2粗砂混、灰色5Y4/1極細砂混シルト～シルトの互層 (12大溝11層)
16. 灰黄色2.5Y6/2中～粗砂混シルト、小礫 (径0.1～0.3cm) 含む、酸化鉄斑文顕著
17. 暗灰黄色2.5Y5/2極細砂混シルト、灰黄色2.5Y7/2極細砂プロック含む、下部に灰オリーブ色5Y5/2極細砂、上部にマンガン斑文有り、中央付近に酸化鉄斑文顕著
18. 黄褐色2.5Y5/3極細砂混シルト、小礫 (径0.1～0.3cm) 多い、灰オリーブ色5Y5/2極細砂混シルト (地山) プロック (径3～5cm) 含む
19. 灰色7.5Y5/1極細～粗砂混シルト、小礫 (径0.1～0.3cm) 若干含む、炭化物有り
20. 灰オリーブ色5Y5/2細～粗砂混シルト、小礫 (径0.1～0.3cm) 多い、マンガン斑文有り
21. 灰オリーブ色5Y5/2極細～粗砂混シルト、灰オリーブ色5Y5/2極細砂混シルト～シルト (地山) プロック含む、小礫 (径0.1～0.3cm) 含む
22. 暗灰黄色2.5Y5/2極細砂混シルト、小礫 (径0.1～0.2cm) 若干含む、酸化鉄斑文有り
23. 灰色5Y4/1極細砂混シルト～シルト、黄褐色2.5Y5/3粗砂混シルト含む、上部に小礫 (径0.1～0.2cm) 含む (18大溝1層)
24. 灰色5Y5/1細～粗砂混シルト、小礫 (径0.5～2cm) 含む、酸化鉄斑文若干有り
25. 灰色7.5Y4/1極細～中砂混シルト～シルト、灰色7.5Y6/1細～粗砂ラミナ有り
26. 灰色7.5Y5/1中～粗砂混シルト、小礫 (径0.1～0.3cm) 含む (18大溝1層)
27. 灰色10Y4/1極細～中砂混シルト、小礫 (径0.1～0.3cm) ・礫 (径2～5cm) 含む、植物遺体多い (18大溝2層)
28. 灰色7.5Y4/1細～粗砂混シルト、小礫 (径0.1～0.5cm) 含む、礫 (径2～3cm) 若干有り、炭化物有り (18大溝2層下層)
29. 灰色7.5Y4/1極細～細砂混シルト、灰色7.5Y5/1粗砂混シルト含む
30. 黒色2.5Y2/1シルト～粘土、暗オリーブ灰色2.5GY4/1極細砂 (地山) プロック含む、炭化物有り、植物遺体若干含む
31. 黒色10Y R.7/1粘土 (腐植土) (18大溝3層)
32. 灰色5Y4/1粗砂混、緑灰色7.5GY5/4細～粗砂 (地山) プロック含む (18大溝4層)
33. 灰色7.5Y5/1粗砂混 (18大溝4層)

図312 有池遺跡03-2-4調査区 中央アゼ 断面図

本体である古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝の影響を受けてやや窪んだ堆積状況となり、全体としては大別して4層に分かれる。1層が小礫を含む灰色中～粗砂混シルト、2層が小礫、植物遺体を含む灰色極細～中砂混シルト、2層下層が礫、炭化物を含む灰色細～粗砂混シルト、3層が腐植土である黒色粘土である。出土遺物は1・2層では中世の土師器・瓦器、陶器が含まれ、3層では平安時代後期～中世(12～13世紀)を中心とする土師器・瓦器がみられる。

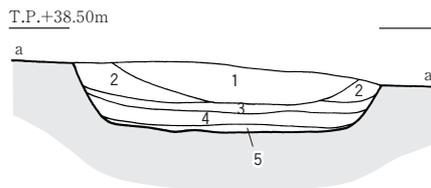
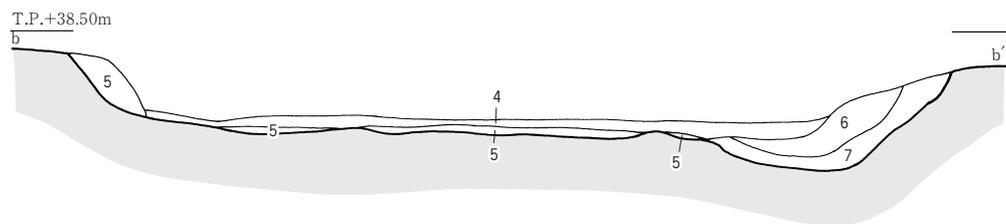
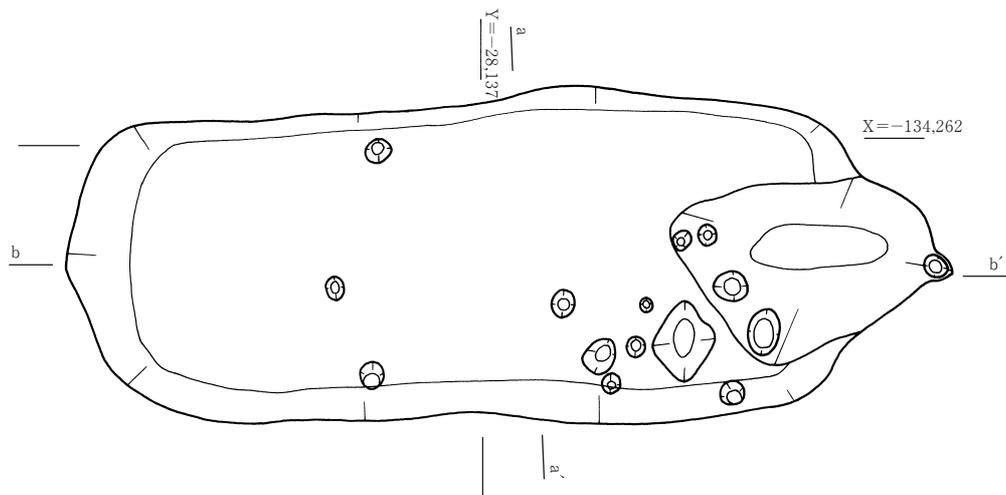
12大溝同様、谷水田の下部には削平を免れた古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝が遺存する。検出規模は東西長約21m、南北最大幅約5m、深さ1mである。底面の標高は東端T.P.+35.32m、西端T.P.+34.66mである。V字状に近い断面形状であり、ゆるく蛇行しながら南西方向に流下する状態である。断面形状からは自然流路を人為的に加工し、溝として利用したと考えられる。埋土は腐植土、緑灰細砂混シルト(地山)ブロックを含む灰色粗砂礫である。古墳時代中期～飛鳥時代初頭の土師器が出土した。

また、調査区南壁沿いでは別の溝が南東方向から流入する合流点を検出した。

14土坑(図311) 調査区北西部に位置する。隅丸長方形であり、長辺2.6m、短辺1.3m、深さ15cm、底面の標高T.P.+38.38mである。遺構の軸方向はほぼ方位に沿う。北西隅部の底面では長辺約90cm、短辺約70cm、深さ26cmのピット状の落込、また東壁に沿って幅約30cm、高さ5cm前後の段が認められる。埋土は、上層が直径1～3cmの小礫を含むオリーブ褐色極細～細砂混シルト、中層が炭化物や直径1～2cmの小礫を含む暗灰黄色極細～細砂混シルト、下層が直径1～3cm大の炭化物を多量に含む黒褐色極細砂混シルトが4～11cm厚で堆積する。遺物は土師器小片が6～7点出土するが、時期が明確でない。他に炭化材や焼土塊の小片も出土した。なお同様の遺構として南側11mの位置で17土坑、7調査区で25土坑の計3基を検出した。

17土坑(図313) 調査区中央部やや西寄りに位置する。隅丸長方形であり、西端部にピット状の落込が設けられていることから西壁中央が半楕円状に35cm程突出する。底面は全体的にほぼ平坦である。長辺3.5m、短辺1.2m、深さ約30cm、底面の標高はT.P.+38.16mである。遺構の軸方向はほぼ方位に沿う。西端部の落込は長軸1.0m、短軸70cm、深さは検出面下約40cm、底面からでは約15cmである。埋土は7層が確認できる。上層では、中央部分にオリーブ褐色極細砂混シルトが層厚最大16cmでレンズ状に堆積する。

その下層では南北の壁沿いに直径1～3cm大の焼土や直径1～2cm大の小礫を含むにぶい黄褐色極細砂混シルト(2層)、層厚2～4cmで直径1～2cm大の焼土や炭化物を多く含むにぶい黄褐色極細砂混シルト(3層)、層厚5～6cmで直径1～2cm大の焼土や直径2～3cm大の炭化物を含む黒褐色細～中砂混シルト(4層)がほぼ水平堆積し、底面直上の中央部分に層厚3cm前後で明褐色焼土ブロックを含む赤褐色極細～中砂混シルト(5層)が薄く堆積する。また側壁面の数箇所では5層の明褐色焼土ブロックを含む赤褐色極細～中砂混シルトが焼壁状になる状態が認められる。西端部の落込の埋土は、上層では遺構全体にひろがる1～4層が堆積する。その下層に層厚最大15cmで直径1～3cm大の焼土や直径0.5～1cm大の炭化物を含む黒褐色極細砂混シルト(6層)が、底面直上から側壁面周囲にかけて層厚5～10cmで直径1～3cm大の焼土や直径1～2cm大の炭化物を含む黒色細砂混シルト(7層)が堆積する。出土遺物は土師器小片5点と須恵器小片1点に限られるが、わずかに原形をとどめた土師器皿の器形から平安時代の遺構である可能性が想定される。他に焼土塊の小片が数点出土する。遺構の性格はその形状、焼土や炭化物の細片を多量に含む堆積状況、溶壁化した壁面状況、また西端部の落込が焚口あるいは煙出しと推定されることなどから炭窯の可能性が考えられる。



1. オリーブ褐色2.5Y4/4極細砂混シルト、上部にマンガン斑文有り
2. にぶい黄褐色10Y R4/3極細砂混シルト、小礫、焼土含む
3. にぶい黄褐色10Y R4/3極細砂混シルト～シルト、焼土、炭化物多い
4. 黒褐色10Y R3/2細～中砂混シルト、炭化材、焼土含む（トーン部分）
5. 赤褐色5 Y R4/6極細～中砂混シルト、上部に焼土ブロック有り
6. 黒褐色10Y R3/2極細砂混シルト～シルト、焼土、炭化物含む
7. 黒色2.5Y2/1細砂混シルト、炭化物、焼土含む

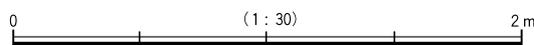


図313 有池遺跡03-2-4調査区 17土坑 平・断面図

なお同様の遺構として北側11mの位置で14土坑、7調査区で25土坑の計3基を検出した。

38土坑 (図311) 調査区中央部に位置する。直径1.1m前後の不整な円形であり、深さ29cm、底面の標高はT.P.+38.24mである。断面形状は浅い椀形である。埋土は、上層に直径0.1~0.3cmの小礫や炭化物を多く含む灰黄褐色極細~細砂混シルトが最大厚18cmでレンズ状に堆積する。底面直上から側壁面周囲にかけては層厚2~11cmで直径0.5~1cm大の焼土を含む黒色極細砂混シルトが堆積し、その下部に底面付近から側壁面周囲にかけては部分的に焼土を多く含む赤褐色細砂混シルトが2~3cm厚で焼壁化する状態が認められる。遺物は出土していない。この38土坑は炭窯の可能性をもつ17土坑の東側1mの近距離に位置していることや、焼土や炭化物の細片を多く含む堆積状況が共通することなどから、遺構形状は異なるが相互に関連する遺構である可能性が高い。

5. 5調査区 (図314)

5調査区は、3調査区の北東側、7調査区の北側、8調査区の西側に位置する小規模な南北方向の調査区である。5調査区の現況は、調査開始時点では更地の状態であり、それ以前の状況は明らかでない。機械掘削により約1.5m厚の盛土を除去した段階で削剥された地山面がひろがり、調査区北半に大型の攪乱坑が認められた。調査区全体にひろがる堆積層は認められない。谷の流路である1流路と2流路を検出した。

1流路 (図314) 調査区南半部に位置する。東西方向にのびる自然流路であり、その延長部は西側の3調査区(3流路)と東側の8調査区(9流路)で検出した。検出規模は長さ約4m、幅約6~8m、深さ0.9~1.7mである。底面の標高は東端T.P.+36.00m、西端T.P.+35.70m、高低差は30cmであり、流路は西方向にゆるく流下する。埋土は大別して6層に分かれる。上層の1層が層厚最大50cmでレンズ状に

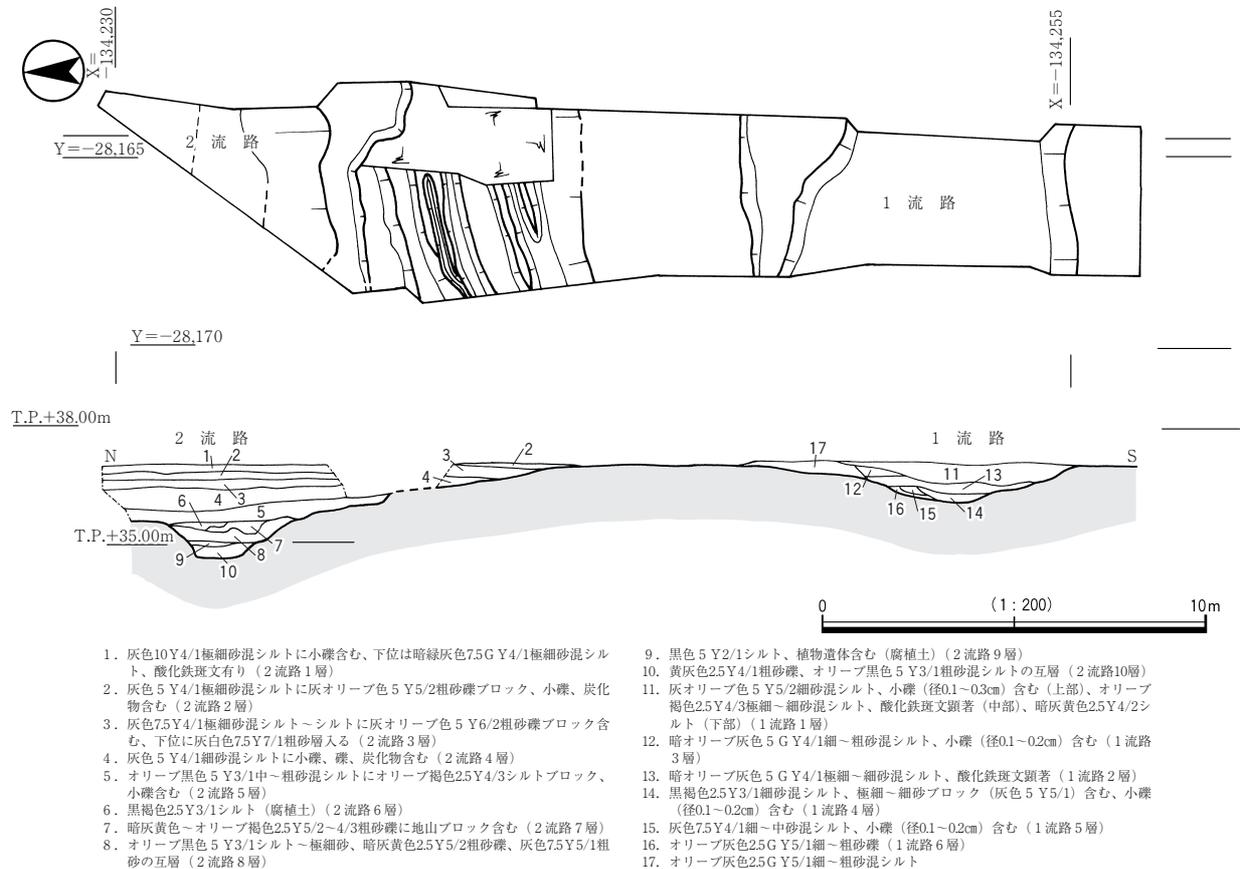


図314 有池遺跡03-2-5調査区 平面図(全体) / 東壁断面図

厚く堆積する灰オリーブ色細砂混シルト、中層の2層が層厚20～40cmで北側壁面から中央部にかけて堆積する暗オリーブ灰色極細～細砂混シルト、3層が北側肩部に層厚30cm前後で堆積する暗オリーブ灰色細～粗砂混シルト、4層が層厚最大24cmでレンズ状に堆積する黒褐色細砂混シルトで最下面は流路本体の底面に達する。5層は4層北側下層にみられ、層厚20cm前後で中間的に堆積する灰色細～中砂混シルト、6層が北側壁面から北側底面にかけて層厚8～10cmで堆積するオリーブ灰色細～粗砂礫で最下層となる。3層と6層は類似した堆積層であるが直接的な層位関係は明らかでない。4層が腐植物を含む堆積層であり古層の様相を示すものと判断されるが、4層ほか遺構全体において遺物は出土していない。

2 流路 (図314) 調査区北半部に位置する。ほぼ東西方向にのびる自然流路であり、その延長部は東側の8調査区(12大溝)と2・4調査区(12大溝)で検出した。西側の延長部は調査区外に、さらに深さを増して延長すると判断される。南側肩部から底面にかけて検出し、北側の大半は調査区外に位置する。検出規模は長さ5.9m、幅11.9m、深さ2.5m、底面の標高はT.P.+34.67mである。埋土は大別して3層に分かれる。上層(1～4層)が中世の谷水田、中層(5層)が古代末～中世の堆積層、下層(6～10層)が古墳時代中期～飛鳥時代初頭溝である。

上層は、1層が灰色極細砂混シルト、2層が灰色極細砂混シルト、3層が灰色極細砂混シルト、4層が灰色細砂混シルトで、これら1～4層は中世の水田耕作土である。遺物は中世の土師器・瓦器・陶器・磁器などが少量出土した。14世紀末～15世紀初頭に位置付けられる。

中層(5層)はオリーブ黒色中～粗砂混シルトで、土師器・須恵器・瓦器などの出土遺物から古代末～中世の堆積層とみられる。

下層は、6層が黒褐色腐植土質シルト、7層が暗灰黄色～オリーブ褐色粗砂礫、8層がオリーブ黒色シルト～極細砂と、暗灰黄色粗砂礫、灰色粗砂の互層、9層が植物遺体を含む黒色腐植土質シルト、10層が黄灰色粗砂礫とオリーブ黒色粗砂混シルトの互層で底面に接する。6・9層は腐植土を多く含むことなどから流水が比較的穏やかな時期の堆積層、7・8・10層は粗砂礫を主体とすることや粗砂・粗砂礫を含む互層堆積の状態を示すことなどから流水が激しい時期の堆積層と考えられる。遺物は古墳時代中期～飛鳥時代初頭の須恵器小片が出土した。

6. 6 調査区 (図315)

6調査区は、有池遺跡02-1調査区の南側に位置する小規模な調査区で、有池遺跡02-1調査段階では未調査となっていた部分である。6調査区では現況や基本層序などは基本的に有池遺跡02-1-1A・1Bと共通し、上層から現代耕土層、近世耕土層(1層)、中世耕土層(2～3層)である。2～3層では中世の土師器・瓦器・須恵器・陶器・磁器が少量出土した。主要遺構としては最終遺構面で東西方向の低い段で区画された平坦面3面およびピットを検出した。段差を伴う平坦面は有池遺跡02-1-1A・1Bにおける1大溝の延長に位置することから同一遺構内の水田域と考えられ、4～6水田とした。

4 水田 (図315) 調査区北端に位置し、平坦面3面の内では上段にあたる。検出規模は東西長5.5m、南北幅0.8～1.4m、標高T.P.+39.74～39.91mである。耕土は層厚20cm前後で直径3cm大の灰色砂礫ブロック、直径0.3～1cmの小礫を含むオリーブ黒色極細～中砂混シルト(6層)である。

5 水田 (図315) 調査区中央部に位置し、平坦面3面の内では中段にあたる。検出規模は東西長1.3～4.3m、南北幅2.1m、標高T.P.+39.64～39.69m、4・5水田の高低差14～18cmである。耕土は層厚14～28cmで灰色粗砂礫層が入る灰色極細砂混シルト～シルト(5層)で、6水田上層までのびる。層位関係

から5水田は4・6水田よりも新しいことがわかる。また5水田では北側の段下付近で東西方向の1小溝群（鋤溝群）を検出し、土師器・瓦器が出土した。

6水田（図315） 調査区南端に位置し、平坦面三面の内では下段にあたる。検出規模は東西長約1.5m、南北幅約1.2m、標高T.P.+39.51~39.54mである。耕土は層厚13~20cmで灰色粗砂礫層が入り直径0.1~0.2cmの小礫を含むオリブ黒色極細~細砂混シルト（7層）である。

3ピット 6水田の北東隅に位置する。直径45cmの円形であり、深さ29cm、底面の標高はT.P.+39.34mである。断面形状はU字状である。埋土は、オリブ黒色細砂混シルトである。遺物は平安時代後期の土師器皿が出土した。

7. 7調査区（図316）

3調査区の東側、4調査区の西側、5・8調査区の南側に位置する調査区である。

2面では、調査区のほぼ南半で東から西へはしる1大溝、調査区北側の微高地で炭窯の可能性が考えられる土坑（25土坑）を確認した。

1大溝は、3調査区1大溝、4調査区18大溝につらなるものであり、これらと同様に上層が中世谷水田であり、最下層は古墳時代中期~飛鳥時代初頭の溝である。本調査区では、古墳時代中期~飛鳥時代初頭の溝を覆う平安時代後期の堆積層（1大溝下層1層）を確認した。4調査区18大溝においても、その肩部から平安時代後期の遺物が出土しており注意されたが、本調査区では、この平安時代後期の堆積層を明確に確認できたことが意義ある成果といえる。1大溝の北肩部では、中世谷水田除去後の平坦面において完形の曲物が据えられた64土坑を確認した。1大溝の南肩部では、東西方向の段落ちとともに、1大溝へと下降する南北方向の溝を数条確認した。

1大溝（図317） 調査区のほぼ南半を東から西へとはしる。最大幅約29m、2層除去後面からの深さ3.2mである。上層は谷に設けられた平安時代後期（12世紀）以降中世の水田であり、北肩部および南肩

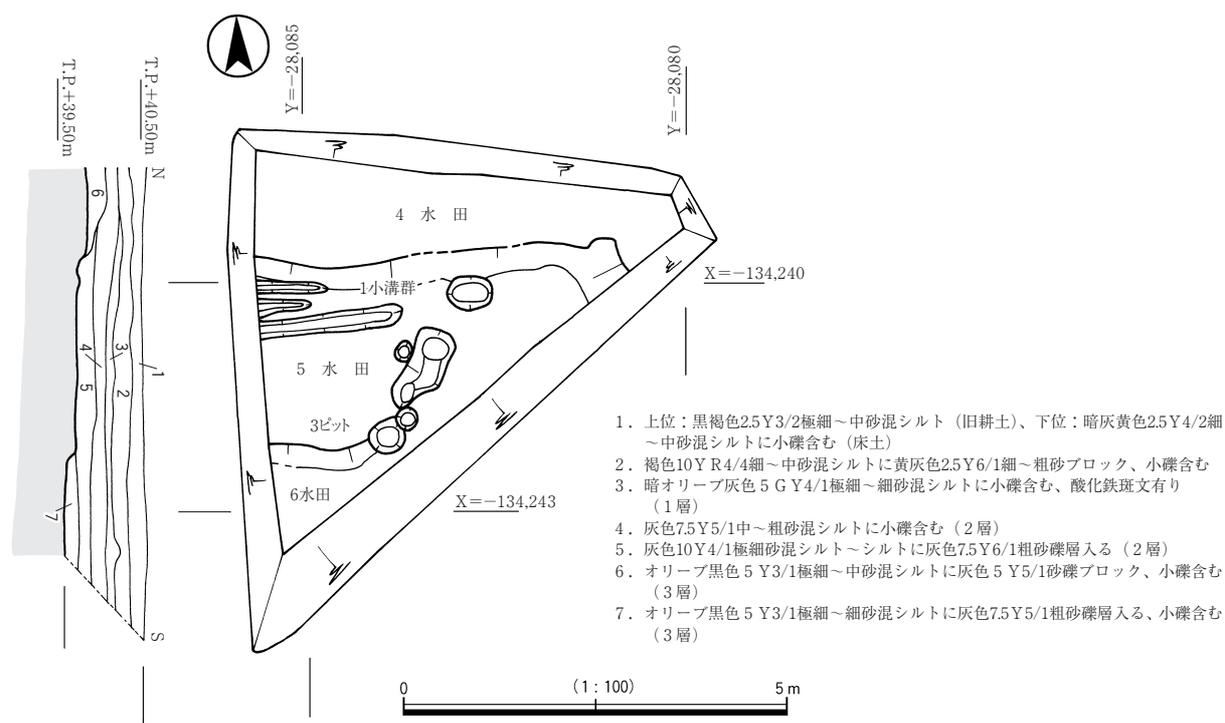


図315 有池遺跡03-2-6調査区 平面図（全体）／西壁断面図

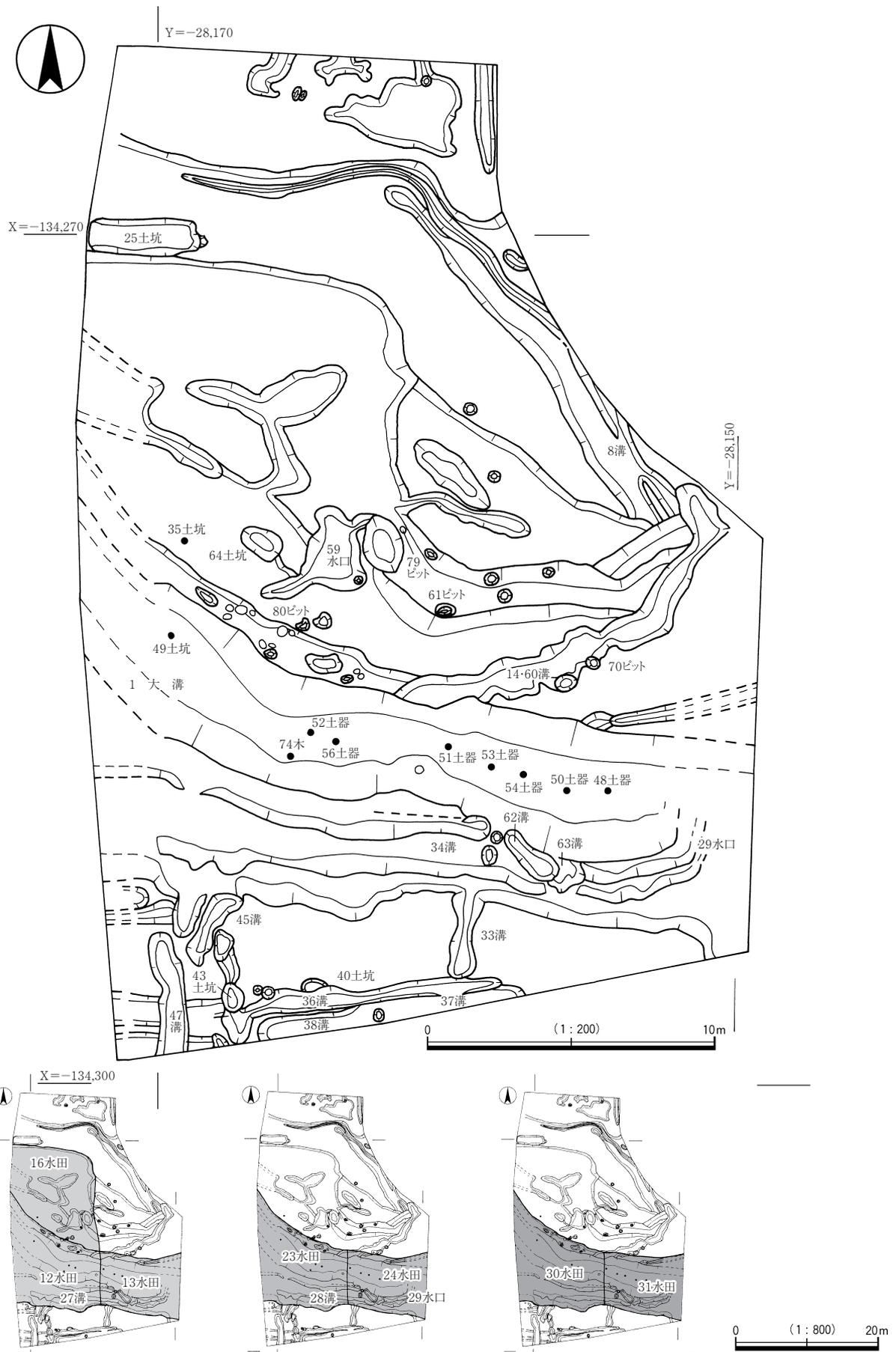


図316 有池遺跡03-2-7 調査区 平面図 (全体)

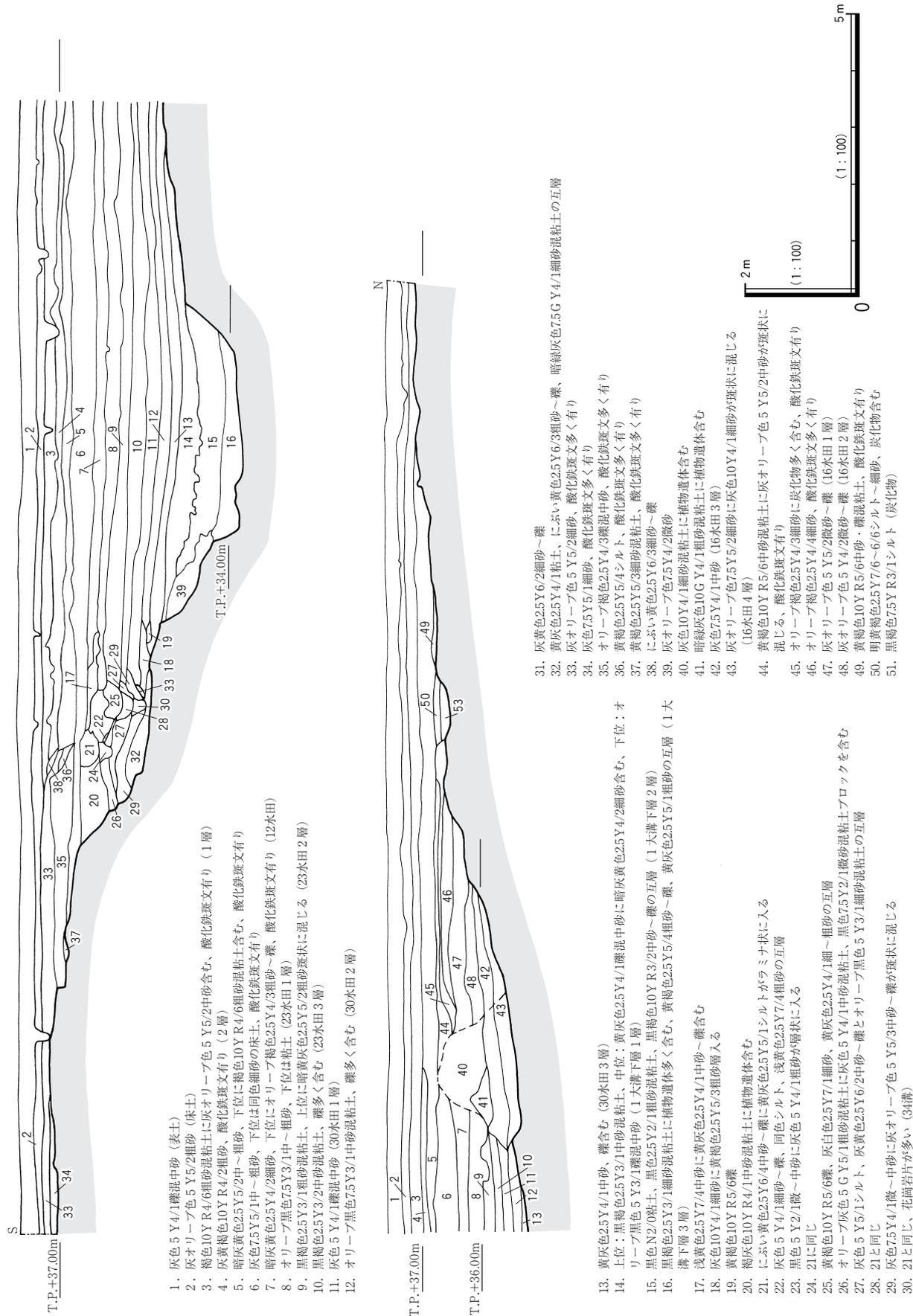


図317 有池遺跡03-2-7調査区 西壁断面図

部から東西、南北方向に区画をもった平坦面が段状に落ちる。これを除去後、最下層の谷の中心部で古墳時代中期～飛鳥時代初頭溝を検出した。

上層の谷は、2層除去後、古墳時代中期～飛鳥時代初頭溝の上層にあたる南半が東西の水田区画に分かれ、西側を12水田、東側を13水田とした。北半は西側が方形の区画をもって北側に張り出しており、これを16水田とした。16水田は耕土、床土を掘削後地山面である2面にいたり、後述する64土坑、59水口、80・79ピットを検出した。北半の東側は2層除去後地山面である2面にいたり、14・60溝、61・70ピットを検出した。

南半の12（西）・13（東）水田は東西の2区画を保持した状態で、23（西）・24（東）水田、30（西）・31（東）水田と、耕土と床土からなる水平堆積が下層へと続く。各水田面の南辺には東西方向の溝がはしり、12（西）・13（東）水田の南辺をはしる溝を27溝、23（西）・24（東）水田の南辺をはしる溝を28溝、28溝東端の北西へ向かって伸びる落ち部を29水口とした。遺物は、12・13水田および27溝では土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器が、23・24水田および28溝では土師器、須恵器、瓦器、陶器、木製品の蓋が、29水口では瓦器・瓦質羽釜が、30・31水田では土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、木製品が出土した。23・24水田および28溝の出土遺物は多く、13世紀の瓦器椀が主体であり、30・31水田では12世紀の瓦器椀が主体である。

本調査区の南側は、3調査区の居住域がひろがる微高地上段にあたり、また微高地上から谷水田に向けて落ちる水口とみられる3調査区50落込が近接するため、水田である割に遺物が多いと考えられる。

30・31水田除去後、蛇行する溝を検出し、1大溝下層とした。上層より1～3層とし、1層が黒褐色中砂混粘土、2層が黒色粘土、3層が植物遺体を多く含む粗砂層である。1層下面では、多くの踏み込みが認められた。遺物は1層から平安時代後期の土師器、須恵器が、2～3層から古墳時代中期～飛鳥時代初頭の土師器、須恵器が出土した。古墳時代中期～飛鳥時代初頭遺物は、2・3層境から特に多く出土し、35～56土器の名称を付けて、一群ごとに取り上げた。遺物は、完形の土師器壺・高杯、須恵器壺、木製品を含む。5世紀後半～7世紀初頭に位置付けられる。3層からは植物遺体が多く出土した。古墳時代遺物はコンテナ約10箱におよぶことから、周辺に古墳時代中期～飛鳥時代初頭集落が存在した可能性が考えられる。

また、13水田からアカマツ、センダン、古墳時代中期～飛鳥時代初頭溝からエゴノキ、アサ、モモ、ブドウ属、ハクウンボク、コナラ、ノブドウ、オニグルミの大型植物遺体が出土した。

なお、古墳時代中期～飛鳥時代初頭溝の壁面、基盤層に突き刺さった状態の木（74木）があり、これを放射性炭素年代測定（AMS法）したところ、弥生時代後期～古墳時代前期に相当する数値を得た。

64土坑（図318） 1大溝の北肩部西側に位置し、16水田を除去した段階で検出した。長軸1.38m、短軸85cm、深さ28cmの不整形な形状をなし、ほぼ中央に完形の曲物が据えられる。土坑埋土は上層がオリーブ灰色～黄灰色礫混細砂と灰色シルトの互層、下層が暗オリーブ灰色粗砂～礫である。上層はシルトが介在することから、曲物は当初その上端は埋まらずに地表面から出ていたものが、流水堆積により次第に埋没したものとみられる。

曲物は、直径45cm、深さ28cmであり、上下端の樺皮紐が残存する完形品である。埋土は灰色中～粗砂が主体であり、一時に埋没した可能性が考えられる。埋土の最下層は比較的しまった灰色粗砂～礫層であり、土坑下層と類似することから、曲物設置時に伴う埋土とみられる。このしまった灰色粗砂～礫層上面の西側に置かれた状態で瓦器椀1個体、砥石1個体が並んで出土した。瓦器椀は12世紀中葉に位置

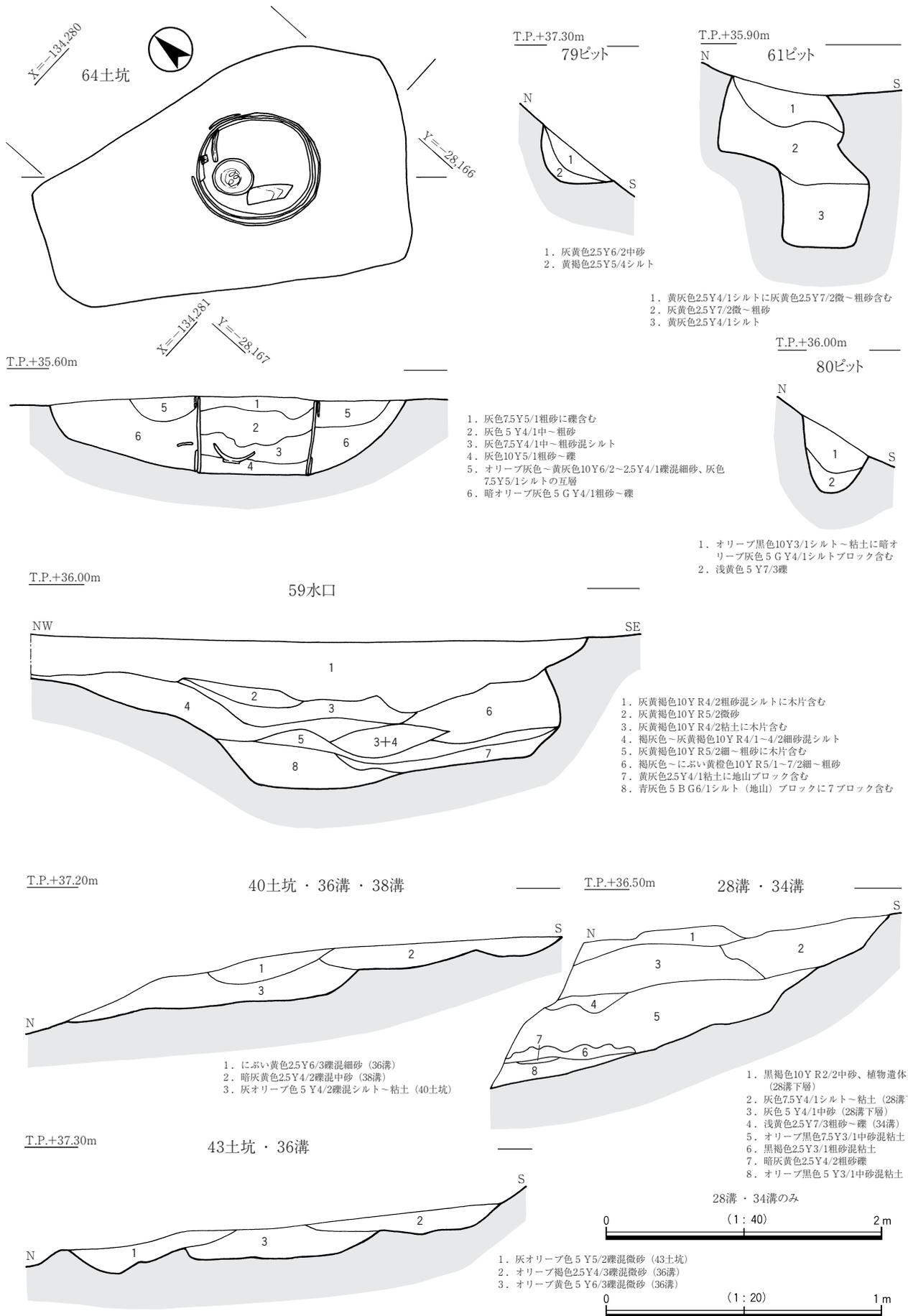


図318 有池遺跡03-2-7調査区 土坑・ピット・水口・溝 平・断面図

付けられる。また、ウメの大型植物遺体が出土した。遺物は他に、曲物および土坑埋土から土師器が出土した。

59水口（図318） 1大溝の北肩部西側に位置し、16水田を除去した段階で検出した。長軸3m、短軸2m、深さ54cmの不整な円形の土坑から、幅60cmの溝が南西へ向かって長さ2mのび、1大溝中の水田へ水を落とすと考えられる。埋土は上層が灰黄褐色シルト～粘土と灰黄褐色微～粗砂の互層、下層が黄灰色粘土ブロックおよび地山ブロックである。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

79ピット（図318） 1大溝の北肩部中央に位置し、16水田を除去した段階で、北西へ下降する斜面地において検出した。直軸約25cmの円形であり断面は浅いU字状である。深さは20cm。埋土は、上層が黄灰色中砂、下層が黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

61ピット（図318） 1大溝の北肩部中央に位置する。直径約35cmの円形であり、断面は鉤形に二段に落ちる。深さは55cm。埋土は、上層が黄灰色シルトに灰黄色微～粗砂を含み、中層が灰黄色微～粗砂、下層が黄灰色シルトである。遺物は土師器・瓦器が出土した。

80ピット（図318） 1大溝の北肩部西側に位置し、16水田を除去した段階で、北西へ下降する斜面地において検出した。直径約20cmの円形であり、断面はU字状である。深さは30cm。埋土は、上層がオリブ黒色シルト～粘土に暗オリブ灰色シルトブロックを含み、下層が浅黄色礫である。遺物は出土していない。

70ピット（図320） 1大溝の北肩部東側、14・60溝の南肩部に位置する。直径30cmの円形であり、断面はU字状である。深さは15cm。埋土は、上層が灰オリブ色礫混細砂、下層が灰オリブ色礫である。遺物は瓦器が出土した。

25土坑（図319） 1大溝、16水田の北肩部に位置する。ほぼ東西方向に主軸をもつ隅丸長方形であり、東端は半円形に突出する。長辺4.14m、短辺1.2m、深さは西が浅く12cm、東が深く22cm、半円形の突出部は浅く4cmである。埋土は、上層が暗灰黄色シルト、中層が明黄褐色粗砂混シルトであり、これらは16水田の耕土、床土にあたることから、土坑本来の埋土はこれより下層となる。したがって土坑本来の埋土は基本的に、土坑の東では明黄褐色シルト（焼土）ブロックに炭化物を含む、中央より西では黒褐色シルト（炭化物）であり、黒褐色シルト（炭化物）は明黄褐色シルト（焼土）ブロックに炭化物を含む層の下層である。なお、半円形の突出部下方には焼土がみられる。

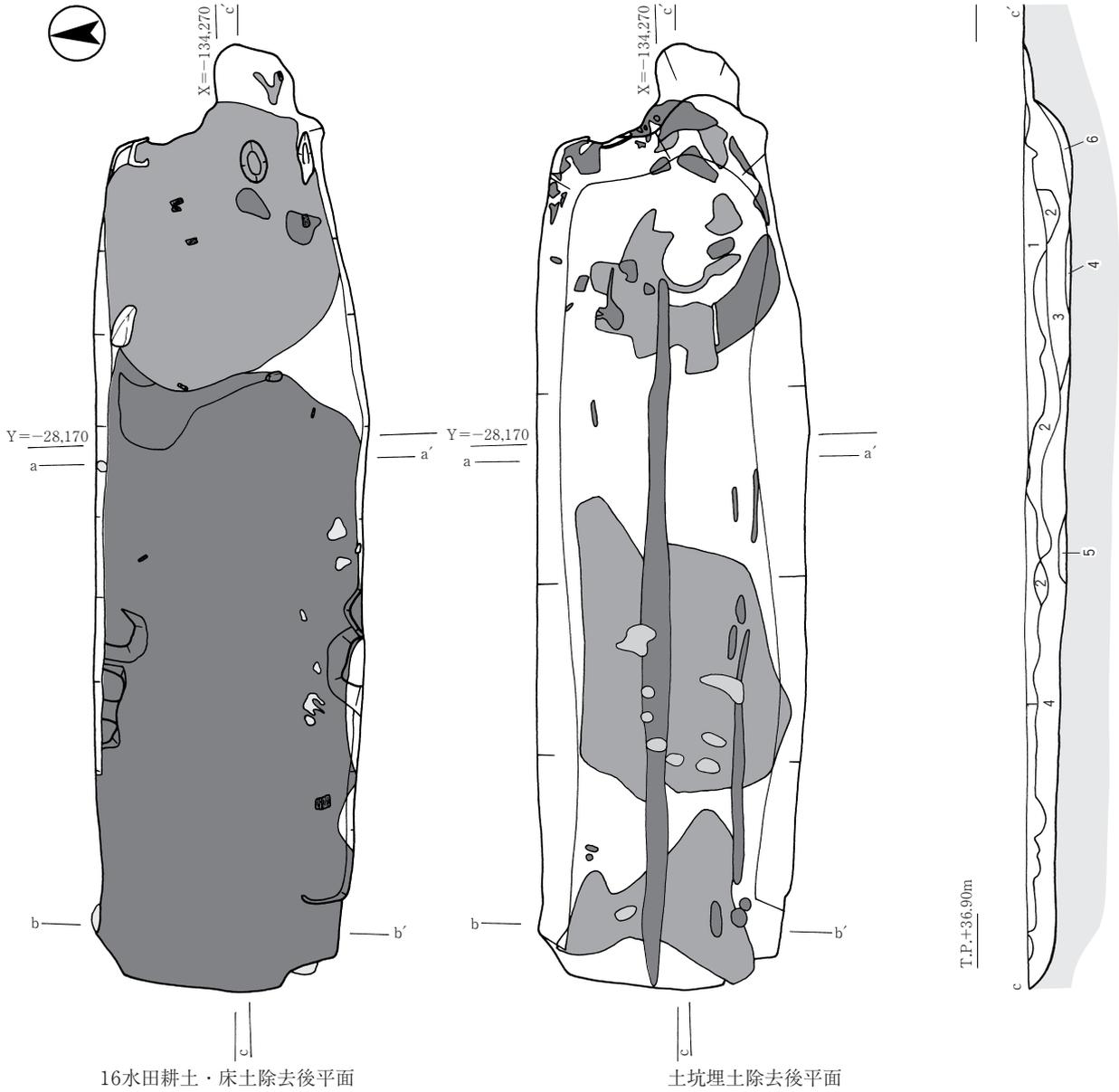
図319左側平面は16水田耕土、床土除去後の状況であり、右側平面は土坑埋土除去後の状況である。

16水田耕土、床土除去後、土坑の東に明黄褐色シルト（焼土）ブロックに炭化物を含む層が不整形円形にひろがり、中央より西に黒褐色シルト（炭化物）がひろがる。両層の境よりやや東、北辺下で20×8cmの石が1個体出土した。石は焼けていないことから、耕土、床土に伴う可能性が考えられる。

埋土除去後、底面中央および西端、東端に、基盤層が被熱して赤変するのを認めた。それらを切る状態で中央に長さ3.1m、幅10cm、深さ5cmの溝を1条、その南に長さ14cm～1.1m、幅4cm、深さ2～3cmの溝を5～6条検出した。溝の断面はV字状で、埋土は炭化物である。土坑中央よりやや西では、これら溝の上に漆喰状の黄色粘土塊が散在した。土坑東端では、直径5～10cmの炭化物がまとまって出土した。

遺物は上層、中層の16水田耕土、床土からは土師器、須恵器、瓦器が出土した。土坑埋土からは土師器小片のみの出土であり、年代は不明である。

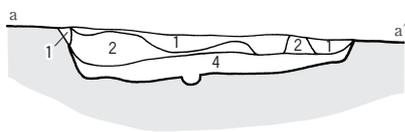
なお同様の遺構として4調査区14土坑、17土坑があり、17土坑は平安時代の可能性が考えられる。本



16水田耕土・床土除去後平面

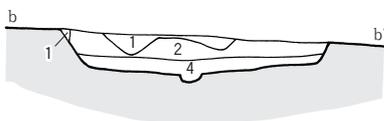
土坑埋土除去後平面

T.P.+36.90m



1. 暗灰黄色2.5Y5/2シルト (16水田耕土)
2. 明黄褐色2.5Y7/6~6/6粗砂混シルト (16水田床土)
3. 明黄褐色5YR5/6シルト (焼土) ブロックに炭化物含む (土坑埋土)
4. 黒褐色7.5YR3/1シルト (炭化物) (土坑埋土)
5. 4に明赤褐色5YR5/6シルト (焼土) ブロック含む (土坑埋土)
6. 明赤褐色5YR5/8シルト (焼土) (土坑埋土)

T.P.+36.90m



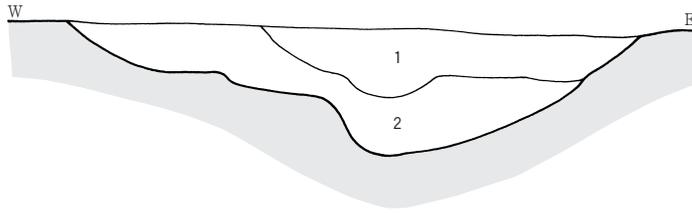
- 焼土
- 炭化物を多く含む焼土
- 焼土上の漆喰状のもの
- 焼土 (基盤層上面)

0 (1:30) 2m

図319 有池遺跡03-2-7調査区 25土坑 平・断面図

T.P.+37.20m

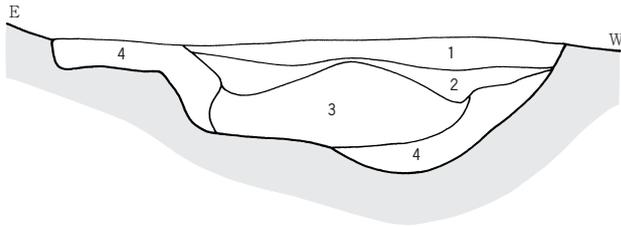
14・60溝 北側



1. 灰色 5 Y4/1中砂混シルトに緑灰色 5 G6/1シルトブロック含む
2. 灰黄色2.5 Y6/2粗砂に灰色 5 Y4/1シルト～粘土ブロック含む

T.P.+36.90m

14・60溝 中央

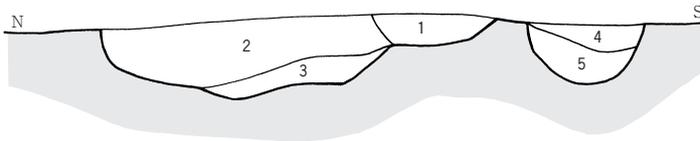


1. オリーブ黒色 5 Y3/1礫混中砂
2. 淡黄色 5 Y8/3礫に土器片含む
3. オリーブ黄色 5 Y6/4礫混粗砂
4. 3に緑灰色10 G Y6/1～5/1粗砂～礫ブロック

T.P.+35.80m

14・60溝 南側

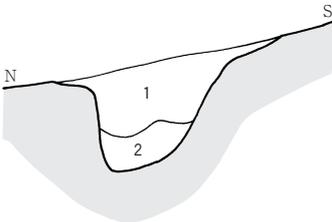
70ピット



1. 黒褐色2.5 Y3/1礫混シルト～粘土
2. オリーブ黒色 5 Y3/1細砂と黄褐色2.5 Y5/3細砂の互層
3. 灰白色 5 Y7/2粗砂～礫
4. 灰オリーブ色 5 Y5/2礫混細砂
5. 灰オリーブ色 5 Y5/3礫

T.P.+35.80m

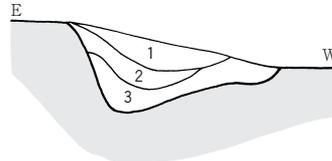
62溝



1. 灰色 5 Y4/1細砂混シルト～粘土
2. 灰オリーブ色 5 Y6/2礫に暗オリーブ灰色 5 G Y4/1粘土ブロック含む

T.P.+35.90m

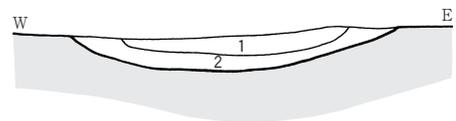
63溝



1. 灰色10 Y4/1シルト～粗砂
2. 灰色 5 Y6/1粗砂
3. 灰オリーブ色 5 Y6/2礫

T.P.+36.80m

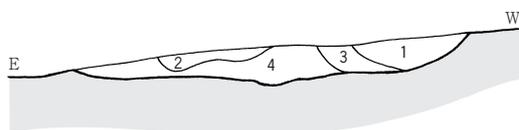
33溝



1. 黄褐色2.5 Y5/3礫混微砂
2. 暗灰黄色2.5 Y5/2礫混微砂

T.P.+36.90m

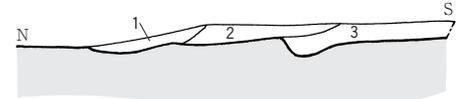
45溝



1. 灰オリーブ色 5 Y4/2礫混細砂、酸化鉄斑文有り
2. オリーブ褐色2.5 Y4/3礫混微砂、酸化鉄斑文有り
3. オリーブ黒色 5 Y3/2細砂
4. 暗オリーブ色 5 Y4/3シルト

T.P.+37.30m

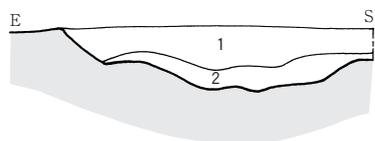
36溝・37溝



1. 灰オリーブ色 5 Y6/2礫混微砂 (36溝)
2. 灰色 5 Y5/1礫混微砂 (36溝)
3. 黄灰色2.5 Y6/1礫混微砂 (37溝)

T.P.+37.00m

47溝



1. オリーブ褐色2.5 Y4/4礫混細砂
2. 灰オリーブ色 5 Y4/2礫混微砂

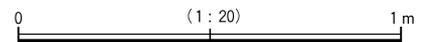


図320 有池遺跡03-2-7調査区 溝 断面図

遺構も同様の年代となる可能性が考えられる。

40土坑 (図318) 1大溝の南肩部、36溝、38溝の下部に位置する。直径1.1mの不整円形であり、断面は浅い皿状である。深さは12cm。埋土は、灰オリーブ色礫混シルト～粘土。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

43土坑 (図318) 1大溝の南肩部、36溝の上部に位置する。直径60cmの不整円形であり、断面は浅い皿状である。深さは10cm。埋土は、灰オリーブ色礫混微砂である。遺物は須恵器、瓦器、瓦質三足釜脚部が出土した。

36・37・38溝 (図318・320) 1大溝の南肩部、調査地南辺に位置する。東西方向の37・38溝を切って36溝が平行し、36溝は西端が南へ屈曲する。東西方向が長さ9.5m、幅80cm、南北方向が長さ1.3m、幅1.1mであり、断面は浅いU字状である。深さは東で浅く6cm、西で深く10cmである。埋土は、37・38溝が暗灰黄色礫混中砂～黄灰色礫混微砂、36溝がにぶい黄色礫混細砂～オリーブ黄色礫混微砂である。遺物は37・38溝、36溝とも土師器、須恵器、瓦器が出土した。1大溝を最終的に埋積する中世水田(2層)に伴う区画溝と考えられる。

8溝 調査区北端の微高地から南へ一段下がった段落ち沿いにはしる北西-南東方向の溝である。長さ15.2m、幅1.7mである。深さは8cm。埋土は、灰黄褐色粗砂～暗灰黄色粗砂混シルトである。遺物は土師器皿、瓦器椀、銭貨(景德元寶)が出土した。1大溝を最終的に埋積する中世水田(2層)に伴う区画溝と考えられる。13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。

14・60溝 (図320) 1大溝の北肩部東側に位置する北東-南西方向の溝である。長さ14m、幅60cm～1.8mであり、北端が西へやや屈曲する。深さは35cm。埋土は、上層がオリーブ黒色礫混中砂～淡黄色礫、下層がオリーブ黄色礫混粗砂に地山ブロックを含む。遺物は土師器皿、須恵器甕、瓦質羽釜、磁器が出土した。北端はややひろがり、深くなっており、東接する4調査区18溝北肩部にはほぼ直交することから、4調査区18溝北肩部の北にひろがる水田からの排水用の溝と考えられる。

34溝 (図318) 1大溝の南肩部西側に位置する東西方向の溝である。長さ10m、幅30cmである。深さは7cm。埋土は、浅黄色粗砂～礫。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜、陶器椀など多数出土した。1大溝を埋積する23水田より下層、30水田前後の段階における水田区画溝と考えられる。13世紀に位置付けられる。

62溝 (図320) 1大溝の南肩部東側に位置する北西-南東方向の溝である。長さ2.3m、幅60～90cmである。深さは27cm。埋土は、上層が灰色細砂混シルト～粘土、下層が灰オリーブ色礫に暗オリーブ灰色粘土ブロックを含む。遺物は出土しなかった。北端が1大溝南肩部にはしる段落ちを切り深くなっていることから、1大溝を埋積する中世水田のある段階における排水用の溝の一部と考えられる。また、北端が33溝の延長線上にあることから、排水の出口は共有あるいは踏襲されたのかもしれない。対岸の14・60溝と方向性が対称になることから、14・60溝と共存した可能性も考えられる。

63溝 (図320) 1大溝の南肩部東側、62溝に東接する南北方向の溝である。長さ1.2m、幅90cmである。深さは22cm。埋土は、上層が灰色シルト～粗砂、中層が灰色粗砂、下層が灰オリーブ色礫である。遺物は出土しなかった。62溝同様、北端が1大溝南肩部にはしる段落ちを切り深くなっていることから、1大溝を埋積する中世水田のある段階における排水用の溝の一部と考えられる。62溝に切られていることから、62溝より古い、排水の出口と考えられる。

33溝 (図320) 1大溝の南肩部、中央よりやや東側に位置する南北方向の溝である。長さ3m、幅85

cmである。深さは10cm。埋土は、上層が黄褐色礫混微砂、下層が暗灰黄色礫混微砂である。遺物は土師器、瓦器が出土した。北端が1大溝南肩部を切り深くなっていることから、1大溝を埋積する中世水田のある段階における排水用の溝と考えられる。33溝の延長線上に62溝の北端があることから、排水の出口は共有あるいは踏襲されたのかもしれない。

45溝 (図320) 1大溝の南肩部西側に位置する北北東-南南西方向の溝である。長さ2.9m、幅1.05mである。深さは10cm。埋土は、上層から灰オリーブ色礫混細砂、オリーブ褐色礫混微砂、オリーブ黒色細砂、暗オリーブ色シルトである。遺物は土師器、瓦器が出土した。

47溝 (図320) 1大溝の南肩部西端に位置する南北方向の溝である。長さ4.2m、幅1mである。深さは17cm。埋土は、上層がオリーブ褐色礫混細砂、下層が灰オリーブ色礫混微砂である。遺物は土師器、瓦器が出土した。東西方向の溝を切っていることから、1大溝を埋積する中世水田のある段階における排水用の溝と考えられる。

8.8 調査区 (図321)

5調査区の東側、2・4調査区の西側、7調査区の北側に位置する調査区である。調査前の状況は灌木が生えており、他の調査区がもとは水田であった状況に比べると、本調査区のみ異なる状況であった。

2面では、調査区のほぼ中央を東西にはしる12大溝、調査区南端を東西にはしる9流路の他にピット、溝を確認した。

12大溝 (図322) 調査区ほぼ中央で検出した。遺構延長部は西側の5調査区(2流路)、東側の2・4調査区(12大溝)で検出した。他調査区同様、上層が中世水田、中層が平安時代後期水田、下層が古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝である。長さ10m、幅11～16m、深さ2.75m、底面の標高はT.P.+34.4mである。断面形は下層部分がV字状であり、中層、上層にかけてゆるやかにひろがる。中層の6層が堆積する南肩部には東西方向の木杭列がみられ、肩部を整形し土留めをしたことがわかる。埋土は2～10層の9層に分かれる。上層(2～4層)が中世の谷水田、中層(5～6層)が平安時代後期の谷水田、下層(7～10層)が古墳時代中期～飛鳥時代初頭の溝である。

上層は、2層がにぶい黄褐色礫混細砂～黄褐色粗砂混粘土、3層が灰オリーブ色細砂混粘土、4層が黄灰色中砂混粘土で、これら2～4層は中世の水田耕作土である。遺物は13世紀を主体とする土師器皿・瓦器椀・陶器・磁器椀などが出土した。

中層は、5層が黄灰色粗砂、6層が黒褐色粘土に植物遺体多く含む。両層とも下面に踏み込みまたは攪拌の痕跡が認められ、6層が堆積する南肩部は整形され、木杭列により土留めされていることから、平安時代後期の水田耕作土と考えられる。遺物は12世紀を主体とする土師器皿・須恵器・瓦器椀などが出土した。

下層は、7層が黒色粘土、8層が暗灰黄色粗砂と黒褐色粗砂の互層、9層が黒色粘土、10層が暗灰黄色粗砂と黒褐色粗砂の互層で底面に接する。7・9層は腐植土を多く含むことなどから流水が比較的穏やかな時期の堆積層、8・10層は粗砂を主体とする互層堆積の状態から流水が激しい時期の堆積層と考えられる。遺物は古墳時代中期～飛鳥時代初頭の土師器甕・高杯、須恵器などが出土した。

9流路 (図322) 調査区南端で検出した。遺構延長部は西側の5調査区(1流路)、3調査区(3流路)で検出した。東側の4調査区では、調査区西側の一段低くなっている部分は削平のため不明であるが、調査区東側の高い部分では、17土坑周辺が浅い谷状の落込であり、これに続く可能性が考えられる。

長さ4m、幅5.1m、深さ1.75m、底面の標高はT.P.+35.6mである。断面形は下層部分がV字状であ

り、上層にかけてゆるやかにひろがる。

埋土は1～5層に分かれる。1層が黄褐色細砂、2層がにぶい黄褐色中砂混粘土、3層が黄褐色粗砂、4層が黄灰色中砂、5層が灰オリーブ色粗砂である。遺物は4層から沈線をもつ縄文土器が出土した他は、まったく出土しなかった。当初1層のみ掘削し落込と考えたが、2層が基盤層に類似するものの、やや黒色であったため下層を確認し、流路であることを確認した。

6ピット (図321) 12大溝の北肩部中央に位置し、12大溝6層を除去した段階で、南へゆるやかに下降する斜面地において検出した。直径約50cmの円形であり断面は浅いU字状である。深さは10cm。埋土は、灰色礫混細砂である。遺物は須恵器が出土した。

7ピット (図321) 12大溝の北肩部中央、6ピットの西に位置する。長軸80cm、短軸40cmの楕円形であり断面はU字状である。深さは20cm。埋土は、灰色粘土である。遺物は土師器が出土した。

11ピット (図321) 12大溝の南肩部西側に位置し、12大溝6層を除去した段階で検出した。直径30～50cmの円形であり、断面はU字状である。深さは12cm。埋土は、にぶい黄色粗砂である。遺物は瓦器椀が出土した。

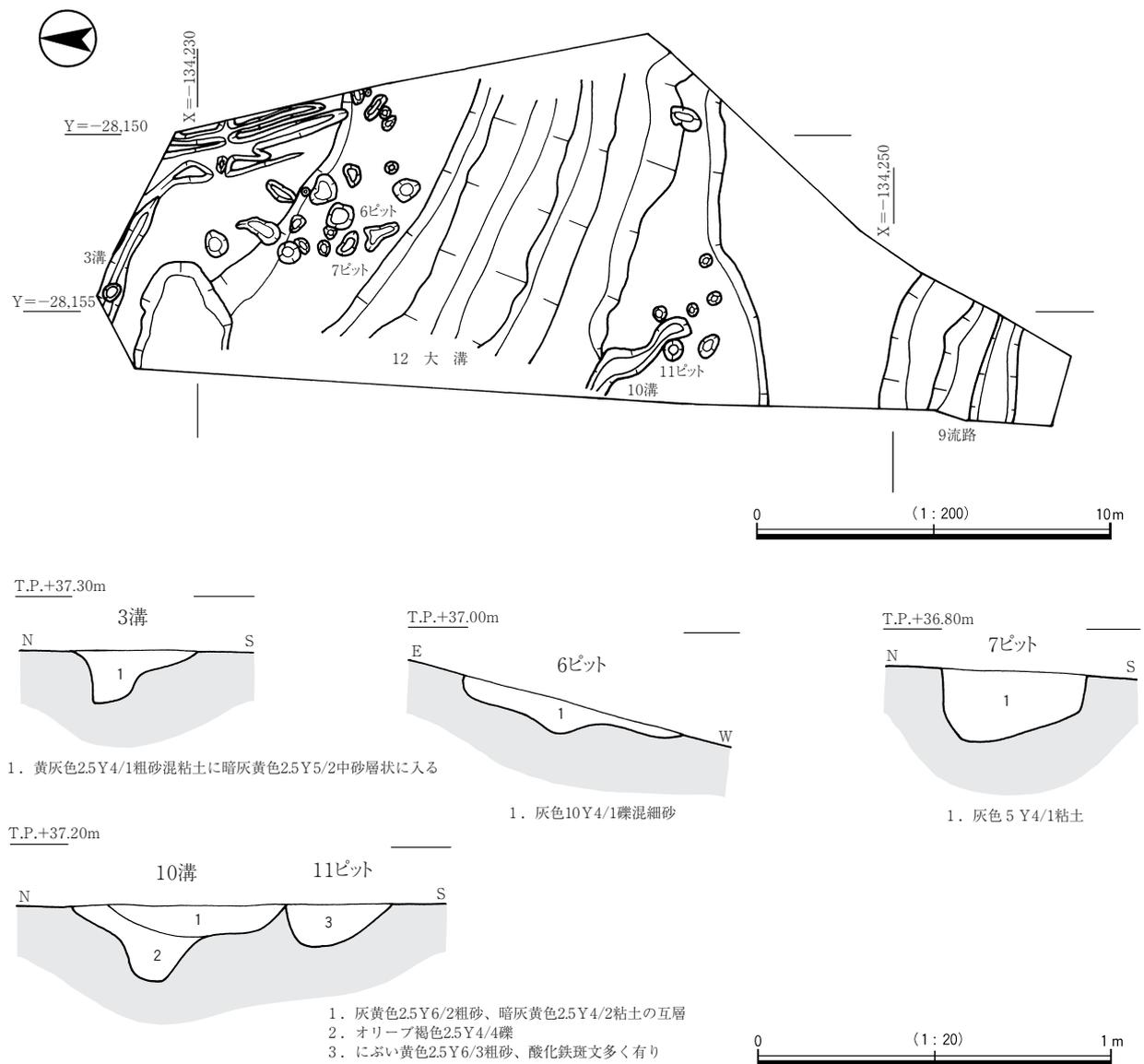


図321 有池遺跡03-2-8調査区 平面図(全体) / 溝・ピット 断面図

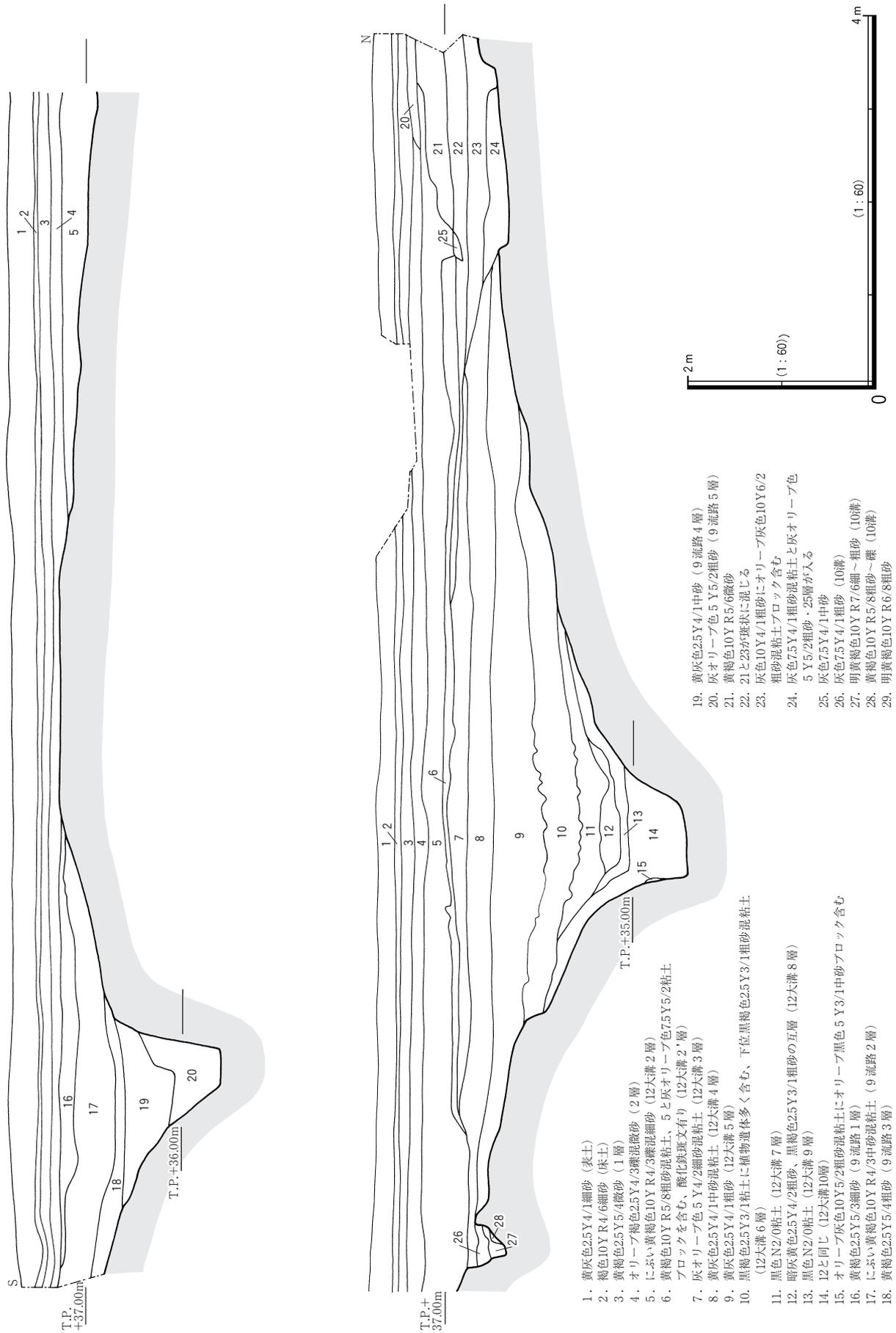


図322 有池遺跡03-2-8調査区 西壁断面図

3溝（図321） 調査区北端をはしる西北西－東南東方向の溝である。長さ4 m、幅60cmであり、断面は二段に落ちるU字状である。深さは14cm。埋土は、黄灰色粗砂混粘土に暗灰黄色中砂が層状に入る。遺物は土師器が出土した。調査区の区画に沿って本溝をはじめとする鋤溝が平行してはしることから、本調査区がもとは水田として利用されていたと考えられる。

10溝（図321） 12大溝の南肩部西側をはしる北西－南東方向の溝である。長さ3.5m、幅40～90cmであり、断面は二段に落ちるU字状である。深さは22cm。埋土は、上層が灰黄色粗砂と暗灰黄色粘土の互層、下層がオリーブ褐色礫である。遺物は土師器皿、瓦器椀、瓦質三足釜が出土した。北端が12大溝南肩部にはしる段落ちを切り深くなっていることから、12大溝を埋積する中世水田のある段階における排水用の溝の一部と考えられる。

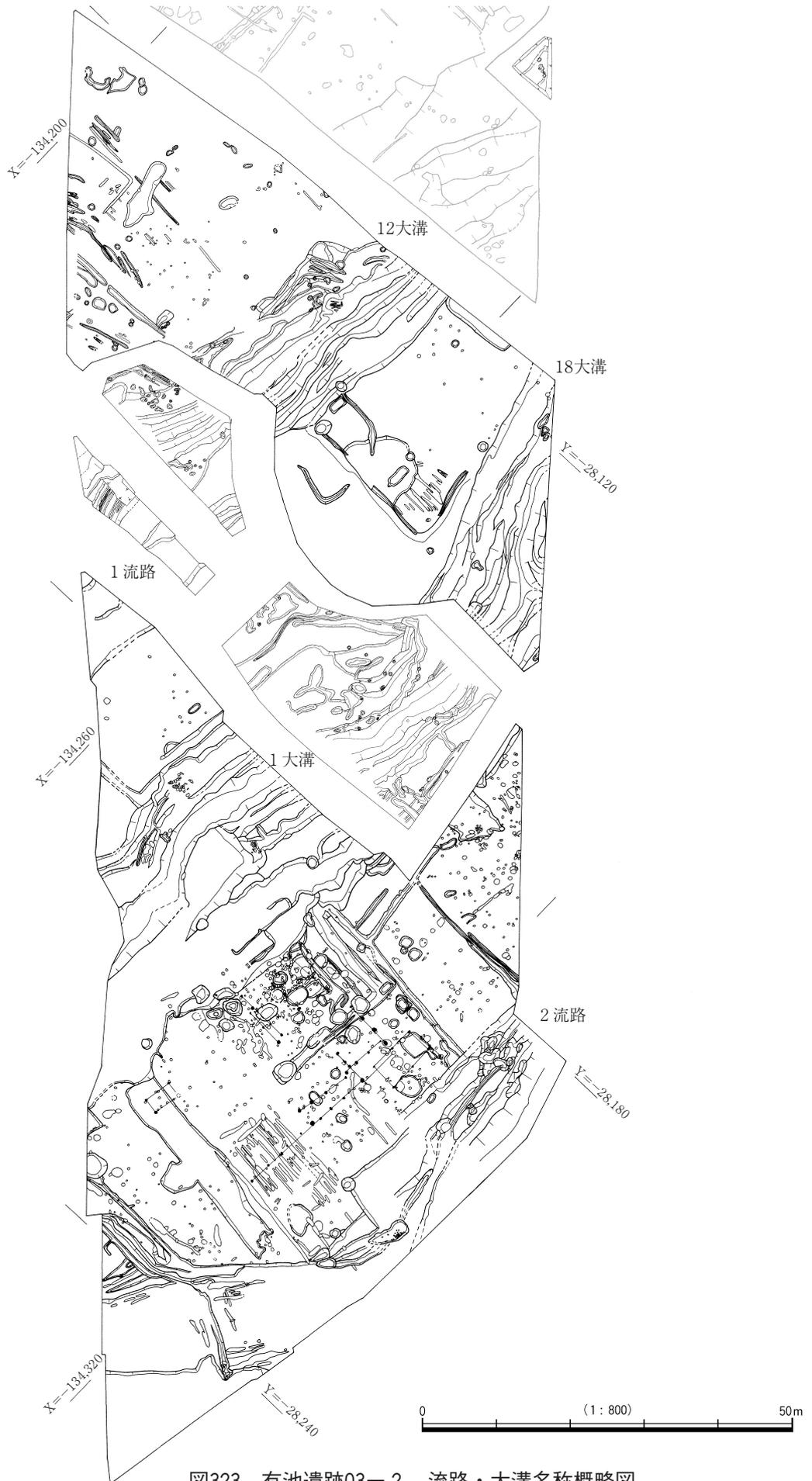


图323 有池遺跡03-2 流路・大溝名称概略图

第3節 遺構のまとめ

有池遺跡03-2では、発掘調査の結果、ほぼ東から西へとはしる谷が3筋とこれら谷筋の間に位置する微高地を3箇所検出した。調査では調査区ごとに谷の名称を付したが、小文では便宜上、谷を北から12大溝、1大溝、2流路と呼称する(図323)。谷筋間の微高地上では、北側と中央の微高地上では顕著な遺構が少なく、南側の微高地上でまとまった遺構を検出した。調査地は大きく東から西へ、また、北から南へと緩やかに下降する地形であり、北側と中央の微高地上は近世以降の水田開発による削平のため、中世以前の遺構が失われた可能性が考えられる。

今回の調査では、古墳時代中期～飛鳥時代初頭(5世紀後半～7世紀初頭)、平安時代後期(11世紀後半～12世紀)、中世(13世紀～14世紀後半)の3段階の遺構を確認し、縄文時代～中世の遺物が出土した。その他、理化学的分析によりさまざまな成果を得ることができた。以後、これらの成果をまとめ、周辺遺跡との関連をまじえて、年代順に記述することとする(図324)。

縄文時代以前～古墳時代前期

今回の調査で得られた成果のうち、最も古い年代に相当するものは、現地表面から2m下、4調査区東壁T.P.+35.3m前後で採取した試料より得られた始良Tn火山灰である。暦年では2.6～2.9万年前頃になるとみられる。後述するように、12大溝と1大溝谷底の基盤層から採取した試料から、この地点における基盤層の形成年代は弥生時代後期～古墳時代中期という結果が得られており、同じ基盤層の形成年代を示す結果としては乖離する年代を得ることとなった。基盤層の形成については、今後の資料の蓄積とともに検討を重ねる必要がある。

石器は剥片を中心に20点弱が出土した。調査地から東へ約700mの神宮寺遺跡は、山間を流れる清流が扇状地へとでる境界にあたる傾斜変換点に立地し、尖頭器および国府型ナイフ形石器が出土しているが、扇状地上に立地する今回の調査地では、旧石器はみとめられなかった。

8調査区南端の9流路は、上層が基盤層に類似していたが、やや黒色であったため下層を確認し縄文土器が1点出土した。縄文土器(図368-456)は沈線をもつが、小片のため年代は確定できない。

近接する神宮寺遺跡は縄文時代早期の標式遺跡として著名であり、今回の調査でも関連資料の検出が期待されたが、明らかな縄文時代早期の遺物を得ることはできなかった。

4調査区12大溝下層の古墳時代溝から、古墳時代中～後期の遺物とともに縄文時代後期初頭とみられる磨消縄文土器が出土した。摩滅はみとめられない。

周辺では南西へ約4～5kmの星田旭遺跡で類似した土器がみとめられる。星田旭遺跡からもたらされたものか、もしくは周辺に未知の縄文時代後期の遺跡が存在するのかは不明であるが、今後の資料の蓄積により明らかになるものと期待する。

縄文時代後期以降、古墳時代中期まで出土土器はみとめられない。ただし、石鏃、石庖丁、石核、剥片などの石器が出土していることから縄文時代から弥生時代にかけて、人々の往来はあったものと考えられる。とくに石庖丁の存在には注意を要する。西へ約1kmの私部城遺跡で弥生時代中期土器および粘板岩製石庖丁が出土しているほかは、周辺では、北接する倉治遺跡や南へ800mの山裾にひろがる寺村遺跡では弥生時代後期土器の散布がみとめられるのみである。近年調査された天野川右岸に立地する私部南遺跡では、弥生時代後期水田、弥生時代中期の石庖丁が明らかにされており、今回出土した石庖丁もこうした天野川沿いの低地部からもたらされた可能性が大きい。

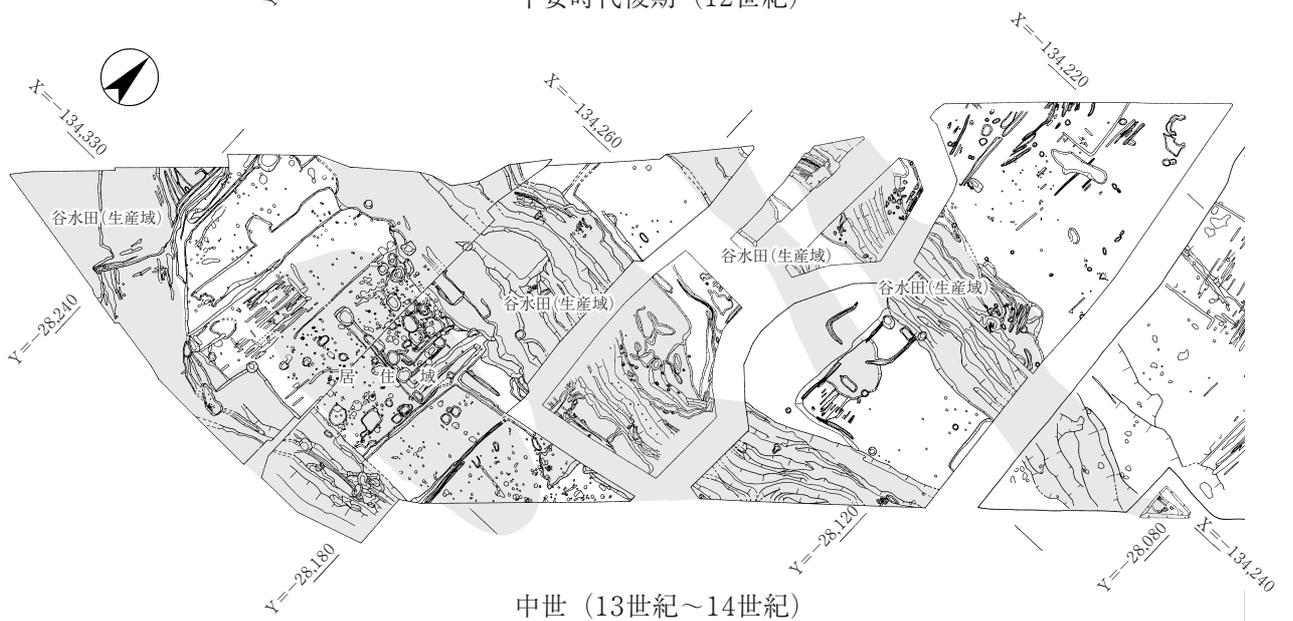
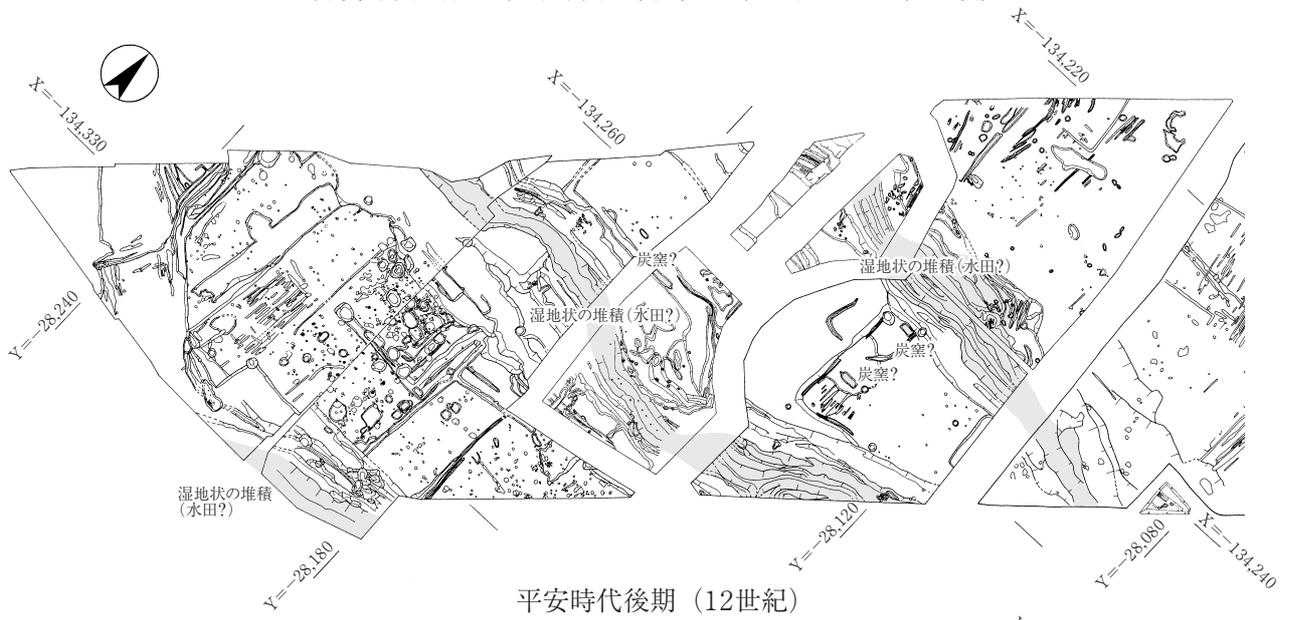
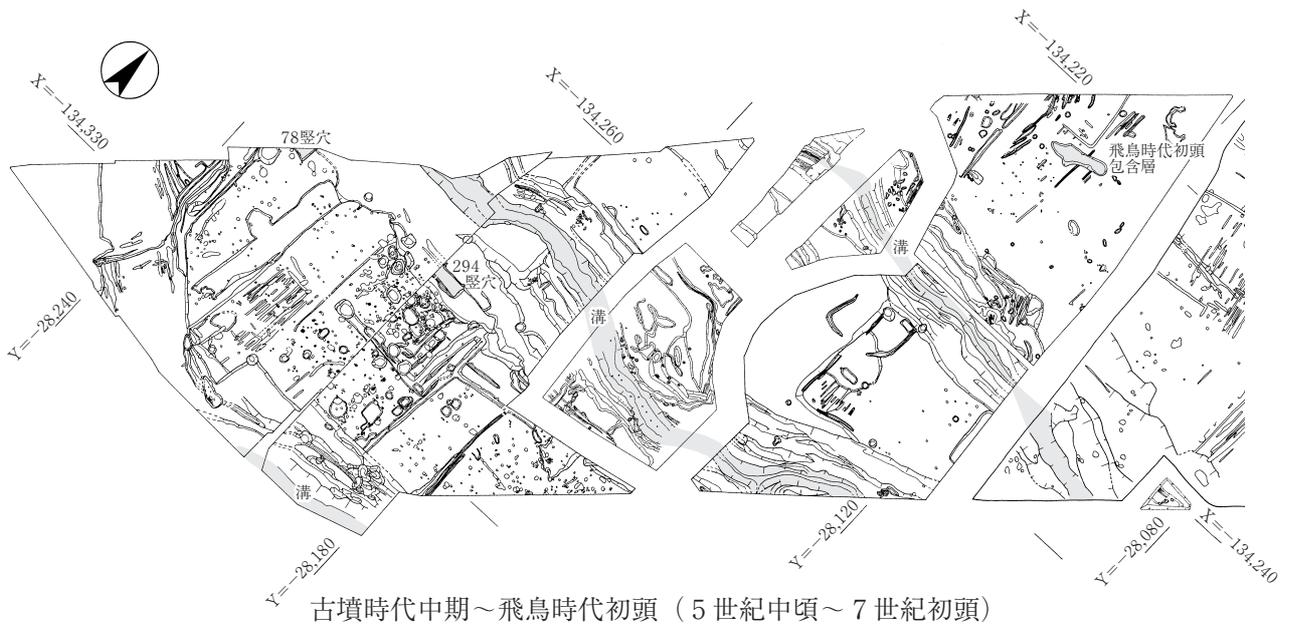


図324 有池遺跡03-2 遺構変遷図

7 調査区 1 大溝の基盤層から検出した木片を AMS 法により年代測定したところ、弥生時代後期～古墳時代前期に相当する年代が得られ、この時期においても開析谷の埋積が継続していたと考えられた。

弥生時代後期～古墳時代前期、東倉治遺跡、寺村遺跡、森遺跡と山裾に連なる遺跡において集落の存在が明らかであり、これら集落をつなぐ道の存在が推定されている。また、森遺跡から東へ山をあがった標高210～230mの地点には、弥生時代後期土器が散布し、南山遺跡として高地性集落の存在が想定されている。また、森遺跡に東接する尾根上には古墳時代前期の森古墳群が立地する。周辺遺跡を含めた花粉分析からは、遺跡周辺にはアカガシ亜属を主体としてシイノキ属などを伴う、コナラ亜属などの落葉広葉樹などからなる暖温帯性広葉樹林がひろがり、後背丘陵や後背山地などにはモミ属、ツガ属、スギ属などの温帯性針葉樹が分布していたと推定されている。この時期、山裾を中心とする地域には人々の往来があったとみられるが、やや降った扇状地は、いまだ人々の手がおよばない、暖温帯性広葉樹林がひろがる景観が想定される。

古墳時代中期～飛鳥時代初頭（5世紀後半～7世紀初頭）

12大溝、1大溝、2流路の3筋の谷を利用し、溝（以下、小文では「古墳時代溝」と呼称）の掘削が行なわれる。いずれの溝も断面V字形であり、下層には砂が上層には黒色粘土が堆積する。下層の砂は黒色粘土の薄層を挟む。遺物は初期須恵器段階からTK217型式までのものがみとめられ、MT85型式前後のものが主体である。須恵器よりも土師器が多く、さまざまな器種がみられるものの、土師器甕・高杯が多く出土した。遺物は下層から上層まで出土しており、とくに層境に集中する。下層と上層で、とくに年代差はみとめられず、溝の埋積は比較的短期間になされたと考えられる。粒度分析から、溝は間欠的な土砂流出により埋積した可能性が示唆されており、これと整合性をもつ。また、珪藻、花粉、植物珪酸体微化石が比較的少ないということも埋積の速さを傍証している可能性がある。ただし、溝底から得られた試料による珪藻分析により止水性の種が検出されており、掘削当初、溝内は水流がある状態ではなかったとみられる。ただし、溝底に滞水を示すようなシルト～粘土層はみとめられないことから、古墳時代の溝は、掘削後、ある程度管理された状態の後、間欠的な土砂流出により埋積し、この埋積した砂層上に土器が集中し、上層の黒色粘土中にかけて土器は埋まる状態である。上層の黒色粘土は緻密であり、滞水状態のなかで継続して埋積したとみられる。土器は砂層上でほぼ完形に復元できるものが多数、溝の両肩部を中心に出土しており、人為的な廃棄の可能性も考えられるが、後述するように居住域のあり方が不明瞭であり、断定には至らない。

古墳時代の遺構は谷底の溝のほかに、3調査区1大溝の南肩部で294堅穴を1棟検出した。中世の谷水田開発による削平のため、南辺4.8m、南北1m弱が残存するのみであった。焼失住居であり、板状の炭化材が等間隔でみられ羽目板の可能性が考えられた。また、炭化材上では据えられた状態で土器がまともに出て出土した。甕に手捏土器が1個体入った状態で出土したり、土師器高杯の杯部または二重口縁壺の口縁部に類似する不明土器2点が並び据えられた状態で出土しており、住居廃棄後の人為的な行為がうかがえる例として重要である。出土遺物中、須恵器が体部片一片のみであり年代の特定は困難であるが、土師器甕から古墳時代中～後期でも後期の可能性が高い。

他に、1調査区78堅穴が住居跡の可能性はあるが、遺物が出土しておらず年代が不明である。78堅穴は壁沿いに柱穴列がめぐり、294堅穴とは埋土を含め様相が異なる。

古墳時代の溝からは、12大溝では少量の遺物が出土したのみであるが、1大溝からは3・7調査区でまとまった量の遺物が出土し、2流路においても3調査区ではまとまった遺物が出土した。これより古

墳時代中期～飛鳥時代初頭の居住域が3調査区周辺に存在した可能性が考えられるが、微高地上で検出した遺構はすべて中世に属し、また、古墳時代遺物も全く認められなかった。古墳時代溝出土土器のありかたからは、古墳時代中期～飛鳥時代初頭の居住域は、微高地上にあったものが中世の水田開発により削平され、消滅した可能性が考えられるが、まったく痕跡がみとめられないことから、可能性を指摘するにとどめる。ただし、2調査区中央部と平成14年度調査地西端において限られた範囲ではあるが同時期の包含層がみとめられることから、居住域はある程度のひろがりがあった可能性もまた考えられる。

古墳時代溝埋土中のイネ属および珪酸体は僅少であり、溝周辺で稲作はされていなかったと考えられる。有池遺跡周辺の低位段丘上には古墳時代の水田開発は及んでいなかったようである。有池遺跡03-2調査地は微地形分析から低位段丘上をはしる谷にあたっており、この谷の内容として3筋の谷を検出したこととなる。この三筋の谷を利用して掘削された溝は、西側の天野川氾濫原にひろがるとみられる水田への用水路として機能した可能性が考えられる

古墳時代中期～飛鳥時代初頭、2流路を挟んで西接する上私部遺跡では、竪穴住居および掘立柱建物がまとまって検出されており、まさにこの時期の居住域のひろがり確認されている。まとまった遺構からは、古墳時代中～後期の竪穴住居から古墳時代後期～飛鳥時代初頭の掘立柱建物への変遷を追うことができる。また、上私部遺跡から府道交野久御山線を挟んでその西側にひろがる私部南遺跡では古墳時代初頭から飛鳥時代前半にわたる水田が確認されており、ここが上私部遺跡の居住域に伴う生産域になると考えられる。

この時期、周辺では、森遺跡の古墳時代中～後期の鍛冶関連遺構が注目されている。また前期古墳の森古墳群、中期古墳の車塚古墳群、後期群集墳の清水谷古墳、倉治古墳群、寺古墳群が山麓に分布し、窯跡は大谷窯跡、大谷北窯跡が古墳時代後期から飛鳥時代にかけて操業している。

この時期の植生は、溝周辺ではネザサ節、ヨモギ属などの草本類が成育し、溝内にはガマ属、ヨシ属など水湿地性植物が分布する。周辺の森林は古墳時代以前と類似するアラカシ、アカガシ亜属、シイノキ属などの暖温帯性常緑広葉樹、オニグルミ、エゴノキ、コナラなどの落葉広葉樹、モモ、スモモなどの分布が推定されている。こうした植生は周辺遺跡の理化学的分析からも、縄文時代晩期以前の常緑広葉樹から中世の二次林へと変遷する途上の様相であり、人間活動の影響や地形環境の変化などの影響を受けた植生と考えられている。

上私部集落での営み、森集落での鍛冶操業、大谷窯の操業など、この時期森林の伐開はかなり進んだと想定される。

飛鳥時代後半～平安時代前半

この時期の遺構、遺物は検出されていない。唯一、12大溝、1大溝、2流路の3筋の谷に埋積する、古墳時代埋土と平安時代後期埋土の間層である黒色粘土が、遺物は出土していないもののこの時期に相当する可能性がある。黒色粘土からは植物珪酸体が多数検出され、長い期間にわたる堆積が示唆されている。微化石分析から、溝内にはガマ属やヨシ属などの水湿地生植物が生育し、イネ科やソバ属花粉からは周辺の植生が人間活動の影響を受けていたことが推定されている。森林植生は前代同様暖温帯性広葉樹林が存在するもののマツ属の増加傾向がみとめられ、先述の森林伐開の影響が考えられる。

奈良時代後期、交野山麓に開元寺、津田寺が創立されるほか、周辺に顕著な遺跡はみとめられない。平安時代、交野が原は天皇をはじめ宮廷人の遊猟地となっていることから、この時期の様相がうかが

える。

平安時代後期（11世紀後半～12世紀）

12大溝、1大溝、2流路の3筋の谷において、前代の黒色粘土上層に堆積する腐植物層とその上層のシルト～細砂層がこの時期に相当し、2調査区12大溝では水場遺構とみられる15木組を検出した。7調査区30・31水田出土土器は12世紀の瓦器が主体であり、この時期の水田とみられる。また、4調査区14・17土坑、7調査区25土坑は炭窯の可能性をもつ。出土遺物はいずれも瓦器椀、土師器皿など少量である。

3筋の谷に埋積する腐植物層とシルト～細砂は、二層ともに下面が踏み込みあるいは攪拌のため乱れている。とくに、8調査区12大溝では、腐植物層に相当する両肩部を整形し木杭による土留めをおこなっており、粒度分析からも同層は溝の埋積を目的とした客土と判断されている。その上層のシルト～細砂層はイネ属珪酸体分析結果と淘汰不良の粒度組成から耕作土の造成とその維持管理にともなう人為的攪乱や耕作活動が推定されており、この時期、湿地状の様相を呈していた溝を埋め、谷水田の造営がはじまったと考えられる。水場遺構はこうした初期の谷水田に伴うものとみられる。

炭窯とみられる遺構の存在からは、周辺の森林がある程度回復している可能性が想定され、その植生は、中世の様相からはマツ属の増加が推察される。

中世（13世紀～14世紀）

12大溝、1大溝、2流路に加え3調査区3流路の4筋の谷において、谷水田が営まれる。谷水田は、7調査区1大溝で模式図を示したように、谷の下層から上層にかけて谷の幅に合わせ面積を広げながら拡大する。3調査区および7調査区1大溝はとくにこの様相を顕著に示し、13世紀から14世紀後半で厚さ1m強の堆積がみられる。

水田は、谷の斜面を整形し、所によっては木杭により土留めをし、段落ち際に沿って溝を設ける。水田区画の境で溝が交差する箇所には、石組による水場を設け下方向へ水を落とす。こうした水場遺構は1調査区31石組、3調査区18石組がみられ、石組や木組の施設はみられないものの、7調査区59水口も同様の機能を果たしたと考えられる。とくに1調査区31石組は、2流路をはさんだ対岸となる上私部遺跡1調査区の石組と比高が約1mはあるものの、相対する位置にあることが注意される。

この相対する位置に石組がみられる2流路は、上私部遺跡において顕著ではあるが、中世谷水田耕土上に厚い砂の堆積がみられる。この砂層は他の谷ではみられず、2流路は水路の系統が異なるか、あるいは幹線水路的なものであったか、いずれにしても12大溝や1大溝とは異なる性格が考えられる。これは、2流路から鉄鎌や鉄鎌、下駄が出土しており、こうした遺物は12大溝や1大溝からは出土していないことからうかがわれる。とくに鉄鎌は1点のみの出土であるが、境界の祭祀に用いられる例もあり注目される。

2流路と1大溝間の微高地では、掘立柱建物、柵列のほか、多数のピット、溝、土坑、井戸を検出した。谷水田に伴う居住域とみられる。ピットは密集し、多くの重複がみとめられる。ピットでは、埋土に炭化物、焼土を含むものが多い点が注意された。この時期、火災により施設が崩壊した可能性がうかがわれる。溝は微高地縁辺部をのぞき、東西もしくは南北方向であり、2流路、1大溝、12大溝とともに東西、南北方向の区画割りに沿った方向性をもつ。1調査区23溝は幅が5m前後と広く、この溝を境に西側では遺構密度が低くなることから、居住域を区画する溝であった可能性が考えられる。23溝は、後世の削平により残存する深さは浅いものの、有池遺跡03-1を参考にすれば、堀であった可能性が考えられる。3調査区128溝は、東西、南北方向に屈曲する溝である。これも有池遺跡03-1を参考に

するならば、屋敷地を区画する溝の可能性が考えられる。土坑の多くは直径1～2 m、深さ50cm前後の不整形である。とくに遺物が多く出土する傾向はなく、性格は不明である。1調査区52土坑など長方形のものは墓壇の可能性も考えられるが、出土遺物が少なく不明である。1調査区79土坑は掘立柱建物の柱間に位置することから、建物と一体の施設となる可能性がある。井戸は1調査区、3調査区とも素掘りの井戸であった。居住域の縁辺となる1大溝の3調査区における南肩部では焼土の集積がみとめられた。これと伴出はしなかったものの、居住域からは鉄滓が比較的多く出土していることから、小規模な鍛冶がなされた可能性がある。

2流路と1大溝間の微高地上にひろがる、谷水田に伴う居住域は、出土遺物から有池遺跡03-1で検出された溝や堀で区画された屋敷地とほぼ同時に併存していたものとみられる。有池遺跡03-1では屋敷地内において大型の掘立柱建物が整然と建ち並び、石組み井戸が配されるのに対し、有池遺跡03-2の居住域は、少数の掘立柱建物、柵列とともに多数の重複するピット、素掘りの井戸からなる。これより、有池遺跡03-1の屋敷地には中心的な建物施設が、有池遺跡03-2の居住域には一般的な建物施設があったとみられ、1大溝、12大溝を隔てたふたつの微高地上の景観はかなり異なるものであったと考えられる。

中世（15世紀～16世紀）～近世

谷水田の最上層より上層でわずかにこの時期の遺物が出土した。谷がほぼ埋積し、段落ちする平坦な水田がひろがる景観が復元できる。

13～14世紀前半、3調査区および7調査区1大溝における谷水田の厚さが1 m強であるのに対し、この時期の谷水田の厚さは約40cmにとどまることから埋積スピードの低下がうかがわれる。13～14世紀前半の耕土層は、谷を埋積する灰褐色微砂混じりシルトでやや還元状態を示し、ブロック土からなる床土も約20cmと厚く、床土と耕土層の累積が幾層もみとめられるのに対し、15～16世紀の耕土層は、谷の最上層から微高地上を覆う状態であり、茶褐色シルトに酸化鉄、マンガンを含む酸化状態を示し、半乾田化し安定した耕土のありかたがうかがわれる。

この時期の景観は、調査前にみられた現代の景観に継続するとみられる。

第4節 遺物

1. 土器・土製品

(1) 1調査区

1大溝(図325-1~15) 1~3は北肩部(2層)、4は4層、5~8は6層、9、10は7層から出土した。1は龍泉窯系青磁碗である。体部外面には鎬蓮弁文を刻む。弁はやや細い。2、3は瓦質羽釜。3は口縁部外面に段がつき、端部は内側へ突出する。ともに、外面には煤が付着する。4は瓦器碗で、焼成などから見て大和型と考えられるが、口縁端部の沈線は比較的横位から施す。外面には分割ヘラミガキが粗く施される。Ⅱ-B段階(12世紀中葉)の所産とみられる。5は土師器皿。口縁部はゆるやかに上方に屈曲させる。13世紀後半の所産であろう。6は瓦器皿である。口径9.8cmを測る。口縁部はヨコナデにより屈曲させ、外反させる。見込みには7往復程度のジグザグ状暗文を施す。7は楠葉型瓦器碗である。口縁部には細い沈線が施される。Ⅲ-3期(13世紀後半)の所産である。8は瓦質羽釜である。器壁は薄く、体部上位には断面方形の鏝が貼り付けられる。9は土師器皿である。口縁部は上方に強く屈曲させる。10は東播系須恵器甕である。口縁部は大きく外反し、上端部はヨコナデにより凹線状に凹む。体部外面には平行タタキを施す。

以上、1大溝出土遺物は上層に14世紀代の遺物を若干含むものの、概ね12世紀中葉~13世紀後半の所産である。

11~15は1大溝最下層の「深掘トレンチ④」から出土した。11は龍泉窯系青磁碗の底部である。外面には片切彫の蓮弁文を有する。12は土師器壺。体部は扁球形を呈する。外面には丁寧ミガキ調整を施す。13~15は土師器高杯である。13は内面に放射状にミガキを施す。杯部外面は下位に板ナデ調整が残るが、上位はナデ調整によって仕上げている。14は脚部である。裾部は外方へゆるやかに開く。全体に丁寧ヨコナデを施して仕上げている。15は外方に大きく開く杯部を持つ。口縁端部は内側に肥厚させている。内外面ともに全体にナデ調整を施すが、外面には縦方向の接合痕が残っている。

11は上層の遺物と考えられるが、その他の遺物は、概ね6世紀代に位置付けられるものと考えられる。

2流路(図326-16~20) 16、17は12~13層、18~20は14~15層、19~21は「深掘トレンチ①」から出土した。16は口縁部が玉縁状になる白磁碗(Ⅳ類)である。17は大和型瓦器碗である。内面のヘラミガキは密で、外面には分割ヘラミガキが認められる。Ⅱ-B段階(12世紀中葉)の所産である。18も大和型瓦器碗であるが、口縁部には非常に強いヨコナデを施す。見込みは螺旋状暗文。Ⅲ-A段階(12世紀後半)に位置付けられるものであろう。19は須恵器杯身。口縁部の立ち上がりは低く、底部のヘラケズリは3分の1程度にのみ施している(TK43型式)。20は土師質羽釜である。器壁は厚く、断面方形の口縁部を有する。外面鏝以下の部分には煤が付着する。

以上、2流路12層以下から出土した遺物は12世紀中葉~後半に位置付けられるものである。

31石組(図326-21~32) 21~24は土師器皿である。21は底部中央に穿孔を有するが、口縁部と底部の境にもう1箇所、穿孔を施そうとした痕跡がある。22は口縁部が上方にゆるやかに屈曲するものである。内面には煤が付着しており、灯明皿として用いられていたものと考えられる。23、24は口径6.0cm前後と小型で、口縁部はゆるやかに立ち上がる。23は内面にハケメが認められる。25、26は楠葉型瓦器碗。内湾する口縁部を有する。Ⅲ-2~3期(13世紀前半~後半)の所産であろう。27は三島手(粉青砂器)碗の底部である。外面には白泥釉が掛かる。28は東播系須恵器鉢で、第Ⅱ期第1段階(12世紀中葉~後

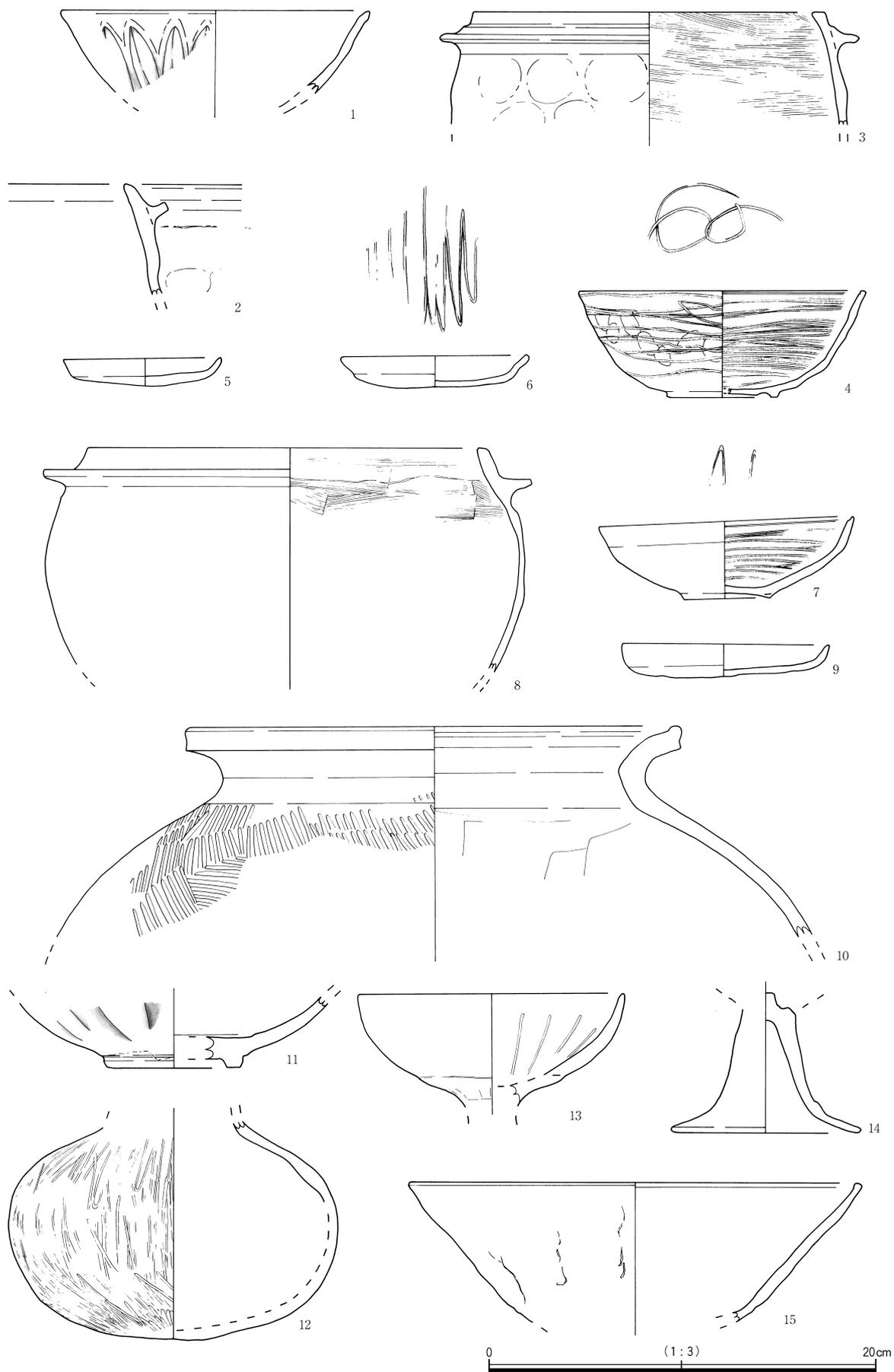


图325 有池遺跡03-2-1 調査区 1大溝出土遺物

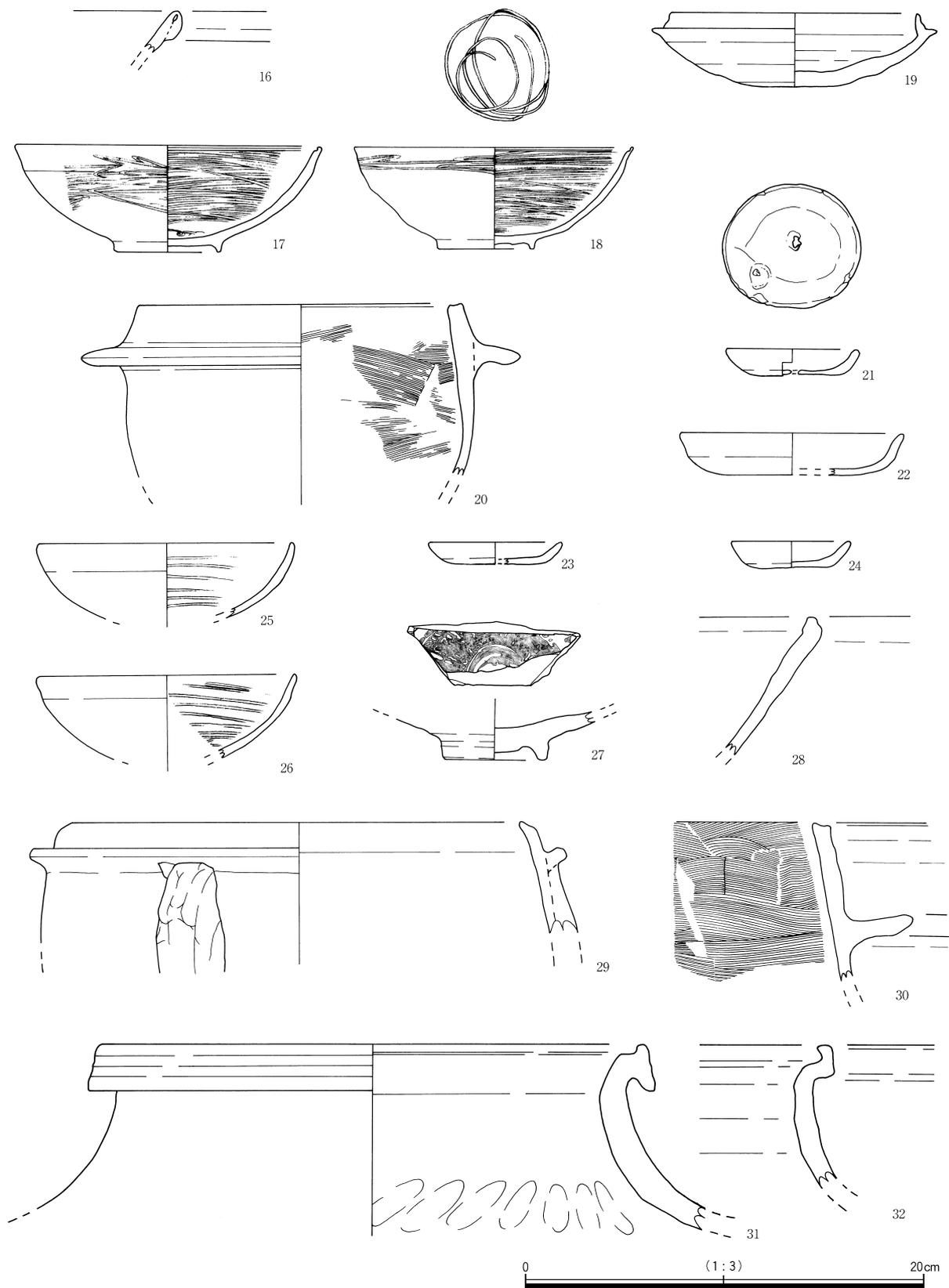


图326 有池遺跡03-2-1 調査区 2 流路・31石組出土遺物

半)に位置付けられるものである。29は瓦質三足釜である。脚部は鐙の直下に貼り付けられ、接合痕はナデ消されていない。胴部の張りは弱い。体部外面には煤が付着する。30は瓦質羽釜である。口縁部は直線的にのび、上端部は内側をつまみあげて突出させる。外面にはヨコナデにより浅い凹線が2条入る。31、32は常滑焼甕の口縁部である。31は口縁端部が上下に拡張する6 a型式(13世紀後半)、32はその拡張がなく、受け口状になる5型式(13世紀前半)に位置付けられるものである。

以上、31石組出土土器は若干時期幅があるが、概ね13世紀代のものが多い。

44・69ピット(図327-33・37、34) 33・37は陶器壺で、口縁部(33)は44ピット、体部以下(37)は後述の69ピットから出土し、接合したものである。口縁端部は玉縁状になり、片口を1箇所有する。肩部は張り、沈線状のヘラケズリを入れている。底部は平坦で、いわゆる「下駄印」が認められる。焼成および形状からみて常滑焼の可能性が高い。34は楠葉型瓦器椀。IV-1期(13世紀後半)の所産である。

73ピット(図327-35) 35は楠葉型瓦器椀である。口縁部は直線的に広がる。内面にはハケメが認められる。III-1~III-2期(13世紀前半)の所産であろう。

69ピット(図327-36、37) 36は土師器皿。口縁部はゆるやかに上方へ屈曲する。13世紀前半に位置付けられるものであろう。69ピットからはこの他、先述の常滑焼壺の体部以下(37)が出土している。

80井戸(図327-38) 38は楠葉型瓦器椀である。口縁端部には沈線がめぐる。III-1期(12世紀末~

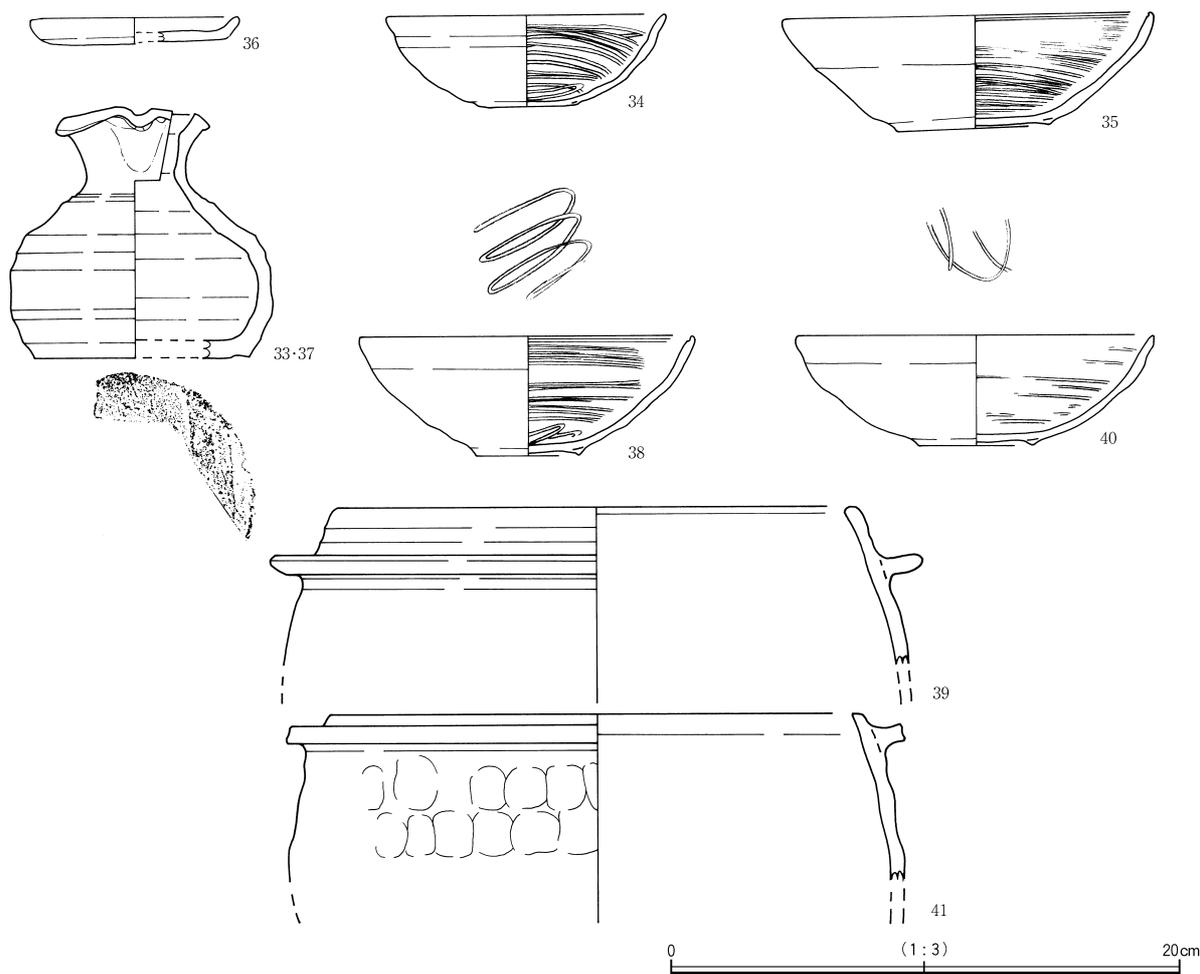


図327 有池遺跡03-2-1調査区 ピット・井戸・土坑出土遺物

13世紀初頭)の所産である。

5井戸(図327-39) 39は瓦質羽釜である。口縁部外面には2条の凹線が入る。

52土坑(図327-40) 40は楠葉型瓦器椀である。Ⅲ-2期(13世紀前半)に位置付けられる。

63土坑(図327-41) 41は瓦質羽釜である。鏝は上位に付き、口縁部は断面方形を呈する。胴部の張りは弱く、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。

6溝(図328-42、43) 42、43は楠葉型瓦器椀である。器壁が磨耗しており、調整は不明瞭である。Ⅲ-3~Ⅳ-1期(13世紀後半)の所産である。

43溝(図328-44~53) 44~49は土師器皿である。44は底部が平坦で、口縁部は短く上方に折り返す。器壁は厚い。45、47は44より口径がひとまわり大きい。口縁部は同様に短く上方へ折り返す。46は底部がまるい。48は口縁部が外方へのびる。49は口径12.9cmを測り、口縁部が上方へ強く屈曲する。50~53は楠葉型瓦器椀。いずれもⅢ-3期(13世紀後半)の所産である。

以上、43溝出土遺物は12世紀代の遺物を若干含むが、13世紀後半代のものが多い。

60溝(図328-54、55) 54、55は楠葉型瓦器椀である。Ⅲ-3期(13世紀後半)の所産である。

66溝(図328-56) 56は東播系須恵器鉢である。内面には使用痕が認められる。第Ⅲ期第1段階(13世紀前半~後半)に位置付けられるものであろう。

67溝(図328-57) 57は大和型瓦器椀である。外面は磨耗しており、ヘラミガキは確認できない。口縁端部の沈線は浅い。Ⅲ-A(新)段階(12世紀末~13世紀初頭)に位置付けられるものであろう。

128落込(図328-58、59) 58、59は土師器皿。58は口径9.3cm、器高1.6cmを測る。底部は丸みをおび、口縁部は外方に開く。色調はにぶい橙色。59は復元口径14.4cmを測り、灰白色で精良な胎土をもつ。12世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

59落込(図328-60) 60は楠葉型瓦器椀。口縁部は直線的に外方へ広がり、底部には非常に退化した高台が貼り付けられる。Ⅳ-2期(14世紀前半)の所産である。

4土器群(図328-61~67) 61~65は土師器皿。61、63、65は口縁部を短く上方に屈曲させるものである。62は口縁部ののびがやや長い。64は口縁部に強いヨコナデを施し、屈曲させる。66は瓦器皿である。見込みに暗文はない。67は楠葉型瓦器椀である。内外面ともに器壁が著しく磨耗しており、調整は不明瞭である。外面には接合痕が明瞭に残る。Ⅲ-1~Ⅲ-2期(12世紀末~13世紀前半)に位置付けられる。

以上、4土器群は12世紀末~13世紀前半の所産である。

(2) 2調査区

11水田上層(4層)[12大溝](図329-68~76) 68~76は11水田上層(4層)から出土したものである。68は青白磁の蓋である。口縁部内面にはかえりを有する。外面には蓮弁文が施される。69、70は土師器皿。口縁部は二段ナデを意識して上方につまみ出されるが、下段のナデは段階的に施しているものとみられ、外面には横方向に連続して指頭圧痕が残る。11世紀末~12世紀前半の所産と考えられる。71は瓦器椀で、大和型と考えられる。内面のヘラミガキは密に、外面は隙間が目立つものの下位まで施されている。

72~75は11水田下層(5層)、76は下層(7層)から出土した。72は土師器皿。口縁部は上方につまみだされる。73~76は瓦器椀である。71、73、74、76は内面に幅の細いミガキが密に施され、光沢をもつ。外面には分割ヘラミガキが下位まで施され、74・76は底部にしっかりした高台が貼り付けられる。

76は見込みにジグザグを重ねて格子状になった暗文を有する。75は他のものとは焼成がやや異なり、灰色を呈する。見込みは連結輪状暗文。これらの瓦器碗は大和型に分類されるものと考えられる。

以上、図化できた12大溝出土遺物は、概ね11世紀末～12世紀前半の所産である。

15木組（図329-77、78） 77は土師器皿。78は瓦器碗で、大和型（Ⅱ-A段階）と考えられる。11世紀末～12世紀前半の所産である。

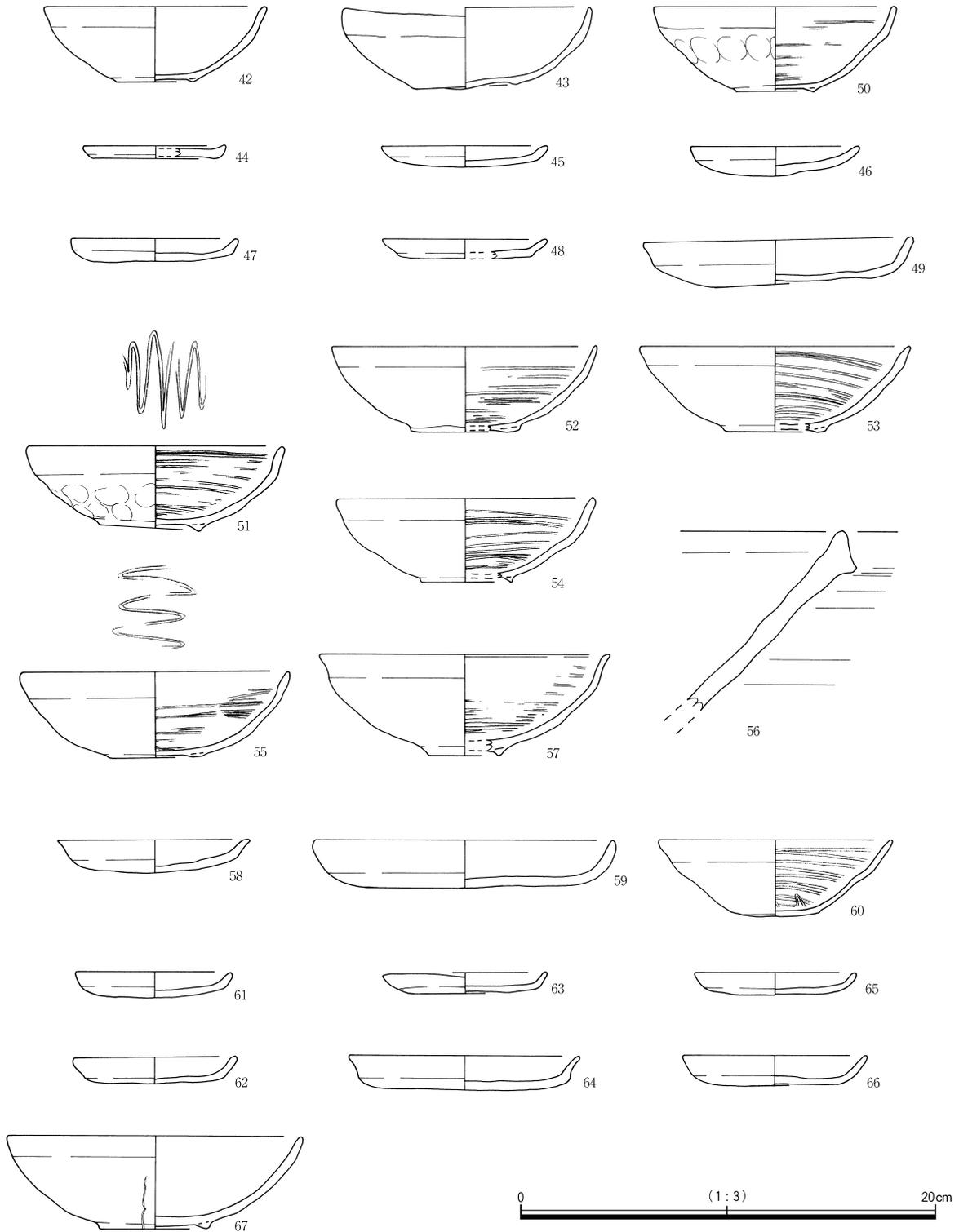


図328 有池遺跡03-2-1調査区 溝・落込・土器群出土遺物

(3) 3調査区

3流路 (図330・331-79~105) 79~84は土師器皿である。79は口縁端部に煤が付着する。82は明橙色を呈し、外方に大きくのびる口縁部を有する。80、84は口縁部が外反しながら上方へ立ち上がる。81は大きく外方にのびる口縁部を有する。83は白色系で、口縁部は底部と明瞭な境界をもって屈曲し、端部にはヨコナデを施す。81、83は、上村編年Ⅸ期併行(14世紀後半~15世紀初頭)に位置付けられるものと考えられる。85~91は楠葉型瓦器碗。Ⅳ-1~Ⅳ-2期(13世紀後半~14世紀前半)に位置付けられるものと考えられるが、いずれも底部には高台が貼り付けられる。92は瓦質羽釜。外面鏝以下の部分には煤が付着する。93は瓦質三足釜。口縁部は大きく内傾する。内面はナデ調整。94、95は大和産の瓦質土器播鉢。94は口縁部直下に穿孔を有する。いずれも断面は方形を呈し、体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。佐藤編年A期(14世紀中葉~後半)に位置付けられるものである。96~105は南肩部から出土したもので、96~104はそのうち10土器群として取上げたものである。96~100は土師器皿。外方に大きく屈曲する口縁部を有する。101~104は楠葉型瓦器碗である。いずれもⅣ-2期(14世紀前半)の所産である。102と104にはかなり退化した高台が貼り付けられる。105は瓦質羽釜である。口縁部はわずかに内傾し、外面には2条の凹線を有する。鏝は幅が広い。

3流路出土遺物は若干時期幅があるものと考えられ、実年代を付すのは難しいが、概ね14世紀~15世紀初頭の範疇におさまるものと考えられる。なお細片であるが、いわゆる「へそ皿」も出土している。

2層 (図332-106) 106は楠葉型瓦器碗で、Ⅳ-2期(14世紀前半)の所産である。

1大溝下段 (図332-107~116) 107~111は16層、112は17層から出土した。107は東播系須恵器甕の口

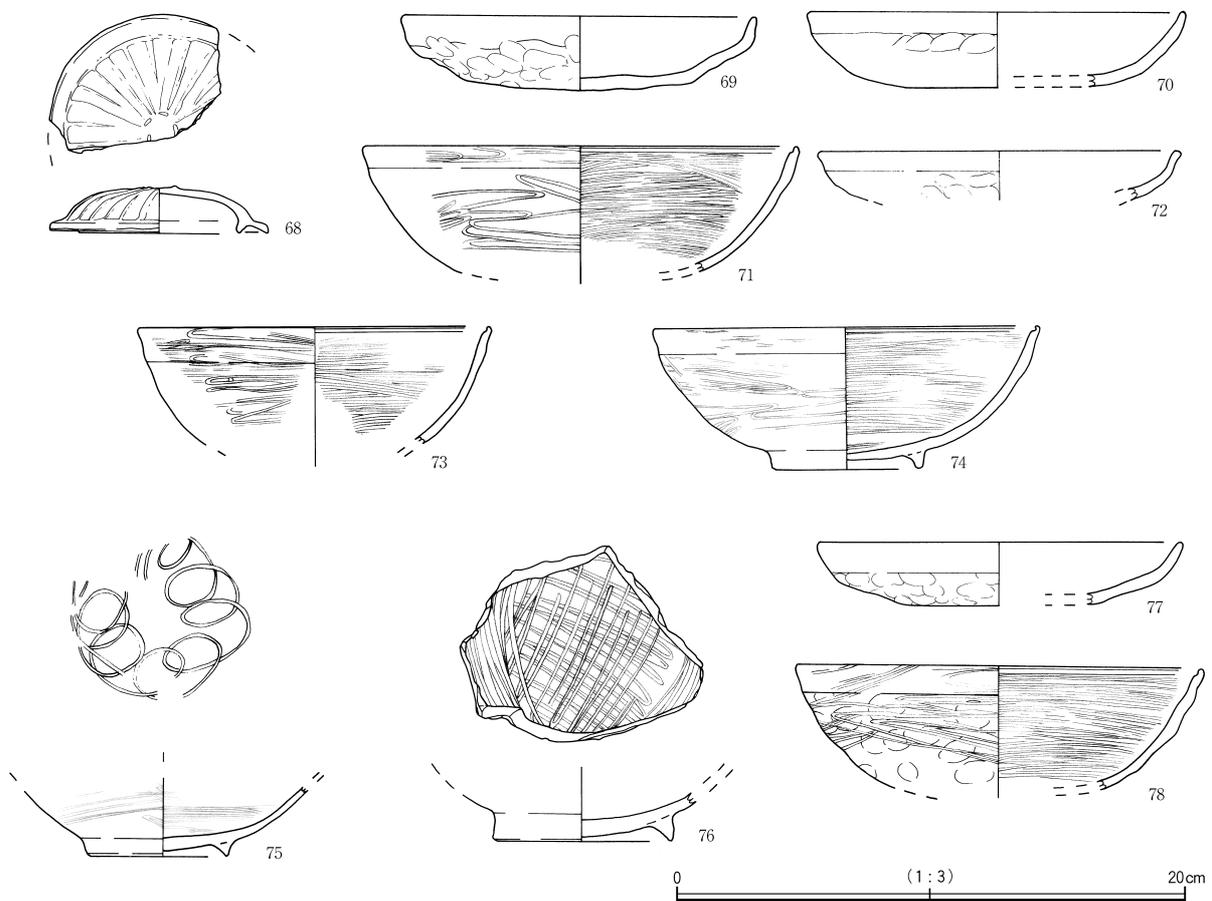


図329 有池遺跡03-2-2調査区 耕土層等出土遺物

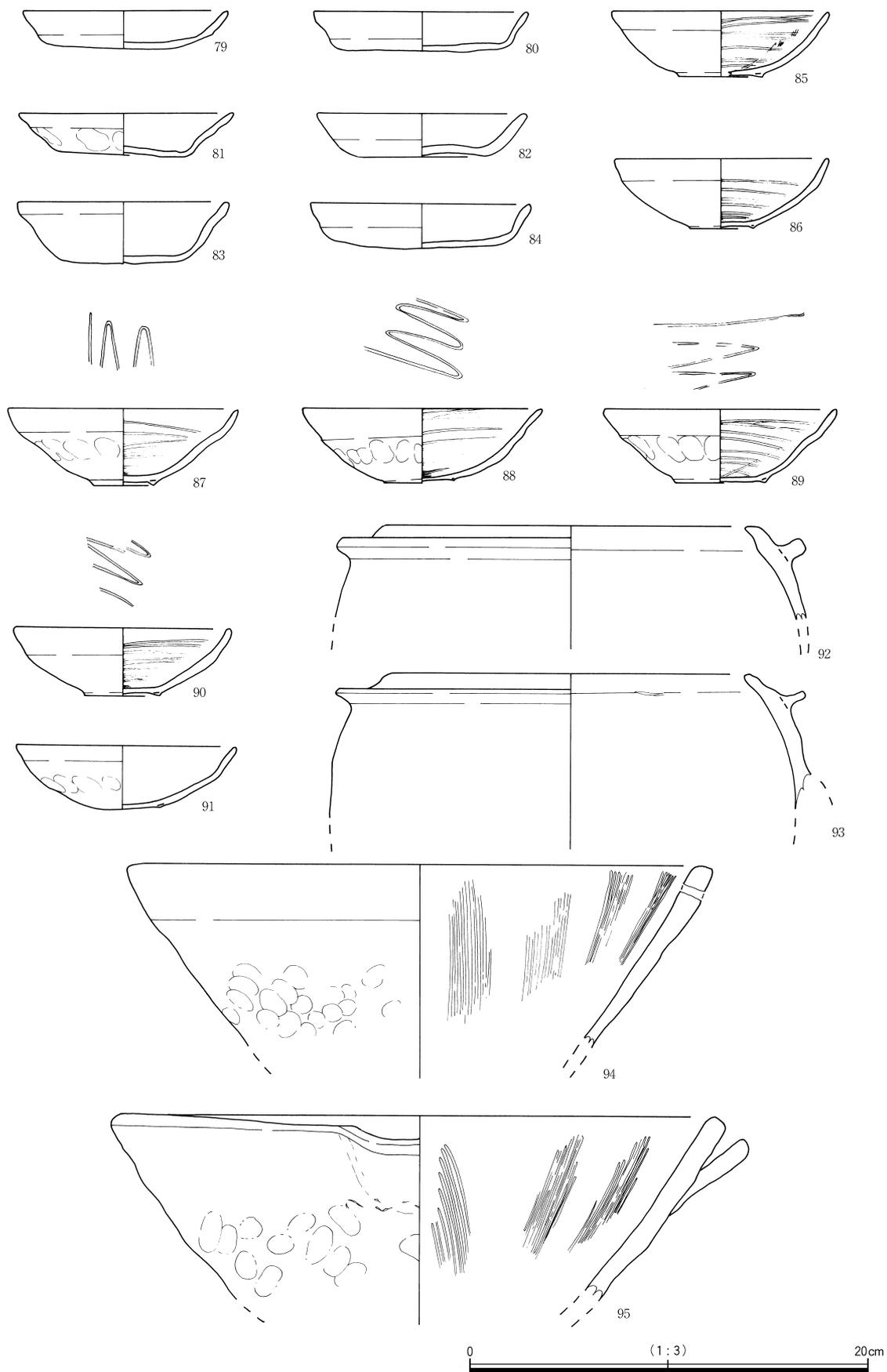


図330 有池遺跡03-2-3調査区 3流路出土遺物

縁部で、ゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。外面は磨耗しており不明瞭であるが、平行タタキがわずかに認められる。焼成はあまく、土師質焼成になっている。108は土師質羽釜である。口縁部は断面方形を呈する。胎土はやや粗い。109は瓦質羽釜で、口縁端部直下にヨコナデを施し、外面に段を設ける。内面は直線的に立ち上がり、丁寧に板ナデ調整を施す。鏝以下の部分には煤が付着する。110は東播系須恵器鉢の底部であるが、円形に打ち搔いており、中央には孔径2mm程度の穿孔を施している。何らかに転用して用いられたものであろう。111は口縁部が外方に長くのび、端部には強くヨコナデを施す。14世紀後半の所産か。112はての字状口縁を有する土師器皿である。器壁は厚く、器高は高い。11世紀後半～12世紀前半の所産であろう。

113～115は10・11-2・16層、116は東西アゼ④層から出土した。113は土師器皿。器高が高く、口縁部は外方に大きくのびる。14世紀後半～15世紀初頭の所産であろう。114は瓦器壺である。口縁端部は断面方形を呈し、肩部には蓮華文状の暗文を施す。115は土師器高杯の脚部で、透かし状に3ヶ所、貫通しない切りこみを入れる。116は瓦質土器で、双耳浅鉢と考えられる。耳は粘土塊を貼り付けた後、棒状工具で突き刺して穿孔している。

以上、1大溝下段出土遺物は、古墳時代や12世紀初頭までの遺物が若干混じるものの、おおむね14世紀後半～15世紀初頭の遺物を包含する。

1大溝上段（図333～335-117～143） 117～120は6層から出土したものである。117は楠葉型瓦器椀である。底部には砂粒を多く含む粘土を貼りつけて、高台を作り出す。Ⅲ-2期（13世紀前半）の所産である。118は褐釉壺と考えられる。底部は中央部を抉り高台状になる。内・外面ともにオリーブ色の釉が掛かる。119は土師器皿。内面には煤が付着する。120は土管で、本来は瓦質であると考えられるが、外面は土師質焼成になっている。端部は受口状になる。上層からの混入の可能性がある。121～128は7層から出土した。121は白磁口禿皿。底部は平底で、口縁部はわずかに外反する（Ⅸ-1b類）。13世紀

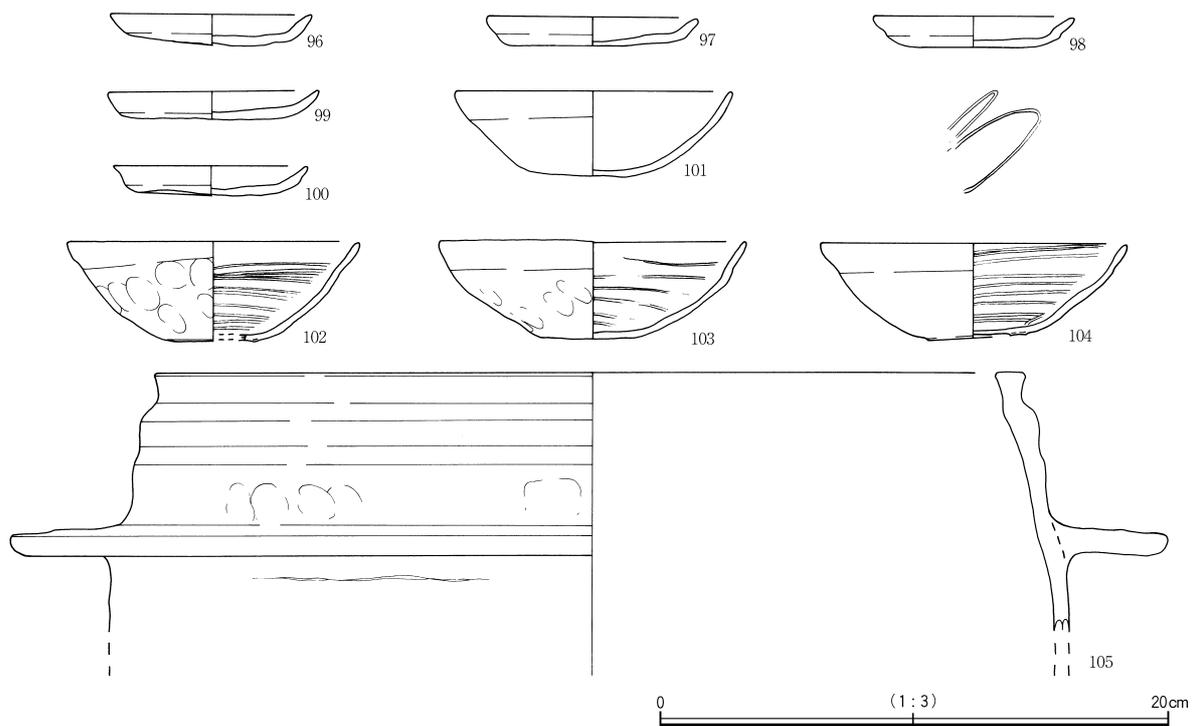


図331 有池遺跡03-2-3調査区 3流路出土遺物

後半～14世紀前半の所産である。122～124は楠葉型瓦器碗である。122はⅣ－1期（14世紀前半）、123、124はⅢ－2～3期（13世紀前半～後半）に位置付けられる。125は瓦器皿。口縁部は上方に屈曲させ、端部をわずかに外反させる。126は瓦質羽釜である。内傾する口縁部に、幅の狭い鋳を有する。127は土師質羽釜である。口縁部は断面方形を呈し、ゆるやかに内傾する。128は瓦質鍋である。口縁端部は断面三角形状になる。

以上、6層および7層出土遺物はやや時期幅があるが、概ね13世紀代の遺物を包含する。

129～139は8層から出土したものである。129～132は楠葉型瓦器碗である。いずれもⅣ－2期（14世紀前半）に位置付けられるものであるが、器壁は薄く、口縁部には強くヨコナデを施す。ミガキは非常に細い。高台はない。133は瓦質土器播鉢である。口縁部は断面方形を呈し、外面は幅広くナデ調整を施している。佐藤編年A期（14世紀中葉～後半）の所産である。134、136、137は瓦質羽釜である。134は口縁端部をわずかに内側に突出させ、口縁部直下には幅の広い鋳をめぐらせる。136は口縁部外面に

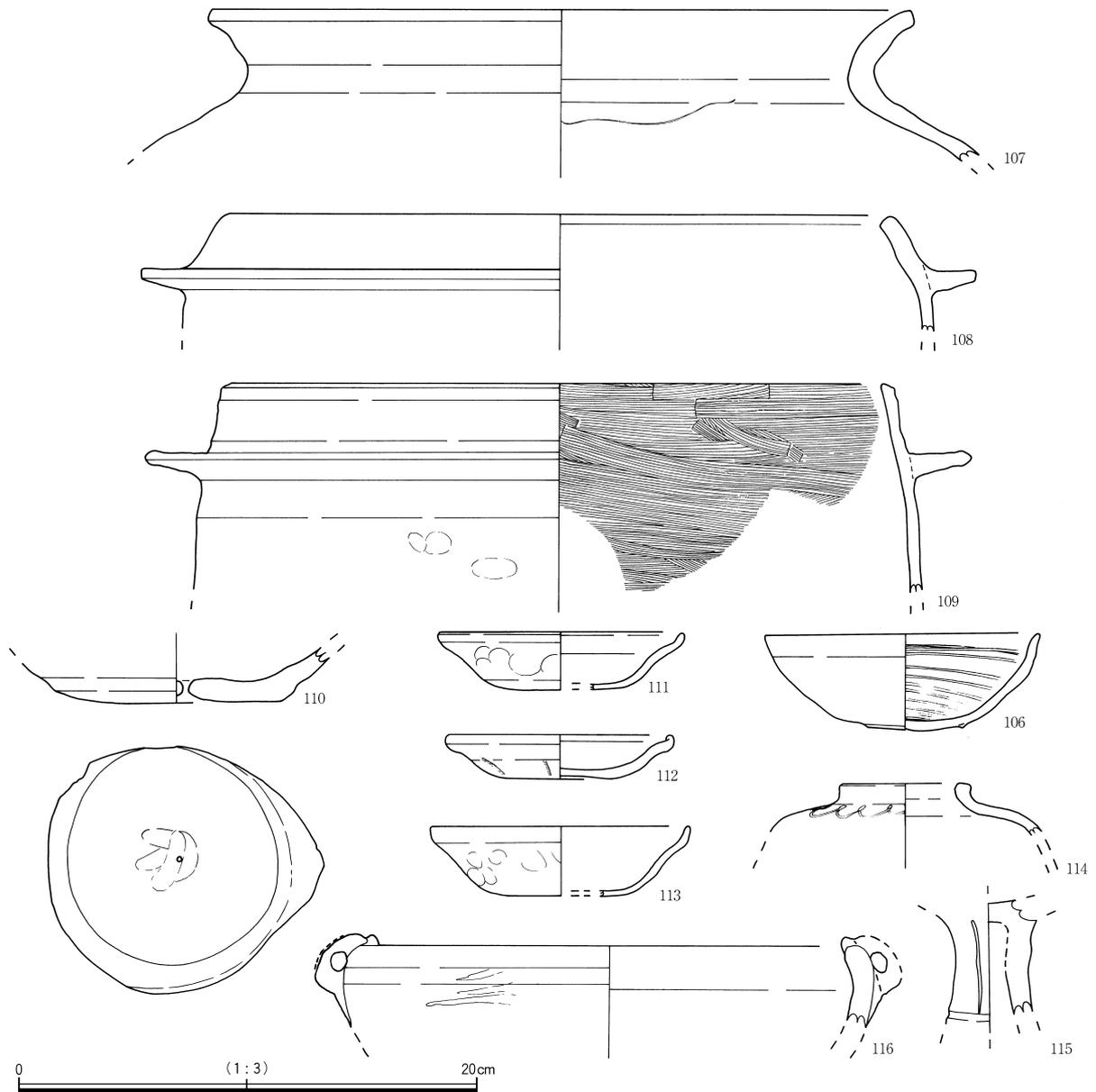


図332 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

2条の凹線が入り、鏝は斜方向に貼り付けられる。137は内面に植物の繊維質状のものが付着する。135は瓦質三足釜である。内面は板ナデ調整。138は東播系須恵器鉢。口縁端部は上下に拡張させる。第Ⅲ期第3段階（14世紀後半）に位置付けられるものである。139は東播系須恵器甕。頸部は直立ぎみに立ち上がる。口縁部には突帯がめぐる。

140は9層から出土した東播系須恵器甕と考えられる。口縁部は垂下せずに粘土帯を押しつけたような形状を呈する。上端部には沈線をめぐらせる。体部外面には綾杉文状のタタキを施す。

以上、8層および9層出土遺物は概ね14世紀後半の所産である。

141、142は12-1層、143は21層から出土した。141は瓦質羽釜である。口縁部はゆるやかに内傾する。142は楠葉型瓦器椀。内面にはハケメが認められる。Ⅲ-3期（13世紀後半）の所産である。143は土師器皿。内面には線状の墨書を有する。

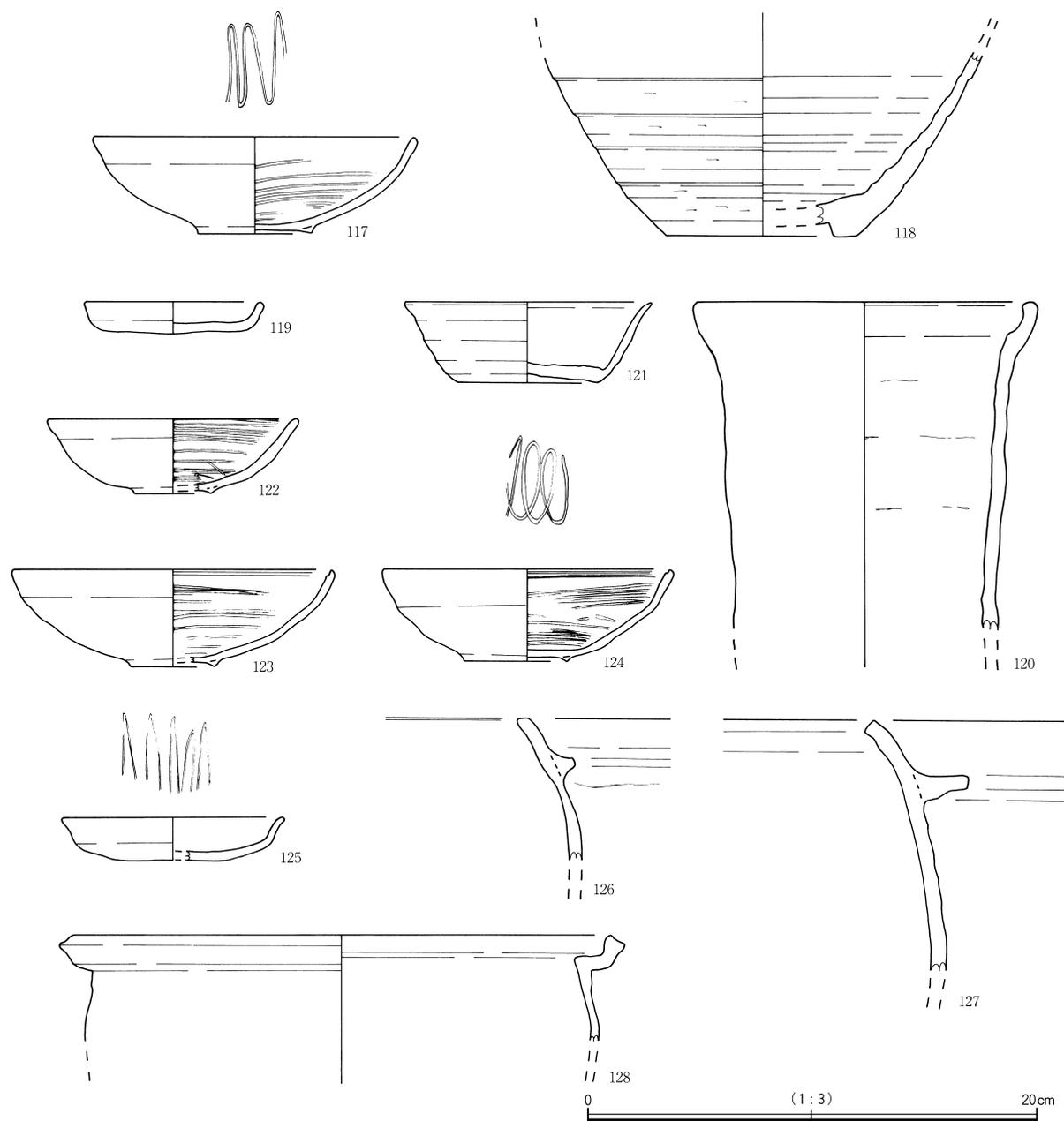


図333 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

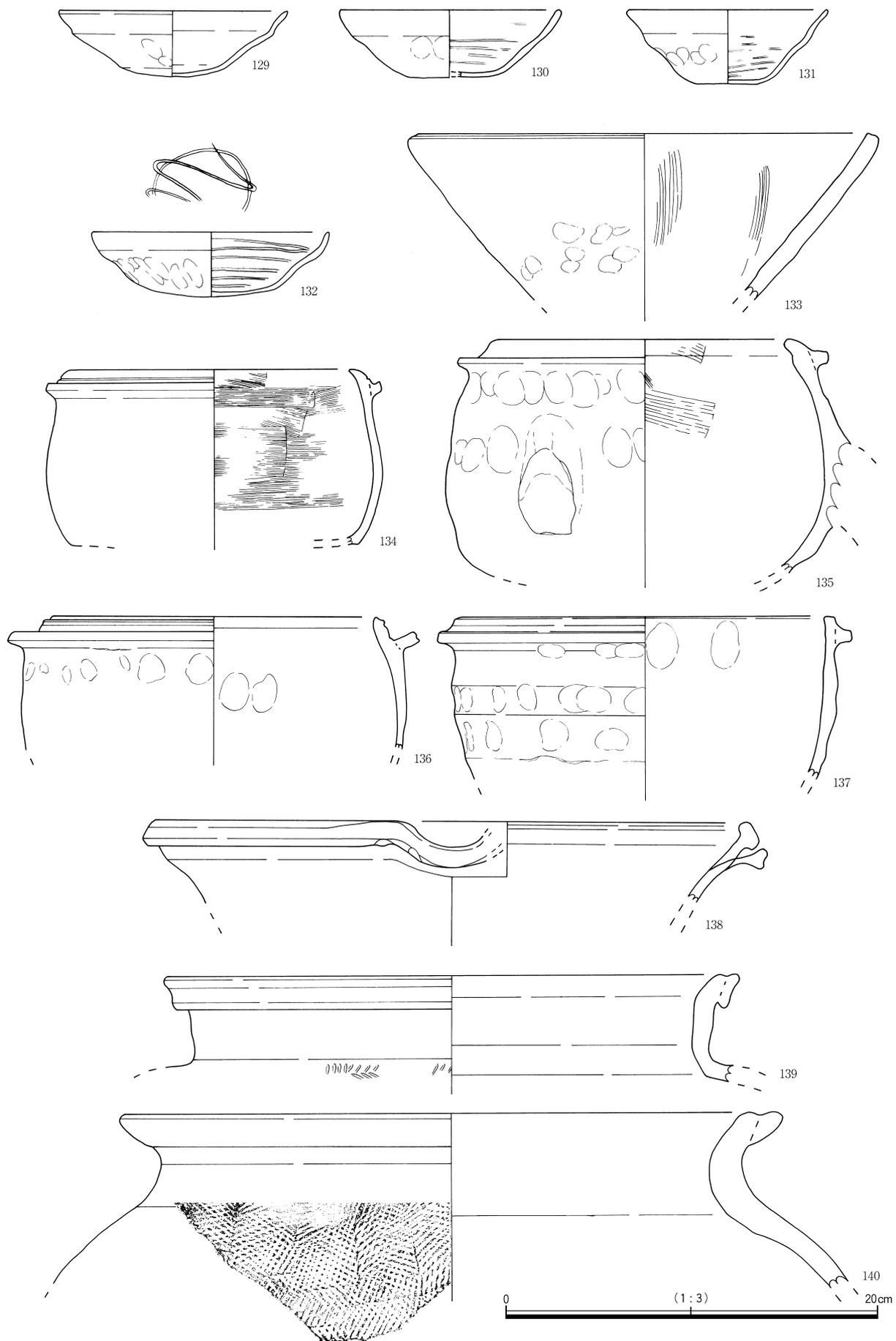


图334 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

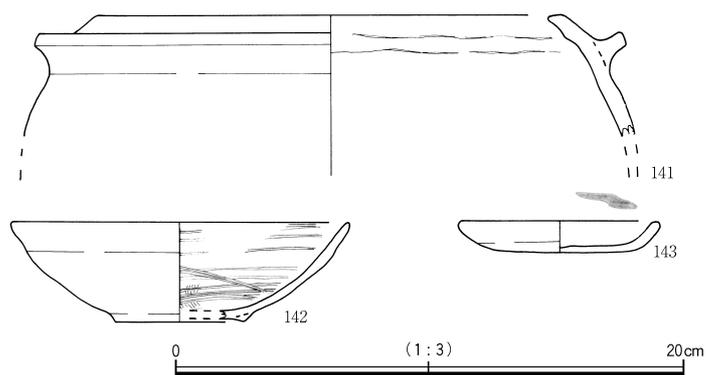


図335 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

以上、12-1層および21層出土遺物は概ね13世紀後半の所産である。

1大溝下段南南側（図336-144～148） 144は42層、145～148は39層から出土したものである。144～146は土師器皿。口縁部には強くヨコナデを施し屈曲させる。147は楠葉型瓦器碗である。底部には砂粒を多く含む粘土を貼り付け、高台を作り出す。IV-1期（14世紀前半）。

148は瓦質羽釜である。口縁部外面には2条の凹線がめぐる。鏝以下の部分には煤が付着する。

以上、1大溝下段南南側出土遺物は14世紀前半に位置付けられる。

1大溝下段南側（図337-149～182） 149～154は3層出土遺物のうち、11土器として取上げたものである。149は土師器皿で、口縁部を上方に屈曲させるものである。150は瓦器皿と考えられる。焼成はあまく、土師質焼成になっている。151～153は楠葉型瓦器碗。III-3期（13世紀後半）に位置付けられるものである。154は常滑焼甕の頸部である。

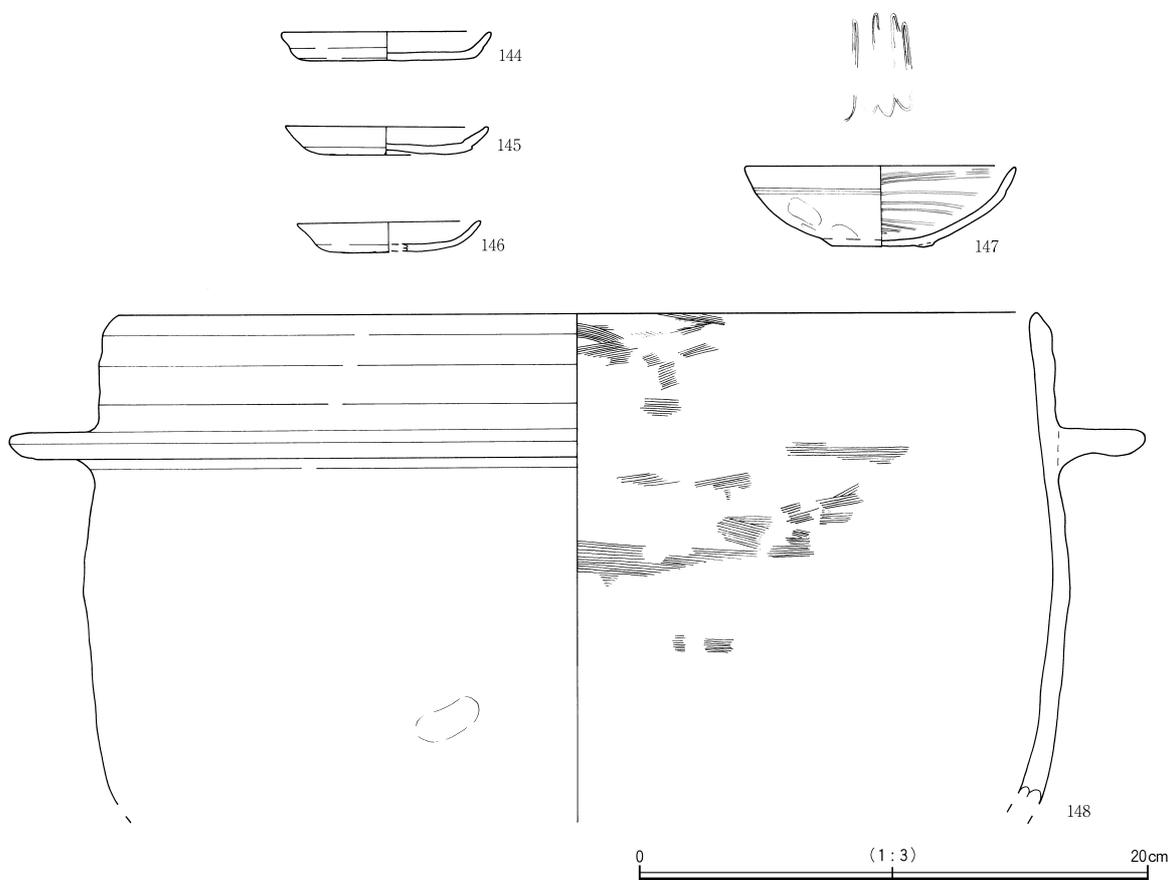


図336 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

以上、3層出土遺物（11土器）は13世紀後半の所産である。

155～157、161は3－2層出土遺物のうち、12土器として取り上げたものである。155は土師質羽釜である。直線的にのびる口縁部に、幅のせまい鑿を有する。156、158は瓦器皿。156は見込みにジグザグ状暗文を描くが、158は暗文を有しない。157、159は土師器皿。159は面取り状にヨコナデを施す。160は楠葉型瓦器椀である。高台には断面三角形の底部を貼り付ける。Ⅲ－3期（13世紀後半）に位置付けられる。161は土師器甕である。体部外面はハケ調整の後、全体をなでて仕上げている。

以上、3－2層出土遺物（12土器を含む）は、13世紀後半に位置付けられる。

162～166は26層から出土したものである。162～164は土師器皿。口径13cm以上を測る大皿で、口縁部はゆるやかに外反しておわる。165は常滑焼甕。口縁部は外反し、上端部にはヨコナデを施し、凹線状に

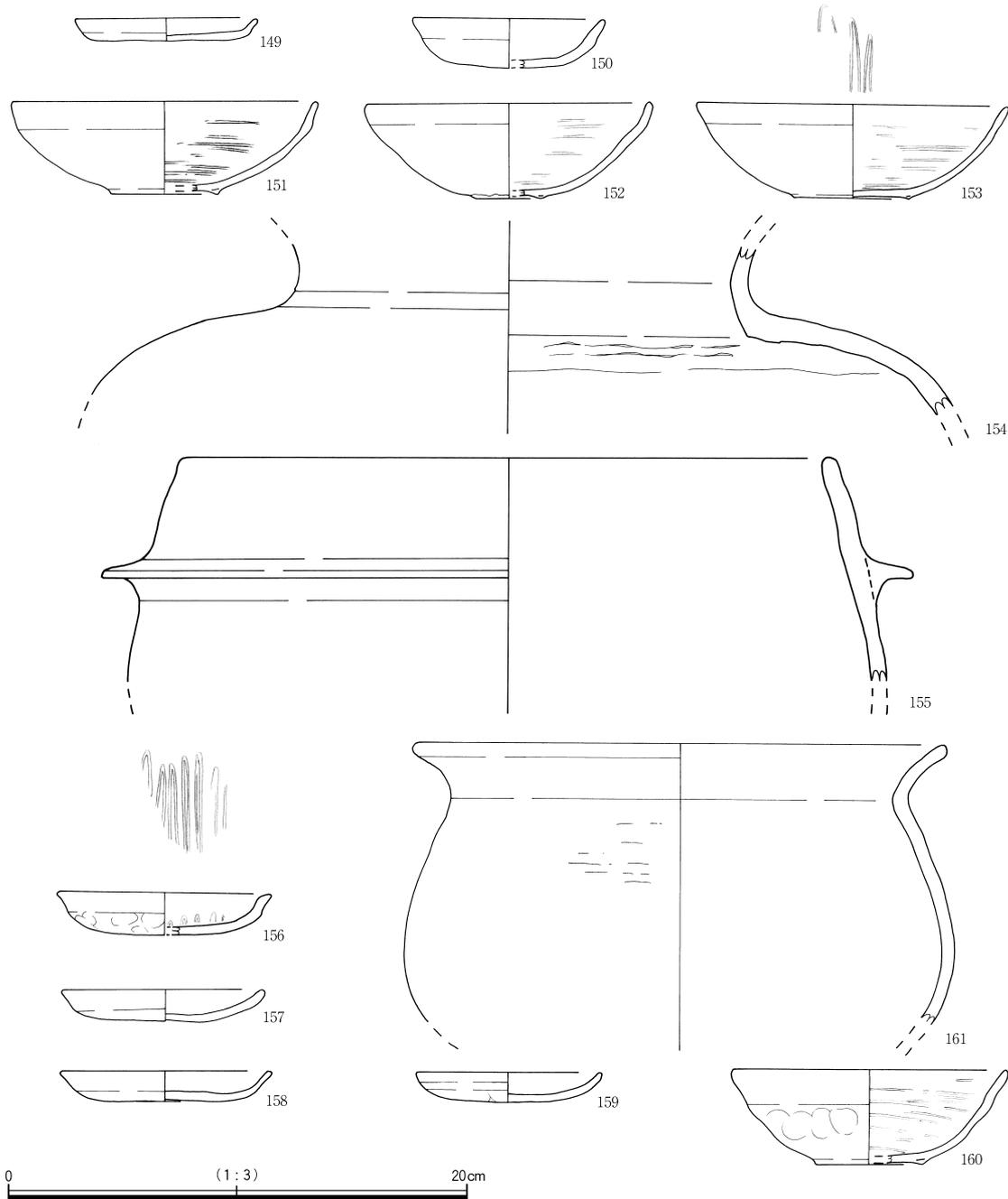


図337 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

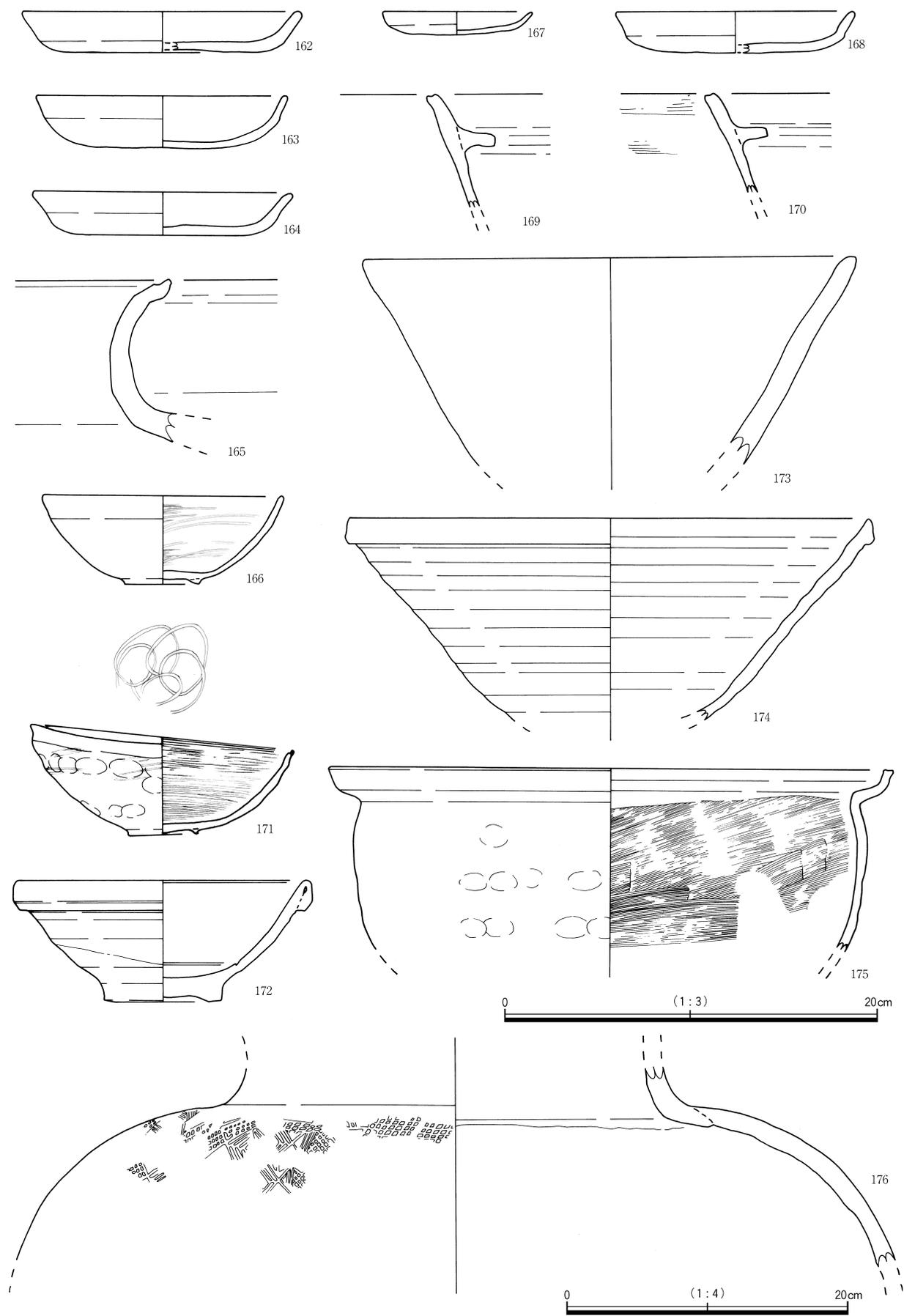


图338 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

凹ませる。4 型式 (11世紀末～12世紀前半) に属するものであろう。166は楠葉型瓦器椀。Ⅲ－2 期 (13世紀前半) に位置付けられるものである。以上、26層出土遺物は、12世紀後半～13世紀前半の所産である。

167～176は27層出土遺物のうち、13土器として取上げたものである。167、168は土師器皿。168は内面に煤が付着する。169、170は土師質羽釜。いずれも胎土には雲母、石英、長石などの砂粒を多く含む。171は大和型瓦器椀である。底径は非常に小さい。Ⅲ－A (新) 段階 (12世紀末～13世紀初頭) に位置付けられるものである。172はⅣ類の白磁椀。173は土師器鉢か。口縁部は丸くおさめる。灰白色を呈し、胎土は非常に粗い。174は東播系須恵器鉢である。第Ⅱ期第2段階 (12世紀末～13世紀初頭) に位置付けられるものである。175は瓦質鍋である。口縁部は水平方向に開き、端部を上方へ屈曲させる。胴部径は口径より小さい。176は国産陶器の甕で、肩部には格子目のタタキ痕が残る。渥美焼か。

以上、27層出土遺物は概ね12世紀末～13世紀初頭の所産である。

177は26層、178、179は26・28層、180は28層、181は28層、182は30－1 層から出土した。177は瓦質三足釜。胴部は丸く、最大径付近に三脚が貼り付けられる。178～180は瓦器椀である。181は土師器壺である。体部内面はケズリ調整、口縁部は板ナデ調整を施す。182は土師器鉢である。178、179は楠葉型で、Ⅲ－1～Ⅲ－2 期 (12世紀末～13世紀前半) に位置付けられるものである。180は大和型で、Ⅲ－A (新) 段階 (12世紀後半～13世紀初頭) の所産である。182は平底ぎみの底部に、ゆるやかに外折して開く口縁部を有する。内面はミガキ調整。

1 大溝南肩部 (図340－183～187) 183～187は30－2 層から出土した。183は土師器甕。外面および口縁部内面はハケ調整を施す。184は須恵器杯身。底部のヘラミガキは2分の1 程度まで施す。TK10型式に位置付けられるものである。185は土師器高坏である。脚部は中実で、裾は外方に大きく開く。外

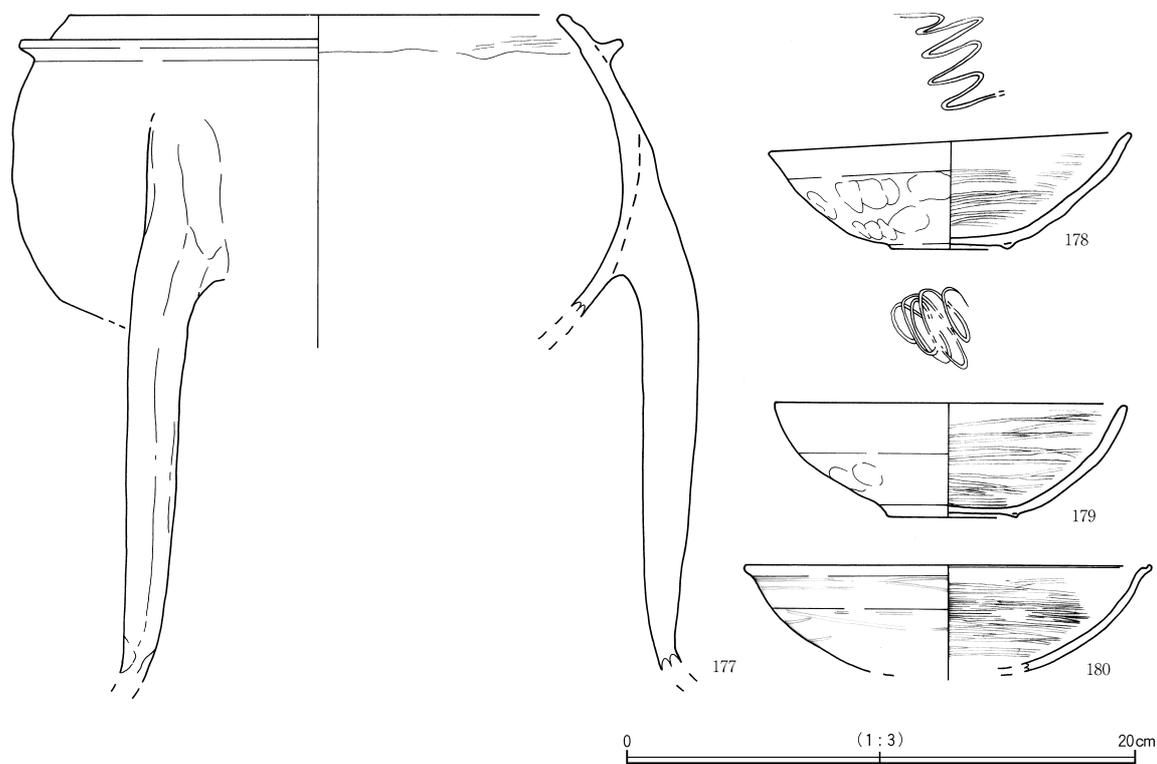


図339 有池遺跡03－2－3 調査区 1 大溝出土遺物

面全体をハケ調整によって仕上げている。186、187は土師器甕。いずれも体部外面および口縁部内面はハケ調整。

1 大溝下段北側（図341～343-188～220） 188～199は26層から出土したものである。188、189は土師器皿で、外反する口縁部をもつ。190は楠葉型瓦器椀で、Ⅲ-3期（13世紀後半）に位置付けられるものである。191は瓦器椀の底部である。見込みには螺旋状暗文を施す。12世紀後半～13世紀前半の所産であろう。192は東播系須恵器甕と考えられるが、焼成は非常にあまい。口縁部は外反し、端部はわずかに肥厚させる。胴部は器壁が薄い。193～197は瓦質羽釜である。195、196は口縁部にヨコナデを施し、外面は階段状になる。194は焼成が土師質になっている。内面は板ナデ調整。197は幅広の鰐が付くものである。外面には2条の凹線を有する。198は大型の瓦質羽釜。内面は板ナデ調整により仕上げる。199は瓦質鍋である。胴部は直線的に開き、口縁端部は三角形状を呈する。

200～203は26層出土遺物のうち15土器として取上げたもの、204～208は16土器として取上げたものである。200～203は瓦質羽釜である。200、201は口縁部直下に短い鰐がつく。内面は板ナデ調整。202、203は大型のものである。202は口縁部外面には段を有するのに対し、203は2～3条の沈線を入れる。204は土師器皿。口縁部はゆるやかに屈曲する。205は楠葉型瓦器椀である。底部中央に穿孔を有する。Ⅳ-2期（14世紀前半）の所産である。206は瓦質鍋。口縁端部は断面三角形になり、受け口の屈曲部は上方に突出する。体部外面には指頭圧痕および粘土紐接合痕が明瞭に残る。

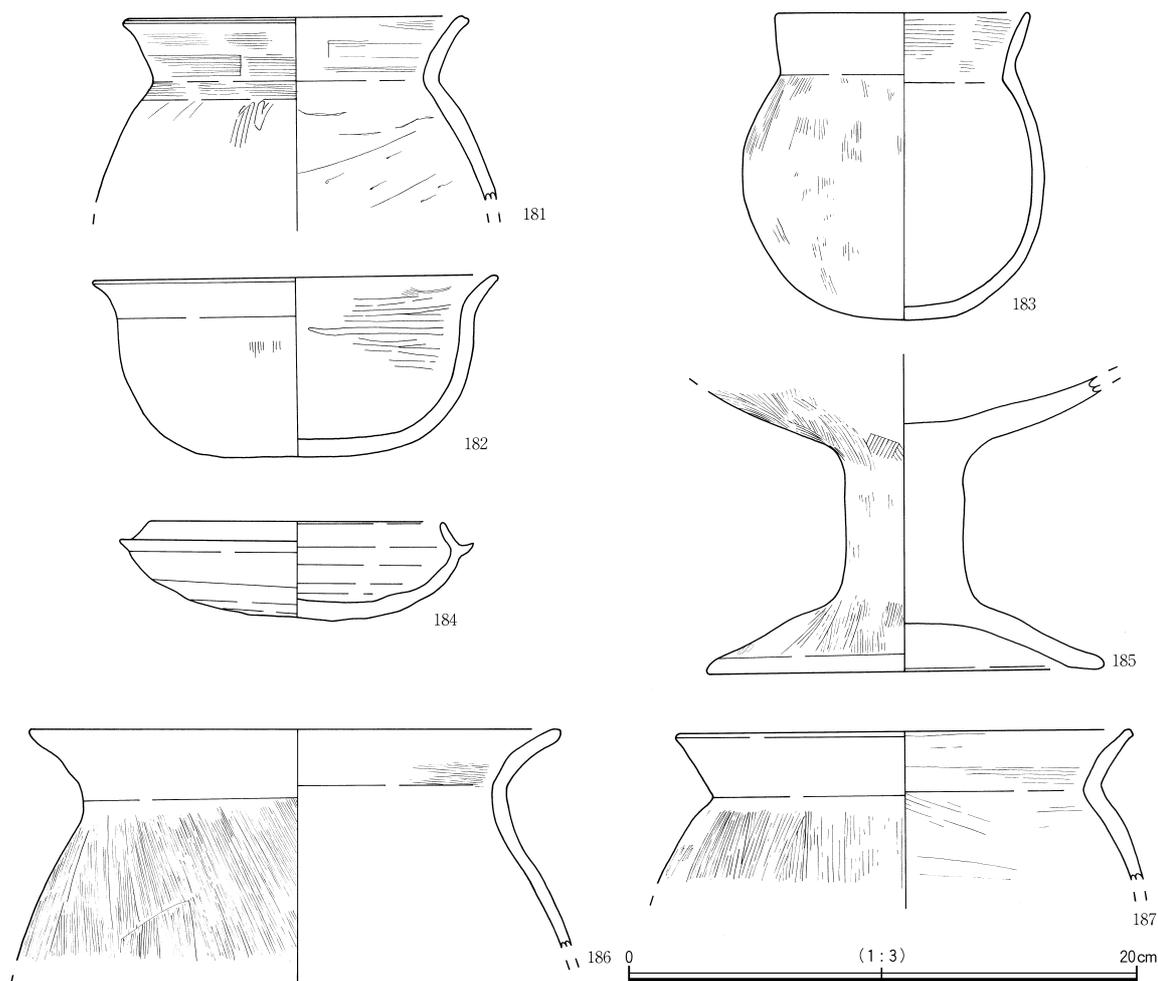


図340 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

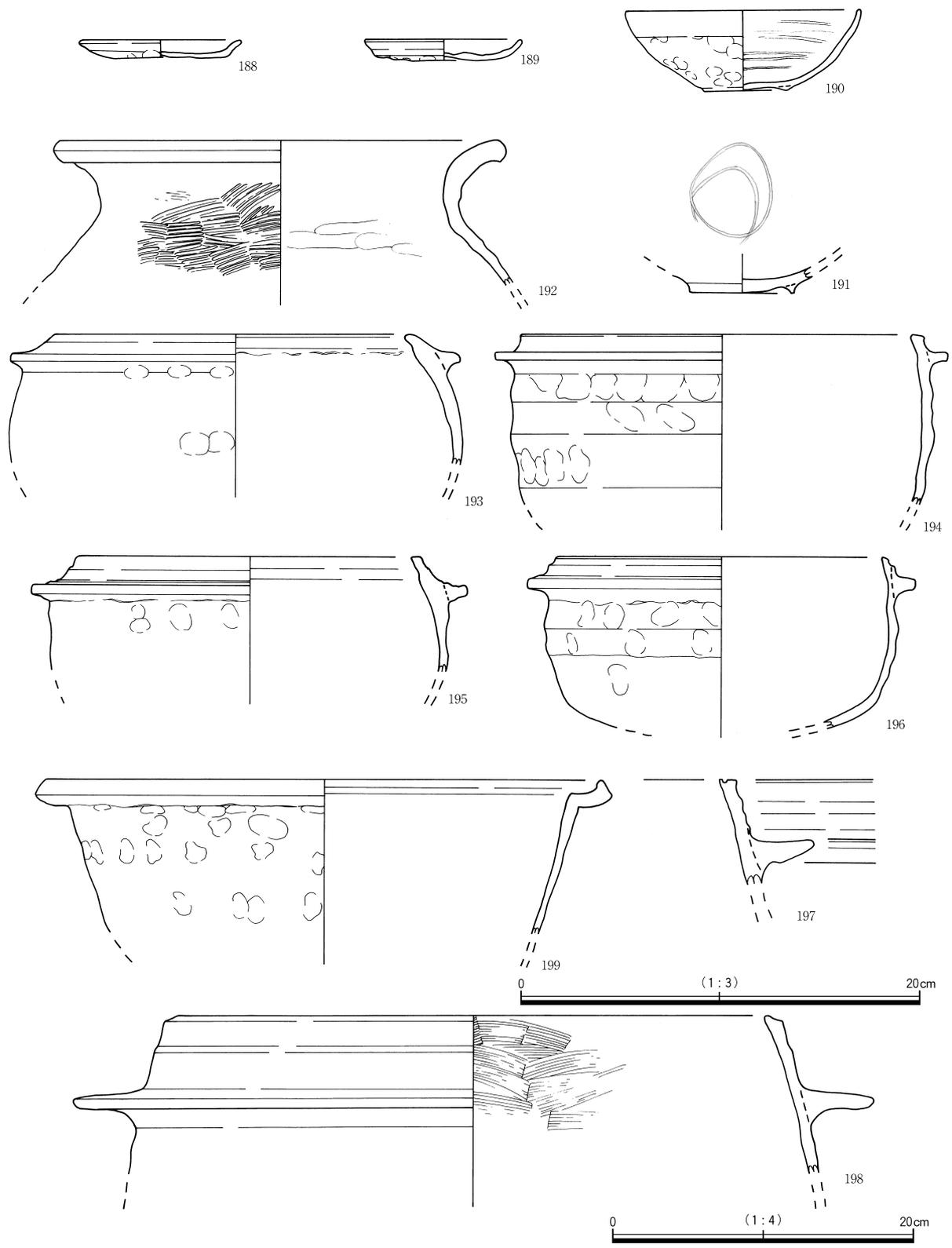


图341 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

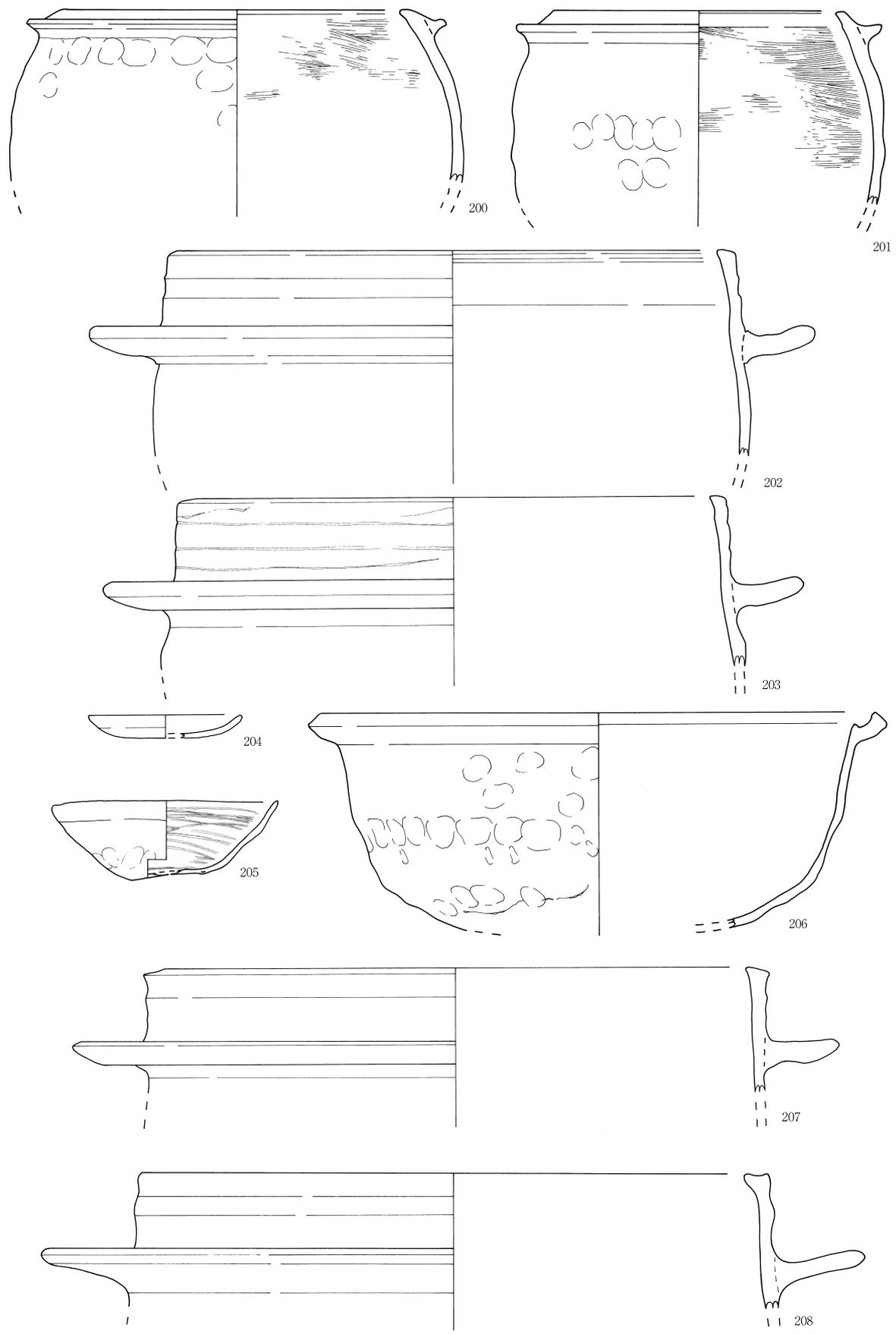


图342 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

207、208はいずれも瓦質羽釜で、口縁外面に段を有する。

以上、26層出土遺物は概ね14世紀前半までの所産と考えられる。

209は26層、210～214は27層、215～220は32層から出土した。209は楠葉型瓦器椀である。底部に高台はない。Ⅳ－2期（14世紀前半）の所産である。210～213は土師器皿である。いずれも口縁部はヨコナデによって外反させる。210、211は底部に穿孔を有する。214は楠葉型瓦器椀である。Ⅳ－2期（14世紀前半）の所産である。215は土師器皿である。底部に「十」字の墨書を有する。216、217は楠葉型瓦器椀である。Ⅳ－2期（14世紀前半）に位置付けられる。218、219は瓦質羽釜である。219は外面に部分的に煤が付着している。220は瓦質三足釜である。

以上、26層、27層、32層出土遺物は、概ね14世紀前半に位置付けられる。

1 大溝18層・19層（図344・355－221～240） 221～230、232は18層、231、233は18～19層、234～240は19層から出土した。221、222は土師器高杯の杯部である。いずれも椀形を呈し、口縁端部にはヨコナデを施す。223は土師器甕。胴部は張りがなく、頸部はゆるやかに屈曲する。体部外面はハケ調整で、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。底部および内面はナデ調整。224、225は土師器高杯の脚部である。いずれも中空で、裾部はゆるやかに外方に開く。内面はケズリ調整。225は外面も縦方向のヘラケズリによって仕上げる。226は須恵器杯蓋。上部は一部ヘラケズリを施すが、天井部は軽くナデのみで、ヘラ切り痕が残る。227～229は須恵器杯身である。227はTK209型式に位置付けられるものであろう。228、229はTK47型式に併行するものと考えられるが、口縁端部は丸くおさめている。230は土師器杯身である。口縁部は横方向のナデ調整、底部はハケ調整を施す。231、232は土師器高杯の脚部である。231は裾部が大きく外方に開き、内外面ともナデ調整によって仕上げている。232は、内面ハケ調整。233は土師器甕である。口縁端部はヨコナデにより外反する。体部外面および口縁部はナデ調整、体部内面はハケ調整

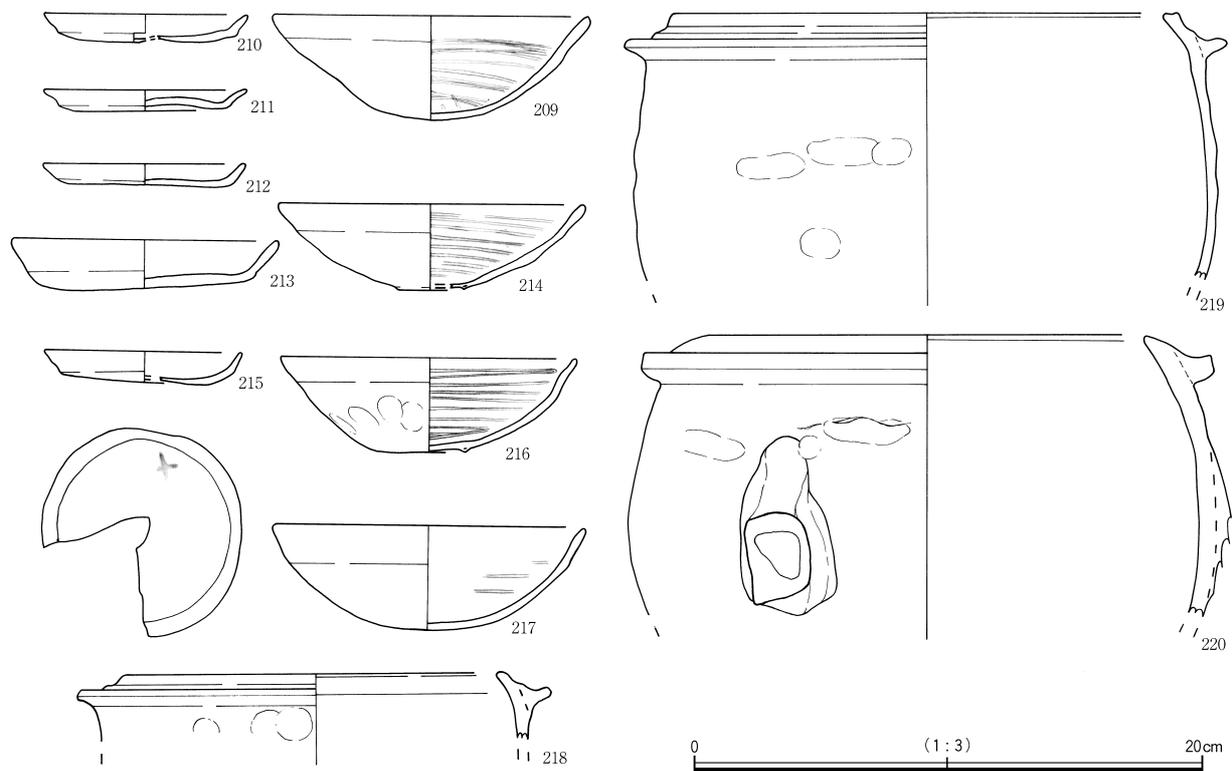


図343 有池遺跡03－2－3調査区 1大溝出土遺物

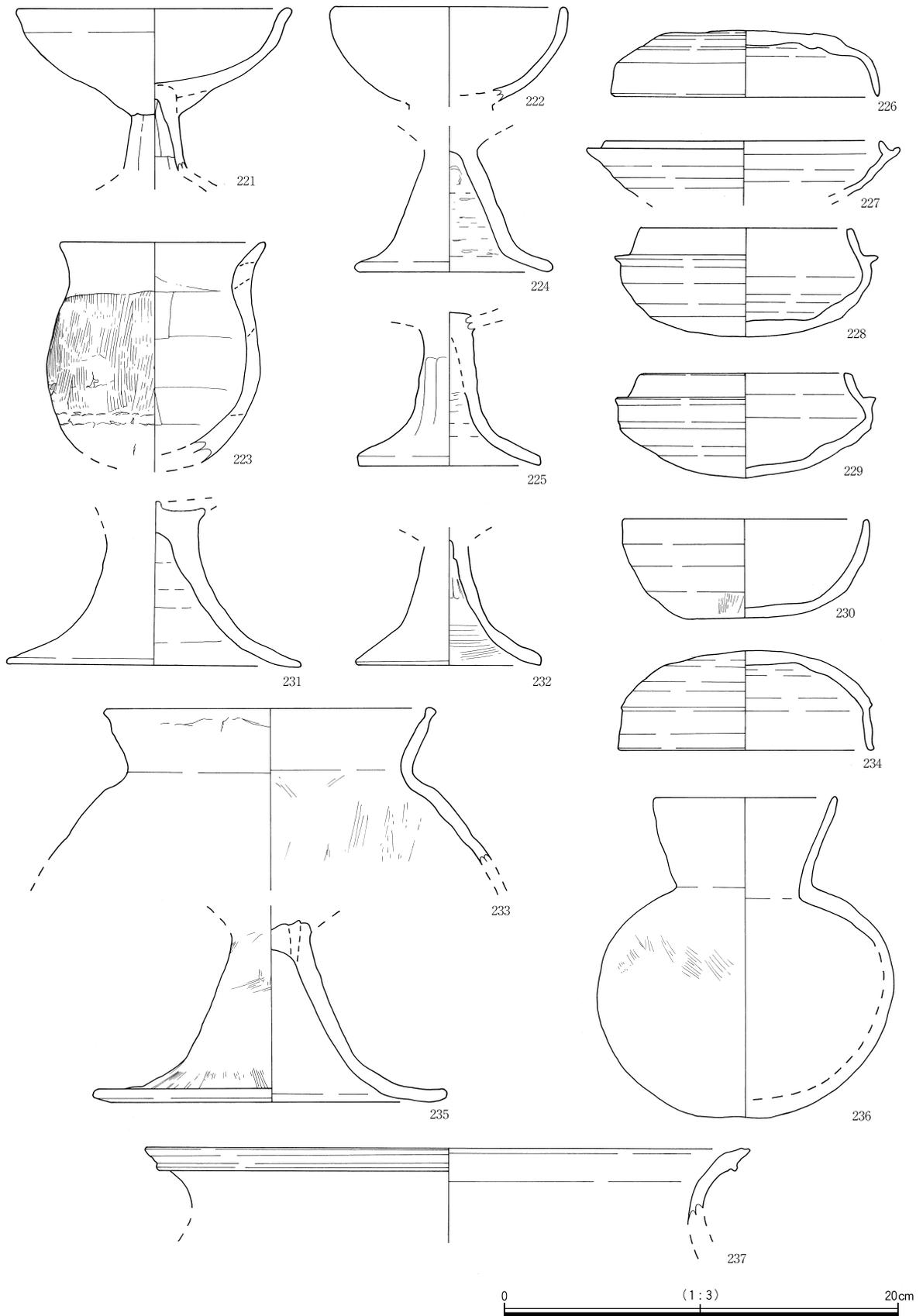


图344 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

の後、ナデを施して仕上げる。234は須恵器杯蓋。法量および天井部に丸みを有すること等からみて、TK47型式に併行するものと考えられるが、端部はやはり丸くおさめている。235は土師器高杯の脚部。大きく外方に開く裾部を有する。外面はハケ調整の後、ナデを施す。236は長頸の土師器壺。球形の胴部に、直線的に開く口縁部を有する。237は、須恵器甕の口縁部である。口縁部上端には凹線がめぐる。238、240も須恵器甕である。238は口縁部が外反し、頸部には2条の突帯で区画された3段の櫛描波状文が施される。口縁端部は拡張され、面が作り出されているが、下端部は突帯に移行しつつある段階を呈する。肩部にはカキメを施している。全体に焼があまいためか、胎土は白っぽく、軟質な印象を受ける。240は頸部をナデ調整して仕上げる。MT15型式に位置付けられるものである。239は須恵器甕。胴部は肩が張る。下位はヘラケズリ、上位は回転ナデによって仕上げ、施文はない。

以上、1大溝最下層からは概ね6～7世紀初頭の遺物を包含する。

18石組（図346-241、242） 241は瓦質土器火鉢の脚部。242は瓦質羽釜である。口縁部はゆるやかに内傾し、端部はわずかに内方へ突出する。

2流路（図347-351-243-298） 243は南側側溝から出土した瓦質土器輪花形火鉢である。外面には菊花文のスタンプを押す。244は6層、245は8層から出土した軒平瓦である。いずれも、圏線内に唐草文を配する。244は凹面に縦棧がつくものである。246は8層から出土した陶器甕である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。渥美焼か。247は9層から出土した瓦質羽釜である。内面は板ナデ調整。外面には煤が付着する。248-250は11層から出土した。248は東播系須恵器鉢。第Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）に位置付けられるものである。249は常滑焼壺の底部。250は東播系須恵器甕である。口縁部上端には凹線がめぐり、下端は垂下せずにおわる。251-258は12層出土遺物である。251は土師器皿。252は瓦器皿である。口縁部はゆるやかに屈曲する。見込みには8往復程度のジグザグ状暗文を描

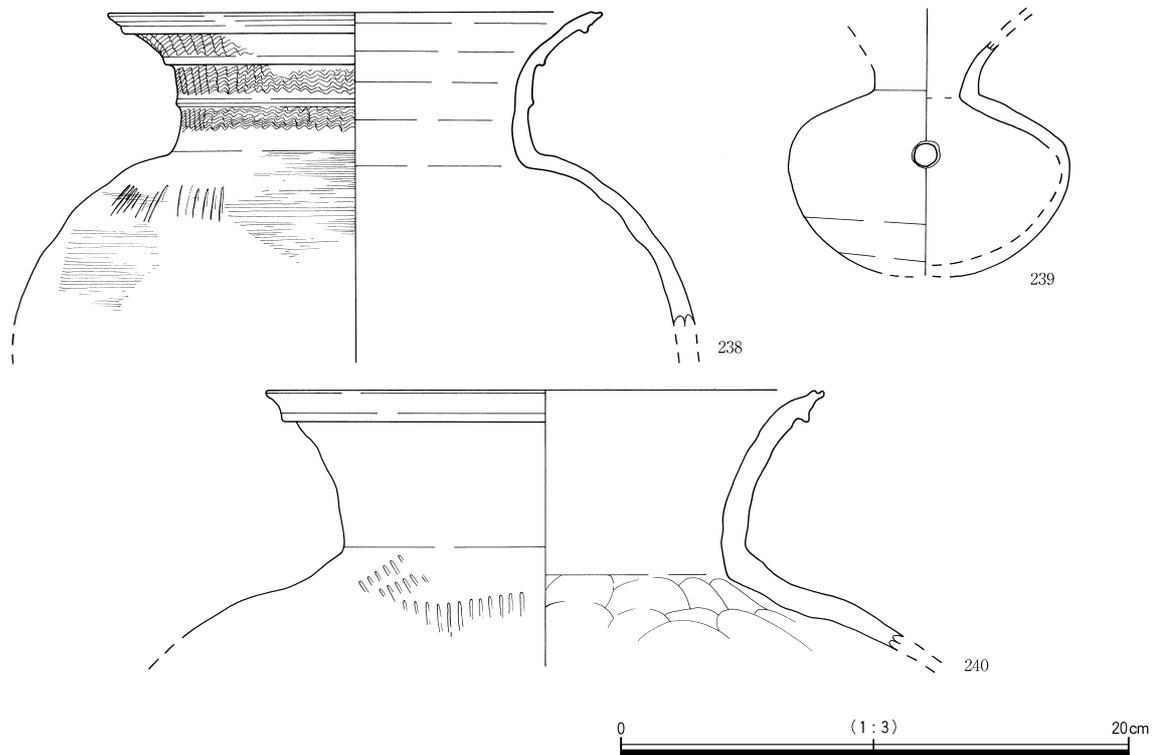


図345 有池遺跡03-2-3調査区 1大溝出土遺物

く。253～256は瓦器椀である。253は大和型、256は楠葉型である。256は外面上位3分の2程度にヘラミガキを施す。253はⅡ－2期（12世紀中葉）、256はⅠ－3期（11世紀末～12世紀初頭）の所産であろう。254、255は高台内に線刻がある。257は土師質羽釜である。口縁端部はヨコナデを施し内傾させる。外面には煤が付着する。258は東播系須恵器甕である。口縁部は外反し、端部は断面方形になる。体部外面には目の粗い平行タタキが残る。259、260は12～13層から出土したものである。259は土師器甕の把手。260は大和型瓦器椀である。内面のヘラミガキは密で、見込みには連結輪状暗文を施す。外面には分割ヘラミガキが認められる。Ⅱ－A段階（11世紀末～12世紀初頭）の所産である。261、262は土師器皿である。261～267は13層から出土した。261の底部は丸く、口縁部は二段ナデを意識しているとみられ、端部は上方につまみ上げる。263は瓦器椀である。ヘラミガキが細く、器壁が薄い点や焼成などからみて大和型と考えられるが、沈線は横位から入れている。11世紀末～12世紀前半に位置付けられるものであろう。264は土師器皿である。二段ナデを意識するが、下段のナデは外面に横方向に連続する指頭圧痕が認められることから、断続的に施しているものとみられる。12世紀前半の所産である。265は瓦質鍋で、把手がつくものと考えられる。平底で、口縁部は外方へのびる。266は瓦器椀で、見込みには連結輪状暗文を有する。外面には分割ヘラミガキが認められる。口縁部は直立して端部を丸くおさめる。口縁内面の沈線はヘラを水平に近い角度であてて施している。器形にゆがみがみられ、口縁の平面形が楕円形になる点、胎土が緻密でミガキを施した箇所が金属的な光沢をおびる点、高台の断面形が外方に反る点など楠葉型にみられる特徴を有する。267は土師質羽釜である。口縁部はゆるやかに内傾する。268～272は14層から出土した。268は瓦器椀の底部である。高台内に「十」字の線刻がある。269～271も瓦器椀。269の外面には、それほど厳密ではないが分割性をとどめた粗いミガキが上半1/3～1/2にかけて施されている。口縁部が外面の強いヨコナデにより外反ぎみな点、口縁内面の沈線は直立

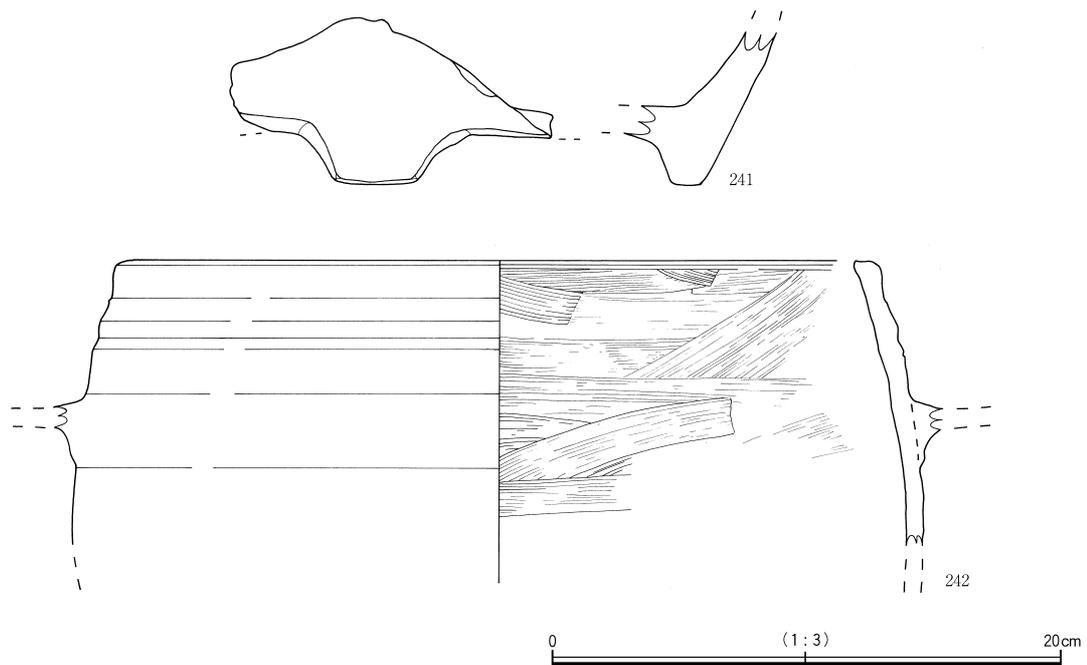


図346 有池遺跡03－2－3調査区 18石組出土遺物

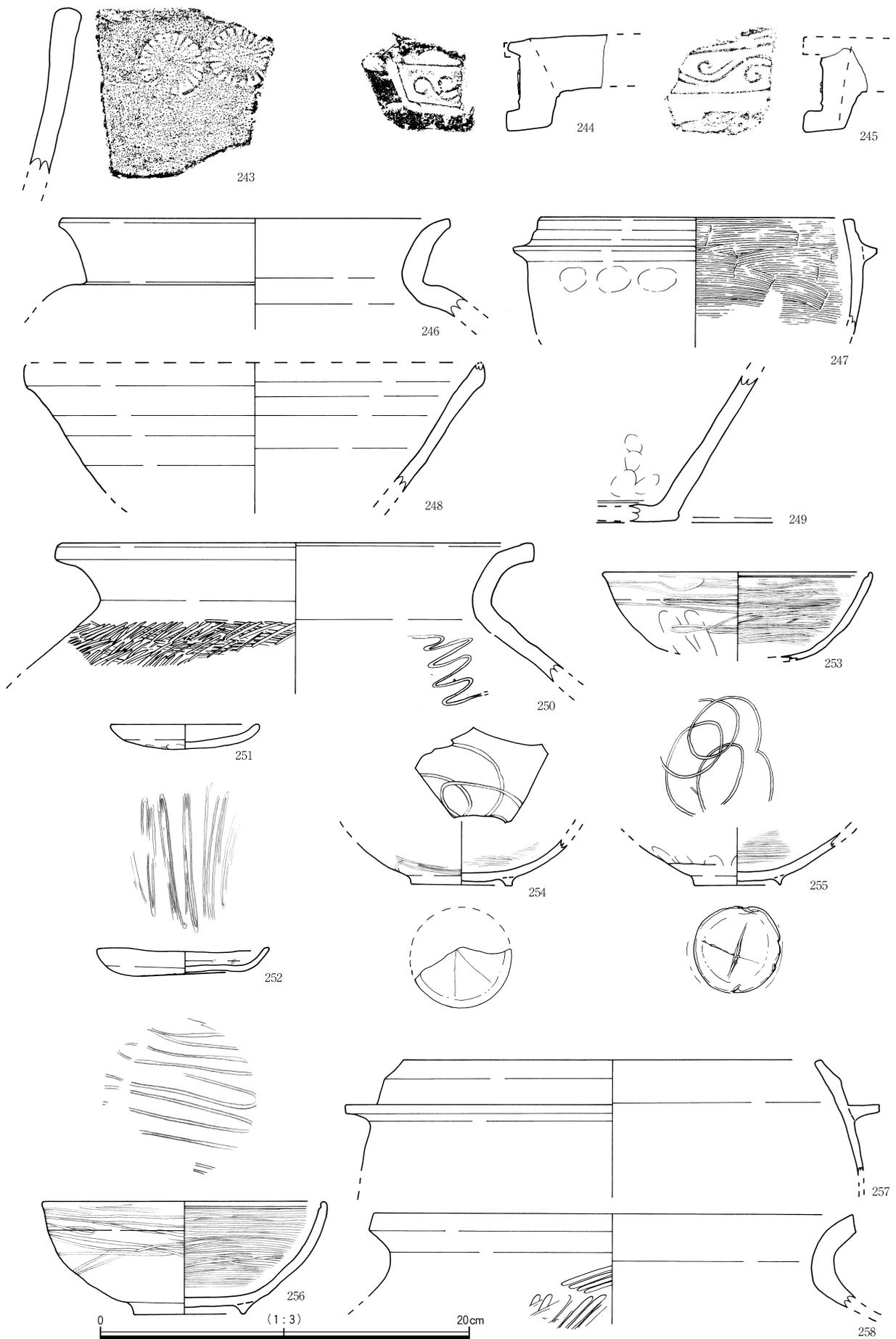


图347 有池遺跡03-2-3調査区 2流路出土遺物

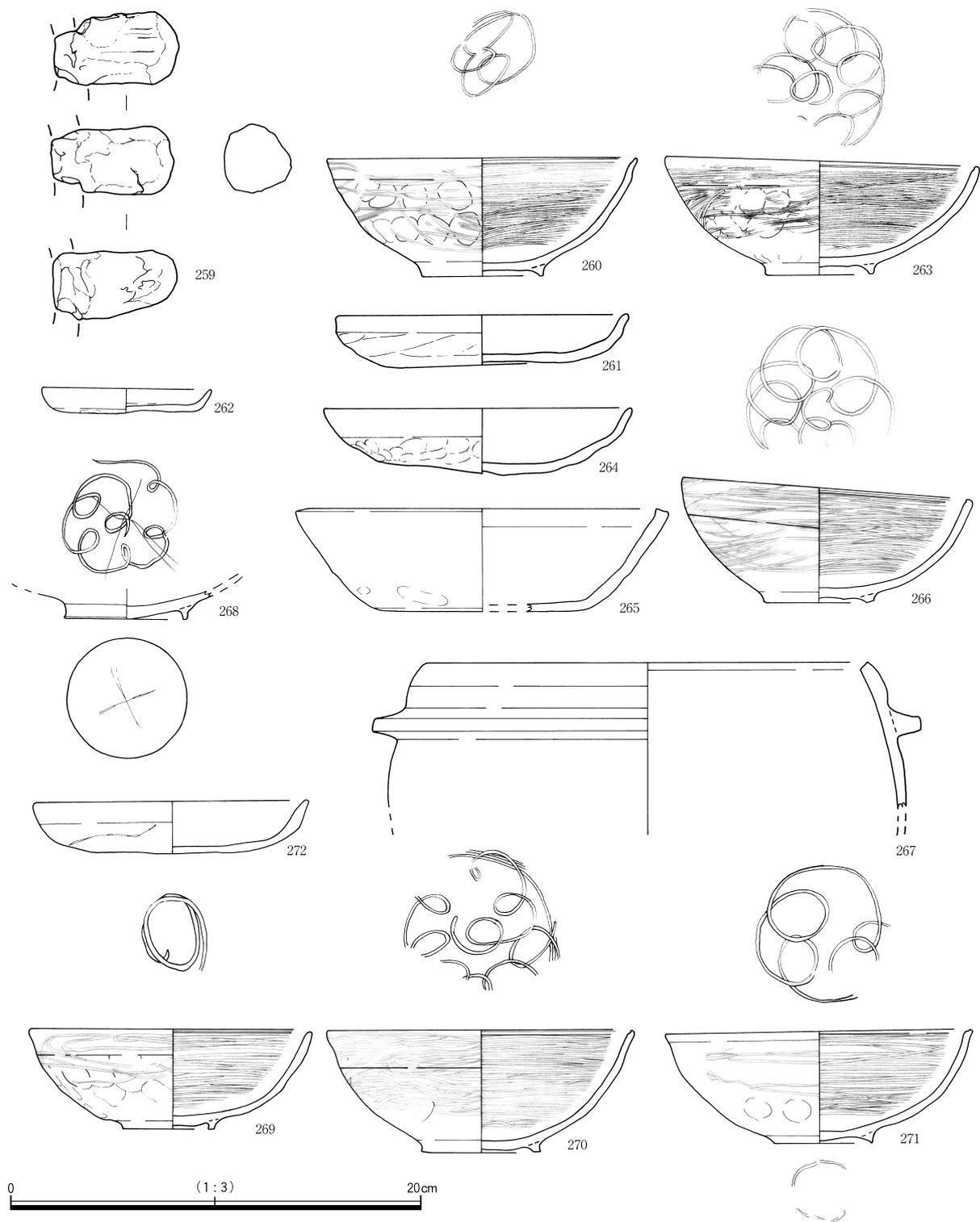


図348 有池遺跡03-2-3調査区 2流路出土遺物

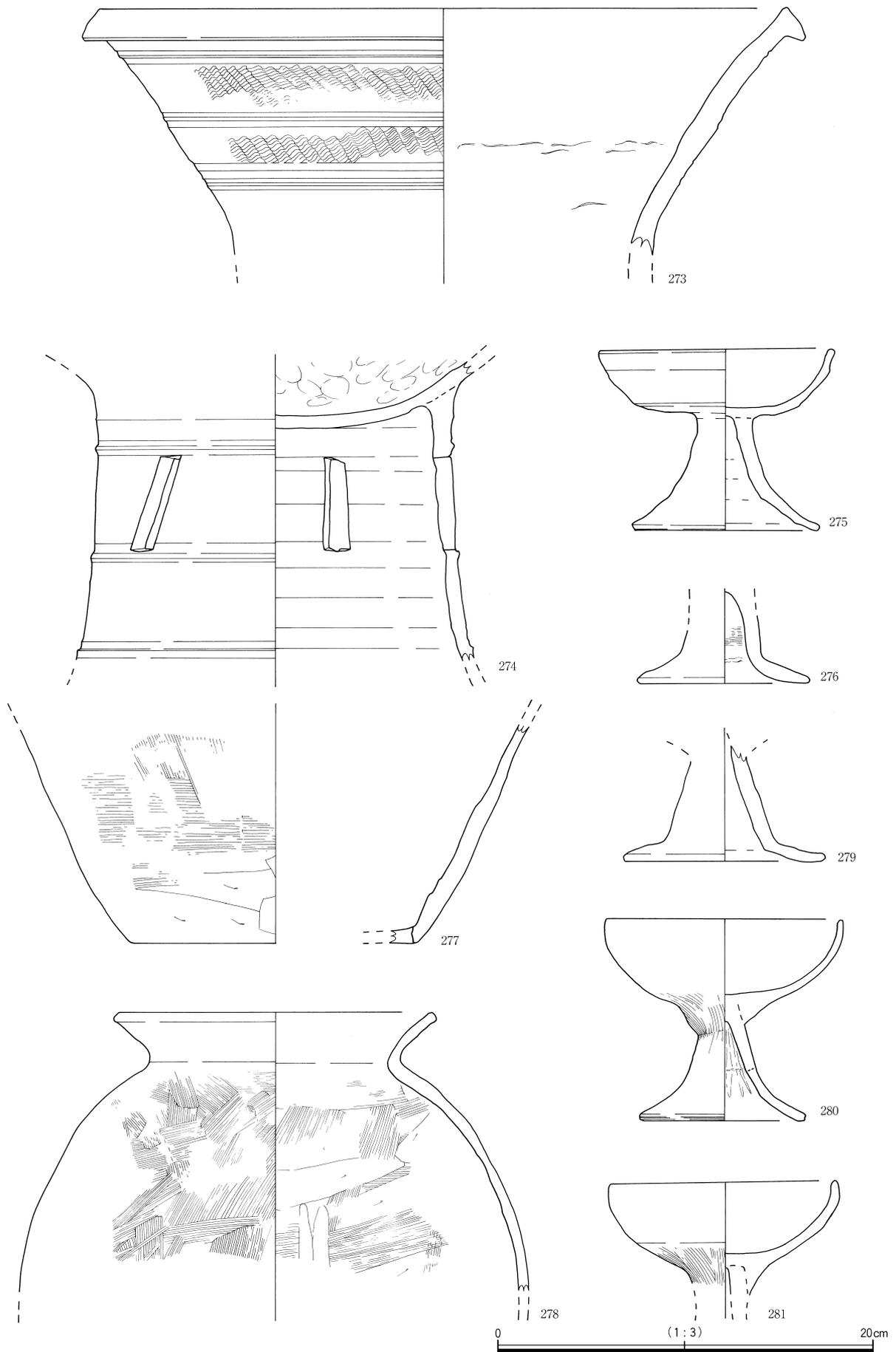


图349 有池遺跡03—2—3調査区 2流路出土遺物

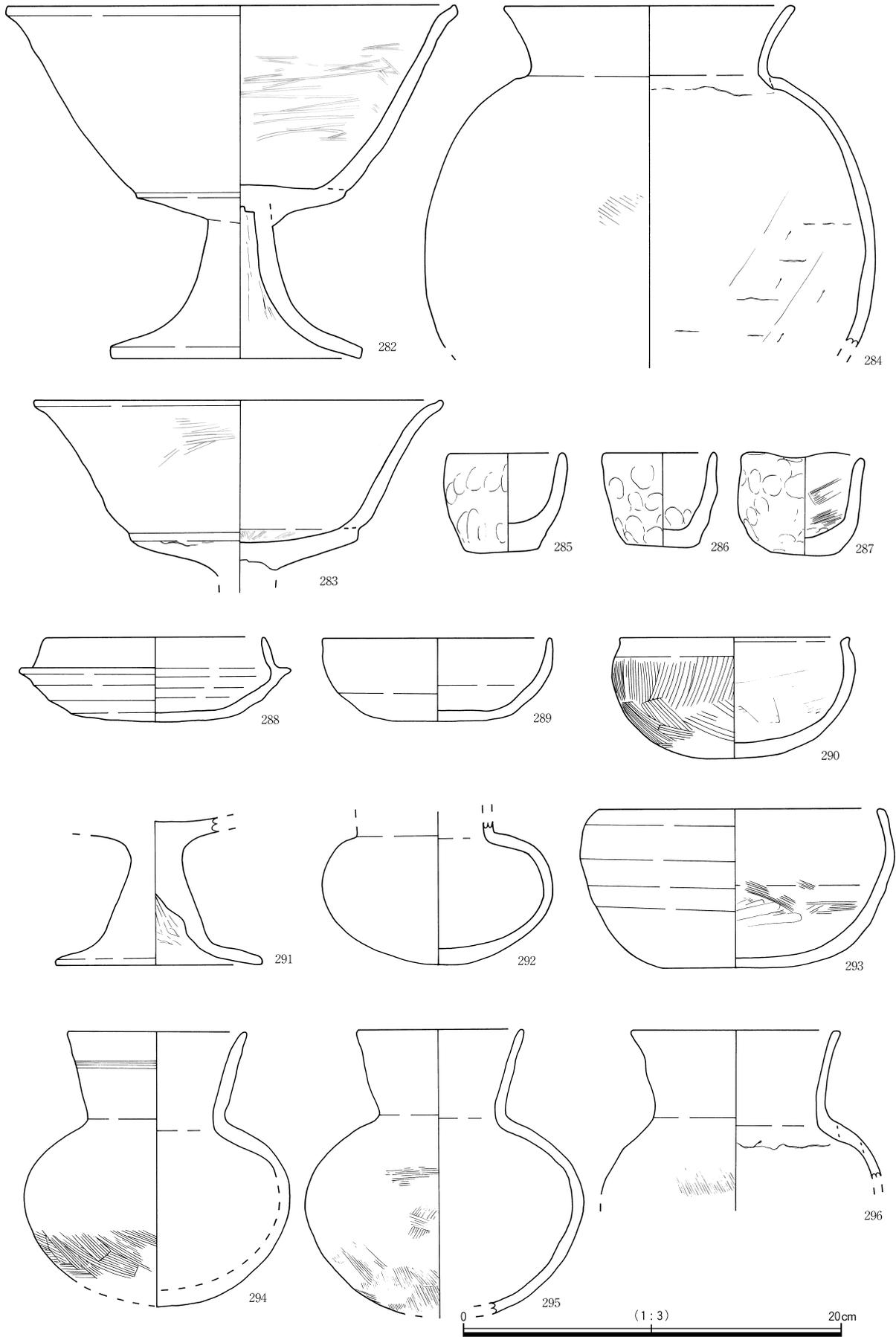


图350 有池遺跡03-2-3調査区 2流路出土遺物

ぎみにヘラをあてて施されている点など、大和型にみられる特徴を有する。内面のヘラミガキは太く、下位まで施されている。見込みには螺旋状暗文を施す。Ⅲ-A（古）段階（12世紀後半）。270も大和型と考えられるもので、外面上位3分の2程度まで密にヘラミガキを施し、しっかりした底部をもつ。11世紀後半に位置付けられるものと考えられる。271は大和型瓦器椀で、Ⅲ-A（古）段階（12世紀後半）に位置付けられる。見込みは連結輪状暗文。272は14層の最下部から出土した土師器皿。口径は13.3cmを測る。器壁は厚く、口縁部はゆるやかに内湾し、端部のみ上方につまみあげる。273は14層から出土した須恵器甕の口縁部である。3条の突帯をもち、その間に櫛描波状文を配する。突帯は2条の凹線を並行させて作り出されており、比高のないなだらかな形状である。TK208型式に位置付けられるものであろう。

以上、2流路上層（8～14層）出土遺物は、概ね11世紀後半～12世紀後半の遺物を包含する。

274、276は15層から、275、277、278は15層以下から出土したものである。274は須恵器の器台である。脚部は数条の突帯を廻らすのみで、施文はない。残存部で見ると上下2段に数ヶ所ずつ、方形の透かしを有する。275は須恵器高杯である。杯部は浅く、脚裾部は外方に向かって開く。276は土師器高杯の脚部である。裾部は屈曲して外方に開く。277は土師器甑である。外面はハケ調整の後、部分的にナデを施して仕上げる。279～285は16～17層、286～298は17層から出土した。278は土師器甕。内面はケズリとハケ調整を繰り返し、部分的にナデ調整を施している。外面はハケ調整。279、280、281は土師器高杯である。後2者はともに杯部下端部にハケメが残る。脚部は杯部に突き刺す形で接合している。282、283は土師器有段高杯である。口縁部は大きく外方に開き、端部は外反する。杯部内面にはヨコ方向のミガキが、杯部内面底部には放射状のミガキが粗く施される。282は脚柱部内面にシボリメが残る。284は土師器甕である。内面はケズリ調整、外面はハケ調整の後、全体をなでている。285～287は土師器ミニチュア土器で、鉢形を呈する。器壁は厚く、外面にはオサエに伴う指頭圧痕が明瞭に残る。288は須恵器杯身である。TK10型式に位置付けられるものであろう。289は土師器杯身である。平坦な底部に内湾する口縁部を有する。290は土師器杯。杯形を呈し、口縁端部は面を作り出し、外反させている。体部外面は粗いハケ調整。291は土師器高杯の脚部である。中実ぎみで、裾部は大きく外接する。292は土師器壺。胴部は球形である。293は土師器杯である。やや大型で、体部上方にふくらみをもち、口縁部は内

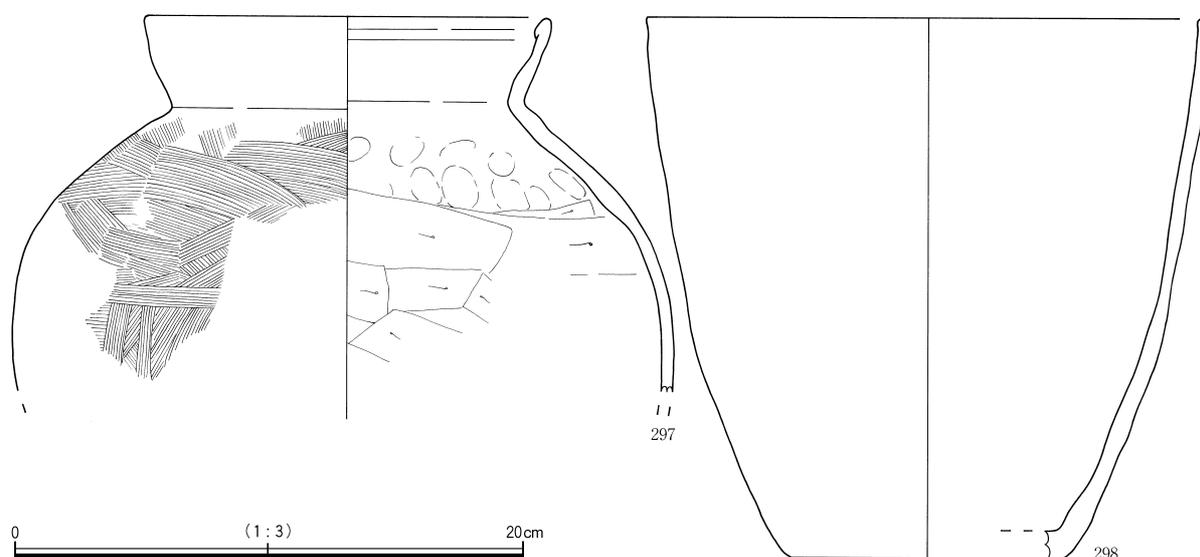


図351 有池遺跡03-2-3調査区 2流路出土遺物

湾ぎみに立ち上がる。外面はヨコナデ調整、内面底部はハケ調整の後ナデを施す。294～296は長頸の土師器壺である。294は口縁部外面に沈線が2条入る。体部外面はいずれもハケ調整。297は土師器甕である。口縁部は内側に折り返して肥厚する。体部内面はケズリ、外面はハケ調整を施す。298は土師器甑。バケツ形を呈し、底部には円孔を有する。残存率が低く把手はない。

以上、12大溝下層（15～17層）出土遺物は、概ね5世紀後半～6世紀代の所産である。

294竪穴（図352-299～306） 299～303は土師器甕である。299、300は口縁部を外折させるが、301～303はその屈曲が弱い。いずれも口縁端部は丸くおさめ、体部外面にはハケ調整を施す。304は土師器ミニチュア土器で、壺形を呈するものと考えられる。外面には指頭圧痕およびハケメが残る。305、306は土師器の台形を呈する土器であるが、器種・用途は不明である。内面は丁寧にナデを施し、図中上端部は丸くおさめ、内面は丁寧にナデ調整を施すのに対し、外面はハケメが残り、図中下端部は粘土紐接合痕および指頭圧痕が明瞭に残ることから、上方に向かって開く形態として図化した。外面には煤が付着している。

137ピット（図353-307） 307は瓦質羽釜である。口縁部は直線的に立ち上がる。

155ピット（図353-308～310） 308～310は土師器皿である。308は底部に穿孔を有する。309は口縁部が強く外反する。13世紀後半～14世紀前半の所産であろう。

48ピット（図353-311、312） 311、312は土師器皿。口縁部は上方に強く屈曲させる。13世紀前半～後半の所産である。

277ピット（図353-313） 313は土師器皿。ゆがみが大きい。13世紀後半の所産であろう。

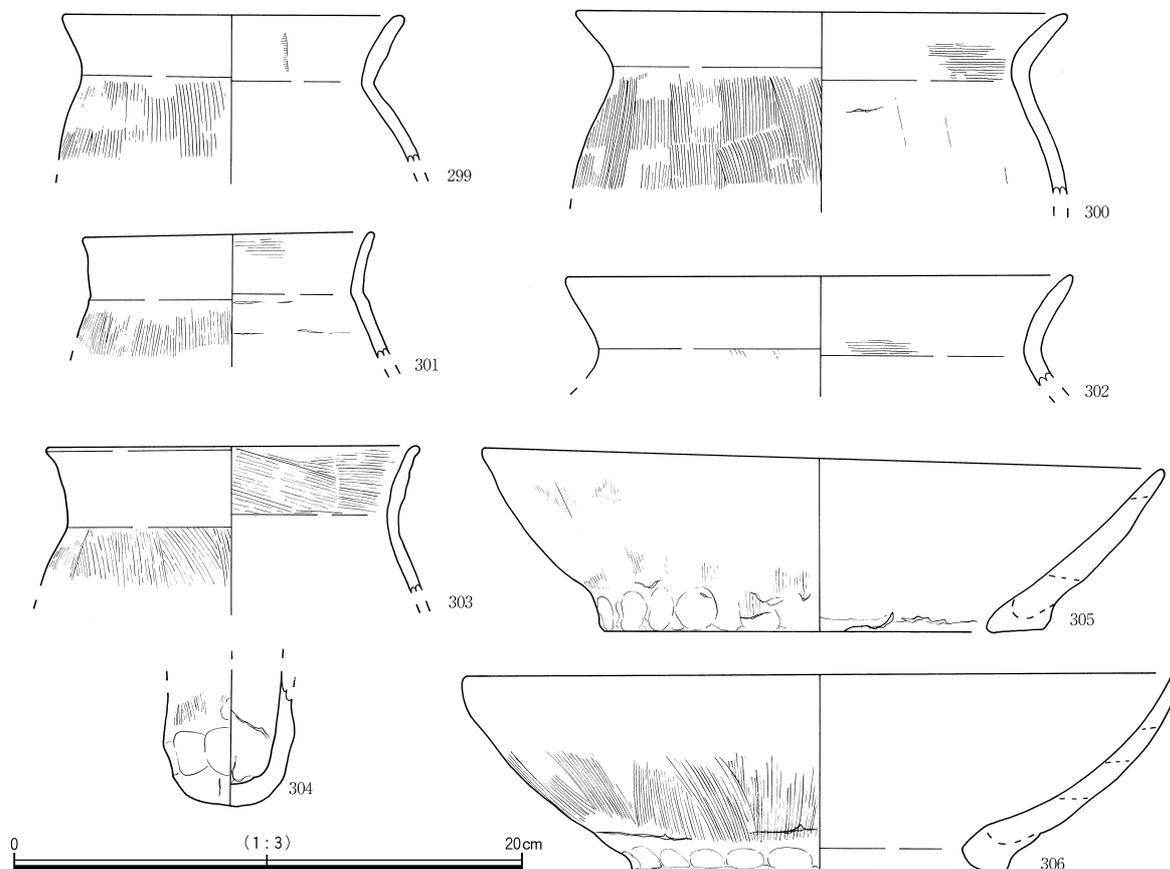


図352 有池遺跡03-2-3調査区 294竪穴出土遺物

- 158ピット (図353-314) 314は土師器皿である。復元口径14.4cm、器高2.7cmを測る。器壁は薄く、口縁部はゆるやかに屈曲する。12世紀後半に位置付けられるものであろう。
- 337ピット (図353-315) 315は土師器皿である。口縁部にはヨコナデを施し上方に屈曲させる。13世紀後半の所産である。
- 116ピット (図353-316) 316は楠葉型瓦器椀である。内面のヘラミガキは粗く、底部には高台を意識して薄く粘土を貼り付けている。Ⅳ-2期(14世紀前半)の所産である。
- 378ピット (図353-317) 317は楠葉型瓦器椀。Ⅳ-2期(14世紀前半)の所産である。
- 63井戸 (図354-318~320) 318、319は土師器皿である。口縁部は上方にゆるやかに屈曲する。12世紀後半の所産であらう。320は須恵器鉢で、口縁端部は内側に折り返しておさめる。内面には粘土紐接合痕が明瞭に認められる。東海系か。
- 454井戸 (図354-321、322) 321、322は楠葉型瓦器椀である。底部にはわずかに粘土をはりつけ、高台を作り出している。Ⅳ-2期(14世紀前半)の所産である。
- 452井戸 (図354-323) 323は瓦質三足釜である。胴部は丸みをおび、鏝直下に脚が付く。外面には煤が付着する。
- 20土坑 (図354-324) 324は瓦質羽釜である。内面はナデ調整。
- 122土坑 (図354-325) 325は楠葉型瓦器椀である。Ⅳ-2期(14世紀前半)の所産である。
- 5溝 (図355-326、327) 326、327は土師器皿である。326は口縁端部に面取り状にヨコナデを施す。327は口縁部を短く屈曲させるものである。内面には煤が付着している。13世紀前半の所産であらう。
- 6溝 (図355-328) 328は東播系須恵器甕である。口縁端部は垂下するが、内側に押しつけられたような形状をなし外傾する。
- 8溝 (図355-329~335) 329、330は土師器皿である。口縁部は上方に強く屈曲する。331~333は楠

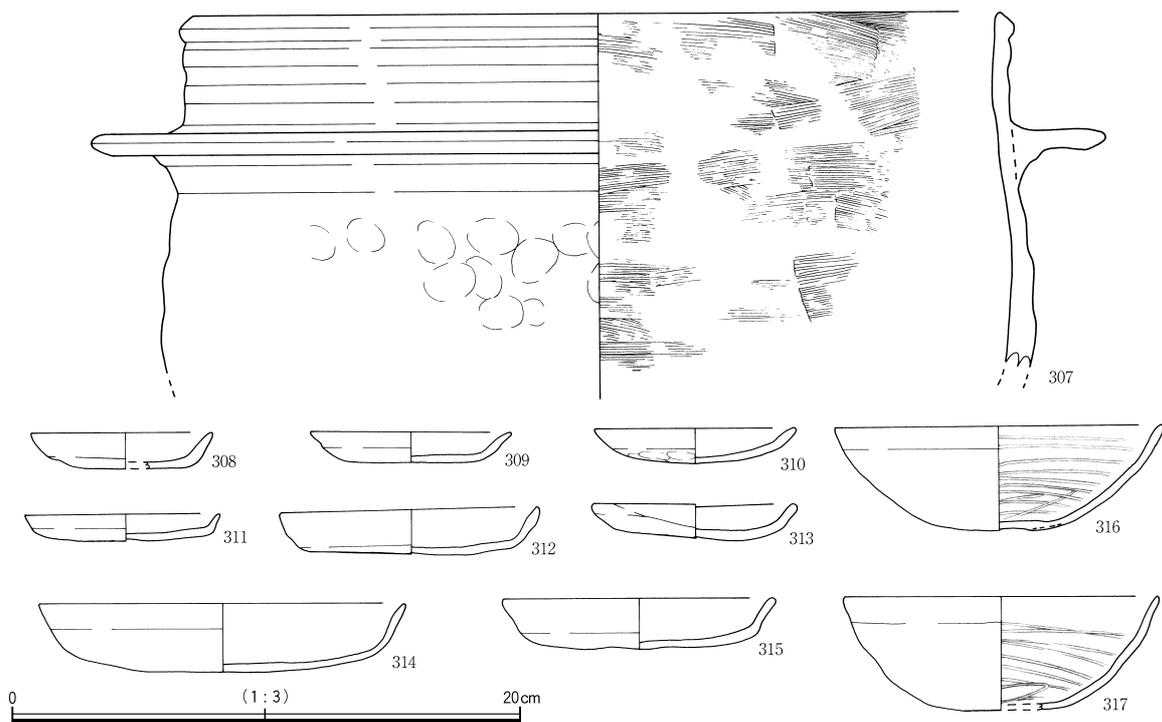


図353 有池遺跡03-2-3調査区 ピット出土遺物

葉型瓦器椀である。いずれもⅣ-2期（14世紀前半）に位置付けられるものである。334は東播系須恵器鉢である。第Ⅲ期第1段階（13世紀前半～後半）。335は瓦質羽釜である。これらは13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる。

19溝（図355-336） 336は土師器皿である。口縁部はヨコナデにより強く外反する。13世紀後半の所産である。

（4）4調査区

12大溝（図356-337-345） 337は1層から出土した土師器皿である。口縁部は短く上方に屈曲し、端部は外反する。13世紀前半の所産であろう。338は瓦器皿で、8層から出土した。底部は丸く口縁部は上方に屈曲させる。見込みには10往復程度のジグザグ状暗文を有し、口縁部内面にもヨコ方向のヘラミガキを施す。12世紀前半の所産である。

339-341は10層、342-344は11層、345は12層から出土したものである。339は土師器鉢である。平底で器高は高く、体部は内湾ぎみに立ち上がる。340-343は土師器甕。いずれも頸部の屈曲はゆるやかで、体部外面はハケ調整、口縁部内面には板ナデ調整を施す。342は口径が器高より大きく、鉢に近い形状をなす。344は須恵器杯蓋。天井部はまるい。TK209型式に位置付けられるものである。345は土師器高杯である。杯部は椀形を呈し、内面には粗いミガキを施しているように思われるが、不明瞭であ

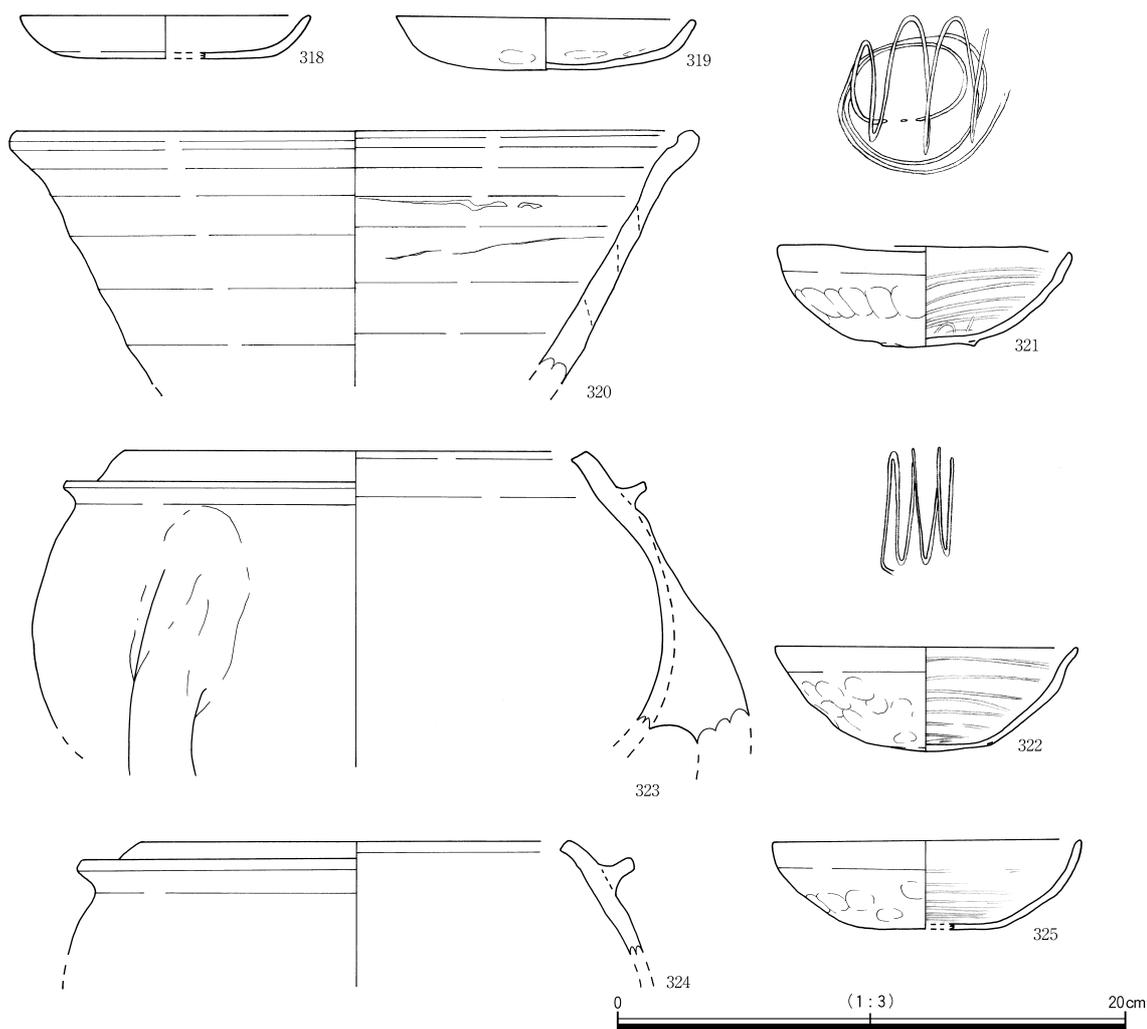


図354 有池遺跡03-2-3調査区 井戸・土坑出土遺物

る。

以上、12大溝出土遺物は、1層には13世紀前半の、8層には12世紀前半の、10～12層には古墳時代中期～後期の遺物を包含する。

18大溝（図356-346～354） 346、347は1層、348～350は2層、351～354は3層下層～4層上層から出土した。346は瓦質羽釜。347は瓦質土器播鉢である。佐藤編年B期（14世紀末～15世紀初頭）に位置付けられるものである。内面には使用痕が残る。348、349は土師器皿である。348は口縁部が上方に立ち上がるもの。13世紀後半に位置付けられる。349は「て」の字状口縁をもつ。器壁は厚い。11世紀前半～12世紀前半の所産であろう。350は土師質羽釜。長胴になるタイプとみられ、口縁部直下に断面方形の鐙が付く。351～353は須恵器杯身である。底部は平坦で、体部は斜め上方に立ち上がる。TK217型式に併行するものと考えられる。354は土師器高杯の脚部である。中実で、外面はハケ調整である。

以上、18大溝出土遺物は、概ね1層は14世紀末～15世紀初頭、2層は11世紀末～12世紀初頭を主体とし、3～4層は7世紀初頭に位置付けられる。

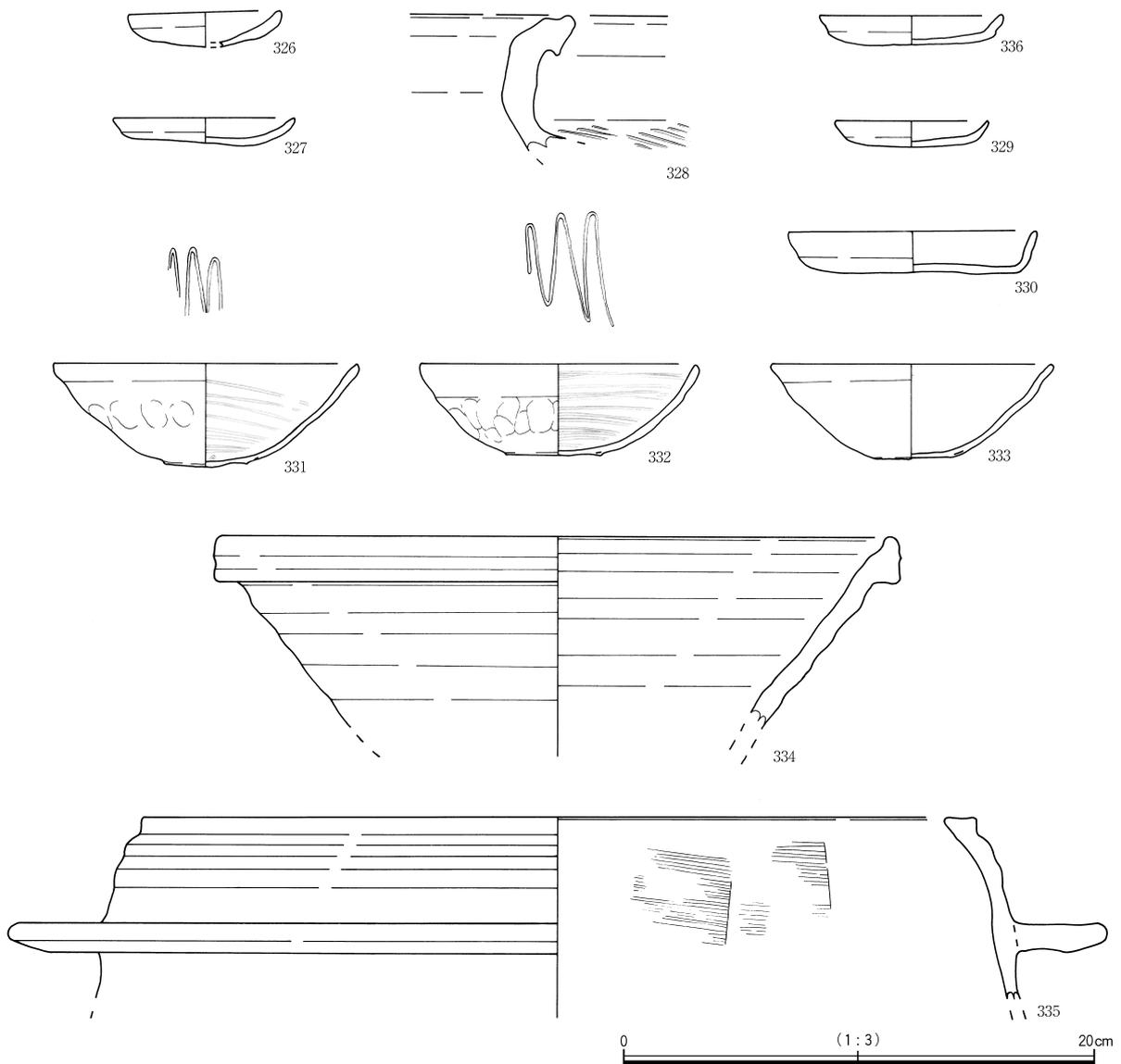


図355 有池遺跡03-2-3調査区 溝出土遺物

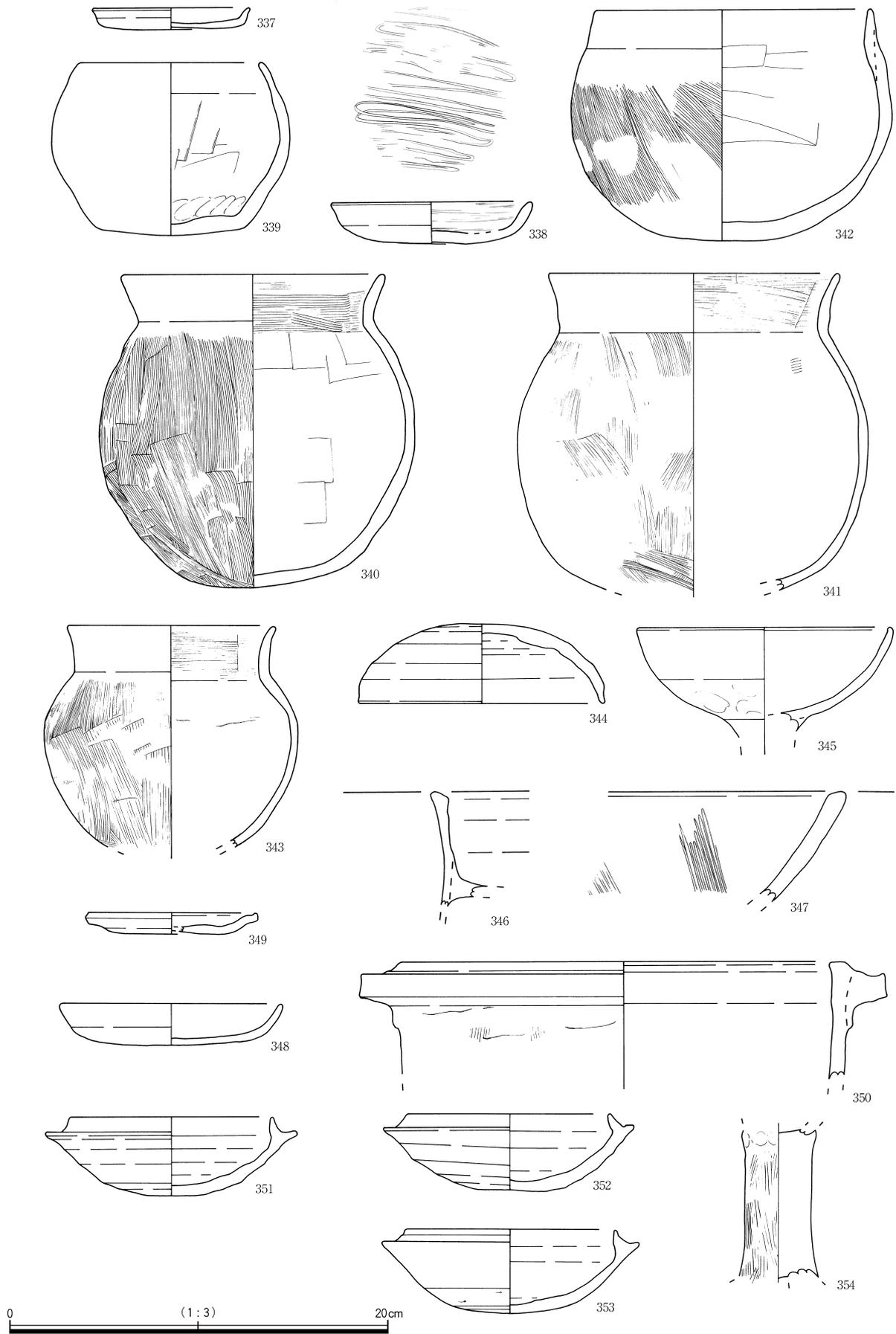


図356 有池遺跡03-2-4調査区 12・18大溝出土遺物

(5) 5 調査区

2 流路 (図357-355~358) 355、356は2層、357、358は5層から出土したものである。355は備前焼播鉢。口縁部は断面三角形状になる。IV B期(15世紀前半)の所産と考えられる。356は瓦質土器の香炉か。内面には煤が付着する。外面には丁寧にミガキ調整を施す。357は須恵器甕の口縁部である。口縁部は外反し、端部は丸く上方にわずかに突出させている。産地不明。358は、須恵器高杯蓋である。扁平な宝珠形つまみが付く。MT21型式に位置付けられるものであろう。

以上、2流路出土遺物は、上層(2層)は15世紀前半に、下層(5層)は7世紀初頭の所産である。

(6) 7 調査区

1 大溝南肩部1層 (図358、359-359~375) 359~361は土師器皿である。359、360は口縁部を短く上方に屈曲させるものである。361は口縁部ののびがやや長い。362~364は楠葉型瓦器椀である。362、364はⅢ-3期(13世紀後半)、363はⅢ-2期(13世紀前半)の所産である。363は口縁端部に細い沈線がめぐる。365~367は瓦質羽釜。365、366は内傾する口縁部を有するもの、367は外面に2条の凹線がめぐるものである。368は瓦質鍋である。口縁部には片口を有する。体部外面には指頭圧痕が残る。369は瓦質土器播鉢である。内面は端部まで播目がおよぶ。佐藤編年A期(14世紀中~後半)。371は第Ⅲ期第1段階(13世紀前半~後半)に位置付けられるものである。370~373は東播系須恵器甕と考えられる。372、373の口頸部はわずかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は粘土を貼りつけた結果、肥厚し、わずかに垂下したようになる。口縁部が大きく外反し、端部を垂下させるものである。374、375は瓦質土器火鉢である。374は体部下位に突帯をめぐらす。375は小片であるが、輪花形になる可能性がある。

以上、1大溝南肩部出土遺物は、概ね13世紀前半~14世紀後半の所産である。

13水田 (図360-376) 376は白磁椀で、口縁部は玉縁状になる(Ⅳ類)。11世紀後半~12世紀前半の所産である。

16水田 (図360-377) 377は常滑焼壺の底部と考えられる。底部は器壁が薄く、高台状に作り出す。

23~24水田 (図360-378~384) 378は東播系須恵器甕である。外面は頸部までタタキ痕が残る。口縁端部は断面方形で、外面には沈線が1条めぐる。13世紀前半の所産と考えられる。379は須恵器壺と考えられる。作りは粗で、体部外面には格子目タタキ痕が残る。産地不明。380、381は土師器皿である。口縁部はゆるやかに上方に屈曲する。382、383は楠葉型瓦器椀である。382は体部が大きく内湾する。

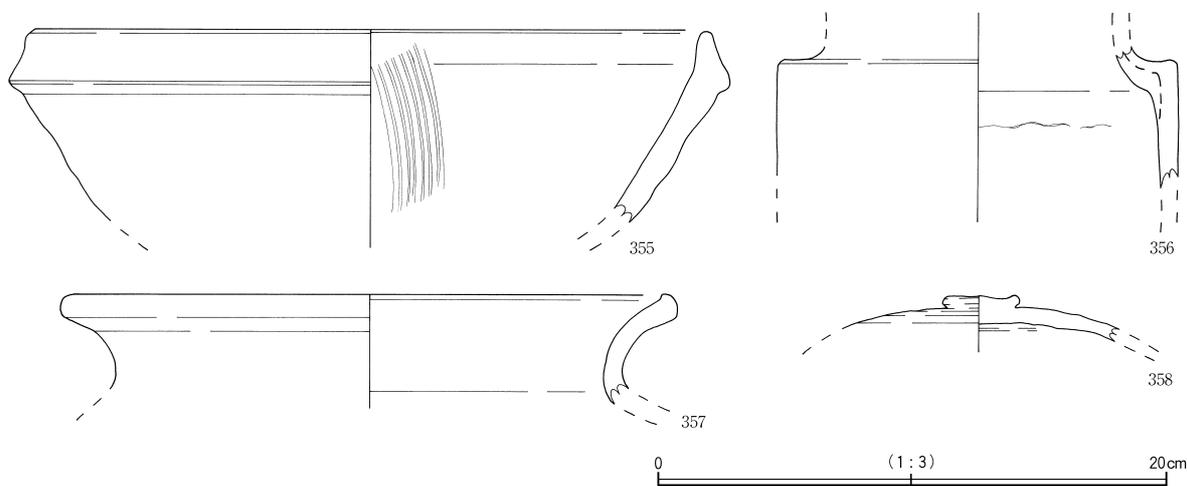


図357 有池遺跡03-2-5 調査区 2流路出土遺物

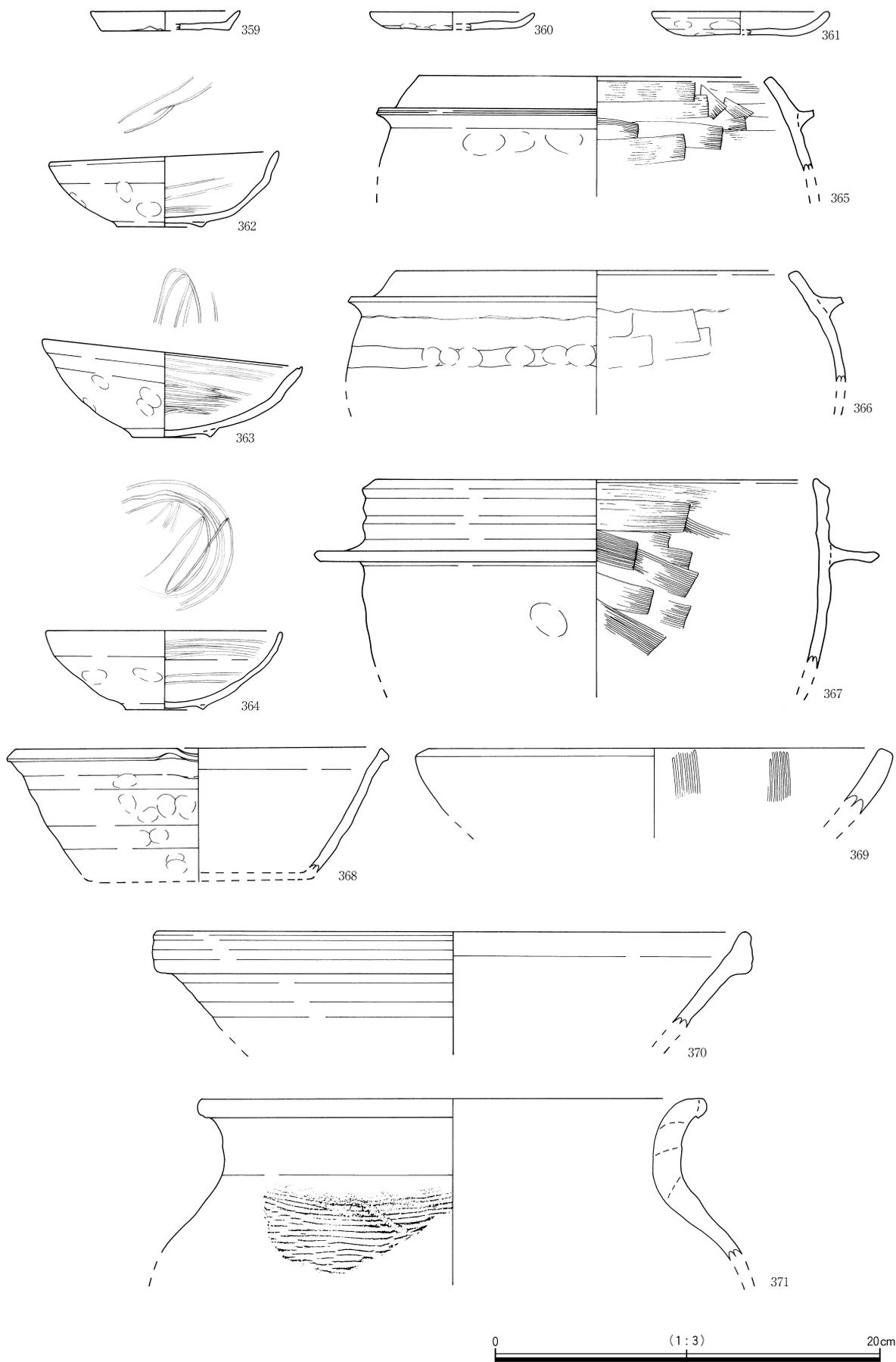


图358 有池遺跡03-2-7調査区 1大溝出土遺物

Ⅲ－２期（13世紀前半）に位置付けられるものである。384は瓦質土器香炉の底部である。三脚を持つものと思われる。

以上、23水田出土遺物は概ね13世紀前半に位置付けられる。

27溝・20土坑（図360－385） 385は土師質羽釜である。口縁部はゆるやかに内傾する。

24水田（図360－386～388） 386は常滑焼壺の底部とみられる。底部外面まで丁寧にナデを施して仕上げている。387は瓦質羽釜である。内外面ともに煤が付着する。388は須恵器甕である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。体部外面には縄目のタタキ痕が残る。頸部はタタキ調整の後ナデを施す。産地不明。

28溝（図361－389～395） 389は12世紀末～13世紀前半に位置付けられる瓦器椀の底部であるが、高台内に「十」字の線刻を有する。390、391は楠葉型瓦器椀である。内面のヘラミガキは粗い。Ⅲ－２期（13世紀前半）の所産である。391は焼成があまく、内面のヘラミガキも不明瞭である。口縁端部の沈線は太いが、非常に浅い。外面には接合痕が明瞭に残る。392、393は土師器皿である。392は底部が丸く、口縁部には二段ナデを施す。393は口縁部をヨコナデにより上方へ屈曲させる。いずれも12世紀後半の

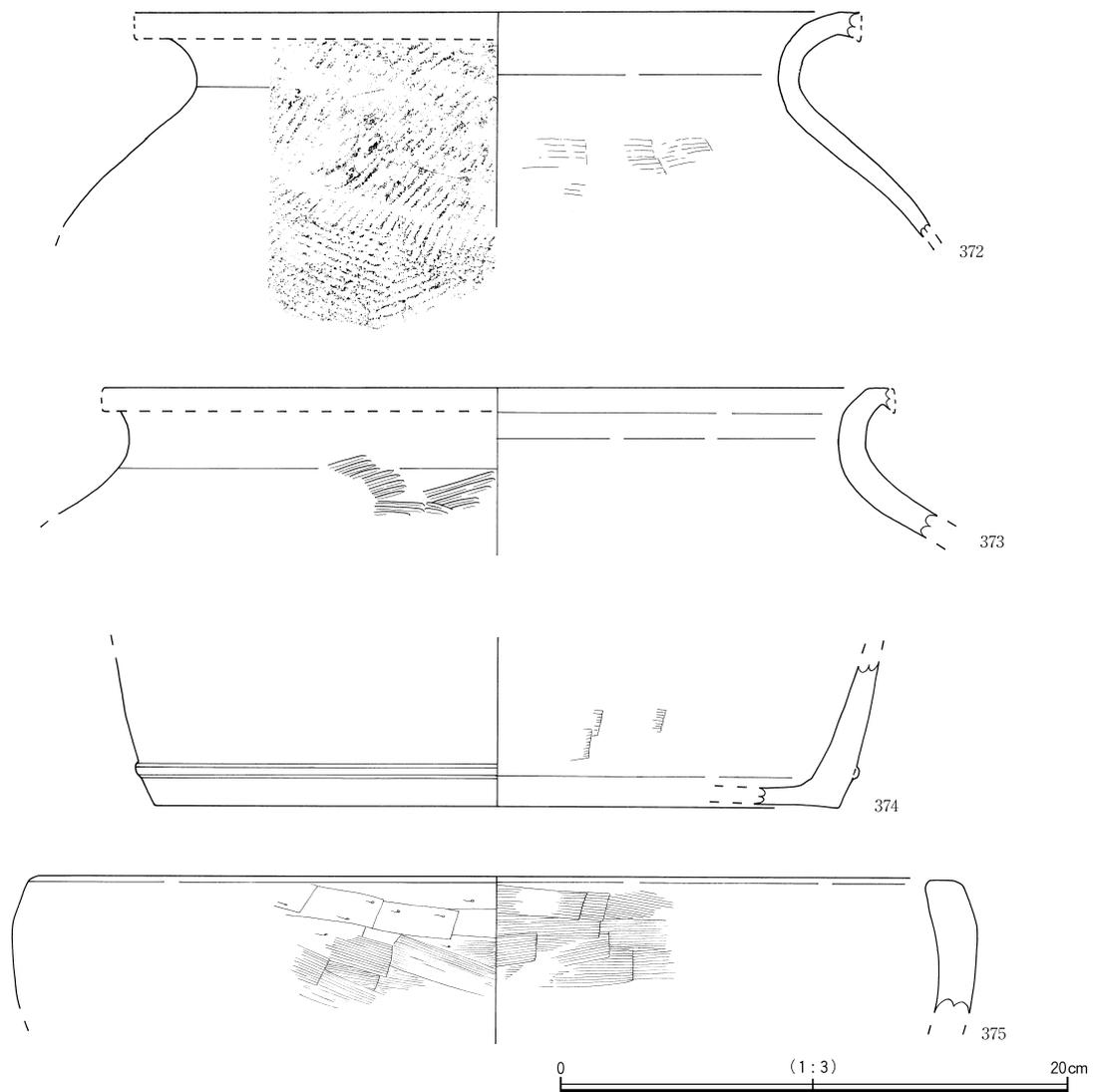


図359 有池遺跡03－２－７調査区 1大溝出土遺物

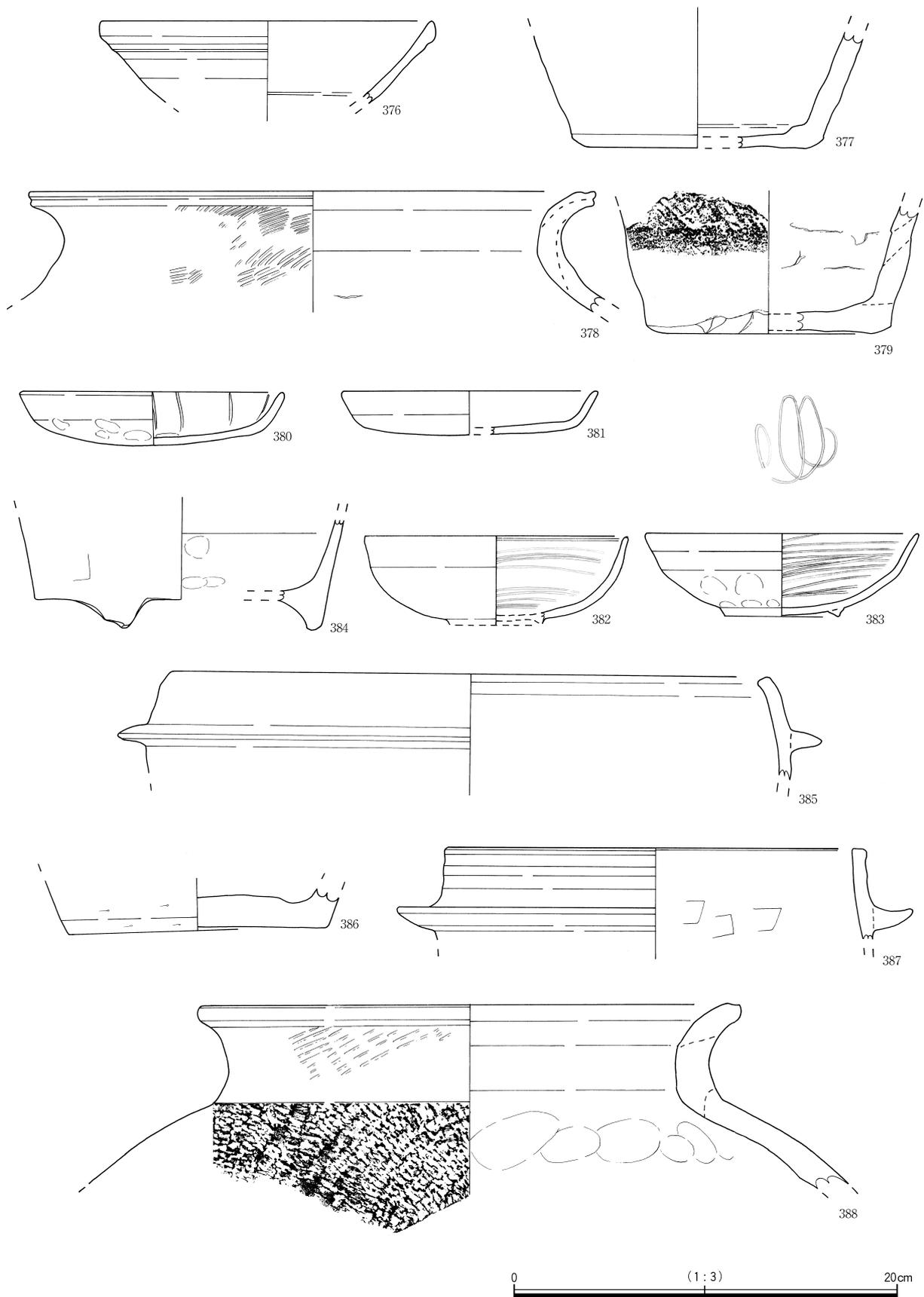


图360 有池遺跡03-2-7 調査区 耕土層等出土遺物

所産であろう。394は須恵器甕の口縁部である。頸部にはタテ方向のカキメを有する。TK209型式に位置付けられるものであろう。395は瓦質甕である。内面は板ナデ調整。

以上、28溝出土遺物は概ね12世紀末～13世紀初頭に位置付けられる。

29水口 (図361-396~399) 396は楠葉型瓦器椀である。口縁端部に細い沈線を有する。Ⅲ-2期(13世紀前半)の所産と考えられる。397、398は瓦質羽釜である。三足が付くものと思われる。399は常滑焼甕である。突帯には凹みを有する。6b型式(13世紀後半)に位置付けられるものであろう。

30水田 (図362-400~410) 400~405は1層、406~408は2層、409は3層、410は3層以下から出土

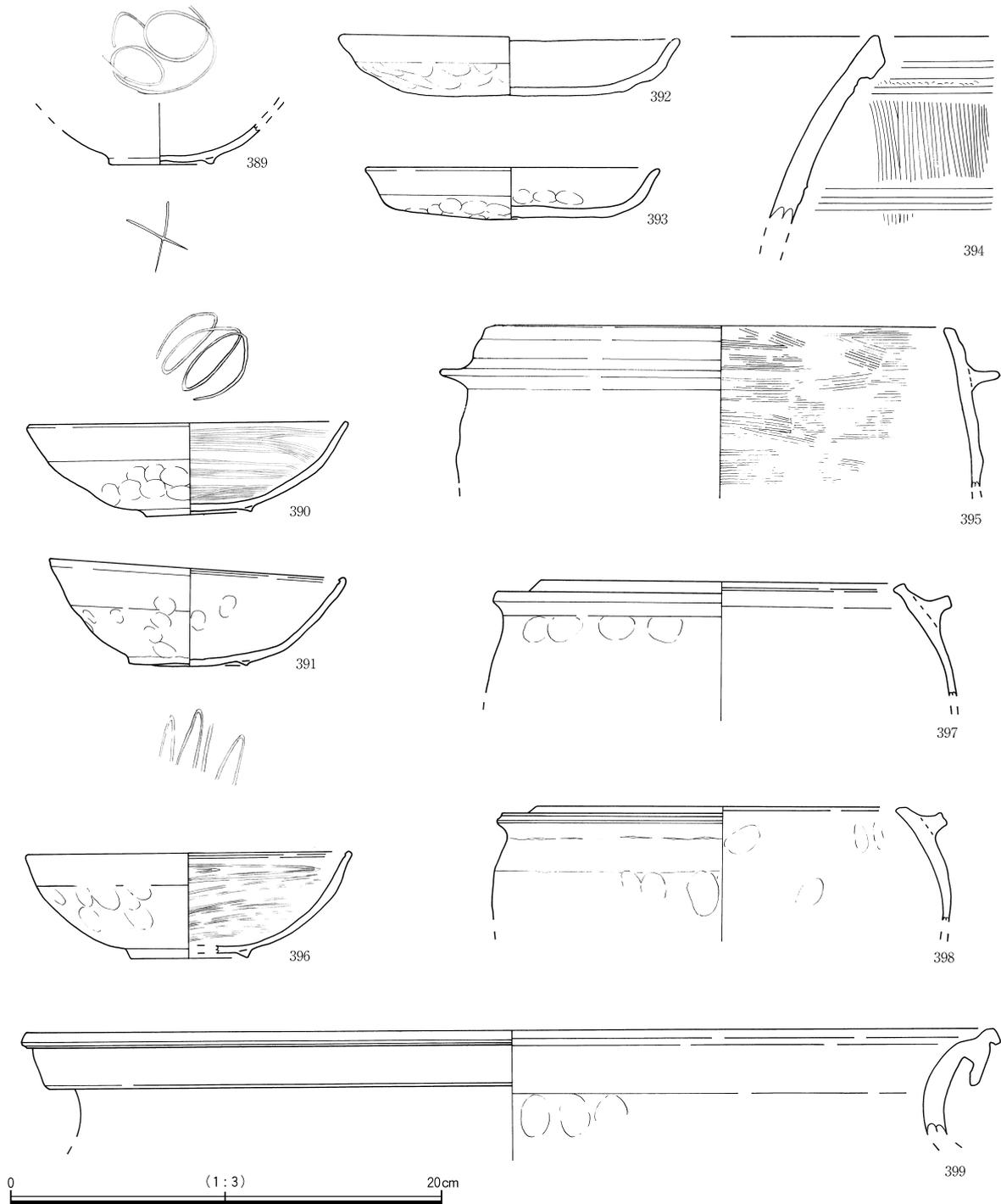


図361 有池遺跡03-2-7調査区 溝・水口出土遺物

した。400～403は土師器皿である。400、401は口縁部が上方に立ち上がる。402は底部が丸く、復元口径は9.4cmを測る。403は二段ナデを志向したと考えられるものである。404は瓦器皿である。見込みにはジグザグ状暗文を密に施す。口縁部は上方に屈曲させる。405～407は瓦器椀である。405、407は大和型でⅡ-B～Ⅲ-A（古）段階（12世紀中葉）に属するものと考えられる。407は口縁部のヨコナデが非常に強く、段をもって屈曲する。406の焼成は大和型に近似するが、口縁端部の沈線はあまく、見込みのヘラミガキが及ばない区画が広い。外面には非常に明瞭な分割ヘラミガキを施している。408は白磁椀（Ⅳ類）である。11世紀後半～12世紀前半の所産である。409は土師器皿。口径は9.3cmを測る。底部は丸みをおび、口縁部はゆるやかに屈曲させている。410は白磁椀である。外面にはヘラ描きの花卉文を有する（Ⅴ類）。11世紀後半～12世紀前半の所産である。

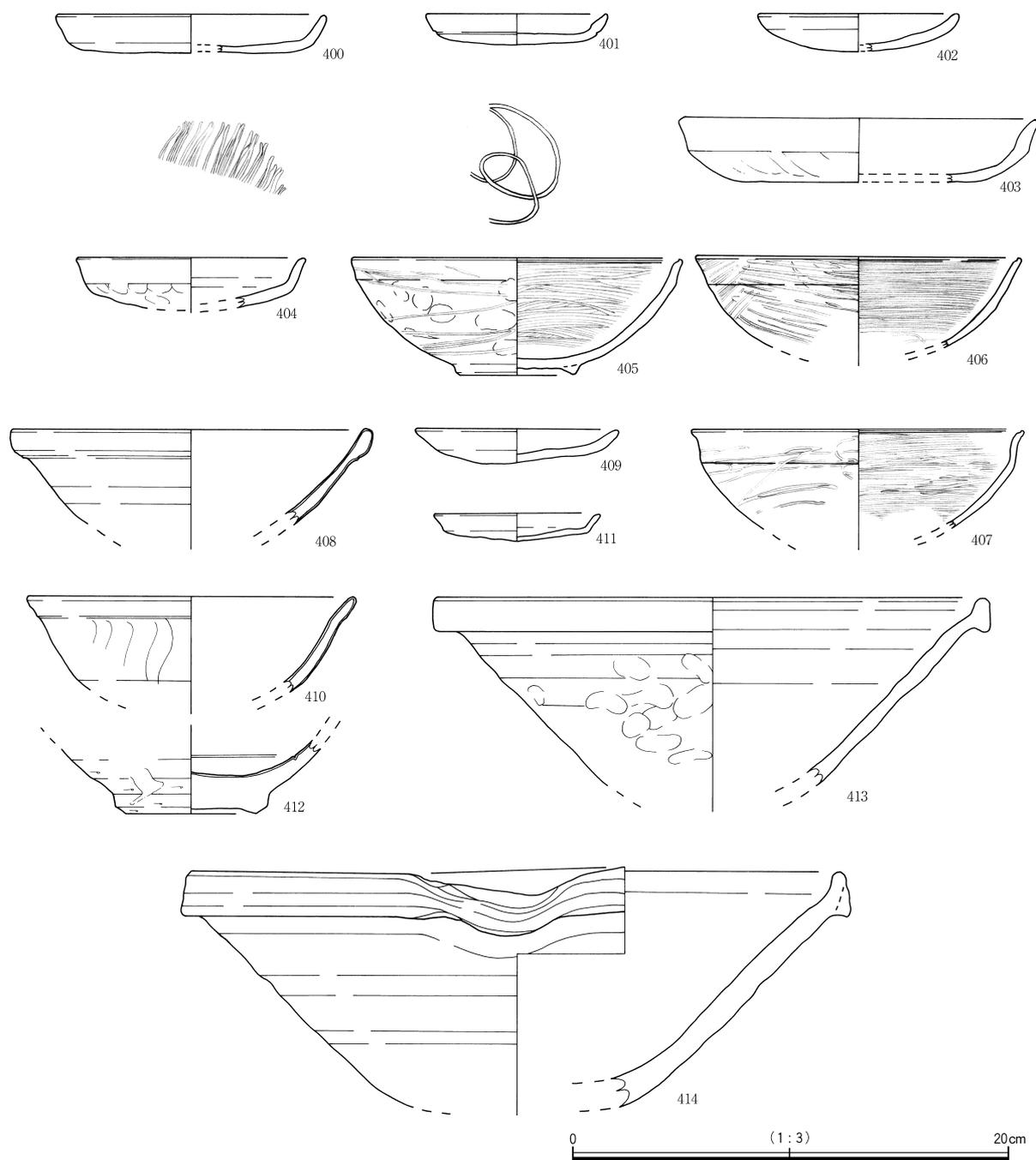


図362 有池遺跡03-2-7調査区 耕土層等出土遺物

以上、30水田出土遺物は、概ね12世紀前半～中葉に位置付けられるものである。

31水田（図362-411～413） 411は土師器皿である。口縁部はヨコナデにより上方に強く屈曲し、端部は外反させる。13世紀後半～14世紀前半の所産である。412は白磁碗の底部である（Ⅳ類）。413、414は東播系須恵器鉢。413は第Ⅲ期第1段階（13世紀前半～後半）に位置づけられる。

1大溝下層（図362～366-414～452） 414は須恵器鉢で第Ⅲ期第2段階（14世紀前半）に位置付けられるものであろう。415、417、418は土師器壺である。417は胴部が球形で、外面はナデ、内面はケズリの後、板ナデおよびナデ調整によって仕上げる。418はやや小型で、内面は粗くナデ調整を施している。416は土師器鉢である。外反する口縁部を有し、胴部は扁平な球形を呈する。内面はケズリ、外面はハケ調整の後、ナデを施す。419は土師器甕である。やや長胴で、体部外面および口縁部内面はハケを施している。420は須恵器杯身である。底部は平坦で、外面は残存部を見る限り、ヘラケズリの痕跡は認められない。TK217型式に位置付けられるものであろう。421は土師器壺である。外面はナデ、内面はケズリ調整によって仕上げる。422は土師器甕と考えられる。口縁部はゆるやかに外折し、口縁部はナデ、体部は内外面ともに丁寧にハケ調整を施す。423は須恵器甕である。頸部には2条の突帯を有し、その間には縦方向のカキメを施す。424は土師器壺である。胴部は球形で、口縁部は短く外方へのびる。外面はナデ調整、内面はケズリ調整。425は須恵器杯身である。底部は平坦で、外面のヘラケズリは3分の2程度まで施している。口縁端部は丸くおさめる。426、427は土師器甕である。426は大型で、やや長胴になる。外面は板ナデ状、内面はケズリ調整を施す。427は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部には面をもつ。外面はハケ調整、口縁部内面は板ナデ調整によって仕上げる。428は須恵器杯蓋である。天井部のヘラケズリの範囲は広く、稜はするどい。TK208～TK23型式に位置付けられる。

429は35土器、430、431は48土器、432は49土器、433は50土器、434は51土器としてそれぞれ取上げたものである。429は須恵器杯身である。口縁部は上方に立ち上がる。端部は丸くおさめている。430、432は土師器甕である。口縁部は直立ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部外面および口縁部内面はハケ調整、体部内面はナデ調整を施す。431は須恵器壺である。小型で、口縁端部は角張った形状に仕上げられている。頸部に1条の突帯を設ける。全体に焼き歪みが生じている。体部上半に、不明瞭だが平行する沈線が3～4条認められた。体部外面には全体的に平行タタキの痕跡が認められるが、体部下半部を最後にたたき締めて仕上げています。底部付近に「十」字形の線刻がみられる。433は須恵器無蓋高杯の杯部である。頸部を内側に軽く屈曲させてから口縁部を外反させている。口縁端部は丸くおさめる。体部には2条の突帯がつき、その間に櫛描波状文を描く。突帯は明瞭な盛り上がりを見せず、凹線に置き換わりつつある様子がうかがえる。波状文は横に流れたような状態で、やや雑に施されたような印象を受ける。この文様帯には対称位置に2個のつまみがつく。つまみは板状の粘土帯で作られている。杯部はほぼ完形だったのに対し、これと同一個体となりそうな脚部は調査区内では出土しなかった。杯の底部に残る脚部の割れ口から、6箇所透かしを有していたことがわかる。割れ口には磨耗した痕跡が見られることから、脚部が欠損した後、意図的に整形した可能性もある。434は土師器壺である。体部は球形で、外面および口縁部内面には丁寧にミガキを施している。

435、436は53土器、437～440は52土器、441、442は54土器、443～452は56土器としてそれぞれ取上げたものである。435は土師器壺。体部外面は器壁が大きく剥離している。胴部は球形を呈する。436は土師器甕である。長胴ぎみで、頸部の屈曲はゆるい。体部外面にはハケ調整を施す。437は土師器高杯である。杯部は深く有稜で、口縁部は外反する。脚裾部はゆるやかに外方に開く。438、439は土師器甕で

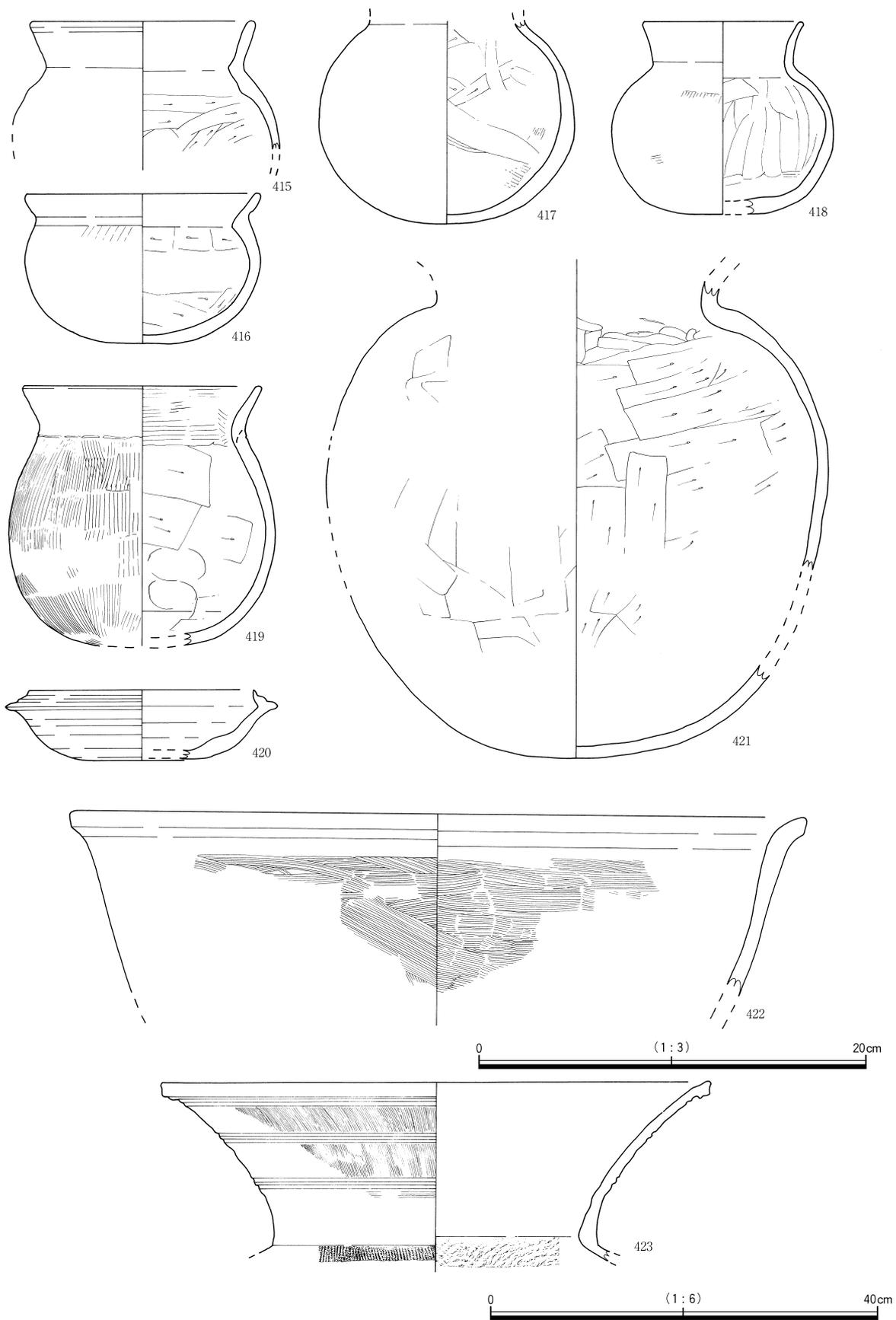


图363 有池遺跡03-2-7調査区 1大溝出土遺物

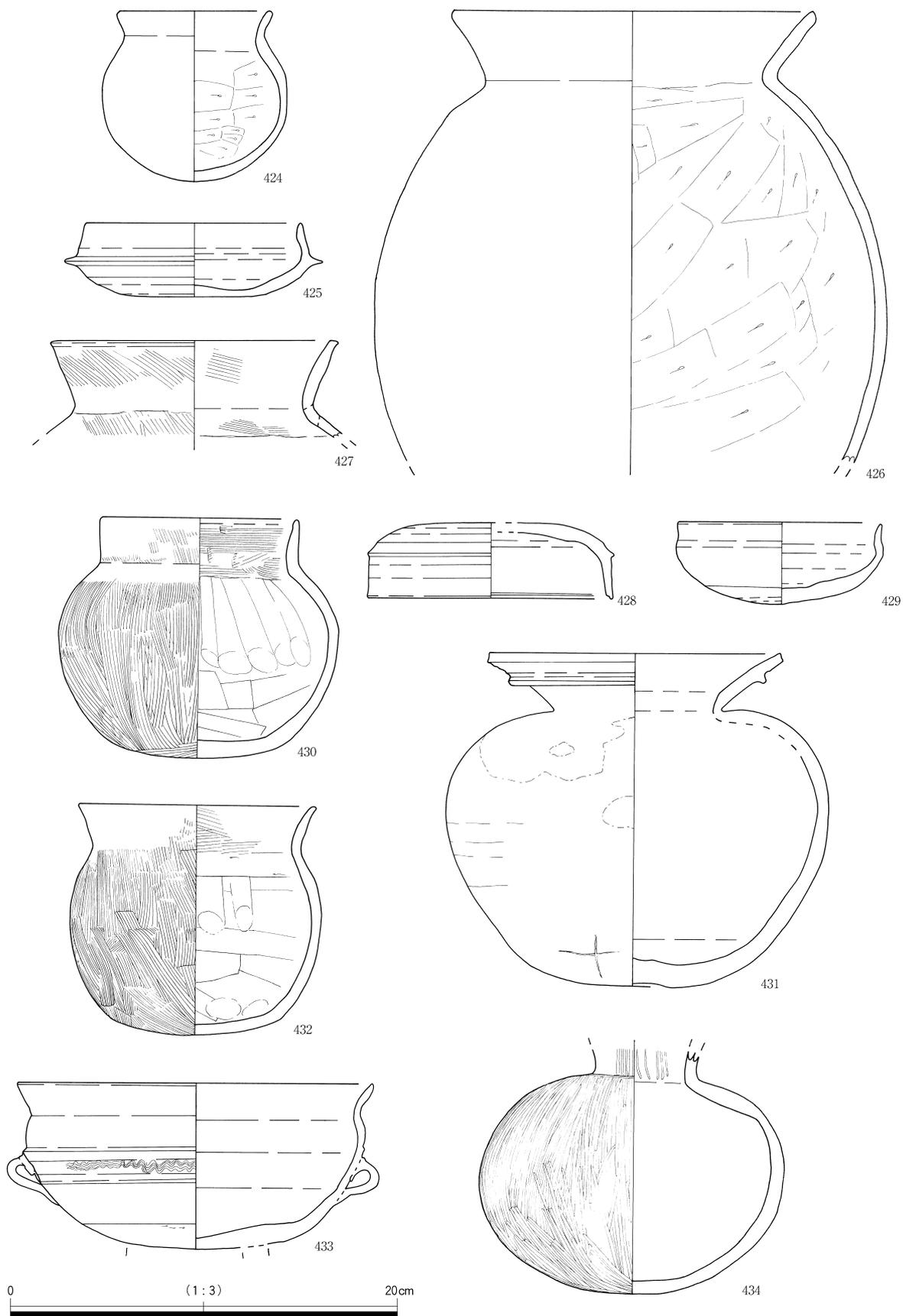


図364 有池遺跡03-2-7調査区 1大溝出土遺物

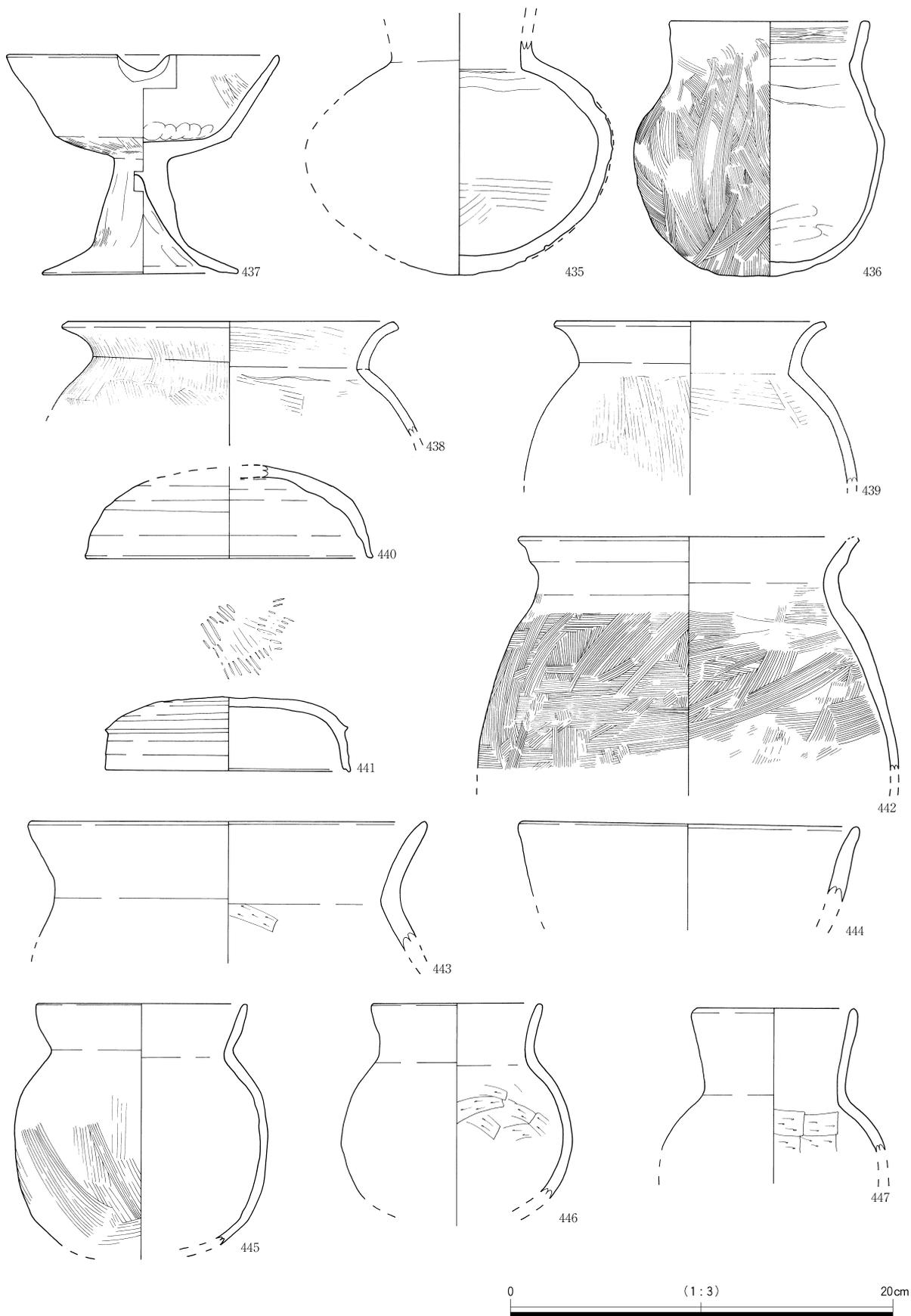


图365 有池遺跡03-2-7調査区 1大溝出土遺物

ある。頸部は強く屈曲し、外反する口縁部を有する。体部外面はハケ調整で、煤が付着している。440、441は須恵器杯蓋である。440は外面全体に回転ナデを施し、内面も回転ナデの後、天井部をナデで仕上げている。441は天井部にヘラケズリの後、タタキを施し、器面を整えている。稜は比較的すどい。440はTK10～TK43型式、441はTK208型式に位置付けられるものと考えられる。442は土師器甕である。体部は内外面とも丁寧にハケ調整を施す。443～445は土師器甕である。446、447は土師器壺。446は内面をヘラ状工具で不定方向にケズリ、外面はナデ調整によって器面を整えている。外面には煤が付着している。447は内面ケズリ調整。448～452は土師器甕である。448、449、452は内面ケズリ、外面はハケ調整を施す。449は口縁端部に面をもち、外面はナデ調整によって仕上げている。

以上、1大溝下層出土遺物は、TK208～TK217型式（5世紀後半～7世紀代）の遺物を包含する。
64土坑（図367-453） 453は大和型瓦器椀である。口縁部には強くヨコナデを施し、段を持って屈曲させる。外面には粗い分割ヘラミガキが認められる。Ⅱ-B段階（12世紀中葉）に位置付けられるものであろう。

34溝（図367-454） 454は楠葉型瓦器椀である。底部には高台をわずかに作り出している。Ⅳ-2期（14世紀前半）に位置付けられる。

8溝（図367-455） 455は土師器皿である。口縁部は上方に屈曲させる。13世紀後半の所産である。
 （7）8調査区

1流路（図368-456） 456は縄文土器片である。細片のため時期および全体の形状は不明である。

12大溝（図368-457-461） 457は4層、459は5層、458、460は8層、461は7～8層から出土した。457は土師器皿である。口縁部は二段ナデを意識しており、端部は上方へつまみ上げるが、やや外方に開く。外面には指頭圧痕が明瞭に残る。458は土師器甕である。459は楠葉型瓦器椀である。外面は高台際まで密にヘラミガキを施し、見込みには格子状暗文を施す。Ⅰ-2～Ⅰ-3期（11世紀後半～12世紀初頭）の所産である。460、461は土師器甕である。460は小型で、外面はハケ調整。内面には接合痕が明瞭に残る。461は体部外面および内面上位に粗いミガキを施す。

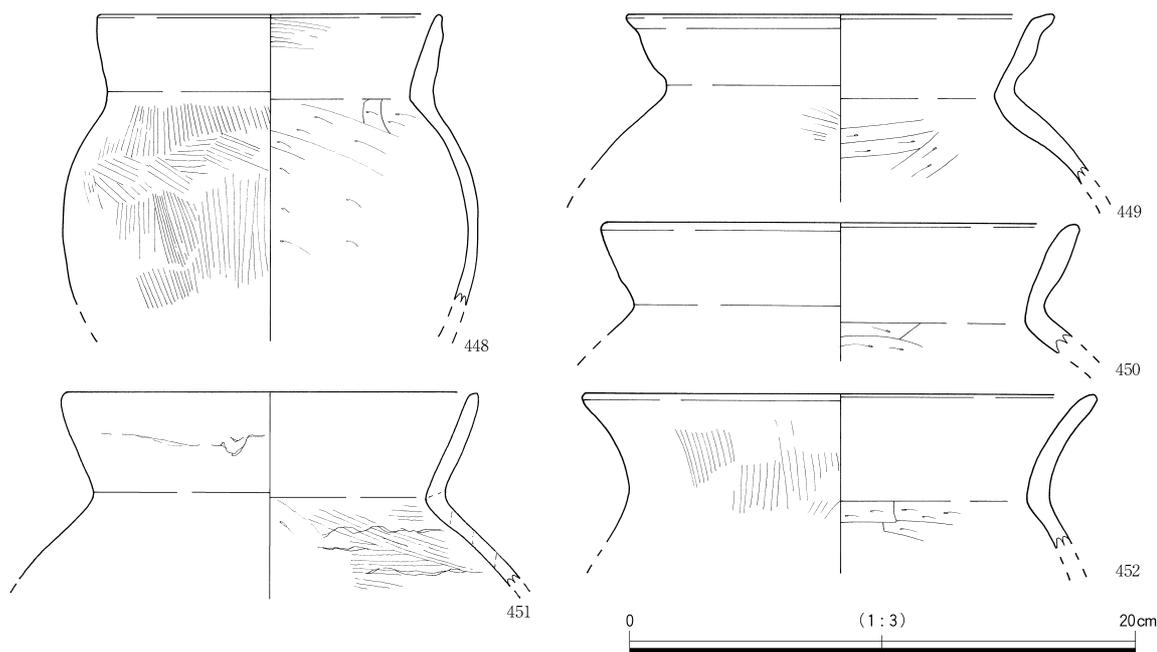


図366 有池遺跡03-2-7調査区 1大溝出土遺物

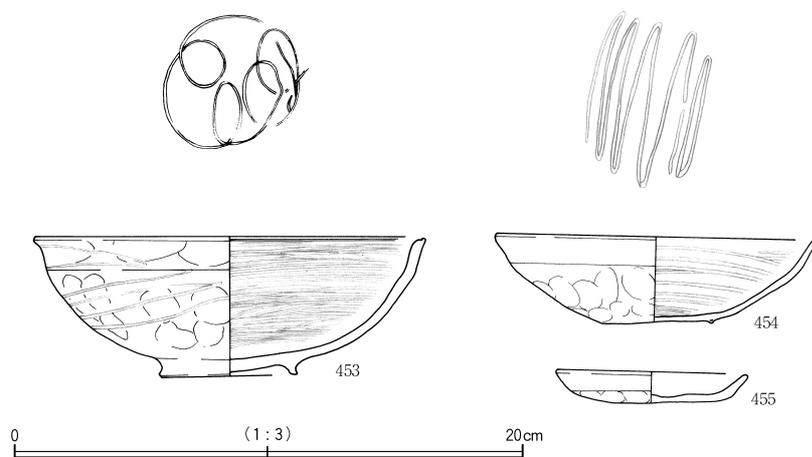


図367 有池遺跡03-2-7調査区 土坑・溝出土遺物

以上、12大溝出土遺物は、4・5層は11世紀後半～12世紀初頭の、7・8層には6世紀代の遺物を包含する。

(8) 土製品 (図369)

462は1調査区1大溝の「深堀トレンチ①」から出土した土製品で、算盤玉形を呈する。用途は不明。463は3調査区1大溝19層から出土した土製円盤である。土師器甕を円形に打ち欠いている。464は7調査区28溝から出土した紡錘車である。半円

2. 石器・石製品 (図370～376)

S1・S2はいずれも凹基式の石鎌で、先端ないし逆刺が欠損する。いずれも基部の挟りが深く、鋭い逆刺をもつ。前者は刃縁に5角形鎌を思わせるゆるやかなS字状のカーブが作り出される。対して後者は全体に緩やかな丸みを呈しており、馬蹄形に近い。縄文時代の所産か。S3は石庖丁である。材質は粘板岩とみられるが、磨製石剣の素材としても使用されるような素材に比べると、層状の節理が強く、色調もややグレーがかった。穿孔部も含めた過半部を欠損するが、直線刃半月形とみられる。刃縁には使用によるとみられる、剥離面の摩滅した刃こぼれが顕著にみられる。刃部は両刃ぎみだが、どちらの面とも刃縁の稜線は不明瞭である。S4はチャートの石核と見られる。全体を覆う背面は上・下面に残る自然面をおおむね打面としており、最終的に自然面を作業面として若干剥離を施している。この

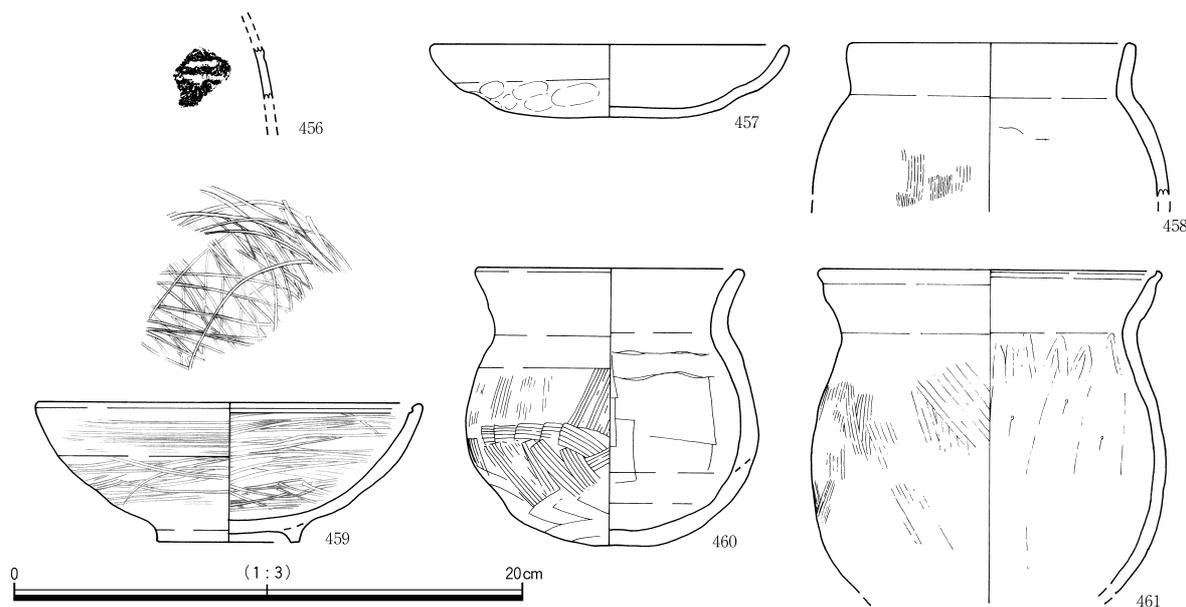


図368 有池遺跡03-2-8調査区 1流路・12大溝出土遺物

ことから角礫を素材とした石核で、上下交互に打面を換えて素材剥片を割り取っていった結果、柱状の残核が残ったとみられる。最後に礫面に対して再度打面調整を試みたものの、うまくいかずに廃棄したようだ。S5・S6はいずれもチャートの剥片である。前者は腹・背面とも打点の位置や方向があまり動いていないことから、打面・作業面を動かさずに打点を少しずつずらしながら、連続的に縦長剥片を割り取っていった過程で生じたものと見られる。後者は背面に自然面を含む微細な剥片である。S7～S16はサヌカイト剥片である。S9は上辺部にわずかに礫面を残す。板状に割りとられた剥片だが、2次加工の痕跡は認めなかった。他のサヌカイト剥片よりやや風化が進んでいる。S11は主要剥離面の打点付近の隆起が著しい。石器製作時に、本体にヒンジ面を生じさせるような打撃を意図的に加えた結果、生じた剥片の可能性はある。S12は背面・腹面とも作業面や打面・打撃の方向を変えず、打点の位置を少しずつずらして連続的に剥片を割り取る過程で生じた板状の剥片とみられる。打点を含む剥片の上部は打撃の際に折損したものか、欠失していた。側辺にわずかに自然面が残る。素材剥片となりうるものだが、二次加工はみとめられない。14は背面上縁に主要剥離面の形成後に施されたと思われる調整剥離が認められる。もとは打面調整の際に生じた剥片と考えられるが、他の石器に作り変えようとしてうまくいかず廃棄したものか。S15は二次調整が認められず、打面調整の際に生じたサヌカイトチップとみられる。S14・S15とも全面風化して白色化しているが、摩滅はしていない。S17は全体が正円にちかい球体で、二次加工および使用痕跡は認められず、河原などで採取された転礫と考える。2流路から出土したものだが、これ以外に類似する礫は含まれておらず、集落外から持ち込まれたものとする。投弾が二次的に埋積した可能性もあるが、断定はできない。S18は古墳時代住居址の埋土から出土したもので、下辺などに敲打痕が見られた。表面が大きく剥落しているが、もとは研磨面が覆っていたと見られる。平面形が大型蛤刃石斧に似るが、それよりは全体的に薄く平板な印象を受ける。帰属時期も勘案すると、砥石として利用された後、叩打具として転用されたものと考えられる。S19～23は火打石とみられ、すべてサヌカイト製である。それらを見ると、剥離痕が集中する部分では作業面が片面に固定される傾向がみられ、打撃の角度が垂直に近いためか、階段状剥離を呈し、エッジの角度も大きい。また長期の使用に伴い、敲打痕が集中する縁辺部中央にかけてゆるやかに抉れ、カーブする。またエッジが潰れて丸みを帯びる傾向も認められる。S21以外は剥離面の風化の度合いに少なくとも2段階があることから、弥生時代以前に製作・使用されていた石器を中世に火打石として再利用した可能性が考えられる。ちなみにS20には剥離面の風化の度合いに3段階が認められる。これを見ると、サヌカイト本来の色合いに最も近い階段状剥離の集中部は5箇所にわたってみられ、それぞれの作業面は一面に固定されている。S22は風化の進んだ剥離面が全て背面であることから、もとは石核だったと考えられる。ただ縁辺部のエッジの角度が適さなかったためか、火打石として再利用されてから、あまり使い込まれな

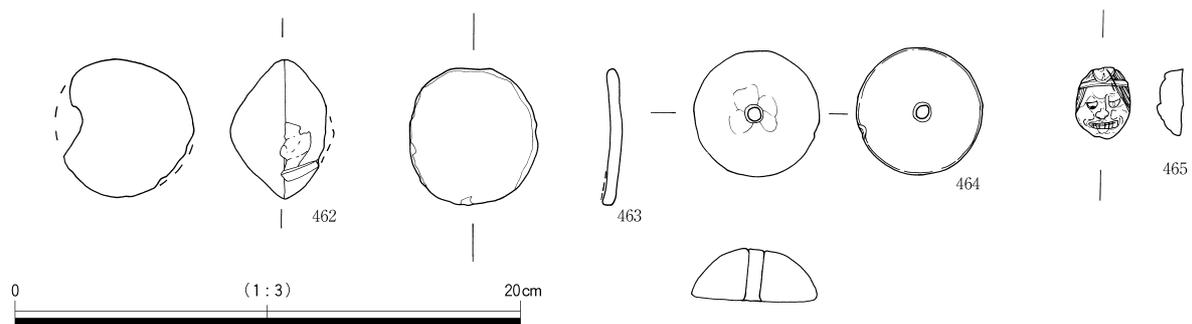


図369 有池遺跡03—2 土製品



图370 有池遺跡03—2 石器

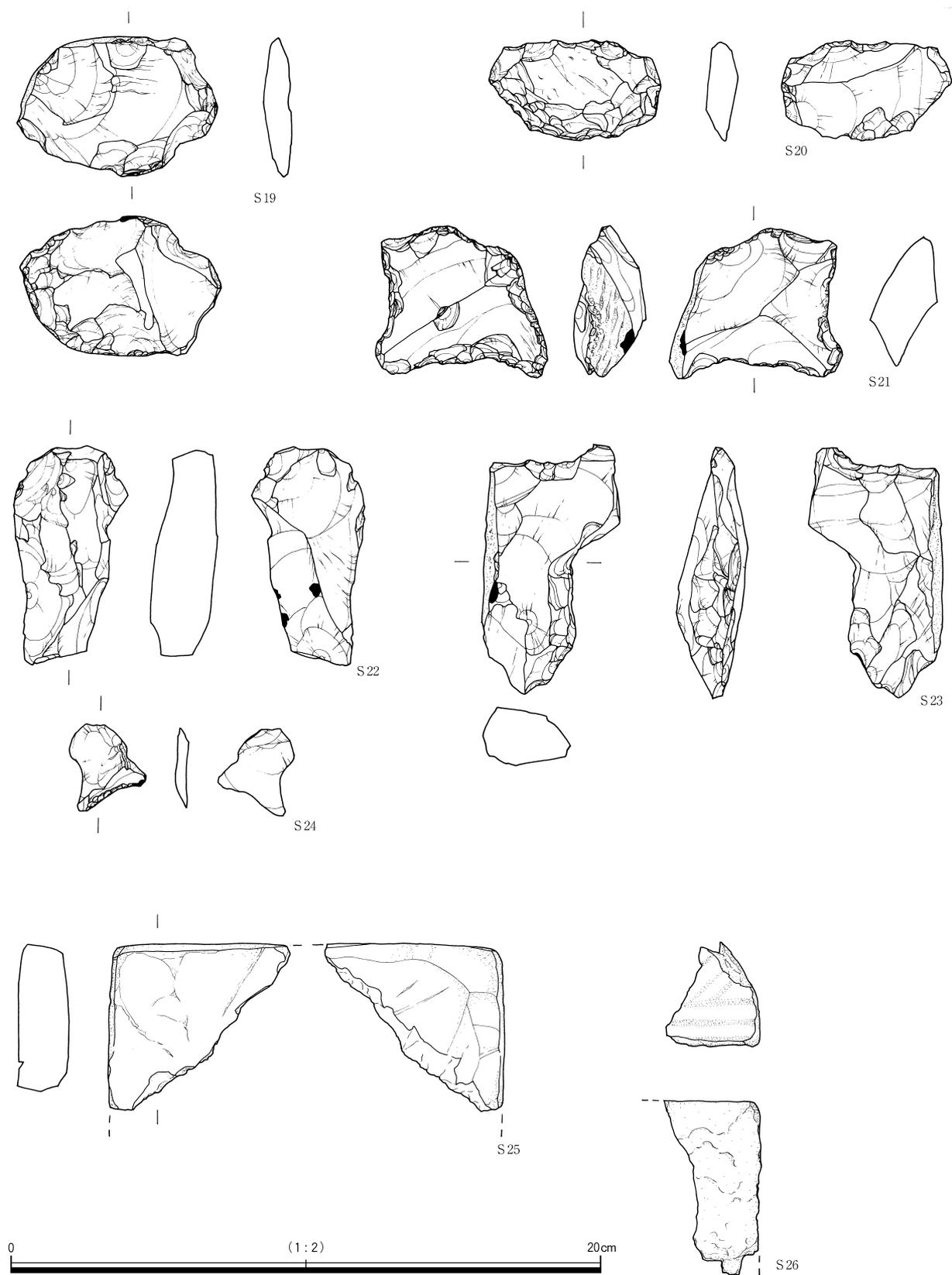


图371 有池遺跡03-2 石器・石製品

うちに廃棄されたようだ。S24は左面が主要剥離面からなるサヌカイト剥片で、下辺に風化の度合いが新しいリタッチがみられる。このリタッチは新欠ではないことから、前述の火打石と同じく、中世の段階で再利用された可能性がある。ただ最大長が3cm弱で厚みも薄く、前述の火打石とは明らかに規格は異なる。S25は石鍋を再利用した温石である。器壁の破断面を研磨して平面が長方形に作り出されていたとみられるが、大きく破碎している。S26は挽臼である。ごく一部が残っていたにすぎないが、よく使い込まれたもののようで、臼目の溝はほとんど凹凸を失っている。S27～S63は砥石である。大半は溝や流路から検出したもので、水田耕作土や井戸から出土したものもあった。砥石には、焼けて白色化もしくは赤色化したものが多く認められた。ほとんどのものが風化により後世に破碎したものとみられ、研磨面がわずかにしか残存しないものもあった。したがって全体の形状がうかがえるものはわずかだが、多くは柱状を呈していたとみられ、S28やS31・S62のように、明らかに転礫を利用したとみられるものはわずかだった。そのうちS62は前面が摩滅して光沢をおびるが、大きさから見て置砥石として利用できるものではないので、手で持って、何かをなめしたりするのに用いられたものかもしれない。柱状の砥石に関しては扁平なものと、直方体の二者が認められた。前者は層状の節理が発達した石材、後者は凝灰岩や砂岩のように節理の弱い石材に対応すると見られる。したがって前述の形態差は、石材の材質の特性をある程度反映したものとみられる。加えて前者は安定して使用できる2面を使用してお

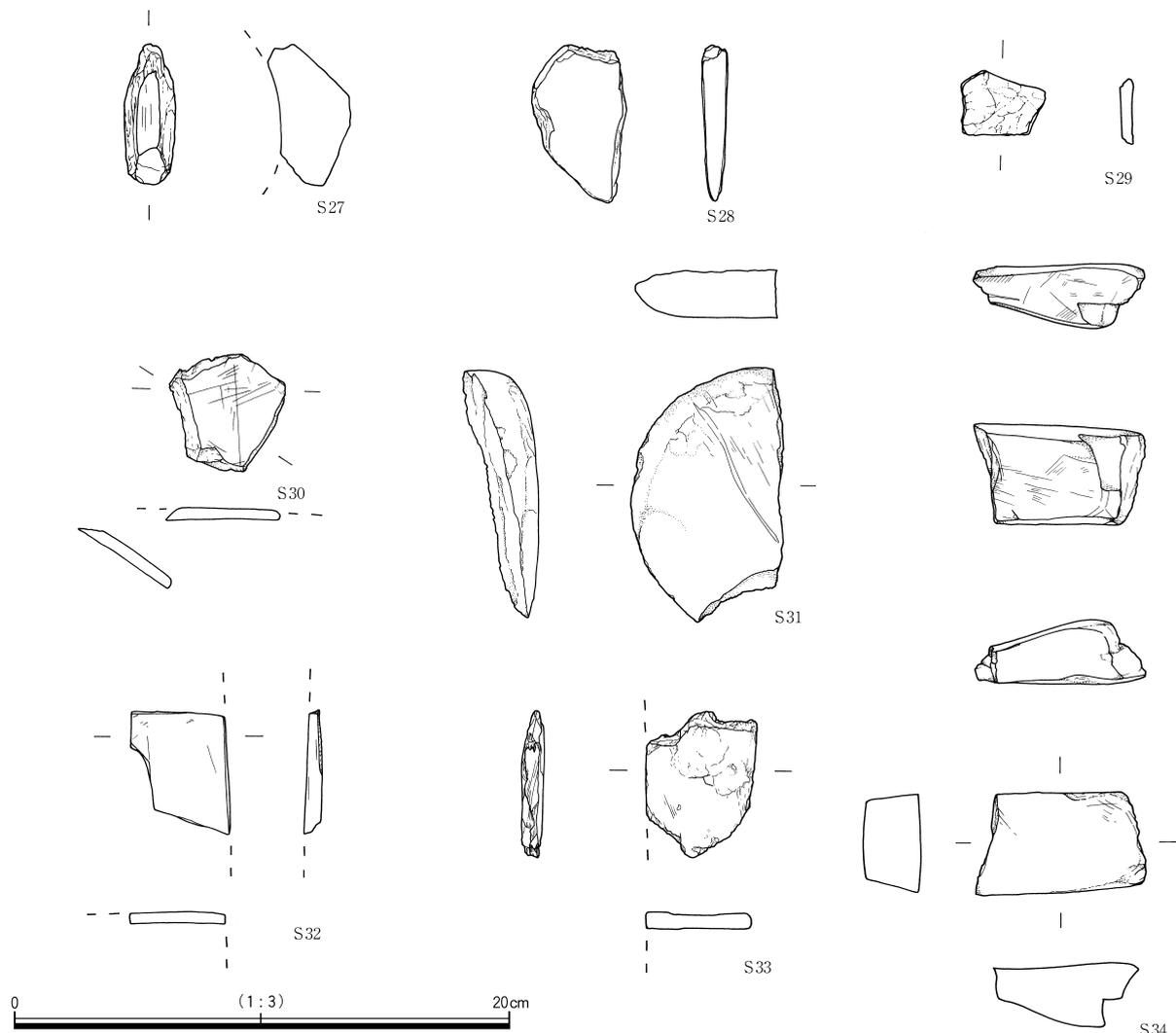


図372 有池遺跡03-2 石器



图373 有池遺跡03-2 石器

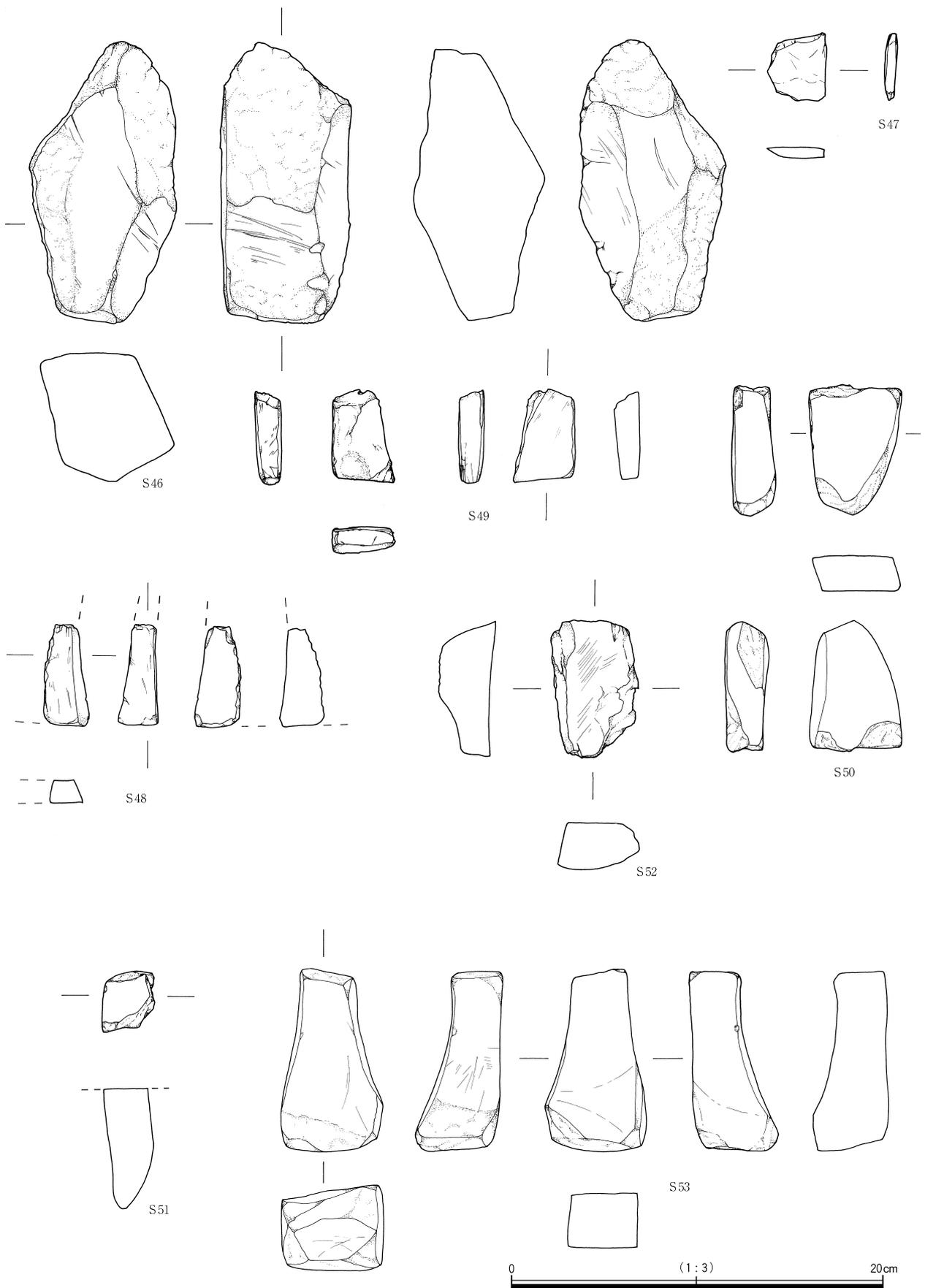


图374 有池遺跡03-2 石器

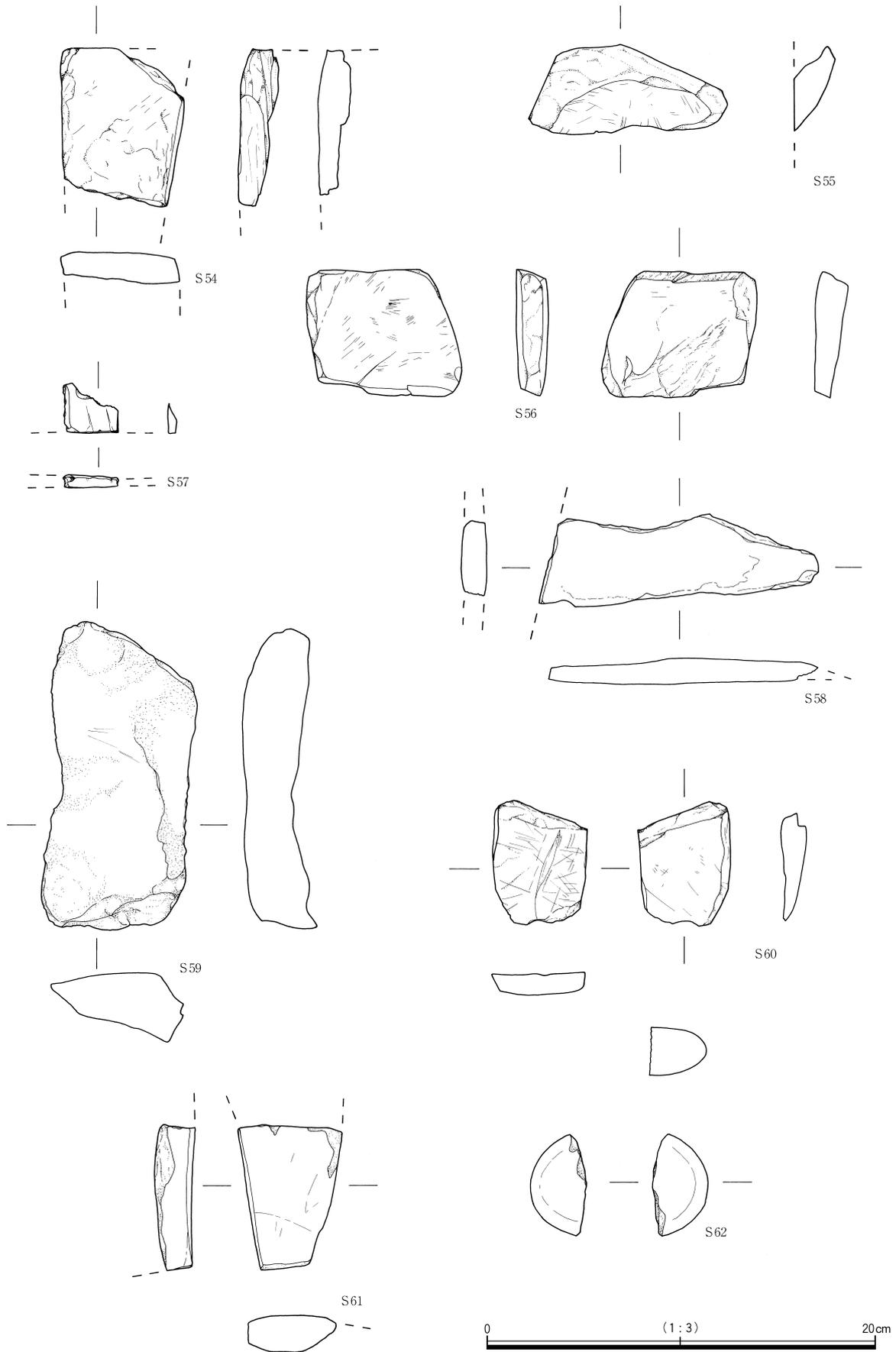


图375 有池遺跡03-2 石器

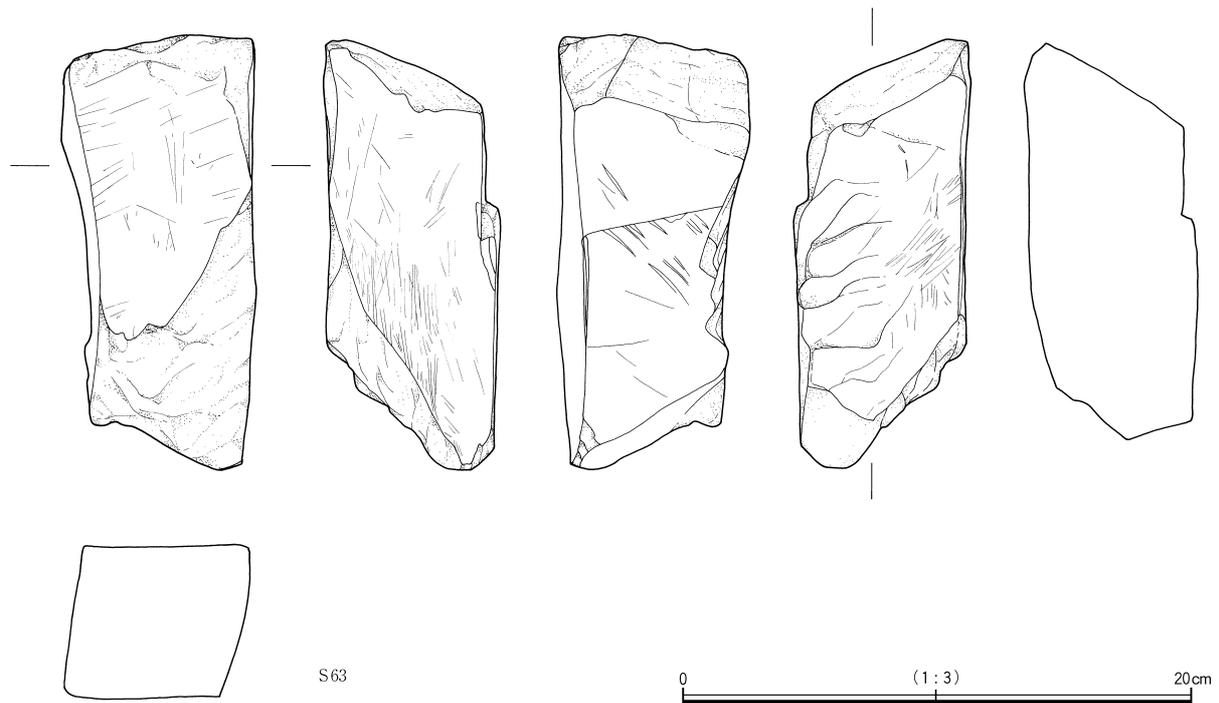


図376 有池遺跡03-2 石器

り、後者は最低限4面を使用する。また前者は使用面がおおむね平坦なのに対し、後者は使用面の中央が研ぎ減りによって湾曲する傾向がある。

3. 木器・漆器 (図377～391)

出土位置や層位からみて、W1～W26はおおむね古墳時代の所産、それ以外は中世以降の所産と見てよいと考える。W1は膝柄のナスビ型着柄鋤の身とみられる。板目取りとみられ、刃部の大半は欠損する。W2・W3は木錘である。輪切りにした心持材を使用し、側面中央にむけて斜めに削り込み、側面からみて鼓形になるよう整形されている。また下端は丸く仕上げられている。W4・W5は大小の違いはあるが、形態的に類似する。輪切りにした心持材の残材とみられる。前者は上・下端とも先細り気味に削りだされるが、後者は下端のみを先細り気味に削っており、上端は平坦に切り落とされている。W6は断面形が六角形になるよう面取りされた棒状の材で、片方の端部に浅い溝が切つてある。みかん割り材を使用したものとみられる。W7は全体に糸の圧痕とみられる、細くて浅い平行な筋が多数認められた。ヒノキの板状部材の両端を先細りさせたもので、丁寧なつくりである。織機の一部で縦糸を押さえるためのカエシと呼ばれる部品と考える。W8とW9は大型の容器で、どちらも加工痕を明瞭に残すものの、丁寧なつくりである。前者は底部に厚みを持たせ、深さと安定感があるのに対し、後者は器壁の厚さが一定しており浅い。したがって前者を槽、後者を盤としておく。平面形はどちらも隅丸の長方形だが、前者は正方形に近い。いずれも横木取りとみられる。W10は上端と下端が炭化しており、火付け木とみられる。W11とW14は前者が断面長方形の柁目材、後者は面取りされた六角形の心持材という相違点はあるが、どちらも片方の端部が斜めに削り落とされ、他方の端部を垂直に切り落としている。後者は柱などの建築部材の可能性が高いが、いずれにせよ残材と考えられる。W12・W13・W15は板状の材である。うちW13は非常に薄く、端部に突起を作り出している。W16は断面形が7角形になるよう面取りされており、少なくとも5箇所穴が設けられている。この穴は完全な形で残っている箇所から見て、2面から開けられ内部で貫通する構造とみられる。W17も断面形が7角形になるよう面取り

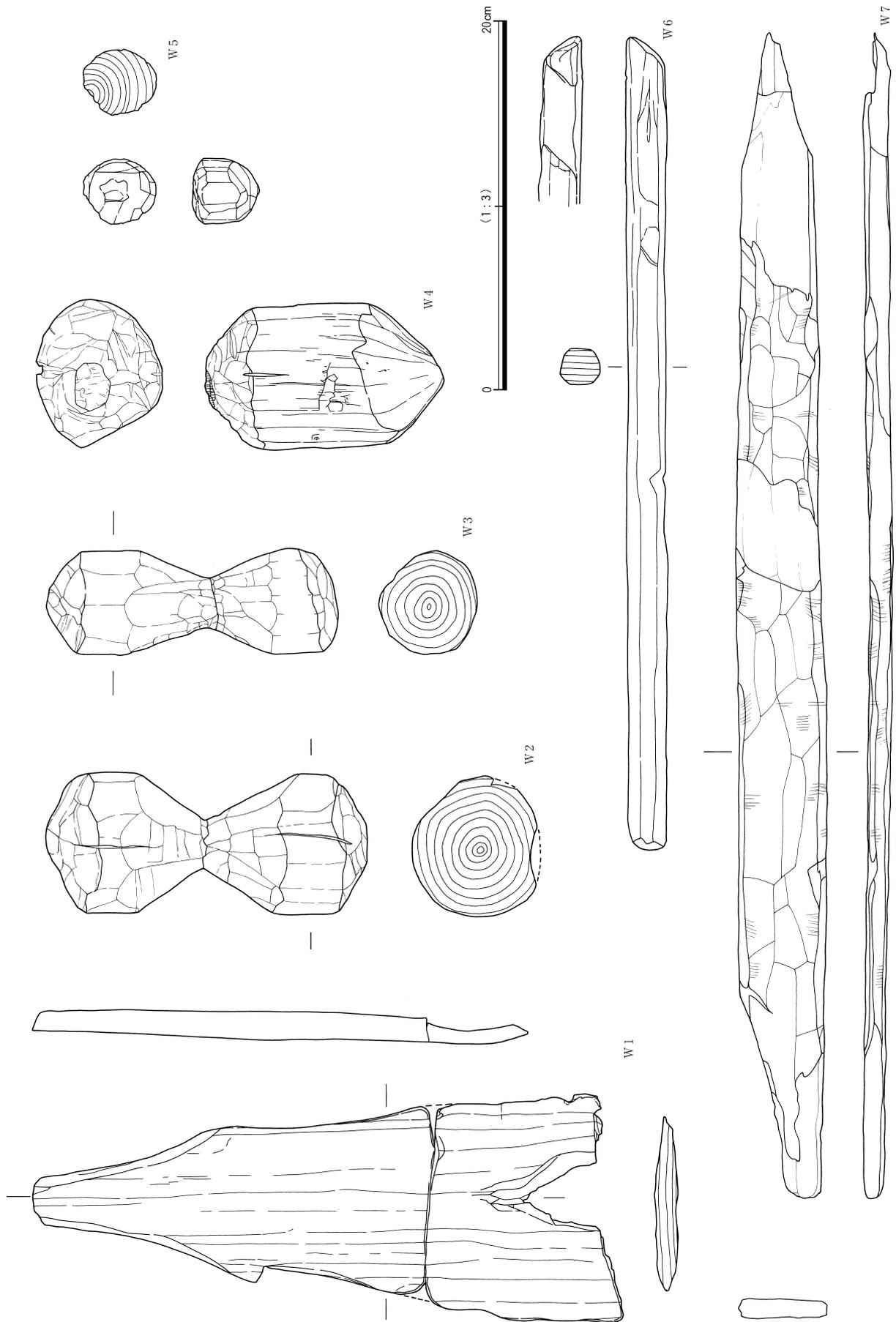


图377 有池遺跡03-2 木器

されており、少なくとも7ヶ所にわたって穴が設けられている。こちらの穴も2面から開けられ、内部で貫通している。このようにW16とW17には形態的な類似点が多く認められるのに加え、特徴的な穴が複数個所にわたってあることから、修羅と考える。ただこれらを一個体分とみると、穴の位置や間隔が一致しない。固定用の綱や引き綱をかけるための穴の位置は、左右で一致させる必要があると考えられることから、それぞれ別個体の可能性もある。W16とW17の放射性炭素年代を加速質量分析法（AMS法）により測定したところ70%以上の確率で、いずれも4世紀前葉から5世紀前葉に含まれることがわかった。W18は板状の部材で片面に細長いレール状の突起が作り出されている。全体的に加工は無造作で大雑把だが、レール状の突起部分は同じ幅で比較的慎重に作り出されている。W19は断面が三角形の棒状の材で、心持材をみかん割にした後、軽く面取りしたものとみられる。W20は欠損部分が多いので全体の形状が明確につかめないが、残存部分を反転させた左右対称の形状だったとすると、長方形の板材の両端に長方形の柄穴が穿たれた形状だったことになる。重量感があり、全体的に丁寧な作りである。大きさの点から見ても机の天板とみるのが適切かと思われる。W21は上面が平坦で、下面に船底

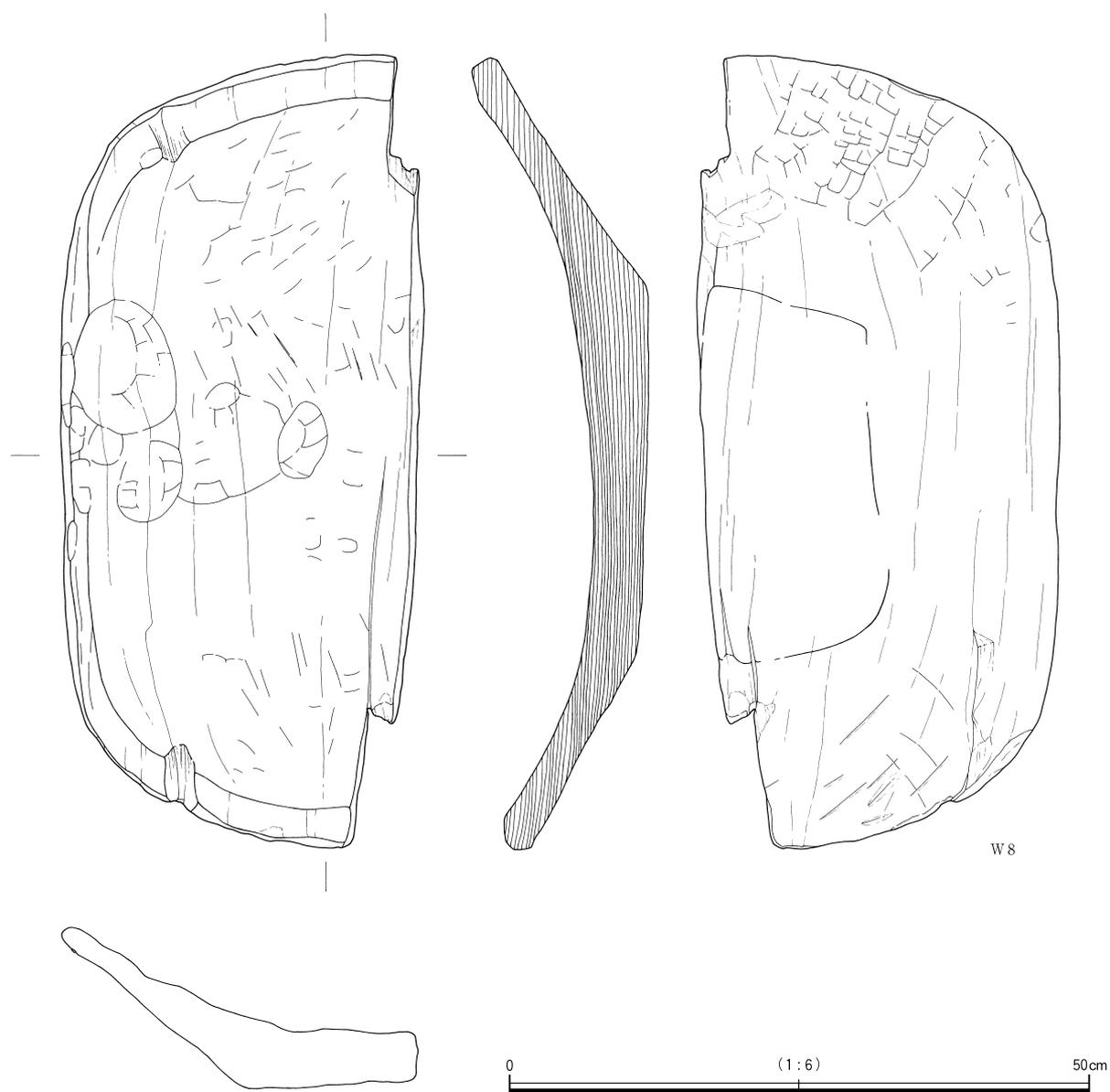


図378 有池遺跡03-2 木器

状のカーブが作り出された長方形の材である。両側から切込みを入れて2箇所にくびれを作り出している。W22は板状の材で両面ともに線状の疵が多数認められた。表面をはつた際に付いた加工痕か。芯に近い部分から割りとった板目の材である。W23も板目の材で、右面に表面をはつた際に付いたと見られる加工痕が認められた。W24は表面を丁寧に削って棒状に仕上げたもので、特に下端部の膨らみは丁寧に作り出されている。形状だけで見ると槌の柄の部分が一番近似すると考えるが、下端の中央に断面V字形の削り込みを作っている点は相違する。おそらくこの下端部の削り込みに別の付属品を差し込んで取り付けたと考える。W25は棒状、W26は板状の材である。W27は金属製利器の柄の部分で、片方の側縁に入れられた切込みに、金属製の身を挟み込んで使用したもので、現状でも切込みの部分に金属の断片が残存しているのがみてとれる。W28は円盤状の木製品で、中央に穿孔が1箇所認められる。O29は亀甲製の櫛である。W30は上半部を欠くが、全体に紡錘形になるように削りだされており、下端中

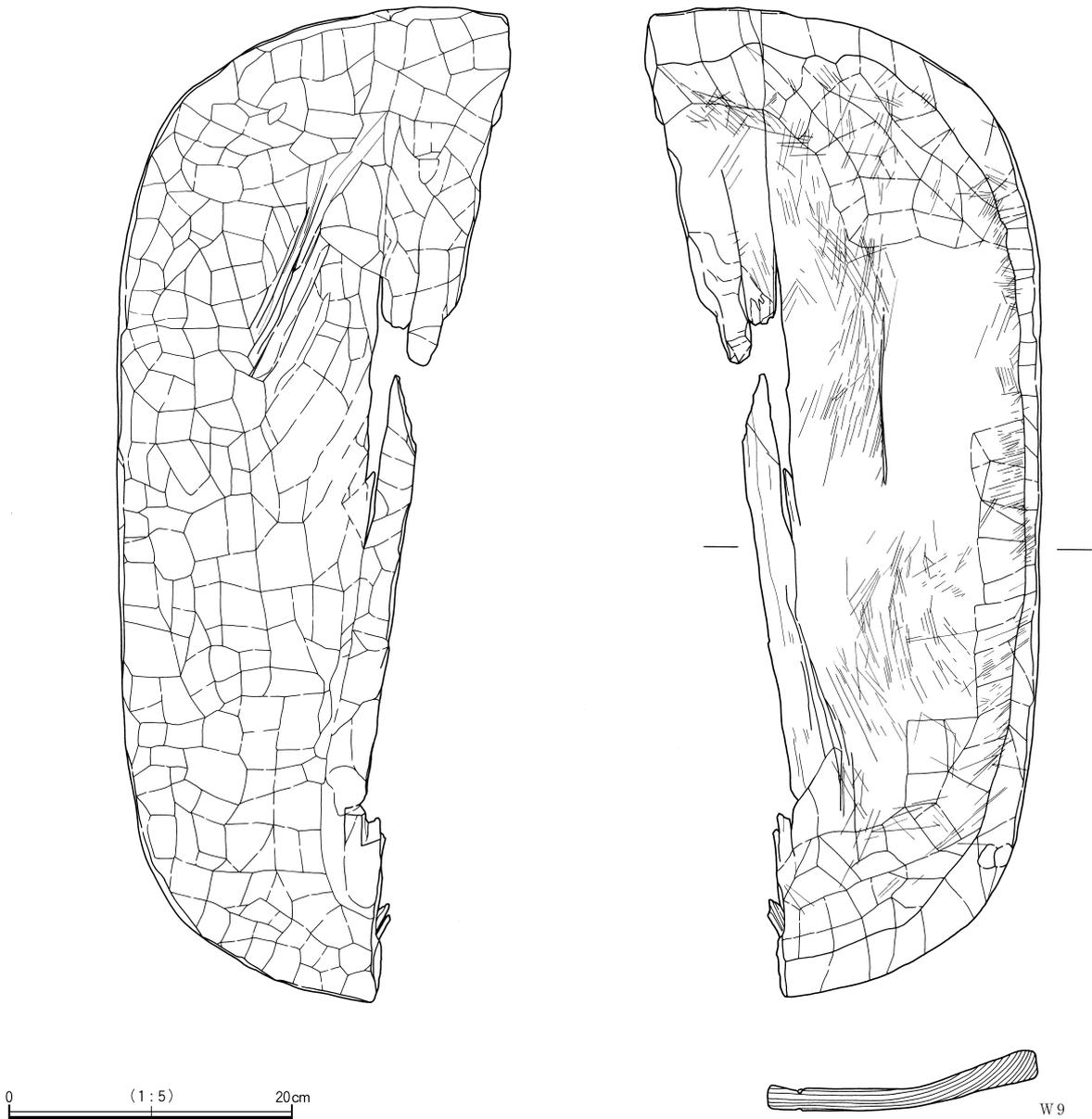


図379 有池遺跡03-2 木器

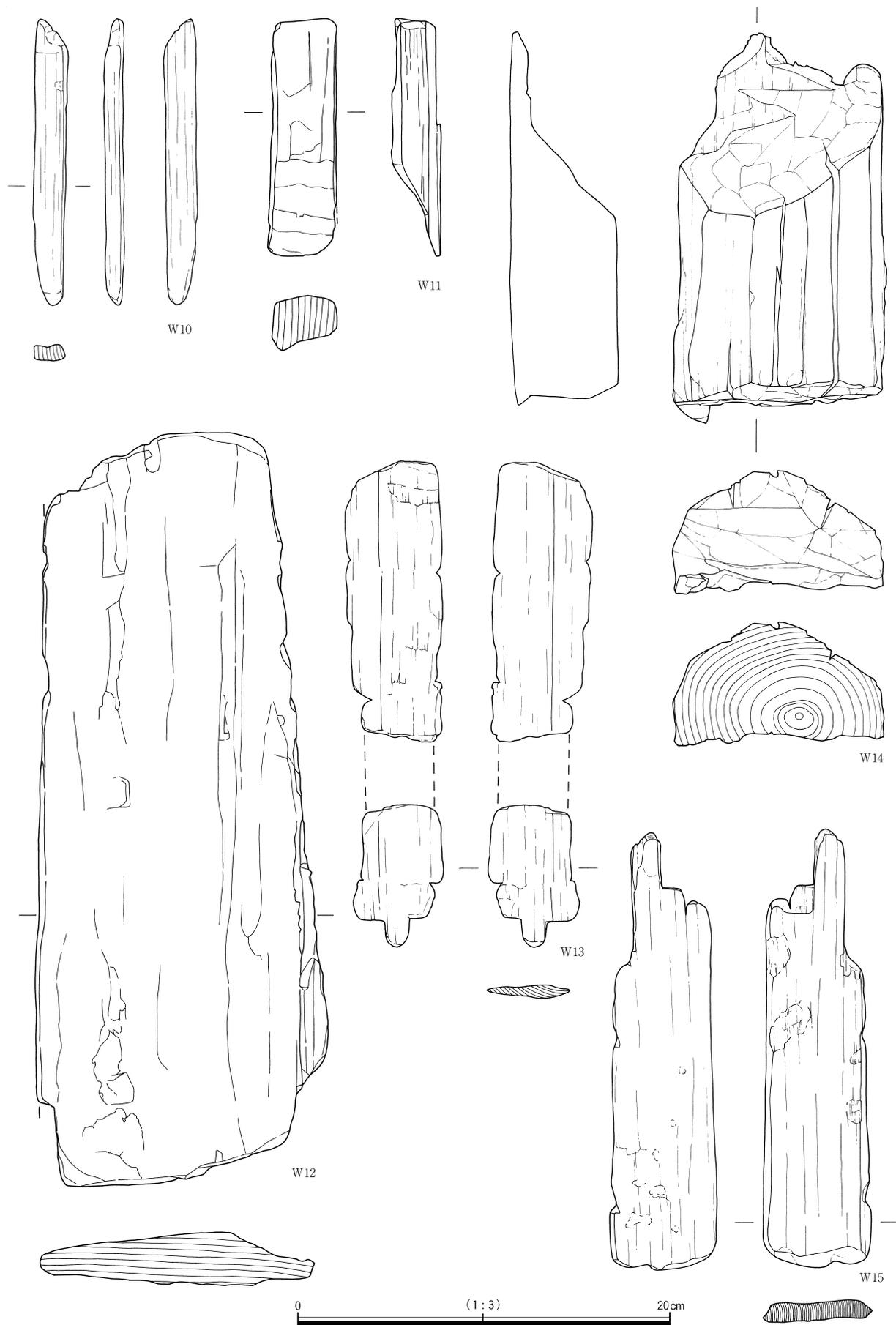


图380 有池遺跡03-2 木器

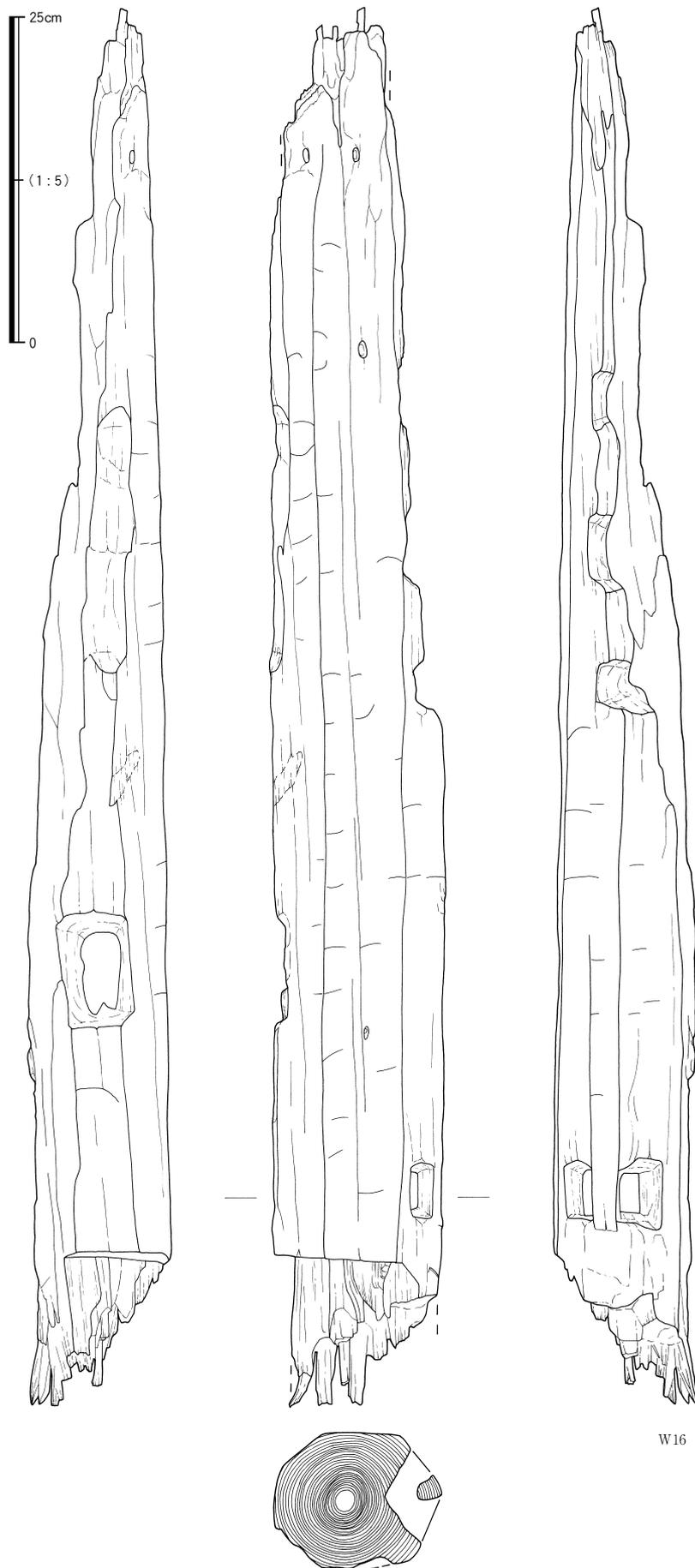


图381 有池遺跡03-2 木器



W17

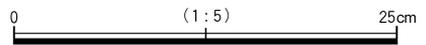
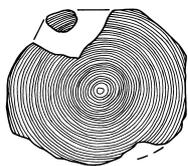


图382 有池遺跡03-2 木器

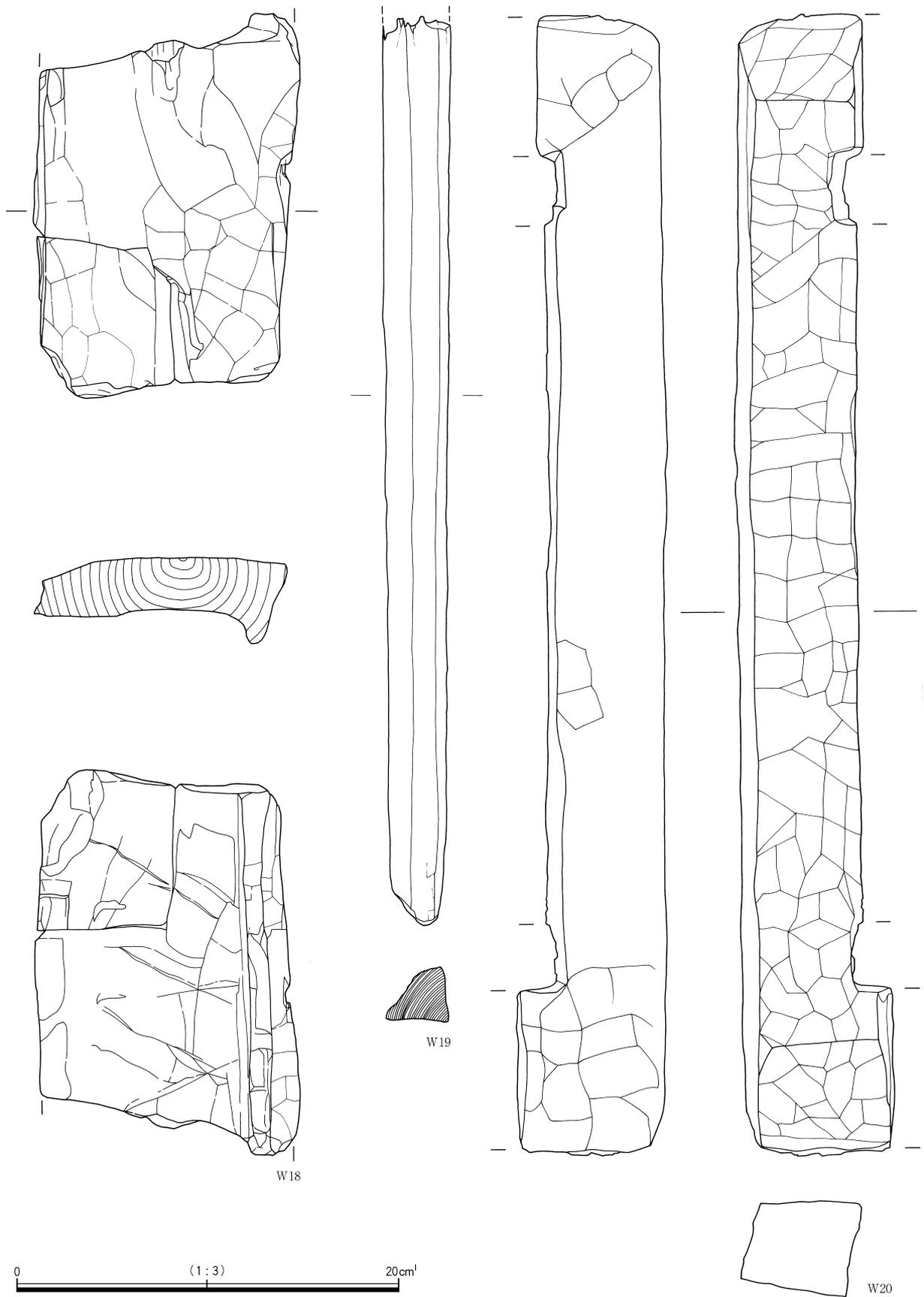


图383 有池遺跡03-2 木器



W21

W22

0 (1:5) 25cm

图384 有池遺跡03-2 木器



図385 有池遺跡03-2 木器

中央に小さく突起が作り出されている。独楽の可能性はある。W32は一方の端部が炭化しており、火付け木と考えられる。W31・W33・W34は漆塗りの椀である。W35は曲物の側板で、上・下端に箍がはめられている。また下端には底板を固定させるための穴が何箇所か穿たれている。W36～W39は下駄で、W37は台木と歯を別々につくり、台木の裏の蟻溝に、歯をはめ込んだものである。これ以外は同一の材から台木と歯を削りだしたものである。完形のW36は左足に対応するものとみられ、後ろの歯が著しく減って、前の歯よりも短くなっている。また歯の内側よりも外側が減っている。W40～W44は曲物の蓋板もしくは底板とみられる。六角形を呈するとみられるW42を除き、他はすべて円形である。W43は中央に2ヶ所穿孔がみられる。W40・W41・W44は側面に何箇所か竹釘の穴が認められる。W45は全体に丁寧なつくりで、縁に沿うように穿孔が3ヶ所認められた。W46・W47は同程度の幅の板材だが、後者は両端が欠損する。前者は長辺の側縁に1ヶ所圧痕がある他、短辺中央にはそれぞれ小さく抉りが入れている。W48～W50は細長い板状の材で、W48は一方の端部を木刀の先端のように先細りさせている。W49も一方の端部を先細りさせているが、W48よりも無造作な印象を受ける。W50は一方の端部に浅い溝を彫り、その中央に穿孔が一箇所認められる。W51は板状の部材で、表面を軽くはつたものである。両面に直径3mm程度の穴が1ヶ所ずつ認められるが、いずれも貫通はしない。W52は直径10cm足らずの細い心持材をみかん割りしたもので、一方の先端を尖らせていた。全体に無造作かつ華奢な印象を受ける。W53・W54は板材に穿孔を複数箇所施したもので、前者は一方の端部を斜めに切り落としたような形状だが、後者はおそらく左右対称になるように長辺側から切込みが入れているものとみられる。ただ穿孔の位置は非対称である。W55はつまみのような突起が作り出され、それを横断するように穿孔が

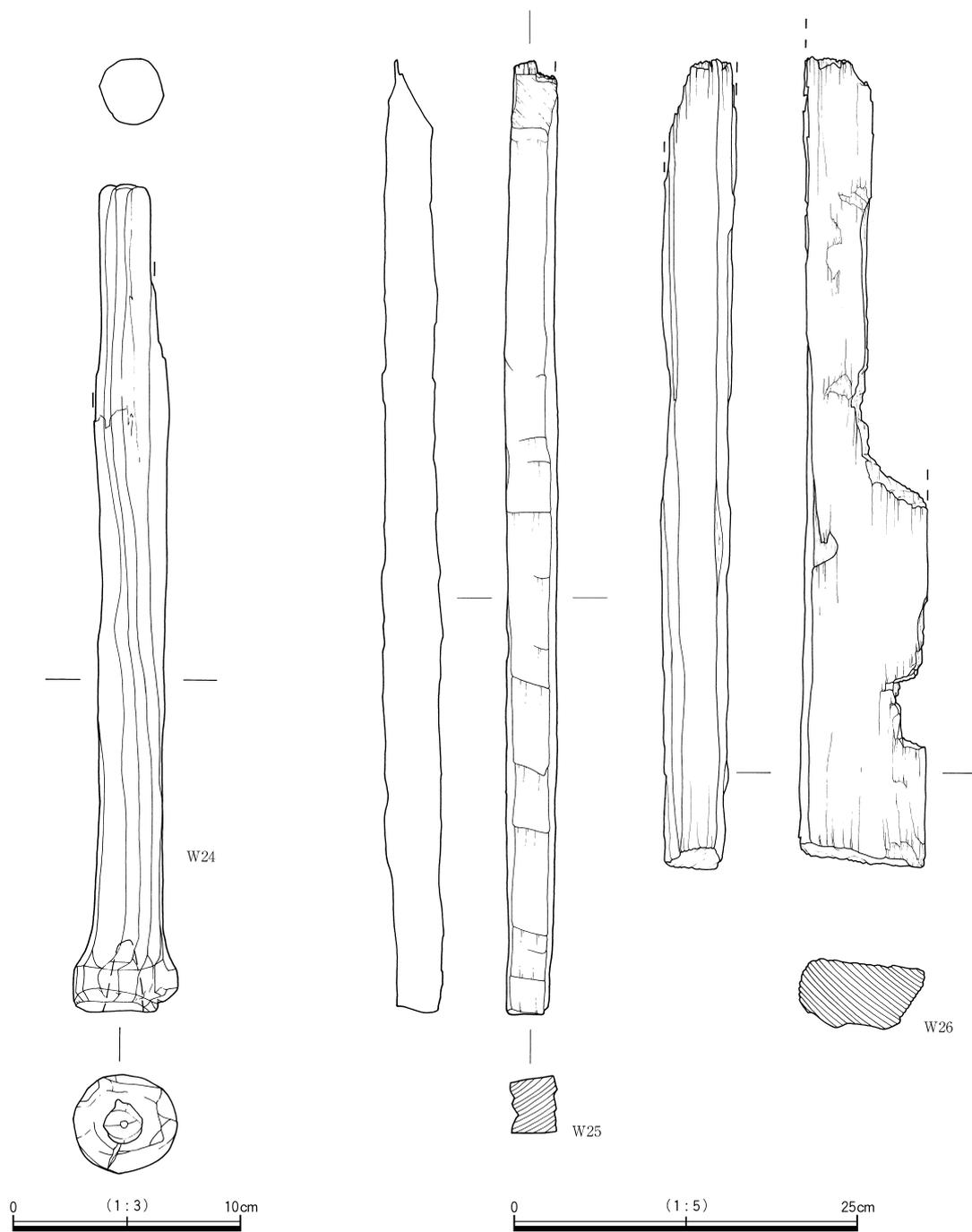
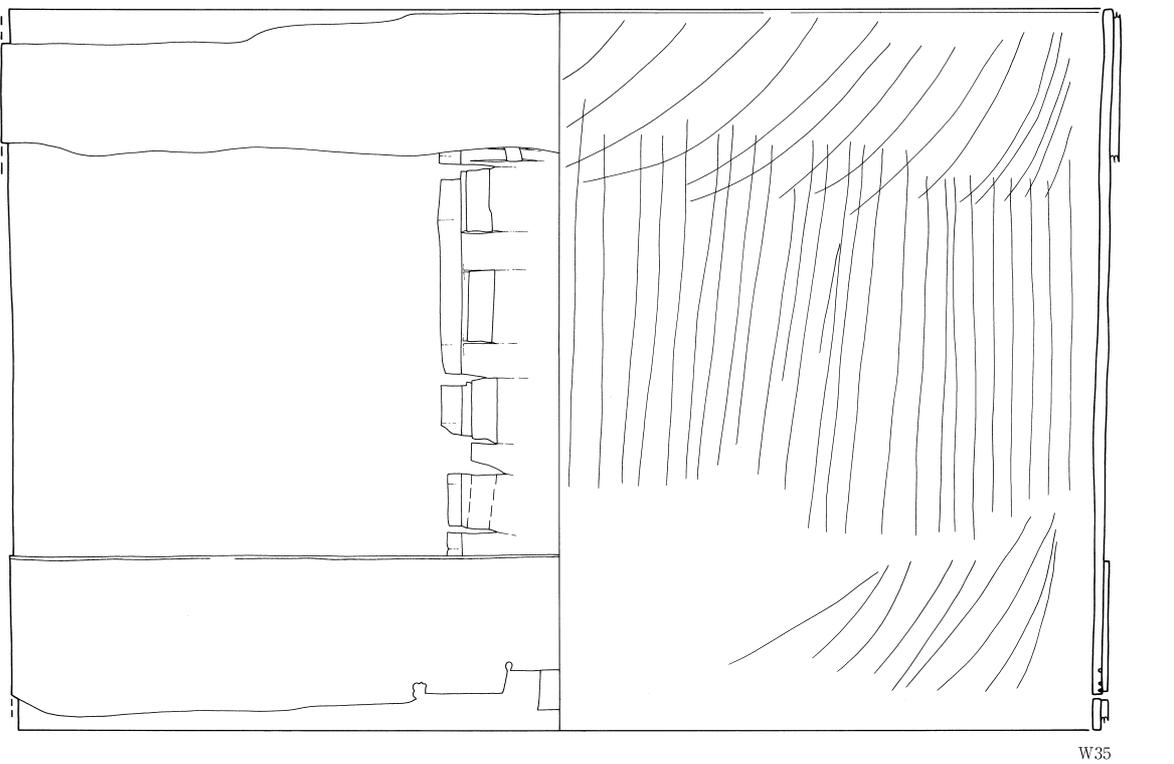
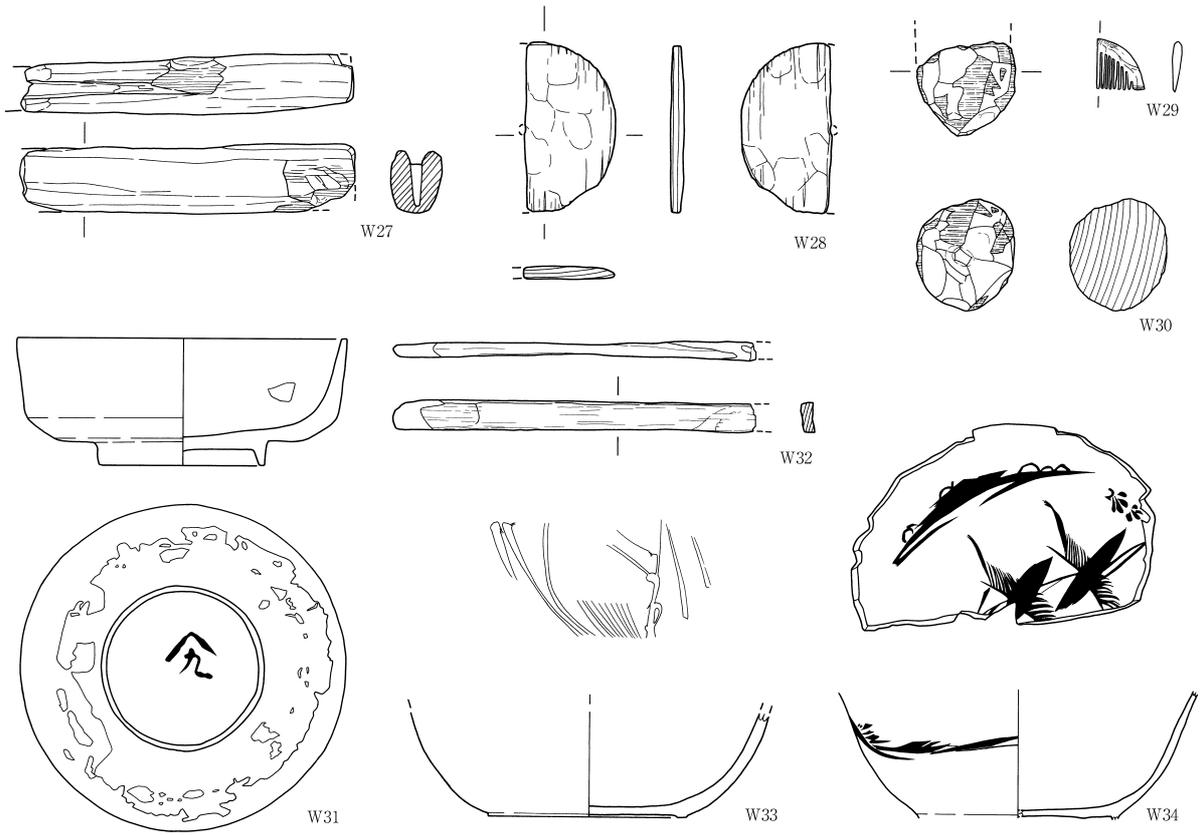


图386 有池遺跡03—2 木器



0 (1:3) 20cm

图387 有池遺跡03-2 木器・漆器

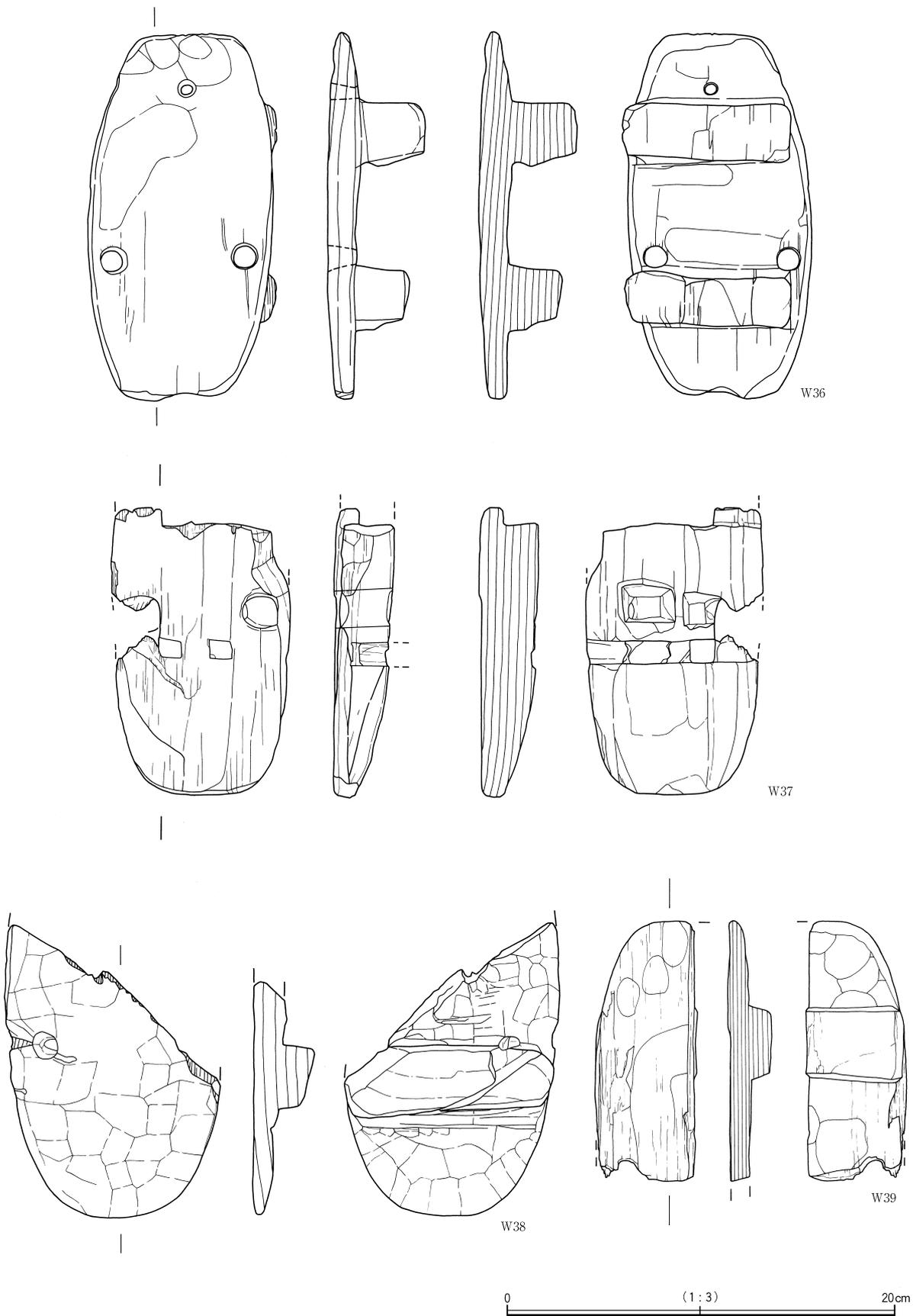


图388 有池遺跡03—2 木器

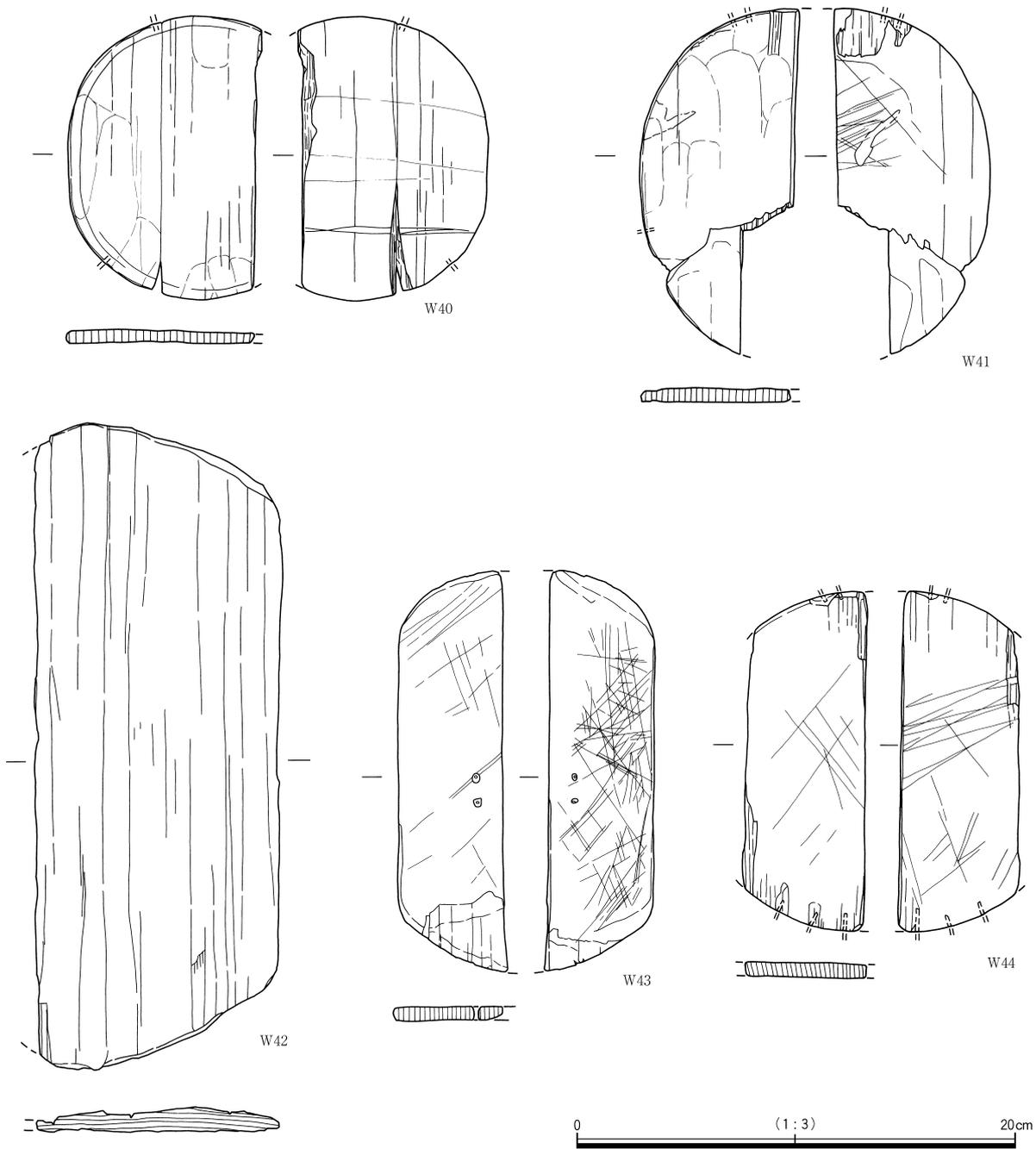


图389 有池遺跡03-2 木器

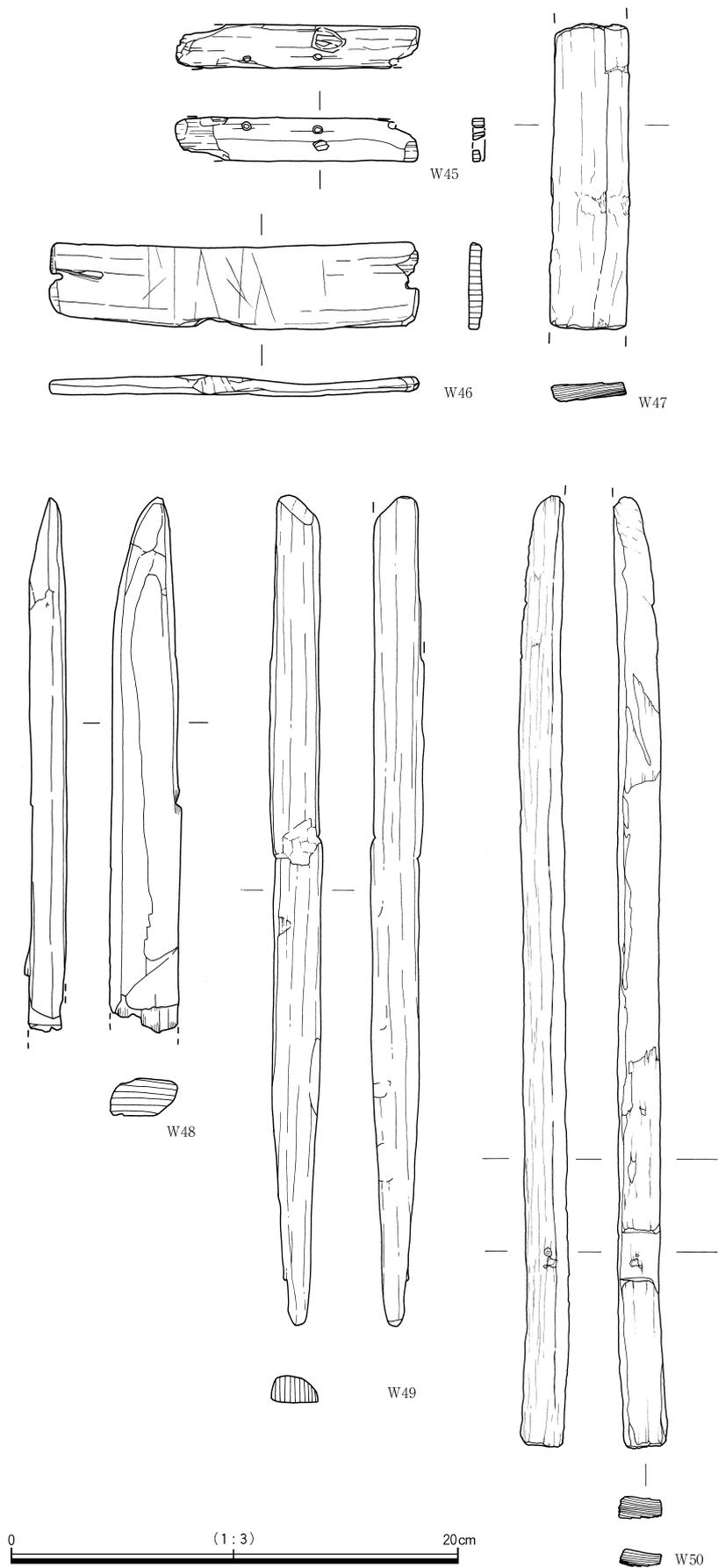


图390 有池遺跡03-2 木器

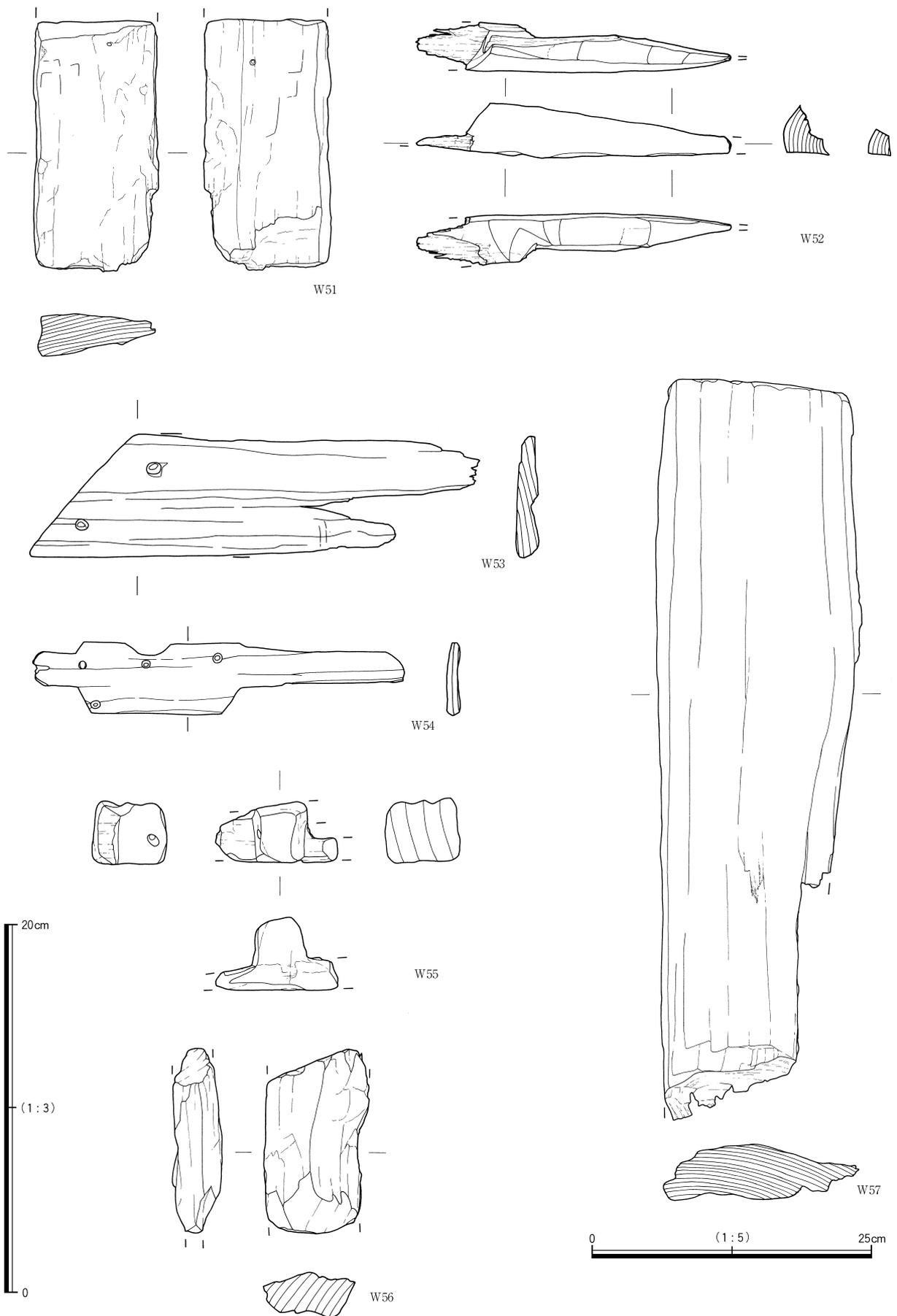


图391 有池遺跡03-2 木器

施されているのが見て取れるが、残存部分はわずかである。W56とW57は板状の部材で、どちらも一方の端部はななめにそぎ切りされたような形状を呈する。

4. 金属器 (図392)

M1はドーナツ状の金属板と輪になった針金とが金属滓によって融着したものである。水田耕土に含まれていたもので、近世以降のもの可能性もある。M2・M3・M12は板状の鉄片である。用途は特定できないが、M2は横断面を観察すると斜めに折り返したような層構造が観察でき、鉄素材の可能性もある。M4は鍬の刃先と考えられるが、風呂との接合部分が残るだけで、全体の形状は不明である。M6は小柄とみられる。一枚の金属板を折り返して作られたもので、中ほどで折れて変形した状態

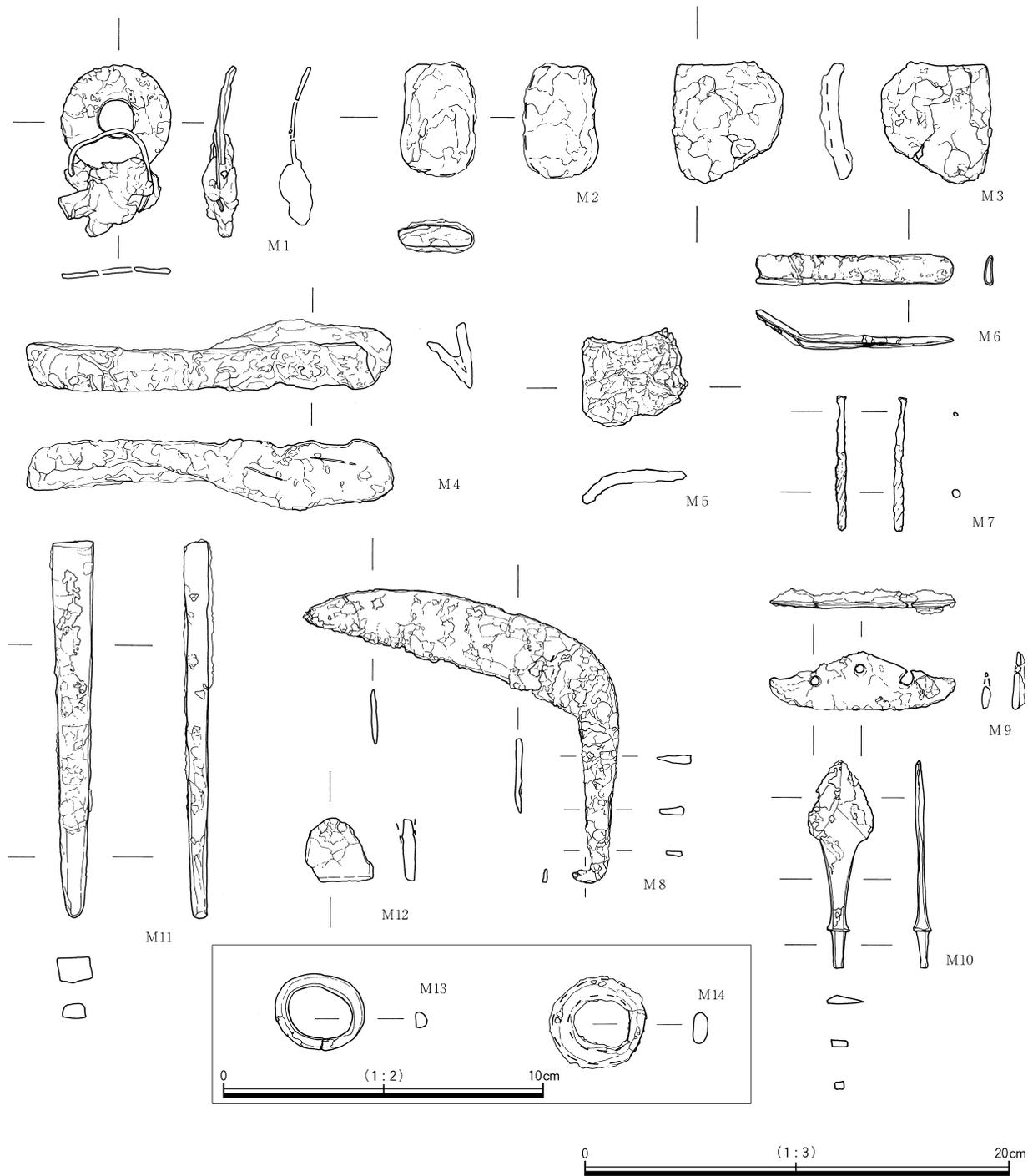


図392 有池遺跡03-2 金属器

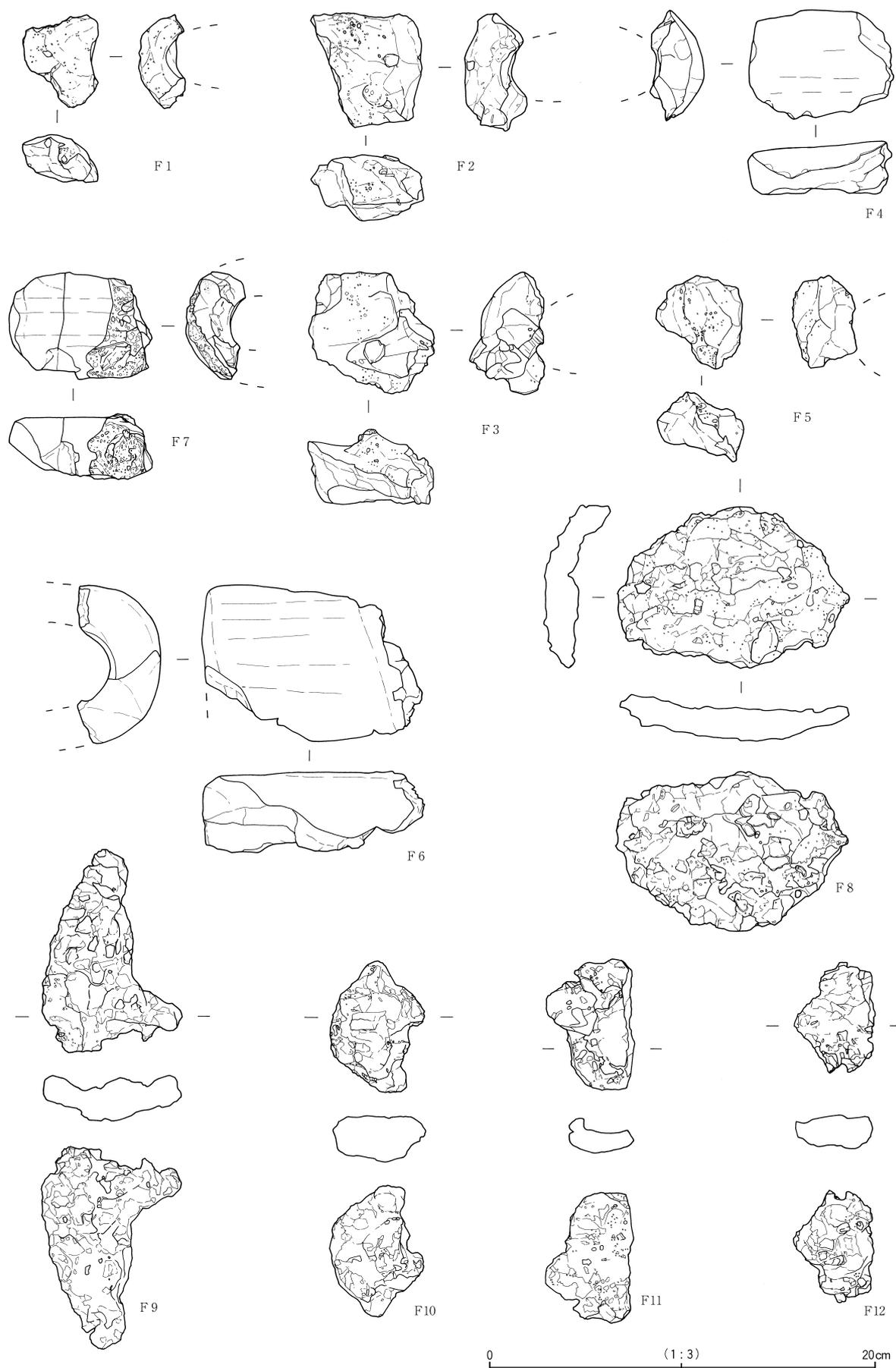
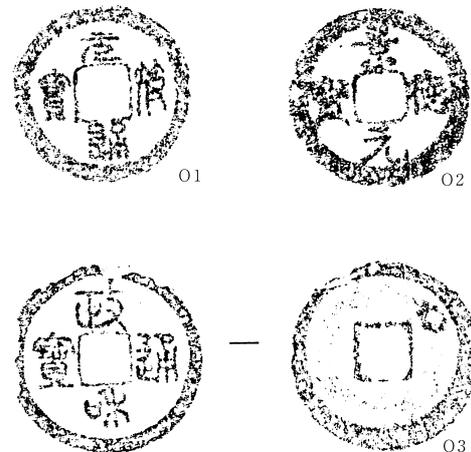


図393 有池遺跡03-2 鑄造関連遺物

土した。M7は簪で頂部に耳搔きが付き、軸の部分は螺旋状にねじって装飾としている。M8は身の形が半月形の直刃の片手鎌で、茎の先端は柄に固定させるために折り返されている。柄と刃縁の角度は113度である。M9は火打ち金で、紐掛け穴が3ヶ所穿たれている。2流路の埋土から出土したものだが、同様の形態のものが中世の集落遺跡として知られる吹田市の粟生間谷遺跡でも出土している。当遺跡では石器の項で紹介したように火打石が出土しており、これらがセット関係を有していた可能性が高い。M10は鉄鏃で刃部がやや腐食するが、全体に保存状態は良かった。M11は上端が平坦で下端部を尖らせた四角柱の鉄器で、馬鍬や地ならしといった農具の歯の部分とみられる。M13・M14は細長い金属板を輪にしたもので、出土地点は異なるが、直径や形態が近似しており、統一性のある規格で作られたもの、もしくは同一の用途を有するものの可能性が高い。留具の類であろうか。

5. 鑄造関連遺物 (図393)

F1～F6は鞆の羽口である。全体の形状がわかるものが無いいため断定はできないが、内法のカーブを比較すると、F6がやや大きい他はほぼ同じ直径だった可能性がある。先端部しか残存しないものを除くと、いずれも軽く面取りがなされているようだ。F1～F3、F5は羽口先端部を含む部分、F4・F6は羽口の基部を含む部分、F7は羽口中位の先端に近い部分である。先端部に付着する黒色ガラス質滓に光沢はなく、端部から2cm程度のところまでは気泡もあまりなく滑らかである。それより外側になると大小の気泡と、2～3mm大の長石が多く含まれる。それに加えてF2・F3は黒色ガラス質滓に1cm前後の角礫がいくつか巻き込まれている。F8は羽口の直下で送風方向にのびた椀形鍛冶滓でずっしりとした重量感がある。上面・下面ともゆるやかに湾曲する。上面では気泡や3mm大の砂粒が多く含まれるのに対し、下面は気泡も少なく、木炭痕はみられるものの全体に滑らかである。F9は上下に引き伸ばされた水滴形で、上面下端部に羽口の溶解部が若干付着している。上面・下面ともゆるやかに湾曲しており、木炭痕による凹凸が顕著に見られる。全体に緻密でなめらかな質感を帯びており、気泡は下面に多くみられる。F10は下面にやや湾曲が認められるが、上面は平坦である。気泡の広がりかたや白砂粒の混じり具合は全体に均一である。F11は灰緑色で上面の中央に表面が滑らかで大きくほみが認められる。それ以外の部分では大小の気泡が密にみられ、軽石のような質感を呈している。F12は黒色で外面に木炭痕の凹凸が認められるが、気泡はあまり認められず、全体に滑らかで光沢がある。



0 (1:1) 4 cm

図394 有池遺跡03-2 銭貨

表28 有池遺跡03-2 土器観察表

図 番号	報告 番号	実測 番号	調査 区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
325	1	12	1	1大溝 2-2層	青磁碗	[16.0]	/	/	-	龍泉窯系 鎚蓮弁文
	2	149	1	1大溝 北肩 2層	瓦質羽釜	/	/	-	/	外面に煤付着
	3	148	1	1大溝 北肩 2層	瓦質羽釜	[18.2]	/	-	[21.6]	外面鏢以下に煤付着
	4	78	1	1大溝 4層	瓦器碗	[14.4]	5.5	[5.8]	-	大和型、連結輪状暗文
	5	36	1	1大溝 下層 6層	土師器皿	8.1	1.6	-	-	
	6	17	1	1大溝 下層 6層	瓦器皿	9.8	1.6	-	-	ジグザグ状暗文
	7	100	1	1大溝 下層 6層	瓦器碗	13.1	4.0	4.5	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	8	20	1	1大溝 下層 6層	瓦質羽釜	20.5	/	-	25.1	外面オサエ、内面ハケ
	9	44	1	1大溝 下層 7層	土師器皿	10.8	1.7	-	-	
	10	61	1	1大溝 下層 7層	須恵器甕	[25.0]	/	-	/	東播系 体部外面に平行タタキ
	11	11	1	1大溝 深掘トレンチ④ 最下層	青磁碗	/	/	[7.0]	-	龍泉窯系 蓮弁文
	12	24	1	1大溝 深掘トレンチ④ 最下層	土師器壺	/	/	-	17.0	外面ミガキ
	13	27	1	1大溝 深掘トレンチ④ 最下層	土師器高杯	[13.8]	/	/	-	外面ナデ、内面粗いミガキ
	14	26	1	1大溝 深掘トレンチ④ 最下層	土師器高杯	/	/	9.8	-	全体にヨコナデ
	15	124	1	1大溝 深掘トレンチ④ 最下層	土師器高杯	23.0	/	/	-	内外面ナデ
326	16	57	1	2流路 12~13層	白磁碗	/	/	/	-	
	17	13	1	2流路 12~13層	瓦器碗	[15.3]	5.3	5.4	-	大和型、連結輪状暗文
	18	16	1	2流路 14・15層	瓦器碗	14.0	5.1	5.0	-	大和型、螺旋状暗文
	19	34	1	2流路 深掘トレンチ① 14・15層	須恵器杯身	[12.9]	3.7	-	[14.9]	
	20	68	1	2流路 深掘トレンチ① 14・15層	土師質羽釜	[16.0]	/	-	[22.0]	外面鏢以下に煤付着、内面ハケ
	21	48	1	31石組	土師器皿	6.6	1.3	-	-	穿孔あり(内→外)
	22	138	1	31石組	土師器皿	[11.1]	2.1	-	-	内面に煤付着
	23	152	1	31石組	土師器皿	[6.8]	1.1	-	-	内面ヨコナデ後ハケ
	24	153	1	31石組	土師器皿	[6.0]	1.3	-	-	
	25	137	1	31石組	瓦器碗	[13.0]	/	/	-	楕葉型
	26	151	1	31石組	瓦器碗	[13.0]	/	/	-	楕葉型
	27	135	1	31石組	三島手碗	/	/	[5.0]	-	
	28	136	1	31石組	須恵器鉢	/	/	-	-	東播系
	29	150	1	31石組	瓦質三足釜	[22.4]	/	-	[26.8]	外面に煤付着
	30	66	1	31石組	瓦質羽釜	/	/	-	/	
31	15	1	31石組	常滑焼甕	[27.2]	/	/	/		
32	134	1	31石組	常滑焼甕	/	/	/	/		
327	33・37	50	1	44ピット・69ピット	常滑焼?壺	5.3	9.9	[8.5]	10.3	底部に下駄印
	34	60	1	44ピット	瓦器碗	[10.9]	3.6	[3.2]	-	楕葉型 ジグザグ状暗文
	35	159	1	73ピット	瓦器碗	14.4	4.4	[6.0]	-	楕葉型
	36	161	1	69ピット	土師器皿	8.2	1.1	-	-	
	38	162	1	80井戸	瓦器碗	[13.0]	4.7	[4.1]	-	楕葉型、連続長楕円状暗文
	39	154	1	5井戸	瓦質羽釜	[20.4]	/	-	[25.6]	
	40	158	1	52土坑	瓦器碗	[14.0]	4.3	4.5	-	楕葉型、連続長楕円状暗文
	41	144	1	63土坑	瓦質羽釜	[21.0]	/	-	[24.4]	
328	42	126	1	6溝	瓦器碗	[10.8]	3.6	[3.7]	-	楕葉型
	43	8	1	6溝	瓦器碗	11.8	3.9	4.9	-	楕葉型
	44	143	1	43溝	土師器皿	[6.8]	0.6	-	-	
	45	98	1	43溝	土師器皿	8.0	1.0	-	-	
	46	96	1	43溝	土師器皿	8.1	1.4	-	-	
	47	97	1	43溝	土師器皿	8.0	1.1	-	-	
	48	142	1	43溝	土師器皿	[7.8]	0.9	-	-	
	49	99	1	43溝	土師器皿	12.9	2.1	-	-	
	50	139	1	43溝	瓦器碗	[11.6]	4.0	[3.8]	-	楕葉型
	51	95	1	43溝	瓦器碗	12.3	4.0	4.8	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	52	140	1	43溝	瓦器碗	[12.8]	4.1	[5.2]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	53	141	1	43溝	瓦器碗	[13.0]	4.1	[4.8]	-	楕葉型
	54	69	1	60溝	瓦器碗	[12.4]	4.0	[4.4]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	55	70	1	60溝	瓦器碗	[12.9]	4.1	4.4	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	56	156	1	66溝	須恵器鉢	/	/	-	-	東播系、内面使用痕
	57	155	1	67溝	瓦器碗	[14.0]	4.8	[3.5]	-	大和型
	58	47	1	128落込	土師器皿	9.3	1.6	-	-	
	59	157	1	128落込	土師器皿	[14.4]	2.2	-	-	
	60	43	1	59落込	瓦器碗	[11.2]	3.8	[4.4]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	61	146	1	4土器群	土師器皿	7.5	1.2	-	-	
62	147	1	4土器群	土師器皿	[7.8]	1.3	-	-		
63	3	1	4土器群	土師器皿	8.0	1.0	-	-		
64	46	1	4土器群	土師器皿	[11.2]	1.6	-	-		
65	145	1	4土器群	土師器皿	7.8	1.1	-	-		
66	38	1	4土器群	瓦器皿	8.9	1.5	-	-		
67	14	1	4土器群	瓦器碗	[14.1]	4.5	5.2	-	楕葉型	
329	68	19	2	11水田 上層 4層	青白磁蓋	[6.2]	1.8	-	8.6	蓮弁文
	69	201	2	11水田 上層 4層	土師器皿	[13.8]	2.9	-	-	内面に煤付着
	70	208	2	11水田 上層 4層	土師器皿	[13.8]	3.0	-	-	

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不能、-:計測項目なし

表29 有池遺跡03-2 土器観察表

図 番号	報告 番号	実測 番号	調査 区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
329	71	202	2	11水田 上層 4層	瓦器椀	[17.0]	/	/	-	大和型
	72	199	2	11水田 下層 5層	土師器皿	[14.2]	/	-	-	大和型
	73	198	2	11水田 下層 5層	瓦器椀	[13.8]	/	/	-	大和型
	74	18	2	11水田 下層 5層	瓦器椀	[15.1]	5.6	5.9	-	大和型、ジグザグ状暗文
	75	197	2	11水田 下層 5層	瓦器椀	/	/	5.4	-	大和型、連結輪状暗文
	76	196	2	11水田 下層 7層	瓦器椀	/	/	6.9	-	大和型、格子状暗文
	77	204	2	15木組	土師器皿	[14.2]	2.5	-	-	
	78	203	2	15木組	瓦器椀	[15.8]	/	/	-	大和型
330	79	217	3	3流路	土師器皿	10.3	2.0	-	-	口縁部に煤付着
	80	216	3	3流路	土師器皿	10.8	2.0	-	-	内面に炭化物付着
	81	218	3	3流路	土師器皿	10.7	2.2	-	-	
	82	211	3	3流路	土師器皿	[10.6]	2.2	-	-	
	83	223	3	3流路	土師器皿	[10.4]	3.1	-	-	
	84	212	3	3流路	土師器皿	11.0	2.3	-	-	
	85	213	3	3流路	瓦器椀	[10.8]	3.3	[4.2]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	86	214	3	3流路	瓦器椀	[10.6]	3.5	3.2	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	87	219	3	3流路	瓦器椀	[11.4]	3.9	/	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	88	205	3	3流路	瓦器椀	11.9	3.8	3.5	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	89	206	3	3流路	瓦器椀	[11.6]	3.7	4.6	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	90	215	3	3流路	瓦器椀	[10.7]	3.4	3.7	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	91	207	3	3流路	瓦器椀	11.0	3.2	/	-	楕葉型
	92	221	3	3流路	瓦質羽釜	[17.4]	/	-	[23.6]	外面鏢以下に煤付着
	93	210	3	3流路	瓦質三足釜	[18.0]	/	-	[23.6]	外面鏢以下に煤付着
	94	222	3	3流路	瓦質土器播鉢	[29.2]	/	/	-	口縁部に穿孔、内面使用痕、摺目8条1単位
	95	209	3	3流路	瓦質土器播鉢	[30.8]	/	/	-	
331	96	52	3	3流路 10土器	土師器皿	7.9	1.2	-	-	
	97	179	3	3流路 10土器	土師器皿	8.2	1.2	-	-	
	98	182	3	3流路 10土器	土師器皿	[7.8]	1.2	-	-	
	99	180	3	3流路 10土器	土師器皿	8.3	1.1	-	-	
	100	55	3	3流路 10土器	土師器皿	7.5	1.2	-	-	
	101	181	3	3流路 10土器	瓦器椀	10.9	3.3	-	-	楕葉型
	102	185	3	3流路 10土器	瓦器椀	[11.5]	3.9	[3.2]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	103	2	3	3流路 10土器	瓦器椀	11.9	3.9	-	-	楕葉型
	104	186	3	3流路 10土器	瓦器椀	11.9	3.7	3.9	-	楕葉型、連続長楕円状暗文か
	105	220	3	3流路	瓦質羽釜	[33.8]	/	-	[45.4]	外面鏢以下に煤付着
332	106	10	3	2層	瓦器椀	12.0	4.1	4.2	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	107	408	3	1大溝 下段 16層	須恵器甕	[30.4]	/	-	/	東播系 外面平行タキ
	108	438	3	1大溝 下段 16層	土師質羽釜	[28.6]	/	-	[36.4]	
	109	417	3	1大溝 下段 16層	瓦質羽釜	[28.4]	/	-	[36.0]	外面に煤付着
	110	437	3	1大溝 下段 16層	須恵器鉢	/	/	10.6	-	東播系、底部に焼成後穿孔
	111	396	3	1大溝 下段 16層	土師器皿	[10.7]	2.5	-	-	
	112	76	3	1大溝 下段 17層	土師器皿	[9.8]	1.9	-	-	「て」の字状口縁
	113	256	3	1大溝 下段 10・11-2・16層	土師器皿	[11.4]	3.0	-	-	
	114	254	3	1大溝 下段 10・11-2・16層	瓦器壺	[5.4]	/	-	/	肩部に蓮華文状の暗文
	115	416	3	1大溝 下段 10・11-2層	土師器高杯	/	/	-	-	外面に透かし状の切れ目
	116	450	3	1大溝 下段 東西アゼ④層	瓦質土器双耳浅鉢	[20.8]	/	/	[23.0]	内面に煤付着
333	117	227	3	1大溝 上段 6層	瓦器椀	[14.2]	4.3	5.0	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	118	283	3	1大溝 上段 6層	褐釉壺	/	/	[8.4]	/	
	119	228	3	1大溝 上段 6層	土師器皿	[7.8]	1.4	-	-	内面に煤付着
	120	226	3	1大溝 上段 6層	瓦質土管	[15.4]	/	/	-	
	121	271	3	1大溝 上段 7層	白磁皿	[11.0]	3.6	6.3	-	口禿皿
	122	230	3	1大溝 上段 7層	瓦器椀	[11.0]	3.3	3.4	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	123	276	3	1大溝 上段 7層	瓦器椀	[14.2]	4.4	[3.8]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	124	275	3	1大溝 上段 7層	瓦器椀	12.8	4.1	4.6	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	125	238	3	1大溝 上段 7層	瓦器皿	[9.8]	1.9	-	-	ジグザグ状暗文
	126	273	3	1大溝 上段 7層	瓦質羽釜	/	/	-	/	外面鏢以下に煤付着
	127	270	3	1大溝 上段 7層	土師質羽釜	/	/	-	/	
	128	272	3	1大溝 上段 7層	瓦質鍋	[23.8]	/	-	[25.0]	
334	129	282	3	1大溝 上段 8層	瓦器椀	[12.2]	3.6	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	130	253	3	1大溝 上段 8層	瓦器椀	[11.8]	3.6	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	131	251	3	1大溝 上段 8層	瓦器椀	[10.7]	4.0	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	132	279	3	1大溝 上段 8層	瓦器椀	[12.6]	3.5	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	133	278	3	1大溝 上段 8層	瓦質土器播鉢	[24.2]	/	/	-	内面使用痕、摺目6条1単位
	134	258	3	1大溝 上段 8層	瓦質羽釜	[14.6]	/	-	[18.0]	外面鏢以下に煤付着
	135	252	3	1大溝 上段 8層	瓦質三足釜	[14.8]	/	-	[20.0]	外面鏢以下に煤付着
	136	284	3	1大溝 上段 8層	瓦質羽釜	[17.4]	/	-	[22.2]	外面に煤付着
	137	285	3	1大溝 上段 8層	瓦質羽釜	[19.4]	/	-	[22.4]	外面に煤付着、内面に植物の繊維質が付着
	138	281	3	1大溝 上段 8層	須恵器鉢	[31.8]	/	-	[33.2]	東播系
	139	280	3	1大溝 上段 8層	須恵器甕	[30.2]	/	-	/	東播系
	140	229	3	1大溝 上段 9層	須恵器甕	[35.6]	/	-	/	東播系 体部外面は綾杉文状のタキ

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不能、-:計測項目なし

表30 有池遺跡03-2 土器観察表

図 番号	報告 番号	実測 番号	調査 区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
335	141	231	3	1大溝 上段 12-1層	瓦質羽釜	[18.2]	/	-	[23.0]	外面鏢以下に煤付着
	142	232	3	1大溝 上段 12-1層	瓦器碗	[13.2]	3.9	5.0	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	143	242	3	1大溝 上段 21層	土師器皿	7.7	1.2	-	-	口縁部外面に煤付着、見込みに墨書
336	144	426	3	1大溝 下段南側 42層	土師器皿	[8.2]	1.1	-	-	
	145	415	3	1大溝 下段南側 39層	土師器皿	[7.8]	1.1	-	-	
	146	414	3	1大溝 下段南側 39層	土師器皿	7.1	1.1	-	-	
	147	400	3	1大溝 下段南側 39層	瓦器碗	10.6	3.3	3.9	-	楠葉型、連続長楕円状暗文
	148	441	3	1大溝 下段南側 39層	瓦質羽釜	[36.2]	/	-	[44.8]	外面鏢以下に煤付着
	149	193	3	1大溝 下段南側 3層 11土器	土師器皿	[7.8]	1.0	-	-	
337	150	189	3	1大溝 下段南側 3層 11土器	瓦器皿	[8.2]	2.1	-	-	
	151	190	3	1大溝 下段南側 3層 11土器	瓦器碗	[13.2]	4.0	4.6	-	楠葉型
	152	187	3	1大溝 下段南側 3層 11土器	瓦器碗	[12.4]	4.1	[2.9]	-	楠葉型
	153	191	3	1大溝 下段南側 3層 11土器	瓦器碗	[13.5]	4.1	5.0	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	154	277	3	1大溝 下段南側 3層 11土器	常滑焼甕	/	/	/	/	
	155	75	3	1大溝 下段南側 3-2層 12土器	土師質羽釜	[28.2]	/	-	[35.4]	
	156	74	3	1大溝 下段南側 3-2層 12土器	瓦器皿	[9.2]	1.8	-	-	ジグザグ状暗文
	157	73	3	1大溝 下段南側 3-2層 12土器	土師器皿	8.7	1.4	-	-	
	158	243	3	1大溝 下段南側 3-2層	瓦器皿	[9.0]	1.3	-	-	
	159	249	3	1大溝 下段南側 3-2層	土師器皿	8.0	1.3	-	-	
	160	250	3	1大溝 下段南側 3-2層	瓦器碗	[11.9]	4.1	4.7	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	161	192	3	1大溝 下段南側 3-2層 12土器	土師器甕	[23.0]	/	-	[24.0]	体部外面ハケ後ナデ
	338	162	234	3	1大溝 下段南側 26層	土師器皿	[14.8]	2.1	-	-
163		237	3	1大溝 下段南側 26層	土師器皿	13.4	2.8	-	-	
164		236	3	1大溝 下段南側 26層	土師器皿	[14.0]	2.3	-	-	
165		235	3	1大溝 下段南側 26層	常滑焼甕	/	/	/	/	
166		233	3	1大溝 下段南側 26層(南側中段)	瓦器碗	[12.8]	4.8	4.0	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
167		177	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	土師器皿	8.1	1.2	-	-	
168		176	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	土師器皿	[12.8]	2.2	-	-	口縁部内面の一部に煤付着
169		173	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	土師質羽釜	/	/	-	/	外面に煤付着
170		174	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	土師質羽釜	/	/	-	/	
171		171	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	瓦器碗	14.1	5.2	3.7	-	大和型、連結輪状暗文
172		170	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	白磁碗	[15.3]	6.5	6.3	[16.1]	
173		178	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	土師器鉢?	[26.4]	/	/	-	
174		175	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	須恵器鉢	[28.0]	/	-	-	東播系
339		175	188	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	瓦質鍋	[30.2]	/	-	-
	176	172	3	1大溝 下段南側 27層 13土器	渥美焼?甕	/	/	/	/	肩部格子目タタキ
	177	259	3	1大溝 下段南側 27層	瓦質三足釜	[19.4]	/	-	[24.0]	体部外面に煤付着
	178	433	3	1大溝 下段南側 26・28層	瓦器碗	[14.0]	4.4	[4.4]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	179	429	3	1大溝 下段南側 西壁 26・28層	瓦器碗	13.7	4.5	5.1	-	楠葉型、連続長楕円状暗文
	180	241	3	1大溝 下段南側 西壁 26・28層	瓦器碗	[16.0]	/	/	-	大和型
	181	434	3	1大溝 下段南側 28層 南肩部	土師器壺	[13.2]	/	-	/	
	182	413	3	1大溝 下段南側 30-1層 南肩部	土師器鉢	15.7	7.0	-	-	
340	183	77	3	1大溝 下段南側 30-2層 南肩部	土師器甕	9.9	12.0	-	11.9	
	184	64	3	1大溝 下段南側 30-2層 南肩部	須恵器杯身	11.6	3.8	-	14.0	部分的に焼成時の重ね焼痕
	185	65	3	1大溝 下段南側 30-2層 南肩部	土師器高杯	/	/	15.3	-	
	186	41	3	1大溝 下段南側 30-2層 南肩部	土師器甕	20.8	/	-	/	
	187	67	3	1大溝 下段南側 30-2層 南肩部	土師器甕	17.8	/	-	/	
	341	188	295	3	1大溝 下段北側 26層	土師器皿	[8.0]	[0.9]	-	-
189		290	3	1大溝 下段北側 26層	土師器皿	[7.8]	1.1	-	-	
190		291	3	1大溝 下段北側 26層	瓦器碗	[11.8]	4.1	[4.1]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
191		395	3	1大溝 下段北側 26層	瓦器碗	/	/	[5.2]	-	高台内に繊維状のプリント、螺旋状暗文
192		292	3	1大溝 下段北側 26層	須恵器甕	[22.0]	/	-	/	東播系
193		286	3	1大溝 下段北側 26層	瓦質羽釜	[17.4]	/	-	[22.4]	
194		294	3	1大溝 下段北側 26層	瓦質羽釜	[20.2]	/	-	[22.8]	
195		288	3	1大溝 下段北側 26層	瓦質羽釜	[17.2]	/	-	[21.8]	
196		289	3	1大溝 下段北側 26層	瓦質羽釜	[16.2]	/	-	[19.5]	外面に煤付着
197		330	3	1大溝 下段北側 26層	瓦質羽釜	/	/	-	/	
198		287	3	1大溝 下段北側 26層	瓦質羽釜	[39.8]	/	-	[54.0]	外面鏢以下に煤付着
199		293	3	1大溝 下段北側 26層	瓦質鍋	[28.0]	/	-	[28.9]	
342	200	200	3	1大溝 下段北側 26層 15土器	瓦質羽釜	[17.5]	/	-	[21.8]	外面に煤付着
	201	194	3	1大溝 下段北側 26層 15土器	瓦質羽釜	[15.0]	/	-	[19.0]	外面に煤付着
	202	296	3	1大溝 下段北側 26層 15土器	瓦質羽釜	[28.25]	/	-	[37.4]	外面鏢以下に煤付着
	203	195	3	1大溝 下段北側 26層 15土器	瓦質羽釜	[26.8]	/	-	[36.4]	外面鏢以下に煤付着
	204	168	3	1大溝 下段北側 26層 16土器	土師器皿	[7.8]	1.2	-	-	
	205	9	3	1大溝 下段北側 26層 16土器	瓦器碗	11.6	4.0	3.7	-	楠葉型、底部に穿孔(内→外)有
	206	169	3	1大溝 下段北側 26層 16土器	瓦質鍋	[29.0]	/	-	[30.0]	
	207	164	3	1大溝 下段北側 26層 16土器	瓦質羽釜	[30.0]	/	-	[39.8]	外面鏢以下に一部煤付着
	208	163	3	1大溝 下段北側 26層 16土器	瓦質羽釜	[32.6]	/	-	[42.8]	
343	209	240	3	1大溝 下段北側 26層	瓦器碗	12.1	4.1	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	210	260	3	1大溝 下段北側 27層	土師器皿	8.0	1.1	-	-	底部に穿孔

単位:cm、〔 〕:復元径、/ :測定不能、- :計測項目なし

表31 有池遺跡03-2 土器観察表

図 番号	報告 番号	実測 番号	調査 区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
343	211	262	3	1大溝 下段北側 27層	土師器皿	8.0	0.9	-	-	底部に直径3mm程度の穿孔
	212	261	3	1大溝 下段北側 27層	土師器皿	7.8	1.0	-	-	
	213	263	3	1大溝 下段北側 27層	土師器皿	10.4	2.0	-	-	
	214	264	3	1大溝 下段北側 27層	瓦器碗	[11.8]	3.6	2.6	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	215	404	3	1大溝 下段北側 32層	土師器皿	7.65	1.35	-	-	底部に「十」の墨書
	216	1	3	1大溝 下段北側 32層	瓦器碗	11.6	3.8	3.6	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	217	401	3	1大溝 下段北側 32層	瓦器碗	[12.2]	4.1	-	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	218	394	3	1大溝 下段北側 32層	瓦質羽釜	[15.0]	/	-	[18.6]	
	219	403	3	1大溝 下段北側 32層	瓦質羽釜	[19.7]	/	-	[23.8]	外面部分的に煤付着
220	402	3	1大溝 下段北側 32層	瓦質三足釜	[17.4]	/	-	-		
344	221	40	3	1大溝 最下層 18層	土師器高杯	[13.6]	/	/	-	内外面ナデ
	222	418	3	1大溝 最下層 18層	土師器高杯	[11.6]	/	/	-	内外面ナデ
	223	37	3	1大溝 最下層 18層	土師器甕	10.4	/	-	10.9	体部外面ハケ、その他ナデ
	224	39	3	1大溝 最下層 18層	土師器高杯	/	/	[10.1]	-	外面ナデ、内面ケズリ
	225	419	3	1大溝 最下層 18層	土師器高杯	/	/	9.2	-	内外面ケズリ、脚裾部はココナデ
	226	397	3	1大溝 最下層 18層	須恵器杯蓋	[13.5]	3.3	-	[12.4]	
	227	72	3	1大溝 最下層 18層	須恵器杯身	[14.0]	/	-	[16.0]	
	228	32	3	1大溝 最下層 18層	須恵器杯身	[10.8]	5.5	-	13.4	
	229	31	3	1大溝 最下層 18層	須恵器杯身	[10.4]	5.3	-	13.3	
	230	33	3	1大溝 最下層 18層	土師器杯身	12.4	5.0	-	-	体部下位にハケメ残る
	231	59	3	1大溝 最下層 18～19層	土師器高杯	/	/	[15.0]	-	内外面ナデ
	232	42	3	1大溝 最下層 18層	土師器高杯	/	/	9.3	-	内面ハケ
	233	56	3	1大溝 最下層 18～19層	土師器甕	[16.6]	/	-	/	外面ナデ、体部内面ハケのちナデ
	234	53	3	1大溝 最下層 19層	須恵器杯蓋	12.9	5.1	-	-	
	235	62	3	1大溝 最下層 19層	土師器高杯	/	/	18.0	-	外面ハケのちナデ
236	23	3	1大溝 最下層 19層	土師器壺	[9.2]	16.2	-	15.0	体部外面ハケのちナデ	
237	58	3	1大溝 最下層 19層	須恵器甕	[30.8]	/	-	/		
345	238	63	3	1大溝 最下層 19層	須恵器甕	[19.4]	/	-	/	櫛描波状文は7条1単位 肩部にカキ目
	239	25	3	1大溝 最下層 19層	須恵器甕	/	/	-	11.1	
	240	22	3	1大溝 最下層 19層	須恵器甕	[21.8]	/	-	/	
346	241	421	3	18石組	瓦質土器火鉢	/	/	/	-	
	242	409	3	18石組	瓦質羽釜	[28.2]	/	-	/	
347	243	423	3	2流路 南側側溝	瓦質土器火鉢	/	/	/	-	輪花形 菊花文スタンプ
	244	424	3	2流路 6層	軒平瓦	-	-	-	-	凹面に縦線がつく 唐草文
	245	425	3	2流路 8層	軒平瓦	-	-	-	-	唐草文
	246	432	3	2流路 8層	渥美焼?甕	[20.9]	/	/	/	
	247	427	3	2流路 9層	瓦質羽釜	[16.8]	/	-	[19.6]	外面に煤付着
	248	410	3	2流路 11層	須恵器鉢	/	/	/	[25.2]	東播系
	249	411	3	2流路 11層	常滑焼壺	/	/	/	-	
	250	430	3	2流路 11層	須恵器甕	[25.4]	/	-	/	東播系
	251	431	3	2流路 12層	土師器皿	8.0	1.35	-	-	
	252	7	3	2流路 12層	瓦器皿	9.3	1.5	-	-	ジグザグ状暗文
	253	439	3	2流路 12層	瓦器碗	[14.5]	/	/	-	大和型
	254	435	3	2流路 12層	瓦器碗	/	/	[5.4]	-	連結輪状暗文、底部に線刻
	255	407	3	2流路 12層	瓦器碗	/	/	[4.6]	-	連結輪状暗文、底部に「十」の線刻
	256	440	3	2流路 12層	瓦器碗	15.3	6.1	6.1	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
257	455	3	2流路 12層	土師質羽釜	[22.6]	/	-	[29.0]	外面に煤付着	
258	449	3	2流路 12層	須恵器甕	[26.0]	/	-	/	東播系 外面に粗い平行タタキ	
348	259	472	3	2流路 12～13層	土師器甕	/	/	/	/	把手部分のみ
	260	453	3	2流路 12～13層	瓦器碗	[15.0]	5.8	[6.0]	-	大和型、連結輪状暗文
	261	459	3	2流路 13層	土師器皿	14.1	2.7	-	-	口縁部二段ナデ
	262	458	3	2流路 13層	土師器皿	8.1	1.3	-	-	
	263	443	3	2流路 13層	瓦器碗	15.1	5.8	5.2	-	大和型、連結輪状暗文
	264	456	3	2流路 13層	土師器皿	14.8	3.2	-	-	内外面共に煤付着
	265	469	3	2流路 13層	瓦質鍋	[17.0]	5.0	[10.2]	-	
	266	452	3	2流路 13層	瓦器碗	13.9	6.1	5.4	-	楠葉型か、連結輪状暗文
	267	420	3	2流路 13層	土師質羽釜	[21.6]	/	-	[26.8]	外面に煤付着
	268	457	3	2流路 14層	瓦器碗	/	/	5.95	-	底部に「十」字の線刻 連結輪状暗文
	269	442	3	2流路 14層	瓦器碗	13.7	4.9	3.4	-	大和型、螺旋状暗文
	270	454	3	2流路 14層	瓦器碗	[14.8]	5.95	[5.8]	-	大和型、連結輪状暗文
	271	444	3	2流路 14層	瓦器碗	14.8	5.4	4.7	-	大和型、連結輪状暗文
	272	6	3	2流路 14層	土師器皿	13.3	2.6	-	-	
439	273	436	3	2流路 14層	須恵器甕	[37.4]	/	-	[38.4]	櫛描波状文
	274	82	3	2流路 15層	須恵器器台	/	/	/	-	長方形の透かしが入ると思われる(外→内)
	275	80	3	2流路 15層以下	須恵器高杯	12.4	9.6	9.9	-	
	276	81	3	2流路 15層	土師器高杯	/	/	9.0	-	
	277	112	3	2流路 15層以下	土師器甕	/	/	[15.3]	-	底部に穿孔、外面ハケ、下方ケズリのちナデ
	278	116	3	2流路 15層以下	土師器甕	[16.8]	/	-	/	体部外面ハケ、内面ケズリのちハケのちナデ
	279	107	3	2流路 16～17層	土師器高杯	/	/	10.6	/	脚部内外面ナデ
280	103	3	2流路 16～17層	土師器高杯	12.5	10.7	[8.9]	-	杯部下方にハケ残る	

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不能、-:計測項目なし

表32 有池遺跡03-2 土器観察表

図 番号	報告 番号	実測 番号	調査 区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
439	281	104	3	2流路 16~17層	土師器高杯	12.0	/	/	-	杯部下方にハケ残る
	282	123	3	2流路 16~17層	土師器高杯	[23.7]	18.7	13.1	-	内面粗いミガキ、脚柱部内面にシボリメ
	283	110	3	2流路 16~17層	土師器高杯	21.5	/	/	-	内外面ミガキ
	284	111	3	2流路 16~17層	土師器甕	[15.2]	/	/	[24.0]	体部外面ハケのちナデ、内面ケズリ
	285	102	3	2流路 16~17層	土師器ミニチュア土器	6.0	5.2	3.9	6.5	外面オサエ
	286	105	3	2流路 17層	土師器ミニチュア土器	[5.8]	5.0	3.4	6.2	外面オサエ
	287	79	3	2流路 17層	土師器ミニチュア土器	6.2	5.4	-	6.45	外面オサエ、内面板ナデ
	288	113	3	2流路 17層	須恵器杯身	[11.5]	4.6	-	[14.4]	
	289	114	3	2流路 17層	土師器杯身	[12.0]	4.4	-	[12.2]	外面に煤付着、内外面ナデ
	290	101	3	2流路 17層	土師器杯	12.2	6.4	-	12.9	外面ハケ、内面板ナデ
	291	115	3	2流路 17層	土師器高杯	/	/	10.8	-	外面ナデ
	350	292	109	3	2流路 17層	土師器壺	/	/	-	12.2
293		83	3	2流路 17層	土師器杯	14.8	8.4	-	16.6	外面下端部に煤付着、外面ナデ
294		21	3	2流路 17層	土師器壺	[9.4]	14.5	-	14.0	体部外面ハケ、頸部外面に沈線2条
295		108	3	2流路 17層	土師器壺	8.7	/	-	14.8	体部外面ハケ
296		106	3	2流路 17層	土師器壺	11.0	/	-	/	体部外面ハケ、口縁部内面ナデ
297		122	3	2流路 17層	土師器甕	15.8	/	-	[26.0]	体部煤付着、体部外面ハケ、内面ケズリ
298		119	3	2流路 17層	土師器甕	[22.2]	21.1	[10.2]	-	底部穿孔
299		93	3	294竪穴 土器5	土師器甕	13.2	/	-	/	体部外面ハケ
300		91	3	294竪穴 土器2	土師器甕	19.0	/	-	/	体部外面ハケ
301		90	3	294竪穴 土器2	土師器甕	11.4	/	-	/	体部外面ハケ
302		92	3	294竪穴 土器2	土師器甕	[19.8]	/	-	/	体部外面ハケ
351		303	28	3	294竪穴 土器7	土師器甕	14.7	/	-	/
	304	29	3	294竪穴 土器7	土師器ミニチュア土器	/	/	-	5.2	体部外面にハケとオサエ
	305	121	3	294竪穴 土器1	土師器台形土器	26.8	7.0	19.8	-	外面に煤付着
	306	120	3	294竪穴 土器4	土師器台形土器	27.9	7.7	14.7	-	外面に煤付着
	307	125	3	137ピット	瓦質羽釜	[31.8]	/	-	[40.0]	外面鏝以下に煤付着
	308	54	3	155ピット	土師器皿	7.1	1.4	-	-	中央付近に穿孔(外→内)
	309	128	3	155ピット	土師器皿	8.0	1.2	-	-	
	310	131	3	155ピット	土師器皿	[8.0]	1.4	-	-	
	311	49	3	48ピット	土師器皿	7.6	1.0	-	-	
	312	45	3	48ピット	土師器皿	10.2	2.2	-	-	
	313	4	3	277ピット	土師器皿	8.0	1.5	-	-	
	352	314	133	3	158ピット	土師器皿	[14.4]	2.7	-	-
315		130	3	337ピット	土師器皿	[10.8]	1.9	-	-	
316		132	3	116ピット	瓦器碗	[13.0]	4.0	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
317		129	3	378ピット	瓦器碗	[12.4]	4.5	-	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
318		445	3	63井戸	土師器皿	[11.4]	1.6	-	-	
319		446	3	63井戸	土師器皿	11.7	2.0	-	-	外面部分的に薄く煤付着
320		428	3	63井戸	須恵器鉢	[26.6]	/	/	-	東播系か
321		84	3	454井戸	瓦器碗	11.5	3.9	3.6	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
322		85	3	454井戸	瓦器碗	11.9	4.1	3.5	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
323		470	3	452井戸	瓦質三足釜	[18.1]	/	-	[23.0]	外面に濃く煤付着
324		183	3	20土坑	瓦質羽釜	[16.2]	/	-	[22.0]	外面鏝以下に煤付着
353		325	184	3	122土坑	瓦器碗	12.1	3.5	/	-
	326	167	3	5溝	土師器皿	[6.4]	1.5	-	-	
	327	166	3	5溝	土師器皿	7.7	1.1	-	-	口縁部に一部煤付着
	328	165	3	6溝	須恵器甕	/	/	-	/	東播系
	329	269	3	8溝	土師器皿	[6.4]	1.1	-	-	
	330	5	3	8溝	土師器皿	10.5	1.9	-	-	
	331	265	3	8溝	瓦器碗	[12.8]	4.4	3.6	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	332	239	3	8溝	瓦器碗	11.8	3.9	4.0	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	333	266	3	8溝	瓦器碗	[11.8]	4.0	[3.2]	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	334	224	3	8溝	須恵器鉢	[28.6]	/	/	[29.0]	東播系
	335	225	3	8溝	瓦質羽釜	[35.2]	/	-	[46.6]	外面鏝以下に煤付着
	354	336	268	3	19溝	土師器皿	7.7	1.3	-	-
337		475	4	12大溝 1層	土師器皿	[8.2]	1.1	-	-	
338		473	4	12大溝 8層	瓦器皿	10.4	2.2	-	-	ジグザグ状暗文
339		94	4	12大溝 10層	土師器鉢	9.5	9.1	-	[12.6]	
340		86	4	12大溝 10層	土師器甕	13.8	16.5	-	16.6	外面全体に煤付着
341		118	4	12大溝 10層	土師器甕	[15.2]	/	-	[18.4]	外面下部に一部煤付着
342		88	4	12大溝 11層	土師器甕	[14.6]	12.3	-	[16.0]	外面全体に煤付着
343		89	4	12大溝 11層	土師器甕	10.9	/	-	[13.4]	
344		87	4	12大溝 11層	須恵器杯蓋	[12.8]	4.2	-	[13.0]	
345		479	4	12大溝 12層	土師器高杯	[13.3]	/	/	-	内面に粗いミガキ
346		462	4	18大溝 1層	瓦質羽釜	/	/	-	/	
355		347	461	4	18大溝 1層	瓦質土器搗鉢	/	/	/	-
	348	465	4	18大溝 2層	土師器皿	[11.6]	2.2	-	-	
	349	464	4	18大溝 2層	土師器皿	8.9	1.2	-	-	「て」の字状口縁
	350	463	4	18大溝 2層	土師質羽釜	[23.5]	/	-	[28.0]	

単位:cm、〔 〕:復元径、/ :測定不能、- :計測項目なし

表33 有池遺跡03-2 土器観察表

図 番号	報告 番号	実測 番号	調査 区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
356	351	117	4	18大溝 3層下層~4層上層	須恵器杯身	[10.7]	4.1	-	13.4	
	352	30	4	18大溝 3層下層~4層上層	須恵器杯身	10.7	4.0	-	13.3	
	353	460	4	18大溝 3層下層~4層上層	須恵器杯身	[11.0]	4.5	-	[13.6]	二次焼成を受ける
	354	466	4	18大溝 3層下層~4層上層	土師器高杯	/	/	/	-	外面ハケ
357	355	477	5	2流路 2層	備前焼鉢	[26.4]	/	/	-	摺目7条1単位
	356	467	5	2流路 2層	瓦質土器香炉?	/	/	/	/	内面に煤付着、外面にミガキ
	357	468	5	2流路 5層	須恵器甕	[23.0]	/	-	/	
	358	471	5	2流路 5層	須恵器杯蓋	/	/	/	/	
358	359	327	7	1大溝 南肩部 1層	土師器皿	[7.8]	1.2	-	-	
	360	298	7	1大溝 南肩部 1層	土師器皿	[8.6]	0.95	-	-	
	361	297	7	1大溝 南肩部 1層	土師器皿	[9.2]	1.2	-	-	
	362	325	7	1大溝 南肩部 1層	瓦器碗	[11.8]	3.7	[4.4]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	363	321	7	1大溝 南肩部 1層	瓦器碗	[13.6]	4.5	[4.1]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	364	324	7	1大溝 南肩部 1層	瓦器碗	[12.2]	4.1	[4.0]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	365	333	7	1大溝 南肩部 1層	瓦質羽釜	[18.4]	/	-	[22.8]	
	366	299	7	1大溝 南肩部 1層	瓦質羽釜	[20.8]	/	-	[25.5]	
	367	335	7	1大溝 南肩部 1層	瓦質羽釜	[19.6]	/	-	[29.4]	鏝以下に煤付着
	368	328	7	1大溝 南肩部 1層	瓦質鍋	[19.1]	/	-	[20.0]	体部外面に指頭圧痕
	369	323	7	1大溝 南肩部 1層	瓦質土器播鉢	[23.4]	/	/	-	大和産、摺目6条1単位
	370	334	7	1大溝 南肩部 1層	須恵器鉢	[30.6]	/	/	[31.3]	東播系
	359	371	336	7	1大溝 南肩部 1層	須恵器甕	[26.0]	/	-	/
372		331	7	1大溝 南肩部 1層	須恵器甕	/	/	-	/	東播系
373		329	7	1大溝 南肩部 1層	須恵器甕	/	/	-	/	東播系
374		322	7	1大溝 南肩部 1層	瓦質土器火鉢	/	/	[27.0]	/	
375		337	7	1大溝 南肩部 1層	瓦質土器火鉢	[36.0]	/	/	[38.0]	
360	376	332	7	13水田	白磁碗	[17.2]	/	/	[17.5]	
	377	338	7	16水田	常滑焼壺	/	/	[11.0]	/	
	378	318	7	23~24水田	須恵器甕	[29.6]	/	-	/	東播系、体部外面タタキ
	379	316	7	23~24水田	須恵器壺	/	/	[10.75]	/	体部外面格子目タタキ
	380	304	7	23~24水田	土師器皿	[13.8]	2.8	-	-	内面圧痕?
	381	305	7	23~24水田	土師器皿	[13.2]	2.3	-	-	内面部分的に煤付着
	382	307	7	23~24水田	瓦器碗	[13.6]	/	/	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	383	306	7	23~24水田	瓦器碗	[14.2]	4.4	[6.0]	-	楠葉型、連続長楕円状暗文
	384	315	7	23水田	瓦質土器香炉	/	/	-	-	
	385	308	7	27溝・20土坑	土師質羽釜	[31.4]	/	-	[36.8]	
	386	317	7	24水田	常滑焼壺	/	/	[13.5]	-	
	387	309	7	24水田	瓦質羽釜	[21.8]	/	-	[27.0]	内外面に煤付着
	388	319	7	24水田	須恵器甕	[27.6]	/	-	/	外面タタキ
361	389	348	7	28溝	瓦器碗	/	/	4.9	-	連結輪状暗文、底部に線刻
	390	347	7	28溝	瓦器碗	14.6	4.2	4.9	-	楠葉型、連続長楕円状暗文
	391	339	7	28溝	瓦器碗	[13.8]	4.6	[5.4]	-	楠葉型
	392	343	7	28溝	土師器皿	15.4	2.9	-	-	口縁部外面に二段ナデ
	393	345	7	28溝	土師器皿	13.6	2.4	-	-	
	394	340	7	28溝	須恵器甕	/	/	-	/	頸部外面にタテ方向のカキ目
	395	341	7	28溝	瓦質羽釜	[20.6]	/	-	[25.6]	
	396	300	7	29水口	瓦器碗	[15.0]	4.9	[5.5]	-	楠葉型、ジグザグ状暗文
	397	303	7	29水口	瓦質羽釜	[17.0]	/	-	[21.4]	外面鏝以下に煤付着
	398	302	7	29水口	瓦質羽釜	[17.2]	/	-	[21.0]	外面に煤付着顕著
	399	301	7	29水口	常滑焼	[45.0]	/	/	[45.6]	
362	400	364	7	30水田 1層	土師器皿	[12.3]	1.8	-	-	
	401	366	7	30水田 1層	土師器皿	[8.9]	1.4	-	-	
	402	354	7	30水田 1層	土師器皿	[9.4]	1.7	-	-	
	403	312	7	30水田 1層	土師器皿	[16.0]	3	-	-	口縁部外面に二段ナデ
	404	311	7	30水田 1層	瓦器皿	[10.4]	/	-	-	ジグザグ状暗文
	405	310	7	30水田 1層	瓦器碗	[15.0]	5.4	[5.2]	-	大和型、連結輪状暗文
	406	365	7	30水田 2層	瓦器碗	[14.8]	/	/	-	
	407	359	7	30水田 2層	瓦器碗	[15.3]	/	/	-	大和型
	408	367	7	30水田 2層	白磁碗	[16.6]	/	/	[16.6]	
	409	360	7	30水田 3層	土師器皿	9.3	1.5	-	-	
	410	363	7	30水田 3層以下	白磁碗	[15.2]	/	/	-	外面に経櫛花弁文
	411	362	7	31水田 1層 南肩部	土師器皿	[7.7]	1.3	-	-	
	412	313	7	31水田 1層	白磁碗	/	/	[6.0]	-	
363	413	320	7	31水田 1層 南肩部	須恵器鉢	[29.8]	/	/	[30.8]	東播系、内面上半に薄く煤付着
	414	314	7	側溝(1大溝 下層)	須恵器鉢	[25.2]	/	/	[25.6]	東播系
	415	368	7	1大溝 下層 砂層	土師器壺	11.5	/	-	/	外面ナデ、内面ケズリ
	416	374	7	1大溝 下層 2層 下半	土師器鉢	[11.8]	7.8	-	[12.2]	外面底部に工具痕有
	417	376	7	1大溝 下層 2層 下半	土師器壺	/	/	-	[13.1]	外面ナデ、内面ケズリ後板ナデ+ナデ
	418	373	7	1大溝 下層 2層 下半	土師器壺	[8.0]	10.0	-	[11.4]	内外面ともナデ
	419	391	7	1大溝 下層 2層 下半	土師器甕	[12.2]	13.5	-	[13.8]	外面に煤付着、外面ハケ、内面ナデ
	420	361	7	1大溝 下層 2層 下半	須恵器杯身	[11.8]	3.6	-	[14.0]	

単位:cm、〔 〕:復元径、/ :測定不能、- :計測項目なし

表34 有池遺跡03-2 土器観察表

図 番号	報告 番号	実測 番号	調査 区	遺構名	器種名	法量				備考
						口径	器高	底径	最大径	
363	421	447	7	1大溝 下層 2層 下半	土師器壺	/	/	-	25.9	外面ナデ、内面ケズリ
	422	351	7	1大溝 下層 2層 下半	土師器甗	[37.6]	/	/	-	内外面ともハケ
	423	326	7	1大溝 下層 2層 上	須恵器甗	[55.6]	/	-	/	
364	424	353	7	1大溝 下層 3層 直上	土師器壺	[7.6]	8.8	-	[9.4]	外面ナデ、内面ケズリ
	425	370	7	1大溝 下層 3層 直上	須恵器杯身	[11.0]	3.8	-	[13.2]	
	426	448	7	1大溝 下層 3層 直上	土師器甗	18.3	/	-	[26.2]	外面ナデ、内面ケズリ。外面に煤付着
	427	344	7	1大溝 下層 3層 直下	土師器甗	14.0	/	-	-	外面ハケ、内面板ナデ
	428	369	7	1大溝 下層 3層 直下	須恵器杯蓋	[12.5]	3.9	-	[12.7]	
	429	385	7	1大溝 2・3層境 35土器	須恵器杯身	10.4	4.2	-	10.5	
	430	371	7	1大溝 2・3層境 48土器	土師器甗	[10.0]	12.3	-	[14.3]	外面・口縁部内面ハケ、内面ナデ
	431	393	7	1大溝 2・3層境 48土器	須恵器壺	15.0	17.2	-	19.6	外面・口縁部内面ハケ、内面ナデ
	432	375	7	1大溝 2・3層境 49土器	土師器甗	[12.0]	11.8	-	[12.9]	外面・口縁部内面ハケ、内面ナデ
	433	387	7	1大溝 2・3層境 50土器	須恵器無蓋高杯	18.2	/	/	-	脚部透かし6ヶ所有、体部外面櫛波状文
	434	389	7	1大溝 2・3層境 51土器	土師器壺	/	/	-	15.6	外面・口縁部内面ミガキ、体部内面ナデ
	365	435	412	7	1大溝 2・3層境 53土器	土師器壺	/	/	-	/
436		392	7	1大溝 2・3層境 53土器	土師器甗	10.3	13.3	-	13.0	体部外面・口縁部内面ハケ、内面ナデ
437		388	7	1大溝 2・3層境 52土器	土師器高杯	14.0	11.4	[10.1]	-	杯部・脚部部分的にハケ残る
438		382	7	1大溝 2・3層境 52土器	土師器甗	17.0	/	-	/	体部外面・口縁部内面ハケ、内面ナデ
439		379	7	1大溝 2・3層境 52土器	土師器甗	[13.9]	/	-	/	体部外面ハケ、煤付着、内面ナデ
440		386	7	1大溝 2・3層境 52土器	須恵器杯蓋	14.8	4.8	-	-	
441		349	7	1大溝 2・3層境 54土器	須恵器杯蓋	12.6	3.8	-	12.6	外面底部タキ痕有
442		372	7	1大溝 2・3層境 54土器	土師器甗	[17.6]	/	-	/	体部外面ハケ、内面ハケ後ナデ
443		357	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器甗	[20.5]	/	-	/	内面ケズリ
444		356	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器甗	[17.6]	/	-	/	
445		383	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器甗	[11.0]	/	-	[13.3]	体部外面ハケ、口縁部・内面ナデ
446		358	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器壺	[8.9]	/	-	[12.0]	外面・口縁部ナデ、体部内面ケズリ
366	447	355	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器壺	[8.3]	/	-	/	外面・口縁部ナデ、体部内面ケズリ
	448	384	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器甗	[13.1]	/	-	[16.4]	外面・口縁部内面ハケ、体部内面ケズリ
	449	380	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器甗	[16.8]	/	-	/	体部外面ハケ、体部内面ケズリ
	450	378	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器甗	[18.6]	/	-	/	体部内面ケズリ
	451	377	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器甗	[16.0]	/	-	/	外面ナデ、体部内面ケズリ後板ナデ
	452	381	7	1大溝 2・3層境 56土器	土師器甗	[20.1]	/	-	/	外面ハケ、体部内面ケズリ
367	453	390	7	64土坑	瓦器椀	15.2	5.5	5.4	-	大和型、連結輪状暗文
	454	346	7	34溝	瓦器椀	12.5	3.8	4.2	-	楕葉型、ジグザグ状暗文
	455	342	7	8溝	土師器皿	7.6	1.3	-	-	
368	456	352	8	1流路	縄文土器	/	/	/	/	器形不明
	457	406	8	12大溝 4層	土師器皿	[14.0]	2.9	-	-	口縁部二段ナデ
	458	405	8	12大溝 8層	土師器甗	[11.0]	/	-	/	外面ハケ、内面ナデ
	459	399	8	12大溝 5層	瓦器椀	[15.0]	5.5	[5.6]	-	楕葉型、格子状暗文
	460	398	8	12大溝 8層	土師器甗	10.4	10.8	-	11.5	外面に煤吸着、外面ハケ、内面ケズリ
369	461	422	8	12大溝 7~8層	土師器甗	[13.2]	/	-	[13.9]	外面ハケ、煤付着、内面ケズリ
	462	51	1	1大溝 深掘トレンチ①	土製品	径:5.6、厚:3.7				
	463	71	3	1大溝 19層	土製品	長径:5.3、短径:3.1、厚:0.5				土器片の転用品
	464	350	7	28溝	紡錘車	径:4.8、高:2.1、孔径:0.7				
	465	127	4	3水田 3層	泥面子?	長:2.8、幅:2.1、厚:0.95				顔

単位:cm、〔 〕:復元径、/:測定不能、-:計測項目なし

表35 有池遺跡03-2 石器観察表

図番号	挿図番号	調査区	遺構名	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	自然	折損	備考
370	S1	1	56ピット	石鏃	(2.4)	(1.6)	0.25	0.7	無	有	
	S2	4	16落込	石鏃	(2.1)	2.05	0.25	0.8	無	有	
	S3	4	12大溝 4層	石包丁	(5.6)	(4.9)	0.5	22.5		有	
	S4	1	2流路 6層 下層	石核	1.9	4.1	1.8	17.4	有		
	S5	7	1大溝 北肩部 (16水田除去面)	チャート剥片	3.7	2.6	0.95	8.6	無		
	S6	4	1層	チャート剥片	(1.2)	1.5	0.4	0.6	有	有	
	S7	1	機械掘削	サヌカイト剥片	2.3	2.6	0.5	3.2	無		
	S8	1	側溝 (10・11層)	サヌカイト剥片	(3.1)	2.0	0.8	4.9	無		
	S9	1	2流路 14層	サヌカイト剥片	6.55	4.2	0.9	29.8	無		
	S10	1	1大溝 6層 下層	サヌカイト剥片	4.7	1.8	5.5	7.6	無		
	S11	1	1大溝 深掘トレンチ④ (16層)	サヌカイト剥片	3.65	3.85	0.9	7.2	無		
	S12	3	1大溝 19層	サヌカイト剥片	9.1	5.5	0.8	59.1	無		
	S13	2	1層	サヌカイト剥片	(2.4)	(2.05)	0.4	3.2	無		
	S14	4	8水田 2層	サヌカイト剥片	2.0	3.2	0.4	3.0	有		
	S15	7	23水田 3層	サヌカイト剥片	2.7	3.7	0.9	9.9	有		
	S16	8	1層	サヌカイト剥片	3.75	3.0	0.4	6.6	無		
	S17	3	2流路 12層	投擲か	—	—	—	75.0			
	S18	3	294竪穴住居 上・中層	砥石ないし礫器	12.2	4.3	2.3	206.5			
371	S19	1	1層	不定形刃器	4.8	6.8	0.95	42.1			
	S20	1	2流路 谷部アゼ (西側)	火打ち石?	3.4	5.9	1.1	27.5			
	S21	3	1層	火打ち石?	5.2	4.9	1.9	60.8			
	S22	3	2流路 9層	火打ち石?	7.4	3.8	2.0	57.3			
	S23	3	1大溝 下段南側 3層	火打ち石?	8.5	4.6	1.9	72.2			
	S24	4	1層	火打ち石?	2.95	2.6	0.45	3.3			
	S25	1	31石組	石鍋	5.7	6.1	1.7	78.2		有	
	S26	1	2流路 4層	石臼	3.6	3.2	5.95	52.9		有	
	S27	1	1層	砥石	5.7	2.1	3.3	39.1		有	
372	S28	1	2流路 2層	砥石	3.8	6.4	1.0	30.1		有	
	S29	1	2流路 3層	砥石	2.6	3.45	0.55	5.4		有	
	S30	1	2流路 5層	砥石	4.7	4.7	0.5	14.3		有	
	S31	1	2流路 5層	砥石	10.3	6.0	2.0	162.8		有	
	S32	2	1-2層	砥石	4.7	3.8	0.45	15.4		有	
	S33	1	アゼ側溝 3層以下	砥石	5.9	4.45	0.9	23.7		有	
	S34	1	1大溝 7層	砥石	6.8	4.05	2.7	97.7		有	
	S35	3	2層	砥石	10.0	5.3	4.5	391.0		有	
373	S36	3	2流路 (側溝10層以下)	砥石	12.25	6.8	5.45	442.3		有	
	S37	3	2流路 11層	砥石	12.8	3.6	4.0	467.9			
	S38	3	3流路 南肩部	砥石	6.0	2.9	0.7	23.3		有	
	S39	3	4溝	砥石	5.0	4.0	3.7	89.0		有	
	S40	3	8溝	砥石	9.6	3.05	1.7	71.0		有	
	S41	3	5溝 (12-1層除去後面)	砥石	4.7	3.3	0.6	18.7		有	
	S42	3	1大溝 上段 6層	砥石	9.8	5.6	2.9	251.0		有	
	S43	3	1大溝 上段 8層	砥石	8.0	6.15	2.8	173.0		有	
	S44	3	1大溝 下段 2-2層	砥石	4.9	0.8	4.7	28.1		有	
	S45	3	1大溝 11-2層	砥石	5.5	5.4	1.3	44.7		有	
374	S46	3	1大溝 下段 16層	砥石	15.1	7.8	7.0	980.0		有	
	S47	3	1大溝 下段北側 26層	砥石	3.6	3.1	0.6	9.6		有	
	S48	3	1大溝 下段北側 26層	砥石	5.4	2.15	2.45	29.5		有	
	S49	3	1大溝 下段北側 26層	砥石	5.0	3.35	1.4	28.8		有	
	S50	3	1大溝 下段北側 26層	砥石	6.8	4.9	1.9	113.4		有	
	S51	3	1大溝 下段 29層	砥石	3.0	2.8	6.5	76.8		有	
	S52	3	1大溝 下段南側 30-1層 南肩部	砥石	7.4	4.7	3.05	121.1		有	
	S53	3	1大溝 下段南側 30-2層 南肩部	砥石	9.7	5.5	4.6	246.6			
375	S54	4	1井戸	砥石	7.3	6.0	1.1	110.6		有	
	S55	4	1井戸	砥石	9.7	4.5	1.7	78.8		有	
	S56	4	10溝	砥石	6.5	7.4	1.6	138.5			
	S57	7	16水田 4層	砥石	2.5	2.8	0.6	4.4		有	
	S58	7	13水田 1層	砥石	13.7	3.8	1.3	118.0		有	
	S59	7	23水田	砥石	15.7	7.9	3.6	675.0		有	
	S60	7	23水田 3層	砥石	6.2	4.7	1.1	42.0		有	
	S61	7	24水田 3層	砥石	7.4	5.3	1.9	116.0		有	
	S62	7	側溝	砥石	4.6	2.8	2.4	47.3		有	
376	S63	8	64土坑 (内側)	砥石	16.9	7.4	6.0	1200.0			

表36 有池遺跡03-2 木器・漆器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種別	最大径(cm)	最大長(cm)	最大幅(cm)	高さ(cm)	最大厚(cm)	備考
377	W1	488	3	2流路 17層	鍬	-	31.8	12.3	-	1.5	茄子型
	W2	504	3	2流路 17層	木錘	7.5	17.2	-	-	-	
	W3	505	3	2流路 17層	木錘	5.6	15.5	-	-	-	
	W4	503	3	2流路 17層	残材	-	(12.7)	8.0	-	6.6	先端だけ表面が炭化している
	W5	480	3	2流路 16~20層	残材	3.8	3.6	-	-	-	穿孔(貫通せず)箇所
	W6	485	3	2流路16~17層	棒状木製品	-	44.1	2.1	-	1.8	先端部に凹あり
	W7	487	3	2流路 17層	織機(カエシ)	-	62.6	4.7	-	1.0	圧痕・擦り切れあり
378	W8	633	2	15木組	槽	-	67.6	(30.5)	-	6.5	焼けた痕あり
379	W9	514	2	15木組	盤	-	(71.2)	(24.5)	-	(2.2)	
380	W10	628	3	2流路 側溝 16~17層	火付け木	-	15.5	1.7	-	0.9	上部と下部に炭化箇所あり
	W11	509	3	2流路 17層	残材	-	12.7	3.6	-	2.7	
	W12	624	3	2流路 17層	板状木製品	-	40.6	15.5	-	2.9	
	W13	630	3	2流路 17層	板状木製品	-	/	5.2	-	0.7	
	W14	510	3	2流路 17層	残材	-	21.1	11.3	-	6.0	表面面取りしている、木取・板目
	W15	622	3	2流路 17層	板状木製品	-	23.65	5.75	-	1.0	
381	W16	621	3	2流路 17層	修羅	-	107.5	10.0	-	13.1	ほぞ孔2箇所あり、穿孔(貫通せず)4箇所、6角形
382	W17	623	3	2流路17層	修羅	-	111.7	12.4	-	11.4	ほぞ孔8箇所、8角形
383	W18	481	3	2流路 16~20層	板状木製品	-	(20.4)	13.4	-	4.4	
	W19	631	3	2流路 17層	棒状木製品	-	(47.9)	3.5	-	2.9	
	W20	482	3	2流路 16~20層	机	-	60.0	(7.8)	-	5.0	
384	W21	613	2	15木組	板状木製品	-	80.7	16.7	-	5.7	
	W22	612	2	15木組	板状木製品	-	83.7	13.5	-	4.8	表・裏面に刃物傷?あり
385	W23	632	2	15木組	板状木製品	-	178.6	24.5	-	6.4	
386	W24	486	7	54土器	棒状木製品	4.5	36.5	-	-	-	全面的に表面が炭化している 穿孔(貫通せず)1箇所
	W25	620	3	2流路 17層	棒状木製品	-	(71.0)	(3.8)	-	4.3	
	W26	614	3	2流路 17層	板状木製品	-	(60.0)	9.1	-	5.2	切り込み?あり
387	W27	493	7	30水田 1層	柄	-	(13.0)	2.8	-	2.0	金属(刃)一部残存、木取・板目
	W28	494	7	側溝(23水田以下)	円盤状木製品	6.6	-	-	-	0.5	穿孔の痕跡あり、木取・板目
	O29	506	1	試掘トレンチ(4)	櫛	-	1.5	(1.9)	-	0.3	べつ甲製、全体やすりがけしている
	W30	619	3	2流路 13層	独楽か	-	4.4	3.8	-	3.6	
	W31	483	3	271井戸	漆器椀	口径12.8 底径6.5	-	-	4.9	-	全面赤漆塗、底外面に文字あり
	W32	492	7	30水田 1層	火付け木	-	(14.2)	1.1	-	0.5	炭化箇所あり
	W33	610	3	1大溝 上段 12-1層	漆器椀	復元底径7.6	-	-	(4.1)	-	全面黒漆塗、文様は赤漆
	W34	507	3	1大溝 上段 8層	漆器椀	/	-	-	(5.0)	-	全面黒漆塗、文様は赤漆
	W35	516	7	64土坑	曲物側板	44.2	-	-	28.4	0.4	
389	W36	501	3	2流路 12層	下駄(左足)	-	19.0	9.6	-	1.4[歯部4.9]	木取・板目、歯の左側の高さが摩滅のため低くなっている(が)にまた歩きの人が使用)
	W37	502	3	5溝(12-1層 除去面)	下駄	-	(14.9)	9.1	-	3.0	はめ込み式歯
	W38	499	3	2流路 14~15層境	下駄(左足)	-	(15.3)	(10.6)	-	1.0[歯部3.1]	木取・板目、裏に刃物傷あり、歯に擦痕あり
	W39	500	3	31水田 1層	下駄(左足)	-	(13.4)	(5.0)	-	1.1[歯部2.3]	木取・板目、側面に擦り減りあり
389	W40	495	4	12大溝 7層	曲物底板か蓋板	12.8	-	-	-	0.7	釘孔2箇所、表面のみ黒漆塗、表面縁周辺に圧痕、裏面刃物傷あり、木取・板目
	W41	498	4	12大溝 6層	曲物底板か蓋板	/	-	-	-	0.8	釘孔3箇所(うち1箇所木釘痕)、表面のみ黒漆塗、木取・板目
	W42	512	3	2流路 10層除去面~11層 245木器	曲物底板か蓋板	-	29.7	/	-	1.1	
	W43	497	7	23水田 2層	曲物底板か蓋板	/	-	-	-	0.7	穿孔2箇所、全面黒漆塗、表・裏面に刃物傷あり、木取・板目
	W44	496	7	23水田 2層	曲物底板か蓋板	/	-	-	-	0.7	釘孔(表3箇所・裏2箇所)、両面黒漆塗、表・裏面に刃物傷あり、木取・板目
390	W45	491	3	2流路 12層	板状木製品	-	(10.6)	1.9	-	0.5	穿孔4箇所、木取・板目
	W46	490	3	2流路 12層	板状木製品	-	16.5	3.8	-	0.9	穿孔3箇所、二本削り、表面刃傷あり
	W47	616	7	23水田 2層	板状木製品	-	(13.9)	3.5	-	0.8	側面から見ると中央付近でくの字形に歪む
	W48	511	7	31水田 2層	棒状木製品	-	(24.2)	(3.1)	-	(1.6)	木取・板目
	W49	634	3	2流路 17層	棒状木製品	-	(37.3)	2.2	-	1.2	
	W50	627	3	2流路 14層	棒状木製品	-	(71.6)	3.3	-	1.7	穿孔2箇所、凹部分あり

表37 有池遺跡03— 2 木器・漆器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種別	最大径(cm)	最大長(cm)	最大幅(cm)	高さ(cm)	最大厚(cm)	備考
391	W51	626	7	1大溝 2・3層境 53土器	板状木製品	-	(13.7)	(6.7)	-	2.3	穿孔2箇所(貫通せず)
	W52	615	3	2流路 12層	棒状木製品	-	(17.0)	(2.8)	-	(2.6)	
	W53	629	7	13水田 北肩部	板状木製品	-	(21.0)	6.5	-	1.2	穿孔2箇所
	W54	484	7	30水田 1層	板状木製品	-	20.0	3.8	-	0.7	穿孔4箇所
	W55	617	3	2流路 12層	不明木製品	-	(6.5)	(3.3)	-	3.9	穿孔1箇所(貫通せず)
	W56	618	3	2流路 12層	板状木製品	-	(10.0)	(5.5)	-	(2.1)	
	W57	611	7	1大溝 2・3層境 74木	板状木製品	-	(66.1)	18.3	-	5.0	

単位:cm、():残存、/:測定不能、-:計測項目なし

表38 有池遺跡03— 2 金属器観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種別	最大径	長さ	幅	高さ	厚さ	重さ	備考
392	M1	594	1	2-2層	不明	-	80	53	-	15	75.9	
	M2	588	1	2-2層	鉄素材か	-	54	36	-	10	42.5	
	M3	593	1	23溝	不明	-	57	52	-	7	33.8	
	M4	608	1	2流路 3層	鋤等の刃	-	(33)	(171)	-	(5)	105.8	
	M5	602	1	49ピット	不明	-	47	49	-	6	22.9	
	M6	606	3	2流路 2層	小柄	-	(92)	(55)	-	4	8.6	
	M7	607	3	2流路 2層	簪	-	63	4	-	4	2.3	ねじれた部分あり
	M8	600	3	2流路 11層	鎌	-	刃部137 茎78	刃部33	-	4	72.0	
	M9	595	3	2流路 12層	火打金	-	27	87	-	3	28.8	
	M10	596	3	2流路 13層	鎌	-	98	31	-	刃部4	19.8	
	M11	597	7	28溝 下層	農具刃先	-	177	20	-	14	157.1	
	M12	601	7	24水田 2層	不明	-	29	32	-	6	12.8	全面に煤付着、一部分に赤色あり
	M13	598	7	24水田 2層	環状品	28	-	5	-	5	4.9	表面に赤い部分あり
	M14	599	3	50落込	環状品	30	-	5	-	9	9.2	

():残存、単位:mm・g、/:計測不能、-:計測項目なし

表39 有池遺跡03— 2 鋳造関連遺物観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種別	径(mm)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
393	F1	585	3	2流路 12層	羽口	/	(39)	-	1.5	25.8	
	F2	583	7	31水田 1層	羽口	/	(58)	-	2.4	77.6	
	F3	586	7	30水田 1層	羽口	/	(65)	-	2.7	96.8	
	F4	580	7	28溝下層黒色土層(青灰色粘質土より下層)	羽口	/	(75)	-	1.8	95.0	外面は面取り?
	F5	584	7	28溝 下層	羽口	/	(45)	-	2.5	42.7	
	F6	581	7	1大溝 南肩部 1層	羽口	/	(114)	-	2.6	257.5	外面は面取り
	F7	582	8	12大溝 3層	羽口	/	(74)	-	2.2	95.0	外面は面取り
	F8	587	1	1大溝 2-2層	滓	-	84	118	17	244.3	
	F9	590	1	1大溝 2-2層	滓	-	106	72	22	118.1	
	F10	589	3	1大溝 上段 6層	滓	-	68	49	24	71.0	
	F11	591	3	1大溝 上段 6層	滓	-	68	45	16	50.9	
	F12	592	3	2流路 13層	滓	-	58	41	16	36.2	

():残存、/:計測不能、-:計測項目なし

表40 有池遺跡03— 2 銭貨観察表

図番号	報告番号	実測番号	調査区	遺構名(層位)	種類	直径(mm)	孔(辺)(mm)	重さ(g)	直径/質量	登録番号
394	O1	603	4	南壁側溝	元○通寶	23	6	3.9	5.9	808
	O2	604	7	8溝	景德元寶	23	6	2.2	10.5	1074
	O3	605	7	1大溝 南肩部1層	政和通寶	25	6	2.0	12.5	1090

直径/質量は小数点第二位を四捨五入、/:計測不能

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第152集

有池遺跡Ⅰ(第1分冊)

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書

発行年月日/2007年2月28日

編集・発行/財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本/株式会社 三星商事印刷

京都市中京区新町通竹屋町下ル